鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（170）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（X）

芝原（しばはら）遺跡 3

（南さつま市金峰町）

古代・中世・近世編

2012年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



上空から見た芝原遺跡（南から北を望む）



芝原遺跡出土「多口瓶」（古代）







須恵器大甕244　244底部の凹み

芝原遺跡出土「須恵器大甕」（古代）



大量に出土した中世陶磁器

序　　文

この報告書は，万之瀬川の河川改修事業に伴って，平成11年度から平成16年度にかけて実施した，南さつま市金峰町に所在する芝原遺跡の発掘調査の記録(古代から近世編)です。

芝原遺跡では，縄文時代中・後期の遺構・遺物をはじめ，近世まで連綿とした生活跡が発見されました。中でも，本報告書に掲載されている古代の土器集中箇所から発見された墨書土器，中世の多彩な貿易陶磁器，中世から近世の製鉄に関連する遺構・遺物などは，今後，万之瀬川周辺地域の調査・研究に大いに貢献するものと思われます。

また，本改修事業に伴って調査された持躰松遺跡や上水流遺跡，渡畑遺跡の報告書が既に刊行され，多くの重要な情報を私たちにもたらしてくれました。さらに，当遺跡の周辺には，縄文時代から古代・中世の遺跡が数多く所在しており，この地域は考古学的にも注目を集めている地域でもあります。

本報告書を，県民をはじめ多くの方々に御覧いただき，地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値を御理解いただくことにより，国民の共有財産として文化財が保護・活用されることを祈念しております。

なお，弥生・古墳時代編については，今後計画的に報告書を刊行する予定です。

最後に，調査に当たり，ご協力いただいた南薩地域振興局建設部(旧伊集院土木事務所)，南さつま市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺　田　仁　志

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しばはら　いせき
書　　名	芝原遺跡３
副 書 名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	X
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第170集
編 著 者 名	関明恵・長﨑慎太郎・有馬孝一・上床真・平屋大介・大久保浩二
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995-48-5811
発 行 年 月 日	2012年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積（㎡）	調査起因
芝原遺跡（しばはらいせき）	南さつま市（みなみさつまし）金峰町（きんぽうちょう）大字宮崎濱崎（おおあざみやざきはまさき）	46220	35-81	31° 25′ 40″	130° 19′ 37″	1999.10.15～2000.3.22 2000. 4.24～2001.1.25 2001. 5. 7～2002.3.19 2002. 5. 7～2003.3.20 2003. 5. 6～2004.3.22 2004. 5.14～2004.7.21	49,600	中小河川改修（万之瀬川）

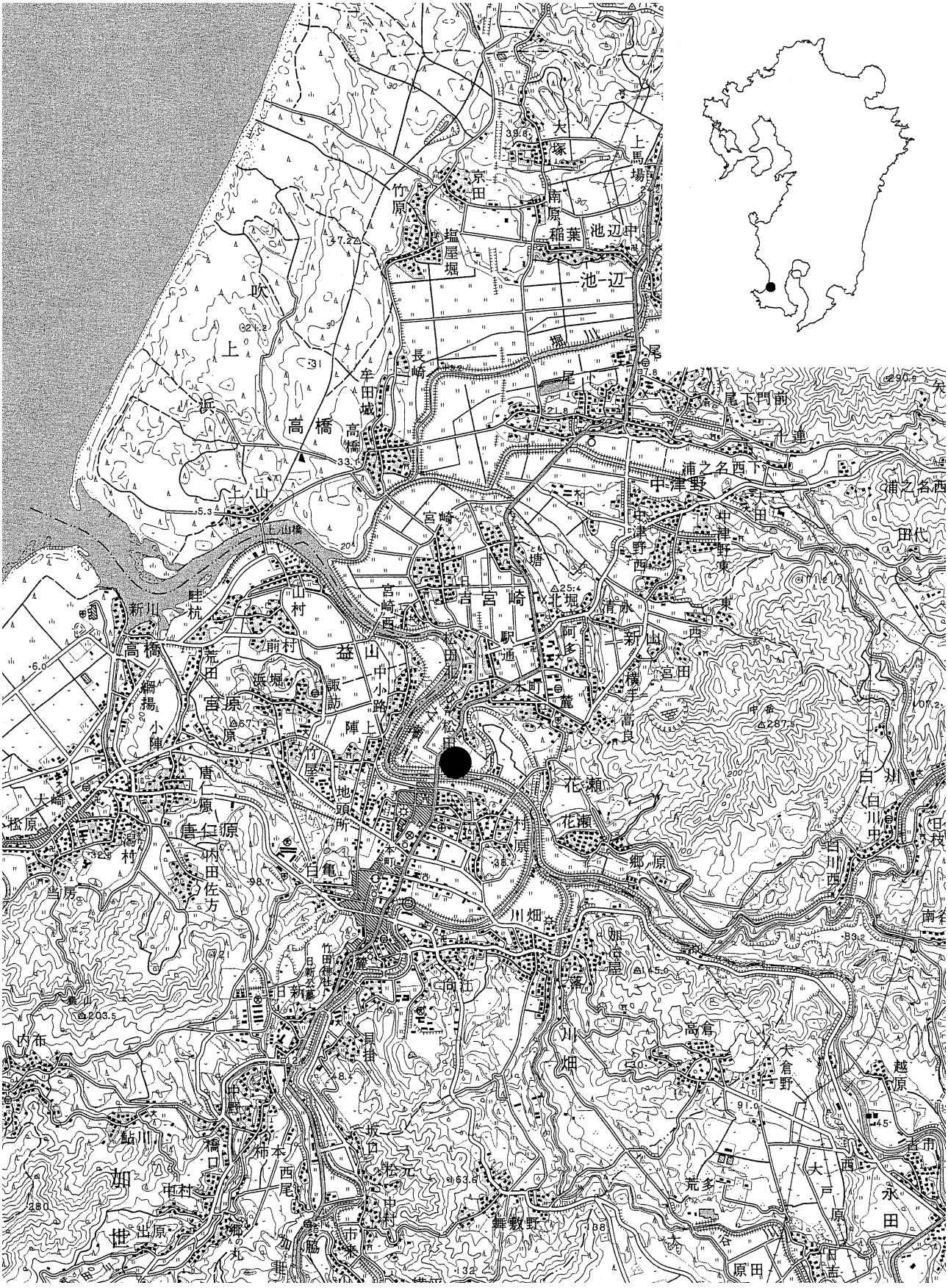
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芝原遺跡	集落跡	古代	溝状遺構 方形竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑　ピット 土坑墓	土師器・黒色土器・赤色土器・須恵器・多口瓶・墨書土器・ヘラ書き土器・紡錘車・石帯・古銭	
		中世	溝状遺構 方形竪穴建物跡 掘立柱建物跡 製鉄関連遺構 土坑墓（木棺墓） 土坑　ピット カマド	土師器・青磁・白磁・青白磁青花・中国陶器・朝鮮陶器ベトナム陶器・瓦器・中世須恵器（東播系・カムィヤキ・樺万丈産）・国産陶器（瀬戸・美濃・常滑・備前）・瓦質土器・土師質土器・中国瓦・滑石製品・砥石・古銭・人骨	
		近世	畠畝跡広域 溝状遺構 掘立柱建物跡 製鉄関連遺構 カマド　土坑墓 （木棺墓）土坑 ピット　焼土　古道	肥前陶磁器・薩摩焼 鍛冶滓・鞴の羽口 古銭・煙管・人骨	

遺跡の概要

芝原遺跡は，縄文時代中期から近世までの遺構・遺物が発見されている複合遺跡である。今回の報告は，古代から近世の遺構・遺物編である。

本遺跡では，古代の方形竪穴建物跡や中世・近世の掘立柱建物跡，土坑墓や木棺墓，鍛冶炉跡など，当時の生活様式を知る上で貴重な遺構が検出された。

また，古代の遺物として多量の土師器や須恵器，中世の輸入陶磁器や国内産陶器，近世の薩摩焼や肥前陶器などが出土した。特に，古代の土器集中箇所から発見された墨書土器やヘラ書き土器，中世の多彩な貿易陶磁器，中世から近世の製鉄に関する遺物などは，当時の国内外と交流や生活の様子の解明につながるものである。



芝原遺跡の位置図（1/50,000）

例　　言

1　本書は，中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う芝原遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成11年10月15日～平成12年３月22日，平成12年４月24日～平成13年１月25日，平成13年５月７日～平成14年３月19日，平成14年５月７日～平成15年３月20日，平成15年５月６日～平成16年３月22日，平成16年５月14日～平成16年７月21日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成17年度から平成23年度に実施した。

5　遺物番号は，通し番号とした。本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，芝原遺跡の遺物注記の略号は「SHB」である。

7　挿図の縮尺は，各図面に示した。

8　本書で用いたレベル数値は，県土木部が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

9　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は，有限会社ふじた，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

10　土器の実測・トレースは，大久保浩二・関明恵・長﨑慎太郎が行った。

11　陶磁器の実測・トレースは平屋大介・関が行い，一部は株式会社大成エンジニアリングに委託し，監修は関が行った。

12　鉄器の実測・トレースは上床真・有馬孝一が行い，分析については株式会社九州テクノ・リサーチに委託し，監修は上床が行った。

13　自然科学分析は，株式会社パリノ・サーヴェイ，株式会社古環境研究所に委託した。

14　遺物の写真撮影は，吉岡康弘・西園勝彦・辻明啓が行った。

15　本書の執筆並びに編集は関が担当し，執筆の分担は次のとおりである。

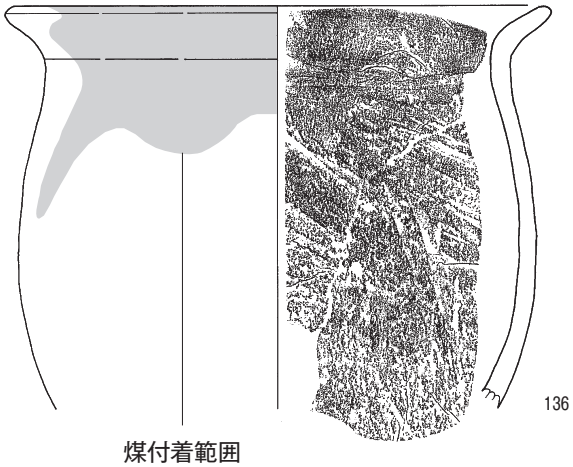
第１章～第２章……大久保・平屋
第３章　第１節～第２節……大久保・平屋
第３節……大久保・有馬・平屋
１……長﨑・有馬
２……関・有馬・平屋
３……関・有馬
第４章……各文頭に記載
第５章　総括　第１節……有馬
第２節……長﨑
第３節……関・平屋
第４節……関
補遺……大久保

凡　　例

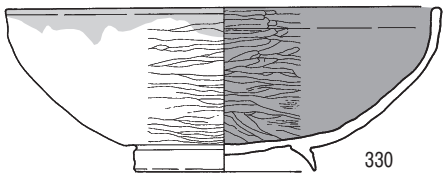
1　本書で用いるかまど遺構の表現については，次のとおりである。（下図参照）

炉壁　　炭化物

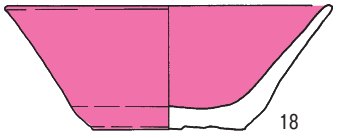
2　本書で用いる土器の表現は，次のとおりである。



煤付着範囲



黒色土器　黒色部分

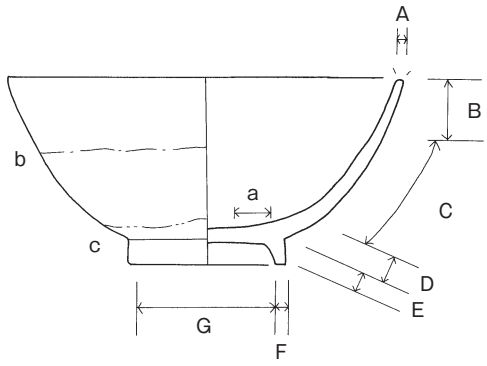


赤色土器　丹塗り部分

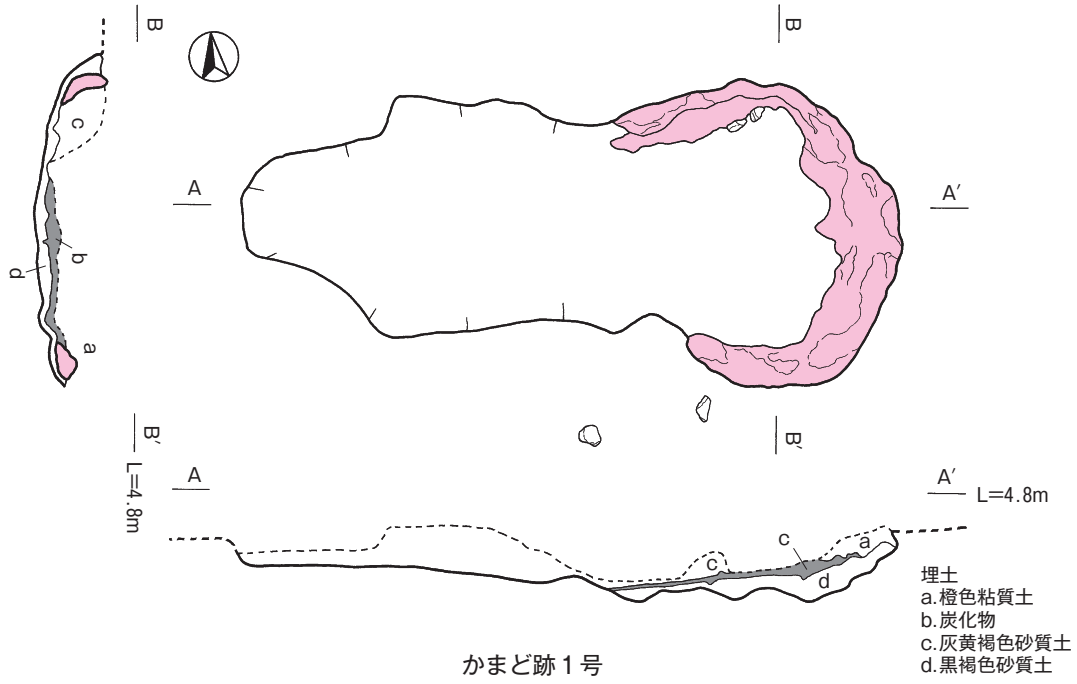
3　本書で用いる中・近世の陶磁器の名称，表現方法については，以下のとおりである。

【名称】　A　口唇部
B　口縁部
C　体部
D　腰部
E　高台脇
F　畳付
G　高台内面

【表現】　a　見込みの釉剥ぎ
b　一次施釉ライン
c　二次施釉ライン



陶磁器の名称



かまど跡１号

目　　次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
凡例
目次

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　事前調査 …… 1
　第３節　本調査 …… 2
　第４節　整理・報告書作成 …… 6

第２章　遺跡の位置と環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 9

第３章　調査の方法と成果 …… 15
　第１節　調査の方法 …… 15
　第２節　層序 …… 16
　第３節　調査の成果 …… 18
　　１　古代の調査 …… 18
　　（１）調査の概要 …… 18
　　（２）出土遺物の分類方法 …… 18
　　（３）遺構 …… 18
　　（４）遺物 …… 92
　　２　中世の調査 …… 119
　　（１）調査の概要 …… 119
　　（２）出土遺物の分類方法 …… 119
　　（３）遺構 …… 119
　　（４）遺物 …… 238
　　３　近世の調査 …… 327
　　（１）調査の概要 …… 327
　　（２）出土遺物の分類方法 …… 327
　　（３）遺構 …… 327
　　（４）遺物 …… 389

第４章　自然科学分析 …… 427

第５章　総括 …… 481

補遺 …… 495

図版

挿図目次

芝原遺跡の位置図（1/50,000）
第１図　遺跡周辺の旧地形…… 11
第２図　周辺遺跡位置図…… 12
第３図　芝原遺跡の基本土層図…… 16
第４図　芝原遺跡の調査範囲とグリッド図…… 17
第５図　古代全体遺構図１…… 20
第６図　古代全体遺構図２…… 21
第７図　古代遺構配置図１…… 22
第８図　古代遺構配置図２…… 23
第９図　古代遺構配置図３…… 24
第10図　古代遺構配置図４…… 25
第11図　古代遺構配置図５…… 26
第12図　古代遺構配置図６…… 27
第13図　古代遺構配置図７…… 28
第14図　古代遺構配置図８…… 29
第15図　古代遺構配置図９…… 30
第16図　古代遺構配置図10…… 31
第17図　古代遺構配置図11…… 32
第18図　古代遺構配置図12…… 33
第19図　古代遺構配置図13…… 34
第20図　古代遺構配置図14…… 35
第21図　古代遺構配置図15…… 36
第22図　古代遺構配置図16…… 37
第23図　古代遺構配置図17…… 38
第24図　古代遺構配置図18…… 39
第25図　古代遺構配置図19…… 40
第26図　古代遺構配置図20…… 41
第27図　古代遺構配置図21…… 42
第28図　古代遺構配置図22…… 43
第29図　古代遺構配置図23…… 44
第30図　古代遺構配置図24…… 45
第31図　掘立柱建物跡１，２号…… 46
第32図　掘立柱建物跡３，４号・３号出土遺物…… 47
第33図　掘立柱建物跡５，６号…… 48
第34図　掘立柱建物跡７，８号…… 49
第35図　掘立柱建物跡９，10号…… 50
第36図　掘立柱建物跡11，12号…… 51
第37図　掘立柱建物跡13，14号…… 52
第38図　掘立柱建物跡15号・竪穴建物状遺構・竪穴建物状遺構出土遺物・炉跡…… 53
第39図　土坑１号遺物出土状況…… 54
第40図　土坑１号完掘状況…… 55
第41図　土坑１号出土遺物（１）…… 56
第42図　土坑１号出土遺物（２）…… 57
第43図　土坑１号出土遺物（３）…… 58
第44図　土坑２～５号・出土遺物…… 59
第45図　土坑６，７号・出土遺物…… 60
第46図　土坑墓１号・出土遺物…… 61
第47図　土坑墓２，３号・３号出土遺物…… 63
第48図　ピット・ピット内出土遺物（１）…… 64
第49図　ピット内出土遺物（２）…… 65
第50図　溝１～４号…… 66
第51図　溝４号出土遺物…… 68
第52図　溝５～８号・溝５～７号出土遺物…… 69
第53図　溝８号(東)出土遺物（１）…… 70
第54図　溝８号(東)出土遺物（２）…… 71
第55図　溝８号(北)出土遺物（１）…… 72
第56図　溝８号(北)出土遺物（２）…… 73
第57図　溝８号(北)出土遺物（３）…… 74
第58図　溝８号(北)出土遺物（４）…… 75
第59図　溝８号(北)出土遺物（５）…… 76
第60図　溝８号(北)出土遺物（６）…… 77
第61図　溝８号(西)出土遺物（１）…… 78
第62図　溝８号(西)出土遺物（２）…… 79
第63図　溝８号(西)出土遺物（３）…… 80
第64図　溝８号(西)出土遺物（４）…… 81
第65図　溝８号(西)出土遺物（５）…… 82
第66図　溝８号(西)出土遺物（６）…… 83
第67図　溝８号(西)出土遺物（７）…… 84
第68図　溝８号(西)出土遺物（８）…… 85
第69図　溝８号(西)出土遺物（９）…… 86
第70図　溝８号(西)出土遺物（10）…… 87
第71図　溝９～17号…… 88
第72図　土師器　椀…… 92
第73図　土師器　坏（１）…… 93
第74図　土師器　坏（２）…… 94
第75図　土師器　皿ほか・黒色土器…… 95
第76図　赤色土器…… 96
第77図　須恵器　蓋…… 97
第78図　須恵器　椀・坏・皿…… 98
第79図　須恵器　甕…… 99
第80図　須恵器　甕・鉢・壺…… 100
第81図　須恵器　壺・硯ほか…… 101
第82図　土製品１…… 102
第83図　土製品２…… 103
第84図　墨書土器１…… 104
第85図　墨書土器２…… 105
第86図　墨書・「宅」の分類…… 106
第87図　墨書土器３…… 106
第88図　ヘラ書き土器１…… 107
第89図　ヘラ書き土器２…… 108
第90図　ヘラ書き土器３…… 109
第91図　ヘラ書き土器４…… 110
第92図　ヘラ書き土器５…… 111
第93図　ヘラ書き土器６…… 112
第94図　ヘラ書き土器７…… 113

第 95 図　中世全体遺構図１…… 120
第 96 図　中世全体遺構図２…… 121
第 97 図　中世遺構配置図１…… 122
第 98 図　中世遺構配置図２…… 123
第 99 図　中世遺構配置図３…… 124
第100図　中世遺構配置図４…… 125
第101図　中世遺構配置図５…… 126
第102図　中世遺構配置図６…… 127
第103図　中世遺構配置図７…… 128
第104図　中世遺構配置図８…… 129
第105図　中世遺構配置図９…… 130
第106図　中世遺構配置図10…… 131
第107図　中世遺構配置図11…… 132
第108図　中世遺構配置図12…… 133
第109図　中世遺構配置図13…… 134
第110図　中世遺構配置図14…… 135
第111図　中世遺構配置図15…… 136
第112図　中世遺構配置図16…… 137
第113図　中世遺構配置図17…… 138
第114図　中世遺構配置図18…… 139
第115図　中世遺構配置図19…… 140
第116図　中世遺構配置図20…… 141
第117図　中世遺構配置図21…… 142
第118図　中世遺構配置図22…… 143
第119図　中世遺構配置図23…… 144
第120図　中世遺構配置図24…… 145
第121図　掘立柱建物跡１，２号…… 146
第122図　掘立柱建物跡３，４号…… 147
第123図　掘立柱建物跡５，６号…… 148
第124図　掘立柱建物跡７号…… 149
第125図　掘立柱建物跡８，９号…… 150
第126図　掘立柱建物跡10，11号…… 151
第127図　掘立柱建物跡12号・出土遺物…… 152
第128図　掘立柱建物跡13，14号…… 153
第129図　掘立柱建物跡15，16号・15号出土遺物…… 154
第130図　掘立柱建物跡17号…… 155
第131図　掘立柱建物跡18号・出土遺物…… 156
第132図　掘立柱建物跡19号…… 157
第133図　掘立柱建物跡20号…… 158
第134図　掘立柱建物跡21号…… 159
第135図　掘立柱建物跡22号…… 160
第136図　掘立柱建物跡23，24号…… 161
第137図　掘立柱建物跡25，26号…… 162
第138図　掘立柱建物跡27，28号…… 163
第139図　掘立柱建物跡29，30号・30号出土遺物…… 164
第140図　掘立柱建物跡31号・出土遺物…… 165
第141図　掘立柱建物跡32，33号…… 166
第142図　竪穴建物跡１号・出土遺物…… 167
第143図　竪穴建物跡２号遺物出土状況…… 168
第144図　竪穴建物跡２号完掘状況・出土遺物…… 169
第145図　竪穴建物跡３，４号・４号出土遺物…… 170
第146図　竪穴建物跡５号…… 171
第147図　竪穴建物跡６号遺物出土状況…… 172
第148図　竪穴建物跡６号完掘状況・出土遺物…… 173
第149図　竪穴建物跡７，８号・７号出土遺物…… 174
第150図　竪穴建物跡９，10号・出土遺物…… 175
第151図　竪穴建物跡11号…… 176
第152図　かまど跡１，２号…… 177
第153図　かまど跡３号・出土遺物…… 178
第154図　かまど跡４～６号配置・かまど跡４号・
出土遺物…… 179
第155図　かまど跡５号…… 180
第156図　かまど跡６，７号・出土遺物…… 182
第157図　かまど跡８号…… 183
第158図　かまど跡９，10号…… 184
第159図　かまど跡11号・出土遺物…… 185
第160図　かまど跡12，13号…… 186
第161図　かまど跡14号…… 187
第162図　かまど跡15号…… 188
第163図　かまど跡16号…… 189
第164図　かまど跡17，18号…… 190
第165図　かまど跡19号…… 191
第166図　かまど跡20，21号・出土遺物…… 192
第167図　かまど跡22号…… 193
第168図　かまど跡23号…… 194
第169図　かまど跡24～26号…… 195
第170図　かまど跡27号…… 196
第171図　かまど跡28，29号・28号出土遺物…… 197
第172図　製鉄関連遺構１，２号…… 198
第173図　製鉄関連遺構３～５号・３号出土遺物…… 199
第174図　製鉄関連遺構６号・出土遺物…… 200
第175図　土坑１～４号・３，４号出土遺物…… 202
第176図　土坑５～８号・６，７，８号出土遺物…… 203
第177図　土坑９～11号・10，11号出土遺物…… 204
第178図　土坑12，13号・出土遺物…… 205
第179図　土坑14，15号・15号出土遺物…… 206
第180図　土坑16～18号・出土遺物…… 207
第181図　土坑19，20号・出土遺物…… 208
第182図　土坑21～23号・22，23号出土遺物…… 210
第183図　土坑墓１～３号・出土遺物…… 211
第184図　土坑墓４号・出土遺物…… 212
第185図　土坑墓５号・出土遺物…… 213
第186図　土坑墓６号…… 214
第187図　土坑墓７号・出土遺物…… 215
第188図　土坑墓８号・出土遺物…… 216
第189図　土坑墓９号・出土遺物…… 217
第190図　土坑墓10号・出土遺物…… 218
第191図　土坑墓11号・出土遺物…… 219
第192図　土坑墓12，13号・出土遺物…… 220
第193図　土坑墓14，15号・14号出土遺物…… 221

第194図　土坑墓16号・出土遺物 …… 222
第195図　土坑墓17号・出土遺物 …… 223
第196図　土坑墓18号・出土遺物 …… 224
第197図　礫，土器集積遺構・出土遺物 …… 225
第198図　ピット１～５号 …… 227
第199図　ピット内出土遺物（１） …… 228
第200図　ピット内出土遺物（２） …… 229
第201図　ピット内出土遺物（３） …… 230
第202図　古道，溝１～６・溝４出土遺物 …… 231
第203図　溝７・出土遺物 …… 232
第204図　溝８～12・溝10，11出土遺物 …… 234
第205図　溝13～16・溝13，14出土遺物 …… 235
第206図　溝17～21・溝19，20出土遺物 …… 236
第207図　溝22～24・溝21，23出土遺物 …… 237
第208図　土師器１ …… 238
第209図　土師器２ …… 239
第210図　土玉・土錘１ …… 240
第211図　土錘２ …… 241
第212図　青磁１ …… 242
第213図　青磁２ …… 243
第214図　青磁３ …… 244
第215図　青磁４ …… 245
第216図　青磁５ …… 246
第217図　青磁６ …… 247
第218図　青磁７ …… 248
第219図　青磁８ …… 249
第220図　青磁９ …… 250
第221図　青磁10 …… 251
第222図　青磁11 …… 252
第223図　青磁12 …… 253
第224図　青磁13 …… 254
第225図　白磁１ …… 255
第226図　白磁２ …… 256
第227図　白磁３ …… 257
第228図　白磁４ …… 258
第229図　白磁５ …… 259
第230図　青磁・白磁 …… 260
第231図　青磁・白磁・青白磁 …… 261
第232図　青花１ …… 262
第233図　青花２ …… 263
第234図　青花３ …… 264
第235図　青花４ …… 265
第236図　青花５ …… 266
第237図　青花６ …… 267
第238図　青花・赤絵 …… 268
第239図　中国陶器１ …… 269
第240図　中国陶器２ …… 270
第241図　中国陶器３ …… 271
第242図　中国陶器４ …… 272
第243図　中国陶器５ …… 273
第244図　中国陶器６ …… 274
第245図　中国陶器７ …… 275
第246図　中国陶器８ …… 276
第247図　中国陶器９ …… 277
第248図　朝鮮陶器・ベトナム陶器 …… 278
第249図　瓦器 …… 279
第250図　中世須恵器１ …… 280
第251図　中世須恵器２ …… 281
第252図　中世須恵器３ …… 282
第253図　中世須恵器４ …… 283
第254図　中世陶器１ …… 284
第255図　中世陶器２ …… 285
第256図　中世陶器３ …… 286
第257図　中世陶器４ …… 287
第258図　中世陶器５ …… 288
第259図　中世陶器６ …… 289
第260図　瓦質土器１ …… 290
第261図　瓦質土器２ …… 291
第262図　瓦質土器３ …… 292
第263図　瓦質土器４ …… 293
第264図　瓦質土器５ …… 294
第265図　瓦質土器６ …… 295
第266図　土師質土器１ …… 296
第267図　土師質土器２・その他 …… 297
第268図　瓦 …… 298
第269図　滑石製石鍋 …… 299
第270図　滑石製石鍋・滑石製品 …… 300
第271図　滑石製品・石製品 …… 301
第272図　砥石 …… 302
第273図　古銭１ …… 304
第274図　古銭２ …… 305
第275図　古銭３ …… 306
第276図　古銭４ …… 307
第277図　古銭５ …… 308
第278図　近世全体遺構図１ …… 328
第279図　近世全体遺構図２ …… 329
第280図　近世遺構配置図１ …… 330
第281図　近世遺構配置図２ …… 331
第282図　近世遺構配置図３ …… 332
第283図　近世遺構配置図４ …… 333
第284図　近世遺構配置図５ …… 334
第285図　近世遺構配置図６ …… 335
第286図　近世遺構配置図７ …… 336
第287図　近世遺構配置図８ …… 337
第288図　近世遺構配置図９ …… 338
第289図　近世遺構配置図10 …… 339
第290図　近世遺構配置図11 …… 340
第291図　近世遺構配置図12 …… 341
第292図　近世遺構配置図13 …… 342
第293図　近世遺構配置図14 …… 343

第294図　近世遺構配置図15 …… 344
第295図　近世遺構配置図16 …… 345
第296図　近世遺構配置図17 …… 346
第297図　近世遺構配置図18 …… 347
第298図　近世遺構配置図19 …… 348
第299図　近世遺構配置図20 …… 349
第300図　近世遺構配置図21 …… 350
第301図　近世遺構配置図22 …… 351
第302図　近世遺構配置図23 …… 352
第303図　近世遺構配置図24 …… 353
第304図　掘立柱建物跡１，２号・出土遺物 …… 354
第305図　焼土跡１～３号 …… 355
第306図　製鉄関連遺構１，２号 …… 357
第307図　製鉄関連遺構３号 …… 358
第308図　製鉄関連遺構４号 …… 359
第309図　製鉄関連遺構５～８号・
　　７号周辺鉄滓出土状況 …… 360
第310図　製鉄関連遺構９，10号 …… 361
第311図　製鉄関連遺構11～16号 …… 362
第312図　製鉄関連遺構17～19号 …… 363
第313図　土坑１～５号・２，５号出土遺物 …… 365
第314図　土坑６～８号・８号出土遺物 …… 366
第315図　土坑墓１，２号・出土遺物 …… 367
第316図　土坑墓３～５号 …… 368
第317図　土坑墓６，７号・６号出土遺物 …… 369
第318図　土坑墓８～10号・９号出土遺物 …… 370
第319図　土坑墓11号 …… 371
第320図　礫集積１～４号 …… 372
第321図　石列・ピット１～３号・３号出土遺物 …… 373
第322図　ピット４号・４，６号出土遺物 …… 374
第323図　古道１～５・古道１～３断面 …… 375
第324図　溝１・出土遺物 …… 377
第325図　溝１出土遺物 …… 378
第326図　溝２～５・溝３，４出土遺物 …… 379
第327図　溝６～８・溝６，７出土遺物 …… 380
第328図　自然流路１断面１・出土遺物 …… 381
第329図　自然流路１断面１付近出土遺物（１） …… 382
第330図　自然流路１断面１付近出土遺物（２） …… 383
第331図　自然流路１断面１付近出土遺物（３） …… 384
第332図　自然流路１断面１付近出土遺物（４） …… 385
第333図　自然流路１断面１付近出土遺物（５） …… 386
第334図　自然流路１断面１付近出土遺物（６） …… 387
第335図　自然流路１断面２，断面３，
　　自然流路２断面・自然流路１断面１，
　　断面３付近，自然流路２出土遺物 …… 388
第336図　磁器１　碗 …… 389
第337図　磁器２　碗 …… 390
第338図　磁器３　碗 …… 391
第339図　磁器４　碗・小坏 …… 392
第340図　磁器５　皿 …… 393
第341図　磁器６　皿 …… 394
第342図　磁器７　皿 …… 395
第343図　磁器８　皿・鉢 …… 396
第344図　磁器９　蓋・その他 …… 397
第345図　陶器１　碗 …… 398
第346図　陶器２　碗・小坏 …… 399
第347図　陶器３　皿 …… 400
第348図　陶器４　鉢 …… 401
第349図　陶器５　徳利 …… 402
第350図　陶器６　蓋・水注・土瓶 …… 403
第351図　陶器７　土瓶 …… 404
第352図　陶器８　土瓶・釜 …… 405
第353図　陶器９　片口 …… 406
第354図　陶器10　片口・鉢 …… 407
第355図　陶器11　鉢・擂鉢 …… 408
第356図　陶器12　擂鉢 …… 409
第357図　陶器13　擂鉢 …… 410
第358図　陶器14　蓋（甕・壺用） …… 411
第359図　陶器15　甕 …… 412
第360図　陶器16　甕 …… 413
第361図　陶器17　甕 …… 414
第362図　陶器18　壺 …… 415
第363図　陶器19　灯明具・仏具 …… 416
第364図　陶器20　その他 …… 417
第365図　金属製品１ …… 418
第366図　金属製品２ …… 419
第367図　金属製品３ …… 420
第368図　補遺　縄文土器１ …… 496
第369図　補遺　縄文土器２ …… 497
第370図　補遺　縄文土器３ …… 498
第371図　補遺　縄文土器４ …… 499
第372図　補遺　縄文土器５ …… 500
第373図　補遺　縄文土器６ …… 501
第374図　補遺　石器１ …… 502
第375図　補遺　石器２ …… 503
第376図　補遺　石器３ …… 504
第377図　補遺　渡畑遺跡 …… 506

写真・図版目次

巻頭図版１　上空から見た芝原遺跡（南から北を望む）
巻頭図版２　芝原遺跡出土「多口瓶」（古代）
巻頭図版３　芝原遺跡出土「須恵器大甕」（古代）
巻頭図版４　大量に出土した中世陶磁器
説明会の様子
上空から見た芝原遺跡周辺
上空から見た芝原遺跡周辺(下流側から持躰松･渡畑･芝原の各遺跡)
土層堆積状況
図版１　芝原遺跡遠景
図版２　調査風景
図版３　古代の調査１
図版４　古代の調査２
図版５　中世の調査１
図版６　中世の調査２
図版７　中世の調査３
図版８　中世の調査４
図版９　中世の調査５
図版10　中世の調査６
図版11　中世の調査７
図版12　中世の調査８
図版13　近世の調査１
図版14　近世の調査２
図版15　近世の調査３
図版16　古代の遺物
図版17　古代　土坑１号出土遺物
図版18　古代　土師器椀・坏
図版19　古代　土師器皿・鉢・甕
図版20　古代　黒色土器・赤色土器・須恵器
図版21　古代　須恵器壺・多口瓶
図版22　古代　須恵器大甕
図版23　古代　墨書土器
図版24　古代　墨書土器「宅」
図版25　古代　ヘラ書き土器「宅」
図版26　古代　ヘラ書き土器　文字
図版27　古代　ヘラ書き土器・硯　その他
図版28　中世の出土遺物
図版29　中世　遺構内出土遺物１
図版30　中世　遺構内出土遺物２
図版31　中世　遺構内出土遺物３
図版32　中世土師器・土錘
図版33　青磁１
図版34　青磁２
図版35　青磁３
図版36　青磁４
図版37　青磁５
図版38　青磁６・白磁１
図版39　白磁２
図版40　白磁３
図版41　青磁７・白磁４
図版42　青磁８・白磁５
図版43　青磁10・白磁７・青白磁
図版44　青花１
図版45　青花２
図版46　青花３
図版47　青花４
図版48　青花５
図版49　青花６
図版50　青花７・赤絵
図版51　中国陶器１
図版52　中国陶器２
図版53　中国陶器３
図版54　中国陶器４
図版55　中国陶器５・朝鮮陶器１
図版56　中国陶器６
図版57　中国陶器７
図版58　中国陶器８・朝鮮陶器２・ベトナム陶器
図版59　瓦器
図版60　中世陶器１・中世須恵器１
図版61　中世陶器２
図版62　中世陶器３
図版63　中世陶器４・中世須恵器２
図版64　中世須恵器３・瓦質土器１
図版65　瓦質土器２・土師質土器・その他
図版66　瓦・滑石製石鍋
図版67　滑石製品
図版68　砥石
図版69　五輪塔
図版70　近世　遺構内出土遺物
図版71　近世　磁器１
図版72　近世　磁器２
図版73　近世　磁器３
図版74　近世　陶器１
図版75　近世　陶器２
図版76　近世　陶器３
図版77　近世　陶器４
図版78　近世　陶器５
図版79　近世　陶器６
図版80　近世　陶器７
図版81　金属製品
図版82　鉄滓
図版83　補遺　縄文土器１
図版84　補遺　縄文土器文様展開写真
図版85　補遺　縄文土器２
図版86　補遺　石器１
図版87　補遺　石器２
図版88　補遺　渡畑遺跡出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護と活用を図るため，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は，中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課，以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けて県文化財課，金峰町教育委員会が平成５年度に分布調査を実施したところ，事業区域内に万之瀬川川底遺跡，松ケ鼻遺跡，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡の６遺跡の所在が判明した。

この結果を受けて，県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）の３者で協議した結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとした。

確認調査は，県立埋文センターが担当し，平成10年度に実施した。その結果，予定地において49,600㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受けて，再度３者で協議した結果，本調査は，県立埋文センターが担当し，平成11年度から平成16年度に調査を実施した。

報告書作成作業は，県立埋文センターが担当し，平成17年度から報告書作成作業に着手した。平成22年３月に「芝原遺跡１縄文時代遺構編」，平成23年３月に「芝原遺跡２縄文時代遺物編」を刊行し，本年度は，「芝原遺跡３古代・中世・近世編」を刊行することとした。なお，平成24年度も継続して作業を実施し，報告書を刊行する計画である。

第２節　事前調査

１　分布調査

（１）調査概要

県土木部は，中小河川改修事業(万之瀬川)の日置郡金峰町内(現南さつま市)における事業計画実施に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，県文化財課に照会した。

これを受けて県文化財課，金峰町教育委員会が平成５年度に事業区域内の分布調査を実施したところ，事業区域内に万之瀬川川底遺跡，松ヶ鼻遺跡，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡の６遺跡の所在が明らかとなった。

２　確認調査

（１）調査概要

平成10年８月に県土木部・県文化財課・県立埋文センターの３者で今後の調査の進め方について協議した結果，平成10年度中に芝原遺跡の確認調査を実施することとした。

確認調査は，平成10年11月に実施した。

（２）調査体制

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	吉永　和人
調査企画	次長兼総務課長	尾崎　進
	調査課長	戸﨑　勝洋
	調査課長補佐兼	
	第一調査係長	新東　晃一
	主任文化財主事	青﨑　和憲
調査担当	文化財主事	安藤　浩
	文化財研究員	中村　和美
事務担当	主査	前屋敷裕徳
	主査	政倉　孝弘
	主査	溜池　桂子

３　調査経過

事業区域内に２ｍ×10ｍを基本としたトレンチを，ほぼ50ｍおきに13本設定した（第４図）。確認調査面積は339㎡であった。

各トレンチの概要は，表１のとおりである。

表１　各トレンチの概要

トレンチ	遺物	遺構	時代	包含層までの深さ
1	有	有	中世･古墳・縄文後期	20～40cm
2	有	有	中世･古墳・縄文後期	30cm
3	有	有	中世・古代	20cm
4	有	無	中世	85cm
5	有	有	中世	70～85cm
6	有	有	中世・縄文後期	80cm
7	無	無	―――	―――
8	無	無	―――	―――
9	無	無	―――	―――
10	無	無	―――	―――
11	有	有	中世	20cm
12	有	無	中世	70～110cm
13	有	有	古墳	40cm

表１の結果のとおり，７トレンチから10トレンチを除く９か所のトレンチで，遺物包含層または遺構が確認された。７トレンチから９トレンチの範囲は，土層の堆積状況から旧河道に相当すると判断できた。事業区域内はすでに圃場整備が行われ，中世から古墳時代の包含層は地点によっては残存が悪く，包含層までの深さは極めて浅い状態であった。縄文時代については，やや深い砂層から出土している。

確認調査の結果から，芝原遺跡の範囲はC-１区からB～E-38区（第４図）であり，遺跡面積は49,600㎡である。またその時代は，縄文時代中・後期，古墳時代，古代，中世（前期・後期）であるが，地点によってその密度が異なっている。

この確認調査の結果を受け，県土木部・県文化財課・県立埋文センターの３者で協議し，現状保存や設計変更が不可能であることから，平成11年度から記録保存のための本調査を実施することとなった。

第３節　本調査

１　調査概要

本調査では，平成11年度及び平成12年度に築堤部分，平成13年度に新堤防と旧堤防の間，平成14年度に新堤防と旧堤防の間及び万之瀬橋の橋脚部分，平成15年度に橋梁部及び樋門から新堤防の間，平成16年度に前年度の調査未了部分を調査した。

２　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部河川課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　吉永　和人（平成11年度）
井上　明文（平成12～14年度）
木原　俊孝（平成15・16年度）
調査企画　次長兼総務課長　黒木　友幸（平成11～13年度）
田中　文雄（平成14・15年度）
賞雅　彰（平成16年度）
調査課長　戸﨑　勝洋（平成11年度）
新東　晃一（平成12～16年度）
調査課長補佐兼第一調査係長　新東　晃一（平成11年度）
調査課長補佐　立神　次郎（平成12～16年度）
主任文化財主事兼第一調査係長　青﨑　和憲（平成12・13年度）
池畑　耕一（平成14・15年度）
主任文化財主事兼第二調査係長　彌栄　久志（平成16年度）
主任文化財主事　中村　耕治（平成11～15年度）
長野　眞一（平成16年度）
調査担当　文化財主事　安藤　浩（平成11年度）
西郷　吉郎（平成11年度）
栗林　文夫（平成11～13年度）
日髙　正人（平成13～15年度）
中村　和美（平成14・15年度）
最上　優子（平成14・15年度）
湯之前　尚（平成15年度）
元田　順子（平成15年度）
富山　孝一（平成15・16年度）
抜水　茂樹（平成16年度）
黒川　忠広（平成16年度）
文化財研究員　福永　修一（平成12年度）
上床　　真（平成16年度）
文化財調査員　橋口　亘（平成12～14年度）
松田　朝由（平成14年度）
事務担当　総務係長　有村　貢（平成11・12年度）

前田　昭伸
（平成13・14年度）

事務担当　総務係長　平野　浩二
（平成15・16年度）
主事　溜池　佳子
（平成11年度）
主査　今村孝一郎
（平成13年度）
主査　脇田　清幸
（平成14年度）
主事　池　珠美
（平成15年度）

調査指導　鹿児島大学歯学部
助手　竹中　正巳
（平成12～14年度）
鹿児島大学埋蔵文化財調査室
助手　中村　直子
（平成12年度）
鎌倉考古学研究所
所員　馬淵　和雄
（平成13年度）
鹿児島県立短期大学生活科学科
助教授　揚村　固
（平成13年度）
鹿児島大学教育学部
助教授　日隈　正守
（平成13年度）
株式会社九州
テクノリサーチ　大澤　正己
（平成14年度）
広島大学文学部
教授　河瀬　正利
（平成15年度）
西南学院大学
教授　髙倉　洋彰
（平成15年度）

3　調査経過

調査の具体的経過については，調査日誌をもとに主な出来事を月単位で記していきたい。

◇　平成11年度

平成11年10月15日～
平成12年３月22日　実働83日

〈10月〉

器材搬入。A～E－７～11区のⅢ層掘り下げ。中世の溝検出（B～C－８～10）。

〈11月〉

A・B－３～10区，C～E－４～６区のⅢ層掘り下げ。土坑，溝状遺構，竪穴建物検出。C－４区から白磁椀出土。D－４焼土内から青磁稜花皿の完形品出土。

〈12月〉

C・D－１～３区Ⅲ層掘り下げ。A'～C－16～22Ⅲ層上面検出。A'・A－20区で掘立柱建物跡検出。A－18区で土坑墓検出。B・C－18区で鍛冶遺構検出。A'・A－21・22区Ⅲ層掘り下げ。

〈１月〉

A～C－11～16区Ⅲ層上面検出。A～C－11～13区，B・C－14・15区，A～C－16～18区Ⅲ層掘り下げ。B・C－13～15区で畠検出。空中写真撮影（27日）。

〈２月〉

A～C－17・18区，A'～C－19～22区Ⅲ層掘り下げ。B・C－11・12区，A～C－13～17区Ⅳ層掘り下げ。D－15区で炉跡検出。B・C－13・14区Ⅴ層で畠検出。東側調査区埋め戻し（７日）。竹中正巳氏（鹿大歯学部助手）による土坑内人骨の鑑定（15日）。

〈３月〉

A～C－14～16区，A－17・18区Ⅲ層掘り下げ。A～C－17～19区Ⅵ層掘り下げ。縄文後期，晩期の土器多数出土。調査終了（17日）

◇　平成12年度

平成12年４月24日～
平成13年１月25日　実働107日

〈４月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（24日）表土の剥ぎ取り，Ⅲ層面検出。

〈５月〉

A～C－24～29区のⅢ層上面検出。溝状遺構，ピット，畝状遺構検出。A・B－20～24区のⅢ層上面検出。近世土坑墓２基検出（古銭有り）。A'～C－11～22区Ⅶ層検出。かまど遺構切り取り保存。

〈６月〉

A'～C－19～22区Ⅳ層掘り下げ。A・B－22～26区Ⅲ層上面でピット，土坑，溝跡，掘立柱建物跡検出。A'～C－21～29区の空中写真撮影。A'～B－27～29区Ⅲ層掘り下げ。A・B－11～17区Ⅳ層掘り下げ。A'～B－15・16区のⅣ層上面で遺構検出。

〈７月〉

A'～C－20～29区Ⅲ層掘り下げ及びⅣ層上面で遺構検出。A'－29区で竪穴建物検出。A'～C－11～21区のⅧ層掘り下げ。B－19区竪穴建物検出。

〈８月〉

B－21～24区，C－22～25区のⅣ層の遺構掘り下げ。C－24～25区で土坑墓３基（人骨３体）検出。B－17～19区Ⅷ層掘り下げ。A～C－20～23区のⅥ層掘り下げ。A'～B－26～29区Ⅳ層の遺構掘り下げ。A・B－

20～24区Ⅵ層検出。

〈９月〉

A～C－22～29区Ⅵ層掘り下げ。A－25区で集石検出。A－26区から指宿式土器出土。A'・A－17～19区Ⅱ層掘り下げ，遺構検出，Ⅵ層上面検出，掘り下げ。A～C－21～23区Ⅷ層掘り下げ。

〈10月〉

A・B－26～28区Ⅵ層掘り下げ。A'・B－23～30区Ⅷ層掘り下げ。A～C－21～23区Ⅷ層掘り下げ。

〈11月〉

A'・B－30・31区の表土剥ぎ，Ⅲ層掘り下げ。ピット，井戸跡，土坑，溝跡，掘立柱建物跡検出。

〈12月〉

A'・B－30・31区Ⅲ層検出のピット，土坑，竪穴建物の掘り下げ。Ⅳ層検出。Ⅳ・Ⅴ層重機で剥ぎ取り。

〈１月〉

A'・B－30・31区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取上げ。調査終了（25日）

◇　平成13年度

平成13年５月７日～

平成14年３月19日　実働174日

〈５月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（７日）。E・F－９・10区表土の剥ぎ取り。E～H－２～５区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。畠検出。E～G－２～５区Ⅳ層上面検出。ピット，木棺墓，大溝検出。E～G－７～12区掘り下げ。大溝内人骨出土。土坑墓検出（F・G－８区）。E～G－５～12区のⅡ層・攪乱層掘り下げ。D～F－11～14区の攪乱層，溝の掘り下げ。畠検出。

〈６月〉

D～G－12区の大溝内から青磁椀・皿の完形品出土。E－13区の土坑墓から古銭，人骨出土。D～G－６～12区Ⅱ層上面検出の遺構掘り下げ。ピット，芋穴，土坑，掘立柱建物，大溝検出。E－７区の土坑墓から人骨出土。E・F－７・８区Ⅳ層掘り下げ。D・E－13区大溝検出。E・F－16・17区Ⅱ層で畠検出。

〈７月〉

E・F－９・10区，D～F－11・12区，D・E－13区，D～F－14区Ⅵ層掘り下げ。D～F－15～23区Ⅱ層掘り下げ。畠，土坑，かまど跡検出。

〈８月〉

D～G－15～22区Ⅱ層掘り下げ。E・F－８区で炭化物，鉄滓の入った遺構検出。E・F－17・18区で土器・石器の集積検出。D・E－14区のⅥ層掘り下げ。

〈９月〉

D～F－18～28区Ⅱ層掘り下げ。E・F－15～17区Ⅱ層掘り下げ。畠畝跡多数検出。D－18区から多口瓶出土。

〈10月〉

D～F－25～31区のⅡ層掘り下げ。D・E－20～26区Ⅲ層検出。C～F－14～17区Ⅵ層掘り下げ。D－24区で焼失建物跡検出。

〈11月〉

C～E－23～31区Ⅲ層掘り下げ。D～F－19～23区Ⅳ層検出の遺構掘り下げ。

〈12月〉

B・C－25～29区Ⅳ層掘り下げ。B・C－30・31区Ⅲ層掘り下げ。C･D－18～21区表土剥ぎ，Ⅱ層掘り下げ。B・C－30・31区で中世土坑墓検出。E－27区で建物に伴う４面庇部検出。

〈１月〉

B～E－26～31区Ⅲ層掘り下げ。２×３間の掘立柱建物検出。C・D－20～25区Ⅱ層掘り下げ。C～E－24・25区Ⅳ層上面検出。B・C－17区のⅣ層上面で，かまど跡，古道，ピット検出。空中写真撮影（29日）。

〈２月〉

B～E－24～31区Ⅳ層掘り下げ。かまど跡，ピット検出。遺構の写真撮影。

〈３月〉

C～E－24～28区Ⅳ層掘り下げ。集石，かまど跡等の遺構実測。調査終了（19日）。

◇　平成14年度

平成14年５月７日～

平成15年3月20日　実働157日

〈５月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（７日）。C～E－18～25区Ⅵ層掘り下げ。集石検出。D～F－14・15区Ⅵ層上面検出。

〈６月〉

E－22～26区，D－24・25区，C－25区Ⅵ層掘り下げ。B・C－15・16区Ⅲ層掘り下げ。C・D－25区から指宿式土器多数出土。D－25区からサメの歯出土。旧堤防下の試掘実施（14日）。

〈７月〉

D・E－19～24区Ⅳ層掘り下げ。C－18～23区，D－19～22区Ⅷ層掘り下げ。C－15～17区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。D－19区から春日式土器が部分的に集中して出土。C－16区から「開元通宝」出土。橋脚部表土剥ぎ（11日～23日）。

〈８月〉

橋脚部掘り下げ。C･D－20･24･25区Ⅷ層掘り下げ。D～G－30～32区で近世畠検出。D－32・33区で製鉄遺構検出。D－34区から成川式土器，須恵器，染付出土。C－36・37区で成川式土器出土。

〈９月〉

C・D－36・37区Ⅲ層掘り下げ。C～F－30～32区Ⅲb層掘り下げ。D～E－32・33区Ⅲ層掘り下げ。E－31区でかまど跡検出。E－32区で竪穴住居検出。

〈10月〉

D～F－30区，C・D－32～34区，C・D－36・37区Ⅲb層掘り下げ。E・F－30～32区，C・D－33・34区，C・D－36・37区Ⅳ層掘り下げ。E－31区の土坑墓から人骨検出。C－33区の方形竪穴建物跡から銅製鏃検出。D－37区から黒髪式土器出土。

〈11月〉

C・D－32・36・37区Ⅳ層掘り下げ。C～D－33・34区Ⅷ層掘り下げ。F～H－23～29区表土掘り下げ。C・D－33・34区から市来式土器出土。遺構実測，写真撮影多数。

〈12月〉

E～G－26～29区Ⅲ層掘り下げ，畠検出。C～F－32区Ⅶ層掘り下げ。E・F－30・31，C・D－33・34，36～38区Ⅷ層掘り下げ。

〈１月〉

F・G－25～27区Ⅰb層掘り下げ。溝遺構検出。E～G－18～24区Ⅱ層掘り下げ。遺構検出。B・C－32・33，D－31・32，E・F－30～33区Ⅷb層掘り下げ。C・D－35・36区Ⅹ層掘り下げ。鐘崎式土器出土。

〈２月〉

E・F－32区Ⅷb層掘り下げ。市来式土器多数出土。D・F－30・31区内から指宿式土器，春日式土器多数出土。E・F－30～32，B～D－32・33区Ⅸb層掘り下げ。集石，ピット，土坑検出。D～F－20～24区Ⅹ層掘り下げ。F～G－17～21区Ⅳ層掘り下げ。空中写真撮影(21日)。

〈３月〉

E－30・31区Ⅸ層掘り下げ。指宿式土器多数出土。E・F－24・25区Ⅱ層掘り下げ。E－24区でかまど跡，焼土集中検出。D～F－19～24区Ⅹ層掘り下げ。調査終了（20日)。

◇　平成15年度

平成15年５月６日～

平成16年3月22日　実働153日

〈５月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（６日)。F・G－15～20区Ⅳ層掘り下げ。F～H－13・14区Ⅲ層掘り下げ。E・F－23～29区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器出土，土坑検出。F－28・29区で集石検出。E・F－26～29区Ⅵ層掘り下げ。E－30区で集石検出。E・F－19～23区の縄文時代後期包含層より，生木，ドングリ等の木の実多数出土。

〈６月〉

F・G－14～18区Ⅱ層掘り下げ。G－16・17区で焼土，炭化物検出。E・F－19～23，26～29，D・E－29・30区Ⅵ層掘り下げ。E・F－26～29区で集石９基，土坑，配石遺構１基検出。A・B－36・37区Ⅱ層掘り下げ。

〈７月〉

E・F－24～26区，D～F－26～30区，D－35，37区Ⅵ層掘り下げ。E・F－27区から磨消縄文土器出土。E－29区，D・E－30区で竪穴住居検出。A～C－35～37区Ⅱ層掘り下げ。D－36区Ⅳ層掘り下げ。

〈８月〉

作業員一部上水流遺跡へ（７日)。E－27～30区Ⅵ層掘り下げ。A～D－32～37区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。D－34～36区Ⅲ層掘り下げ。製鉄炉検出。D－37区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器溜り検出。空中写真撮影（６日)。

〈９月〉

A～C－32～35区Ⅲb層掘り下げ。B－33・34区で溝状遺構，須恵器，土師器溜り検出。B－34・35区で溝状遺構検出。A～C－36・37区Ⅲb層掘り下げ。C・D－37区Ⅳ層掘り下げ。D－37区から成川式土器溜り検出。

〈10月〉

A～C－31～37区Ⅲb層掘り下げ。ピット，土坑検出。A・B－36・37区から銅鏃出土。C－35区から市来式土器，磨製石斧出土。

〈11月〉

B・C－31～35区Ⅲb層掘り下げ。B－33・34区の古墳時代竪穴住居跡周辺から青銅製の小形倣製鏡出土。B－31区から入佐式土器出土。B・C－31～35区Ⅳ層掘り下げ。ピット，土坑検出。B－31区から市来式土器出土。F－34区の河川堆積層から「寛永通宝」出土。D～F－35～37区Ⅳ層掘り下げ。E－35区で焼土遺構検出。

〈12月〉

C～E－36～38区Ⅳ層掘り下げ。B～C－31～33，A～C－34・35区Ⅵ層掘り下げ。ピット検出。A・B－35区から市来式土器多数出土。

〈１月〉

B・C－31～35区Ⅵa・Ⅵb層掘り下げ。ピット検出。遺構掘り下げ，実測，写真撮影等を行う。Ⅵ層遺物多量に出土のため２ｍグリッドにて一括取り上げ（９日～)。

〈２月〉

B・C－31～35区Ⅵb，Ⅶ層掘り下げ。阿高式土器，春日式土器出土。B・C－35区から鋸歯状尖頭器出土。D－35区の溝状遺構から染付，滑石製品，龍泉窯系青磁出土。

〈３月〉

B～D－31～35区のⅧ～Ⅹ層掘り下げ。ピット等の

検出。B－34区で集石２基検出。A～C－36・37区Ⅵ層掘り下げ。調査終了（22日）。

◇　平成16年度

平成16年５月14日～

平成16年７月21日　実働37日

〈５月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（14日）。A～C－36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B－36区から完形の縄文土器３点出土。赤色顔料付着の南福寺式土器（鉢形）出土。軽石製加工品出土。

〈６月〉

A～C－36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B－36区から足形土製品出土。

〈７月〉

A～C－36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B・C－36・37区で集石２基検出。北側土層断面清掃，写真撮影（５日）。調査終了（21日）。

第４節　整理・報告書作成

１　作成概要

県土木部・県文化財課・県立埋文センターの３者で報告書作成作業の進め方について協議した結果，中小河川改修事業（万之瀬川）の整理・報告書作成業務を平成25年度までとし，次のように計画した。

平成17年度　整理作業
　芝原遺跡・上水流遺跡
平成18年度　整理作業
　持躰松遺跡・芝原遺跡
　報告書刊行
　上水流遺跡１
　「縄文時代後期から弥生時代編」
平成19年度　整理作業
　芝原遺跡
　報告書刊行
　上水流遺跡２
　「古墳時代から近世編」
平成20年度　整理作業
　渡畑遺跡・芝原遺跡
　報告書刊行
　上水流遺跡３
　「縄文時代前期・中近世遺物編」
平成21年度　報告書刊行
　上水流遺跡４
　「縄文時代前期末から中期前半編」
　渡畑遺跡１
　「縄文時代編」
　芝原遺跡１
　「縄文時代遺構編」
平成22年度　報告書刊行
　渡畑遺跡２
　「弥生時代から中近世編」
　芝原遺跡２
　「縄文時代遺物・土器編」
平成23年度　報告書刊行
　芝原遺跡３
　「縄文時代遺物・石器編」
　芝原遺跡４
　「弥生・古墳時代遺構編」
平成24年度　報告書刊行
　芝原遺跡５
　「弥生・古墳時代遺物編」
平成25年度　報告書刊行
　芝原遺跡６
　「古代から近世編」

上記の計画に従い，平成21年度まで整理作業・報告書の刊行を進めてきたが，平成21年10月13日に３者で再度協議した結果，報告書の内容と刊行予定を見直し，中小河川改修事業（万之瀬川）の整理・報告書作成業務を平成24年度までとした。

また，古墳時代に関しては遺物量が膨大なため，「古代から近世編」と並行して２年計画で整理作業を進めていくこととし，刊行順を入れ替えた。よって，平成22年度以降の計画を次のように変更した。

平成22年度　報告書刊行
　渡畑遺跡２
　「弥生時代から中近世編」
　芝原遺跡２
　「縄文時代遺物編」
平成23年度　報告書刊行
　芝原遺跡３
　「古代から近世編」
　整理作業
　弥生・古墳時代の遺構・遺物
平成24年度　報告書刊行
　芝原遺跡４
　「弥生・古墳時代編」

２　作成体制

（平成17年度）

事 業 主 体　鹿児島県土木部河川課
作 成 主 体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作 成 統 括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所　　長　上今　常雄

作成企画　次長兼総務課長　有川　昭人
次長兼調査第一課長　新東　晃一
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長　長野　眞一
作成担当　文化財主事　東郷　克利
富山　孝一
廣　栄次
事務担当　主幹兼総務係長　平野　浩二

（平成18年度）
事業主体　鹿児島県土木部河川課
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　上今　常雄
（平成18年７月まで）
宮原　景信
（平成18年８月から）
作成企画　次長兼総務課長　有川　昭人
次長　新東　晃一
調査第一課長　池畑　耕一
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長　中村　耕治
作成担当　文化財主事　東郷　克利
富山　孝一
廣　栄次
主任文化財主事　繁昌　正幸
文化財主事　抜水　茂樹
黒川　忠広
文化財研究員　上床　真
事務担当　総務係長　寄井田正秀

（平成19年度）
事業主体　鹿児島県土木部河川課
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原　景信
作成企画　次長兼総務課長　平山　章
次長　新東　晃一
調査第一課長　池畑　耕一
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長　中村　耕治
作成担当　文化財主事　東郷　克利
文化財主事　溝口　学
富山　孝一
抜水　茂樹
森　雄二
黒川　忠広
文化財研究員　上床　真
事務担当　総務係長　寄井田正秀

（平成20年度）
事業主体　鹿児島県土木部河川課
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原　景信
作成企画　次長兼総務課長　平山　章
次長　池畑　耕一
調査第一課長　青﨑　和憲
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長　井ノ上　秀文
作成担当　文化財主事　溝口　学
佐藤　義明
木之下　悦朗
黒川　忠広
文化財研究員　上床　真
事務担当　総務係長　紙屋　伸一

（平成21年度）
事業主体　鹿児島県土木部河川課
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
作成企画　次長兼総務課長　齊藤　守重
次長　青﨑　和憲
調査第一課長　中村　耕治
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長　宮田　栄二
作成担当　文化財主事　溝口　学
小林　晋也
日高　勝博
文化財研究員　上床　真
事務担当　総務係長　紙屋　伸一
主査　高﨑　智博

（平成22年度）
事業主体　鹿児島県土木部河川課
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
作成企画　次長兼総務課長　田中　明成
次長　中村　耕治

調査第一課長　長野　眞一
調査第一課第二調査係長　八木澤　一郎
作成担当　文化財主事　溝口　学
小林　晋也
池畑　耕一
文化財研究員　平屋　大介
事務担当　専門員　鳥越　寛晴
調査指導　早稲田大学理工学術院
准教授　山本　信夫
鹿児島女子短期大学
教授　竹中　正巳

（平成23年度）
事業主体　鹿児島県土木部河川課
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
作成企画　次長兼総務課長　田中　明成
次長　井ノ上　秀文
調査第一課長　堂込　秀人
調査第一課第二調査係長　大久保　浩二
作成担当　文化財主事　関　明恵
長﨑　慎太郎
有馬　孝一
文化財研究員　平屋　大介
事務担当　主事　岡村　信吾
調査指導　早稲田大学理工学術院
准教授　山本　信夫
鹿児島女子短期大学
教授　竹中　正巳

3　作成経過

芝原遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は，平成17年度より実施した。作業は，県立埋文センターにおいて，他の万之瀬川流域の遺跡群の整理作業と同時進行で行った。芝原遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡であることから，時代ごとに報告書の刊行計画を立て，出土遺物の洗浄・注記後，時代及び遺構ごとに土器・石器の分類を行った。遺構は，調査担当者の記述・意見を基に，実測図・写真等から，その埋土・形状・大きさ等を再検討し，遺構の認定を行った。膨大な遺物や遺構を効率的に処理するために，ジェットマーカーやパソコン・土器実測補助器の活用や，土器・石器の外部への実測委託も行った。

本遺跡出土の土師器・須恵器・陶磁器については，早稲田大学理工学術院准教授山本信夫氏に，中世土坑墓から出土した人骨の鑑定については，鹿児島女子短期大学教授竹中正巳氏に指導をいただいた。また，製鉄関連の遺構・遺物については，九州テクノリサーチの大澤正己氏に金属学的調査を依頼した。



説明会の様子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

芝原遺跡は，鹿児島県南さつま市金峰町大字宮崎に所在し，万之瀬川下流の右岸，標高約４ｍの自然堤防上に立地する。

南さつま市金峰町の地形は大きく山地・シラス台地・沖積平野･砂丘に分けられる。山地は町の東半分を占め，標高200ｍを超える山系が南北に縦断する形で連なっており，金峰山や中岳などがある。シラス台地は，錦江湾奥部の姶良カルデラ噴出起源の入戸火砕流（シラス）が堆積したものである。

万之瀬川は，鹿児島市錫山に源を発し，南さつま市加世田万世に至る延長36㎞，流域面積37㎢の二級河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており，下流域には沖積平野が広がっている。また，中流域には万之瀬川の蛇行によって浸食されたシラス台地がみられ，こうした砂丘地とシラス台地には，縄文時代から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在している。

遺跡周辺では万之瀬川が大きく蛇行しており，かつ，加世田川や長谷川などの支流の合流点も近くにあり，周辺の沖積平野は，過去梅雨や台風の時期になるとたびたび水害に遭っている。特に享和３年(1803)の大洪水では河口が移動して現在の流れとなったが，それ以前は南側に蛇行して流れ，現在より約３㎞南の地点で東シナ海に注いでいたことがわかっている。また，明治35年（1902）測量の第１図と現在の航空写真（写真２）を比較すると，本遺跡東側の村原付近で河川改修（昭和初期）が行われ，低地において蛇行する部分を直線化したことがわかる。

本遺跡から東を望むと，標高約200ｍ前後の山々が南北を縦断している。このなかでも約７㎞北東方向にある金峰山は，旧町名（金峰町）の由来ともなった標高636ｍの薩摩半島中央部における最高峰で，古来より信仰の対象となっている。また，海上航行の際には，薩摩半島南西端にある野間岳と共に，ランドマーク的役割を果たしていた。

第２節　歴史的環境

南さつま市では，旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている。これらの中には，学史上極めて重要な遺跡も含まれており，当地域が考古学研究の良好なフィールドであることを改めて示唆している。ここでは，旧石器時代から近世に至るまでを概観していきたい。

旧石器時代では，金峰町小中原遺跡[17]・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が，金峰町山野原遺跡[9]・加世田平田尻遺跡から細石器が発見されている。平田尻遺跡では礫群も発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては，加世田に椈ノ原遺跡[43]がある。ここでは，連穴土坑・集石等の遺構が発見され，隆帯文土器･磨製石斧などの遺物が出土している。特に，出土した丸ノミ状の磨製石斧は椈ノ原型と称されるほど特徴的である。平成９年（1997）には国史跡に指定された。また，加世田内山田にある志風頭遺跡では，連穴土坑から完形の隆帯文土器が出土している。この土器の放射性年代測定の結果，11,860±50年BPとされている。また，金峰町中尾遺跡からも同時期の遺物・遺構が確認されている。

縄文時代早期の遺跡には，草創期でも紹介した椈ノ原遺跡が著名である。昭和52年（1977）の発掘調査で出土した土器の中で６類として分類された資料は，早期前葉の土器型式設定を検討する上で重要な資料となった。金峰町小中原遺跡[17]では，前平式土器の円筒形・角筒形土器がまとまって出土している。特に，角筒形土器は，上半分は角筒形を，下半分は円筒形を呈しているものもあり，角筒形の発生を考える上で重要な資料となっている。

縄文時代前期の遺跡には，金峰町阿多貝塚[19]，上焼田遺跡[20]，上水流遺跡[37]がある。阿多貝塚から出土した資料の一部は，「阿多Ｖ類土器」（西唐津式土器）と称され，縄文時代前期土器研究に欠かすことのできない資料である。上焼田遺跡では，玦状耳飾が出土している。周辺からは，轟式土器が出土しているが，報告書では，轟式土器ではなく曽畑式土器ないしは春日式土器に伴うものとしてまとめている。上水流遺跡からは曽畑式土器が単独に出土しており，石器組成も含めて良好な資料となっている。また，中期末から後期初頭とされる深浦式土器も大量に出土している。

縄文時代中期の遺跡としては，上水流遺跡[37]から大型の集石と大量の春日式土器が出土しており，河川沿いの低地における遺跡の在り方が注目される。石堂遺跡や上焼田遺跡では並木式土器・阿高式土器が出土している。

縄文時代後期の遺跡には，本遺跡の他に先述の上水流遺跡[37]がある。上水流遺跡からは後期前半の指宿式土器や松山式土器が出土している。指宿式土器の底部圧痕からは，従来大隅半島に分布すると考えられていた「スダレ状圧痕」が確認されている。また，本遺跡と隣接する渡畑遺跡[29]からは本遺跡出土の足形土製品と接合する資料が確認されている。

縄文時代晩期の遺跡としては，上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡[45]がある。この遺跡からは，大型土坑等の遺構が検出されている。また，土器や石器の他に，土偶や軽石製岩偶・石棒などの祭祀をうかがわせる資料や勾玉・管玉・小玉などの垂飾品など様々な遺物が出土している。なお，この上加世田式土器は，近年の広

域編年研究により縄文時代後期に位置づける説もある。また，金峰町下原遺跡では，縄文時代晩期終末から弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って朝鮮半島系無文土器・籾痕土器・石包丁等が出土している。

弥生時代から古墳時代にかけて，市内では数多くの遺跡が発見されている。金峰町高橋貝塚(4)は，弥生時代前期を主体とする貝塚で，万之瀬川の支流堀川の右岸，標高11ｍの洪積世砂丘上にある。昭和37・38年（1962・1963）に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果，縄文時代晩期の夜臼式土器と高橋Ⅰ式土器の共伴関係が確認されたことや，南海産の貝を素材とした貝輪や南海産貝が出土したことなど，学史的に重要な遺跡である。平成18年（2006）には，鹿児島国際大学が，隣接する高橋遺跡の発掘調査を実施し，弥生時代に属する遺構を確認した。また，金峰町下小路遺跡(5)は，弥生時代中期の須玖式土器を用いた甕棺が検出された埋葬遺跡で，棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。金峰町松木薗遺跡(8)では弥生時代後期の環濠の可能性のある大溝が松木薗式土器を伴って発見されている。金峰町中津野遺跡(14)では，床面が３段構造になる竪穴住居跡が発見され，最下段である3段目からは完形品が40個出土しているという。また，ここは中津野式土器の標識遺跡でもある。この中津野式土器は，弥生時代終末の土器とする考えの他に，一部は古墳時代に入る土器があるという説があり，明確には位置付けがなされていない。現状としては，弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として認識されている。

古墳時代の遺跡には，加世田小湊にある奥山古墳（六堂会古墳）が特筆される。この遺跡は，昭和６年（1931）に発見され，石棺の内部には赤色顔料が塗られており，ガラス玉や長さ180㎝の鉄剣，刀子が副葬されていた。平成17年（2005）に実施された鹿児島大学の再調査の結果，周溝の一部と考えられる遺構が発見され，４世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。金峰町白糸原遺跡(25)では，竪穴住居跡19軒が検出され，辻堂原式土器から笹貫式土器にかけての集落であるとされる。上水流遺跡(37)からは竪穴住居跡11軒が検出されている。遺構内から，初期須恵器の出土がみられた。また，中津野遺跡に隣接する南下遺跡では，木製品をはじめ古墳時代の良好な資料が得られている。

古代にも多くの注目される遺跡が発見されている。金峰町小中原遺跡(17)では多くの掘立柱建物跡と「阿多」という字がヘラ書きされた土器などが発見されている。これらのことから阿多郡衙の可能性が考えられている。金峰町山野原遺跡(9)でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。また，祭祀遺構や土師器焼成遺構の可能性が考えられる遺構が発見されており，在地豪族に関わる施設であった可能性が考えられている。加治屋遺跡(41)では，土師甕を用いた埋設遺構と竪穴住居跡とされる遺構が確認されている。本遺跡(30)，持躰松遺跡(28)，上水流遺跡(37)でも墨書土器をはじめ多数の古代遺物が発見されている。

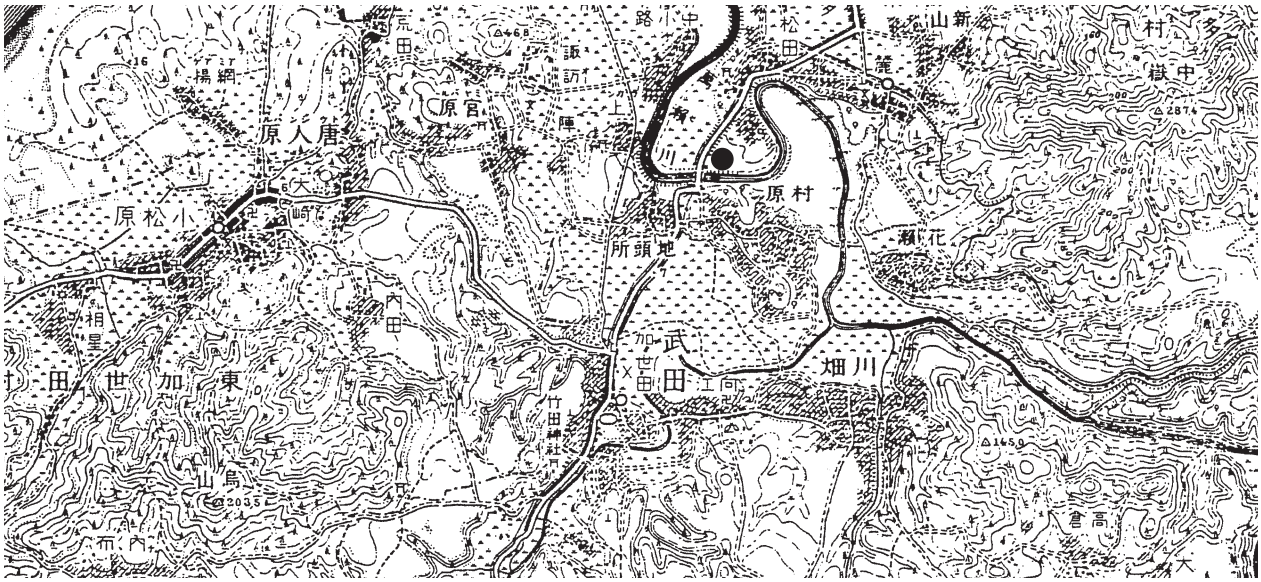
荒平窯をはじめとする中岳山麓古窯跡群は金峰町にあり，９世紀から10世紀にかけて稼働していたと考えられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが，表面採集された遺物が熊本県荒尾市荒尾窯跡群の製品との類似性が高いことから，人的・物的な交流があったと考えられている。

中世には，ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって，阿多郡は唯一大宰府領であった。その後13世紀前半には，金峰町が属する阿多郡は阿多氏･鮫島氏などによって支配を受け，加世田が属する加世田別府は別符氏・塩田氏などによって支配を受けることとなる。城館跡・山城跡も多く所在しており，上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻﨑城跡などは発掘調査が行われている。加世田益山の寺園氏宅には，二重の堀があったと伝えられ，現在もその痕跡が残っている（上東2004）。中世のものであるか明らかでないが，館であった可能性も考えられる。白糸原遺跡(25)では，中世末から近世の土坑墓が24基検出された。この中からは，南海産の夜光貝が出土している。加えて，竪穴建物跡や双魚文青磁なども発見されている。

古代から中世においては，本遺跡も属する万之瀬川流域の遺跡群も近年特に注目されている。全国各地の窯で焼かれた陶器類や，中国からの輸入陶磁器類などが多量に出土した持躰松遺跡や本遺跡を中心に，広範な交流の拠点であったことを示すものであり，今後大いに検討されるべき遺跡群である。

近世においては，前述の上水流遺跡(37)の大溝から16・17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼（苗代川系）等が，福建・広東及びベトナム産の甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。また，万之瀬川河口付近を含む吹上浜海岸では，東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている（橋口1999）。

外城制度（天明４年［1784］，外城から郷に改称）に関しては，行政の中心である地頭仮屋が阿多と田布施の２か所，武士の居住区である麓集落はその周辺にあった。渡畑周辺に点在した阿多麓集落は，享保13年（1728）の新田川掘削工事の完成後に台地上に移転している。新田開発のため，万之瀬川上流の南九州市川辺町腰ヶ原より16ｋｍに及ぶ用水路を宮崎の台地に引く難工事であった。この時の工事監督は，後の木曽川宝暦治水で奉行を務めている。商人の居住区である野町は，金峰地域では阿多公民館付近と池辺の２カ所にあった。また，藩の浄土真宗禁制に対し，かくれ念仏講により信仰が続けられた。



第１図　遺跡周辺の旧地形　（明治35年測量）



上空から見た芝原遺跡周辺　（国土画像情報国土交通省より）


高橋
牟田城
高橋
上山
上山橋
宮崎
日吉
宮崎
北堀
山村
畦杭
荒田
浜堀
益山
中小路
諏訪
加世田市
宮原
春
竹屋
松田北
駅通
松田南
高良
尿処理場
地頭所
白亀
白亀山
本町
村原
花瀬
川畑
加治屋
竹田神社
日新
加世田市

第２図　周辺遺跡位置図

表２　周辺遺跡一覧

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	時　　代							備　　考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
1	上ノ山後遺跡	南さつま市金峰町高橋上ノ山後			●	●	●	●		
2	上ノ山遺跡	南さつま市金峰町上ノ山			●					
3	草原町遺跡	南さつま市金峰町宮崎				●				
4	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋			●					「九州考古学」18
5	下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路			●					
6	牟田城跡	南さつま市金峰町高橋字真門砂入						●		中世城館跡　二階堂氏
7	篠田遺跡	南さつま市金峰町尾下					●			
8	松木薗遺跡	南さつま市金峰町尾下松木薗			●					「鹿児島考古」14号
9	山野原遺跡	南さつま市金峰町尾下字山野原		●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(5)(7)
10	鳥追薗遺跡	南さつま市金峰町尾下鳥追薗		●	●		●			
11	尾下遺跡	南さつま市金峰町尾下			●					
12	中津野下原遺跡	南さつま市金峰町中津野下原			●					「鹿児島県考古学紀要」2号
13	平畑遺跡	南さつま市金峰町中津野		●	●	●		●		金峰町埋文報(8)
14	中津野遺跡	南さつま市金峰町中津野1119			●					
15	中津野城跡	南さつま市金峰町新山						●		別称「江田城」
16	立野原遺跡	南さつま市金峰町新山				●				
17	小中原遺跡	南さつま市金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●		金峰町埋文報(5) 県埋文報(57)
18	野村原遺跡	南さつま市金峰町中津野				●				
19	阿多貝塚	南さつま市金峰町宮崎上焼田		●	●	●				「人類学史講座」第１巻 金峰町埋文発掘調査(1)
20	上焼田遺跡	南さつま市金峰町宮崎上焼田	●	●	●	●	●	●		金峰町埋文報(15)
21	上花立遺跡	南さつま市金峰町								
22	万之瀬川床遺跡	南さつま市加世田益山万之瀬川川床			●	●				「鹿児島考古」12号
23	上川原遺跡	南さつま市金峰町宮崎上川原			●	●				
24	古城跡	南さつま市金峰町宮崎西						●		別称「古ノ城」
25	白糸原遺跡	南さつま市金峰町宮崎		●	●	●		●		
26	上宮寺跡	南さつま市金峰町松田南						●		坊津一条院の末寺
27	松田南遺跡	南さつま市金峰町花瀬		●		●		●		
28	持躰松遺跡	南さつま市金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(10) 県埋セ報(120)
29	渡畑遺跡	南さつま市金峰町宮崎字渡畑		●	●	●	●	●	●	県埋セ報(151)(159)
30	芝原遺跡	南さつま市金峰町宮崎字芝原		●	●	●	●	●	●	**本報告書** 県埋セ報(149)(158)
31	市薗遺跡	南さつま市金峰町宮崎		●				●		
32	阿多城跡	南さつま市金峰町阿多						●		阿多平四郎忠景
33	鶴之城跡	南さつま市金峰町花瀬鶴之城						●		
34	大迫田遺跡	南さつま市金峰町花瀬						●		金峰町埋文報(14)
35	花瀬今城原遺跡	南さつま市金峰町花瀬今城原		●	●	●				金峰町埋文報(14)
36	上水流D遺跡	南さつま市金峰町花瀬						●		金峰町埋文報(14)
37	上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬上水流・森山		●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(9)　県埋セ報(113)(121)(136)(150)
38	上水流C遺跡	南さつま市金峰町花瀬		●		●		●		金峰町埋文報(14)
39	花瀬遺跡	南さつま市金峰町花瀬今城原				●		●		
40	針原遺跡	南さつま市金峰町花瀬		●			●			金峰町埋文報(14)
41	加治屋遺跡	南さつま市加世田川畑岩山		●	●	●	●			県埋文報(82)
42	二頭･花抜園墓地	南さつま市加世田川畑3377他		●		●		●		南さつま市埋文報(1)
43	椿ノ原遺跡	南さつま市加世田村原椿ノ原	●	●	●	●		●	●	国指定史跡　加世田市埋文報(1)(5)(15)(17)(20)
44	永田遺跡	南さつま市加世田川畑永田				●				
45	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田2715他		●	●	●	●	●		加世田市埋文報(3)(4)(13)
46	杉本寺跡	南さつま市加世田川畑杉本寺			●					消滅 蔵骨器出土(加世田市史掲載)
47	別府城跡	南さつま市加世田武田城ノ山			●	●		●	●	加世田市埋文報(10)
48	佐方原・内田原遺跡	南さつま市加世田唐仁原佐方原他				●				
49	下東堀遺跡	南さつま市加世田宮原下東堀176他	●	●		●				
50	田武平遺跡	南さつま市加世田益山田武平		●		●				
51	油免・本寺遺跡	南さつま市加世田宮原油免他		●		●				県埋セ報(148)
52	西荒田遺跡	南さつま市加世田益山西荒田		●	●	●	●			加世田市報(7)
53	宮ノ脇・口畑遺跡	南さつま市加世田宮原宮ノ脇他				●				
54	陣跡	南さつま市加世田益山陣						●		
55	内ノ田遺跡	南さつま市加世田益山内ノ田	●			●		●	●	
56	中小路遺跡	南さつま市加世田益山中小路・屋郷			●	●		●	●	加世田市報(6)(19)
57	浜堀遺跡	南さつま市加世田宮原浜堀				●				
58	鵜ノ塚陣跡	南さつま市加世田益山宇都						●		
59	上山野遺跡	南さつま市加世田益山上山野			●	●				
60	川ノ畑遺跡	南さつま市加世田益山川ノ畑			●	●				

交通網では，薩摩半島を縦貫する近世街道の「伊作筋」と旧南薩鉄道が，渡畑遺跡内で現在の国道270号線と併走していた。「伊作筋」は加世田の村原渡口で渡船し，渡畑を斜行し上宮寺前，伊作峠，谷山を経由して鹿児島と結んだ。南薩鉄道は枕崎市から日置市伊集院を経由し，国鉄線で鹿児島市と連絡していた。大正３年（1914）に始まり昭和58年（1983）の豪雨災害で翌年廃線となった。

近・現代においては，第二次世界大戦時，加世田の唐仁原・高橋に，陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれ，戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となった。

参考文献

田畑智子(2002)「鹿児島県万之瀬川流域の地形発達」『大分地理』15,9-14　大分大学教育福祉科学部地理学教室

上東克彦(2004)「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩－クンディと果実形水注－」『貿易陶磁研究』24号　日本貿易陶磁学会

橋口　亘(1999)「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19号　日本貿易陶磁学会

加世田市教育委員会

(1985)「上加世田遺跡１」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（３）

(1987)「上加世田遺跡２」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（４）

(1995)「干河原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)

(1999)「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)

金峰町教育委員会

(1978)「阿多貝塚」『金峰町埋蔵文化財発掘調査』（１）

(1998)「上水流遺跡－第１次調査－」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』（９）

(1998)「持躰松遺跡　第１次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)

(2000)「小薗遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)

鹿児島県教育委員会

(1991)『小中原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（57）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

(2007)『上水流遺跡１』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113）

(2008)『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）

(2008)『上水流遺跡２』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）

(2009)『上水流遺跡３』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（136）

(2010)『芝原遺跡１』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（149）

(2010)『上水流遺跡４』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（150）

(2010)『渡畑遺跡１』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（151）



上空から見た芝原遺跡周辺（下流側から持躰松・渡畑・芝原の各遺跡）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

平成10年度に行われた確認調査をうけて，平成11年度から平成16年度に本調査を行った。

確認調査の結果，遺跡の範囲は，国家座標Ｘ＝－174390からＸ＝－174490，Ｙ＝－63900からＹ＝－63500であり，調査区を国家座標をもとに10ｍグリッドを設定して発掘調査を実施した。

第４図に示すように，南北方向にA'，Ａ，Ｂ…としてＩまで，東西方向に１，２，３，…として38までを付け，Ａ－37区などと呼称することとした。A'～Ｅ－１～31区（万之瀬川の新築堤防部分）の調査を平成11年度・12年度に行い，Ｂ～Ｈ－２～31区（新堤防と旧堤防の間）を平成13年度，Ｃ～Ｉ－３～38区（新堤防と旧堤防の間及び万之瀬川橋橋脚部分）を平成14年度，Ａ～Ｃ－31～36区及びＤ～Ｆ－34～38区（橋梁部及び樋門から新堤防の間）を平成15年度・平成16年度に調査を行った。

発掘調査は，重機でⅠａ層（表土・耕作土）を除去した後，遺物包含層であるⅠｂ層からＸ層までを人力で掘り下げた。また，場所によりⅡ層以下に無遺物層が認められる場合も重機で除去した。最終的には重機で下層確認のためのトレンチを設定して掘り下げた。

これらの調査の結果，Ⅰｂ層からＸ層にまで，縄文時代中期から近世の数多くの遺構，遺物が発見された。

遺物の出土量は膨大であったため弥生時代以降の遺物は基本的に層とグリッドごとに一括して取り上げた。また，縄文時代の遺物は，原則として平板実測及びレベル測定により現位置を記録し取り上げた。ただ，小グリッドごとに一括して取り上げたものもある。

遺構は検出状況を写真で撮影し，位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測後の状況も写真撮影した。図化作業に関しては，作業の効率化のため業者委託を実施した。

２　遺構の検出と認定

各遺物包含層上面を検出した際，精査を行い，土色及び土質の違いから遺構の有無を確認した。また，遺構内外で異なる土の境界をたどり，平面的に遺構の輪郭（平面プラン）を確定していった。

その後，主軸を確認し，土層確認用のベルトを設定し，遺構の掘り下げを行った。その際，埋土の色・質・硬さなどの違いを比較し掘り下げた。

さらに，遺構を検出した層や埋土状況，遺構の形態，遺構内出土遺物などの情報から遺構の帰属時期の検討を行った。

３　整理作業の方法

古代から近世の遺物については，平成22・23年度に分類・選別，接合，補強・復元にかかり，平成23年度に実測・拓本・トレース等を行った。整理作業の具体的経過については，主な作業を年度ごとに記していきたい。

◇　平成17年度
　洗浄，注記，区・層ごとの分類，レベル入力等

◇　平成18年度
　注記，区・層ごとの分類，人骨処理，鉄器等のクリーニング　等

◇　平成19年度
　注記，区・層・遺構ごとの分類，人骨処理，鉄器等のクリーニング，石器実測委託　等

◇　平成20年度
　縄文時代遺構内出土土器分類・選別，接合・復元・補強，実測，拓本，縄文時代遺構内出土石器仕分け・選別，実測委託・縄文時代遺構配置図作成，集石トレース，鉄器等のクリーニング　等

◇　平成21年度
　土層図作成・トレース，縄文時代土坑トレース，縄文時代遺構内出土土器実測・実測委託，写真撮影，レイアウト，整理指導，原稿執筆，縄文時代包含層出土遺物接合，復元，形式分類，実測　等
「芝原遺跡１　縄文時代遺構編」刊行

◇　平成22年度
　縄文時代包含層出土土器選別，実測，実測委託，拓本，復元・補強，トレース，縄文時代包含層出土土器選別，実測，実測委託，トレース，レイアウト，写真撮影，整理指導，原稿執筆，弥生・古墳時代出土土器接合，古代・中世遺物分類　等
「芝原遺跡２　縄文時代遺物編」刊行

◇　平成23年度
　古墳時代から近世までの遺構選別・トレース，遺構内出土遺物実測・トレース，包含層出土遺物実測・トレース，写真撮影，レイアウト，整理指導，原稿執筆，古墳時代遺物分類・接合・復元・実測・トレース　等
「芝原遺跡３　古代・中世・近世編」刊行

報告書作成指導委員会
　平成23年11月25日　井ノ上次長ほか10名

報告書作成検討委員会
　平成23年11月29日　寺田所長ほか13名

第２節　層序（第３図）

芝原遺跡は万之瀬川中流の右岸にあり，標高約４ｍの自然堤防上に立地する遺跡である。第３図に平成15年の調査時に作成された本遺跡の基本土層を示す。

万之瀬川は過去に何度も大きな洪水を繰り返しており，その氾濫堆積層などを含んでいるので，遺跡内において必ずしも安定した層序を成している状況ではなかった。加えて各年度ごとに遺跡を分断して調査を進めざるをえなかった結果，各年度の層序の整合がとれない状況も発生した。

例えば平成12度のB-19区Ⅷ層からは春日式土器が集中して出土しているのに対し，平成13・14年度のⅨ層としたものからは，春日式土器より新しい市来式土器が出土している。このため平成22年度に刊行した「縄文時代遺物編」では，平成12年度の春日式土器出土集中区のみ独立させ，それ以外に関しては一括して取り扱わざるをえなかった。

今回の整理作業を進める中でも，基本土層では中世前期の包含層とされているⅢa層から，近世前期の遺物が多数出土していることが確認され，基本土層の年代に疑問を呈する状況となった。

よって，今回の整理作業では基本土層にある包含層年代には依らず，遺物の年代観による時期決定を優先して作業を進めた。

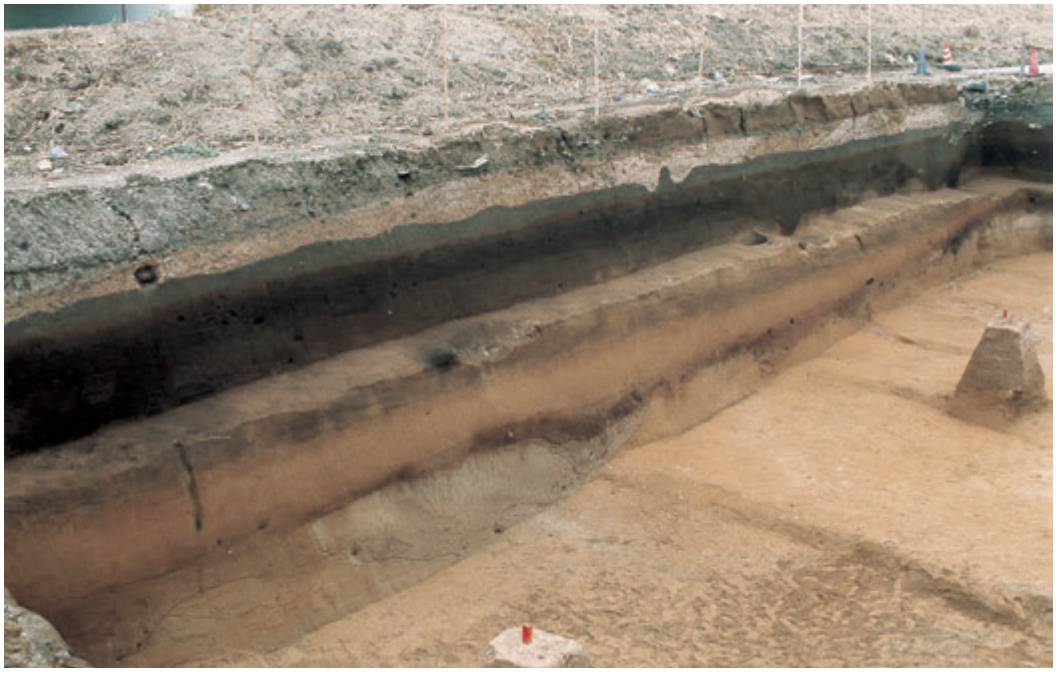
ちなみにⅡb層の白色砂層については，遺跡を広く覆っていることから，河口を現在の位置に変えた享和３年（1803）の大洪水時のものと仮定すれば，その下位から近世前期の遺物が出土することに矛盾はないことも考えられる。

基本土層以外では，旧堤防部分に縄文時代後期土器を伴う泥炭層がみられた。また，その他の調査区でも河川氾濫時の堆積層とみられる砂層が所々みられた。

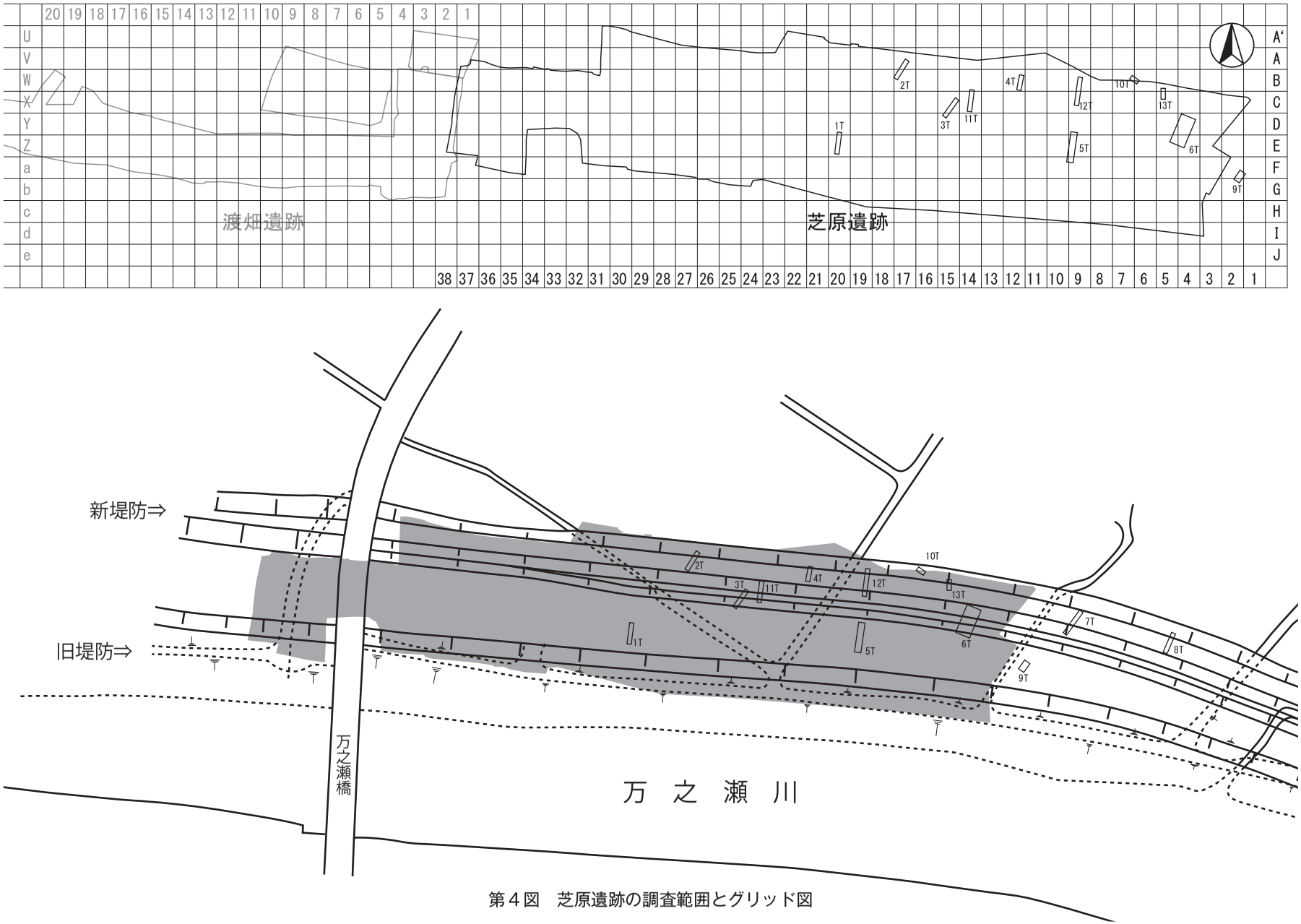
本遺跡では明確な火山灰層はみられなかったが，本遺跡上流の上水流遺跡では，縄文時代晩期包含層であるⅢb層中に，開聞岳起源の「灰ゴラ」がブロック状に含まれていたと報告されている。芝原遺跡では部分的に見られたにせよ，明確なブロック状の堆積は見られなかった。

Ⅰ層	灰褐色土，現表土	
Ⅰｂ層	灰褐色砂質土	中世～近世後期包含層
Ⅱａ層	茶褐色砂質土 炭化物・赤褐色の焼土を含む。	中世中期包含層
Ⅱｂ層	白色砂層 万之瀬川の洪水層	
Ⅲａ層	黒色砂質土	中世前期包含層
Ⅲｂ層	明黒褐色砂質土	古代，古墳時代包含層
Ⅳ層	黄褐色砂質土	弥生時代包含層
Ⅴ層	暗黄褐色砂質土	
Ⅵａ層	黄橙色砂質土	縄文時代後・晩期包含層
Ⅵｂ層	暗茶褐色砂質土 炭化物多く含む	縄文時代後期包含層
Ⅶ層	白色砂層	部分堆積
Ⅷ層	茶褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
Ⅸａ層	白色砂層	
Ⅸｂ層	にぶい黄橙色砂層	
Ⅹ層	にぶい黄褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
ＸⅠ層	黄褐色砂質土	

第３図　芝原遺跡の基本土層図（平成15年調査時）



土層堆積状況



第４図　芝原遺跡の調査範囲とグリッド図

第３節　調査の成果

１　古代の調査

（１）調査の概要

調査は全時代を通じて,10m四方のグリッドを基本に,調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。調査区内は河川敷という立地もあり，層堆積は不安定で発掘調査時は遺構把握，出土遺物の層認定に非常に苦慮した。また，多数のピットが検出されたため，掘立柱建物跡の認定作業は困難を極め，整理作業において図上での復元も試みた。遺構の時期認定は，出土遺物を中心に記録層位，埋土を検討して認定を行った。

（２）出土遺物の分類方法

遺物総数は約61,270点で，遺構内出土遺物の一部は番号を付けて取り上げを実施し，それ以外は原則として一括して取り上げた。包含層出土遺物で一括して取り上げた遺物は，ほとんどが土師器の小破片と須恵器の小破片であった。

遺物の分類は，土師器，須恵器，土製品，石製品，鉄製品，墨書土器に分けた。さらに土師器については，椀，坏，高坏，高台付皿，甕，黒色土器，赤色土器に，須恵器については，蓋，椀，坏，皿，甕，鉢，壺に，墨書土器については，墨書，ヘラ書き，スタンプ文に分けた。器種毎の分類は，以下の通りである。

蓋の分類

つまみの形態を指標として４類に分類した。

- **蓋Ⅰ類**　頂部が高い山形になった擬宝珠状。
- **蓋Ⅱ類**　頂部が山形になった擬宝珠状。
- **蓋Ⅲ類**　扁平な擬宝珠状。
- **蓋Ⅳ類**　頂部が窪む扁平なボタン状。

椀の分類

高台の形状・高さを指標として８類に分類した。

- **椀Ⅰ類**　長くハの字状に開き太さは均一で端部が角張る。
- **椀Ⅱ類**　長くハの字状に開き太さは均一だが，端部が角張らずに丸みを帯びる。
- **椀Ⅲ類**　ハの字状に開くが端部が細くなり，断面でみると外反しているようにみえる。
- **椀Ⅳ類**　短く端部は細い。外面は外側が直で内側が傾斜する形になる。
- **椀Ⅴ類**　高台が短く先が細くなり，ハの字状にやや開き気味になる。
- **椀Ⅵ類**　高台は太く長くハの字状に開き端部は角張るかやや丸みを帯びる。
- **椀Ⅶ類**　高台は太く短く端部は細くなるが畳付の幅は広い。
- **椀Ⅷ類**　Ⅶ類に比べ畳付の幅が狭く端部は尖るような形になる。

体　部　A-直線的，B-曲線的

口縁部　a-直口，b-外反

坏の分類

形状・大きさを指標として６類に分類した。

- **坏Ⅰ類**　大宰府出土の坏に類似し，底部外面に稜線を有する。
- **坏Ⅱ類**　箱形の器形で，底部に調整が施され，底部外面は丸い。
- **坏Ⅲ類**　逆台形の器形。
- **坏Ⅳ類**　円柱状の充実高台を有する。
- **坏Ⅴ類**　小坏
- **坏Ⅵ類**　口径が大きくなり器高が低い。

甕の分類

口縁部の器形と技法を指標にして４類に分類した。

- **甕Ⅰ類**　胴部が若干張り気味で丸みをもつ。口縁部は短く外反する。
- **甕Ⅱ類**　口縁部はⅠ類と同じで，胴部が張らない。
- **甕Ⅲ類**　底部より内湾しながら立ち上がり，口縁部に至る。胴部は他と比べて浅く，鍋の形態に似る。
- **甕Ⅳ類**　胴部が大きく横に張る。

鉢の分類

器形を基準に３類に分類した。

- **鉢Ⅰ類**　器高が高く直線的に外傾するバケツ形。
- **鉢Ⅱ類**　器形が低く大きく外反する器形。
- **鉢Ⅲ類**　口縁部が内湾する「鉄鉢形」。

黒色土器の分類

黒く燻された面から２類に分類した。

- **黒色土器Ⅰ類**　内面のみを黒く燻された内黒土器。外面に赤色顔料を施されたものもある。
- **黒色土器Ⅱ類**　内外面とも黒く燻された黒色土器。

赤色土器の分類

赤色顔料を施された面から３類に分類した。

- **赤色土器Ⅰ類**　内面にのみ施されたもの。
- **赤色土器Ⅱ類**　内外面とも施されたもの。
- **赤色土器Ⅲ類**　外面にのみ施されたもの。

（３）遺構

古代の遺構は，掘立柱建物跡15棟，竪穴建物状遺構１基，炉跡１基，土坑７基，土坑墓３基，溝17条が検出された。ピットは多数検出され，根石などの構造物が確認できるもの以外は，掲載遺物のあるもののみ遺構配置図

で平面形を図示するに留めた。

掘立柱建物跡（第31図～第38図）

掘立柱建物跡は，15軒が検出された。そのうちC・D-25～29区に８基が集中し，残りは調査区内に点在する。２間×３間規模の建物が半数を占める。

掘立柱建物跡１号（第31図）

B・C-32区で検出された。規格が１間×２間の建物で梁行約3.6m，桁行約４mの規模をもち，床面積14.4㎡となる。柱穴は径50cm前後のものが大半を占め，桁行の中間柱がない。

掘立柱建物跡２号（第31図）

D-31・32区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約4.8m，桁行約7.2mの規模をもち，床面積34.56㎡となる。柱穴は径80cmから100cmのものが多く，全体的にがっしりとした印象を受ける。

掘立柱建物跡３号（第32図）

A'・A-29区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約4.7m，桁行約6.2mの規模をもち，床面積29.14㎡となる。柱穴は径40cm前後のものが大半を占める。南西隅の柱は確認できなかった。柱穴３から須恵器の坏が出土した。

出土遺物（第32図）

１は須恵器坏である。逆台形で，底部から口縁部まで直線的に開く。口縁部は尖り，底部は平坦で厚みがある。胴部立ち上がり部にナデ調整を施している。

掘立柱建物跡４号（第32図）

C-28・29区で検出された。規格が２間×２間の建物で梁行約3.4m，桁行約３mの規模をもち，床面積10.2㎡となる。柱穴は径50cm前後のものが大半を占め，東側梁行き間の柱は確認できなかった。

掘立柱建物跡５号（第33図）

C-28区で検出された。規格が１間×２間の建物で梁行約3.1m，桁行約4.2mの規模をもち，床面積14.7㎡となる。柱穴は径30cm前後である。

掘立柱建物跡６号（第33図）

D-27・28区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約3.2m，桁行5.4mの規模をもち，床面積17.28㎡となる。柱穴は径30cmから50cm程度とばらつきがある。柱穴６，10の柱配置に若干ズレがみられる。

掘立柱建物跡７号（第34図）

C-27区で検出された。規模が２間×３間の建物で梁行約４m，桁行約5.4mの規模をもち，床面積21.6㎡となる。柱穴は径60cmから70cm程度のものが大半を占め，全体的にがっしりした印象を受ける。掘立柱建物跡８号・９号と切り合い関係にあるが，前後関係については明確でない。

掘立柱建物跡８号（第34図）

C-27区で検出された。規格が１間×２間の建物の北と東側に庇が付く。建物本体の規模は，梁行約3.6m，桁行約４mで，床面積14.4㎡となる。庇部は80cmほど張り出す。柱穴は径30cm前後のものが大半を占める。

掘立柱建物跡９号（第35図）

C-26・27区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約４m，桁行約5.2mの規模をもち，床面積20.8㎡となる。柱穴は径40cmから50cmのものが大半を占める。西側梁行間の柱のみ径20cmと小さく，やや南側にずれている。

掘立柱建物跡10号（第35図）

D-26・27区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約3.2m，桁行約5.4mの規模をもち，床面積17.28㎡となる。柱穴10が若干東にずれ，柱穴３が若干北にずれる。柱穴は30cm程度から90cmほどのものと，ばらつきがある。

掘立柱建物跡11号（第36図）

D-25・26区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約3.6m，桁行約５mの規模をもち，床面積15㎡となる。柱穴は径50cm前後のものが大半を占める。溝７に柱穴を切られており，建物が溝７以前のものであることが明らかである。

掘立柱建物跡12号（第36図）

A-24区で検出された。規格が１間×２間の建物で梁行2.8m，桁行約３mの規模をもち，床面積8.4㎡となる。柱穴は径30cm前後である。

掘立柱建物跡13号（第37図）

D・E-22・23区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行４m，桁行7.2mの規模をもち，床面積28.8㎡となる。柱穴は径30cmから40cmのものが大半を占める。柱穴３と柱穴５の間に柱があり半間の柱間をつくる。

掘立柱建物跡14号（第37図）

E-20・21区で検出された。規格が２間×２間と思われるが東側と南側の中間の柱は確認できなかった。梁行約3.7m，桁行約４mの規模をもち，床面積14.8㎡となる。柱穴は径30cm程度である。

掘立柱建物跡15号（第38図）

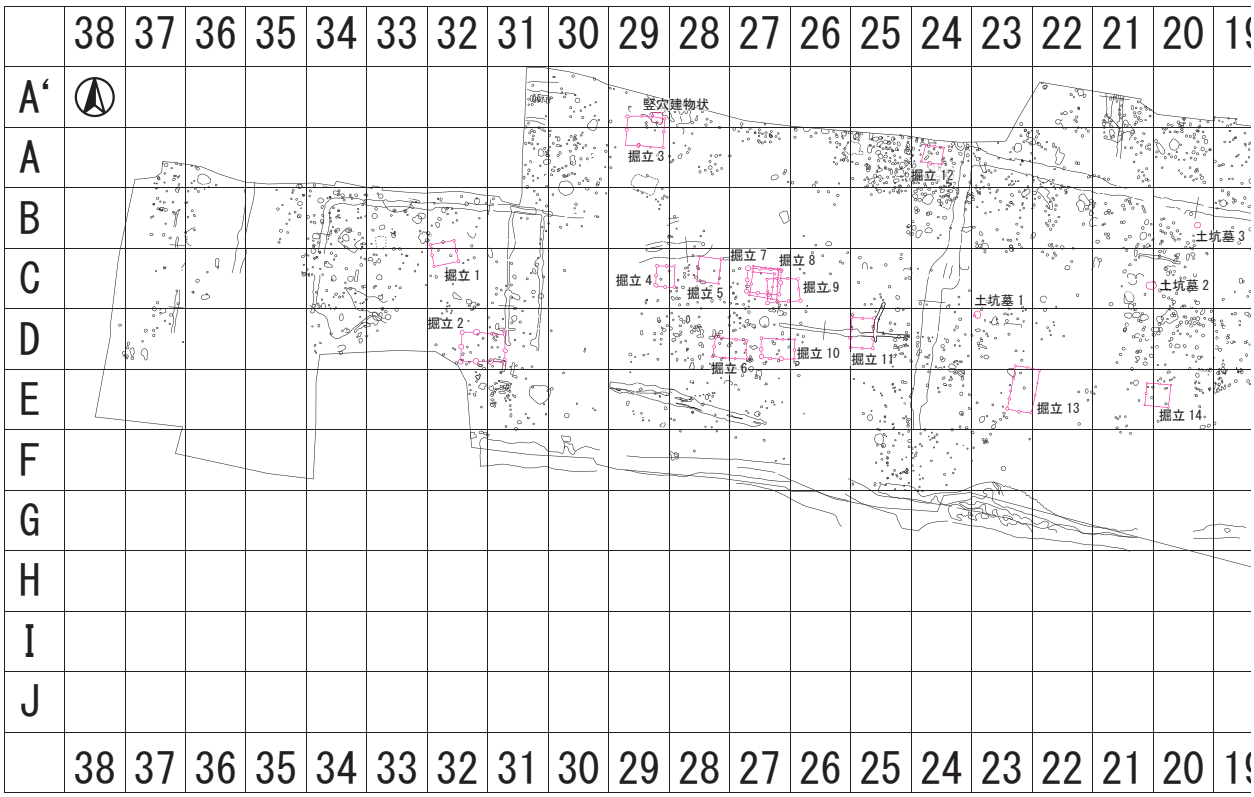
G-６・７区で検出された。規格が１間×２間の建物で梁行４m，桁行４mの規模をもち，床面積16㎡となる。柱穴は径約35cm前後である。梁行の柱間が広いが，中間の柱穴を検出できなかった可能性もある。

竪穴建物状遺構（第38図）

竪穴建物状遺構は，A'-29区で1基検出された。形状は１辺が約1.8mの方形を呈する。検出面からの深さ約30cmで底面中央部が凹む。底面が平坦でないこと，規模が小さいことから建物とは断定できなかった。

出土遺物（第38図）

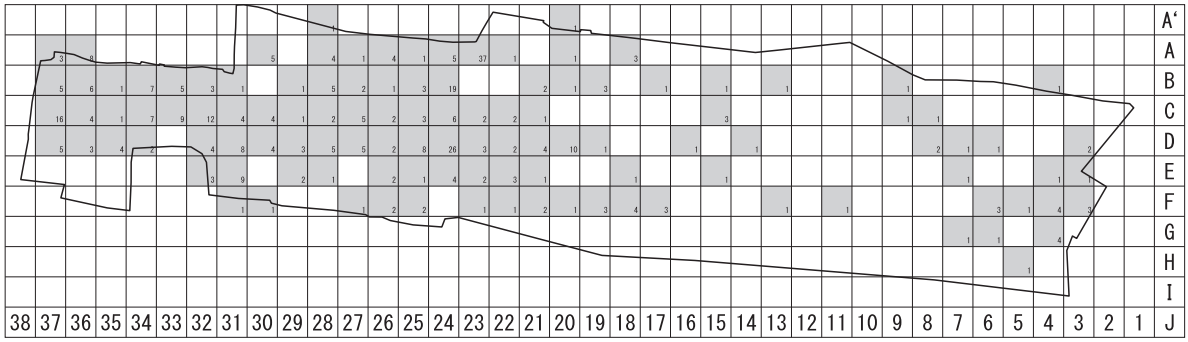
２は完形品の土師器坏Ⅲ類で，硬質に焼き締められ内外面とも赤橙色を呈する。内外面ともに横ナデ調整，底



第５図　古代全体遺構図１

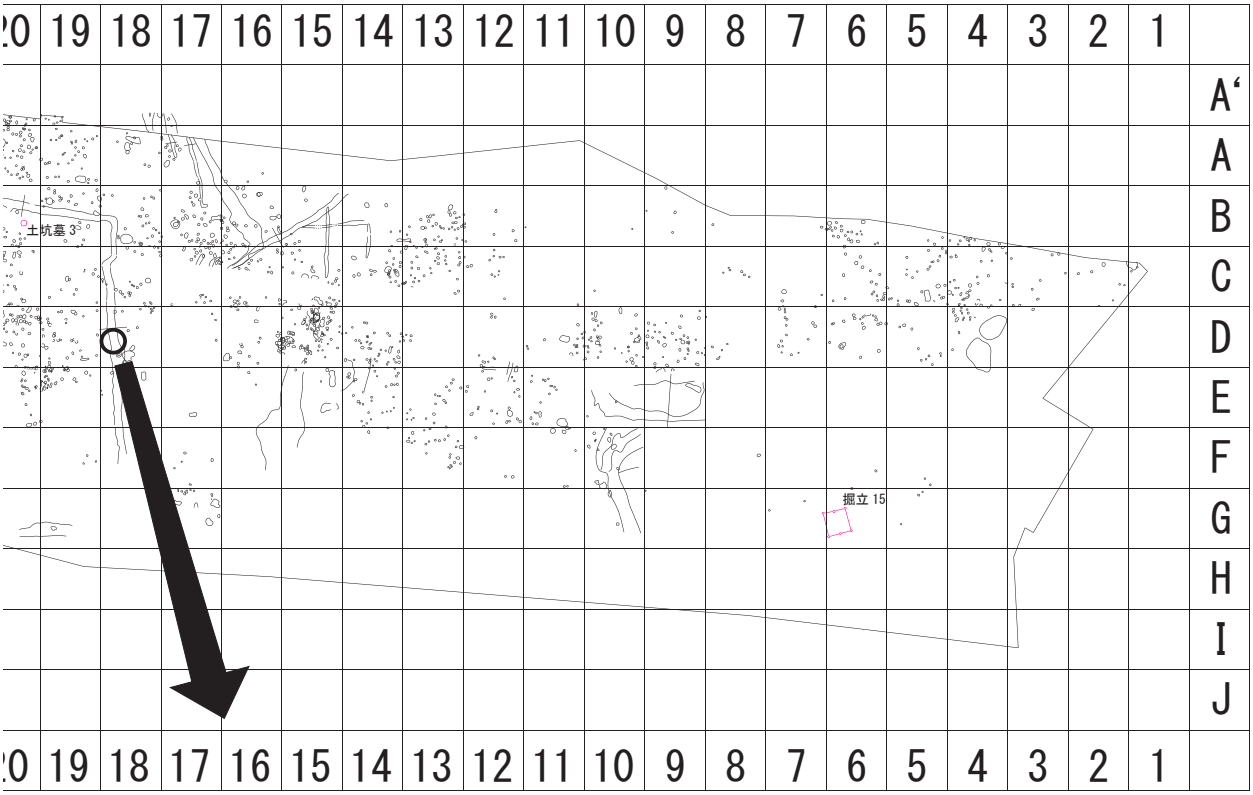


土師器（口縁部）出土状況

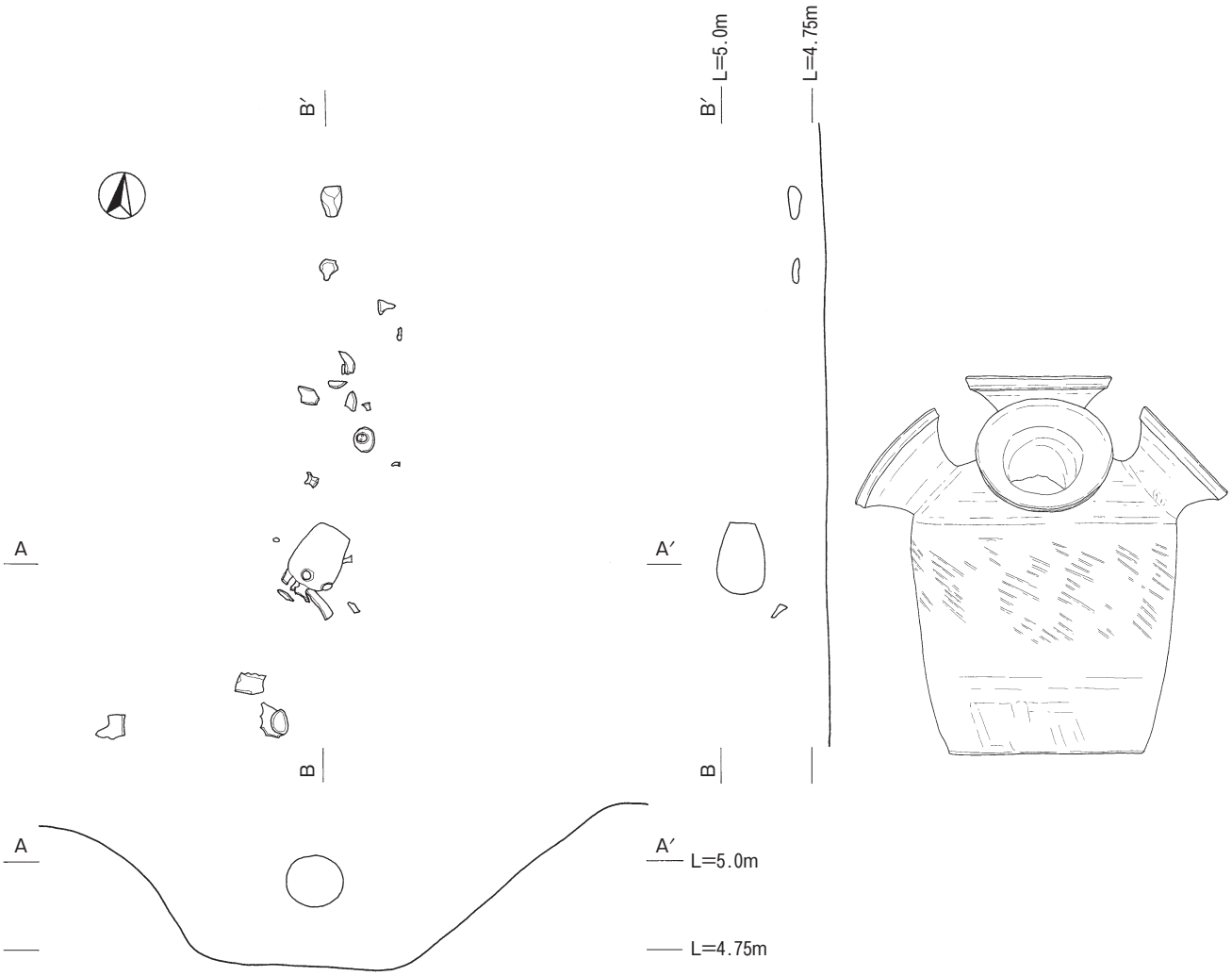


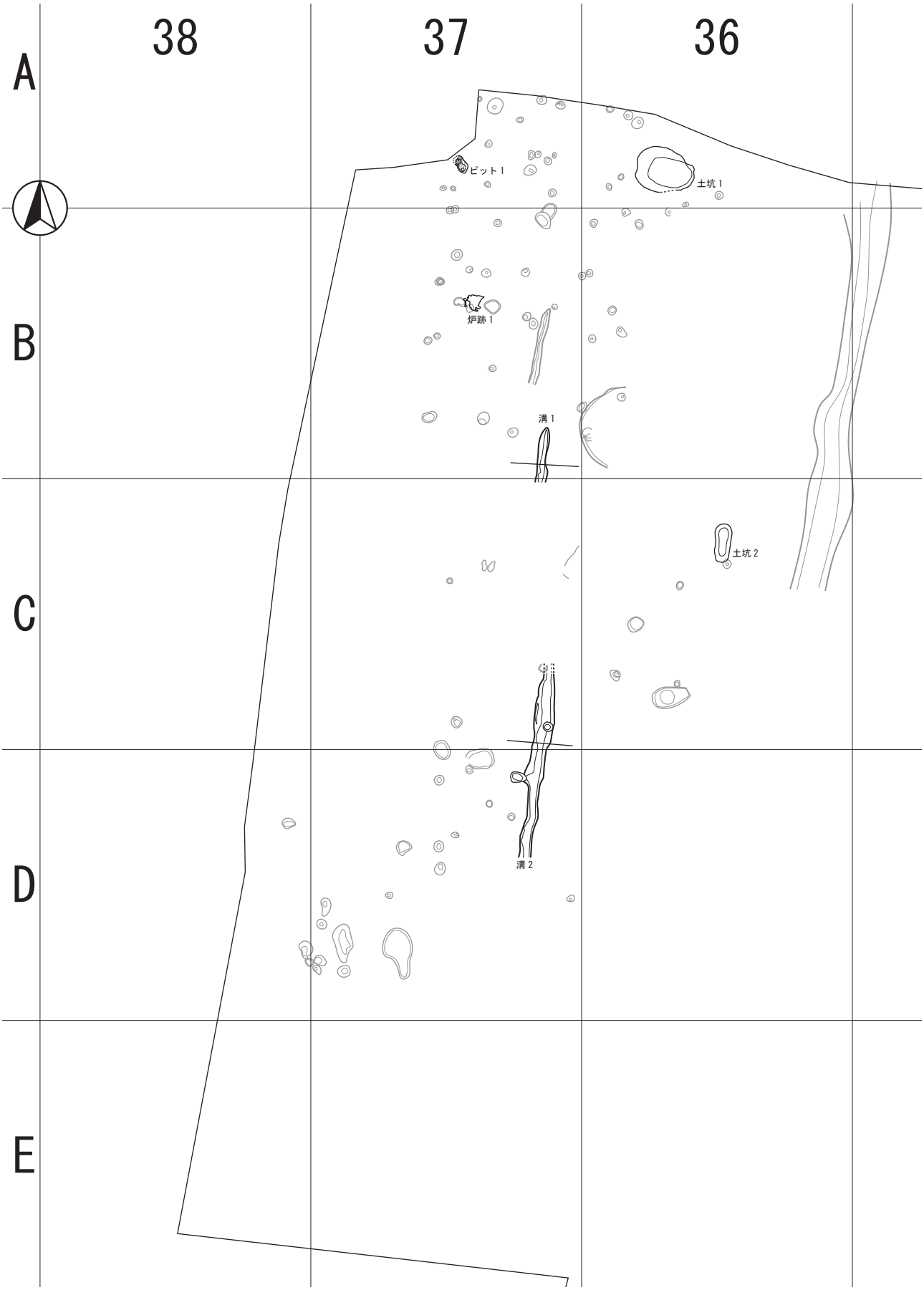
須恵器（口縁部）出土状況





第６図　古代全体遺構図２





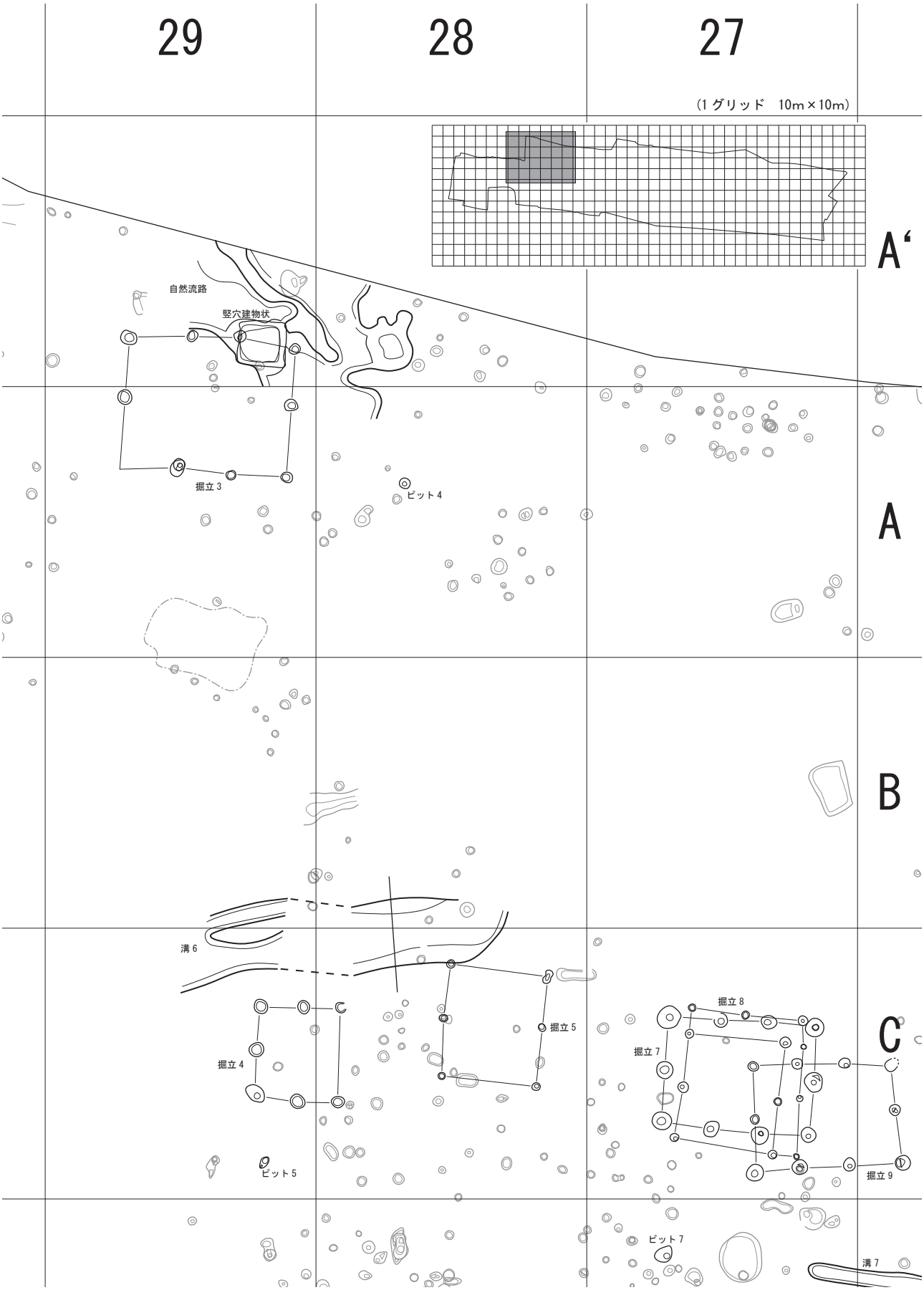
第７図　古代遺構配置図１



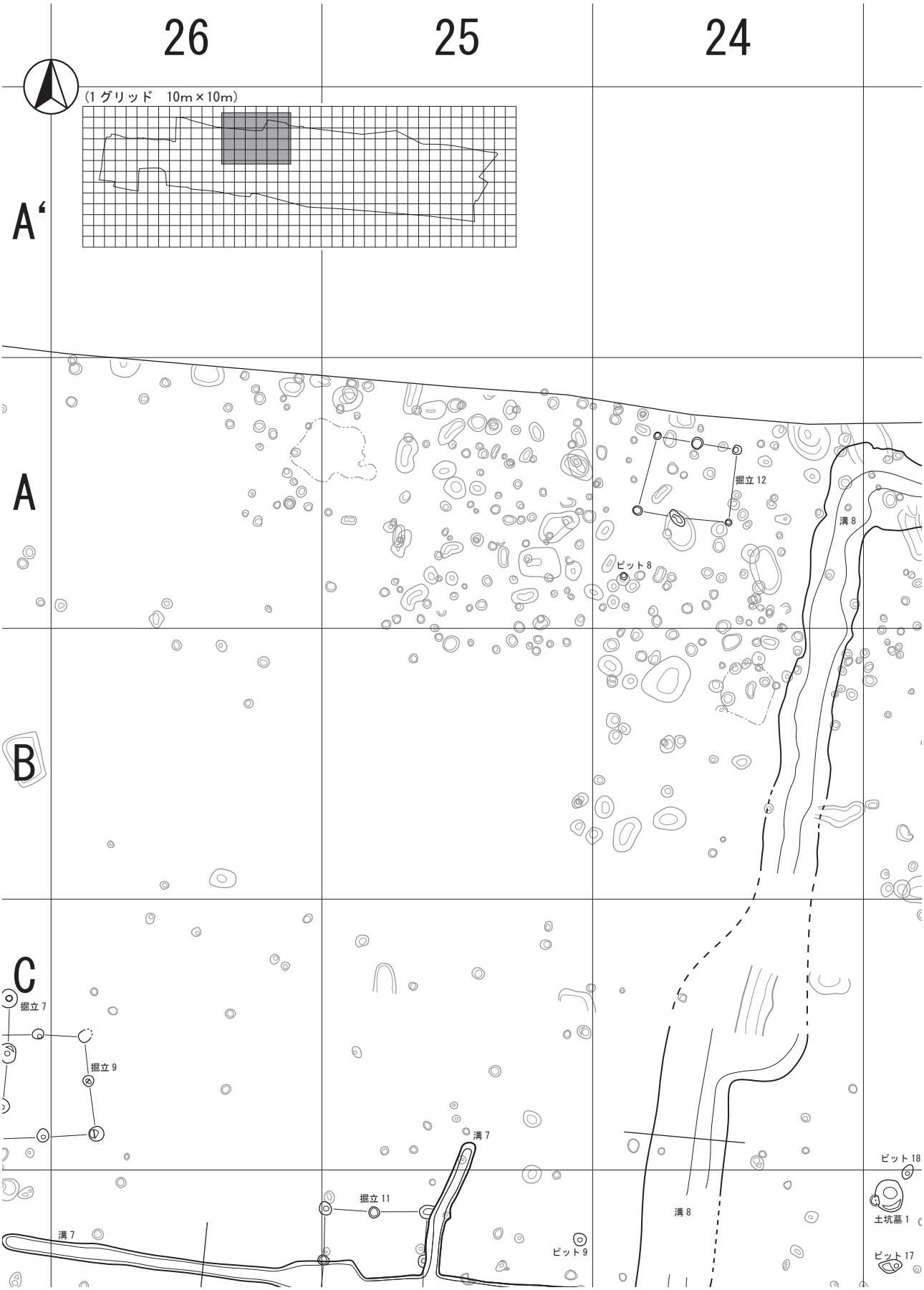
第８図　古代遺構配置図２



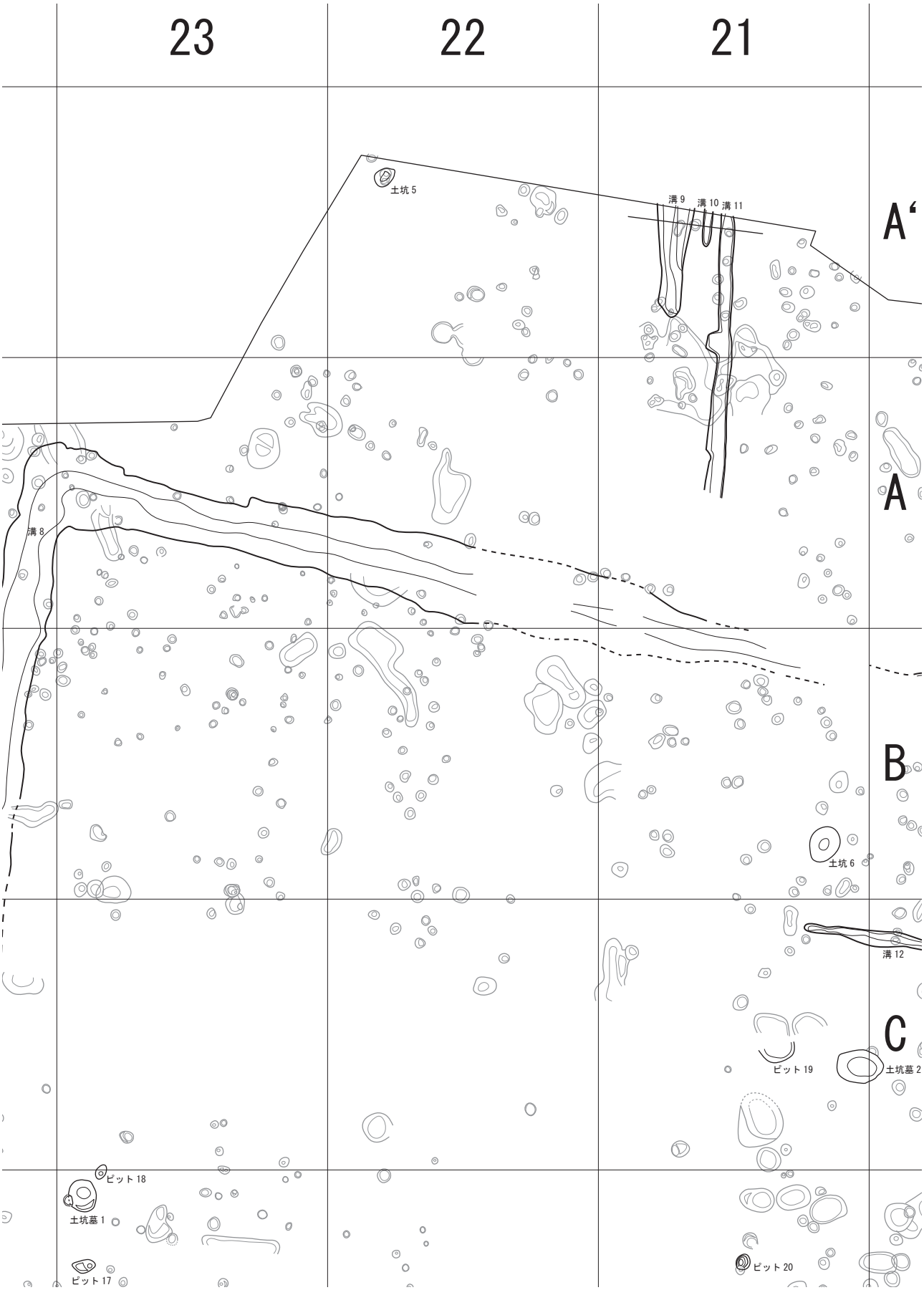
第９図　古代遺構配置図３



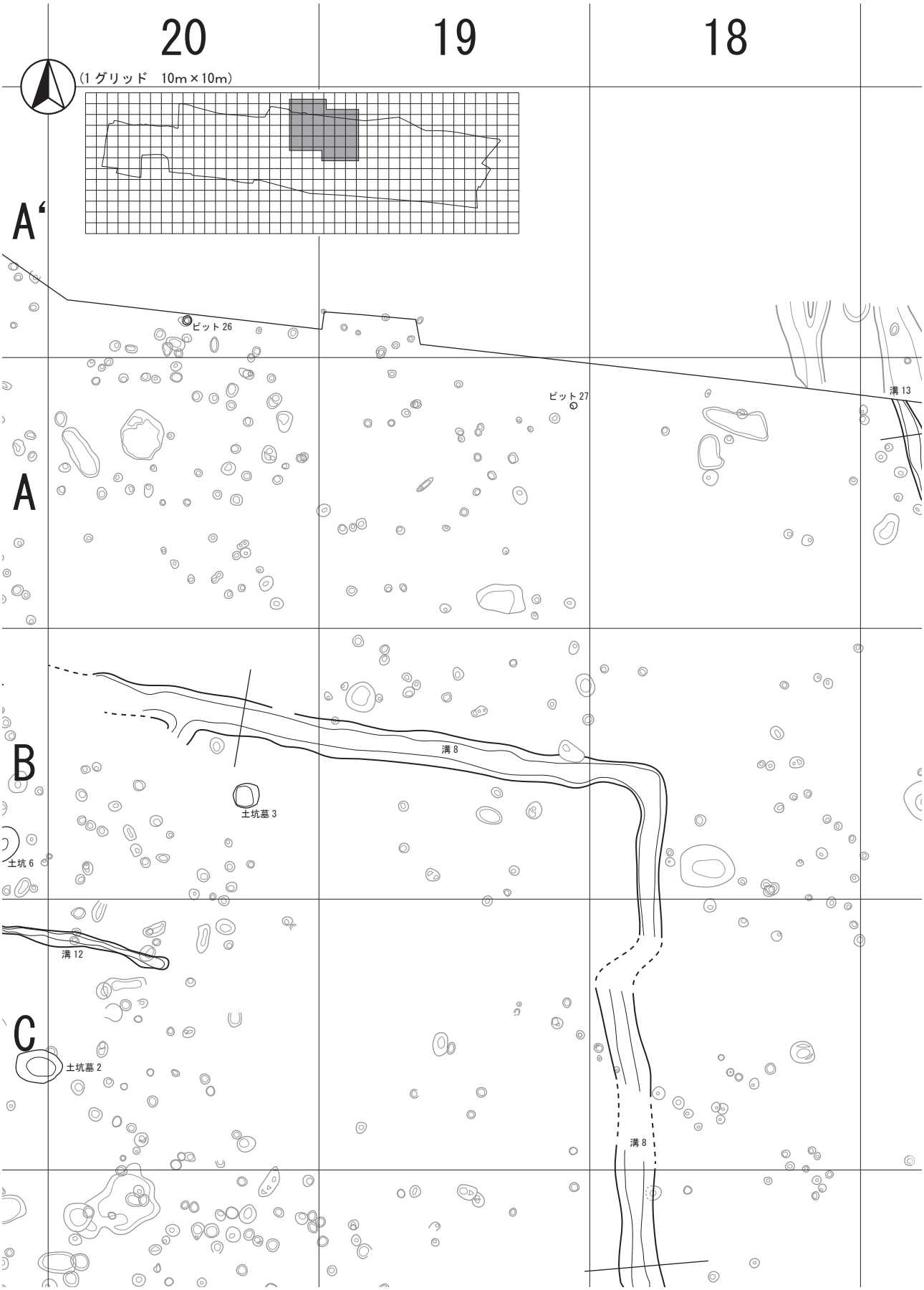
第10図　古代遺構配置図４



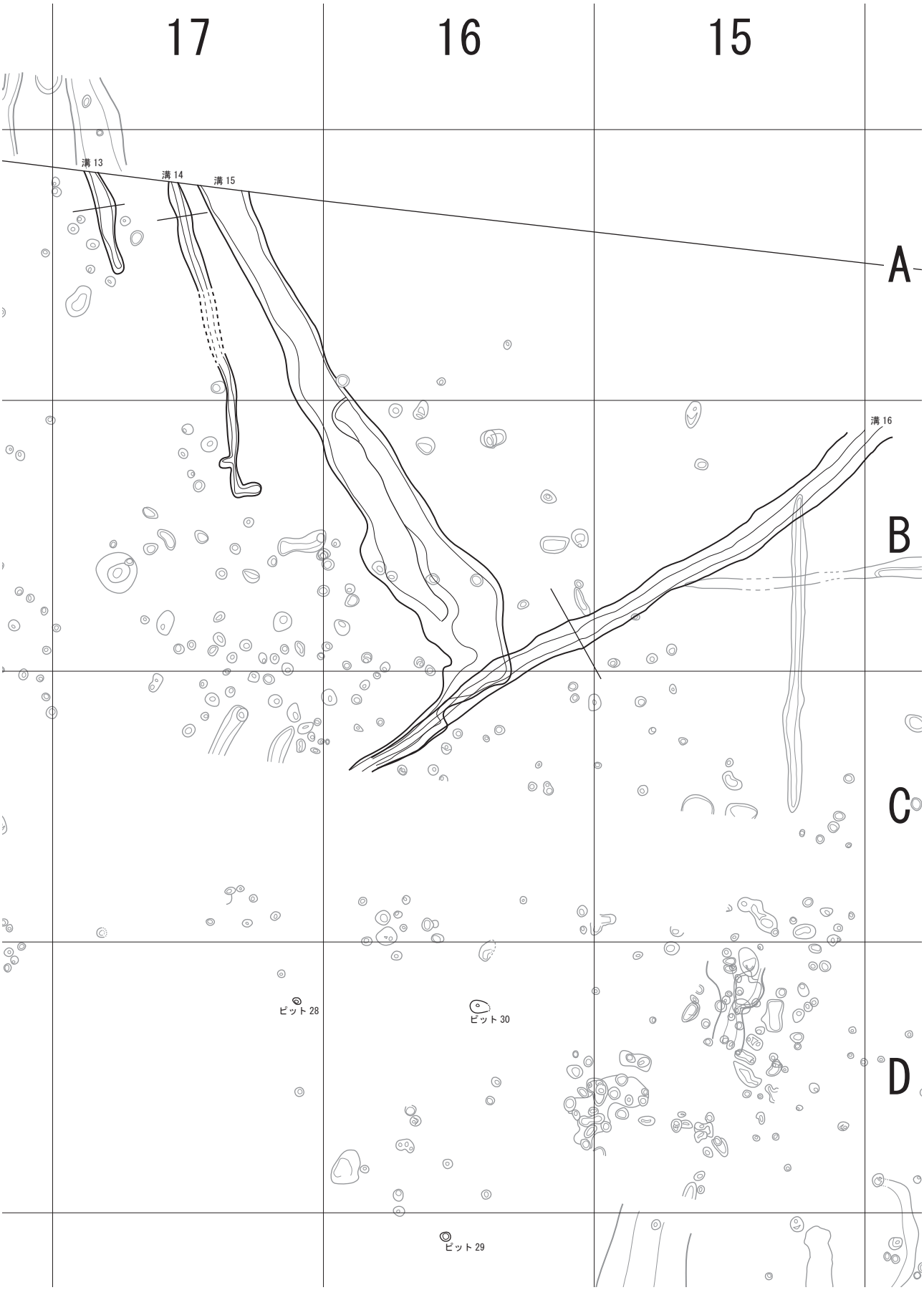
第11図　古代遺構配置図５



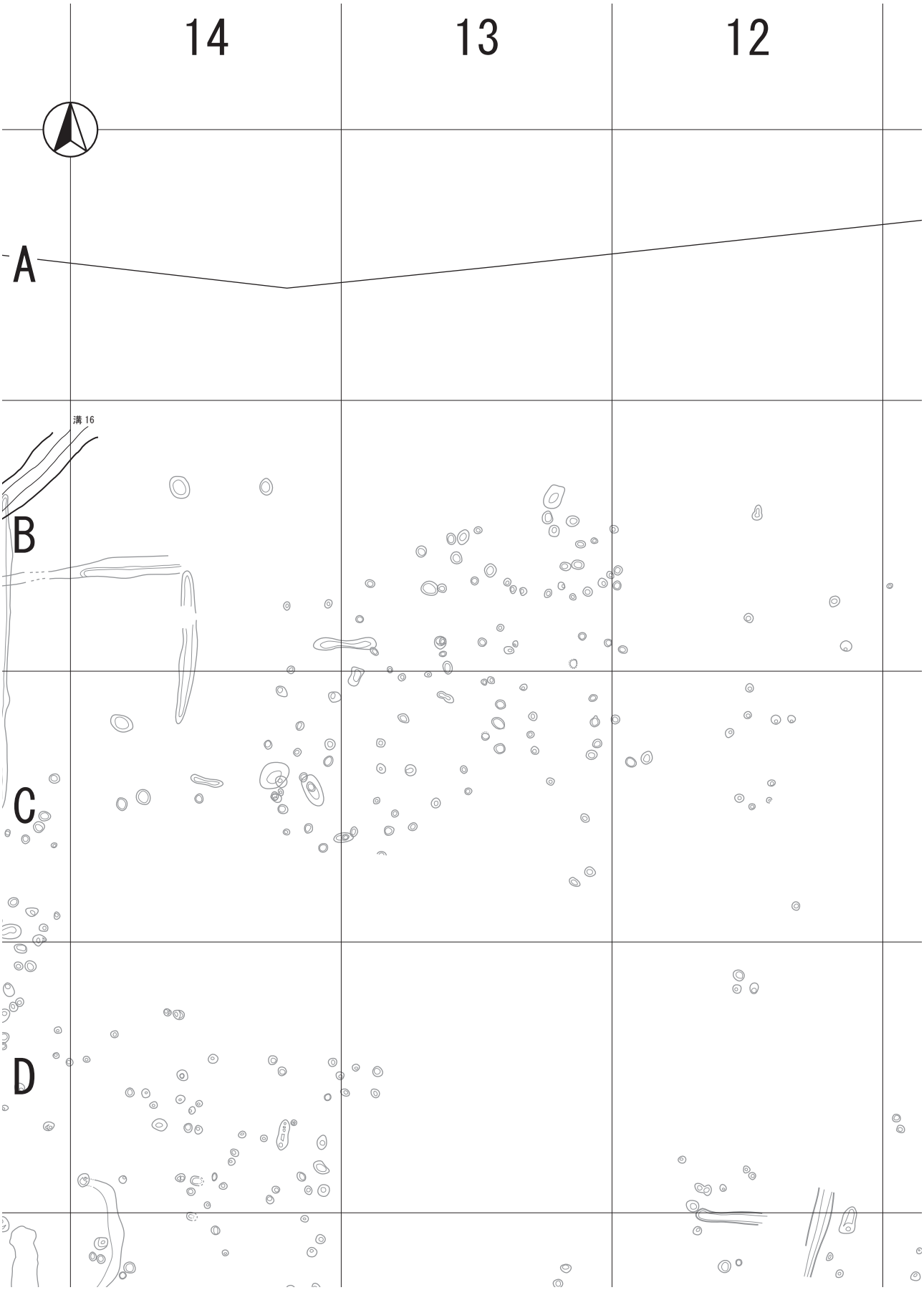
第12図　古代遺構配置図６



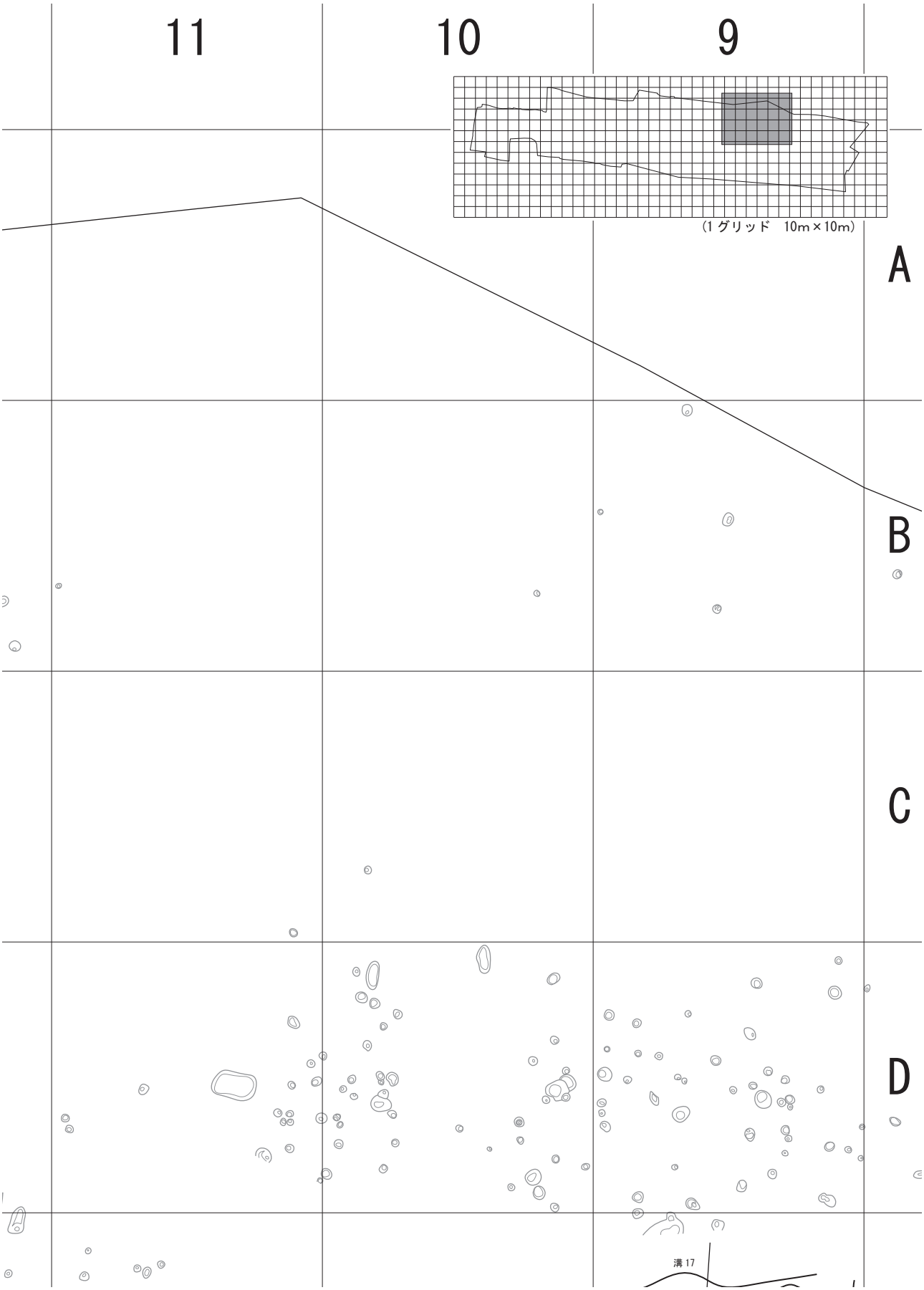
第13図　古代遺構配置図７



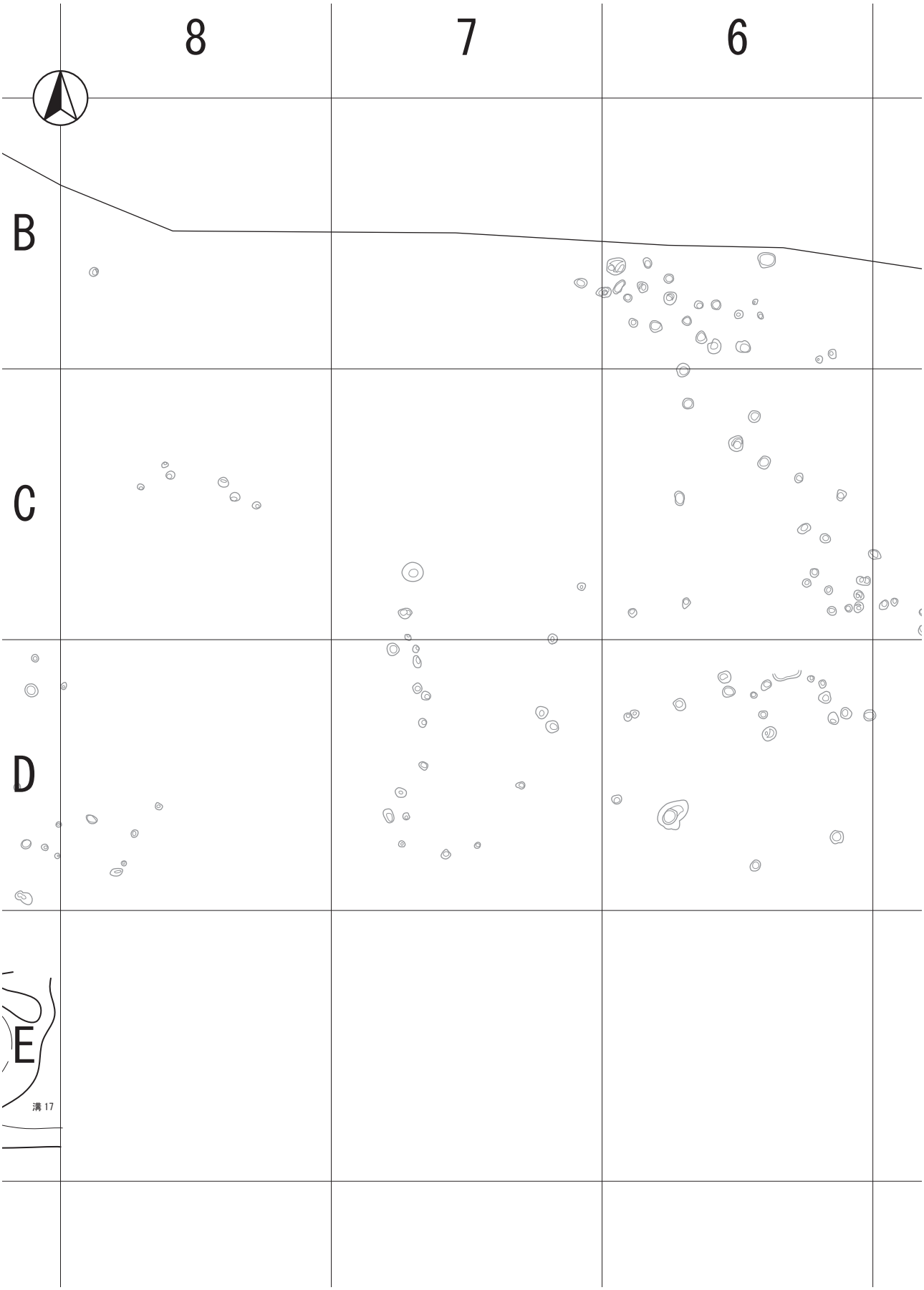
第14図　古代遺構配置図８



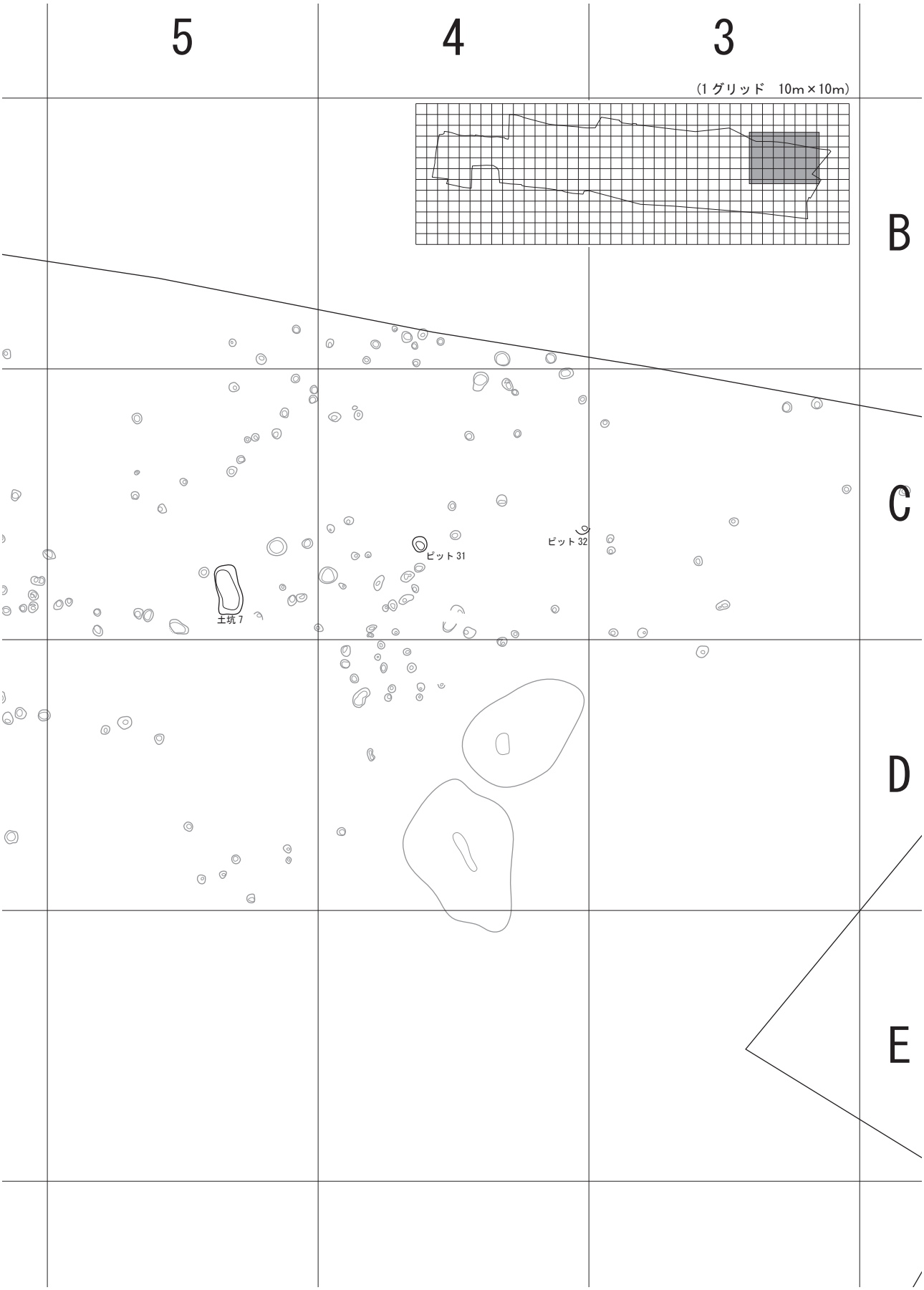
第15図　古代遺構配置図９



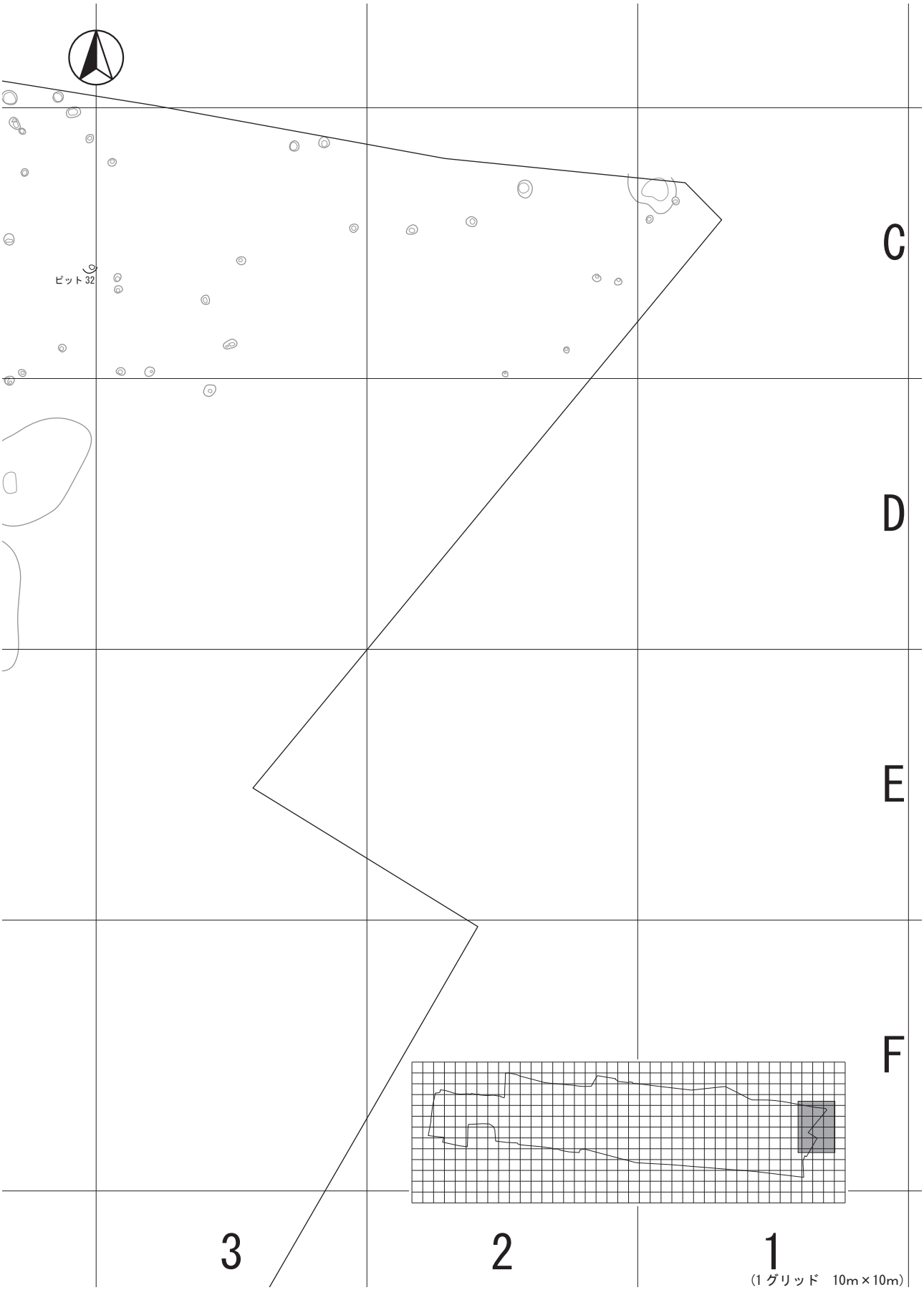
第16図　古代遺構配置図10



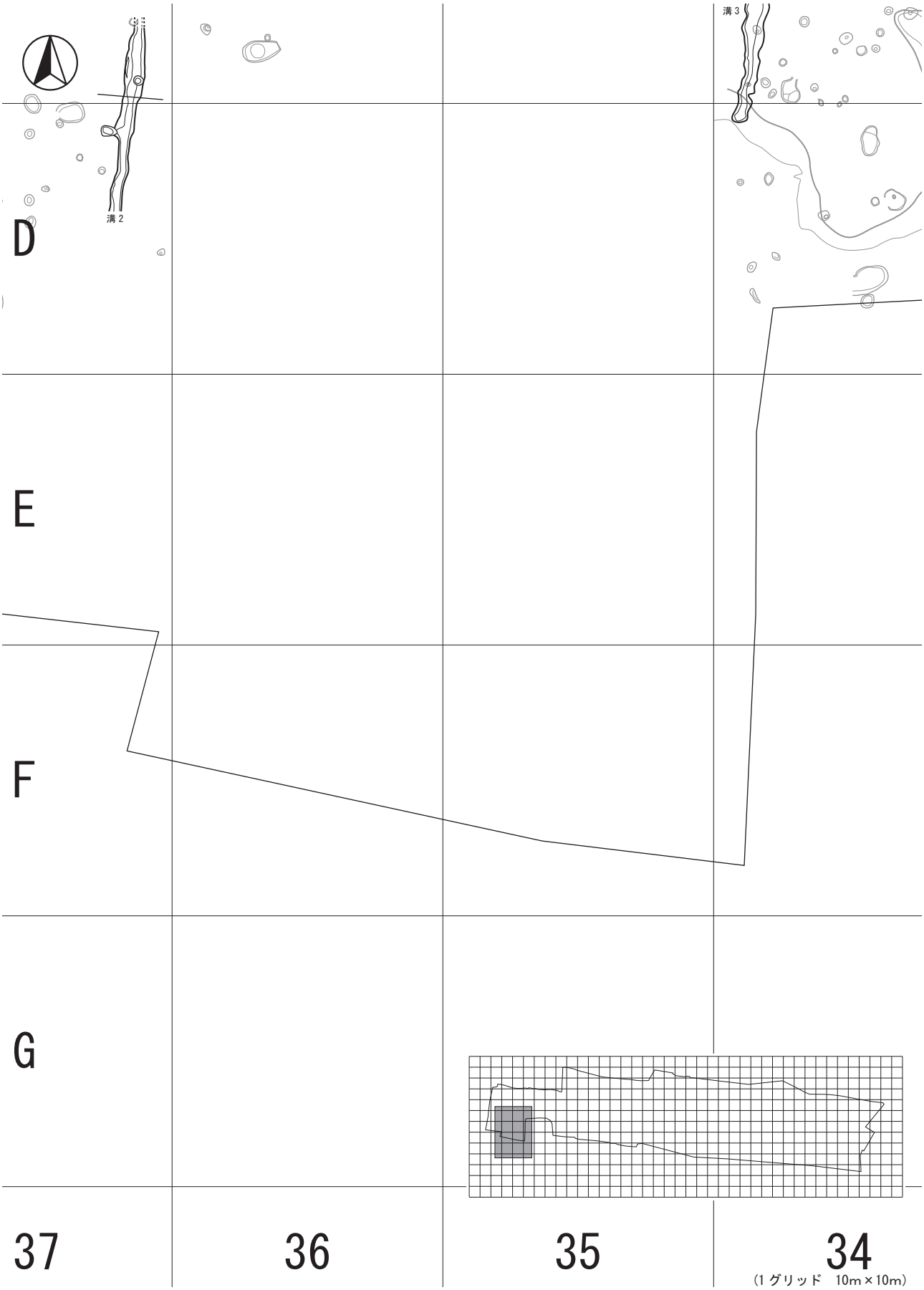
第17図　古代遺構配置図11



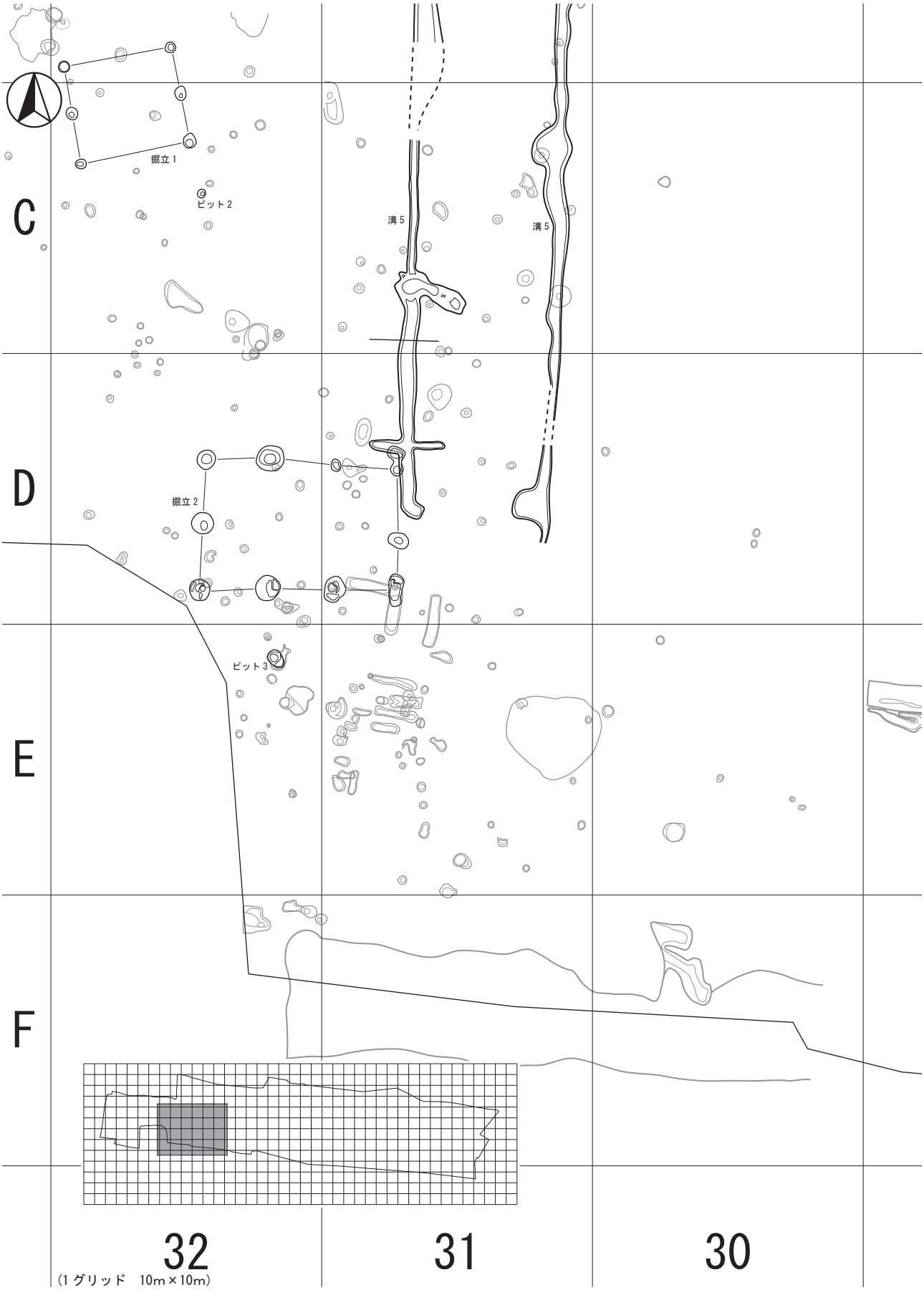
第18図　古代遺構配置図12



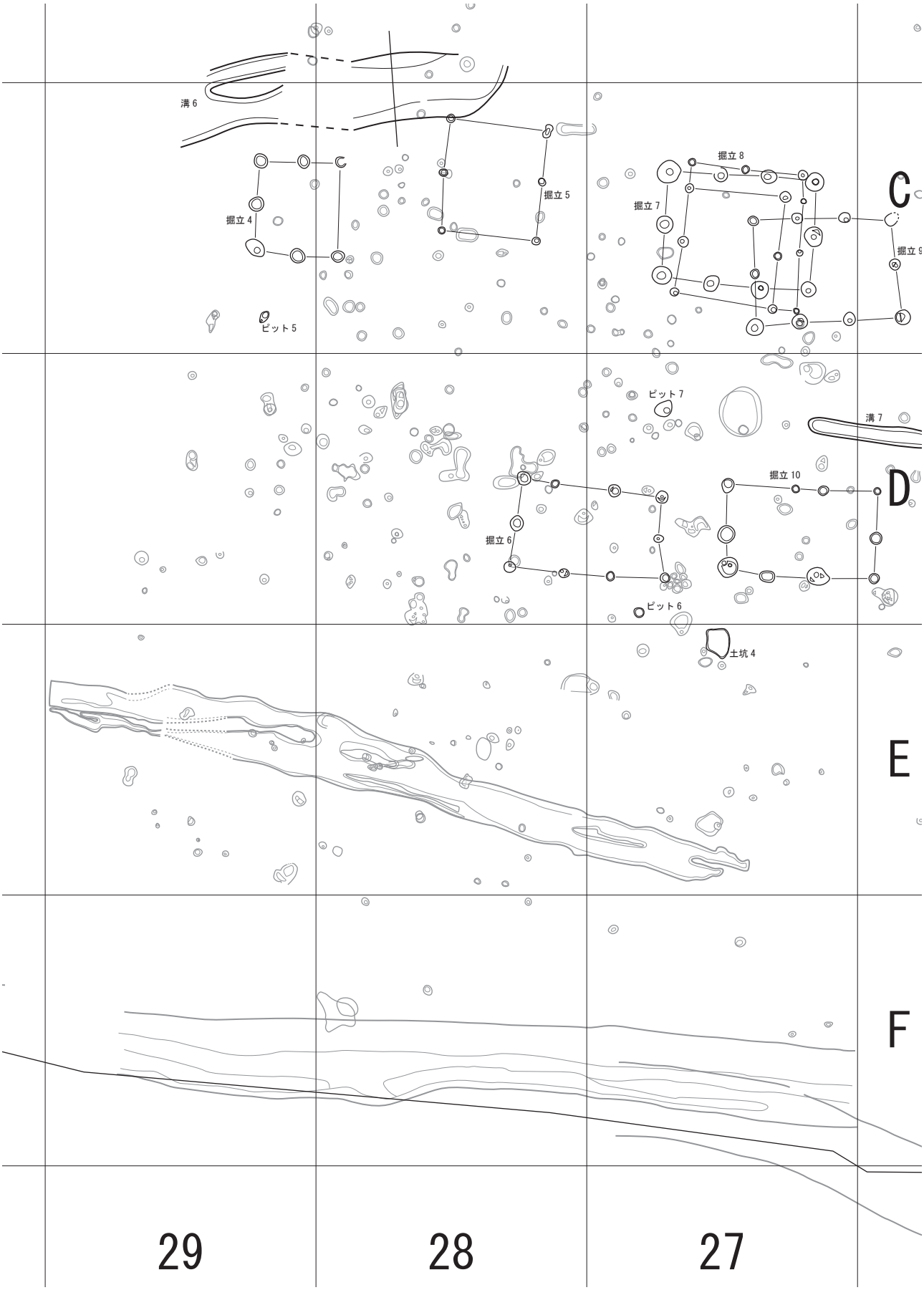
第19図　古代遺構配置図13



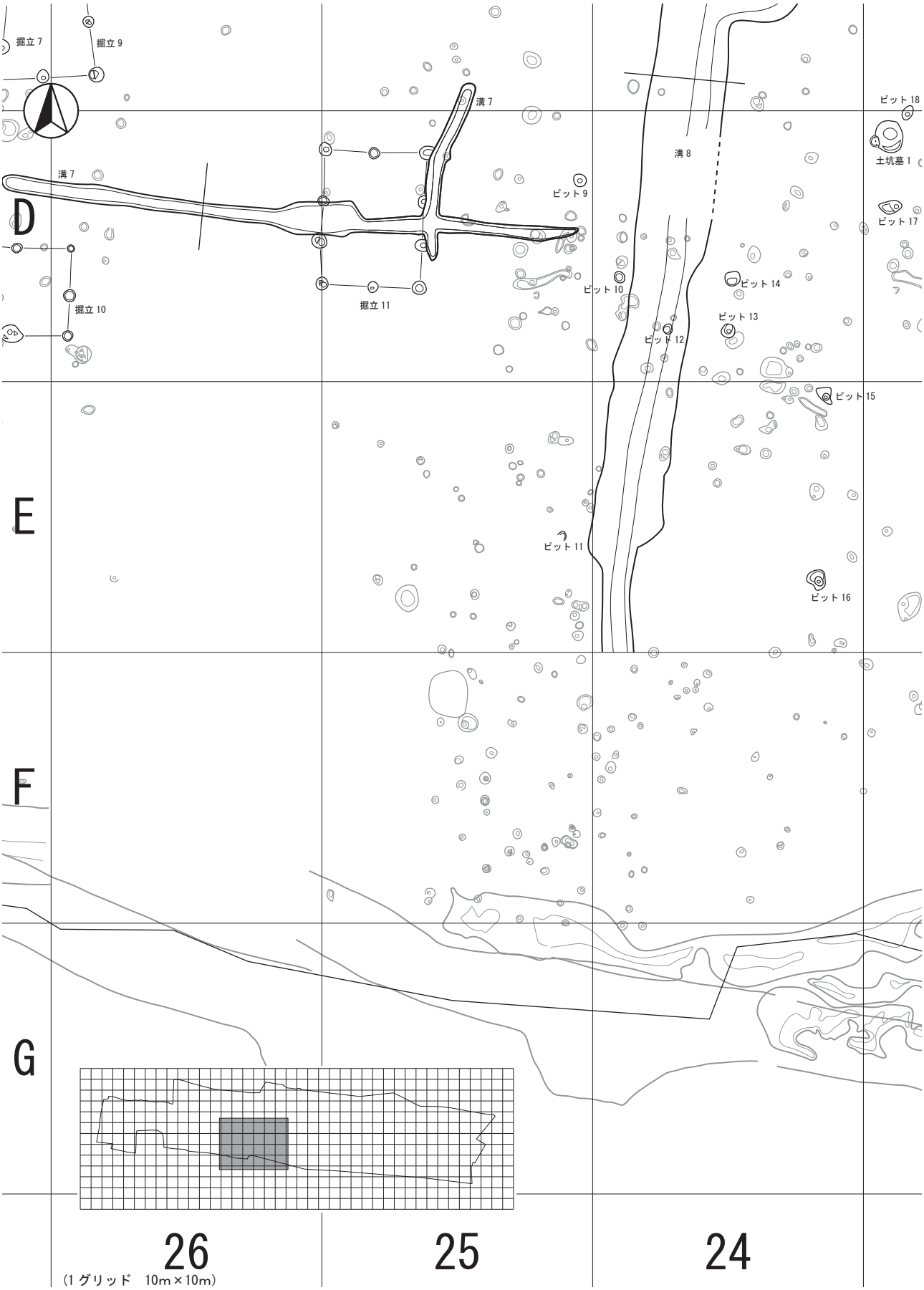
第20図　古代遺構配置図14



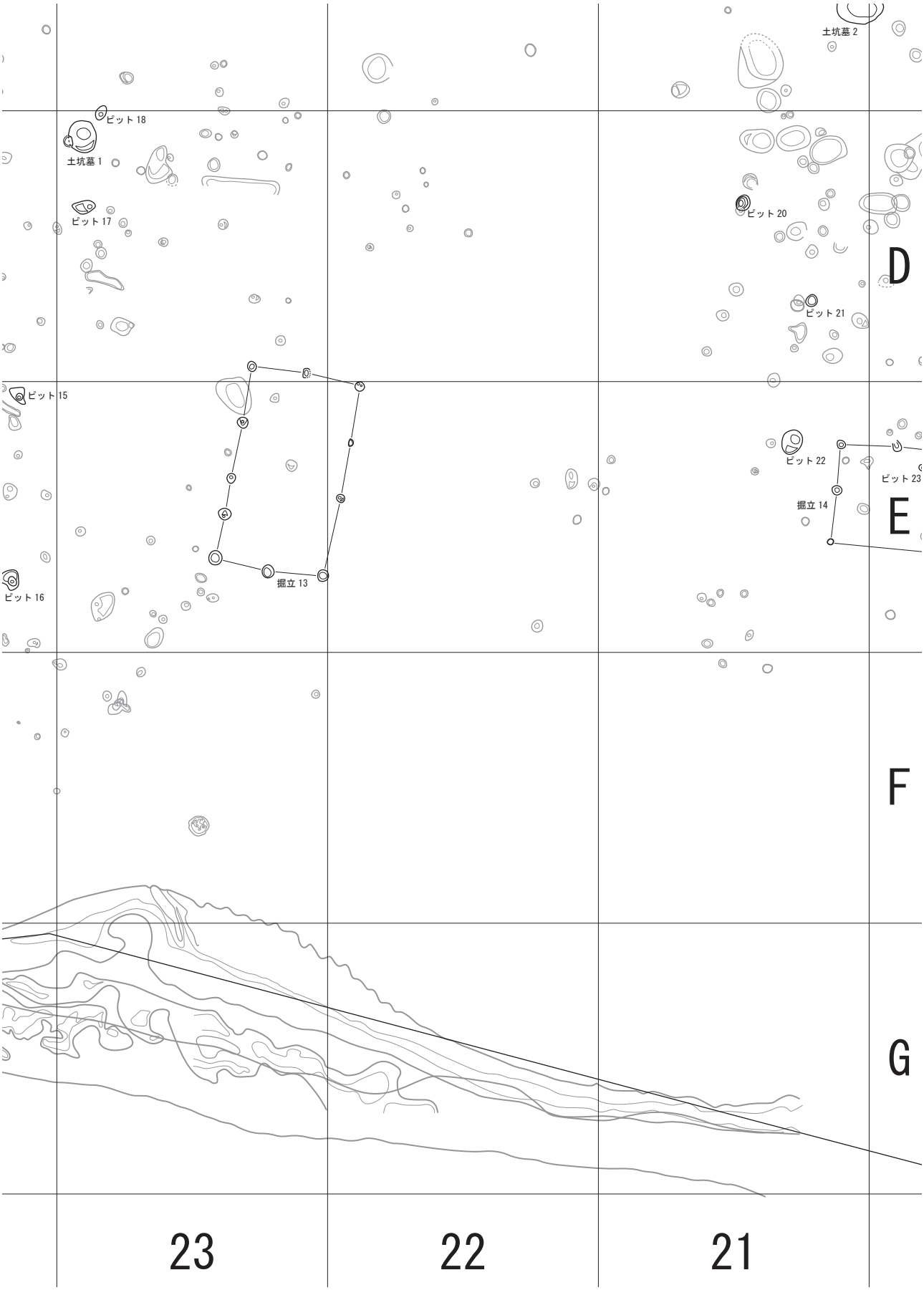
第21図　古代遺構配置図15



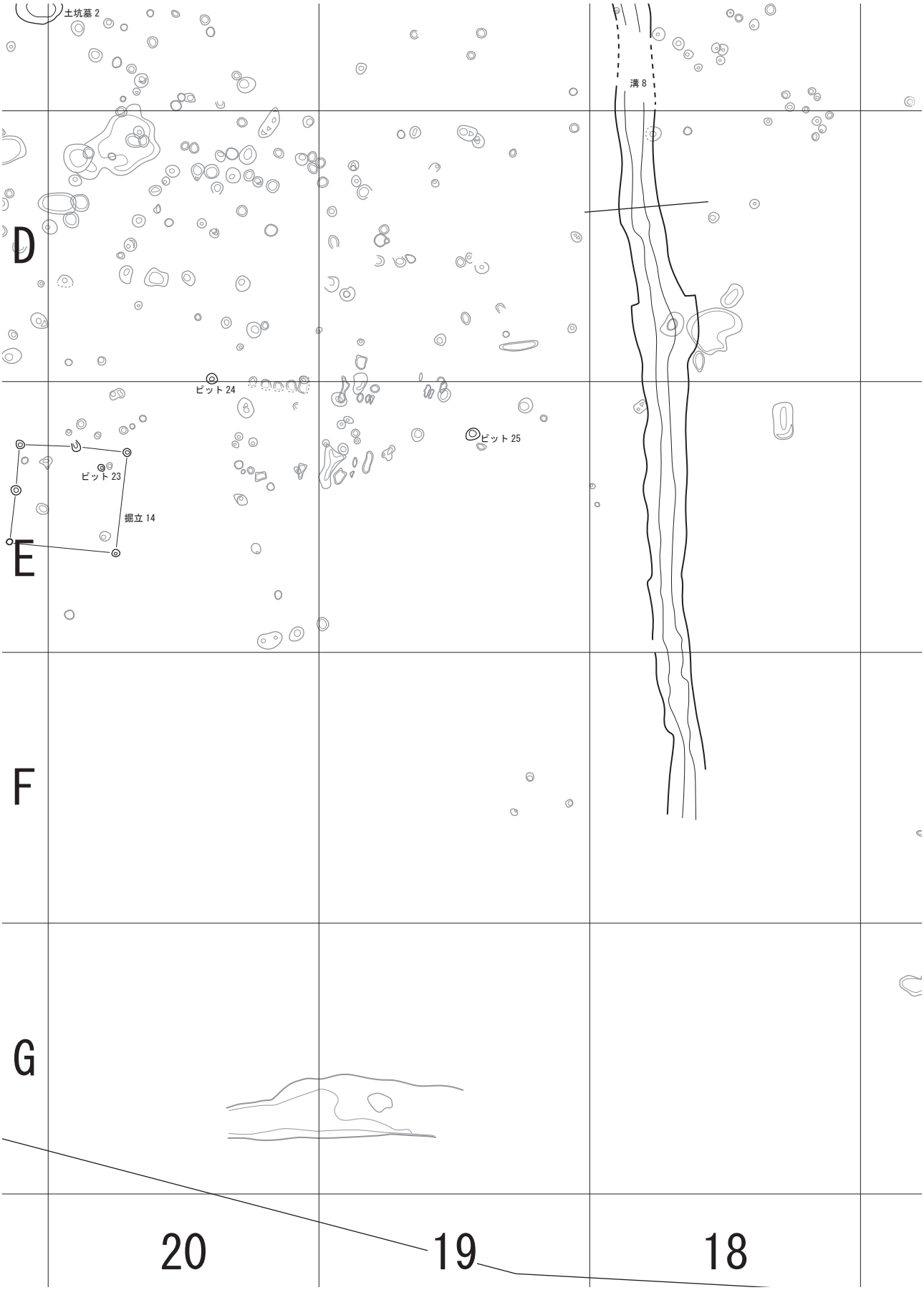
第22図　古代遺構配置図16



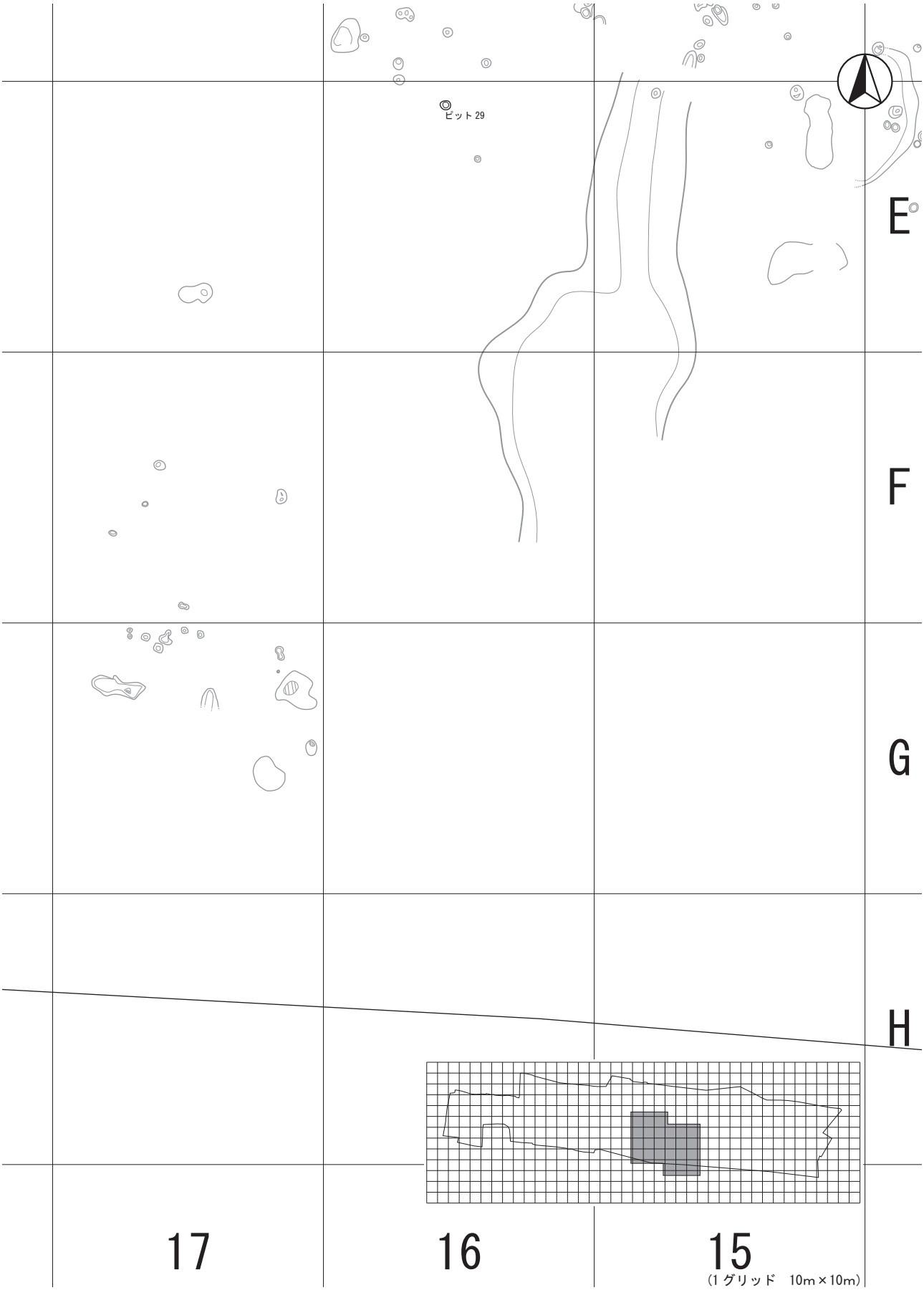
第23図　古代遺構配置図17



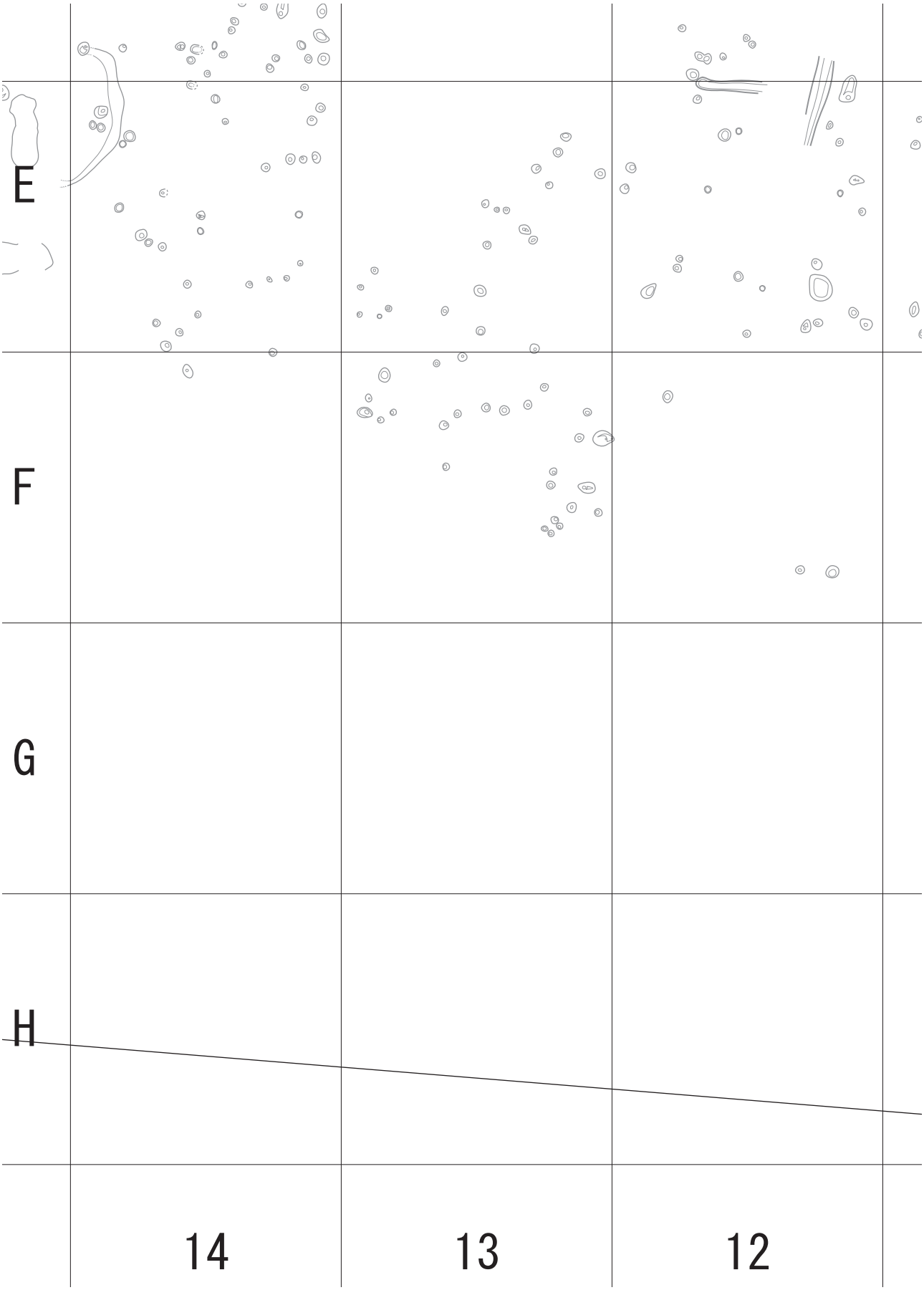
第24図　古代遺構配置図18



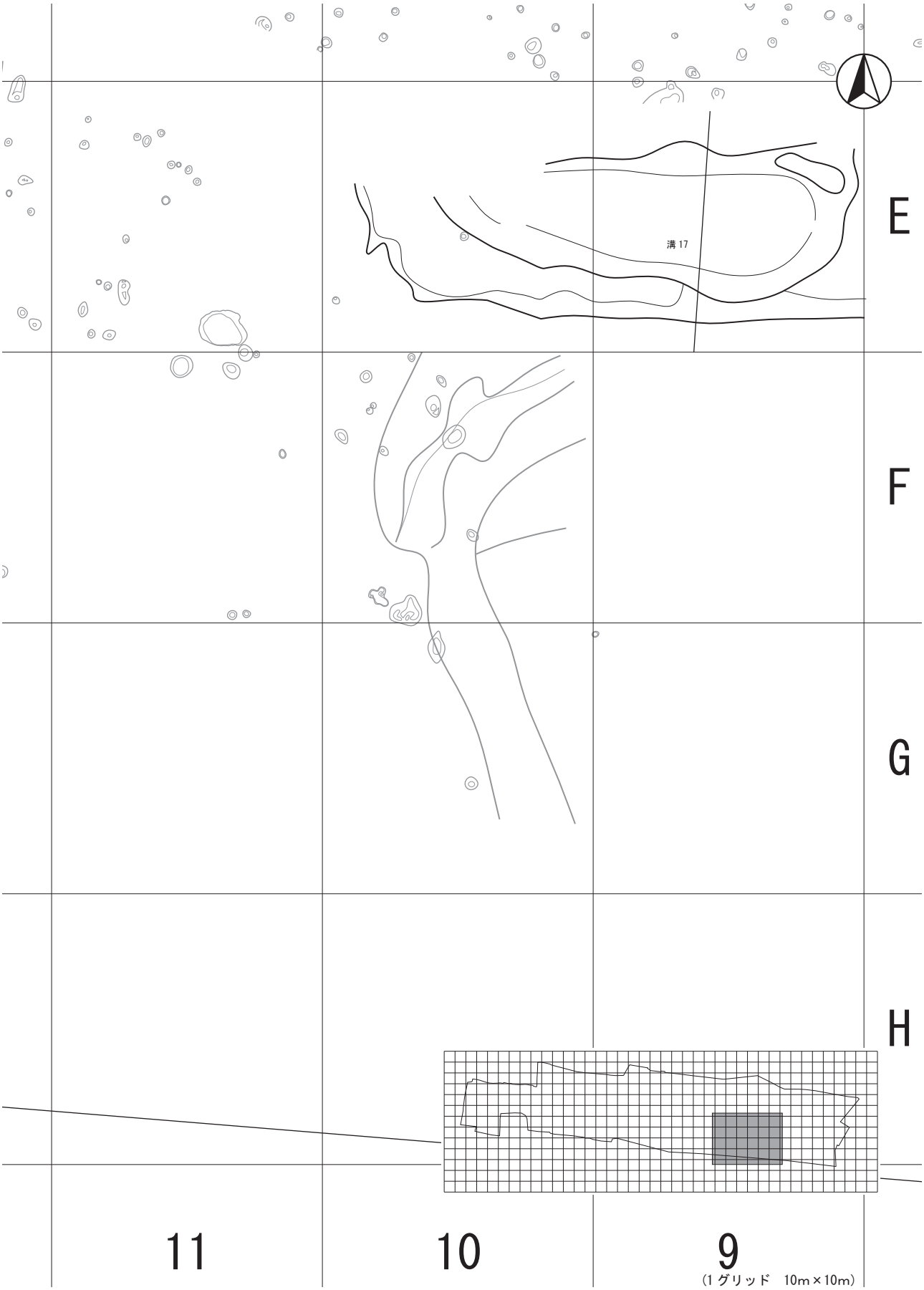
第25図　古代遺構配置図19



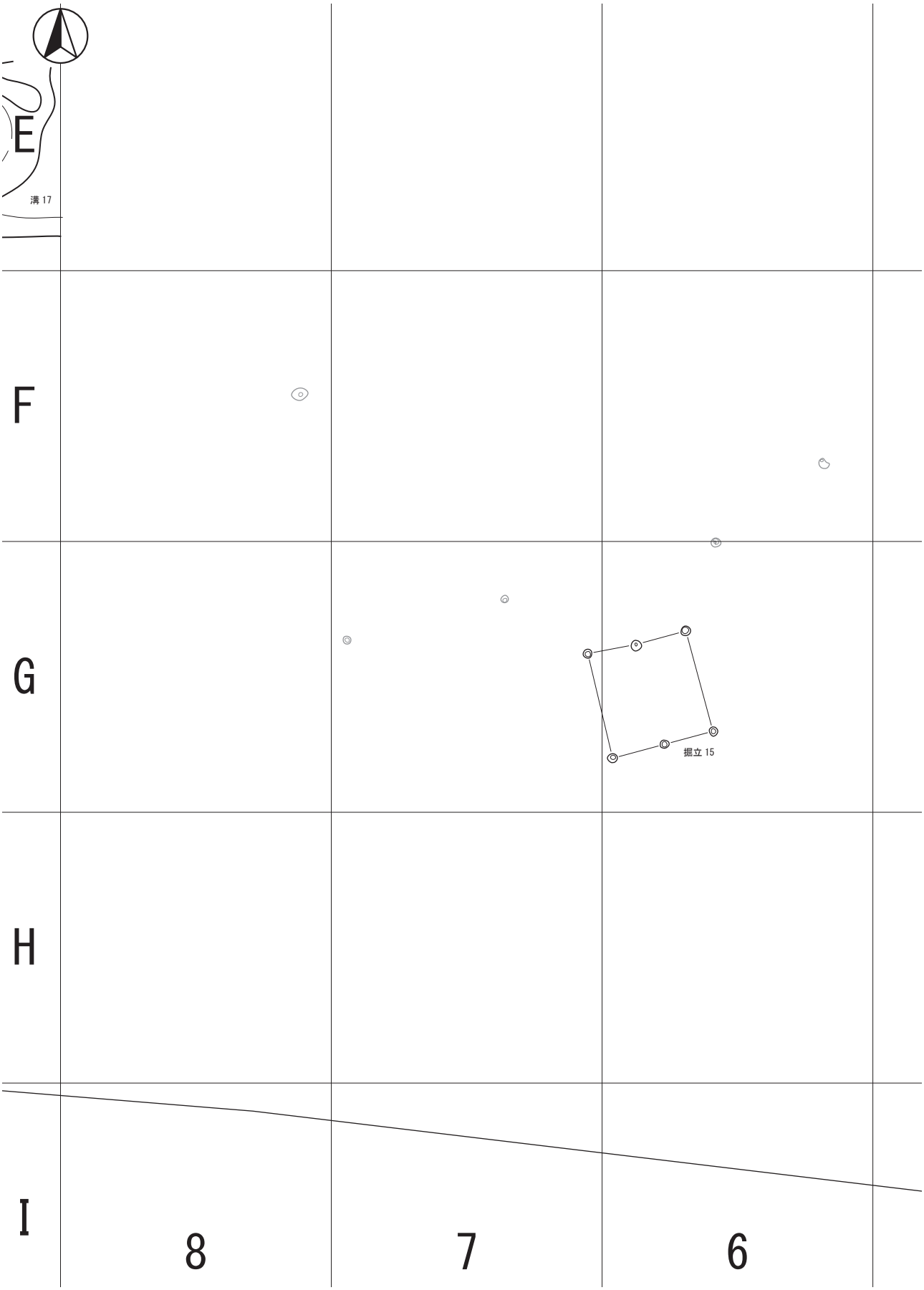
第26図　古代遺構配置図20



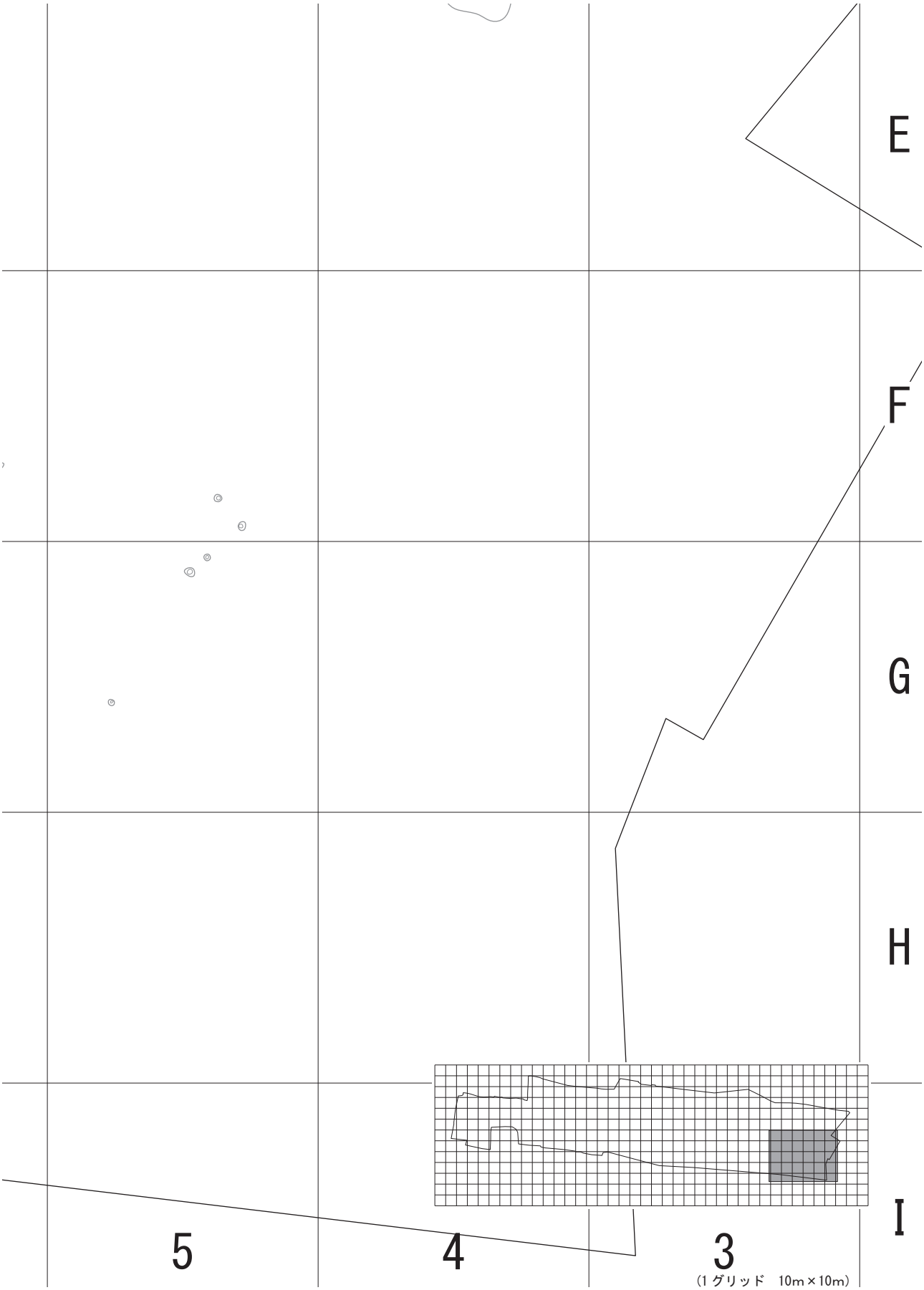
第27図　古代遺構配置図21



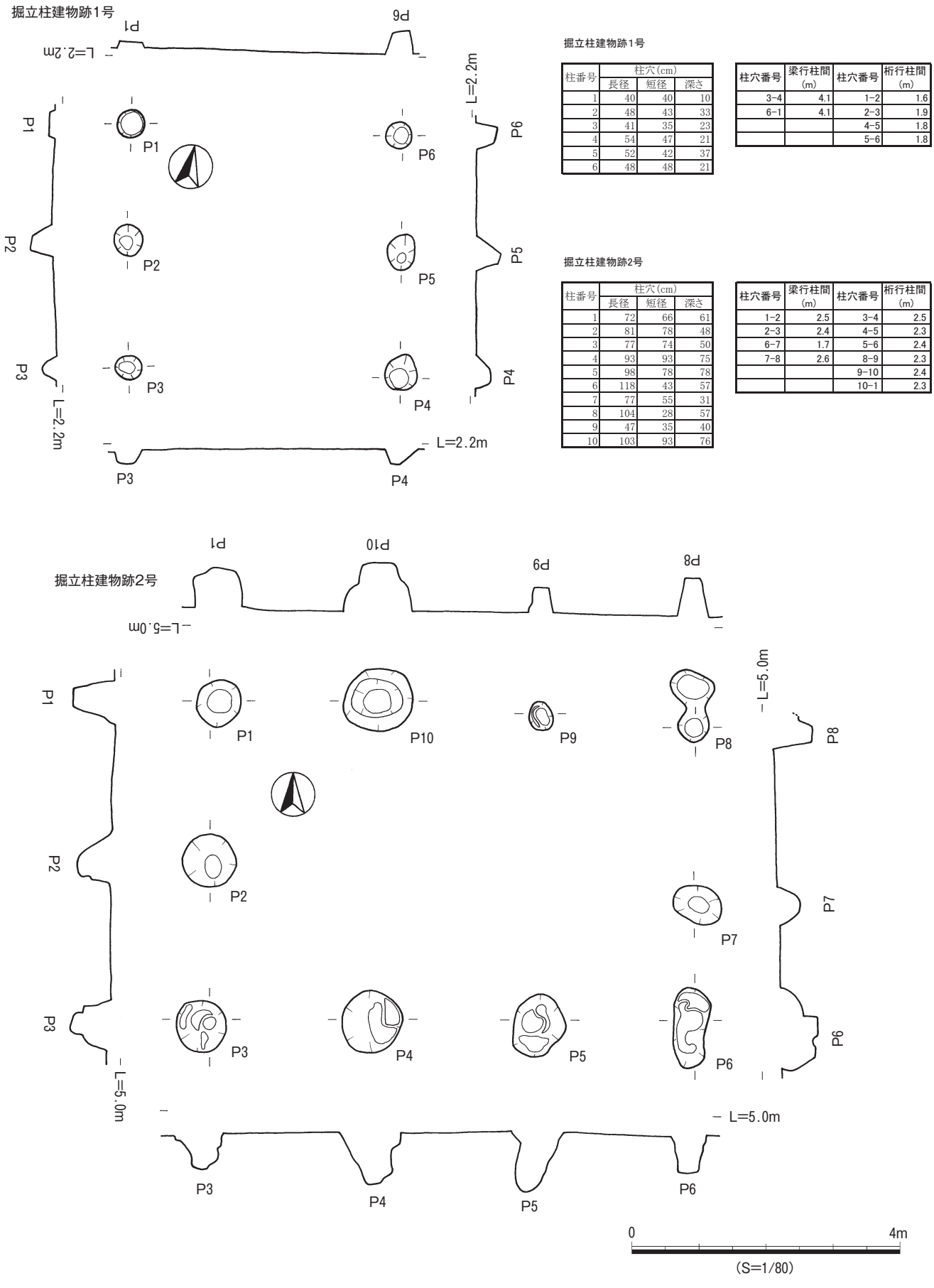
第28図　古代遺構配置図22



第29図　古代遺構配置図23



第30図　古代遺構配置図24



掘立柱建物跡1号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	40	40	10
2	48	43	33
3	41	35	23
4	54	47	21
5	52	42	37
6	48	48	21

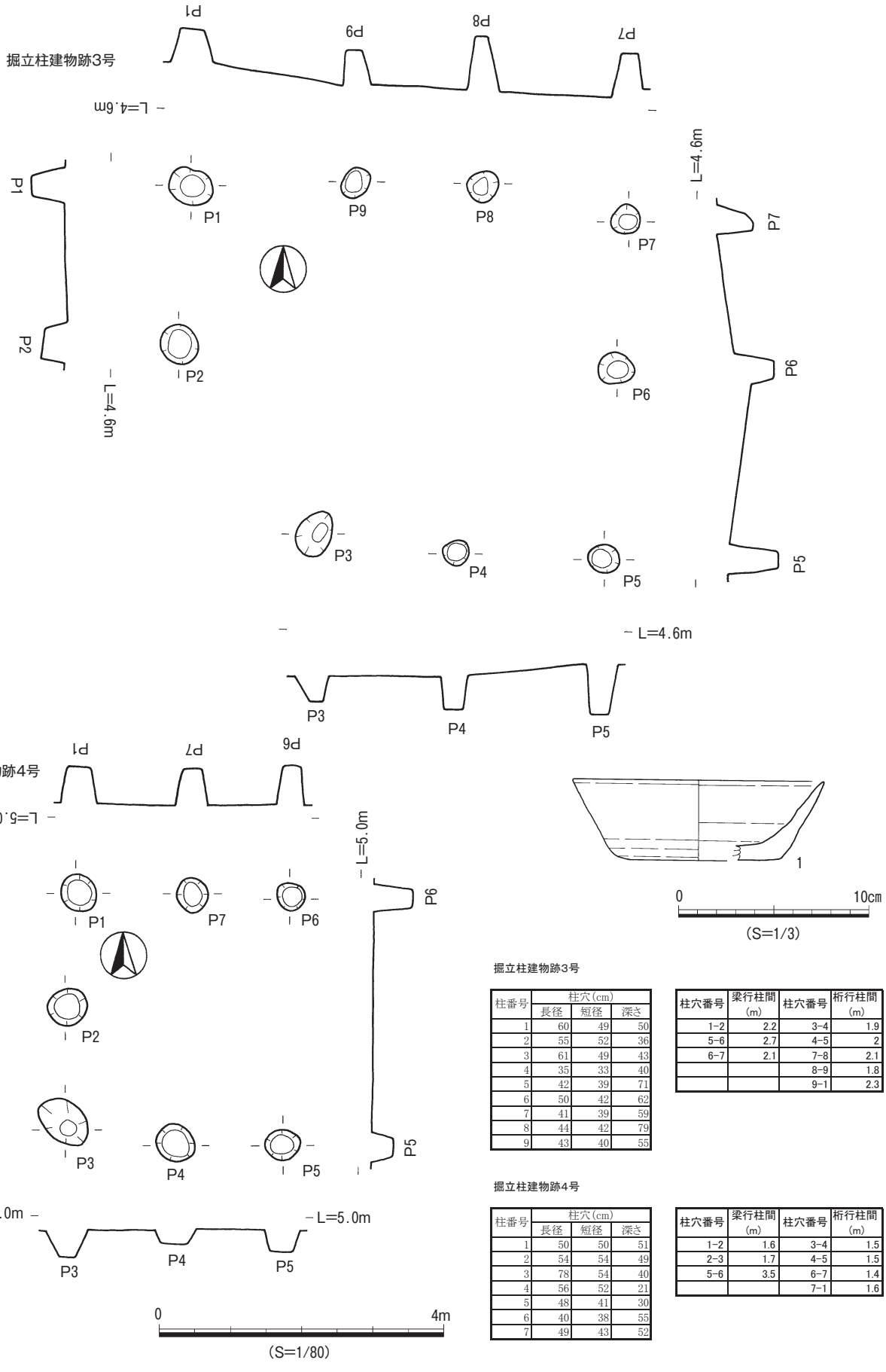
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
3-4	4.1	1-2	1.6
6-1	4.1	2-3	1.9
		4-5	1.8
		5-6	1.8

掘立柱建物跡2号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	72	66	61
2	81	78	48
3	77	74	50
4	93	93	75
5	98	78	78
6	118	43	57
7	77	55	31
8	104	28	57
9	47	35	40
10	103	93	76

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.5	3-4	2.5
2-3	2.4	4-5	2.3
6-7	1.7	5-6	2.4
7-8	2.6	8-9	2.3
		9-10	2.4
		10-1	2.3

第31図　掘立柱建物跡１，２号



掘立柱建物跡3号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	60	49	50
2	55	52	36
3	61	49	43
4	35	33	40
5	42	39	71
6	50	42	62
7	41	39	59
8	44	42	79
9	43	40	55

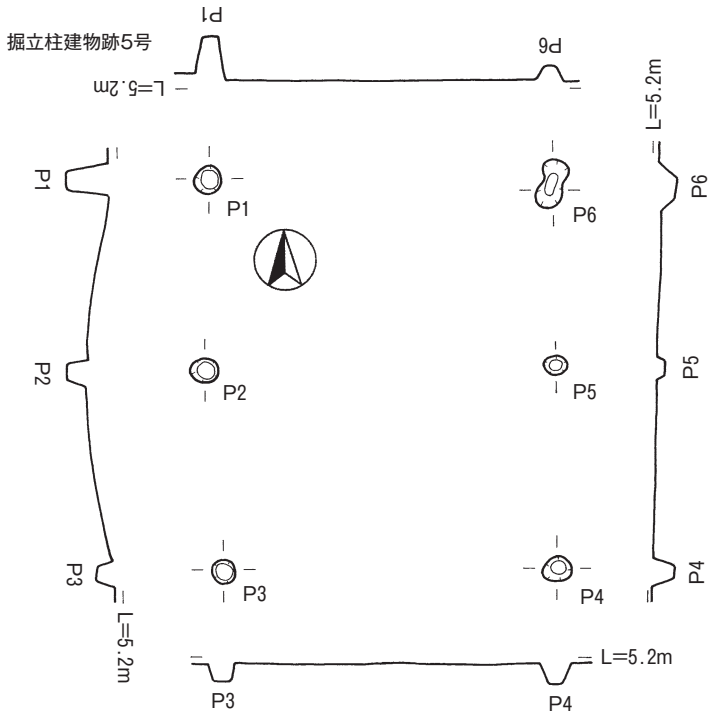
柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
1-2	2.2	3-4	1.9
5-6	2.7	4-5	2
6-7	2.1	7-8	2.1
		8-9	1.8
		9-1	2.3

掘立柱建物跡4号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	50	50	51
2	54	54	49
3	78	54	40
4	56	52	21
5	48	41	30
6	40	38	55
7	49	43	52

柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
1-2	1.6	3-4	1.5
2-3	1.7	4-5	1.5
5-6	3.5	6-7	1.4
		7-1	1.6

第32図　掘立柱建物跡３，４号・３号出土遺物



掘立柱建物跡5号

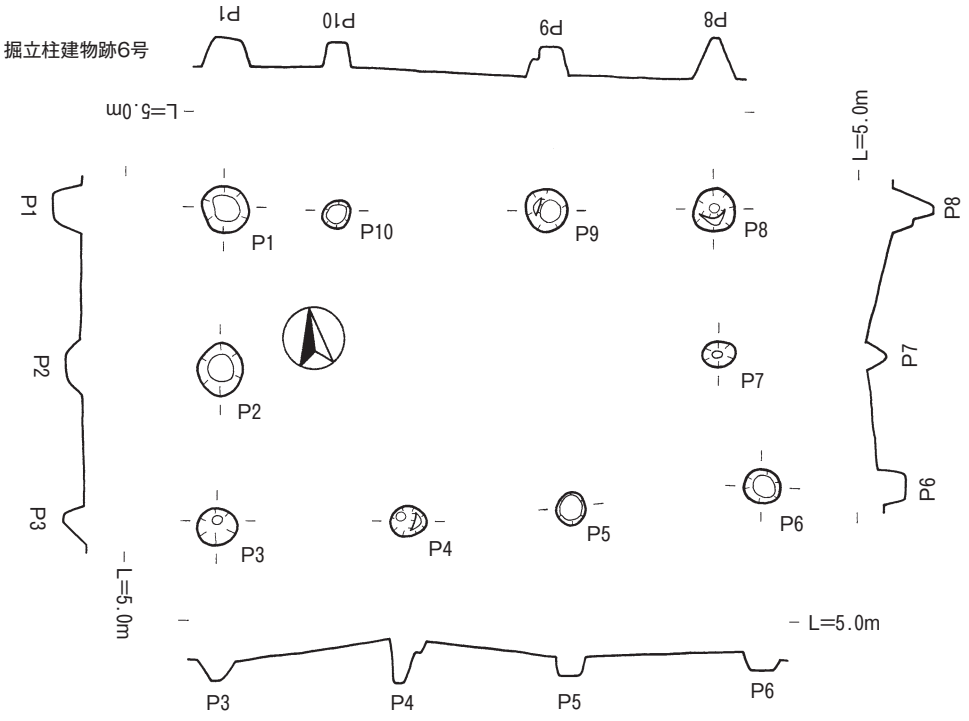
柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	33	33	46
2	33	27	51
3	27	27	20
4	30	28	24
5	26	23	46
6	51	28	18

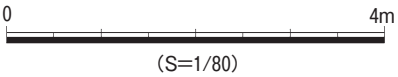
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
3-4	3.5	1-2	2.0
6-1	3.6	2-3	2.1
		4-5	2.1
		5-6	1.8

掘立柱建物跡6号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	49	49	32
2	55	48	16
3	43	40	23
4	38	32	46
5	35	29	20
6	39	35	30
7	35	27	20
8	44	44	43
9	46	43	31
10	30	28	26

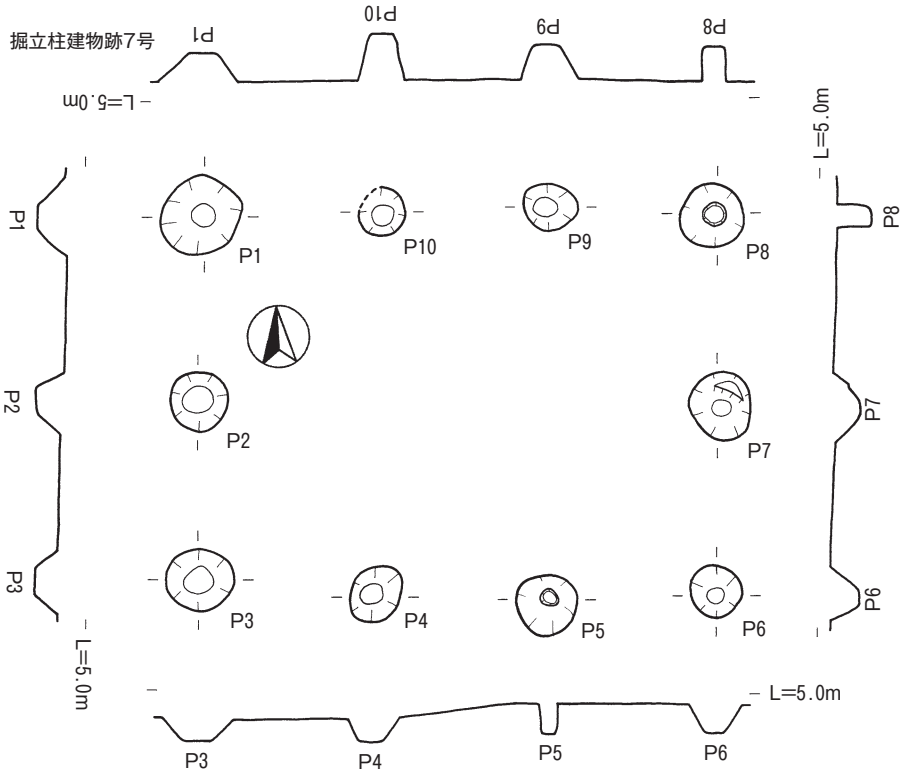
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.7	3-4	2.0
2-3	1.6	4-5	1.8
6-7	1.5	5-6	2.0
7-8	1.5	8-9	1.7
		9-10	2.2
		10-1	1.2





(S=1/80)

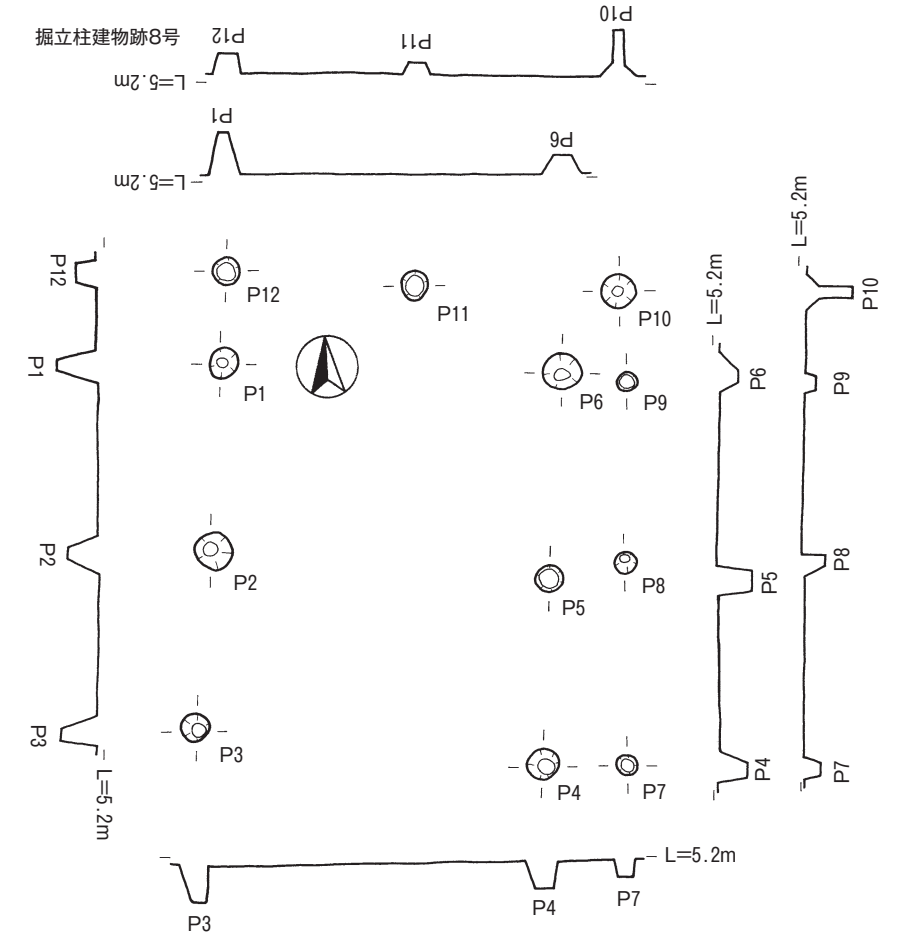
第33図　掘立柱建物跡５，６号



掘立柱建物跡7号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	88	83	31
2	61	61	23
3	70	65	24
4	64	51	24
5	63	53	32
6	55	50	30
7	71	65	28
8	66	66	36
9	57	49	35
10	51	48	49

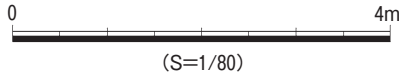
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.9	3-4	1.8
2-3	1.9	4-5	1.8
6-7	2.0	5-6	1.8
7-8	2.0	8-9	1.8
		9-10	1.7
		10-1	1.9



掘立柱建物跡8号

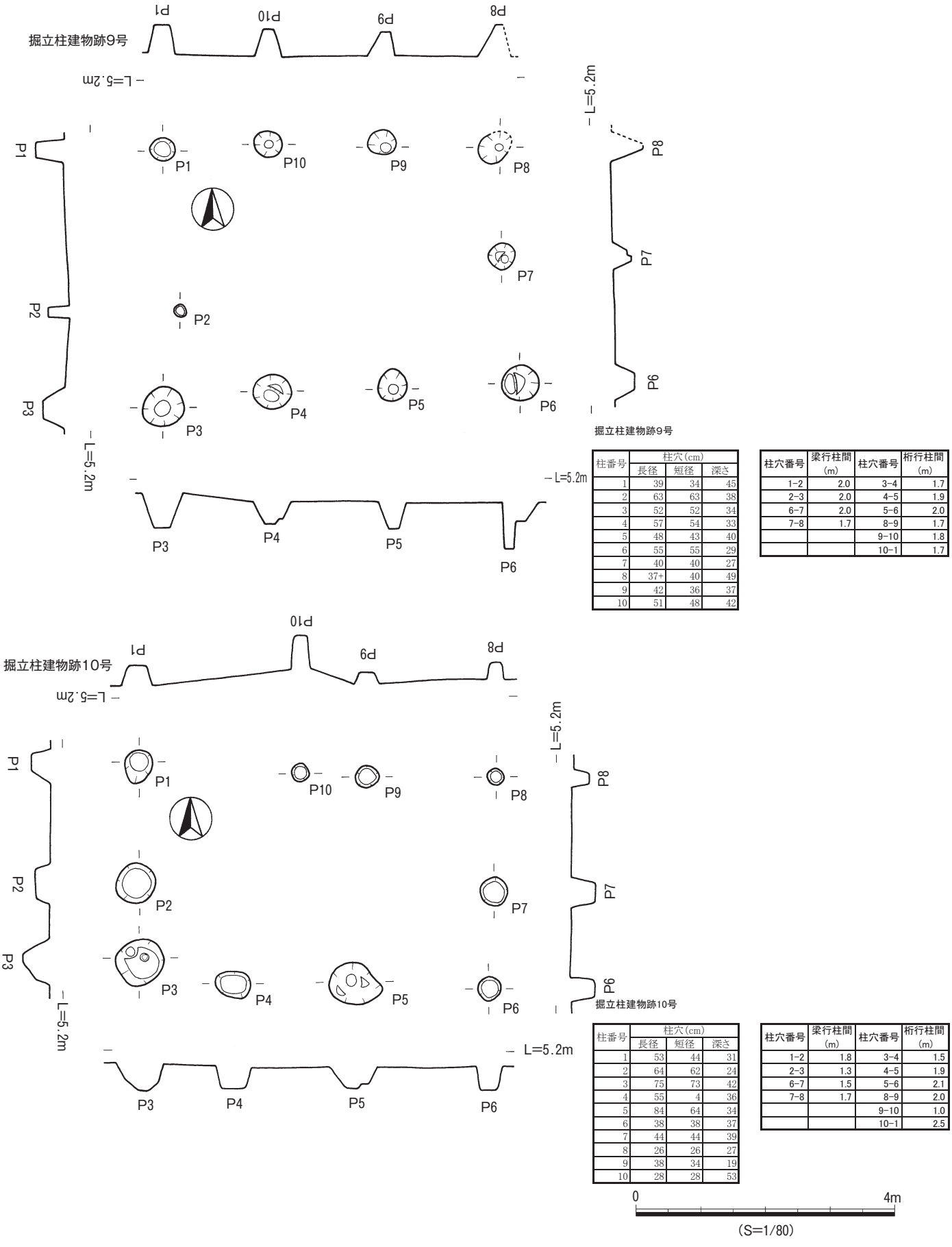
柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	33	30	45
2	39	39	33
3	32	29	40
4	32	32	31
5	29	29	37
6	41	39	22
7	23	20	19
8	24	23	26
9	21	18	13
10	35	35	50
11	31	28	17
12	27	27	22

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
3-4	3.7	1-2	2.0
6-1	3.6	2-3	1.9
4-7	0.8	4-5	2.0
10-11	2.1	5-6	2.1
11-12	2.0	7-8	2.2
		8-9	1.8
		9-10	1.0
		12-1	1.0



(S=1/80)

第34図　掘立柱建物跡７，８号



掘立柱建物跡9号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	39	34	45
2	63	63	38
3	52	52	34
4	57	54	33
5	48	43	40
6	55	55	29
7	40	40	27
8	37+	40	49
9	42	36	37
10	51	48	42

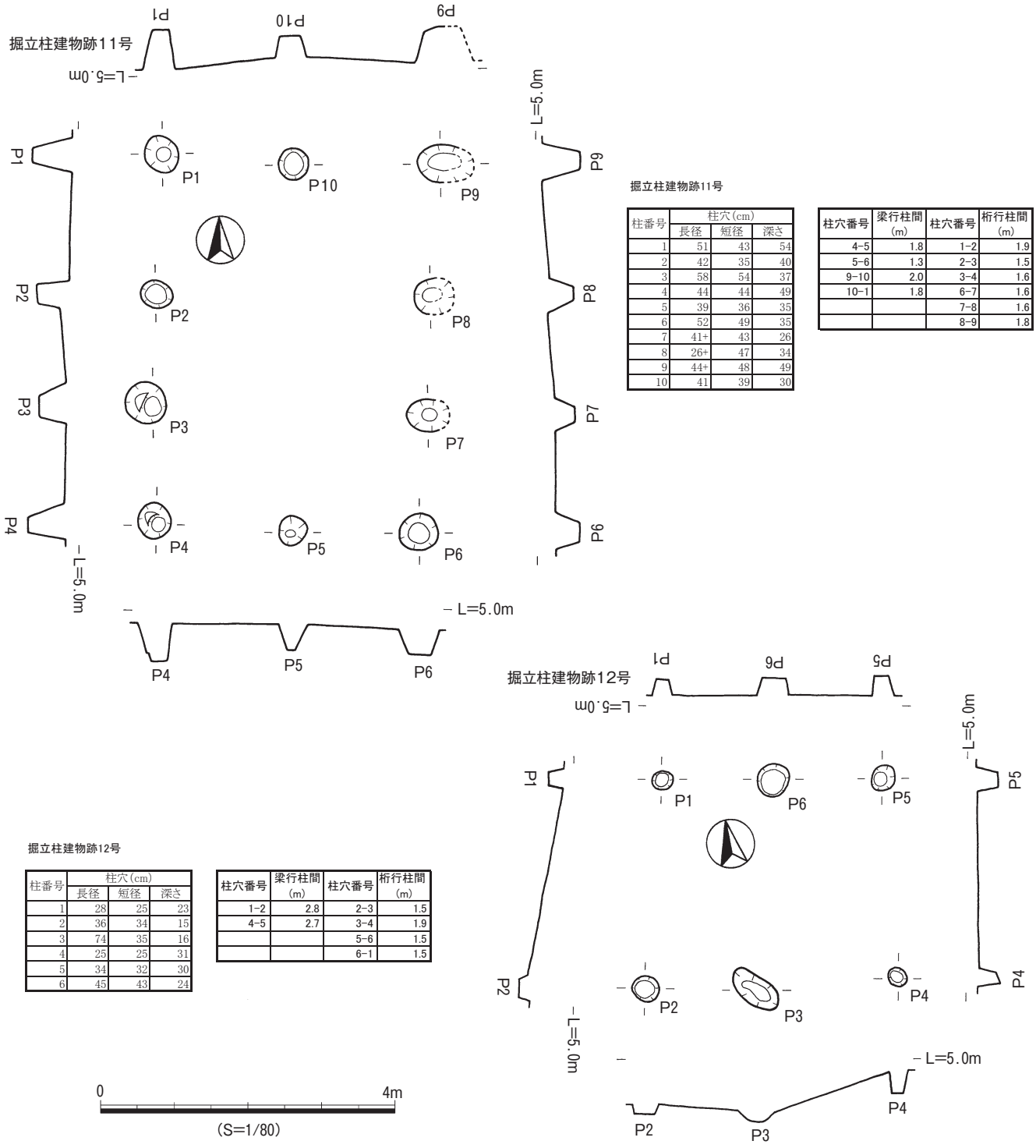
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.0	3-4	1.7
2-3	2.0	4-5	1.9
6-7	2.0	5-6	2.0
7-8	1.7	8-9	1.7
		9-10	1.8
		10-1	1.7

掘立柱建物跡10号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	53	44	31
2	64	62	24
3	75	73	42
4	55	4	36
5	84	64	34
6	38	38	37
7	44	44	39
8	26	26	27
9	38	34	19
10	28	28	53

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.8	3-4	1.5
2-3	1.3	4-5	1.9
6-7	1.5	5-6	2.1
7-8	1.7	8-9	2.0
		9-10	1.0
		10-1	2.5

第35図　掘立柱建物跡９，10号



掘立柱建物跡11号

柱番号	柱穴(cm) 長径	短径	深さ
1	51	43	54
2	42	35	40
3	58	54	37
4	44	44	49
5	39	36	35
6	52	49	35
7	41+	43	26
8	26+	47	34
9	44+	48	49
10	41	39	30

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
4-5	1.8	1-2	1.9
5-6	1.3	2-3	1.5
9-10	2.0	3-4	1.6
10-1	1.8	6-7	1.6
		7-8	1.6
		8-9	1.8

掘立柱建物跡12号

柱番号	柱穴(cm) 長径	短径	深さ
1	28	25	23
2	36	34	15
3	74	35	16
4	25	25	31
5	34	32	30
6	45	43	24

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.8	2-3	1.5
4-5	2.7	3-4	1.9
		5-6	1.5
		6-1	1.5

第36図　掘立柱建物跡11，12号

部は回転ヘラ切りによる切り離し後，調整を施していない。

炉跡（第38図）

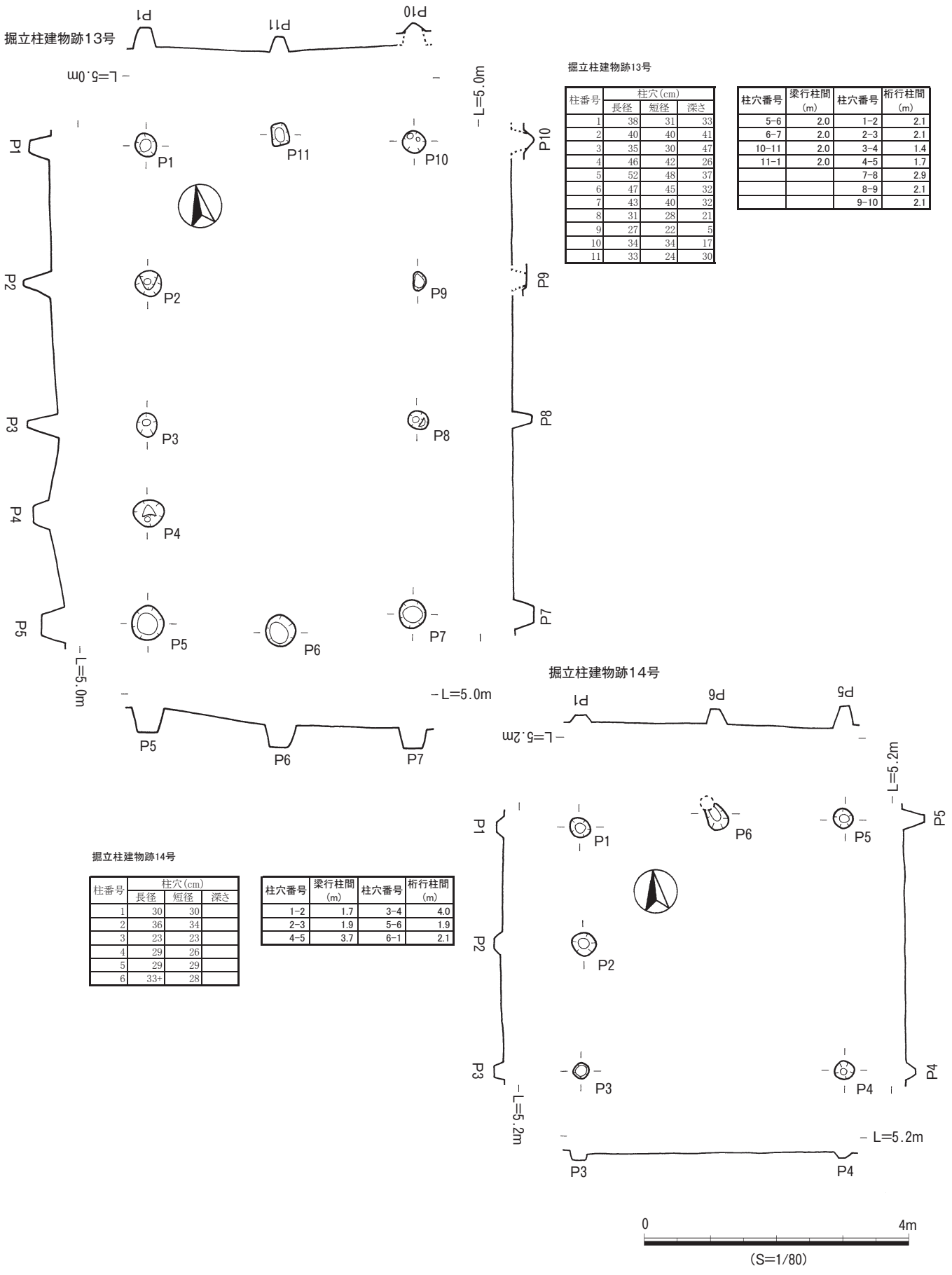
炉跡は，B-37区で1基検出された。上面を削平されており，本来の全体形状は明らかでない。残存部が約50cm四方で，焼土厚は15cm程度である。

土坑（第39図～第45図）

土坑は７基検出された。概ね長軸，短軸１ｍ以上のもので，遺構内から遺物が出土したものを，基本的に扱った。調査区西側にやや偏っているが集中部を形成するほどではなく，点在する。

土坑１号（第39図・第40図）

A-36区で検出された。平面形は，長軸2.1m以上，短軸は1.6mの隅丸方形を呈すると思われる。検出面からの深さ約95cmで，底面はほぼ平坦である。埋土中，中位から上位に大量の遺物を検出した。形態から本来，土坑



掘立柱建物跡13号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	38	31	33
2	40	40	41
3	35	30	47
4	46	42	26
5	52	48	37
6	47	45	32
7	43	40	32
8	31	28	21
9	27	22	5
10	34	34	17
11	33	24	30

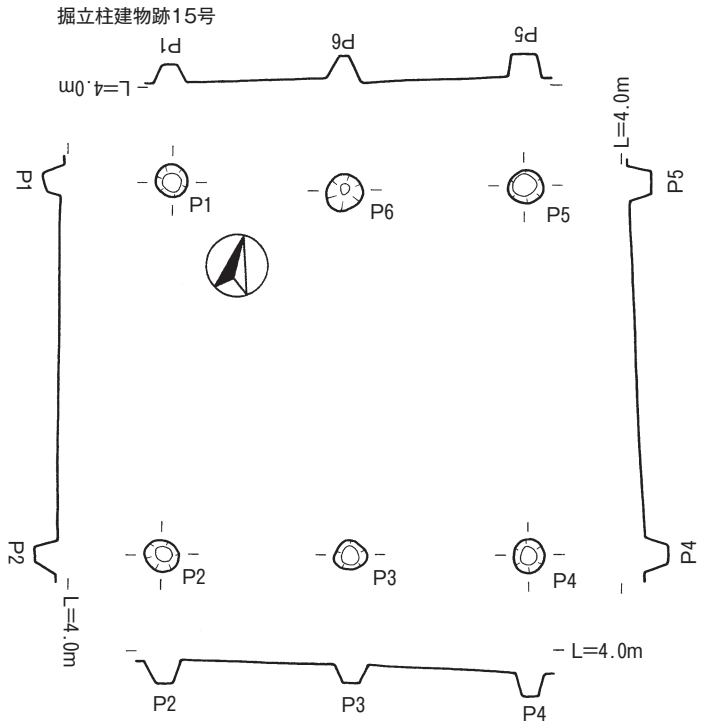
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
5-6	2.0	1-2	2.1
6-7	2.0	2-3	2.1
10-11	2.0	3-4	1.4
11-1	2.0	4-5	1.7
		7-8	2.9
		8-9	2.1
		9-10	2.1

掘立柱建物跡14号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	30	30	
2	36	34	
3	23	23	
4	29	26	
5	29	29	
6	33+	28	

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.7	3-4	4.0
2-3	1.9	5-6	1.9
4-5	3.7	6-1	2.1

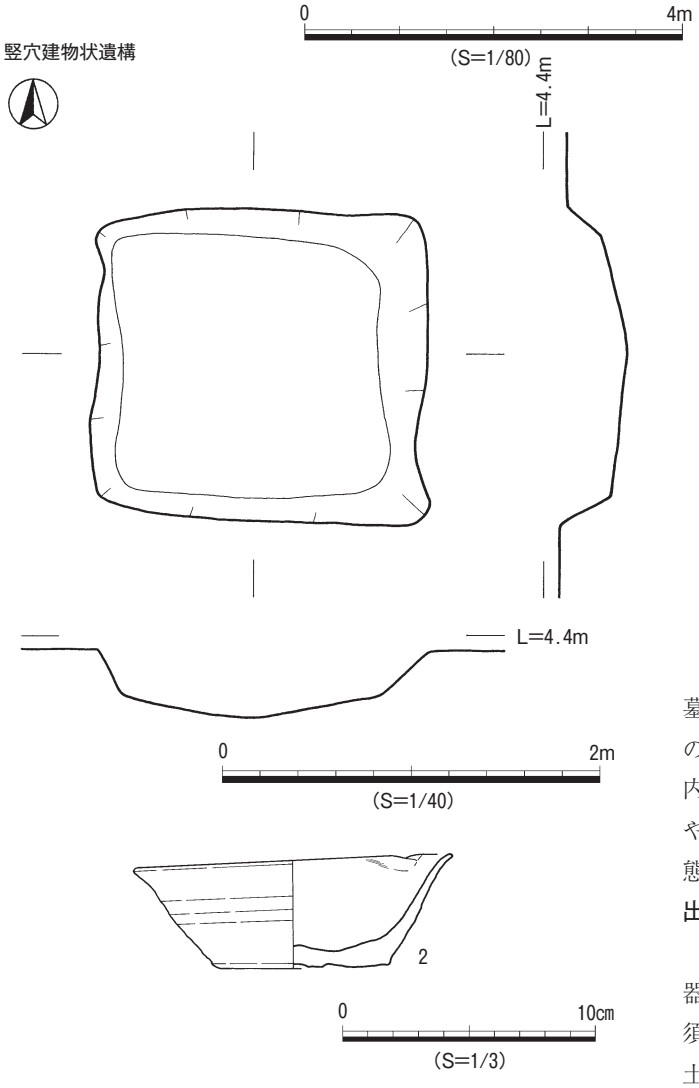
第37図　掘立柱建物跡13，14号

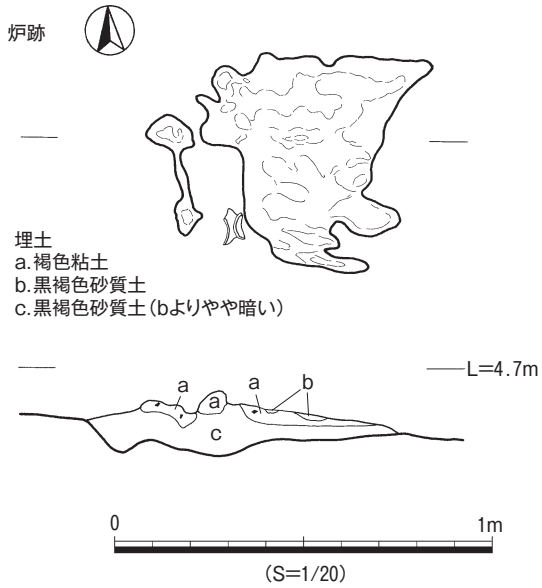


掘立柱建物跡15号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	33	33	20
2	37	34	24
3	35	31	20
4	34	30	24
5	37	37	25
6	39	39	26

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	3.9	2-3	2.0
4-5	3.9	3-4	1.8
		5-6	1.9
		6-1	1.8



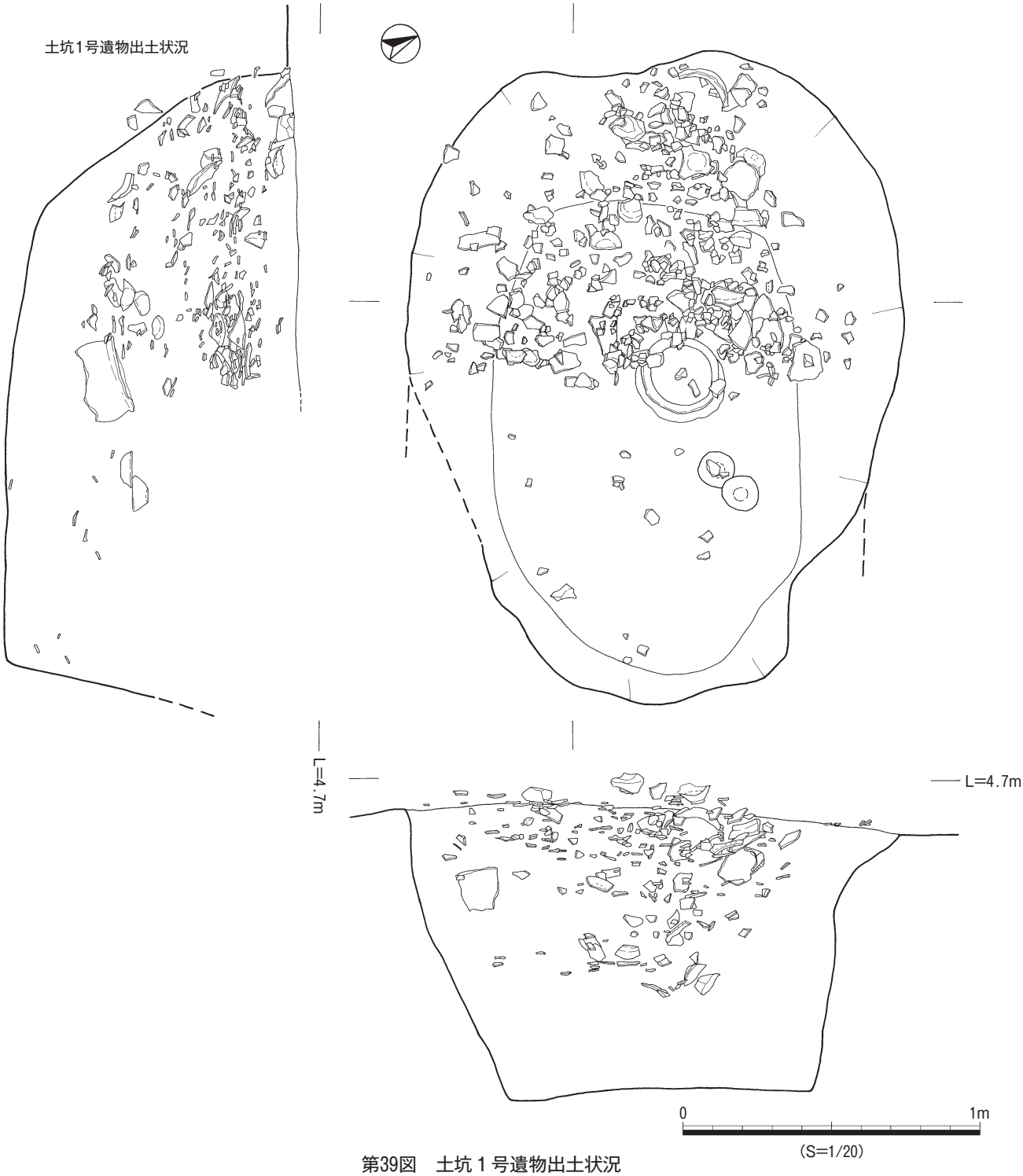


第38図　掘立柱建物跡15号・竪穴建物状遺構・竪穴建物状遺構出土遺物・炉跡

墓の可能性も考えられるが，底面付近での人骨，副葬品の検出がみられないことから，土坑として取り扱った。内部から出土した遺物は，土坑が埋没していく過程でやや深い凹みをもっていた時期に，一括して廃棄された状態とみられる。

出土遺物(第41図～第43図)

土師器椀１点，土師器坏15点，土師器甕８点，黒色土器１点，赤色土器１点，須恵器皿２点，須恵器蓋４点，須恵器大甕１点，土製品１点，墨書土器４点，ヘラ書き土器１点の39点を掲載した。本遺跡の他の遺構と比較して，土師器坏，土師器甕および墨書土器の点数が多い特徴がある。一方，土師器椀，赤色土器，黒色土器および

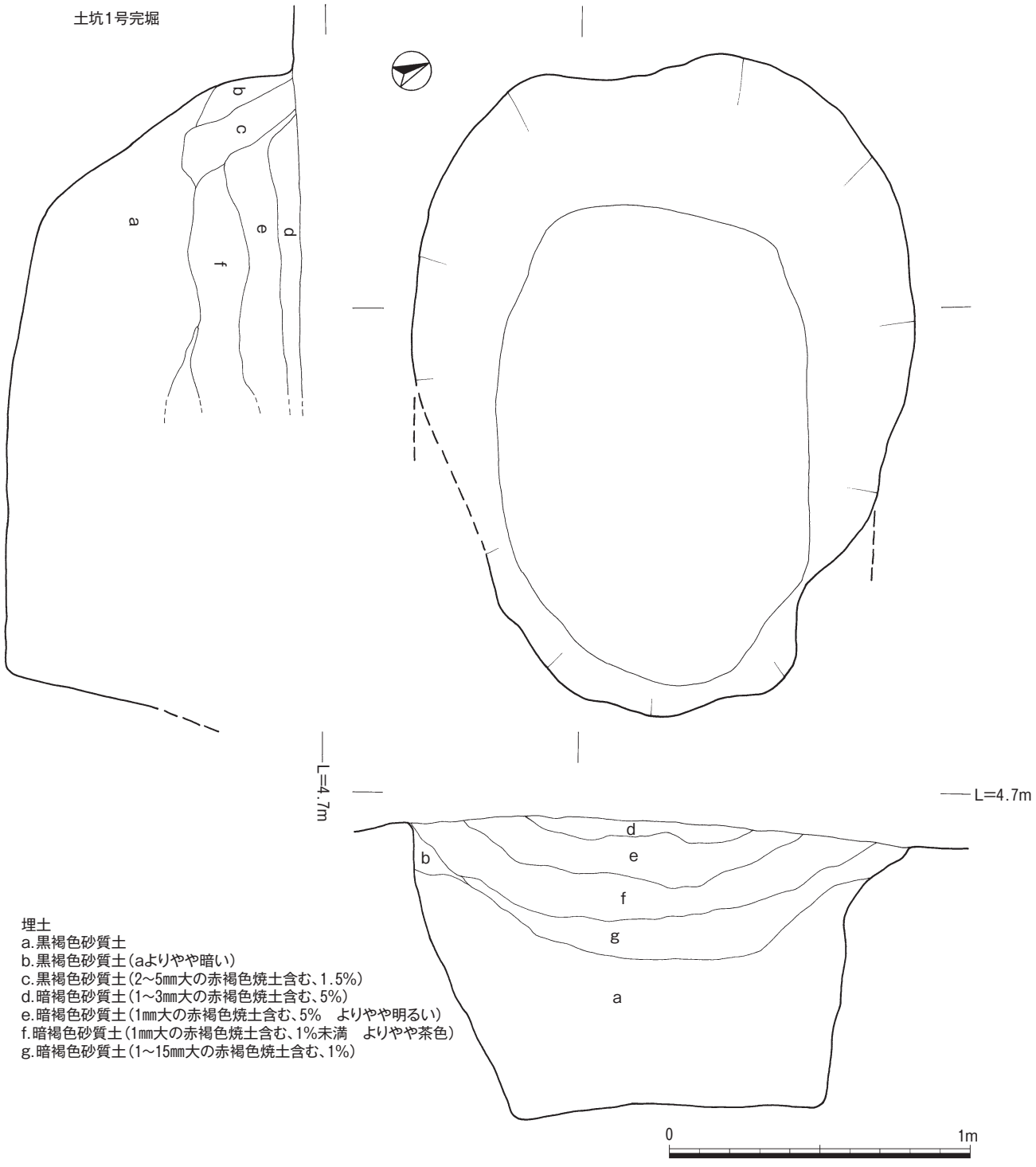


第39図　土坑１号遺物出土状況

須恵器の点数が少ない。また，墨書土器では，「宅」「万」「作」「門」「凡」「富」といった本遺跡で多く出土する文字を記載した土器は出土していない。

３は，土師器椀の底部である。口縁部および高台端部を欠損している。高台はハの字に広がるものである。

４～17は，すべて土師器坏のⅢ類である。16と17については底部を欠損しているが，椀との判別が困難なため坏として掲載することとした。内外面ともに横ナデ調整を施し，底部は回転ヘラ切りによる切り離し後，ナデ調整を施している。底面は平坦で，体部が直線的に開く。８・10はほぼ完形品である。４・５・８・９・13・17は口縁端部が尖る。６・16は口縁部がほぼ直行している。４・５・７は胴部から口縁部にかけて，やや内湾している。５・６・８・９・11・12は底部から胴部にかけて，やや丸みをもって立ち上がる。11・17は口縁部がやや外反している。11は焼成により，内外面とも赤橙色を呈している。また，底部の器壁がやや厚く，内面の中心部が窪んでいる。18は赤色土器Ⅱ類の坏である。



第40図　土坑１号完掘状況

19～25は土師器甕である。口縁部から胴部まで復元できたもので,完形品はなかった。口縁部は短く外反する。19・20・23・25は胴部が張り出すⅠ類，21・22・24は胴部が張り出さないⅡ類である。19は口縁部から胴部の張り出しあたりまで，ほぼ完形で出土している。胴部下端から底部は出土していない。口径26㎝を測り，外面にハケ目調整，内面にケズリ調整，内面張り出しに指頭圧痕，口縁部内外面に丁寧な横ナデ調整を施す。20･22～24は，外面にハケ目調整，内面にケズリ調整を施す。25は，口縁部と底部を欠損している。内外面ともケズリ調整を施す。26は土師器甕の底部である。外面にハケ目調整，内面にケズリ調整，底部内面に指頭圧痕を施す。

27は黒色土器Ⅰ類の口縁部である。28は赤色土器Ⅱ類の坏で，口縁部を欠損している。明確な胴部立ち上がりの稜をもち，内外面とも丁寧に磨かれている。33は須恵器皿の底部で，口縁部を欠損している。29～32は須恵器蓋である。30はボタン状の摘みをもつⅣ類である。30～32の口縁端部は，断面三角形の肥厚部となる。35は

かまどの焚き口を構成する部分と考えられる。34は土師器底部を転用した紡錘車と考えられる。

36～39は墨書土器で，41はヘラ書き土器である。36は土師器坏の胴部外面に墨書されているが，欠損により文字は不明である。37は土師器坏の胴部外面に正位で墨書されていて，一文字目が「大」，二文字目は「得」に類似する。38は土師器坏の胴部外面に逆位で丁寧な楷書体で墨書されている。一文字目は，大部分の偏を欠損し，旁は「酉」と読める。二文字目は「井」と読める。旁に「酉」を持つ字は少なく，「酒」が想定され，あわせて「酒井」となり，人名の可能性がある。39は硬質に焼き締められた土師器皿の底部で，口縁部から底部を欠損している。底部外面の中央部に墨書があり，一部欠損があるが「厂」「豆」「寸」で構成されていて「厨」と読める。40は土師器坏の口縁部で，39の口縁部の可能性がある。41は土師器坏Ⅱ類の完形品で，底部内面の中央やや外側にヘラ書きされている。「乙」の字が，左右逆に書かれた鏡映文字になっている可能性がある。

土坑２号（第44図）

C-36区で検出された。平面形は，長軸1.5m，短軸0.6mの長楕円を呈する。検出面からの深さ約13cmで，上面はかなり削平されていると思われる。

出土遺物（第44図）

42は土師器椀で，底面は平坦で，体部が直線的に開く。内外面ともに横ナデ調整を施し，高台を欠損している。

土坑３号（第44図）

B-33区で検出された。平面形は，長軸約1.2m，短軸0.9mの楕円形を呈する。検出面からの深さ約32cmで上面は削平されていると思われる。遺構内部東壁面に接し，ほぼ完形の土師甕が出土している。火葬墓の可能性も考えられるが，科学分析の結果では，確証は得られなかった（第４章参照）。

出土遺物（第44図）

43は土師器甕Ⅰ類で，外面にハケ目調整，内面にケズリ調整を施されている。完形であるが，歪が大きい。

土坑４号（第44図）

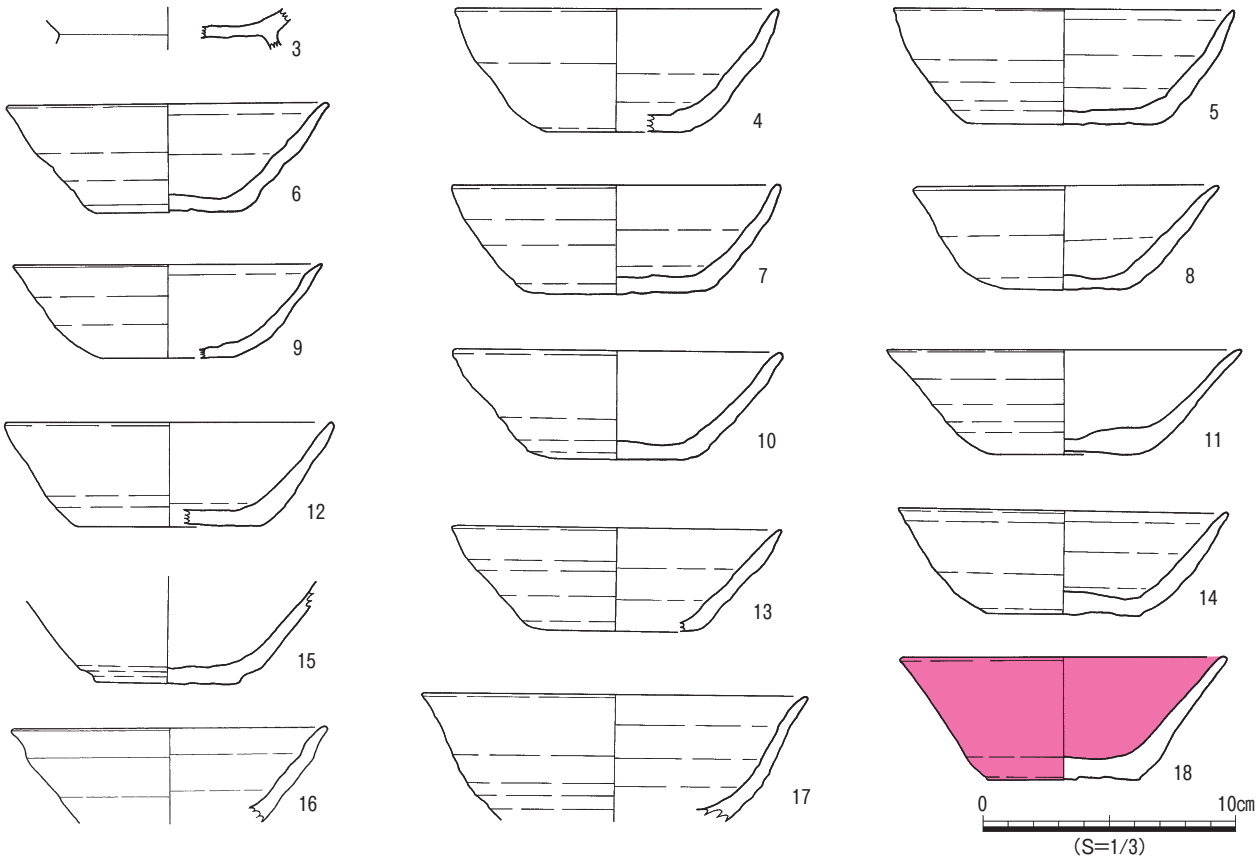
E-27区で検出された。平面形は，長軸約0.9m，短軸約0.8mの台形を呈する。検出面からの深さ約40cmである。掘り込み壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構内から墨書された土師器の椀が出土した。

出土遺物（第44図）

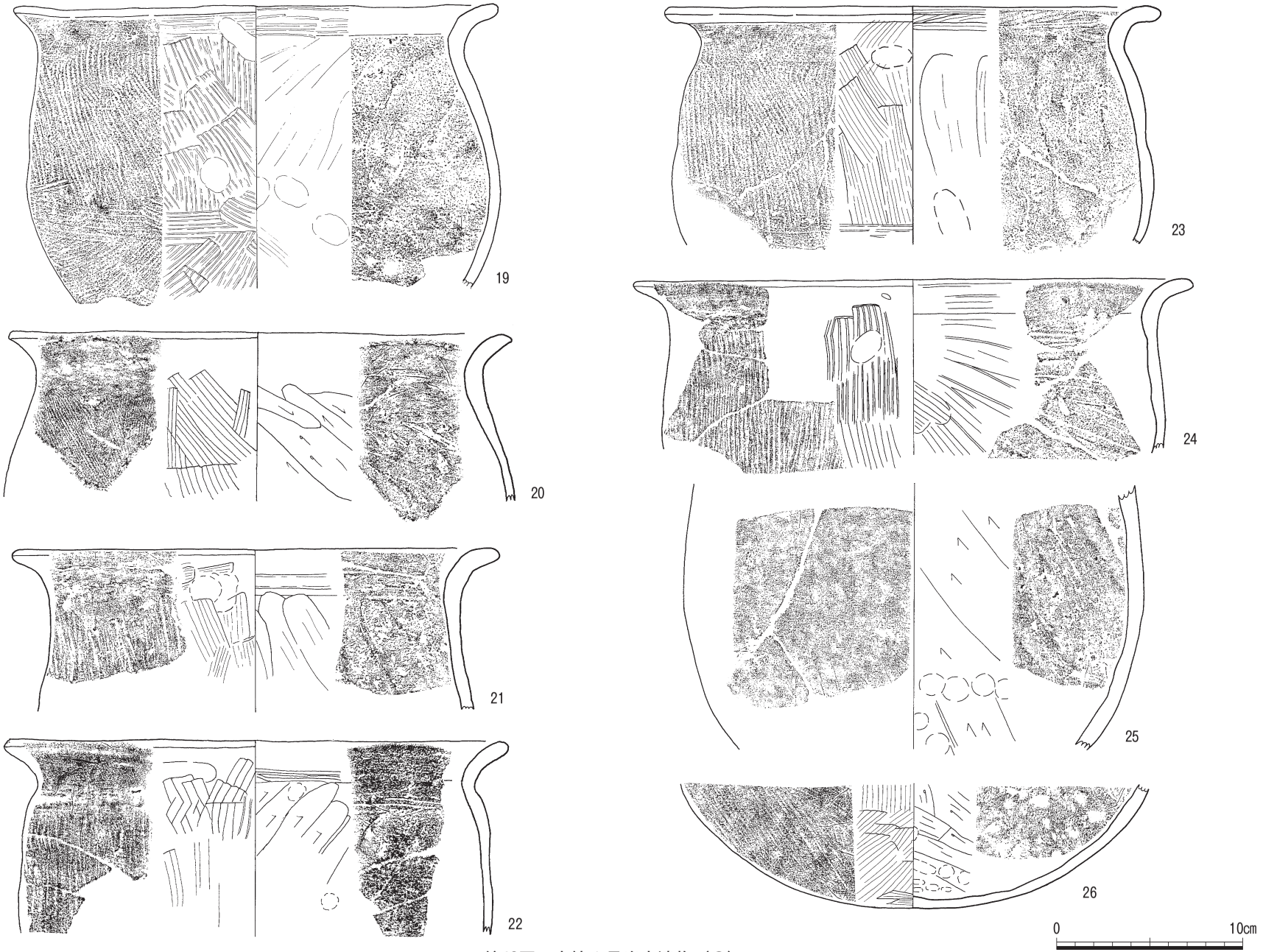
44は胴部外面に朱書の施された赤色土器Ⅰ類の完形品である。化学分析により，顔料はベンガラであるという結果がでている。正位で，後述する「宅」の字の変形したものと思われる。本遺跡では朱書された土器はこの１点のみである。底部に内面から穿った痕跡がみられる。

土坑５号（第44図）

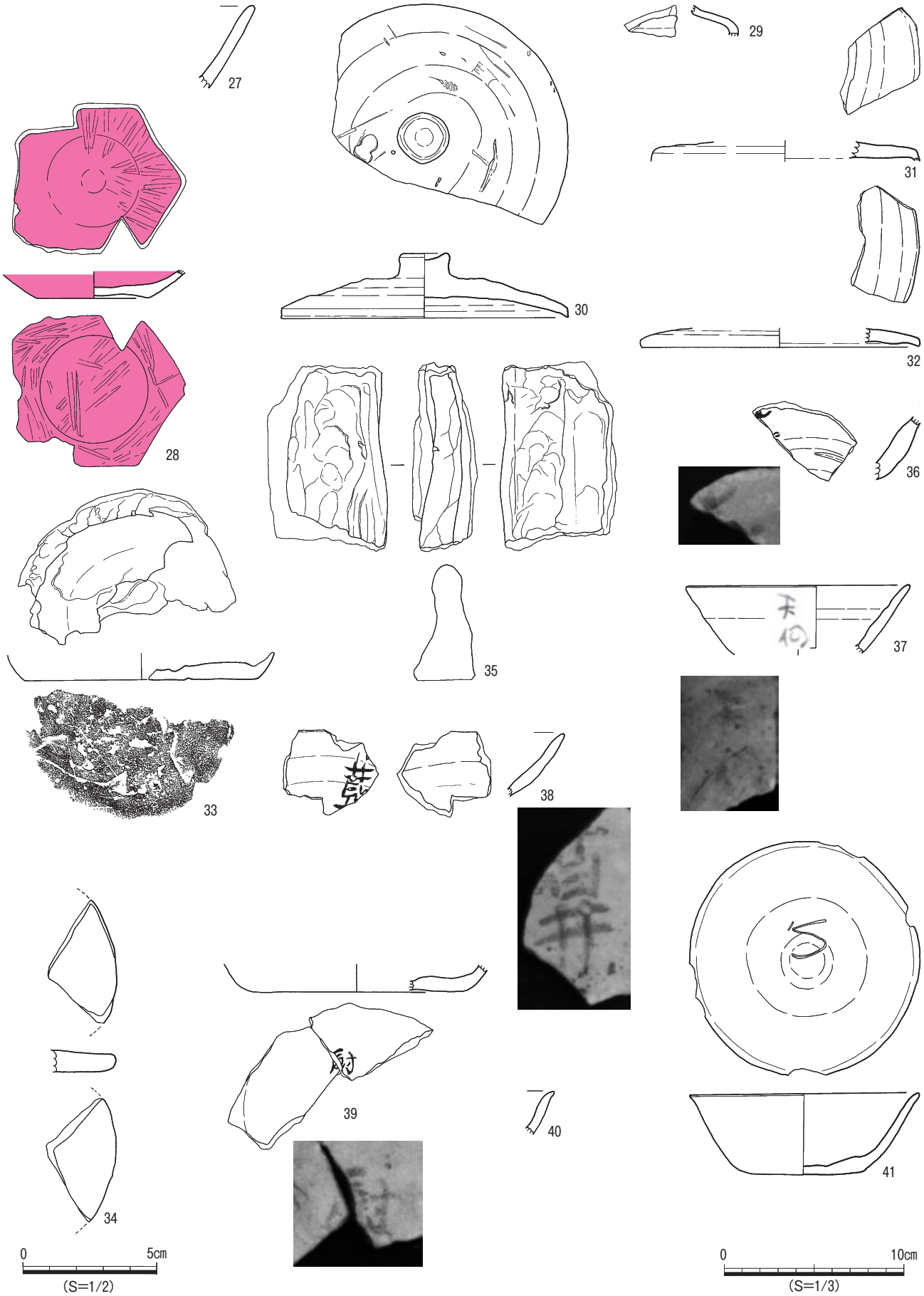
A'-22区で検出された。平面形は長軸0.8m，短軸0.6



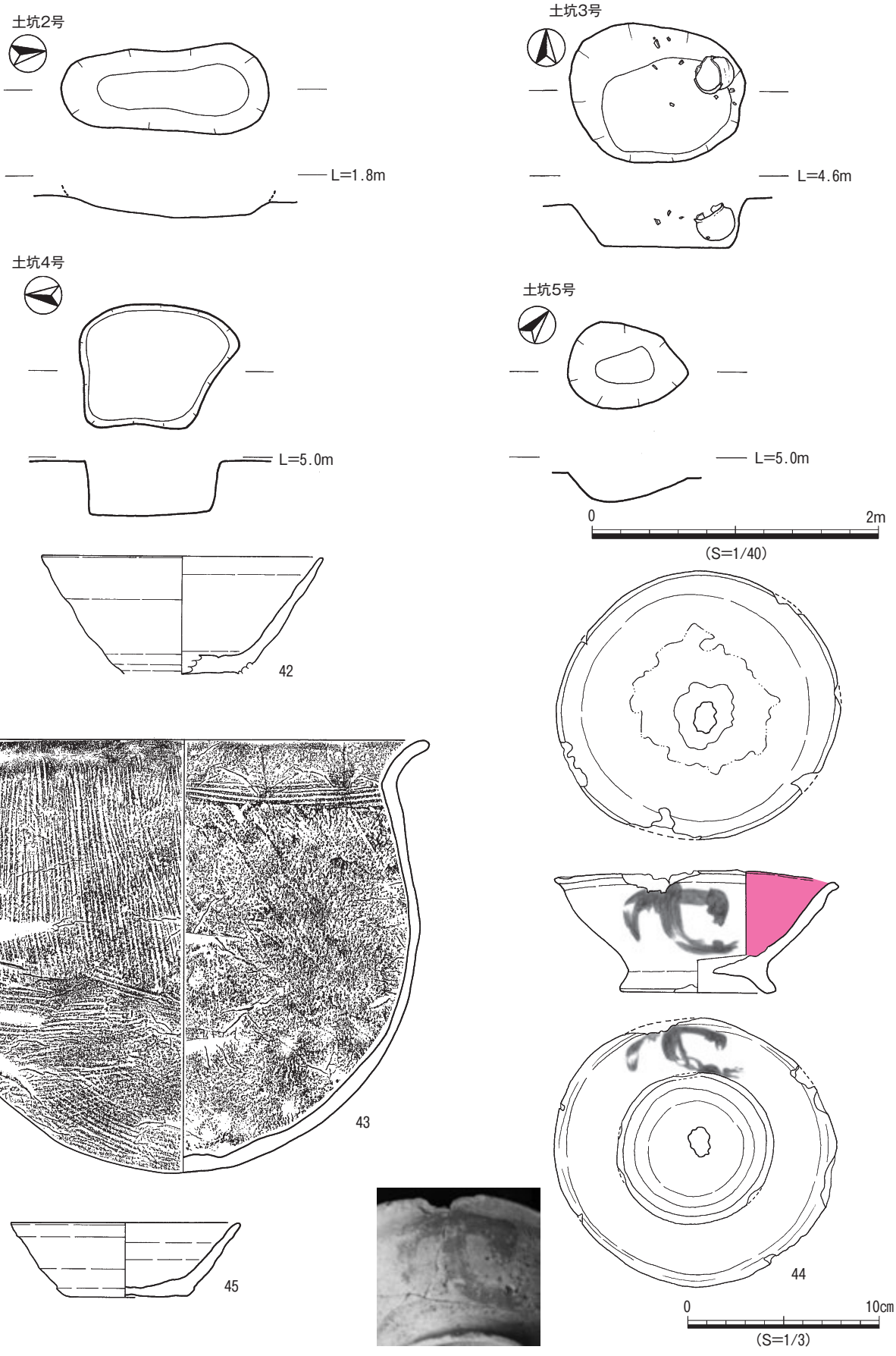
第41図　土坑１号出土遺物（１）



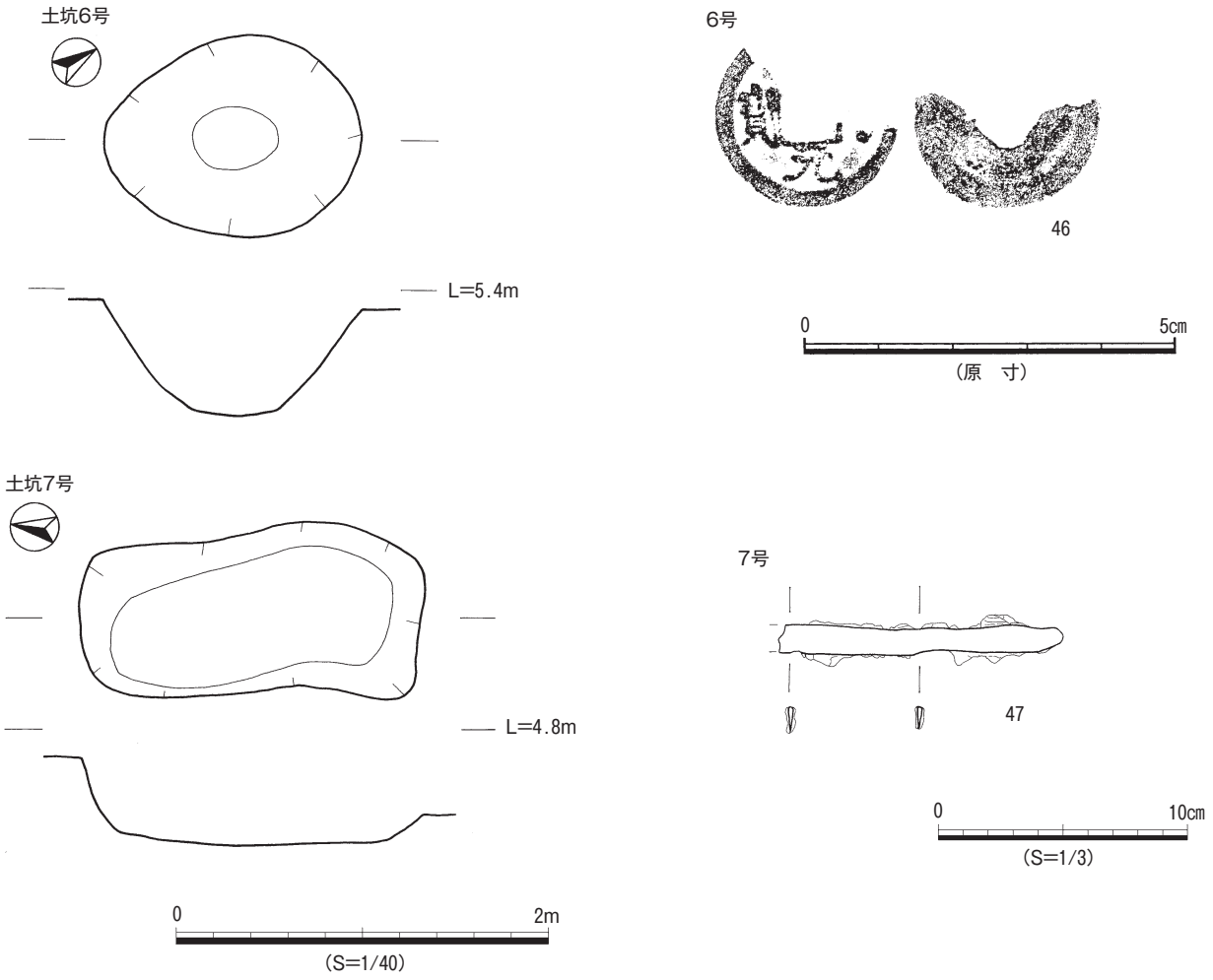
第42図　土坑１号出土遺物（２）



第43図　土坑１号出土遺物（３）



第44図　土坑２～５号・出土遺物



第45図　土坑６，７号・出土遺物

mの楕円形を呈する。検出面からの深さ約20cmで，底面は皿状を呈する。

出土遺物（第44図）

45は硬質の土師器坏である。内外面ともに横ナデ調整，底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施されている。

土坑６号（第45図）

B-21区で検出された。平面形は長軸約1.4m，短軸約1.1mの楕円形を呈する。検出面からの深さ約60cmで，断面形がすり鉢状を呈する。埋土内から銭貨が出土した。

出土遺物（第45図）

銭貨が１点出土した。46は元･宝の文字が判別できる。

土坑７号（第45図）

C-5区で検出された。平面形は長軸約1.8m，短軸約0.9mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さ約５cmで，底面はほぼ平坦である。埋土内から鉄器が出土した。

出土遺物（第45図）

47は細身の刃部をもつ刀子片である。

土坑墓（第46図～第47図）

土坑墓は３基，B～D-20～23区，溝8に囲まれた範囲に検出された。

土坑墓１号（第46図）

D-23区で検出された。平面形は径約1.2mのほぼ円形を呈し，検出面からの深さ約75cmである。主軸は西に６°振れる。底面で歯，銭貨，釘が出土しており，木棺墓と判断した。

出土遺物（第46図）

出土した銭貨３枚を図化した。48は咸平元宝である。49は紹聖元宝である。50は景徳元宝である。

土坑墓２号（第47図）

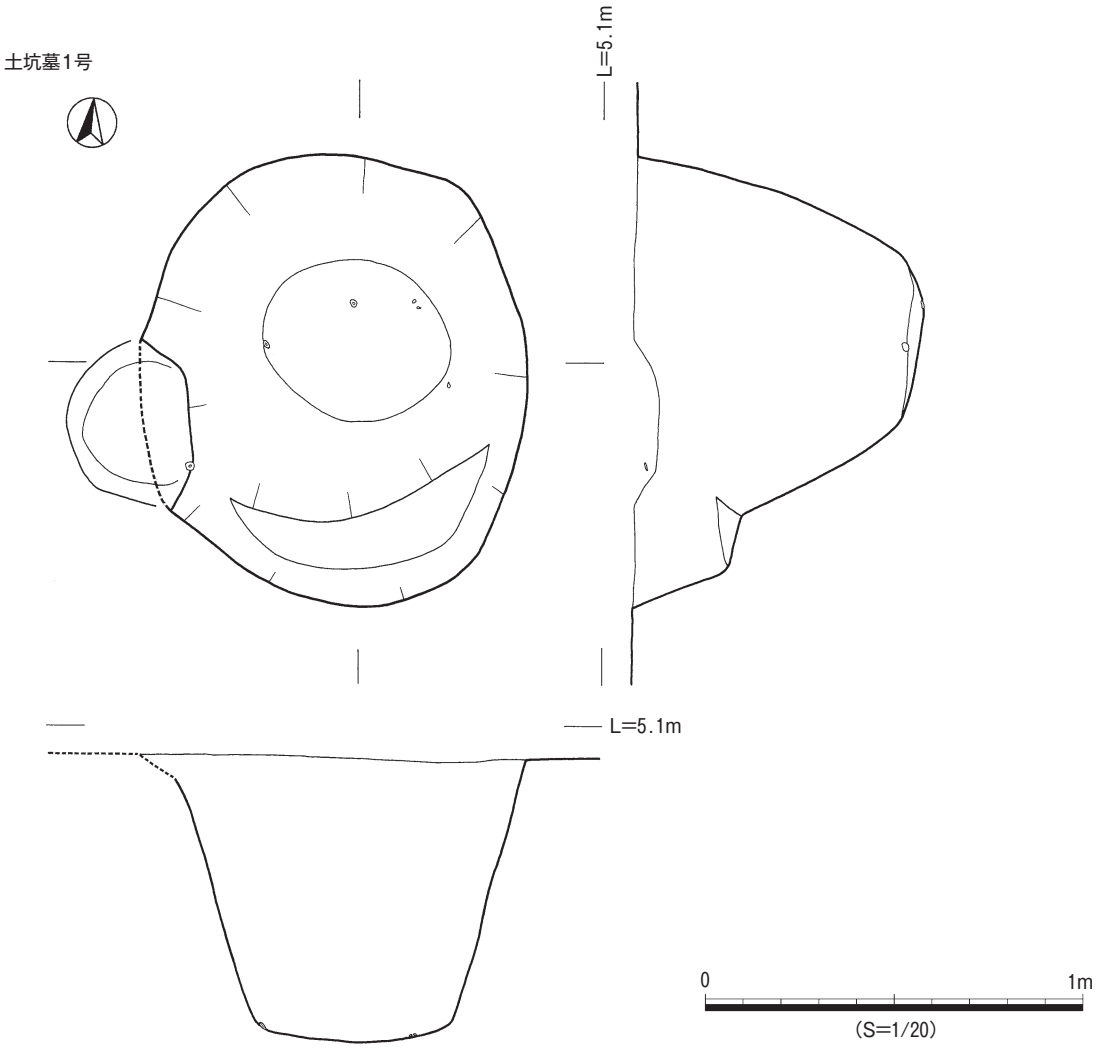
C-20･21区で検出された。平面形は，長軸約1.7m，短軸1.2mの楕円形を呈する。主軸は西に78°振れる。検出面からの深さ約65cmで底面中央付近が凹む，断面U字形を呈する。埋土内から釘，土師器片が出土しており，木棺墓と判断した。

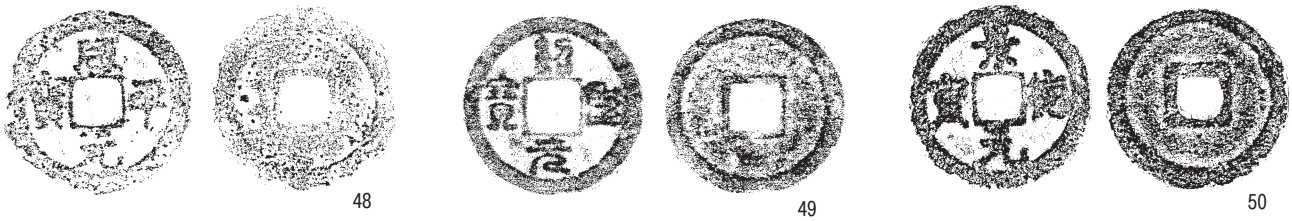
土坑墓３号（第47図）

B-20区で検出された，平面形は，長軸１m，短軸0.9mのほぼ方形を呈する。検出面からの深さ約50cmで，底面はほぼ平坦である。遺構内から銭貨が出土した。

出土遺物（第47図）

51は，錆のため宝の字のみ読み取れる，種別については不明である。





第46図　土坑墓１号・出土遺物

ピット（第48図）

ピットは，調査区内全域に多数検出された。その内遺構内に根石，礫などが確認できたものについて図化し掲載した。また，掲載可能な遺物が出土したものについては，遺構配置図中に遺構番号を付して表示し，遺物のみ掲載した。

ピット１号（第７図・第48図）

A-37区で検出された。平面形は長軸約70cm，短軸約35cmの楕円形を呈する。２つのピットが切り合っており，北西側のピットに根石，根固め石と思われるものが入っている。検出面からの深さ約35cmである。周辺に建物を構成するピット配列がないか確認したが，復元には至らなかった。

ピット２号（第９図・第48図）

C-32区で検出された。52は口径13cmの小型の土師器皿である。口縁部が外反する器形で，器面調整は丁寧な回転ナデである。

ピット３号（第21図・第48図）

E-32区で検出された。53は土師器坏の胴部外面に，正位で墨書されている。「大」の字に類似する。

ピット４号（第10図・第48図）

A-28区で検出された。54は赤色土器Ⅱ類の坏もしく

は椀の胴部外面に，倒位で「宅」と記された墨書土器である。

ピット５号（第10図・第48図）

C-29区で検出された。55は皇宋通宝である。

ピット６号（第22図・第48図）

D-27区で検出された。56は蛇文岩を石材とする暗緑色の石製丸鞆で，正面および側面は研磨剤で光沢を持つほど磨かれ，裏面の外枠付近まで認められる。３ヶ所の径0.2㎜の貫通する孔が認められる。重量は９gである。

ピット７号（第22図・第48図）

D-27区で検出された。銭貨が１点出土した。57は皇宋通宝である。

ピット８号（第11図・第48図）

A-24区で検出された。58は須恵器壺の口縁部から頸部である。頸部がくの字に屈曲し，二重口縁となるものである。

ピット９号（第11図・第48図）

D-25区で検出された。59は須恵器壺で，頸部がくの字に屈曲し，二重口縁となるものである。

ピット10号（第23図・第48図）

D-24区で検出された。銭貨が１点出土した。60は元宝通宝である。

ピット11号（第23図・第48図）

E-25区で検出された。銭貨が１点出土した。61は元祐通宝である。

ピット12号（第23図・第48図）

D-24区で検出された。62はバケツ形に開く器形の須恵器鉢の完形品である。63は硬質の赤色土器Ⅰ類の椀の底部外面に，ヘラ書きされている。「乙」の字が，左右逆に書かれた鏡映文字になっている可能性がある。

ピット13号（第23図・第48図）

D-24区で検出された。銭貨が１点出土した。64は嘉元重宝である。

ピット14号（第23図・第48図）

D-24区で検出された。銭貨が１点出土した。65は熙寧元宝である。

ピット15号（第23図・第48図）

E-24区で検出された。銭貨が１点出土した。66は熙寧元宝である。

ピット16号（第23図・第48図）

E-24区で検出された。銭貨が１点出土した。67は元豊通宝である。

ピット17号（第11図・第49図）

D-23区で検出された。銭貨が１点出土した。68は天聖元宝である。

ピット18号（第11図・第49図）

C・D-23区で検出された。銭貨が１点出土した。69は祥符元宝である。

ピット19号（第12図・第49図）

C-21区で検出された。70は硬質の土師器坏で，内外面ともに横ナデ調整，底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施されている。

ピット20号（第12図・第49図）

D-21区で検出された。71は，ほぼ完形の土師器坏で，内外面ともに横ナデ調整，底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施されている。

ピット21号（第24図・第49図）

D-21区で検出された。72は，ほぼ完形の須恵器坏で，内外面ともに赤橙色を呈する。

ピット22号（第24図・第49図）

E-21区で検出された。銭貨が１点出土した。73は嘉祐元宝である。

ピット23号（第25図･第49図）

E-20区で検出された。74は，土師器坏もしくは椀で底部内面に，ヘラ書きされている。「作」の字に類似する。

ピット24号（第25図・第49図）

D・E-20区で検出された。銭貨が１点出土した。75は太平通宝である。

ピット25号（第25図･第49図）

E-19区で検出された。銭貨が１点出土した。76は景祐元宝である。

ピット26号（第13図・第49図）

A'-20区で検出された。77は，土師器坏もしくは椀で胴部外面に，三角状の記号が記された墨書土器である。

ピット27号（第13図・第49図）

A-19区で検出された。78は，硬質の赤色土器Ⅱ類の坏もしくは椀で胴部外面に，文字が施されている。欠損のため文字の判別はできない。

ピット28号（第14図・第49図）

D-17区で検出された。銭貨が１点出土した。79は太平通宝である。

ピット29号（第14図・第49図）

E-16区で検出された。銭貨が１点出土した。80は景徳元宝である。

ピット30号（第14図・第49図）

D-16区で検出された。銭貨が１点出土した。81は太平通宝である。

ピット31号（第18図・第49図）

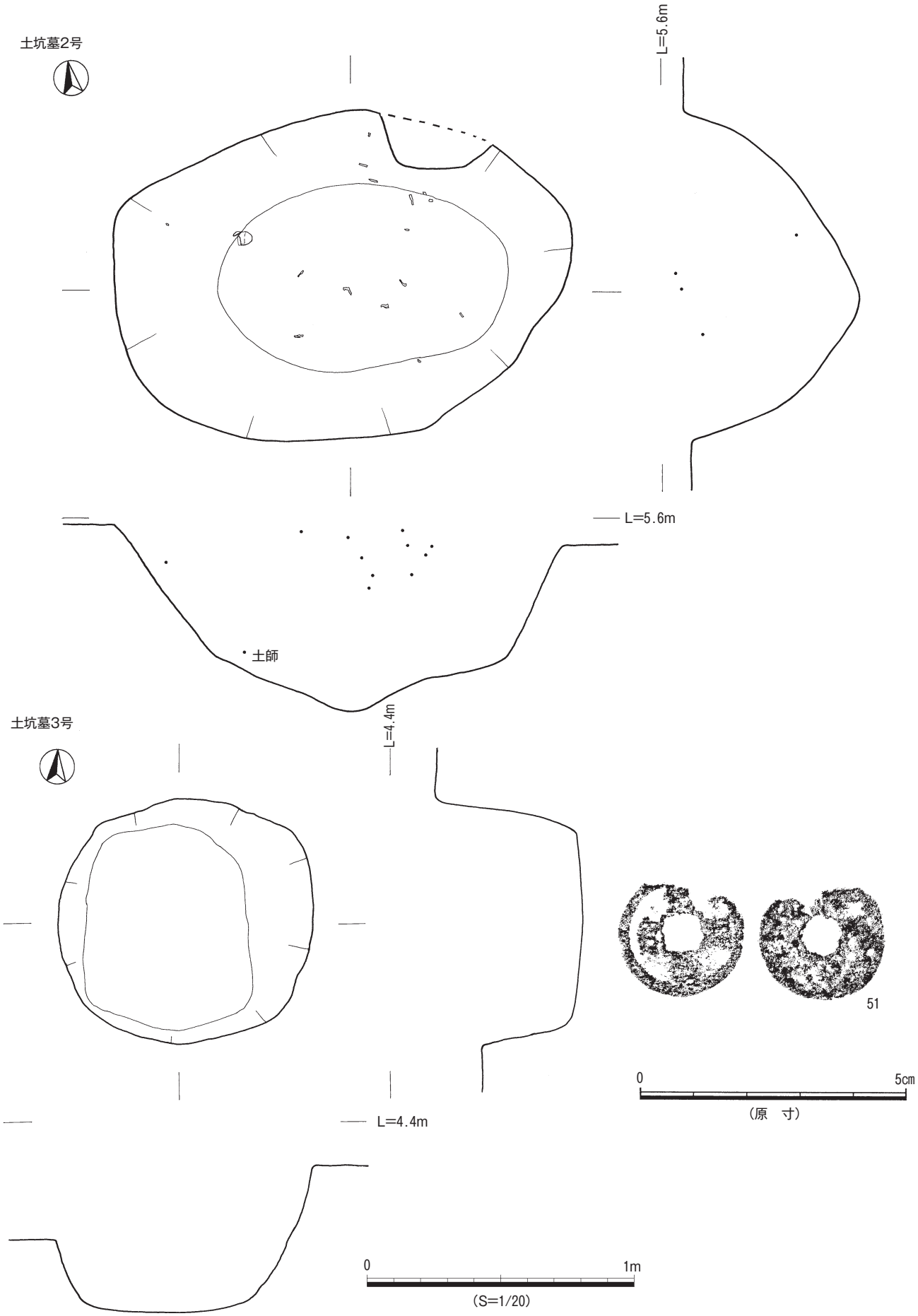
C-4区で検出された。銭貨が１点出土した。82はX線写真での確認の結果，開元通宝であると判明した。

ピット32号（第18図）

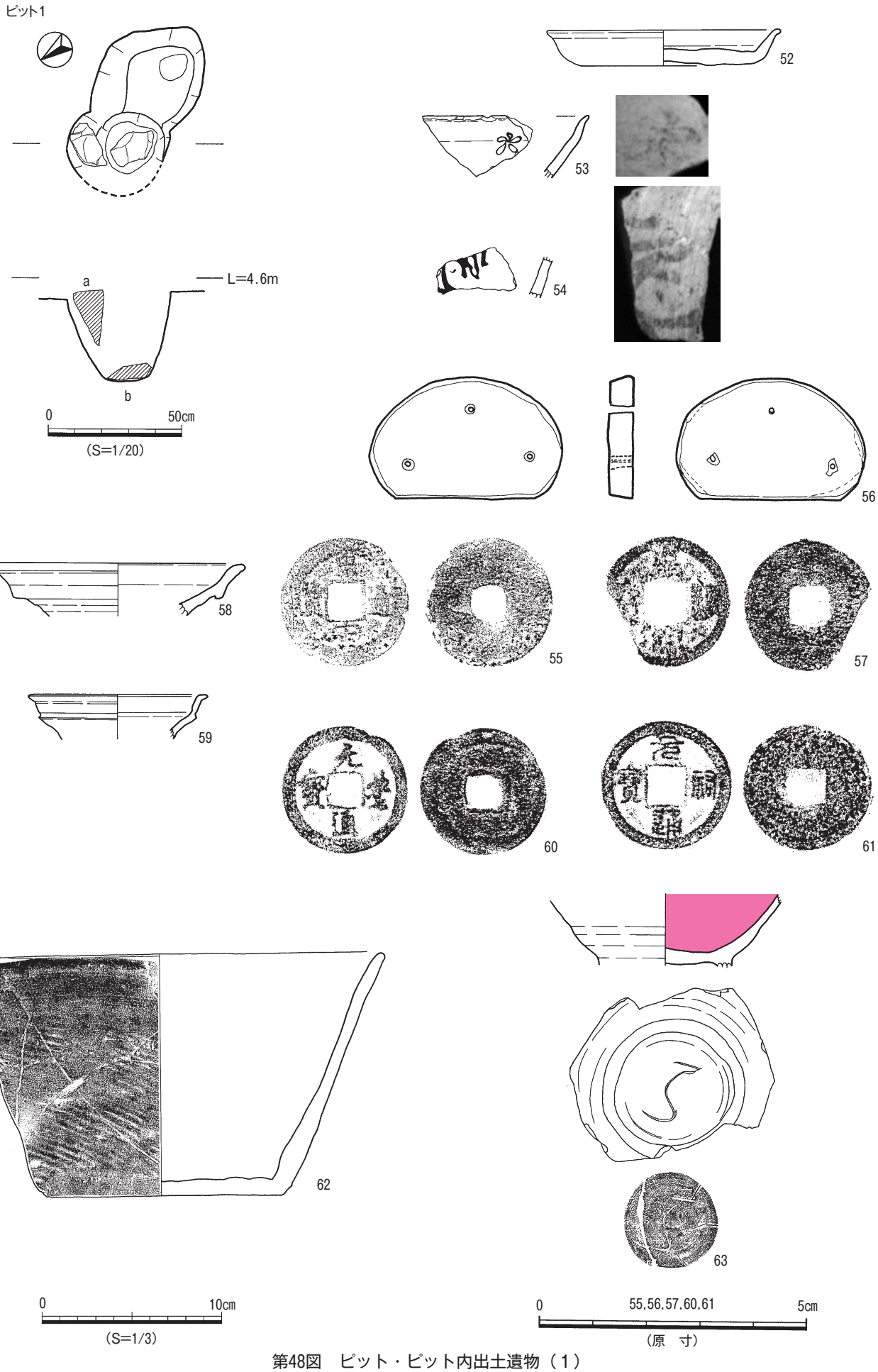
C-4区で検出された。銭貨が１点出土したが，小片のため種別の確認は出来なかった。

溝（第50図～第71図）

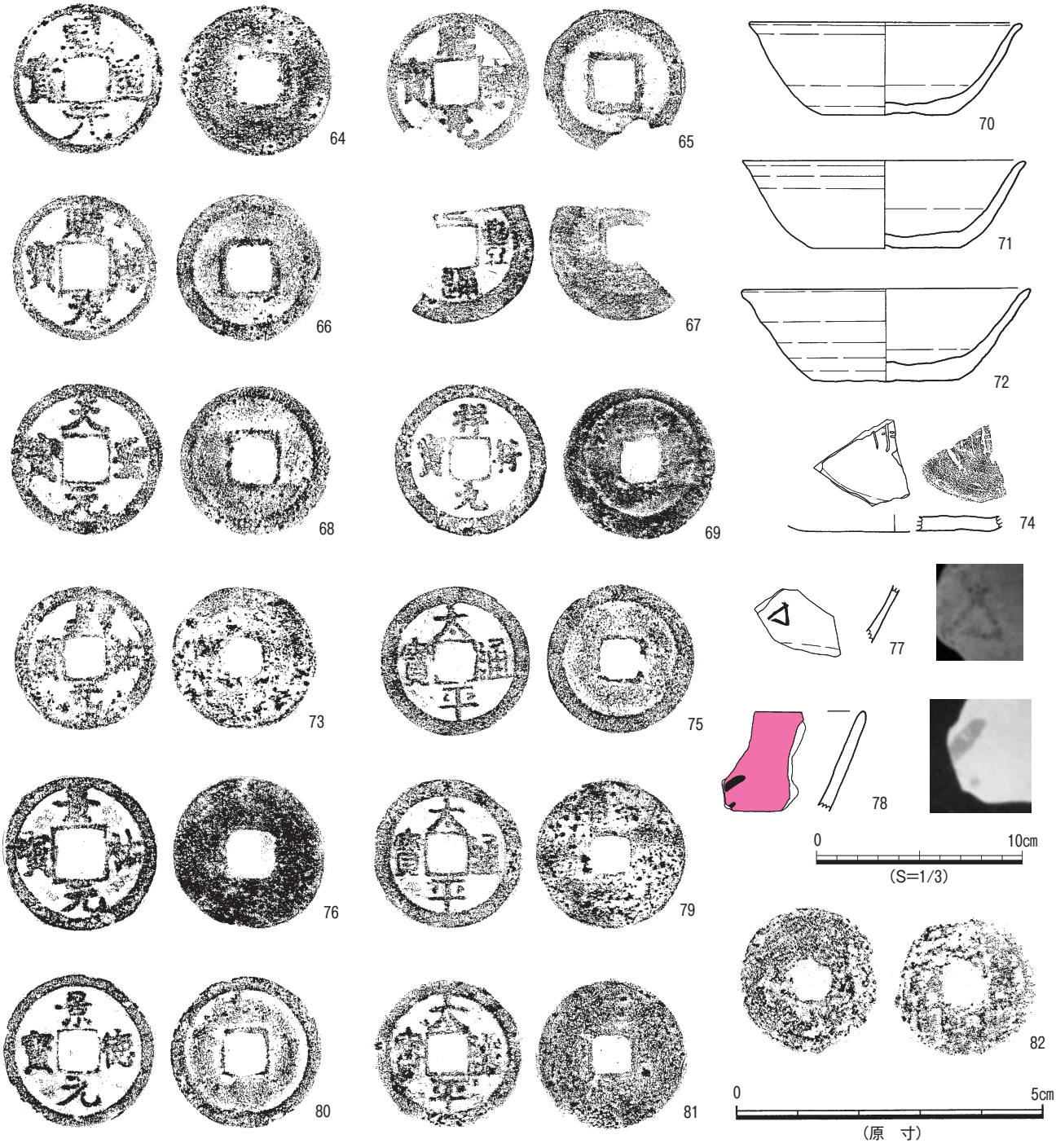
溝は，調査区内から17条検出された。基盤となる層が



第47図　土坑墓２，３号・３号出土遺物



第48図　ピット・ピット内出土遺物（1）



第49図　ピット内出土遺物（２）

砂質が強いため，掘り込みの形状を良好に留めているものは少ない。また，河川敷ということもあり遺構上面を流水作用で削平され，溝本来の深さを留めていないものがほとんどと思われる。B～D-31～34区，A～F-18～24区で検出された溝は，現河川方向にコの字状に開き，その内側と外側を区画しているようである。

溝１号（第７図・第50図）

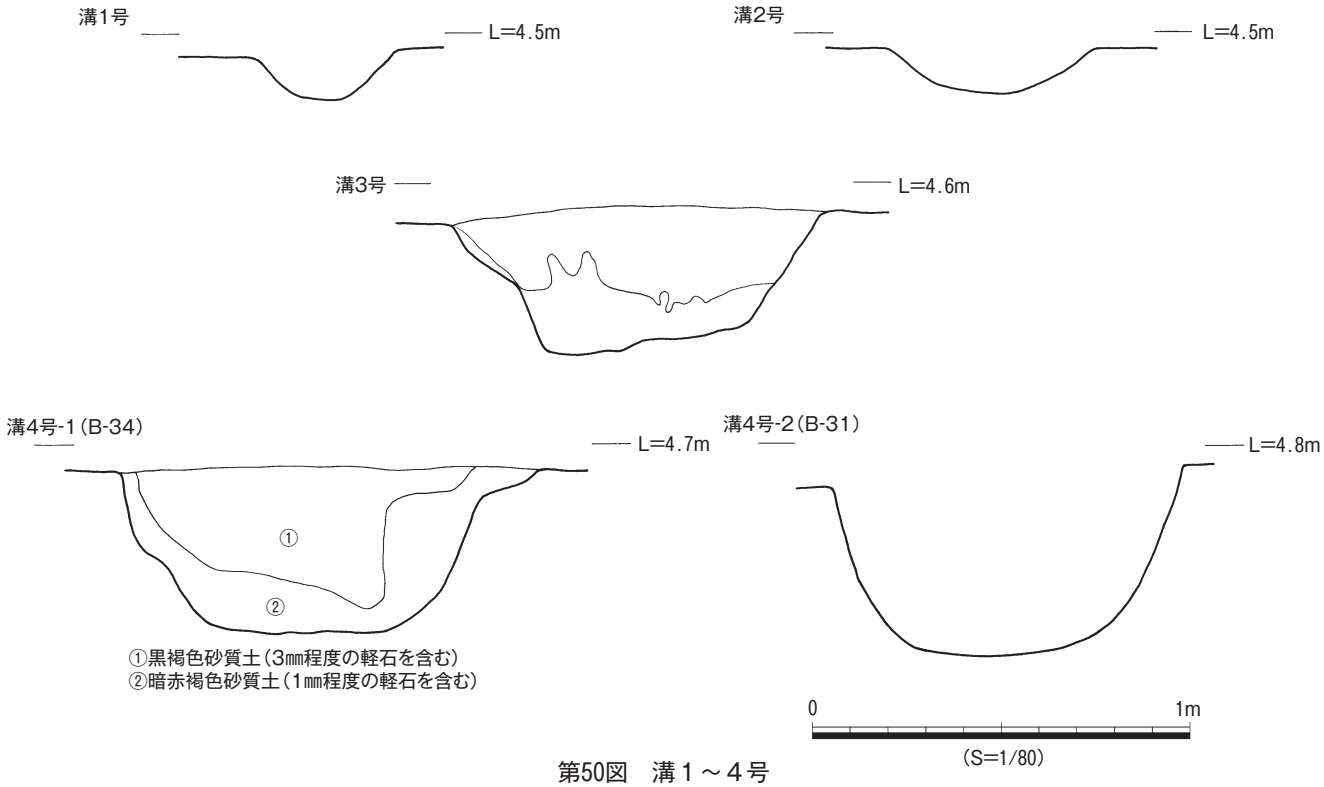
B-37区で検出された。南北方向に２ｍ延びる。幅約40㎝，検出面からの深さ約15㎝で，断面は緩いU字状を呈する。溝２と同一直線上にあり，本来はつながっていた可能性も考えられる。

溝２号（第７図・第50図）

C・D-37区で検出された。南北方向に７ｍ延びる。幅約1.1ｍ，検出面からの深さ約20㎝強で断面皿状を呈する。

溝３号（第８図・第50図）

C・D-34区で検出された。南北方向に約６ｍ延びる。幅約１ｍ，検出面からの深さ約35㎝で断面形が箱堀のしっかりした掘り込みをもつ。北側で検出された溝４号と同一直線上にあり，本来はつながっていた可能性も考えられる。



第50図　溝１～４号

溝４号（第８図・第50図）

B・C-30～34区で検出された。B-34区で北方向に約９m延び，東方向へ90°折れ曲がりさらに直線的に約42mのびる。幅約１m，検出面からの深さ約45㎝で断面は箱形を呈する。埋土内からは土師器坏，刻書のある土師器など数多くの遺物が出土した。

出土遺物（第51図）

土師器坏３点，土師器皿１点，須恵器椀１点，須恵器坏１点，須恵器蓋１点，須恵器大甕１点，土製品４点，ヘラ書き土器２点を掲載した。89は高台付皿である。口縁部から体部までを欠損している。内面は丁寧に磨かれていて，平坦である。95，96は土師器坏の底部内面にヘラ書きされている。

溝５号（第９図・第52図）

B～D-31区で検出された。南北方向に約23m延びる２条の溝が，B-31区で東西方向に約７m延びる溝につながり，ひとつながりの溝となる。幅約60㎝，検出面からの深さ約25㎝で緩いU字状の断面を呈する。B-31区で東西に延びる部分は，溝４と重なり，検出レベルから溝５が後出することが明らかである。

出土遺物（第52図）

97は土師器坏の底部外面に，98は土師器坏の底部内面に，ヘラ書きが施されている。欠損のため，文字は判別できない。

溝６号（第10図・第52図）

B・C-28・29区で検出された。東西方向に約12m延びる。幅約2.4m，検出面からの深さ約30㎝で断面は皿状を呈する。

出土遺物（第52図）

99は硬質の土師器坏もしくは椀で胴部内面に，正位でヘラ書きされている。「宅」の字の一部と考えられる。

溝７号（第11図･第52図）

D-25～27区で検出された。東西方向に約21m延びる溝で，D-25区で南北へ枝状に溝が伸びる。幅約60㎝，検出面からの深さ約20㎝で，断面は緩いU字状を呈する。

出土遺物（第52図）

100は赤色土器の椀で，内面にはミガキ調整が施されている。101は扁平で先端の尖る鉄片で，やり鉋もしくは刀子の先端と思われる。

溝８号（第11図・第52図）

A～F-18～24区で検出された。F-18区から北方向に約40m延び，そこで西にほぼ直角に折れ，約55m程のところで，さらに南側にほぼ直角に折れ48m延びる，コの字状の溝である。幅約1.5m，検出面からの深さ約50㎝で断面は箱堀を呈する。溝埋土内からは，多口瓶のほか多数の遺物が出土した。

出土遺物（第53図～第70図）

（東側53・54図，北側55～60図，西側61～70図）

遺構が長大でかつ遺物量が多いため，溝のつながりから３ヶ所に分けて掲載した。18区を中心にした東側で12点，A区を中心とした北側で65点，24区を中心にした西側で91点掲載した。以下，３ヶ所に分けて記述する。

東側の出土遺物の内訳は，土師器坏４点，土師器高坏１点，土師器高台付皿２点，黒色土器１点，赤色土器３

点，須恵器１点である。

102～105は，土師器坏Ⅲ類である。胴部外面の立ち上がりの器形は，102に稜が見られ103～105には丸みがみられる。102,103,105は完形品である。108は口径17.8cm底径10.6cmを測る高坏の完形品で，内面にスス痕がみられる。106と107は高台付皿である。107は高台部を欠損している。109は黒色土器Ⅰ類の椀である。椀Ⅵ類で，口縁部を欠損している。110～112は，赤色土器Ⅰ類のほぼ完形品の椀である。110・111は椀Ⅰ類，112は椀Ⅱ類である。113は肩部に４つの口を持つ多口瓶である。D-18区で出土した。うち一つは欠損し，一部だけを残す。口径8.7cm，底径11.7cm，器高22.4cmを測る。最初に長胴壺を作り，後に肩部に４ヶ所孔を開け，ラッパ状の口縁部を接合している。孔は丸いものと四角いものがある。用途は不明であるが，古代インドにおける打楽器と相似形である。

北側の出土遺物の内訳は，土師器椀４点，土師器坏13点，土師器皿１点，土師器鉢５点，土師器甕５点，黒色土器２点，赤色土器７点，須恵器蓋４点，須恵器椀１点，須恵器坏４点，須恵器鉢１点，須恵器壺３点，須恵器甕３点，土製品１点，墨書土器７点，ヘラ書き土器４点である。

114～117は土師器椀で，内外面の器面調整は丁寧な回転ナデを施され，口径は15～16cmを測る。114はⅡ類，115はⅣ類の完形品である。114・115・117は，体部が直線的に開く器形である。115・116は口縁部が外反する。116・117は高台部を欠損している。118～130は，土師器坏ですべてⅢ類である。118～123，125～128，130は完形品である。内外面の器面調整は丁寧な回転ナデを施され，底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施されている。118・121・123・124・126は，口縁部が外反する。116・125は口縁部の形状が玉縁状である。118・120・122・126・127は，胴部外面の立ち上がりの器形に丸みがみられる。122・129・130は，体部が直線的に開く器形である。131は，口縁部が外反する器形の土師器皿で，ほぼ完形品である。

132～136は，土師器鉢である。132は口縁部を欠損し，やや厚みのある胴部が直線的に立ち上がる器形である。133～136は，胴部が丸みを持ち口縁部が内湾する器形の土師器鉢Ⅲ類である。内外面の器面調整は丁寧な回転ナデを施され，硬質である。133の底部は，平坦であるのに対して，135の底部は，鉄鉢状に丸く尖り気味の器形である。133の口径は19cmを測る。134・135の口径は17.4～20cmを測る。133の底部は欠損している。137～141は口径23～27cmを測る土師器甕で，底部を欠損している。外面にハケ目調整，内面にケズリ調整を施されている。137～138は胴部が張る器形で，141は胴部が直線的で張り出さない。140は口縁部を欠損している。

142・143は黒色土器Ⅰ類の椀で，胴部はやや丸みをもつ器形である。142は胴部内面にミガキ調整がみられる。143は高台部を欠損している。144～148は，赤色土器Ⅰ類の椀で，口径14～16cmを測る。149は高台付皿で，口径13.2cmを測る。150は口径12cm，底径15cm，器高19.3cmを測る赤色土器Ⅱ類の壺である。外面に工具痕，爪痕，内外面に指頭圧痕を多く施されている。

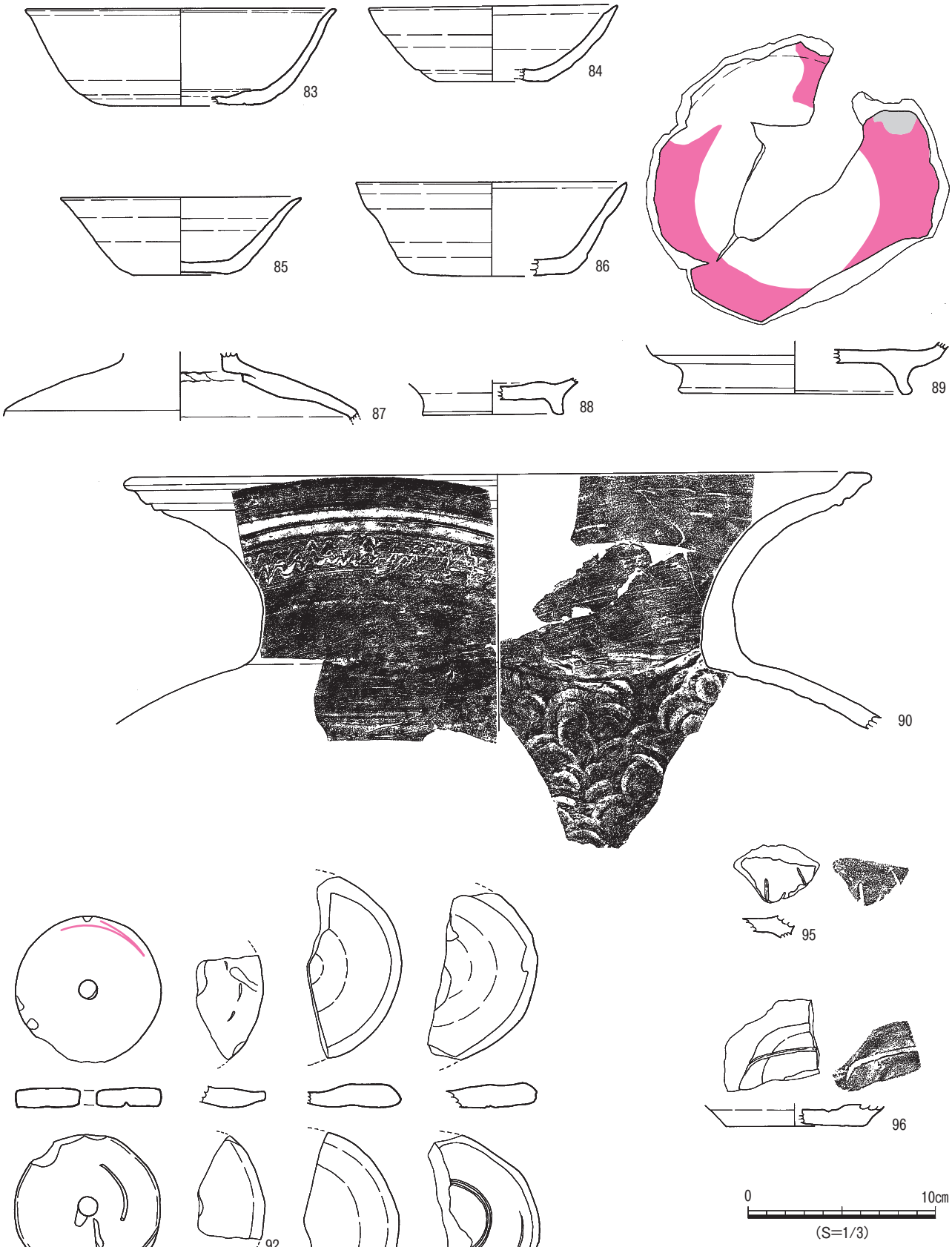
151～154は須恵器蓋である。151は，つまみの頂部が窪むⅣ類で，端部を欠損している。152～154は，底径14～19cmを測り，つまみ部を欠損している。155は須恵器椀のほぼ完形品である。156～159は須恵器坏Ⅲ類で，159は口径12.8cmを測りやや小型である。160は，バケツ型の器形の須恵器鉢Ⅰ類である。161～163は須恵器壺である。161は口縁部のみで，頸部がくの字に屈曲し，二重口縁となるものである。162は，口縁部を欠損する。163は底部外面に同心円叩きによる調整が施されている。164～166は須恵器甕である。164は，胴部外面に横位の平行タタキによる調整，内面に当具痕を施されている。165は口縁部を接合痕から上位を欠損し，胴部外面に縦位の平行タタキによる調整を施されている。

167は，土師器坏の胴部外面に墨書が施され，右向きの倒位で「宅」の字の変形に類似する。168は土師器坏の胴部外面に墨書が施され，右向きの倒位で「□万」の字に類似する。169は完形の内赤土器椀の胴部外面に，墨書が施されている。やや斜位に配置された二つの縦長楕円の墨書の間に，「小」の字に似た墨書が同じく斜位に施されている。人面土器の可能性がある。174は須恵器鉢の底部内面に，「宅」の字がヘラ書きされている。

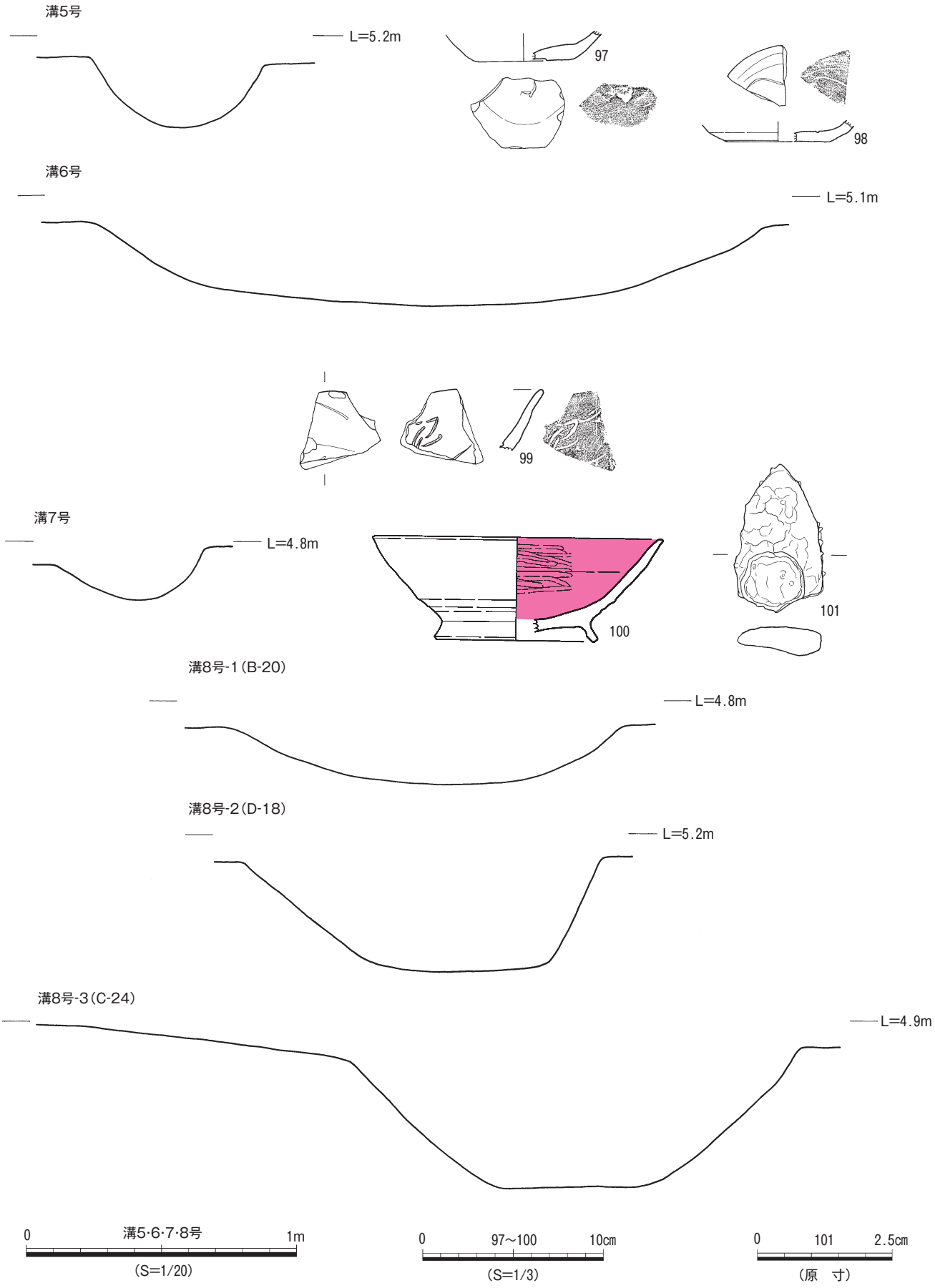
176は，土師器椀の底部内面に，「作」の字がヘラ書きされている。177は，須恵器小型壺の胴部外面に，記号がヘラ書きされている。内面には，黒い付着物がみられる。

西側の出土遺物の内訳は，土師器椀１点，土師器坏21点，土師器高台付皿２点，土師器鉢２点，土師器甕３点，黒色土器６点，赤色土器20点，須恵器蓋２点，須恵器椀３点，須恵器坏１点，須恵器甕12点，須恵器鉢１点，須恵器壺4点，墨書土器11点，ヘラ書き土器２点である。

179は，口径14cmを測る土師器椀Ⅱ類で直線的に開く器形である。180～195，197は，口径12～13.4cm，器高3.7～5.2cmを測る。189は，口径13cm，器高4.5cmとやや大型である。180・185・188・189・191・196・197は口縁部が外反する器形である。185・188～191・194は胴部の立ち上がりに丸みをもつ。198～200は，小型の土師器坏Ⅴ類の一群で，口径７～10cmを測る。200は胴部から底部の外面にスス痕がみられ，灯明皿の可能性がある。201・202は土師器高台付皿で，口径13cmを測る。203はバケツ状に開く器形の土師器鉢である。底部内面に指頭圧痕による調整が施されている。204は口縁部が内湾する器形の土師器鉢である。硬質に焼き締められている。



第51図　溝４号出土遺物



第52図　溝５～８号・溝５～７号出土遺物

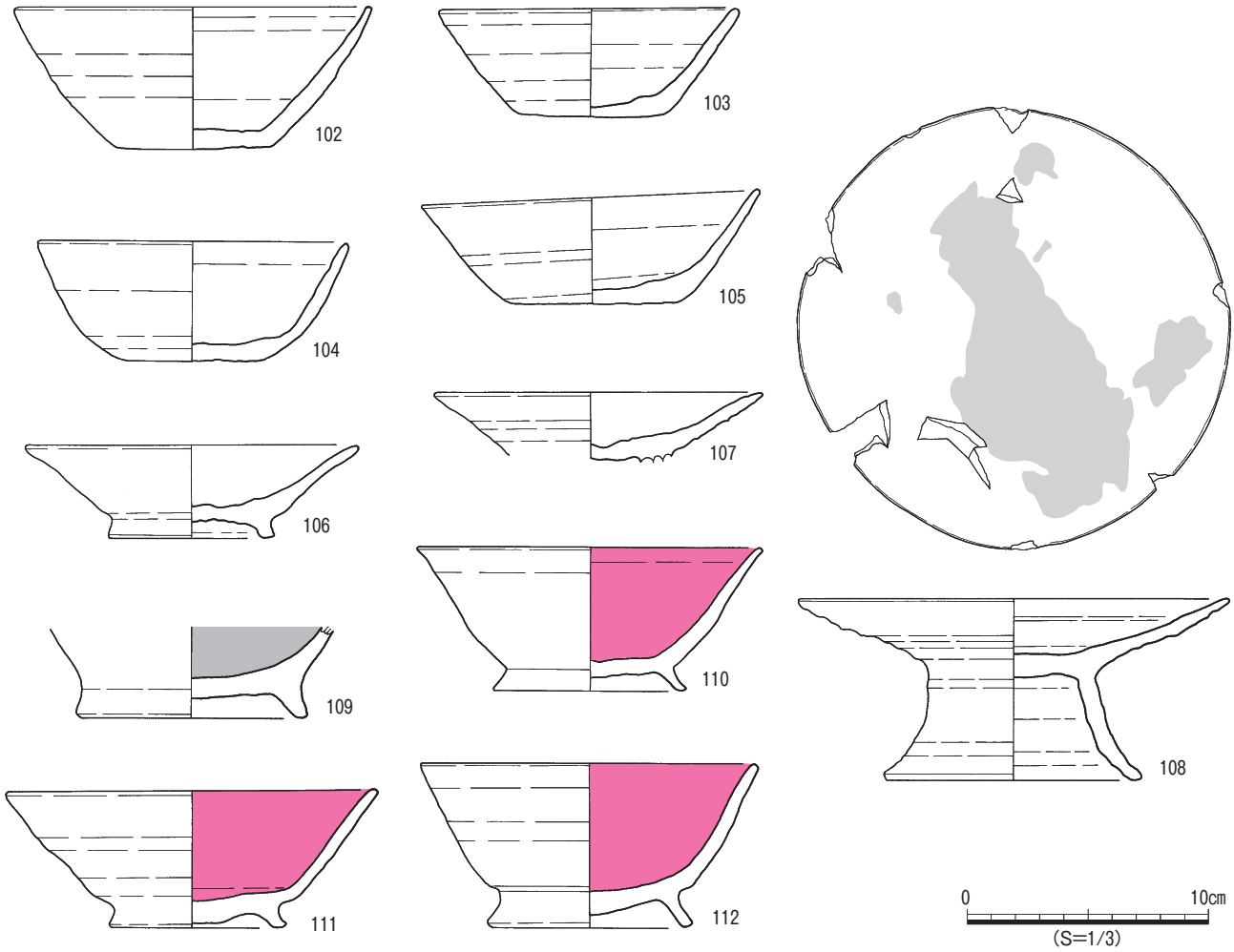
205は，胴部がやや張り出す器形の土師器甕である。206・207は胴部が張り出さない器形である。

208～212は，黒色土器Ⅰ類の椀である。209・212は，器高4.3cmとやや低く，胴部内面にミガキ調整を施されている。213は黒色土器Ⅱ類の小皿で内外面ともミガキ調整を施されている。214～223は赤色土器Ⅰ類の椀である。内外面の器面調整は丁寧な回転ナデを施され，218・219の内面にはミガキ調整が施されている。224～227は赤色土器Ⅰ類の高台坏皿である。226の胴部外面から底部外面にかけて，赤色顔料着色時に付いたと思われる，赤色の指頭痕が施されている。227は完形品であるが，焼成前に高台の一部が潰れた様子がうかがえる。229は，赤色土器Ⅰ類の鉢で口径13.2cm，器高6.9cmを測る。230～233は赤色土器Ⅱ類である。230は，口縁部から胴部を欠損した椀である。231は直線的に開く器形の坏である。

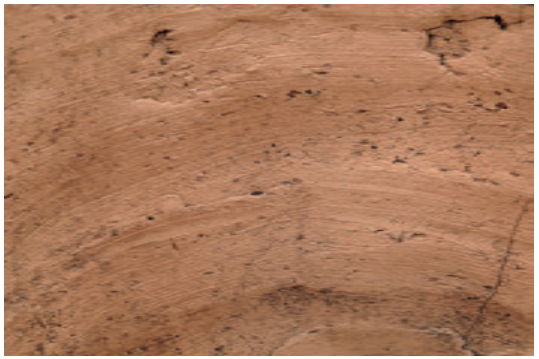
234は須恵器蓋で，高い山形の頂部をもつ擬宝珠状である。235は須恵器蓋のつまみで，扁平なボタン状である。236は完形の須恵器椀で，口径15.2cmを測る。

240・242・243は須恵器甕の口縁部から胴部で，頸部がくの字に屈曲し，二重口縁となるものである。241・243は，胴部外面に横位の平行タタキによる調整，内面に同心円タタキによる調整が施されている。246は須恵器大甕で口唇部と胴部下半部を欠損している。胴部最大径は71cmを測る。胴部外面に横位の平行タタキによる調整，内面に上から同心円タタキによる調整が施され，縦位の平行タタキによる調整が続いている。247は須恵器大甕の胴部から底部である。法量・調整から246と同一個体の可能性がある。244は，須恵器大甕の完形品で，口径41cm，器高73cm，胴部最大径61cmを測る。胴部外面に格子タタキによる調整，内面に上から同心円タタキによる調整が施され，縦位の平行タタキによる調整が続いている。底部には焼成前にできた凹みがあり，その補修をした痕跡もうかがえる。245は須恵器大甕で，口径32cm，器高59cm，胴部最大径57cmを測る。248は完形の須恵器甕で，口径13.1cm，器高23.4cm，胴部最大径24cmを測る。249は完形の須恵器甕で，外面は青灰色である。252は，バケツ型に開く器形の須恵器鉢である。253～256は須恵器長胴壺で，肩の張る器形である。253は胴部下半を欠損し，頸部がくの字に屈曲し，二重口縁となるものである。253・255は，耳状の把手が肩部直下につく。

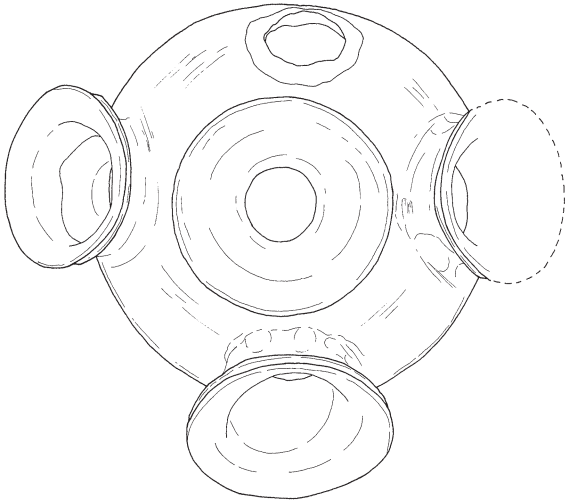
257は，赤色土器Ⅰ類の高台付皿の胴部外面に，３文字



第53図　溝８号(東)出土遺物（１）

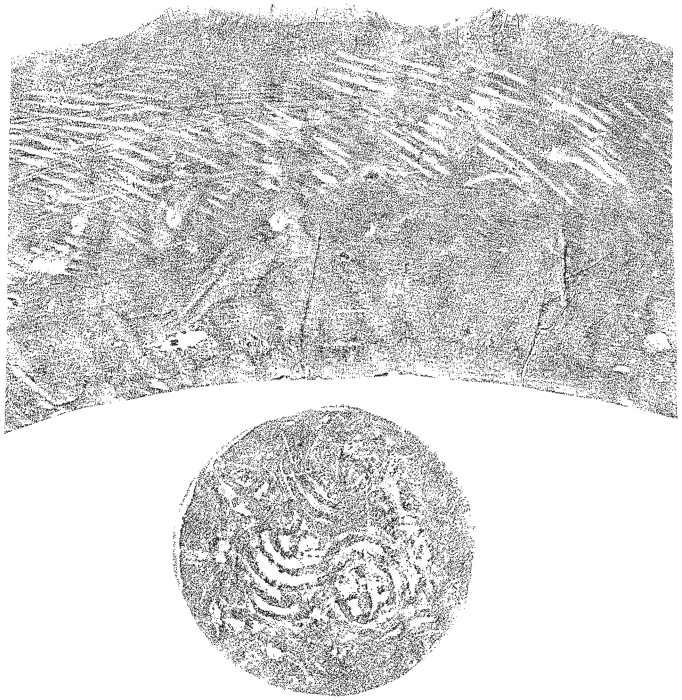


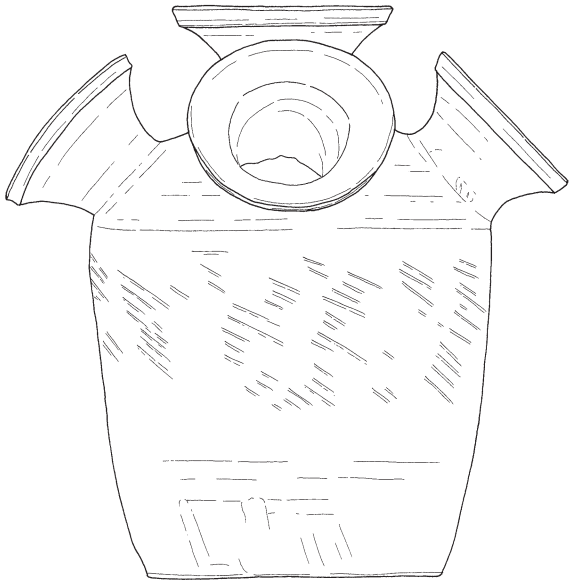
胴部内面



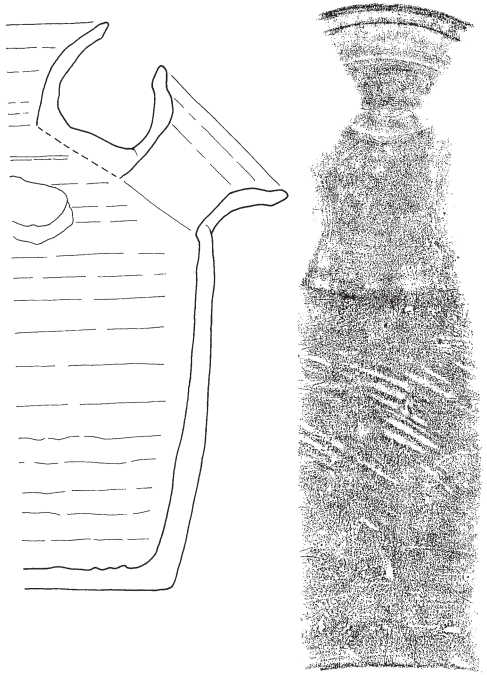


底部内面





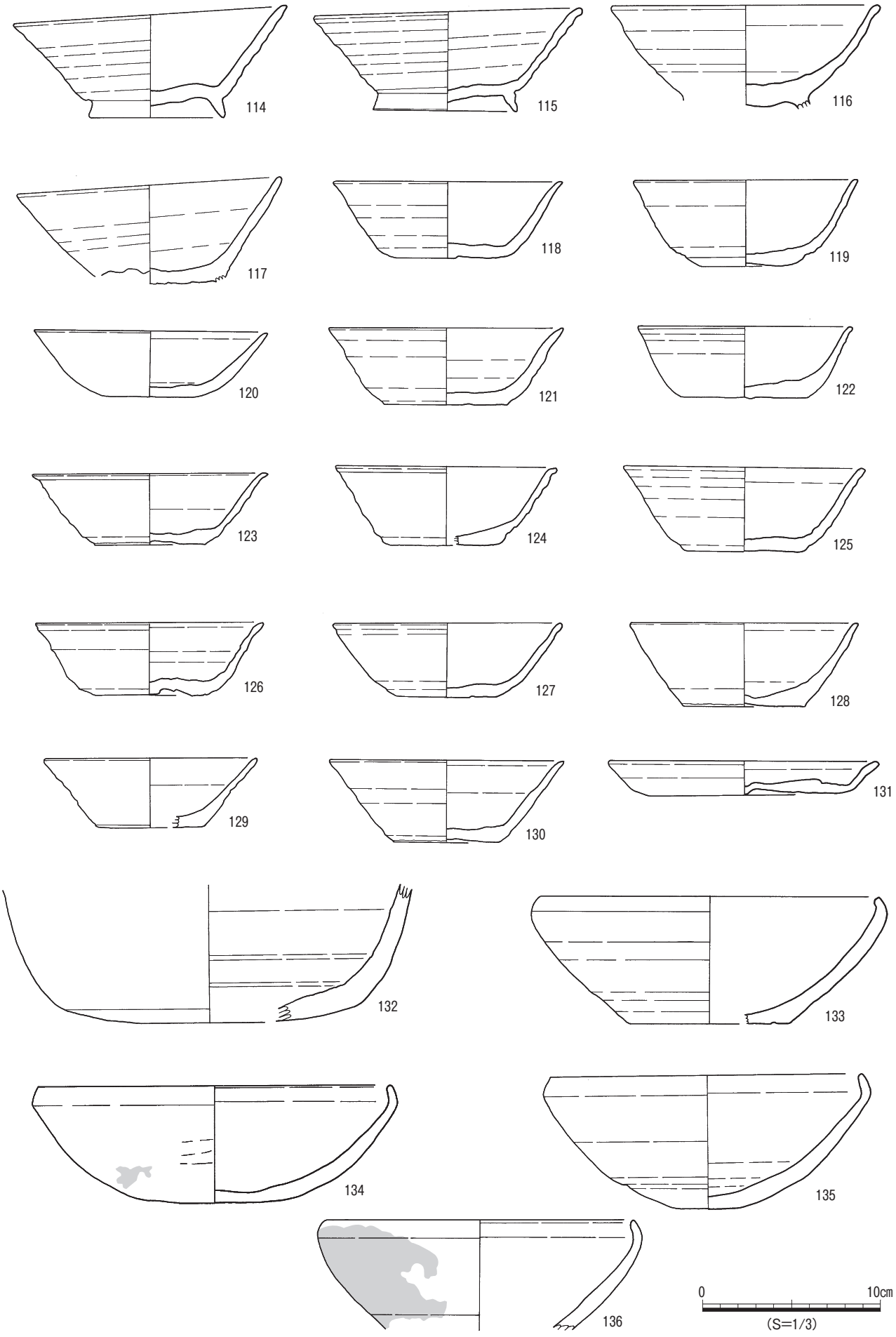
113



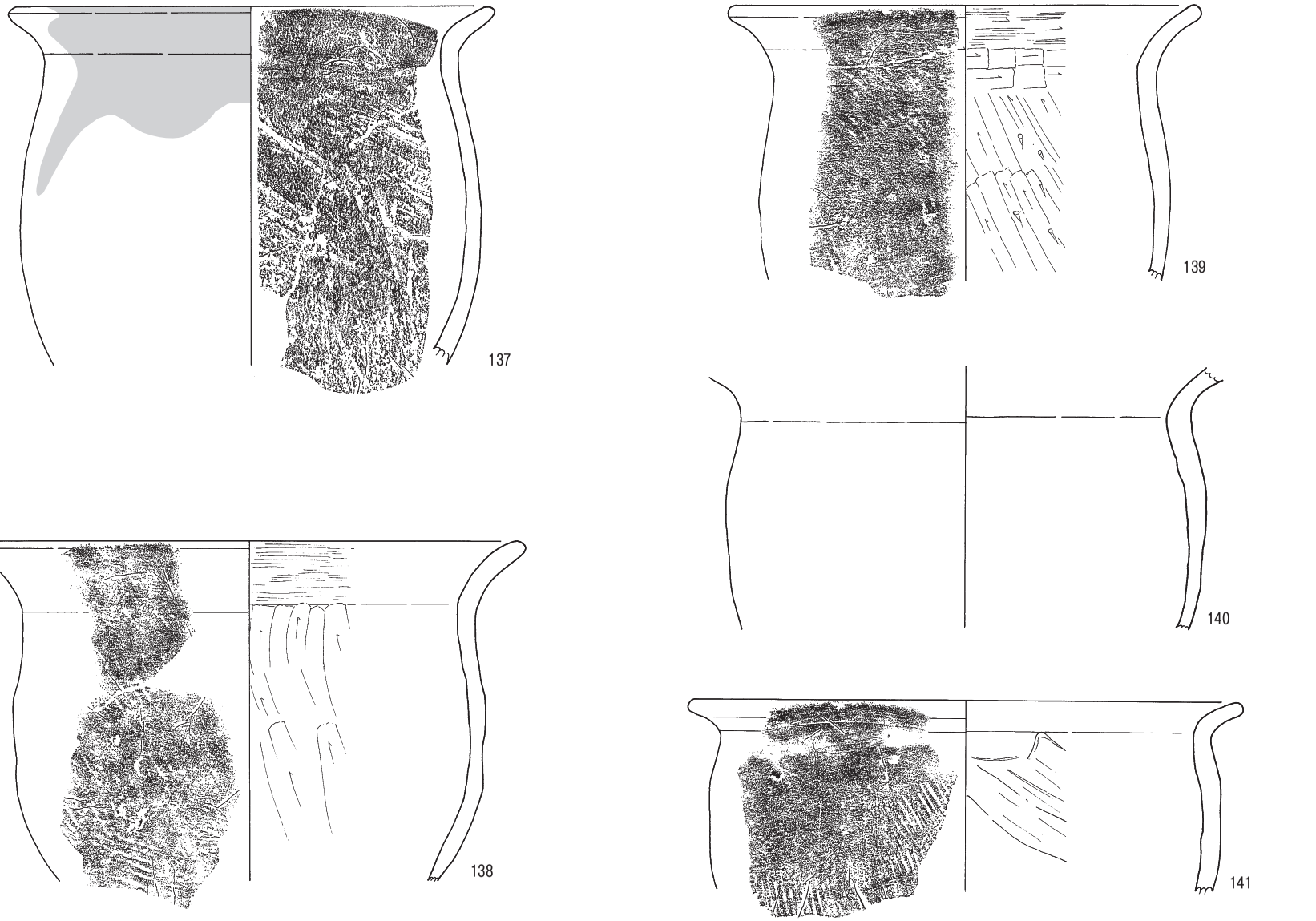
0 10cm

(S=1/3)

第54図　溝８号(東)出土遺物（２）



第55図　溝８号(北)出土遺物（１）



第56図　溝８号(北)出土遺物（２）

0　10cm
(S=1/3)

の右側倒位の墨書が施されている。一文字目は不明瞭であるが，二文字目を「宅」，３文字目を「又」と読める。258は赤色土器Ⅰ類の高台付皿の底部外面に墨書が施されている。不明瞭であるが「宅」の変形文字に類似する。

259は須恵器坏の胴部外面に，ヘラ書きされている。261は，赤色土器Ⅰ類の椀の胴部外面に，右側倒位の墨書が施されている。草書体で「宅」と記されている。262は，土師器坏の胴部外面に，墨書が施されている。墨書の途中から欠損していて，文字は不明である。263・264・266は，胴部外面に正位で「中万」265は「十万」と，墨書されている。264は，赤色土器Ⅰ類の高台付皿，265は黒色土器Ⅰ類の椀である。269は，赤色土器Ⅰ類の口縁部外面に墨書されている。欠損のため文字は不明である。

溝９号（第12図・第71図）

A'-21区で検出された。南北方向に約４ｍ延びる。幅約1.3m，検出面からの深さ約10cm強で断面は皿状を呈する。調査区外北側へ延びるものと思われる。

溝10号（第12図・第71図）

A'-21区で検出された。南北方向に約50cm延びる。幅約35cm，検出面からの深さ約６cmで，断面は皿状を呈する。調査区外北側へ延びるものと思われる。

溝11号（第12図・第71図）

A'・A-21区で検出された。南北方向に約10m延びる。幅約50cm，検出面からの深さ約５cmで断面は皿状を呈する。調査区外北側へ延びるものと思われる。

溝12号（第12図・第71図）

C-20・21区で検出された。東西方向に約７ｍ延びる。幅約55cm，検出面からの深さ約25cmで，断面は箱堀を呈する。

溝13号（第14図・第71図）

A-17区で検出された。南北方向に約４ｍ延びる。幅約65cm，検出面からの深さ約10cm弱で，断面は皿状を呈する。調査区外北側へ延びるものと思われる。

溝14号（第14図・第71図）

A・B-17区で検出された。ほぼ南北方向に約12m延びる。幅約60cm，検出面からの深さ約15cmで，断面は皿状を呈する。南側末端でL字に折れる。

溝15号（第14図・第71図）

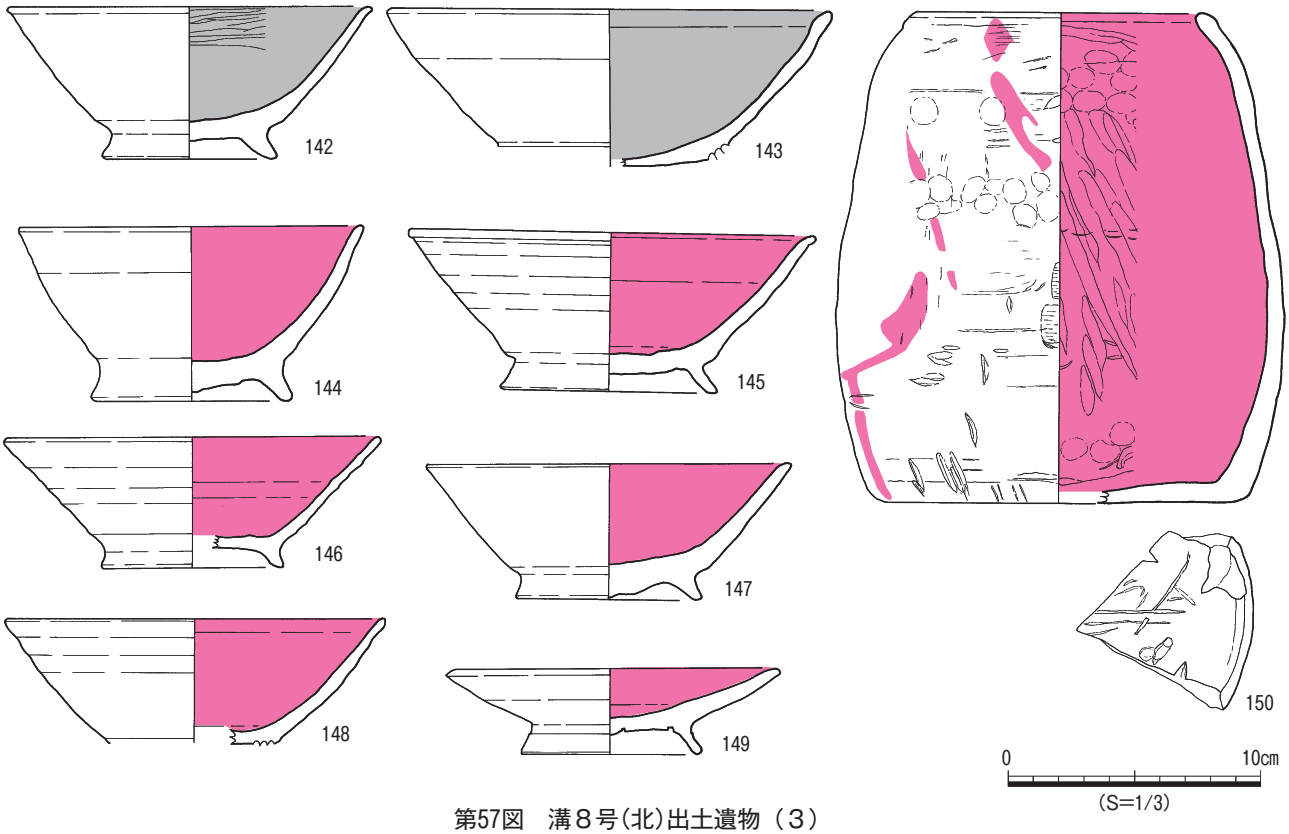
A～C-16･17区で検出された。南東方向に約23m延び，末端は溝16に沿うように南西に折れ曲がる。幅約2.5m，検出面からの深さ約30cmである。

溝16号（第14図・第71図）

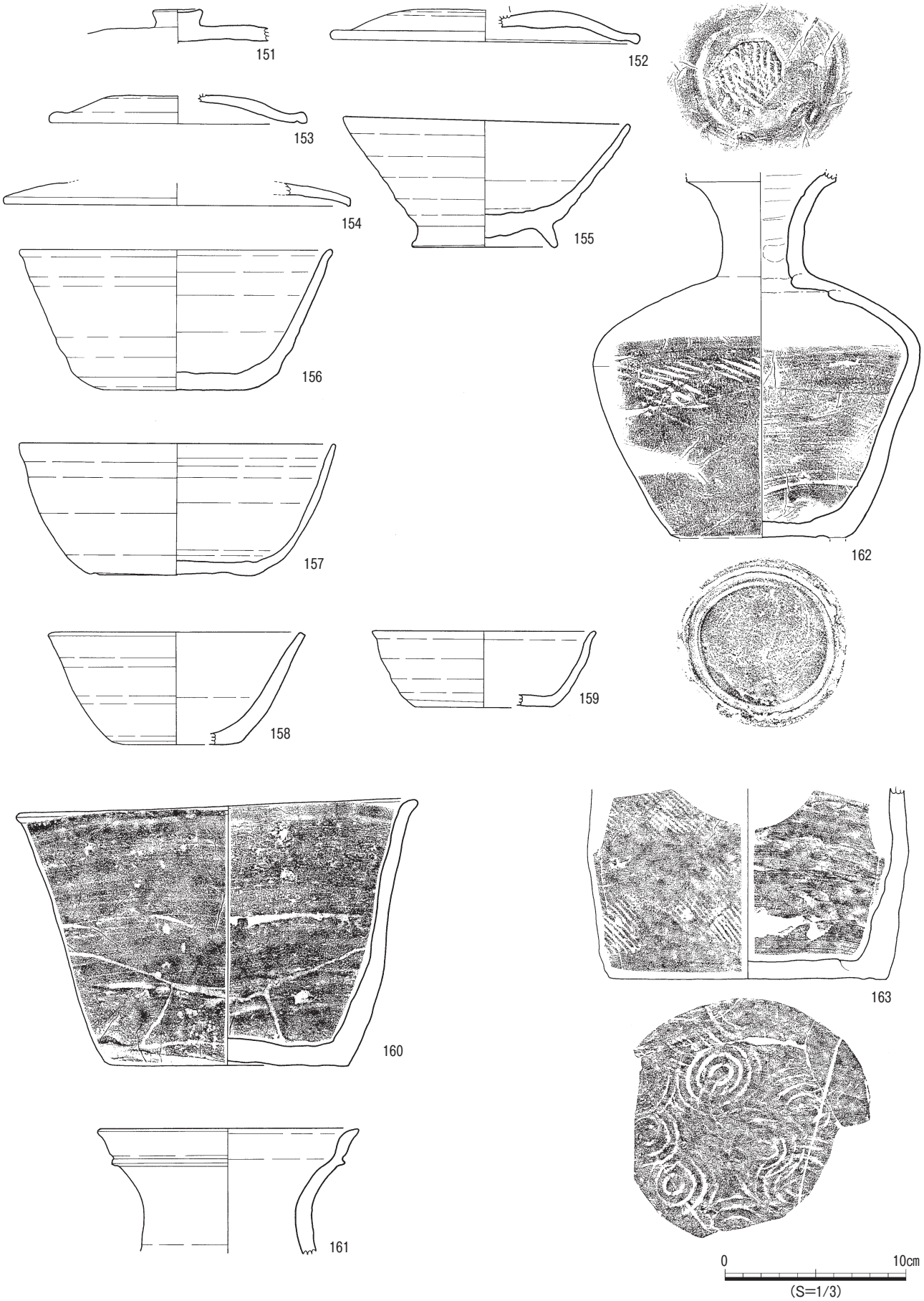
B・C-15・16区で検出された。南西方向に約22m延び，幅約80cm，検出面からの深さ約35cmで，断面は箱堀状のしっかりした溝である。末端部では浅くなり自然と消滅してしまう。

溝17号（第28図・第71図）

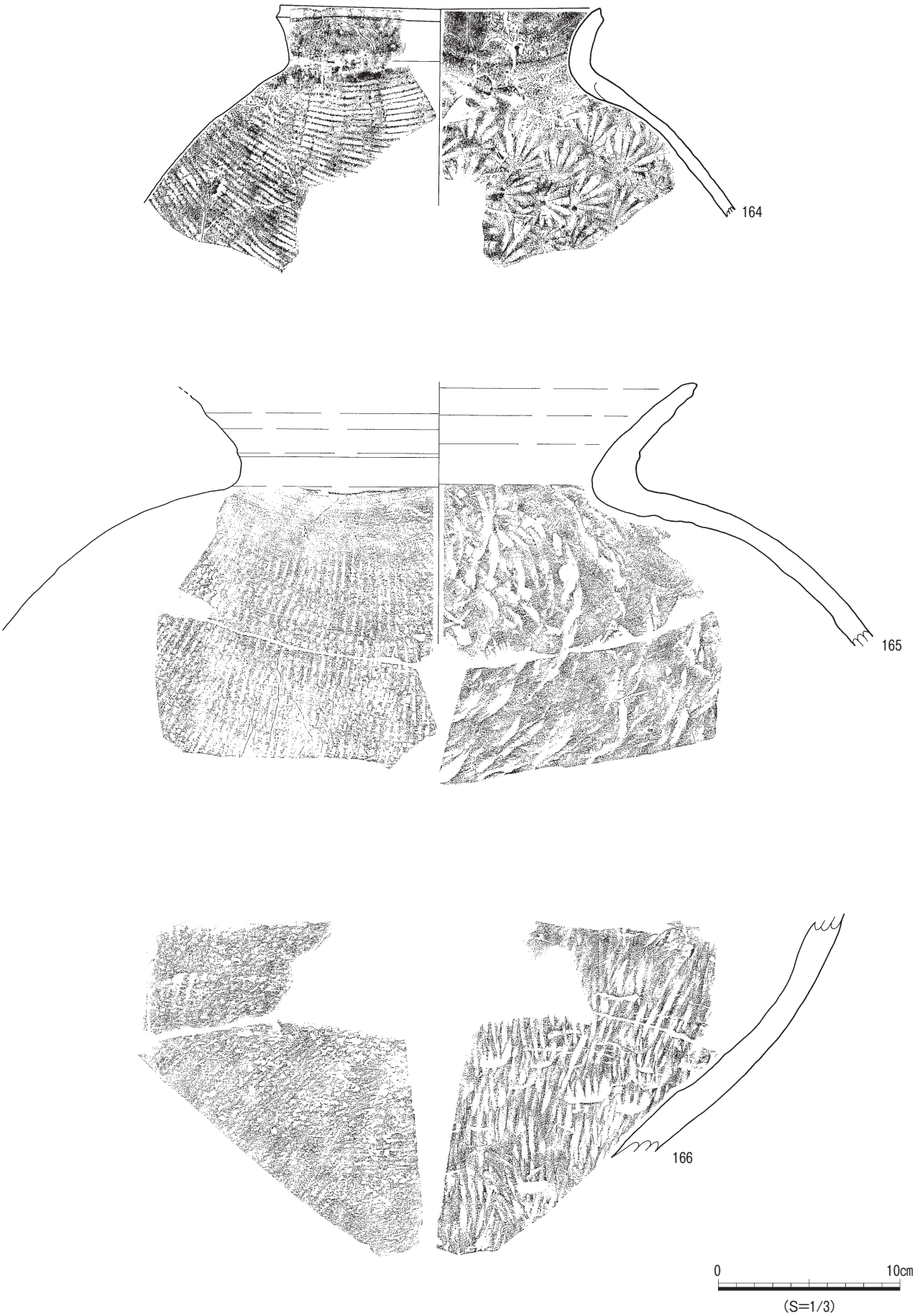
E-9・10区で検出された。東西方向に約18m延び，幅約７m，検出面からの深さ約1.4mで，断面は緩いU字状を呈する。



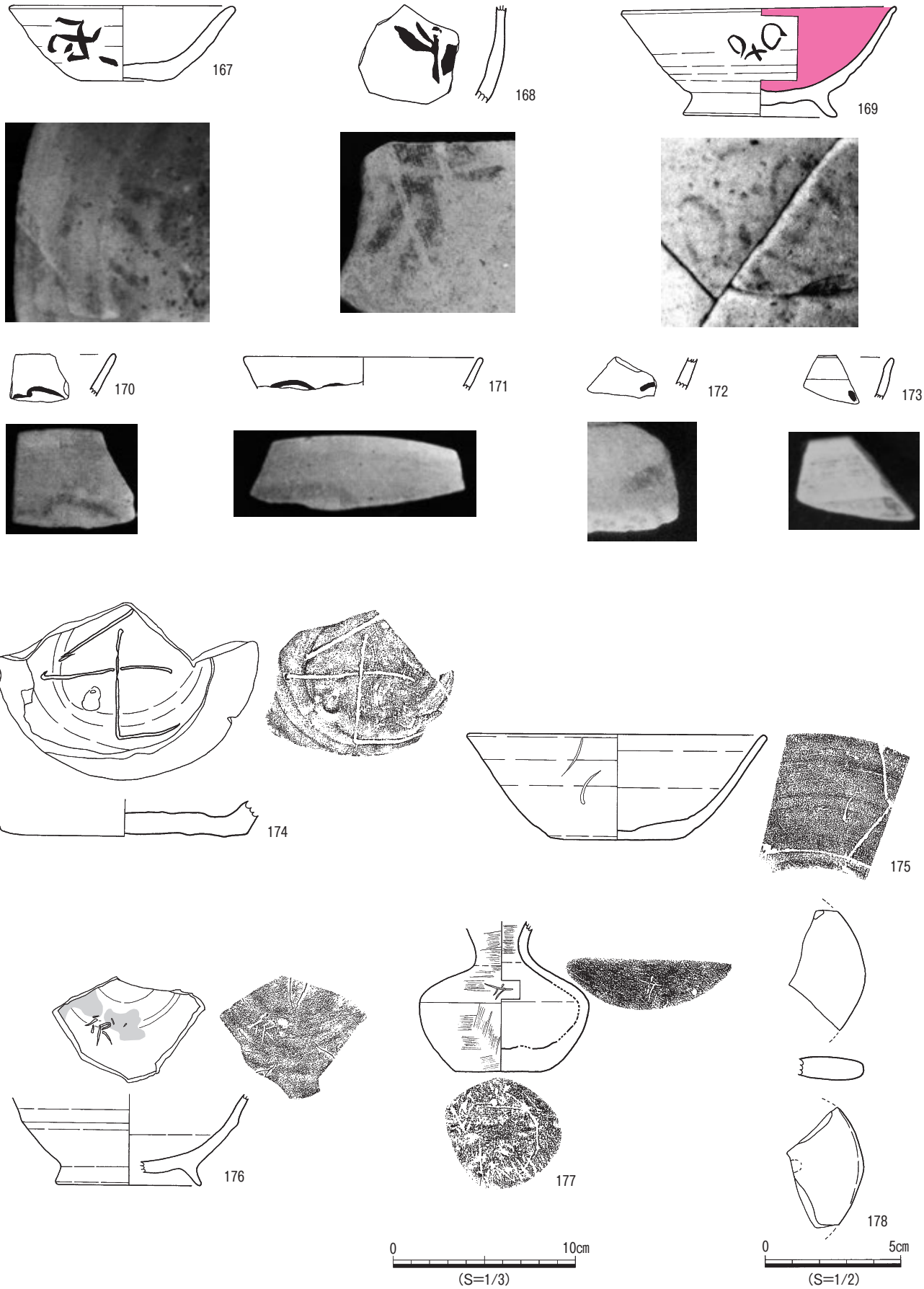
第57図　溝８号(北)出土遺物（３）



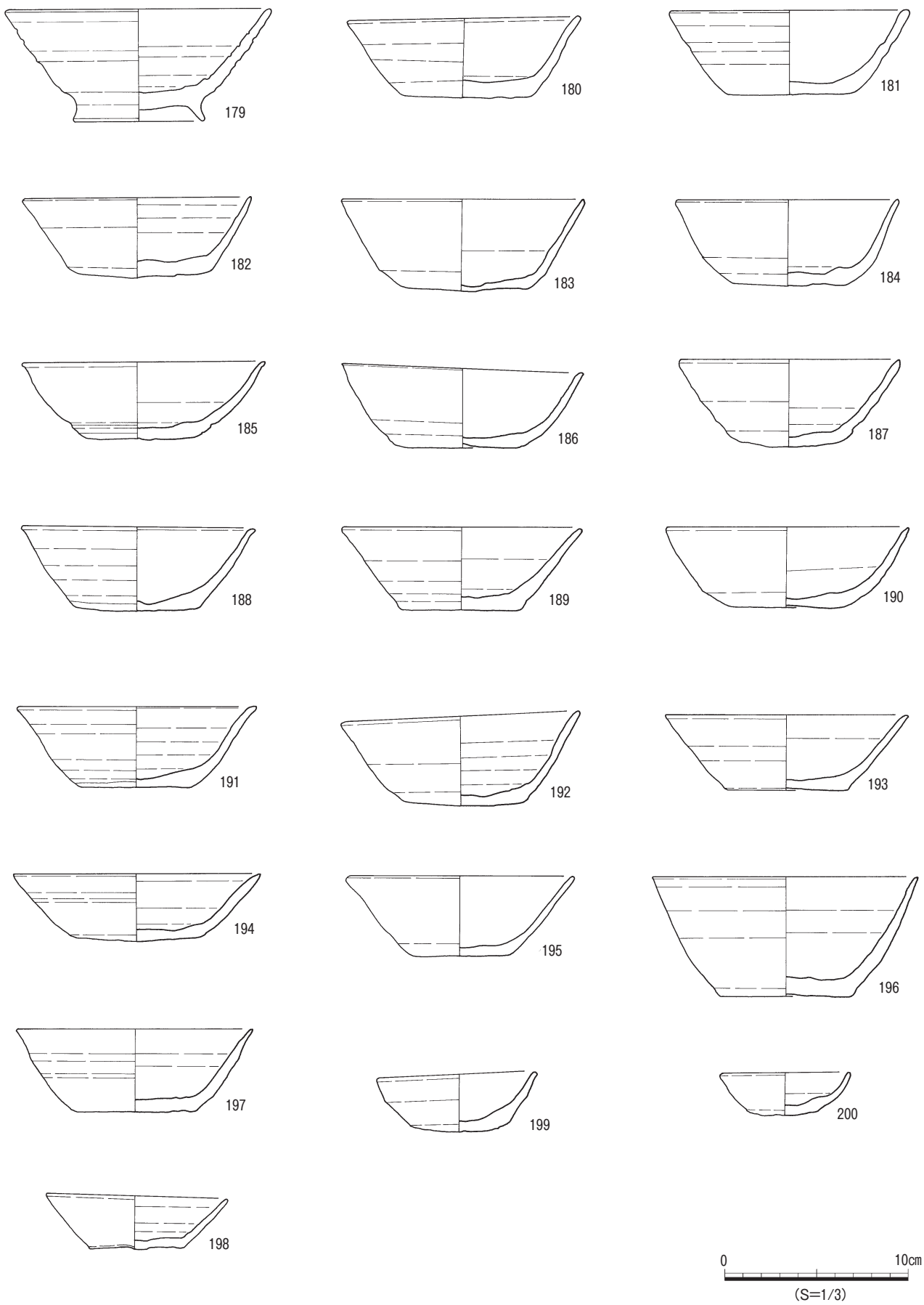
第58図　溝８号(北)出土遺物（４）



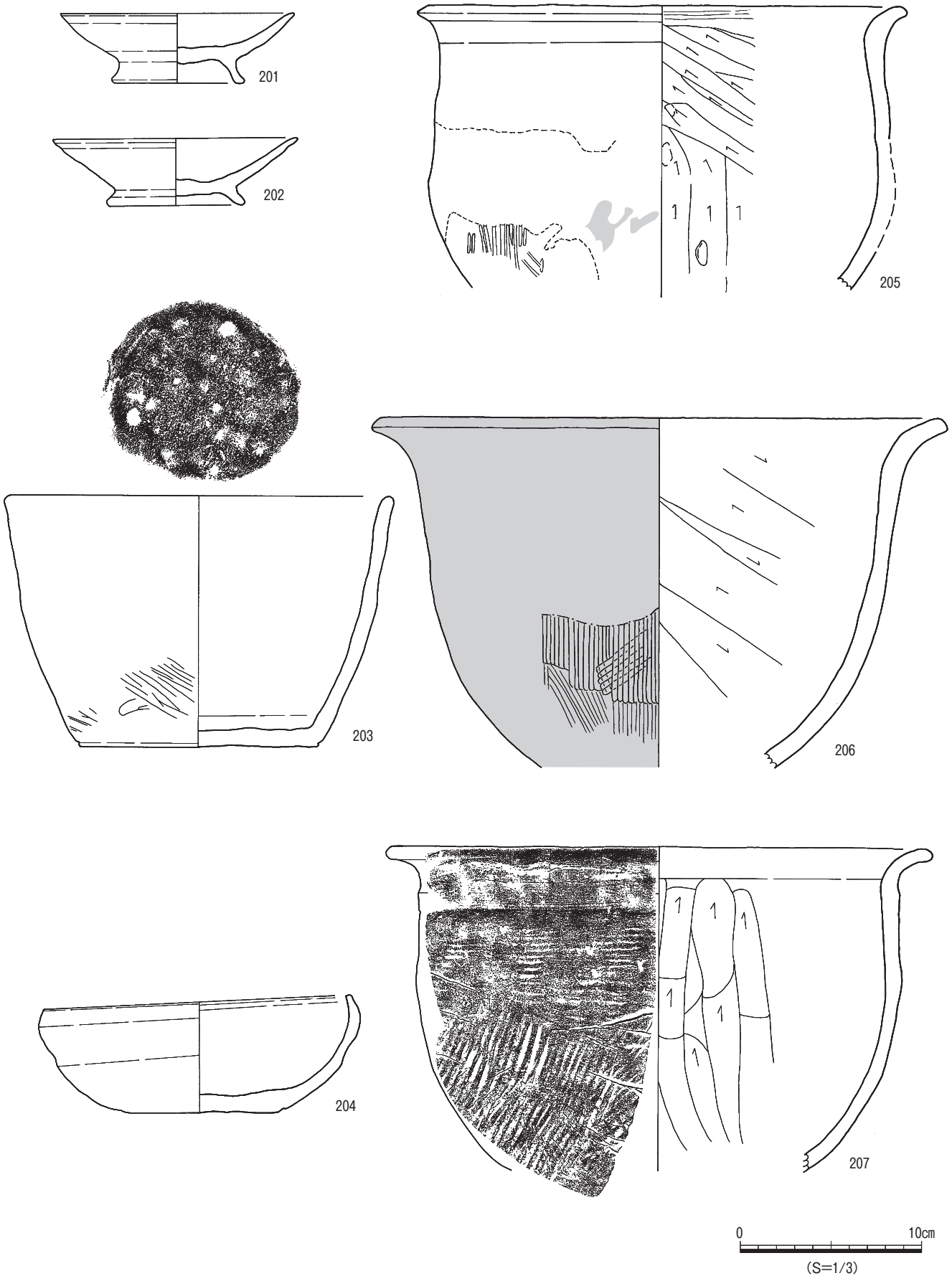
第59図　溝８号(北)出土遺物（５）



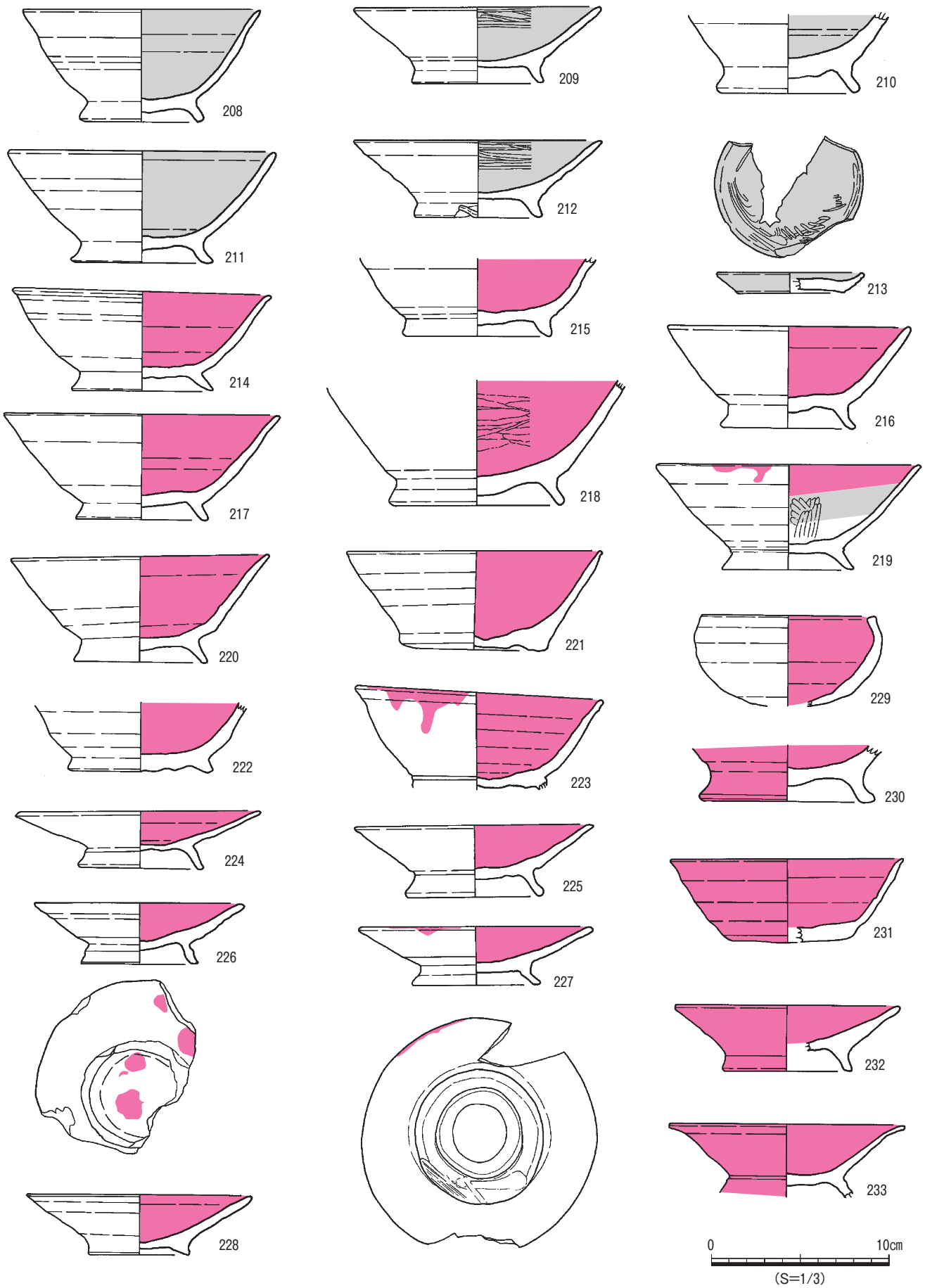
第60図　溝８号(北)出土遺物（６）



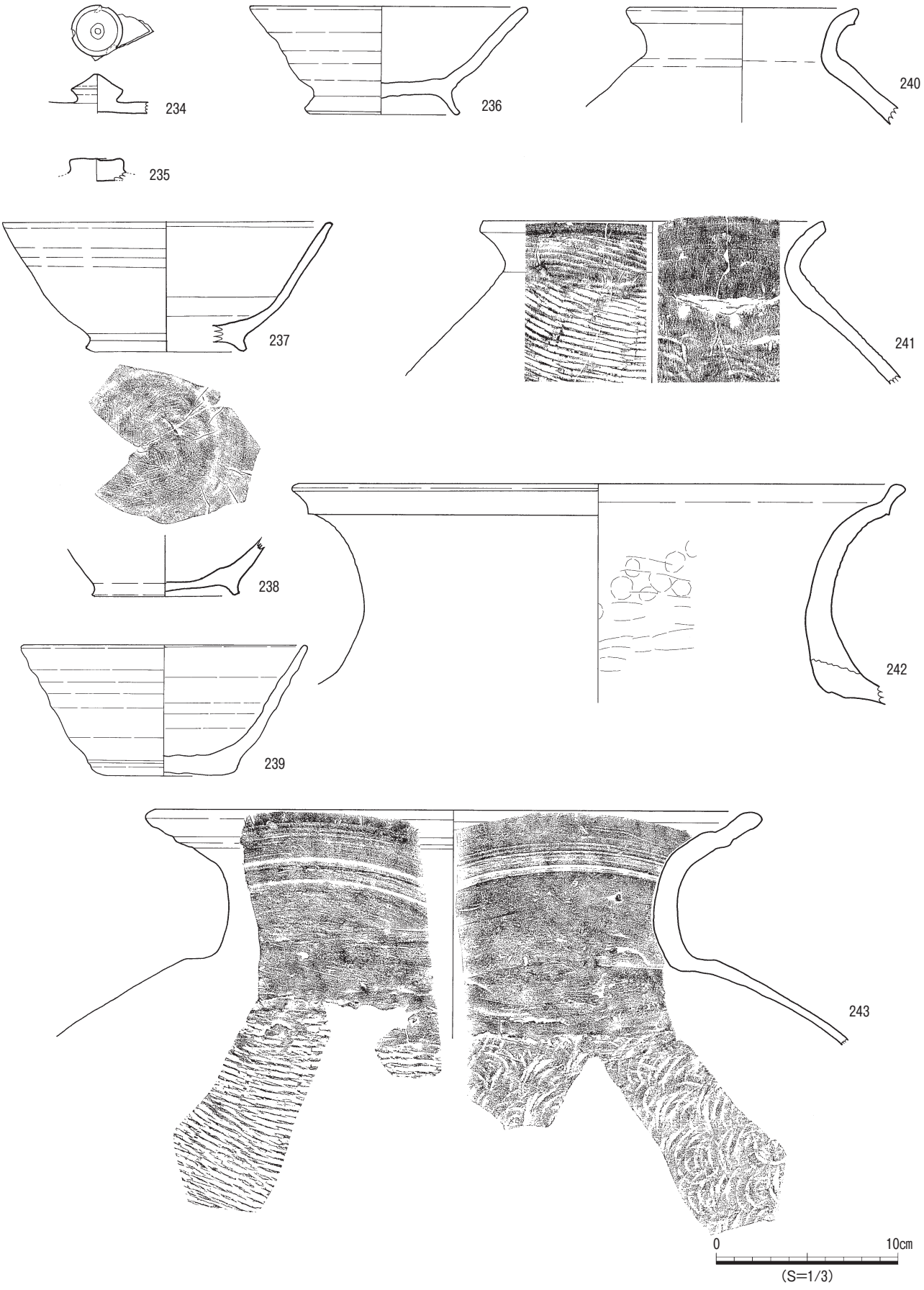
第61図　溝８号(西)出土遺物（１）



第62図　溝８号(西)出土遺物（２）



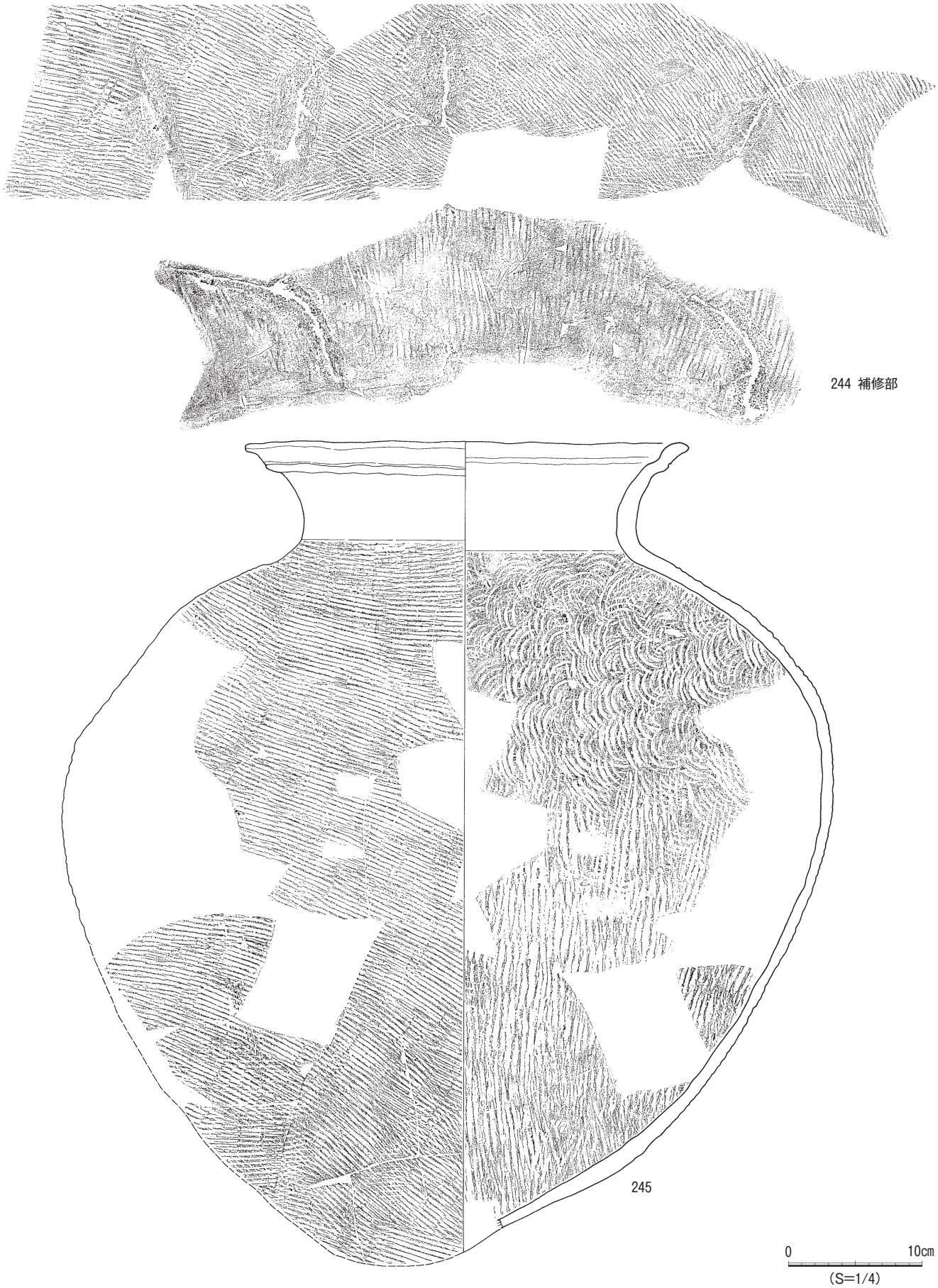
第63図　溝８号(西)出土遺物（３）



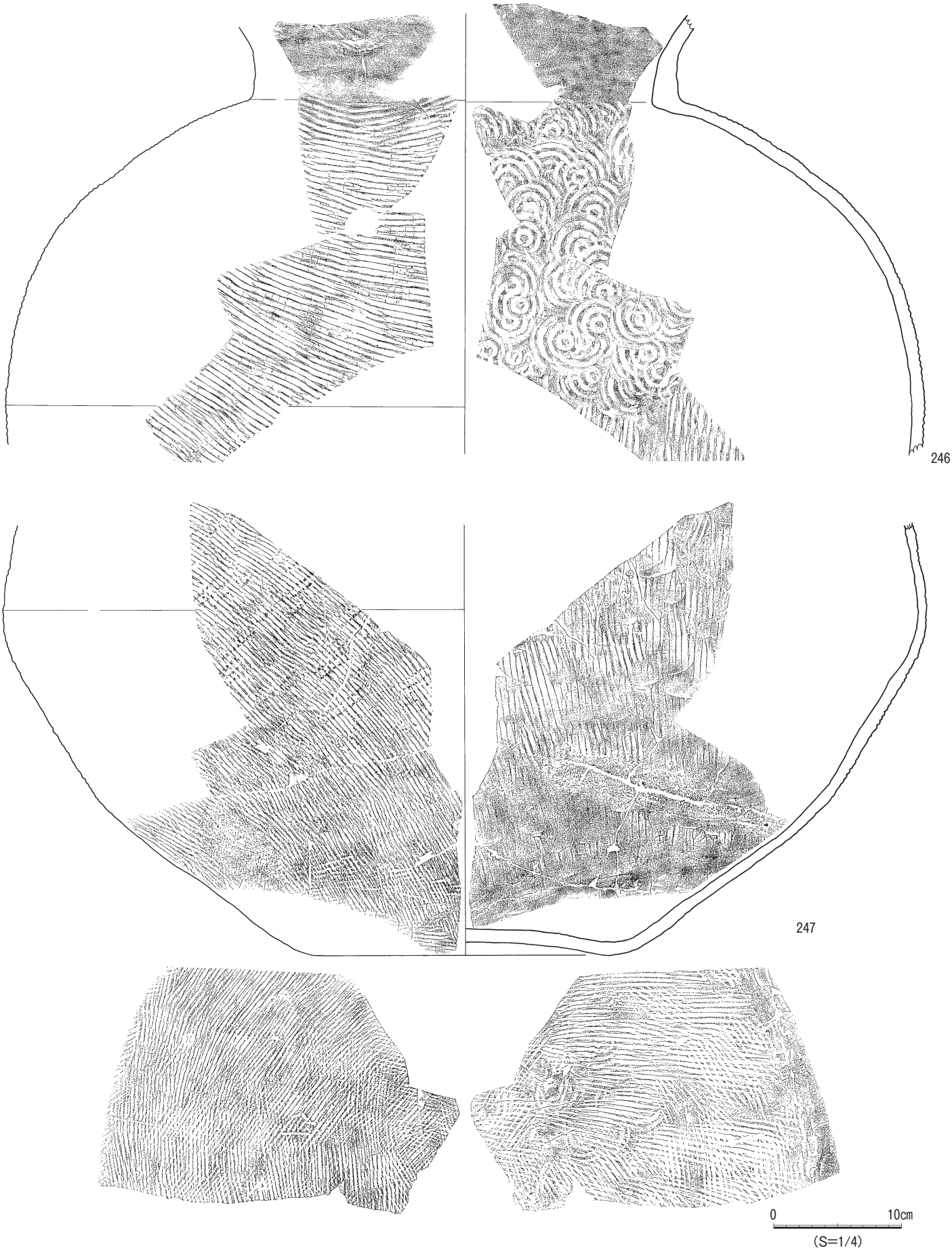
第64図　溝８号(西)出土遺物（４）



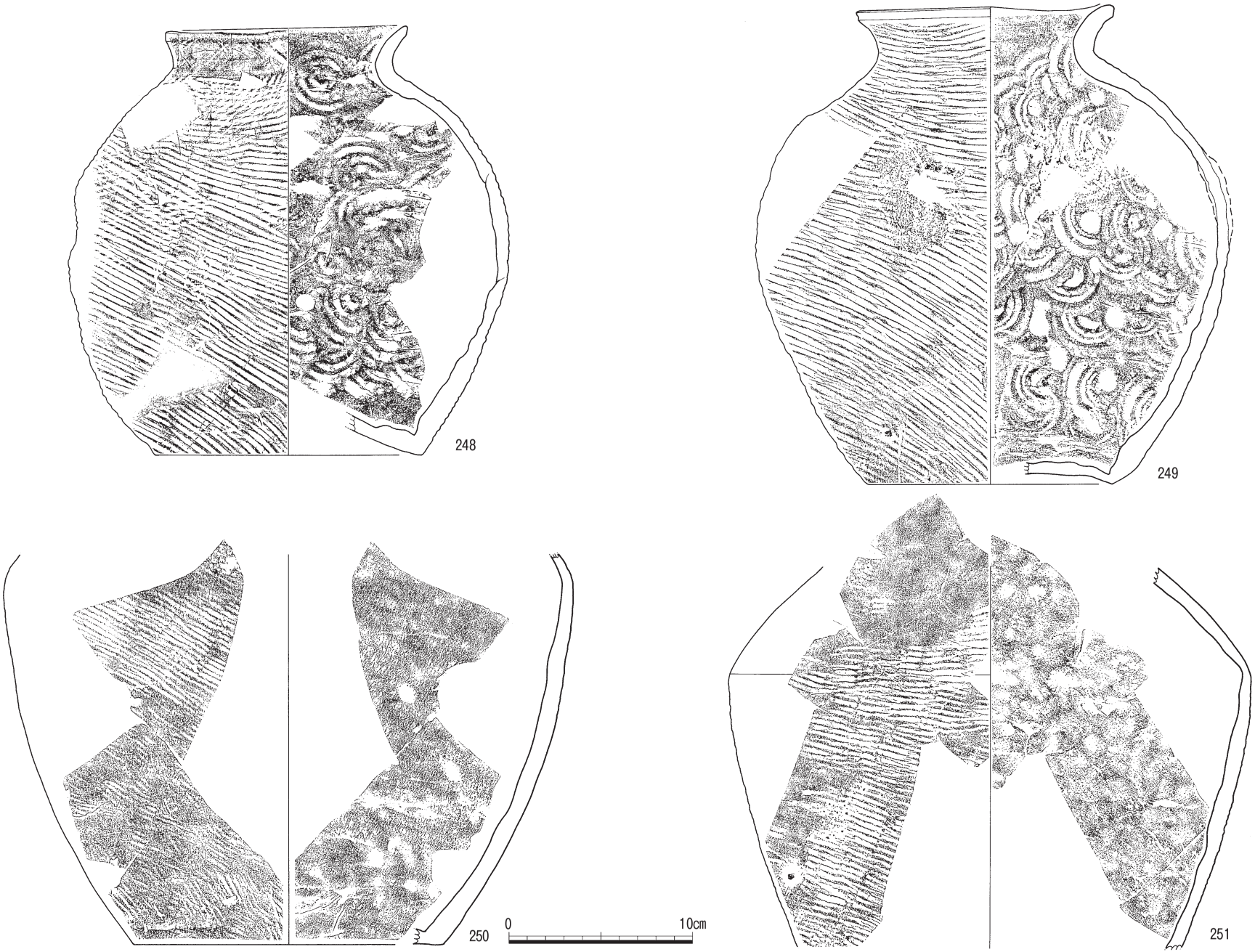
第65図　溝８号(西)出土遺物（５）



第66図　溝８号(西)出土遺物（６）

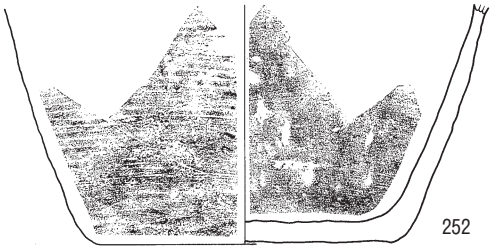


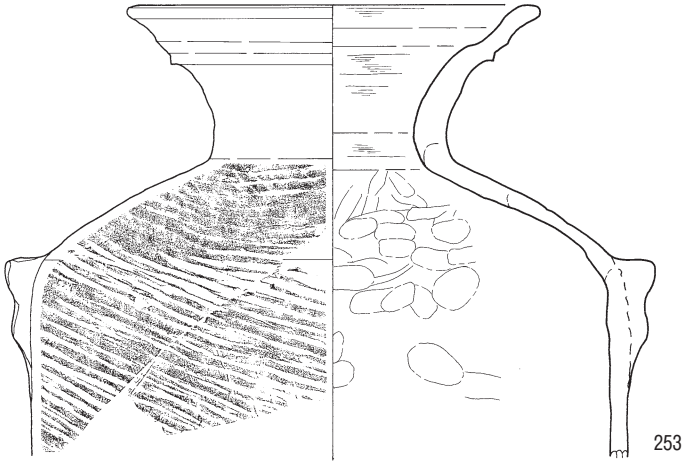
第67図　溝８号(西)出土遺物（７）

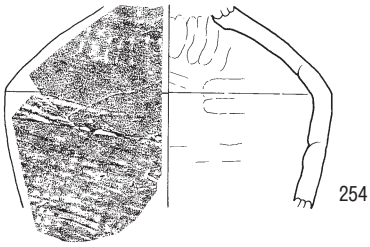


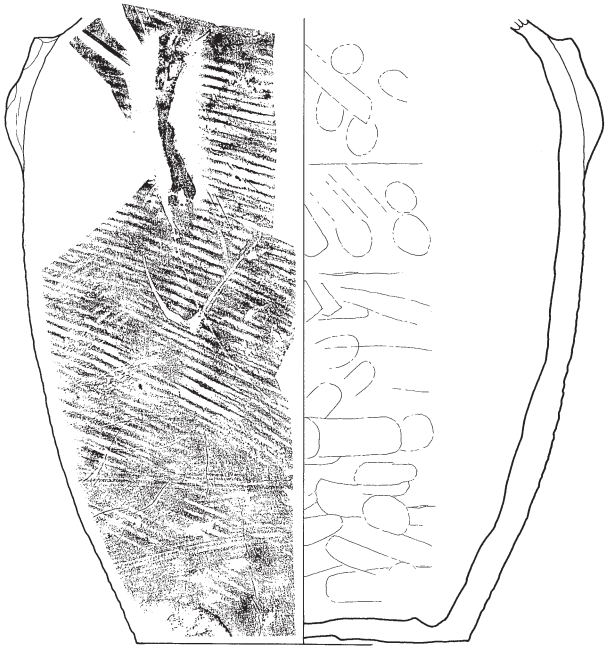
(S=1/3)

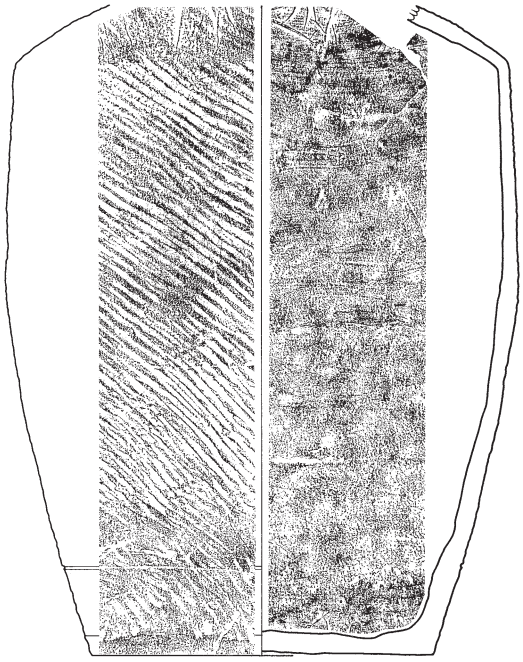
第68図　溝８号(西)出土遺物（８）





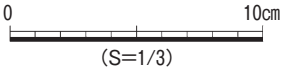




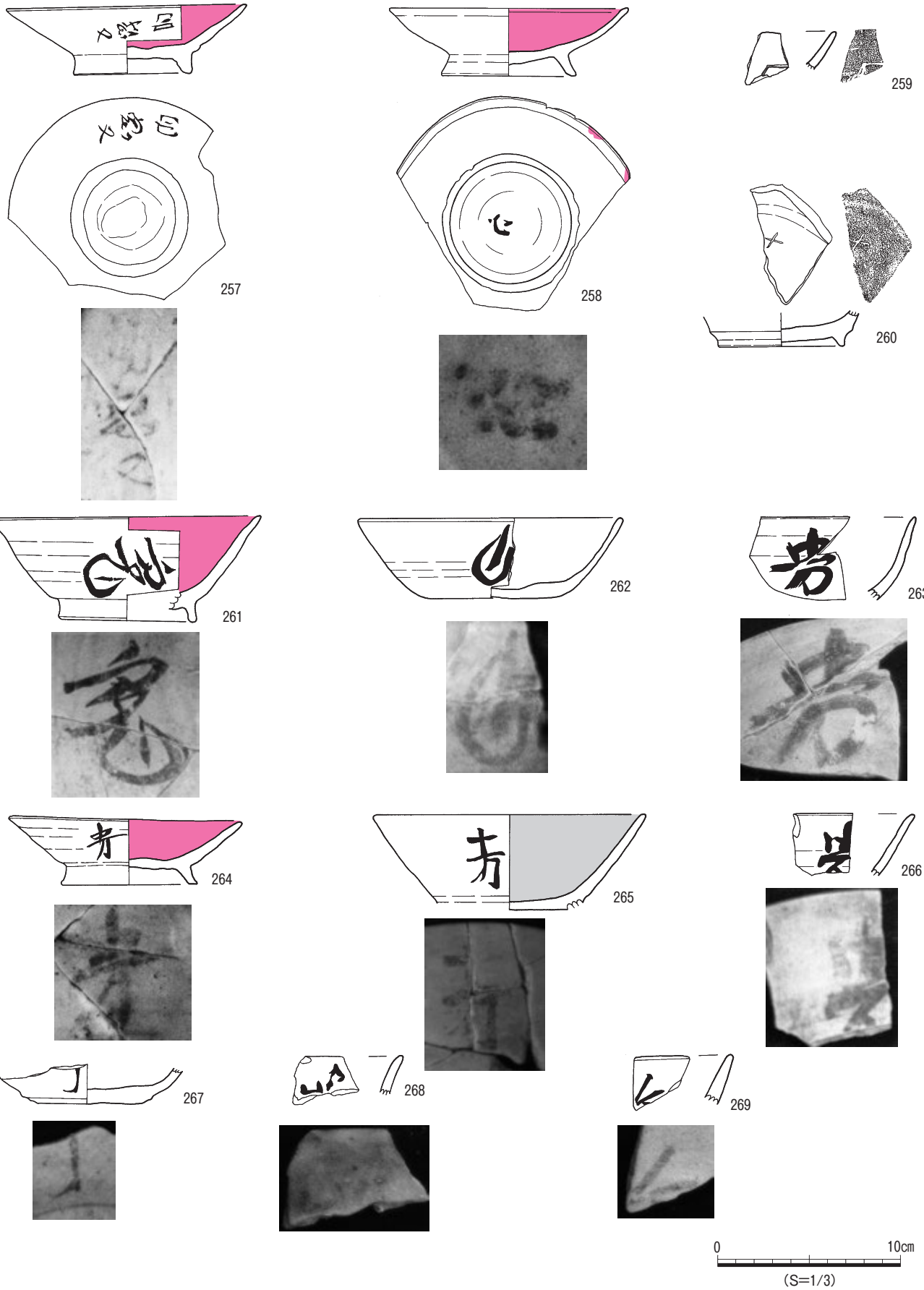




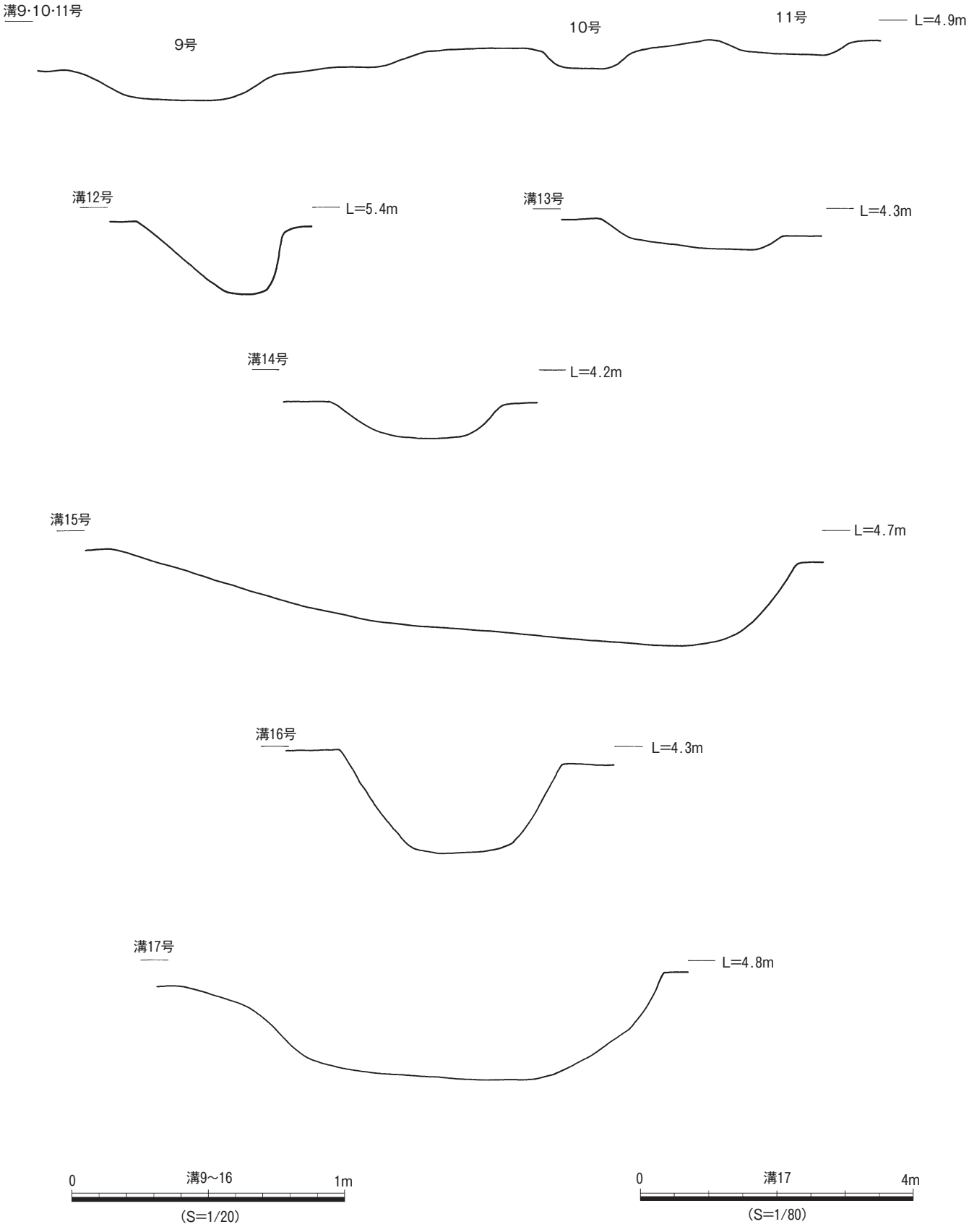




第69図　溝８号(西)出土遺物（９）



第70図　溝８号(西)出土遺物（10）


溝9･10･11号
9号
10号
11号
L=4.9m
溝12号
L=5.4m
溝13号
L=4.3m
溝14号
L=4.2m
溝15号
L=4.7m
溝16号
L=4.3m
溝17号
L=4.8m
0
溝9～16
1m
(S=1/20)
0
溝17
4m
(S=1/80)

第71図　溝９～17号

古代遺物（遺構内）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区 遺構番号	種別	器種	部位	法量（cm）			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	内側	外側		
32	1	掘立柱建物跡３号	A-29 1922	須恵器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.2	9.4	4.2	横ナデ	横ナデ	灰白色	外面スス付着
38	2	竪穴建物状遺構	A'-29 1965	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	12.6	7.0	4.5	横ナデ	横ナデ	橙色	
41	3	土坑１号	A-36 11312	土師器	椀	底～脚部				横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	4		A-36 11312	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	12.8	6.0	4.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	5		A-36 11312	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.2	7.2	4.6	横ナデ	横ナデ	(外)にぶい黄橙色 (内)浅黄橙色	外面スス付着
	6		A-36 11312	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.7	6.2	4.3	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	7		A-36 11312	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.0	7.0	4.4	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	
	8		A-36 11765	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	12.0	5.4	4.1	横ナデ	横ナデ	(外)にぶい橙色 (内)浅黄橙色	
	9		A-36・37 11312	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	12.2	6.0	3.7	横ナデ	横ナデ	淡黄色	
	10		A-36 11765	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	13.0	6.4	4.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	11		A-36 11312	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	14.0	6.4	4.2	横ナデ	横ナデ	橙色	
	12		A-36 11312	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.0	7.2	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	13		A-36 11312	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.0	6.5	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	14		A-36 11312	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.0	6.0	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	15		A-36 11312	土師器	坏	胴～底部		5.8		ナデ	ナデ	(外)浅黄橙色 (内)にぶい黄橙色	
	16		A-36 11312	土師器	坏	口縁～胴部				横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	17		A-36 11312	土師器	坏	口縁～胴部	15.2	8.8	5.0	横ナデ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)淡黄色	
	18		A-36 11312	赤色土器Ⅱ	坏ⅢAa	口縁～底部	12.8	6.0	4.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
42	19		A-36 11765	土師器	甕Ⅰ	口縁～胴部	36.0			ヘラケズリ・ヘラナデ	ヘラナデ・ハケメ	(外)橙色 (内)にぶい黄橙色	外面スス付着
	20		A-36 11312	土師器	甕Ⅰ	口縁～胴部	27.0			ケズリ・ナデ	ヘラナデ	(外)橙色 (内)にぶい黄橙色	
	21		A-36 11312	土師器	甕Ⅱ	口縁～胴部	26.0			ケズリ・ヘラナデ	ハケメ・指ナデ	(外)橙色 (内)にぶい黄橙色	
	22		A-36 11312	土師器	甕Ⅱ	口縁～胴部	37.0			ケズリ・ナデ	ヘラナデ・指ナデ	(外)橙色 (内)灰黄褐色	内外面スス付着
	23		A-36 11312	土師器	甕Ⅰ	口縁～胴部	27.0			ケズリ・指頭圧痕	ハケメ・指頭圧痕	(外)橙色 (内)灰黄褐色	
	24		A-36 11312	土師器	甕Ⅱ	口縁～胴部	30.0			ケズリ・ナデ	ハケメ・指頭圧痕	にぶい黄橙色	内外面スス付着
	25		A-36 11312	土師器	甕Ⅰ	胴部				ケズリ	ナデ	(外)にぶい褐色 (内)にぶい黄橙色	
	26		A-36 11312	土師器	甕	胴部		6.0		ケズリ・指頭圧痕	ヘラナデ	(外)橙色 (内)にぶい黄橙色	内外面にスス付着
43	27		A-36 11312	黒色土器Ⅰ	坏	口縁～底部				ミガキ	ミガキ	浅黄橙色	
	28		A-36 11312	赤色土器Ⅱ	坏Ⅰ	胴～底部		6.0		ミガキ	ミガキ	浅黄橙色	北部九州型 8c末 坏D
	29		A-36 11312	土師器	蓋	体部				ナデ	ナデ	灰黄色	
	30		A-36 11312	土師器	蓋	体部	25.5	2.8	3.6	ナデ・指頭圧痕	ナデ	にぶい黄橙色	底径はつまみ径
	31		A-36 11312	土師器	蓋	体部	19.4			横ナデ	横ナデ	(外)にぶい黄橙色 (内)浅黄橙色	
	32		A-36 11312	土師器	蓋	体部	15.6			横ナデ	横ナデ	(外)灰黄褐色 (内)灰褐色	
	33		A-36 11312	土師器	皿	底部		13.0		横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	34		A-36 11312	土製品	円形土製品				0.8			にぶい黄色	器高は最大厚
	35		A-36 11312	土製品	竈	口縁部				指頭圧痕・ナデ	横ナデ	黄灰色	
	40		A-36 11312	土師器	皿	口縁部				横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	39と同一個体の可能性
44	42	土坑２号	C-36 8907,8908	土師器	椀	口縁～底部	14.6	6.0	6.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	43	土坑３号	B-33	土師器	甕	口縁～底部				ハケ目	ケズリ	浅黄橙色	内外面スス付着
	45	土坑５号	A'-22 342	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.0	6.4	3.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	内面スス付着
48	52	ピット２号	C-32 9807	土師器	皿	口縁～底部	13.0	9.0	1.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	56	ピット６号	E-27 6028	石製品	丸鞆		2.2	3.5	4.5			暗緑色	蛇文岩，法量は縦・横・厚さ
	58	ピット８号	A-24 1295	須恵器	壺	口縁部	14.2			ナデ	ナデ	灰白色	
	59	ピット９号	D-25 7608	須恵器	壺	口縁部	10.0			ナデ	ナデ	灰色	
	62	ピット12号	D-24 5184	須恵器	鉢Ⅰ	口縁～底部	24.0	13.2	13.4	ナデ・指頭圧痕	タタキ・ナデ	浅黄色	
49	70	ピット19号	C-21 8663	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.2	6.0	4.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	71	ピット20号	D-20 7696	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.6	7.2	4.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	72	ピット21号	D-21 8655	須恵器	坏ⅢAa	口縁～底部	14.0	7.0	4.5	横ナデ	横ナデ	黄灰色	
51	83	溝４号	B-32 11329	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	16.6	7.8	5.2	横ナデ	横ナデ	明黄褐色	内面スス付着
	84		B-33 11329	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.4	6.0	4.2	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	85		B-34 11326	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	12.8	5.0	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	外面スス付着
	86		B-33 11329	須恵器	坏ⅢAa	口縁～底部	14.3	8.0	4.9		横ナデ	浅黄色	内面スス付着
	87		B-33 11329	須恵器	甕	肩部				ナデ	ナデ	灰黄色	
	88		B-30 7371	須恵器	坏	底部～脚部		7.4		横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	
	89		B-34 11326	土師器	高台付皿	脚部		12.4		ナデ	ナデ	(外)浅黄橙色 (内)橙色	
	90		B-33・34 11329	須恵器	甕	口縁～肩部	40.0			同心円状タタキ	ナデ	灰褐色	大甕b
	91		B-34 11326	土製品	紡錘車			5.2	0.8	同心円状タタキ・ナデ	ナデ	淡黄色	
	92		B-34 11326	土製品	紡錘車				0.8	ナデ	ナデ	褐黒色	内面スス付着
	93		B-33 11329	土製品	円形土製品				0.8	ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	94		B-33 11329	土製品	円形土製品				0.9	ナデ	ナデ	淡黄色	外面スス付着
52	100	溝７号	D-25 6371	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBa	口縁～底部	16.0	9.0	5.7	ナデ後ミガキ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)橙色	
53	102	溝８号（東）	F-18 4699	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	14.8	6.4	5.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	103		F-18 4699	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.4	6.0	4.6	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	104		D・E-18 4699	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	12.8	6.0	4.9	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	105		D・E-18, D-18 4699	土師器	坏	口縁～底部	14.0	6.7	4.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	内外面スス付着
	106		D-18 4699	土師器	高台付皿	口縁～底部	13.7	8.8	3.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	107		D-18 4699	土師器	高台付皿	口縁～底部	13.6	6.8	2.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	108		D-18 タコウヘイミゾ	土師器	高坏	口縁～底部	17.8	10.6	7.6	横ナデ	横ナデ	明黄褐色	皿部分にスス付着
	109		D-18 4699	黒色土器Ⅰ	椀Ⅳ	底部		9.6		ミガキ	横ナデ	(外)にぶい黄橙色 (内)黒色	
	110		F-18 4699	赤色土器Ⅰ	椀ⅠBb	口縁～底部	14.3	8.0	5.9	横ナデ	横ナデ	(外)黄橙色 (内)赤色	
	111		F-18 4699	赤色土器Ⅰ	椀ⅠAa	口縁～底部	15.5	7.8	5.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	112		F-18, E-18 4699	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBb	口縁～底部	14.0	8.6	6.8	横ナデ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)橙色	
54	113		D-18	須恵器	多口瓶	ほぼ完形	8.7	11.7	22.4	ナデ	ナデ・条痕	浅黄橙色	
55	114	溝８号（北）	B-20 570	土師器	椀ⅡAa	口縁～底部	15.3	7.7	6.3	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	115		B-20 570	土師器	椀ⅣAb	口縁～底部	15.1	8.1	5.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	外面スス付着
	116		A-21 1391	土師器	椀	口縁～底部	15.0			横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	117		A-21～23 1391	土師器	椀	口縁～底部	14.9			横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	118		A-21 1391	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	12.9	6.4	4.3	横ナデ	横ナデ	(外)淡橙色 (内)橙色	
	119		A-21 1391	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.6	6.0	4.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	120		A-23 1391	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.2	5.0	3.7	ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	121		A-23 1349	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.0	6.6	4.3	横ナデ	横ナデ	黄橙色	口縁部スス付着
	122		B-19 570	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.0	7.0	4.1	横ナデ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)黄橙色	
	123		A-22 1331	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	13.2	6.2	4.0	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	124		B-20 570	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	12.4	6.6	4.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	底部スス付着
	125		B-20 570	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.6	6.4	4.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	底部スス付着
	126		B-20 570	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.8	6.2	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	底部ヘラ切り
	127		A-21 1391	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	12.9	5.4	4.3	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	128		A-21 1391	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.8	7.0	4.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	129		B-20 570	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.0	6.2	3.9	横ナデ	横ナデ	黄橙色	
	130		A-22・23 1391	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.1	6.0	4.6	横ナデ	横ナデ	淡黄色	外面スス付着
	131		A-21 1391	土師器	皿Ⅱ	口縁～底部	15.6	5.6	2.0	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	132		A-22 1391	土師器	鉢Ⅰ	胴～底部		17.0		ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	133		A-23 1391	土師器	鉢Ⅲ	口縁～底部	19.0	9.0	7.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	134		B-20 570	土師器	鉢Ⅲ	口縁～腰部	20.0	4.0	6.6	横ナデ	横ナデ	(外)灰黄褐色 (内)淡黄色	外面スス付着

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区 遺構番号	種別	器種	部位	法量（cm）			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	内側	外側		
55	135		B-20 570	土師器	鉢Ⅲ	口縁～底部	17.4	2.0	7.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	136		A-22 1391	土師器	鉢Ⅲ	口縁～胴部				横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	外面スス付着
56	137		A-21 1391	土師器	甕Ⅰ	口縁～胴部	23.0			ヘラケズリ	ナデ	(外)橙色 (内)にぶい黄橙色	外面スス付着
	138		A-21 1391	土師器	甕Ⅰ	口縁～胴部	27.2			ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄橙色	
	139		A-21 1391	土師器	甕Ⅰ	口縁～胴部	23.0			ヘラケズリ	ナデ	浅黄橙色	
	140		A-21 1391	土師器	甕Ⅰ	口縁～胴部				ヘラケズリ	ナデ	(外)にぶい褐色 (内)にぶい黄橙色	内外面スス付着
	141		A-21 1391	土師器	甕Ⅱ	口縁～胴部	27.4			ヘラケズリ	ナデ	浅黄橙色	
57	142	溝８号（北）	A-23 1391	黒色土器Ⅰ	椀ⅧBb	口縁～底部	14.4	7.0	6.0	ミガキ	横ナデ	(外)明黄褐色 (内)黒色	
	143		A-23 1391	黒色土器Ⅰ	椀	口縁～底部	17.6			ミガキ	横ナデ	(外)にぶい黄褐色 (内)黒色	
	144		A-23 1391	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBa	口縁～底部	13.8	8.0	6.9	横ナデ	横ナデ	(外)にぶい黄橙色 (内)橙色	
	145		B-20 570	赤色土器Ⅰ	椀ⅢBb	口縁～底部	16.0	8.5	6.3	ミガキ	ミガキ・横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)橙色	
	146		A-23 1391	赤色土器Ⅰ	椀ⅤAa	口縁～底部	14.9	7.2	5.2	横ナデ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)赤色	
	147		A-23 1391	赤色土器Ⅰ	椀ⅤAa	口縁～底部	14.6	7.2	5.4	横ナデ	横ナデ	(外)にぶい黄橙色 (内)橙色	内外面スス付着
	148		A-23 1391	赤色土器Ⅰ	椀	口縁～底部	15.0			ミガキ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)明赤褐色	
	149		A-23 1391	赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.2	7.0	3.4	ナデ	ナデ	(外)にぶい橙色 (内)橙色	
	150		A-22 1391	赤色土器Ⅱ	鉢	口縁～底部	12.0	15.0	19.3	ミガキ	ヘラナデ	(外)にぶい黄橙色 (内)明赤褐色	
58	151		A-23 1349	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部		2.8		ナデ	ナデ	灰白色	底径はつまみ径
	152		A-23 1391	須恵器	蓋	体部	17.0			横ナデ	横ナデ	灰褐色	
	153		A-23 1391	須恵器	蓋	体部	14.2			横ナデ・ハケメ	横ナデ	灰色	
	154		A-22 1391	須恵器	蓋	体部	19.0			横ナデ	横ナデ	灰褐色	
	155		A-22 1391	須恵器	椀ⅣAa	口縁～底部	15.4	8.0	7.2	横ナデ	横ナデ	灰色	
	156		B-20 570	須恵器	坏ⅢAa	口縁～底部	17.2	8.2	7.7	横ナデ	横ナデ	淡黄色	
	157		A-23・24 1391	須恵器	坏ⅢBa	口縁～底部	17.0	9.4	7.3	横ナデ	横ナデ	にぶい黄色	
	158		A-23 1391	須恵器	坏ⅢAa	口縁～底部	14.2	4.4	6.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	
	159		A-23 1391	須恵器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.8	7.6	4.2	ナデ	ナデ	灰色	
	160		A-21 1391	須恵器	鉢Ⅰ	口縁～底部	22.3	13.4	14.7	横ナデ	横ナデ	浅黄色	外面スス付着
	161		A-23 1391	須恵器	壺	口縁部	14.4			ナデ	ナデ	灰黄色	
	162		A-22 1391	須恵器	壺	口縁～底部		9.2		ナデ	横ナデ	灰色	
	163		A-23 1391,1349	須恵器	壺	胴～底部		15.2		ナデ	ナデ	浅黄色	
59	164		A-23 1391,1720	須恵器	甕	口縁～肩部	17.6			車輪状タタキ	平行タタキ	灰白色	
	165		A-22・23 1391	須恵器	甕	口縁部	21.8			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色	
	166		A-21・22・23 1391	須恵器	甕	胴部				平行タタキ	平行タタキ	灰白色	
60	178		A-22 1391	土製品	円形土製品				0.8	ナデ	ナデ	浅黄橙色	
61	179		B-24 1391	土師器	椀ⅡAa	口縁～底部	14.4	7.2	6.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	180		B-24 1391	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.7	7.0	4.3	横ナデ	横ナデ	淡橙色	
	181		A-24 1391	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.0	7.2	4.6	横ナデ	横ナデ	(外)にぶい橙色 (内)浅黄橙色	
	182		B-24 1391	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.4	8.0	4.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	183		E-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.3	7.0	5.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	184		A-24 1391	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.2	7.6	4.8	横ナデ	横ナデ	浅黄色	
	185		D-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.3	6.8	4.3	横ナデ	横ナデ	淡黄色	
	186		D-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.2	5.8	4.6	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	187		B-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.0	7.0	4.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	内面スス付着
	188		D-24 4933	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	12.7	6.6	4.6	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	189		D-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.0	6.4	4.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	190		D-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.2	6.0	4.5	横ナデ	横ナデ	淡黄色	
	191		A-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.8	6.4	4.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	192		D-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.0	6.4	5.2	横ナデ	横ナデ	(外)浅黄色 (内)浅黄橙色	
	193		D-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.0	6.4	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	194		D-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.4	7.0	3.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	195		B-24 1391	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.4	5.4	4.4	横ナデ	横ナデ	浅黄色	スス付着
	196		D-24 4699	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	14.4	7.0	6.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	197		C・D-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.0	6.8	4.5	横ナデ	横ナデ	(外)黄橙色 (内)橙色	
	198		B-24 1391	土師器	坏ⅤAa	口縁～底部	9.8	5.2	3.0	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	199		E-24 タコウヘイミゾ	土師器	坏ⅤBa	口縁～底部	8.8	5.8	3.3	横ナデ	横ナデ	(外)黄橙色 (内)浅黄橙色	
	200		D-24 4699	土師器	坏ⅤBa	口縁～底部	7.1	4.0	2.4	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	内面にスス付着
62	201		A-24 1391	土師器	高台付皿	口縁～底部	12.8	7.4	3.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	202		C-24 1391	土師器	高台付皿	口縁～底部	13.4	7.6	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	203		D-24 4699	土師器	鉢Ⅰ	口縁～底部	21.4	7.0	13.9	指頭圧痕		浅黄橙色	
	204		B-24 1391	土師器	鉢Ⅲ	口縁～底部	16.9	8.1	6.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	205		E-24 タコウヘイミゾ	土師器	甕Ⅰ	口縁～胴部	26.8			ヘラケズリ	ナデ後ヘラ	にぶい黄褐色	内外面スス付着
	206		D-24 4699	土師器	甕Ⅱ	口縁～胴部	13.5			ヘラナデ	ナデ・工具ナデ	灰白色	外面スス付着　石粒含む
	207		E-24 タコウヘイミゾ	土師器	甕Ⅱ	口縁～胴部	30.0			ヘラケズリ	ナデ	明黄褐色	
63	208		D-24 4699	黒色土器Ⅰ	椀ⅠBb	胴～底部	13.4	6.2	6.2	ミガキ	横ナデ	(外)明黄褐色 (内)黒色	
	209		E-25 タコウヘイミゾ	黒色土器Ⅰ	椀Ⅱ	口縁～底部	14.0	7.4	4.3	ミガキ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)黒色	
	210		D-24 4699	黒色土器Ⅰ	椀Ⅱ	胴～底部		8.0		ミガキ	横ナデ	(外)にぶい赤橙色 (内)赤黒色	
	211		E-24 タコウヘイミゾ	黒色土器Ⅰ	椀ⅢBa	口縁～底部	15.0	7.4	6.2	ミガキ	ミガキ・横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)黒色	
	212		E-25 タコウヘイミゾ	黒色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	14.0	7.2	4.3	ミガキ	横ナデ	(外)淡黄色 (内)黒色	
	213		B-25 1391	黒色土器Ⅱ	皿	口縁～底部	8.3	6.2	2.2	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒色	
	214		C-24 1391	赤色土器Ⅰ	椀ⅢBb	口縁～底部	14.5	8.0	5.8	ナデ	ナデ	(外)浅黄橙色 (内)赤色	
	215		D-24 4699	赤色土器Ⅰ	椀Ⅴ	胴～底部		8.4		横ナデ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)赤色	
	216	溝８号（西）	D-24 4699	赤色土器Ⅰ	椀ⅢAa	口縁～底部	13.6	7.6	5.7	ミガキ	横ナデ	(外)赤色 (内)浅黄橙色	
	217		C-24 1391	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBa	口縁～底部	15.5	7.5	6.0	横ナデ	横ナデ	黄橙色	
	218		D-24,E-24 4699	赤色土器Ⅰ	椀Ⅱ	胴～底部		9.8		ミガキ	横ナデ	(外)にぶい黄橙色 (内)明赤褐色	
	219		C-24 1391	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBa	口縁～底部	14.8	7.4	5.9	ミガキ	横ナデ	(外)浅黄橙色 (内)黄橙色	
	220		B-24 1391	赤色土器Ⅰ	椀ⅢBa	口縁～底部	14.5	7.5	6.1	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	221		E-24 タコウヘイミゾ	赤色土器Ⅰ	椀	口縁～底部	14.0	8.4	5.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	脚部なし
	222		B-24 タコウヘイミゾ	赤色土器Ⅰ	椀Ⅴ	胴～底部		8.2		横ナデ	横ナデ	橙色	
	223		E-24・25 タコウヘイミゾ	赤色土器Ⅰ	椀	口縁～底部	14.0	7.6	5.9	ナデ後ミガキ	ナデ	(外)浅黄橙色 (内)橙色	
	224		D-24 タコウヘイミゾ	赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.7	7.0	3.3	ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	225		B-24 1391	赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.4	7.8	4.1	横ナデ	横ナデ	灰白色	
	226		C-24 タコウヘイミゾ	赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～脚部	11.8	6.6	3.4	ミガキ	ナデ	橙色	
	227		A・B-21～24 1391	赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.2	7.0	3.2	ミガキ	横ナデ	浅黄橙色	
	228		D-24 4699	赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	12.6	5.6	3.4	横ナデ	横ナデ	淡黄色	底部にスス付着
	229		C・D-24 タコウヘイミゾ	赤色土器Ⅰ	鉢	口縁～底部	13.2			横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	230		B-24 1391	赤色土器Ⅱ	椀Ⅵ	胴～底部		9.8		ミガキ・ナデ	横ナデ	(外)明黄褐色 (内)明赤褐色	
	231		A-24 1391	赤色土器Ⅱ	坏ⅢBb	口縁～底部	13.0	7.0	4.7	ミガキ	横ナデ	浅黄橙色	
	232		C・D-24 タコウヘイミゾ	赤色土器Ⅱ	高台付皿	口縁～脚部	12.6	7.2	3.7	ミガキ	横ナデ	浅黄橙色	
	233		C-24 タコウヘイミゾ	赤色土器Ⅱ	高台付皿	口縁～底部	13.2			横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
64	234		A-24 1391	須恵器	蓋Ⅰ	体部	2.8			ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	口径はつまみ径

古代遺物（遺構内）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区 遺構番号	種別	器種	部位	法量（cm）			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	内側	外側		
64	235	溝８号（西）	B-24 1391	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部	3.0			ナデ	ナデ	浅黄色	口径はつまみ径
	236		A-24 1391	須恵器	椀ⅢAa	口縁～底部	15.2	8.0	6.1	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	237		D-24 4699	須恵器	椀ⅣBa	口縁～脚部	17.2	9.8	7.1	横ナデ	横ナデ	灰色	
	238		A-23 1391	須恵器	椀Ⅱ	底部		8.0		ナデ	ナデ	黄橙色	
	239		B-24 1391	須恵器	坏	胴部～底部	15.2	8.0	7.2	回転横ナデ	回転横ナデ	灰色	
	240		D-24 4699	須恵器	甕	口縁部	12.4			タタキ後ナデ	タタキ後ナデ	灰色	
	241		B-24 1391	須恵器	甕	口縁部	18.8			同心円状タタキ	平行タタキ	灰黄色	
	242		A・B-22～24 1391	須恵器	甕	口縁部	32.5			同心円状タタキ	ナデ	にぶい橙色	
	243		A-23・24 1319	須恵器	甕	口縁～肩部	33.8			同心円状タタキ	平行タタキ	灰黄色	
65	244		D-24 4699	須恵器	大甕	口縁～底部	41.0	5.0	73.0	同心円状タタキ	平行タタキ	灰褐色	胴部最大径61cm
66	245		－	須恵器	大甕	口縁～底部	32.0		59.0				胴部最大径57cm
67	246		A-23・24 1391・1349	須恵器	大甕	頸～胴部				同心円状タタキ	平行タタキ	にぶい橙色	胴部最大径71cm
	247		D-24 4699	須恵器	大甕	底～胴部	24.0			平行タタキ	格子目タタキ	橙色	
68	248		D-24 4699	須恵器	甕	口縁～底部	13.1	14.4	23.4	同心円状タタキ	平行タタキ	灰色	胴部最大径24cm
	249		A-21 1391	須恵器	甕	口縁～底部	14.0	13.4	26.1	同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色	
	250		B-24・C-24 1391	須恵器	壺	胴～底部		17.0		ナデ	平行タタキ	赤褐色	長胴タイプのＥ・Ｆ
	251		A-26, B-20・21・23・24, D-24 1391・1349	須恵器	壺	肩～胴部				ナデ	平行タタキ	灰黄色	
69	252		D-24 1391	須恵器	鉢Ⅱ	胴～底部		11.8		ナデ	平行タタキ後ナデ	灰褐色	
	253		A-23, B-24 1391	須恵器	壺	口縁～底部	16.6			指頭圧痕	平行タタキ後ナデ	灰色	
	254		A-23・24 1391, 1720	須恵器	壺	頸～胴部				ナデ	格子目タタキ・ナデ	灰褐色	
	255		A-23・24 1391	須恵器	壺	胴～底部		13.0		ナデ	平行タタキ	灰褐色	
	256		D-24 タコウヘイミゾ	須恵器	壺	胴～底部		13.6		ナデ	平行タタキ	黄灰色	

墨書土器（遺構内）

挿図番号	掲載番号	遺構名	調査区 遺構番号	種別	器種	記載部位	文字	法量(cm)			備考
								口径	底径	器高	
43	36	土坑1号	A-36 11312	墨書	土師器	体部外面	■				
	37		A-36 11312	墨書	土師器	体部外面	天■ヵ	12.4			正位
	38		A-36 11312	墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	酒井				逆位
	39		A-36 11312	墨書	土師器 皿	底部外面	厨		11.4		
	41		A-36 11765	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	乙	12.4	6.6	4.6	
44	44	土坑5号	F-27 6034	朱書	赤色土器Ⅰ 椀	体部外面	宅				宅Ⅳ類
48	53	ピット３	E-32 9309	墨書	土師器	口縁部外面	大ヵ				
	54	ピット４	B-24 1878	墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	宅				宅Ⅰ・Ⅱ類
	63	ピット12	D-24 5184	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ 椀	底部外面	乙				
49	74	ピット23	E-20 5120	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	作		10.3		
	77	ピット26	A'-20 327	墨書	土師器	体部外面	記号				三角形
	78	ピット27	A-23 1391	墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	■				
51	95	溝４号	B-33・34 11329	ヘラ書き	土師器 椀	底部内面	■				
	96		B・C-34 11326	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■			7.4	
52	97	溝５号	D-31 6336	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■			6.0	
	98		C-31 6288	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■			5.6	
	99	溝６号	D-28 6157	ヘラ書き	土師器	体部内面	宅				宅Ⅰ・Ⅱ類
59	167	溝８号北	A-24 1391	墨書	土師器 坏	体部外面	宅	12.0	4.4	4.2	右倒位, 宅Ⅳ類
	168		A-23 1391	墨書	土師器	体部外面	■万				右倒位
	169		A-21 1391	墨書	赤色土器Ⅰ 椀	体部外面	記号	14.9	8.2	6.1	正位, 人面
	170		A-22 1391	墨書	土師器	体部外面	■				左倒位
	171		A-23 1391	墨書	土師器	体部外面	■	13.1			
	172		A-23 1391	墨書	土師器	体部外面	■				
	173		A-23 1391	墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	■				
	174		A-22 1391	ヘラ書き	土師器 鉢	底部内面	宅		13.6		宅Ⅰ・Ⅱ類
	175		A-23 1391	ヘラ書き	土師器 坏	体部外面	■	16.4	5.5	5.8	
	176		A-21 1391	ヘラ書き	土師器 椀	体部内面	作		8.0		
	177		A-21 1371	ヘラ書き	須恵器 小型壺	底部外面	■			5.1	
70	257	溝８号西	B-24 1391	墨書	赤色土器Ⅰ 高台付皿	体部外面	■宅又ヵ	13.2	6.0	3.7	右倒位, 宅Ⅰ類
	258		C-24 タコウヘイミゾ	墨書	赤色土器Ⅰ 高台付皿	底部外面	宅	13.0	7.2	3.7	宅Ⅳ類
	259		D-24 4699	ヘラ書き	須恵器	口縁部外面	■				
	260		A-24 1391	ヘラ書き	土師器 椀	底部内面	十		7.0		
	261		B・E-24 タコウヘイミゾ	墨書	赤色土器Ⅰ 椀	体部外面	宅	14.2	7.2	5.9	右倒位, 宅Ⅱ類
	262		B-24 1391	墨書	土師器 坏	体部外面	■	14.3	6.4	4.4	右倒位
	263		A-24 1391	墨書	土師器	口縁部外面	中万				正位
	264		D・E-24 4699	墨書	赤色土器Ⅰ 高台付皿	体部外面	中万	12.5	7.4	3.6	正位
	265		E-25 タコウヘイミゾ	墨書	黒色土器Ⅰ 椀	底部外面	十万	13.9			正位
	266		D-24 4933	墨書	土師器	口縁部外面	中万ヵ				正位
	267		B-24 1391	墨書	土師器 坏	体部外面	■		7.2		
	268		D-24 タコウヘイミゾ	墨書	土師器	体部外面	■■				
	269		A-24 1391	墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	■				
87	505	溝15号	C-16	墨書	土師器 坏	体部外面	■		7.7		文章P98、図P106
94	635		C-16	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	記号	14.2	4.4	4.3	文章P98、図P113

（4）遺物

古代の遺物は，土師器・黒色土器・赤色土器・須恵器・土製品・墨書土器が出土している。中でも，椀坏では須恵器より土師器，椀より坏の出土数が大となる。また，墨書土器・ヘラ書き土器の出土数が多いことも特徴である。口縁部合計10.230点のうち，342点を図化した。

土師器

椀（第72図270～272）

全体を復元できたものは少く，３点を図化した。270は胴部外面には回転ヘラケズリ調整が施されている。

272の口縁部は玉縁状を呈し，胴部に丸みをもつ器形である。270・271は完形の椀である。

坏（第73図273～第74図316）

非常に多量に出土した土師器片のうち，完形品もしくは残存状況の良好な44点を図化した。

273は，側面観が箱形で，直線的に立ち上がる器形を呈する坏Ⅱ類に該当する。この器形は少なく，完形品の１点を図化した。

274～312は逆台形の器形のもので，Ⅲ類に該当する。この器形と思われる土師器片は非常に多い。口径13㎝器高４㎝程度のものが多く，底径はややばらつきがある。

274～293は，底部から直線的に開く器形の一群である。このうち274～288は口縁部が直行し，289～293は口縁部が外反する。294～312は，胴部に丸みをもつ器形の一群である。このうち294～298は口縁部が直行し，299～312は口縁部が外反する。274～276・279・284・285・287・289・291～295・299・300・303・304・309・312は，胴部外面下端に丁寧なナデ調整やケズリが施され丸みをもつ器形である。277・278・281～283・286・297・298・307・308・310・311は，回転台を使ったナデ調整時にできた段を胴部下端に観察できる。275・276・281・282・284・287・289・291・293・295・296・302・304・309は，底部外面に丁寧なナデ調整が施されている。279・280・282・288・290・296・301・310は硬質に焼き締められている。

313は充実高台を有するもので，硬質に焼き締められている。314は小坏で内面にスス痕がある。底部を内面から打ち欠いている。315・316は口径が広く器高の低い器形になる。

高台付皿（第75図317～320）

317は，胴部と高台の間に斜めに突き出た短い袴状の突帯が巡る形状を呈する。318・319の高台はハの字状に開き，端部は角張る。320の高台はハの字状に開き，端部は細くなる。

皿（第75図321，322）

321は直線的に開く器形である。322は胴部の立ち上がりから外反する器形である。

鉢（第75図323～325）

323・324は，口縁部を外反する鉄鉢状の器形であり，硬質に焼き締められている。323は完形品で，底部内外面に指頭痕を残している。324は胴部下半が尖り気味の器形で，底部を欠損している。325は直線的に立ち上がり底部は丸みを帯びる器形の完形品である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

壺（第75図326）

胴部が丸く膨らむ小型の壺である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

甕（第75図327）

遺構内と比べ，包含層での器形を判断可能な土師器甕の出土数は少なかった。甕Ⅱ類に該当し，胴部にアーチ状の把手が貼り付けられている。外面にハケ目調整，内面にケズリ調整が施されている。胴部外面にはスス痕を観察できる。胴部の半分と底部を欠損する。

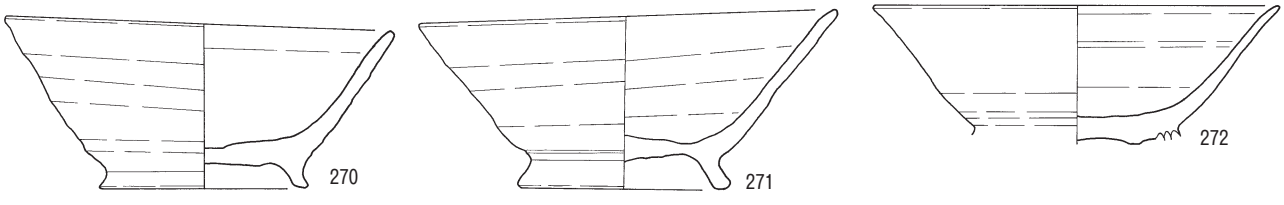
黒色土器

Ⅰ類（第75図328～331）

328～330は，胴部はやや丸みをもつ器形の椀である。高台は短く端部の細くなる形状で，断面は外側が直で内側が傾斜する形になる。内外面とも丁寧なミガキを施されている。330は口縁部が直に立ち上がる器形である。331は胴部の大部分と高台を欠損している。高台の基部の口径は５㎝を測り，その外周には，底部から下方に向く形で，口径７㎝厚さ４㎜長さ５㎜の突帯が巡る。二重に長短の高台が巡るような形状である。内面に放射状のミガキを観察できる。

Ⅱ類（第75図332～335）

332～335は，丁寧なミガキを施された小皿である。底部内外面には，指頭痕が稜に沿って巡るように施されている。



第72図　土師器　椀


273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
0
10cm
(S=1/3)

第73図　土師器　坏（1）

赤色土器

Ⅰ類（第76図336～349）

336～342は，椀Ⅱ類に該当する。339は底部を内側から打ち欠いた口径２㎝の穿孔がある。343は，椀Ⅴ類に該当し，やや低い器高5.3㎝を測る。344は高台を欠損している。338・339・342・343・344は硬質に焼き締められ，337・339は底部内面に，344は外面全体と胴部内面に渦巻き状のスス痕がみられる。345・346は高坏で，口縁部を欠損している。347～349は高台付皿である。347・348の高台はハの字状に開き端部は丸く，349の高台は短く細い。

Ⅱ類（第76図350～354）

352以外のものは硬質に焼き締められている。

350は器高の小さな椀で，高台は太く短く端部は細く畳付は広い形状である。351～353は坏である。

351・352は坏Ⅰ類に該当する。351は底部がやや上げ底で，内外面とも丁寧なミガキが施されている。大宰府出土の坏に類似し，土坑１号からも同様の坏が出土している。352はこれに器形は似ているが，焼成が悪くミガキも施されていない。353は内外面とも丁寧なミガキが施された坏Ⅱ類である。

須恵器

蓋（第77図355～381）

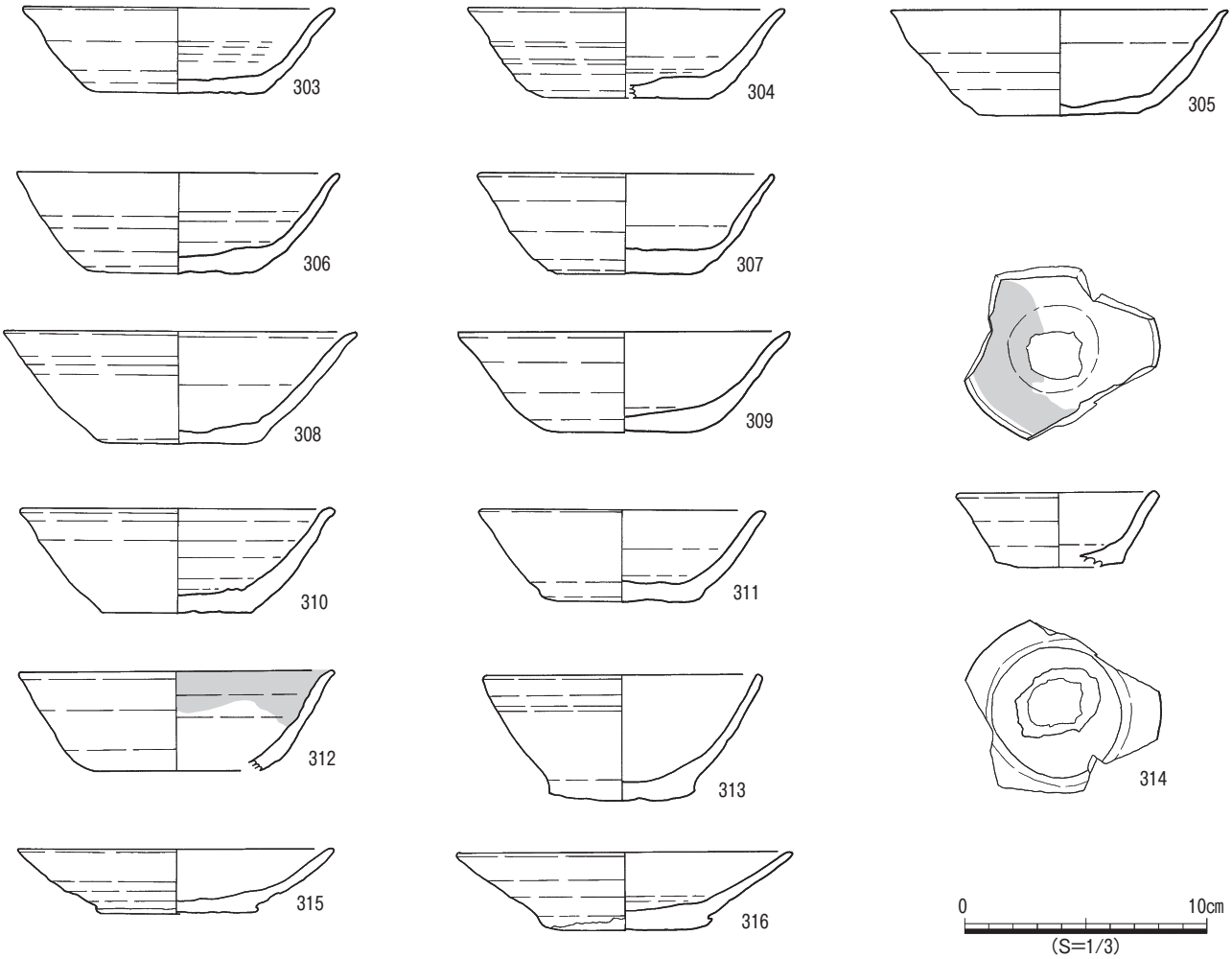
欠損しているものが多く，つまみ部もしくは端部を有する27点を図化した。355・359・361・365・366・368・369は蓋Ⅱ類に該当する。356・357・360は蓋Ⅲ類に該当する。358・362～364・367・370は蓋Ⅳ類に該当する。372～377，380は端部が断面三角形の肥厚部となる形状を呈する。371は端部に丸みをもつ形状で，欠損したつまみ部を挟む位置に一対の穿孔を確認できる。つまみ欠損後に紐を通して代用した可能性がある。381は小蓋の完形品である。

椀（第78図382～388）

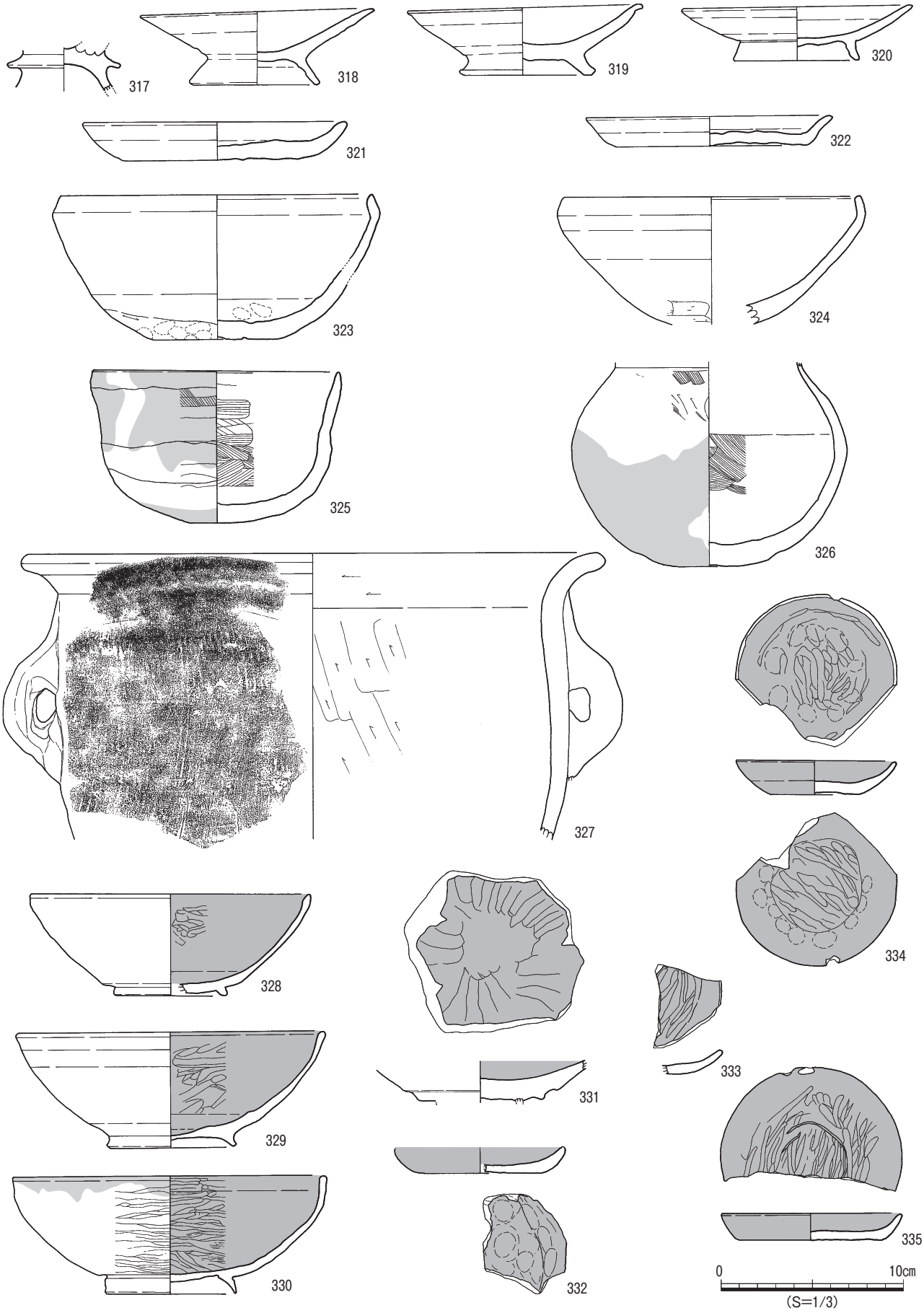
高台を有する７点を図化した。382は，底部から直線的に開いてのびる器形の椀Ⅰ類である。385・388は，布目圧痕を底部内・外面にそれぞれ施されている。383・386は，胴部に丸みをもつ器形のもので，口縁部を欠損している。384は丸く整形され，底部外面に磨滅痕が観察される。

坏（第78図389～395）

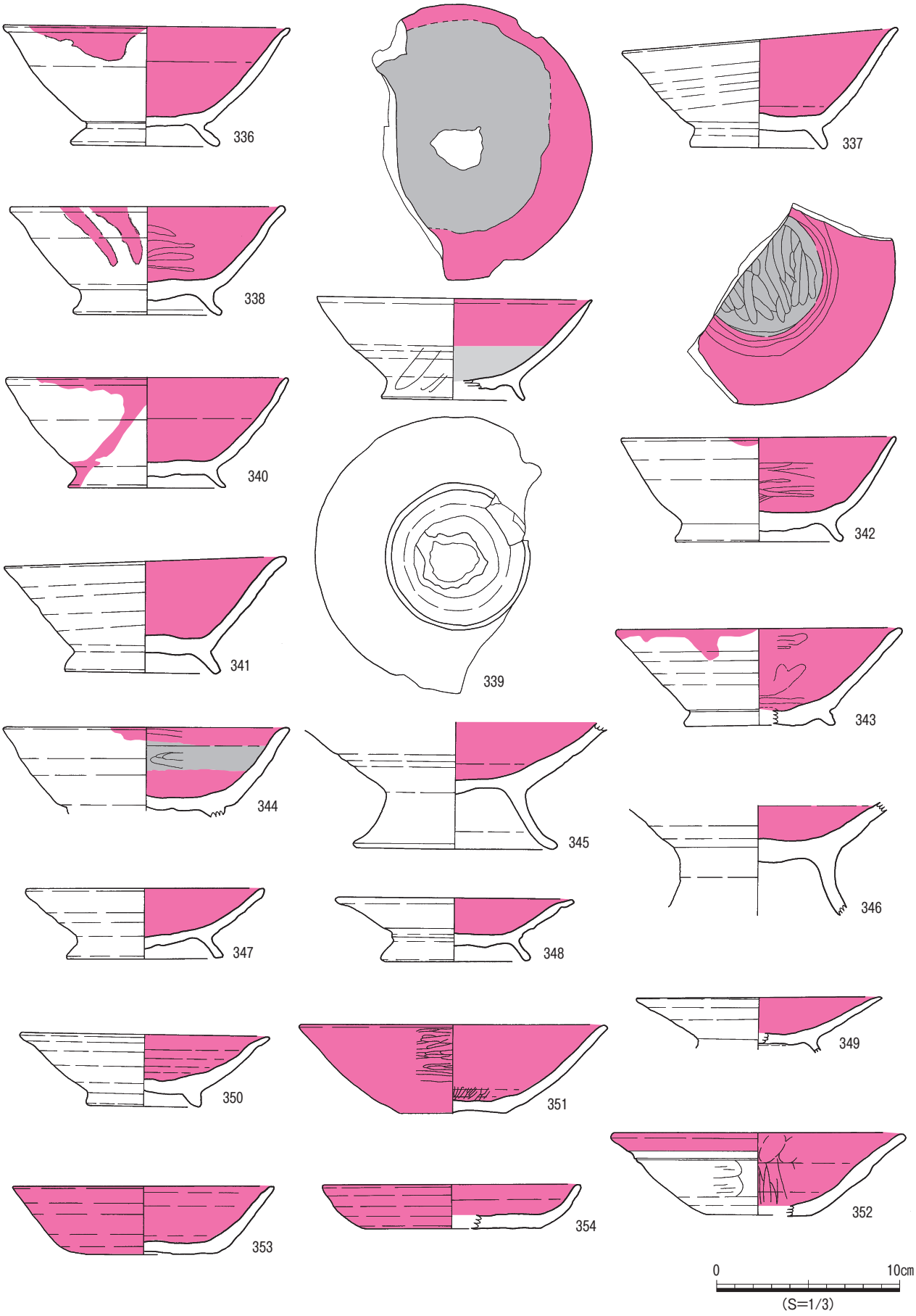
７点を図化した。389は坏Ⅱ類に該当する。390～394は坏Ⅲ類に該当する。385は小坏の坏Ⅴ類に該当する。



第74図　土師器　坏（２）



第75図　土師器　皿ほか・黒色土器


336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
0
10cm
(S=1/3)

第76図　赤色土器

390～392・394は，胴部の立ち上がりに稜をもつ。393の口縁部は玉縁状を呈する。

皿（第78図396～399）

396・397は直線的な胴部で，398・399は外反する。

甕（第79図400～第80図410）

11点を図化した。口縁部を残すものと胴部から底部を残すものを図化した。400～408は頸部が締まり口縁部は短く外反している。外面は平行叩きが施され，404には格子状叩きが施されている。内面には同心円当て具が見られる。409は頸部から上を欠損する。410は二重口縁で，頸部に櫛描波状文が施されている。

鉢（第80図411～413）

３点を図化した。バケツ形に開く器形で鉢Ⅰ類に該当する。411は底部外面に同心円叩きが施されている。

壺（第80図414～第81図425）

12点を図化した。414は完形品の小壺である。415～417は頸部がくの字に屈曲し二重口縁となるものである。420・424は肩部に耳状の把手をもつものである。

421・422は頸部と肩部の中間に突帯を巡らせている。

420・423・425の内面には指頭痕が施されている。

その他

脚付の土器（第81図426～428）

３点を図化した。脚が底部外面に貼り付けられた器形を呈する。火舎の可能性があり，脚を３本と想定して図化した。426は脚の根元部分だけを残す。

硯（第81図429，430）

429･430ともに内面に磨り減って光沢する部分を持つ。430は風字硯の前半部右側であると考えられる。

穿孔のある土器（第81図431）

底部内面から穿孔が施され，用途は不明である。

土製品

紡錘車（第82図432～第83図450）

すべてが土師器坏あるいは黒色土器からの転用で，周縁部は平坦に調整し片面中央が窪む器形である。

円形土製品（第83図451～461）

穿孔の痕跡は見られないが，紡錘車の可能性のあるものを11点図化した。

墨書土器

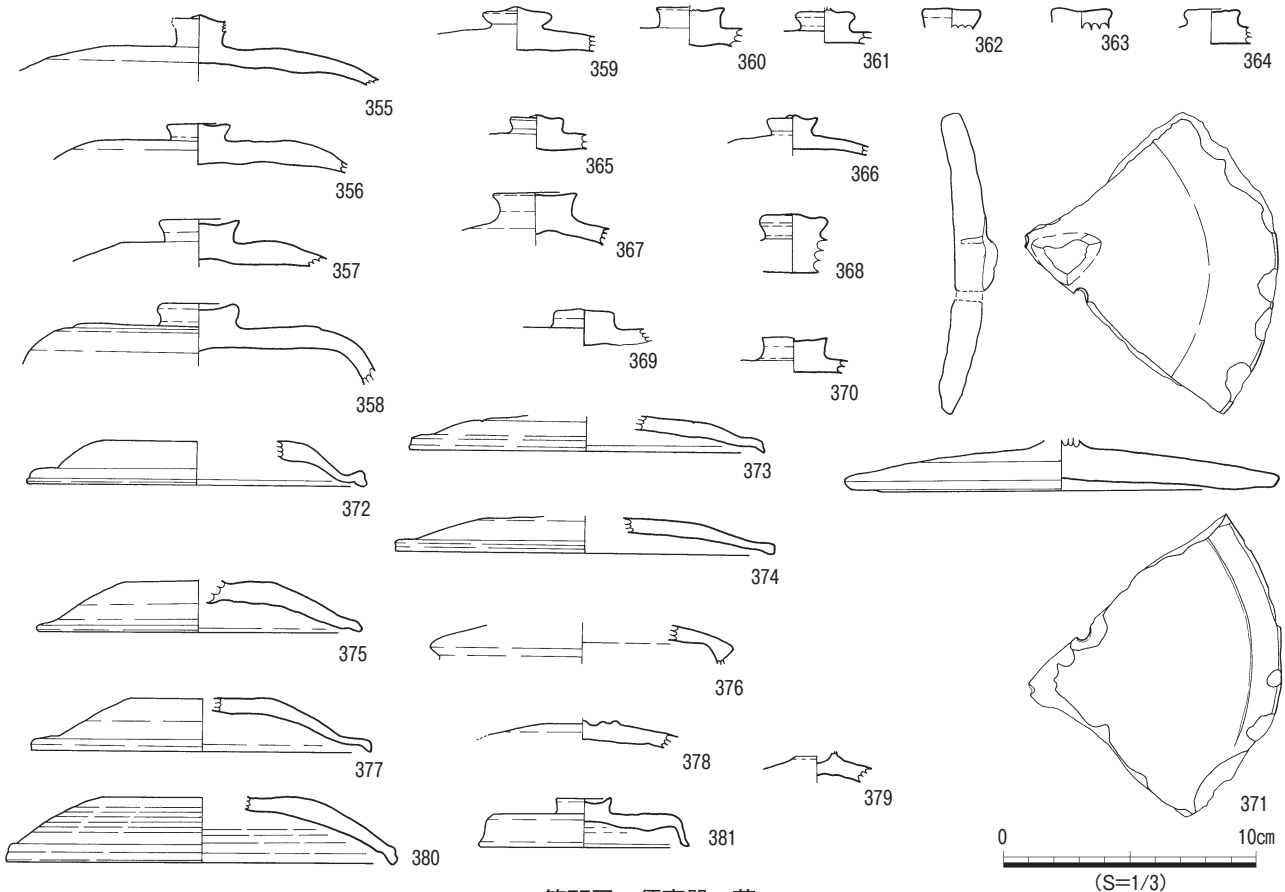
包含層からは178点出土している。文字の釈読について，永山修一氏（ラ・サール学園教諭）の御教示をいただいた。34点出土した「宅」の字を４類に分類した。

宅Ⅰ類　ウ冠が通常のもの

宅Ⅱ類　ウ冠の「ワ」が「つ」にみえるもの

宅Ⅲ類　草書体のもの

宅Ⅳ類　「屯」の字形でウ冠と一体化したもの。



第77図　須恵器　蓋

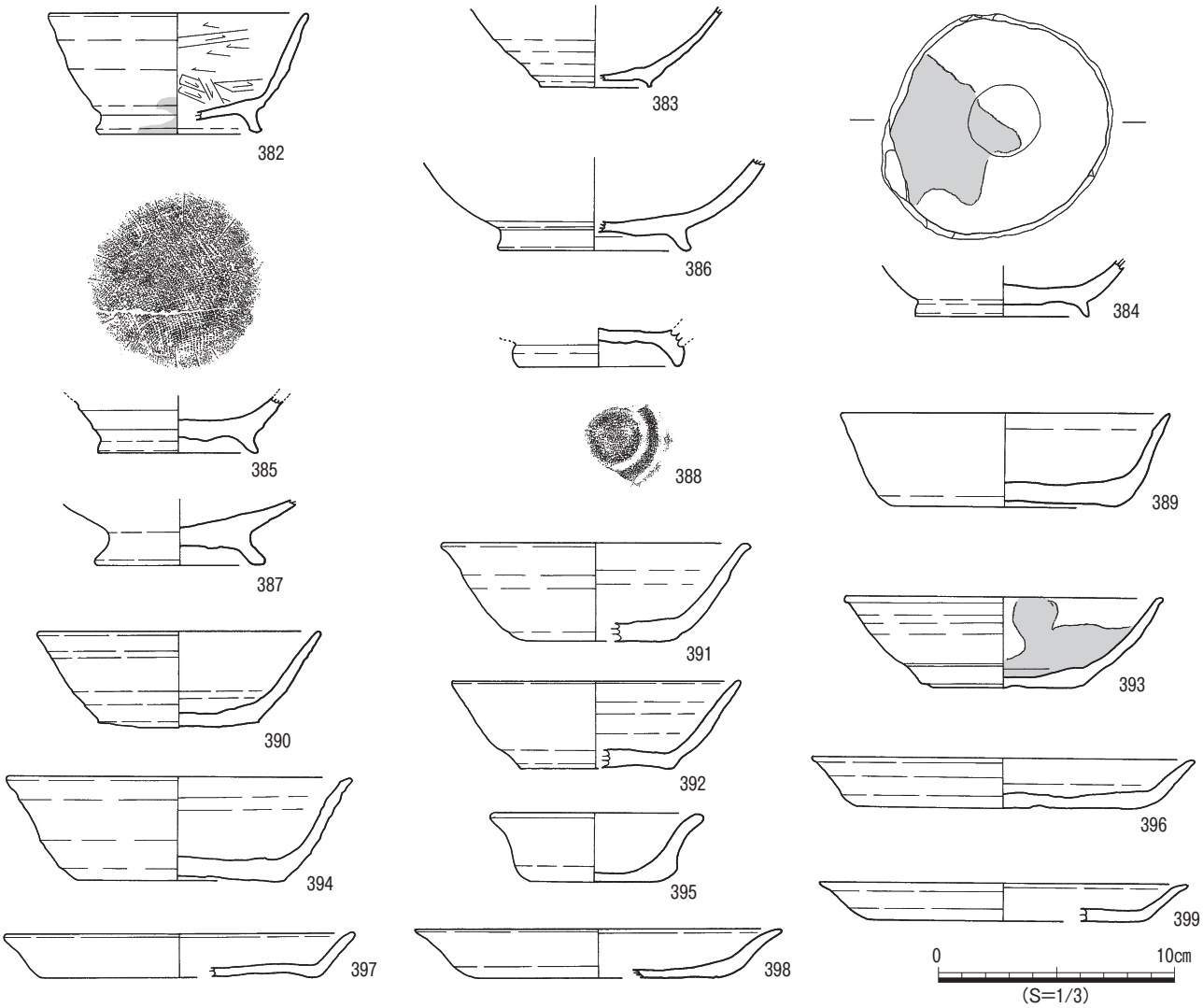
墨書土器（第84図462～第87図507）

墨書の確認できた46点を図化した。462～471は「宅」と読めるもの，およびその一部と考えられるものである。宅Ⅰ類に466・469，宅Ⅱ類に462・465・470，宅Ⅲ類に463，宅Ⅳ類に464が分類される。468，471は一部のみ残存する。464は，内黒外赤の丁寧に磨かれた土師器椀に，「宅」の変形したと考えられる「屯」の墨書が施されている。字形の同じものは，土坑４号出土の朱書きの44がある。472～475は「福」と読めるもの，およびその一部と考えられるものである。472～474は，C-32区Ⅲ層から出土した黒色土器Ⅰ類の体部外面に，墨書を施されたという共通点がある。476・480・481は「作」と読めるもの，およびその一部と考えられるものである。480・481は旁の一部である。476は底部外面にヘラ記号も施されている。477～479は「万」と読めるものを含むもの，およびその一部と考えられるものである。477は「中万」と読める。482・483は記号と考えられるものである。

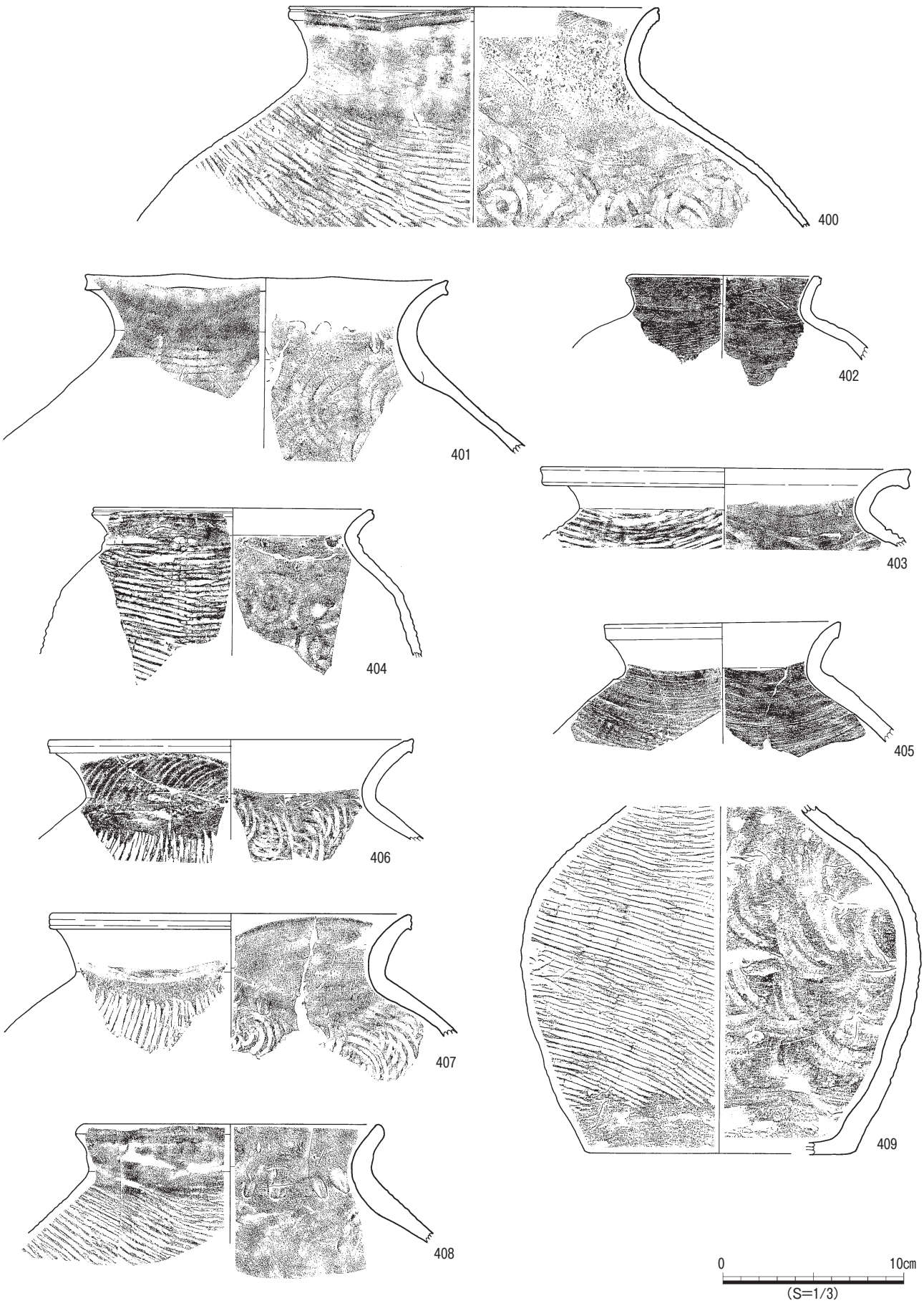
482は逆三角形の記号と思われる。ピット26出土の76にも同様の記号が施されている。483は２箇所に墨書を施されている。左側の記号は長方形の隅部に丸がついた形状の一筆書きである。484～507は墨書の一部のみ残存し判読ができないものである。484は「大」もしくは「六」に類似する。ピット３出土の53からも，同様の墨書を観察できる。505は溝15号から出土している。

ヘラ書き・刻書土器（第88図508～第94図640）

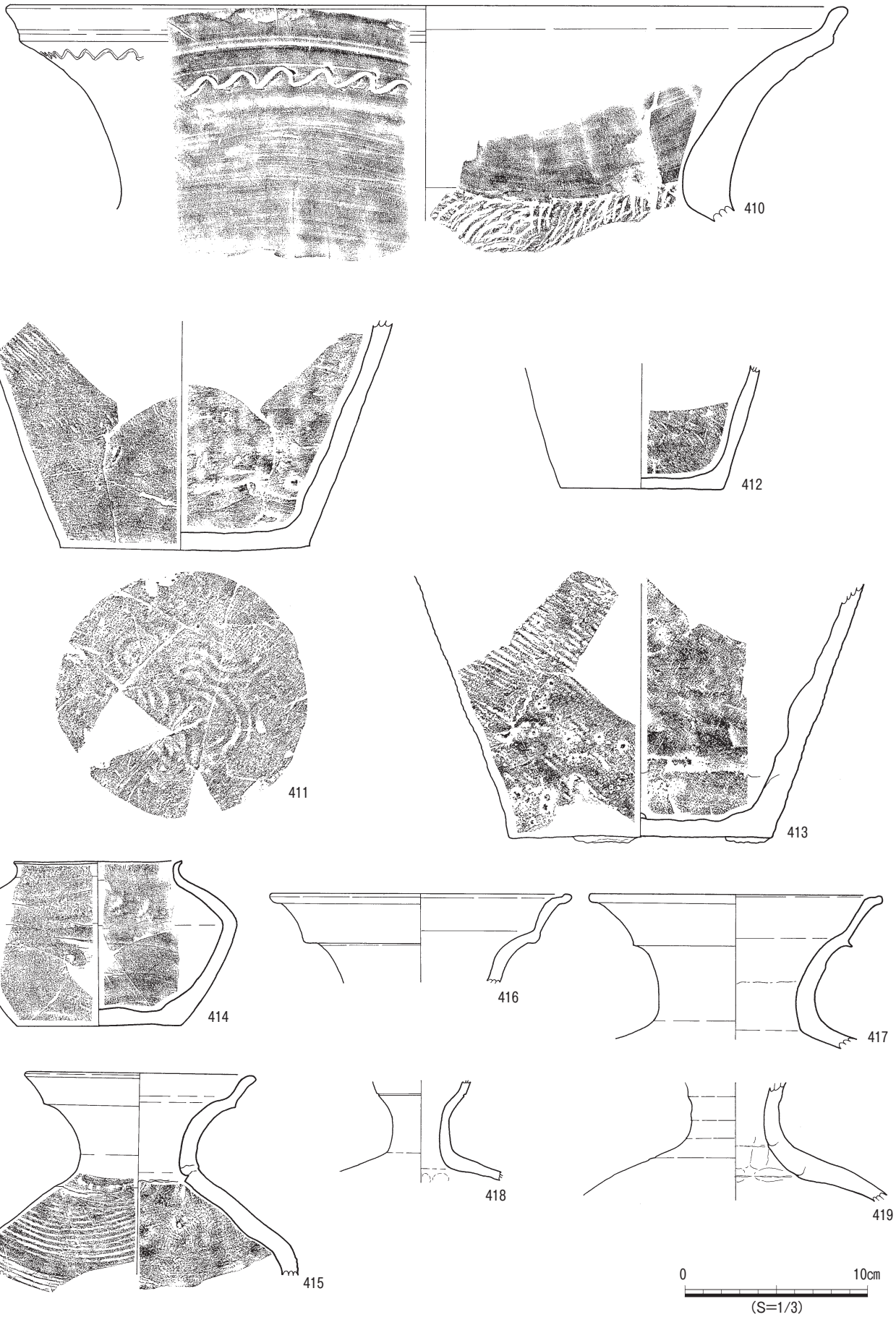
ヘラ書き・刻書の確認できた133点を図化した。土器の焼成前にヘラなどで文字や記号が施されたものをヘラ書き土器とし，焼成後に施されたものを刻書土器とした。ヘラ書き土器が大部分であり，529・547・549・578･580･594・615が刻書土器である。508～525は「宅」と読めるもの，およびその一部と考えられるものである。宅Ⅰ類に516･518･520，宅Ⅱ類に511・519，宅Ⅲ類に508・510・512，宅Ⅳ類に509･513･517･523～525が分類される。514・515・521・522は一部のみ残存する。508と同じ字形は溝８号出土の257・261や463などの墨書にも見られる。526は白色を呈する皿の底部内面に「金財」と施されている。掘立柱建物を建て替えたC-27区で出土した。527･528は「富」と読めるものの一部と考えられるものである。



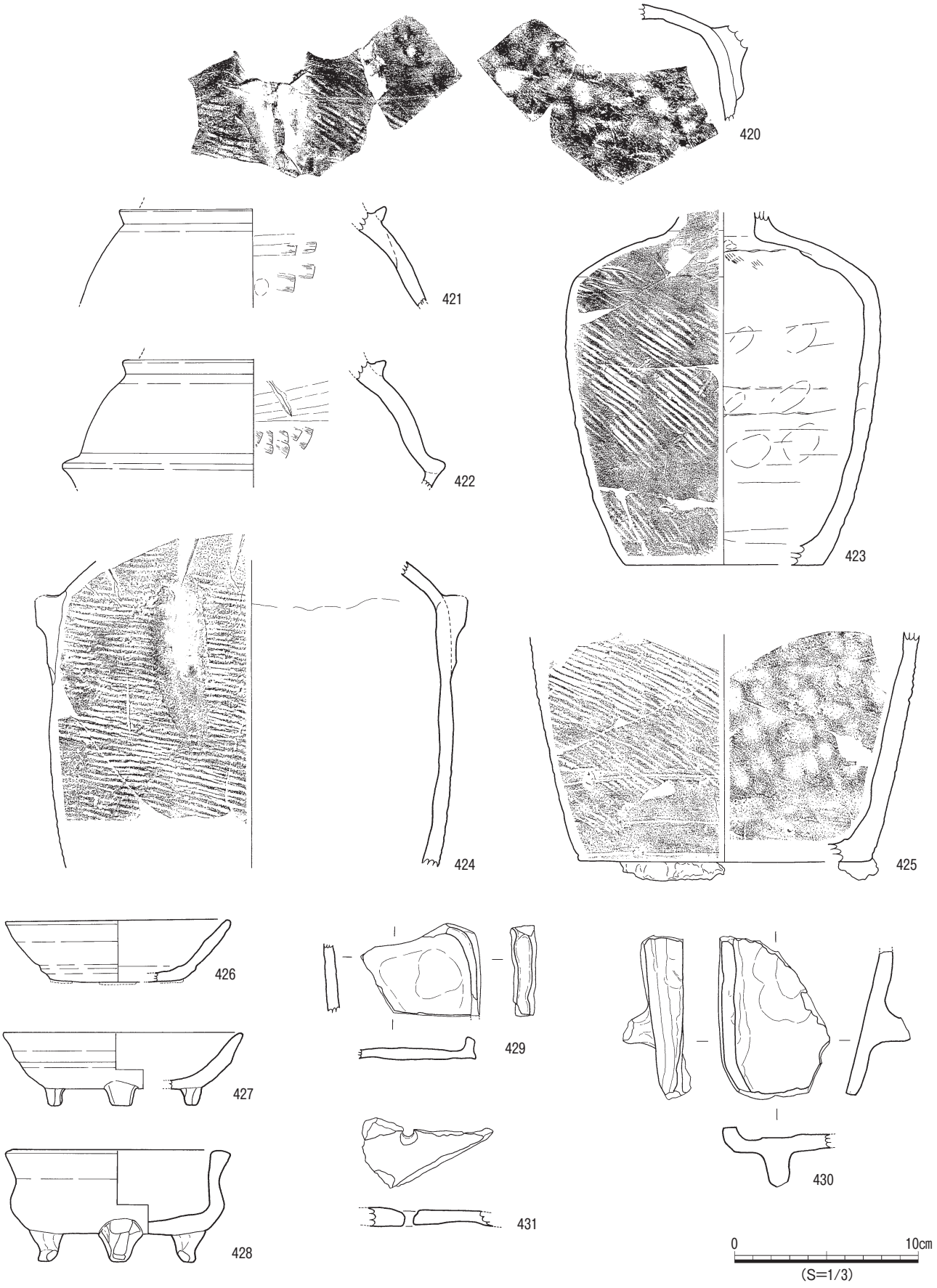
第78図　須恵器　椀・坏・皿



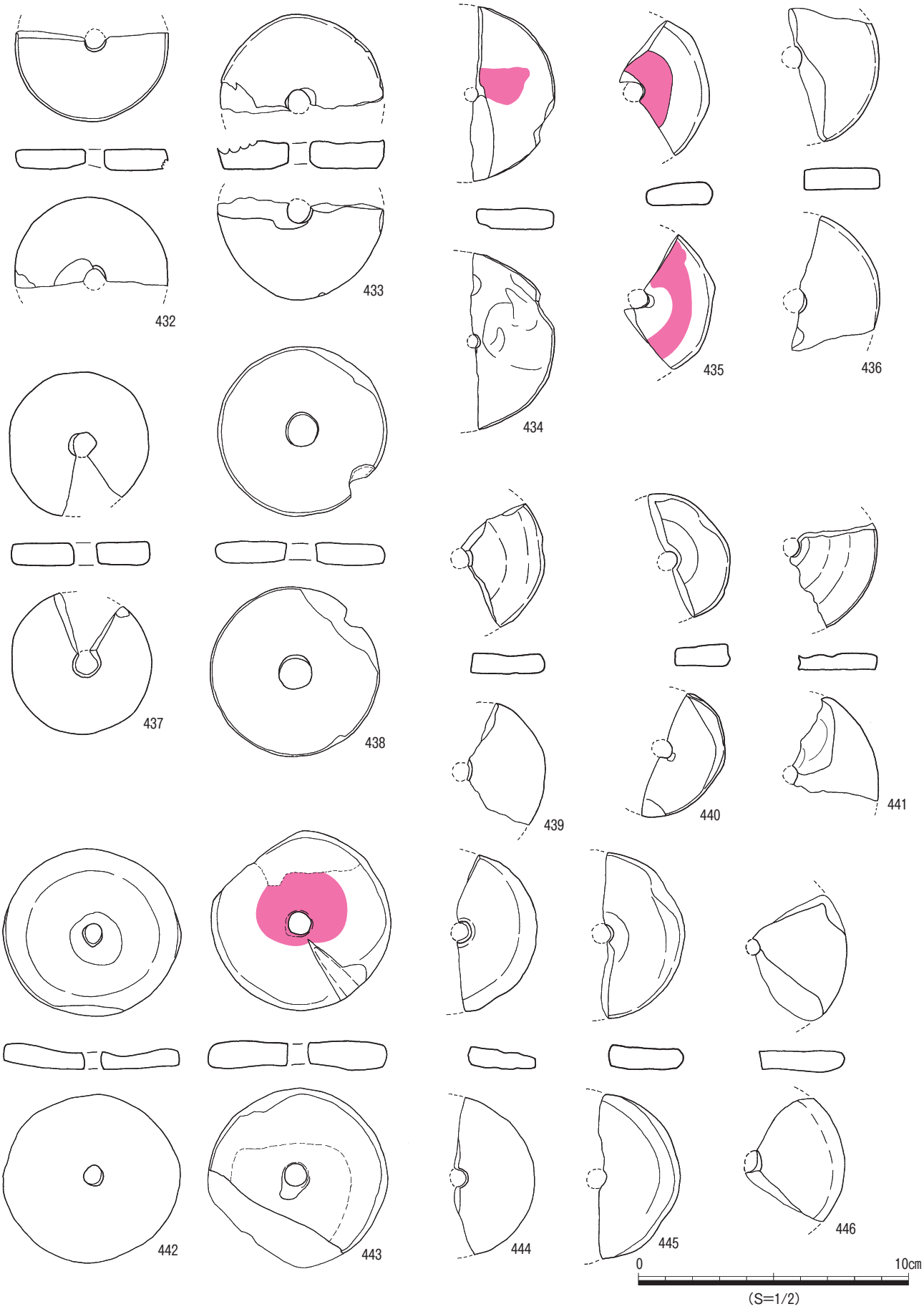
第79図　須恵器　甕



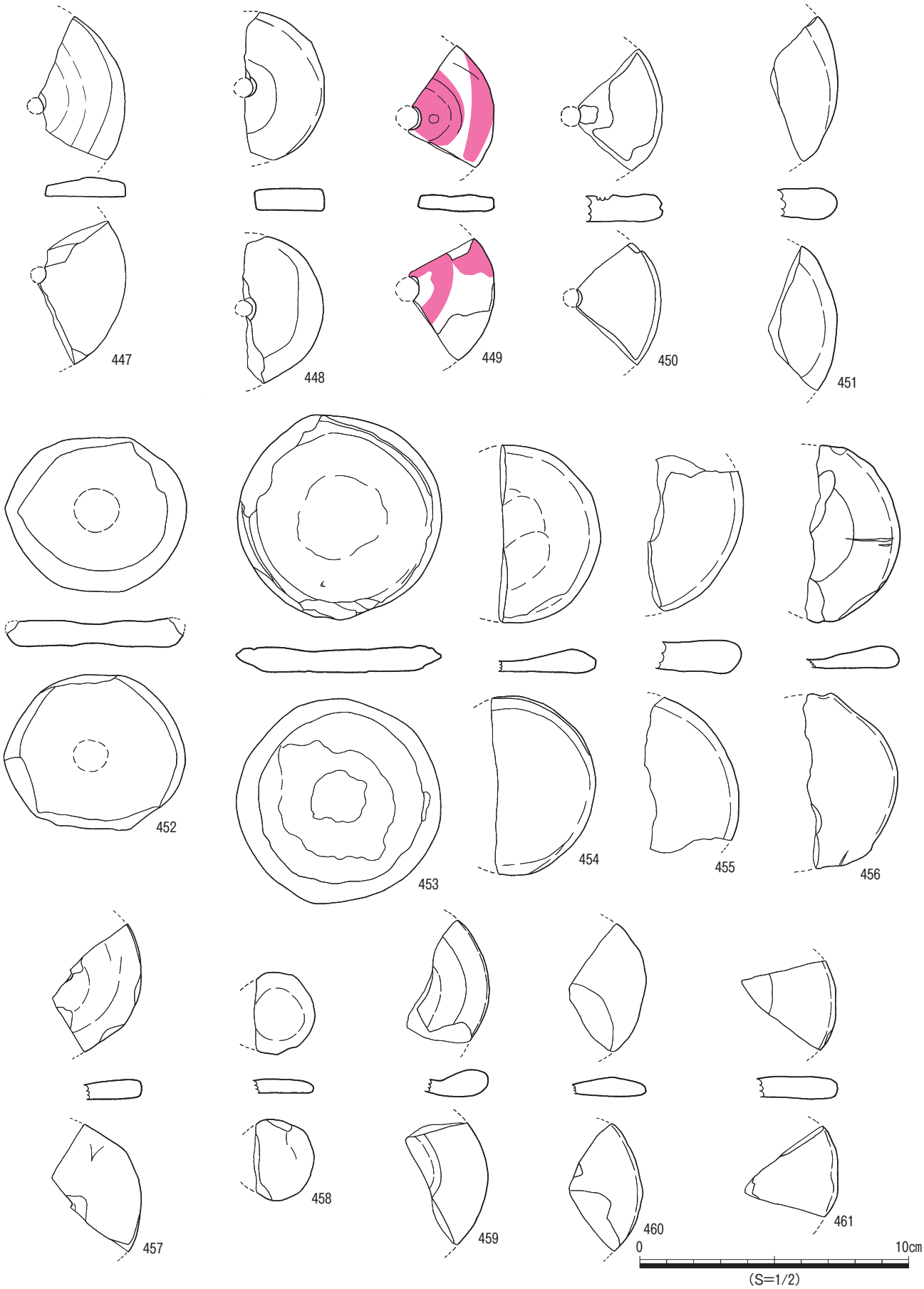
第80図　須恵器　甕・鉢・壺



第81図　須恵器　壺・硯ほか


432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
0
10cm
(S=1/2)

第82図　土製品 1


447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
0
10cm
(S=1/2)

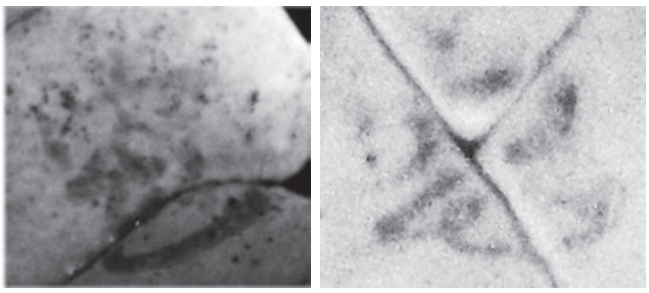
第83図　土製品２



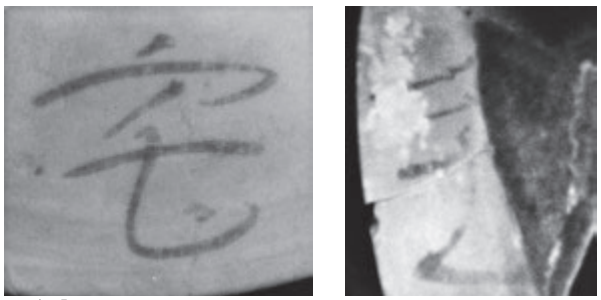
第84図　墨書土器１


472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
0
10cm
(S=1/3)

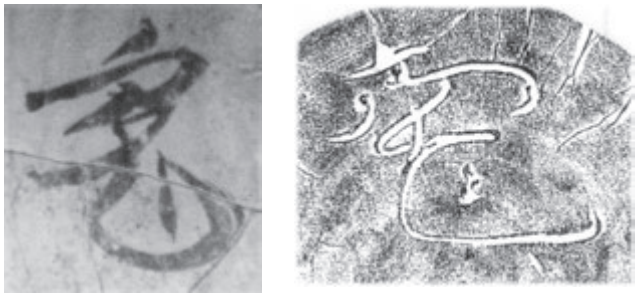
第85図　墨書土器２



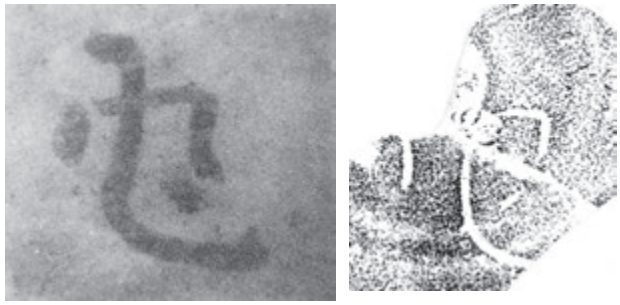
［Ⅰ類］
ウ冠の字形の下部が「ワ」の形になっているもの。



［Ⅱ類］
ウ冠の字形の下部が「つ」の形になっているもの。

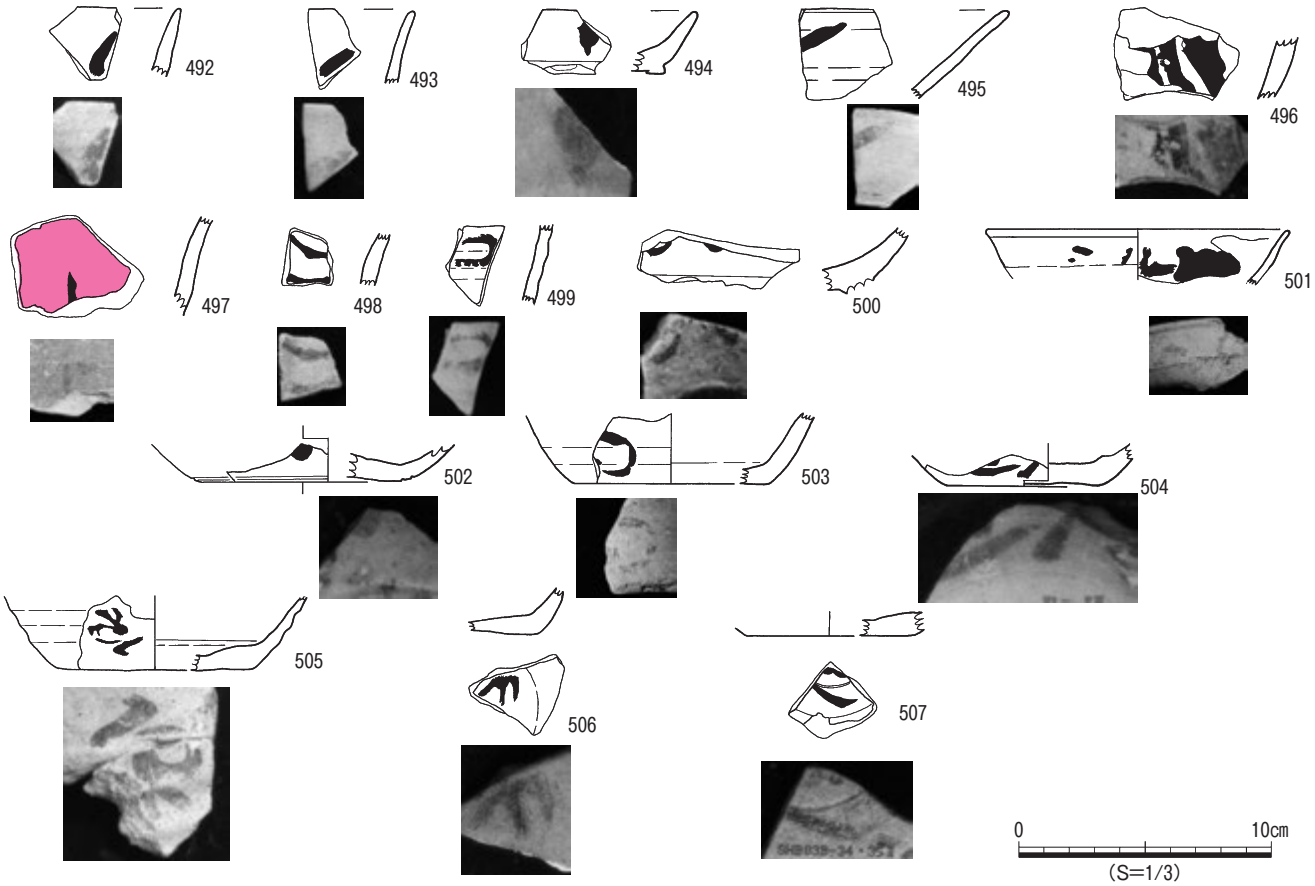


［Ⅲ類］
草書体で墨書されたもの。ウ冠の左側が巻く形状のものもある。



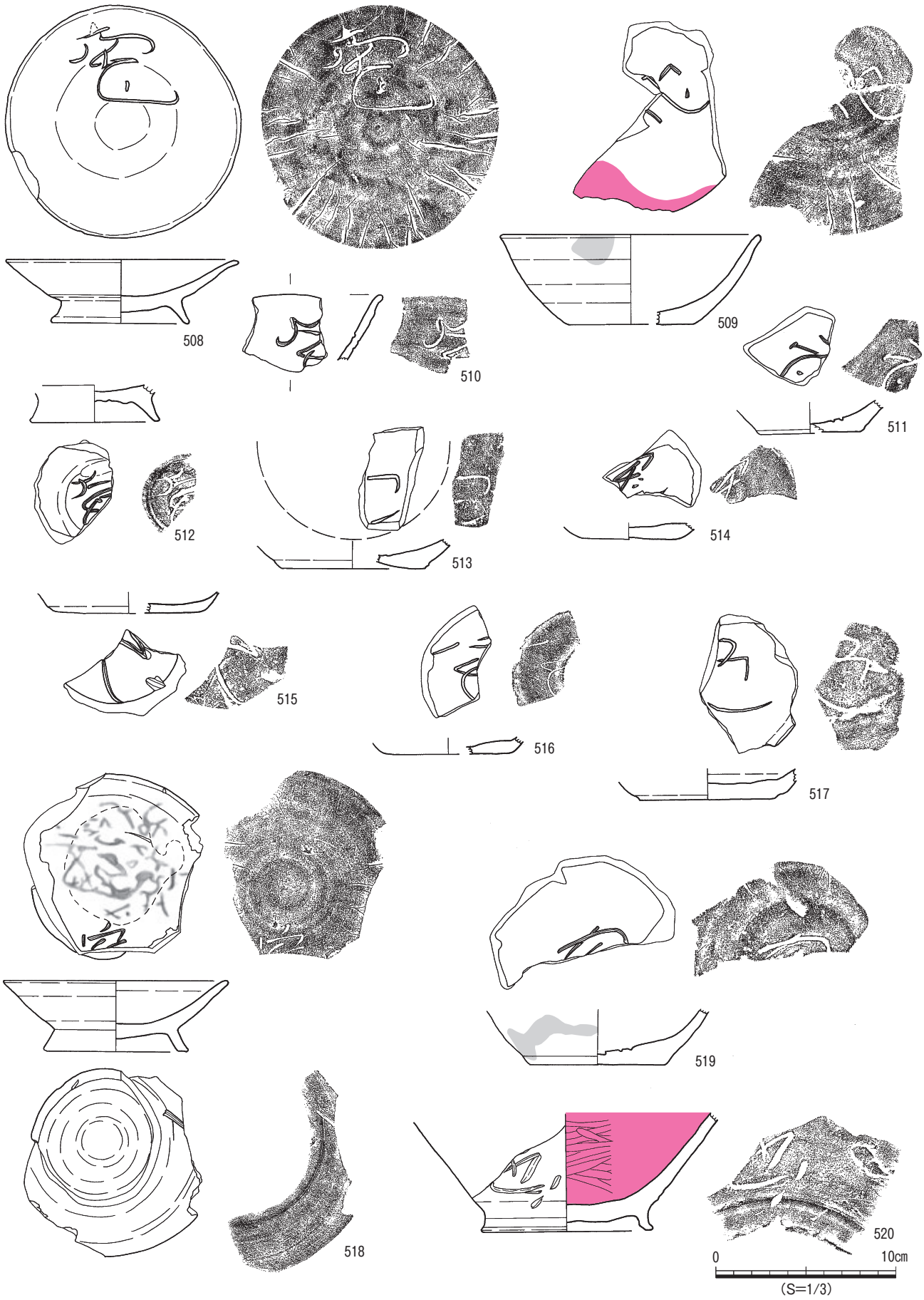
［Ⅳ類］
ウ冠が「千」とつながり，「巾」の形になっているもの。

第86図　墨書・「宅」の分類

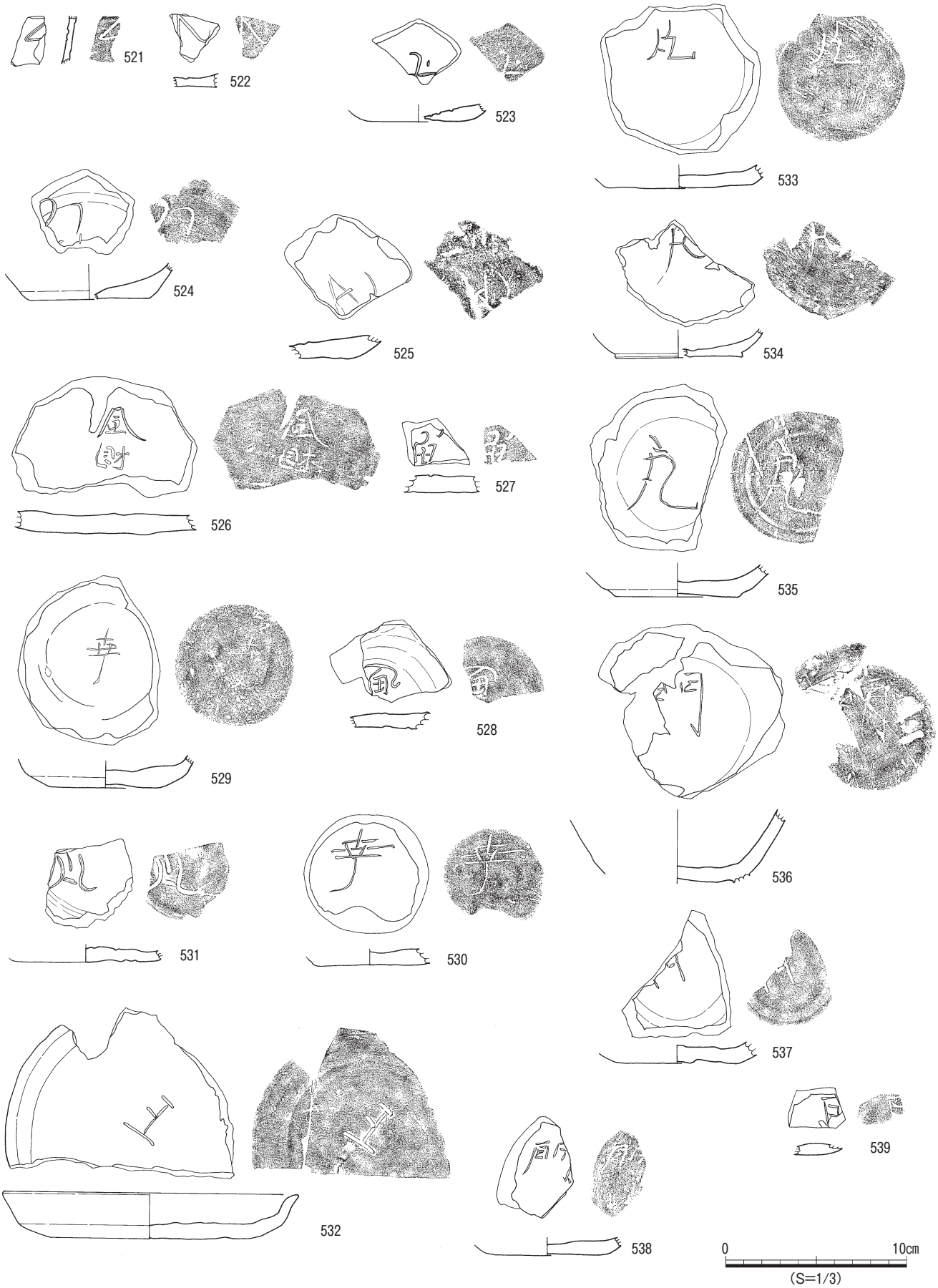


第87図　墨書土器３

529・530は「幸」と読めるもので，左下に撥ねる特徴がある。530は丸く整形された土師器坏の底部内面にヘラ書きを施されている。531・532は「山」と読めるものである。533～535は「凡」と読めるもの，およびその一部



第88図　ヘラ書き土器１

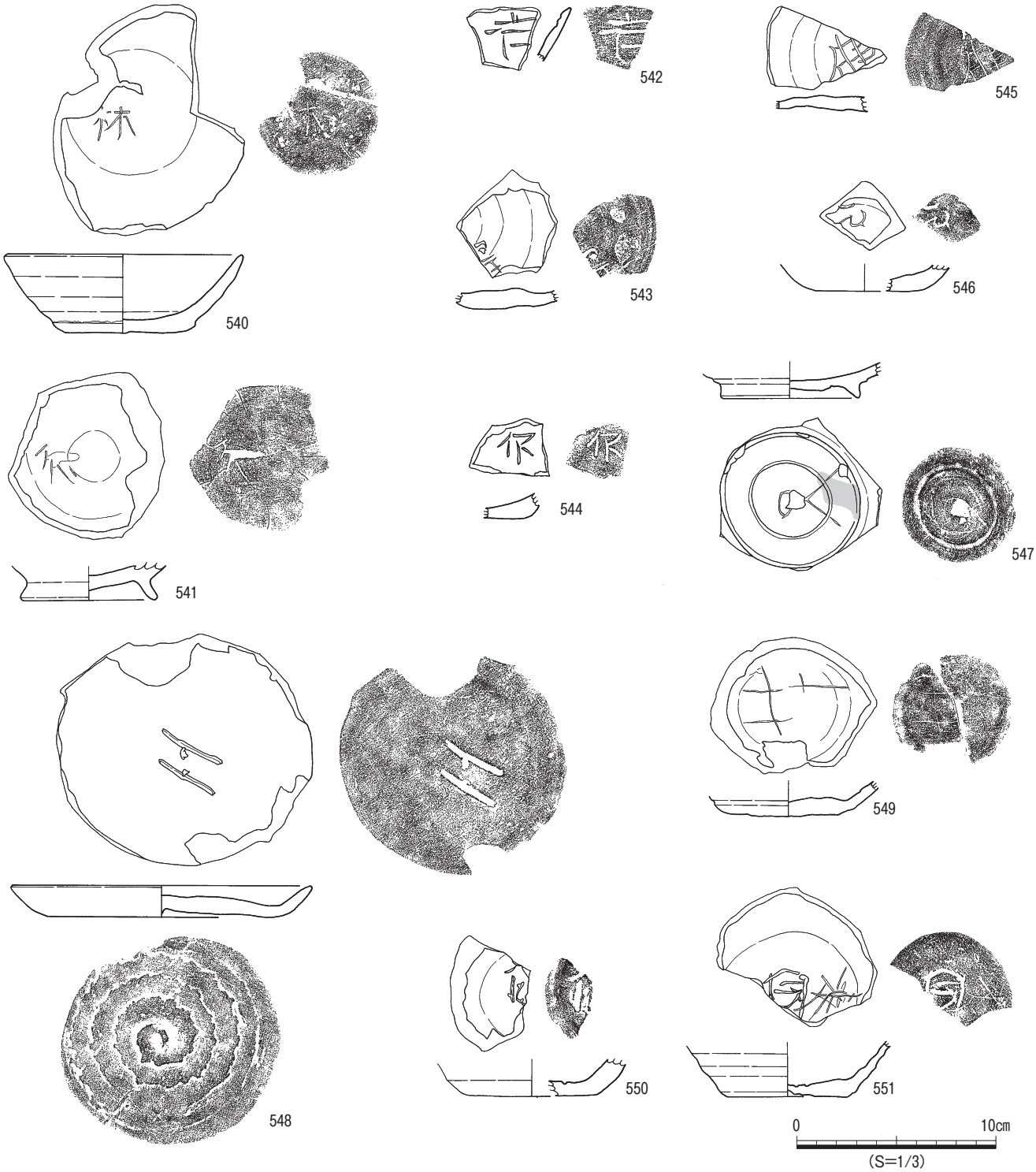


第89図　ヘラ書き土器２

と考えられるものである。536～539・641は「門」と読めるもの，およびその一部と考えられるものである。540は「林」と読めるものである。541～545は「作」と読めるもの，およびその一部と考えられるものである。546～549は記号と考えられる。550～640はヘラ書き・刻書の一部残存するもので判読ができないものである。552・553・555・557は，須恵器の蓋外面に556・558～560・562・563・566・567・571・572・583は体部内面に，593は底部内外面に，ヘラ書きが施されている。529・547・549・551・578・580・594・615は刻書が施されている。615は，317と同器形である。635は溝15号から出土している。

スタンプ文土器（第94図642）

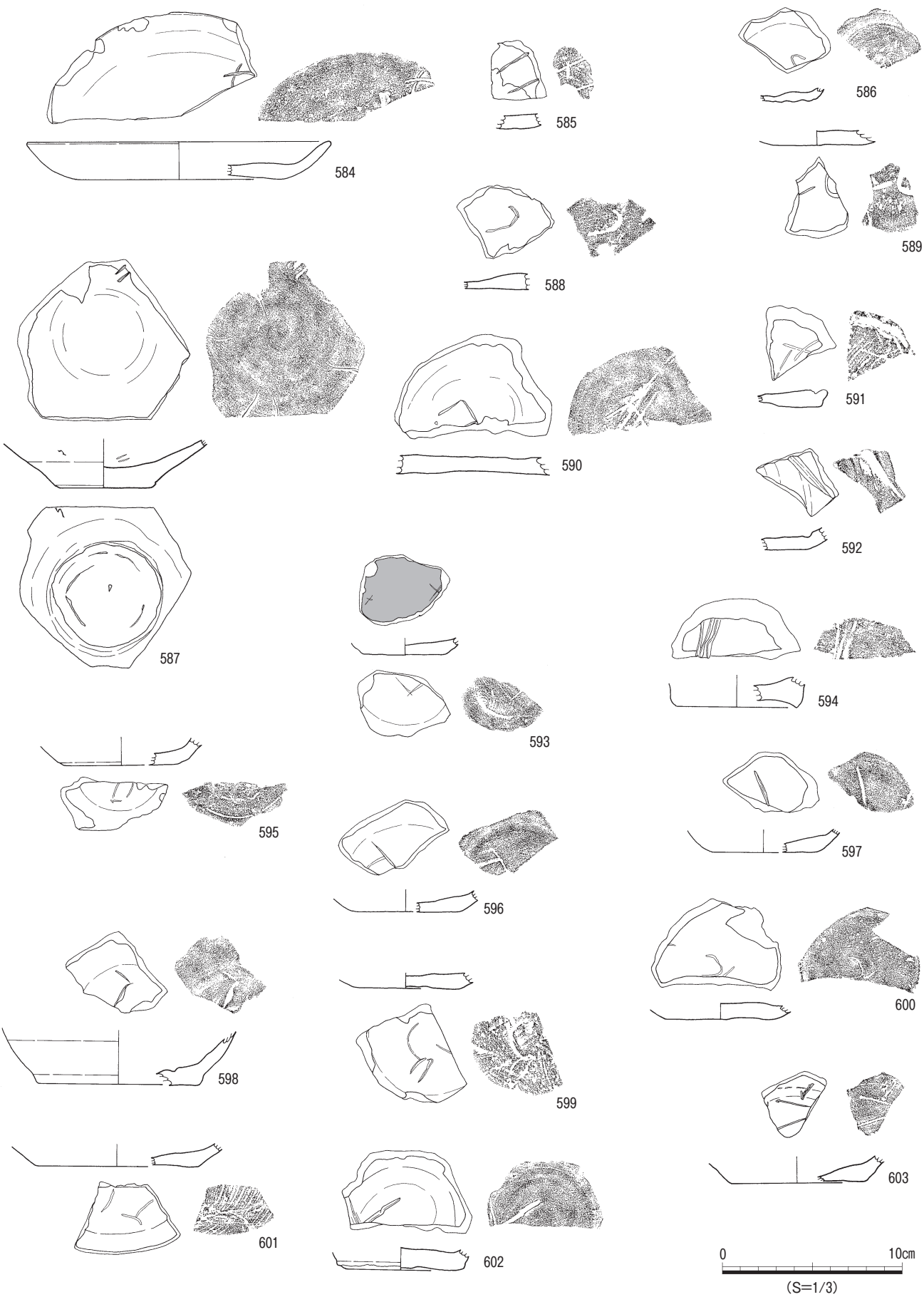
642の１点のみ出土した。底部内面に焼成前に押印したものである。端部が残存するもので判読できない。



第90図　ヘラ書き土器３



第91図　ヘラ書き土器４



第92図　ヘラ書き土器５



第93図　ヘラ書き土器６



第94図　ヘラ書き土器７

土師器・黒色土器・赤色土器（一般）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	法量（cm）			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	内側	外側		
72	270	B-20	Ⅲ	土師器	椀ⅠAa	口縁～底部	15.3	8.0	6.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	271	B-20	Ⅲ	土師器	椀ⅡAa	口縁～底部	16.6	8.0	7.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	272	B-33	Ⅲ	土師器	椀	口縁～底部	16.0			横ナデ	横ナデ	淡黄色	
73	273	E-31	Ⅲ	土師器	坏Ⅱ	口縁～底部	11.8	7.2	3.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	274	C-33	Ⅲa	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.4	6.4	4.8	横ナデ	横ナデ・ケズリ	橙色	
	275	A-31	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.0	6.4	4.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	276	B-36・37	Ⅱ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.8	6.0	3.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	内外面スス付着
	277	B-16	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.4	7.6	4.3	横ナデ	横ナデ	浅黄色	
	278	C-33	Ⅲb	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.6	6.4	4.4	横ナデ	横ナデ	(内)黄灰色 (外)灰白色	
	279	B-24	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	14.2	7.0	6.1	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	280	B-33	Ⅲb	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.6	5.3	4.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	281	A-28	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.8	6.4	4.0	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	282	B-28	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.2	6.4	4.4	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	283	E-25	Ⅱ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.2	6.8	5.3	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	284	F-11	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.4	7.0	4.6	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	
	285	B-33	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.3	6.6	3.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	286	D-32	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.0	7.1	4.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	287	C-18	Ⅲ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	14.4	6.2	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	288	C-31	Ⅱ	土師器	坏ⅢAa	口縁～底部	13.4	6.4	4.1	横ナデ	ヘラケズリ	橙色	
	289	C-34	Ⅲb	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	12.6	6.3	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	290	B-33	Ⅲ	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	14.0	7.6	5.1	横ナデ	横ナデ	黄橙色	
	291	C-34	Ⅲb	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	14.0	6.8	4.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	292	A-25	Ⅲ	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	13.2	7.4	4.6	横ナデ	横ナデ	浅黄色	
	293	C-37	Ⅲb	土師器	坏ⅢAb	口縁～底部	13.0	6.0	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	294	C・B-33	Ⅱ・Ⅲa	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	12.8	7.0	3.5	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	295	B-20	Ⅲ	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	12.8	6.0	4.7	横ナデ	横ナデ	(内)浅黄色 (外)淡黄色	
	296	A-20	Ⅲ	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	12.0	6.0	4.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	スス付着
	297	B-19	Ⅲ	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	13.0	7.0	4.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	298	C-24	Ⅲ	土師器	坏ⅢBa	口縁～底部	12.8	5.6	4.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	299	D-23	Ⅲ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.6	8.0	4.3	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	300	C-32	Ⅲ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.5	6.4	3.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	301	A-23	Ⅲ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.0	6.4	4.6	ミガキ	横ナデ	にぶい橙色	スス付着
	302	A'-21	Ⅲ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.0	6.4	4.2	ミガキ	横ナデ	浅黄橙色	
74	303	C-36		土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.8	6.8	3.4	ミガキ	横ナデ	浅黄橙色	
	304	B-18	Ⅲ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.0	7.0	3.7	ミガキ	横ナデ	浅黄色	
	305	B-33, C-33	Ⅲb	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.8	6.6	4.4	横ナデ	ミガキ・横ナデ	(内)浅黄橙色 (外)にぶい黄橙	外面スス付着
	306	C-33	Ⅲb	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.3	7.0	4.2	横ナデ	横ナデ	淡黄色	スス付着
	307	A-29	Ⅲ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	12.2	6.0	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	308	C-33	Ⅱ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	14.6	6.6	4.7	横ナデ	横ナデ	(内)淡黄色 (外)浅黄橙色	外面スス付着
	309	C-34		土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	7.0	5.0	4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	310	B-20	Ⅲ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.0	6.0	4.3	横ナデ	横ナデ	黄橙色	
	311	B-33		土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	11.8	6.6	3.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	312	F-11	Ⅲ	土師器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.0			横ナデ	横ナデ	(内)にぶい黄橙色	内面スス付着
	313	F-6	Ⅱ	土師器	坏Ⅳ	口縁～底部	11.6	6.0	5.2	ナデ	横ナデ	橙色	
	314	B-24	Ⅲ	土師器	坏Ⅴ	口縁～底部	8.2	5.2	3.1	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	内面スス付着
	315	C-33	Ⅲb	土師器	坏Ⅵ	口縁～底部	13.0	6.6	2.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	316	B-28	Ⅲ	土師器	坏Ⅵ	口縁～底部	14.0	4.5	3.2	横ナデ	ナデ	(内)浅黄橙色 (外)にぶい橙色	
75	317	E-22	Ⅱ	土師器	椀	脚部				ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	318	B-33, C-33	Ⅱ	土師器	高台付皿Ⅱ	口縁～底部	12.8	6.8	4.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	内面スス付着
	319	B-19	Ⅲ	土師器	高台付皿Ⅵ	口縁～底部	13.2	7.0	3.9	ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	320	D-32, C-32	Ⅲ	土師器	高台付皿Ⅱ	口縁～底部	12.6	6.0	3.0	ナデ	横ナデ	浅黄橙色	内面スス付着
	321	D-30		土師器	皿	口縁～底部	14.6	9.4	2.3	ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	322	C-19, D-19	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	13.4	10.3	1.6	横ナデ	横ナデ	明黄褐色	
	323	C-24	Ⅲ	土師器	鉢Ⅲ	口縁～底部	17.0	6.9	7.9	ナデ・ケズリ・指頭痕	ナデ・ケズリ・指頭痕	(内)浅黄橙色 (外)淡黄色	
	324	B-20	Ⅲ	土師器	鉢Ⅲ	口縁～底部	16.2			ナデ	ナデ	(内)浅黄色 (外)黄橙色	
	325	C-30	Ⅲb	土師器	鉢	口縁～底部	13.5	2.0	8.4	ハケメ	ヘラナデ	(内)黒色 (外)明赤褐色	
	326	A-23	Ⅲ	土師器	壺	頸部～底部		3.5	14.8	ナデ	ヘラナデ	(内)黄灰色 (外)浅黄色	
	327	B-20		土師器	甕Ⅱ	口縁～胴部	32.0			ナデ・ケズリ	ナデ	(外)橙色 (内)浅黄橙色	
	328	-		黒色土器Ⅰ	椀ⅦBa	口縁～底部	15.2	6.2	5.6	ミガキ	ナデ	(内)黒色 (外)浅黄色	
	329	D-25	Ⅲ	黒色土器Ⅰ	椀ⅧBa	口縁～底部	16.7	7.0	6.3	ミガキ	ミガキ・ナデ	(内)黒色 (外)浅黄橙色	
	330	AB-11		黒色土器Ⅰ	椀ⅧBa	口縁～底部	17.2	7.1	6.5	ミガキ	ミガキ	(外)にぶい黄橙色 (内)黒色	
	331	C-31	Ⅲ	黒色土器Ⅰ	椀	口縁～底部		6.6		ミガキ	ナデ	(内)黒色 (外)にぶい黄橙	
	332	C-30		黒色土器Ⅱ	皿	胴～底部		7.0		ミガキ	ミガキ	黒色	
	333	B-31	Ⅲ	黒色土器Ⅱ	皿	口縁～底部				ミガキ	ミガキ	黒色	
	334	D-27	Ⅲ	黒色土器Ⅱ	皿	口縁～底部	8.8	4.9	1.9	ミガキ	ミガキ	黒色	
	335	-		黒色土器Ⅱ	皿	口縁～底部	9.9	7.8	1.5	ミガキ	ミガキ	黒色	
76	336	D-32	Ⅲa	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBb	口縁～底部	15.6	8.2	6.5	ミガキ	ナデ	(内)橙色 (外)にぶい黄橙	
	337	B-20	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBb	口縁～底部	15.0	7.2	5.9	横ナデ	横ナデ	(内)橙色 (外)淡黄色	椀Ⅰ類 9c前半
	338	A-23	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBb	口縁～底部	15.0	8.2	5.9	ミガキ	横ナデ	(内)明赤褐色 (外)明黄褐色	
	339	D-37	Ⅳ	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBa	口縁～底部	15.0	7.4	5.5	ミガキ	ミガキ	(内)橙色 (外)淡黄色	
	340	C-24, D-24	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBa	口縁～底部	15.4	8.6	6.0	ミガキ	横ナデ	浅黄橙色	
	341	B-19	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	椀ⅡAb	口縁～底部	15.4	8.3	6.4	ミガキ	横ナデ	(内)橙色 (外)浅黄橙色	
	342	D	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	椀ⅡBa	口縁～底部	15.0	9.2	5.7	ミガキ・ナデ	横ナデ	(内)橙色 (外)にぶい黄橙	内面スス付着
	343	B-19・20, D-19	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	椀ⅤAa	口縁～底部	15.6	8.2	5.3	ミガキ	横ナデ	(内)にぶい赤褐色 (外)浅黄橙色	
	344	B-24	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	椀	口縁～底部	15.6			ミガキ・ナデ	横ナデ	(内)黒色 (外)橙色	内外面スス付着
	345	C-2		赤色土器Ⅰ	高坏	口縁～底部		7.6		ミガキ	ナデ	(内)橙色 (外)黄橙色	

赤色土器・須恵器（一般）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	法量（cm）			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	内側	外側		
	346	E-20	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	高坏	胴部				ミガキ	ナデ	(内)橙色 (外)浅黄橙色	
	347	C-32	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.0	8.5	3.8	ナデ	ナデ	(内)橙色 (外)にぶい黄橙	
	348	C-34		赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.0	8.0	3.5	ナデ	ナデ	(内)明赤褐色 (外)浅黄橙色	
	349	－		赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.4			ナデ	ナデ	(内)橙色 (外)浅黄橙色	
	350	D-21	Ⅲ	赤色土器Ⅱ	高台付皿	口縁～底部	13.6	6.2	36.9	ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	351	B-37	Ⅲ	赤色土器Ⅱ	坏Ⅰ	口縁～底部	16.8	5.8	4.9	ミガキ・ナデ	ミガキ	橙色	北部九州型　8c末　坏D
	352	C-33	Ⅲb	赤色土器Ⅱ	坏Ⅰ	口縁～底部	16.0	5.6	4.5	ミガキ・指ナデ	ヘラケズリ	(内)橙色 (外)浅黄色	坏D手法
	353	B-37	Ⅲ	赤色土器Ⅱ	坏Ⅱ	口縁～底部	14.2	8.0	3.8	ミガキ	ミガキ	浅黄橙色	
	354	F-4	Ⅳ	赤色土器Ⅱ	皿	口縁～底部	14.2	9.4	2.4	横ナデ	横ナデ	(内)にぶい橙色 (外)明黄褐色	
77	355	D-31	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部～体部		2.5		ナデ	ナデ	(内)浅黄橙色 (外)にぶい黄橙	底径はつまみ径
	356	E-30	Ⅰb	須恵器	蓋Ⅲ	つまみ部～体部				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	357	A-30		須恵器	蓋Ⅲ	つまみ部～体部		3.1		ナデ	ナデ	灰色	底径はつまみ径
	358	C-24	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部～体部		3.2		横ナデ	横ナデ	(内)にぶい赤褐色	底径はつまみ径
	359	D-9		須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部		2.7		ナデ	ナデ	黄灰色	底径はつまみ径
	360	G-14	Ⅱ	須恵器	蓋Ⅲ	つまみ部		2.7		ナデ	ナデ	灰緑色	底径はつまみ径
	361	D-27	Ⅱ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部		2.4		ナデ	ナデ	灰緑色	底径はつまみ径
	362	G-7	Ⅱ	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部		2.2		ナデ	ナデ	浅黄橙色	底径はつまみ径
	363	B-20		須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部		2.4		ナデ	ナデ	にぶい橙色	底径はつまみ径
	364	F-6	Ⅱ	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部		2.2		ナデ	ナデ	浅黄色	底径はつまみ径
	365	E-31		須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部		2.2		ナデ	ナデ	橙色	底径はつまみ径
	366	D-25	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部		2.0		ナデ	ナデ	灰黄色	底径はつまみ径
	367	E-21	Ⅱ	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部		3.4		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底径はつまみ径
	368	G・H-5	Ⅰb	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部		2.7		ナデ	ナデ	浅橙色	底径はつまみ径
	369	D-5	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部		2.2		ナデ	ナデ	浅黄橙色	底径はつまみ径
	370	－		須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部		2.6		ナデ	ナデ	(内)灰色 (外)にぶい褐色	底径はつまみ径
	371	CD-2		須恵器	蓋	体部	17.1			ナデ	ナデ	にぶい橙色	
	372	E-29	Ⅱ	須恵器	蓋	体部	13.4			横ナデ	横ナデ	灰黄色	
	373	D-22	Ⅰb	須恵器	蓋	体部	14.0			横ナデ	横ナデ	灰黄色	
	374	B-30	Ⅲ	須恵器	蓋	体部	15.0			横ナデ	横ナデ	灰色	
	375	D-7	Ⅲ	須恵器	蓋	体部	13.0			横ナデ	横ナデ	(内)にぶい黄色 (外)灰緑色	
	376	B-28	Ⅲ	須恵器	蓋	体部				横ナデ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)にぶい橙色	
	377	D-20	Ⅱ	須恵器	蓋	体部	13.4			ナデ	ナデ	(内)橙色 (外)にぶい褐色	
	378	D-28		須恵器	蓋	体部				ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	379	D-2		須恵器	蓋	体部				ナデ	ナデ	浅黄橙色	
	380	C-37	Ⅲb	須恵器	蓋	体部	15.6			横ナデ	横ナデ	灰黄色	
	381	A-28	Ⅱ	須恵器	小型蓋Ⅲ	体部	8.3	2.3	2.1	ナデ	ナデ	明褐灰色	底径はつまみ径
78	382	B-27	Ⅲ	須恵器	椀ⅠBa	口縁～底部	11.1	7.0	5.1	横ナデ	横ナデ	橙色	ススク付着
	383	－		須恵器	椀Ⅳ	胴部～底部		4.8		横ナデ	横ナデ	灰白色	
	384	－		須恵器	椀Ⅳ	底部		7.6		ミガキ	ナデ	(内)灰黄色 (外)浅黄色	ススク付着
	385	E-11	Ⅲ	須恵器	椀Ⅴ	胴～脚		6.8		ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部布目痕
	386	B-27	Ⅲ	須恵器	椀Ⅴ	胴部～底部		8.4		横ナデ	横ナデ	(内)にぶい褐色 (外)明赤褐色	
	387	B-37	Ⅲ	須恵器	椀Ⅵ	底部		7.2		横ナデ	横ナデ	(内)橙色 (外)明赤褐色	
	388	E-26	Ⅱ	須恵器	椀Ⅴ	底部		6.8		横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	底部布目痕
	389	F-8	Ⅱ	須恵器	坏Ⅱ	口縁～底部	14.0	9.4	3.9	横ナデ	横ナデ	橙色	
	390	C-33	Ⅲ	須恵器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.0	6.8	4.1	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	
	391	D-32	Ⅲb	須恵器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.0	6.0	4.2	ナデ	ナデ	(内)浅黄色 (外)にぶい黄色	
	392	A-36	Ⅱ	須恵器	坏ⅢAa	口縁～底部	12.2	6.4	3.7	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	
	393	C-33	Ⅲa	須恵器	坏ⅢBb	口縁～底部	13.4	6.0	3.9	ナデ	ナデ	(内)浅黄色 (外)にぶい黄色	内面、ススク付着
	394	F-10	Ⅲ	須恵器	坏ⅢBb	口縁～底部	14.6	8.8	4.4	横ナデ	横ナデ	(内)黄橙色 (外)橙色	
	395	D-19	Ⅱ	須恵器	坏ⅤAa	口縁～底部	9.0	5.6	3.0	ナデ	工具ナデ・ケズリ	灰褐色	
	396	－	Ⅵ	須恵器	皿	口縁～底部	16.2	11.8	2.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	
	397	C-22	Ⅰb	須恵器	皿	口縁～底部	14.8	11.6	1.9	横ナデ	横ナデ	灰緑色	
	398	A-24	Ⅱ	須恵器	皿	口縁～底部	15.5	10.2	2.1	横ナデ	横ナデ	(内)浅黄色 (外)灰白色	
	399	G-8	Ⅱ	須恵器	皿	口縁～底部	15.6	11.4	1.6	横ナデ	横ナデ	灰緑色	
79	400	B-29	Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	20.4			同心円状タタキ	平行タタキ	灰色	
	401	D-30, E-31	Ⅰb・Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	20.0			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色	
	402	D-22, E-22	Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	10.8			平行タタキ	平行タタキ	灰黄色	
	403	－		須恵器	甕	口縁部	20.4			同心円状タタキ	平行タタキ	(内)にぶい黄橙色 (外)褐灰色	
	404	C-24	Ⅲ	須恵器	甕	口縁～胴部	15.6			同心円状タタキ	平行タタキ	灰色	
	405	E-24	Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	13.1			同心円状タタキ・ナデ	格子目タタキ	黒灰黄色	
	406	C-31, D-31	Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	20.2			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色	
	407	C-31	Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	20.0			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色	
	408	D-24	Ⅲ	須恵器	甕	口縁部	17.0			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色	
	409	A-23, B-22・24	Ⅲ	須恵器	甕	胴部～底部		15.0		同心円状タタキ	平行タタキ	灰色	
80	410	C-31, D-32	Ⅰ・Ⅲ	須恵器	大甕	口縁部	46.0			同心円状タタキ・ ナデ	ヘラナデ	灰白色	
	411	A-31, C-27	Ⅱ・Ⅲ	須恵器	鉢Ⅰ	底部		13.6		指頭圧痕	平行タタキ	灰白色	底部同心円状タタキ
	412	－		須恵器	鉢Ⅰ	底部		9.0		ヘラナデ・指頭圧痕	ナデ・指頭圧痕	灰黄色	
	413	B-20	Ⅲ	須恵器	鉢Ⅰ	胴部～底部		14.4		ナデ・指頭圧痕	平行タタキ	褐灰色	
	414	C-30	Ⅲ	須恵器	小壺	口縁～底部	9.2	9.0	9.0	横ナデ	ナデ	灰白色	
	415	E-31		須恵器	壺	口縁～肩部	12.6			指頭圧痕・布目痕	平行タタキ	灰色	
	416	D-31, E-29・30	Ⅱ・Ⅳ	須恵器	壺	口縁部	16.6			ナデ	横ナデ	褐灰色	
	417	B-20	Ⅲ	須恵器	壺	口縁部	16.0			指頭圧痕・ナデ	ナデ	灰色	
	418	D-31	Ⅱ	須恵器	壺	頸部				指圧・ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色	
	419	C-35	Ⅱ	須恵器	壺	頸部	4.8			ナデ・指頭圧痕	ナデ	(内)にぶい黄褐色	
	420	D-31	Ⅱ・Ⅳ	須恵器	壺	肩部				指頭圧痕・布目痕	平行タタキ	(内)にぶい黄褐色	
	421	E-30・31	Ⅱ	須恵器	壺	胴部				工具ナデ・指押さえ	工具ナデ	灰黄色	
	422	B-33	Ⅱ	須恵器	壺	胴部				工具ナデ・ケズリ	工具ナデ	灰黄色	

須恵器　ほか（一般）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	法量（cm）			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	内側	外側		
81	423	A−30,C−31,D−32	Ⅱ・Ⅲ	須恵器	壺	胴部～底部		10.8		ナデ・指頭圧痕・タタキ	平行タタキ	灰黄色	
	424	A−17,C−21・22	Ⅱ・Ⅲ	須恵器	壺	肩部～胴部				指頭圧痕	平行タタキ	灰黄色	
	425	A−24,C−20	Ⅲ	須恵器	壺	胴部～底部		16.0		指頭圧痕	平行タタキ	灰黄色	
	426	F−20	Ⅱ	土製品	火舎？	口～底	12.2			ナデ	ナデ	浅黄色	
	427	D−35		土製品	火舎？	口～脚	13.6	8.8	4.1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	
	428	−		土製品	火舎？	口～脚	12.2	5.2	6.1	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙色	
	429	A−30	Ⅲ	須恵器	円面硯	底部					ナデ	にぶい褐色	
	430	−		須恵器	風字硯	底部						灰褐色	
	431	F−19	Ⅱ	須恵器	蓋	体部				ナデ	ナデ	灰白色	

紡錘車・円形土製品（一般）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位・遺構	器種	種別	法量（cm）		胎土の色調	備考
						最大径	最大厚		
82	432	C−32	Ⅱ	土製品	紡錘車		0.8	浅黄橙色	
	433	F−9	Ⅱ	土製品	紡錘車	6.1	1.05	黒色	
	434	B−33	Ⅲ	土製品	紡錘車		0.8	にぶい黄橙色	
	435	A−28	Ⅲ	土製品	紡錘車		0.85	浅黄色	
	436	C−37	Ⅲ	土製品	紡錘車		0.8	にぶい黄橙色	
	437	D−6	Ⅲ	土製品	紡錘車	5.1	1.0	橙色	
	438	−		土製品	紡錘車	6.2	0.8	にぶい黄橙色	
	439	A−30	Ⅲ	土製品	紡錘車	6.0	0.8	浅黄橙色	
	440	C−33	Ⅱ	土製品	紡錘車		0.85	灰色	
	441	C−33	Ⅲb	土製品	紡錘車		0.6	淡黄色	
	442	C−32	Ⅲb	土製品	紡錘車	6.5	0.95	浅黄橙色	
	443	F−25	Ⅱ	土製品	紡錘車	6.6	1.1	浅黄橙色	
	444	A−30	Ⅲ	土製品	紡錘車		0.8	浅黄橙色	
	445	C−32	Ⅱ	土製品	紡錘車		0.9	浅黄橙色	
	446	B−33	Ⅱ	土製品	紡錘車		0.8	黄橙色	
83	447	C−33	Ⅲa	土製品	紡錘車		0.7	浅黄色	
	448	C−33		土製品	紡錘車		0.8	橙色	
	449	−		土製品	紡錘車		1.0	浅黄色	
	450	A−31	Ⅲ	土製品	紡錘車		0.6	浅黄橙色	
	451	A'−31		土製品	円形土製品		1.2	浅黄橙色	
	452	AA'−17・18		土製品	円形土製品	6.7	1.1	黄橙色	
	453	−		土製品	円形土製品	7.6	1.0	灰色	
	454	C−30	Ⅲ	土製品	円形土製品	7.0	0.9	浅黄色	
	455	E−30	Ⅱ	土製品	円形土製品		1.25	浅黄橙色	
	456	A−30		土製品	円形土製品	6.5	0.85	黄橙色	
	457	B−32	Ⅱ	土製品	円形土製品		0.75	黒色	
	458	C−27	Ⅱ	土製品	円形土製品	3.0	0.9	浅黄橙色	
	459	B−36・37	Ⅱ	土製品	円形土製品		1.0	浅黄橙色	
	460	B−30	Ⅲ	土製品	円形土製品		0.7	浅黄橙色	
	461	D−35		土製品	円形土製品	6.8	0.9	明黄褐色	

墨書土器（一般）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	記載部位	文字	法量(cm)			備考
								口径	底径	器高	
84	462	B-20		墨書	赤色土器Ⅰ　椀	体部外面	宅	13.2	6.8	4.9	逆位，宅Ⅱ類
	463	−		墨書	土師器　坏	体部外面	宅	12.4	6.4	4.4	逆位，宅Ⅲ類
	464	B-14		墨書	黒色土器Ⅰ　椀	体部外面	宅	14.5	7.6	6.2	正位，宅Ⅳ類
	465	B-20		墨書	須恵器	体部外面	宅	13.0			右倒位，宅Ⅱ類
	466	C-33	Ⅲ	墨書	須恵器　坏	底部外面	宅	13.6	7.8	4.4	宅Ⅰ類
	467	D-37	Ⅲ	墨書	土師器　坏	体部外面	宅カ	11.3	7.0	3.8	
	468	D-21		墨書・ヘラ書き	須恵器　蓋	内面・体部外面	■・宅カ		9.4		
	469	C-34	Ⅲb	墨書	土師器　坏	底部外面	宅		6.7		宅Ⅰ類
	470	D-25	Ⅲ	墨書	土師器	体部外面	宅				右倒位
	471	D-20	Ⅴ	墨書	土師器	体部外面	宅カ				

墨書土器（一般）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	記載部位	文字	法量(cm)			備考
								口径	底径	器高	
85	472	C-32	Ⅲ	墨書	黒色土器Ⅰ 椀	口縁部外面	福	15.2	7.6	5.5	正位
	473	C-32	Ⅲ	墨書	黒色土器Ⅰ 高台付皿	口縁部外面	福	12.5	7.0	3.6	左倒位
	474	C-32	Ⅲ	墨書	黒色土器Ⅰ	口縁部外面	福				左倒位
	475	B-32	Ⅱ	墨書	土師器	口縁部外面	福カ				左倒位
	476	D-21		墨書	土師器 坏	体部外面	作	14.2	5.8	4.6	逆位
	477	D-18		墨書	土師器 坏	体部外面	中万	13.7	7.5	4.7	正位
	478	D-20	Ⅱ	墨書	土師器	体部外面	■万				正位
	479	C-13		墨書	土師器	体部外面	万				左倒位
	480	D-2		墨書	土師器	体部外面	作カ				正位
	481	－	－	墨書	土師器	口縁部外面	作カ				正位
	482	D-15	Ⅱa	墨書	赤色土器Ⅰ 椀	体部外面	記号	16.2	9.2	5.5	三角形
	483	－	－	墨書	土師器 坏	体部外面	記号・乙カ	13.0	6.4	4.4	四角形・右倒位
	484	B-20	Ⅲ	墨書	土師器	体部外面	大				正位
	485	B-6		墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	■				
	486	B-15	Ⅲ	墨書	土師器	体部外面	■	13.2			
	487	D-21		墨書	土師器	体部外面	■		7.6		
	488	C-33	Ⅲ	墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	■				
	489	C-2		墨書	土師器	口縁部外面	■	11.6			
	490	－	－	墨書	赤色土器Ⅰ 鉢	体部外面	■				
	491	B-33	Ⅲ	墨書	土師器	体部外面	■				
87	492	E-14	Ⅲ	墨書	土師器	体部外面	■				
	493	G-7	Ⅱ	墨書	土師器	体部外面	■				
	494	C-6	Ⅲ	墨書	土師器 皿	体部外面	■				
	495	C-32	Ⅱ	墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	■				
	496	B-34	Ⅲ	墨書	土師器	体部外面	■				
	497	－	－	墨書	赤色土器Ⅰ	体部内面	■				
	498	E-14	Ⅱ	墨書	土師器	体部外面	■				
	499	－	－	墨書	赤色土器Ⅰ	体部外面	■				
	500	－	－	墨書	黒色土器Ⅰ	体部外面	■				
	501	EF-21		墨書	土師器	内面・体部外面	■・■	12.0			
	502	C-37	Ⅲa	墨書	土師器 坏	体部外面	■		8.6		
	503	F-30	Ⅱ	墨書	土師器 坏	体部外面	■		7.6		
	504	C-37	Ⅲa	墨書	土師器 坏	体部外面	■		6.0		
	505	C-16		墨書	土師器 坏	体部外面	■		7.7		
	506	B-21		墨書	土師器 坏	底部外面	■		11.4		
	507	B-34,35	Ⅱ	墨書	土師器 坏	底部外面	■		4.0		
88	508	C-33	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 高台付皿	底部内面	宅	13.0	7.6	3.5	宅Ⅲ類
	509	C-33	Ⅱ,Ⅲa	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	宅	14.4	7.0	4.9	宅Ⅳ類、外面スス付着
	510	A'-28	Ⅲ	ヘラ書き	土師器	体部内面	宅				正位・宅Ⅲ類
	511	B-27	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	宅		5.8		宅Ⅱ類
	512	C-32	Ⅲb	ヘラ書き	土師器 椀	底部外面	宅		7.2		宅Ⅲ類
	513	－	－	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ 坏	底部内面	宅		8.0		宅Ⅳ類
	514	C-32	Ⅲb	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ 坏	底部内面	宅		5.6		
	515	D-27	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	宅カ		8.0		
	516	A-30	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	宅		7.0		宅Ⅰ類
	517	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	宅		7.4		宅Ⅳ類
	518	－		ヘラ書き	土師器 椀	底部内面・体部外面	宅・■	12.4	8.0	3.9	宅Ⅰ類
	519	E-27	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	宅カ		7.6		宅Ⅱ類, 外面スス付着
	520	F-24		ヘラ書き	赤色土器Ⅰ 椀	底部外面	宅		9.5		逆位・宅Ⅰ類
89	521	C-30	Ⅲa	ヘラ書き	土師器	体部内面	宅カ				正位
	522	D-31	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	底部内面	宅カ				
	523	C-32		ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	宅		6.2		宅Ⅳ類
	524	C-27	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	宅		6.6		宅Ⅳ類
	525	－	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	宅カ				
	526	C-27	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	金財				
	527	B-33	Ⅲ	ヘラ書き	土師器	底部内面	富				
	528	B-36,37	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	底部内面	富				
	529	B-20	Ⅲ	刻書	土師器 小皿	底部内面	幸		6.0		
	530	A-28		ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	幸		6.4		
	531	C-29		ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	山カ		8.0		
	532	C-29・30		ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	山	16.3	9.0	2.5	
	533	B-33	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	凡		8.4		
	534	B-37	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	凡		7.0		
	535	B-36・37	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	凡		6.8		
	536	B-36	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 椀	底部内面	門				
	537	B-32	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	門		8.6		
	538	B-34	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	門		7.0		
	539	B-34	Ⅲb	ヘラ書き	土師器	底部内面	門				
90	540	C-28	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	林	12.0	7.0	3.9	
	541	F-11・12	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 椀	底部内面	作		6.7		
	542	C-30		ヘラ書き	土師器	体部内面	作				
	543	B-31	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	作カ				
	544	B-20	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	作				
	545	C-31	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	作カ		9.0		
	546	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		6.0		
	547	B-28	Ⅲ	刻書	黒色土器Ⅰ 椀	底部外面	記号		7.0		
	548	D-37	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	記号	15.2	7.0	1.6	
	549	C-32・33	Ⅱ,Ⅲa	刻書	土師器 坏	底部内面	記号		6.0		九字
	550	C-29	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		7.0		
	551	－	－	ヘラ書き・刻書	土師器 坏	底部内面	記号		6.0		
91	552	B-31	Ⅲ	ヘラ書き	須恵器 蓋	体部外面	■	6.4			
	553	－	－	ヘラ書き	須恵器 蓋	体部外面	■				
	554	C-33	Ⅲb	ヘラ書き	土師器 坏	体部外面・底部外面	■・■	12.4	6.8	3.9	
	555	E-13		ヘラ書き	須恵器 蓋	体部外面	■				
	556	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	体部内面	■	14.0			
	557	E-24	Ⅲ	ヘラ書き	須恵器 蓋	体部外面	■				
	558	D-24		ヘラ書き	土師器	体部内面	■				

墨書土器（一般）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	記載部位	文字	法量(cm)			備考
								口径	底径	器高	
91	559	－	－	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ	体部内面	■				
	560	E-26	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	体部内面	■				
	561	D-31	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	体部外面	■				
	562	B-32	Ⅱ	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ	体部内面	■				
	563	A'-17・18		ヘラ書き	土師器	体部内面	■				
	564	－	－	ヘラ書き	土師器	体部外面	■	13.8			
	565	E-28	Ⅰb	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ	体部内面	■				
	566	C-31	Ⅲ	ヘラ書き	土師器	体部内面	記号				
	567	D-28	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	体部内面	■				
	568	－	－	ヘラ書き	土師器	体部外面	■				
	569	－	－	ヘラ書き	須恵器	体部外面	■				
	570	C-32	Ⅲb	ヘラ書き	土師器	底部内面	■				
	571	C-27	Ⅲ	ヘラ書き	土師器	体部内面	■				
	572	B-27	Ⅲ	ヘラ書き	土師器	体部内面	■				
	573	B-33	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	底部外面	■				
	574	C-33	Ⅲ	ヘラ書き	土師器	底部外面	■				
	575	C-33	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■				
	576	E-3?	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 皿	体部外面	■				
	577	D-32	Ⅲa	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■				
	578	B-32	Ⅲ	刻書	土師器 皿	底部外面	■				
	579	C-27	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	■				
	580	－	－	刻書	土師器 皿	底部内面	■				
	581	D-23	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	体部外面	■		4.8		
	582	－	－	ヘラ書き	土師器 椀	体部外面	■		8.6		
	583	D-21	Ⅰc	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■				
92	584	B-33	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	■	16.8	11.3	2.1	
	585	D-31	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	底部内面	■				
	586	C-20	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■				
	587	F-10	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	体部内面・外面	■		5.6		
	588	B-33	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	底部内面	■				
	589	E-26		ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		6.4		
	590	F-26	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 皿	底部内面	■				
	591	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■				
	592	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■				
	593	ＢＣ-31		ヘラ書き	黒色土器Ⅰ 坏	底部内面・底部外面	■・■		4.8		
	594	－	－	刻書	土師器 坏	底部内面	■		6.6		
	595	E-28	Ⅱ,Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		6.0		
	596	C-32	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		6.0		
	597	C-33	Ⅲa	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		5.8		
	598	B-33	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		8.8		
	599	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		6.0		
	600	C-20	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		5.8		
	601	C-25	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 皿	底部外面	■		9.0		
	602	C-27	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		6.2		
	603	C-32	Ⅲa	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		7.4		
93	604	A-38	Ⅲ	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ 坏	体部内面	■		4.8		
	605	D-32	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		5.8		
	606	C-32	Ⅲa	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■				
	607	D-30	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■				
	608	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■				
	609	A-30	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		8.8		
	610	E-21	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		7.2		
	611	F-26	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		6.0		
	612	B-33	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		6.2		
	613	F-11・12	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 椀	底部内面	■		7.8		
	614	B-32	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		7.0		
	615	C-32	Ⅲa	刻書	土師器 椀	底部内面	■				
	616	B-34		ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■		5.8		
	617	C-33	Ⅲb	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	■				
	618	C-34	Ⅲa	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		8.0		
	619	C-32	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		5.8		
	620	C-28	Ⅲ	ヘラ書き	土師器	底部外面	■				
	621	E-24	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 皿	底部外面	■		7.0		
	622	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		7.5		
	623	W-6	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		6.2		
	624	－	－	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		5.4		
	625	D-28	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		7.6		
	626	A-28	Ⅵ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		5.0		
94	627	D-27	Ⅲ,Ⅳ	ヘラ書き	黒色土器Ⅰ 椀	底部外面	十		7.6		
	628	D-28	Ⅱ	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ 椀	底部外面	記号		8.6		
	629	B-15	Ⅲ	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ 椀	底部外面	記号		7.8		
	630	A-28	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	十	12.8	6.4	4.2	
	631	D-31	Ⅱ	ヘラ書き	土師器	底部外面	■				
	632	D-25	Ⅲ	ヘラ書き	赤色土器Ⅰ 椀	底部外面	■		7.0		
	633	D-30		ヘラ書き	黒色土器Ⅰ 椀	底部外面	記号		7.0		
	634	E-21	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		6.6		
	635	C-16		ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	記号	14.2	4.4	4.3	
	636	A-31	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	記号		4.8		
	637	B-33	Ⅲ	ヘラ書き	黒色土器Ⅰ 高台付皿	底部外面	十	13.0			
	638	D-28		ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		7.4		
	639	E-30	Ⅱ	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	■		10.0		
	640	E-30・31	Ⅰb	ヘラ書き	土師器 坏	底部外面	記号		6.0		
	641	C-29	Ⅲ	ヘラ書き	土師器 坏	底部内面	門				
	642	B-33	Ⅲ	スタンプ文	土師器 坏	底部内面	■		7.6		

2　中世の調査

（1）調査の概要

調査は中世の調査においても，10m四方のグリッドを基本に，調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。調査区内は河川敷という立地もあり，層堆積は不安定で発掘調査時は遺構把握，出土遺物の層認定に非常に苦慮した。また，多数のピットが検出されたため，掘立柱建物跡の認定作業は困難を極め，整理作業において図上での復元も試みた。遺構の時期認定は，出土遺物を中心に記録層位，埋土を検討して認定を行った。

（2）出土遺物の分類方法

中世の出土遺物については，11世紀後半（平安末）から16世紀初頭の資料について，中世の遺物として報告する。土師器は，底部の切り離しが糸切りの資料を，中世土師器として取り扱った。越州窯系青磁については，青磁の分類上，中世の青磁のなかで報告する。また，1580年代から17世紀初頭に相当する青花については，時代が近世と重なるが，中世の遺物として取り扱った。

分類方法については，土師器，輸入磁器，輸入陶器，国内産陶器，瓦，土師質土器，滑石製品，石製品・砥石，古銭に大分類し，さらに種別や産地，器種を考慮して細分類をした。（以下参照）

土師器　　小皿，坏，土錘
輸入磁器　青磁（椀，皿，浅形椀，小椀，坏，盤）
　　白磁（椀，皿，坏）
　　その他の青磁白磁
　　青白磁（坏，壺，合子，小皿）
　　青花（椀，皿，大皿，その他）
輸入陶器　中国陶器（天目碗，盤，鉢，水注，四耳壺，壺，甕，その他）
　　朝鮮陶器
　　ベトナム陶器
　　その他
国内産陶器　瓦器
　　中世須恵器（東播系・カムィヤキ・樺万丈産）
　　中世陶器（瀬戸，美濃，常滑，備前）
　　瓦質土器（擂鉢，茶釜，火鉢）
　　土師質土器
　　その他
瓦
土師質土器　（擂鉢，茶釜，火鉢）
滑石製品・石製品
砥石
銭貨

なお，主な陶磁器の分類，年代や編年にあたっては，下記の文献を使用した。また，遺物指導を山本信夫氏に依頼し，御指導・御教示を得た。

山本信夫ほか「大宰府条坊跡ＸＶ陶磁器分類編」『大宰府条坊跡ＸＶ』2000太宰府市教育委員会
森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」
小野正敏「15～16世紀の染付椀，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究№２』1982
上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類について」
森田勉「北部九州出土の高麗陶磁器」『貿易陶磁研究№５』1985
乗岡実「中世備前焼甕（壺）の編年案」『第２回中近世備前焼研究会レジメ集』2000
乗岡実「中世備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会レジメ集』2000

陶磁器の年代については，８世紀末から14世紀中頃までのものは大宰府編年を使用し，Ａ～Ｇ期で区分した。それ以降はＨ～Ｋ期で区分した。これらの年代については観察表の中に記載した。各期の対応年代は以下の通りである。

Ａ期　８世紀末～10世紀中頃
Ｂ期　10世紀後半～11世紀中頃
Ｃ期　11世紀後半～12世紀前半
Ｄ期　12世紀中頃～後半
Ｅ期　13世紀初頭前後～前半
Ｆ期　13世紀中頃～14世紀初頭前後
Ｇ期　14世紀初頭～14世紀中頃
Ｈ期　14世紀後半～15世紀前半
Ｉ期　15世紀中頃～後半
Ｊ期　15世紀末～16世紀前半
Ｋ期　16世紀中頃～17世紀前半

（3）遺構

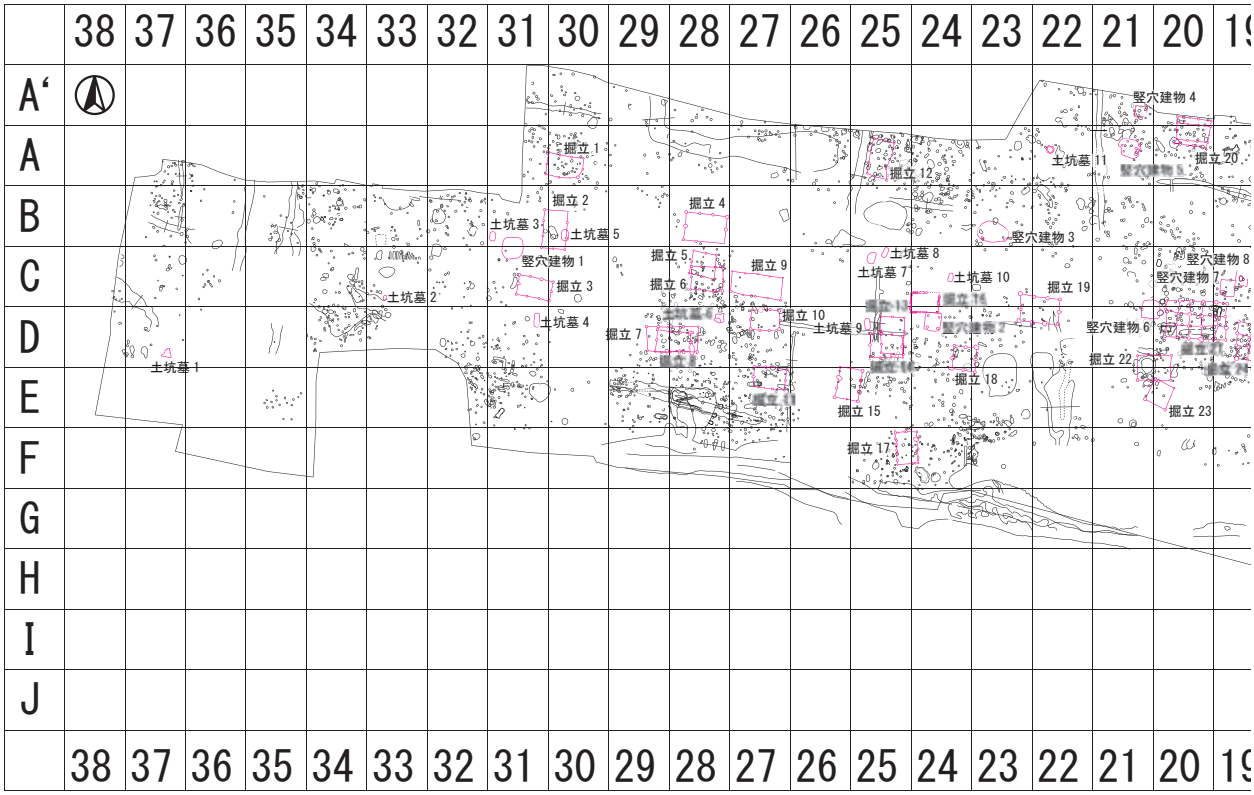
中世の遺構は，掘立柱建物跡33棟，竪穴建物跡11基，かまど跡29基，製鉄関連遺構６基，土坑23基，土坑墓18基，礫・土器集積遺構１カ所，溝24条が検出された。ピットは多数検出され，根石などの構造物が確認できるもの以外は，掲載遺物のあるもののみ遺構配置図で平面形を図示するに留めた。

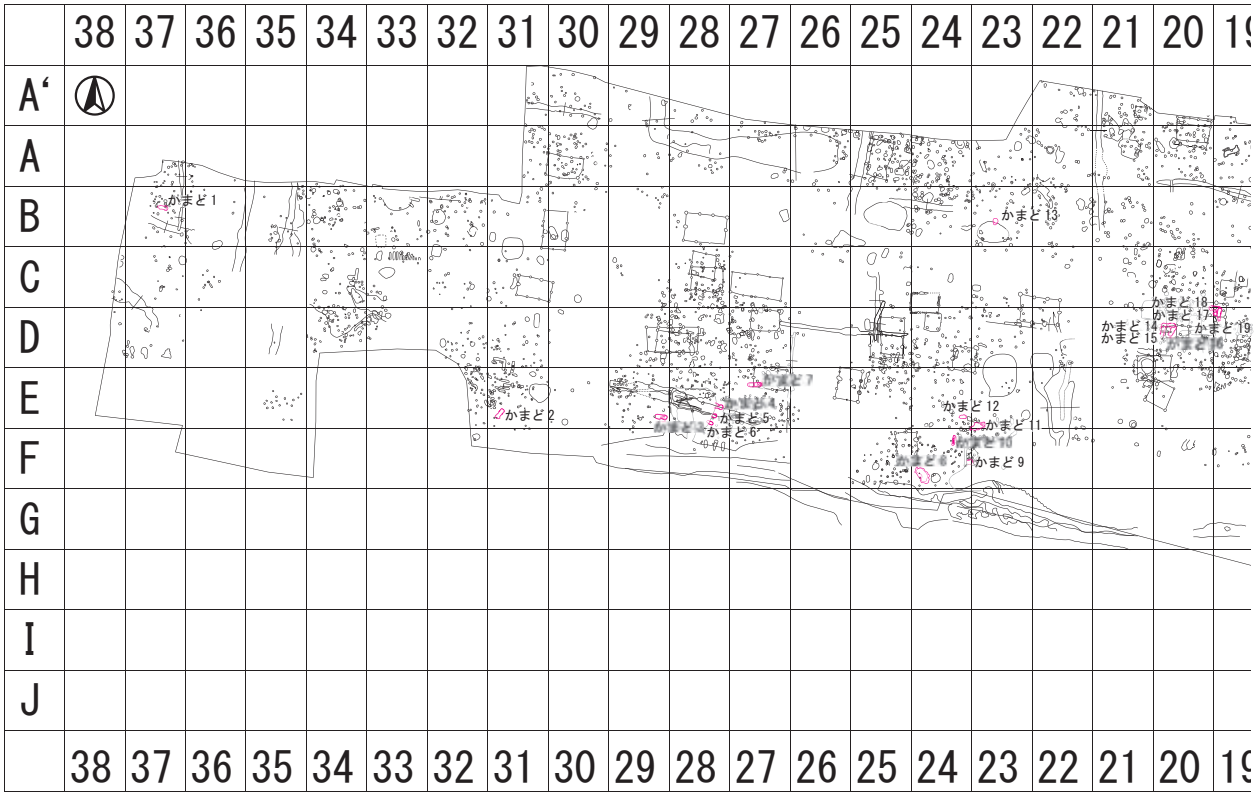
掘立柱建物跡（第121図～第141図）

掘立柱建物跡は，Ａ～Ｃ-30・31区，Ｂ～Ｅ-27～29区，Ｃ～Ｆ-22～26区，Ｃ～Ｅ-16～21区の４カ所にある程度のまとまりをもち，残りは点在する。形状は２間×３間が主体を占め，２間×２間，１間×１間，総柱，壁立のものが少数みられる。

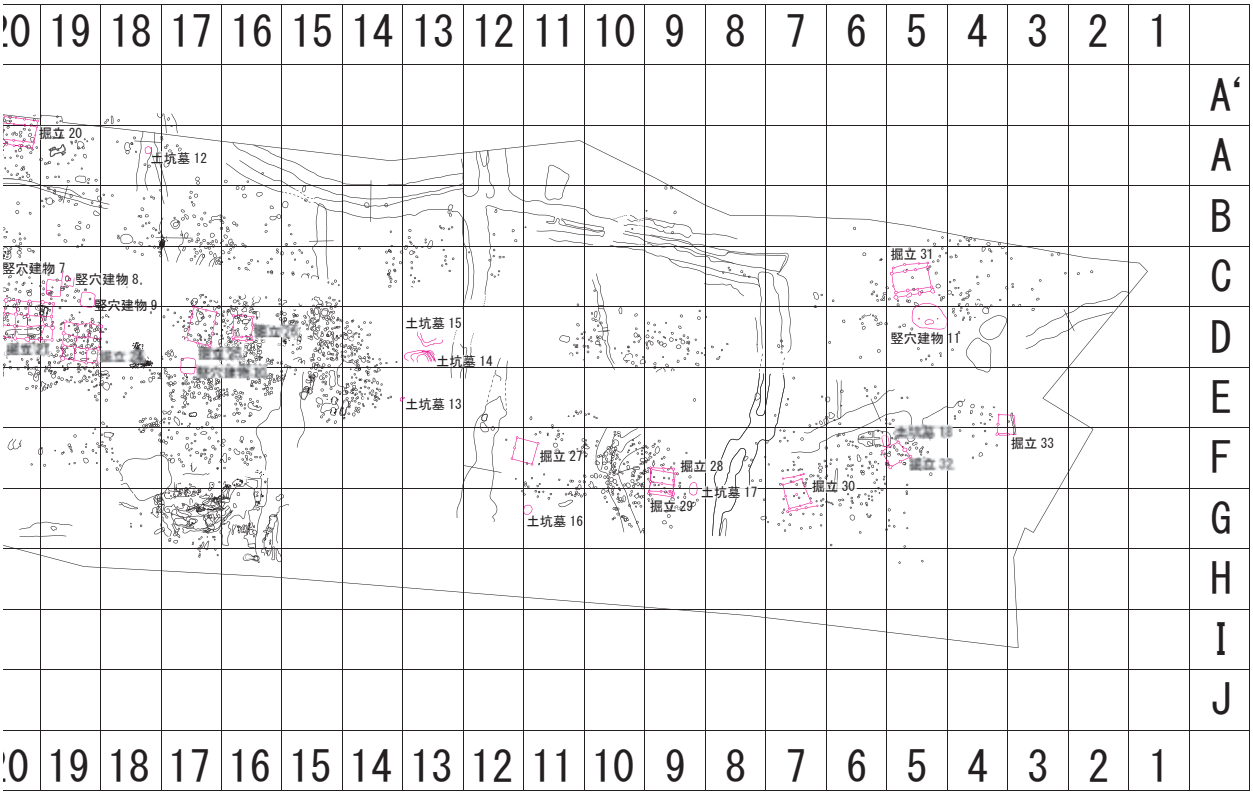
掘立柱建物跡１号（第121図）

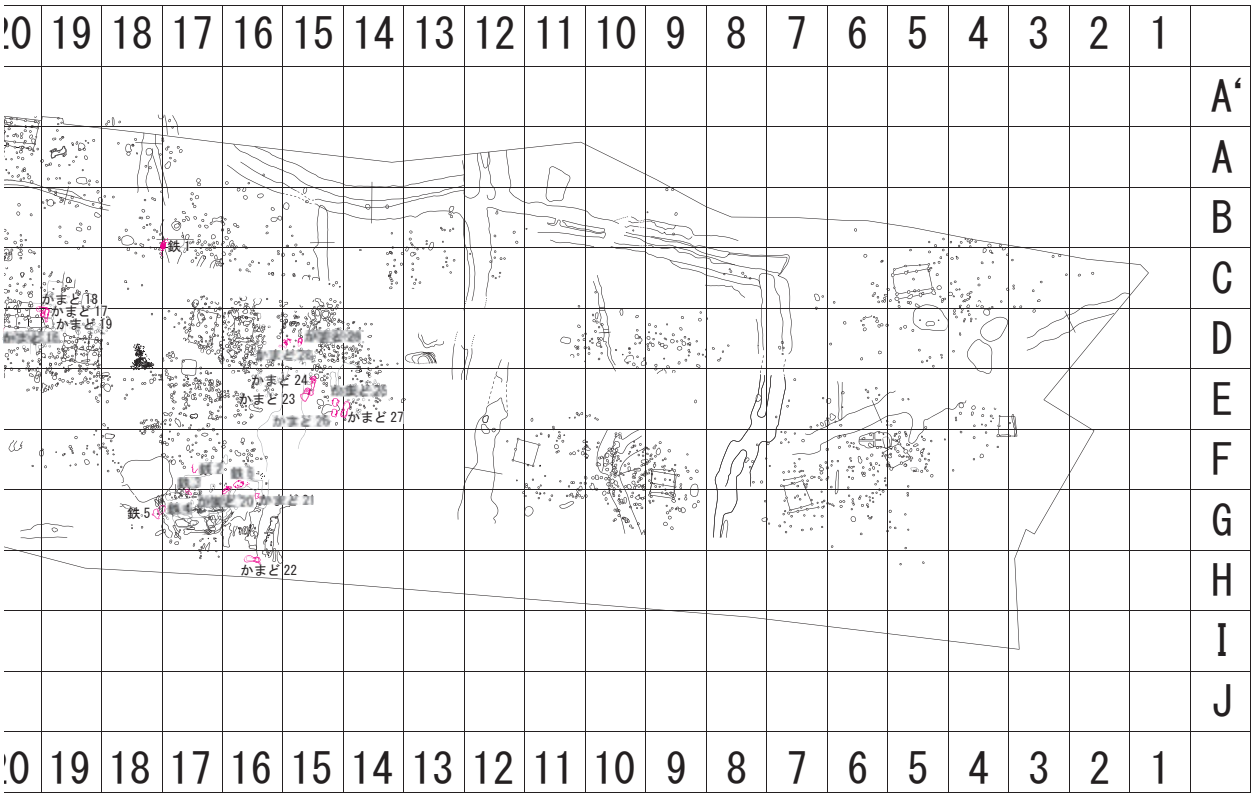
Ａ-30・31区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約3.6ｍ，桁行約5.8ｍの規模をもち，床面積





第95図　中世全体遺構図 1

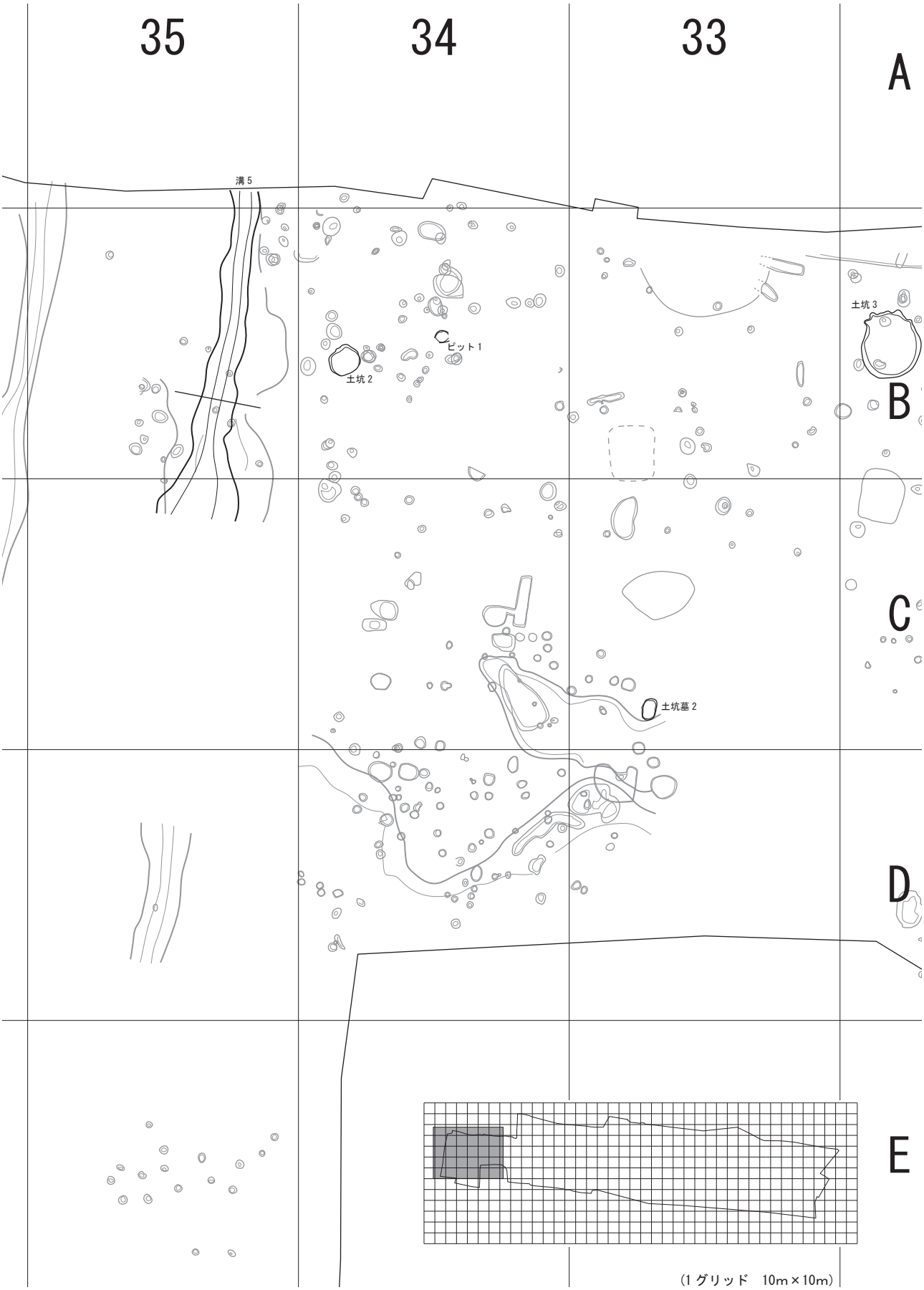




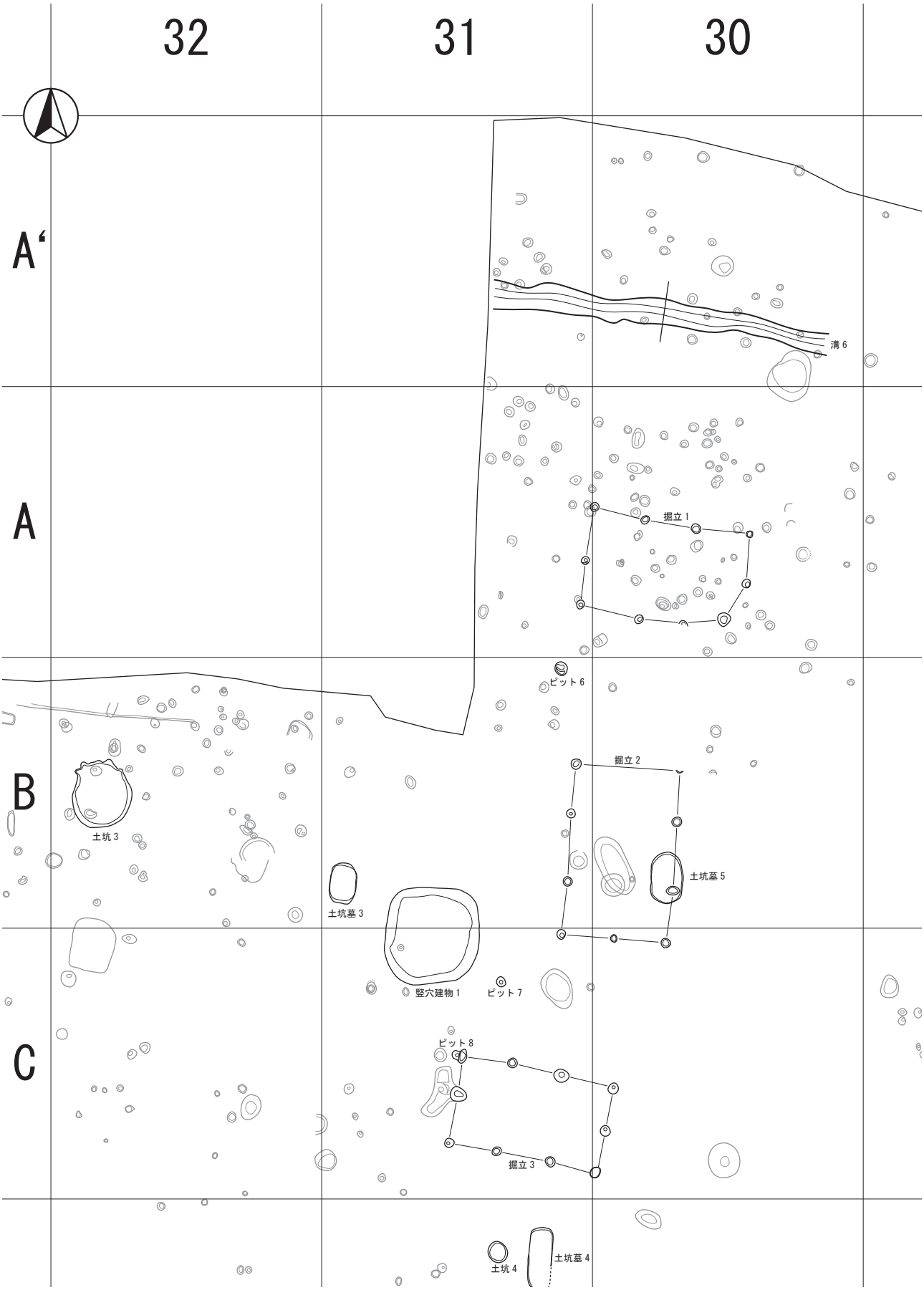
第96図　中世全体遺構図２



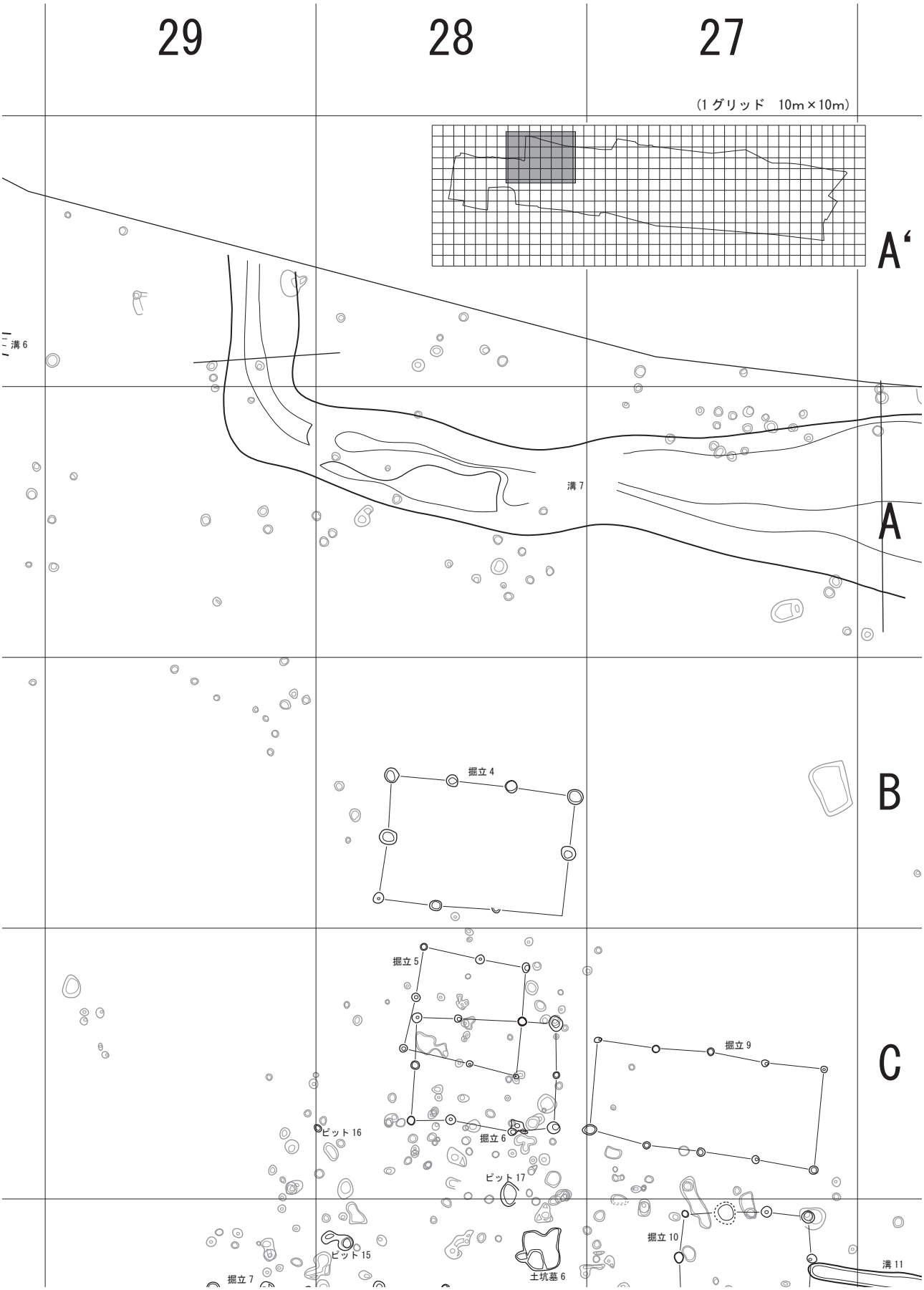
第97図　中世遺構配置図 1



第98図　中世遺構配置図２



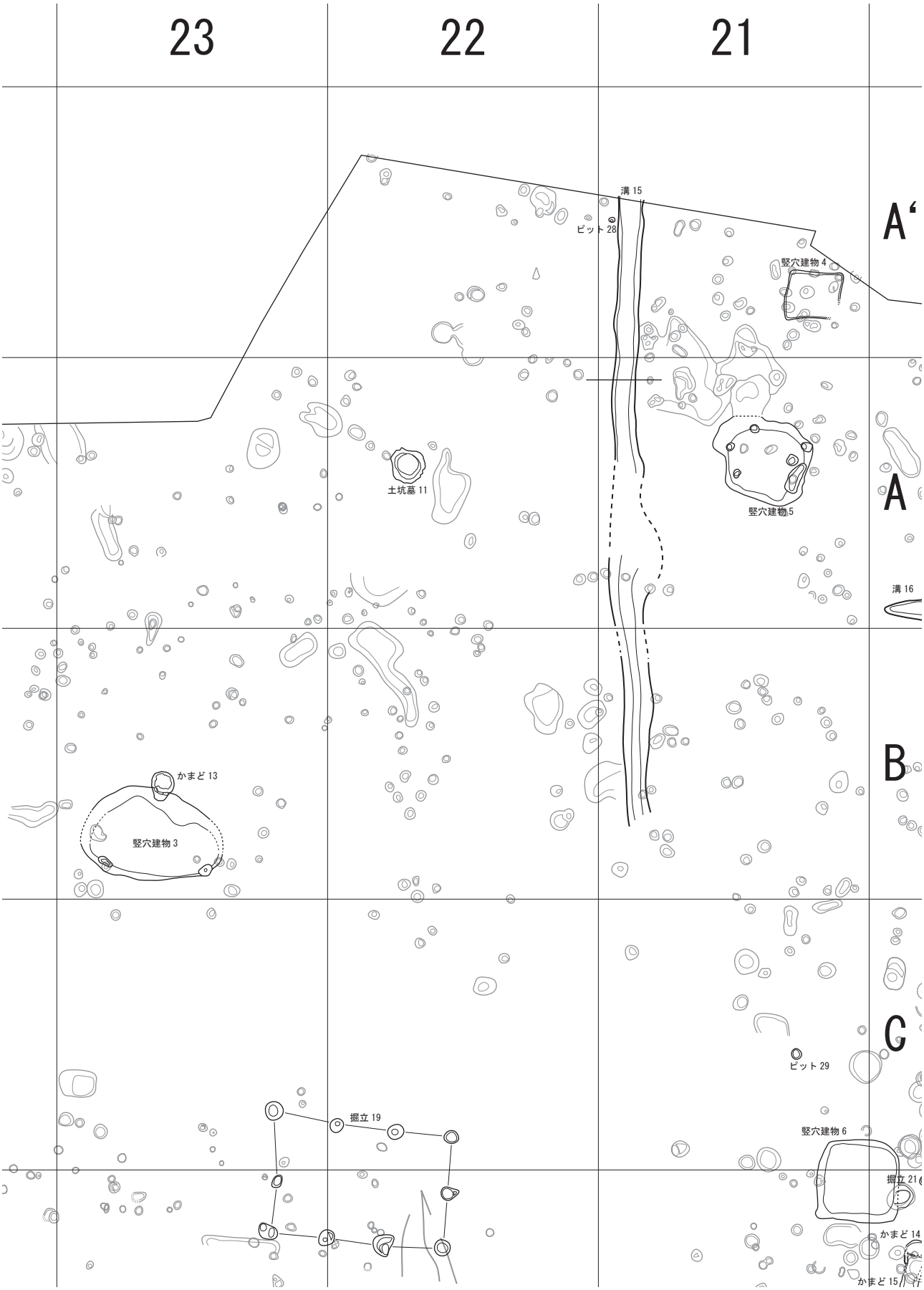
第99図　中世遺構配置図３



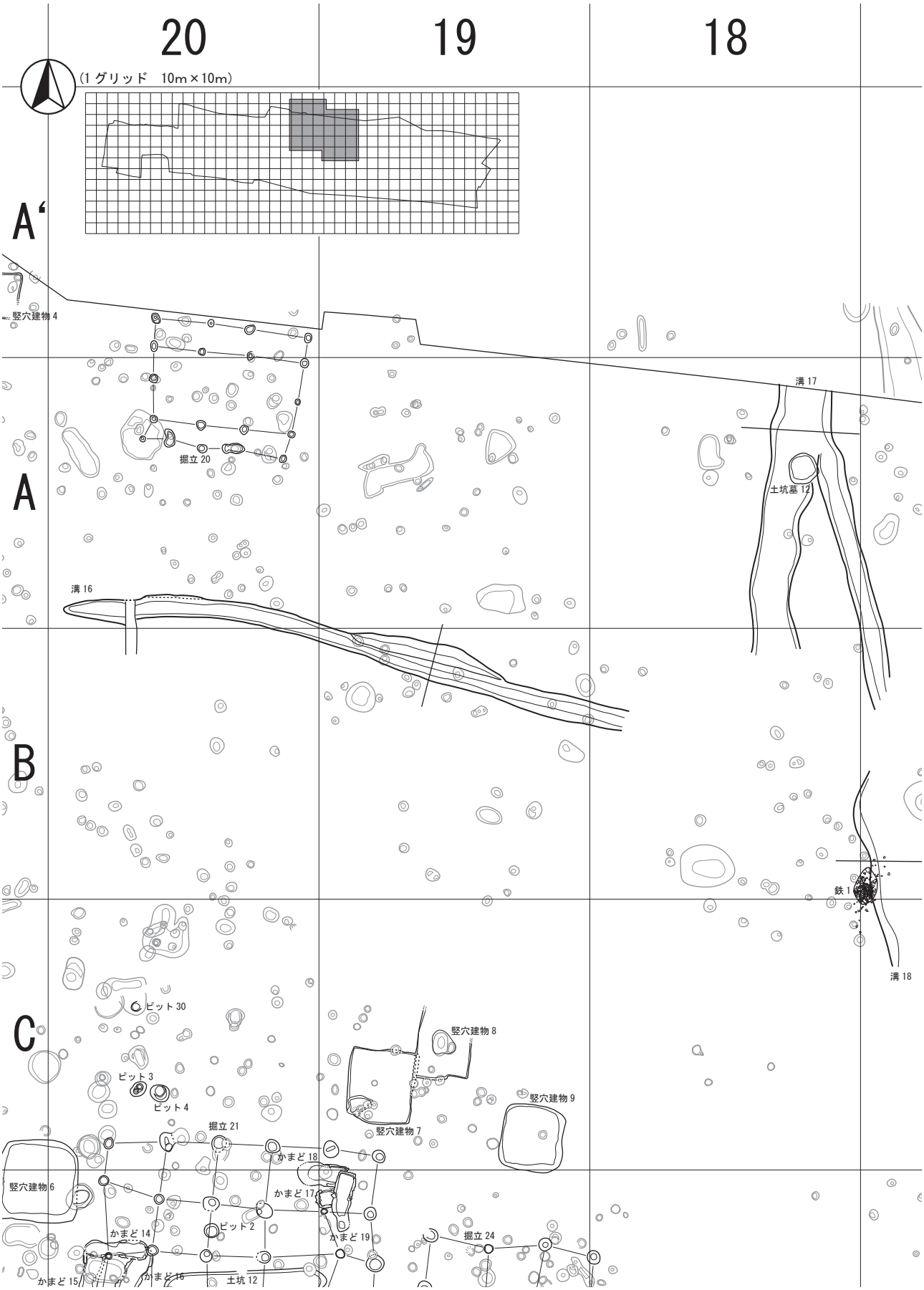
第100図　中世遺構配置図４



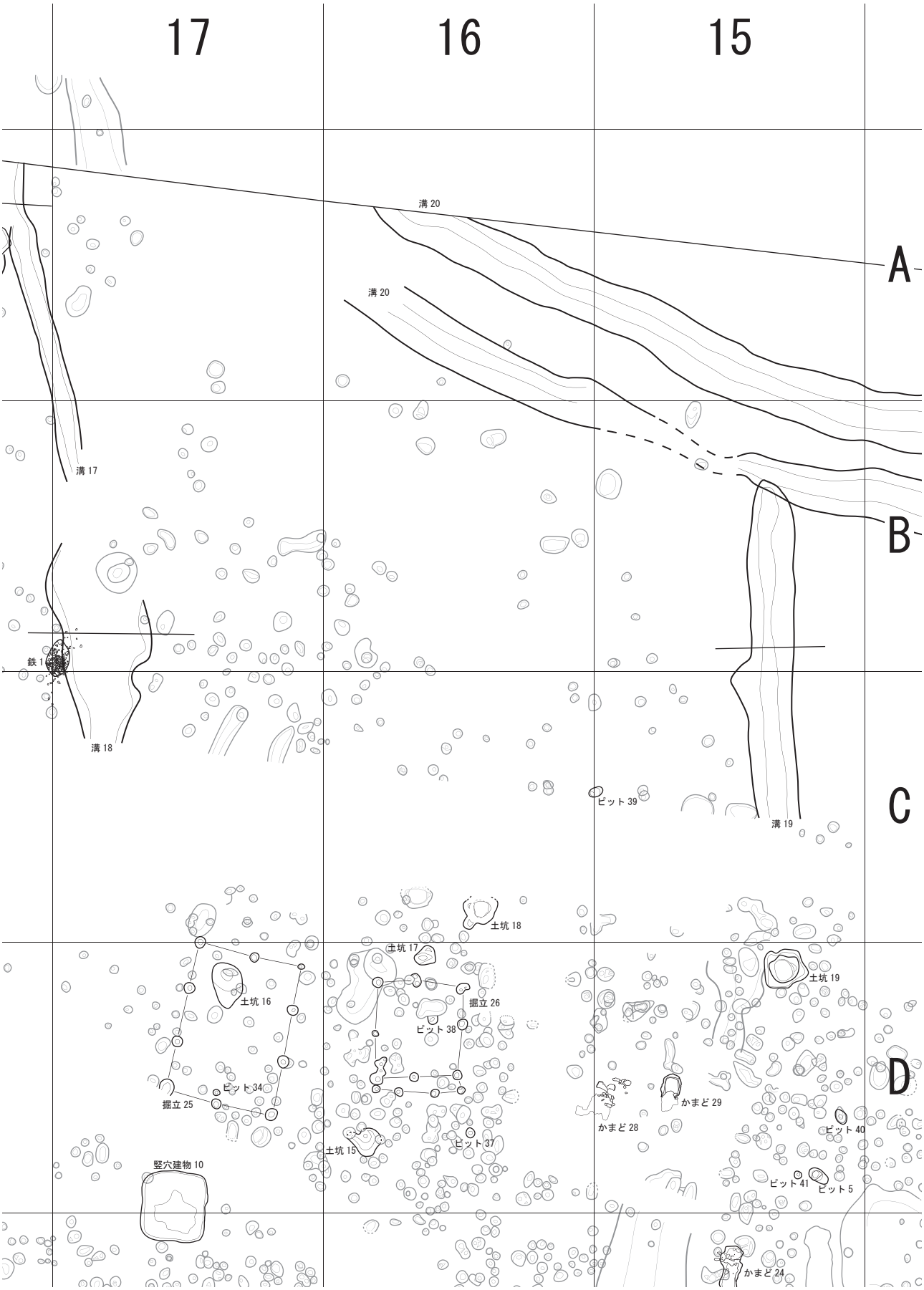
第101図　中世遺構配置図５



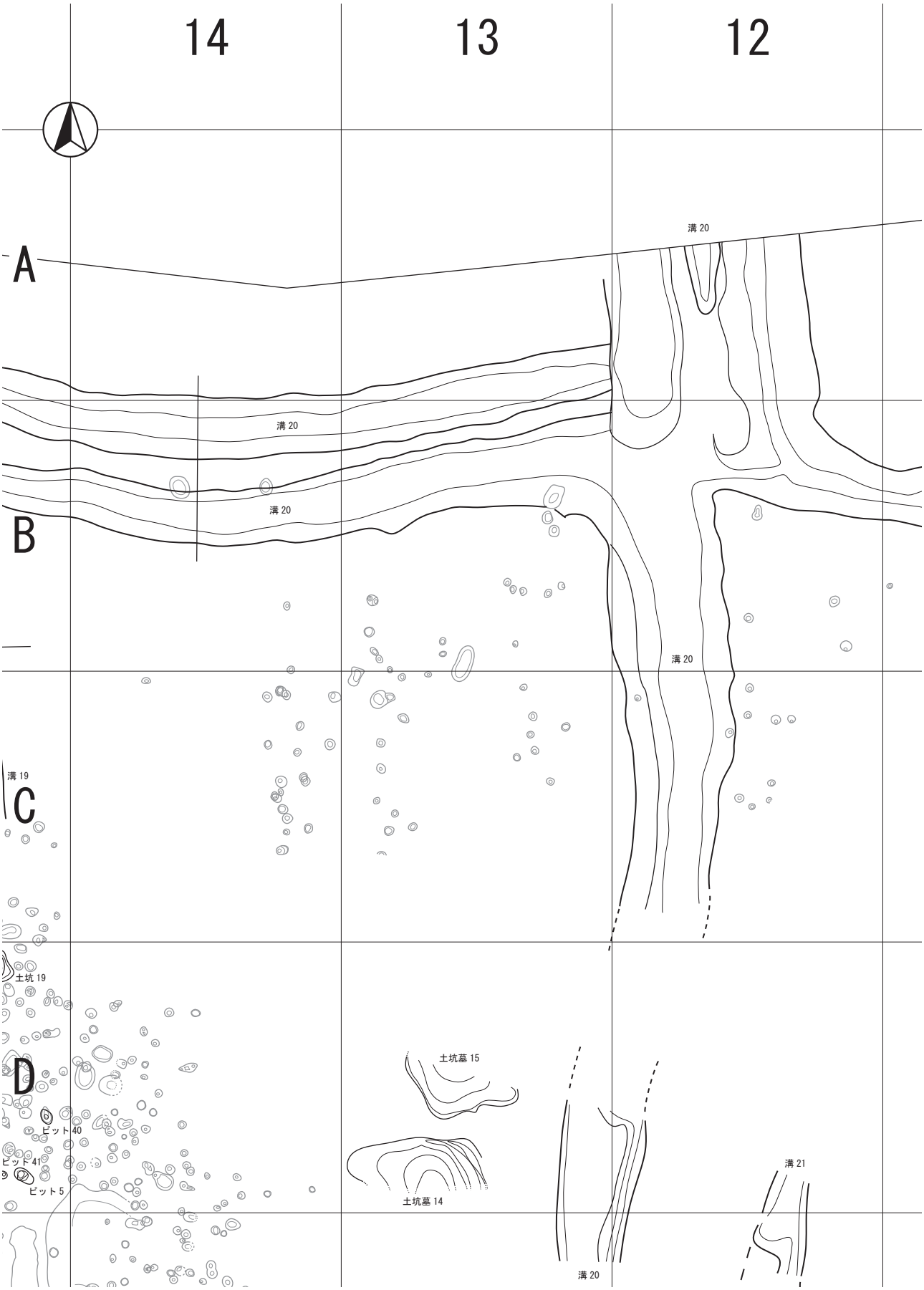
第102図　中世遺構配置図６



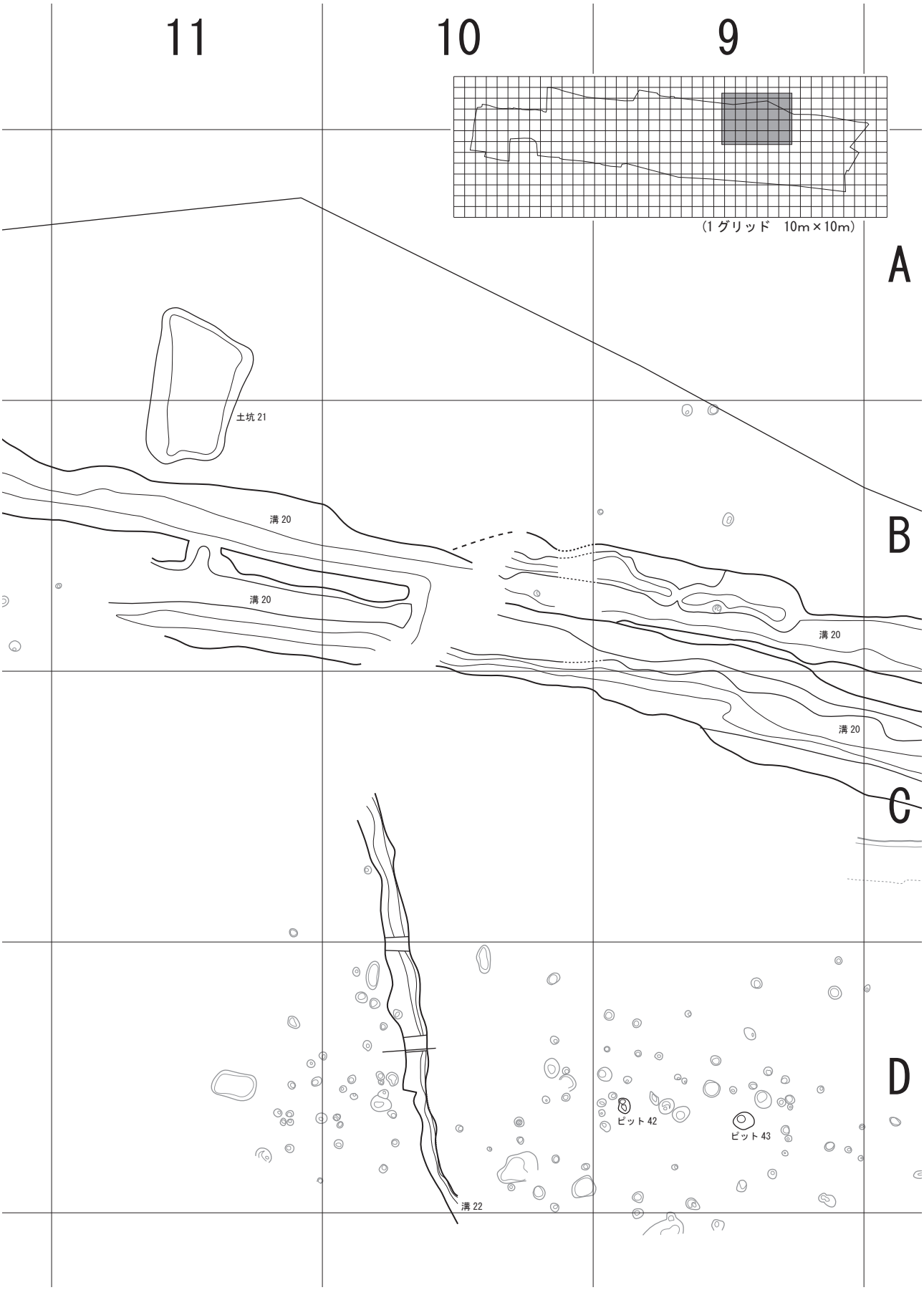
第103図　中世遺構配置図７



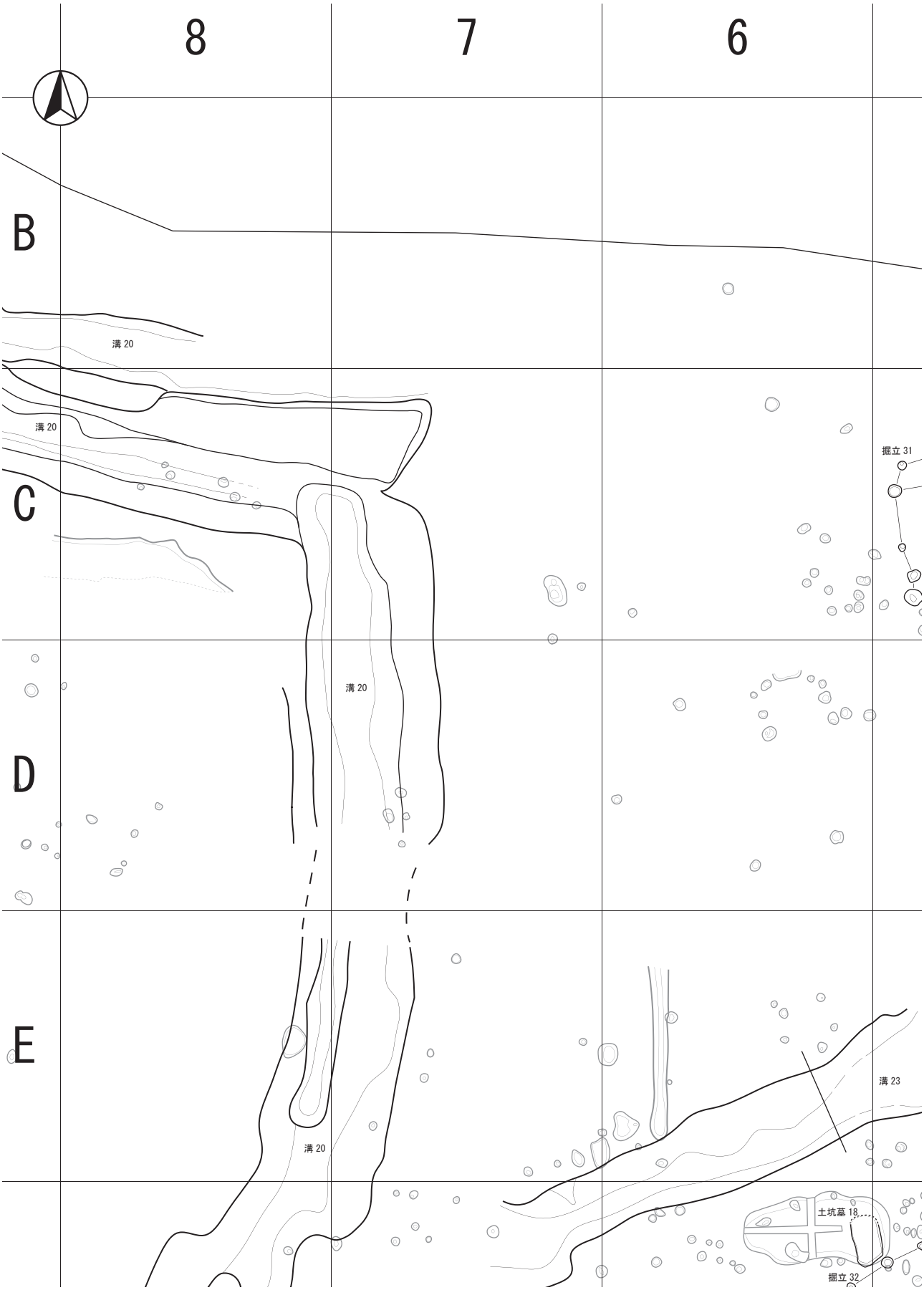
第104図　中世遺構配置図８



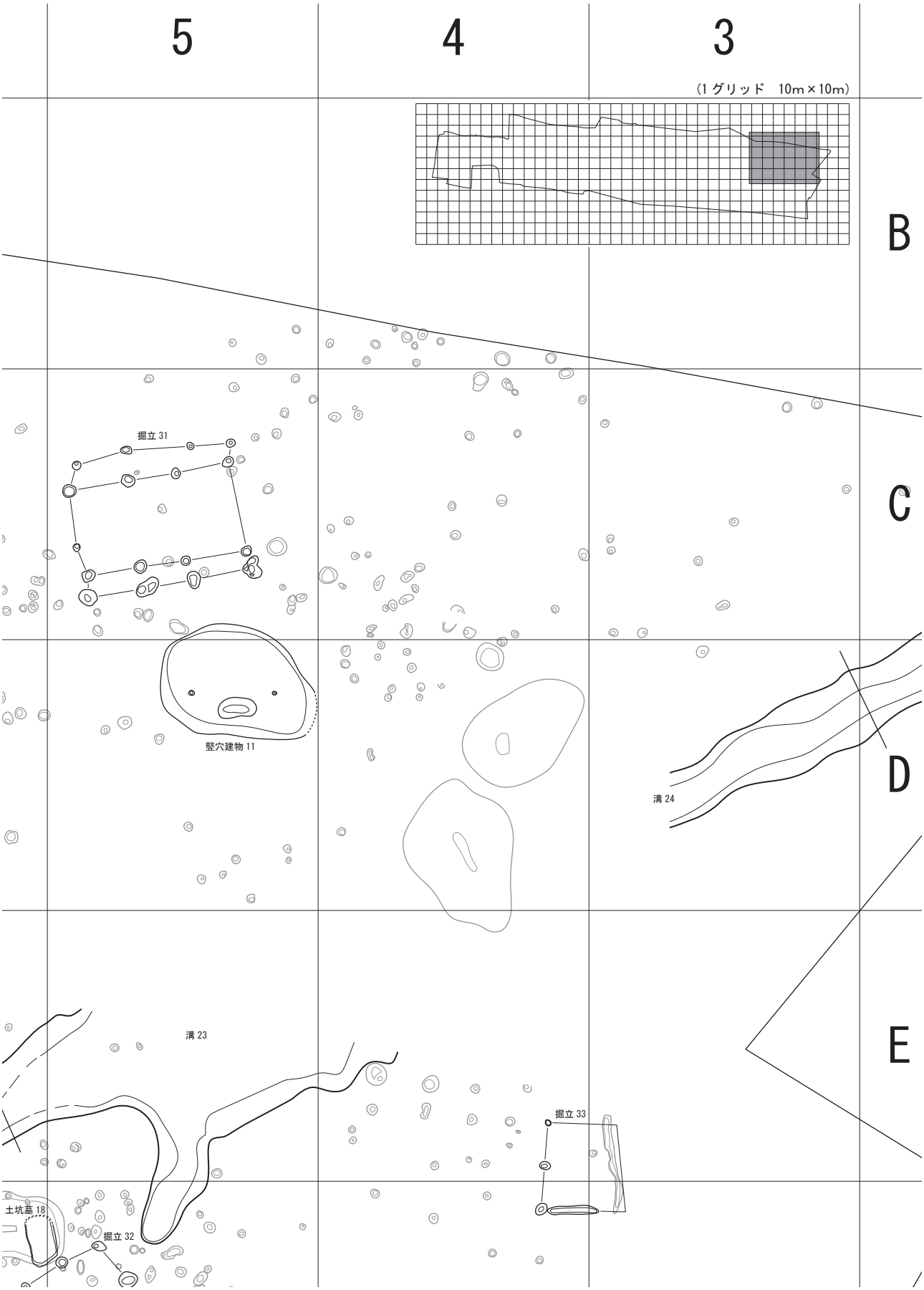
第105図　中世遺構配置図９



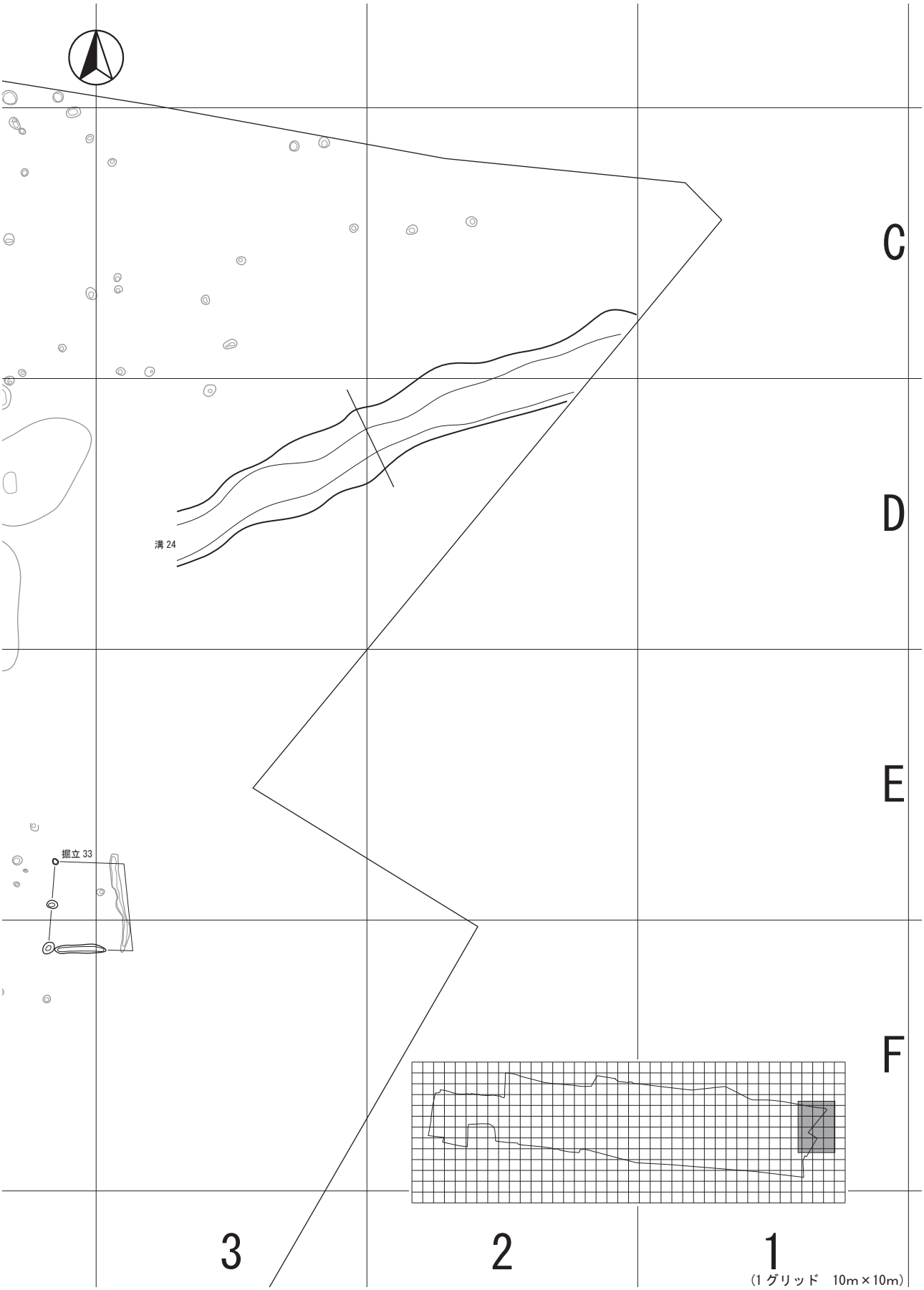
第106図　中世遺構配置図10



第107図　中世遺構配置図11



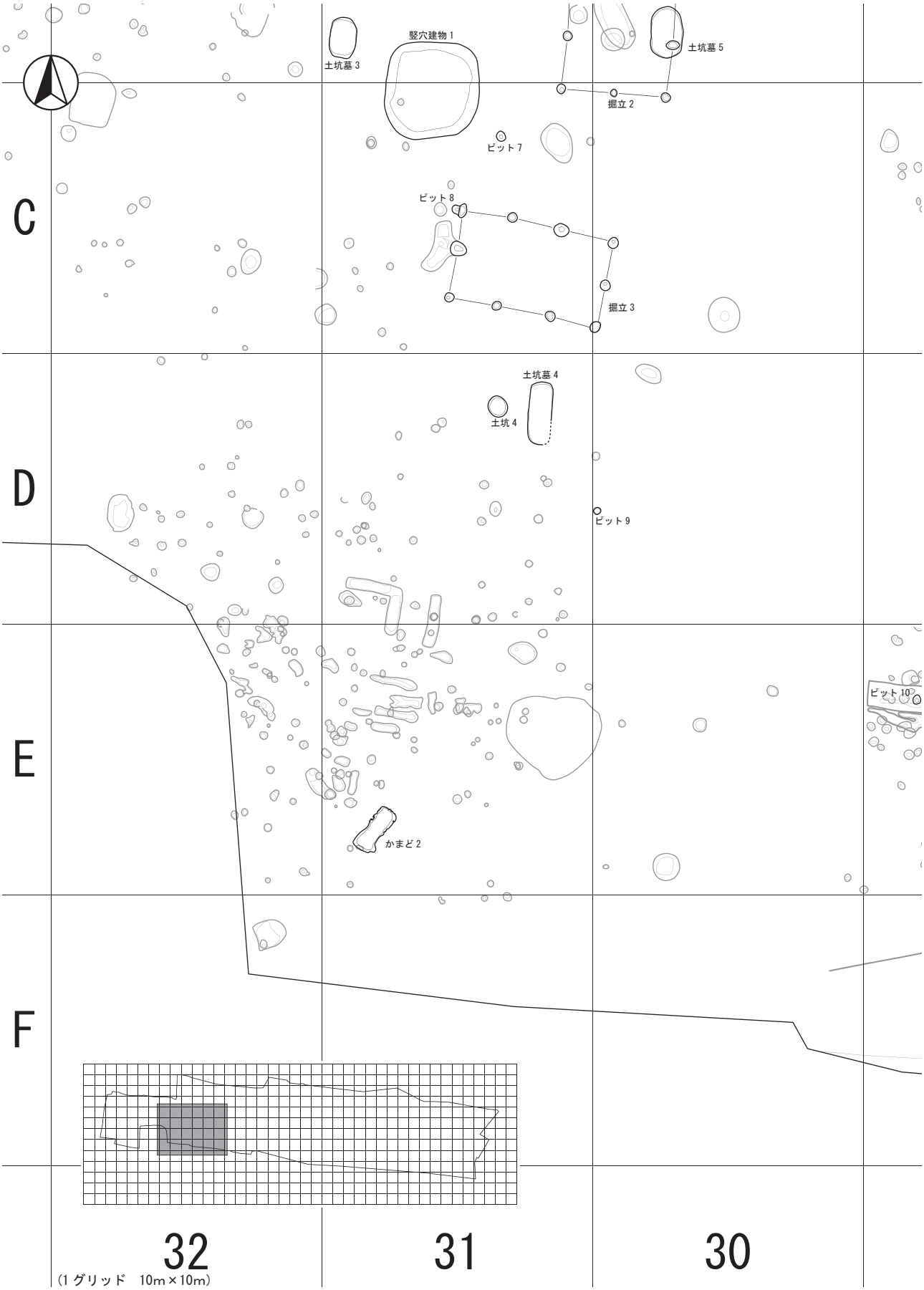
第108図　中世遺構配置図12



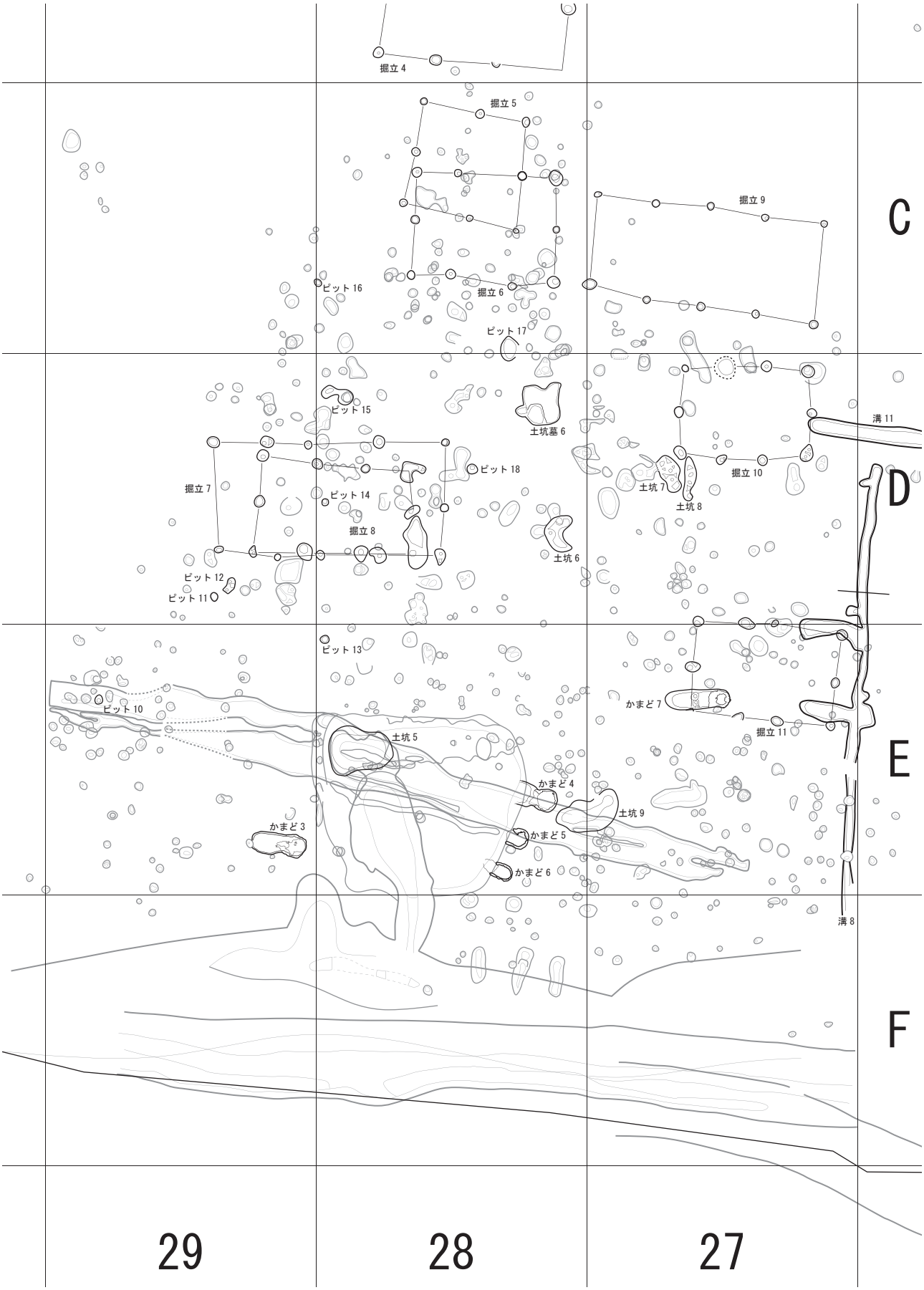
第109図　中世遺構配置図13



第110図　中世遺構配置図14



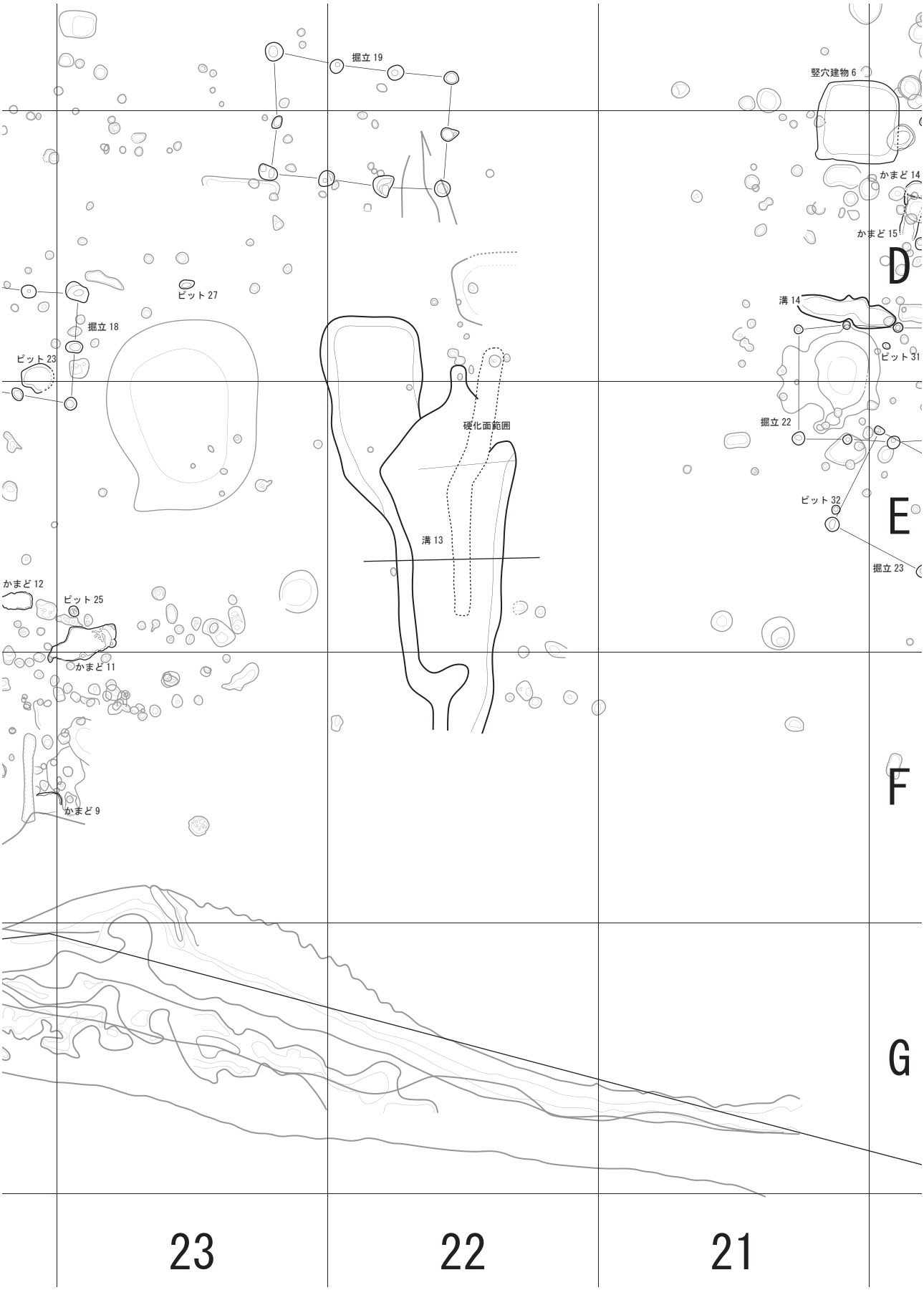
第111図　中世遺構配置図15



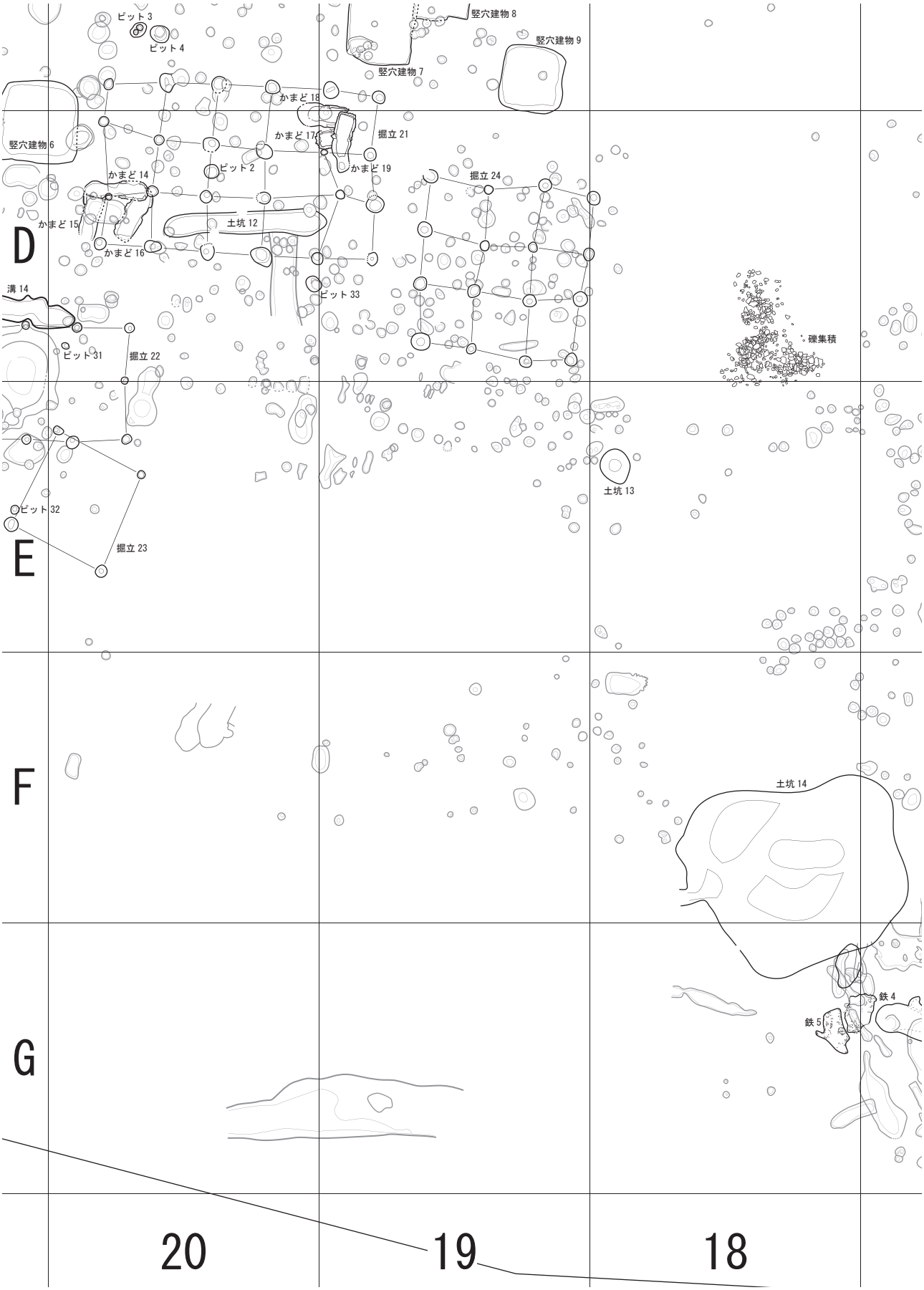
第112図　中世遺構配置図16



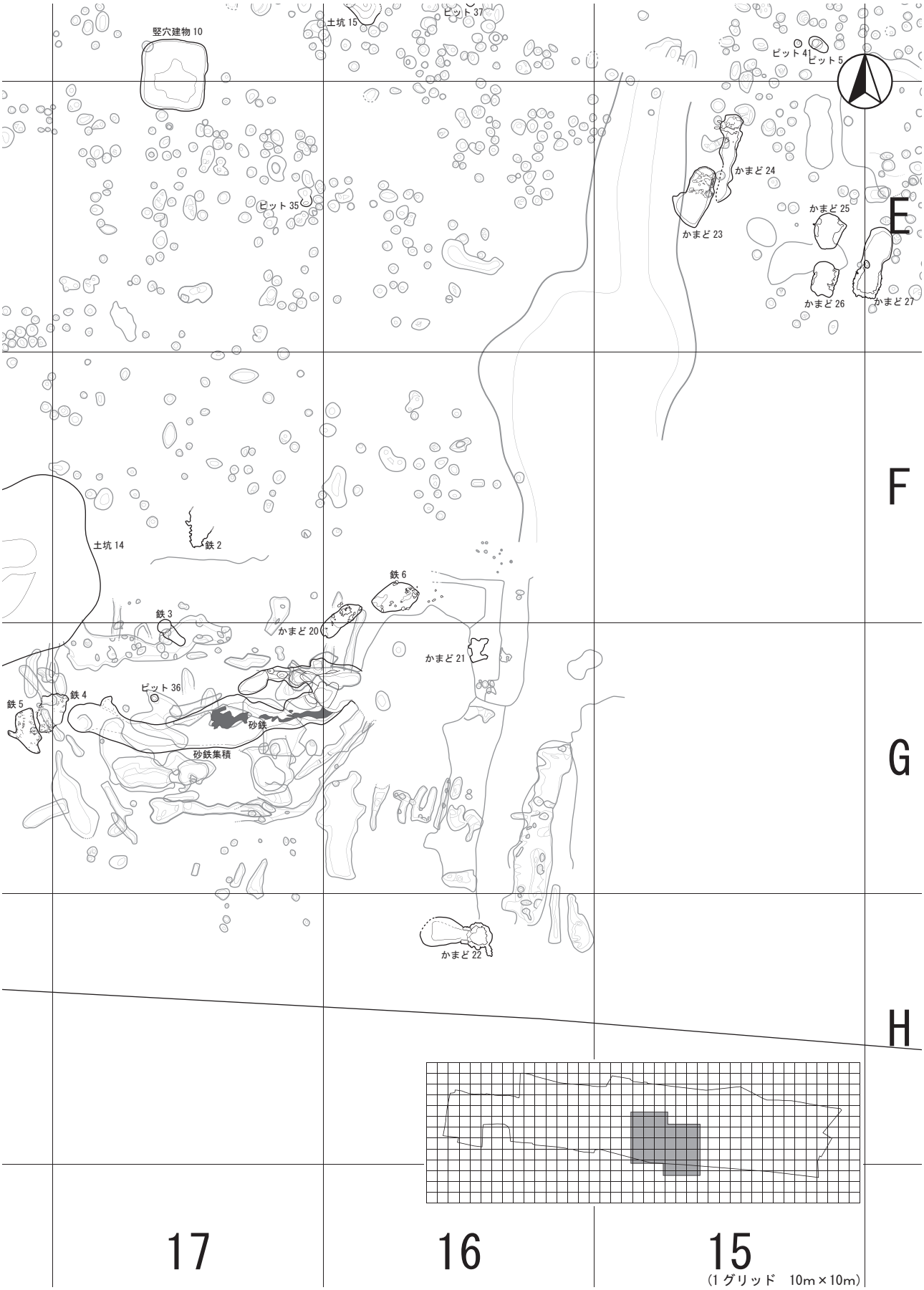
第113図　中世遺構配置図17



第114図　中世遺構配置図18



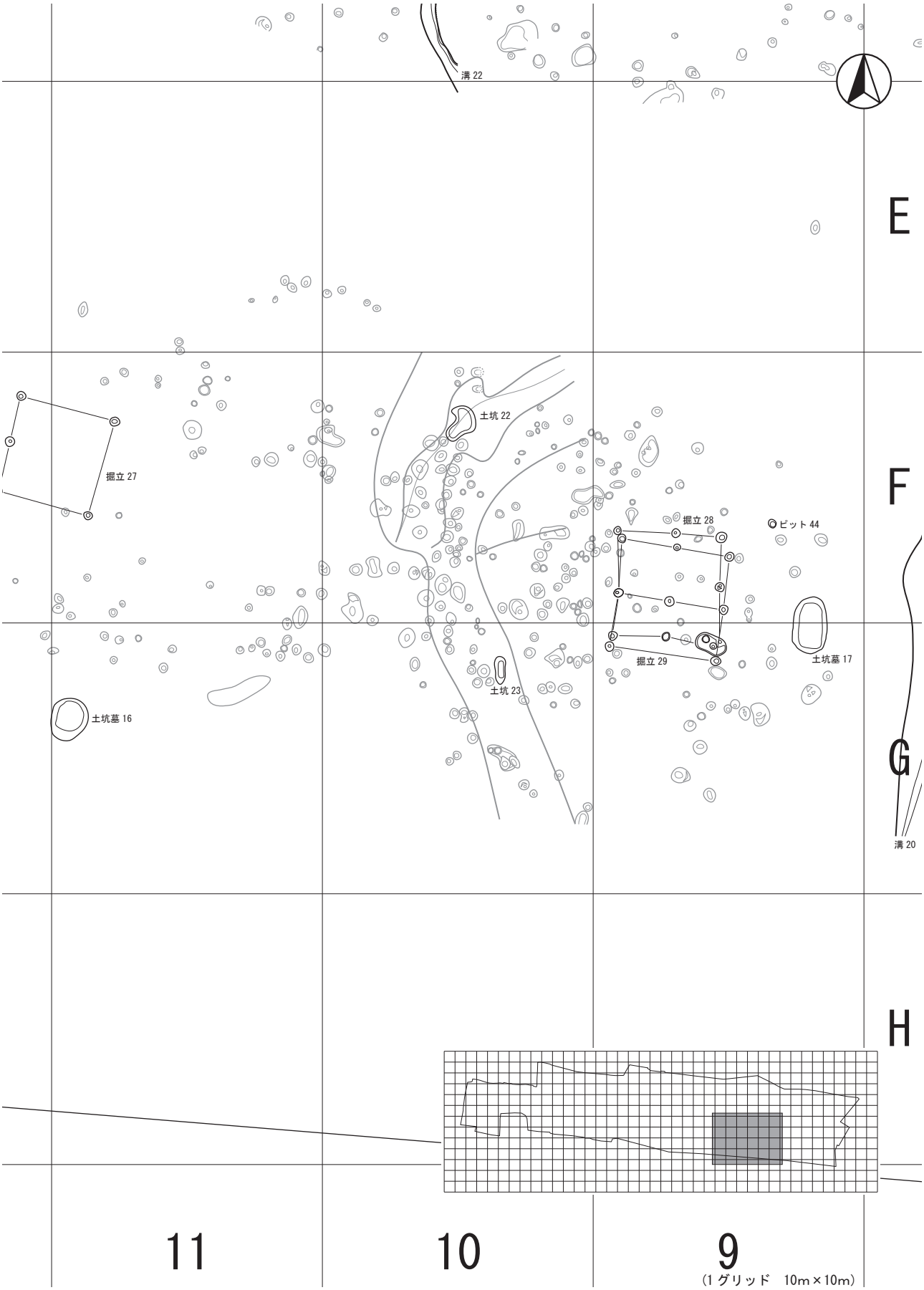
第115図　中世遺構配置図19



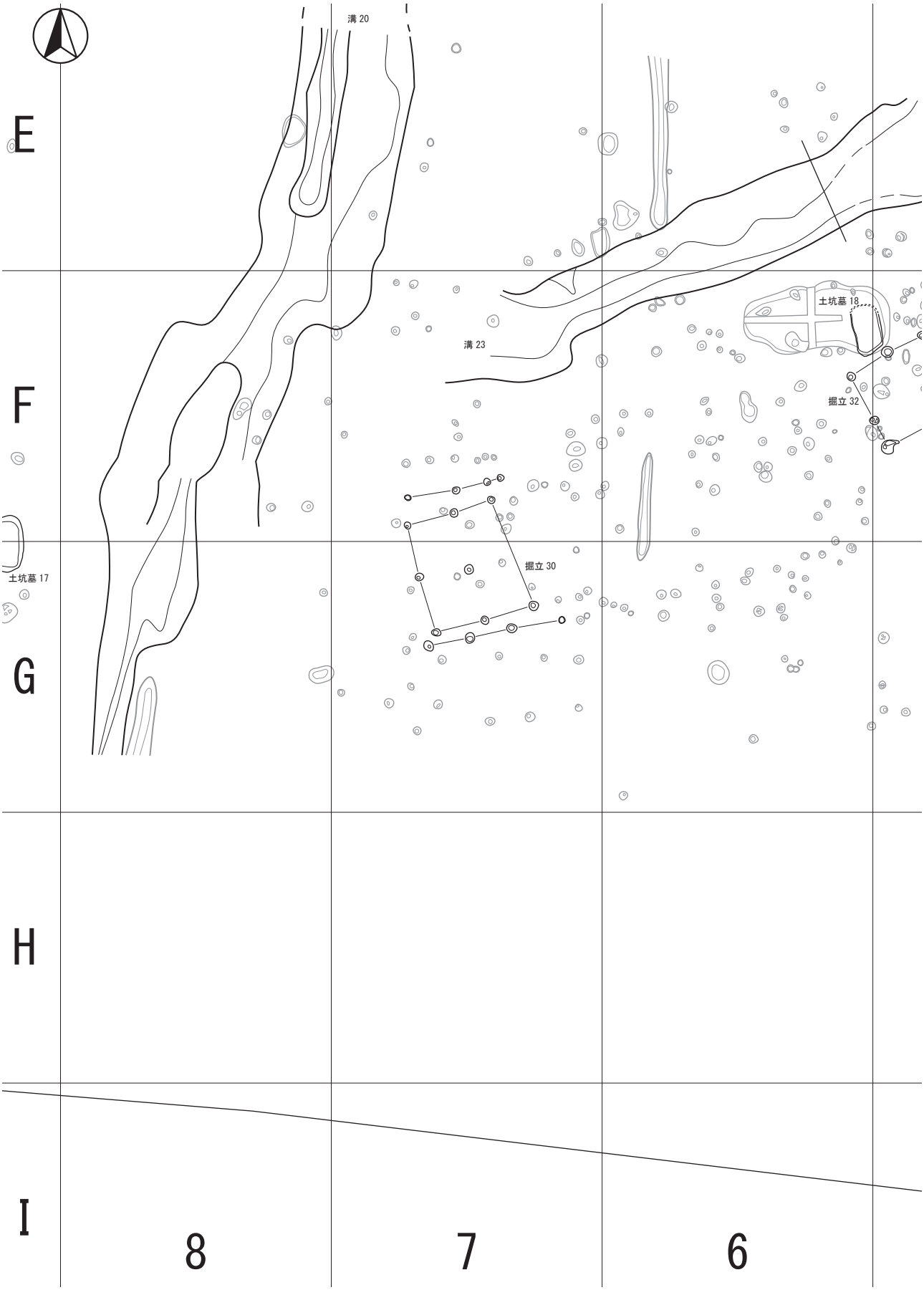
第116図　中世遺構配置図20



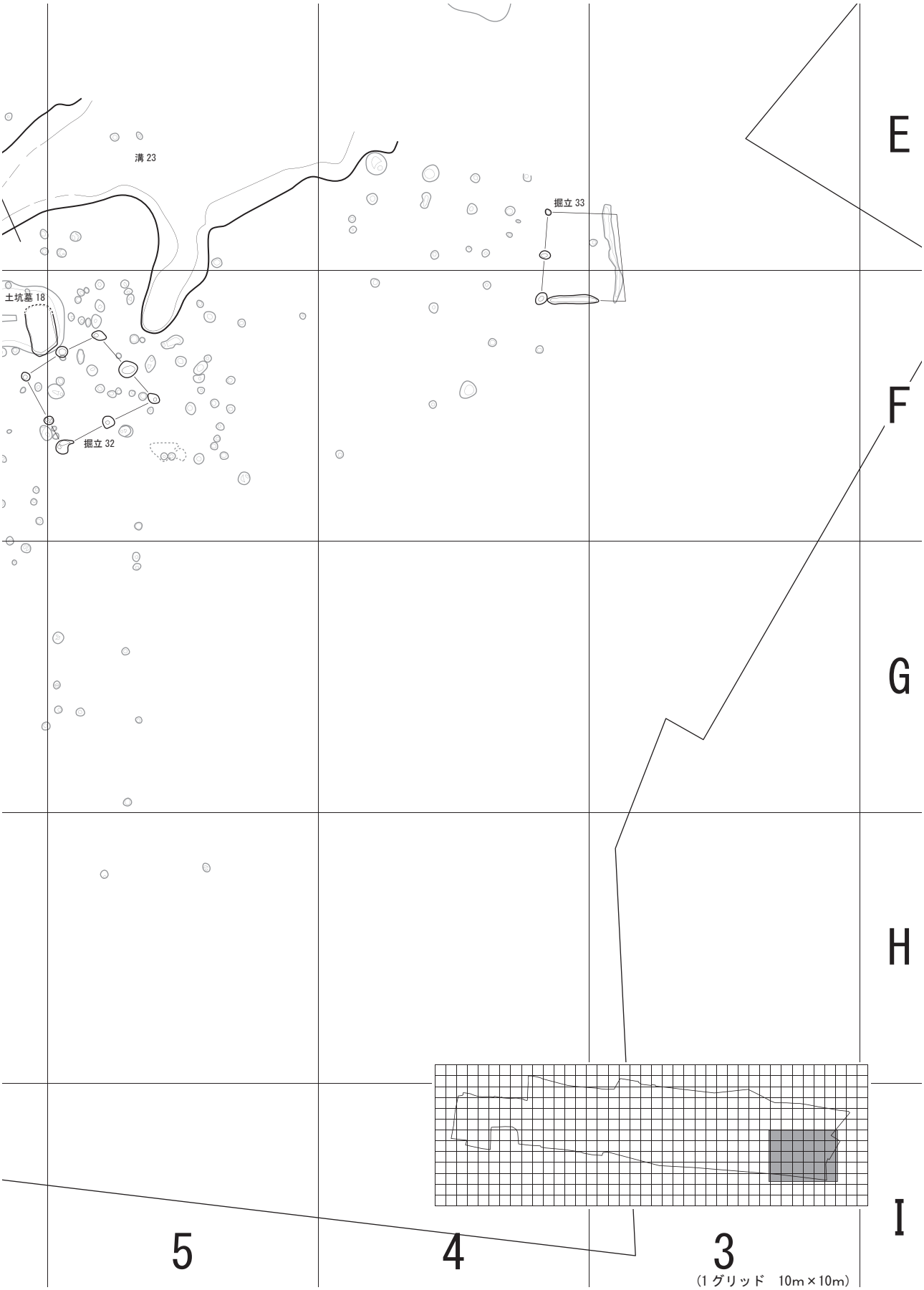
第117図　中世遺構配置図21



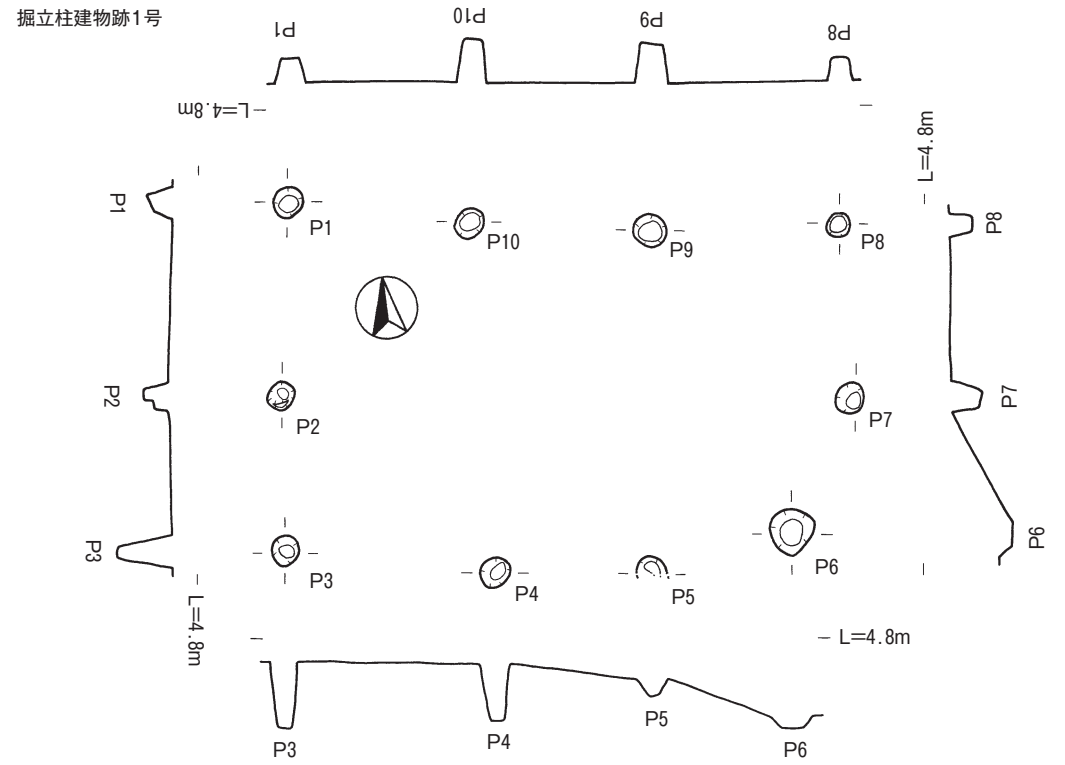
第118図　中世遺構配置図22

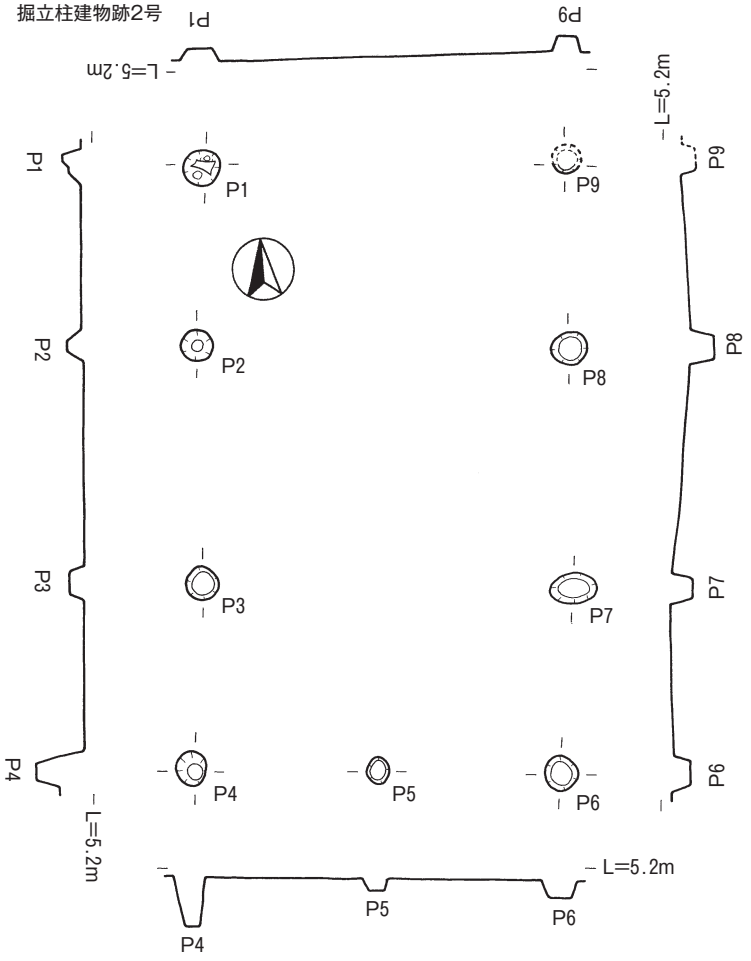


第119図　中世遺構配置図23



第120図　中世遺構配置図24





掘立柱建物跡1号

柱番号	柱穴(cm) 長径	短径	深さ
1	32	32	29
2	30	30	76
3	33	28	70
4	32	32	60
5	33	33	19
6	50	48	14
7	32	30	34
8	24	24	25
9	35	35	44
10	33	30	48

柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
1-2	2.0	3-4	2.2
2-3	1.6	4-5	1.6
6-7	1.5	5-6	1.5
7-8	1.8	8-9	2.0
		9-10	1.9
		10-1	2.0

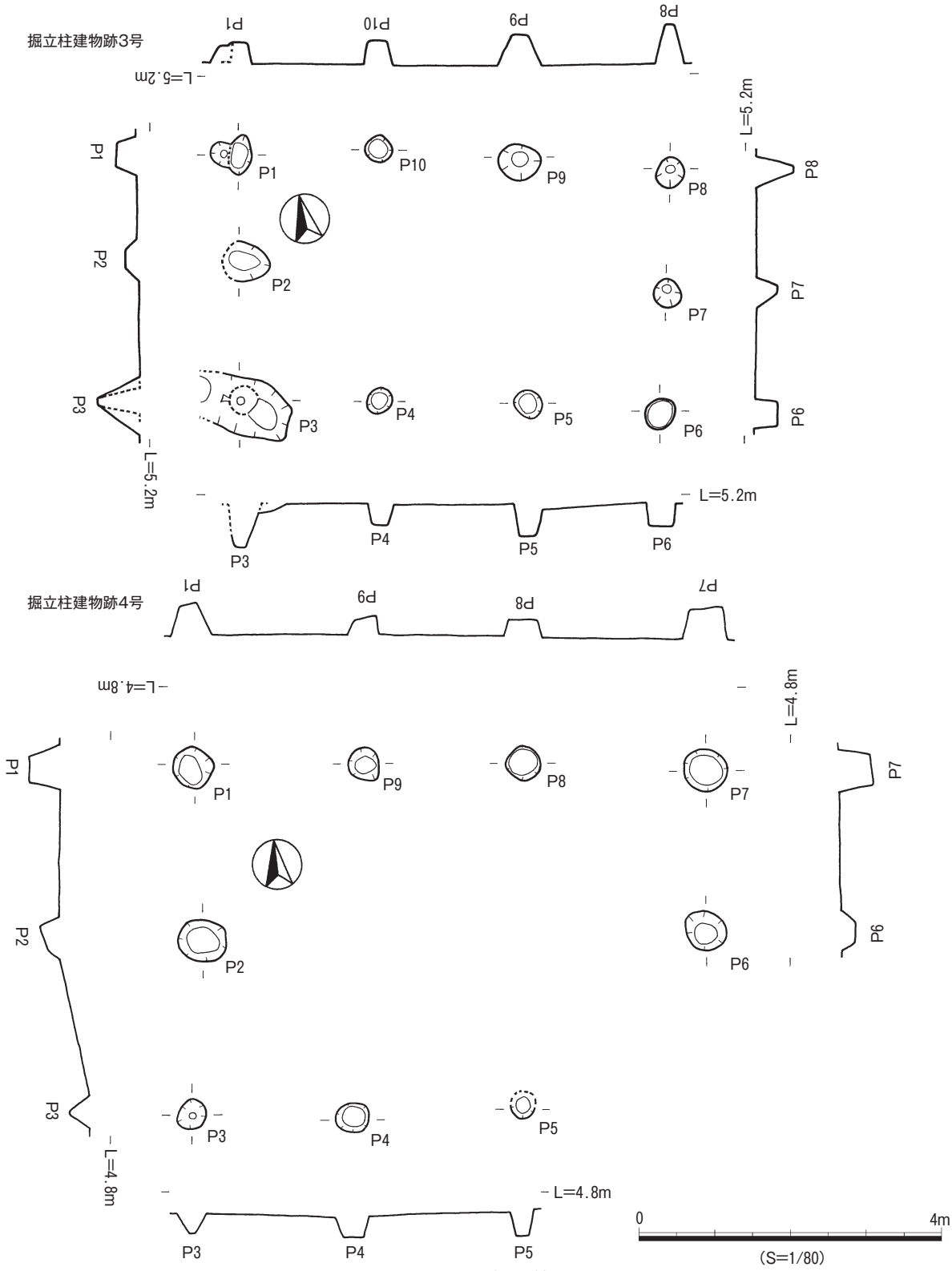
掘立柱建物跡2号

柱番号	柱穴(cm) 長径	短径	深さ
1	37	37	13
2	33	33	17
3	34	34	14
4	34	32	25
5	27	23	12
6	34	34	18
7	48	32	20
8	37	34	26
9	19+	19+	16

柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
4-5	1.9	1-2	1.9
5-6	1.9	2-3	2.5
9-1	3.85	3-4	2.0
		6-7	1.9
		7-8	2.5
		8-9	2.0

0 4m
(S=1/80)

第121図　掘立柱建物跡１，２号



掘立柱建物跡3号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	54	30	23
2	45+	54	16
3	33	33	58
4	33	33	29
5	38	35	36
6	39	34	31
7	39	37	36
8	41	37	50
9	56	48	40
10	36	36	33

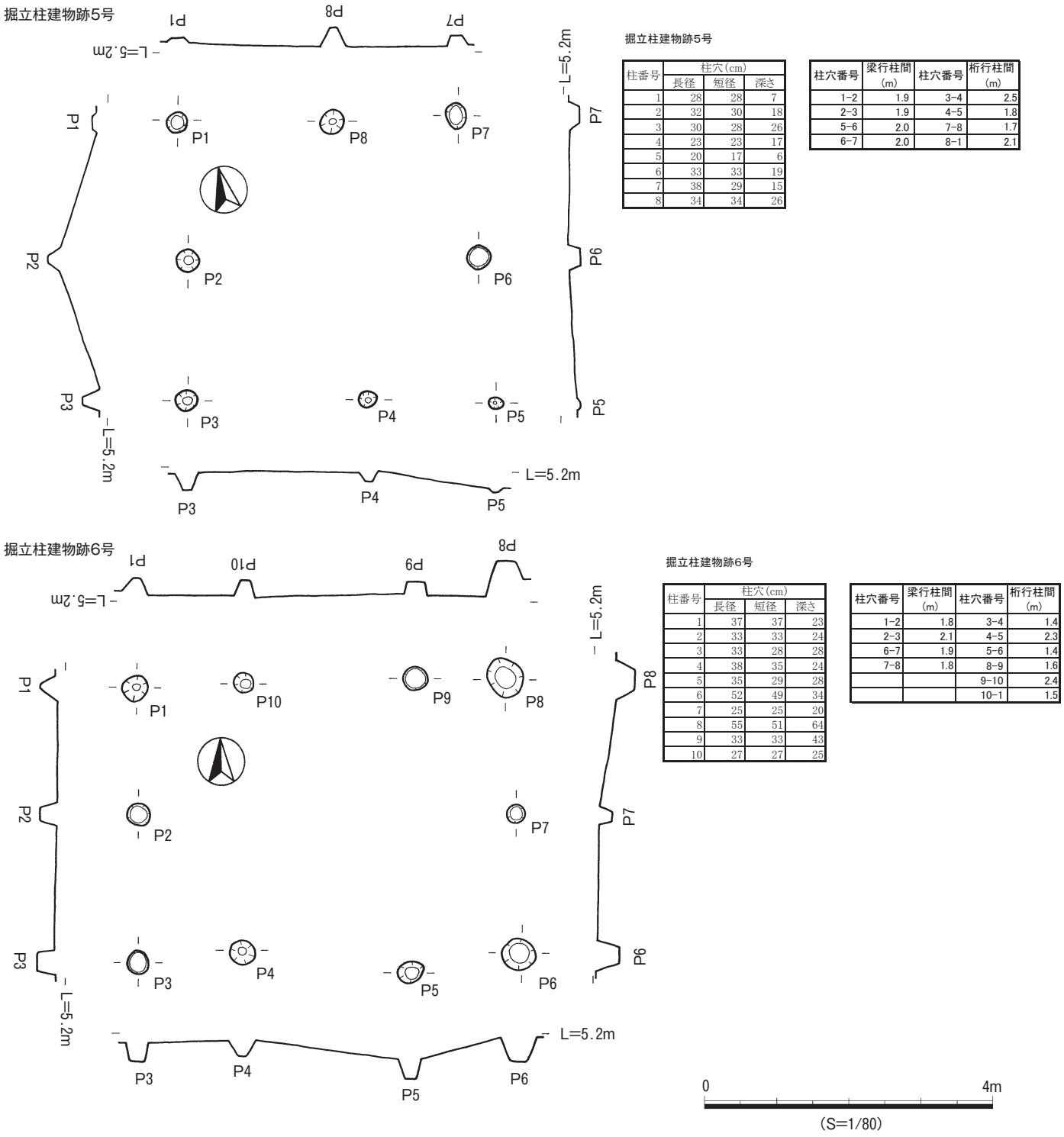
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.4	3-4	1.8
2-3	1.8	4-5	2.0
6-7	1.6	5-6	1.7
7-8	1.6	8-9	2.0
		9-10	1.9
		10-1	1.9

掘立柱建物跡4号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	55	53	41
2	64	55	26
3	40	38	28
4	43	38	27
5	31	–	33
6	52	–	22
7	58	55	43
8	46	–	27
9	40	–	28

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.2	3-4	2.1
2-3	2.3	4-5	2.2
6-7	2.2	7-8	2.3
		8-9	2.1
		9-1	2.3

第122図　掘立柱建物跡３，４号



掘立柱建物跡5号

柱番号	柱穴(cm) 長径	短径	深さ
1	28	28	7
2	32	30	18
3	30	28	26
4	23	23	17
5	20	17	6
6	33	33	19
7	38	29	15
8	34	34	26

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1–2	1.9	3–4	2.5
2–3	1.9	4–5	1.8
5–6	2.0	7–8	1.7
6–7	2.0	8–1	2.1

掘立柱建物跡6号

柱番号	柱穴(cm) 長径	短径	深さ
1	37	37	23
2	33	33	24
3	33	28	28
4	38	35	24
5	35	29	28
6	52	49	34
7	25	25	20
8	55	51	64
9	33	33	43
10	27	27	25

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1–2	1.8	3–4	1.4
2–3	2.1	4–5	2.3
6–7	1.9	5–6	1.4
7–8	1.8	8–9	1.6
		9–10	2.4
		10–1	1.5

第123図　掘立柱建物跡５，６号

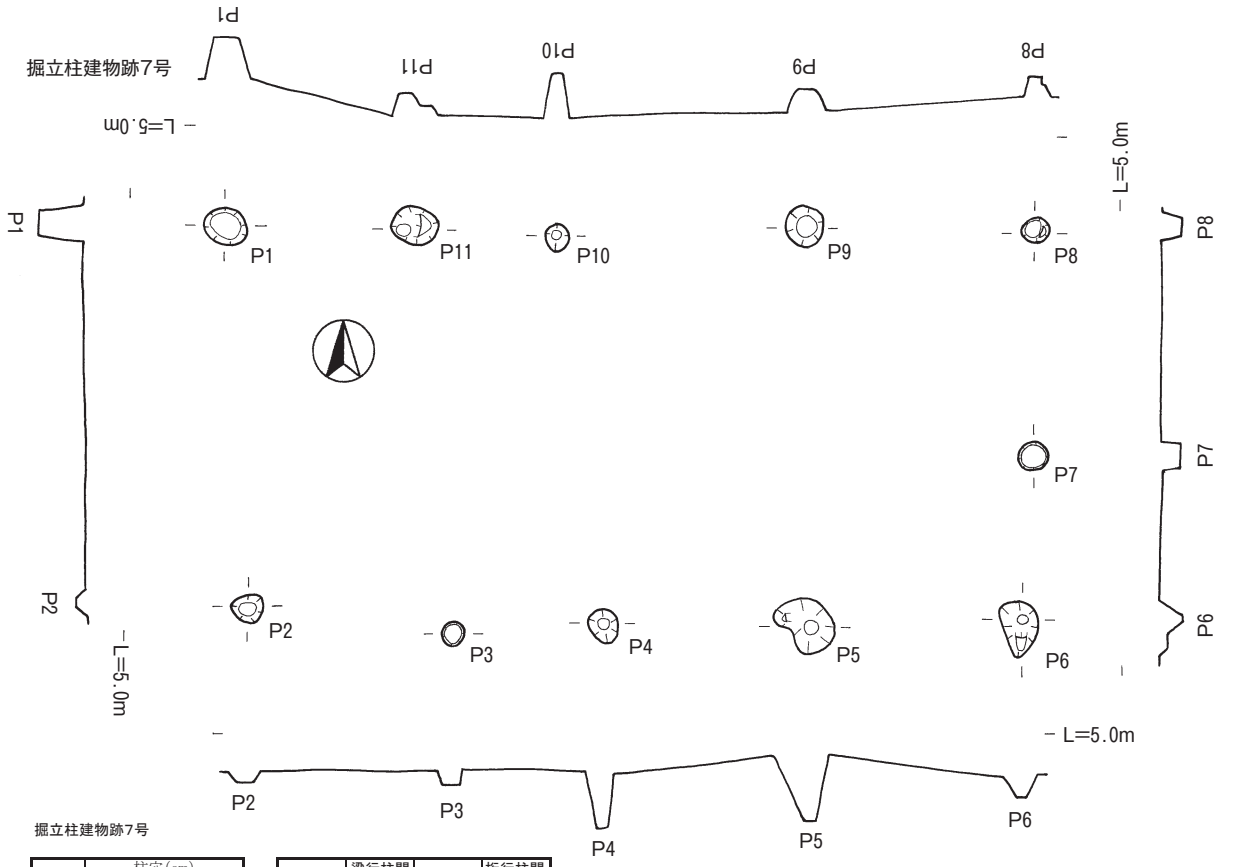
20.88㎡となる。柱穴は径30㎝強のものが大半を占める。柱穴６は梁行，桁行の直線上からやや内側にずれる。

掘立柱建物跡２号（第121図）

B・C-30・31区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.88m，桁行約6.6mの規模をもち，床面積25.608㎡となる。柱穴は径34㎝前後のものが大半を占める。なお，遺構北側の梁行間の柱穴を１本欠く。

掘立柱建物跡３号（第122図）

C-30・31区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.1m，桁行約5.6mの規模をもち，床面積17.36㎡となる。柱穴は径40㎝前後のものが多い。柱穴３は古代の溝が埋まった後に掘られている。



掘立柱建物跡7号

柱番号	柱穴(cm) 長径	短径	深さ
1	45	39	47
2	33	20+	12
3	24	22	16
4	35	30	61
5	60	43	71
6	59	35	25
7	29	29	22
8	29	25	22
9	46	40	59
10	29	27	50
11	50	39	25

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	4.0	2-3	2.2
6-7	1.8	3-4	1.6
7-8	2.4	4-5	2.2
		5-6	2.2
		8-9	2.4
		9-10	2.6
		10-11	1.6
		11-1	2.0

第124図　掘立柱建物跡７号

掘立柱建物跡４号（第122図）

B-28区で検出された。規格が2間×3間の建物で，梁行約4.6m，桁行約6.9mの規模をもち，床面積31.74㎡となる。柱穴は径40～50cmのものがほとんどである。南東隅の柱穴は確認できなかった。

掘立柱建物跡５号（第123図）

C-28区で検出された。規格が２間×２間の建物で，梁行，桁行約3.9mの規模をもち，床面積15.21㎡となる。柱穴は径約30cm前後のものが大半を占める。また，掘立柱建物跡６号と切り合い関係にある。

掘立柱建物跡６号（第123図）

C-28区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.9m，桁行約5.2mの規模をもち，床面積20.28㎡となる。柱穴は径約30～40cm前後のものが多い。

掘立柱建物跡７号（第124図）

D-28・29区で検出された。規格は２間×４間の建物で，梁行約4.2m，桁行約8.2mの規格をもち，床面積34.44㎡となる。柱穴は径30cm前後のものから60cm程度のものまであり，ばらつきがある。西側梁行間の柱穴を１本欠いている。また掘立柱建物跡８号と切り合い関係にある。

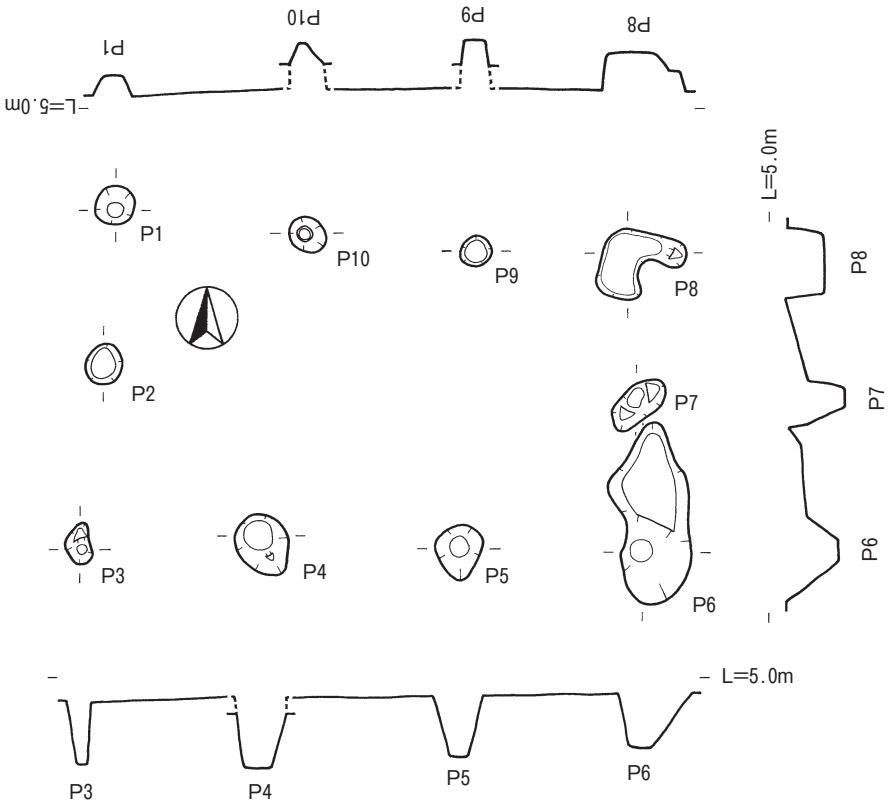
掘立柱建物跡８号（第125図）

D-28・29区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.6m，桁行約5.8mの規模をもち，床面積20.88㎡となる。柱穴は径40～50cm程度のものが大半である。柱穴６は浅い凹みと切り合っており，平面形は崩れている。

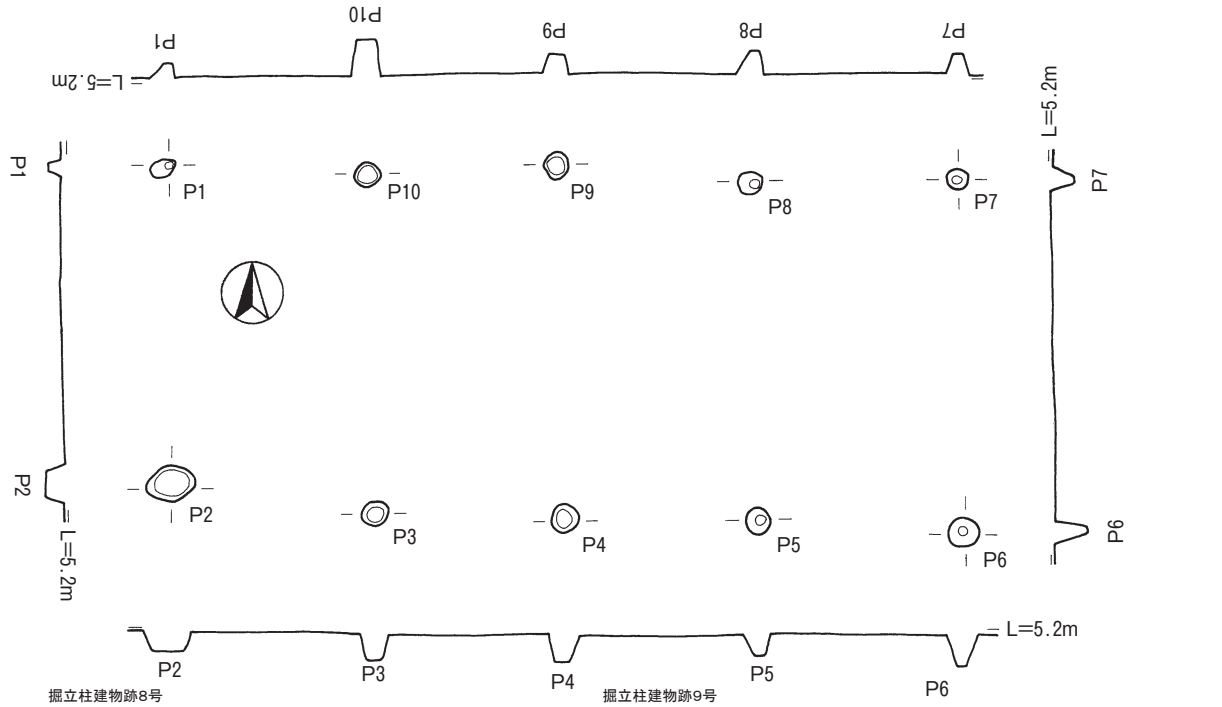
掘立柱建物跡９号（第125図）

C-27区で検出された。規格が１間×４間の建物で，梁行約3.6m，桁行約8.4mの規模をもち，床面積30.24㎡となる。柱穴は径30cm前後のものが大半を占める。

掘立柱建物跡8号



掘立柱建物跡9号



(S=1/80)

掘立柱建物跡8号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	44	40	22
2	42	36	27
3	43	27	52
4	68	55	57
5	59	50	62
6	192	65	56
7	67	34	41
8	53	27	26
9	31	31	28
10	40	35	23

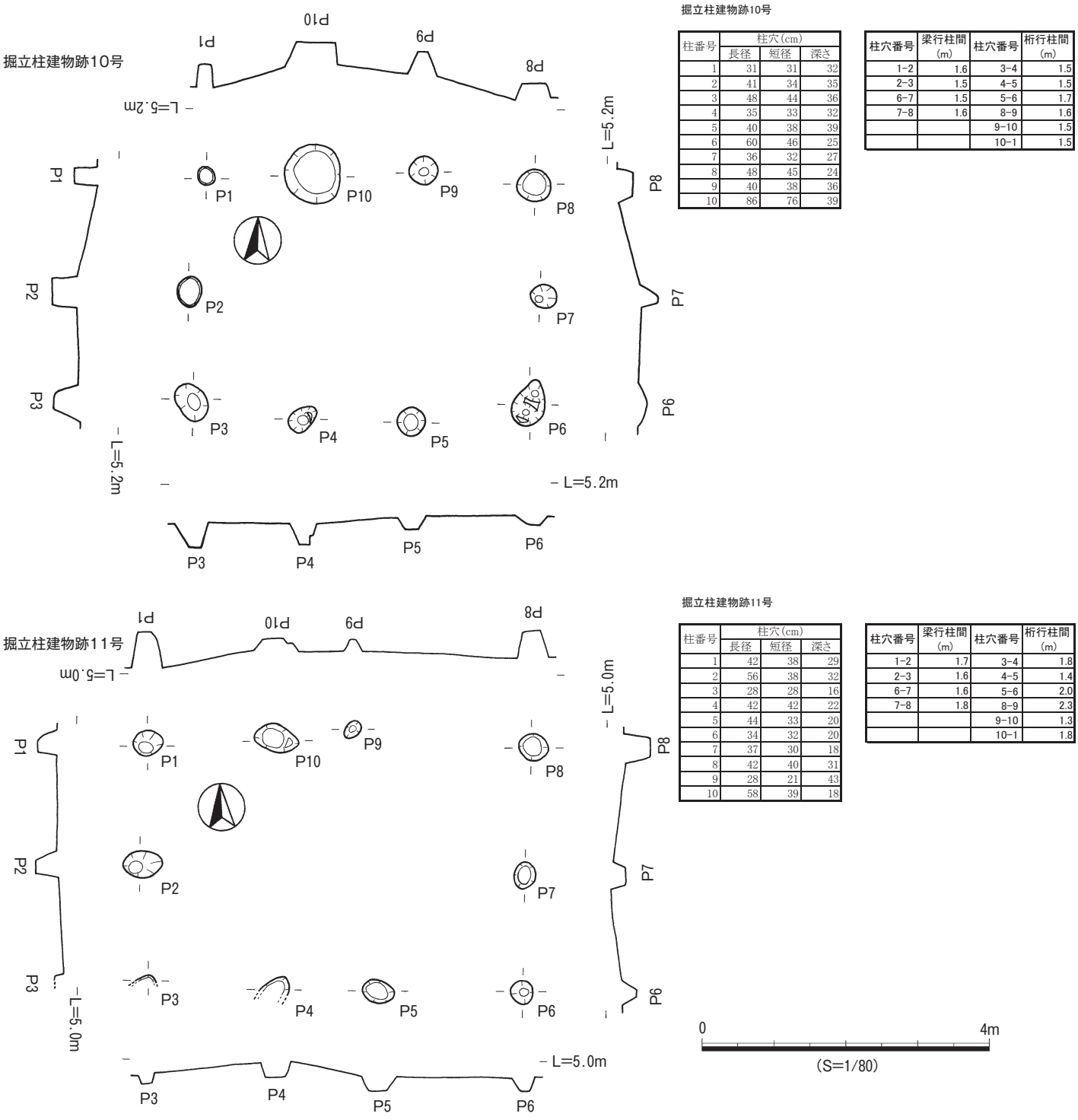
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.7	3-4	1.8
2-3	2.1	4-5	2.1
6-7	1.8	5-6	2.0
7-8	1.2	8-9	2.0
		9-10	1.8
		10-1	2.0

掘立柱建物跡9号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	29	19	15
2	53	40	22
3	28	28	36
4	31	31	30
5	29	26	25
6	33	31	43
7	23	23	23
8	27	25	26
9	29	25	20
10	28	28	40

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	3.4	2-3	2.2
6-7	3.7	3-4	2.0
		4-5	2.1
		5-6	2.1
		7-8	2.1
		8-9	2.1
		9-10	2.0
		10-1	2.1

第125図　掘立柱建物跡８，９号



掘立柱建物跡10号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	31	31	32
2	41	34	35
3	48	44	36
4	35	33	32
5	40	38	39
6	60	46	25
7	36	32	27
8	48	45	24
9	40	38	36
10	86	76	39

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.6	3-4	1.5
2-3	1.5	4-5	1.5
6-7	1.5	5-6	1.7
7-8	1.6	8-9	1.6
		9-10	1.5
		10-1	1.5

掘立柱建物跡11号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	42	38	29
2	56	38	32
3	28	28	16
4	42	42	22
5	44	33	20
6	34	32	20
7	37	30	18
8	42	40	31
9	28	21	43
10	58	39	18

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.7	3-4	1.8
2-3	1.6	4-5	1.4
6-7	1.6	5-6	2.0
7-8	1.8	8-9	2.3
		9-10	1.3
		10-1	1.8

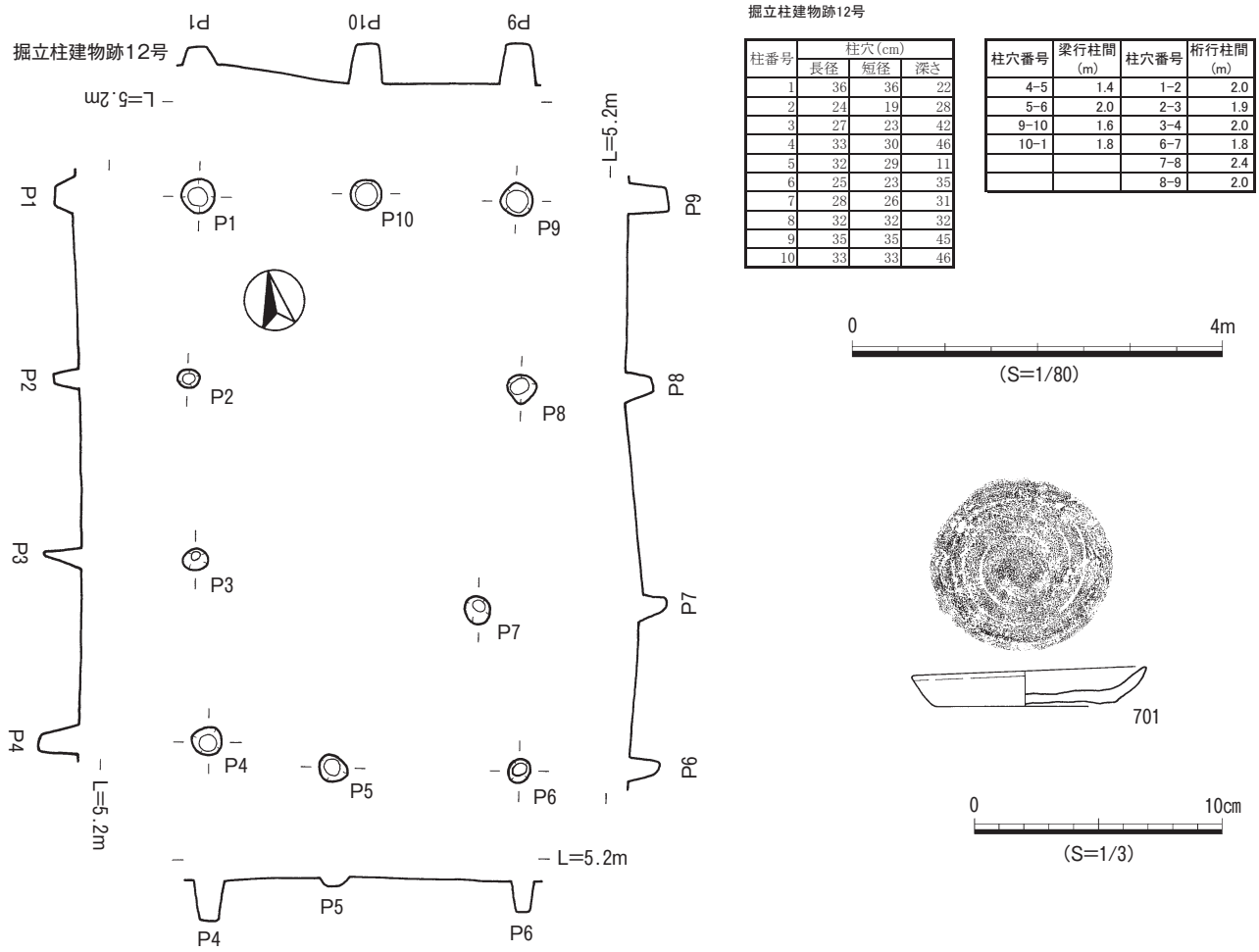
第126図　掘立柱建物跡10，11号

掘立柱建物跡10号（第126図）

D-27区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.2m，桁行約4.6mの規模をもち，床面積14.72㎡となる。柱穴は径40㎝程度のものが中心で，86㎝の大きさのものもみられる。

掘立柱建物跡11号（第126図）

D･E-27区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.4m，桁行約5.3mの規模をもち，床面積18.02㎡となる。柱穴は径40㎝前後のものが中心となる。北側桁行間の柱穴９がやや西方向へずれており規格性を乱す。



掘立柱建物跡12号

柱番号	柱穴(cm) 長径	短径	深さ
1	36	36	22
2	24	19	28
3	27	23	42
4	33	30	46
5	32	29	11
6	25	23	35
7	28	26	31
8	32	32	32
9	35	35	45
10	33	33	46

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
4-5	1.4	1-2	2.0
5-6	2.0	2-3	1.9
9-10	1.6	3-4	2.0
10-1	1.8	6-7	1.8
		7-8	2.4
		8-9	2.0

第127図　掘立柱建物跡12号・出土遺物

掘立柱建物跡12号（第127図）

A-25区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.4m，桁行約６mの規模をもち20.4㎡となる。柱穴は30㎝前後である。東側桁行間の柱穴７が西側へずれ柱配列が乱れている。柱穴６から土師器小皿が出土した。

出土遺物（第127図）

柱穴６内より土師器の小皿が１点，完形で出土した。701の体部は，丸みを帯びながら短く立ち上がる。内面には器面調整の痕跡が輪状に残る。

掘立柱建物跡13号（第128図）

D-25区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.9m，桁行約６mの規模をもち，床面積23.4㎡となる。柱穴は径35㎝前後のものが中心である。また掘立柱建物跡14号と切り合い関係にあるが，時間的前後関係については不明である。

掘立柱建物跡14号（第128図）

D-25区で検出された。規格が２間×３間の建物で，西側梁行約４m，東側梁行約3.5m，桁行約5.4mの規模をもつ，平面形がわずかに台形状を呈する。床面積20.25㎡となる。柱穴は径40～50㎝のものがほとんどである。

掘立柱建物跡15号（第129図）

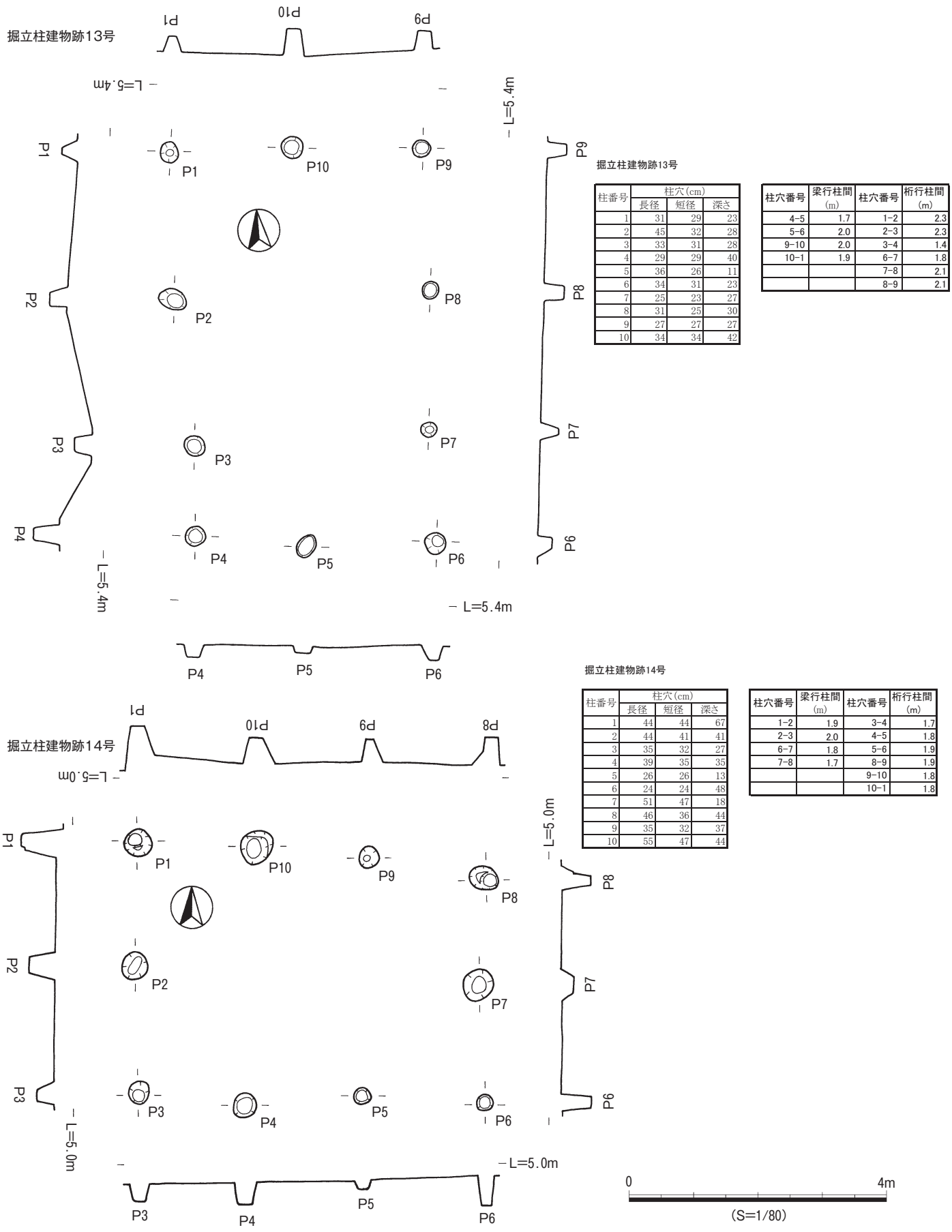
E-25・26区で検出された。規格が２間×３間の建物で，梁行約3.9m，桁行約5.1mの規模をもち，床面積19.89㎡となる。柱穴は径35～50㎝のものが大半を占める。対をなす柱穴２と柱穴８から銭貨が出土しており，地鎮の可能性を示している。

出土遺物（第129図）

柱穴２から703が，柱穴８から702が出土している。ともに錆のため文字判読が不能で，種別はわからなかった。さらに，柱穴６からも銭貨片が出土したが，小片のため図化できなかった。

掘立柱建物跡16号（第129図）

C・D-24区で検出された。浅い溝状の掘り込みの中に連続した柱穴列が確認でき，梁行約3.2m，桁行4.5mの規模をもち，床面積14.4㎡となる。壁立ちの建物が想定される。南東側で竪穴建物跡２号と切り合っている。



掘立柱建物跡13号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	31	29	23
2	45	32	28
3	33	31	28
4	29	29	40
5	36	26	11
6	34	31	23
7	25	23	27
8	31	25	30
9	27	27	27
10	34	34	42

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
4-5	1.7	1-2	2.3
5-6	2.0	2-3	2.3
9-10	2.0	3-4	1.4
10-1	1.9	6-7	1.8
		7-8	2.1
		8-9	2.1

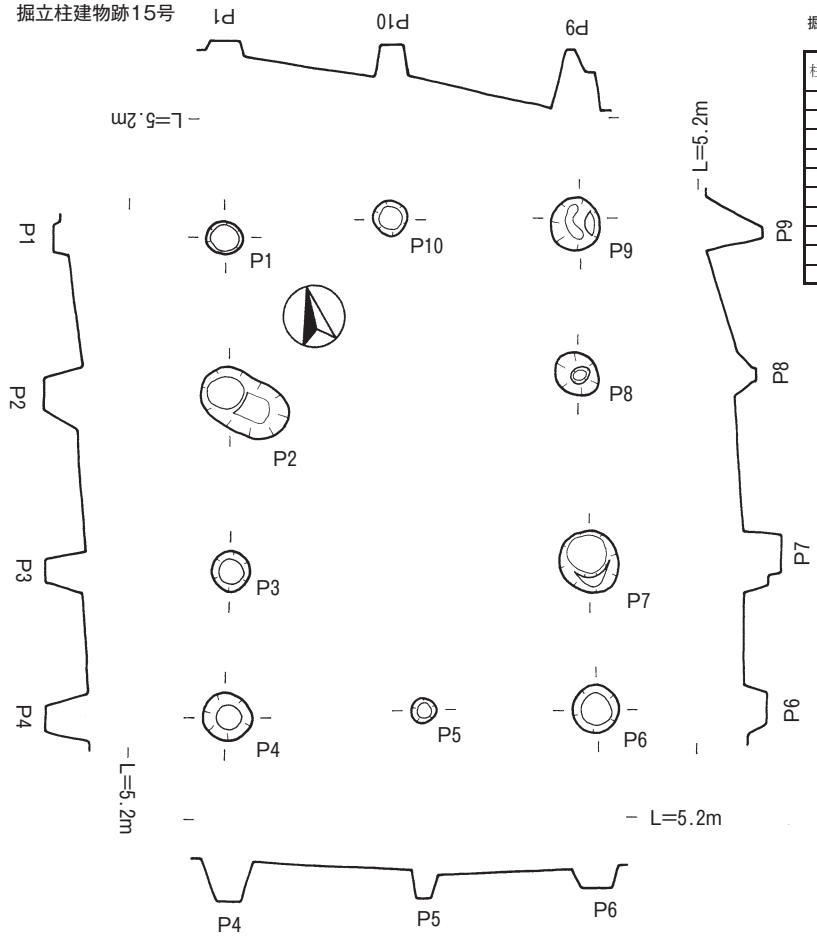
掘立柱建物跡14号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	44	44	67
2	44	41	41
3	35	32	27
4	39	35	35
5	26	26	13
6	24	24	48
7	51	47	18
8	46	36	44
9	35	32	37
10	55	47	44

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.9	3-4	1.7
2-3	2.0	4-5	1.8
6-7	1.8	5-6	1.9
7-8	1.7	8-9	1.9
		9-10	1.8
		10-1	1.8

第128図　掘立柱建物跡13，14号

掘立柱建物跡15号

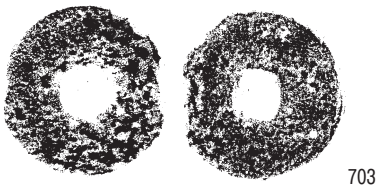


掘立柱建物跡15号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	36	33	16
2	96	58	34
3	41	41	43
4	51	51	46
5	24	24	31
6	48	48	23
7	66	61	40
8	49	42	20
9	53	51	63
10	36	36	32

柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
4-5	2.1	1-2	1.7
5-6	1.8	2-3	1.8
9-10	2.0	3-4	1.5
10-1	1.7	6-7	1.6
		7-8	2.0
		8-9	1.7

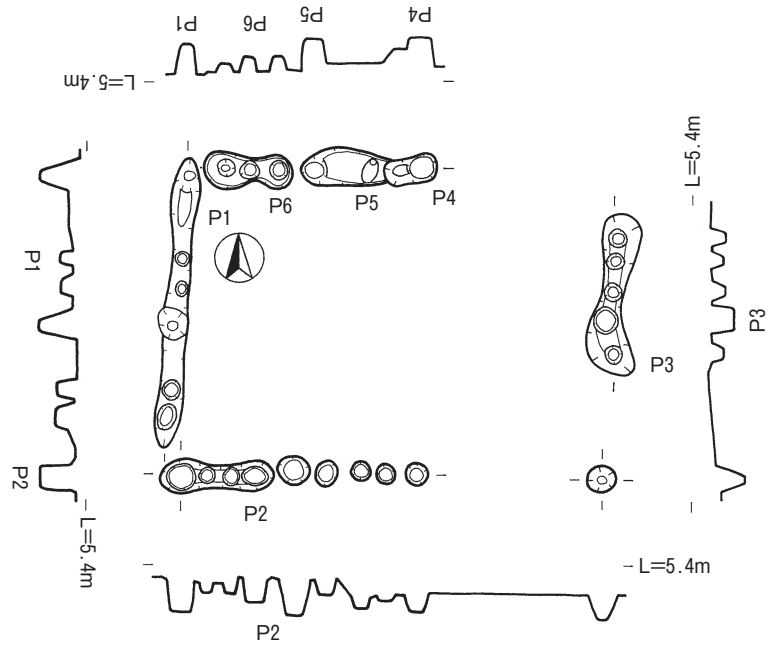






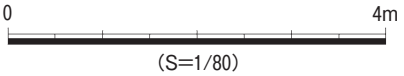
(原　寸)

掘立柱建物跡16号



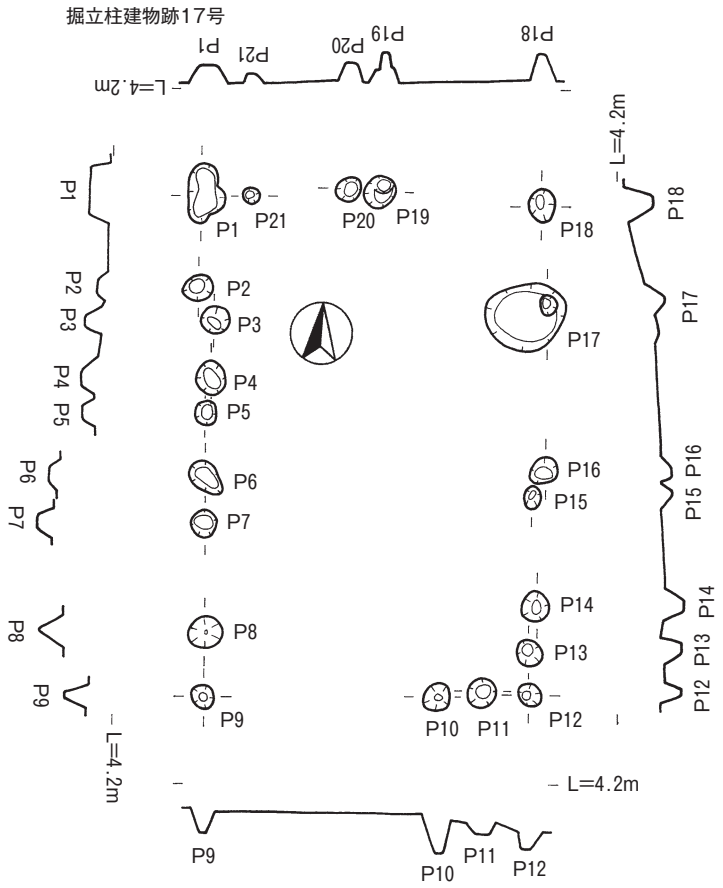
掘立柱建物跡16号(壁立ち)

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	305	17	45
2	244	30	41
3	162	20	29
4	53	24	31
5	86+	39	33
6	89	19	20



(S=1/80)

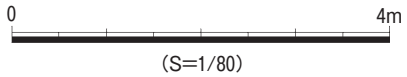
第129図　掘立柱建物跡15，16号・15号出土遺物



掘立柱建物跡17号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	63	29	21.6
2	32	28	11.2
3	32	29	23
4	37	32	17.4
5	26	23	14.6
6	43	28	9.7
7	30	22	21.6
8	37	34	25.6
9	24	24	26.8
10	28	28	44
11	32	32	15.3
12	24	22	15.6
13	28	28	23.9
14	33	31	23.6
15	26	17	10.6
16	29	27	12.3
17	85	74	20.4
18	35	28	31.3
19	33	33	33
20	26	26	21.6
21	19	17	9.4

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
9–10	2.5	1–2	0.8
10–11	0.5	2–3	0.5
11–12	0.5	3–4	0.6
18–19	1.7	4–5	0.4
19–20	0.3	5–6	0.7
20–21	1.1	6–7	0.5
21–1	0.5	7–8	1.1
		8–9	0.7
		12–13	0.5
		13–14	0.5
		14–15	1.2
		15–16	0.3
		16–17	1.6
		17–18	1.2



第130図　掘立柱建物跡17号

掘立柱建物跡17号（第130図）

F-24・25区で検出された。直線的に連続した柱穴が確認された。梁行約3.6m，桁行約5.3mの規模をもち，床面積19.08㎡となる。壁立ちの建物が想定される。柱穴径は30㎝前後のものが大半を占める。

掘立柱建物跡18号（第131図）

D・E-23・24区で検出された。規格は２間×２間の建物で，梁行約3.8m，桁行約４mの規模をもち，床面積15.2㎡となる。柱穴は径60㎝前後のものが多い。

また柱穴１，３，５，７，８から銭貨が１枚ずつ出土しており，地鎮の可能性を示している。

出土遺物（第131図）

柱穴１から704が出土した。開元通宝である。柱穴３からは708が出土した。天豊通宝である。柱穴５から707が出土した。元祐通宝である。柱穴７からは706が出土した。天聖元宝である。柱穴８から705が出土した。祥符通宝である。

掘立柱建物跡19号（第132図）

C・D-22・23区で検出された。規格は２間×３間の建物で，梁行約4.3m，桁行約6.6mの規模をもち，床面積28.38㎡となる。柱穴は50㎝～70㎝のものが主体である。

掘立柱建物跡20号（第133図）

A'・A-20区で検出された。規格は２間×３間の建物で，梁行約2.7m，桁行約5.4mの規模をもち，床面積14.58㎡となる。南北に庇の付く２面庇の建物が想定される。南面庇の柱穴は建物本体の柱数に比例せず，５本確認されている。

掘立柱建物跡21号（第134図）

C・D-19・20区で検出された。規格は３間×５間で，梁行約６m，桁行約10mの規模をもち，床面積60㎡となる総柱の建物である。柱穴は径40㎝～60㎝のものが大半を占める。柱穴７，24など柱配列に乱れが見られるものも確認できる。

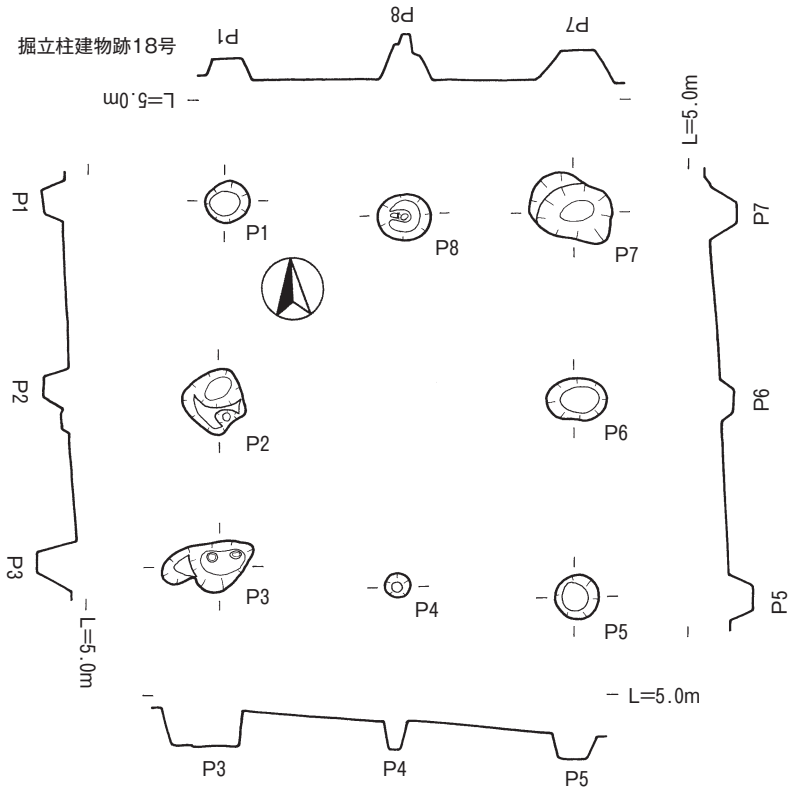
掘立柱建物跡22号（第135図）

D・E-20・21区で検出された。規格は２間×３間で，梁行約４m，桁行約5.6mの規模をもち，床面積22.4㎡となる建物である。柱穴は30㎝～40㎝のものが主体である。西側の梁行間の柱穴を１本欠いている。

また建物南側で掘立柱建物跡23号と切り合い関係にある。時間的前後関係は不明である。

掘立柱建物跡23号（第136図）

E-20・21区で検出された。規格が１間×１間で，４m



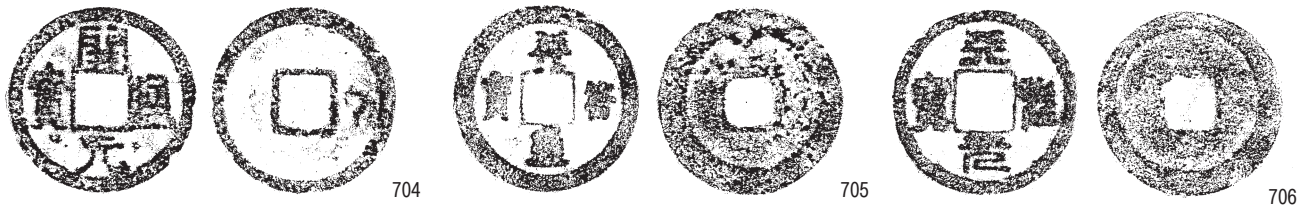
掘立柱建物跡18号

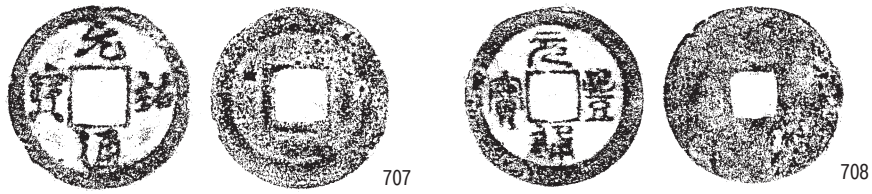
柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	44	44	22
2	59	49	31
3	99	27	46
4	24	24	33
5	45	45	24
6	62	42	19
7	39	55	34
8	56	56	48

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.0	3-4	1.9
2-3	1.8	4-5	1.9
5-6	2.1	7-8	1.8
6-7	2.0	8-1	1.9

0 4m

(S=1/80)

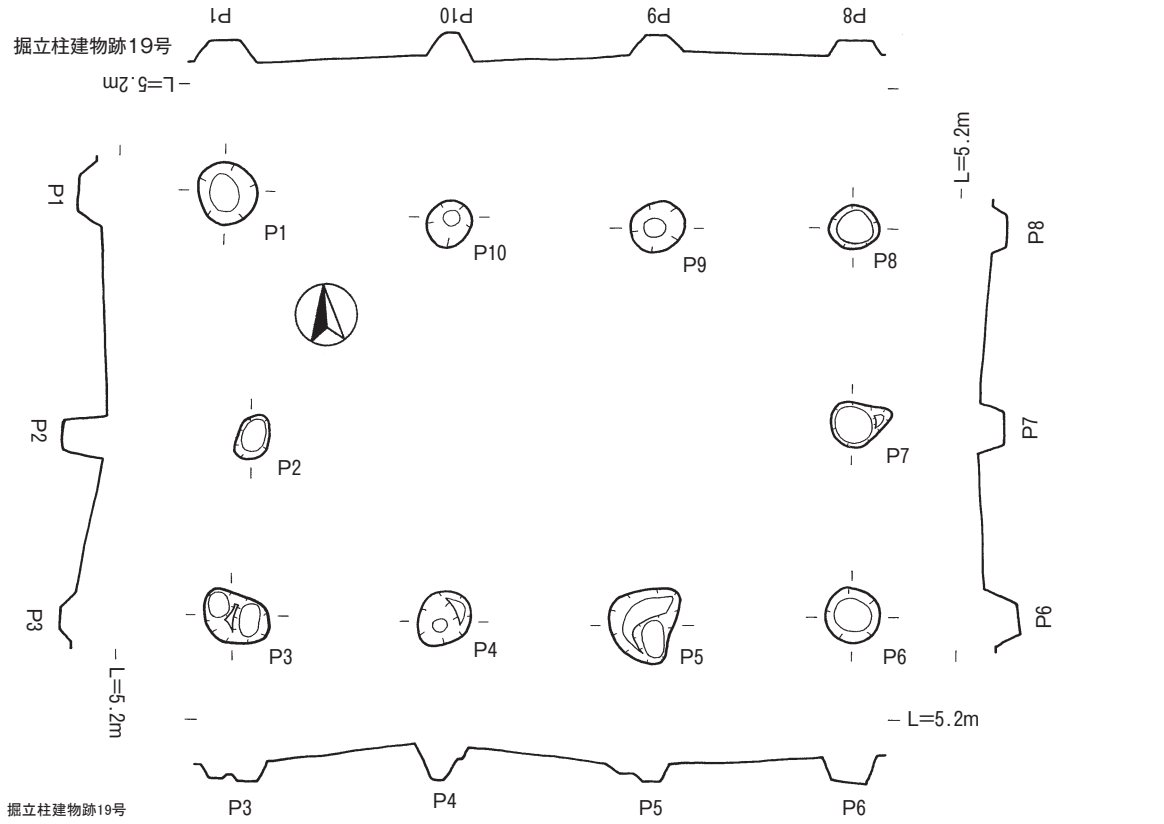




0 5cm

(原　寸)

第131図　掘立柱建物跡18号・出土遺物



掘立柱建物跡19号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	68	63	22
2	49	34	45
3	67	53	23
4	64	54	38
5	78	67	19
6	58	58	39
7	66	52	27
8	54	54	17
9	54	48	20
10	51	45	25

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.6	3-4	2.2
2-3	1.9	4-5	2.2
6-7	2.1	5-6	2.2
7-8	2.1	8-9	2.1
		9-10	2.2
		10-1	2.4

第132図　掘立柱建物跡19号

四方の正方形の平面形を示す，床面積16㎡となる建物である。ほかと比較して柱穴間が広い。柱穴は径30㎝～50㎝である。

掘立柱建物跡24号（第136図）

D-19区で検出された。規格が３間×３間で，6.2m四方の正方形の平面形を示す，床面積38.44㎡となる総柱の建物である。柱穴は径40㎝～60㎝前後のものが大半を占める。

掘立柱建物跡25号（第137図）

D-17区で検出された。規格が２間×３間で，梁行約４m，桁行約5.6mの規模をもち，床面積22.4㎡となる建物である。柱穴は径40㎝強のものがほとんどである。

掘立柱建物跡26号（第137図）

D-16区で検出された。規格が２間×２間で，3.2m四方の正方形の平面形を示す，床面積10.24㎡となる建物である。かつ南側に庇をもつ一面庇建物である。庇の柱穴は，建物本体の柱数に比例せず，４本確認された。柱穴の径は20㎝～40㎝のものがほとんどである。柱穴９から銭貨片が出土したが，小片のため図化できなかった。

掘立柱建物跡27号（第138図）

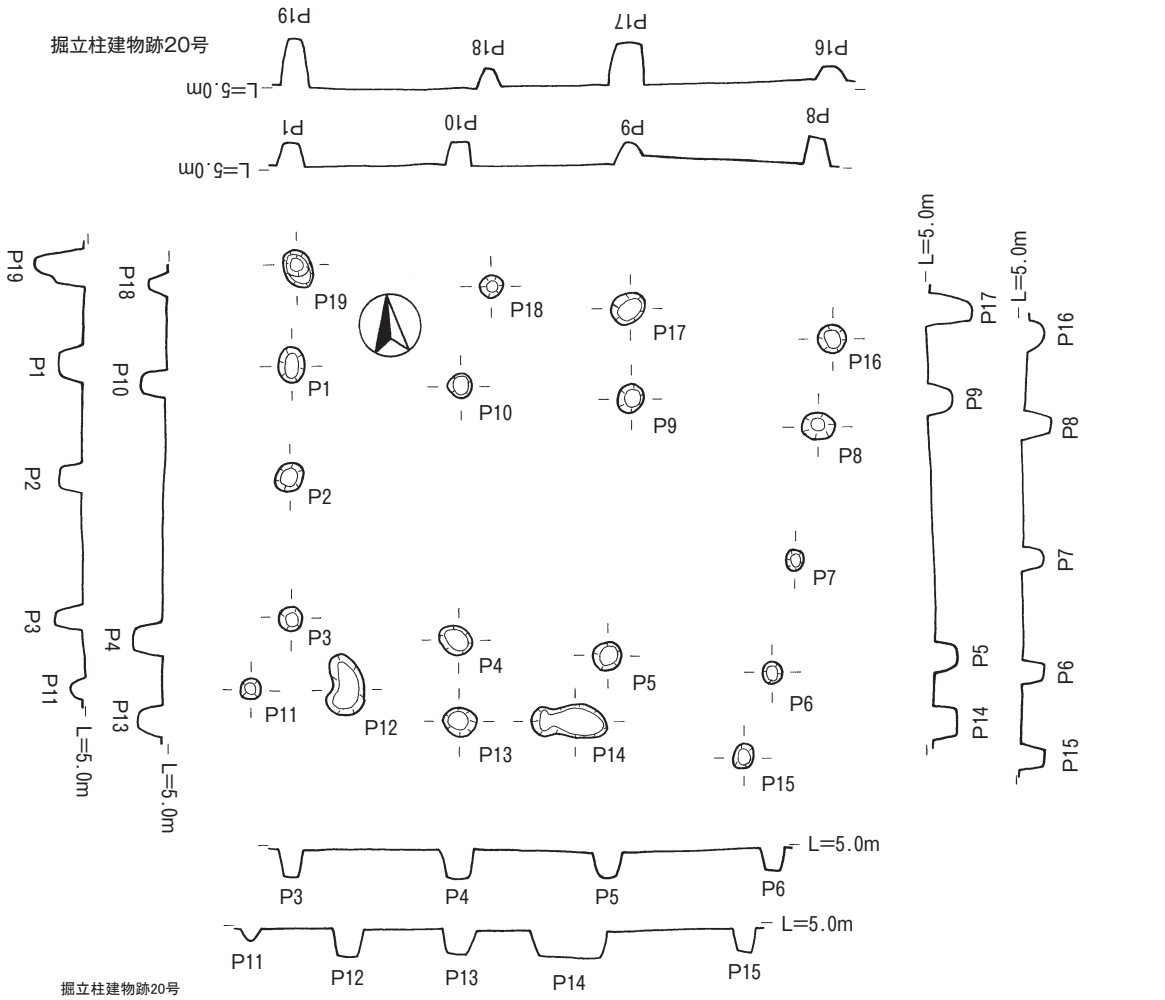
F-11・12区で検出された。規格が２間×１間で，3.6m四方の正方形の平面形を示す，床面積12.96㎡となる建物である。建物東側の中間柱を欠いている。柱穴の径は35㎝前後である。

掘立柱建物跡28号（第138図）

F・G-9区で検出された。規格は２間×２間で，４m四方の正方形の平面形を示す，床面積16㎡となる建物である。柱穴は径30㎝～40㎝である。掘立柱建物跡29号と切り合い関係にある。また柱穴２を共有している。時間的前後関係については不明である。

掘立柱建物跡29号（第139図）

F・G-9区で検出された。規格は２間×２間で，４m四



柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	39	29	26.5
2	30	30	26.5
3	25	25	30
4	36	32	33
5	30	30	26.5
6	25	23	25
7	27	19	22
8	30	30	35
9	30	30	26
10	25	25	28
11	23	23	15
12	67	31	30.5
13	36	30	26.5
14	80	25	28
15	27	23	27
16	33	33	16
17	36	32	48.5
18	25	25	21
19	41	29	53.4

柱穴番号	梁行柱間(m)
1-2	1.2
2-3	1.5
6-7	1.2
7-8	1.4
19-1	1.1
3-11	0.8
15-6	0.9
8-16	1.0

柱穴番号	桁行柱間(m)
3-4	1.8
4-5	1.6
5-6	1.8
8-9	2.0
9-10	1.8
10-1	1.8
11-12	1.0
12-13	1.2
13-14	1.1
14-15	2.0
16-17	2.2
17-18	1.5
18-19	2.1

第133図　掘立柱建物跡20号

方の正方形の平面形を示す，床面積16㎡となる建物で，建物南側の中間柱を欠いている総柱建物と考えられる。柱穴は径30㎝前後である。

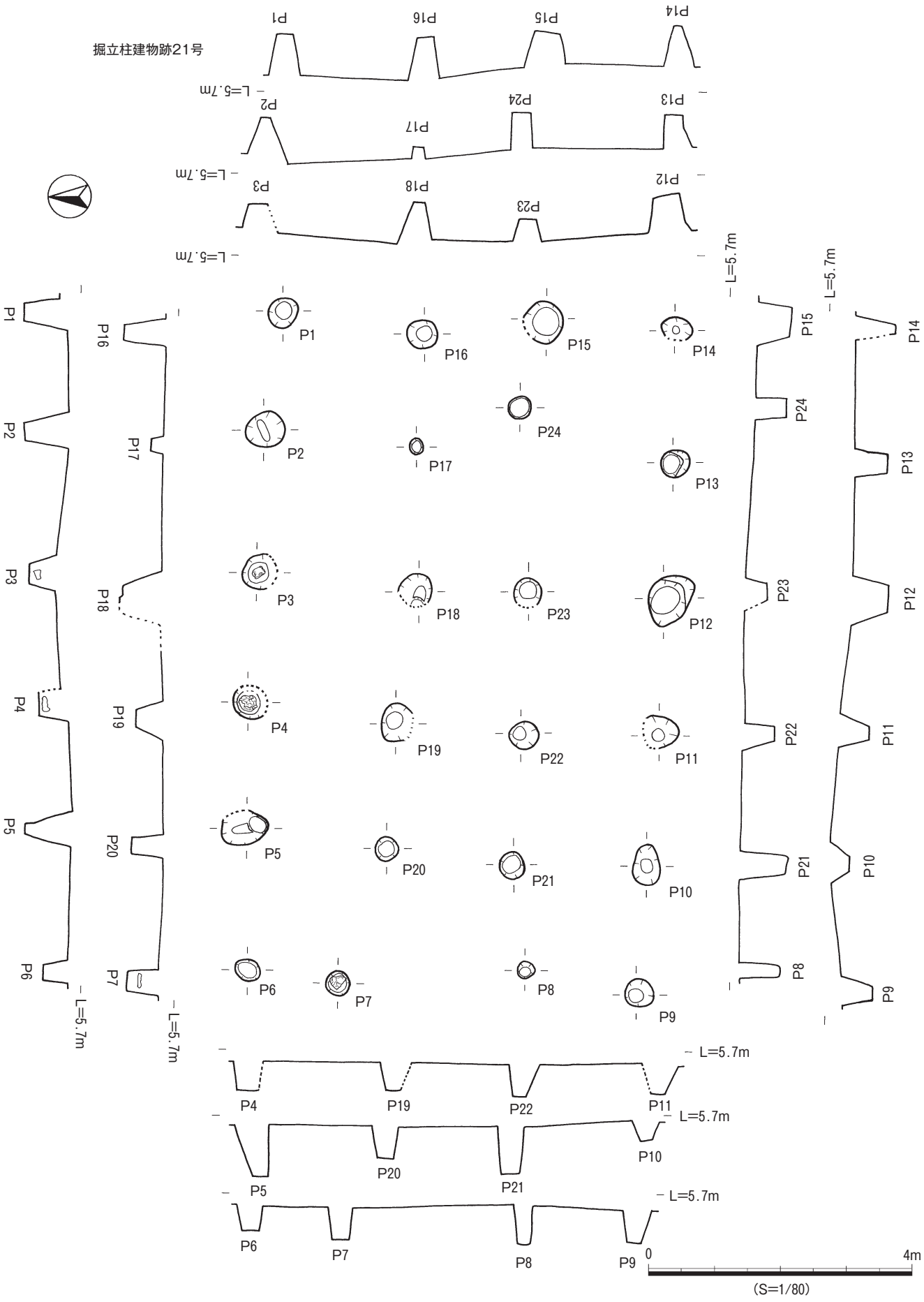
掘立柱建物跡30号（第139図）

F・G-7区で検出された。規格は２間×２間で，北側梁行3.3m，南側梁行3.8m，桁行４mのわずかに台形の平面形を示す，床面積14.2㎡となる総柱になると思われる建物であるが東側桁行間の柱穴が欠けており，明言は出来ない。また建物北側，南側の両面に庇，もしくは柵と思われる柱穴列が並ぶ。

出土遺物（第139図）

柱穴10内より，土師器の小皿とカムィヤキの甕の胴部が出土したが，カムィヤキは流れ込みと判断した。

709は土師器の小皿である。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。口縁部の一部に煤が付着しており，灯明皿と考えられる。



第134図　掘立柱建物跡21号

掘立柱建物跡21号

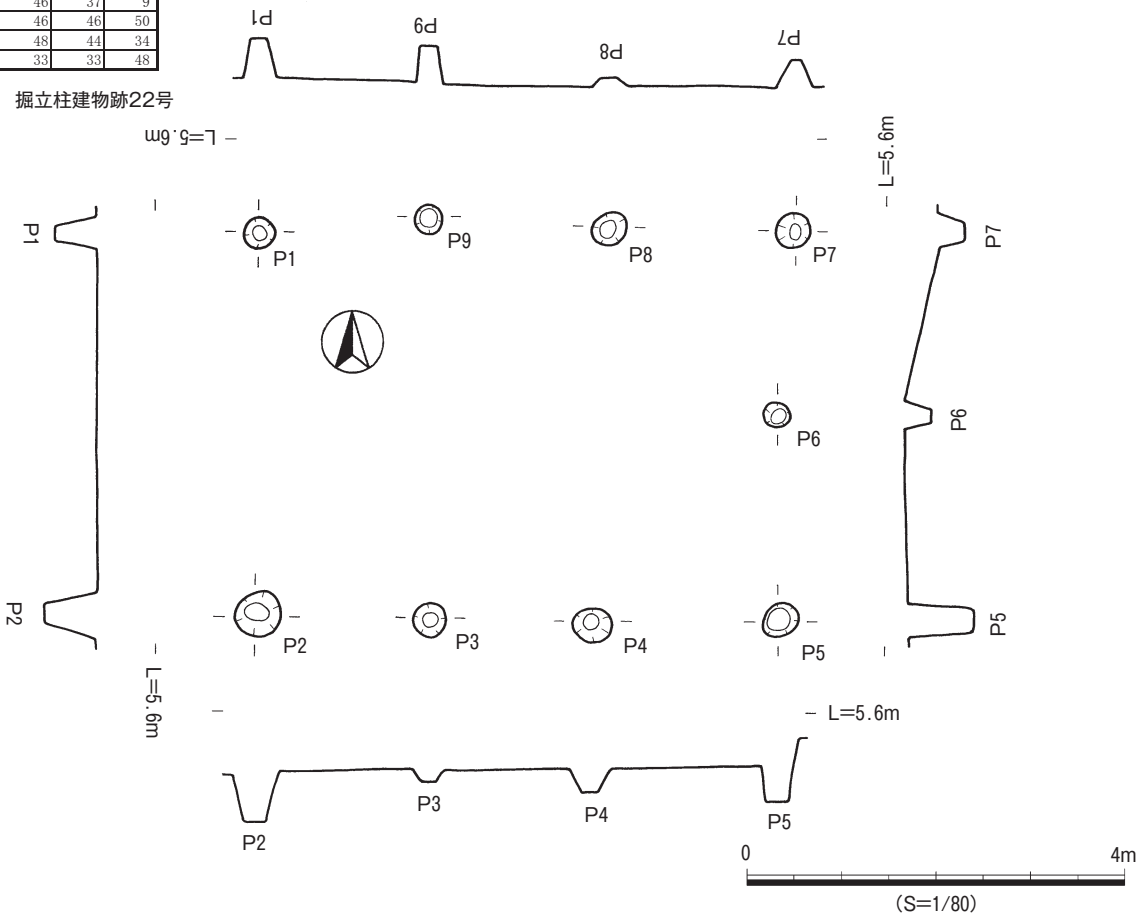
柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	51	44	66
2	62	55	73
3	55	55	37
4	51	51	55
5	73	54	80
6	42	34	38
7	37	37	39
8	26	26	9
9	45	45	50
10	63	36	29
11	56	52	46
12	86	62	62
13	45	42	49
14	50	37	62
15	67	62	54
16	48	48	66
17	26	20	18
18	53	53	58
19	60	47	42
20	36	36	48
21	46	37	9
22	46	46	50
23	48	44	34
24	33	33	48

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
6-7	1.8	1-2	1.8
7-8	2.4	2-3	2.1
8-9	1.8	3-4	1.7
14-15	2.0	4-5	2.1
15-16	1.8	5-6	2.2
16-1	2.2	9-10	1.9
5-20	1.9	10-11	2.0
20-21	1.9	11-12	2.0
21-10	2.0	12-13	2.1
4-19	2.2	13-14	2.0
19-22	1.9	16-17	1.7
22-11	2.1	17-18	2.2
3-18	2.5	18-19	2.0
18-23	1.7	19-20	2.0
23-12	2.1	20-7	1.9
2-17	2.3	8-21	1.8
17-24	1.7	22-23	2.8
24-13	2.4	21-22	2.1
		23-24	2.8
		24-15	1.4

掘立柱建物跡22号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	33	33	43
2	49	47	53
3	35	33	11
4	41	35	25
5	41	35	67
6	26	26	29
7	36	36	27
8	36	34	8
9	30	28	20

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	4.1	2-3	1.8
5-6	2.2	3-4	1.7
6-7	1.9	4-5	2.0
		7-8	1.9
		8-9	1.9
		9-1	1.8



第135図　掘立柱建物跡22号

掘立柱建物跡31号（第140図）

C-5区で検出された。規格は２間×３間で，梁行3.2ｍ，桁行６ｍの規模をもち，床面積19.2㎡となる建物で，南北に庇をもつ建物である。東側の梁行間の柱穴を１本欠いている。柱穴は径40～50㎝程度が平均である。柱穴１から銭貨が出土しており，地鎮の可能性を示す。

出土遺物（第140図）

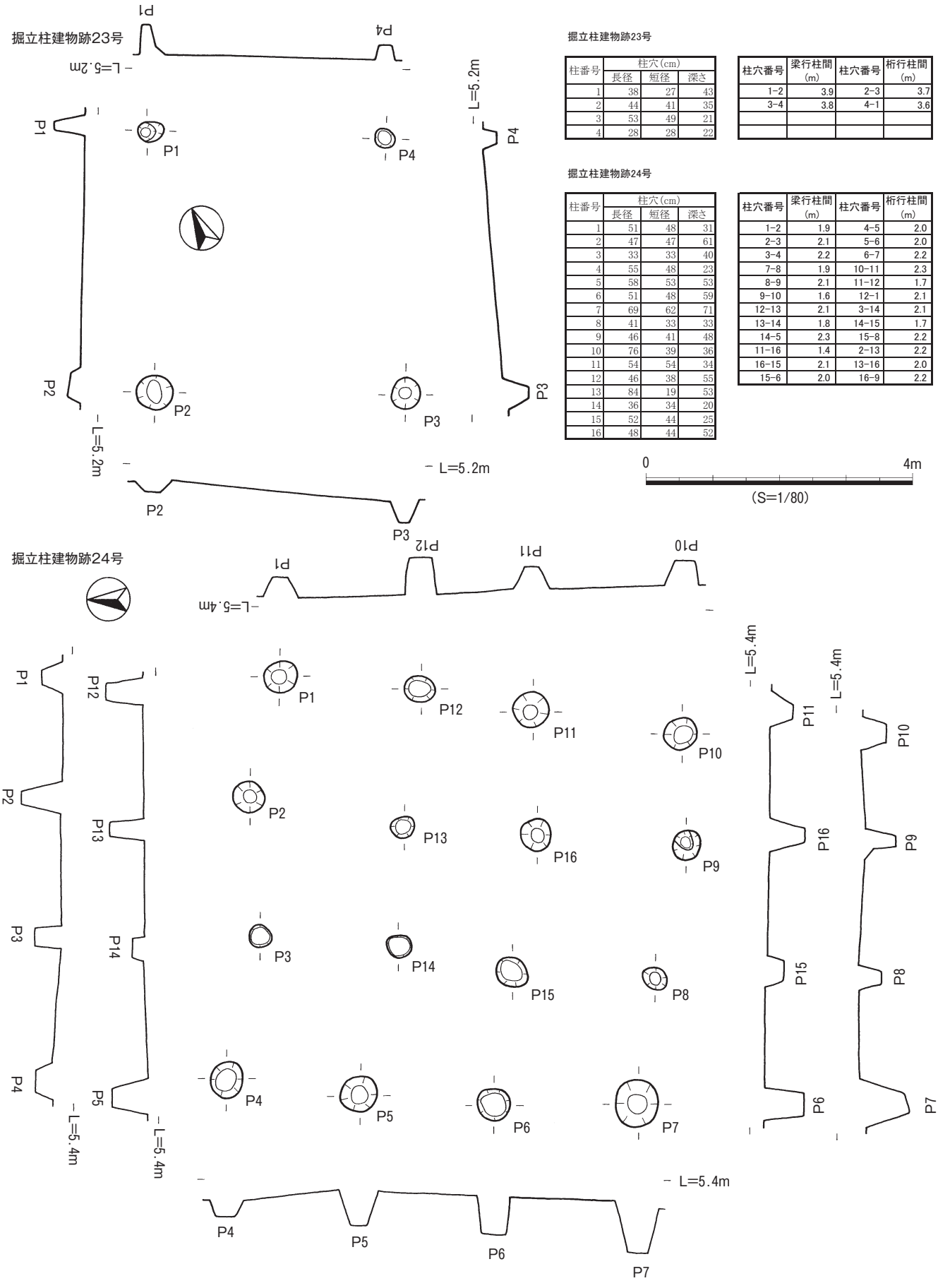
柱穴１から710，711が出土した。710は政和通宝，711は洪武通宝である。

掘立柱建物跡32号（第141図）

F-5・6区で検出された。規格は２間×２間で，梁行３ｍ，南側桁行４ｍ，北側桁行３ｍの規模をもち，床面積10.5㎡となる。若干台形状を呈する建物である。柱穴は径40㎝前後のものがほとんどである。

掘立柱建物跡33号（第141図）

E・F-3・4区で検出された。規格は，西側南北方向の３柱穴列と南側の溝状の掘り込みからは推定できない。建物の一部が壁立ちであった可能性が伺える。



掘立柱建物跡23号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	38	27	43
2	44	41	35
3	53	49	21
4	28	28	22

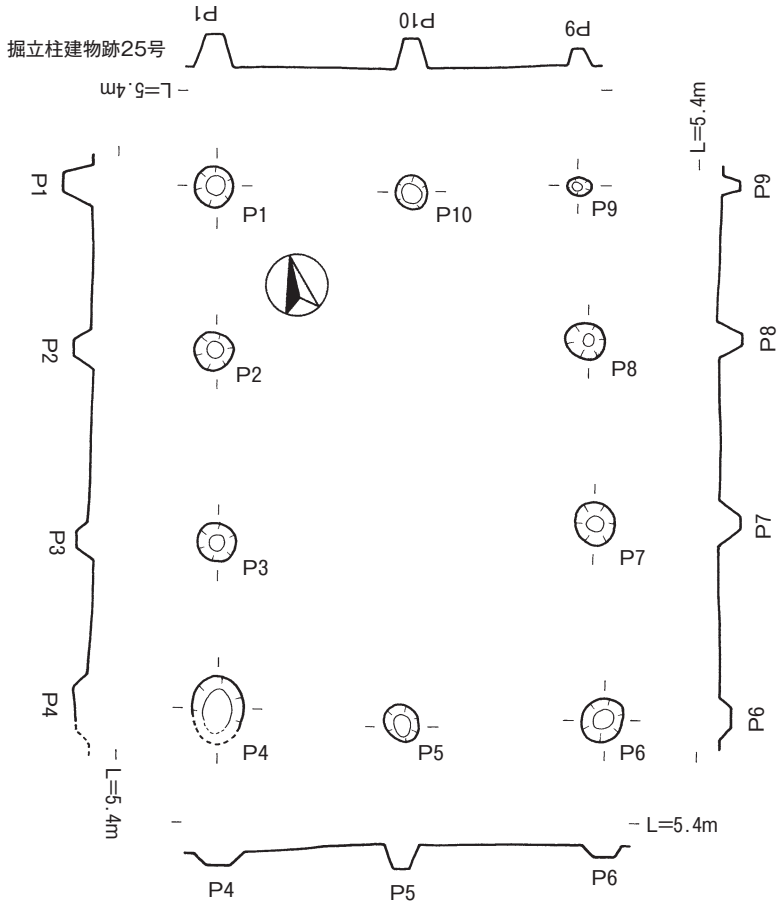
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	3.9	2-3	3.7
3-4	3.8	4-1	3.6

掘立柱建物跡24号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	51	48	31
2	47	47	61
3	33	33	40
4	55	48	23
5	58	53	53
6	51	48	59
7	69	62	71
8	41	33	33
9	46	41	48
10	76	39	36
11	54	54	34
12	46	38	55
13	84	19	53
14	36	34	20
15	52	44	25
16	48	44	52

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.9	4-5	2.0
2-3	2.1	5-6	2.0
3-4	2.2	6-7	2.2
7-8	1.9	10-11	2.3
8-9	2.1	11-12	1.7
9-10	1.6	12-1	2.1
12-13	2.1	3-14	2.1
13-14	1.8	14-15	1.7
14-5	2.3	15-8	2.2
11-16	1.4	2-13	2.2
16-15	2.1	13-16	2.0
15-6	2.0	16-9	2.2

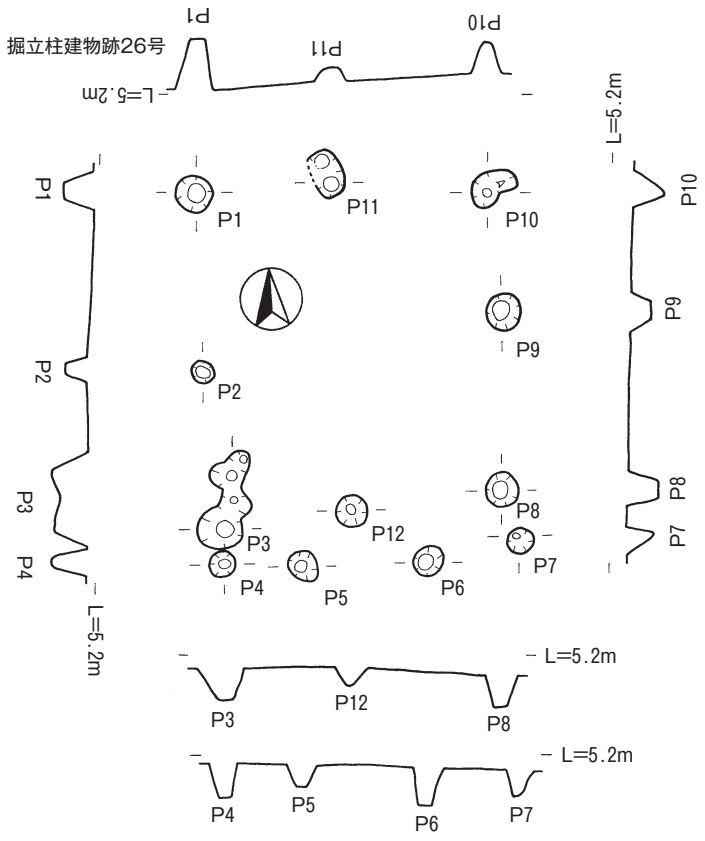
第136図　掘立柱建物跡23，24号



掘立柱建物跡25号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	42	37	34
2	40	40	21
3	39	39	18
4	51+	53	15
5	36	33	27
6	44	41	13
7	45	42	23
8	42	35	26
9	25	19	18
10	34	31	33

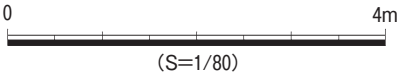
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
4-5	1.9	1-2	1.7
5-6	2.1	2-3	2.1
9-10	1.7	3-4	1.7
10-1	2.1	6-7	2.1
		7-8	2.0
		8-9	1.6



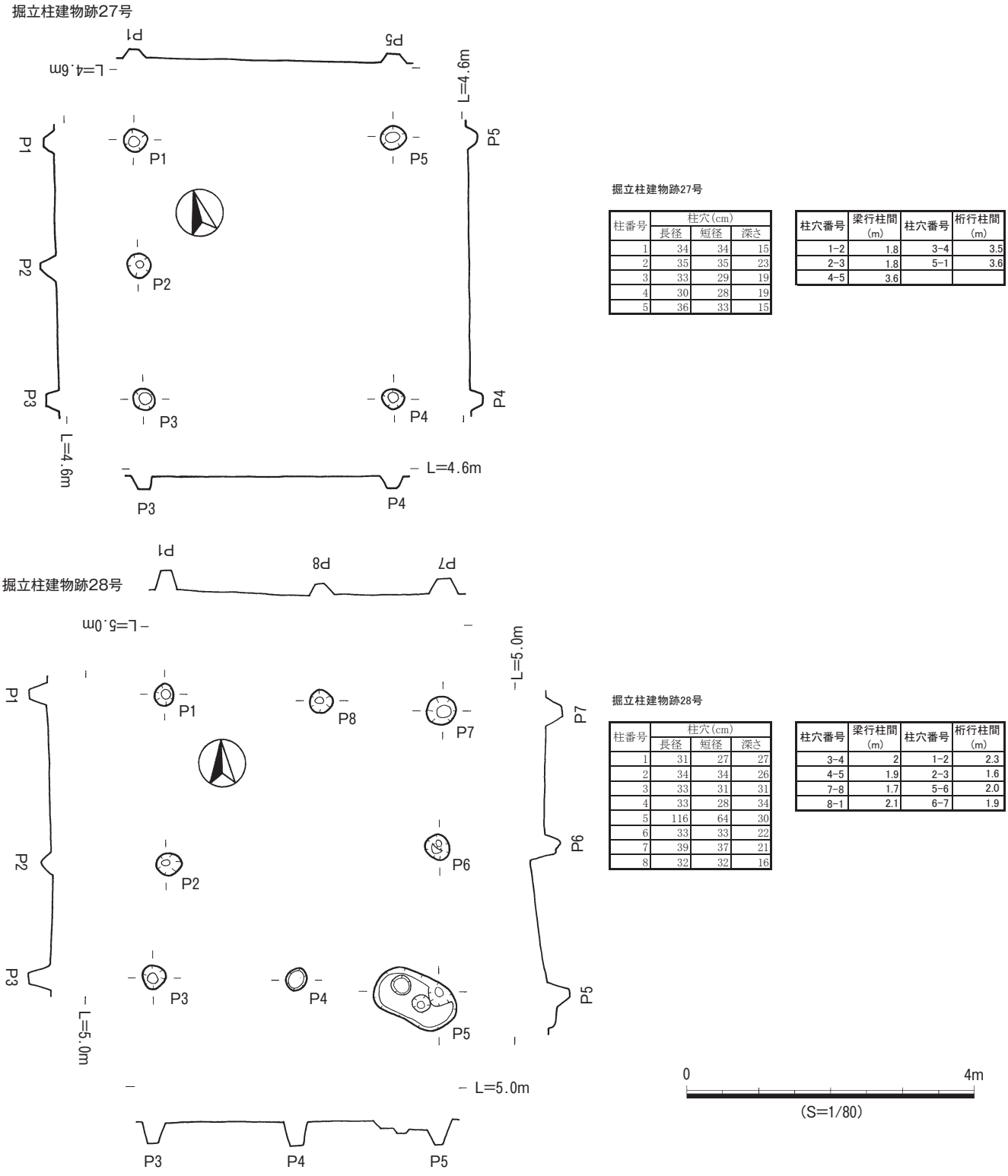
掘立柱建物跡26号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	38	38	54
2	25	22	26
3	99	47	35
4	28	26	38
5	33	28	25
6	33	28	40
7	29	27	27
8	36	33	35
9	37	36	23
10	51	37	44
11	49	34	23
12	32	32	20

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.9	4-5	0.8
2-3	1.7	5-6	1.3
8-9	1.9	6-7	1.0
9-10	1.3	10-11	1.7
		11-1	1.4
		3-12	1.3
		12-8	1.6



第137図　掘立柱建物跡25，26号



掘立柱建物跡27号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	34	34	15
2	35	35	23
3	33	29	19
4	30	28	19
5	36	33	15

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.8	3-4	3.5
2-3	1.8	5-1	3.6
4-5	3.6		

掘立柱建物跡28号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	31	27	27
2	34	34	26
3	33	31	31
4	33	28	34
5	116	64	30
6	33	33	22
7	39	37	21
8	32	32	16

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
3-4	2	1-2	2.3
4-5	1.9	2-3	1.6
7-8	1.7	5-6	2.0
8-1	2.1	6-7	1.9

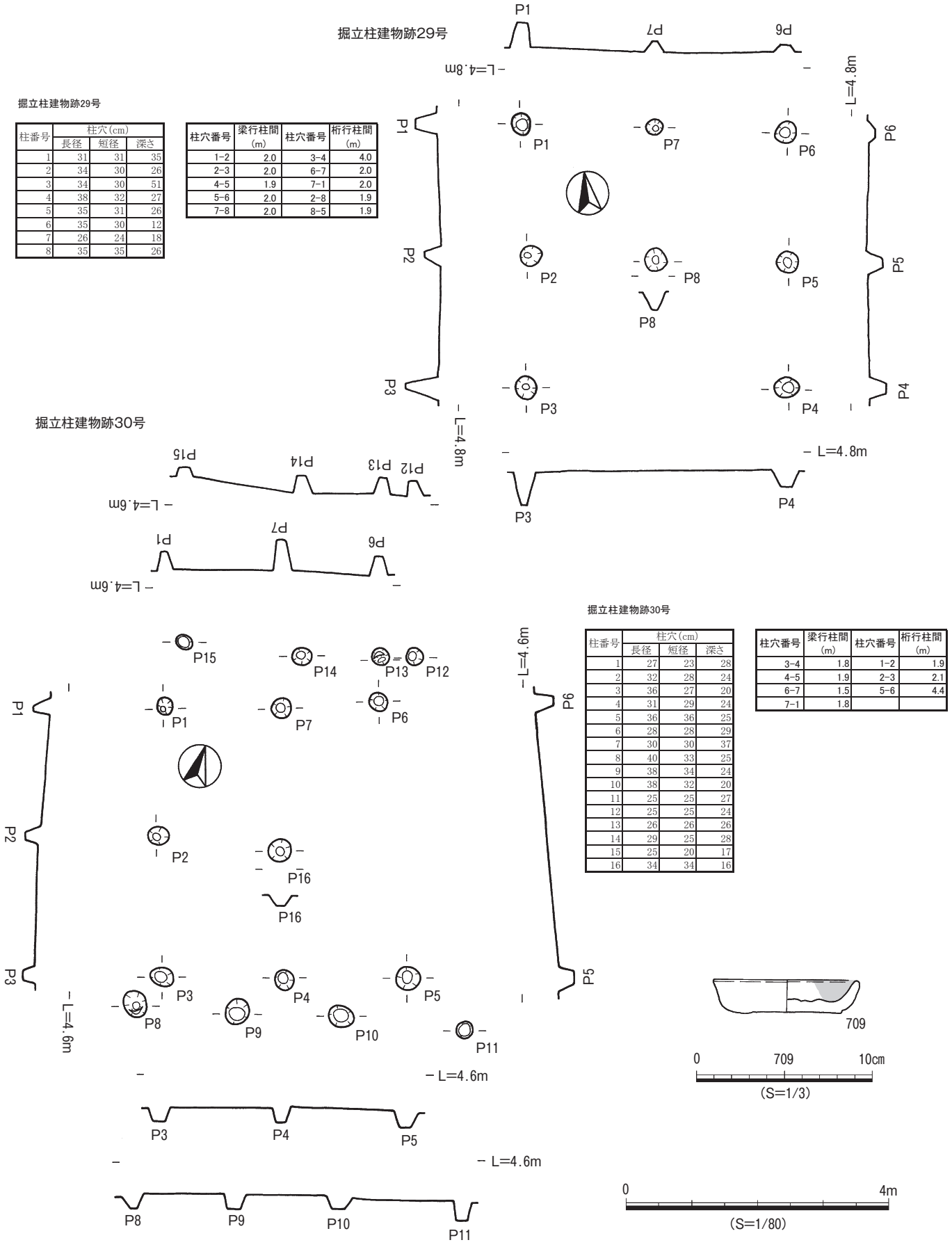
第138図　掘立柱建物跡27，28号

竪穴建物跡（第142図～第151図）

竪穴建物跡は11基検出された。調査区内西側には検出されず，東側の１基を除き，ほとんどが調査区中央付近で検出された。

竪穴建物跡１号（第142図）

B・C-31区で検出された。形状は１辺が3.5ｍのやや崩れた隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約40㎝程度で壁の立ちあがりは緩やかである。埋土内からは遺物も多数出土している。



掘立柱建物跡29号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	31	31	35
2	34	30	26
3	34	30	51
4	38	32	27
5	35	31	26
6	35	30	12
7	26	24	18
8	35	35	26

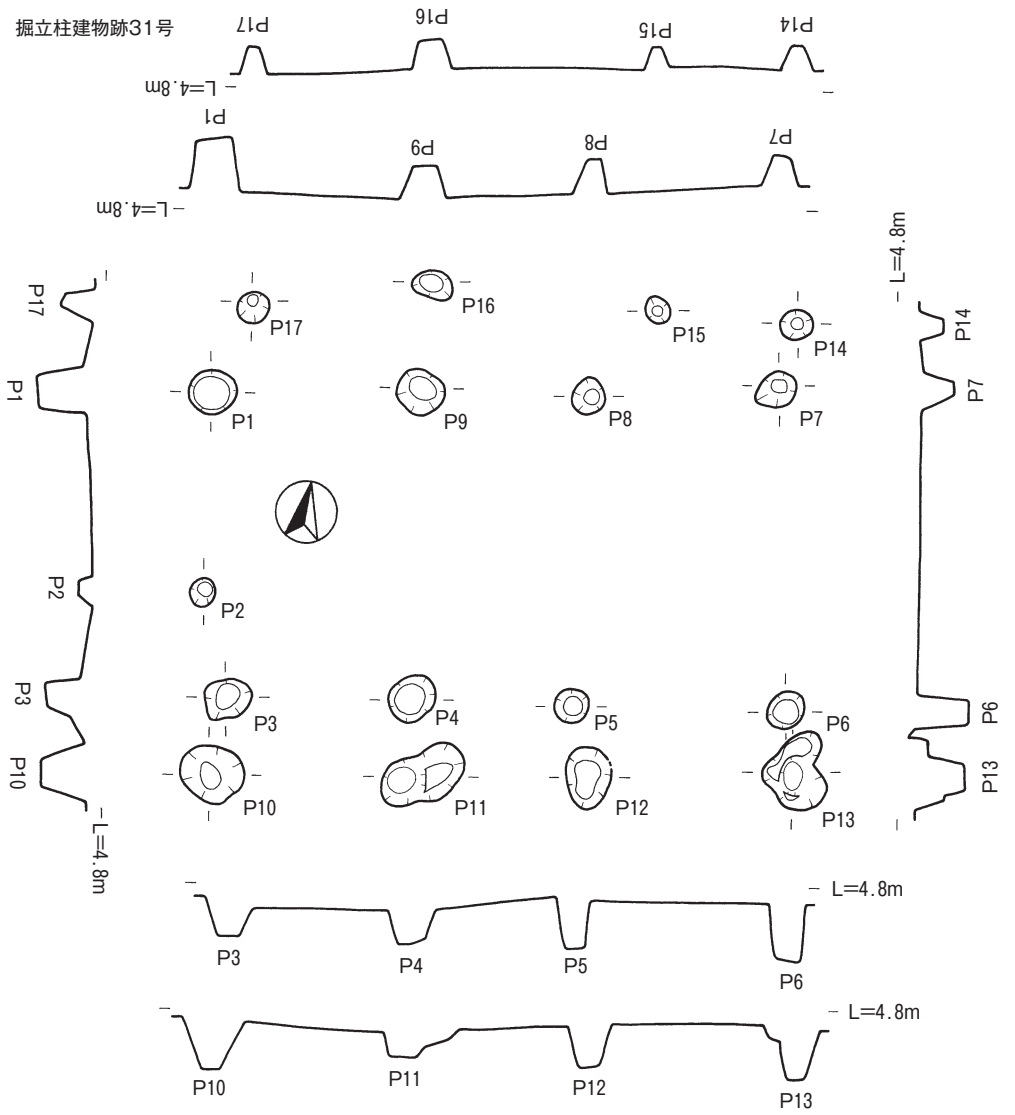
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.0	3-4	4.0
2-3	2.0	6-7	2.0
4-5	1.9	7-1	2.0
5-6	2.0	2-8	1.9
7-8	2.0	8-5	1.9

掘立柱建物跡30号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	27	23	28
2	32	28	24
3	36	27	20
4	31	29	24
5	36	36	25
6	28	28	29
7	30	30	37
8	40	33	25
9	38	34	24
10	38	32	20
11	25	25	27
12	25	25	24
13	26	26	26
14	29	25	28
15	25	20	17
16	34	34	16

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
3-4	1.8	1-2	1.9
4-5	1.9	2-3	2.1
6-7	1.5	5-6	4.4
7-1	1.8		

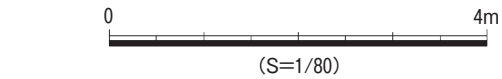
第139図　掘立柱建物跡29，30号・30号出土遺物



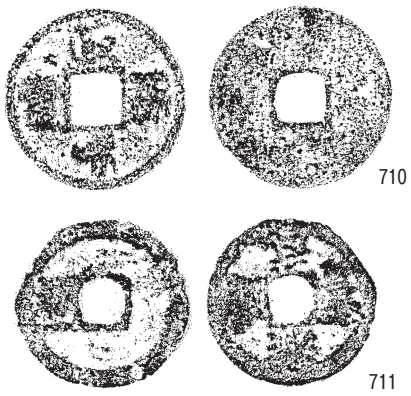
掘立柱建物跡31号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	50	47	54
2	30	26	13
3	51	43	38
4	52	45	40
5	35	35	49
6	42	35	60
7	45	35	37
8	41	35	40
9	52	47	39
10	65	57	48
11	94	52	33
12	65	44	45
13	83	37	57
14	34	24	26
15	28	24	22
16	42	28	31
17	32	32	29

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
17-1	1.0	3-4	1.9
1-2	2.1	4-5	1.7
2-3	1.2	5-6	2.2
3-10	0.8	7-8	2.0
13-6	0.7	8-9	1.8
6-7	3.4	9-1	2.2
7-14	0.7	10-11	2.2
		11-12	1.8
		12-13	2.2
		14-15	1.5
		15-16	2.4
		16-17	1.9



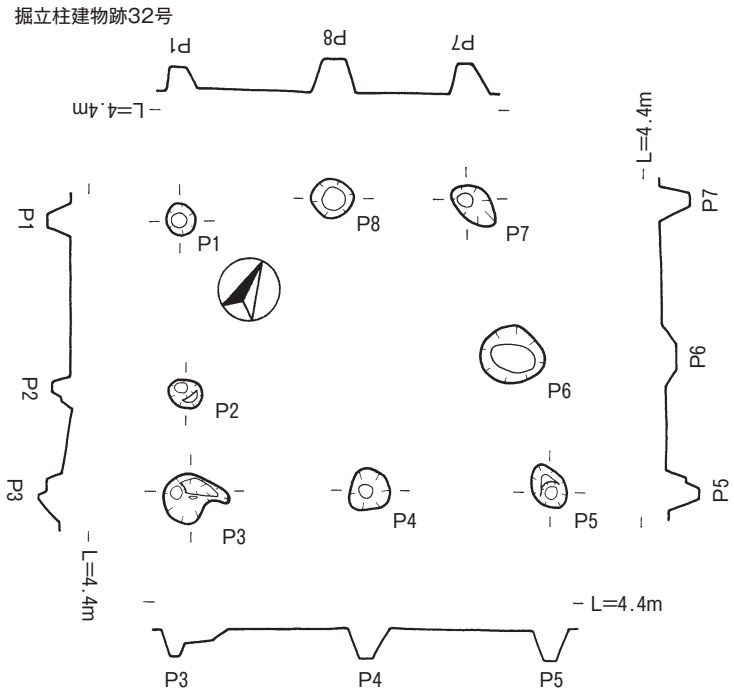
(S=1/80)





(原　寸)

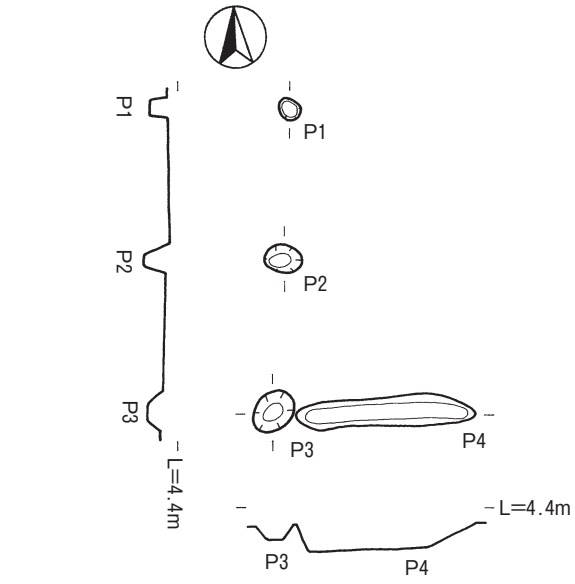
第140図　掘立柱建物跡31号・出土遺物



掘立柱建物跡32号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	34	30	26
2	36	30	19
3	70	14	49
4	42	42	33
5	48	35	34
6	70	60	14
7	54	34	32
8	44	41	35

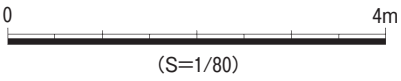
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.8	3-4	2.0
2-3	1.1	4-5	1.9
5-6	1.5	7-8	1.4
6-7	1.8	8-1	1.7



掘立柱建物跡33号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	25	20	19
2	40	30	28
3	50	38	16
4	189	27	13

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.6	3-4	1.2
2-3	1.6		



第141図　掘立柱建物跡32，33号

出土遺物（第142図）

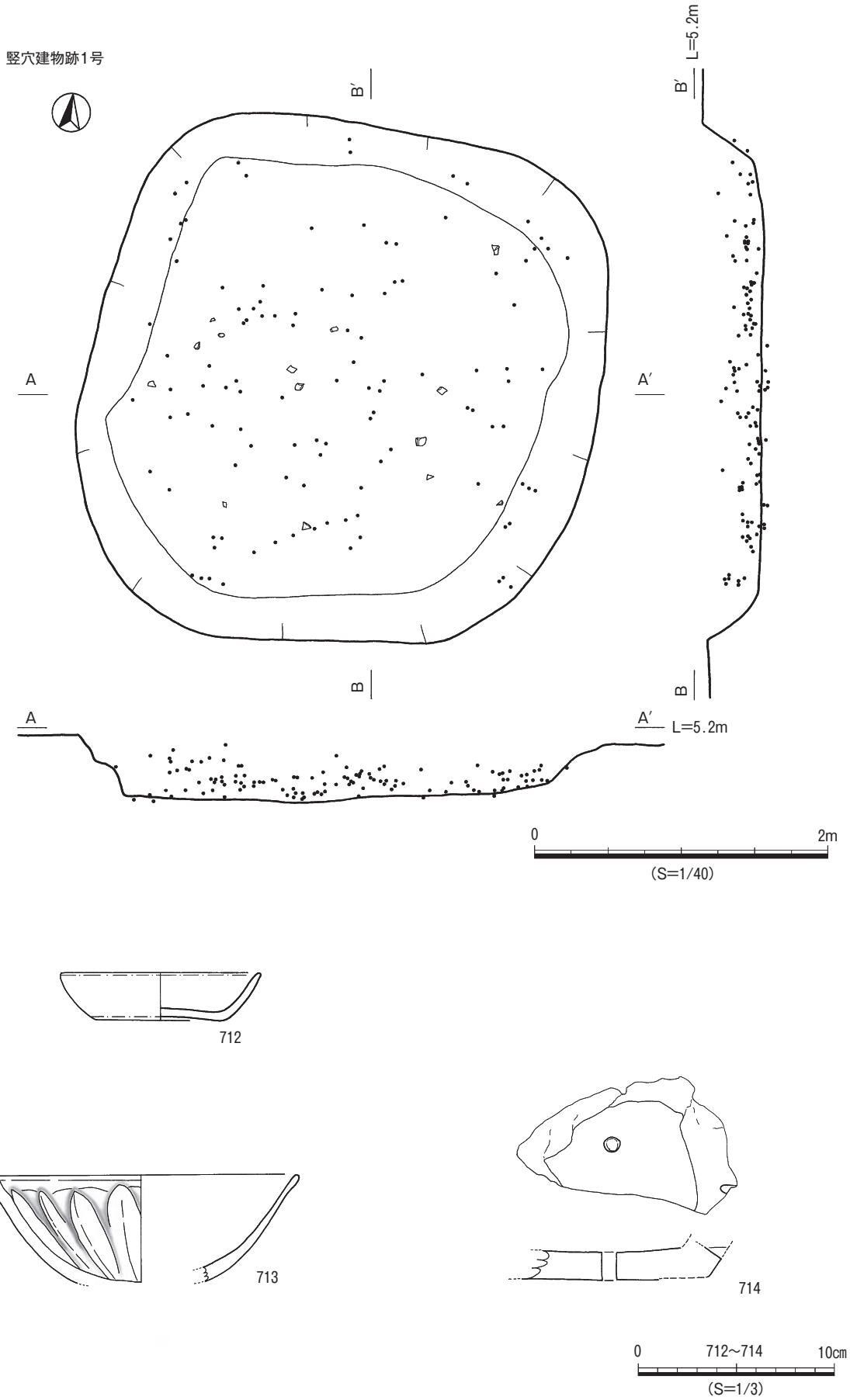
遺物は青磁，白磁，土師器，東播系須恵器等約20点出土したが，ほとんどは流れ込みと思われる。該期のものと考えられる遺物から２点を図化した。712は白磁の皿で，口唇部の釉が削り取られる口禿げである。713は青磁の椀である。間弁がしっかりしたもので，蓮弁の中心は稜を有する。714は，滑石製品底部の転用品で中央に穿孔を施す。未製品である。

竪穴建物跡２号（第143図）

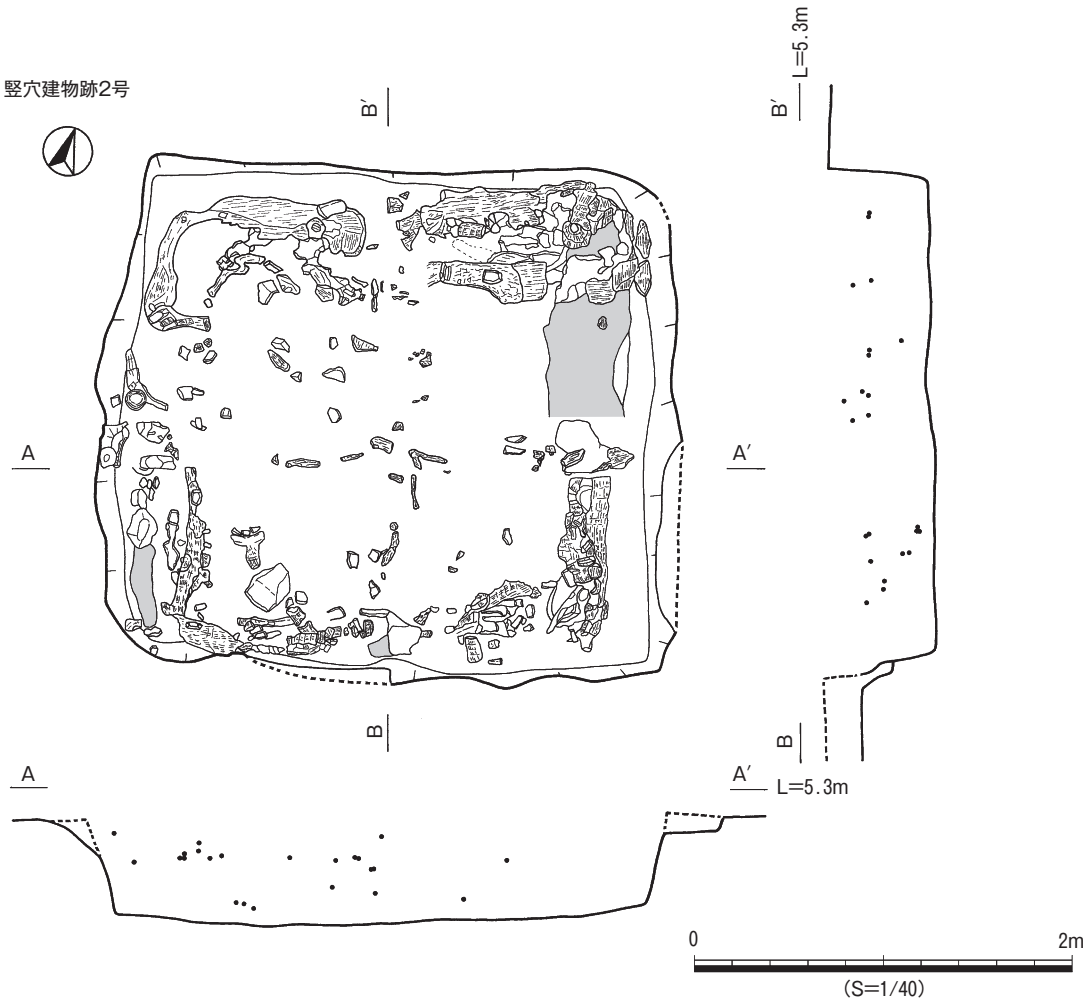
D-24区で検出された。形状は長軸2.9m，短軸2.7mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約61cmで，壁の立ちあがりはほぼ直角で直線的にしっかり立ち上がる。この遺構は，建物使用中に火災にあったと考えられ，遺構内埋土中から建築部材とおぼしき炭化物が大量に出土した。また，建物の4隅に径60～80cmの比較的大きな柱穴が確認された。

出土遺物（第144図）

遺物は，土師器の坏，白磁の椀・皿，同安窯系の青磁皿，天目碗，瓦質土器，樺万丈産と思われる甕の胴部等が出土した。家屋が焼失した後の流れ込みによる遺物も



第142図　竪穴建物跡１号・出土遺物



第143図　竪穴建物跡２号遺物出土状況

多く，この遺構が焼失したと考えられる時期の遺物の中から３点を図化した。715は土師器の坏である。底部と体部の境はナデ調整が施される。716は白磁で，口禿げの皿である。717は天目碗である。胎土は暗灰黄色を呈し，微細な白色砂粒を含む。釉は黒褐色の光沢の弱い天目釉が，外面腰部までかかる。中国産のものと思われる。以上のことから家屋が焼失した時期は，13世紀後半から14世紀初頭頃と考えたい。

竪穴建物跡３号（第145図）

B-23区で検出された。形状は長軸4.7m，短軸3.4mの楕円形を呈する。検出面からの深さは約25cmで，壁の立ちあがりは極端に緩やかであることから当時の建物平面形態は現在とは異なっていた可能性も考えられる。また，建物北側には，かまどが付帯しており，かまど床面と建物床面はほぼ同じ高さである。かまどの詳細については後述する。

竪穴建物跡４号（第145図）

A'-21区で検出された。形状は，南東隅のコーナー部を消失しているものの，長軸２m，短軸1.7mの隅丸長方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約20cmで壁面の立ちあがりはほぼ直角でしっかりとした立ち上がりである。柱穴は確認できなかった。

出土遺物（第145図）

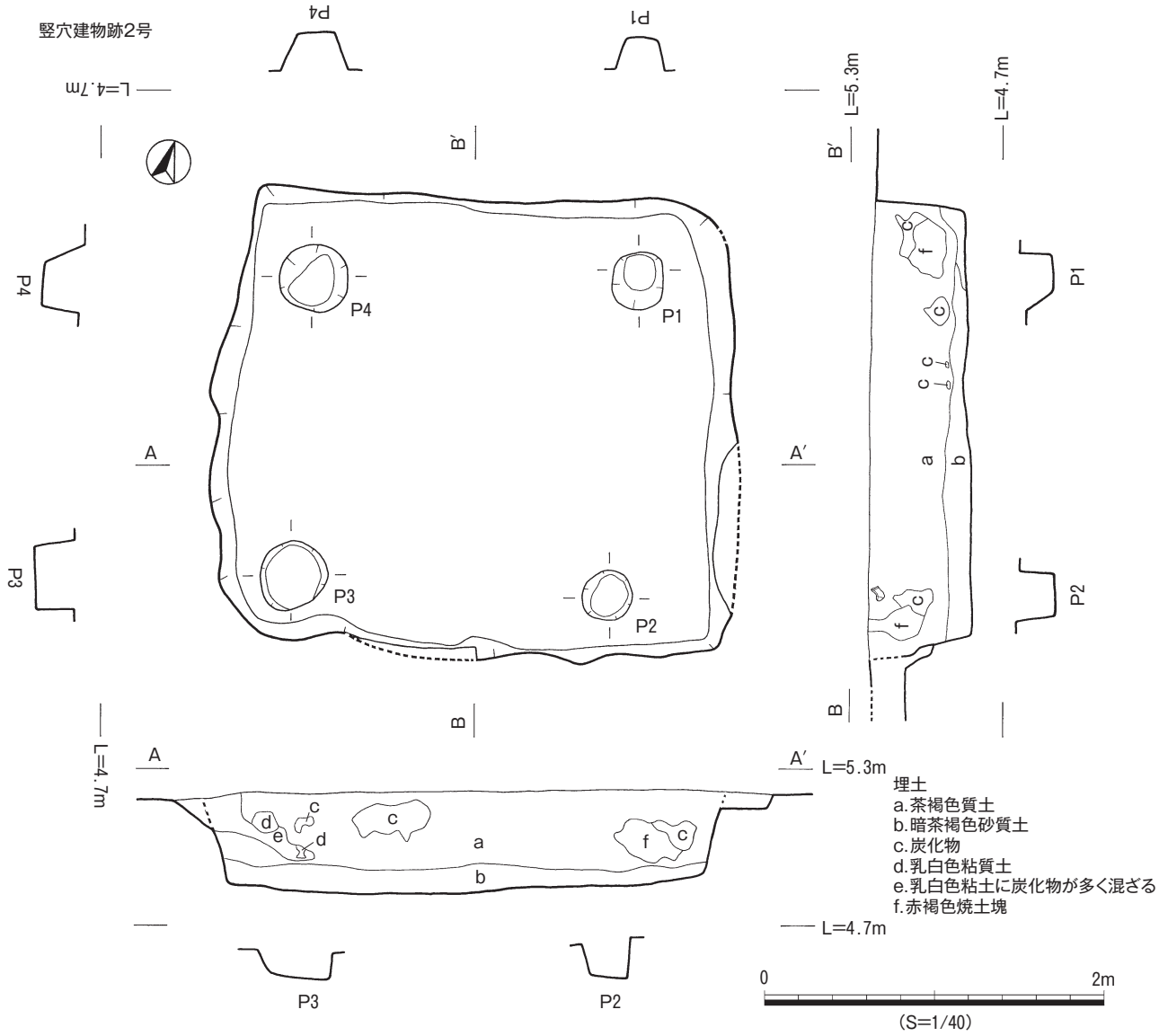
遺物は，完形の土師器の坏と青磁椀の小片が出土した。そのうち土師器の坏１点を図化した。718は口径13.0cm，底径10.0cm，器高2.7cmを測る。体部は直線的に立ち上がり，口縁端部はわずかに外反する。口縁部内外面に煤が付着する。

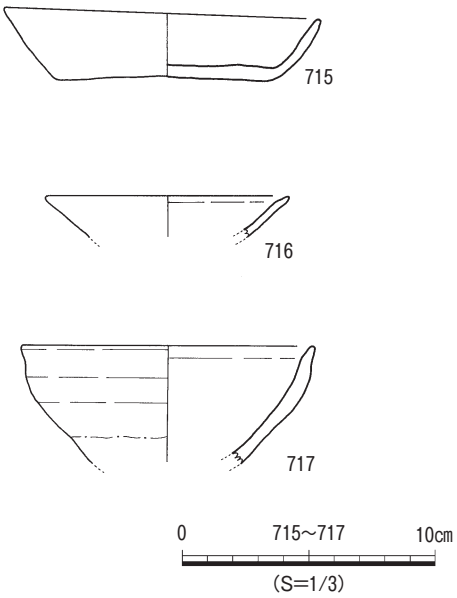
竪穴建物跡５号（第146図）

A-21区で検出された。形状は長軸3.6m，短軸３m隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは15cmと非常に浅い。床面には5か所の柱穴が確認された。柱穴は径30～40cmほどである。また東側，側壁下部に長さ1.2m程の浅い溝が確認できる。

竪穴建物跡６号（第147図）

C・D-20・21区で検出された。形状は長軸3.1m，短軸３mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約65cmと比較的深い。また壁の立ち上がりもほぼ直角でしっかり





第144図　竪穴建物跡２号完掘状況・出土遺物

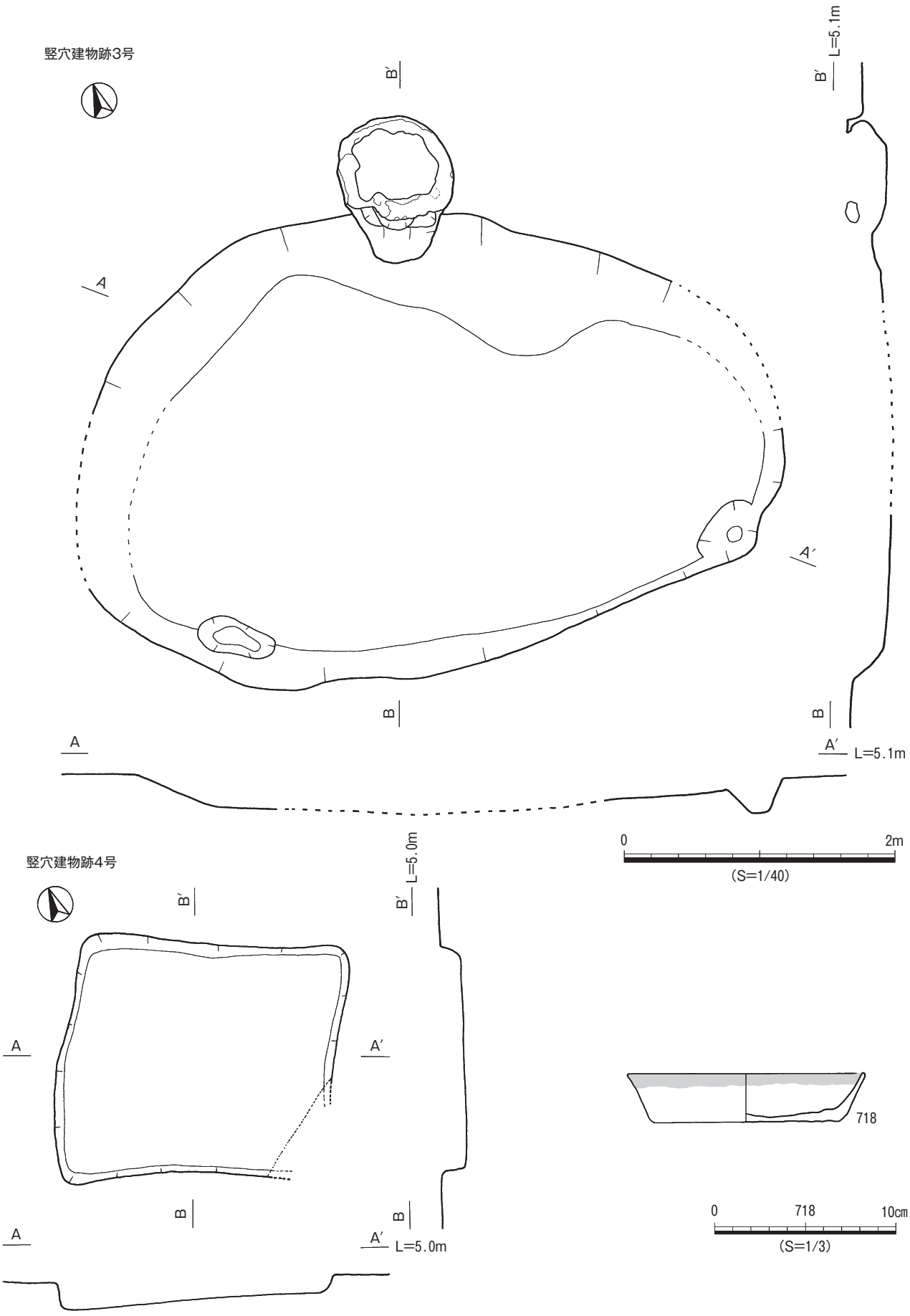
している。建物内部南側にかまど跡が確認された。かまどは，長軸短軸80㎝で残存高25㎝であった。床面には炭化物の集中箇所がみられた。柱穴等の痕跡は確認できなかった。

出土遺物（第148図）

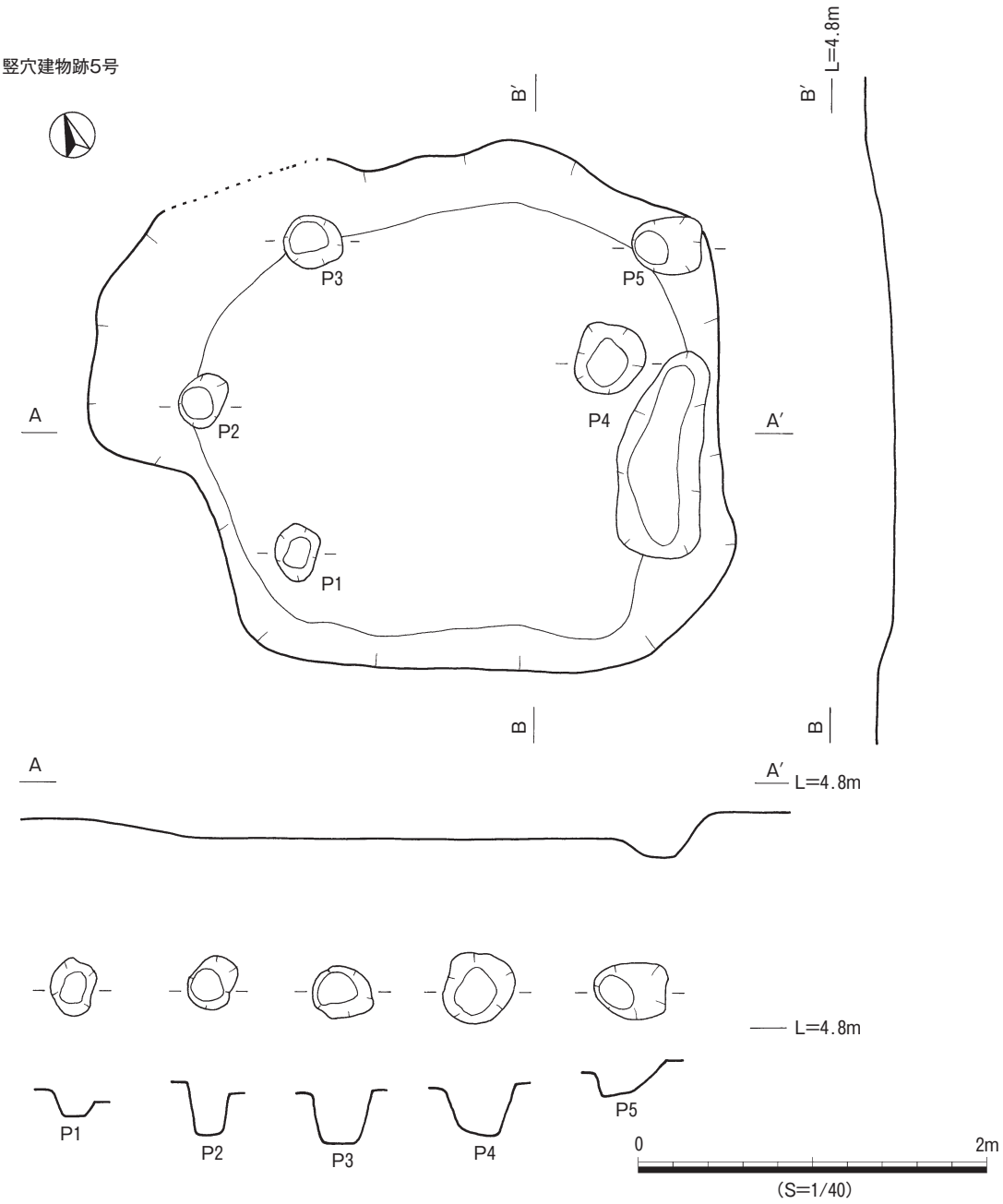
遺物は，底部が糸切りの土師器の皿や坏等が出土しているが，小片で図化できなかった。719・720は埋土内から出土した銭貨である。719は大･通･宝の文字が読める。720は小片のため種別は不明である。721は厚さ８㎜程の鉄片である。

竪穴建物跡７号（第149図）

C-19区で検出された。北東隅で竪穴建物跡８号と切り合っているが，前後関係は不明である。形状は長軸2.8m，短軸2.4mの方形を呈する。検出面からの深さは約35㎝で，壁はほぼ直角に立ち上がりしっかりしている。床面から柱穴は確認できなかった。遺構内南西隅に長軸



第145図　竪穴建物跡３，４号・４号出土遺物



第146図　竪穴建物跡５号

90cm，短軸60cm，深さ10cmほどの浅い掘り込みが確認された。遺構内から銭貨が出土している。

出土遺物（第149図）

722は埋土中から出土した銭貨で，天・通・宝の文字が読める。

竪穴建物跡８号（第149図）

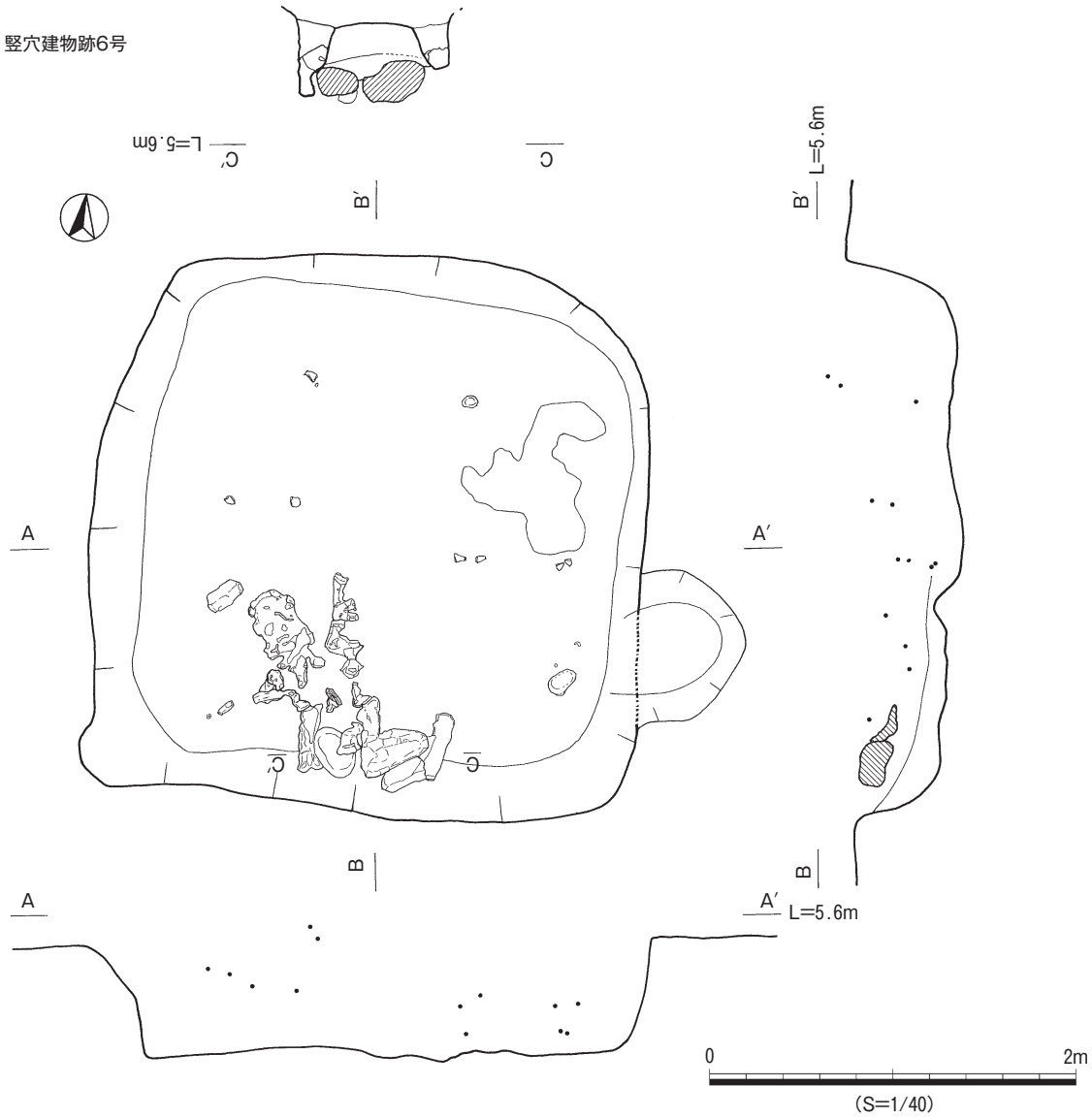
C-19区で検出された。南西隅で竪穴建物跡７号と切り合っている。また，遺構北側はカクランにより消失している。遺構中央に浅い掘り込みがみられるが，後世の掘り込みの切り合いによるものである。遺構現存部で，長軸2.5m，短軸1.9mの長方形の形状を示す。検出面からの深さは約50cmと比較的深く壁の立ち上がりも，ほぼ直角でしっかりしている。柱穴等は確認できなかった。

竪穴建物跡９号（第150図）

C-19区で検出された。形状は長軸2.5m，短軸2.3mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さ約30cmで，壁面は，ほぼ直角のしっかりとした立ち上がりをみせる。柱穴等は確認されなかった。

出土遺物（第150図）

遺物は，青磁，中国陶器，常滑焼の甕，東播系の捏鉢，土師器の皿・坏等約30点出土した。小片が多く，該期の遺物として図化できたものは１点であった。723は土師



第147図　竪穴建物跡６号遺物出土状況

器の小皿である。体部は丸みを帯びながら短く立ち上がる。外底面は糸切りである。

竪穴建物跡10号（第150図）

D・E-17区で検出された。形状は長軸2.5m，短軸2.3mの隅丸方形である。検出面からの深さ約65cmで比較的深い。最下面には一部，硬化面が確認でき床面と推測される。柱穴等は確認できなかった。

出土遺物（第150図）

724は埋土中から出土した銭貨で，皇宋通宝である。

竪穴建物跡11号（第151図）

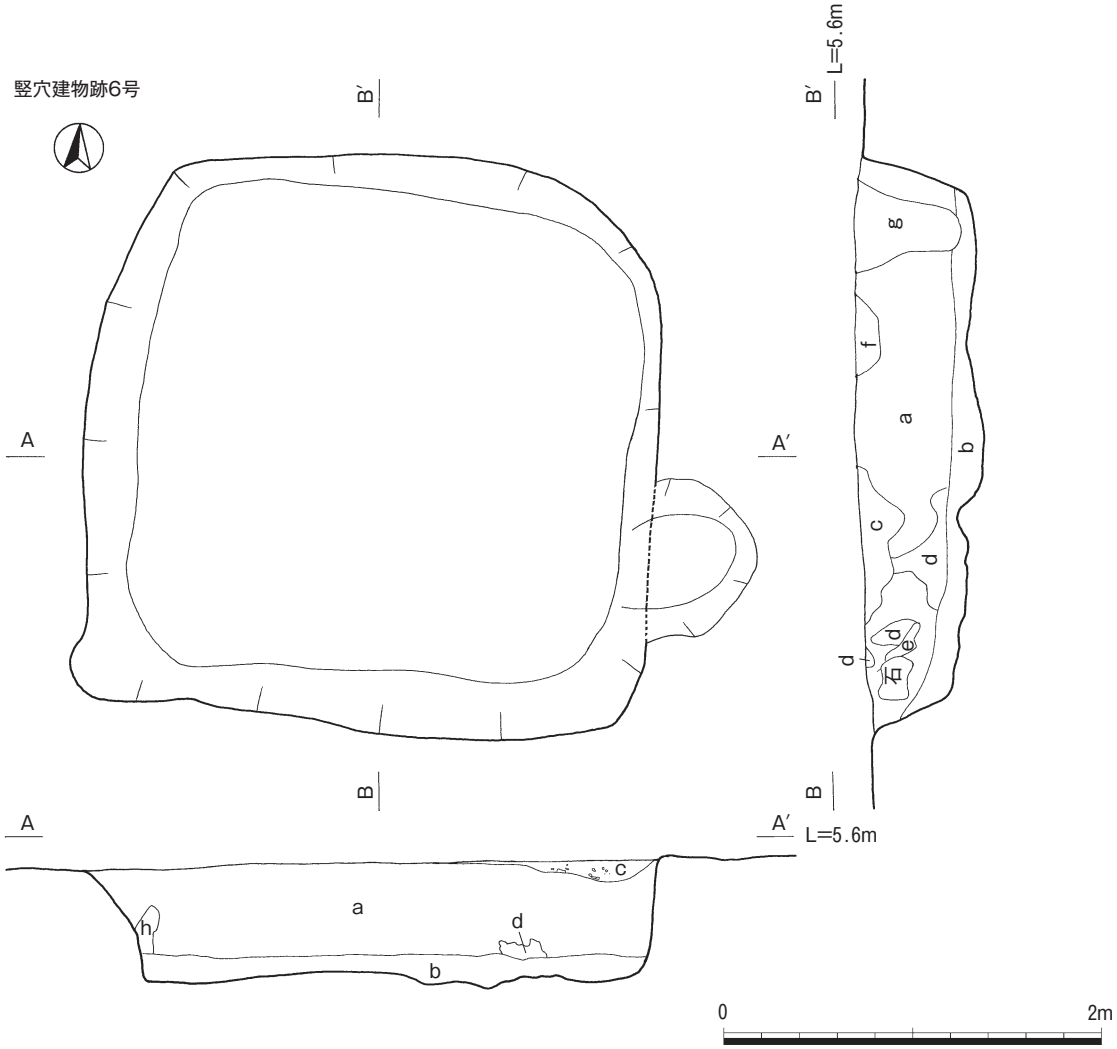
C・D-5区で検出された。形状は長軸5.5m，短軸４mの楕円形である。検出面からの深さは約40cmで壁面はやや緩やかに外向きに立ち上がる。床面から径約20cmの柱穴が２か所検出された。また遺構内南側に長径1.4m，短径0.7m，深さ７cmの浅い掘り込みも確認できる。

かまど跡（第152図～第171図）

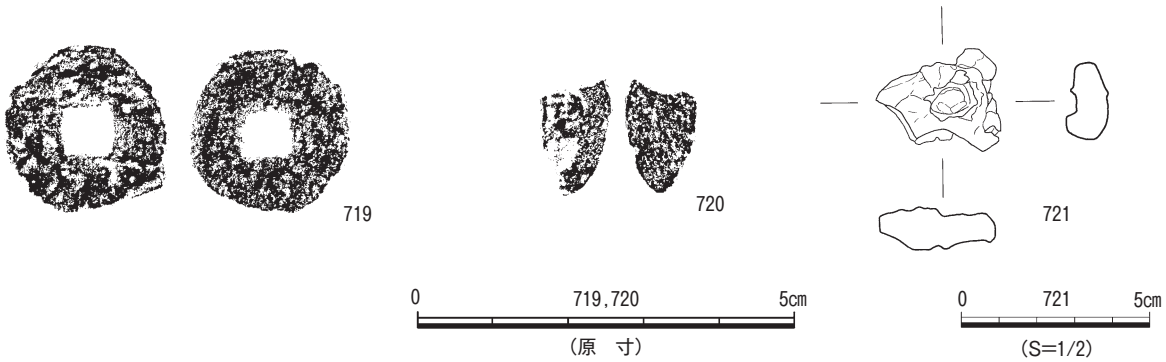
かまど跡は29基確認されている。遺構に付帯するものは別として，単体で検出される場合は少なく，数基が集中，もしくは切り合って検出される傾向にある。

かまど跡１号（第152図）

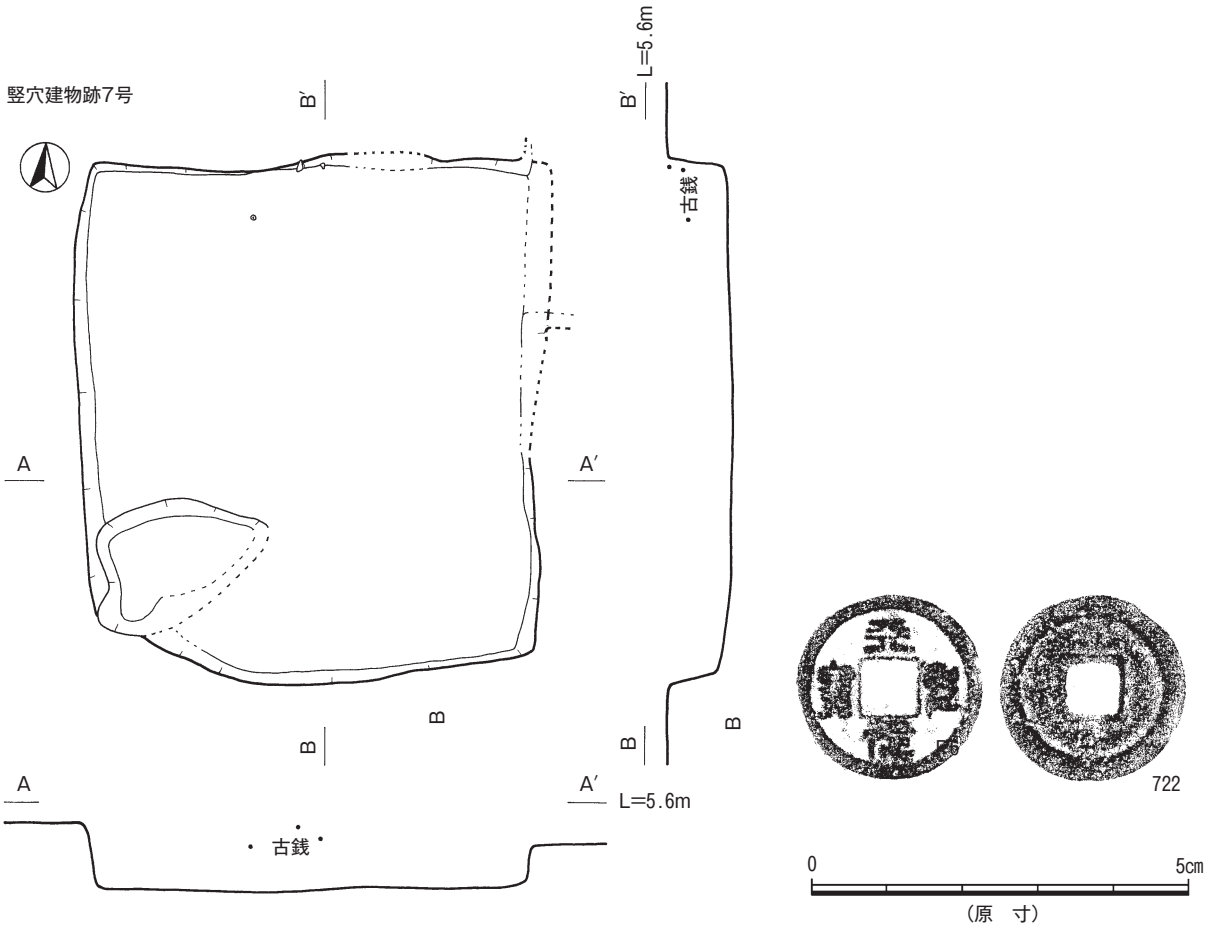
B-37区で検出された。主軸は西に79°振れ，焚き口は西に開く。全長1.6m，全幅0.6mである。平面形はかまど本体が焚き口でくびれ灰溜まりへと広がるひょうたん形を呈する。かまど本体は幅約60cm，奥行き約50cmで，燃焼により橙色に変色した本体壁の立ち上がりは，ほとんど失われ一部が高さ９cmほど残存する。かまど本体下部にはわずかに炭化物の層が確認できる。

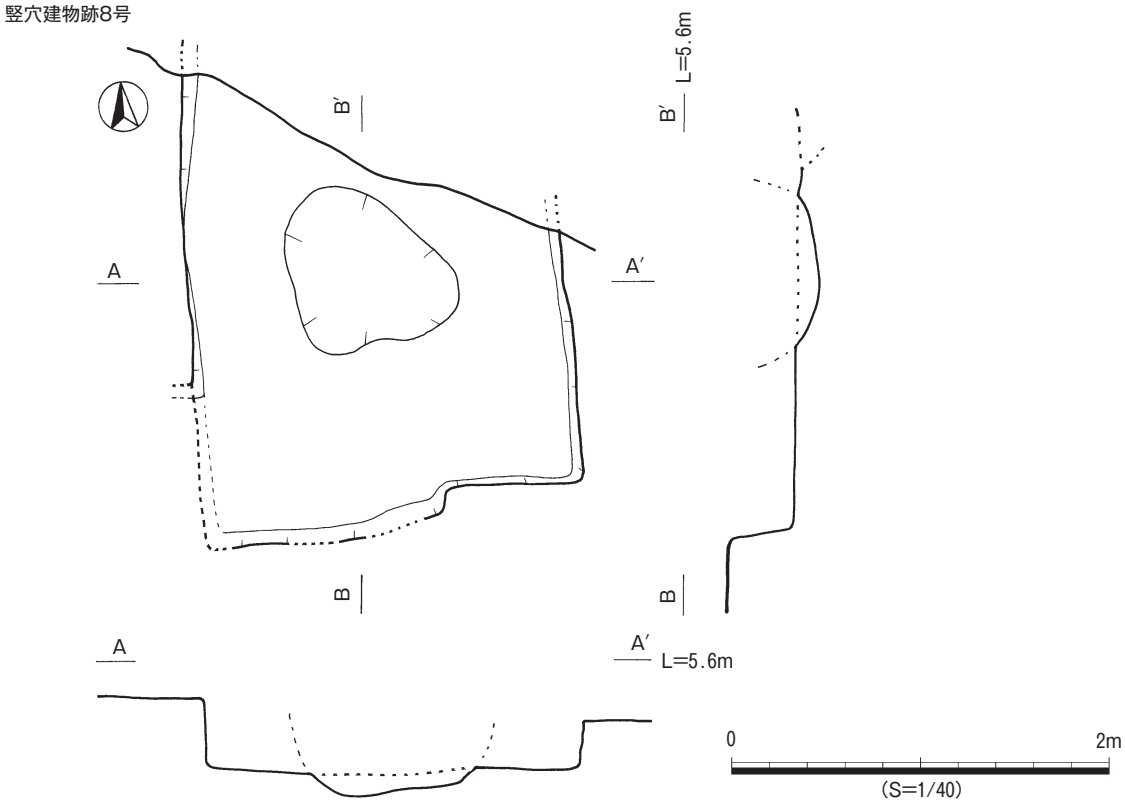


埋土
a.黒褐色砂質土、やや粘性あり
b.暗褐色～黒褐色砂質土
c.暗褐色砂質土、やや粘性あり、aより粘性が強く硬い
　炭化物片を少量含む。赤褐色極微細小ブロックをわずかに含む
d.黒褐色砂質土、やや粘性を帯びる。橙～明褐色の粘質土ブロック
　やや硬い
e.橙～明褐色粘土ブロック
f.暗褐色～黒褐色砂質土、やや粘性を帯びる。
g.暗褐色～黒褐色砂質土、やや粘性を帯びる。
　（竪穴を切るピットの埋土）
h.黒褐色砂質土、やや粘質を帯びる



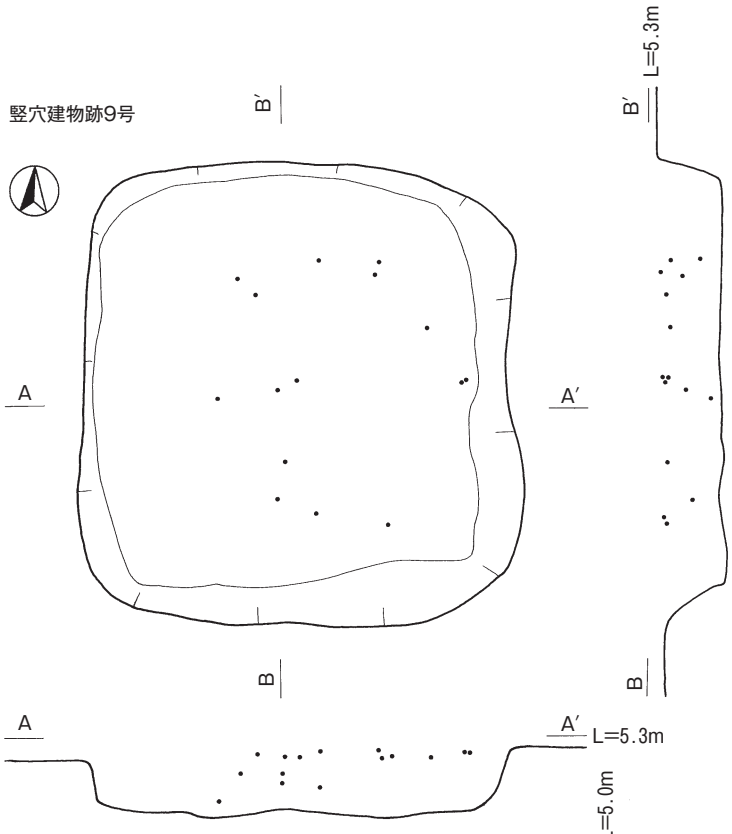
第148図　竪穴建物跡６号完掘状況・出土遺物

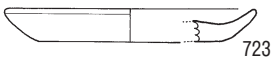




第149図　竪穴建物跡７，８号・７号出土遺物

竪穴建物跡9号



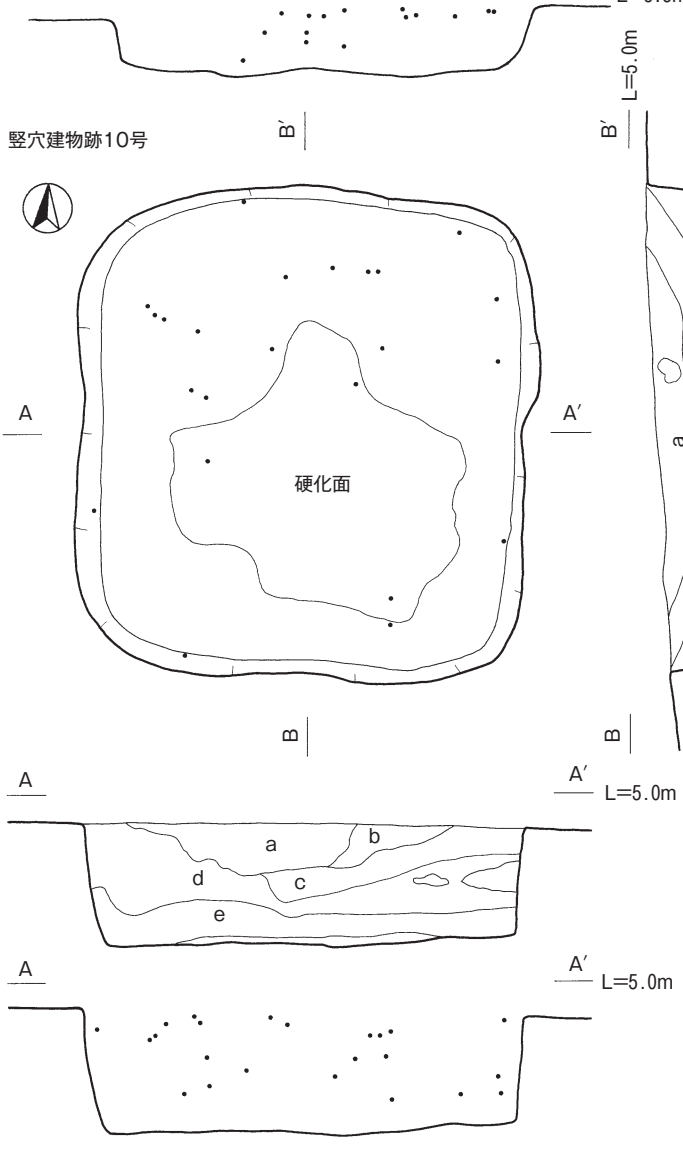


0 10cm
(S=1/3)



0 5cm
(原　寸)

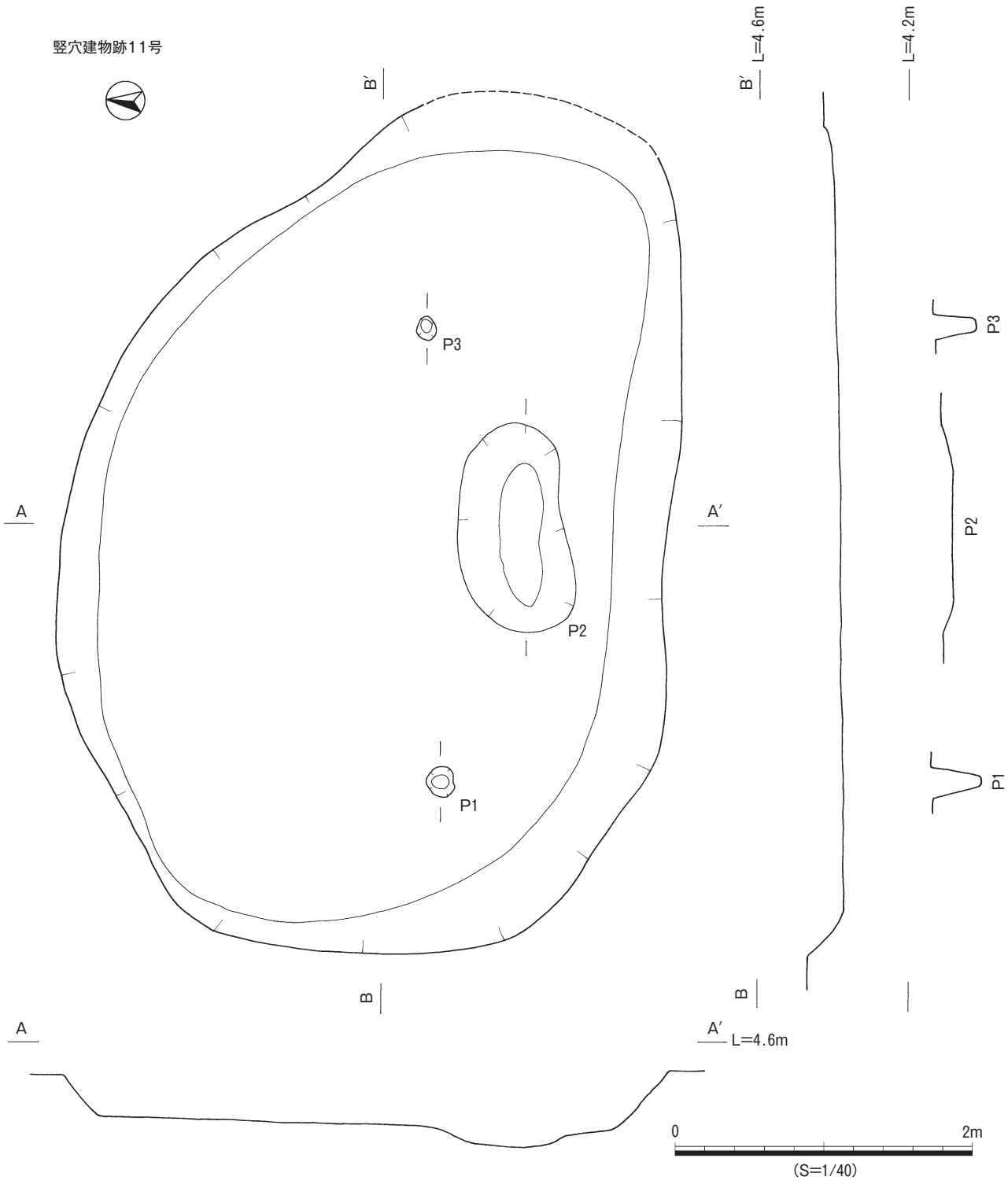
竪穴建物跡10号



埋土
a.黒褐色砂質土（やや粘質をおびる、にぶい黄褐砂質土ブロック、暗褐色砂質土ブロック少量か若干混じる）
　焼土、炭化物、微量
b.暗褐色砂質土
c.褐色砂質土（やや粘質をおびる、にぶい黄褐色砂質土ブロック、暗褐色砂質土ブロックを若干含む）
d.暗褐色砂質土
e.黒褐色砂質土　砂質土ブロックを若干含む

0 2m
(S=1/40)

第150図　竪穴建物跡９，10号・出土遺物



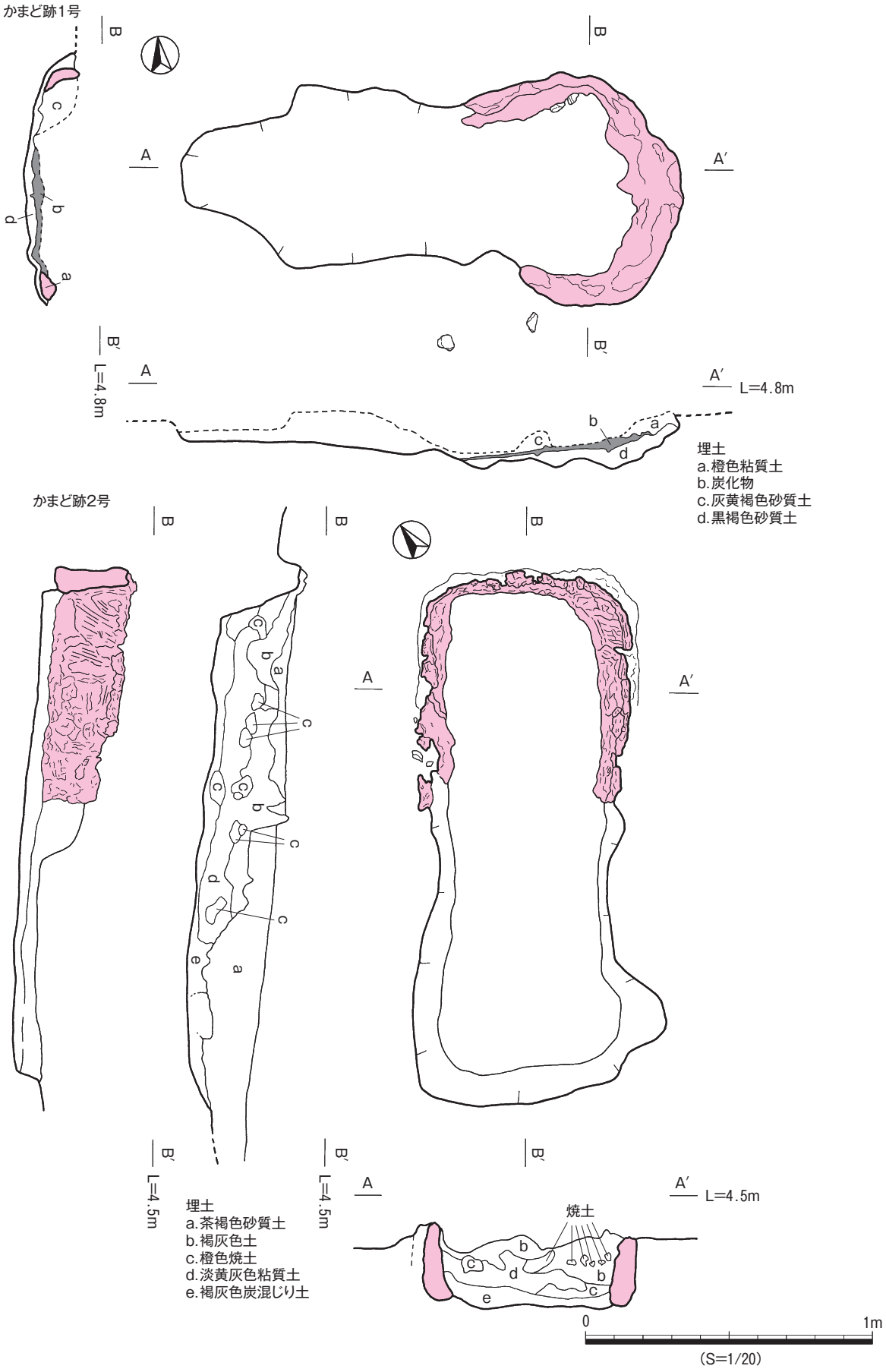
第151図　竪穴建物跡11号

かまど跡２号（第152図）

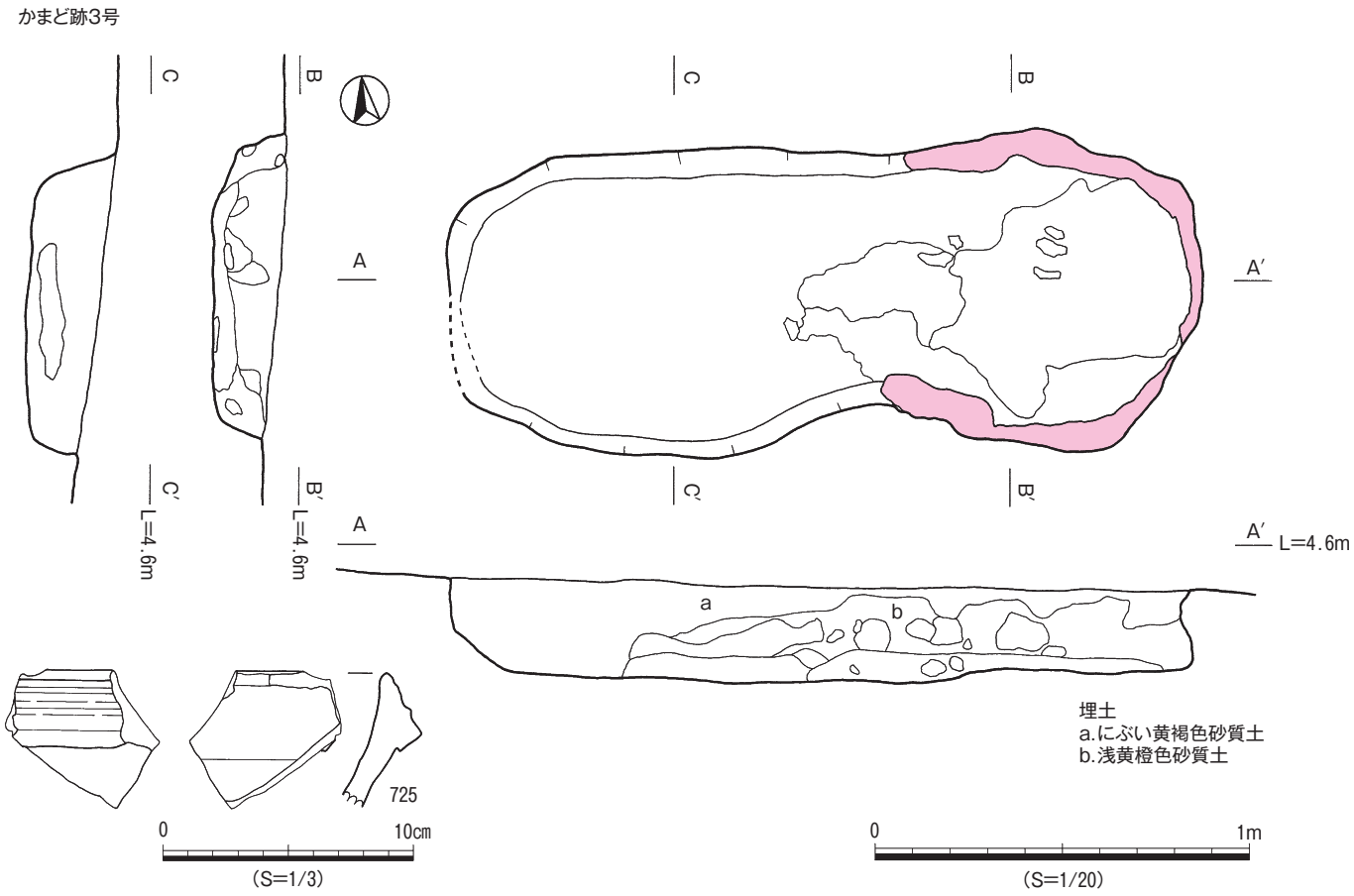
E-31区で検出された。主軸は東に39°振れ，焚き口は南西に開く。全長1.7m，全幅0.9mである。平面形は，かまど本体から灰溜まりへとそのまま続く長方形を呈する。かまど本体は幅約60cm，奥行き約90cm，燃焼により強く焼けた高さ約25cmの本体壁がコの字型に残存する。

かまど跡３号（第153図）

E-29区で検出された。主軸は西に82°振れ，焚き口は西に開く。全長２m，全幅0.8mである。平面形は，かまど本体焚き口部でわずかにくびれる，楕円形を呈する。かまど本体は幅約80cm，奥行き80cmの円形を呈すると思われる。本体壁の残りはよくないが，一部14cmの高さで



第152図　かまど跡１，２号



第153図　かまど跡３号・出土遺物

残存する。

出土遺物（第153図）

遺物は備前産の擂鉢が１点出土した。725は口縁部を外側に折り返して断面三角形につくるものである。内面の擂り目は破損していて観察できない。

かまど跡４号（第154図）

E-28区で検出された。かまど跡４号～６号はE-28区に形成された浅い凹み状地形の縁辺部に構築されている。主軸は西に74°振れ，焚き口は西北西に開く。灰溜まり末端は凹みにより形成されないため，灰溜まり痕跡までの全長が約1.5m＋α，全幅0.9mである。平面形は，かまど本体が焚き口部でくびれ，灰溜まりへ広がるひょうたん形を呈すると思われる。かまど本体は幅約80cm，奥行き80cmの円形を呈する。本体内部には崩壊した本体壁の破片が散在していた。燃焼により赤化した本体壁は，高さ16cmほど残存している。

出土遺物（第154図）

かまどが設置された凹地から銭貨が出土したのでここに記す。726は熙寧元宝である。

かまど跡５号（第155図）

E-28区で検出された。主軸は西に69°振れ，焚き口は西北西に開く。全長は断面から１m強，全幅0.8mである。平面形はかまど本体部分しか確認できないがU字形を呈し，焚き口部で若干くびれるものと推測される。かまど本体は幅約68cm，奥行き約55cmで，燃焼により赤化した本体壁が高さ約14cmほど残存している。

かまど跡６号（第156図）

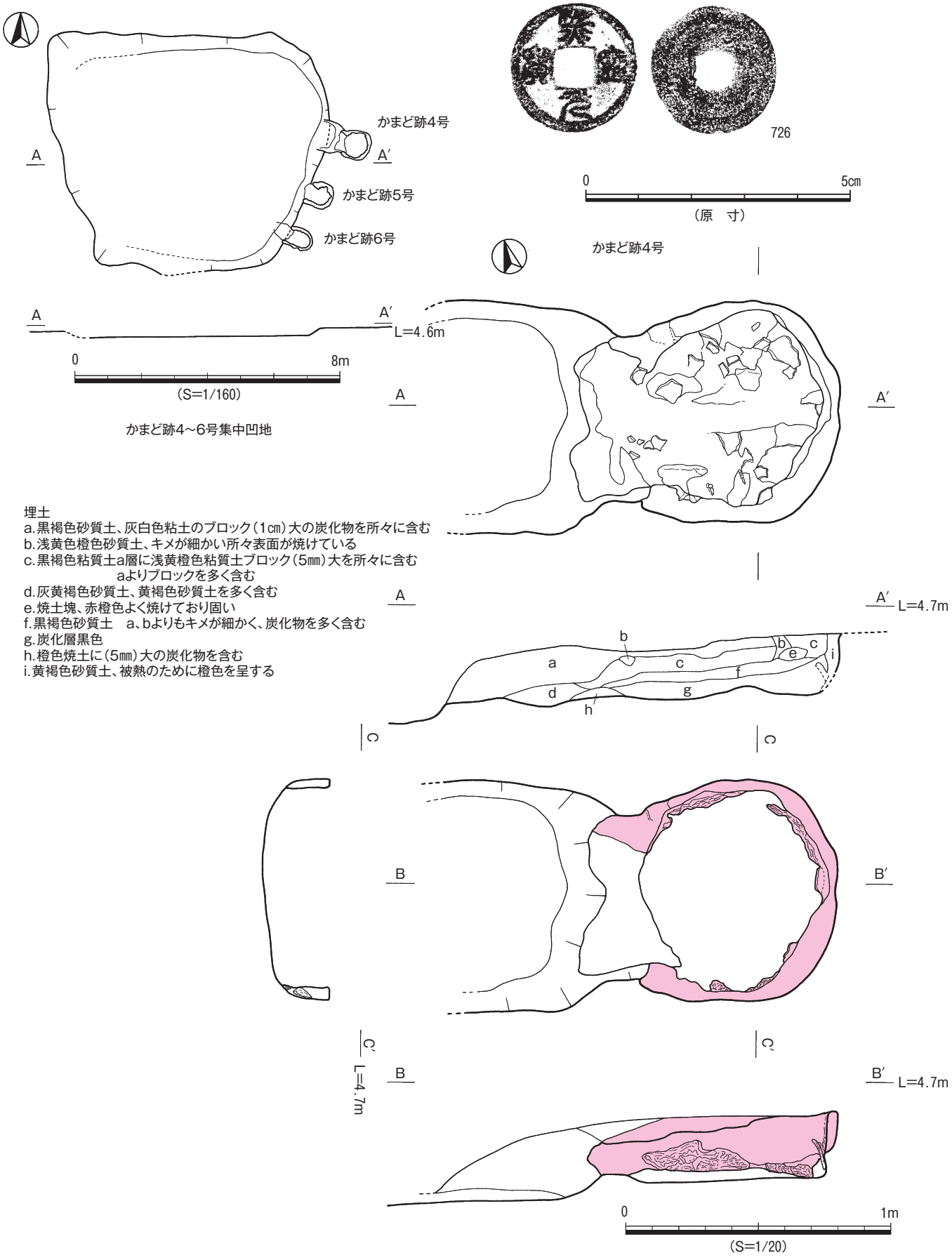
E-28区で検出された。主軸は西に65°振れ，焚き口は西北西に開く。灰溜まりがはっきりせず，全体の平面形，全長，全幅は不明であるが，かまど本体は幅50cm，奥行き１mのU字形を呈する。燃焼により赤化した本体壁が高さ25cmほど残存する。かまど本体内部埋土には，崩壊した本体壁が混じっている。

出土遺物（第156図）

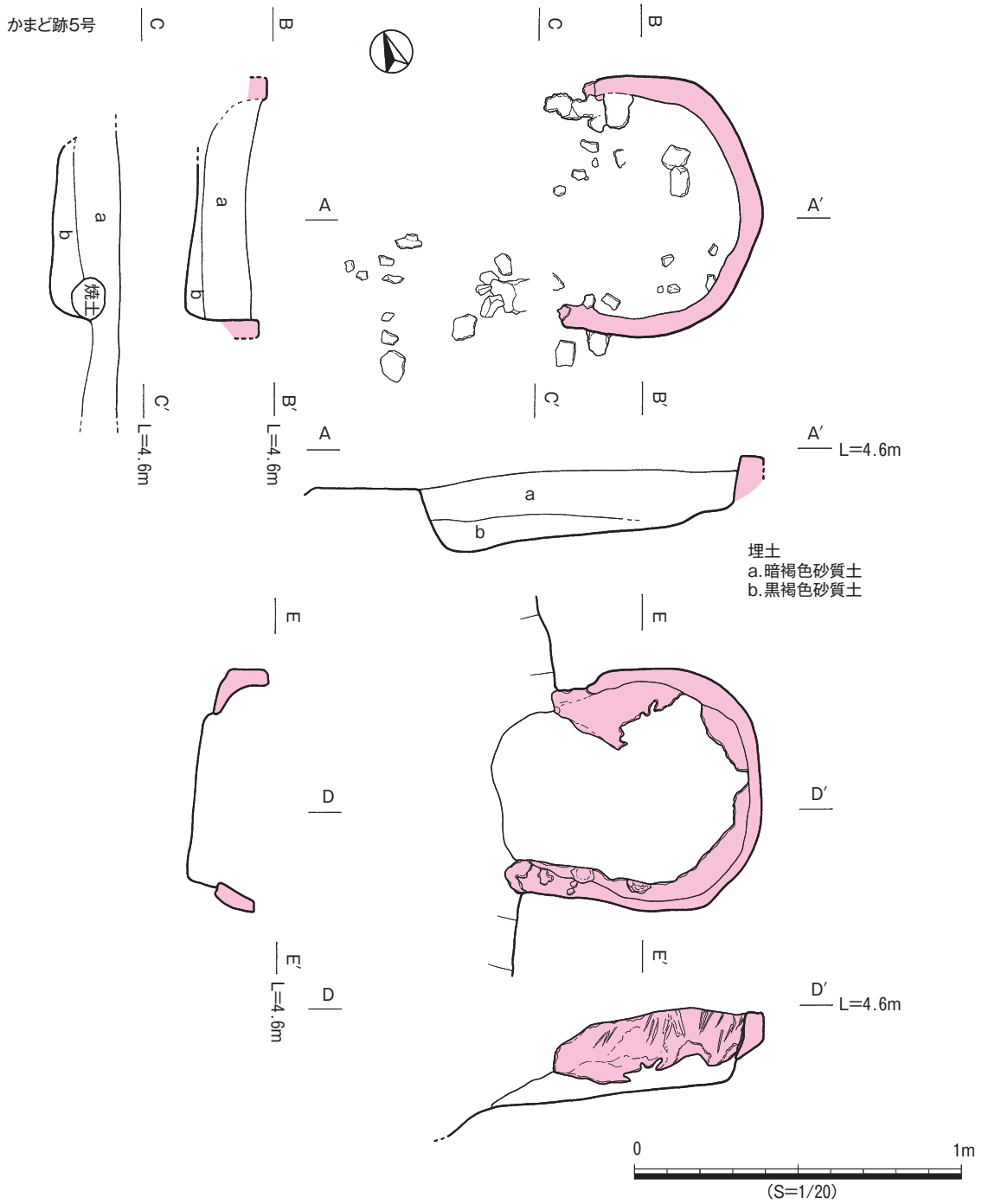
遺物は，白磁２点と青磁１点出土し，白磁椀１点を図化した。727は口縁部が外反し，腰部が張る形状を呈する椀である。胎土は灰褐色を呈し，釉も灰色味がかる。

かまど跡７号（第156図）

E-27区で検出された。主軸は東に87°振れ，焚き口は西に開く。全長2.2m，全幅0.7mである。灰溜まりを含む全体的な平面形は，長楕円形を呈し，かまど本体は円形を呈する。かまど本体は幅約70cm，奥行き75cmである。



第154図　かまど跡４～６号配置・かまど跡４号・出土遺物



第155図　かまど跡５号

本体，灰溜まり部の掘り込みは約30cmほどである。灰溜まり部にピットが確認できるが，後世のものと考えられる。

さらに，かまど7号は掘立柱建物跡11号の内部に本体が位置し，かまど長軸と掘立柱建物跡桁行方向が平行関係にある。

出土遺物（第156図）

遺物は青磁が２点出土した。そのうち１点を図化した。728は龍泉窯系青磁の椀である。外面には蓮弁文が細線と剣頭部に分かれた線描蓮弁文が描かれる。剣頭部は蓮弁の単位を意識して描かれる。

かまど跡８号（第157図）

F-24区で検出された。主軸は，かまど本体，灰溜まりの形状が不明のため特定することは出来ない。焼土塊，炭化物の広がりは長軸2.8m，短軸1.4mと比較的広範囲に広がる。焼土塊，炭化物混じりの層の厚さは20cm程で

ある。

かまど跡９号（第158図）

F-23・24区で検出された。主軸は東に81°振れ，焚き口は西に開く。灰溜まりが確認できず，全長，全幅は特定できない。かまど本体の平面形は，南西側壁が失われているが，コの字状を呈していると考えられ，本体幅70cm，奥行き80cmの規模をもつ。燃焼により焼けた本体壁は高さ17cmほど残存し，本体内部の埋土中には崩壊したかまど壁塊が大量に混ざる。

かまど跡10号（第158図）

F-24区で検出された。主軸は東に８°振れ，焚き口は北方向に開くと推測される。全体の形状は全長1.7m，全幅0.4mの長楕円形を呈する。遺構断面，かまど本体の記録が確認できず詳細は不明である。

かまど跡11号（第159図）

E・F-23・24区で検出された。主軸は東に65°振れ，かまど本体の崩壊が激しいが，焚き口は西南西方向に開くと思われる。先述の通りかまど本体の形状は不明であるが，全体の形状は全長2.6m，全幅0.9mの崩れた楕円形を呈する。かまど奥側の本体壁が一部，高さ20cmほど残存する。埋土中から銭貨が出土した。

出土遺物（第159図）

729・730ともに７枚重ねの銭貨で，表裏が裏面のため種別については不明である。

かまど跡12号（第160図）

E-24区で検出された。主軸は東に88°振れ，焚き口は西方向に開く。全長1.1m，全幅0.6mで楕円形の形状を示す。かまど本体は幅60cm，奥行き50cmのコの字状を呈する。かまど壁は良好なところで５cm程度，最奥部は最下面がわずかに残るのみである。埋土中には炭化物や，かまど本体壁と思われる焼土塊が混ざる。

かまど跡13号（第160図）

B-23区で検出された。竪穴建物跡３号に伴うかまど跡である。建物北側に位置し，焚き口部が丁度，建物壁付近に位置する。主軸は東に13°振れ，焚き口は南南西方向に開き，灰溜まりは形成されていないが，建物床とほぼ同じ高さとなる。形状は幅90cm，奥行き110cmのほぼ円形を呈している。焚き口部上面がブリッジ状に残存しているように見えるが，崩壊した本体壁の塊がのっているだけである。

かまど跡14号（第161図）

D-20区で検出された。かまど跡15号・16号と切り合い，３基の内で最も新しいものであることが確認できる。主軸は東に90°振れ，かまど本体は後世の掘り込みなどで，かなり崩壊しているものの，焚き口は西方向に開くことが確認できる。全長約2.2m，全幅約50cmで，全体形状は，かまど焚き口部でややくびれるひょうたん形を呈している。かまど本体は，幅50cm，奥行き約100cmのコの字状を呈し，焚き口付近が若干狭まる。燃焼を受け赤色化した本体壁は高さ約17cmほど残存する。かまど本体付近の埋土には，崩壊した本体壁や炭化物が大量に混ざる。

かまど跡15号（第162図）

D-20区で検出された。かまど本体部分はかまど跡14号の灰溜まり部に切られ，失われている。また灰溜まり部にも後世の土坑が切り合い，ほとんど原形を留めていない。全長は，1.7m以上で，全幅は0.7mほどと想定される。

かまど跡16号（第163図）

D-20区で検出された。かまど跡14号の本体部分で，一部を切られる。主軸は東に37°振れる。全体の形状は，全長1.8m以上，全幅0.8mの隅丸長方形を呈する。かまど本体は完全に破壊されており，かまど本体がどこに存在したか不明である。掘り込みは良好なところで深さ18cmほど残存しており，掘り込み内埋土に崩壊したかまど本体壁塊が多量に混ざっている。

かまど跡17号（第164図）

D-19・20区で検出された。かまど跡19号と切り合い，かまど本体の一部と，灰溜まりを消失している。主軸は東に82°振れ，焚き口は東方向に開く。かまど本体の形状はコの字状を呈していると考えられ，現存部で幅50cm，奥行き50cm以上ある。

かまど跡18号（第164図）

C・D-19・20区で検出された。かまど跡19号と切り合い，かまど本体部の一部を消失する。主軸は西に83°振れる。全体の形状は，全長約1.7m，全幅0.9mの砲弾型を呈する。焚き口は西方向に開く。かまど本体はコの字状を呈し，幅60cm，奥行き50cm以上とみられる。燃焼により赤化した本体壁は高さ５cmほど残存している。掘り込み内には崩壊した本体壁塊が多量に混ざる。

かまど跡19号（第165図）

D-19区で検出された。かまど跡17号・18号と切り合う。切り合い関係から3基の内19号が最も新しいものと判断できる。主軸は東へ12°振れる。全体形状は，全長2.1m，全幅0.7mの略長方形を呈し灰溜まり部に若干の張り出しをもつ。焚き口は南に開く。かまど本体はコの字状を呈し，幅50cm，奥行き90cmである。燃焼により赤化した本体壁は高さ約10cmほど残存する。

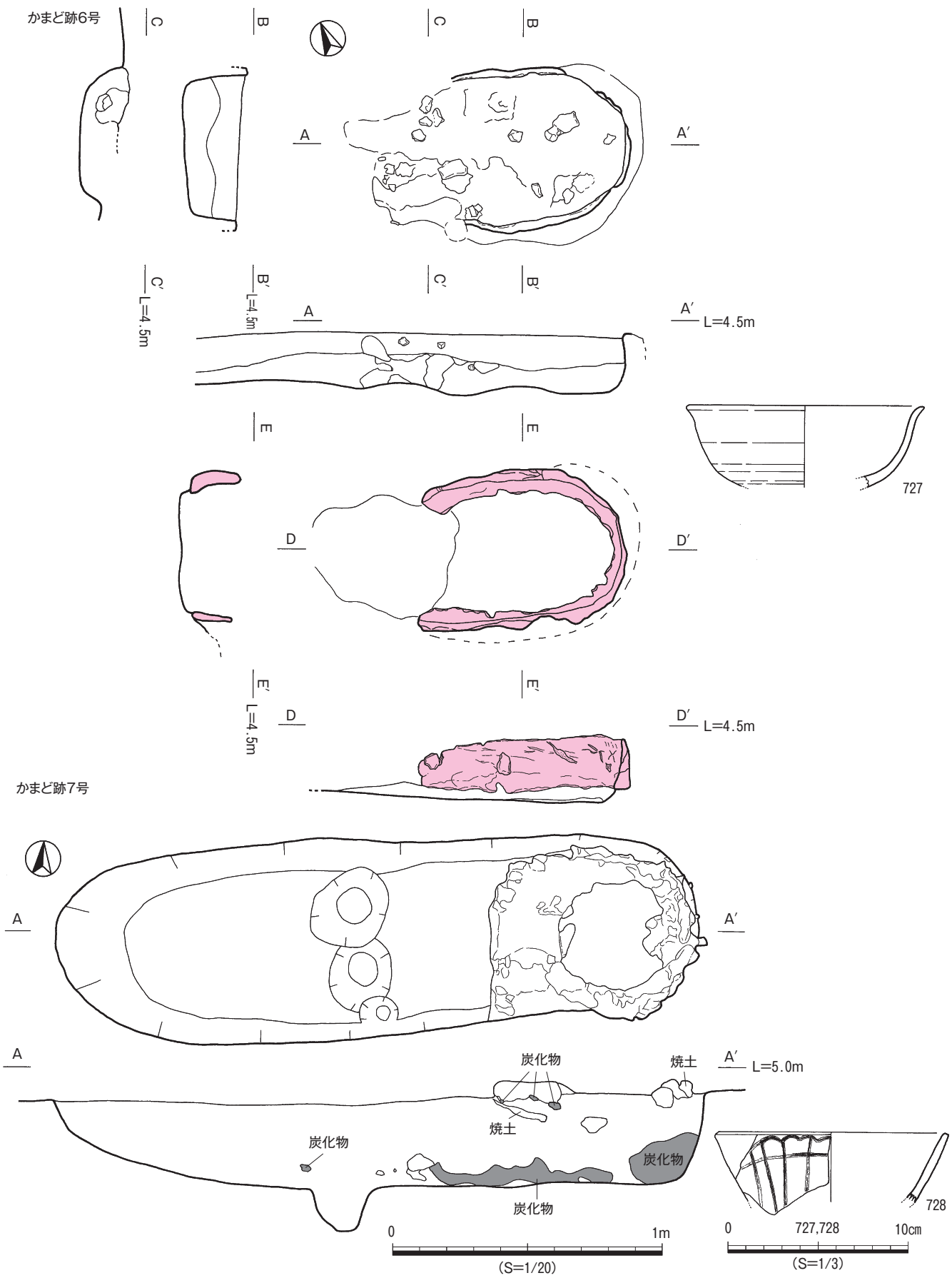
かまど跡20号（第166図）

F・G-16・17区で検出された。主軸は東に53°振れる。全体の形状は，全長約1.7m，全幅約0.6mの楕円形を呈する。かまど本体壁と思われる焼土塊と炭化物が多量に出土したが，本体と灰溜まり部の確認には至らなかった。

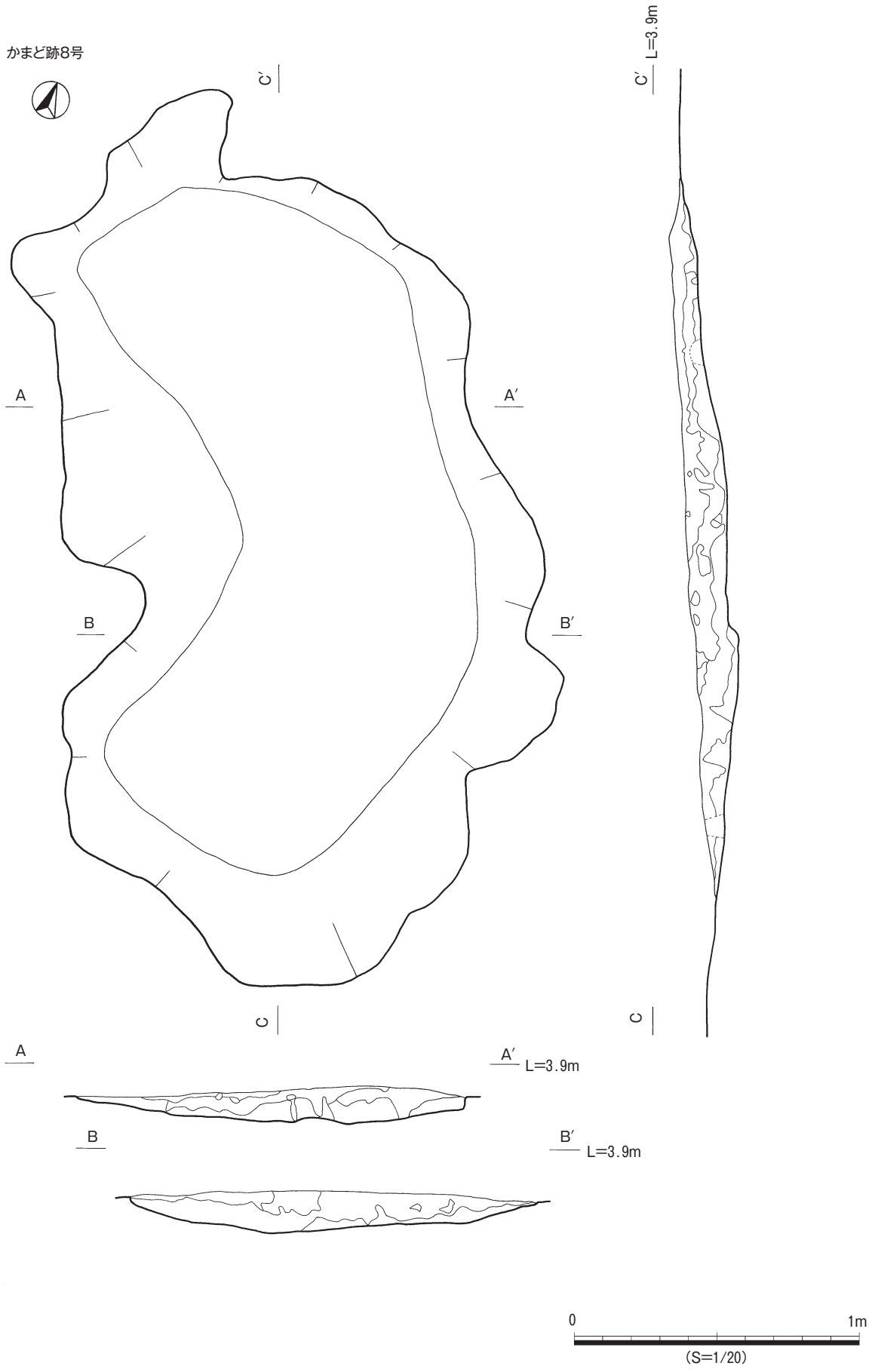
出土遺物（第166図）

土師器７点，白磁２点，瓦質土器１点等が出土した。そのうち８点を図化した。731～733は土師器である。

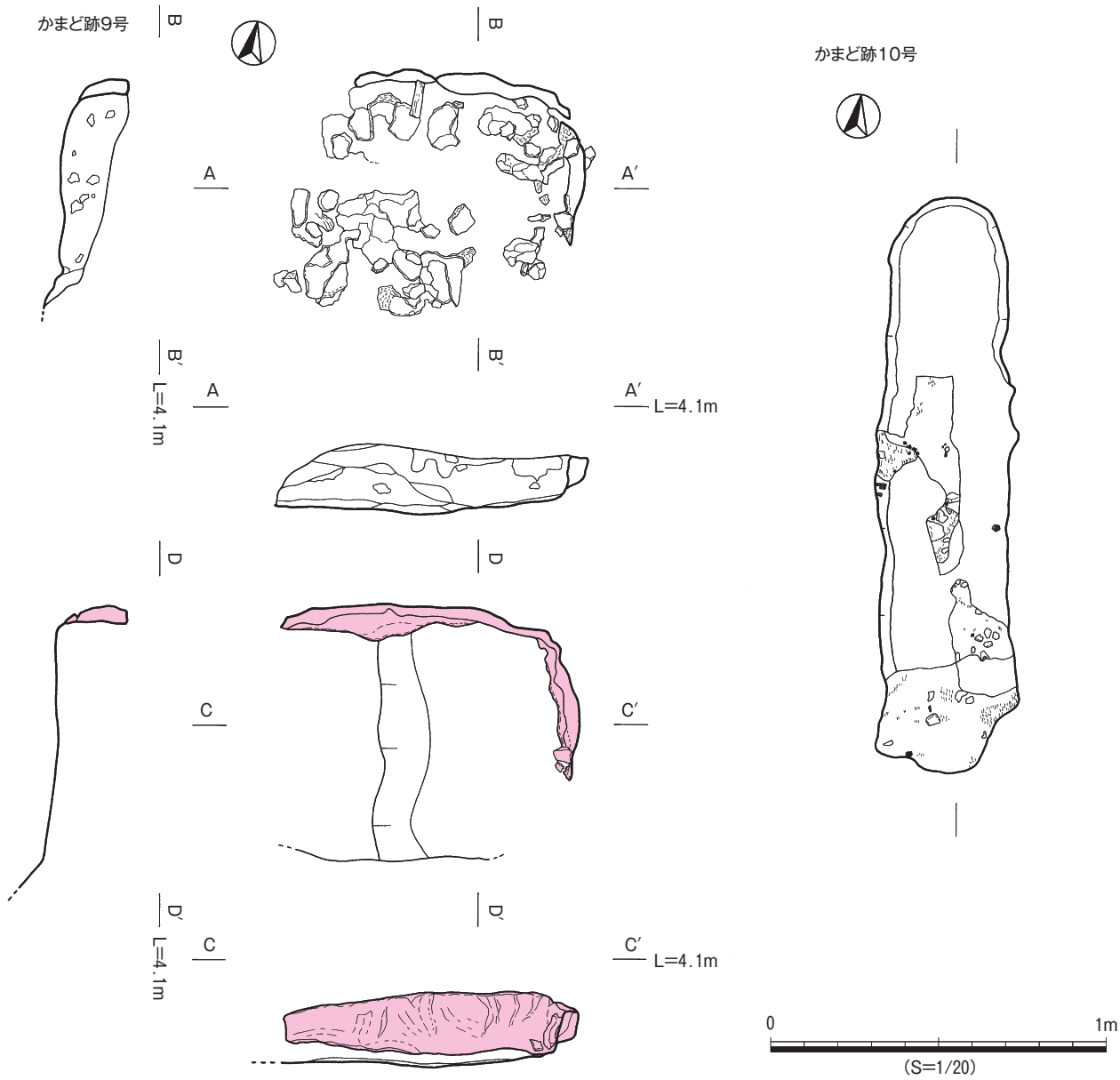
731・732は小皿である。731は口径8.5cm，底径5.6cm，



第156図　かまど跡６，７号・出土遺物



第157図　かまど跡８号



第158図　かまど跡９，10号

器高1.6cmを測り，内面はやや盛り上がる形状を呈する。体部は丸みを帯びながら立ちあがる。732は口縁部のみの資料である。口径8.8cmを測る。733は口径12.7cmを測る。内面は摩滅が激しく，器壁の剥落部分が観察される。734～736は坏である。734は口径13.5cmを測る。体部はまるみを帯びながら立ち上がり，口縁端部はわずかに外反する。735・736はどちらも内面中央部が盛り上がる形状を呈する。737は白磁の椀である。口唇部の釉が剥ぎ取られる口禿げの資料である。738は瓦質土器の擂鉢である。流れ込みの可能性が考えられる資料である。

かまど跡21号（第166図）

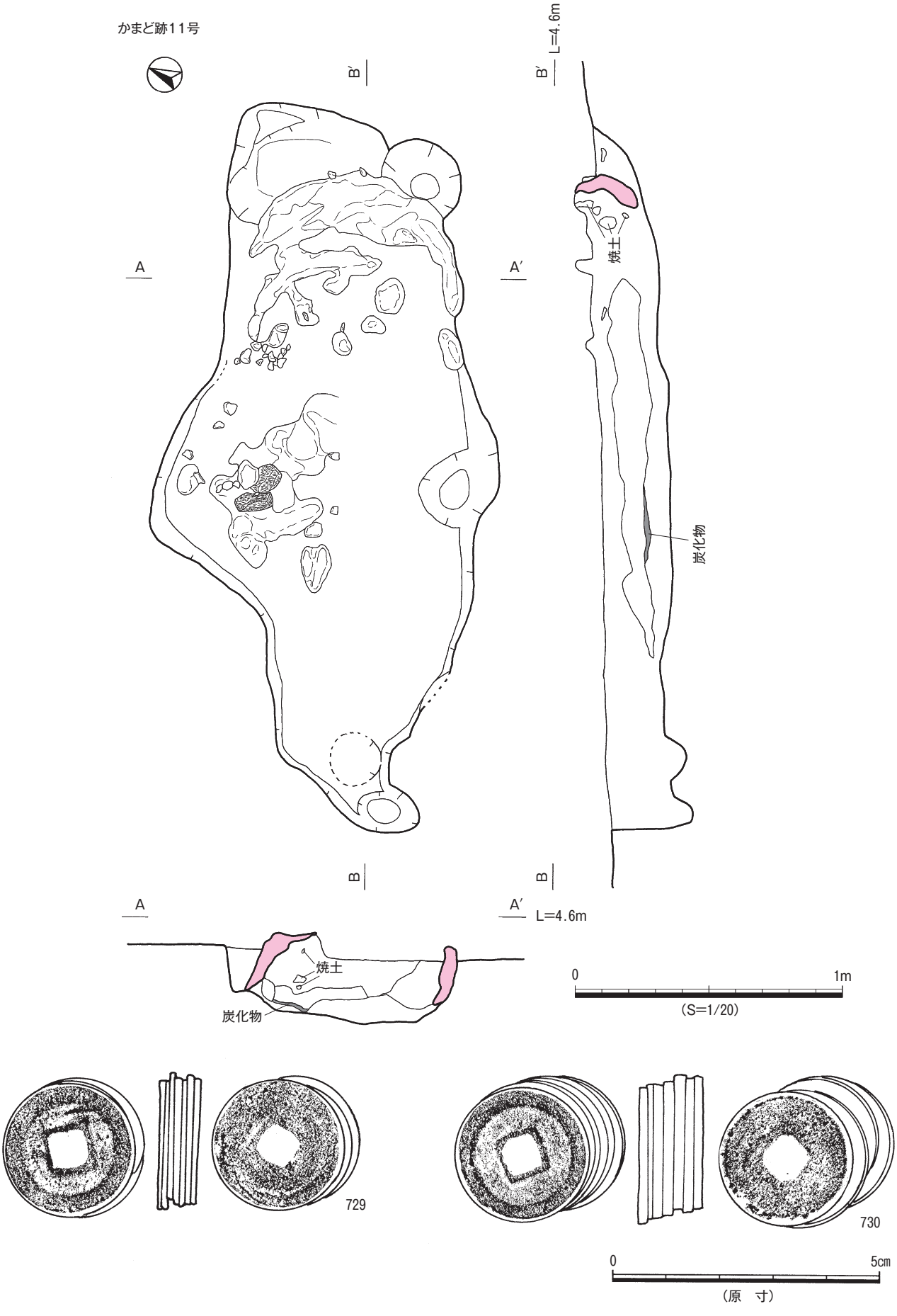
G-16区で検出された。長軸70cm，短軸50cmの範囲に，わずかにかまど本体壁と思われる焼土塊が確認された。燃焼により赤化した本体壁のごく一部が高さ13cmほど確認できた。

出土遺物（第166図）

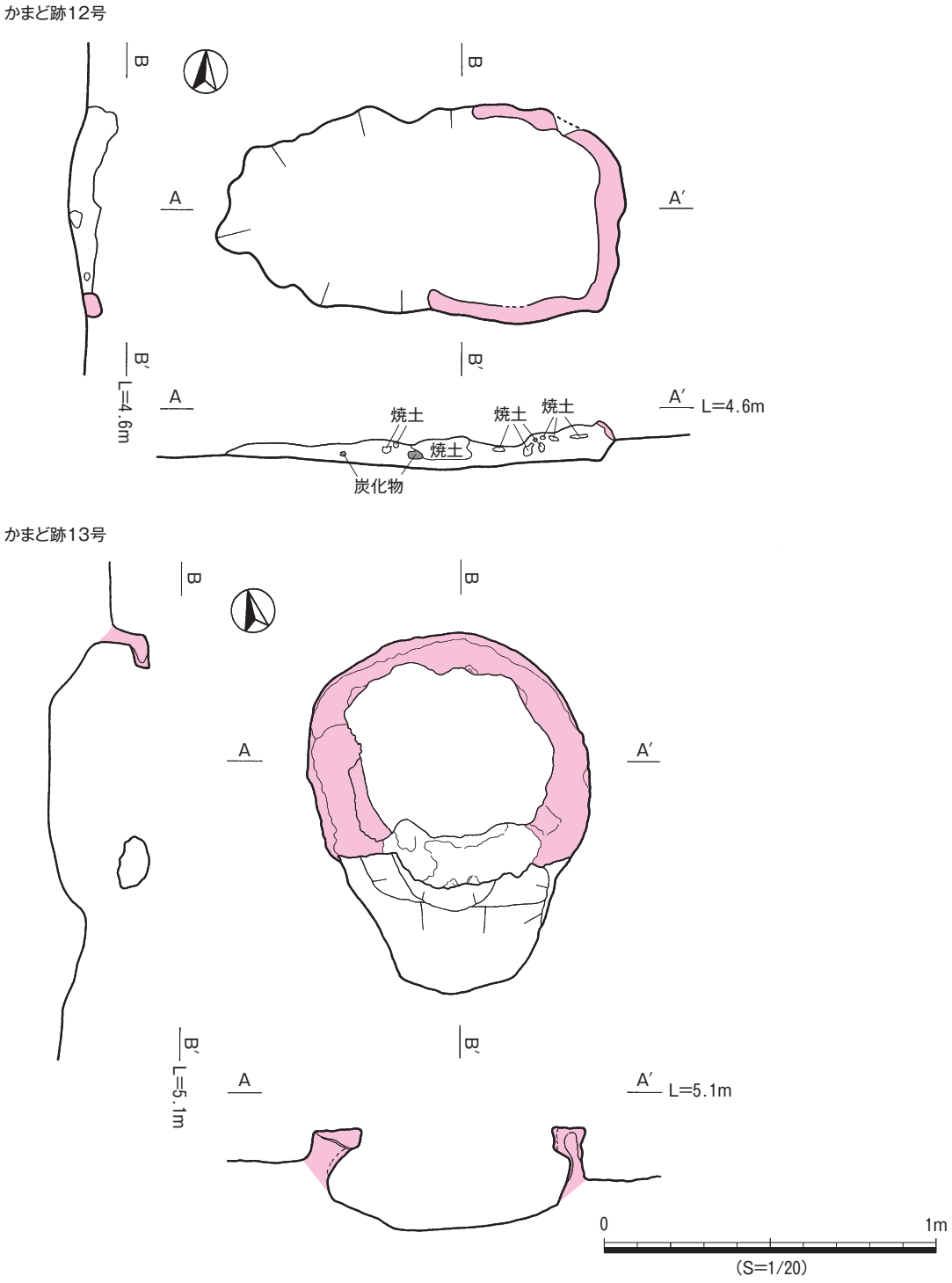
遺物は，青磁２点，備前擂鉢１点，瓦質土器２点，土師器１点が出土した。そのうち土師器の坏１点を図化することができた。739は，底径6.4cmを測る。体部は丸みを帯びながら立ち上がり，内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施される。

かまど跡22号（第167図）

H-16区で検出された。主軸は西に82°振れる。全体の形状は，全長2.4m，全幅約１mで焚き口部でくびれる，



第159図　かまど跡11号・出土遺物

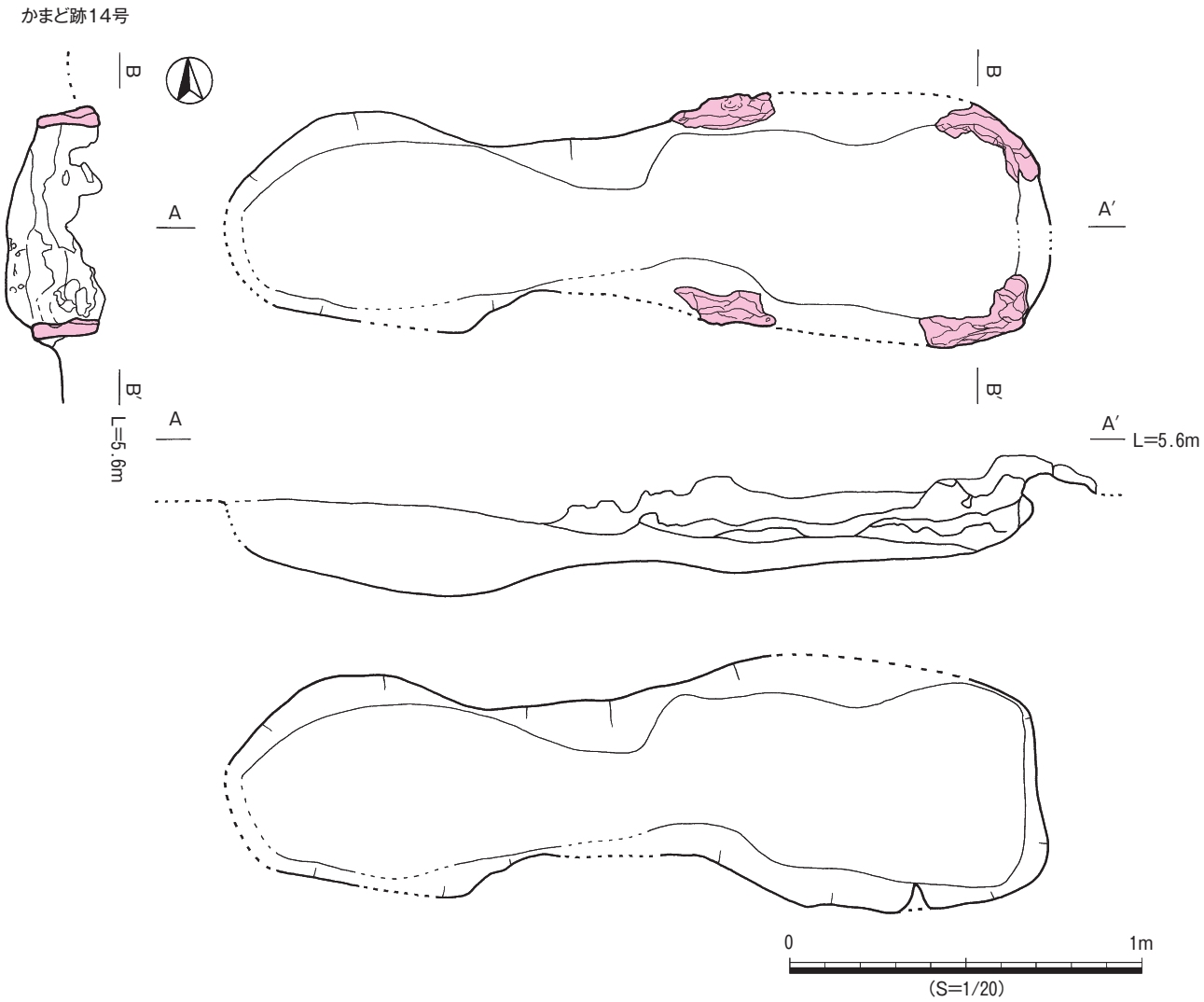


第160図　かまど跡12，13号

ひょうたん形を呈する。焚き口は石臼を転用し，西方向に開く。かまど本体は幅60cm，奥行き60cmで円形を呈している。燃焼により赤化したかまど本体壁は高さ20cmほど残存し，灰溜まりは深さ40cm程度ある。かまど本体下部，床面付近には炭化物が層をなして残存している。

かまど跡23号（第168図）

E-15区で検出された。かまど跡24号と切り合っており，23号の方が新しいことが確認できる。主軸は東に24°振れる。全体の形状は全長2.2m，全幅1.3mである。崩壊したかまど本体壁と思われる焼土塊が遺構北側に集中し，本体は北側にあり，焚き口は南南西方向に開いていたと考えられる。本体部分は大きく損壊しているが，幅70cm前後，奥行き90cm前後と考えられる。燃焼により赤化した，かまど本体壁が高さ約14cmほど残存している。



第161図　かまど跡14号

かまど跡24号（第169図）

E-15区で検出された。かまど跡23号に灰溜まり部を切られている。全体の形状は，全長3.3m，全幅0.7mの長楕円形を呈している。かまど本体の立ち上がりは掘り込みの北側から約55cmのところに確認でき，幅40cm前後，奥行き60cm前後のコの字状を呈すると推測される。主軸は東に11°振れる。焚き口は南方向に開き，かまど内部の埋土には炭化物が集中する。また，かまど本体の北側にみられる掘り込みの埋土中には，炭化物が集中しており，かまど24号以前にかまどが存在した可能性を示唆している。

かまど跡25号（第169図）

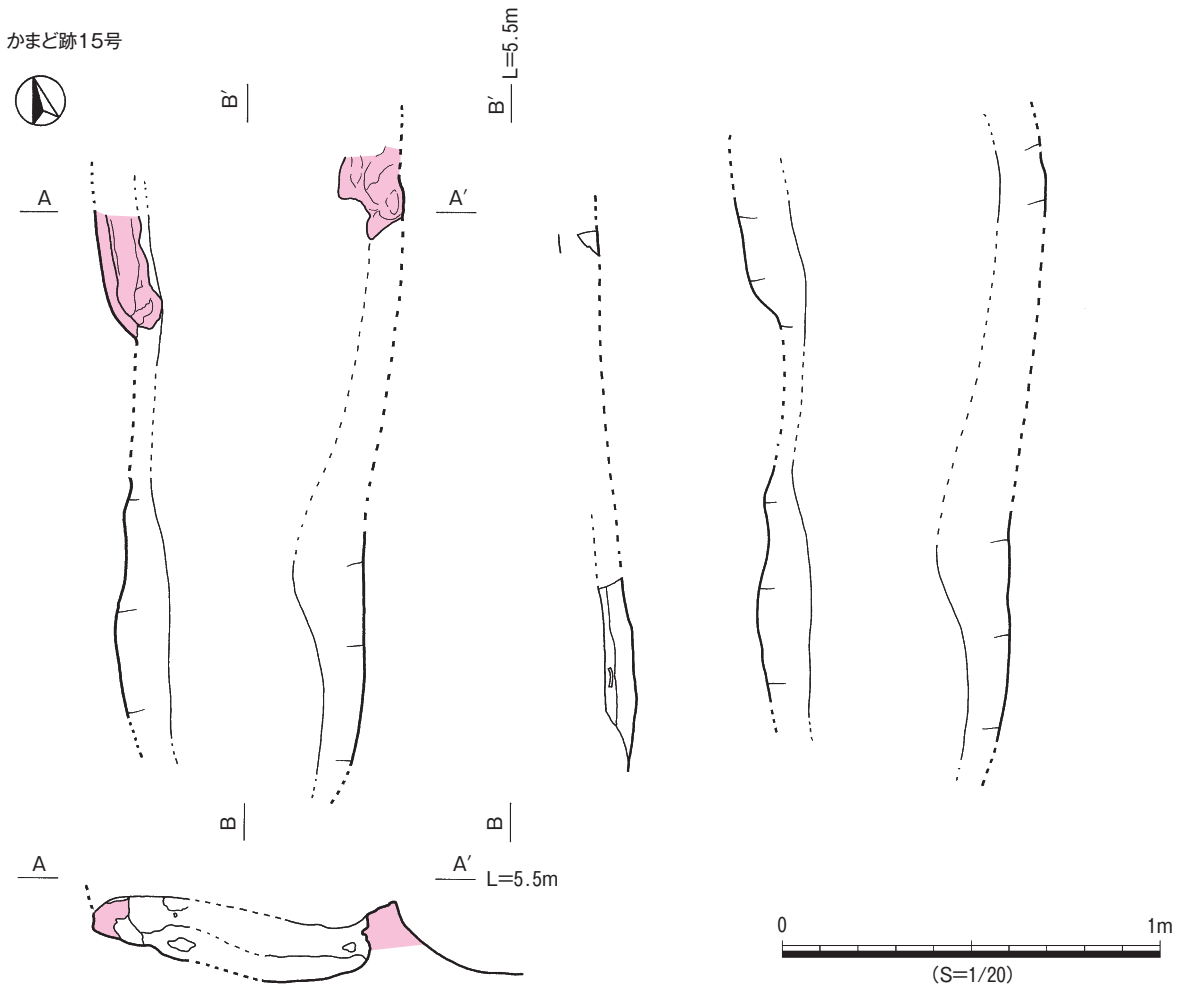
E-15区で検出された。かまど本体部のみの検出である。主軸は東に20°振れる。幅約80cm，奥行き約80cmのコの字状を呈する。焚き口は南南西方向に開く。燃焼により赤化したかまど本体壁の立ち上がりは，約10cmほど確認できる。

かまど跡26号（第169図）

E-15区で検出された。かまど本体部のみの検出である。主軸は東に13°振れる。幅約60cm，奥行き約70cmのコの字状を呈すると考えられる。焚き口は南南西方向に開く。燃焼により赤化したかまど本体の立ち上がりは，約10cmほど確認できる。

かまど跡27号（第170図）

E-14・15区で検出された。主軸は東に15°振れる。全体の形状は，全長2.6m，全幅１mで焚き口部で若干くびれ，わずかにひょうたん形を呈する。かまど本体は幅約80cm，奥行き約100cmで焚き口が北北東方向に開く，コの字状を呈する。燃焼により赤化したかまど本体部の立ち上がりが良好で，高さ22cmほど残存する。かまど本体から灰溜まりの埋土中には，崩壊したかまど本体壁と思われる焼土塊や炭化物が多量に含まれる。



第162図　かまど跡15号

かまど跡28号（第171図）

D-15区で検出された。主軸は東に20°振れる。灰溜まり部は消失し，かまど本体最奥部のみが残存する。本体部分は推定で幅約60cm，奥行き約80cm程度と考えられ，焚き口が南南西方向に開くコの字状を呈すると考えられる。遺構周辺に崩壊したかまど本体と思われる，焼土塊が散乱していた。

出土遺物（第171図）

遺物は青磁椀１点，盤１点，備前擂鉢２点，瓦質土器の擂鉢２点，土師器小片25点，鉄滓小片２点等，約33点出土し，そのうち１点を図化した。

740は龍泉窯系青磁で，外面に雷文帯とラマ式蓮弁が描かれる椀である。

かまど跡29号（第171図）

D-15区で検出された。主軸は東に８°振れる。かまど本体と，灰溜まりの一部が残存する。本来の形状は隅丸長方形を呈すると思われる。かまど本体は幅約50cm，奥行き約70cm程度で，焚き口が南方向に開くコの字状を呈する。燃焼により赤化したかまど本体壁の立ち上がりは，20cmほど残存する。本かまど跡は，140cm×110cmの範囲で遺構切り取りを行い，移設保存を行った。現在，埋蔵文化財センターにて普及活動に利用している。

製鉄関連遺構（第172図～第174図）

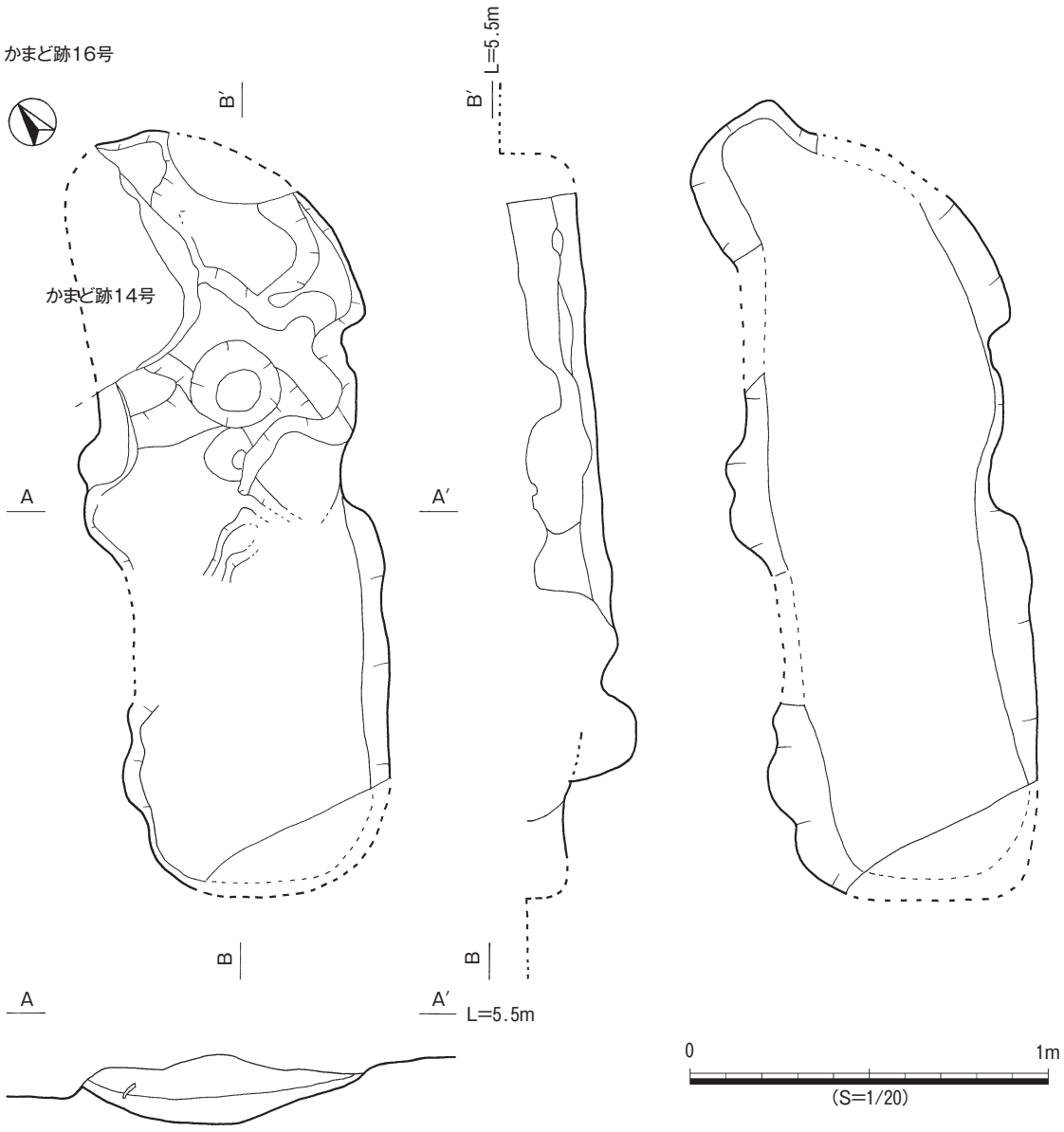
製鉄に関連すると思われる遺構は，B・C-17・18区，F・G-16～18区で６カ所確認された。

製鉄関連遺構１号（第172図）

B・C-17・18区で検出された。鉄滓，礫の集積遺構である。径約80cmの範囲に鉄滓と礫が集中して確認された。また，鞴の羽口片や赤化した焼土塊も含まれており，鉄に関係する作業を行った後の，残滓や不要物を集積した排滓場と捉えた。

製鉄関連遺構２号（第172図）

F-17区で検出された。非常に強い熱を受けたと考えられる。赤褐色，橙色の焼土ブロックの広がりである。



第163図　かまど跡16号

焼土中に小割りにされた様な，炭化物がみられ，このほかにも近辺に製鉄に関連すると思われる遺構が集中することから，製鉄関連の炉と判断した。炉の中心部がどこかは不明である。検出面からの深さ20cmほどの掘り込みがみられる。

製鉄関連遺構３号（第173図）

G-17区で検出された。直径55cm，検出面からの深さ10cmほどの皿状の掘り込みがあり，埋土中に炭化物片と，細かな鉄滓が含まれている。さらに鞴の羽口片も出土した。これらから，鍛冶炉と判断した。炭化物は掘り込み南東側にも広がりをみせ，鍛造剥片が多量に混じる。

出土遺物（第173図）

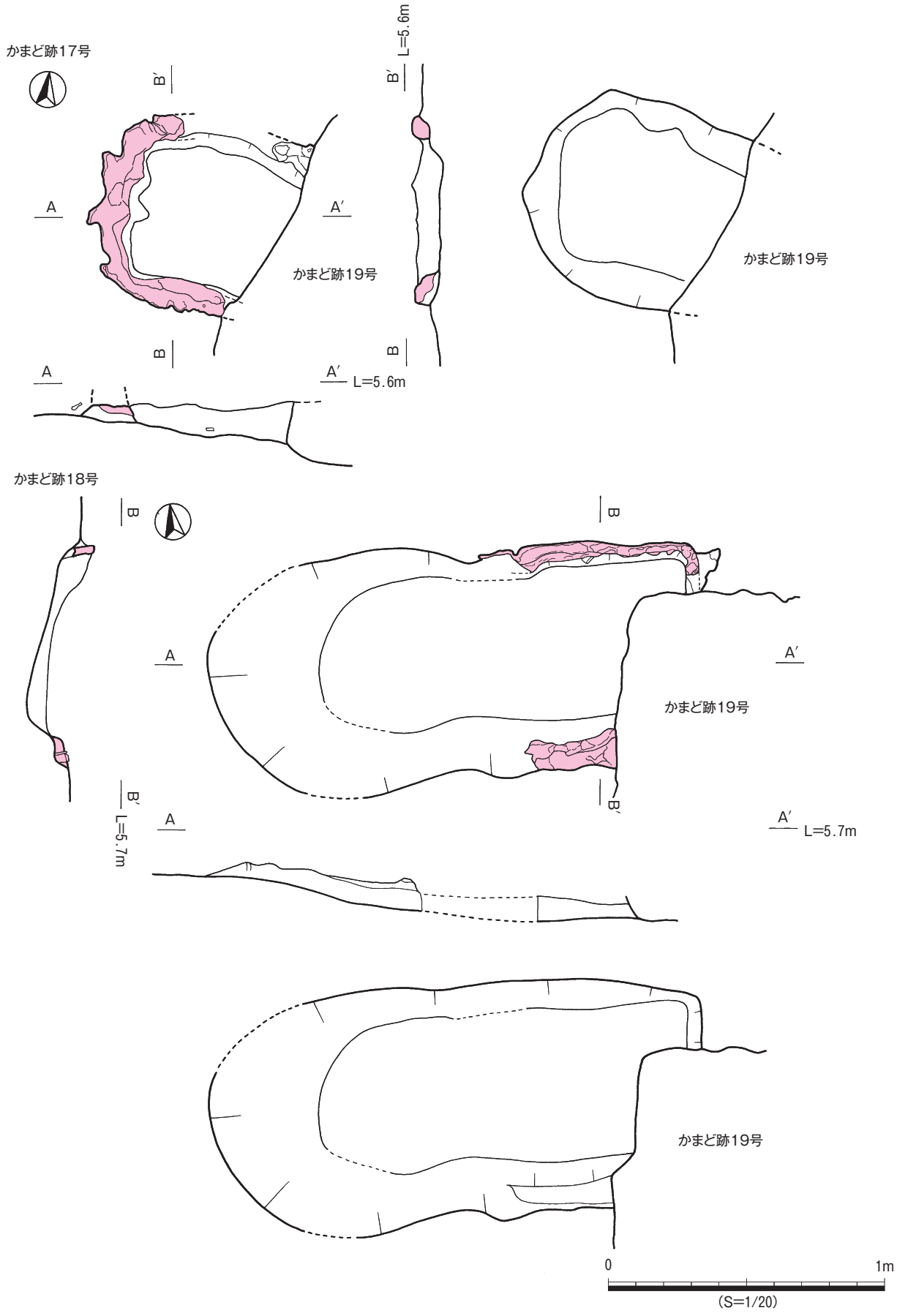
遺物は土師器が２点（１点は完形の小皿）と鞴の羽口が１点出土し，完形の小皿１点と羽口を図化した。741は口径7.6cm，底径5.2cm，器高0.75cmを測る。体部は丸みを帯びながら短く立ち上がる。内外面は丁寧な回転ナデ調整が施される。742は羽口である。大形のもので，外径約9.5cm，内径約2.5cmを測る。外面はへた状工具によるナデ調整が施される。

製鉄関連遺構４号（第173図）

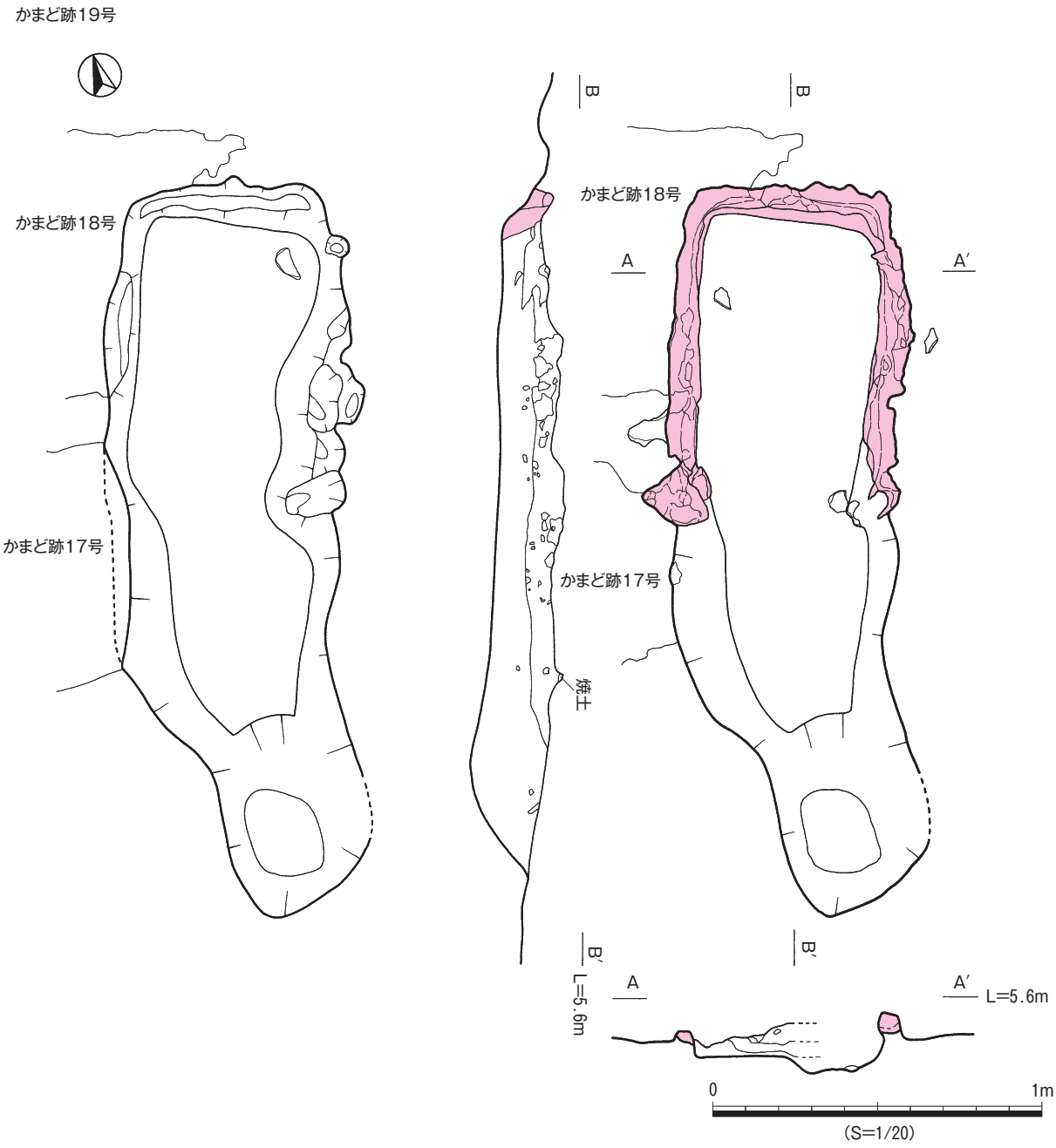
G-17・18区で検出された。長軸1.5m，短軸１mの広がりをみせる焼土跡である。鉄滓と軽石が埋土に混ざる。断面の記録が無いため掘り込みの状況は確認できなかった。鍛冶関係の炉跡もしくは廃棄場と考える。

製鉄関連遺構５号（第173図）

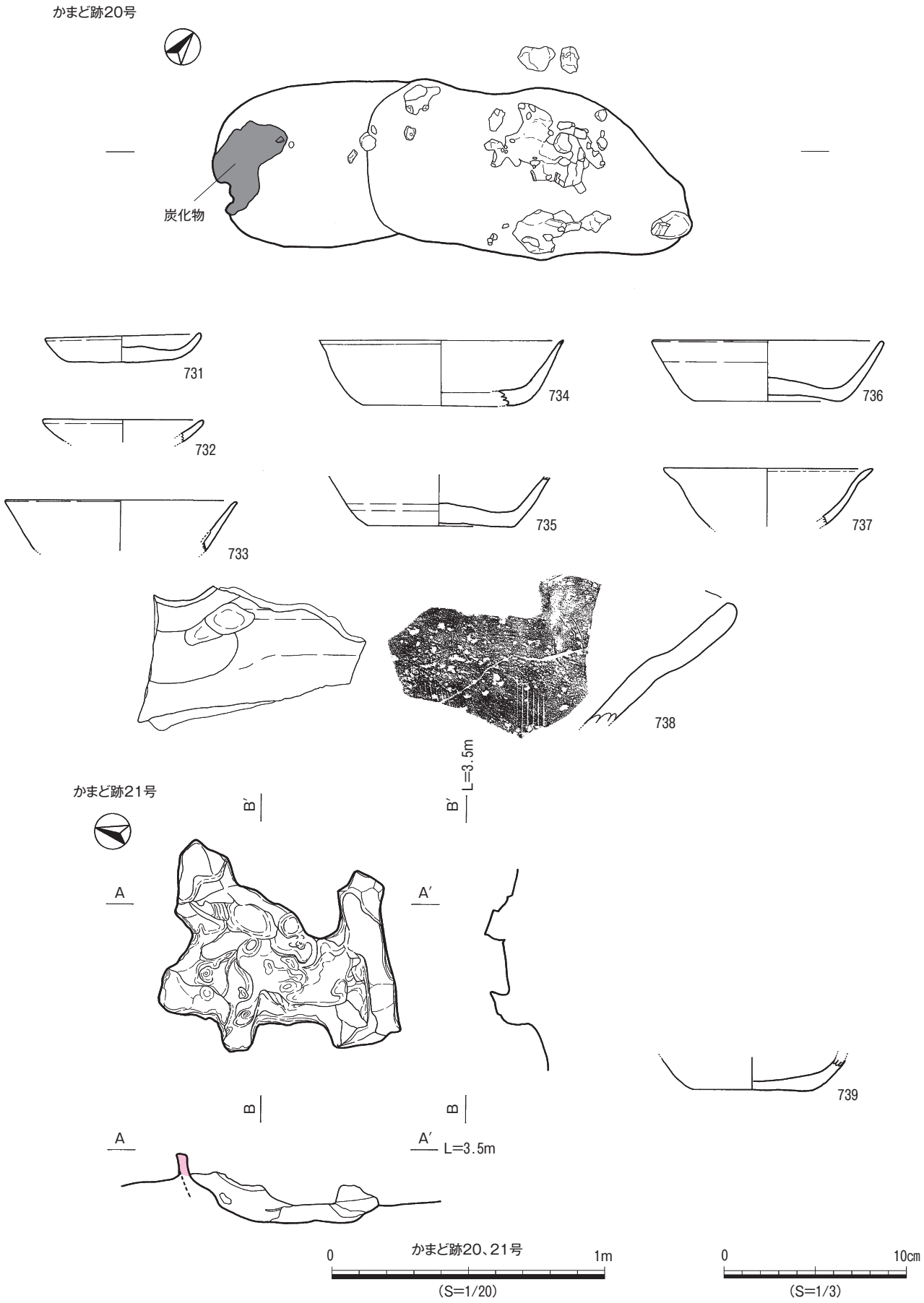
G-18区で検出された。軽石と鉄滓が混じる焼土の広



第164図　かまど跡17，18号

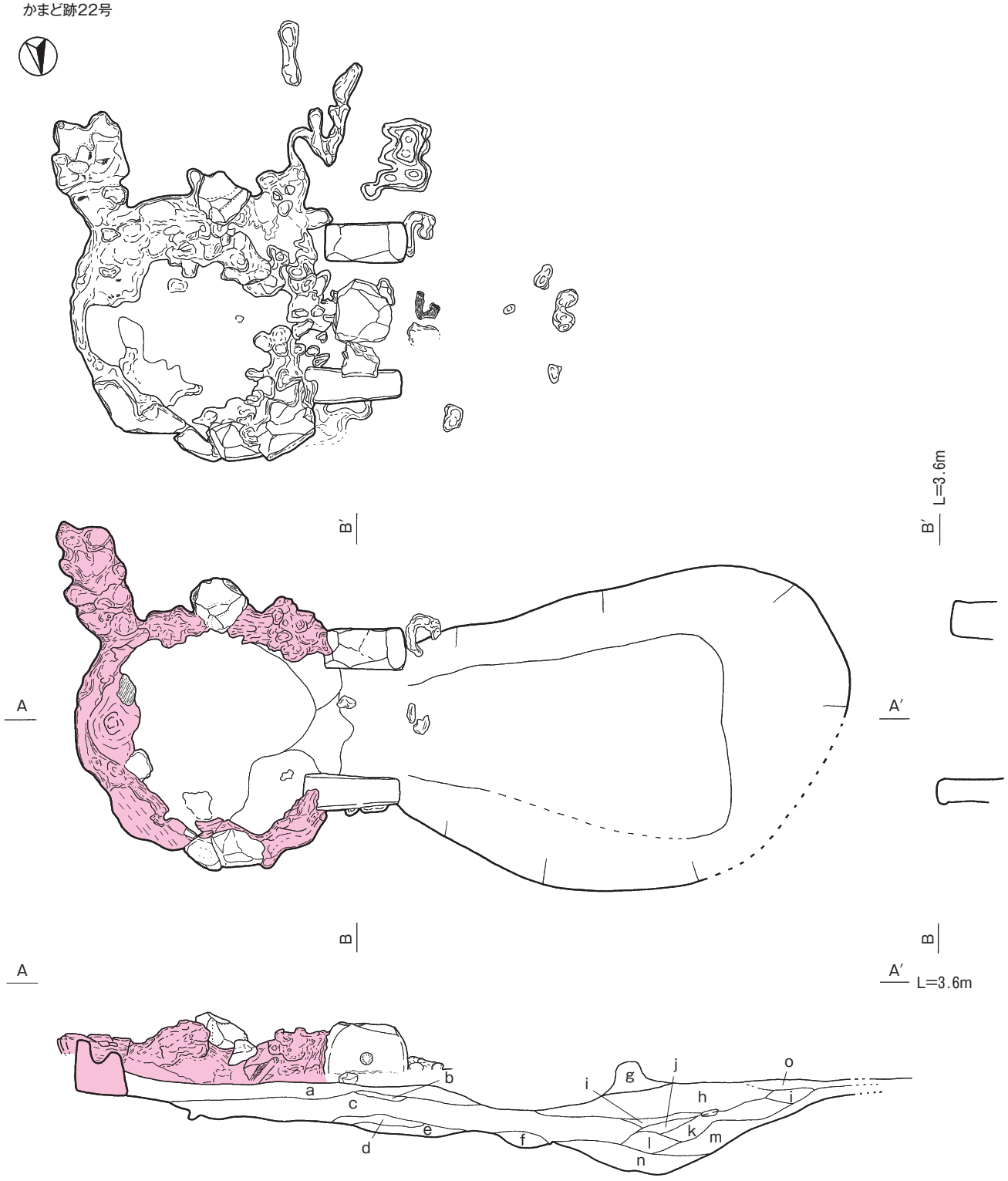


第165図　かまど跡19号



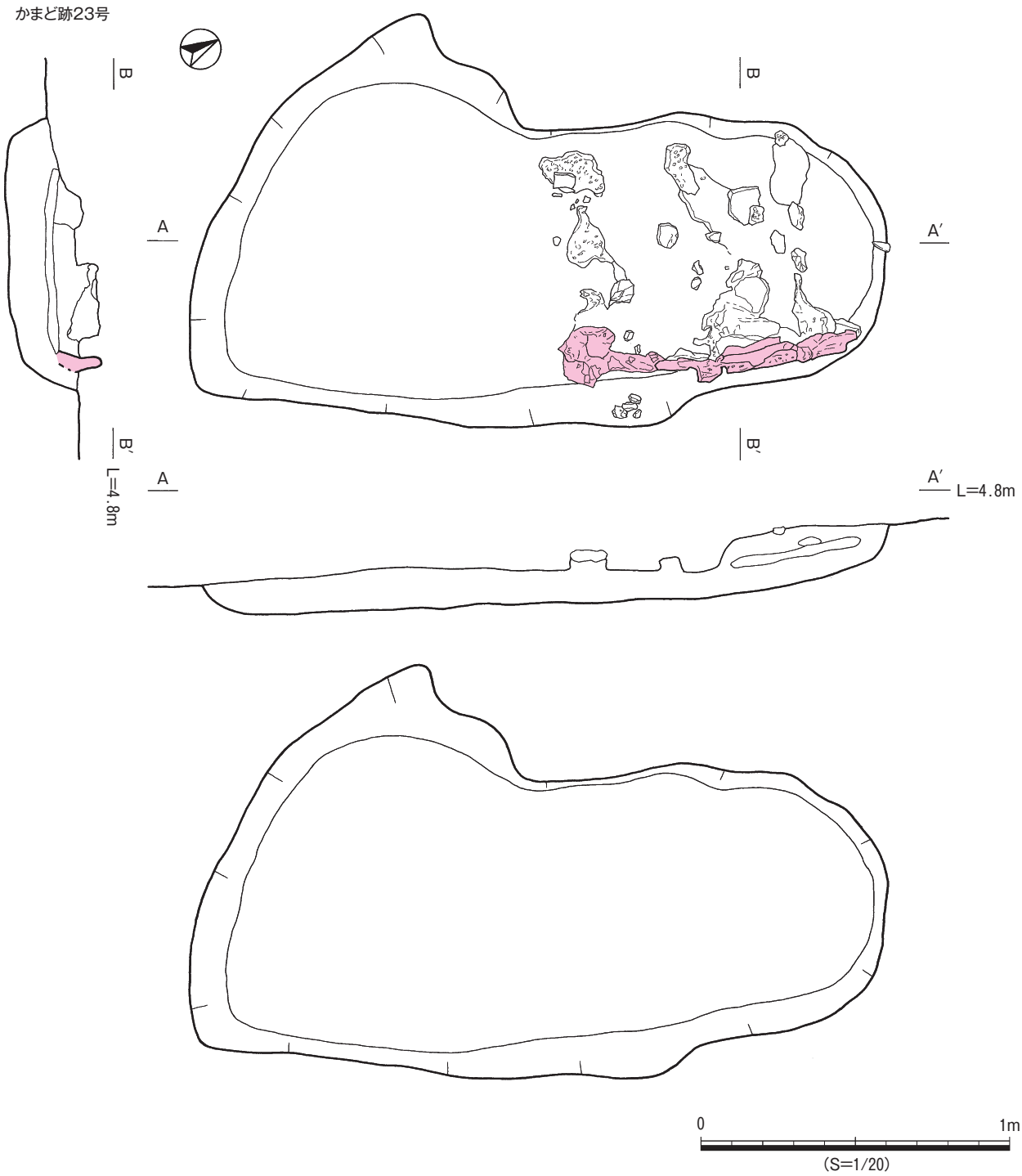
第166図　かまど跡20，21号・出土遺物

かまど跡22号



埋土
a.黒色灰わずかに茶褐砂含む
b.褐色砂
c.暗赤褐色砂に炭化物混り
d.赤褐色砂（ブロック状）に炭化物を含む
e.白濁色灰（粘質あり）
f.黒色土
g.茶褐色砂
h.茶褐色砂と赤褐色砂の混土（炭化物混り）
i.暗茶褐色土
j.炭化物を含む茶褐色土
k.暗茶褐色土（白濁色灰を含む）
l.暗茶褐色土（炭化物多く含む）
m.暗赤褐色砂
n.炭化物混り暗茶褐色土
o.赤褐色砂

第167図　かまど跡22号



第168図　かまど跡23号

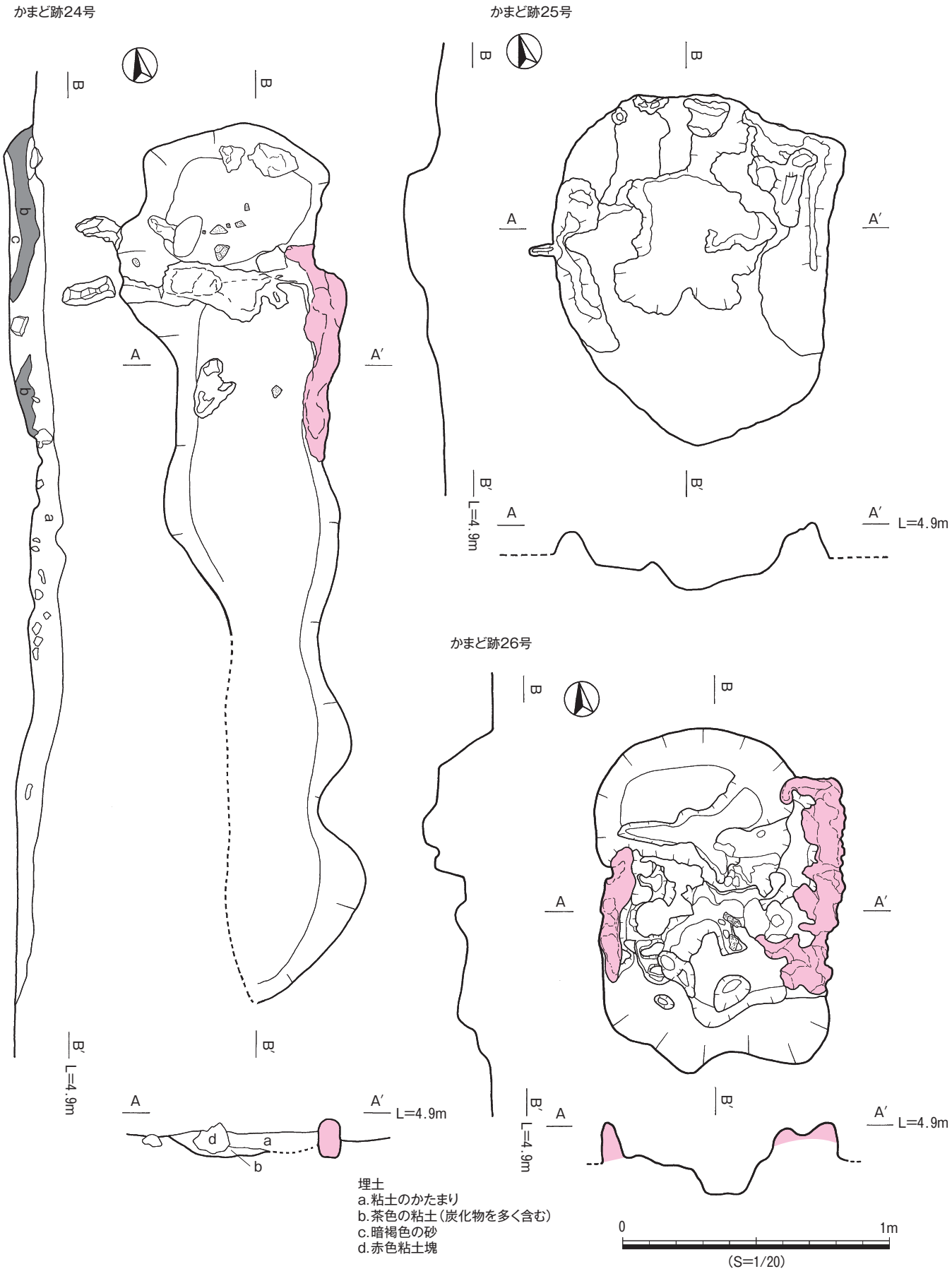
がりである。焼土範囲の記録が無いため規模については確認できない。４号と同じく，鍛冶関係の炉跡もしくは廃棄場と考える。

製鉄関連遺構６号（第174図）

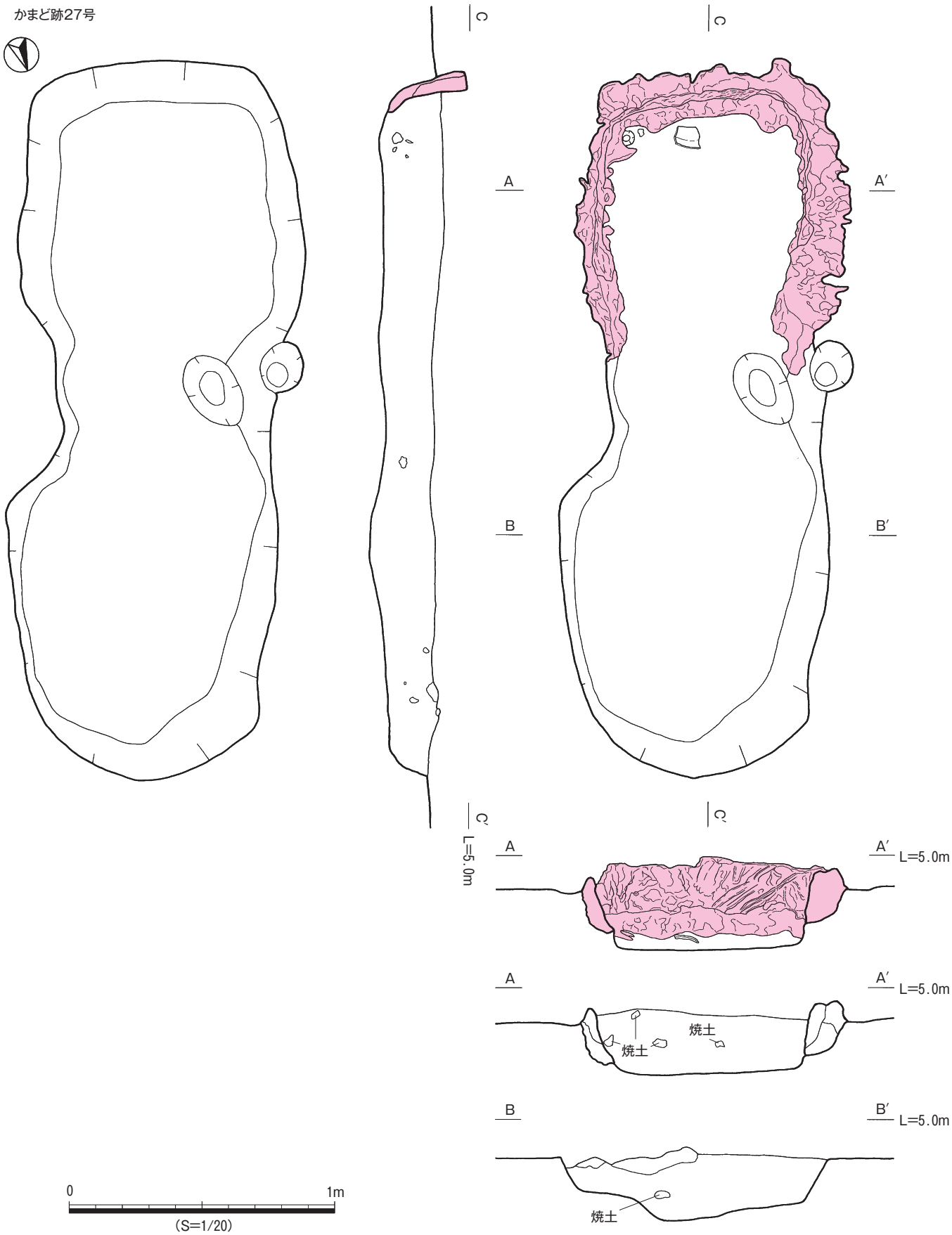
F-16区で検出された。焼土ブロックの集中域である。長軸1.7m，短軸1.1mの広がりをもち，集中域内には鉄滓も含まれている。断面の記録が無く，掘り込みの有無は確認できない。鍛冶関係の廃棄場と考える。

出土遺物（第174図）

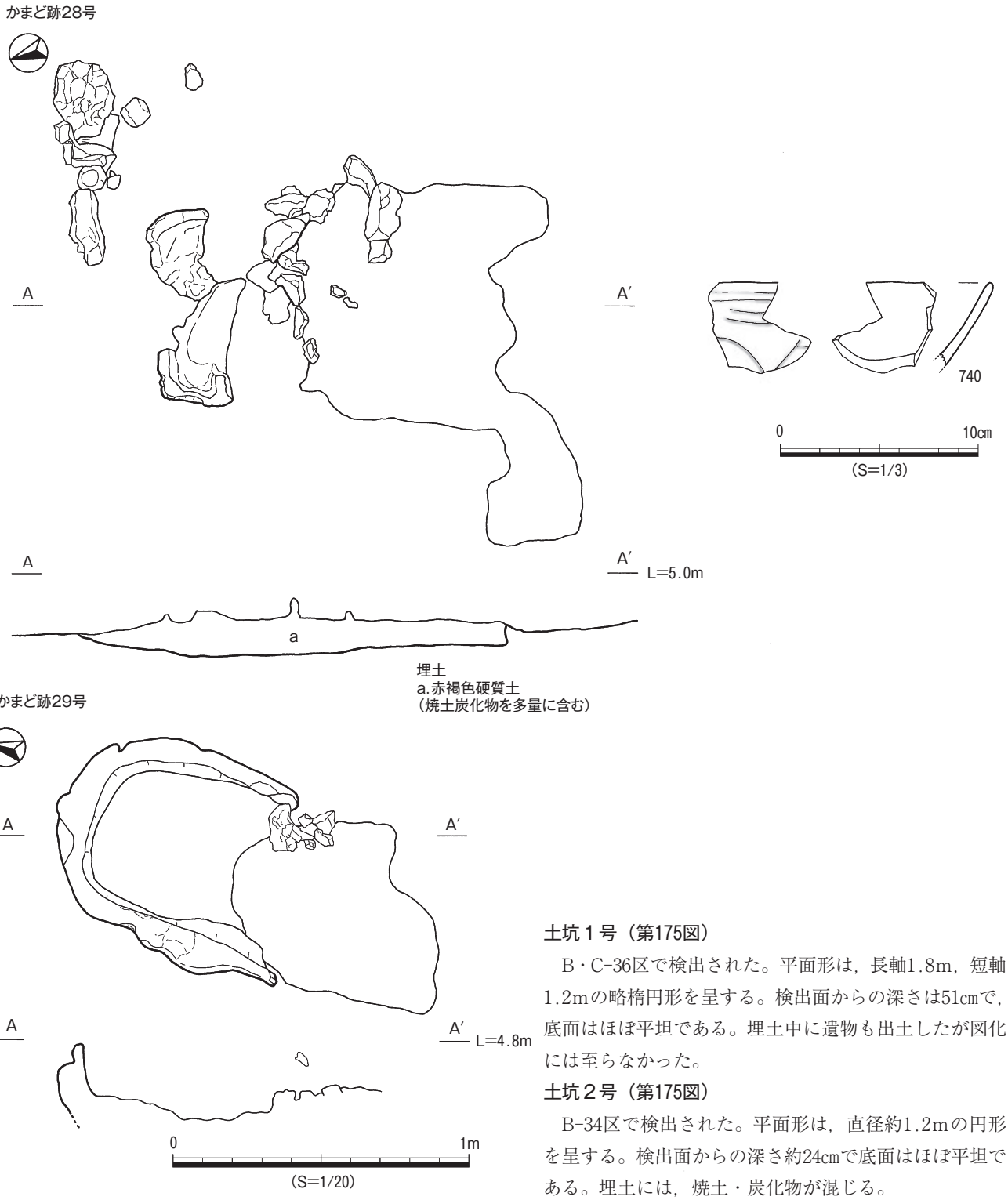
遺物は，土師器小片59点，羽口２点，土錘１点，常滑焼の甕１点が出土し，２点を図化した。743は土師器の小皿である。口径7.6㎝，底径5.4㎝，器高1.1㎝を測る。体部は丸みを帯びながら立ち上がり，内底はやや盛り上がる。内外面は回転ナデ調整が施される。744は輔の羽口である。



第169図　かまど跡24～26号



第170図　かまど跡27号



第171図　かまど跡28，29号・28号出土遺物

土坑（第175図～第182図）

土坑は23基が検出された。概ね長軸，短軸１m以上のもので，遺構内から遺物が出土したものを，基本的に扱った。調査区内に広く散在するが，一部D・E-27・28区やD-15～17区に多少のまとまりもみられる。

土坑１号（第175図）

B・C-36区で検出された。平面形は，長軸1.8m，短軸1.2mの略楕円形を呈する。検出面からの深さは51cmで，底面はほぼ平坦である。埋土中に遺物も出土したが図化には至らなかった。

土坑２号（第175図）

B-34区で検出された。平面形は，直径約1.2mの円形を呈する。検出面からの深さ約24cmで底面はほぼ平坦である。埋土には，焼土・炭化物が混じる。

土坑３号（第175図）

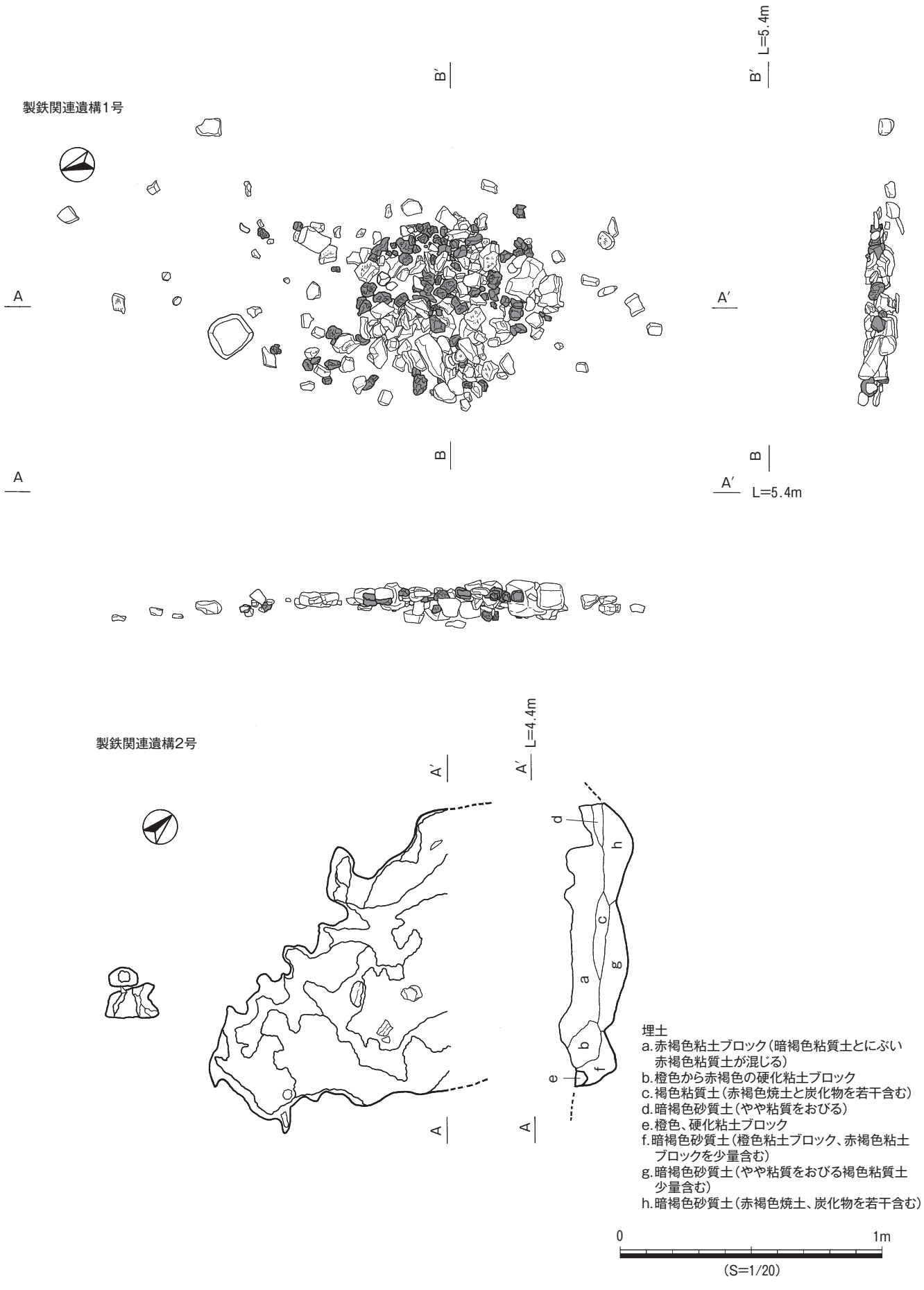
B-32区で検出された。平面形は，長軸2.5m，短軸2.2mの大型の円形を呈する。検出面からの深さは約13cmで底面はほぼ平坦である。遺物が多量に出土した。

出土遺物（第175図）

745は白磁の椀の底部である。見込みには段を有し，外面残存部はヘラ削りが施され，露胎する。

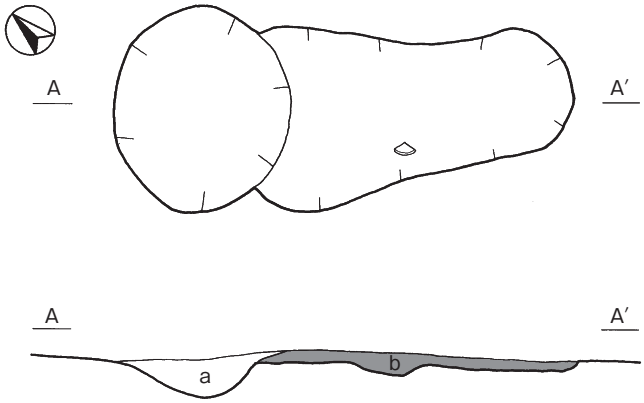
土坑４号土坑（第175図）

D-31区で検出された。平面形は，径70cmの円形を呈



第172図　製鉄関連遺構１，２号

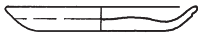
製鉄関連遺構3号



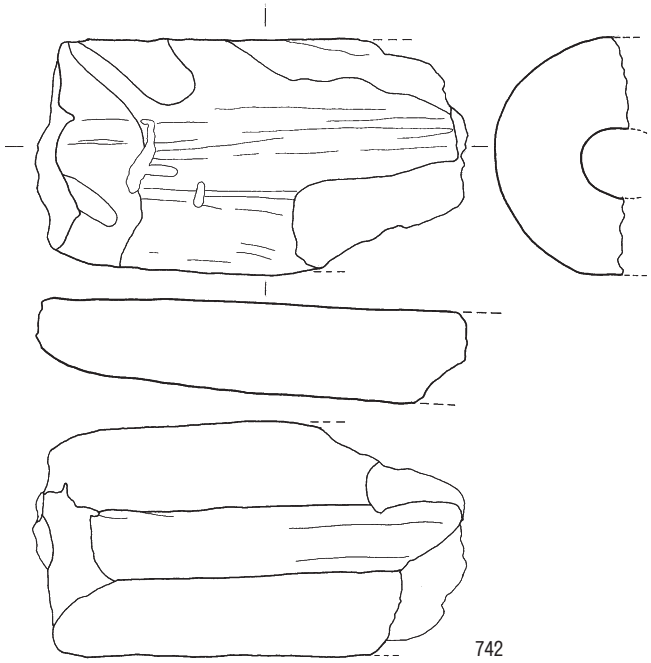
埋土
a.黒色炭化物として細かな鉄滓が含まれる。
b.茶褐色土（炭化物混ざり）

製鉄関連遺構4号



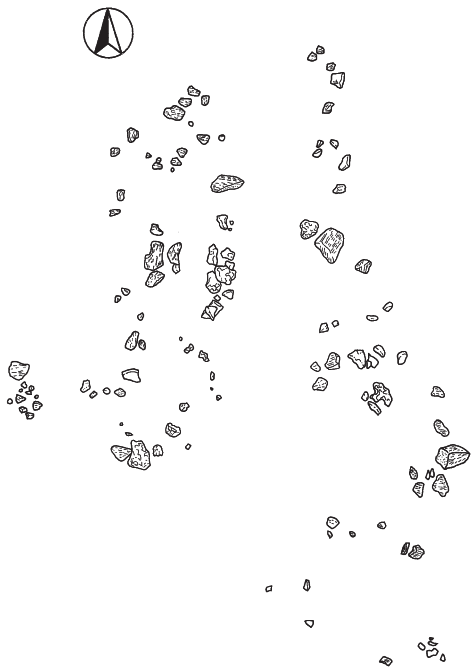


741



742

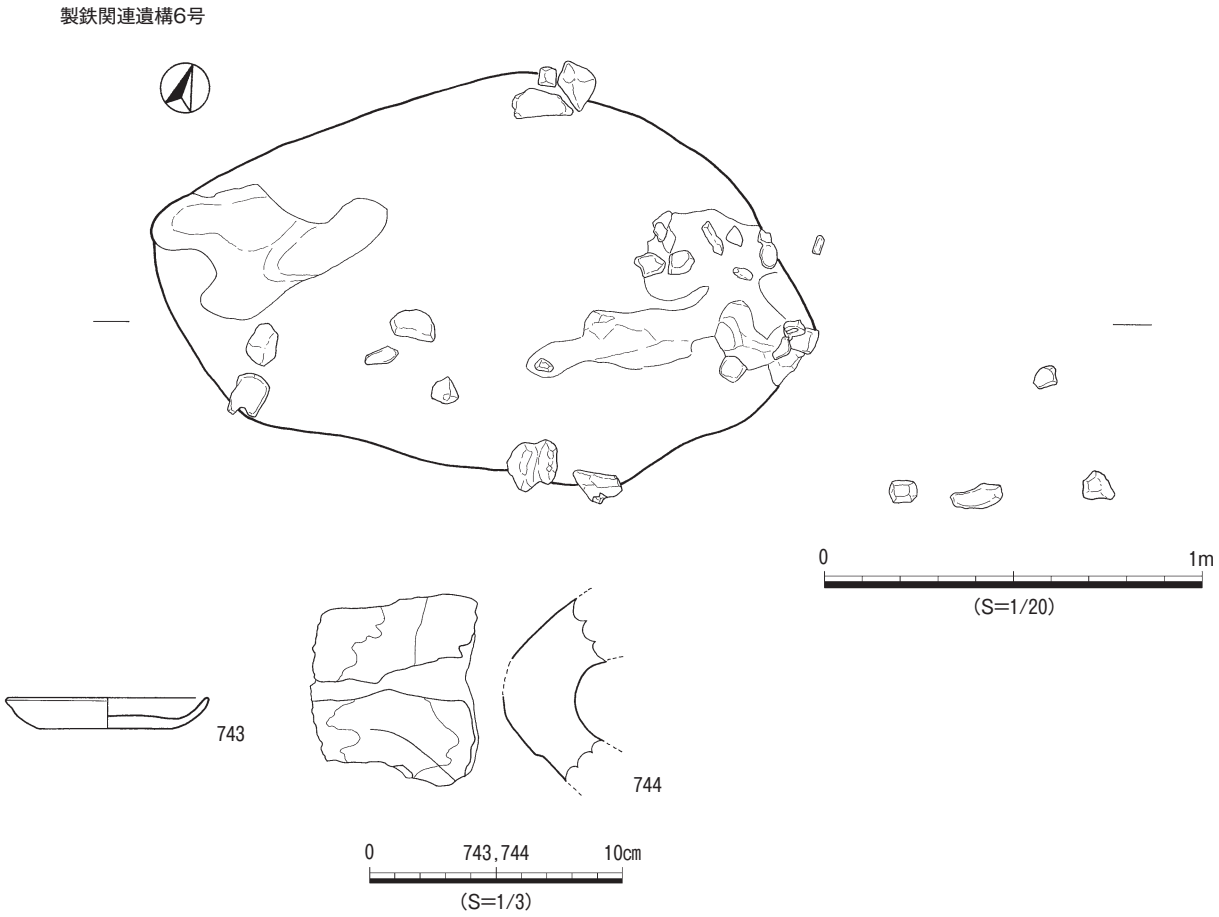
製鉄関連遺構5号



0　741,742　10cm
(S=1/3)

0　1m
(S=1/20)

第173図　製鉄関連遺構３～５号・３号出土遺物



第174図　製鉄関連遺構６号・出土遺物

する。検出面からの深さは約22cmで，底面はほぼ平坦である。埋土中から土錘が出土した。

出土遺物（第175図）

746は土錘である。長さ3.8cm，太さ1.65cm，穿口径約４mmである。

土坑５号（第176図）

E-28区で検出された。かまど４～６号を東側に検出した凹地内にあたる。平面形は，長軸2.4m，短軸1.84mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約90cmで，底面はほぼ平坦である。

土坑６号（第176図）

D-28区で検出された。平面形は，長軸1.7m，短軸1.2mの不定形を呈する。検出面からの深さ約80cmで底面はほぼ平坦であるが，一部に後世のピットと思われる落ち込みがみられる。

出土遺物（第176図）

遺物は土師器の小皿が１点出土した。747は底面に糸切りの痕跡と，板目が残る。

土坑７号（第176図）

D-27区で検出された。平面形は，長軸1.3m，短軸0.8mのひょうたん形で，後世のピット２本が切り合っている。本来の底面は検出面から20cmほどであったと考えられる。埋土中から天目茶碗などの遺物が出土した。

出土遺物（第176図）

遺物は，龍泉窯系青磁の皿と中国産の天目碗が出土した。748は青磁の皿の底部である。見込みに櫛状工具による花文が描かれる。749は天目碗である。胎土は鈍い橙色を呈し，暗褐色の天目釉が外面腰部までかかる。腰部は削りにより段案有する。

土坑８号（第176図）

D-27区で検出された。平面形は，長軸1.6m，短軸0.4mの不定形で，後世のピット３本に切られている。本来の底面は，検出面から約50cmほどであったと考えられる。埋土中から銭貨が出土した。

出土遺物（第176図）

750は埋土中から出土した銭貨であるが錆のため文字の判別は出来なかった。

土坑９号（第177図）

E-27・28区で検出された。平面形は，長軸2.4m，短軸1.1mの不定形を呈する。検出面からの深さ約25cmで，

底面はほぼ平坦である。埋土中から銭貨が出土したが小片で図化できなかった。

土坑10号（第177図）

B-25区で検出された。平面形は，長軸7m，短軸4.2mの楕円形を呈し，検出面からの深さは，最深部で1.2mの巨大なものである。わずかであるが人骨片が検出されており，墓の可能性もある。

出土遺物（第177図）

遺物は，土師器の小片２点，青磁５点，中国陶器１点，カムィヤキ１点，東播系捏ね鉢１点，備前擂鉢１点，瓦質土器１点が出土した。そのうち１点を図化することができた。751は東播系須恵器の捏ね鉢である。口縁部は玉縁状を呈し，外面は黒色に燻される。

土坑11号（第177図）

F-24区で検出された。平面形は，直径約1.5mの円形を呈し，検出面からの深さは約16cmである。遺構北側を２本の後世のピットで切られている。埋土中から銭貨が出土した。

出土遺物（第177図）

752は埋土中から出土した。元豊通宝である。

土坑12号（第178図）

D-20区で検出された。平面形は，長軸６m，短軸0.9mの溝状の細長い形状をしている。掘立柱建物跡21号と重なっており，土坑長軸が，建物の長軸方向と平行する。建物との関連性も考えられるが，掘り込みは検出面から13cmと非常に浅い。

出土遺物（第178図）

753は埋土中から出土したキセルの吸い口である。

土坑13号（第178図）

E-18区で検出された。平面形は，直径約1.2mのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは，約45cmで，底面は平坦である。

出土遺物（第178図）

遺物は，土師器小片３点，青磁の小片３点，，白磁の１点，瓦質土器の火鉢３点，備前擂鉢等が出土した。そのうち図化できたものは白磁の皿と瓦質土器の火鉢であった。754は景徳鎮窯系の白磁で，皿の底部である。口縁部は欠損しているが，外反するものと思われる。畳付の釉は釉剥ぎされる。755は瓦質土器の火鉢の胴部である。内面にはハケ目状の調整痕が残る。

土坑14号（第179図）

F・G-17・18区で検出された。平面形は，長軸8.2m，短軸6.9mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約1.5mで底面はボウル状でほとんど平坦面をもたない。

土坑15号（第179図）

D-16区で検出された。平面形は，推定長軸約1.3m，短軸１mの不定形を呈し，最深部は検出面から約37cmである。３本の後世のピットに切られている。

出土遺物（第179図）

遺物は，土師器45点，青磁５点，瓦質土器５点，常滑焼の甕３点が出土した。そのうち該期の資料と考えられる１点を図化した。756は土師器の坏である。口径13.0cm，底径8.0cm，器高3.6cmを測り，内外面は丁寧なナデ調整が施される。

土坑16号（第180図）

D-17区で検出された。平面形は，長軸1.7m，短軸1.1mの楕円形を呈する。検出面からの深さは約85cmである。掘り込み壁の立ち上がりは鋭角であるが，南側は途中で緩やかな立ちあがりに変化する。

出土遺物（第180図）

遺物は，土師器小片18点，瓦質土器２点，銭貨１点が出土した。そのうち３点を図化した。757は土師器の坏である。口径12.0cm，底径8.8cm，器高2.8cmを測る。758は瓦質土器の捏ね鉢である。内面にはヘラ状工具による調整痕が斜位に入る。759は祥符元宝である。

土坑17号（第180図）

D-16区で検出された。平面形は，径80cm程度の略円形を呈する。遺構中心部付近に，後世のピットが切り合っている。本来の掘り込みは，検出面から18cm程度と考えられる。

出土遺物（第180図）

760は，土師器坏で，口径8.1cm，底径5.0cm，器高2.0cmを測る。

土坑18号（第180図）

C-16区で検出された。平面形は径約1.2m程の円形に35cm程度の張り出しをもつ柄鏡状を呈する。張り出しで浅い段をもち，本体掘り込みは，検出面からの深さ，約1.5mである。断面形状は掘り込み途中でくびれをもつ，フラスコ状である。

出土遺物（第180図）

遺物は，土師器の小片８点と青磁１点が出土し，１点を図化した。761は龍泉窯系青磁で，椀の底部である。高台は角高台で，高台から高台内面は露胎する。外面には蓮弁文が描かれる。

土坑19号（第181図）

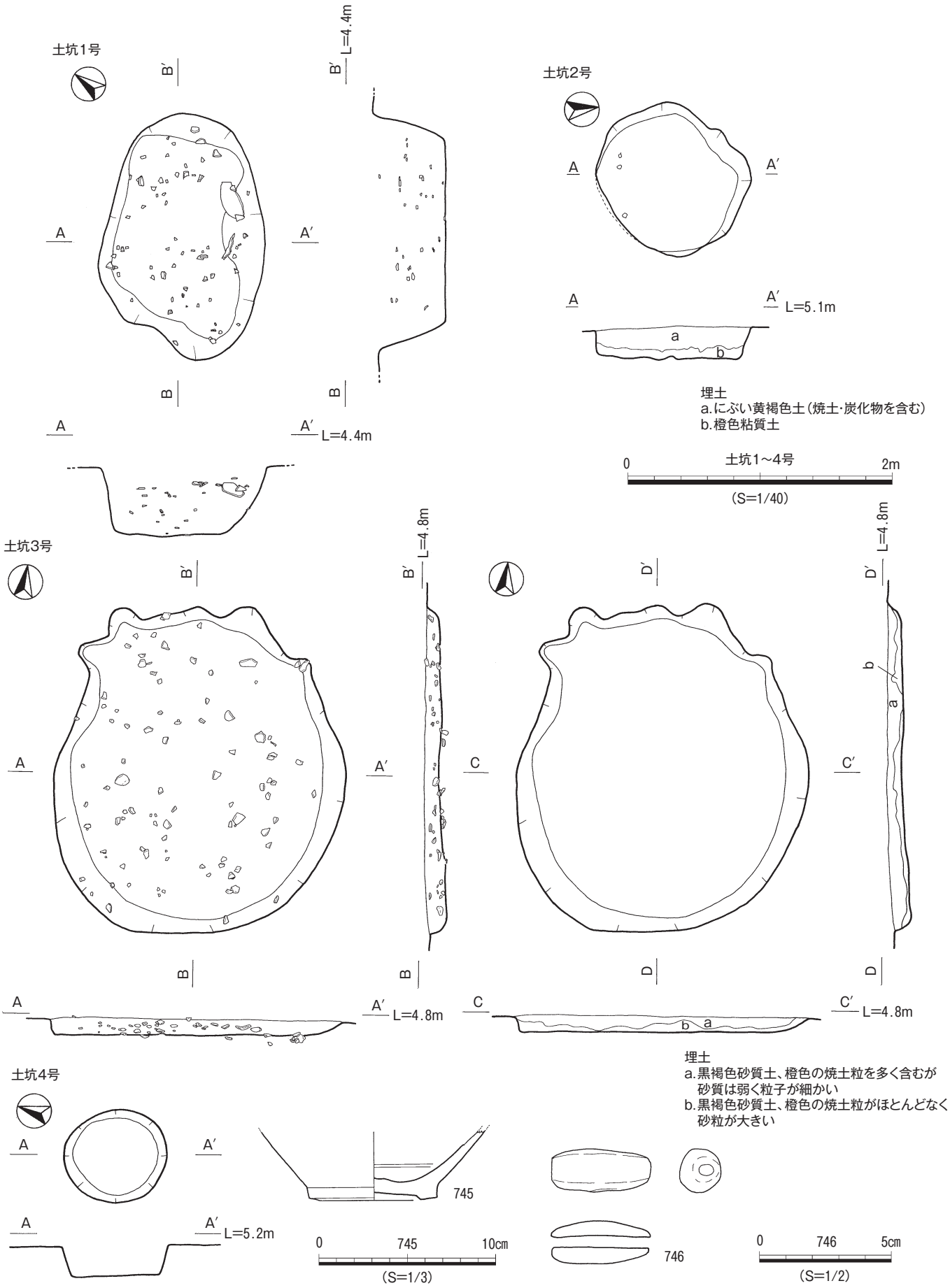
D-15区で検出された。平面形は，長軸1.5m，短軸1.3mの略方形を呈し，底面付近では円形となる。掘り込み途中でわずかに段を有し，検出面からの深さ約1.5mに達する。化学分析の結果，土坑内に人骨等のあった可能性が指摘されている。

出土遺物（第181図）

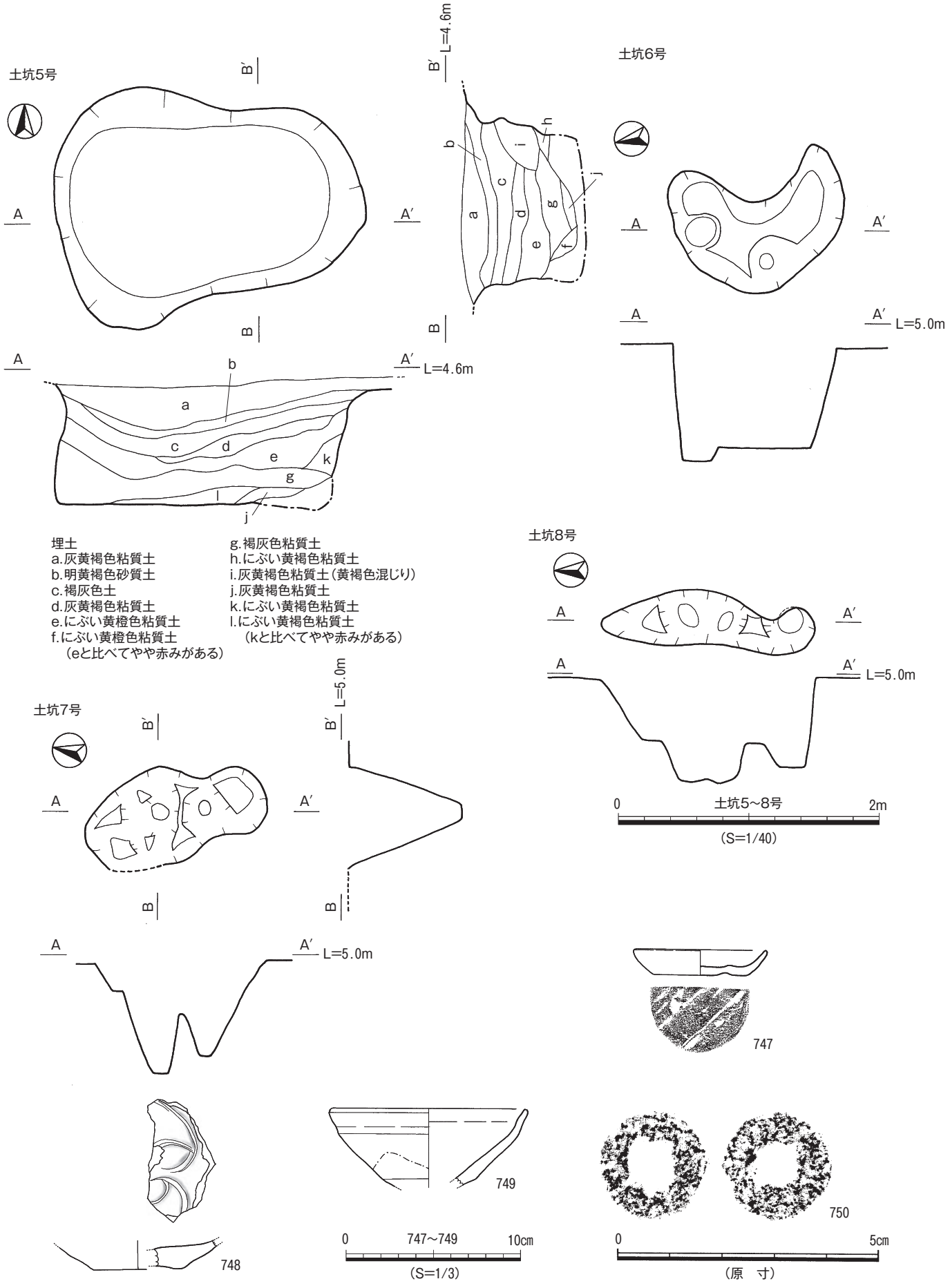
遺物は１点出土した。762は白磁の皿である。灰白色の胎土に白濁した透明釉がかかり，外面腰部以下は露胎する。

土坑20号（第181図）

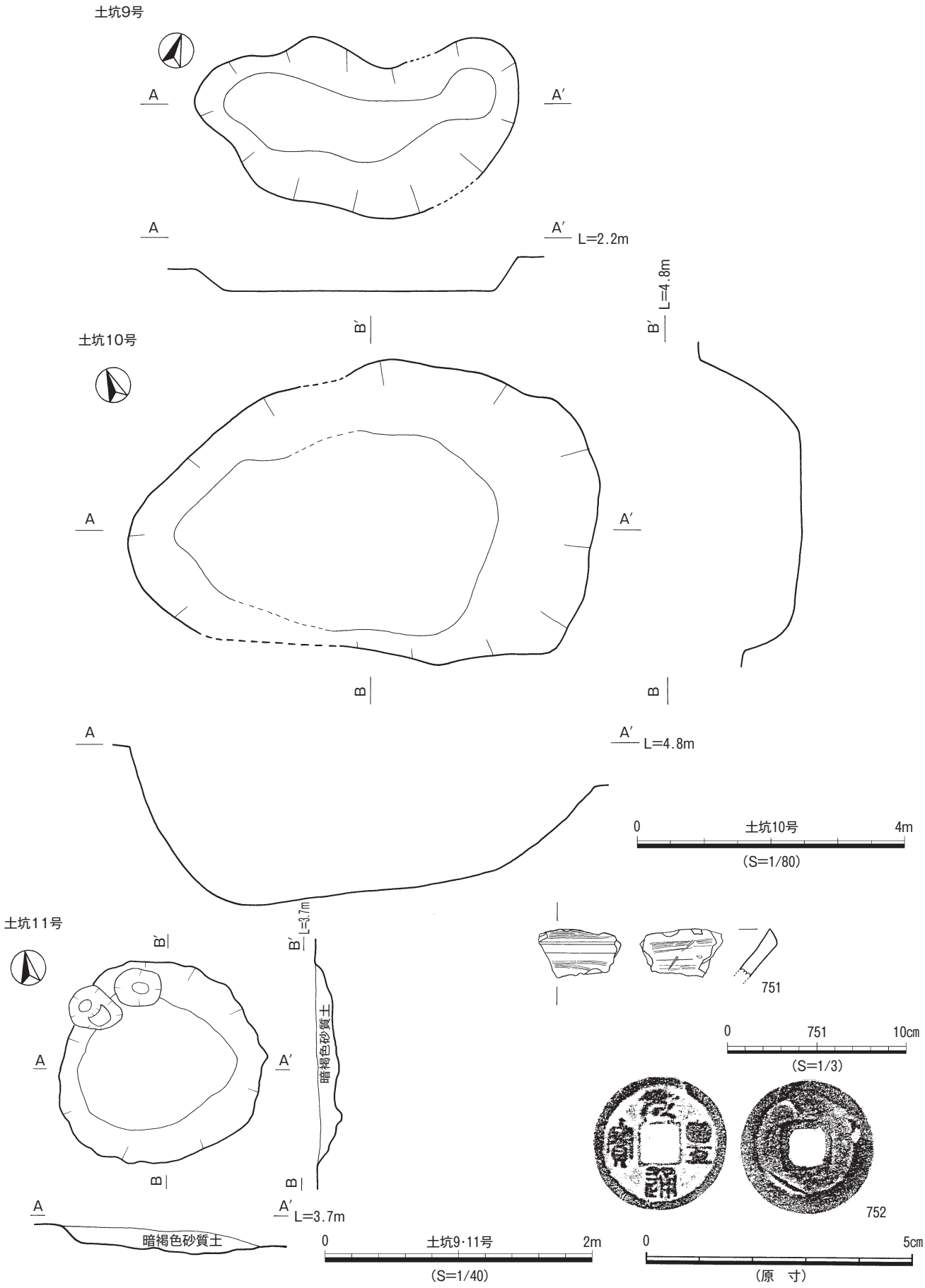
E・F-12区，溝21の下部で検出された。平面形は，長



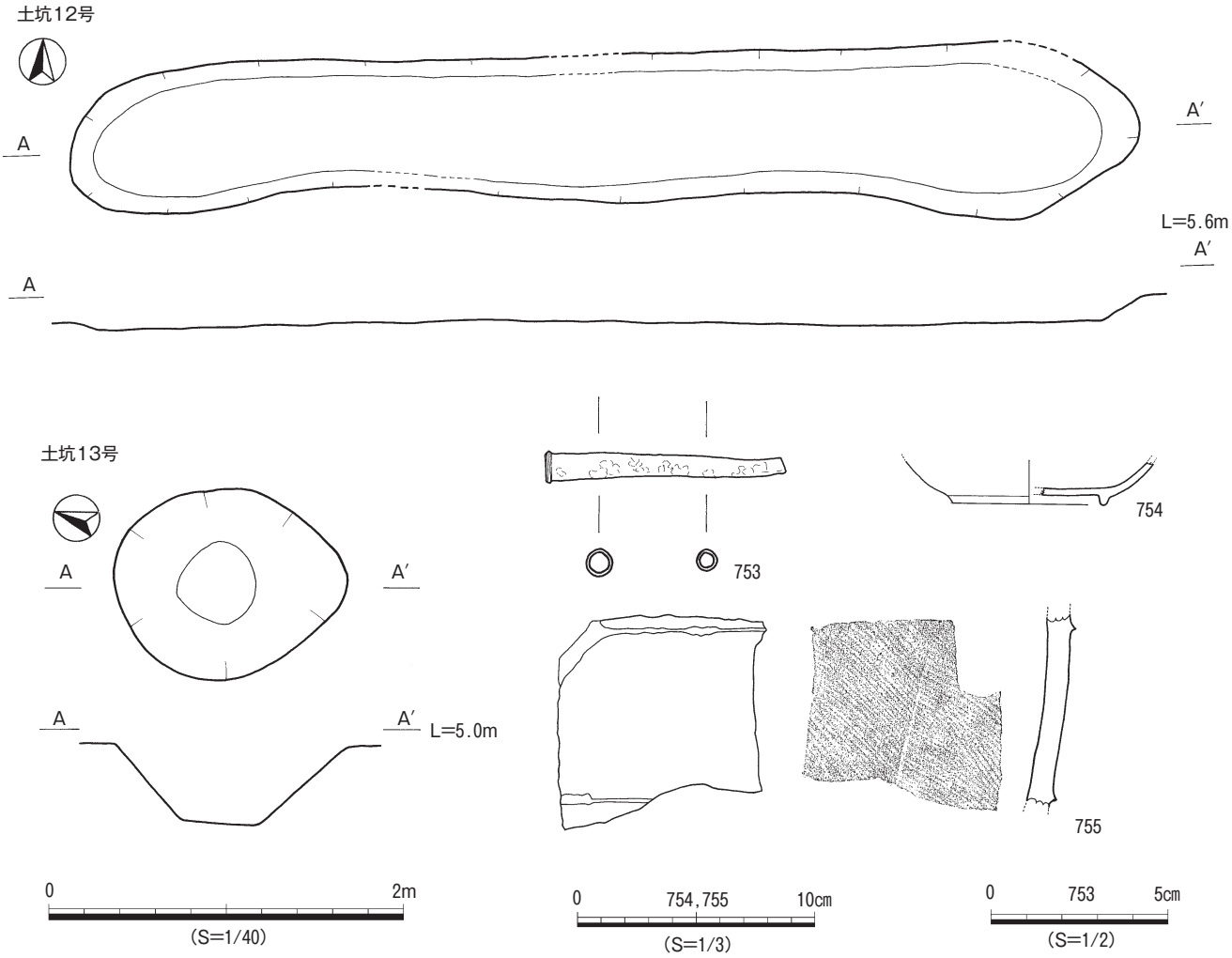
第175図　土坑１～４号・３，４号出土遺物



第176図　土坑５～８号・６，７，８号出土遺物



第177図　土坑９～11号・10，11号出土遺物



第178図　土坑12，13号・出土遺物

軸約1.7m，短軸約1mの略楕円形を呈する。検出面からの深さは約20cmで，底面は皿状になる。遺構中央部付近に，完形の青磁椀，皿が伏せた状態で，床面から20cm浮き上がって出土した。近辺に土坑墓が数基確認されており，墓の可能性が非常に高いと思われるが，人骨等が確認されていないため，土坑として取り扱った。

出土遺物（第181図）

遺物は，龍泉窯系の青磁椀と皿が出土した。どちらも完形品である。763は外面に雷文帯とラマ式蓮弁が描かれたもので，見込みには花文がスタンプされるが，釉が厚くかかるため不明瞭である。畳付から高台内面にかけては露胎する。764は稜花皿である。内外面に唐草文が描かれるが，釉が厚くかかるため不明瞭である。高台内面の釉は輪状に釉剥ぎされる。

土坑21号（第182図）

A・B-11区で検出された。平面形は，長軸約5.7m，短軸約3.5mの台形状を呈する大型の土坑である。検出面からの深さは30cmで，底面は平坦である。竪穴建物跡の可能性も否定できないが，土坑として取り扱った。

土坑22号（第182図）

F-10区で検出された。平面形は，長軸1.4m，短軸0.7mの不定形を呈し，検出面からの深さ約20cmである。底面は平坦である。

出土遺物（第182図）

遺物は，龍泉窯系青磁の椀が２点出土し，そのうち１点を図化した。

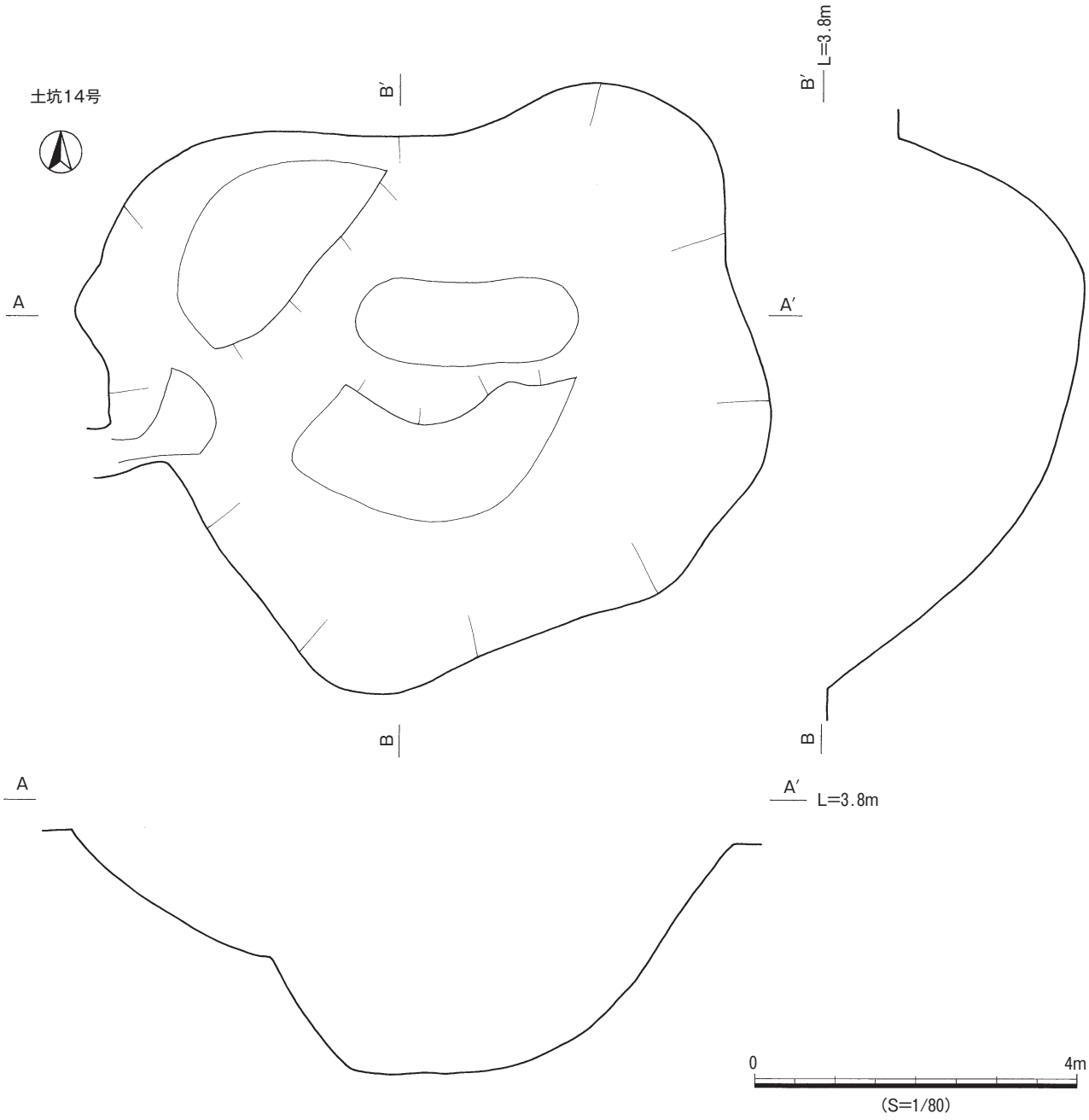
765は口縁部で，外面に幅の狭い蓮弁文が描かれる。

土坑23号（第182図）

G-10区で検出された。平面形は，長軸約１m，短軸約0.4mの楕円形を呈し，検出面からの深さ約30cmである。底面は平坦である。

出土遺物（第182図）

遺物は龍泉窯系青磁の椀が出土した。766は底部である。見込みに片彫りの劃花文が観察される。畳付から高台内面は露胎する。



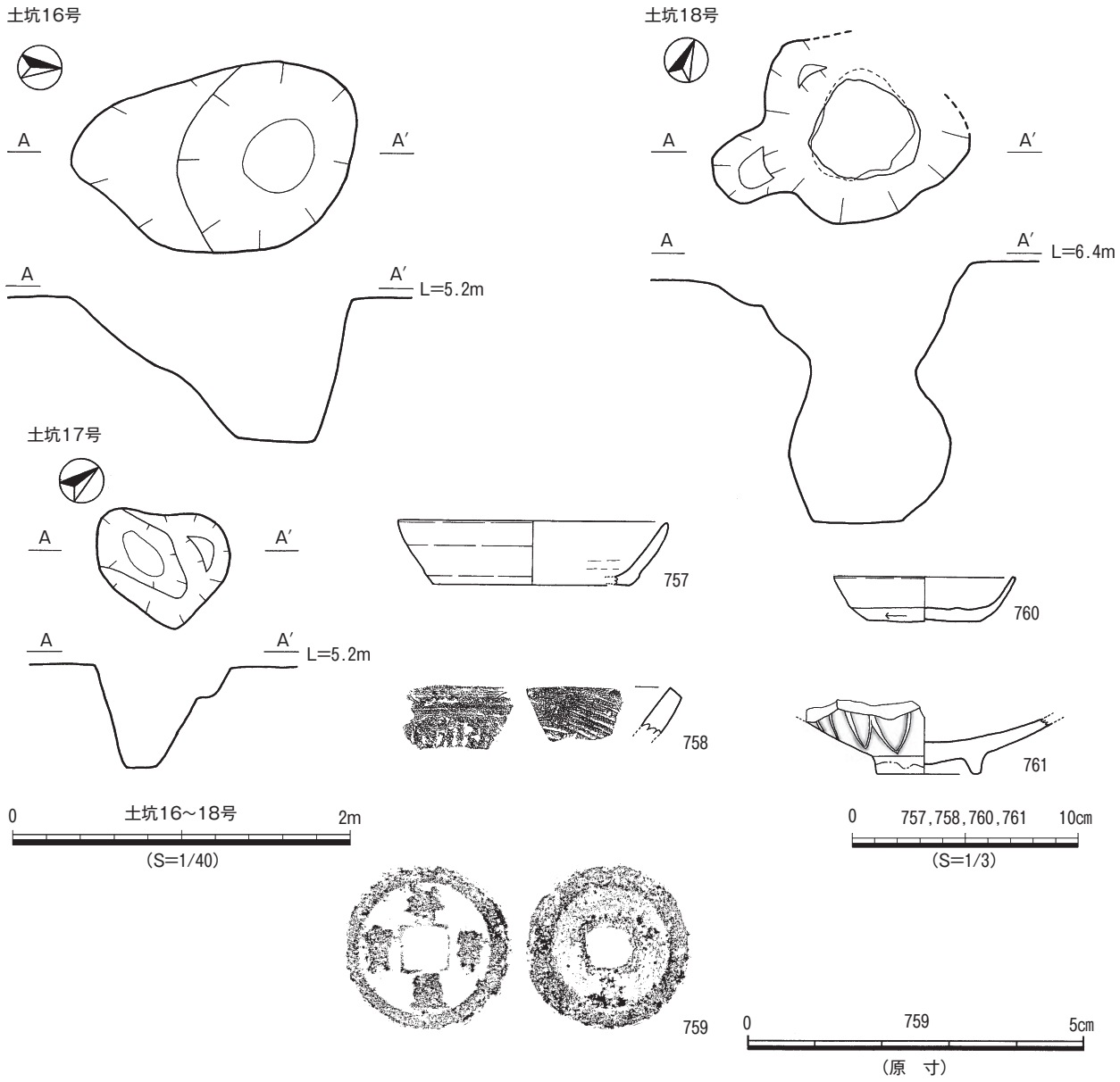
第179図　土坑14，15号・15号出土遺物

土坑墓（第183図～第196図）

土坑墓は，18基検出された。土坑墓は，D・E-13・14区に3基並ぶようなかたちで確認されたものがあるものの，墓域と考えられるような集中はみられず，調査区内に点在する。

土坑墓１号（第183図）

D-37区で検出された。検出時点がほぼ床面で，断面の記録は残されていない。遺構南側は，河川の流水作用



第180図　土坑16～18号・出土遺物

で攪乱されており消失している。平面形は台形状を呈しているが，本来，南北方向を長軸とする隅丸長方形であったと考える。遺構内からは，銭貨と角釘が出土しており，土坑墓と判断した。

出土遺物（第183図）

767～769は洪武通宝である。

土坑墓２号（第183図）

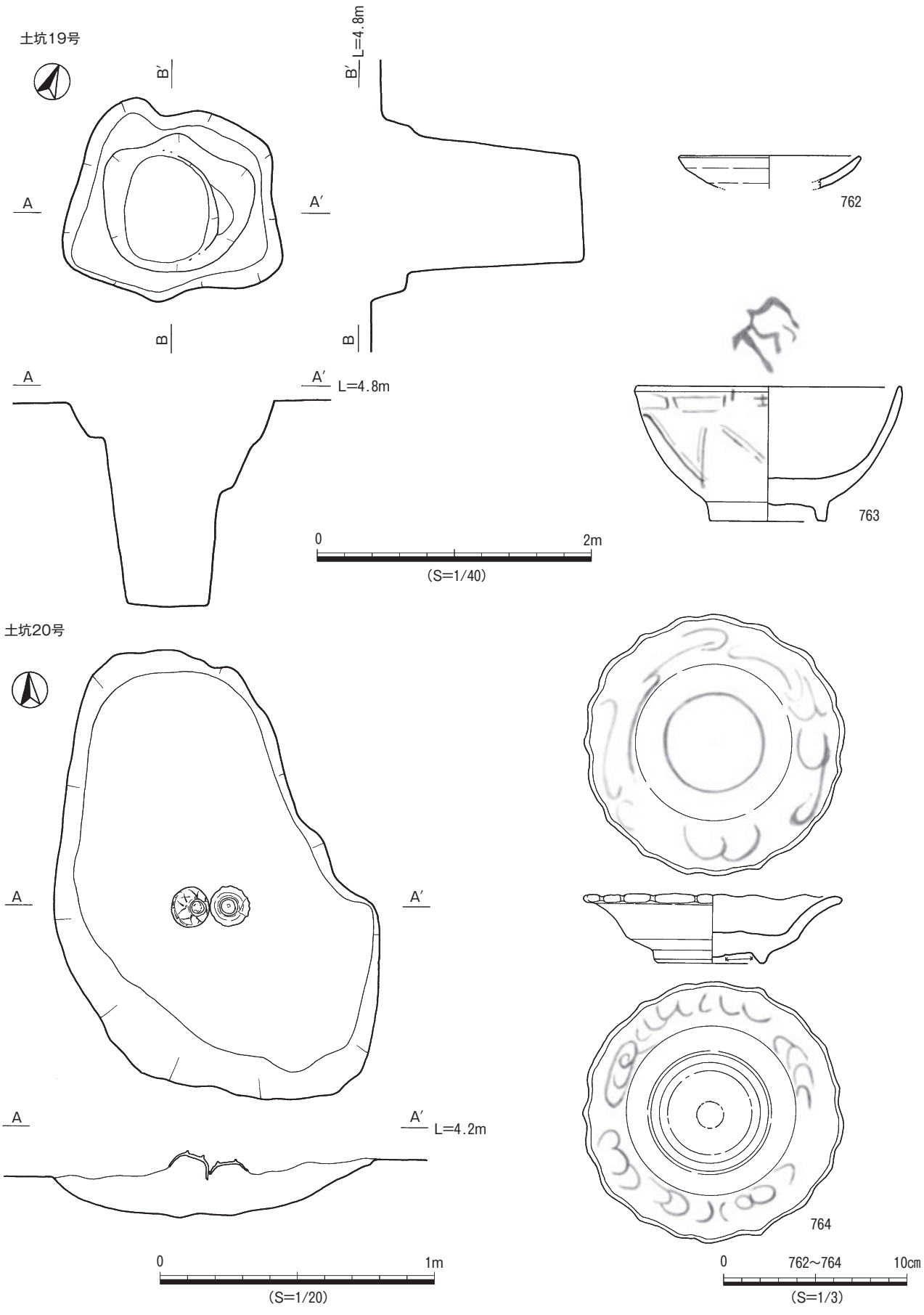
C-33区で検出された。平面形は，長軸0.8m，短軸0.5mで隅丸長方形を呈する。主軸は東に12°振れる。検出面からの深さは13㎝，で上面はかなり削平されていると思われる。埋土内からは銭貨と釘，わずかに人骨片が出土した。木棺墓と判断した。

出土遺物（第183図）

770は２枚重なった状態の洪武通宝で，背に治と読める加治木銭である。また図化できなかったが，同様の小片も出土している。

土坑墓３号（第183図）

B-31区で検出された。平面形は，長軸1.5m，短軸１mの隅丸長方形を呈する。主軸は東に7°振れる。検出面からの深さは30㎝，で上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは，床付近で銭貨，釘，人骨が出土した。人骨の残りはよくない。中央寄りに集中し，頭骨はやや北寄りに，大腿骨は南側に位置することから，座棺であった可能性が高い。



第181図　土坑19，20号・出土遺物

出土遺物（第183図）

771は７枚重なった状態の洪武通宝で，背に治と読める加治木銭である。

土坑墓４号（第184図）

D-31区で検出された。平面形は，長軸2.3m，短軸0.9mの隅丸長方形を呈する。主軸は東に3°振れる。検出面からの深さは40cmで，上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは，銭貨と釘，白磁皿，人骨が出土した。頭骨は北側に，下肢骨が南側に位置し，その周りにほぼ長方形に並ぶように釘が検出された。銭貨は首から，胸付近と考えられる位置に検出され，木棺内に伸展の状態で安置されたものと考えられる。また，白磁皿は，東側釘列と，墓坑壁の間に位置し，木棺外に副葬された可能性が高い。

出土遺物（第184図）

副葬品は，白磁の輪花皿が１点，銭貨が２点出土した。772は産地不明である。内側面には，先端の丸い棒状工具により花びらを描く。見込みは輪状に釉剥ぎされる。銭貨773は錆のため不明である。774は２枚重なった状態の洪武通宝で布付着痕がみられる。

土坑墓５号（第185図）

B-30区で検出された。平面形は，長軸1.9m，短軸1.2mの楕円形を呈する。主軸は東に3°振れる。検出面からの深さは約20cm，で上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは，土師皿２枚と被葬者と考えられる骨粉が検出された。土師皿が遺構内北側に位置することから，北頭位であったと思われる。

出土遺物（第185図）

副葬品は，土師器が２点出土した。775は小皿である。灯明皿であったのか，口縁部の一部にすすが残る，776は坏である。

土坑墓６号（第186図）

D-28区で検出された。平面形は，長軸約1.5m，短軸約1.3mの略方形に若干の張り出しをもつ不定形を呈し，遺構内南側に径80cm前後の掘り込みをもつ。主軸は西に7°振れる。検出面からの深さは35cm前後で，最深部は50cmほどである。埋土内からは人骨を含め，青磁，滑石製品等が出土したが図化には至らなかった。人骨は北頭位で膝をやや屈曲した姿勢と考えられる。

土坑墓７号（第187図）

C-25区で検出された。平面形は，長軸2.2m，短軸1.3mの楕円形を呈する。主軸は東に22°振れる。検出面からの深さは約50cm，で上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは，人骨と白磁皿，銭貨が出土した。頭骨は北寄りに位置し顔が下を向く状態で，下肢骨は膝が屈曲した状態であった。埋葬姿勢はうつ伏せで膝を軽く折り曲げた状態であったと考えられる。

出土遺物（第187図）

副葬品は，白磁の輪花皿が１点と銭貨が出土した。777は口縁端部が外側へ折れるもので，先端は細く尖る。外底面は露胎する。778は洪武通宝で，背に浙と読める。779は洪武通宝で５枚重なった状態での出土である。表以外の４枚は，種別不明である。

土坑墓８号（第188図）

C-25区で検出された。平面形は長軸1.7m，短軸0.8mの隅丸方形を呈する。主軸は東に28°振れる。検出面からの深さは約50cmで，上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは，人骨と銭貨が出土した。頭骨は遺構内北側に位置し，北頭位である。副葬された銭貨には繊維状のものが付着し袋のようなものに入れていた可能性がある。埋葬姿勢については側臥屈葬と考えられる。

出土遺物（第188図）

780は７枚が重なり合った状態で出土した。表裏の1枚ずつは洪武通宝と確認できるが，残り５枚については確認できなかった。

土坑墓９号（第189図）

D-25区で検出された。平面形は長軸1.8m，短軸0.9mの隅丸方形を呈する。主軸は西に4°振れる。検出面からの深さは約60cmで，上面は若干削平されていると思われる。埋土内からは人骨，銭貨，釘が出土している。釘が人骨の周囲に長方形のかたちに並ぶことから木棺であったと考えられる。頭骨が北側，下肢骨が南側に位置する，北頭位である。埋葬姿勢は寝棺内に仰向け，腕と膝を折り曲げた状態である。

出土遺物（第189図）

781～786は洪武通宝で，781は背に文字が書かれるが明瞭でなく，判読が出来ない。782～784は背に治と読める，加治木銭である。785・786は洪武通宝で，786は２枚重なった状態である。

土坑墓10号（第190図）

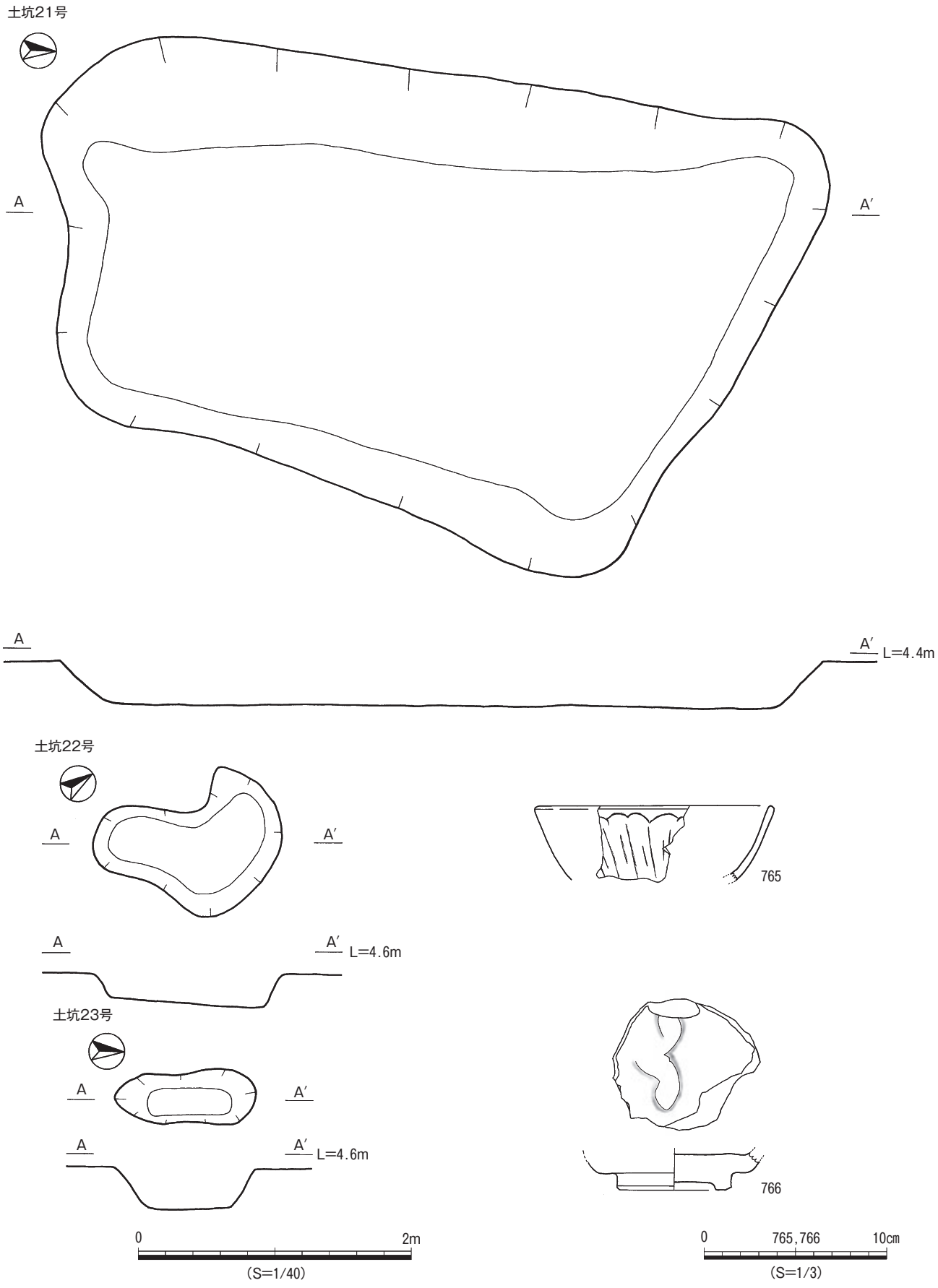
C-24区で検出された。平面形は長軸1.5m，短軸0.8mの楕円形を呈する。主軸は東に10°振れる。検出面からの深さは約30cmで，上面は削平されていると思われる。埋土内からは人骨，銭貨が出土している。頭骨は遺構内北側に位置する。北頭位である。下肢骨は膝を曲げた状態であると考えられる。

出土遺物（第190図）

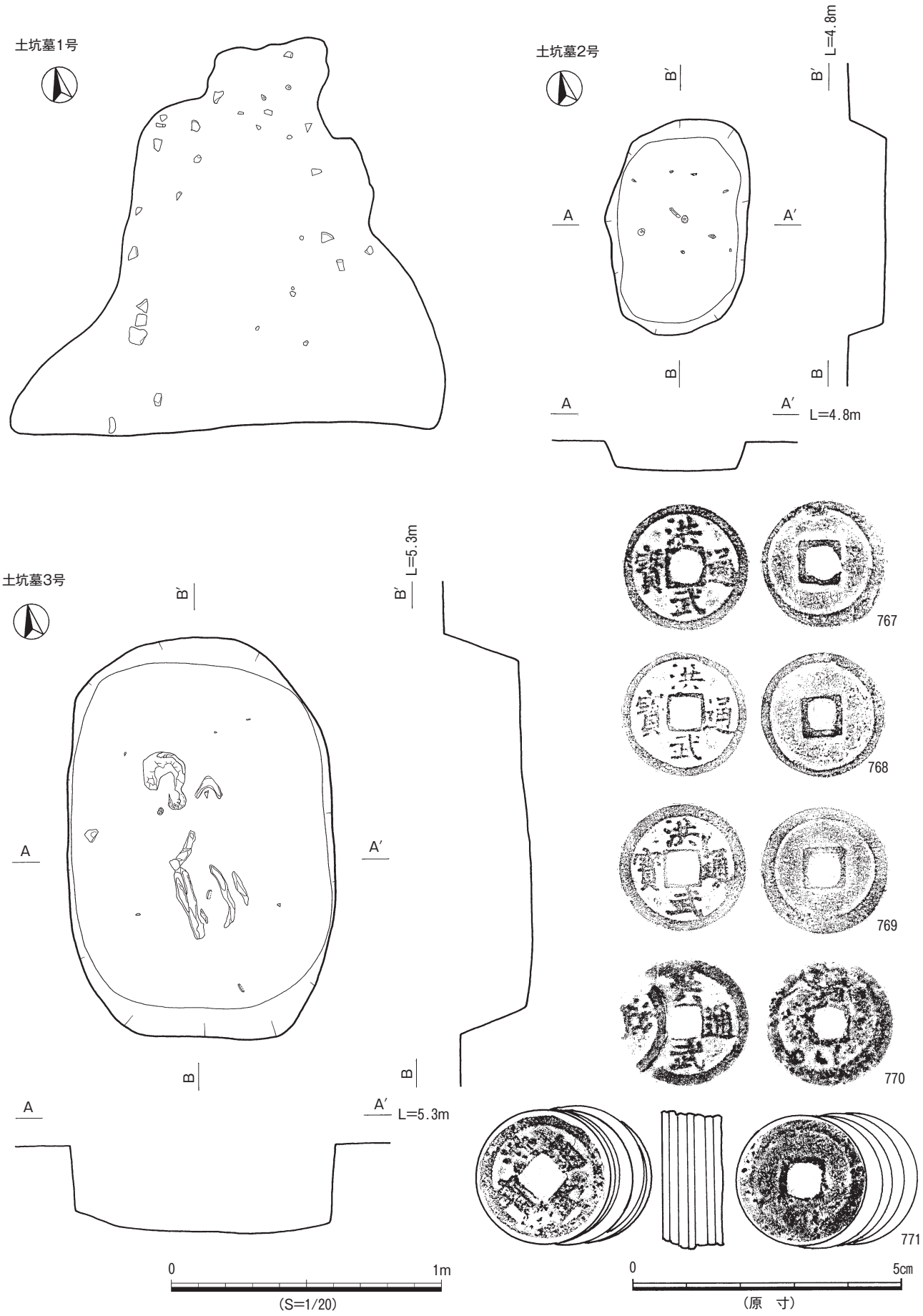
787は，表裏が，洪武通宝，朝鮮通宝で真ん中の１枚は不明で，３枚重なった状態で出土した。788～790は洪武通宝で，789は２枚重なった状態である。

土坑墓11号（第191図）

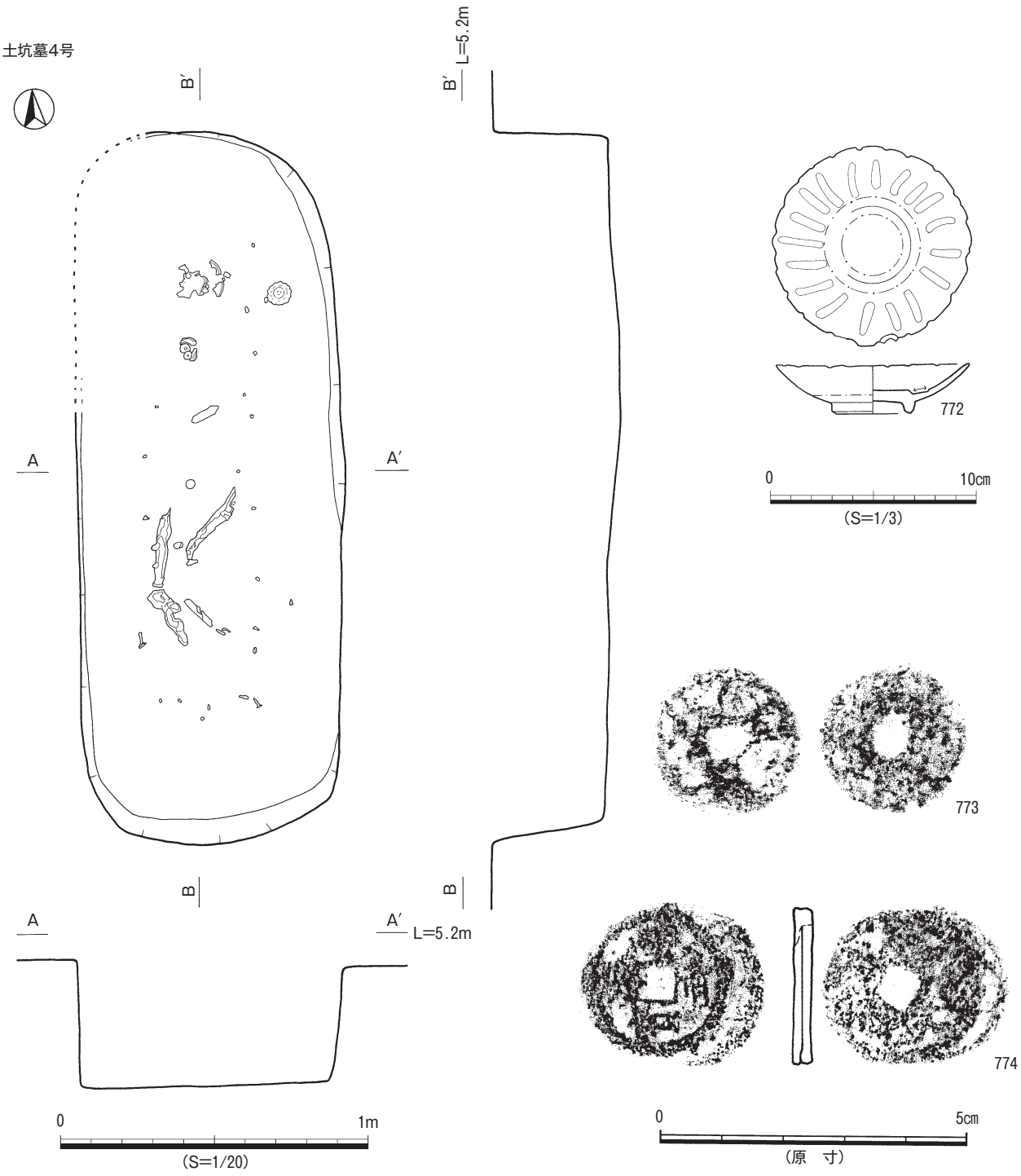
A-22区で検出された。平面形は，径約1.3mの円形を呈する。検出面からの深さは約70cm，である。埋土内からは，床面から35cmほど上位で銭貨が出土した。人骨は検出されず，埋葬姿勢などは不明である。



第182図　土坑21～23号・22，23号出土遺物



第183図　土坑墓１～３号・出土遺物



第184図　土坑墓４号・出土遺物

出土遺物（第191図）

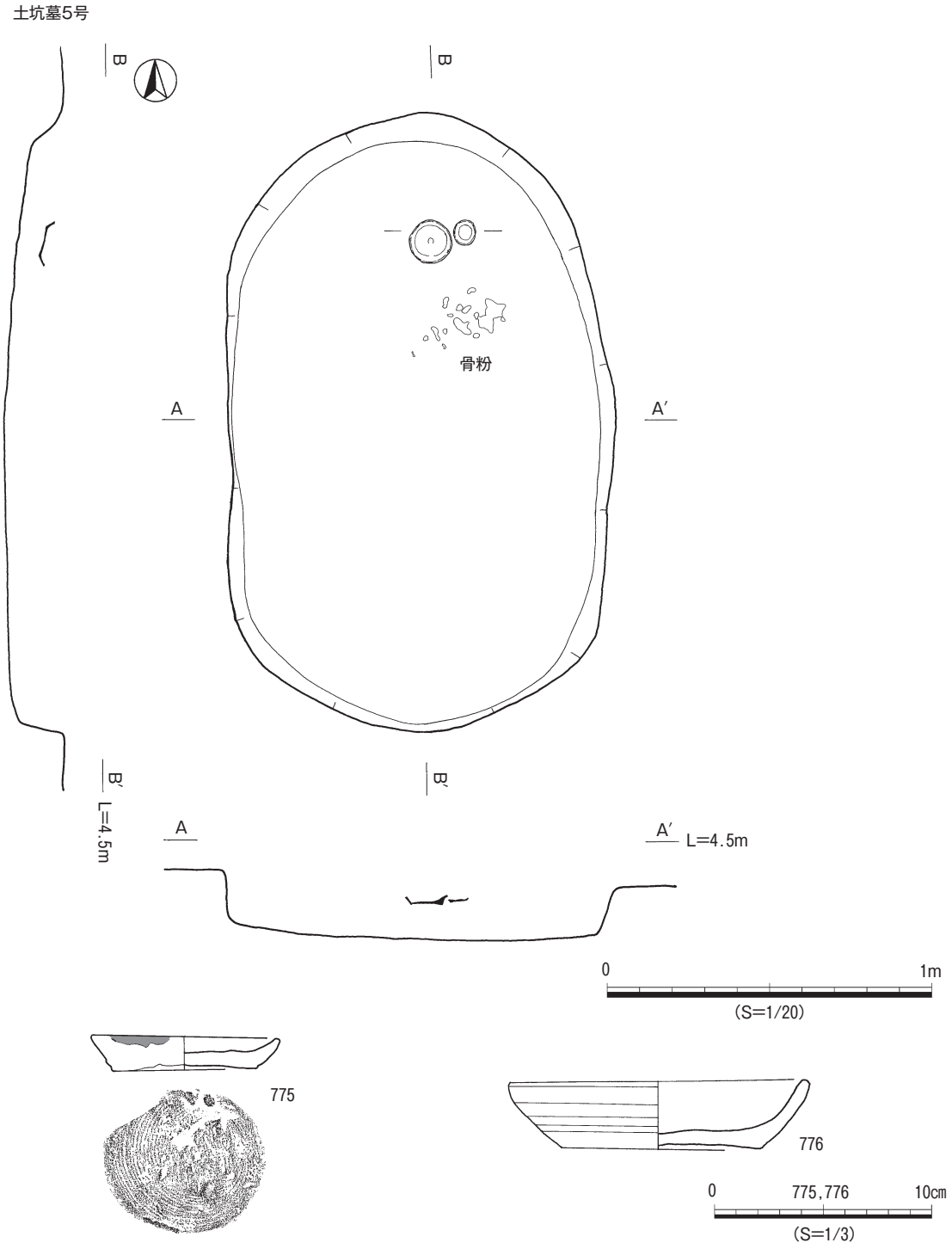
銭貨は全部で12枚出土し，内10枚を掲載した。792を除き洪武通宝と確認できる。792は３枚重なり，表裏が背のため確認できない。

土坑墓12号（第192図）

A-18区で検出された。平面形は，径約1.1mの略円形を呈する。検出面からの深さは40㎝前後である。上面は溝17により削平されている。埋土内からは人骨と銭貨が出土した。頭骨が遺構内中心付近に位置する。埋葬姿勢については不明である。

出土遺物（第192図）

６枚の銭貨が出土した。801は鉄銭で３枚が重なっている。802・803は洪武通宝である。１点は小片のため図化できなかった。



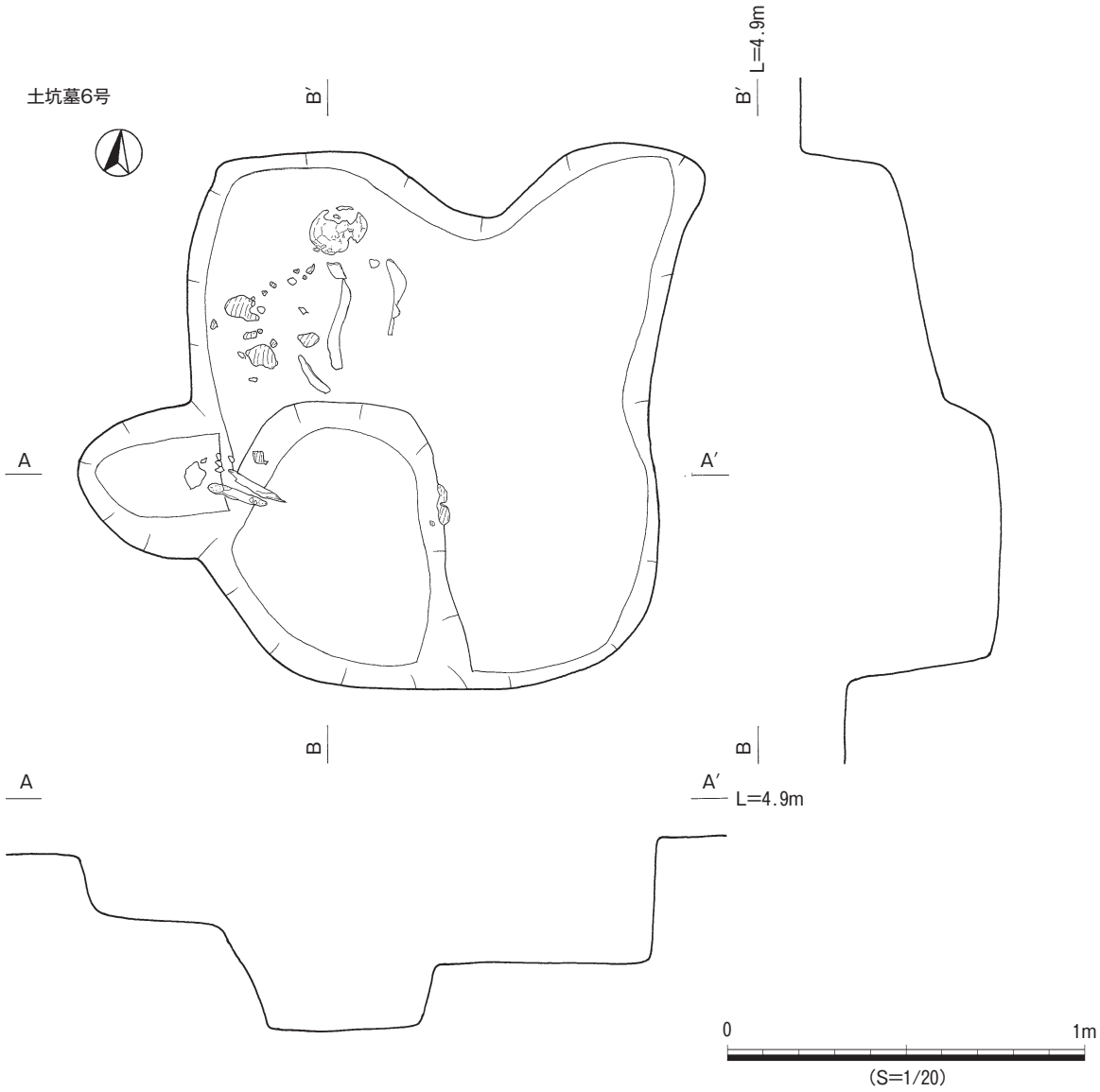
第185図　土坑墓５号・出土遺物

土坑墓13号（第192図）

E-14区で検出された。遺構は攪乱により南側の大部分を消失している。残存部で長軸75㎝前後，短軸65㎝で，南北方向が主軸と考えられる。遺構内北側に頭骨が位置することから，南北方向に延びる楕円形の平面形が想定される。検出面からの深さは30㎝程度である。上面についても削平されていると思われる。埋土内からは，人骨のほかに，銭貨が出土している。

出土遺物（第192図）

７枚の銭貨が出土した。804は２枚重なったもので，表裏が背のため種別は不明である。805は４枚重なっており表の朝鮮通宝のみ確認できる。806は洪武通宝である。



第186図　土坑墓６号

土坑墓14号（第193図）

D-13区で検出された。近世の溝７の下から検出され，遺構上面は流失している。半裁調査したため遺構半分の記録は残っていない。残存部で長軸約５m，短軸1.9m，深さ１mで，遺構平面形は想定できない。埋土内からは銭貨，青磁坏が出土した。人骨は遺構上面約30cmから検出された。後世の流水作用により浮き上がった可能性が考えられる。

出土遺物（第193図）

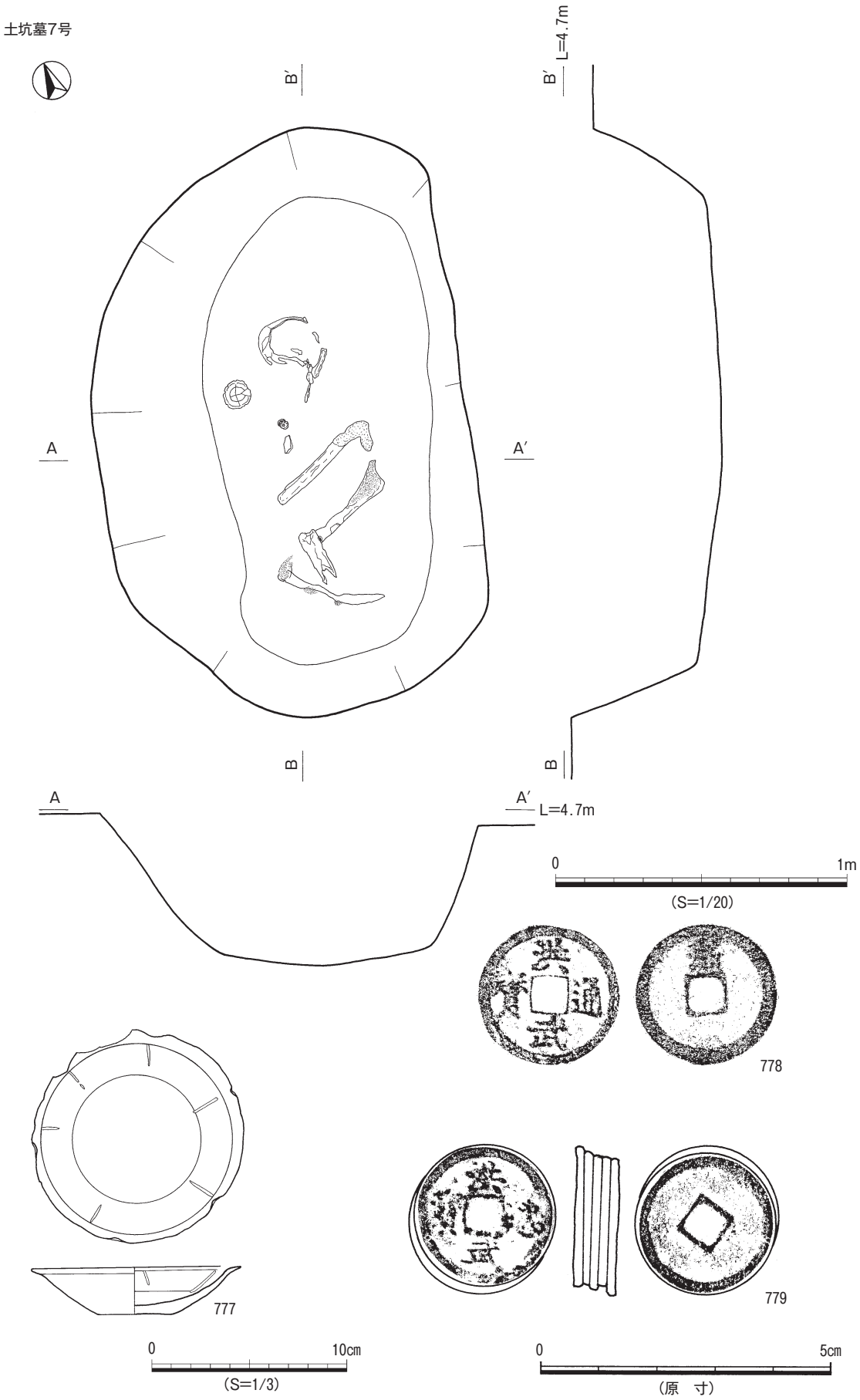
副葬品２点出土した。807は龍泉窯系青磁の坏で，口縁端部は外方向に短く屈曲し，上面はやや凹むが，施釉により平坦となる。808は政和通宝である。

土坑墓15号（第193図）

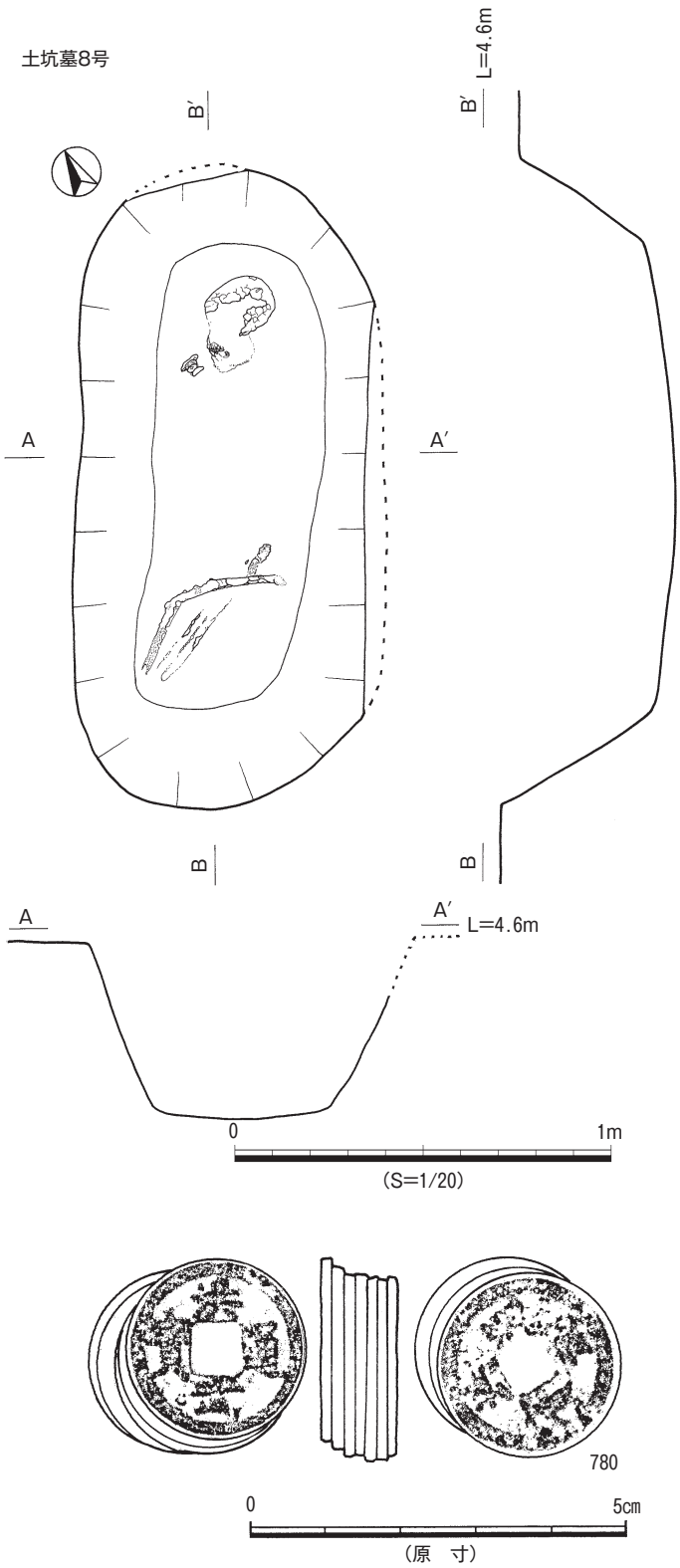
D-13区で検出された。14号同様，遺構上面は流失している。半裁調査したため遺構半分の記録は残っていない。残存部で長軸約4.4m，短軸約1.9m，深さ70cmである。遺構平面形は想定できない。遺構上面約30cmに人骨が検出された。後世の流水作用により浮き上がった可能性が考えられる。

土坑墓16号（第194図）

G-11区で検出された。平面形は，長軸1.6m，短軸1.4mの楕円形を呈する。主軸は東に13°振れる。検出面からの深さは約30cmで，上面は削平されていると思われる。埋土内からは人骨と銭貨，釘が検出された。頭骨は遺構内北側に位置し，南側に下肢骨がみられる。また，釘も人骨の周囲に長方形に並ぶことから，寝棺による埋葬が想定される。埋葬姿勢に付いてまでは言及できない。



第187図　土坑墓７号・出土遺物



第188図　土坑墓８号・出土遺物

出土遺物（第194図）

７枚の銭貨が出土した。809は３枚重なった状態で，表裏に洪武通宝が確認でき，真ん中の1枚は不明である。810～812は洪武通宝で，背に治と読める。813のみ不明瞭である。

土坑墓17号（第195図）

F・G-9区で検出された。平面形は，長軸2.1m，短軸1.3mの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは約45cmである。上面は削平されていると思われる。主軸はほぼ北である。遺構内からは人骨，銭貨，土師皿などが出土している。頭骨は遺構内北側に位置し北頭位であったことが伺える。また人骨周辺に長方形に並んで釘が検出されていることから，寝棺による埋葬であったと思われる。土師皿については完形で，釘列の外側での出土であることから棺外に副葬された可能性が高い。

出土遺物（第195図）

副葬品は，土師器２点と青花１点銭貨が７枚が出土した。814は小皿である。側面に直径５㎜程度の穿孔が２か所穿かれている。815は坏である。底面が楕円形状に歪む。内面は煤と思われる黒色の汚れが観察される。816は漳州窯系の青花の碗と思われる。高台部分は欠損している。817は５枚重なった状態で，表のみ洪武通宝が確認できる。818は２枚重なった状態で，表のみ洪武通宝と確認できる。

土坑墓18号（第196図）

F-5・6区で検出された。遺構北側は削平により失われている。平面形は，長軸1.7m以上，短軸１mの隅丸方形を呈すると推測される。検出面からの深さは約10cmで，上面はかなり削平されている。主軸は西に16°振れる。遺構埋土内からは人骨，銭貨，土器片が出土している。遺構内北側に頭骨が位置することから北頭位であったことが伺える。また，人骨周囲に長方形に釘が並んで検出されることから寝棺による埋葬であったと考えられる。埋葬姿勢は不明である。土器片については小片のため図化できなかった。

出土遺物（第196図）

819・820は洪武通宝である。

礫，土器集積遺構（第197図）

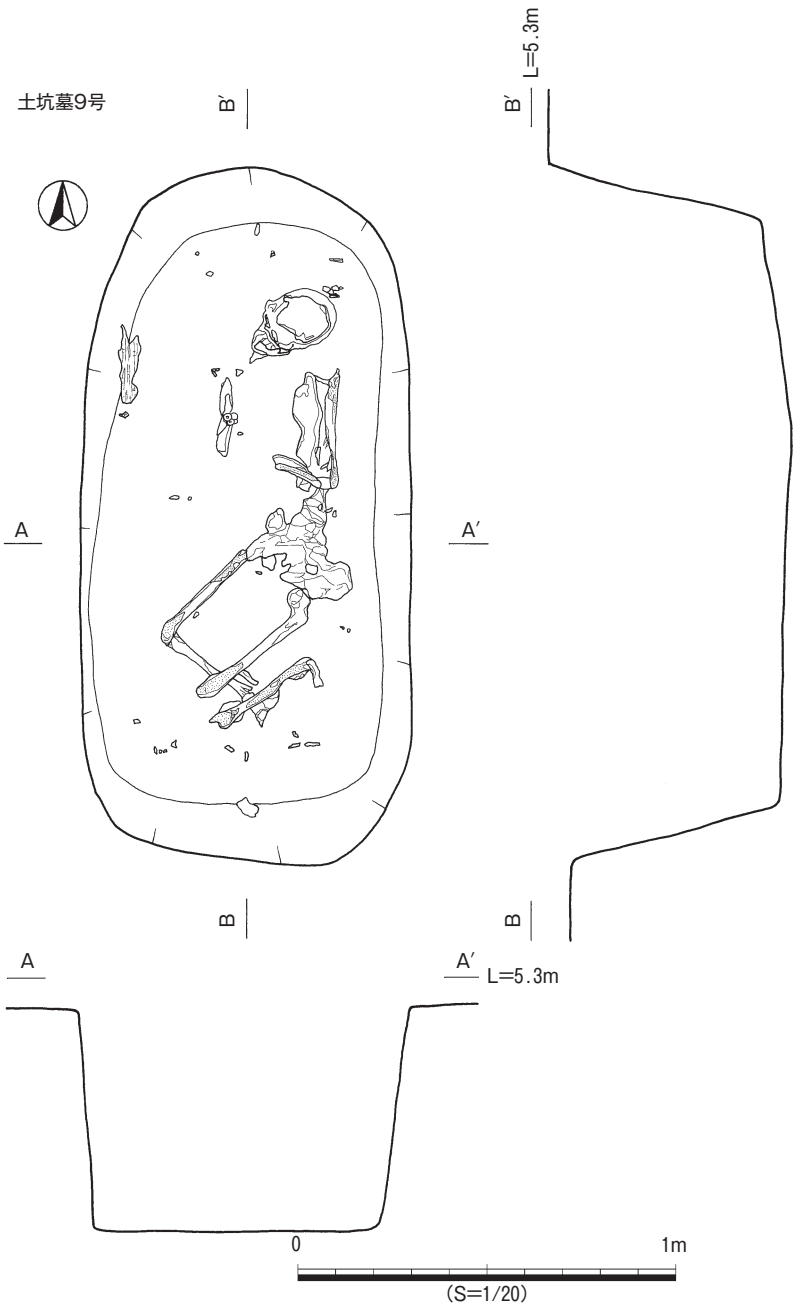
D-18区で検出された。およそ4.5m×４mの範囲に礫，土器片が集中する。また，わずかに鉄滓も混じる。遺構南東の集中部には径約80cm，深さ20cm程の掘り込みがみられ滑石製石鍋が出土している。

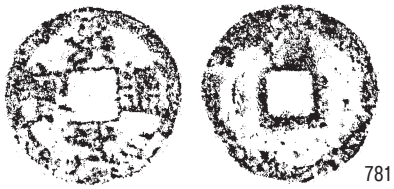
ピット（第198図）

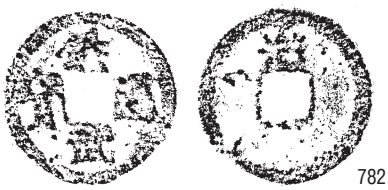
ピットは，調査区内全域に多数検出された。その内遺構内に根石，礫などが確認できたものについて図化し掲載した。また，掲載可能な遺物が出土したものについては，遺構配置図中に遺構番号を付して表示し，遺物のみ掲載した。

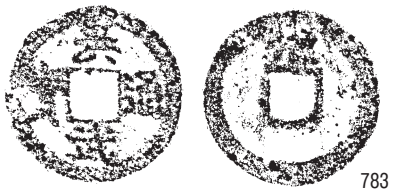
ピット１号（第198図）

B-34区で検出された。直径約50cmの円形で検出面か



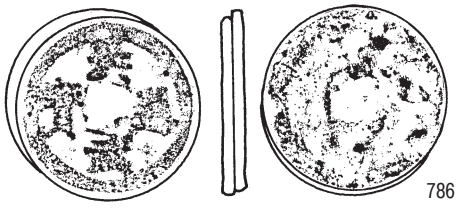

781


782


783


784


785


786

0 5cm
（原　寸）

第189図　土坑墓９号・出土遺物

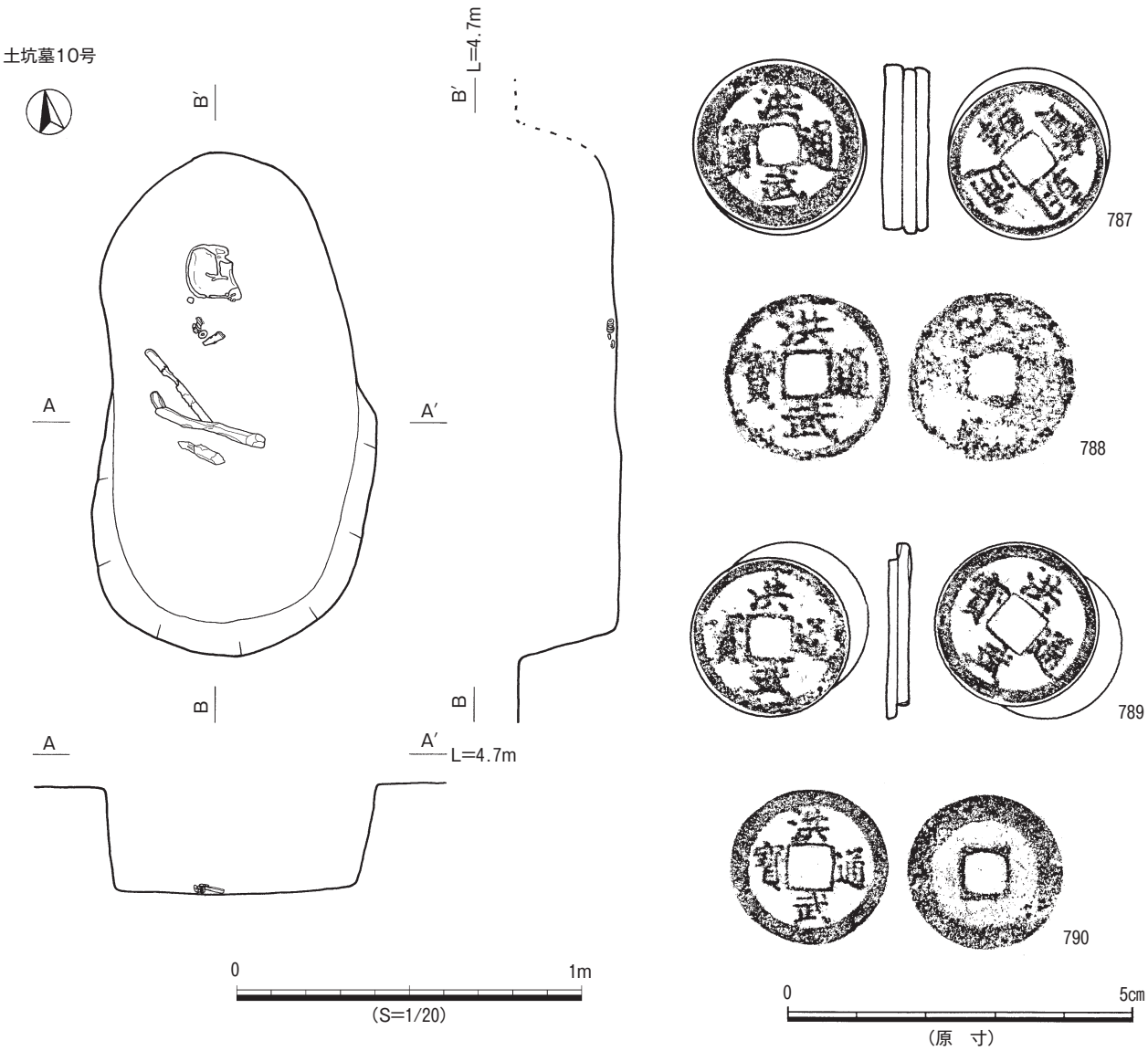
らの深さ30cmである。底面に突き刺さるようなかたちで軽石が検出され，その上位に陶磁器片がのっている。軽石下にはさらに径20cm，深さ40cmの掘り込みが確認された。

ピット２号（第198図）

D-20区で検出された。平面形は，直径約50cmの円形で，検出面からの深さ約40cmである。底面に接するかたちで，小型のやや扁平な礫が置かれている。礎石の可能性が考えられるが，建物の柱配置復元には至らなかった。

ピット３号（第198図）

C-20区で検出された。平面形は，長軸約65cm，短軸約50cmの楕円形を呈し，検出面からの深さ約45cmである。約20cm隣にはピット４号が存在する。底面から５～10cm



第190図　土坑墓10号・出土遺物

上位に礫が検出された。底面には２カ所のわずかな凹みが確認できる。礫の入り込み方は，根固めの状況を想起させる。建物の柱配置復元には至らなかった。

ピット４号（第198図）

C-20区で検出された。平面形は，径約70㎝の円形を呈する。検出面からの深さは約60㎝で，底面に接するかたちで礫が検出された。礫は小ぶりであるが，礎石の可能性が考えられる。しかし，建物の柱配置復元には至らなかった。

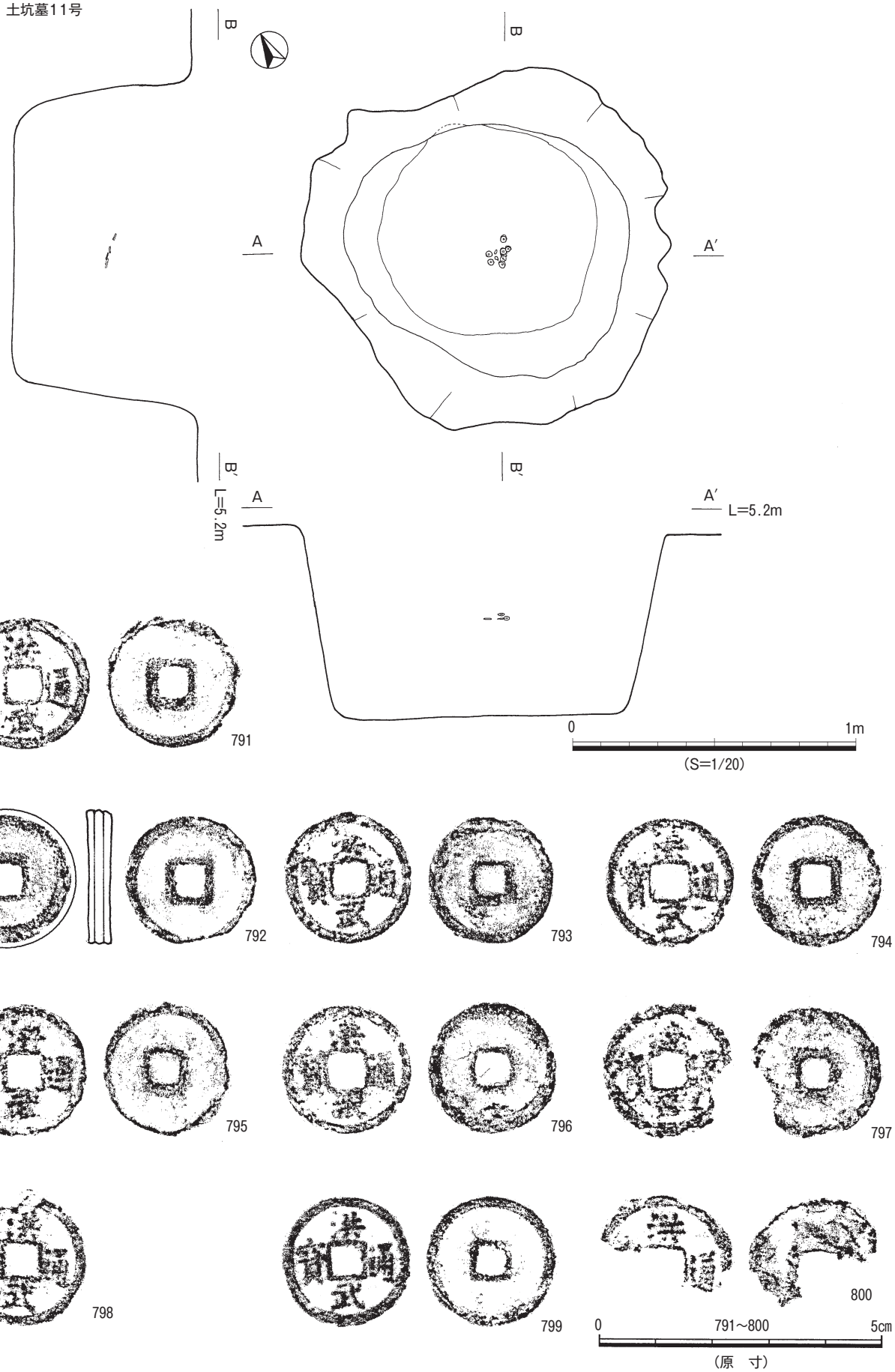
ピット５号（第198図）

D-15区で検出された。平面形は長軸約80㎝，短軸約45㎝の楕円形を呈し，やや北側に偏る底部では径25㎝の円形にすぼまる。遺構内には底面から40㎝付近から小型の礫が5段積み重ねられている。柱のぐらつきを押さえる根固めの礫と考えられる。しかし，建物の柱配置復元には至らなかった。

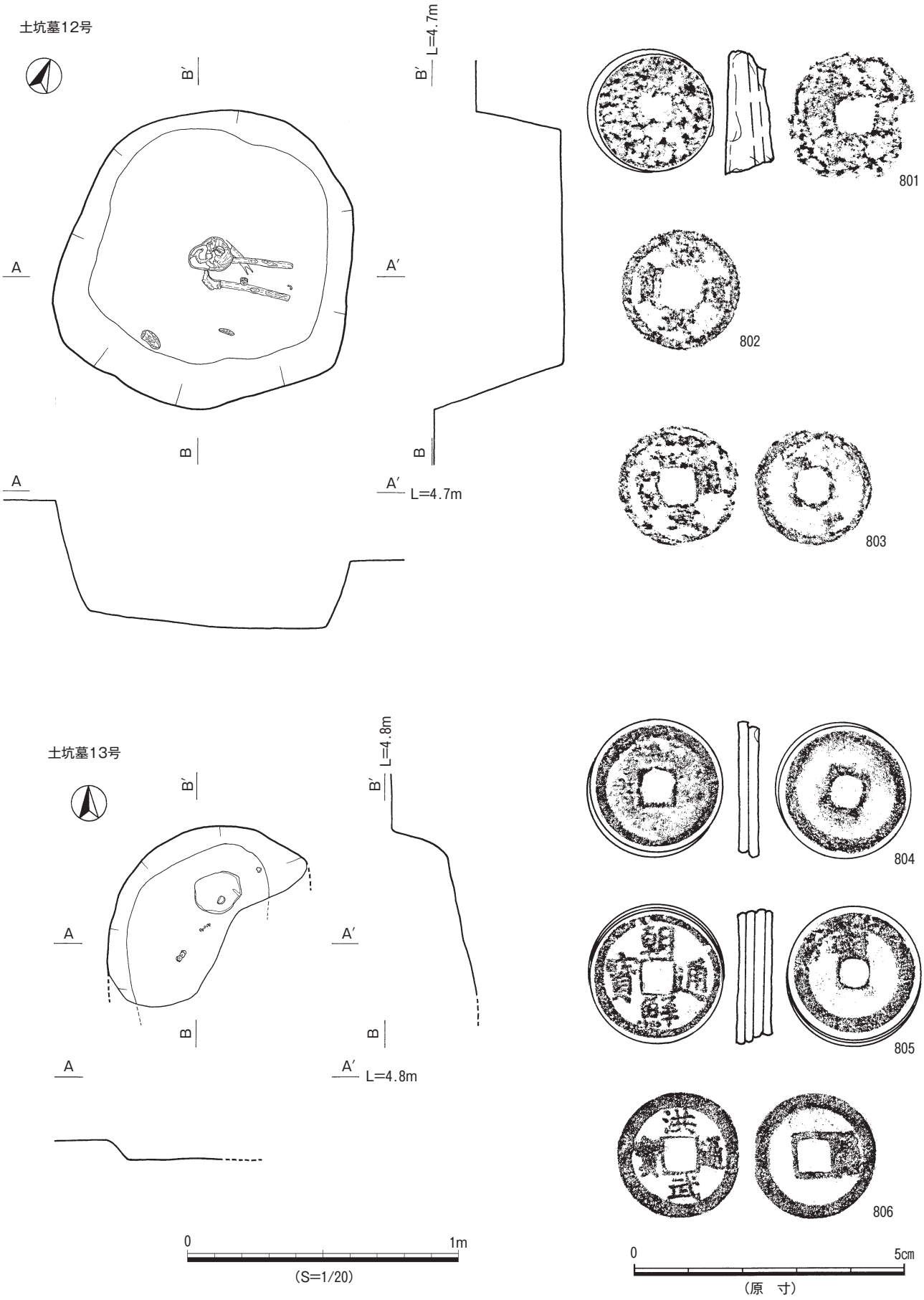
ピット内出土遺物（第199図～201図）

ピット６号（第99図・第199図）

B-31区で検出された。白磁の椀が４点が出土した。822は口縁部で，玉縁口縁を呈するものである。825は胴部である。内面に短い櫛目文が描かれる。822・825の２点については小片のため流れ込みの可能性も考えられる。823は口縁端部が外側に強く屈曲し，端部内面に稜を有するものである。内外面とも無文で，内面口縁下位と見込みに細い沈線が巡る。高台は足高高台である。824は口縁が直口する形状のものである。見込みは段を有し，輪状に釉を剥ぎ取る。

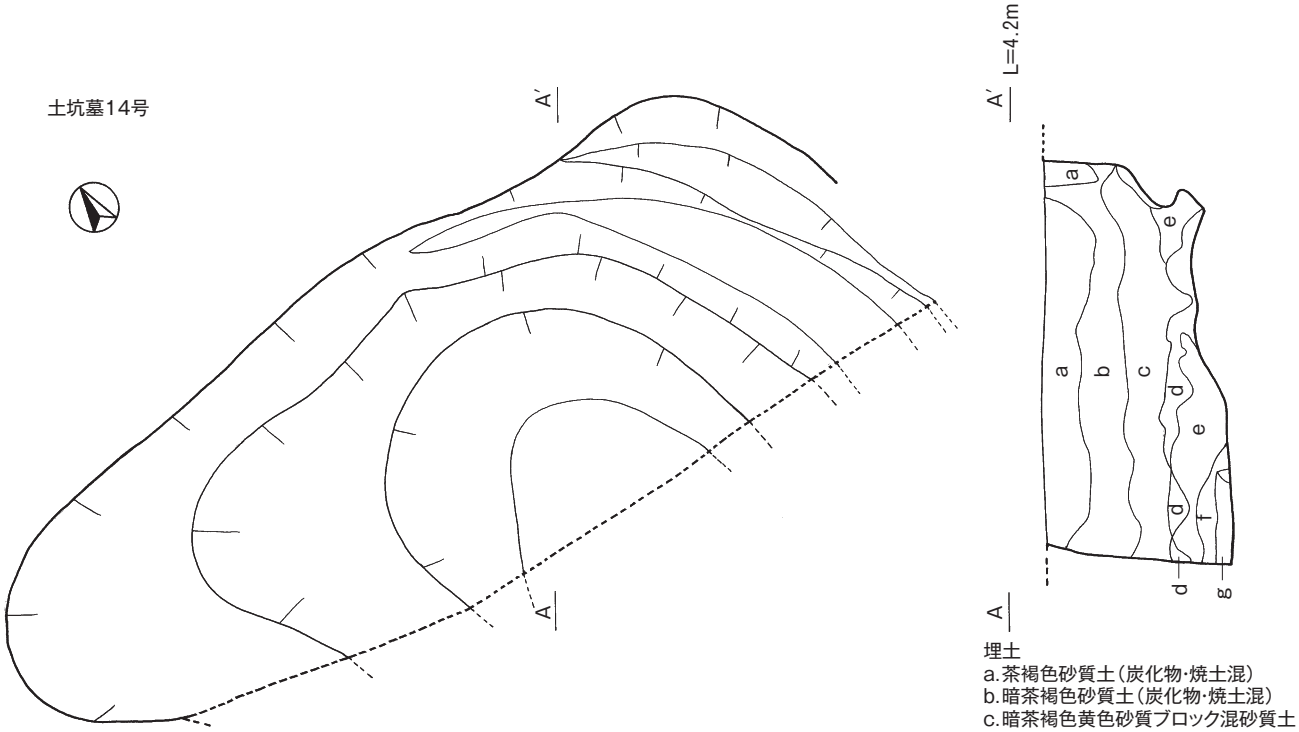


第191図　土坑墓11号・出土遺物



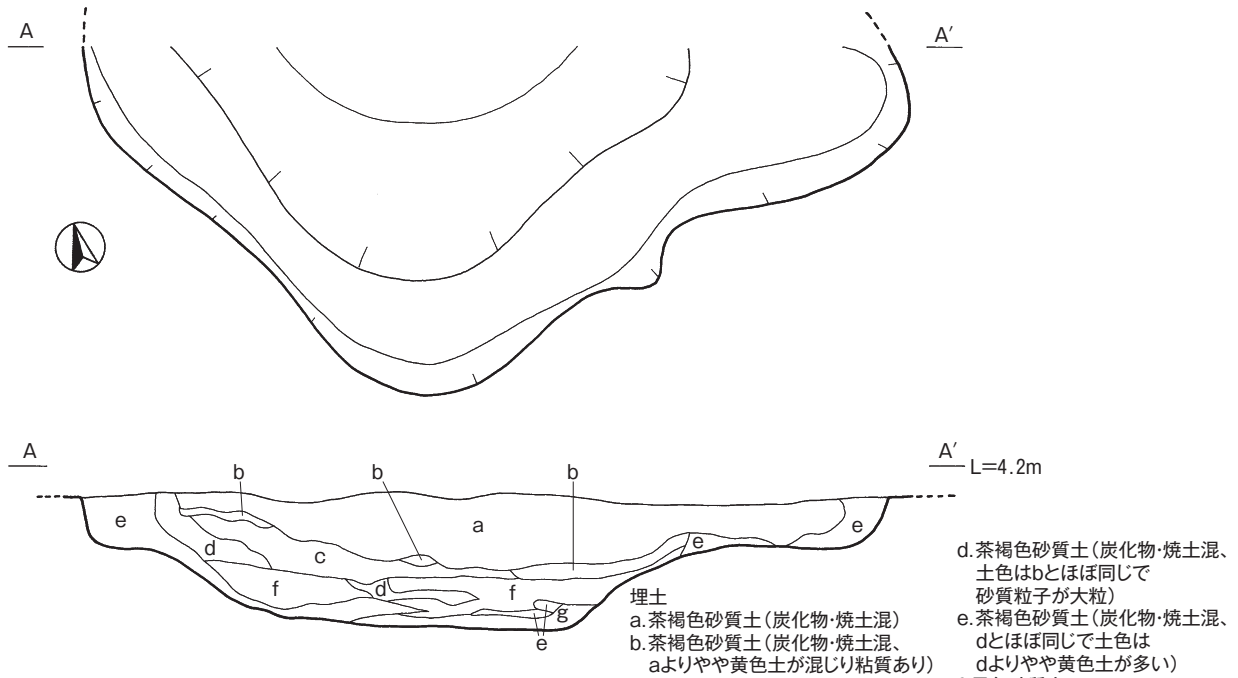
第192図　土坑墓12，13号・出土遺物

土坑墓14号

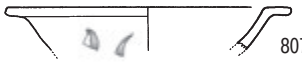


埋土
a.茶褐色砂質土（炭化物･焼土混）
b.暗茶褐色砂質土（炭化物･焼土混）
c.暗茶褐色黄色砂質ブロック混砂質土
d.黄色砂質土
e.暗茶褐色黄色砂質ブロック混砂質土
f.暗褐色砂質土
g.暗茶褐色砂質土

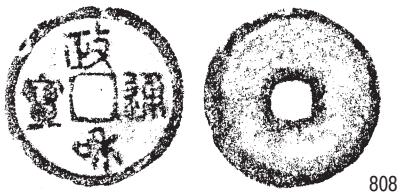
土坑墓15号



埋土
a.茶褐色砂質土（炭化物･焼土混）
b.茶褐色砂質土（炭化物･焼土混、
aよりやや黄色土が混じり粘質あり）
c.茶褐色砂質土
（aより炭化物･焼土が大粒）
d.茶褐色砂質土（炭化物･焼土混、
土色はbとほぼ同じで
砂質粒子が大粒）
e.茶褐色砂質土（炭化物･焼土混、
dとほぼ同じで土色は
dよりやや黄色土が多い）
f.黒色砂質土
g.黄褐色砂質土


807

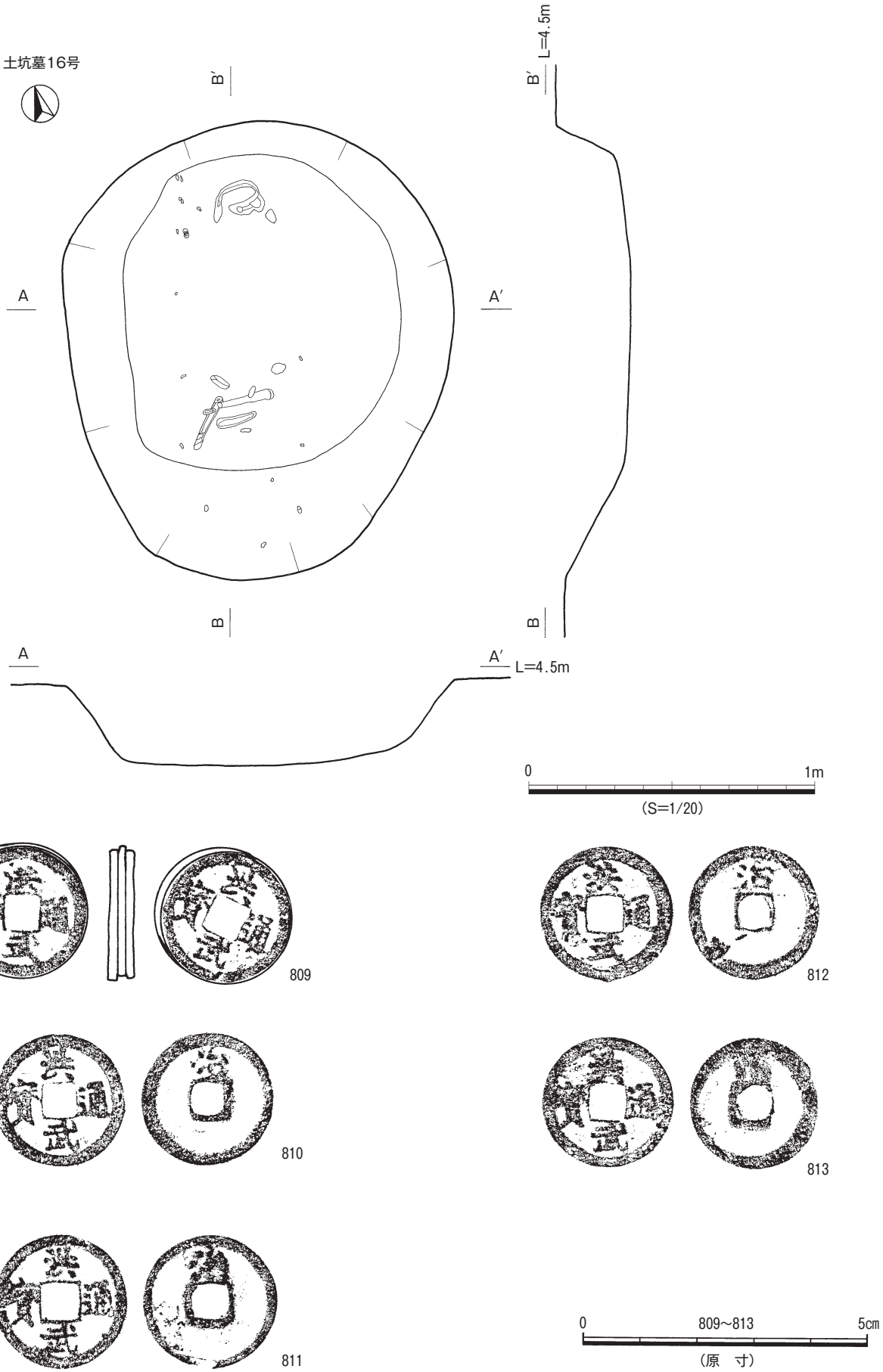
0 10cm
(S=1/3)



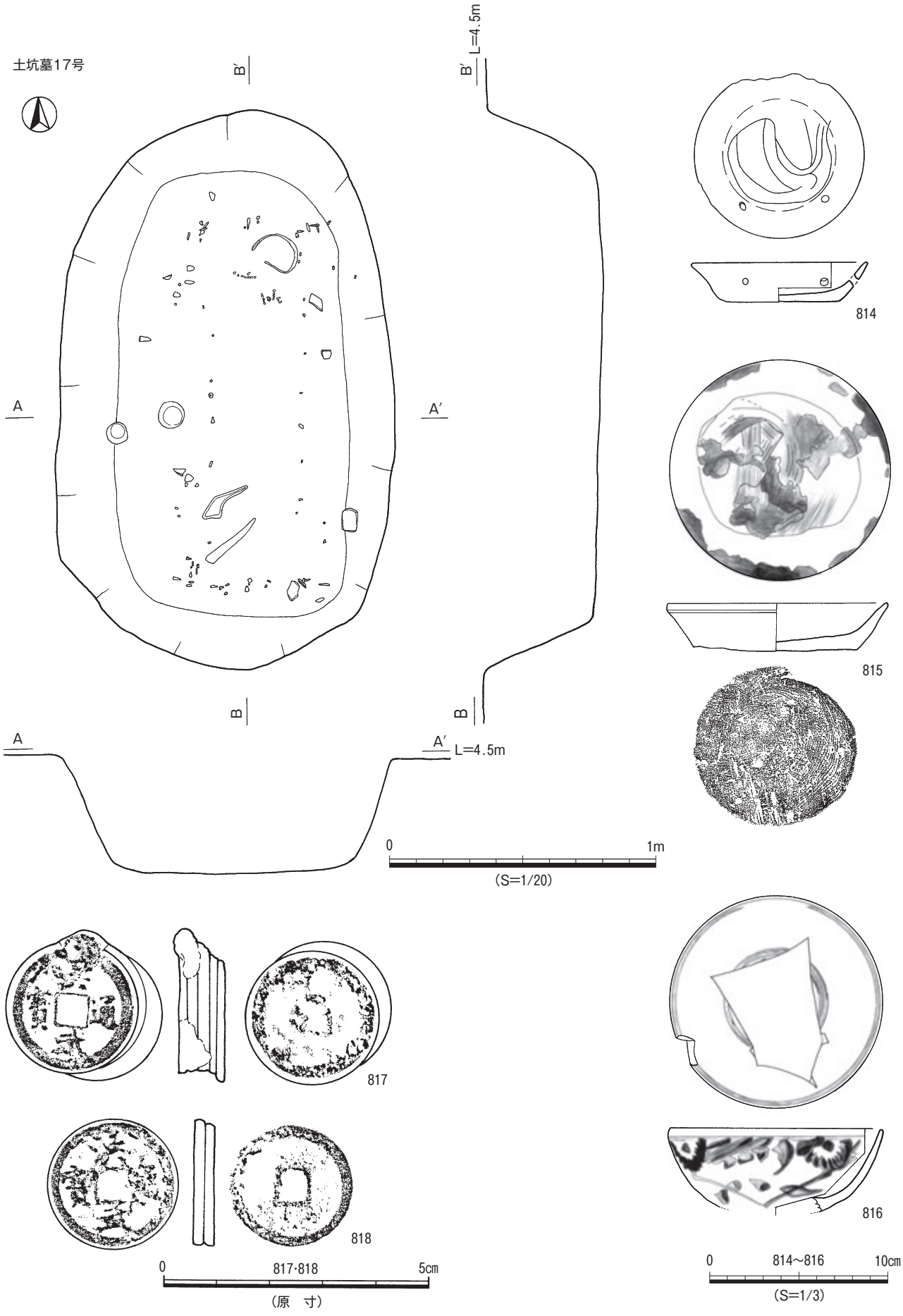
808

0 5cm
(原　寸)

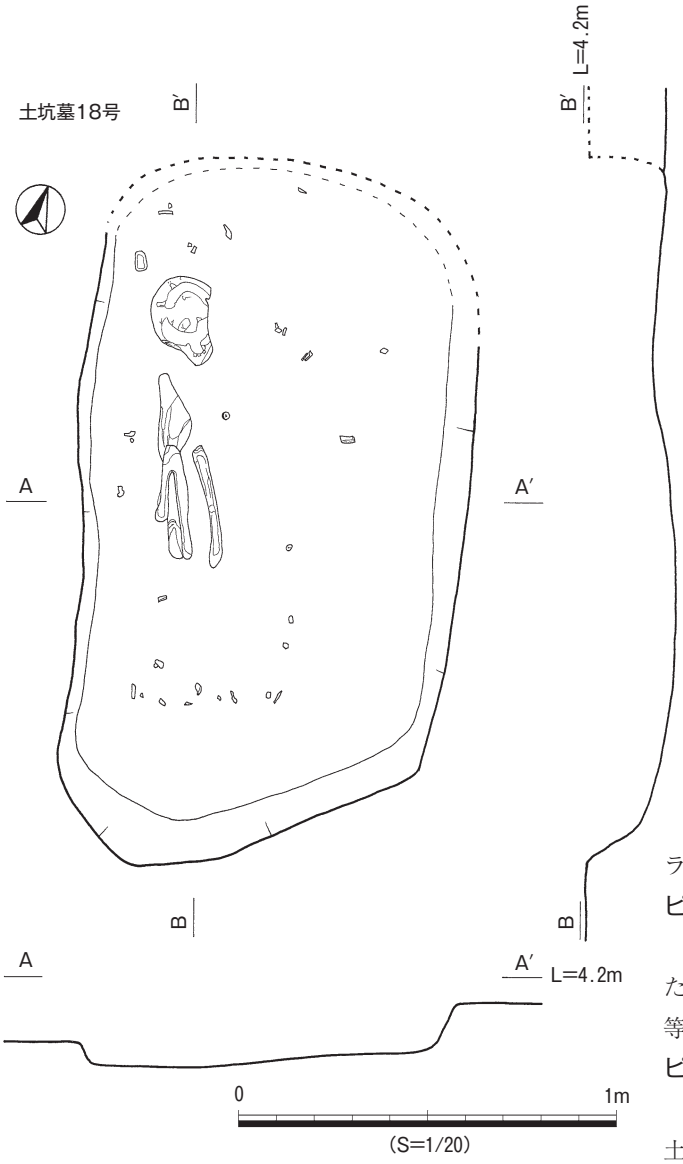
第193図　土坑墓14，15号・14号出土遺物

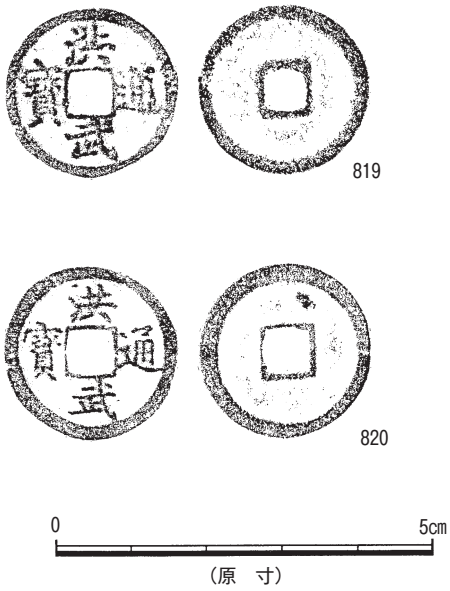


第194図　土坑墓16号・出土遺物



第195図　土坑墓17号・出土遺物





第196図　土坑墓18号・出土遺物

ピット７号（第99図・第199図）

C-31区で検出された。銭貨１枚が出土した。826は錆のため判読不能であった。

ピット８号（第99図・第199図）

C-31区で検出された。遺物は土師器の小皿１点が出土した。827は1/3程度の残存率の小皿である。内外面丁寧なナデ調整が施される。

ピット９号（第111図・第199図）

D-30区で検出された。遺物は滑石製品が１点出土した。828は方形の形状のもので，角は面取りされる。一か所に穿孔があけられる。

ピット10号（第112図・第199図）

E-29区で検出された。遺物は土師器の坏が１点出土した。829は，1/4程度の残存率の資料で，外面腰部はヘラ削りにより面取りされる。

ピット11号（第112図・第199図）

D-29区で検出された。遺物は滑石製品が１点出土した。830は中央が凹む形状のものであるが，詳細な用途等は不明である。

ピット12号（第112図・第199図）

D-29区で検出された。遺物は土師器の小皿１点が出土した。831は1/3程度の残存率で，外面腰部はヘラ削りにより面取りされる。

ピット13号（第112図・第199図）

E-28区で検出された。土師器の小皿が出土した。832は完形の資料で，口径9.2cm，底径6.0cm，器高1.4cmを測る。内面は全体的に黒褐色を呈し，外面の一部に煤が付着していることから，灯明皿として使用されていたものを地鎮として埋納したと考えられる。

ピット14号（第112図・第199図）

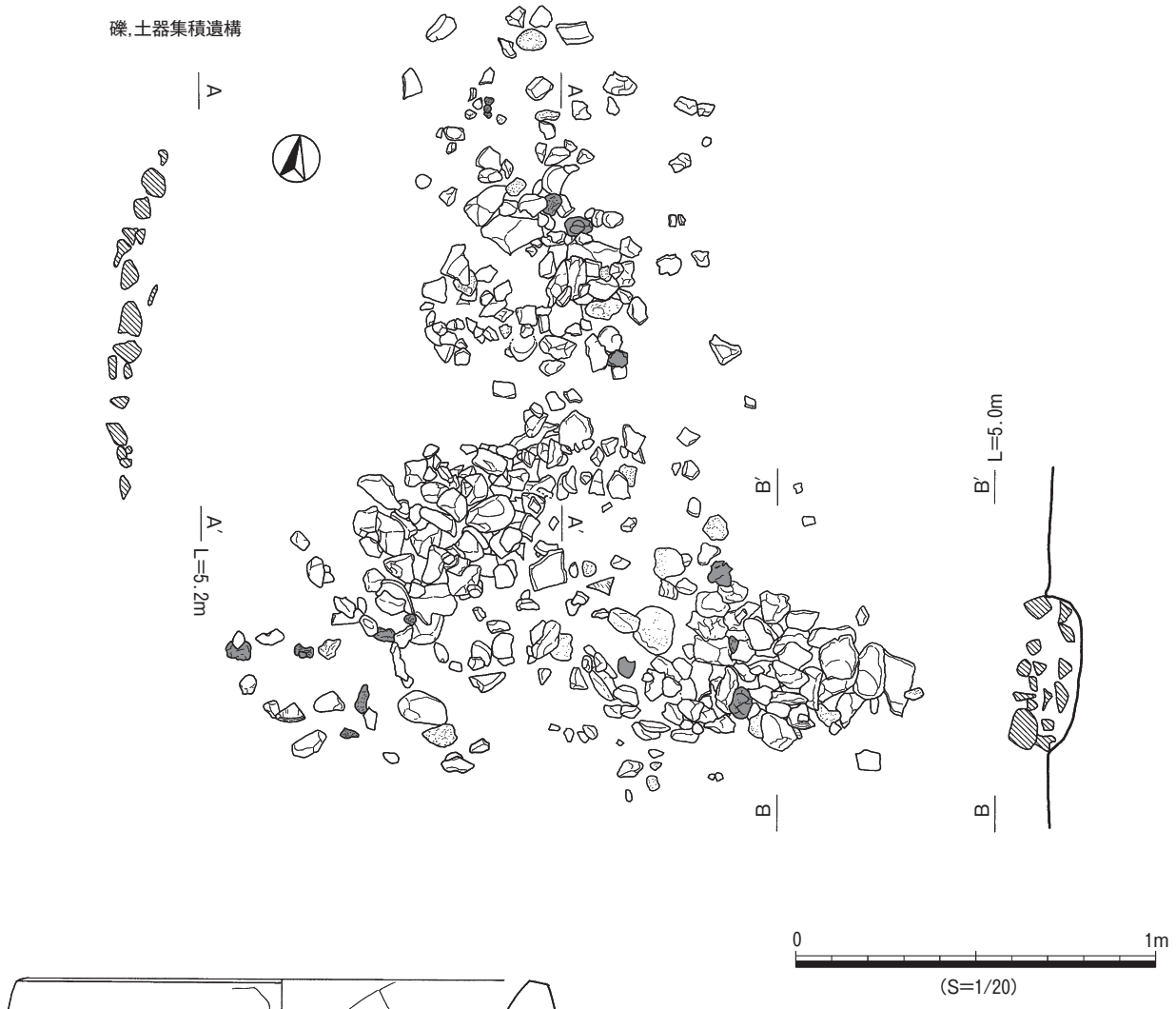
D-28区で検出された。土師器の小皿が出土した。833は体部が丸みを帯び立ち上がるが，口縁部は直線的に立ち上がる。

ピット15号（第112図・第199図）

D-28区で検出された。銭貨が１点出土した。834は洪武通宝である。

ピット16号（第112図・第199図）

C-28区で検出された。銭貨が１点出土した。835は淳祐元宝である。



第197図　礫，土器集積遺構・出土遺物

ピット17号（第112図・第199図）

C・D-28区で検出された。遺物は完形の土師器小皿が１点出土した。836は体部中央からわずかに外反する形状を呈する。

ピット18号（第112図・第199図）

D-28区で検出された。銭貨が２点出土した。837は大中通宝，838は洪武通宝である。

ピット19号（第101図・第200図）

A-25区で検出された。土師器の坏が出土した。839は底径6.0cmを測るもので，口縁部は欠損している。内底には器面調整時の工具痕が輪状に残る。

ピット20号（第101図・第200図）

A-25区で検出された。土師器の坏が出土した。840は体部が丸みを帯びながら立ち上がる。灯明皿として使用したものか，内面と外面の一部に煤が付着する。

ピット21号（第101図・第200図）

B-24区で検出された。龍泉窯系青磁の椀が出土した。841は内面に片彫りによる劃花文が描かれるもので，外面は無文である。

ピット22号（第113図・第200図）

D-24区で検出された。遺物は滑石製品が１点出土した。842は小形で，円錐状の形状を呈する。用途不明の資料である。

ピット23号（第113図）

D・E-24区で検出された。銭貨が1点出土した。小片のため図化できなかった。種別は不明である。

ピット24号（第113図・第200図）

E-24区で検出された。銭貨が1点出土した。843は武・

通の文字が確認できる。

ピット25号（第113図・第200図）

E-23区で検出された。遺物は土師器の小皿が完形で１点出土した。844はやや深さのあるもので，外面腰部はヘラ削りにより面取りされる。

ピット26号（第113図・第200図）

E-24区で検出された。遺物は土師器の小皿が１点出土した。845は2/3の残存率である。やや深さがあり，腰部はヘラ削りにより面取りされる。

ピット27号（第114図・第200図）

D-23区で検出された。846は龍泉窯系青磁の椀である。体部外面に櫛目を入れ，片彫りで周辺を一周させる。内面は片彫りの劃花文が入る。

ピット28号（第102図・第200図）

A'-21区で検出された。龍泉窯系青磁の皿が出土した。847は体部が腰部で強く屈曲するもので，見込みには草花文がスタンプされる。

ピット29号（第102図・第200図）

C-21区で検出された。遺物は，土師器の小片４点と瓦質土器の擂鉢が３点出土した。そのうち２点を図化した。848・849は同一個体と考えられる瓦質土器の擂鉢である。胎土は灰色を呈し，よく焼締まっている。内面は使用のため摩耗している。

ピット30号（第103図・第200図）

C-20区で検出された。遺物は滑石製品が１点出土した。850は滑石製の錘と思われる。

ピット31号（第115図・第200図）

D-20区で検出された。銭貨が1点出土した。851は祥符元宝である。

ピット32号（第115図・第200図）

E-21区で検出された。遺物は土師器の小皿の完形１点が出土した。852は，口縁部に煤が付着しており，灯明皿として使用されものと思われる。

ピット33号（第115図・第200図）

D-20区で検出された。853は漳州窯系の青花皿である。外底面は碁笥底を呈する。見込みは円状に釉が掻き取られる。

ピット34号（第104図・第200図）

D-17区で検出された。銭貨が１点出土した。854は永楽通宝である。

ピット35号（第116図・第200図）

E-17区で検出された。銭貨が１点出土した。855は洪武通宝である。

ピット36号（第116図・第200図）

G-17区で検出された。銭貨が１点出土した。856は元祐通宝である。

ピット37号（第104図・第201図）

D-16区で検出された。銭貨が１点出土した。857は太平通宝である。

ピット38号（第104図・第201図）

D-16区で検出された。銭貨が１点出土した。858は太平通宝である。

ピット39号（第104図・第201図）

C-15・16区で検出された。土師器の小皿が完形で出土した。859は口径8.6cm，底径6.8cm，器高1.6cmを測る。体部は丸みを帯びながら短く立ち上がり，内底はやや盛り上がる。

ピット40号（第104図・第201図）

D-15区で検出された。861は鉄鍋の可能性のある鋳造鉄器片である。厚さ３㎜程度である。

ピット41号（第104図・第201図）

D-15区で検出された。862は鉄鍋の可能性のある鋳造鉄器片である。厚さ５㎜程度である。

ピット42号（第106図・第201図）

D-９区で検出された。863は飾り金具の一部で，六弁花形金座金具と呼ばれるものである。表面に塗金されていた痕跡が伺える。（京都国立博物館　久保智康氏　教示）

ピット43号（第106図・第201図）

D-９区で検出された。銭貨が１点出土した。864は洪武通宝である。

ピット44号（第118図・第201図）

F-9区で検出された銭貨が１点出土した。865は通の文字のみ確認できる。種別は不明である。

古道（第202図）

古道は，D・E-22区で１条検出された。溝13の緩やかな東側掘り込み壁に形成されている。南北に約10m延びる。幅約１mの硬化面である。

溝（第202図～第207図）

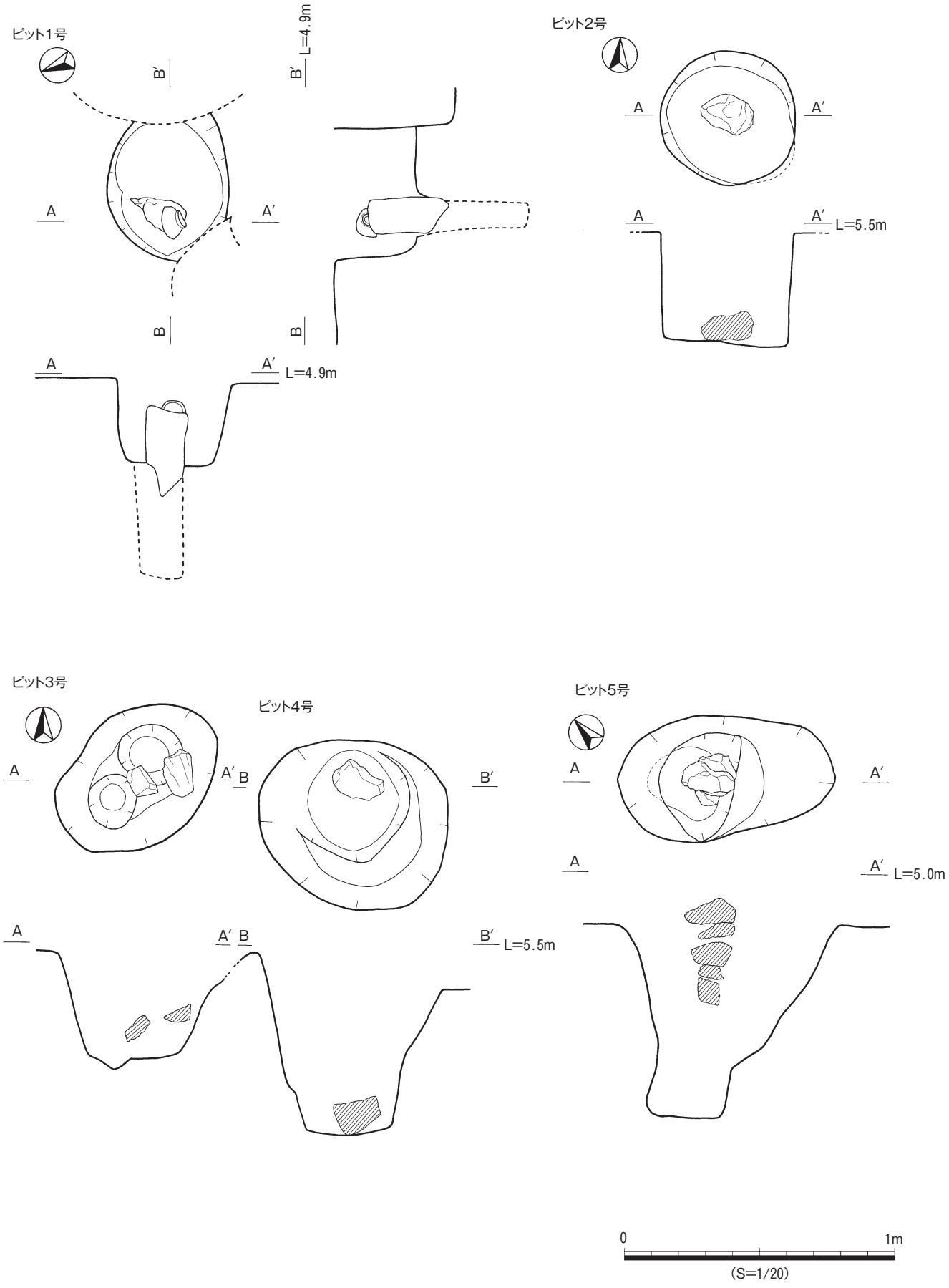
溝跡は，調査区全域で24条検出された。基盤となる層が砂質のため，掘り込みの形状を良好に留めているものは少ない。また，河川敷ということもあり遺構上面を流水作用で削平され，溝本来の深さを留めていないものがほとんどと思われる。

溝１（第202図）

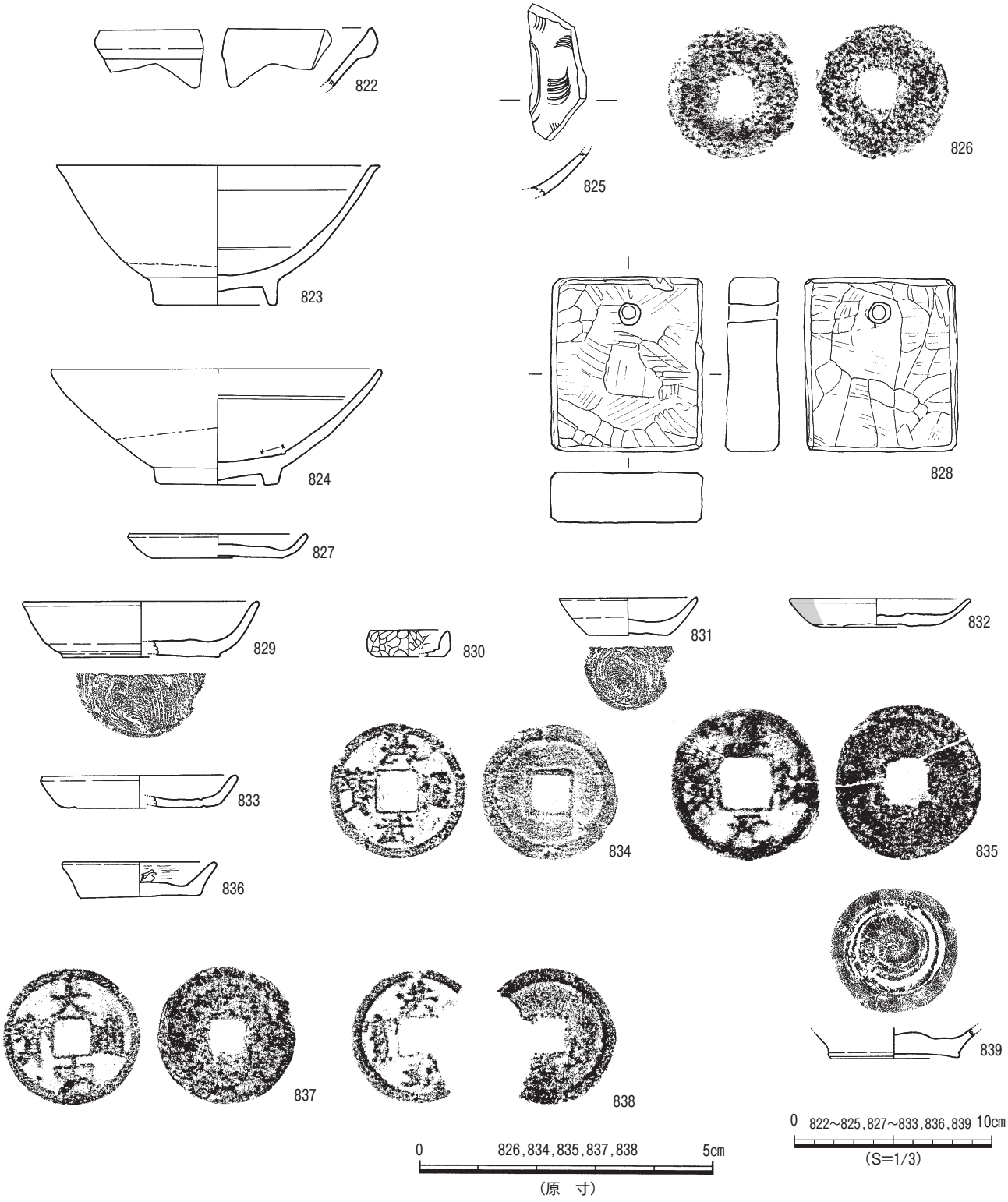
A・B-37区で検出された。南北方向に6m延びる。幅約70cm，検出面からの深さ約20cmで，断面は緩いU字状を呈する。

溝２（第202図）

B-37区で検出された。南北方向に4m延びる。幅約60cm，検出面からの深さ約10cmと非常に浅い。溝１の延長線上にあり一連の溝の可能性が高い。溝３を切っている。



第198図　ピット１～５号



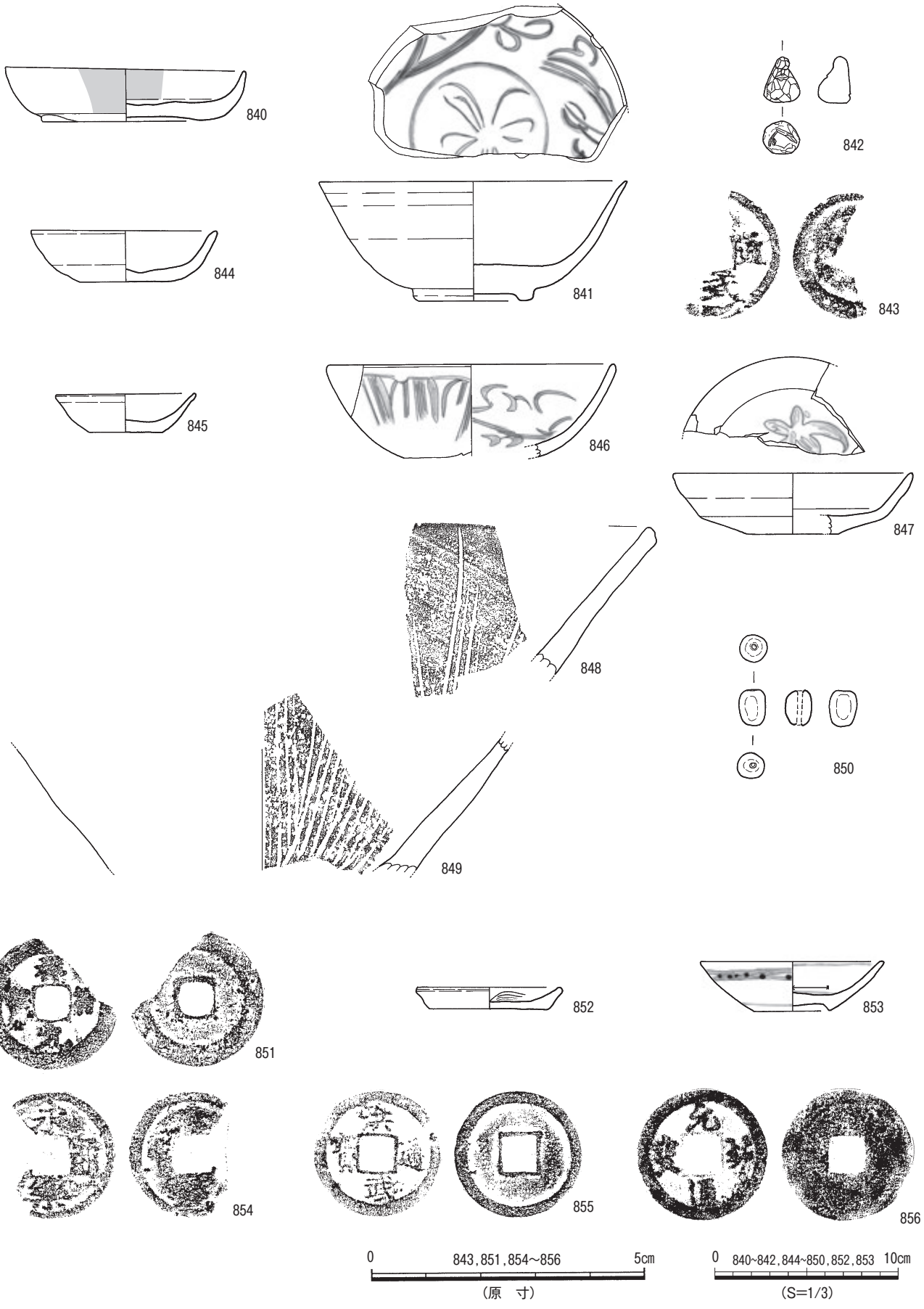
第199図　ピット内出土遺物（１）

溝３（第202図）

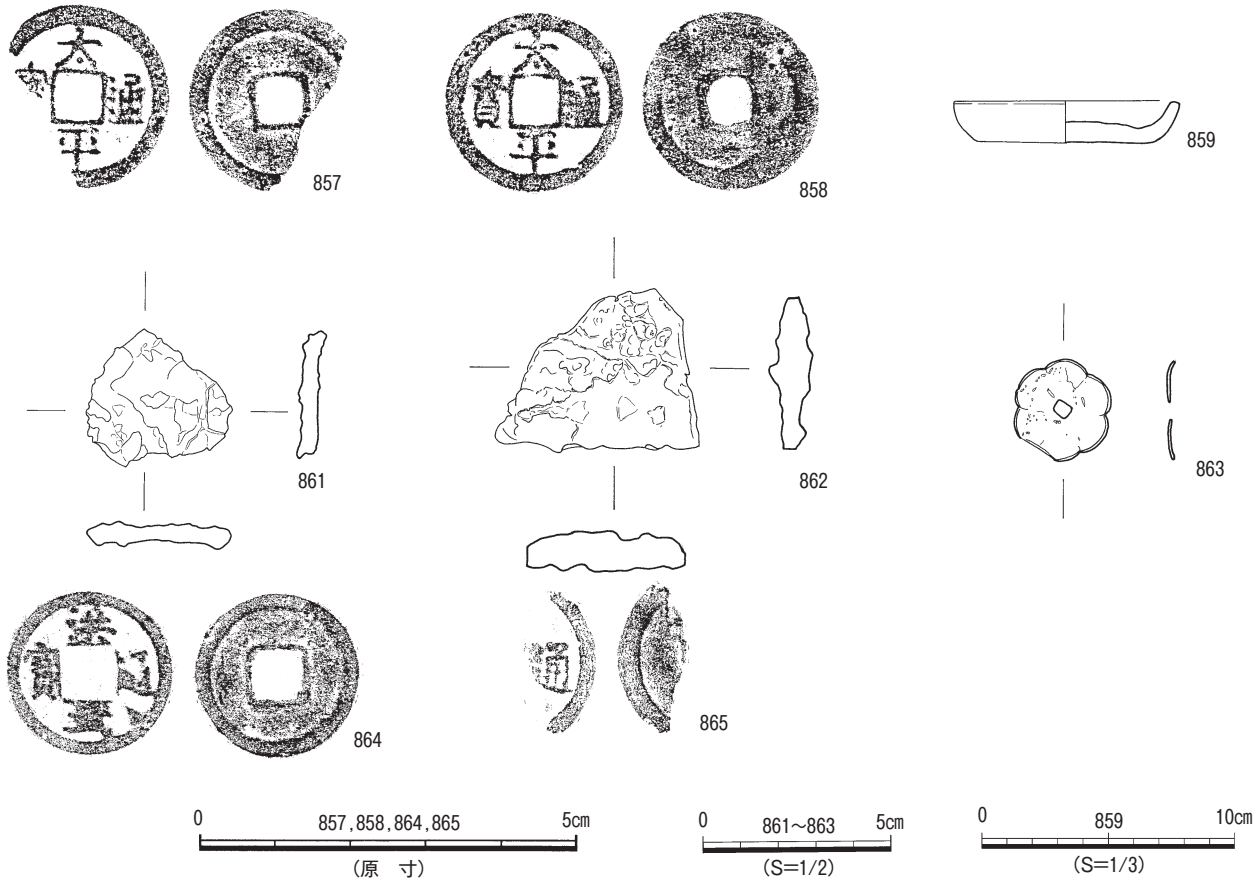
B-37区で検出された。東西方向に約７ｍ延びる。幅約1.1m，検出面からの深さ約10㎝と非常に浅い。

溝４（第202図）

C・D-37・38区で検出された。南東方向に約10m延びる。幅約1.7m，検出面からの深さ約15㎝強である。



第200図　ピット内出土遺物（２）



第201図　ピット内出土遺物（３）

出土遺物（第202図）

遺物は，瓦が３点出土した。３点とも同一個体と考えられ，２点が接合したものを掲載した。866は布目瓦の平瓦である。中国瓦と考えられる。

溝５（第202図）

A～C-35区で検出された。南北方向に12.5m延びる。幅約1.2m，検出面からの深さ約30cm，断面は緩いU字状を呈する。

溝６（第202図）

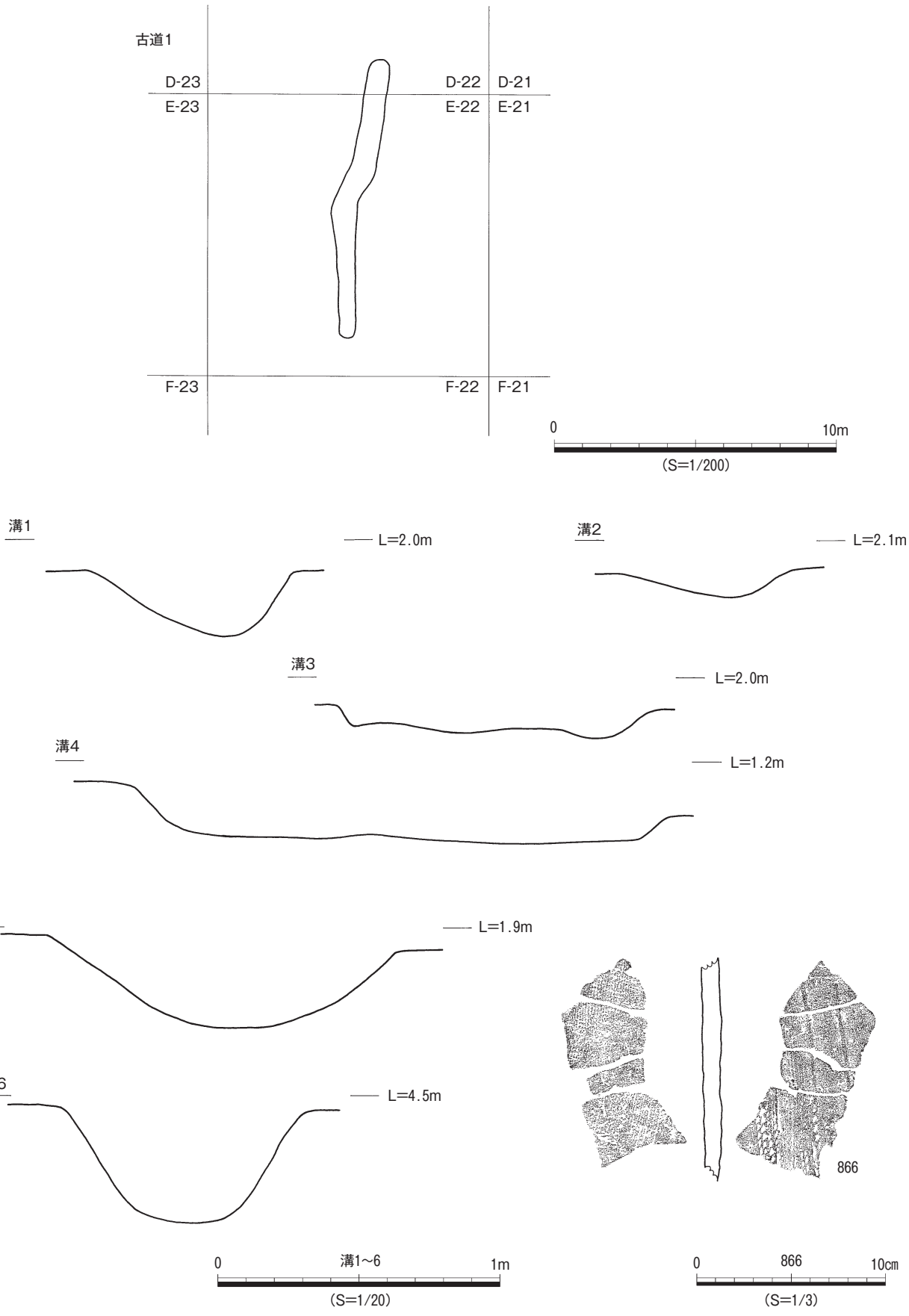
A'-30・31区で検出された。東西方向に13m延びる。幅約0.85m，検出面からの深さ約40cm，断面は比較的明瞭なU字状を呈する。

溝７（第203図）

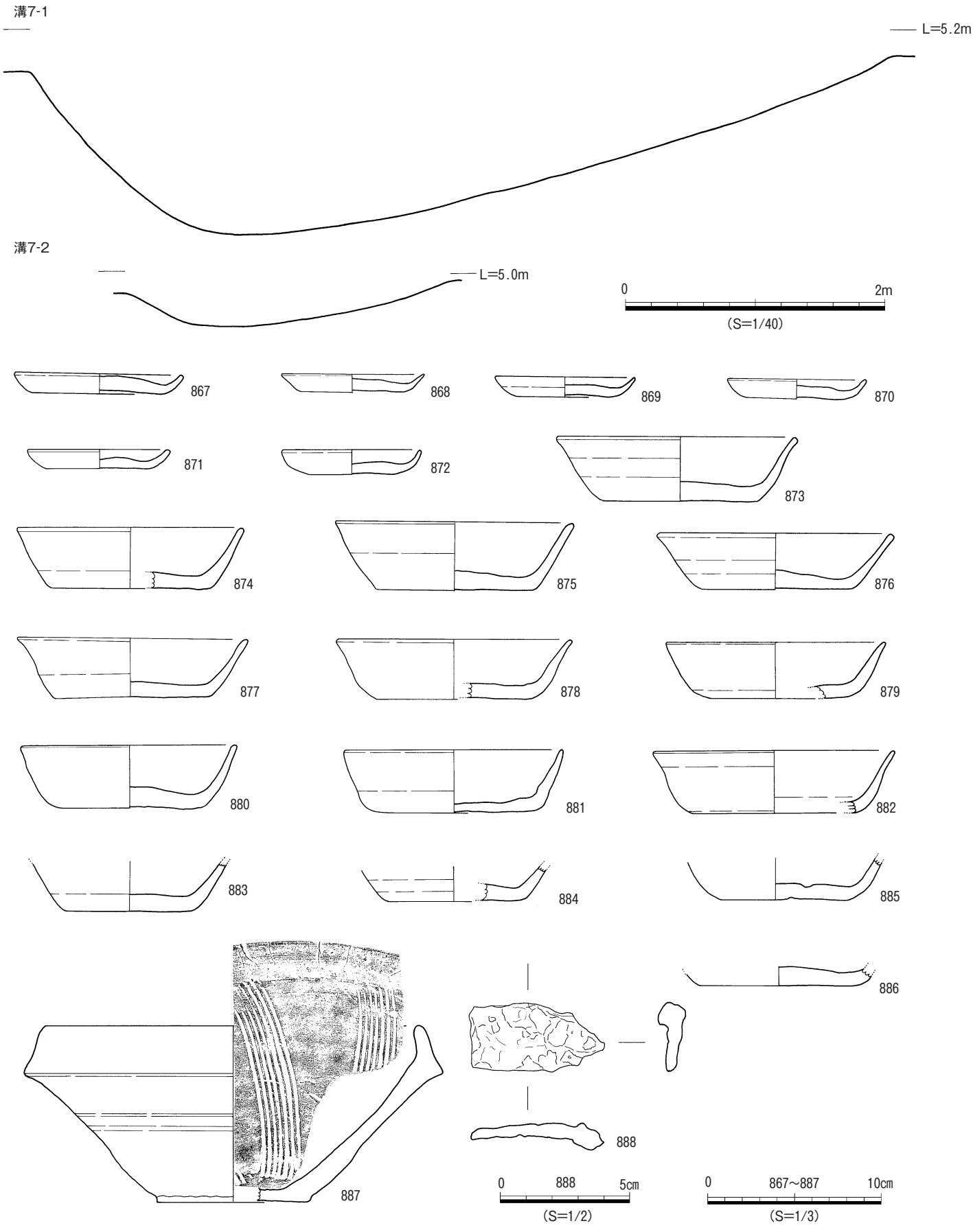
A'・A-26～29区で検出された。A'-29区から南へ延び，A-29区で折れ東方向へ約32m延びる。幅約2.4mから6.6mで，検出面からの深さ約30cmから1.3mの深さである。断面は緩いU字状を呈する。26区から27区にかけて幅，深さともに大きくなっていく。遺物も多く出土した。

出土遺物（第203図）

遺物は，白磁43点，青磁62点，中国陶器24点，東播系鉢６点，備前擂鉢３点，常滑甕４点，瓦質土器５点，カムィヤキ５点，土師器69点，土錘11点，羽口，鉄滓１点，その他19点等，大量に出土している。しかし，そのほとんどは小片で，また流れ込みによる遺物であった。該期の遺物としては，土師器の小皿６点と坏13点，備前擂鉢１点を図化することができた。867～872は土師器の小皿である。867のみ口径が9.6cmとやや大きく，ほかは8.0cm～8.2cmである。５点とも，底部と体部との境はナデ調整が施され，体部はやや丸みを帯びながら短く立ち上がる。内外面の調整は丁寧な回転ナデが施される。外底面の切り離しは糸切りである。873～886は土師器の坏である。口径はいずれも13cm前後で，器高は3.2cm～3.6cmと深い。内外面は丁寧な回転ナデ調整が施されており，体部の立ち上がりが丸みを帯びる877～881については底部と体部との境にナデ調整が施される。883～886は土師器の坏の底部である。体部は丸みを帯びて立ち上がる。887は備前産の擂鉢である。口縁部は外側に折り返し，逆くの字状につくる。胎土は暗褐色を呈し，白色の砂粒を多く含む。一単位７条の擂り目が入る内面は，使用により全体的に滑らかな手触りとなっている。888は鉄鍋



第202図　古道，溝１～６・溝４出土遺物



第203図　溝７・出土遺物

の可能性のある鋳造鉄器片である。厚さ３㎜程度である。

溝８（第204図）

D～F-26～28区で検出された。南北方向に約17m延びる。幅約40㎝で，検出面からの深さ約５㎝弱の非常に浅い溝である。溝は掘立柱建物跡11号に平行するように延び，建物横で建物桁行方向に溝が張り出す。

溝９（第204図）

A・B-25・26区で検出された。ほぼ南北方向に約14m延びる。幅約1.35m，検出面からの深さ約40㎝，断面形は箱堀を呈する。溝は，掘立柱建物跡12号の西横に平行する。

溝10（第204図）

C･D-25区で検出された。南北方向に約11.5m延びる。幅約85㎝，検出面からの深さ約30㎝，断面形は箱堀を呈する。掘立柱建物跡13号に隣接平行する。

出土遺物（第204図）

遺物は，土師器の小片122点，白磁３点，瓦質土器９点，カムィヤキ１点，土錘１点等が出土したが，大部分が小片で，図化できたものは１点であった。889は樺万丈産の捏ね鉢である。胎土は灰色を呈し，内面にはハケ目状の調整痕が入る。

溝11（第204図）

D-25・26区で検出された。東西方向に約18m延びる。幅約60㎝，検出面からの深さ約10㎝，断面形は皿状を呈する溝北側に溝８同様の張り出しをもつ。

出土遺物（第204図）

遺物は，土師器小片４点，白磁１点，中国陶器１点が出土し，１点を図化した。890は中国陶器の鉢である。胎土は粗く，白色の小石粒を多く含む。釉はかからない。口縁部は内湾し，内側に１条の突帯を有する。

溝12（第204図）

B-24・25区で検出された。東西方向に約10m延びる。幅約1.1m，検出面からの深さ約25㎝，断面形は皿状を呈する。

溝13（第205図）

D～F-22区で検出された。南北方向に約15m延びる。幅約3.6m，検出面からの深さ約50㎝，断面形は概ね箱堀を呈する。また溝内に筋状の硬化面がみられる。

出土遺物（第205図）

遺物は，青磁や白磁等が多数出土したが，該期の資料としては青花25点，土錘１点であった。そのうち，５点を図化した。891～894は漳州窯系の青花である。891は蓮子碗の底部である。畳付は釉剥ぎされる。892は見込みがわずかに饅頭心状を呈する碗である。胎土は淡黄色で，白濁した釉がかかる。高台から高台内面は露胎する。893は外面に草花文が描かれる碗で，見込みは輪状に釉剥ぎされる。894は底部が碁笥底を呈する皿である。胎土は浅黄色を呈し，灰白色に濁った釉がかかる。895は土錘である。外面には赤色顔料が塗布される。

溝14（第205図）

D-20・21区で検出された。東西方向に約４m延びる。幅約75㎝，検出面からの深さ約10㎝と非常に浅い断面形皿形を呈する。

出土遺物（第205図）

銭貨が出土した。896は皇宋通宝である。

溝15（296）（第205図）

A'～B-21区で検出された。南北方向に約23m延びる。幅約80㎝，検出面からの深さ約20㎝，断面形は箱堀を呈する。

溝16（第205図）

A・B-18～20区で検出された。東西方向に約22m延びる。幅約１m，検出面からの深さ約20㎝強，断面形は箱堀を呈する。

溝17（第206図）

A・B-17・18区で検出された。南北方向に約12m延びる。途中で二股に分岐する。溝は，幅約1.6m，検出面からの深さ約10㎝弱で非常に浅い。

溝18（第206図）

B・C-17区で検出された。南北方向に約７m延びる。溝は，１～３mと幅の広狭がみられる。検出面からの深さ約10㎝と非常に浅い。

溝19（第206図）

B・C-15区で検出された。南北方向に約12m延びる。幅は約1.5m，検出面からの深さ約20㎝である。

出土遺物（第206図）

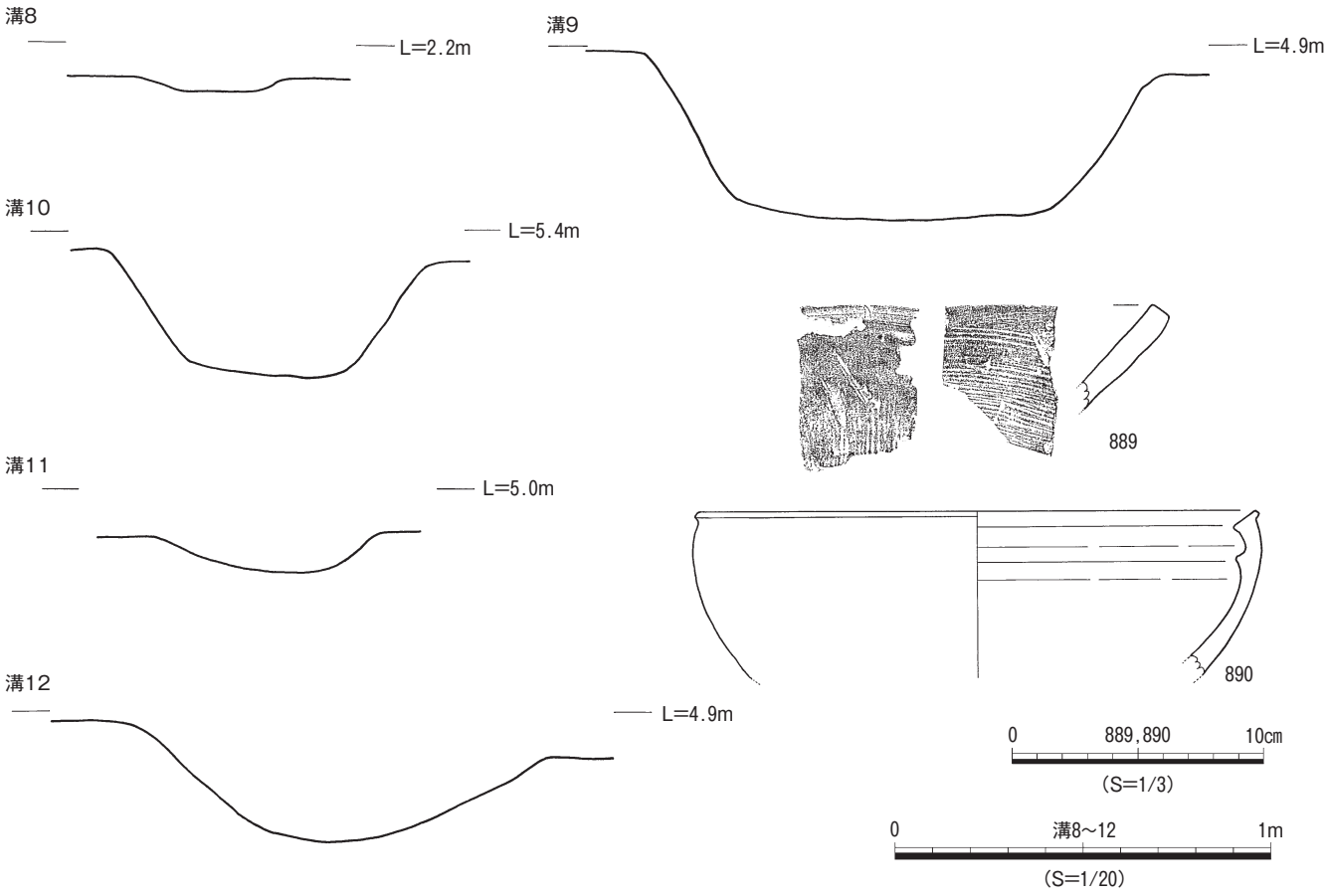
遺物は，土師器４点，白磁椀１点が出土し，そのうち２点を図化した。897は土師器の小皿である。口径8.8㎝，底径6.2㎝，器高1.6㎝を測り，体部は直線的に立ち上がる。898は白磁の椀である。口唇部内側の釉を掻き取る口禿げのタイプである。

溝20（第206図）

A～G-7～16区で検出された。東西，南北方向の複数の溝が切り合い，長大な溝を形成している可能性もあるが，切り合い関係がつかめなかったため，一連の溝として取り扱った。近世の遺物も確認できる部分もあり，一部は後世も機能していた可能性もある。A・B-12区で４条に分岐している。総延長170mあり，幅は２～５m，検出面からの深さ約65㎝である。

出土遺物（第206図）

遺物は，瓦質土器が６点と土錘１点が出土した。そのうち４点を図化した。899～901は瓦質土器である。899・900は樺万丈産の捏ね鉢で，内面にはハケ目状の調整痕が残る。901は擂鉢である。内面には７条１単位の擂り目が入るが，使用による摩耗が激しい。902は土師



第204図　溝８～12・溝10，11出土遺物

質の土錘である。

溝21（第206図）

D～G-12区で検出された。南北方向に約22m延びる。幅は１～６mあり，北から南に進むに従って幅が広がる。検出面からの深さは約60cm，断面形は緩い箱堀を呈する。

出土遺物（第207図）

遺物は，土師器小片27点，青磁10点，白磁３点，備前擂鉢１点，常滑甕１点，瓦質土器２点，東播系須恵器等が出土した。そのうち10点を図化した。

903～905は土師器の小皿である。３点とも内外面は丁寧なナデ調整が施される。903は口径7.0cm，底径5.0cm，器高1.5cmを測る。904は口径7.6cm，底径6.0cm，器高1.2cmを測る。905は口径8.8cm，底径6.6cm，器高1.7cmを測る。906～911は龍泉窯系青磁である。906・907は椀である。906は畳付の外側を面取りし，高台内底にかけては露胎する。907は高台内底の削り出しがやや深く，畳付から高台内底は露胎する。908は見込みに花文がスタンプされる。釉は畳付を越えて高台内面までかかる。909は外面に棒状の工具による蓮弁文が描かれる。釉は畳付を越えて高台内底までかかり，輪状に釉剥ぎされる。910は稜花皿である。見込みは輪状に釉剥ぎされる。911は盤の底部である。釉は畳付を越えて高台内底までかかる。912は備前産擂鉢の底部である。

溝22（第207図）

C・D-10区で検出された。南北方向に約16m延びる。幅は約75cm，検出面からの深さ約45cmである

溝23（第207図）

E･F-4～7区で検出された。南西方向に約25m延びる。幅約３m，検出面からの深さ約30cm強である。

E-5区で二股に分岐する。掘立柱建物跡30・32号は，この溝に平行するようなかたちで検出された。

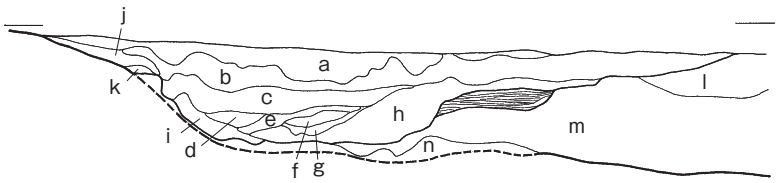
出土遺物（第207図）

913は龍泉窯系青磁の皿である。見込みは円状に釉が掻き取られる。914は備前産の擂鉢である。口縁帯の上角と下角が伸び，上角はさらに上方へ突出するため内側に稜を有する。１単位７条の擂目が入る。

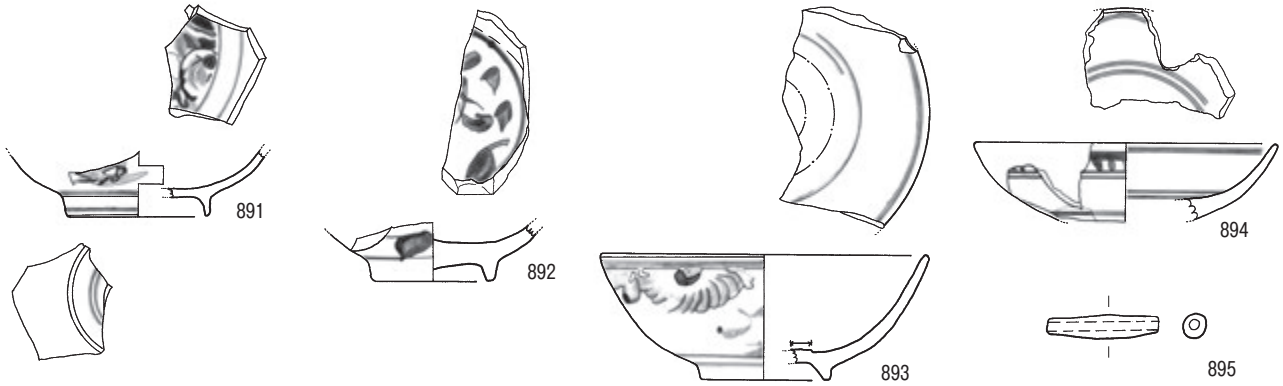
溝24（第207図）

C･D-2･3区で検出された。南西方向に約9.5m延びる。幅約2.3m，検出面からの深さ約35cmである。前述の溝23と同一直線上にあり一連の溝の可能性が高い。

溝13



a.にぶい褐色砂質土
b.暗褐色砂質土
c.暗赤褐色砂質土
d.褐色砂質土（やや粗粒）
e.黒褐色土（φ1mm程度の軽石が混じる）
f.黒褐色土（若干小石が混じる）
g.黒褐色土（fよりやや明るい、若干小石が混じる）
h.暗褐色砂質土
i.黒褐色土
j.黒褐色粘質土
k.暗褐色砂質土
l.にぶい赤褐色土
m.暗赤褐色砂質土
n.にぶい橙砂質土





（原　寸）

溝14

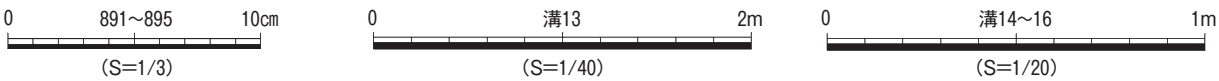


溝15



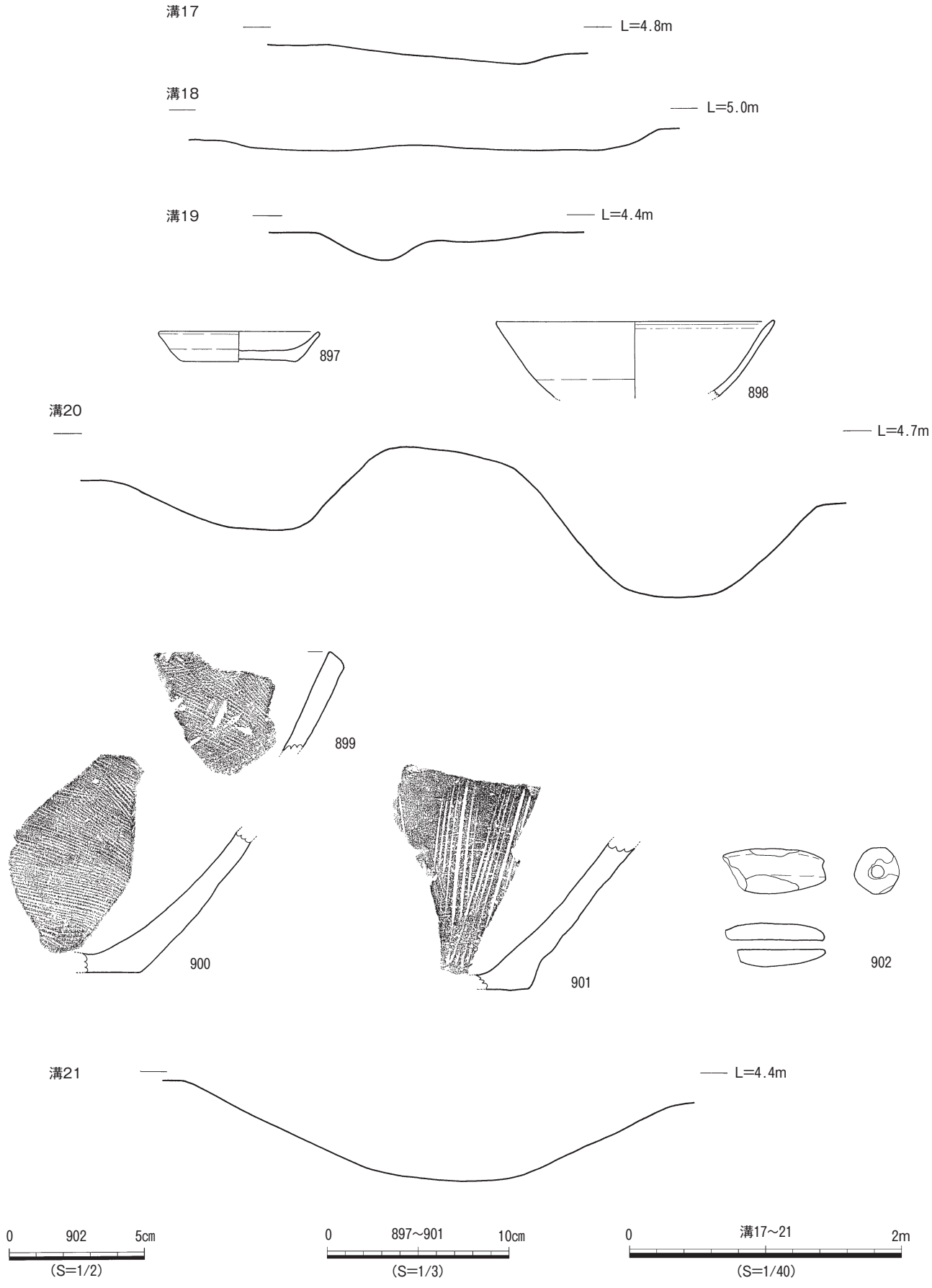
溝16



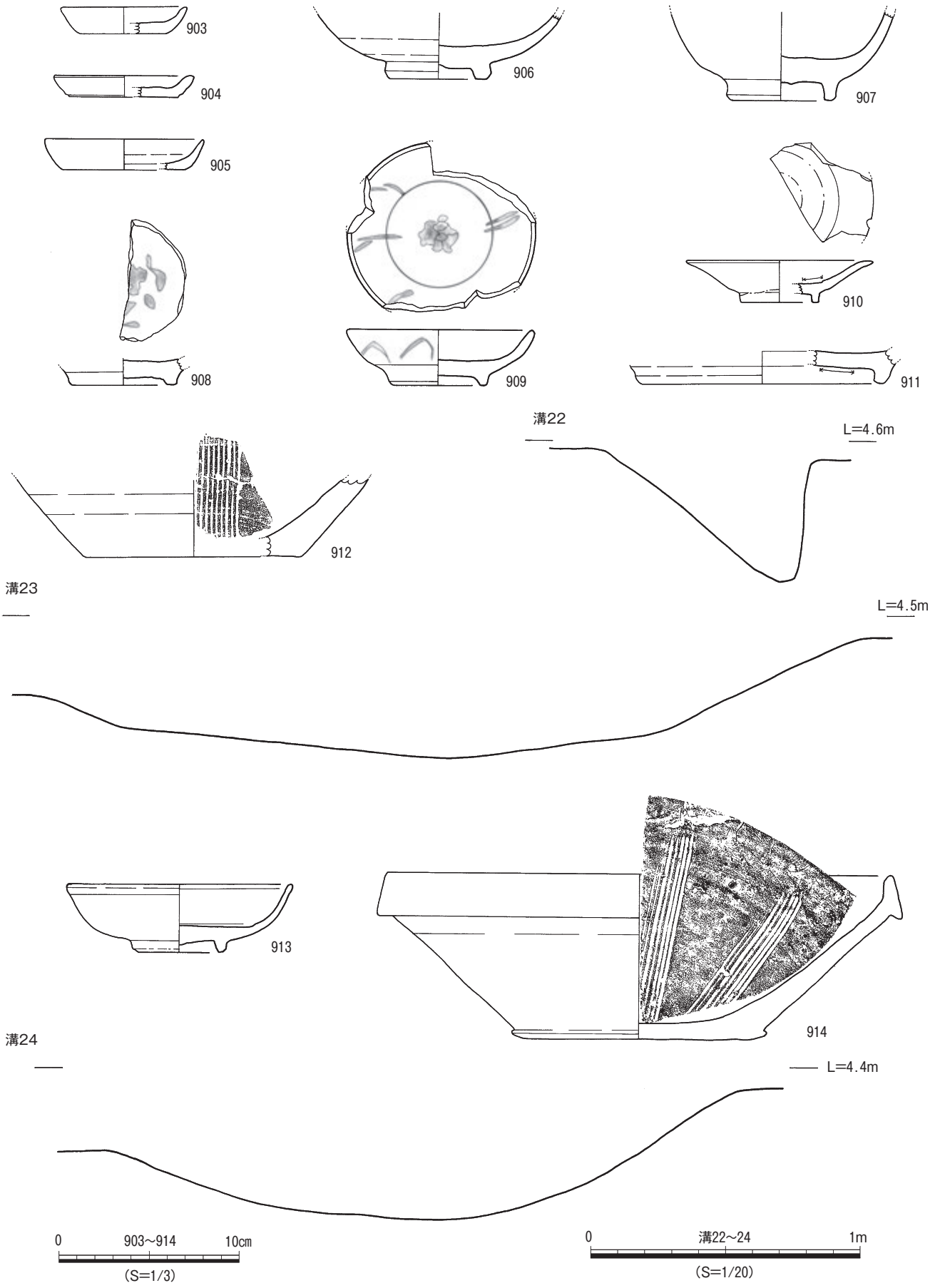


(S=1/3)　(S=1/40)　(S=1/20)

第205図　溝13～16・溝13，14出土遺物



第206図　溝17～21・溝19，20出土遺物



第207図　溝22～24・溝21，23出土遺物

（4）遺物

土師器（第208図915～941，第209図942～956）

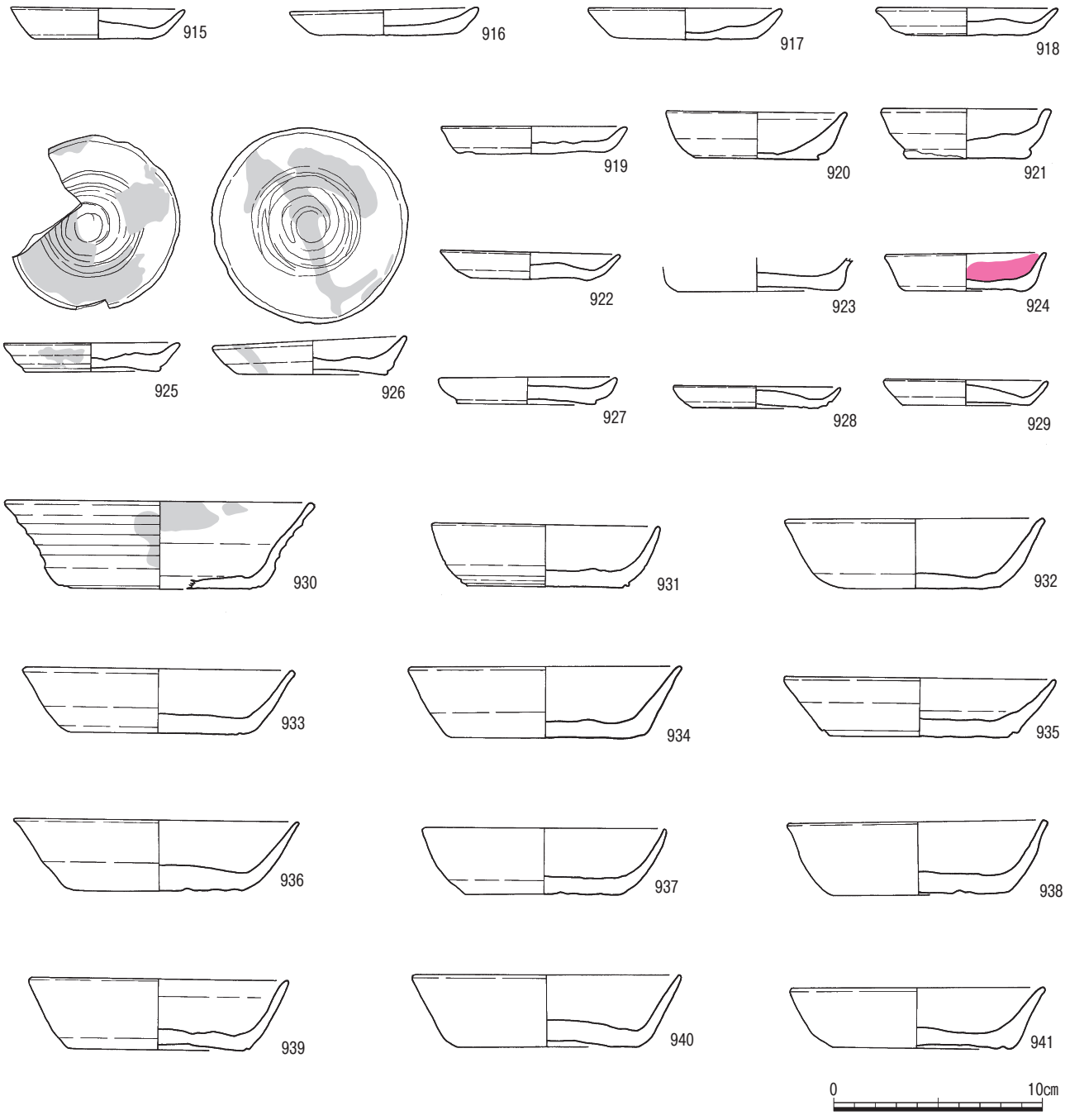
915～956は，土師器である。底部の切り離しが糸切りのものを中世の土師器として取り扱った。器種としては皿・坏，黒色土器Ⅰ類の椀，黒色土器Ⅱ類の皿，赤色土器Ⅱ類の高台付皿，小皿，赤橙色の皿がみられる。915～929は皿である。920・921・925～927は体部との境に段をもつ。925は体部内面に煤痕がある。926は体部内面から底部外面にかけて筋状のシミ痕がある。930～941は坏である。930は口縁部が大きく外反する器形で薄手のものである。939・948は体部内面から底部外面にかけて筋状のシミ痕がある。942～946は黒色土器Ⅰ類の椀である。943は内外面ともに丁寧なミガキ調整が施され胴部は丸みをもち口縁部は内湾する器形である。947・948は黒色土器Ⅱ類の皿である。949・950は赤色土器Ⅰ類の高台付皿と小皿である。950～956は赤橙色皿である。

土玉（第210図957～960）

基部の上位に穿孔を施しており，上位端部には僅かに凹みがみられるが，その用途は不明である。

土錘（第211図961～980，第212図981～1008）

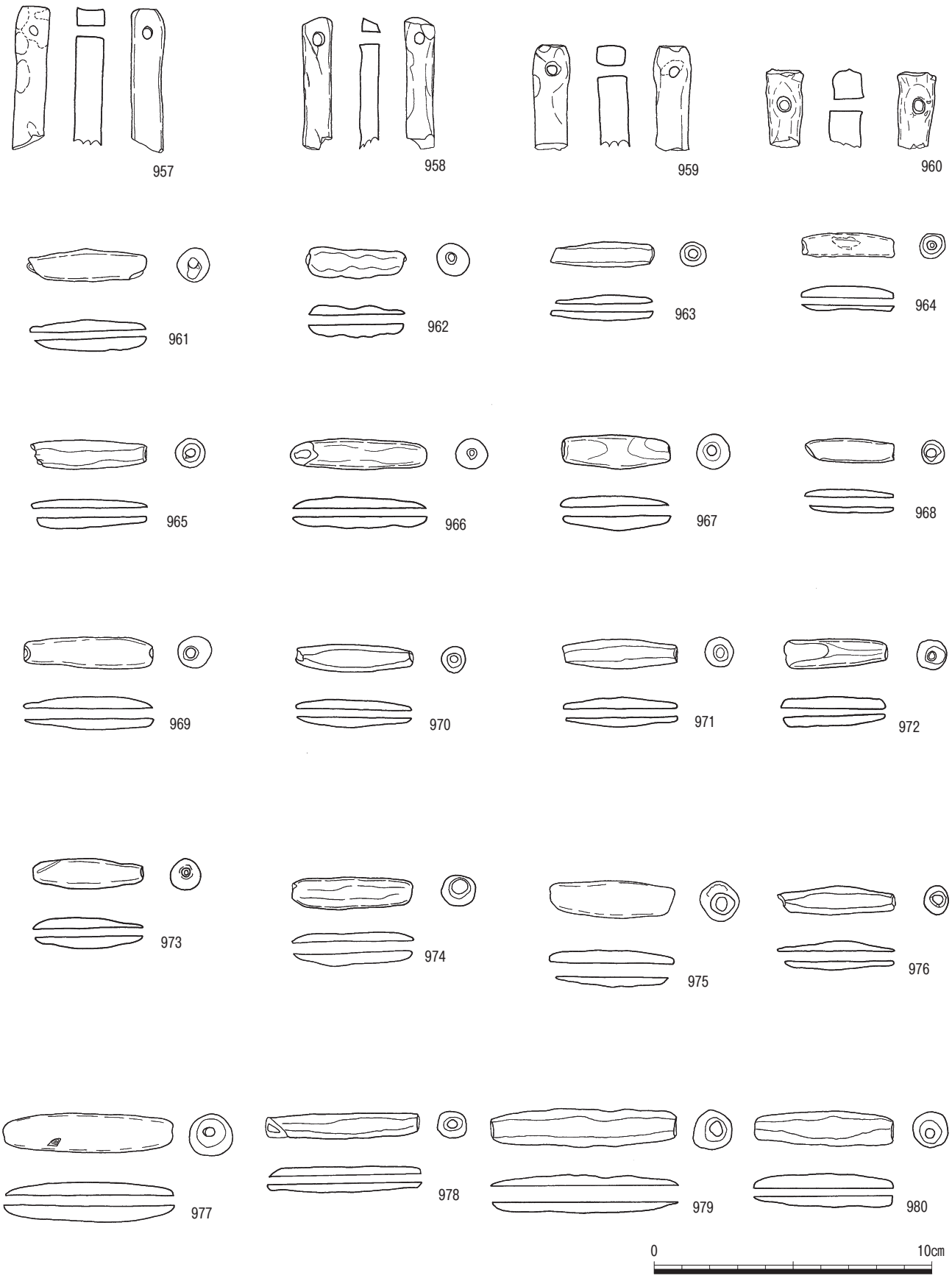
163点中，出土層位が明確で欠損部の少ない52点を図化した。961～1000は厚みが２㎝未満の管状土錘である。1001は土錘を短くしたもので，球状を呈す。1002～1008は厚みが２㎝以上の管状土錘である。



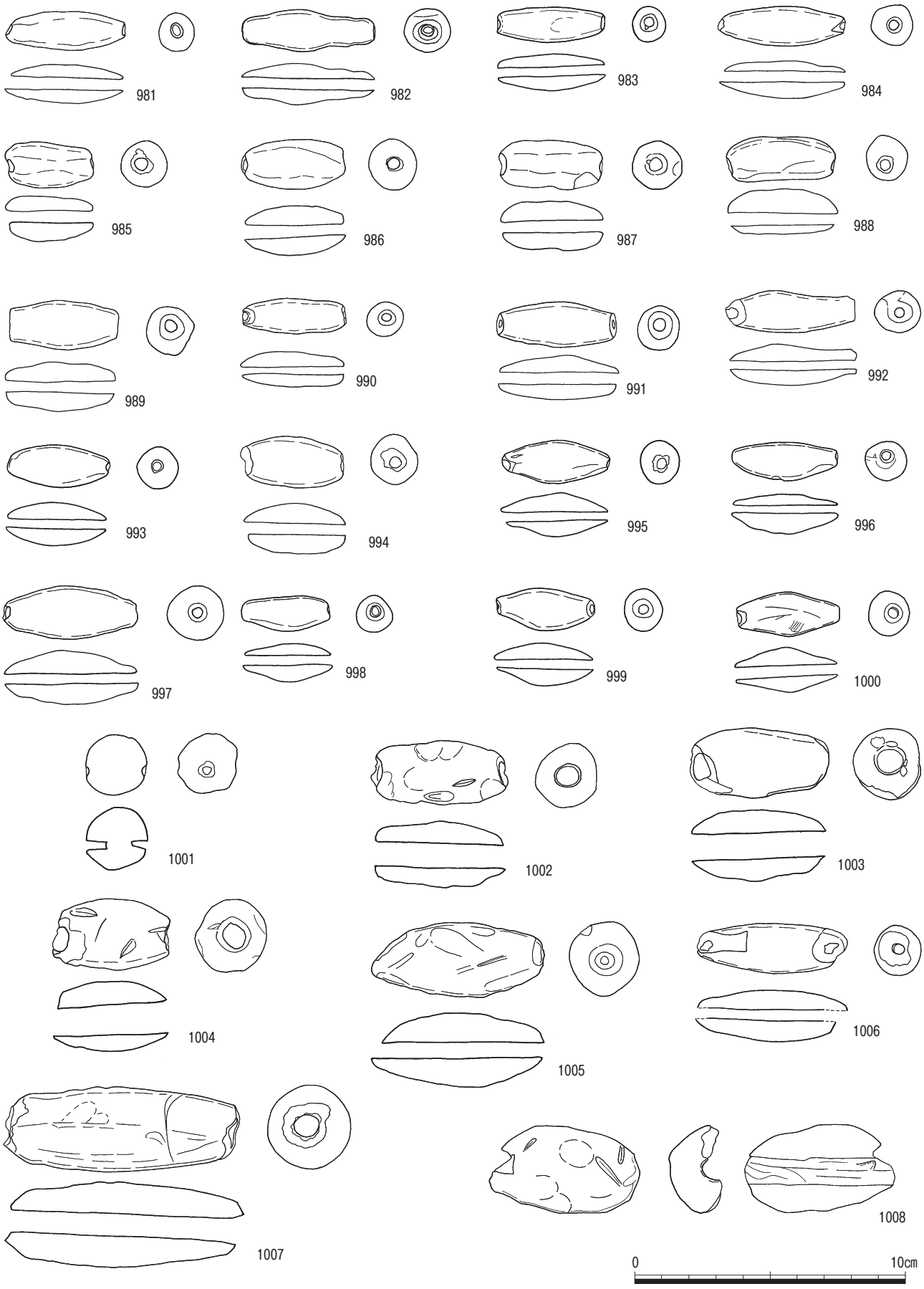
第208図　土師器１


942
943
944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
954
955
956
0
10cm

第209図　土師器２


957
958
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
980
0
10cm

第210図　土玉・土錘１


981
982
983
984
985
986
987
988
989
990
991
992
993
994
995
996
997
998
999
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
0
10cm

第211図　土錘２

輸入磁器

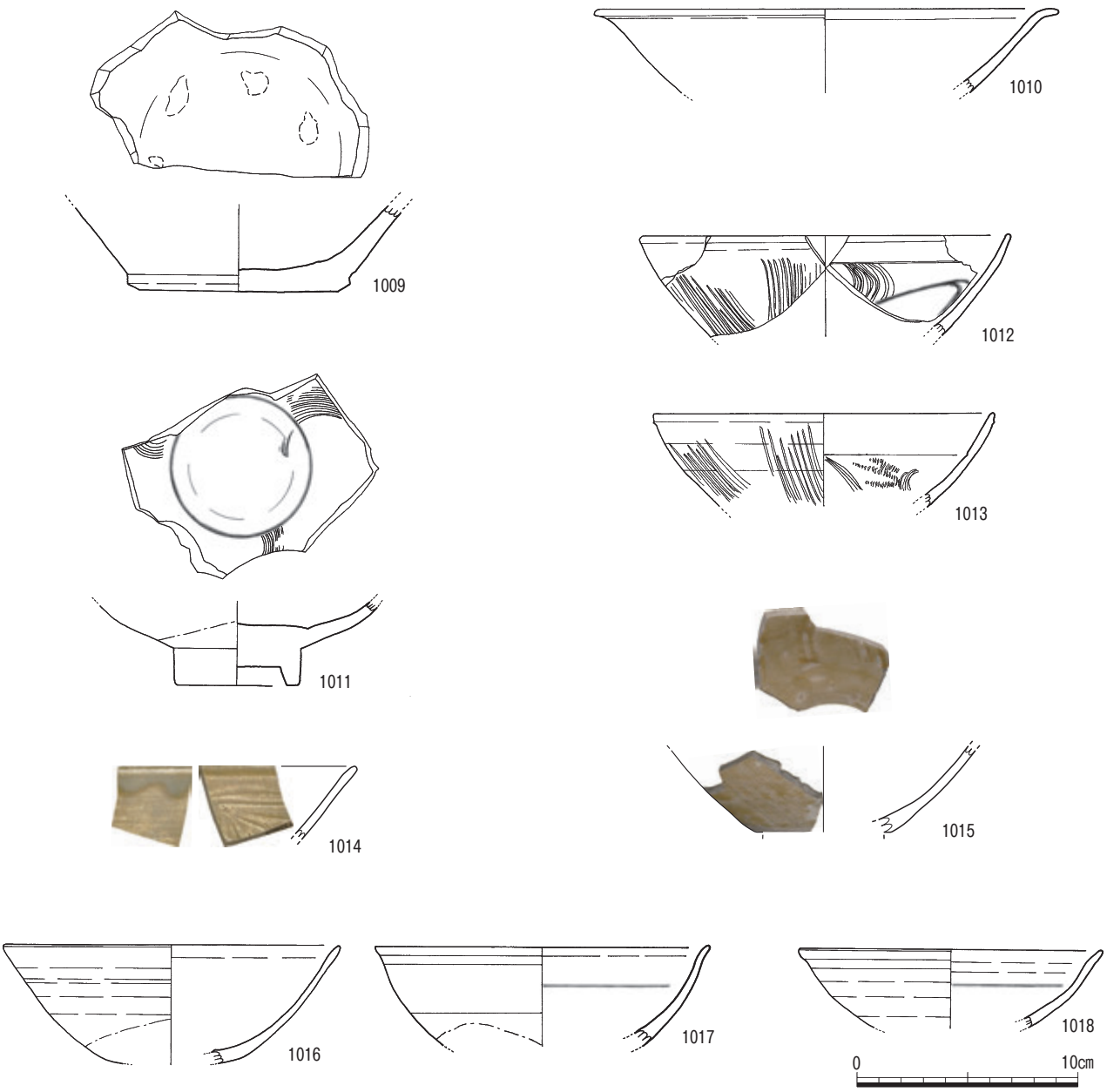
青磁（第212～224図）

1009・1010は，大宰府分類の越州窯系青磁（A期：８世紀末～10世紀中頃）に比定されるものである。越州窯系青磁は，古代に相当する遺物であるが，大宰府分類に従い遺物を分けたため，ここに掲載する。1009は，若干上げ底気味の平底である。体部最下部および底部に回転ヘラ削りの跡が残る。体部外面最下部と見込みに三角形状の目跡を持つ。体部外面下位以下は露胎である。大宰府分類の越州窯青磁椀Ⅰ-5類に相当する。1010は，外反する口縁部から胴部までである。焼成不良で釉の残りが悪いが，全体的に器面全体が茶黄色を呈し，淡黄灰色の胎土を持つことから，越州窯系とした。

1011～1015は，大宰府分類の同安窯系青磁椀Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定され，体部上位で若干内側に屈曲するものである。1011は，外面が無文である。1012は，外面に細かい縦の櫛目文を施している。1013は，外面に粗い櫛目文を施している。1014は，外面が無文で，内面にヘラ状の施文具による文様を有する。1015は外面に細かい縦の櫛目文，内面に櫛による点描文を有する。

1016～1018は，大宰府分類の同安窯系青磁椀Ⅱ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定され，内・外面とも無文で，口縁部を僅かに外反させるものである。

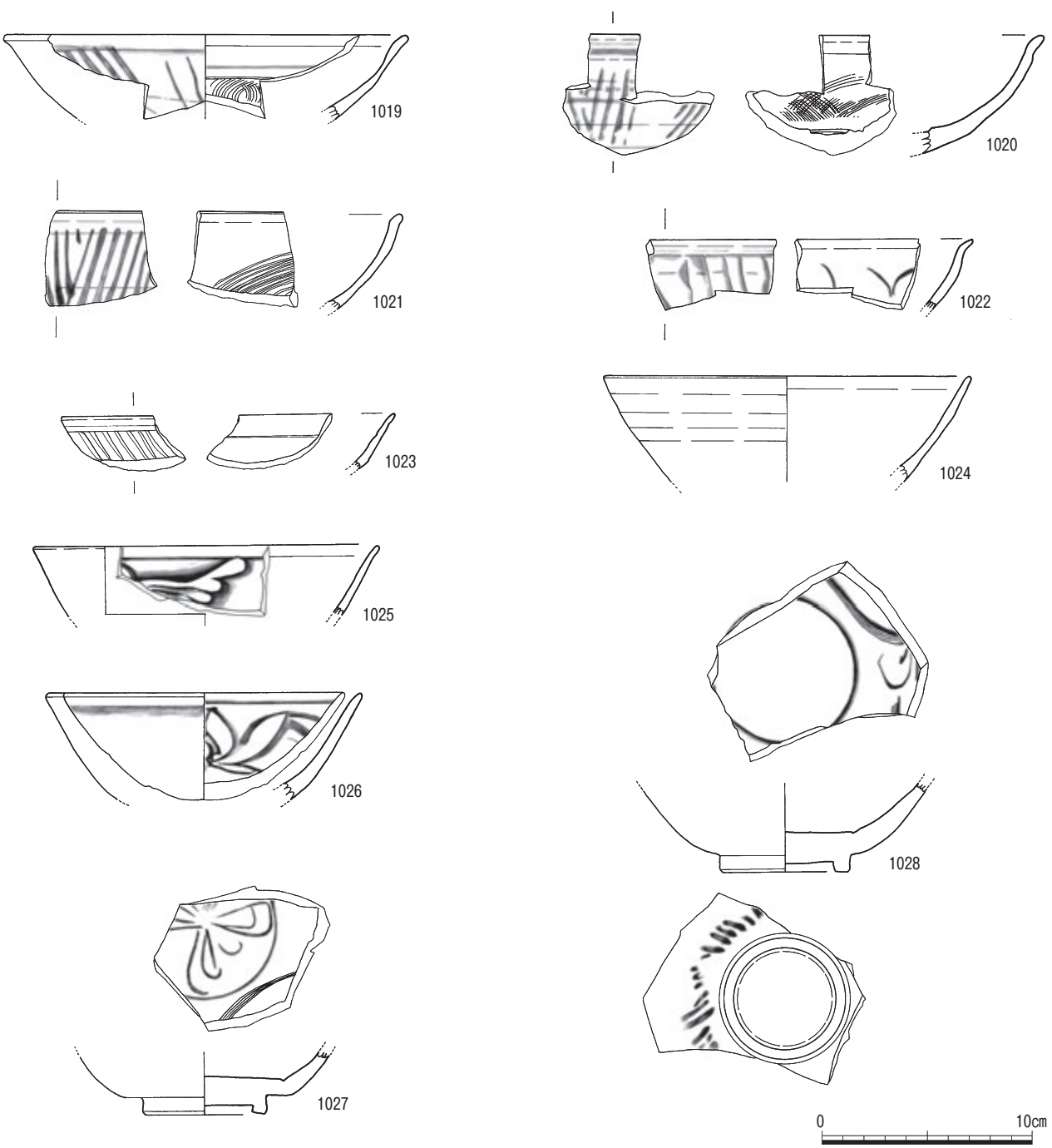
1019～1023は，大宰府分類の同安窯系青磁椀Ⅲ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定され，口縁部を僅かに外反させ，体部外面に粗い縦の櫛目文を施すものである。



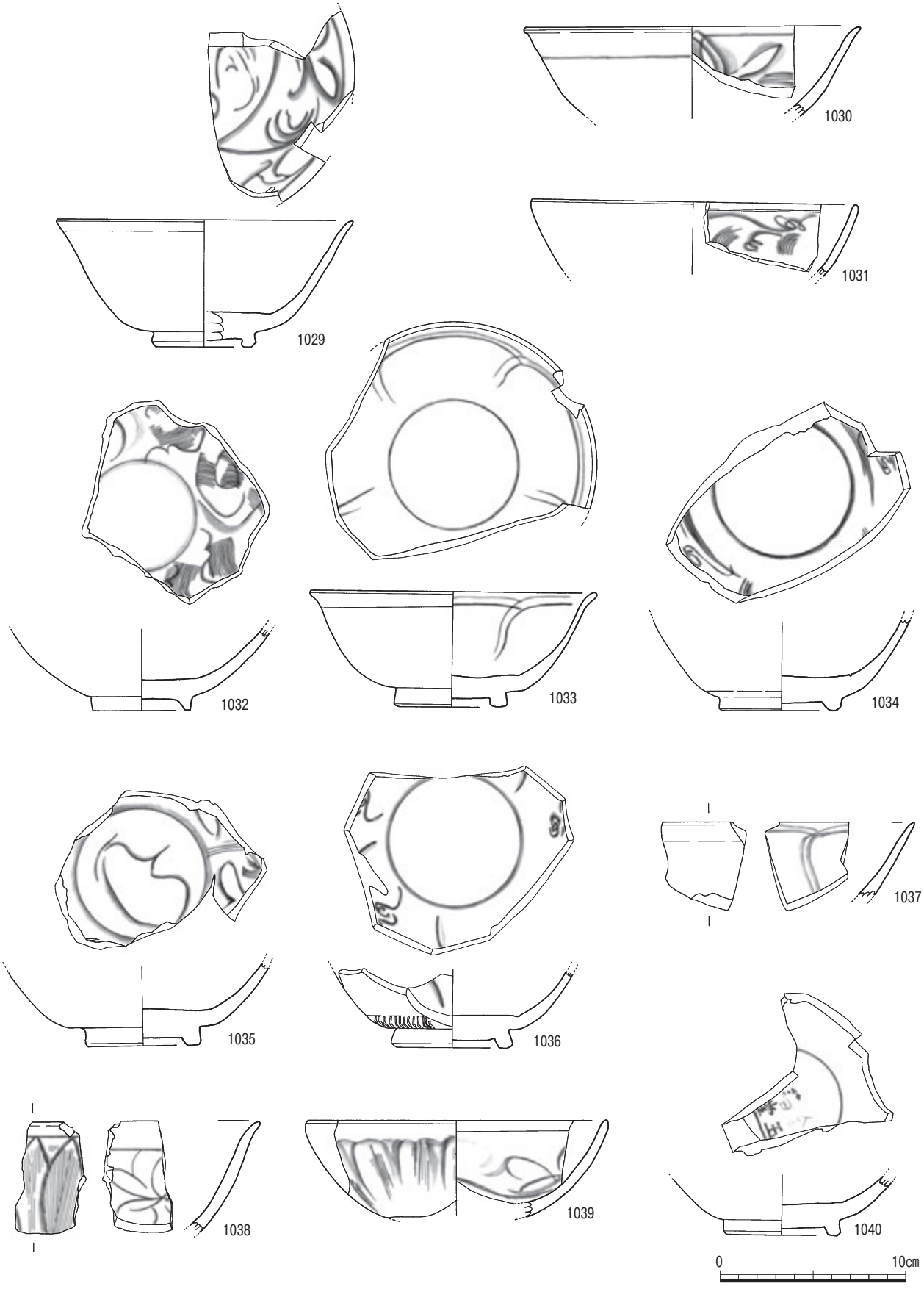
第212図　青磁１

1019・1020は，内面に櫛状の施文具により花文を描く。1023は，内面は無文だが，外面の櫛目文が胴部付近で意図的に止められ段がつく。

1024～1049は，大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。口縁端部は丸く肉厚で，直口か僅かに外反する例が多く，胴部下半の腰には張りがある。高台は断面四角形か五角形が多い。高台内部は削りが若干浅く，このため底部は肉厚となる。口縁部直下から底部外面までヘラ削りを行い，畳付から高台内面は露胎である。1024は，内・外面とも無文である。1025～1029は，外面は無文，内面に片彫蓮花文を有する。1030～1032は，内面に片彫りで草花文や飛雲文を入れ，空白部を櫛目文で埋めている。1033～1037は，櫛刃により内面を分割し，中に飛雲文を入れている。1033は，櫛刃による分割線のみで，内面に文様を施さない略式形式である。1035は，見込みに茸状の模様を片彫りしてある。1038・1039は，胴部外面に蓮弁文と縦の櫛目を入れ，内面に片彫劃花文を施す。1040・1041は，見込みに「金玉満堂」の印文を加える。1042～1046は，内面に劃花文を持つ。龍泉窯系青磁椀Ⅲ



第213図　青磁２

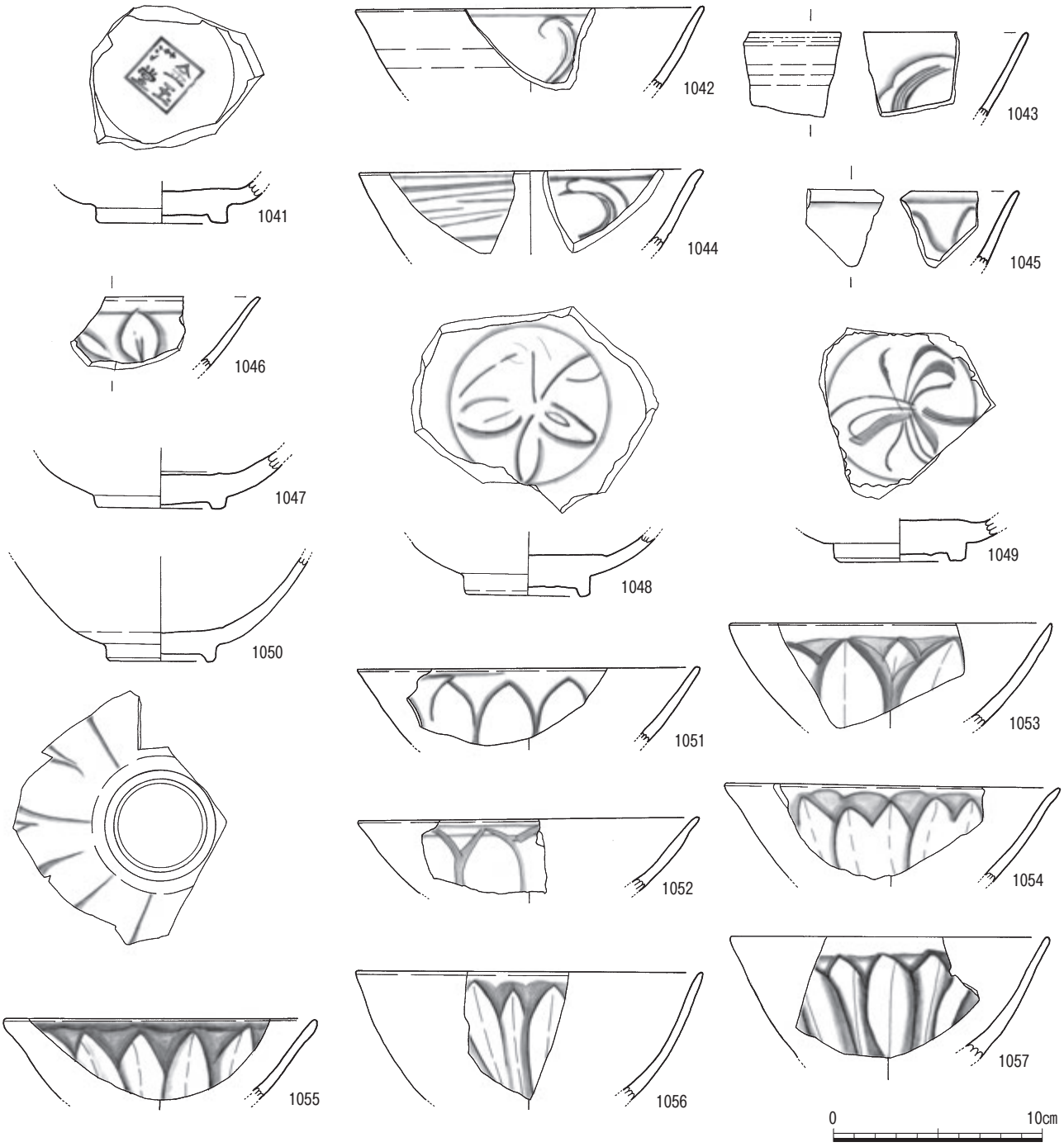

1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1040
0
10cm

第214図　青磁３

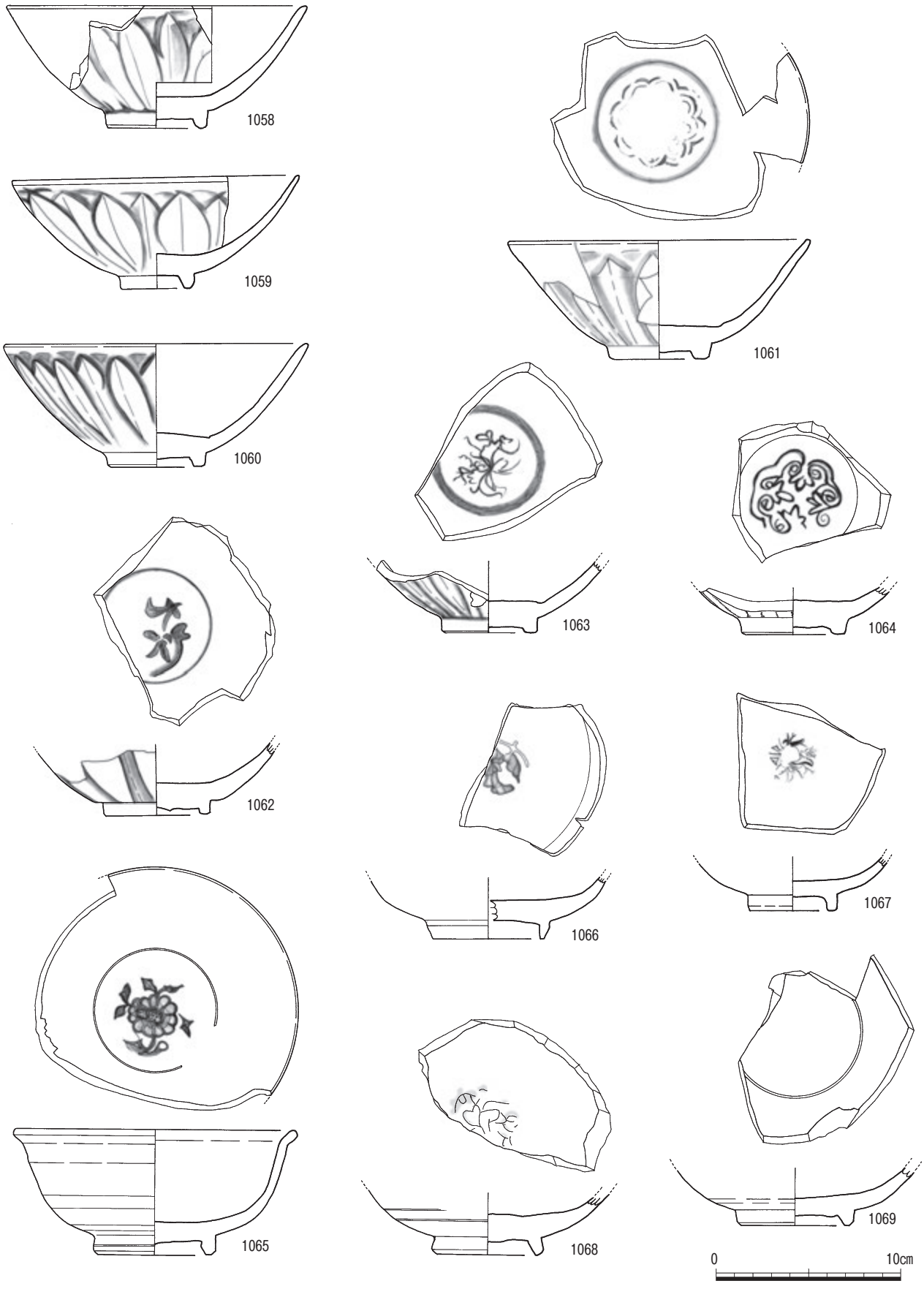
類の直口タイプと類似するが，底部がないので判断できない。1047～1049は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類の底部である。

1050～1064は，大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅱ類（E期：13世紀初頭前後～前半）に比定されるものである。体部外面に蓮弁文を有し，口縁端部は直口か僅かに外反する。1050～1052は，片彫蓮弁文で蓮弁の中心に稜はない。1053～1060は，蓮弁の中心に稜をなす，いわゆる鎬蓮弁文である。1058～1060は，口縁から高台まで残存し，畳付から高台内面まで露胎である。1061～1064は，外面に鎬蓮弁文，見込みに草花文様が施されている。

1065～1074は，大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅳ類（G期：14世紀初頭～中頃）に比定されるものである。龍泉窯系青磁椀Ⅰ～Ⅲ類の雰囲気と，龍泉窯系青磁椀上田Ｂ・Ｄ類の形状を併せ持つ過渡期の陶磁器である。1065～1068は，やや高い角高台で，高台外端を広く斜めに面取りする。高台内面は中央が凸状にふくらんでい



第215図　青磁４


1058
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068
1069
0
10cm

第216図　青磁５

る。見込みには，草花文様の印文を加えている。1069の形状は前述と同じタイプだが，見込みが無文である。1070～1072は，外面に蓮弁文が施されている。1073は口縁部が，1074は底部が欠損しているため，Ⅳ類より古くなる可能性がある。

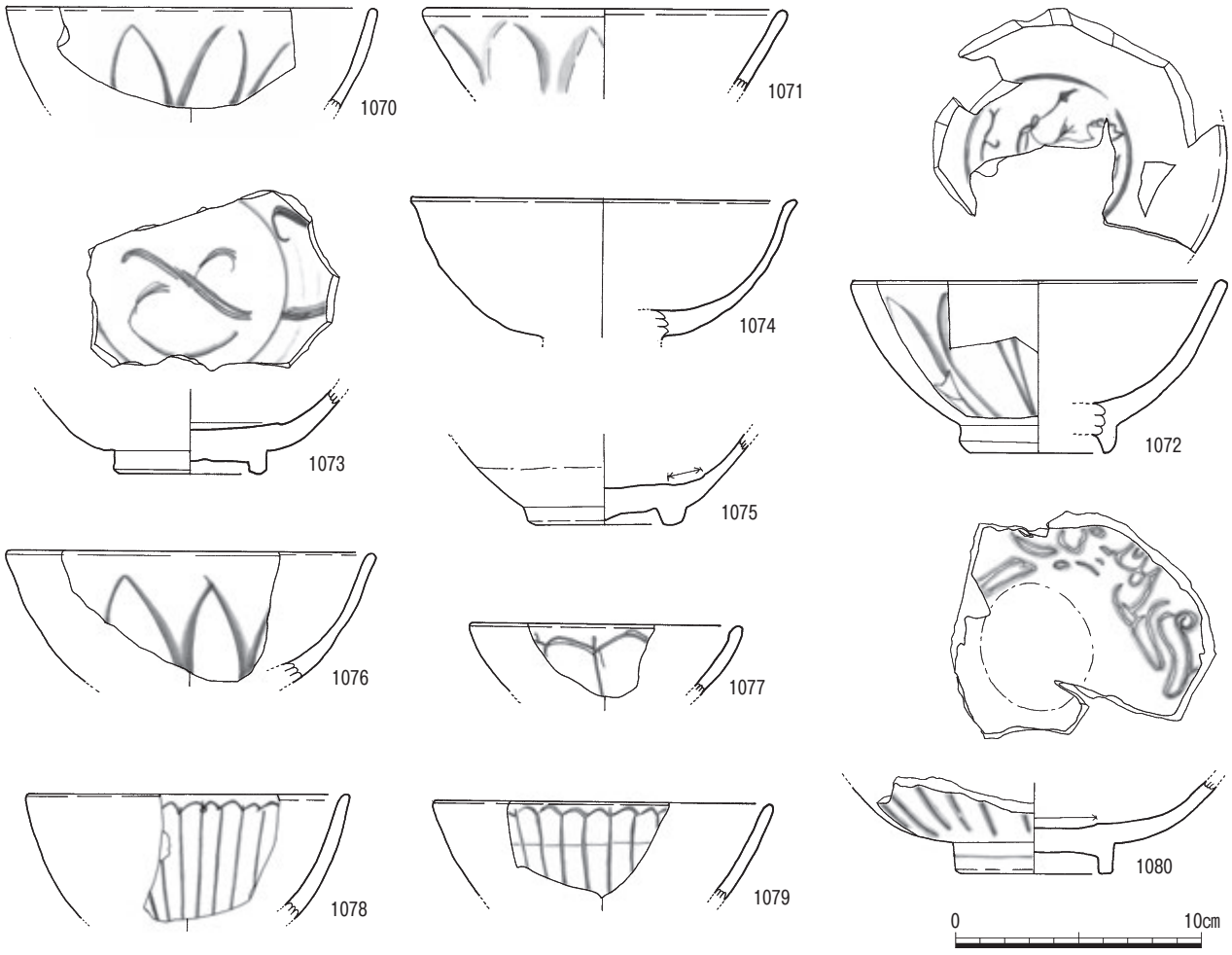
1075は，福建省産青磁椀である。体部下半から高台内面まで露胎し，見込みの釉を輪状に掻き取っている。元代以降，龍泉窯系青磁椀Ⅳ類に対応するものである。

1076～1091は，上田分類のＢ類に比定されるものである。外面に蓮弁文を有する15世紀以降の青磁である。1076は，片切彫りにより蓮弁を表現している。1080は，内面に陽刻を加えているが，残存部分が少ないため詳細はよくわからない。1081は，見込みに草花文の印文を加えている。1091は，蓮弁文の上部に雷文を省略したような線刻が施されているが，蓮弁の線刻がはっきりしていることからB類としている。

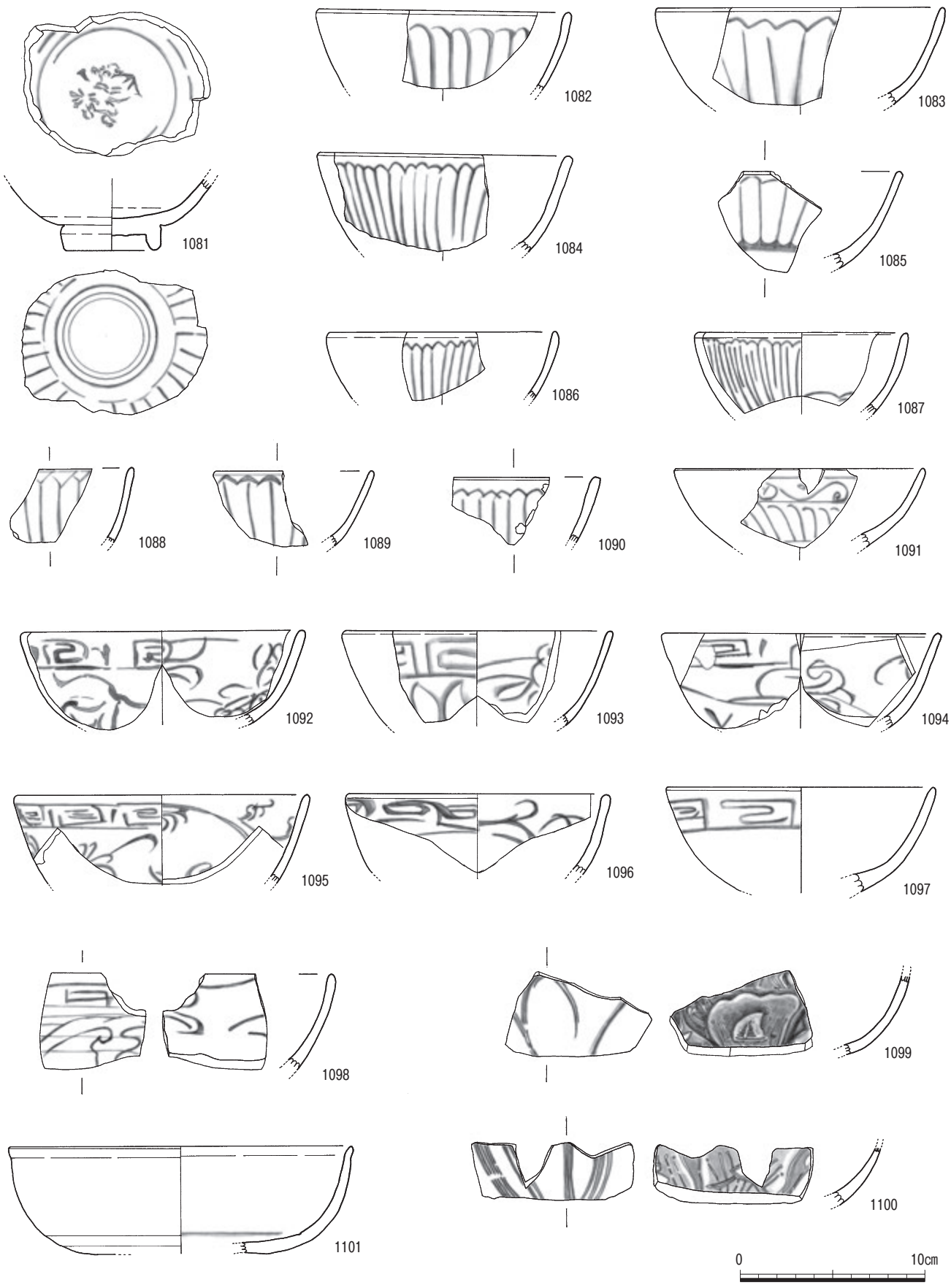
1092～1104は，上田分類のＣ類に比定され，口縁部外面に雷文帯を有するものである。1092～1098は，口縁部から胴部にかけて雷文帯が残る。1093は雷文帯の下部に蓮弁文を施している。1092～1095は，角張ったはっきりとした雷文だが，1096～1098は，曲線で簡略化した雷文である。1099・1100は，内面にラマ式蓮弁の陽刻を施す。1101は，雷文帯が見られないが，C類の器高をそのまま低くした器形であるため，C類の大椀と考えられる。1102～1104は，見込みに印文を加えている。

1105～1116は，上田分類のＤ類に比定されるものである。口縁部が外反し，高台外面まで施釉され，高台内面は露胎である。畳付の釉は削り取る。1105・1106は，見込みに草花文の印文を加えている。1106は，内面にも草花文の陽刻を施している。1107～1112は，見込みの釉を円状に掻き取っている。1107は，体部内面を８分割し，その中に草花文が入る陽刻を施している。1113は，見込みの釉を輪状に掻き取っている。1114～1116は，底部が欠損するものである。1116は，透明感の強い釉が薄くかかるため，体部の回転ヘラ削り跡が見える。

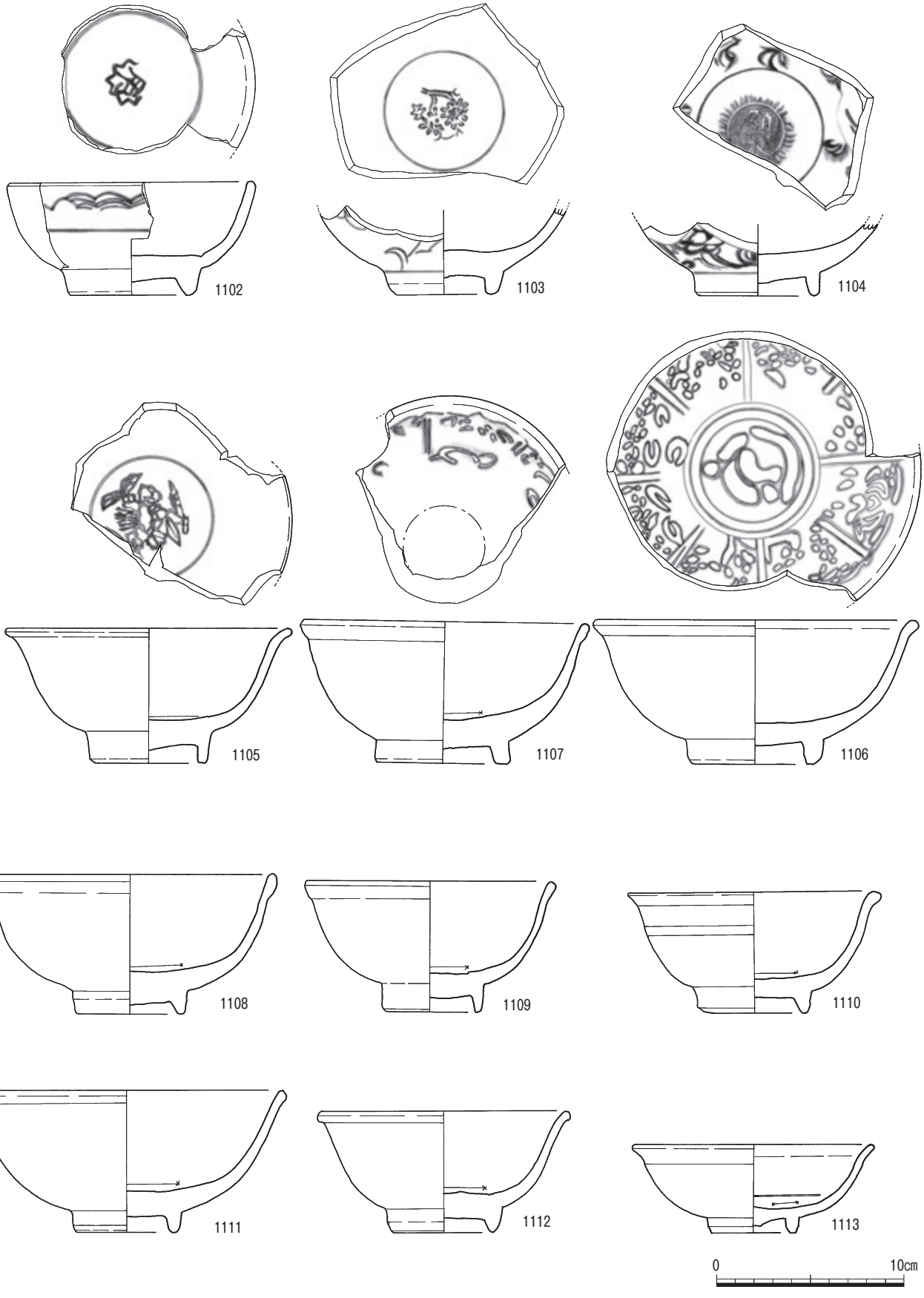
1117～1124は，上田分類のＥ類に比定され，口縁部が内湾するものである。1120・1121は，無文のためにE類に置くが，内湾が緩やかなためC類の可能性もある。1122～1124は，口縁部が欠損しているため，D類の可能性もある。



第217図　青磁６


1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1089
1090
1091
1092
1093
1094
1095
1096
1097
1098
1099
1100
1101
0
10cm

第218図　青磁７

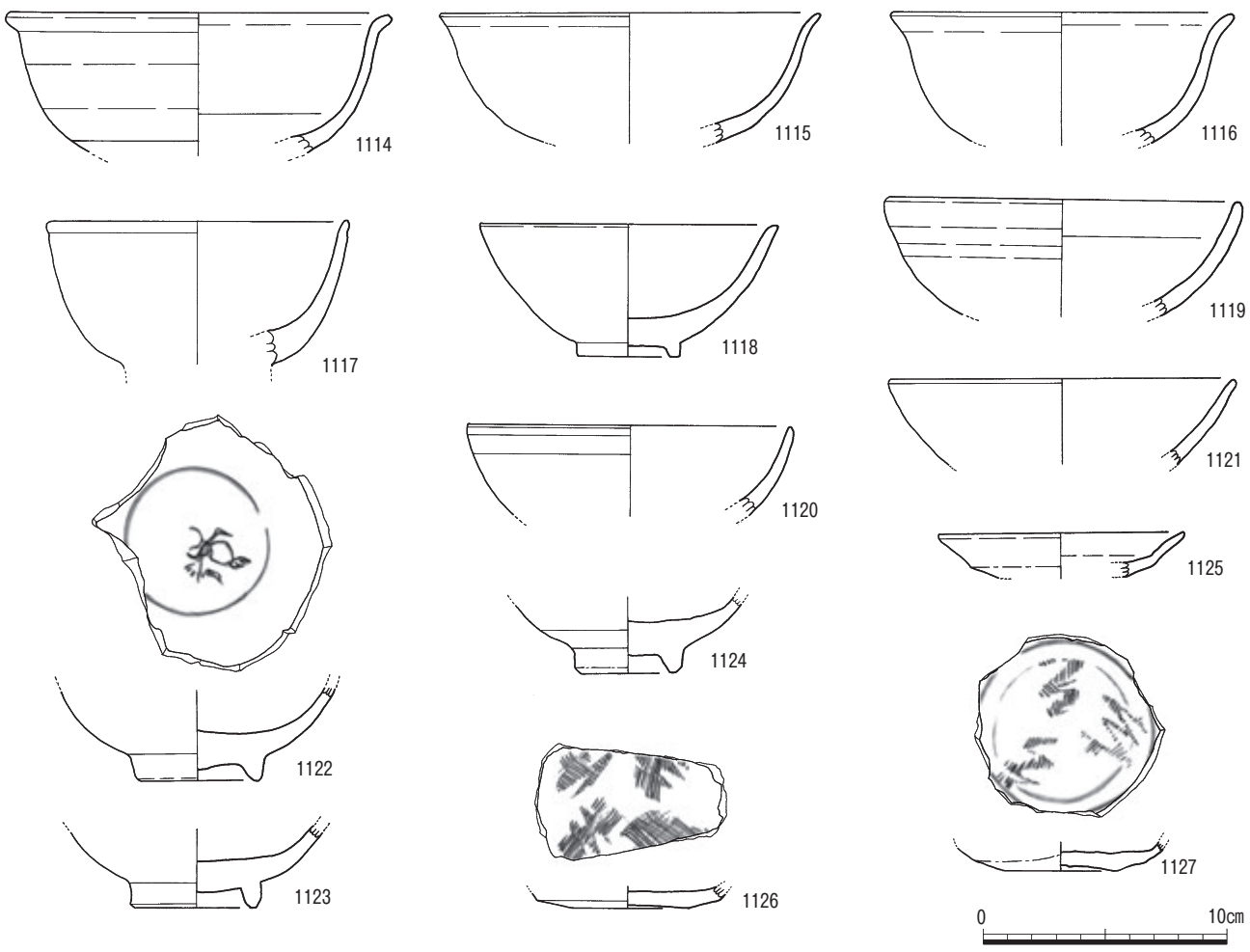

1102
1103
1104
1105
1107
1106
1108
1109
1110
1111
1112
1113
0
10cm

第219図　青磁８

1125・1135は，大宰府分類の同安窯系青磁皿Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。1125は，体部外面下半は露胎で，内・外面とも無文である。1126～1128は，体部外面下半は露胎で，内面にジグザグ状の櫛点描文を施している。1128は，ヘラによる文様が施されている。1129～1135は，全面施釉後，底部外面の釉を掻き取っている。1129・1130は，内面にジグザグ状の櫛点描文を施している。1131～1135は，櫛点描文にヘラによる文様も加えている。

1136～1141は，元代までの皿である。1136～1139は，体部中位で屈曲し口縁部は直に引き出す，大宰府分類の龍泉窯系皿Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。1136・1139は，底部の釉を掻き取り，見込には櫛目の草花文を施す。1140は，大宰府分類の龍泉窯系皿Ⅳ類（G期：14世紀初頭～中頃）に比定されるものである。高台を有するもので，内・外面とも無文である。1141は，福建省産の皿で，龍泉窯系Ⅳ類に対応するものである。体部下半から高台内面まで露胎し，見込みの釉を輪状に掻き取っている。高台内面と見込みに赤化した部分がある。

1142～1160は，明代の皿である。1142～1147は，口縁が外反するタイプの皿である。1142は，高台内面の釉を輪状に掻き取っている。1143・1146は，高台内面が露胎している。1143は，見込みの釉を円状に掻き取っている。1144は，高台内面と見込みの釉を円状に掻き取っている。1145は，高台内面の釉を円状に掻き取っている。1147は，高台内面が露胎し，見込みに草花文の印文を加えている。1148～1151は，口縁が直口するタイプである。1149・1150は，高台内面の釉を輪状に掻き取り，内面に棒状の工具で放射状に模様を描き，見込みに印文を加えている。1151は，畳付から高台内面が露胎で，外面に回転ヘラ削りの跡が見られる。1152～1157は，稜花タイプの皿である。1152～1155は，見込みに印文を加えている。1155は，見込みに双魚紋が施されている。高台内面には，水銀朱による「大」の文字が書いてある。顔料の分析については，第４章に示している。1156は，内面を花弁状に深く削り，立体的な造形である。白磁の1258と形状が似ている。1158～1160は，碁笥底を持つ皿である。これらの碁

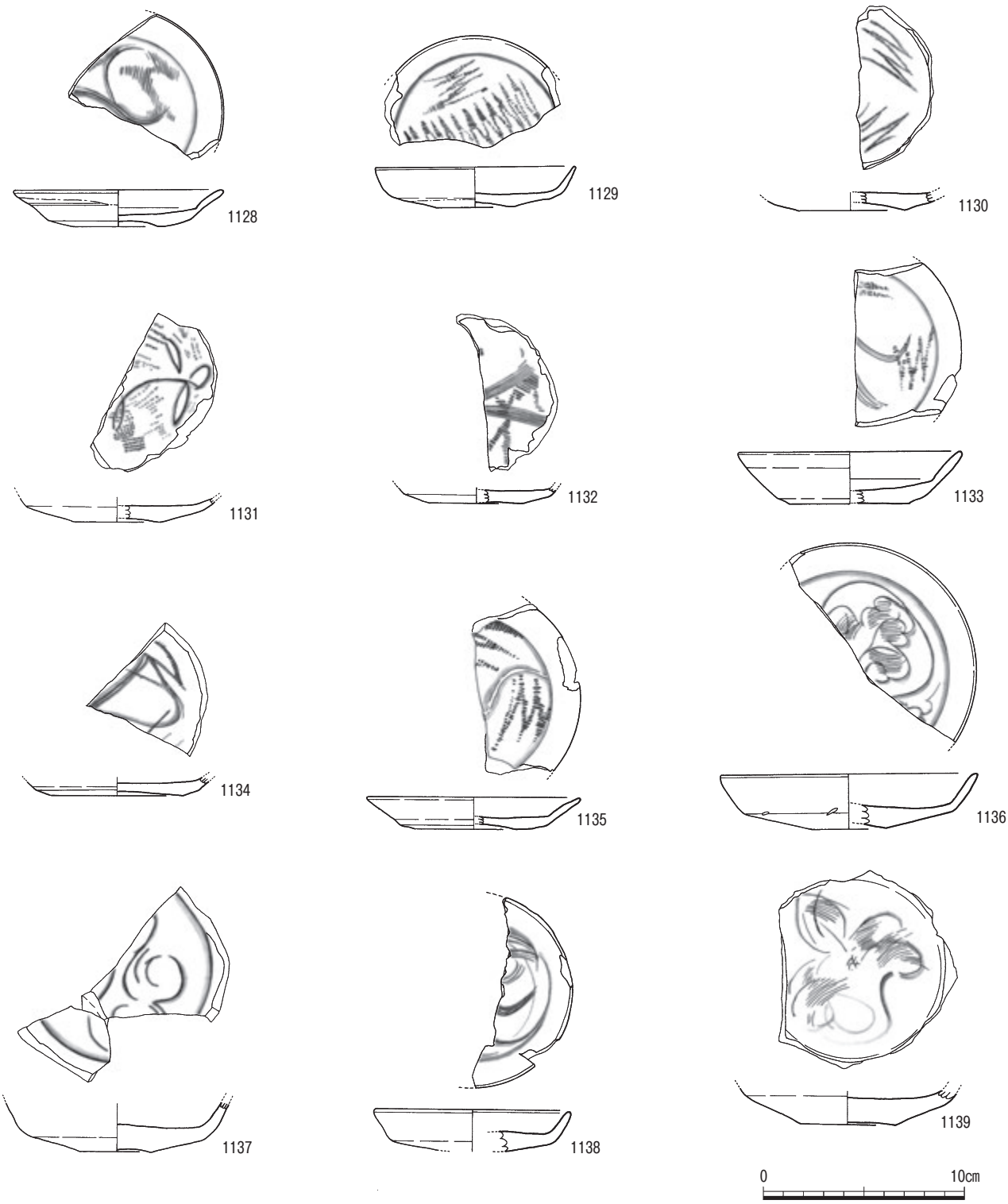


第220図　青磁９

笥底は全て露胎である。

1161～1167は，青磁の浅形椀と小椀である。1161は，大宰府分類の龍泉窯系浅形椀Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。口径15.8㎝で，畳付から高台内面は露胎である。1162は，大宰府分類の龍泉窯系小椀Ⅱ類（E期：13世紀初頭～後半）に比定されるものである。外面に鎬蓮弁文を有する。1163～1165は，大宰府分類の龍泉窯系小椀Ⅲ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。全面施釉後，高台端部周辺の釉を掻き取っている。掻き取られた境は，赤色に発色している。1163は，外面に鎬蓮弁文を有する。1166・1167は，分類ができなかったもので，外面に蓮弁を持つ小椀である。

1168～1172は青磁の坏である。1168は，大宰府分類の



第221図　青磁10

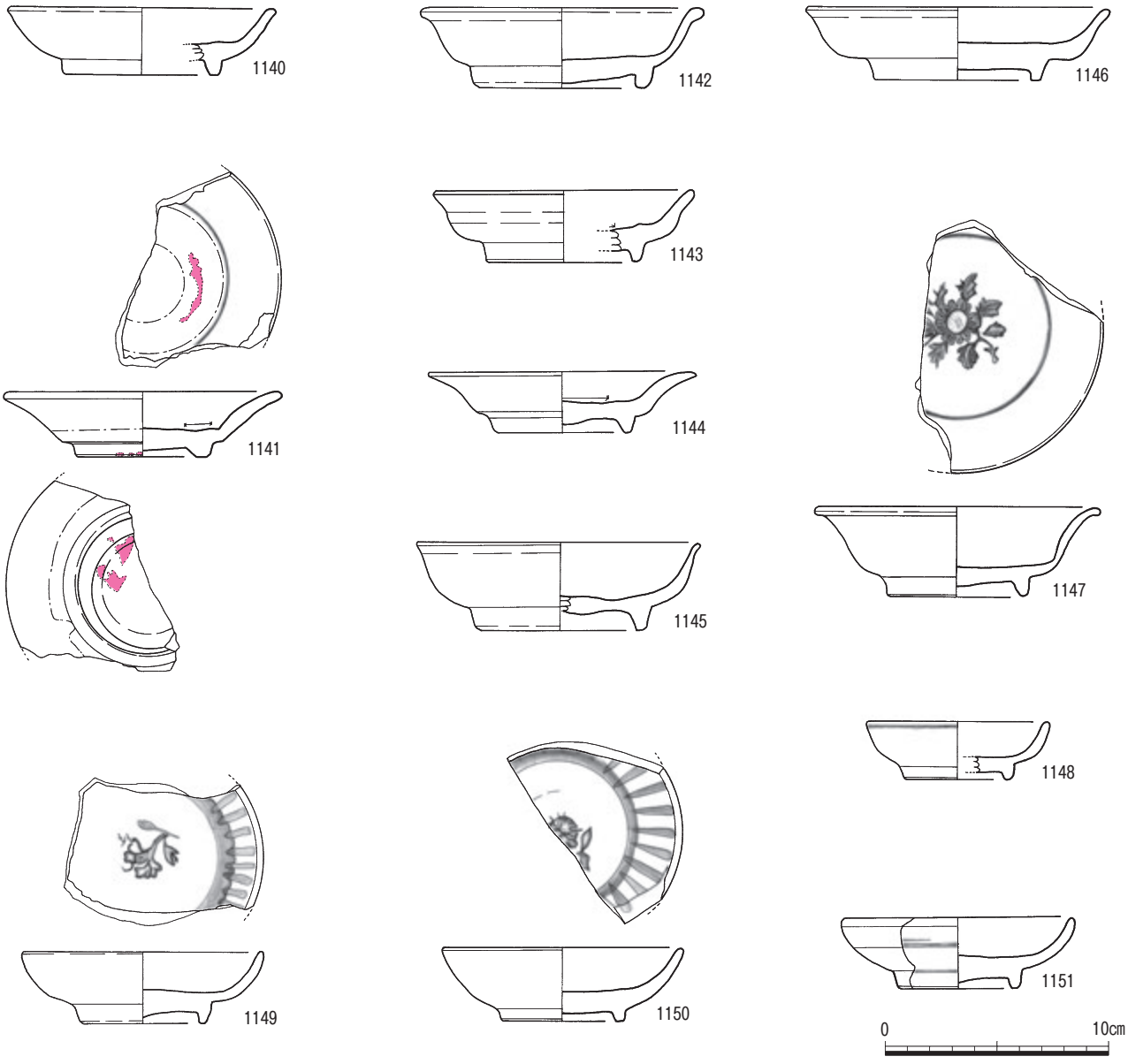
龍泉窯系Ⅲ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定される坏である。見込みの幅が広いことから坏とした。Ⅲ類の特徴である高台端部の掻き取り部分が赤く発色している。1169は，大宰府分類の龍泉窯系Ⅳ類（G期：14世紀初頭～中頃）に比定される坏である。1170～1172は，外面に蓮弁を持つ坏である。

1173～1181は青磁の盤である。おもに明代に製造されたと考えられる。1173・1174は，高台を持ち，1175・1176は，碁笥底となる盤である。1177は，内面全体にヘラ彫りが施されている。1178は，口縁部の鍔が上方に向いた盤である。1177と同様に内面全体にヘラ彫りが施されている。1179は，口縁部のつばが外側に開いた盤である。内面に線刻による文様が薄く施されている。1173・1180は，口縁が稜花となっている。1181は，器肉が薄く，折口皿と考えられる。

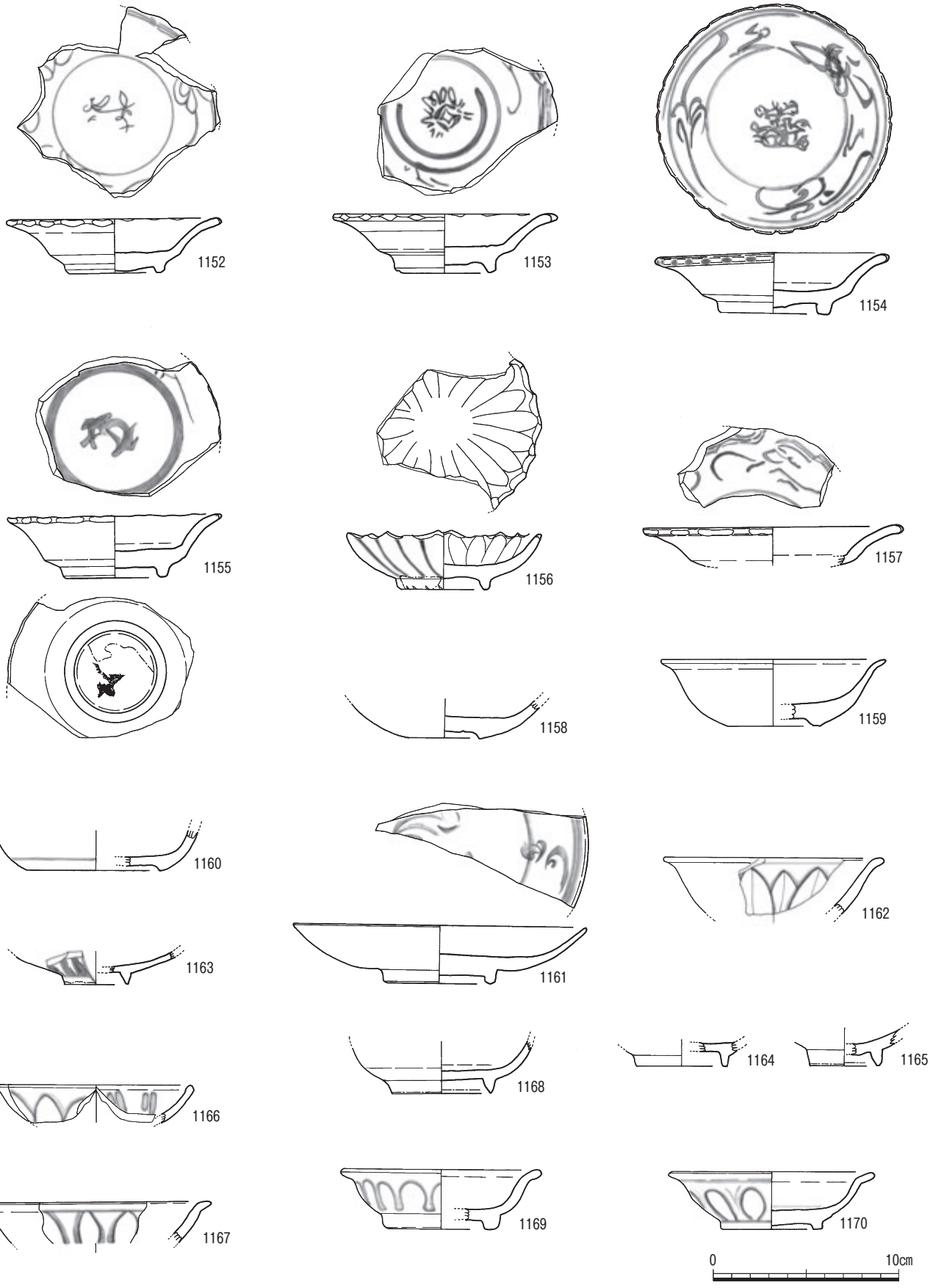
白磁（第225～231図）

1182は，大宰府分類の白磁椀Ⅰ類（A期：８世紀末～10世紀中頃）に比定されるもので，小振りで上質の玉縁を持つ口縁部である。芝原遺跡からは，２点出土している。

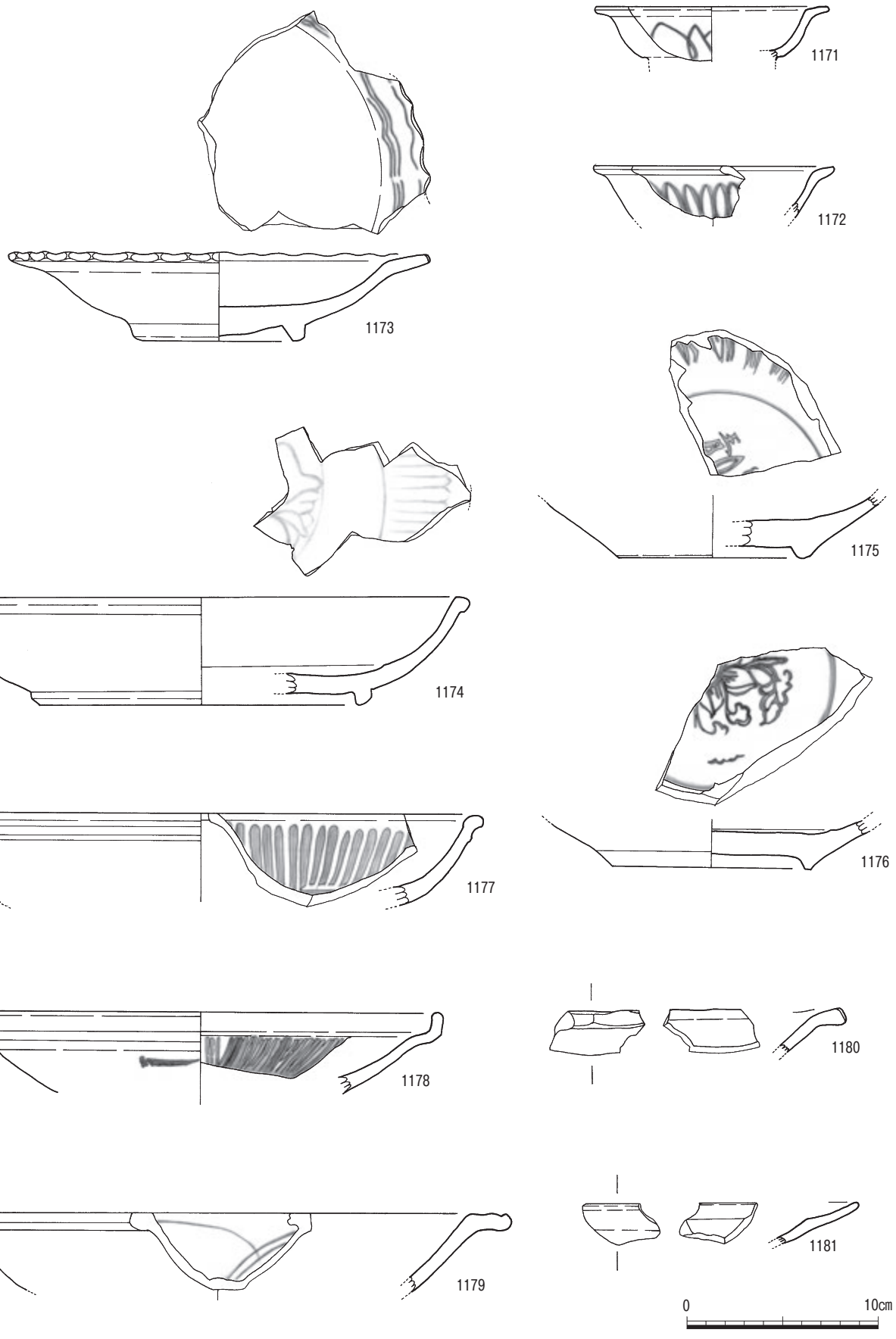
1183・1184は，大宰府分類の白磁椀Ⅱ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。高台部外面は直に，内面は斜めに削り，斜めの面には削り工具のすじ目を残している。胎土には微細な黒色粒を含み，体部外面下半以下は露胎である。1183は，見込みに段を１段持つ。



第222図　青磁11


1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
1162
1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1170
0
10cm

第223図　青磁12



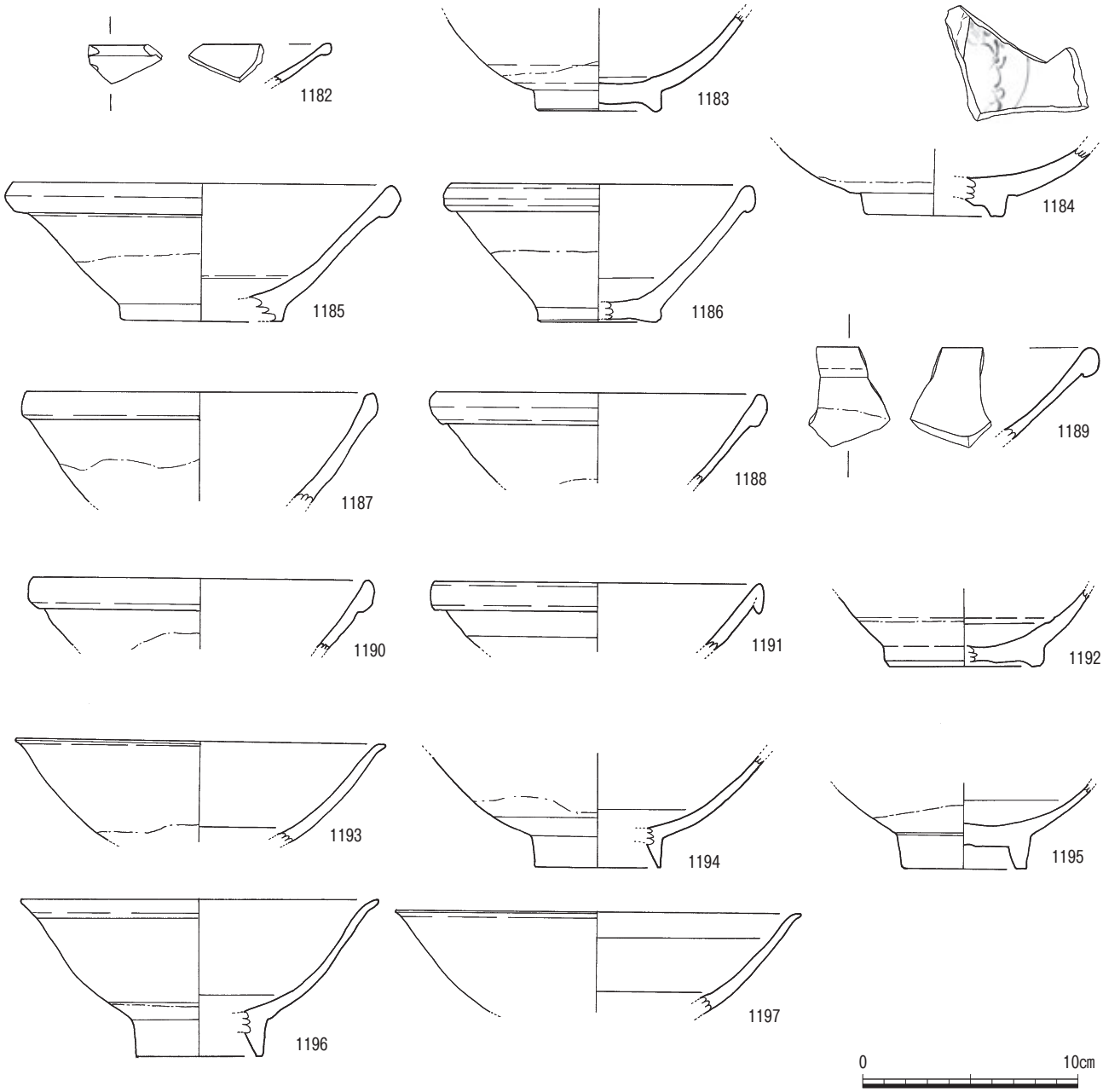
第224図　青磁13

1185～1192は，大宰府分類の白磁椀Ⅳ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。肉厚な玉縁状の口縁部を有し，体部の器肉が比較的厚いものである。体部外面下半から高台内面まで露胎である。1185は見込みに段を１段持ち，1186は，見込みに段を１段と沈線を持つ。高台は幅広で削り出しが浅いため，底部の器肉も厚くなっている。1187～1191は，口縁部から体部上半まで，1192は底部である。

1193～1200は，大宰府分類の白磁椀Ⅴ類（C期：11世紀後半～12世紀前半，嘴状の口縁端部を持つⅤ-4類はD期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。口縁部を水平あるいは水平に近い角度で外反させ，高台は細く高く直立するものである。1193～1196は，内・外面とも無文で，見込みに１本の沈線を持つ。1197・1198は，見込みと内面体部に２本の沈線を持つ。1199は，嘴状の口縁端部を持ち，内面に短い櫛目文が施されている。1200は，内面から見込みまで櫛目文が施されている。

1201は，大宰府分類の白磁椀Ⅵ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。直径12.8㎝の中型椀で，器高は低く浅形を呈する。口縁部は弱く外反し，内・外面とも無文である。

1202は，大宰府分類の白磁椀Ⅶ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。体部は高台より直線的に延び，ロート状を呈する。体部上半は外方へ開き，



第225図　白磁１

口縁部は僅かに外反し，口縁部に輪花を有する。

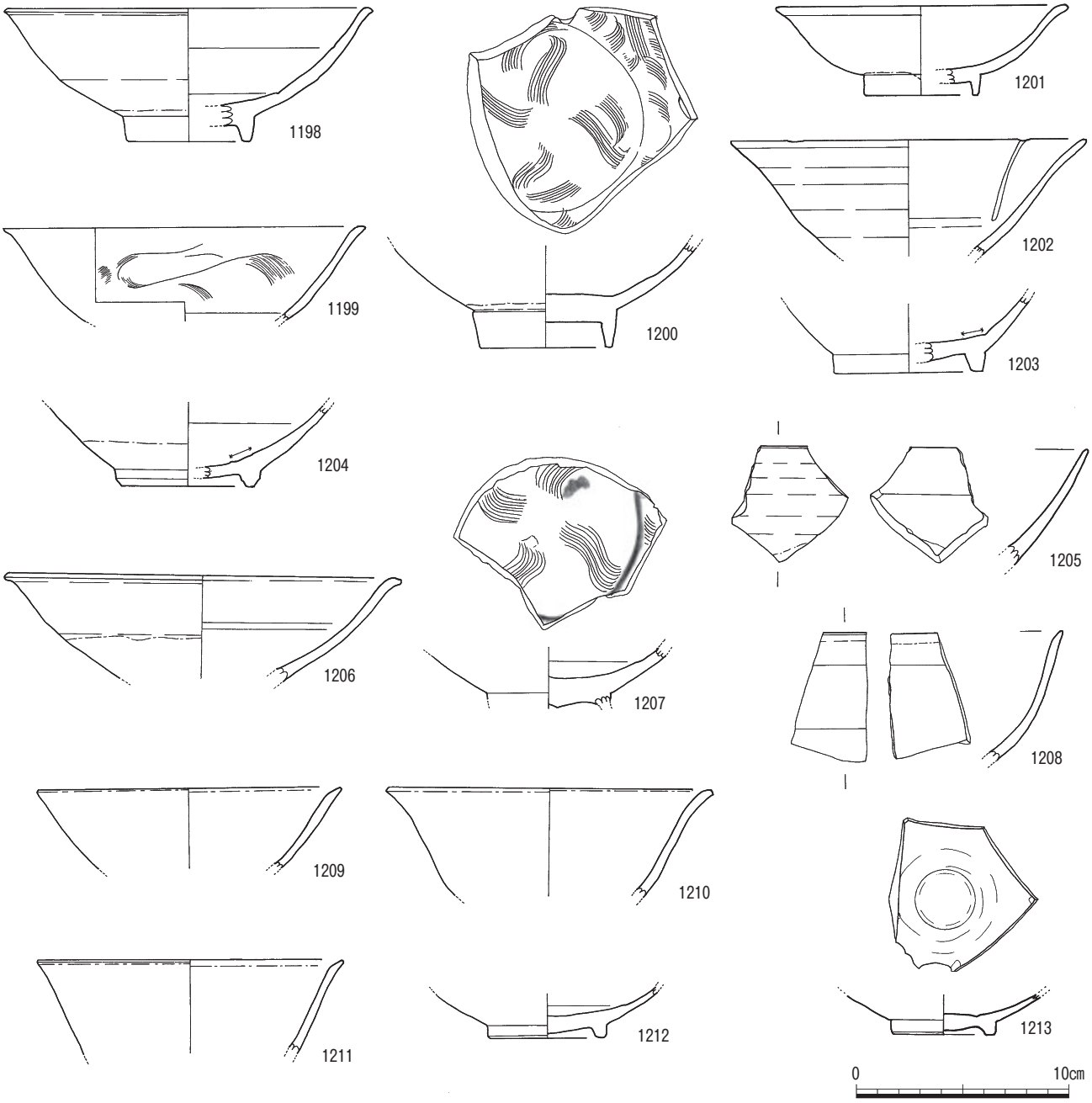
1203～1207は，大宰府分類の白磁椀Ⅷ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるもので，見込みの釉を輪状に掻き取ったものである。体部は，斜上方に直線的に開き，口縁部は外反する。1205・1206は，内面上部に沈線を有する。1207は，見込みの釉の掻き取りがなく，内面に櫛目文を施していることから，Ⅷ類の中では古相を呈す。

1208～1213は，大宰府分類の白磁椀Ⅸ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。口縁部周辺を施釉後に掻き取る，いわゆる口禿の椀である。1212は，見込みに高台径より広い圏線を持つ。全面施釉であるが，畳付と高台内面の一部には施釉が届いていない。1209と同一個体である。

1214～1219は，14世紀～15世紀の白磁椀である。1216は，見込みに目跡が四か所残る，完形の椀である。1217は，体部外面下半は露胎し，見込みの釉を輪状に掻き取っている。

1220は，大宰府分類の白磁皿Ⅱ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるもので，口縁部が断面三角形の玉縁状になっている。体部外面下半以下は露胎である。芝原遺跡で白磁皿Ⅱ類はこの１点のみの出土である。

1221～1225は，大宰府分類の白磁皿Ⅲ類（C期：11世紀



第226図　白磁２

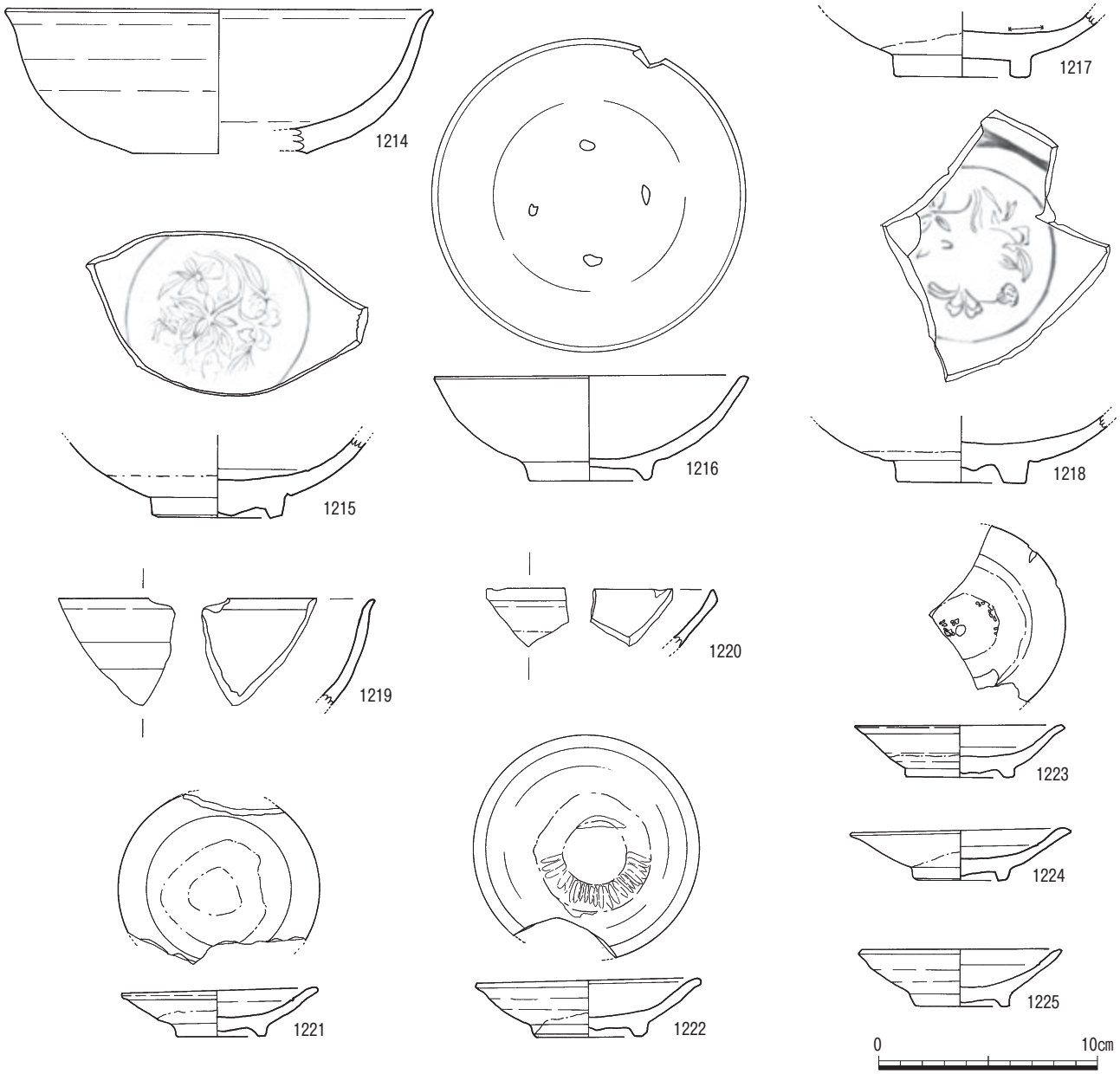
後半～12世紀前半）に比定されるものである。高台はやや高く，口縁部は直口もしくは僅かに外反する。体部下半から高台内面まで露胎である。1221～1223は，見込みの釉を輪状に掻き取っている。1224・1225は，見込みの釉の掻き取りが見られない。焼成時，最上段に重ねたものと考えられる。1225の内面には砂粒が付着している。

1226・1227は，大宰府分類の白磁皿Ⅵ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。口縁部が直口で，底部が僅かに突き出している。1226・1227は，体部上位で内湾し，屈曲部内面に沈線状の段を有する。微細な黒斑が胎土に混じり，黄色味の釉が施される。

1228・1229は，大宰府分類の白磁皿Ⅷ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。口縁は直口で，体部は鈍角に内側へ屈曲する。1228は，見込みにヘラ描きで草花文を施している。

1230～1241は，大宰府分類の白磁皿Ⅸ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。口縁部の釉を掻き取った，いわゆる口禿の皿である。1230・1231・1233～1241は，全面施釉で，1232は底部が露胎する平底の底部である。1230・1234は，底部の釉を板状の工具でのばしている。1237～1241は，口縁部を朝顔型に外反させている。

1242～1260は，Ⅸ類以降の白磁皿である。1242～1250は，森田Ｄ群に比定されるものである。1242～1244は，高台に四か所抉り込みを入れた割高台で，見込みに四か所の目跡が残る。1245は，抉り込みを五か所入れた割高

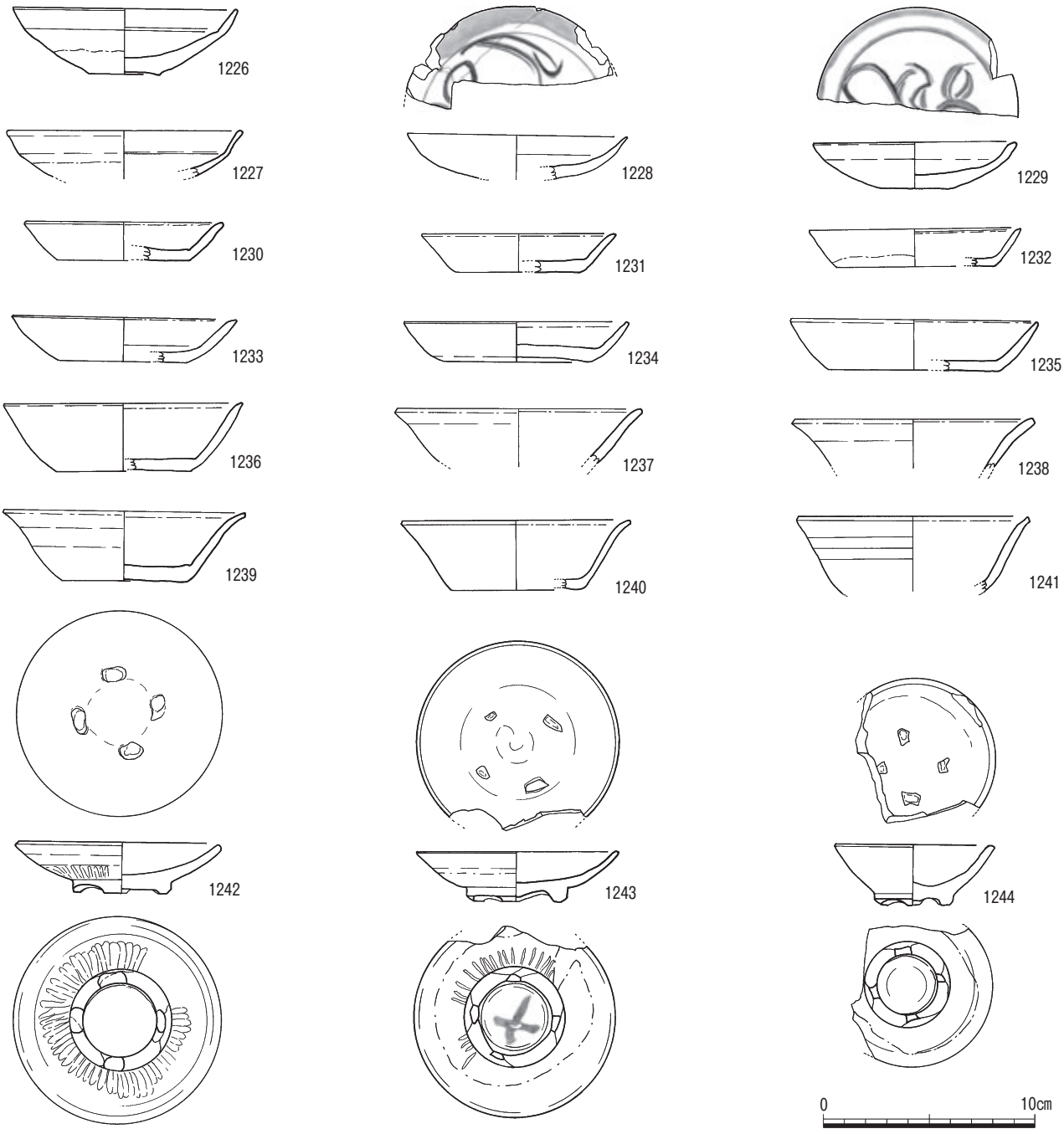


第227図　白磁３

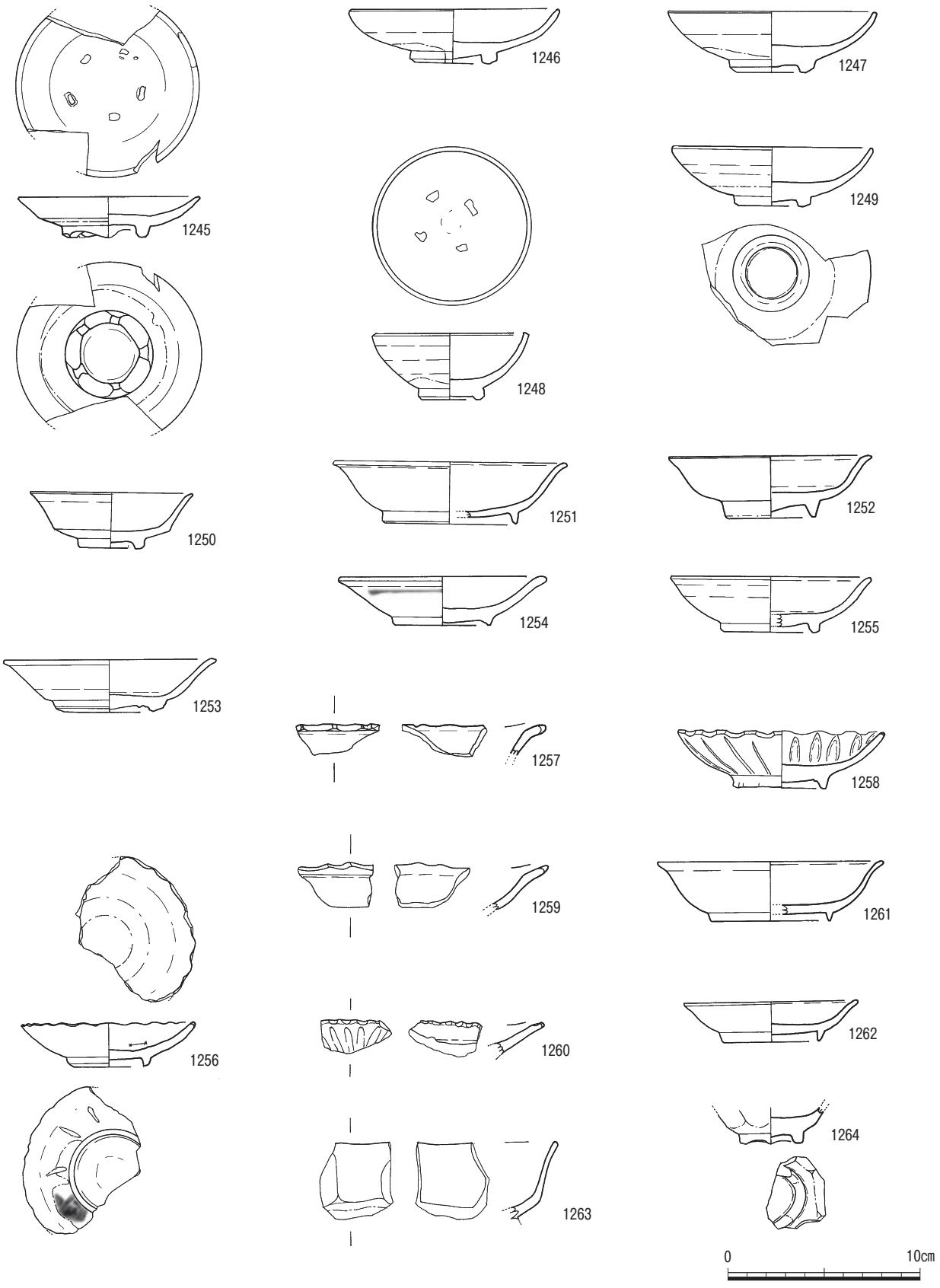
台で，目跡も五か所残る。1246・1247は高台に抉り込みがなく見込みに目跡もない。1248は，高台に抉り込みはないが，見込みに目跡が四か所残る。1249は，外面下半の露胎部分に黒色を塗るものである。1250は，体部中位で屈曲し，その後緩やかに外反する。

1251～1260は，森田Ｅ群に比定されるものである。1251～1255は，高台を持ち，口縁が外反するタイプである。1256～1260は，稜花皿である。1256は，体部外面下半から高台内面まで露胎し，見込みの釉を輪状に掻き取る。1258は，内面を花弁状に浅く削り出し，立体的な造形である。青磁1156と形状が似ている。

1261～1264は，白磁坏である。1261・1262は，畳付の周辺に砂粒が付着している。1263・1264は，底部が露胎し，胴部が八角形を呈する多角杯である。1265～1267は，壺である。1265は，白磁の壺である。口縁端部を丸く折り曲げ，内面まで施釉がされている。1266は，白磁の水注か壺の首部から肩部である。内面まで施釉されている。1267は，青磁の小型壺である。外面に草花文の線刻



第228図　白磁４


1245
1246
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1259
1260
1261
1262
1263
1264
0
10cm

第229図　白磁５

が，内・外面に厚めの釉が施されている。

1268～1272は，瓶である。1269は，小型瓶の口縁部である。1268・1270は，口縁部を丸く折り曲げた瓶か耳壺の口縁部から肩部である。1271は，大型瓶の底部である。底部外面の一部と畳付から高台内面までが露胎である。1272は，小型瓶の底部である。全面施釉後に畳付の釉を掻き取っている。

1273～1279は，口径が約９㎝～15㎝の小型の鉢である。1273・1275・1276は，口縁部が内湾するものである。1273は，内面が露胎する。1274・1277は，体部上半から内側に屈曲し，内面縦方向に等間隔の凹みを持つものである。1278は，平底で底部は露胎する。1279は，白磁の胎土を持つ残存部が全面露胎の口縁部で，口縁部の膨らむ部分に直径0.5㎝程度の穴が残る。口縁部形成時に残されたものと考えられる。大宰府分類の白磁椀Ⅳ類とも考えられる。

1280は，燭台の天蓋か壺の上蓋と思われる。表面は青磁釉が施釉されているが，裏面は露胎する。

1281～1286は香炉である。1281・1282は同一個体と思われる。1281・1283・1284は高台の脇に形骸化した３足がつく。1283は内面下半が露胎する。1286は，高台に抉り込みが三か所ある。

1287～1291は，小形坏である。器壁は非常に薄く，口縁部は外反する。近世に相当する遺物もあるが，白磁の範疇としてここに掲載する1287は，見込みの釉を輪状に掻き取っている。1288～1290は，口縁部が鋭く外反している。1291は，外面に太めの線刻が縦に施されている。

青白磁（第231図）

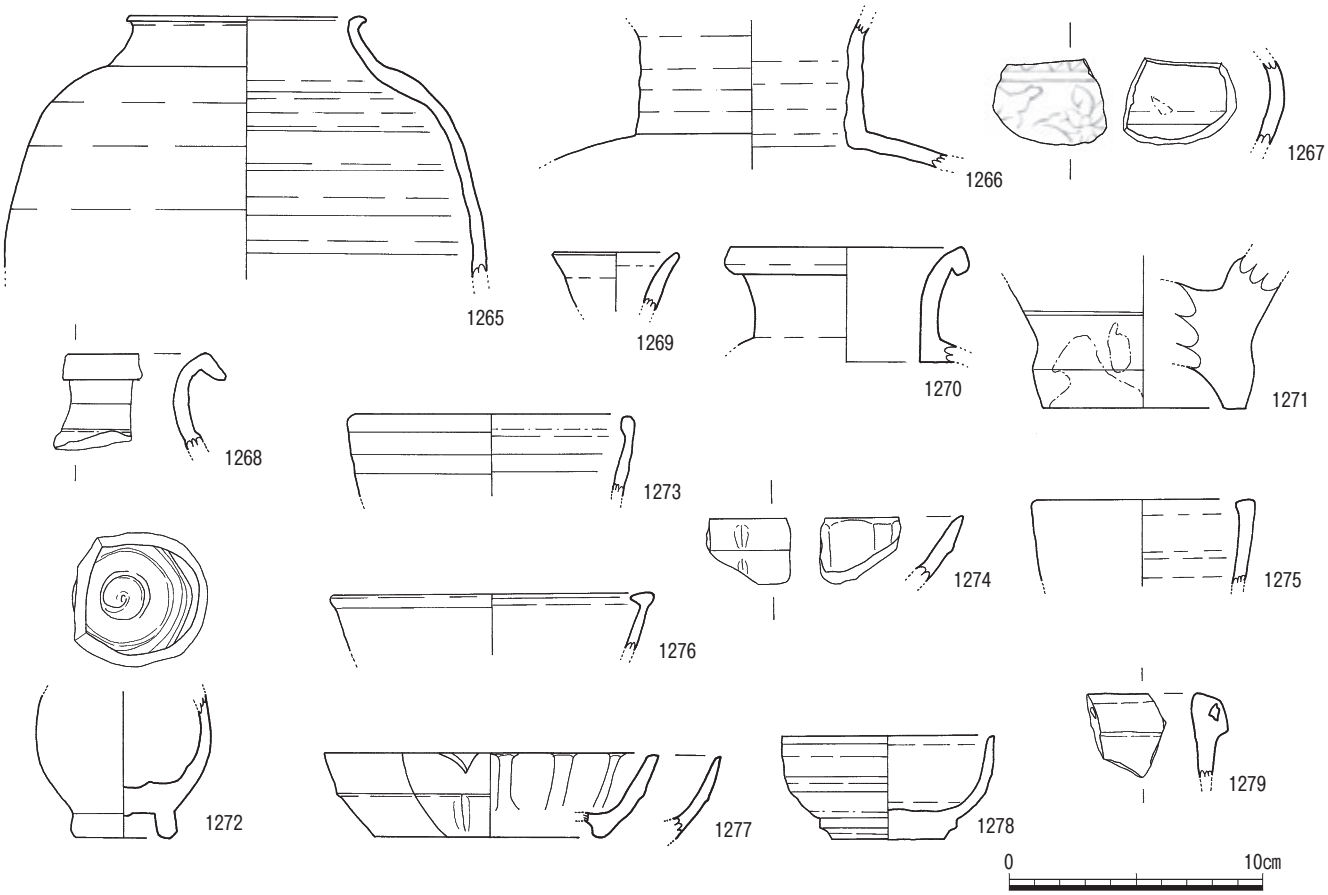
1292～1294は，小壺の蓋である。内面は露胎である。1292・1293は，上面に草花文を型押しされている。1294は上面に菊座状の文様を有している。

1295～1299は，合子である。1295は，型造りによる合子の蓋である。天井部には草花文が型押しされ，側面は無文，内面は露胎である。1296～1299は，型造りによる合子の身である。胴部下半と受け部は露胎である。1296～1298は，側面に菊花文を有している。

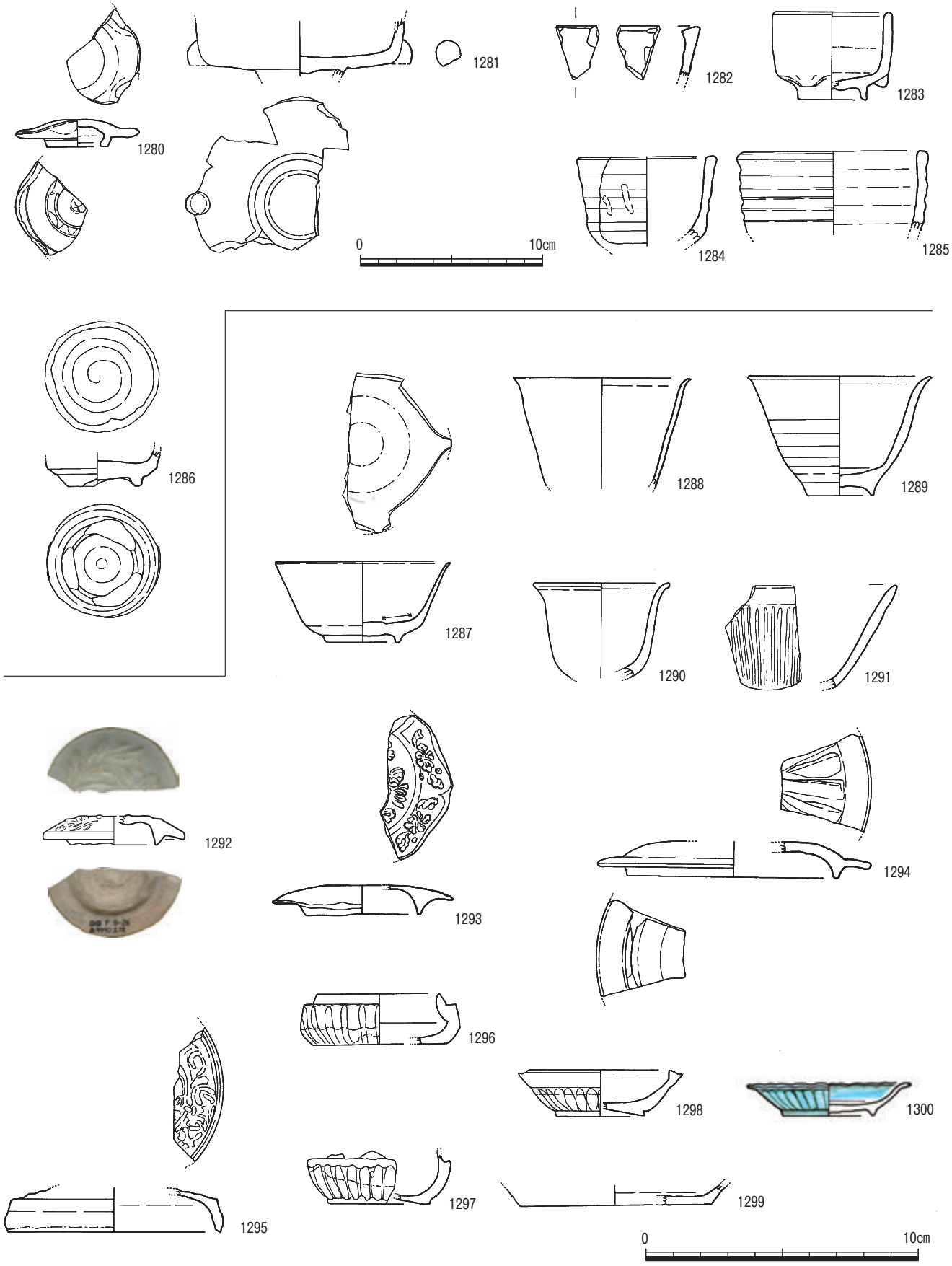
1300は，景徳鎮産の翡翠釉の施された稜花の小皿である。高台から高台内面まで露胎である。体部外面には型造りによって菊座状の文様が浮き出ている。

青花・赤絵（第232～238図）

1301～1304は，小野分類の碗B群（H期：14世紀後半～15世紀前半）に比定されるもので，端反りの碗である。1301・1302は，内面と外面の口縁部に界線があり，貫入



第230図　青磁・白磁



第231図　青磁・白磁・青白磁

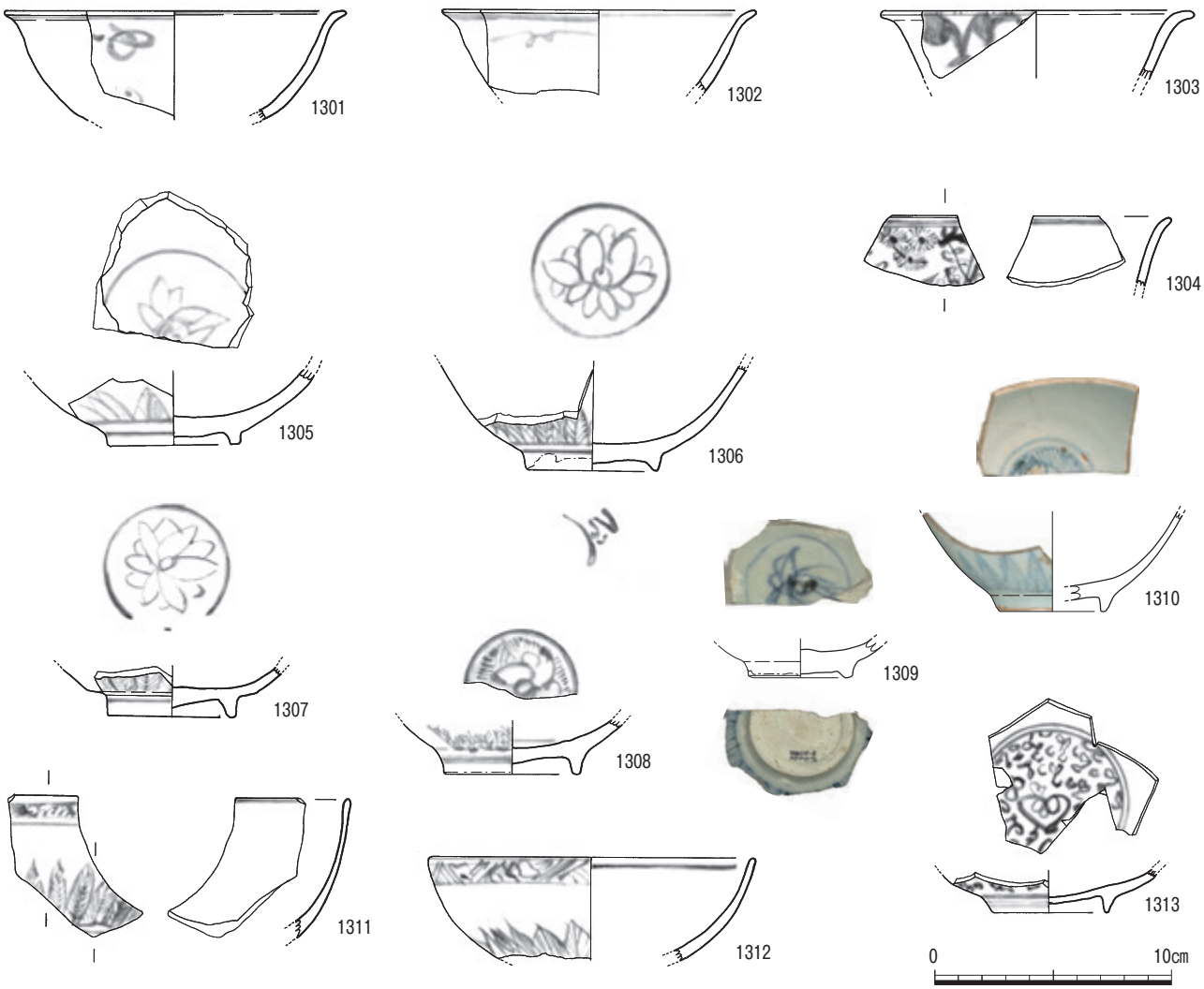
が見られる。1303は，稜花碗である。1304は，景徳鎮窯系の端反り碗である。

1305～1325は，小野分類の碗C群（J期：15世紀末～16世紀前半・中頃）に比定されるもので，いわゆる「蓮子碗（レンツー碗）」である。広く開いた胴を持ち，内面見込みが高台内に凹む器形となる。1305～1314は，外面胴部に芭蕉葉文が描かれている。1306～1308は，見込みに蓮花文を持つ。1306は，高台内面に梵字を持つ。1309は，見込みが緩やかに盛り上がっているが，外面に芭蕉葉文が描かれていることからC群に含めた。1310は，見込みに法螺貝が描かれている。1311は，外面口縁部に波濤文帯が描かれている。1312は，外面口縁部に襷文帯が，1313・1314は，外面胴部と見込みに渦文と丸を三つ結合した文様が描かれている。1315・1316は，見込みに花卉文が，1317～1320は法螺貝がそれぞれ描かれている。1317・1318は，外面胴部に簡略化された芭蕉葉文が描かれている。1321は，腰部から角度をつけて立ち上がり，口縁が外反する碗である。外面に1313と同じく丸を三つ結合した文様が描かれている。1322～1325は，外面全体に波状の文様を描いている。1322は，見込みの釉を輪状に掻き取る。1325は，見込みにも外面と同じ波状文様を描いている。

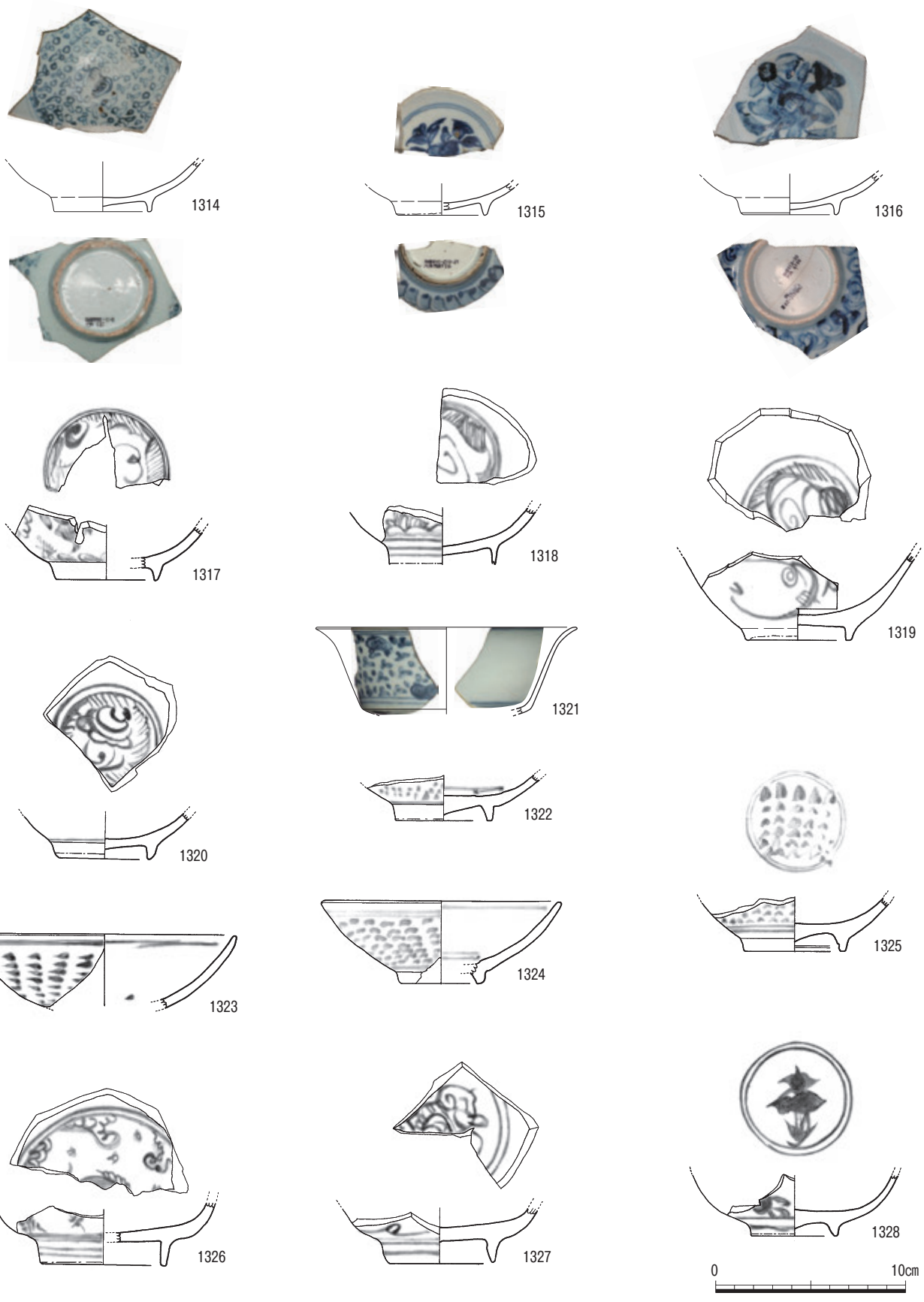
1326・1327は，小野分類の碗D群（J期：15世紀末～16世紀前半・中頃）に比定されるものである。見込みを平坦に広くとった大きな高台を持ち，胴は直線的に少し開いている。

1328～1341は，小野分類の碗E群（K期：16世紀中頃・後半～17世紀前半）に比定されるもので，見込み部分が緩やかに盛りあがる，いわゆる「饅頭心」の碗である。1329は，外面胴部に唐草文を持ち，見込みの釉を輪状に掻き取っている。1330は，見込みに山水人物が描かれ，高台内面に「萬福攸同」が記されている。1332は，外面口縁部に雷文帯，胴部に唐草文を持ち，見込みに牡丹唐草，高台内面に梵字が描かれている。1341は，外面に草花文が描かれている。

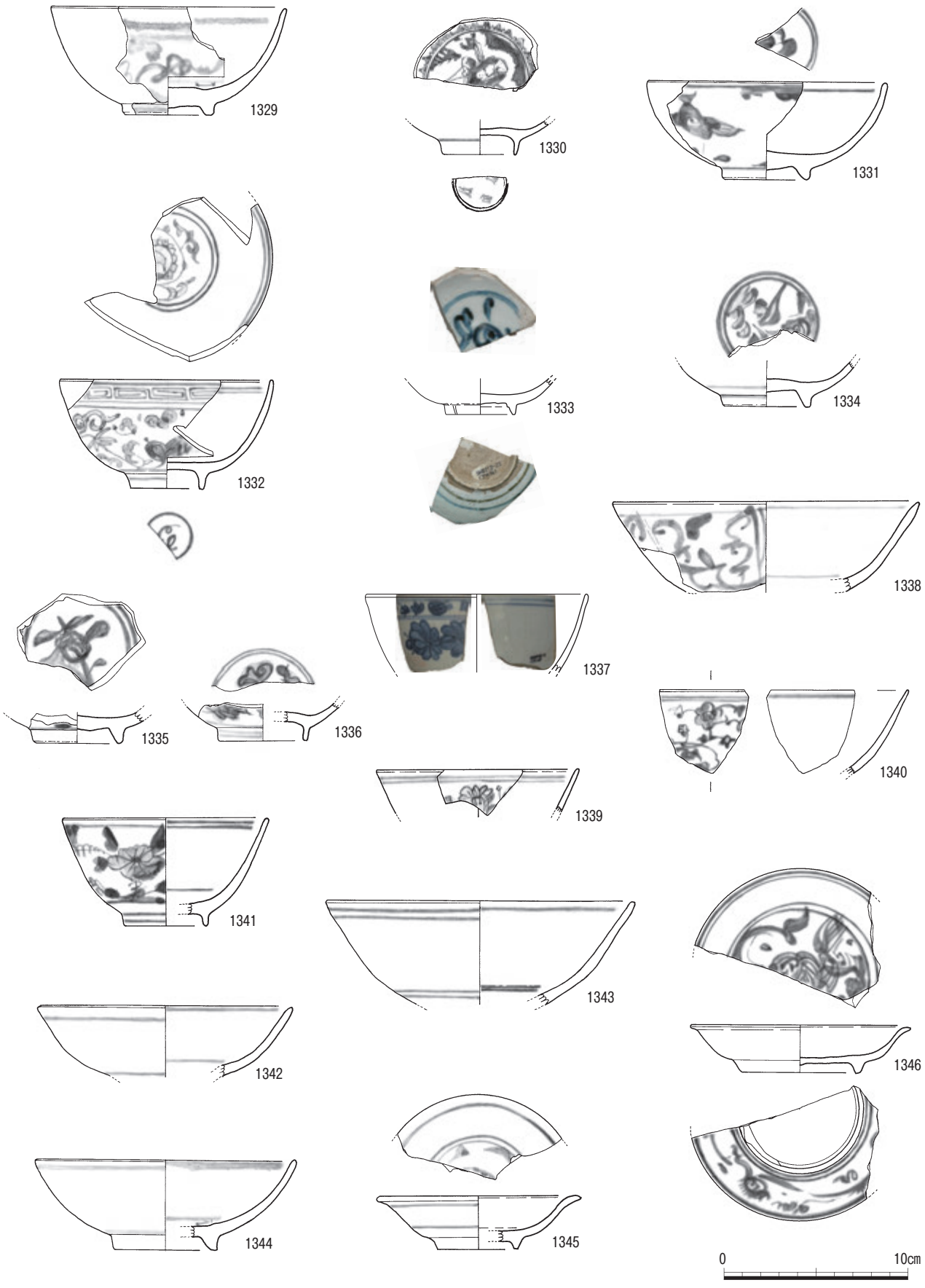
1342～1344は，界線のみ施されている無文の青花碗で



第232図　青花１


1314
1315
1316
1317
1318
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
0
10cm

第233図　青花２


1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
0
10cm

第234図　青花３

ある。

1345～1352は，小野分類の皿B群（I期～K期：15世紀中頃～17世紀前半）に比定されるものである。高台を持つ端反りの皿で，砂敷きで焼成され，畳付に砂粒が付着している。1346～1348は，外面胴部に唐草文，見込みに獅子が描かれている。1350・1352は，外面胴部に渦状の密な唐草文，見込みに十字花文が描かれている。

1353～1359は，小野分類の皿C群（J期：15世紀末～16世紀前半・中頃）に比定されるもので，碁笥底を持つ皿である。1353～1356は，口縁がかるく内湾気味におさまるもので，見込みには人形化した「喜」「福」「寿」を記している。1358は，外面胴部に芭蕉葉文を描く。1359は，口縁が外反する碁笥底皿である。文様は1350と類似し，外面胴部に渦状の密な唐草文，見込みに十字花文が描かれている。

1360は，小野分類の皿F群（K期：16世紀中頃・後半～17世紀前半）に比定されるものである。丸く内湾する胴から斜めに鍔がつく，いわゆる「鍔皿」と呼ぶもので，畳付をヘラで削り，釉を掻き取る。

1361～1368は，分類できなかった皿である。1364は，畳付に砂粒が付着し，高台内面が露胎する皿である。1365は，稜花皿で，内・外面とも胴部を八分割し，その中に花弁を描いている。見込みに蓮花を描く。畳付に砂粒が付着している。1366は，景徳鎮窯系の皿，1367・1368は，景徳鎮窯系の小皿の底部である。

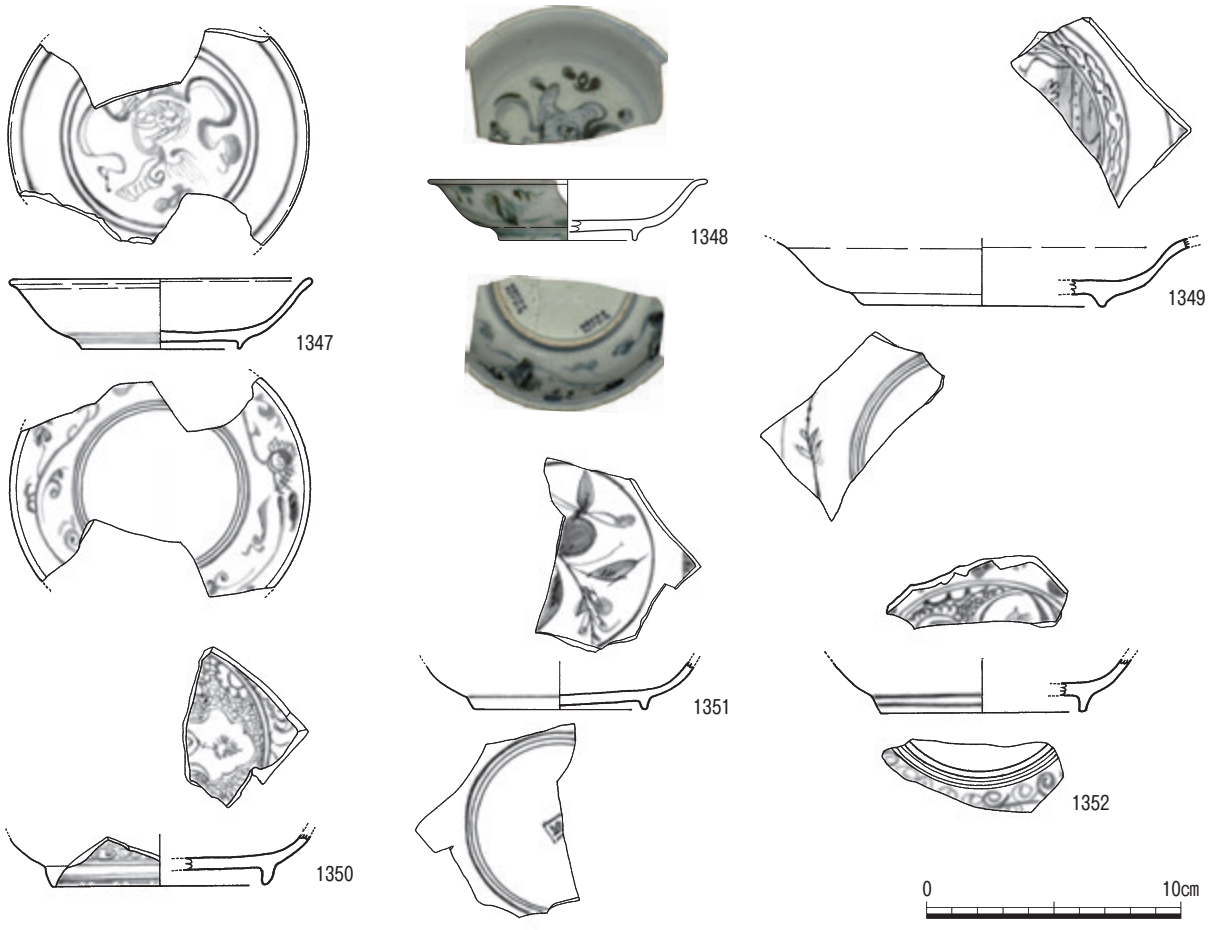
1369～1375は，青花の大皿である。1372は，口縁部が外反するものである。1370は，稜花の口縁を持つ。1369・1373は，口縁が直口する大皿である。1369は，漳州窯系で，外面に花唐草文，内面に点描文と草花文を施している。1371・1374・1375は，大皿の底部である。

1376～1379は，景徳鎮産の赤絵の皿である。1377は，呉須赤絵で，白濁した透明釉を施し，茶色や黒色で松や小鳥が描かれている。1378は，赤絵碗の胴部である。

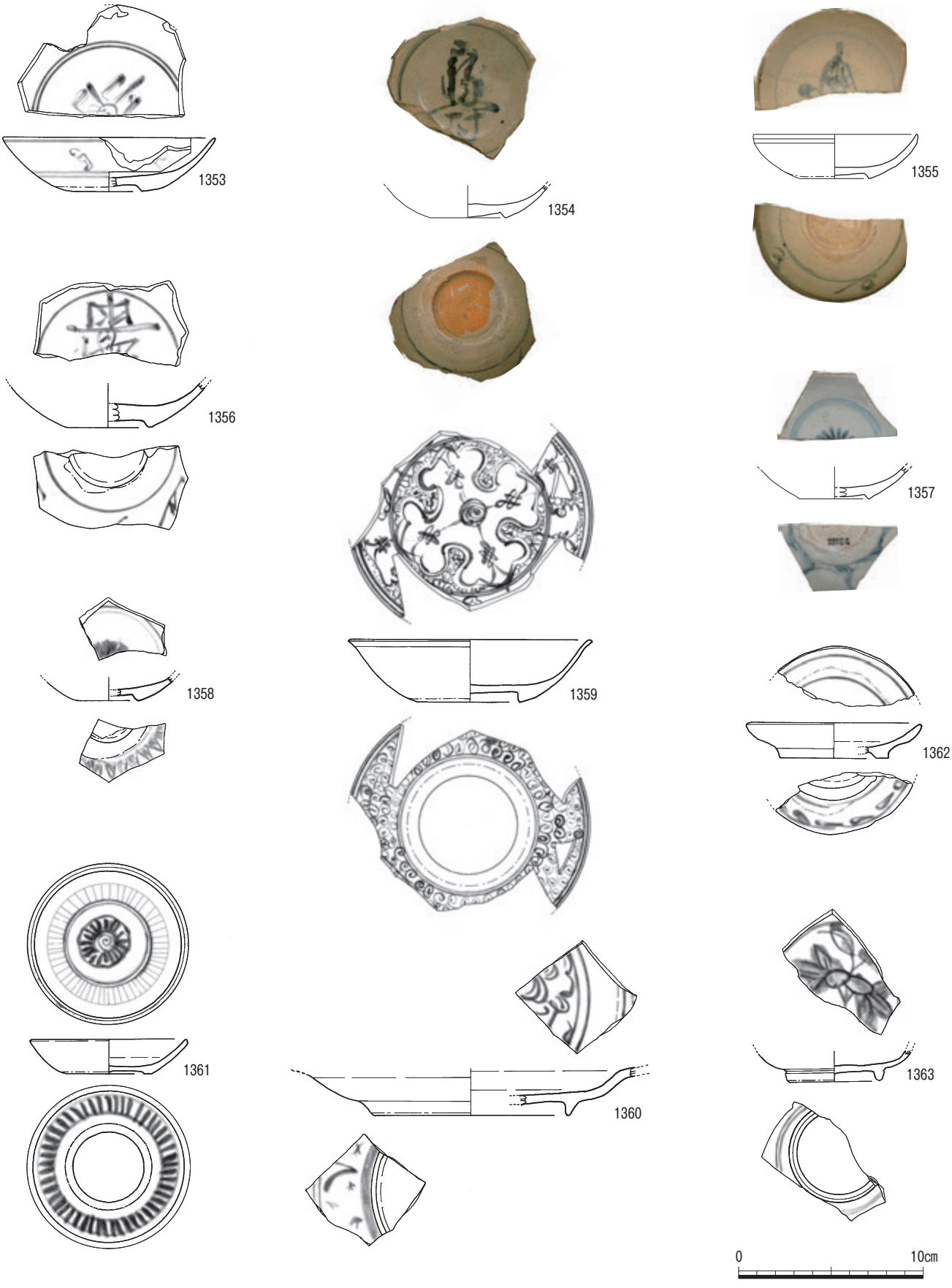
1380・1381は，青花の鉢である。1381は見込みに「喜」を描いている。

1382・1383は，蓋である。1382は，全面施釉後身受けの釉を剥ぎ取っている。1383は，釉を剥ぎ取った身受けに，白化粧土を塗付し，露胎部分を隠している。

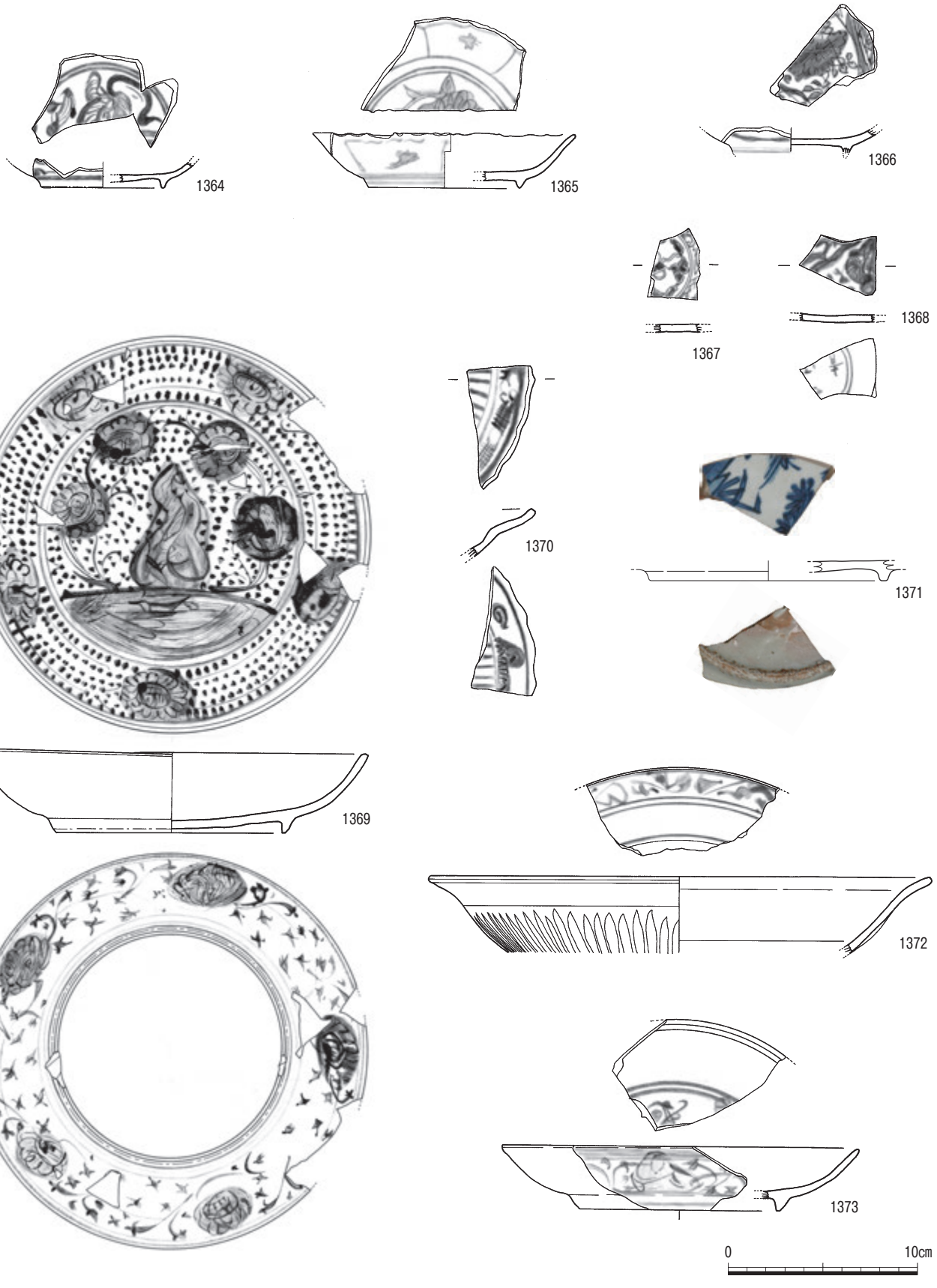
1384は，徳利の肩部から胴部にかけてである。内面は露胎で，外面胴部には牡丹唐草文が描かれている。



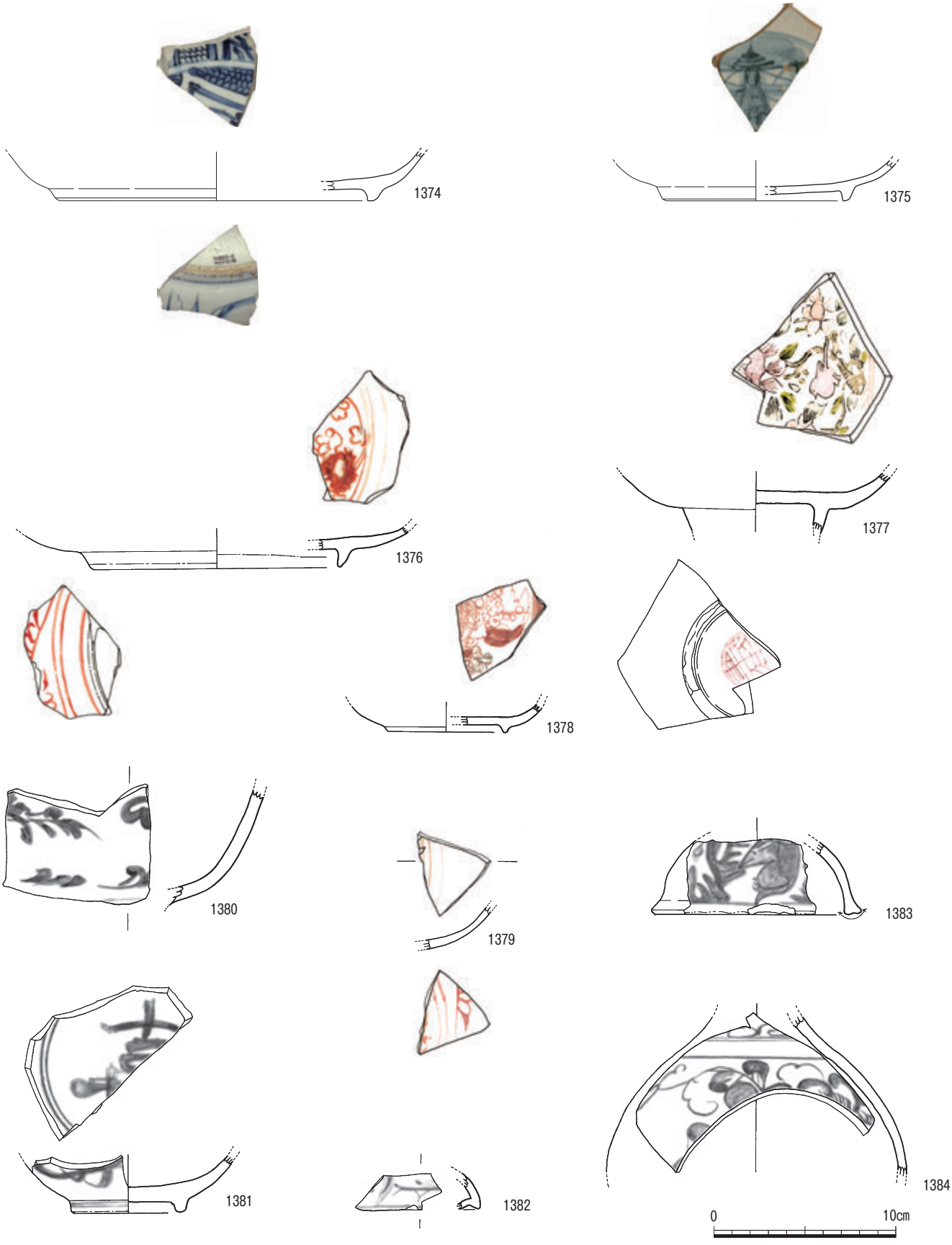
第235図　青花４



第236図　青花５



第237図　青花６



第238図　青花・赤絵

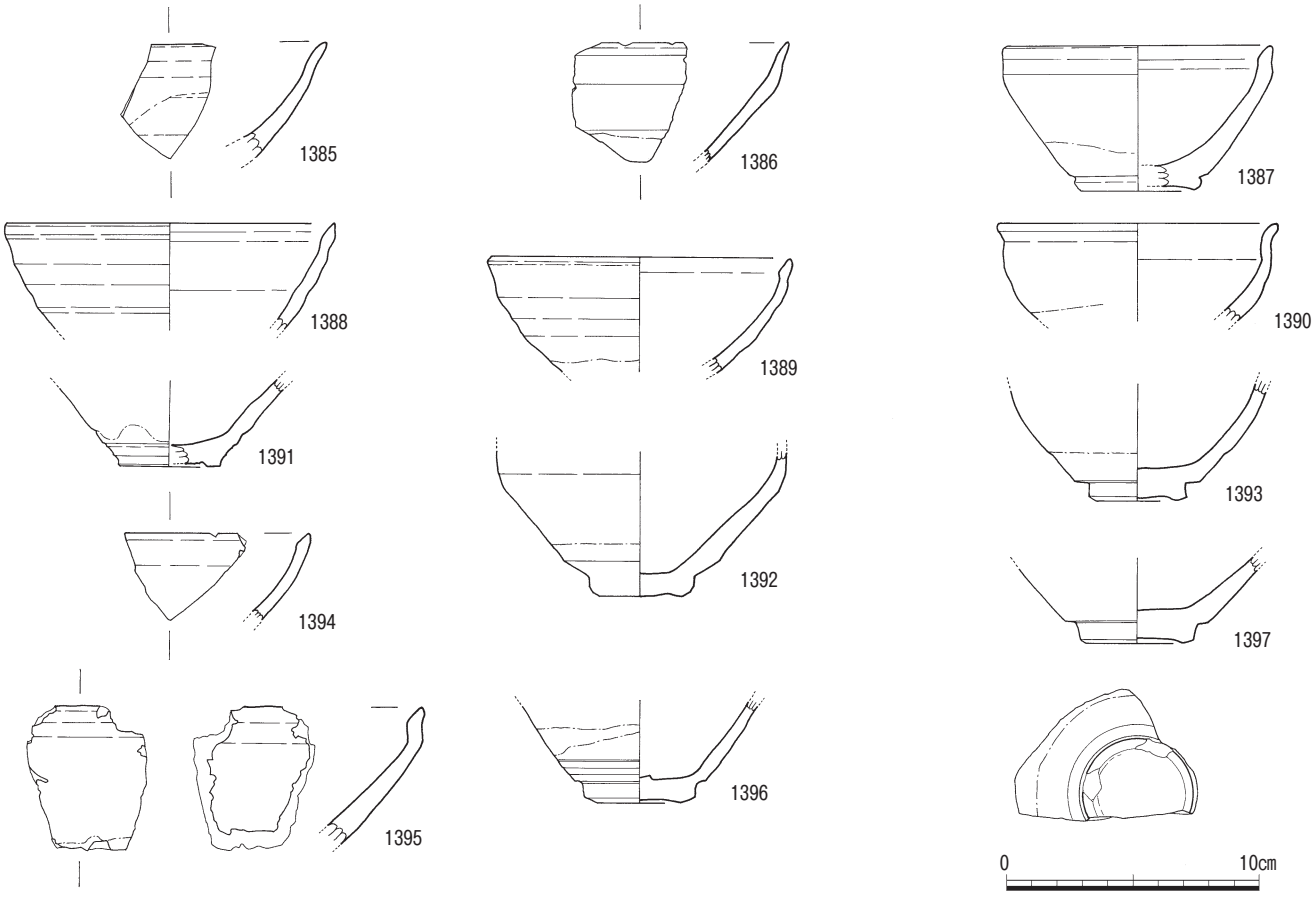
中国陶器

天目碗（第239図）

1385～1393は黒釉の天目碗である。1385は体部が直線的に延び，口縁部はわずかに外反するが，口縁下位に浅い凹みをつくる。1386は体部が直線的に開き，口縁下位で角度を変えて立ち上がるもので，口縁部はわずかに外反する。1387は高台脇を水平に削るもので，体部は直線的に開き，口縁部で軽く屈曲して開く。高台は上げ底状に削られる。1388は体部が直線的に開き，口縁部は弱く屈曲する。1389･1390は体部が丸みを帯びるものである。1389は建窯産と思われる資料で，口縁下位の屈曲は弱い。1390は口縁下位が強く屈曲する。1391～1393は底部である。1391は高台脇から体部が直線的に立ち上がる。1392は高台脇を斜めに深く削り，そこから角度を変えて体部が直線的に延びる。1393は高台脇が水平に削られ，高台は上げ底状をなす。1394～1397は褐釉のかかる資料で，1394・1395は口縁部である。1394は口縁下位が，わずかに凹む。1395は体部が直線的に延び，口縁下位で角度を変え口縁部で屈曲して外反する。1396・1397は高台脇を水平に削られる底部である。高台は上げ底状に削られる。

盤（第240図）

1398～1410は黄釉盤である。胎土はざらつきのある粗い胎土で，黒色や白色の粒子を多く含む。1398～1400は鍔状の口縁部である。1398は口縁部上面から内面にかけて施釉され，外面は露胎する。口縁端部には目跡が残る。1399は鍔状の口縁部上面及び下面の釉は拭き取られ，端部には目跡が残る。1400は口縁部の上面，下面ともに施釉され，端部に重ね焼きの目跡が残る。1401は内面と外面口縁部下位に白化粧がかかり，内面には鉄絵が描かれる。1402は内面に黄釉がかかる。1403は胎土が軟質の福建産の資料である。外面は無釉で，内面のみ黄釉がかかるが，還元がかかり発色が悪い。1404～1407は底部である。1404・1405は同一個体で，内面に黄釉がかかり，鉄絵が描かれる。1406・1407は白化粧土に黄釉がかかり，内面に鉄絵が描かれる。1408～1410は他の器種の可能性も考えられる資料であるが，ここでは盤として報告する。1408は，口唇部も含め内外面に褐釉が施釉される。胎土は褐色を呈し，緻密で混入物はほとんどみられない。口唇部には目跡が残る。1409は口縁部が内湾する形状を呈し，端部は外側に折り曲げておさめる。胎土は緻密で灰色を呈する。口唇部を含め残存部は褐釉がかけ



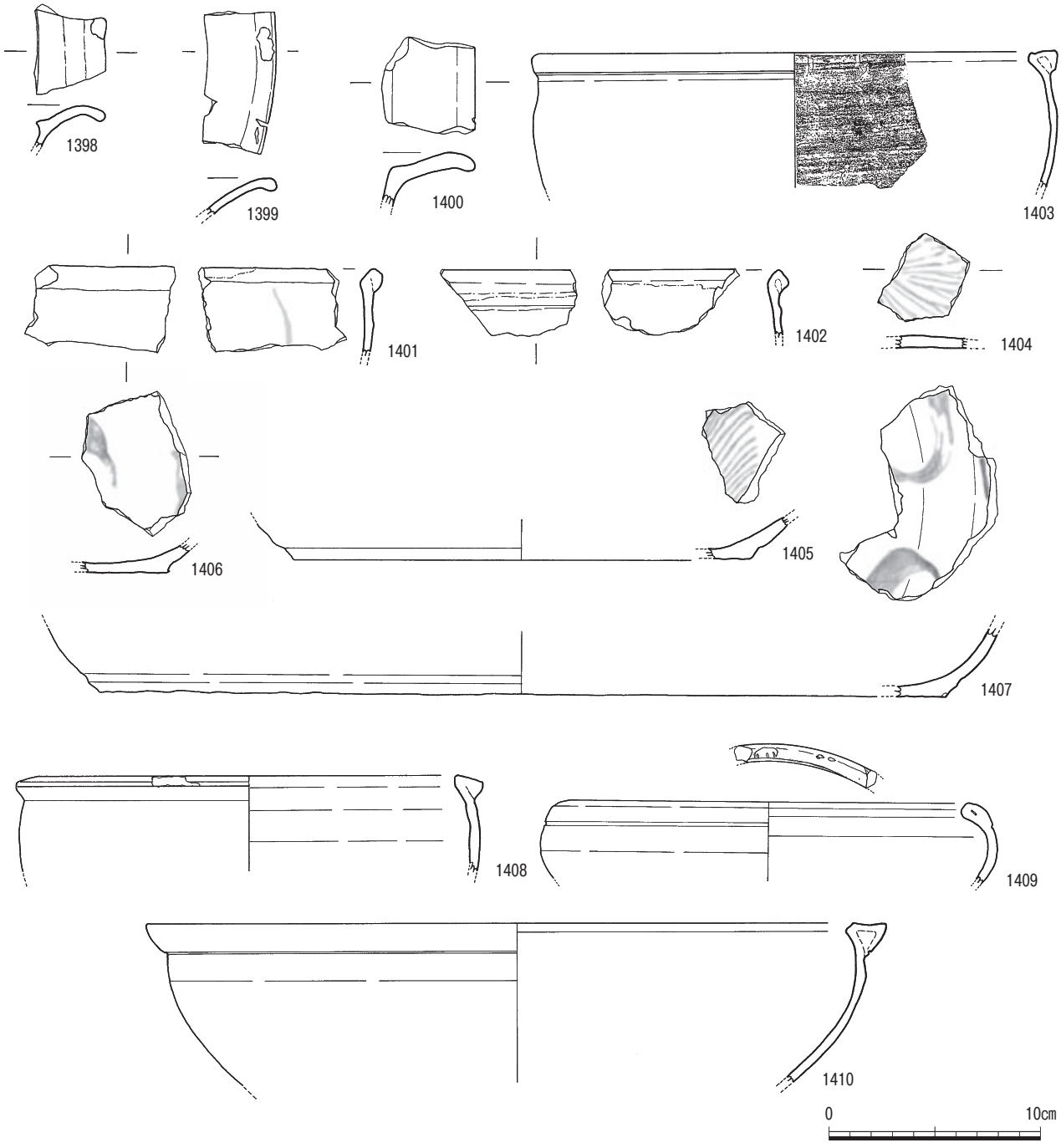
第239図　中国陶器１

られ，口唇部には目跡が残る。1410は口縁端部を外側に折り曲げ，断面三角形状につくる。釉は褐釉を内面口縁部下位から外面にかけてかけたあと，口唇部の釉を掻き取る。胎土は灰褐色を呈し，緻密であるが黒色と白色砂粒を多く含む。

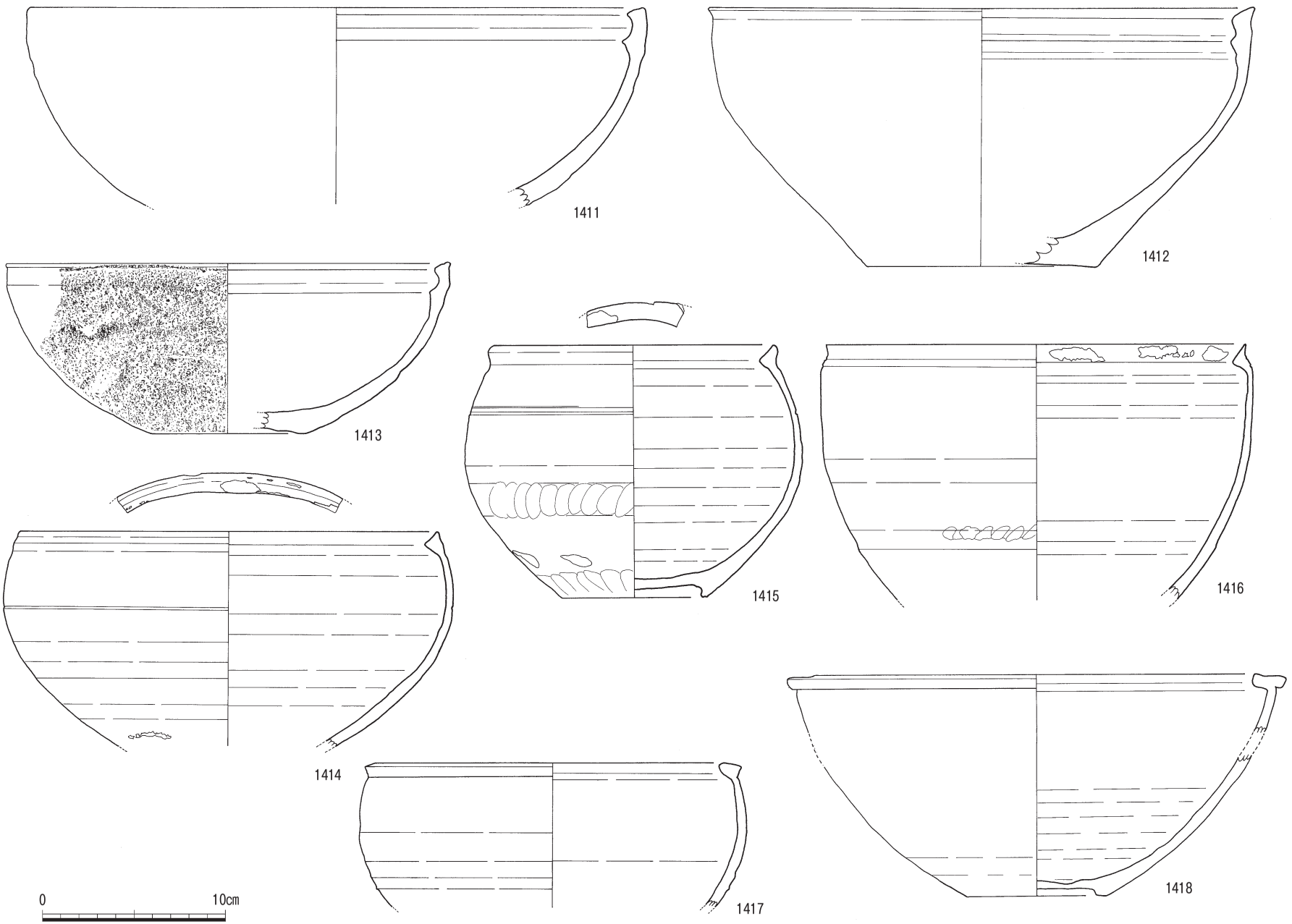
鉢（第241図）

1411～1413は，胎土が粗く，１㎜前後の白色砂を多く含むもので，色調は灰褐色や赤褐色を基調とする。体部は丸みを帯び，底部は平底をなす。口縁部が内側にせり出し，内面には１条の突帯を有する。1411・1413は無釉の資料である。1412は口縁部内外に灰白色の釉がかかる。1413の外面には，平行タタキの痕跡が残り，内面にはあばた状の凹みが観察される。

1414～1416は口縁部が内側に斜行し，口唇部と外面腰部に目跡が残る。胎土は灰褐色を主体とし，褐色もしくは透明の釉が薄くかかる。1414は体部上位に，1415は体部中位に膨らみを有するが，1416は体部上位でわずかに膨らむ程度である。底部は残存していないものもあるが，碁笥底状をなす。1415は外面下位にヘラ状工具による削りが施され，工具痕が残る。1417は胎土が橙色を呈し，白色砂粒を少量含む。釉は外面腰部までかかり，白



第240図　中国陶器２



第241図　中国陶器３

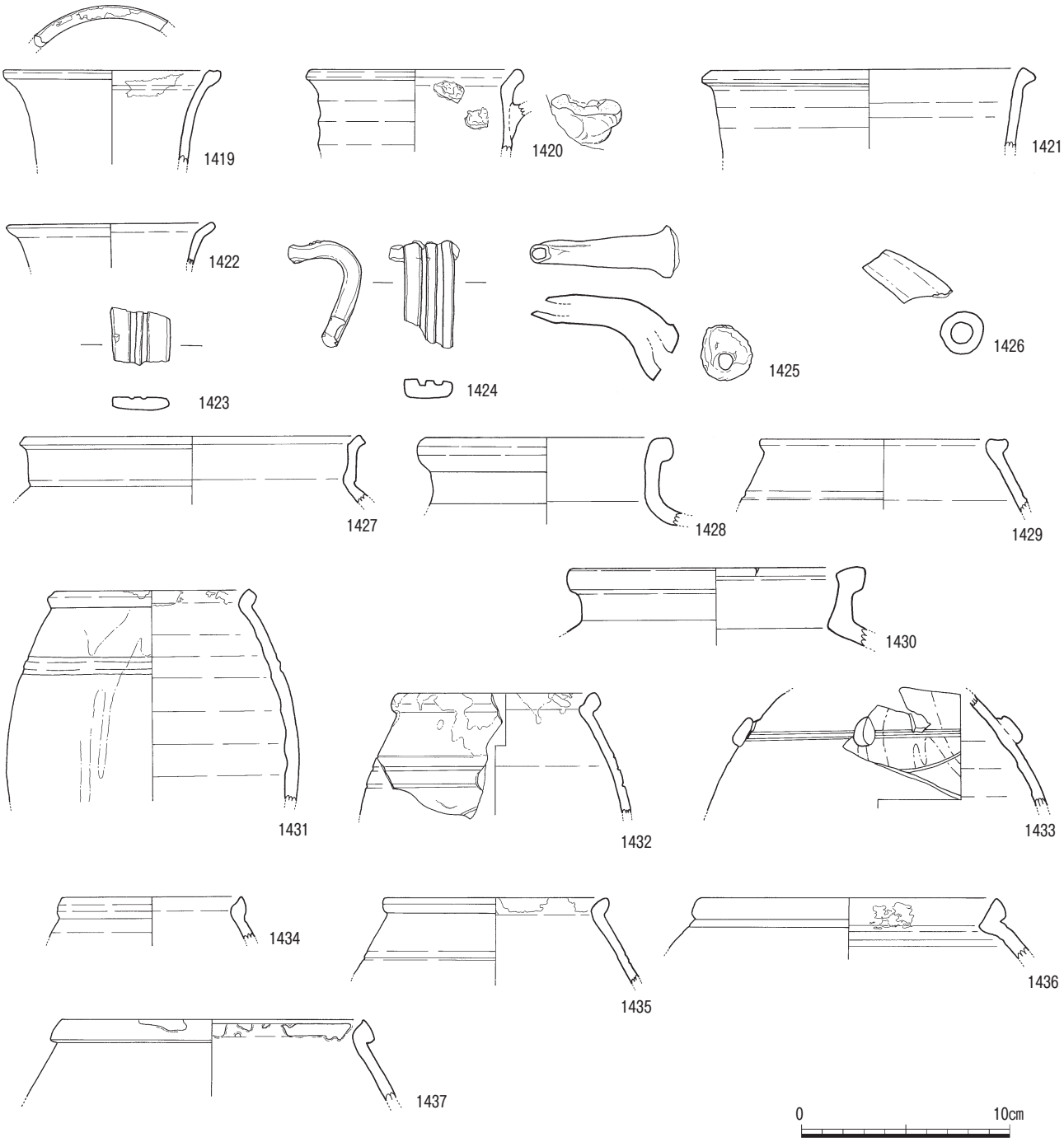
濁する。1418は褐釉が総釉で薄くかかるもので，胎土は灰黄褐色を呈し緻密である。底部は碁笥底状を呈する。

水注（第242図）

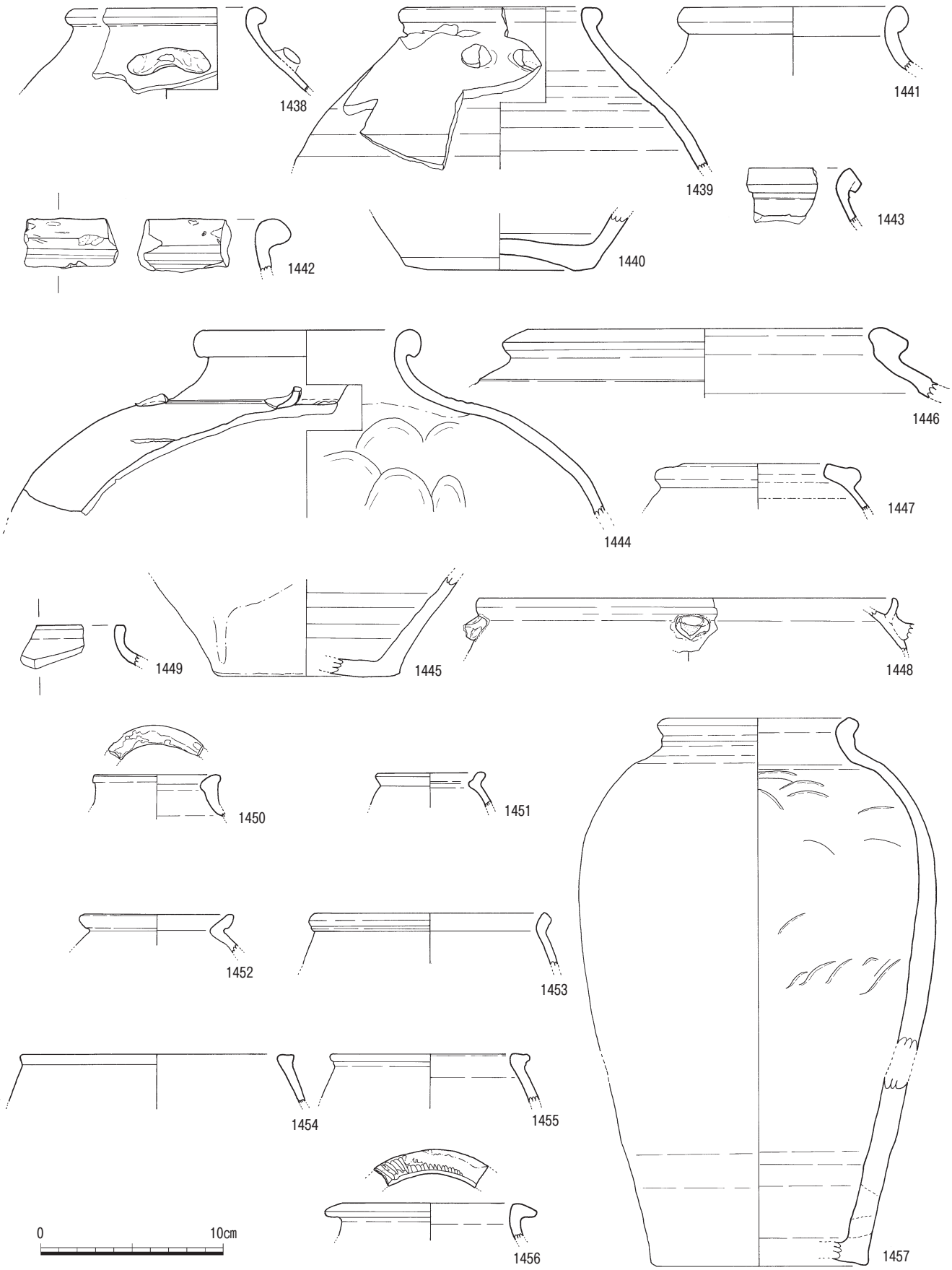
1419～1422は水注の口縁部である。1419は鈍い黄褐色の胎土に透明釉がかかる。口唇部の釉は掻き取られ，口唇部と口縁部内面に目跡が残る。1420は橙色の緻密な胎土に，黄褐色の光沢のない釉がかかる。外面に把手の付け根が残存する。1421は鈍い黄橙色の緻密な胎土に，透明釉がかかる。口縁端部は外側に折れ曲がり，断面三角形状となる。1422は胎土が灰褐色を呈し，褐釉がかかる。口縁内面は斜行し，稜を有する。1423・1424は水注の把手である。外側に２条の溝を有する。1425・1426は水注の注口部である。

壺（第242～244図）

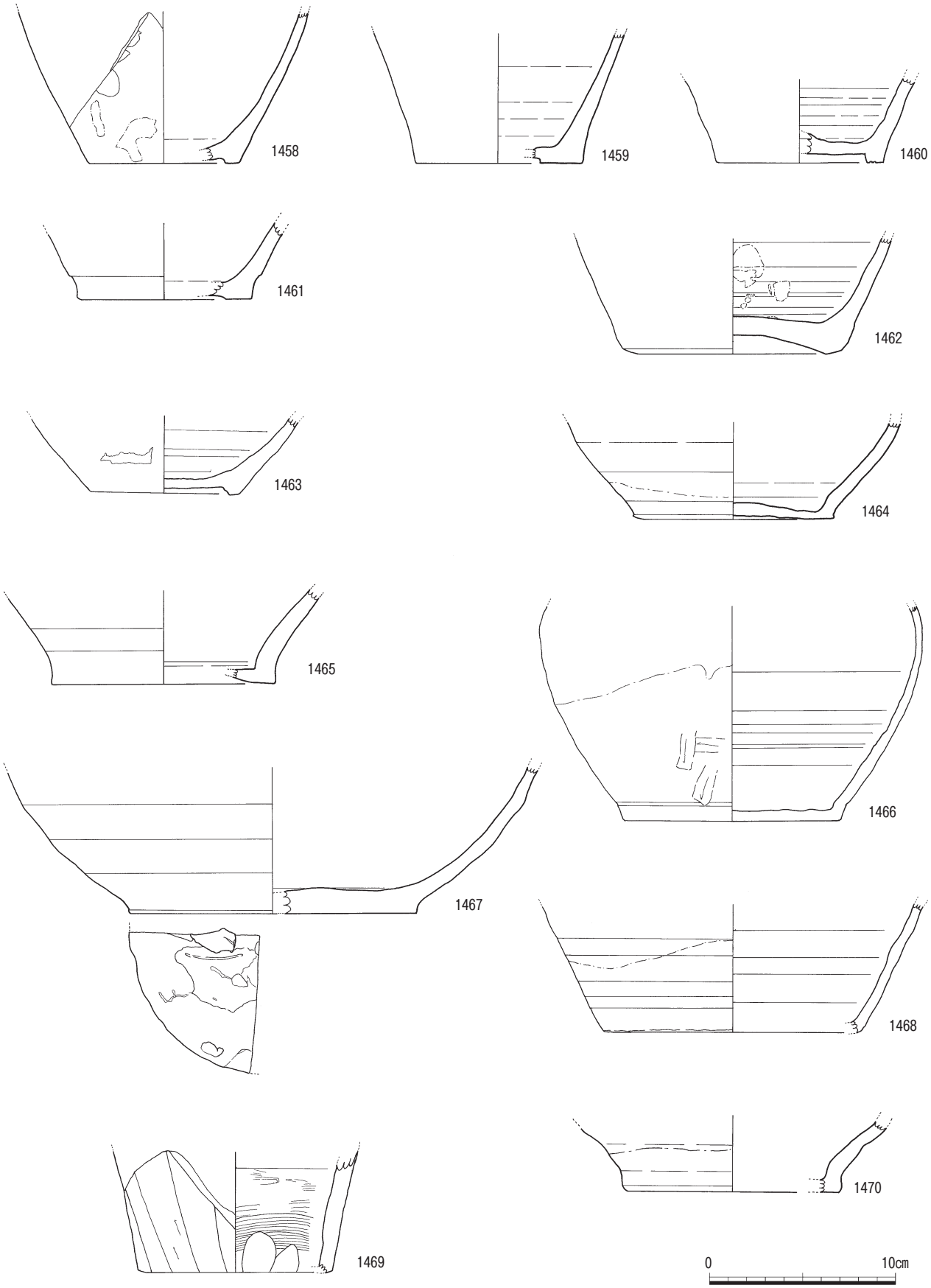
1427～1449は耳壺である。1427は胎土が緻密で灰褐色を呈し，光沢の少ない暗茶褐色の釉がかかる。口縁部は



第242図　中国陶器４


1438
1439
1441
1442
1440
1443
1446
1444
1447
1449
1445
1448
1450
1451
1452
1453
1454
1455
1456
1457
0
10cm

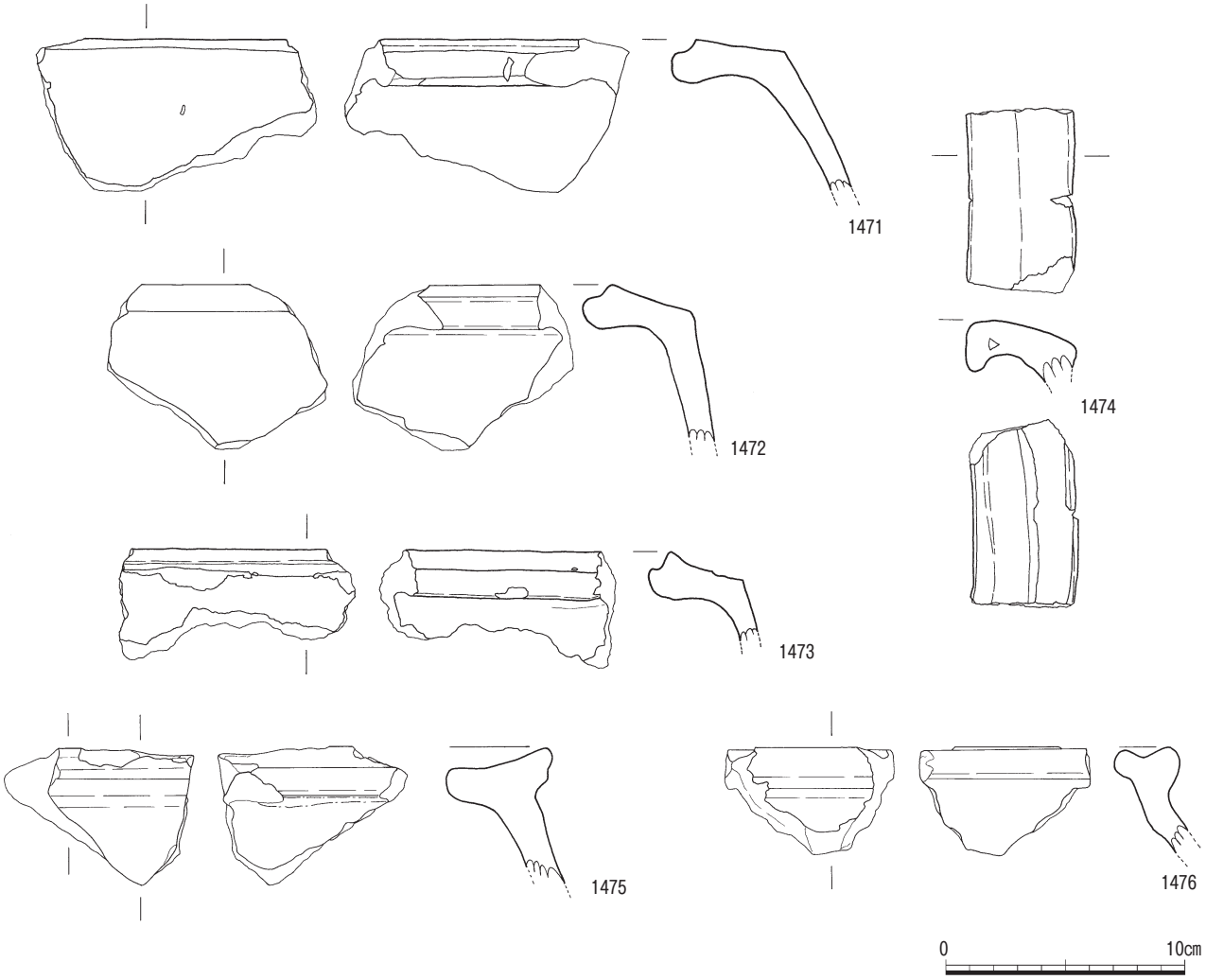
第243図　中国陶器５


1458
1459
1460
1461
1462
1463
1464
1465
1466
1467
1468
1469
1470
0
10cm

第244図　中国陶器６

外側に折り曲げて断面四角形状をなし，頸部は直立する。1428は口縁部が玉縁状を呈する。胎土は灰褐色でざらつきがあり，白色砂粒を多く含む。内外面に褐釉がかかる。1429の胎土は粘質を帯び，灰褐色を呈する。釉は口縁内面から外面にかけて黄褐色の薄い釉がかけられ，口唇部は釉剥ぎされる。1430の胎土は灰色を呈し，微細な白色砂粒を多く含む。釉は黄白色の釉が内外面にかかり，口唇部は掻き取られる。1431～1435の胎土は，灰褐色，黄橙色を主体とするもので，微細な白色砂粒を含む。胴部外面上位には褐色の釉がかけられる。口縁部はくの字状に屈曲し，口唇部には目跡が残る。肩部には２条の横沈線や波状沈線が巡り，横耳がつく。1436・1437は，灰黄色や鈍い黄橙色の緻密な胎土に，光沢のある褐釉がかかる。口唇部には目跡が残る。1438～1444は口縁部が玉縁状につくられる資料である。1438～1448は外面に横耳がつくもので，1439は1440と，1444は1445と同一個体の底部である。４点とも，胎土は緻密で白色の微細な砂粒を含む。釉は，1438が黒釉，1439は褐釉，1444は黄褐色の釉で，外面と内面上部にかかる。また，1438・1439の口唇部は釉は掻き取るが，1444は掻き取らない。1444の外面には目跡が残る。1442・1443は胎土が粗く，白色や黒色粒子を含む。1442は無釉で，1443は黄褐色の釉が外面と内面の上部にかかる。1446・1447は口縁部断面が長い三角形状で外面下方が膨らみ，内行した幅広い縁帯となる。縁帯外面は凹面を有する。胎土は緻密で，白色粒子が入る。

1448は口縁部がＹ字を呈し，蓋受け部をつくる。外面口縁下位には縦耳が付く。胎土は灰白色を呈し，緻密で白色砂粒は含まれない。釉は，外面に褐釉がかかる。1449は短頸の壺の口縁である。胎土は褐色で緻密であるが，白色粒子を含む。釉は化粧土のような白濁した釉が外面にかかり，口唇部は釉剥ぎされる。1450～1457は無耳壺と思われる資料である。1450は頸部と口縁部の境が明瞭でなく，口縁部内面は斜行し貝目が残る。胎土は砂質であるが緻密で，灰褐色を呈する。1451～1453は口縁部がくの字状に外側へ屈曲する。胎土は砂質であるが緻密で，1451・1453は微細な白色砂粒を含む。釉は残存部は内外面にかかり，1452は褐釉，1451・1453は白濁した



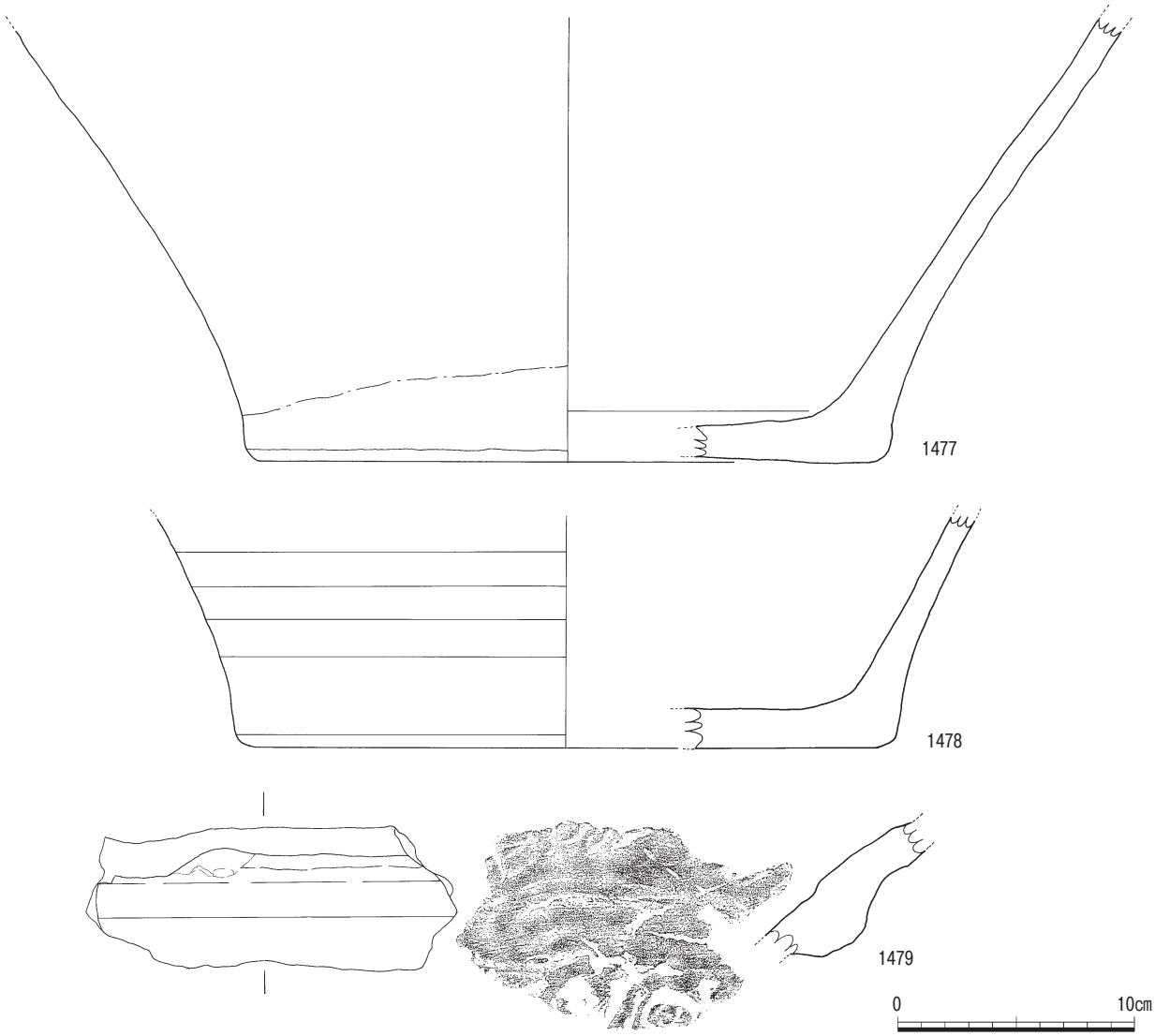
第245図　中国陶器７

釉がかかる。1454・1455は口縁部が断面逆三角形状を呈する。胎土はそれぞれ橙色，灰褐色をなし，緻密である。1456は口縁部が外側に強く屈曲するものである。胎土は緻密で灰褐色を呈する。釉は黒褐色の釉が内外面にかかり，口唇部は掻き取られ目跡が残る。1457は図上復元を試みた資料である。胎土は灰褐色を呈し，黒色および白色粒子を含む。釉はやや光沢のある黄褐色の釉が，内面上位と外面にかかり，外底面は露胎する。口縁部は緩やかに外反し，体部は長胴状，底部は上げ底状を呈する。器壁は厚く，胴部内面上位には，タタキ成形時の当て具痕が残る。

1458～1470は，水注または壺の底部である。1458～1461は高台を有する底部である。1461は高台脇に段を有する。1462は上げ底状の底部である。1463は碁笥底を呈する底部である。外面下位には目跡が残る。1464～1467は平底の底部である。1467は外底面に目跡が残る。1469～1470は底面が欠損しているため底部の形状は不明である。1469の外面下位は面取りされており，内面は横筋状の工具痕が残る。

甕（第245・246図）

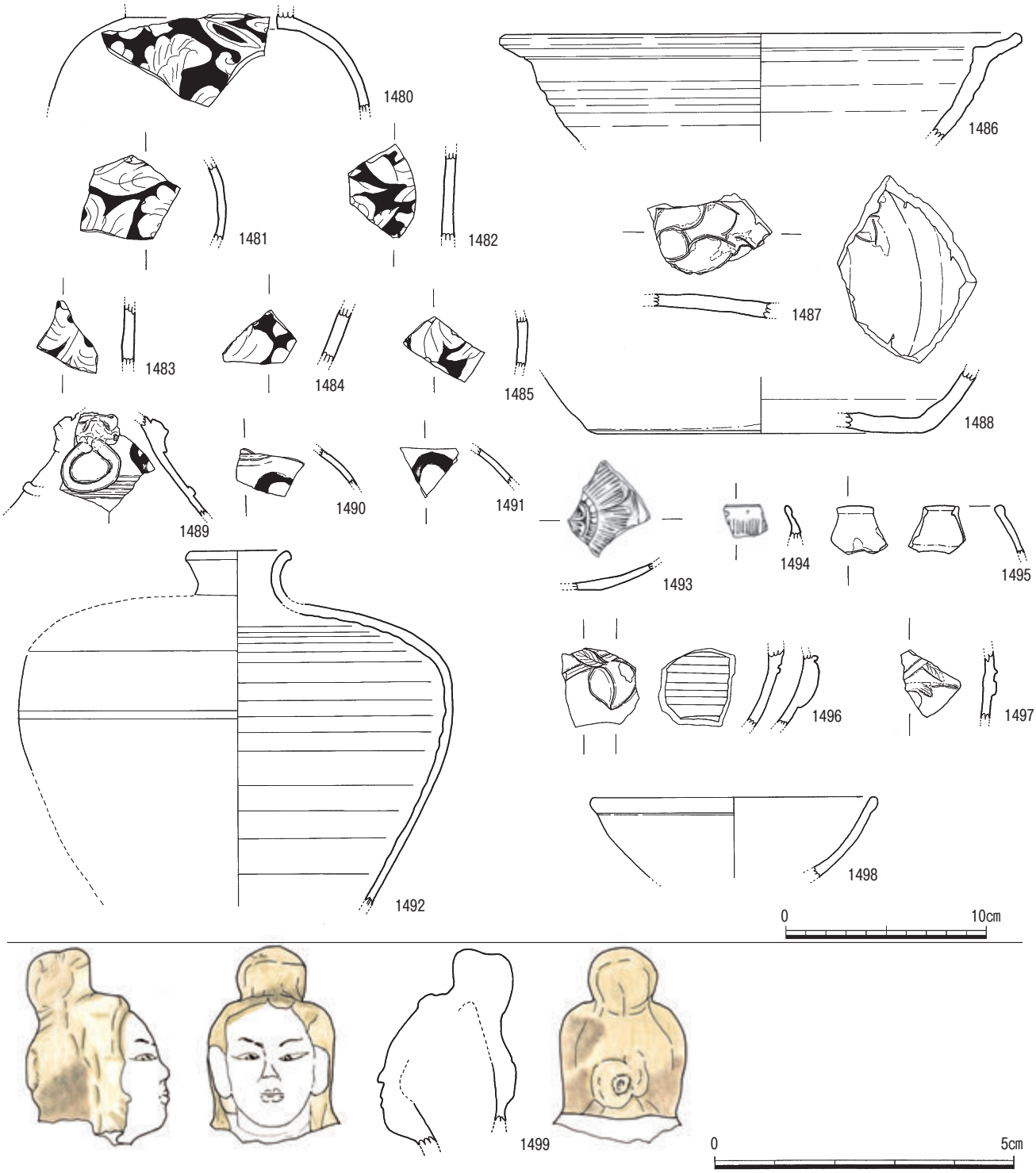
1471～1476は甕の口縁部である。胎土は赤褐色系を呈し，白色砂粒を多く含む。釉は灰黄色で白濁しており，発色も悪い。内外面に薄く施釉し，口唇部は掻き取る。1471～1473は口縁部が内側へ屈曲し，外面に稜をつくる。1474は口縁部が内側へ屈曲し，端部は下方へ垂れる。1475・1476は口縁部が二叉に分かれ，Y字状を呈する。1477・1478は甕の底部である。平底で，外面には砂が付着する。1479は甕の底部としたが，詳細な器種等不明な資料である。胎土は灰褐色で粗く，白色砂粒を含む。釉はかかっていない。



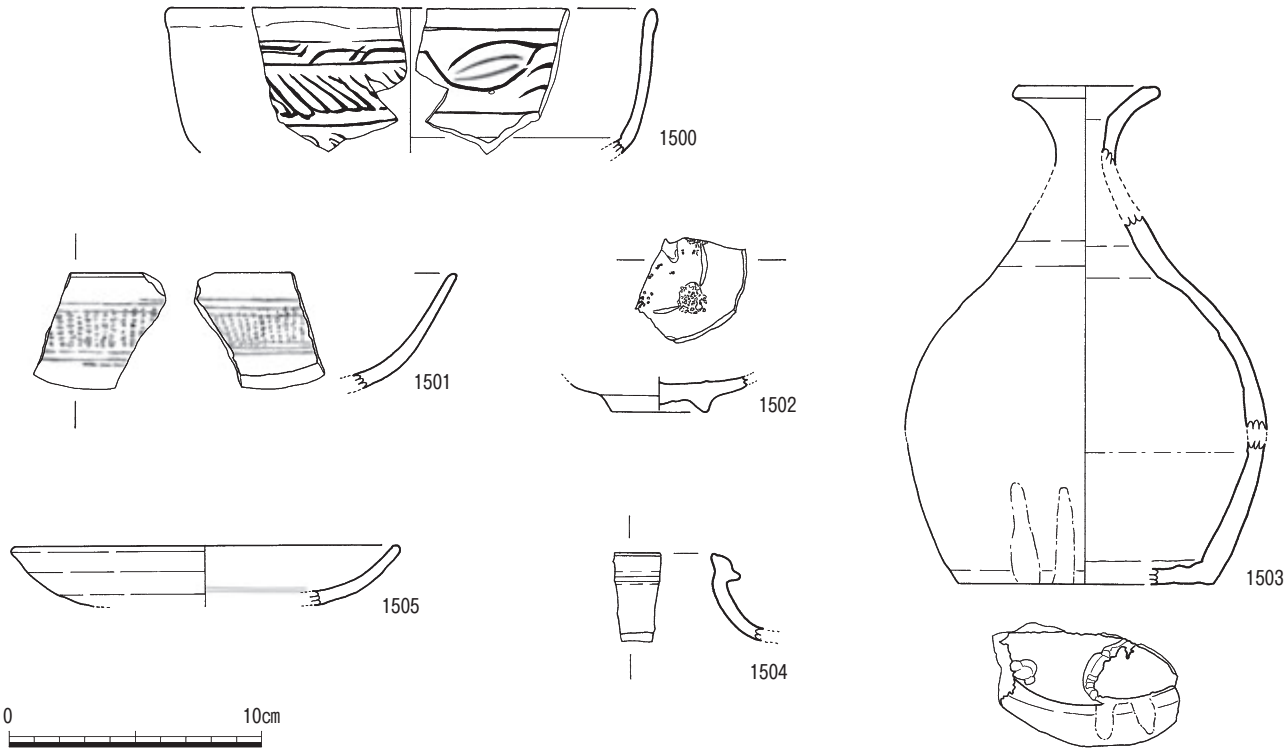
第246図　中国陶器８

その他（第247図）

1480～1485は梅瓶である。磁州窯系の資料と考えられる。鉄釉をかけた素地の上に，白化粧土をかけ，それを掻き落として文様を描く白地剔花の技法により唐草文が描かれる。胎土は緻密で，灰褐色を呈する。1486～1488は華南三彩の緑釉陶器で，盤である。３点とも同一個体と思われる。胎土は緻密であるが軟質で，灰白色を呈する。釉は外底面のみ露胎する。内面には線刻により花文が描かれる。1489～1491は産地不明の緑釉陶器である。胎土は緻密であるが，微細な白色粒を含む。外面は緑釉の上から鉄絵が描かれ，内面は露胎する。頸部には輪状の突帯と獅子頭（？）が張り付けられる。1492は瓶もしくは小口の壺と思われる。胎土は浅黄色を呈し，緻密である。釉は外面と内面上位まで黄釉がかかる。頸部



第247図　中国陶器９



第248図　朝鮮陶器・ベトナム陶器

は短く，口縁部はゆるやかに外反する。体部は肩部で強く屈曲し，下方にむかって窄まる。外面肩部には稜が巡る。1493は皿と思われる資料である。高台はなく，平底である。内面は花文が描かれるが，線彫りに褐釉がかけられたものであるか，黒象嵌に褐釉がかけられたものであるかはっきりしない。胎土は緻密で，黄灰色を呈する。1494・1495は小壺とした。1494は白象嵌に褐釉がかかるもので，内面は露胎する。胎土には微細な白色粒が混入する。1495は灰黄色の緻密な胎土に，内外面に鉄釉がかかる。1496・1497の胎土は緻密であるが，砂質である。微細な白色砂粒を含み，灰白色を呈する。外面には花文が貼り付けられ，透明釉がかかる。内面は露胎である。1498は陶器の椀である。胎土は鈍い黄褐色を呈し，微細な白色砂粒を含む。口縁端部は外側に折り曲げて小形の玉縁状をなす。薄い黄褐色の釉が内面と外面腰部までかかる。産地は不明である。1499は仏像の頭部と思われる。頭髪部分には褐釉がかけられ，目と眉は鉄絵で描かれる。胎土は灰白色を呈し，緻密である。型作りである。

朝鮮陶器・ベトナム陶器（第248図）

1500～1504は朝鮮陶器である。1500は高麗青磁の鉢である。胎土は灰色で，内外面には白土による象嵌で文様が描かれる。内面は一部，赤土の象嵌も施され，その部分は黒く発色する。1501・1502は李朝の資料である。1501は椀である。胎土は灰白色で，内外面に白象嵌による文様が描かれる。1502は胎土が灰色を呈する椀の底部である。見込みには目跡と重ね焼きの際の高台の痕跡が残る。1503は口縁部がラッパ状に開く徳利である。図上復元を試みた資料である。胎土は灰白色を呈し，外面に黒釉がかかる。内面はタタキ成形による当て具痕が残る。外底面には貝目が残る。1504は壺の口縁部と思われる資料である。胎土は黒褐色で，無釉である。口唇部は内側が高く，外側は溝状につくられる。

1505はベトナム陶器の皿である。胎土は灰白色で陶胎である。内面と外面腰部まで化粧土をかけ，その上に呉須で文様を描く。

瓦器

瓦器椀・皿（第249図）

1506～1511は和泉型の瓦器椀である。1506は完形，1507はほぼ完形に復元できた資料である。外面にはミガキが施されず，ナデ調整が行われる。内面は幅の広いヘラ状工具により横方向のミガキが施されるが，雑である。暗文は平行線状で，まばらに入る。高台は貼り付け高台で，断面三角形状を呈する。

1512～1515は皿である。椀と同様に外面にはミガキはみられず，内面にのみ幅の広い工具により施される。暗文は平行状に入る。

中世須恵器

東播系須恵器（第250図）

1516～1521は東播系の捏ね鉢である。1516～1520は口縁部で，端部は玉縁状をなし，炭素で燻されるため黒色を呈する。胎土は灰褐色を呈する。1521は底部である。内面は使用により滑らかになっている。

カムィヤキ（第250・251図）

徳之島に所在する南島系中世須恵器窯の製品である。胎土は小豆色を呈し，やや粗く白色砂粒を含む。1522～1525は甕の口縁部である。1523は外面に波状沈線が廻る。1526～1531は壺の肩部である。タタキ成形により制作されていると思われるが，1526は内外面とも当て具の痕跡を丁寧にナデ消している。1529は内面の一部に格子目状の当て具痕が残る。1530・1531は肩部に二条の沈線と，その間に波状沈線が巡る。1532～1538は壺または甕の胴部，1539は壺の底部，1540は甕の底部である。1532・1533は同一個体で，外面に平行タタキ，内面に格子目タタキが残る。1534・1535も同一個体で，外面に平行叩きが残るが，内面は格子目タタキのあとヘラ状工具によりナデ調整が施されるため，沈線状の横筋が入る。1536～1538・1540の４点も同一個体である。外面は平行タタキ後ナデ，内面は格子目タタキ後ヘラ状工具によるナデ調整が施され，沈線状の横筋が残る。

樺万丈産（第252図）

1541～1547は樺万丈産と考えられる資料である。胎土は灰色を呈し，微細な白色砂粒を含むが大きいものはみられない。1541～1543は捏ね鉢である。内面はハケ目状の調整痕が入る。1543は捏ね鉢としたが，鍋の可能性も考えられる資料である。1544～1547は甕である。外面には格子目タタキが残り，内面はハケ目状の調整痕が残る。1544・1545は頸部がくの字状に強く屈曲する。1546は胴部である。1547は底部で，平底となる。1545を除いた３点は同一個体と考えられる資料である。

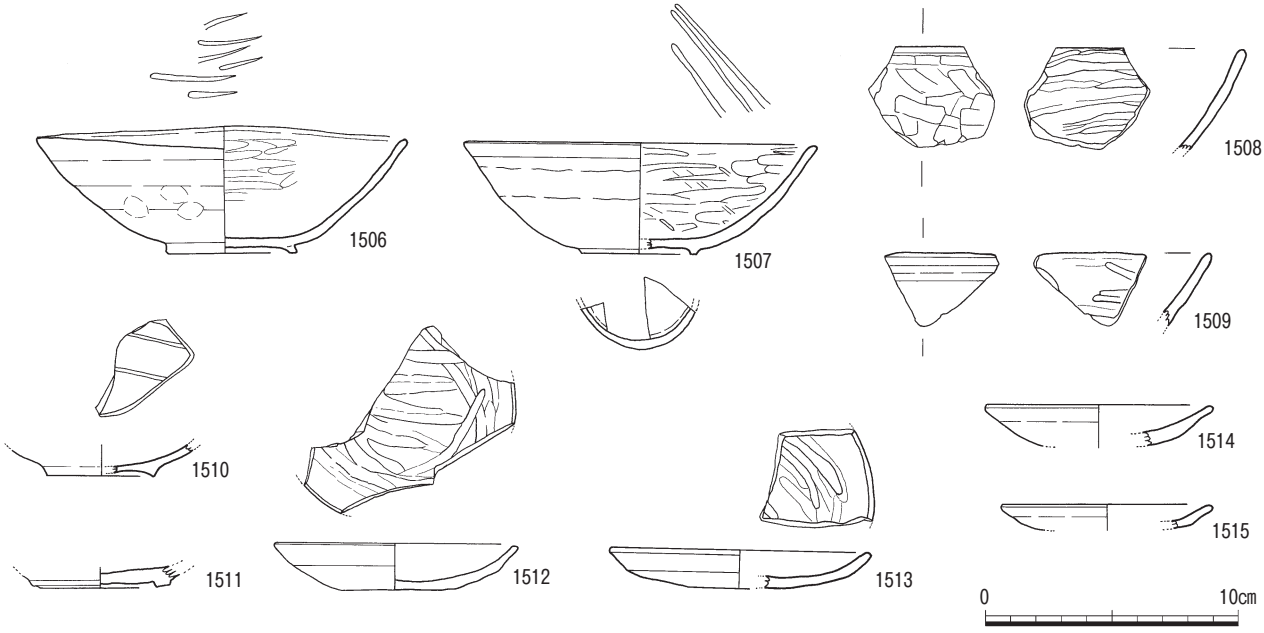
その他（第253図）

1548～1552ははっきりとした産地が不明の資料である。1548は甕の頸部，1549・1550は胴部，1551は底部である。胎土は灰色を主体とし，白色砂粒等はほとんど含まれない。タタキ成形で制作されており，外面には格子目状や綾杉状の当て具痕が残る。内面は当て具の痕跡をナデ消している。1552は壺の底部である。胎土は灰褐色を呈し，白色砂粒を含む。内面はタタキ成形の当て具痕をナデ消している。外面は胴部下位までタタキ成形を施し，その後，底面脇を２㎝程度ナデ消す。

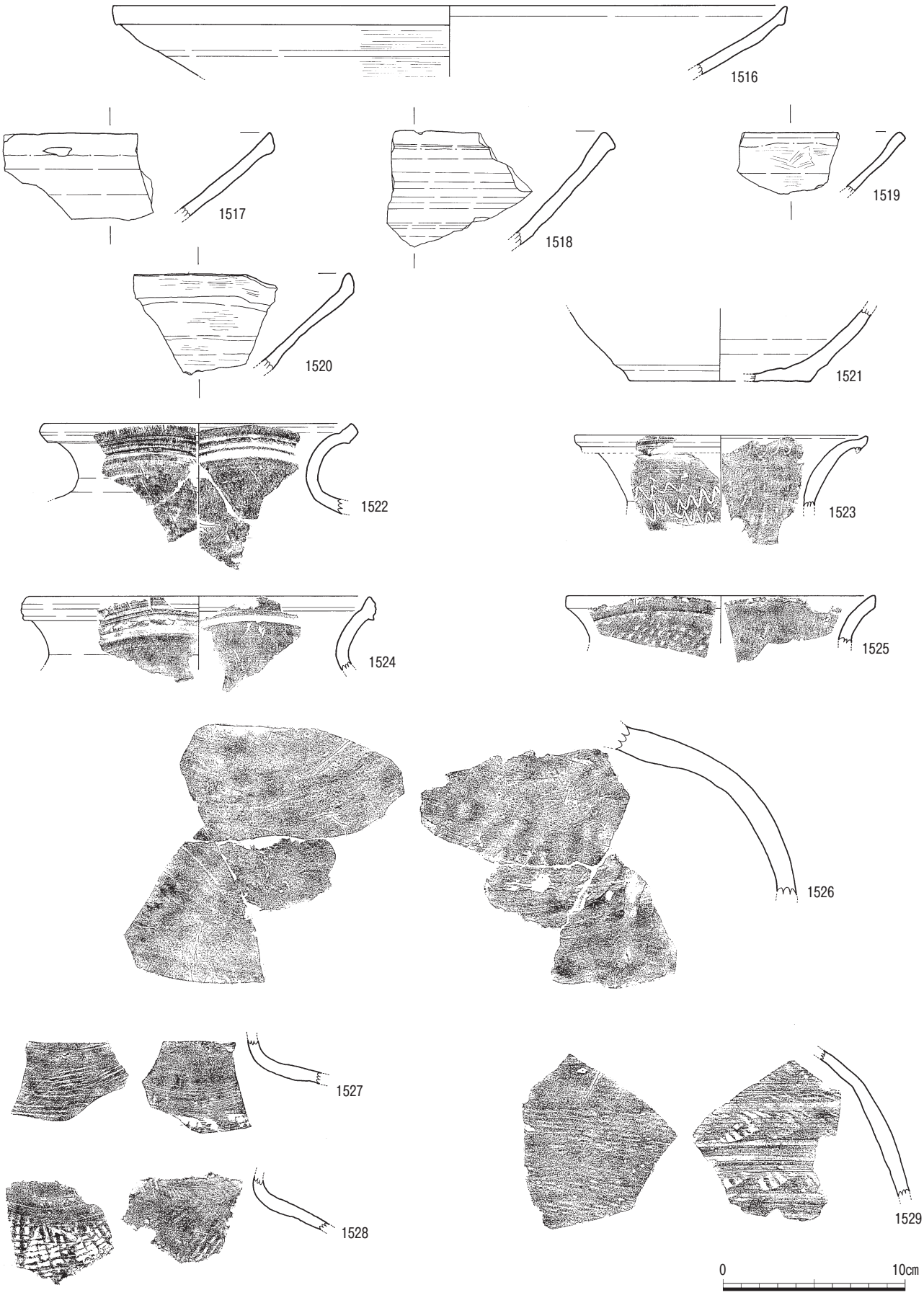
中世陶器

瀬戸・美濃（第254図）

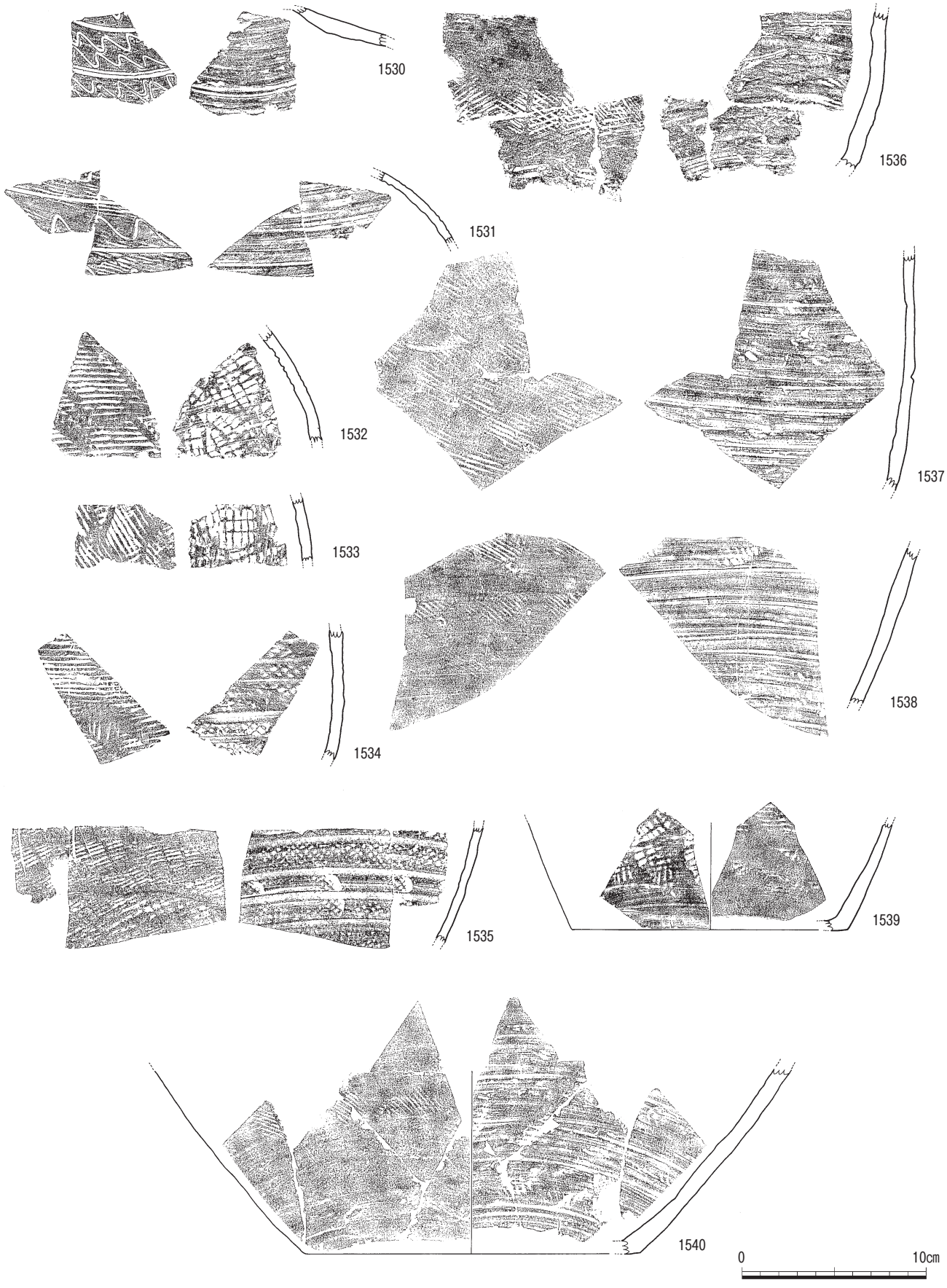
1553・1554は天目碗でる。1553は，胎土は淡灰黄色を呈し，微細な黒色砂粒を少量含み，ややぱさついた質感をなす。釉は褐釉が内面と外面腰部までかかる。高台は上げ底状に，高台脇は水平に削られる。体部は丸みを帯びて立ち上がり，口縁下位で内側に屈曲し，口縁端部は背反する。1554は黄天目である。体部は丸みを帯び，口縁下位で弱く屈曲して外反する。1555～1557は卸皿である。胎土は灰白色で，密である。内面から外面中位まで白濁した釉がかかる。内面には格子状の卸目が刻まれ



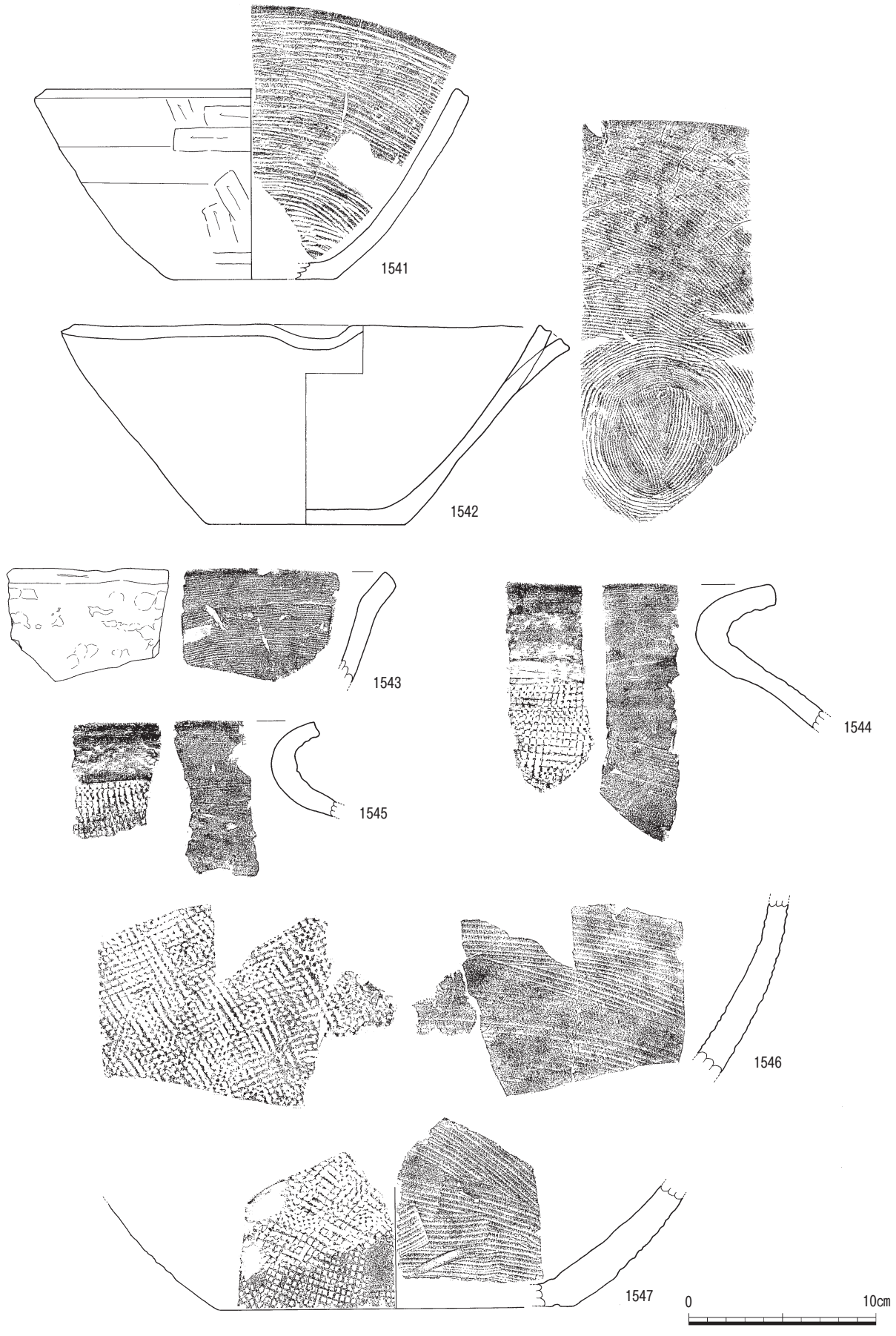
第249図　瓦器



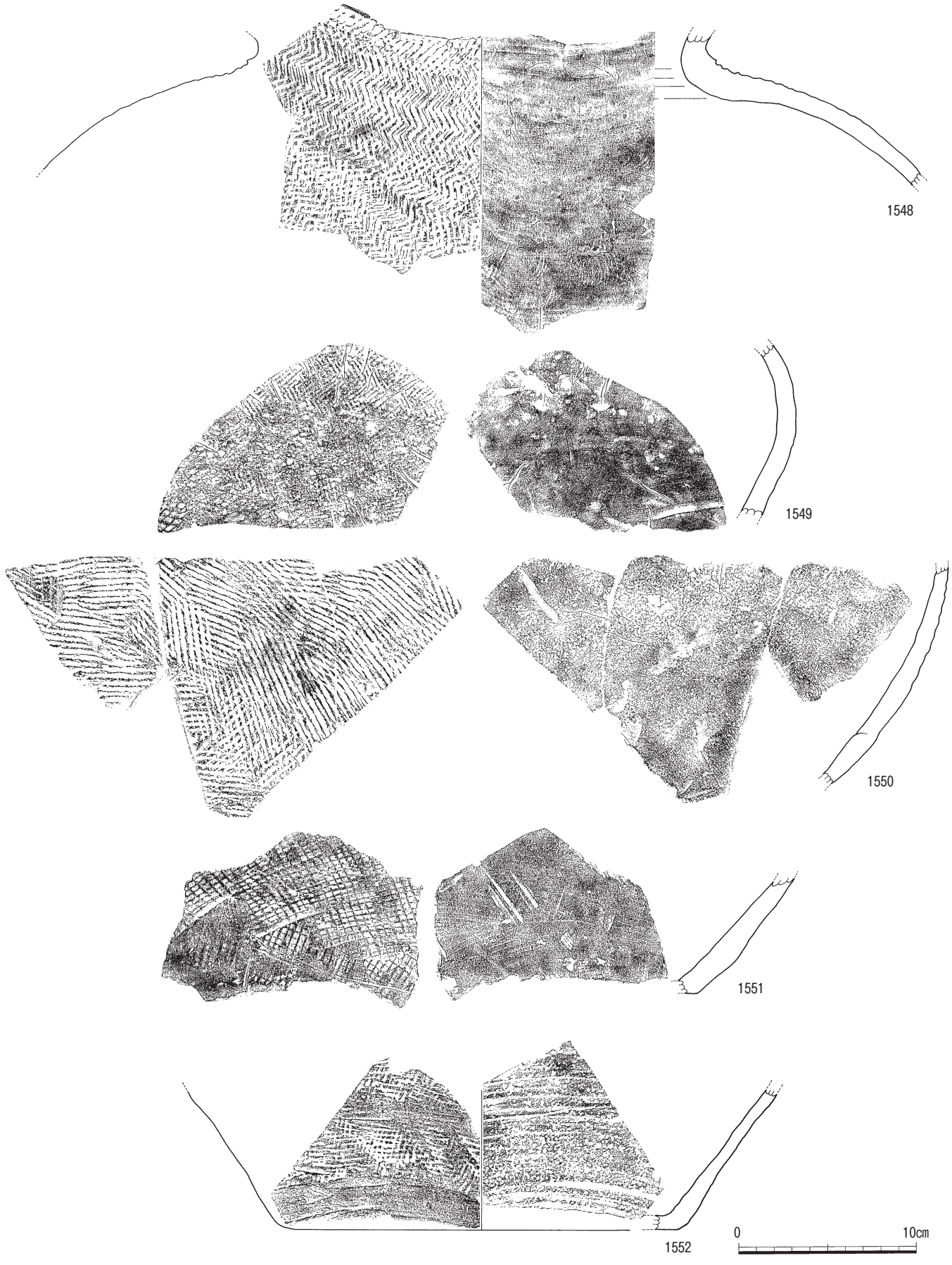
第250図　中世須恵器１



第251図　中世須恵器２



第252図　中世須恵器３

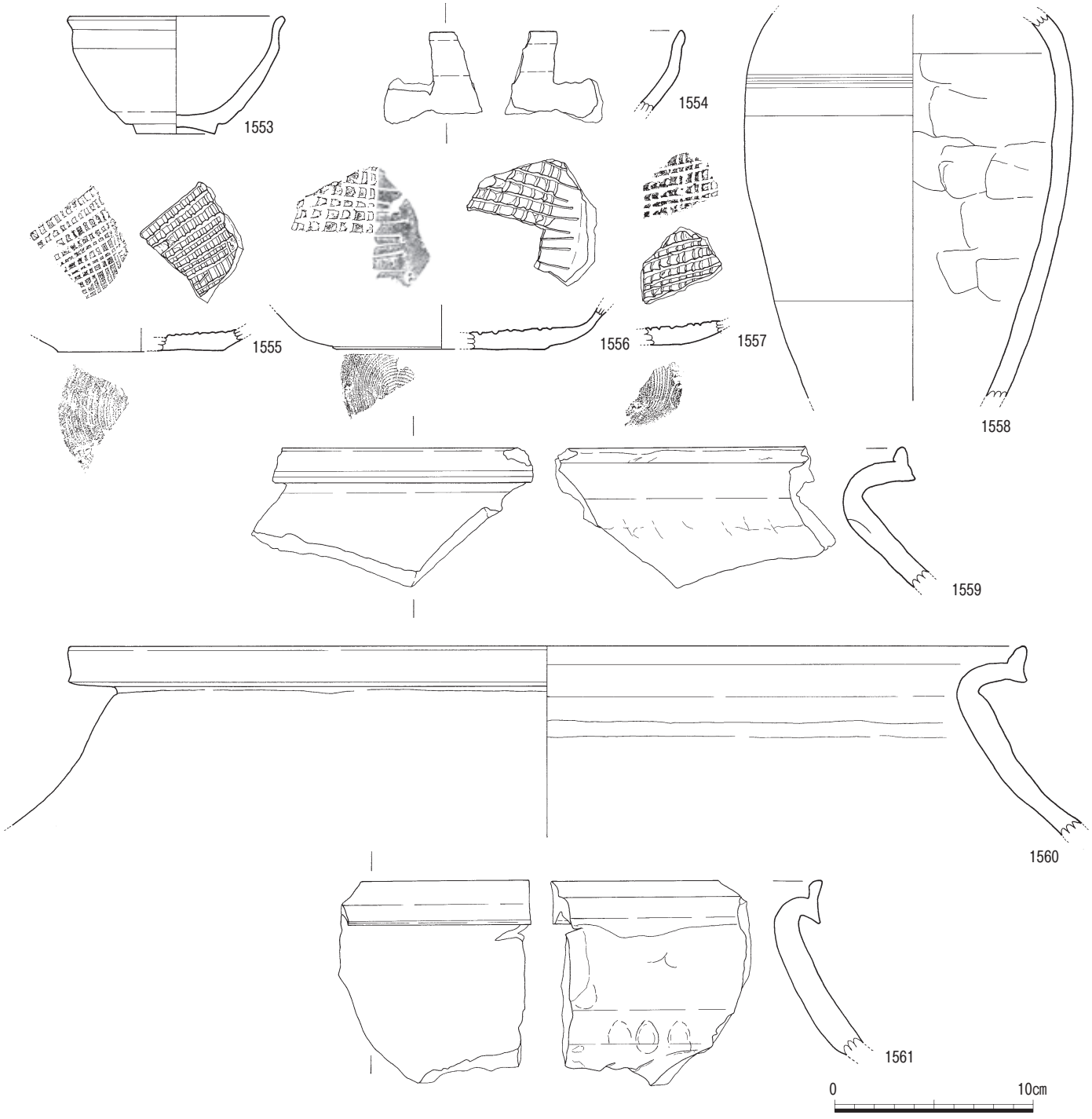


第253図　中世須恵器４

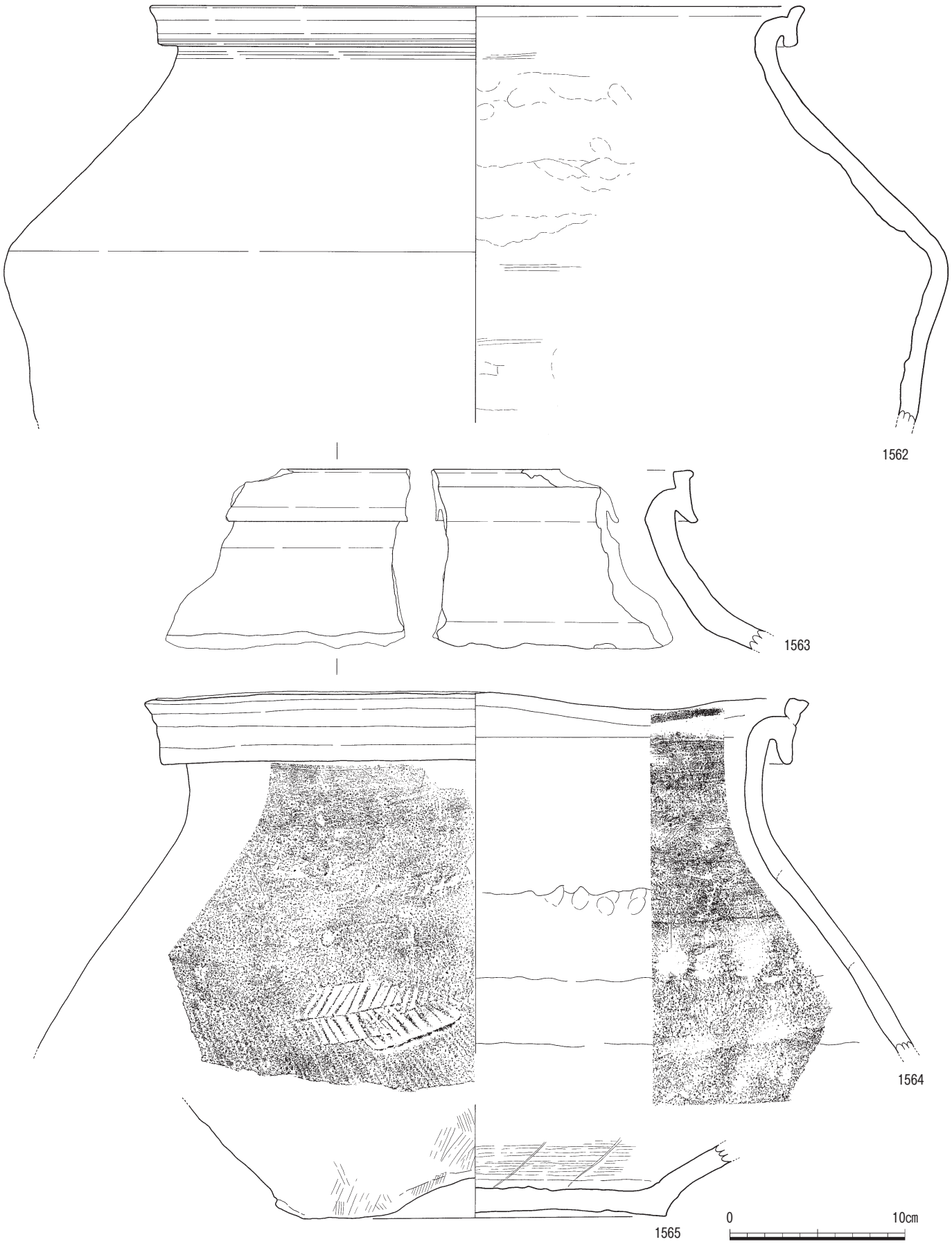
る。外底面は糸切りの痕跡が残る。1558は瓶子である。陶片の一片は，近世の溝状遺構７号によって破壊されたと考えられる土坑14号の中から出土しているが，その他はその周辺から散乱した状態で出土した。また，溝状遺構７号内からは，人骨も検出されており，近世の溝状遺構により破壊された土坑墓の副葬品としても考えられるが，元位置をとどめていないため一般遺物として報告する。胎土は灰白色で，密である。釉は外面に灰緑色の釉がかけられ，内面は露胎する。肩部下位に３条の沈線が巡る。内面には幅の広い横方向のナデ調整が観察される。

常滑（第254・255図）

1559～1565は常滑焼の甕である。胎土は灰色，灰黄色，灰褐色，灰赤褐色で，白色砂粒を多く含む。釉はかからず焼き締めであるが，外面上位は窯の中で灰を被り，灰黄色や灰緑色の自然釉がかかる。1559～1564は口縁部である。1559・1560は口縁部がＬ字状を呈し，端部は上方へ伸び，下方の伸びはわずかである。口縁帯は約1.5cmを測る。1561～1564は口縁部がＮ字状を呈し，口縁端部



第254図　中世陶器１

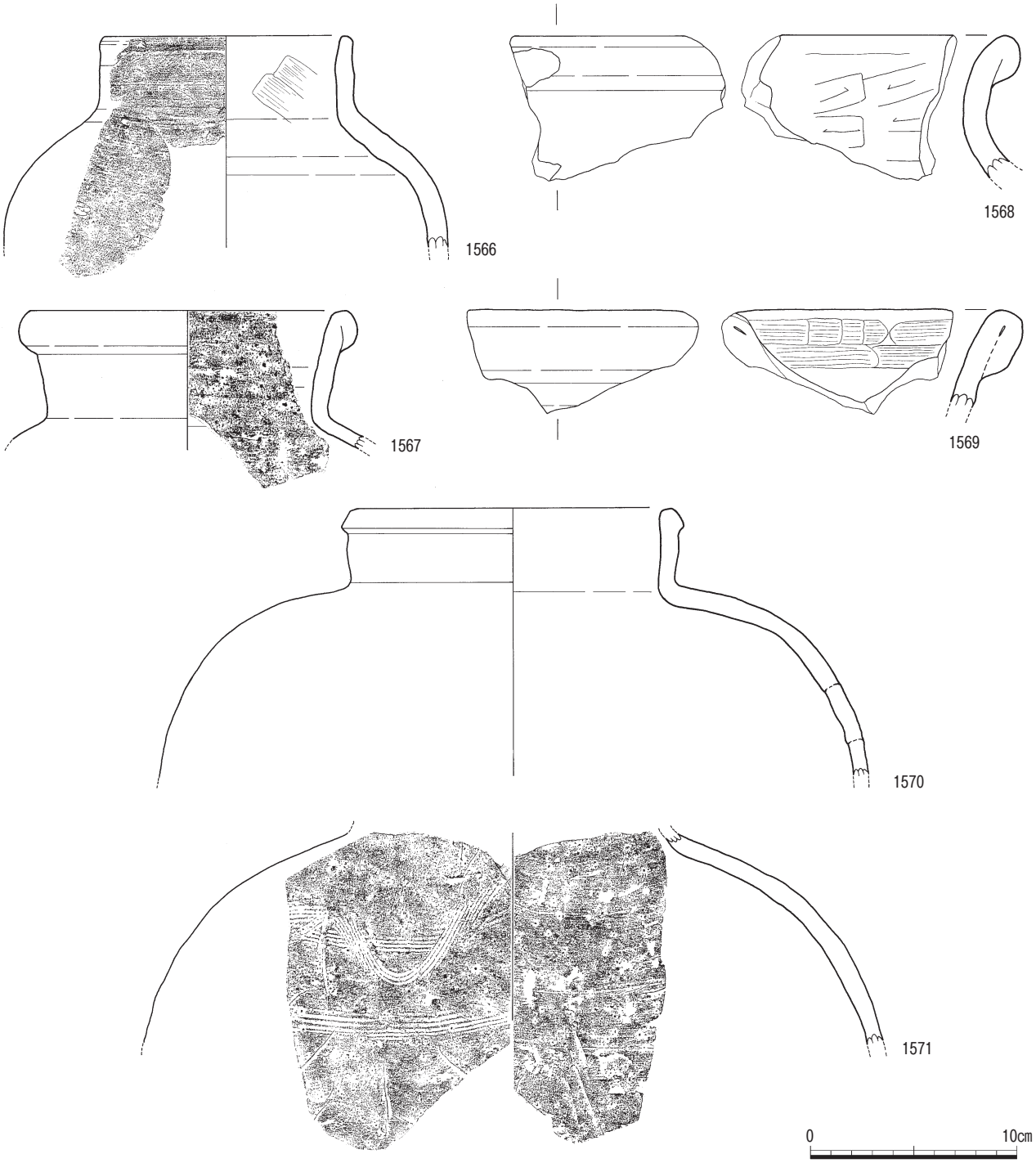


第255図　中世陶器２

が上下に伸びる。1561の口縁帯は２㎝を測る。1562は胴部が肩部で強く屈曲する。口縁帯は約2.5㎝を測る。1563は口縁帯中央が凹むもので，幅は約３㎝を測る。1564は肩部に矢羽根状の押印文が押される。口縁端部はさらに上下に伸びる。口縁帯中央は凹み，段を有し，幅は約４㎝を測る。1565は底部である。

備前（第256～259図）

1566～1572は壺である。胎土は灰色，赤褐色を主体とし，白色，黒色の砂粒や１～２㎜程度のやや大きめの小石を含む。焼き締めで内外面は赤褐色の色調を呈し，外面には灰黄色の自然釉がかかる。1566・1567は鳶口小壺である。口縁部は上方に直口する。1567の口縁端部は小形の玉縁状となる。1568・1569はわずかに外反する口縁部で，端部は折り返して玉縁をなす。1570は口縁端部がわずかに肥厚する。1571は肩部である。浅い横沈線と波状沈線が入る。1572は大壺である。胎土は灰白色で，内外面の色調も灰色を呈する。ヘラ状工具による器面調整



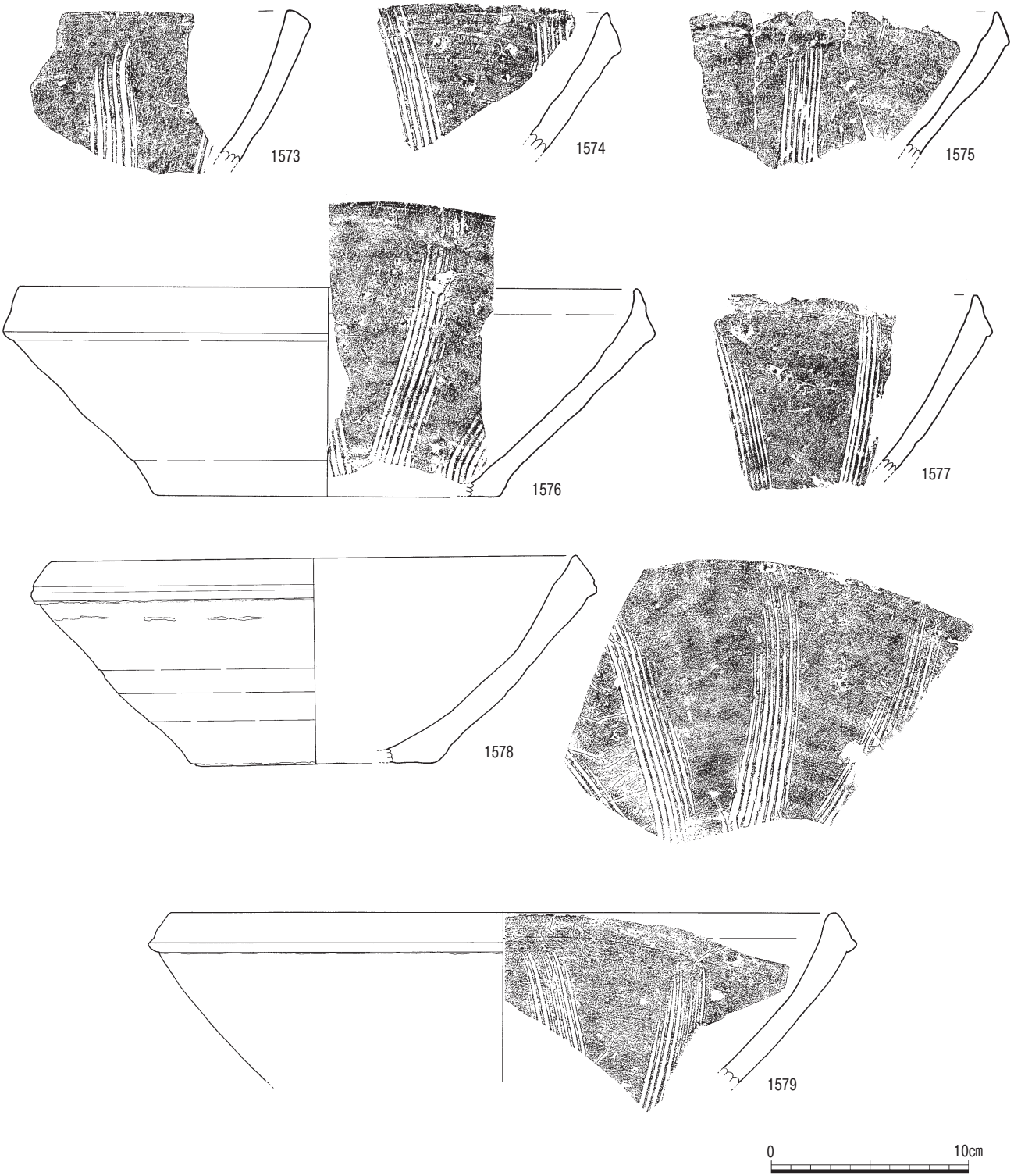
第256図　中世陶器３



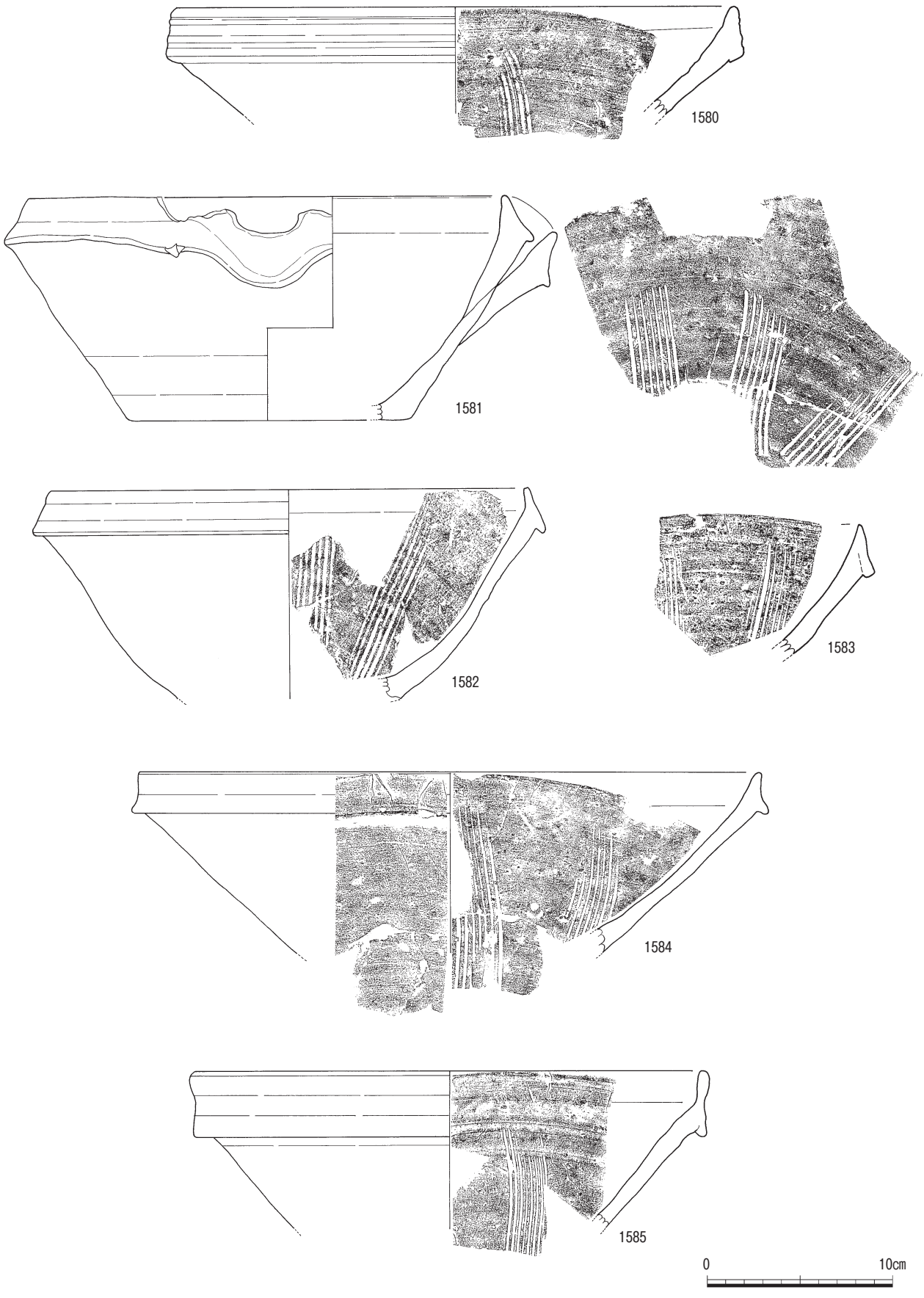
第257図　中世陶器４

が内外面に施され，横筋状に観察される。

1573～1585は擂鉢である。胎土は赤褐色系で，白色の砂粒を含む。釉はかからず焼き締めで，内面や口縁外面に自然釉がかかるものもみられる。1573の口縁部は，やや肥厚し，口唇部は外傾する。擂り目は１単位６条である。1574～1579は口縁部が菱形を呈するもので，口縁部は外傾し，上角端と下角がわずかに尖って突き出す。擂り目は１単位７～８条である。1580～1585は口縁部上角と下角の突出が強く，口縁内面と口縁外面中央に屈曲部を持つ。下角が下垂する。擂り目は１単位６～８条である。1585は口縁部上角の上方への伸びが大きいもので，下角も下垂する。口縁帯中央にはナデによる浅い凹みを



第258図　中世陶器５



第259図　中世陶器６

有する。擂り目は１単位８条である。

瓦質土器（第260～265図）

1586～1630は瓦質土器である。産地等の詳細は不明である。

1586～1598は擂鉢である。内面には粗い擂り目が放射状もしくは斜位に入り，使用により器面があばた状になったものや滑らかになったものがみられる。口縁部を外側に引き出してつくられた片口を有するが，欠損しているものもある。胎土は瓦質のものとやや焼成不良で土師質のものがみられる。1586は内面上位に短いハケ目状の調整痕が斜位に残る。

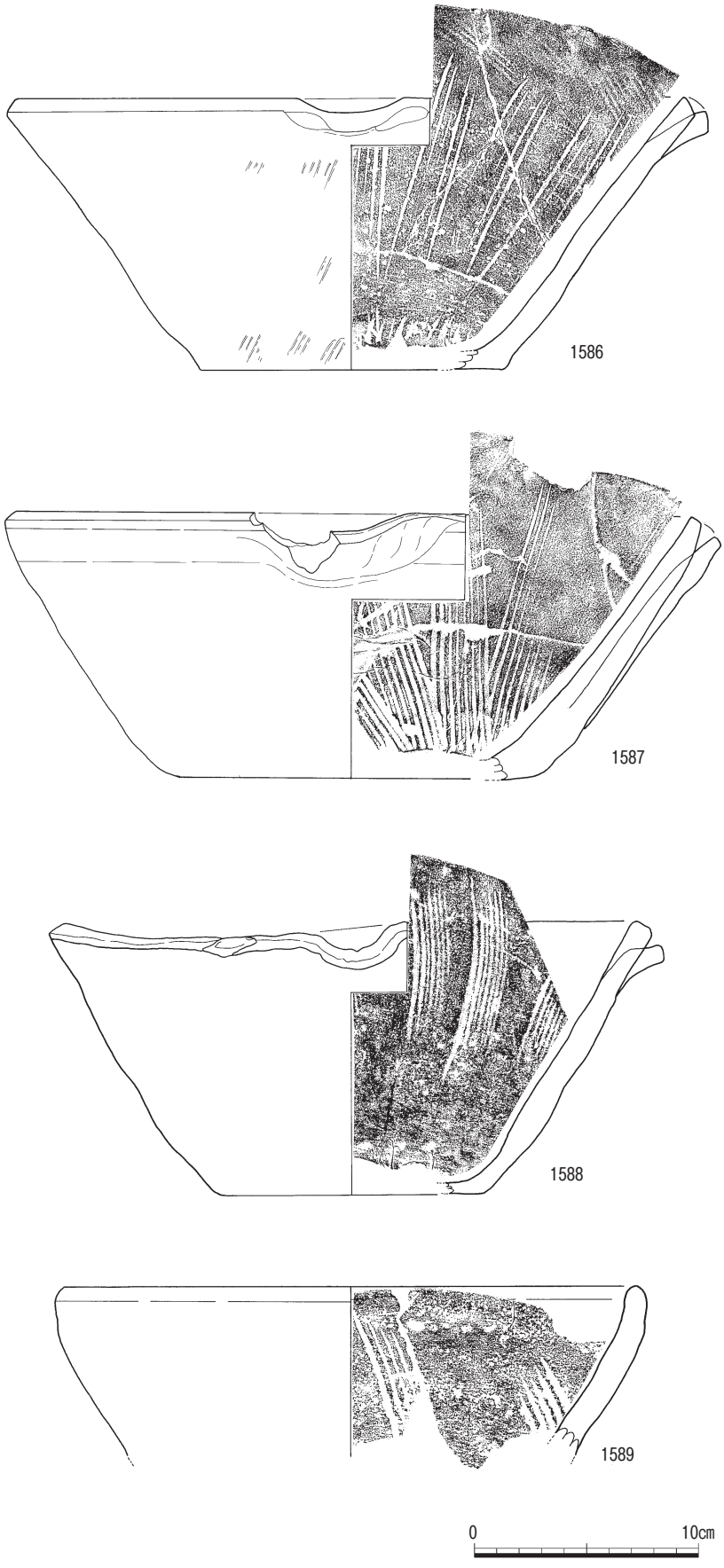
1589は口縁が内湾するもので，擂り目も斜位に入る。1592は小さく深さの浅い資料である。1593～1595は擂り目の下に，ハケ目状の器面調整の痕跡が残る資料である。1594は外面に綾杉状のタタキ目も残っており，内面の擂り目も粗く，体部もやや内湾することから擂鉢でない可能性も考えられる。

1599は内面に擂り目を有するもので，胴部に鍔と思われる突起が巡る。外面には煤が付着していないことから，火にはかけていないものと思われる。外面下位にはハケ目状の器面調整の痕跡が縦に観察される。

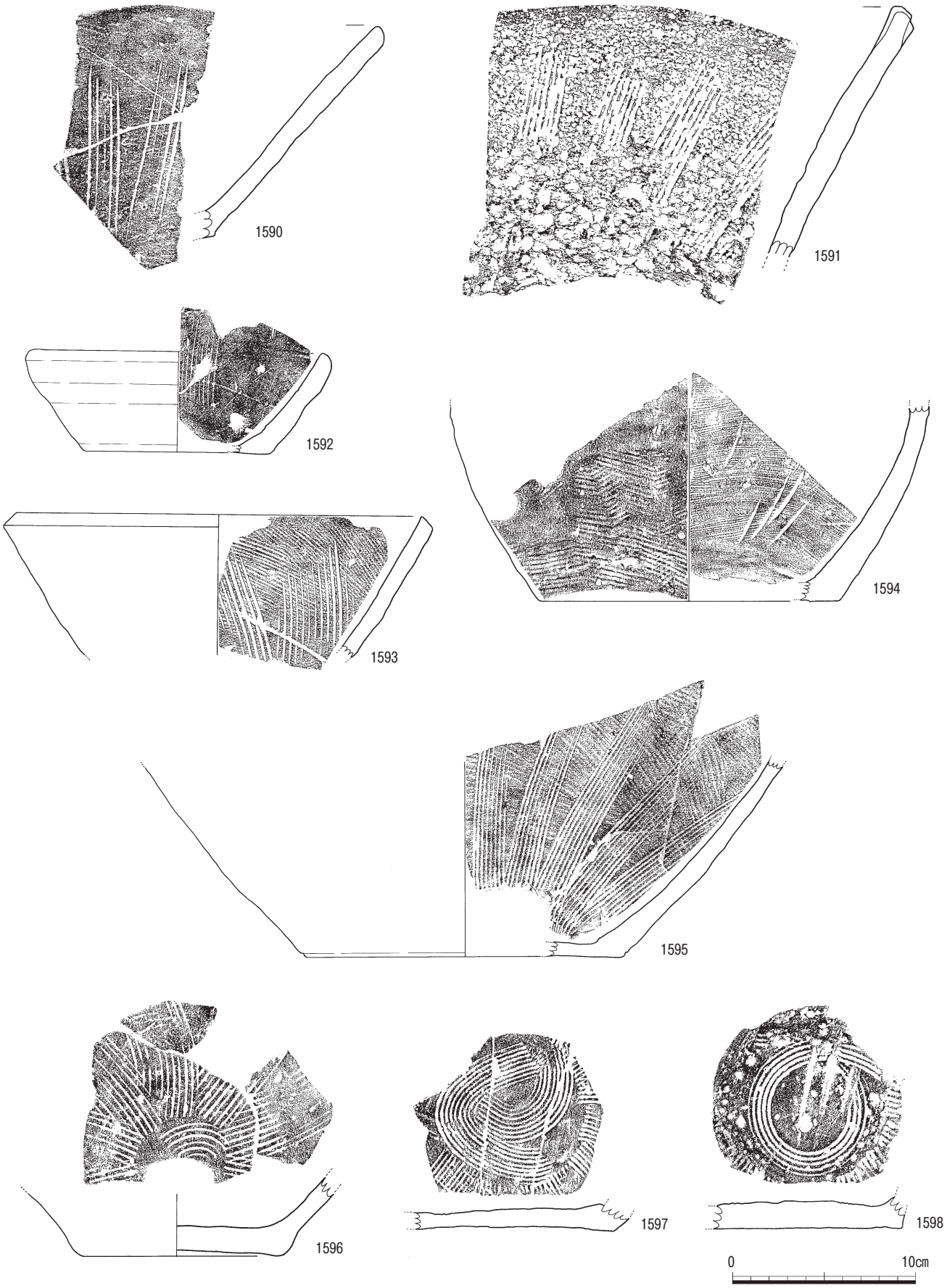
1600～1602は茶釜である。外面には花文がスタンプされる。肩部には縦耳が対で付き，胴部中央には鍔が巡る。

1600は胎土が鈍い黄橙色を呈すが，1601と1602は灰色系の色調で，外面は炭素で燻され黒色を呈する。1600の鍔の上下には煤が付着する。1603・1604は羽釜である。胎土は灰白色で瓦質である。1603は鍔に接して縦耳が対で付く。

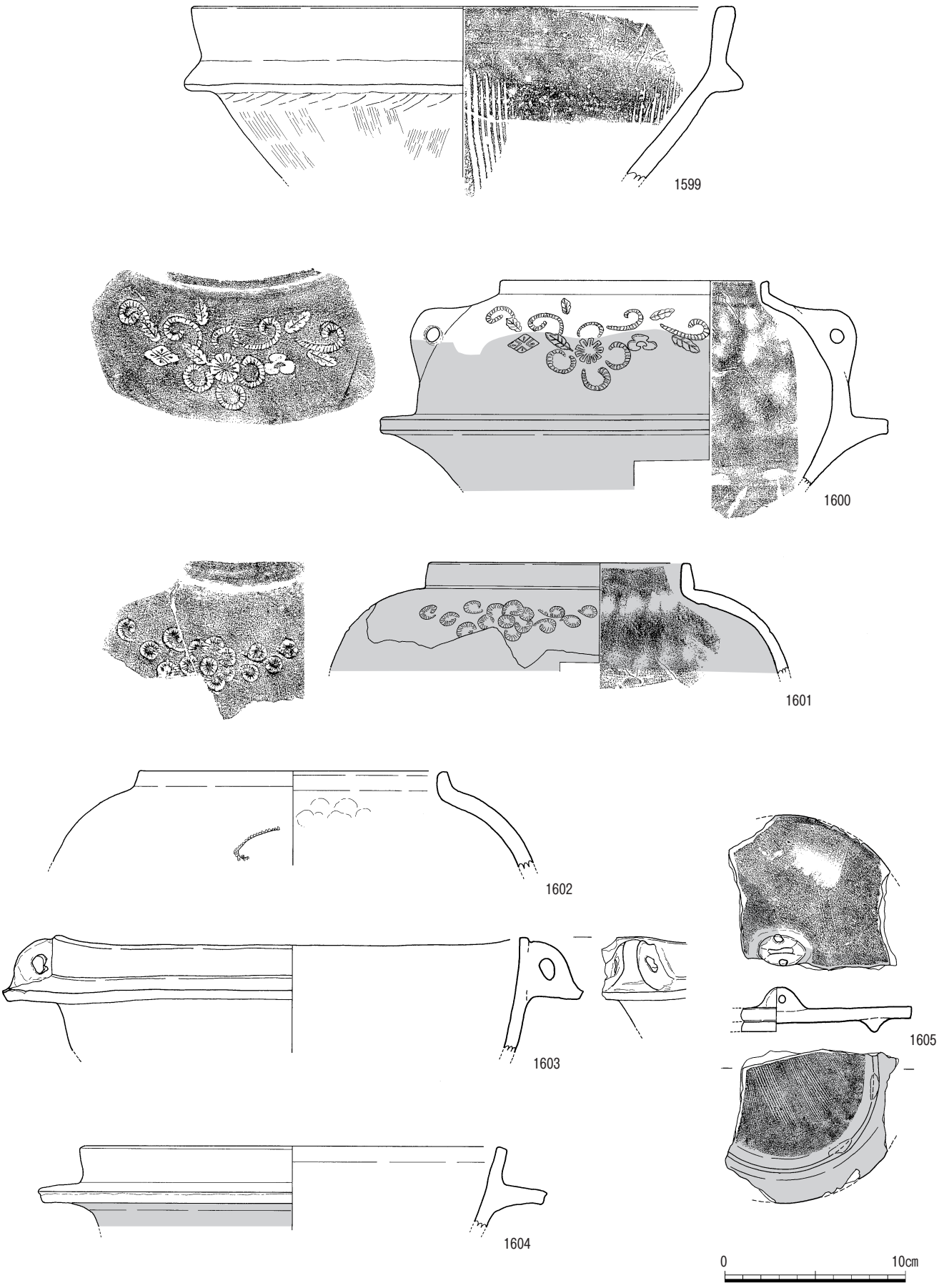
1605は茶釜の蓋である。上面および下面にはハケ目状のナデ調整の痕跡が残る。上面中央にはアーチ状のつまみが付く。



第260図　瓦質土器１



第261図　瓦質土器２



第262図　瓦質土器３

火鉢（第263～265図）

1606～1627は火鉢である。1606～1609は，□と×を組み合わせた幾何学文様がスタンプされる。1606・1607は体部が丸みを帯び，口縁部は内湾する。内面はハケ目状の調整痕が残り，煤が付着する。外面は幾何学文様を挟んで２条の突帯が巡り，1606は下位にも煤が付着する。1609は体部は丸みを帯びるが，口縁部が直口するもので，風炉と思われる。1610～1622は，深鉢形の資料である。口縁部は肥厚するものとしないものがあり，さらにやや内湾するもの，直口するもの，やや外反するものがある。内面はハケ目状の工具痕がのこるものが多く煤も付着する。外面には１条～４条の突帯が巡り，その間や上下に花文や幾何学文様がスタンプされる。1611は胎土に微細な金雲母が入り，外面には横方向のミガキが施される。

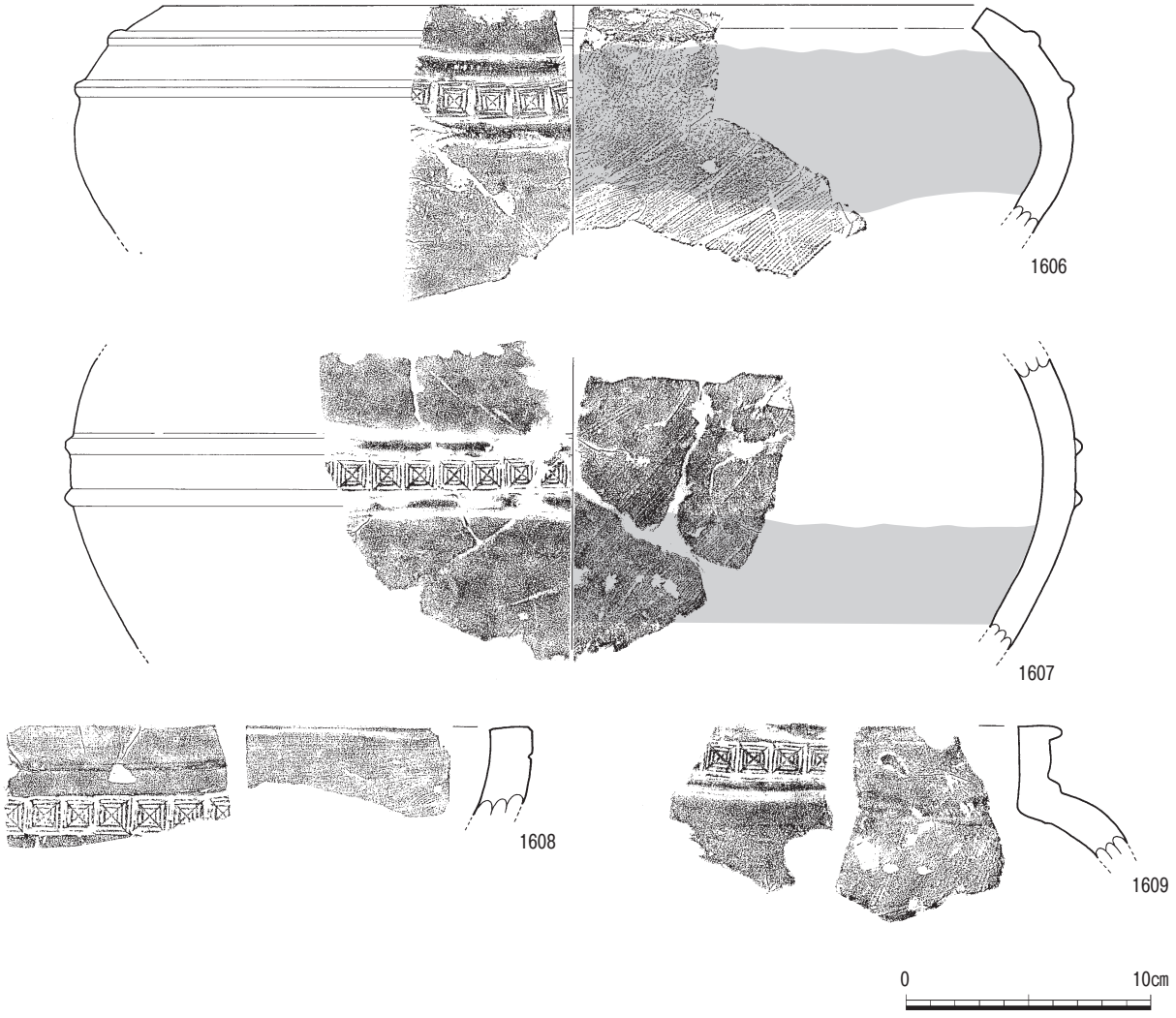
1623～1627は底部である。さまざまな形状の脚部があるが，基本的には３足である。内底面はハケ目状の調整痕が残るものがみられ，煤も付着する。1626は外面に横方向のミガキが施される。1627は方形の形状を呈するものである。火鉢として取り扱ったが，他の器種の可能性も考えられる。外面にはミガキが施される。

1628～1630は内底面に煤が付着することから，火消し壺等の蓋と思われる。1628・1629の外面には花文がスタンプされる。

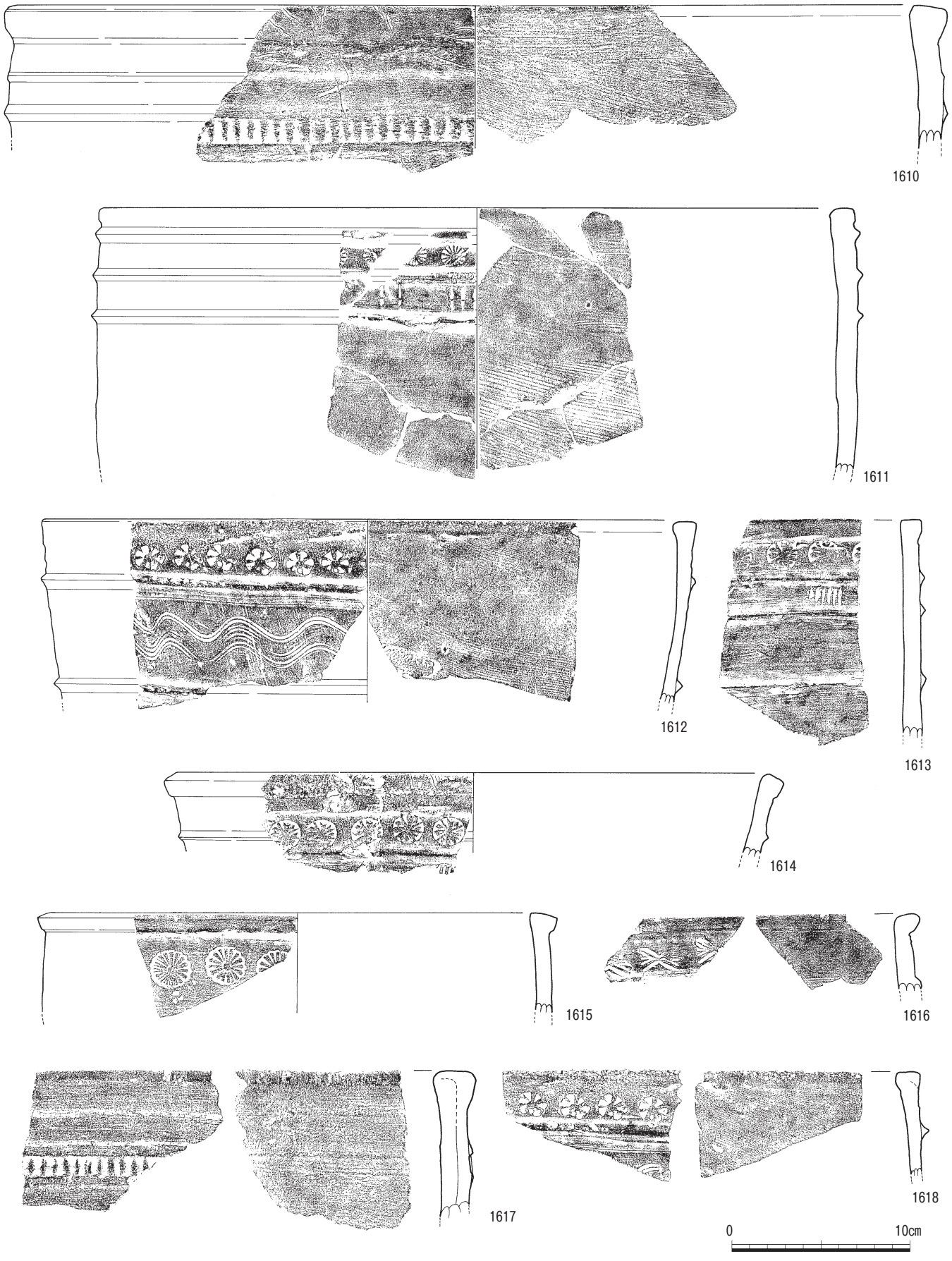
土師質土器（第266・267図）

かまど（第266図）

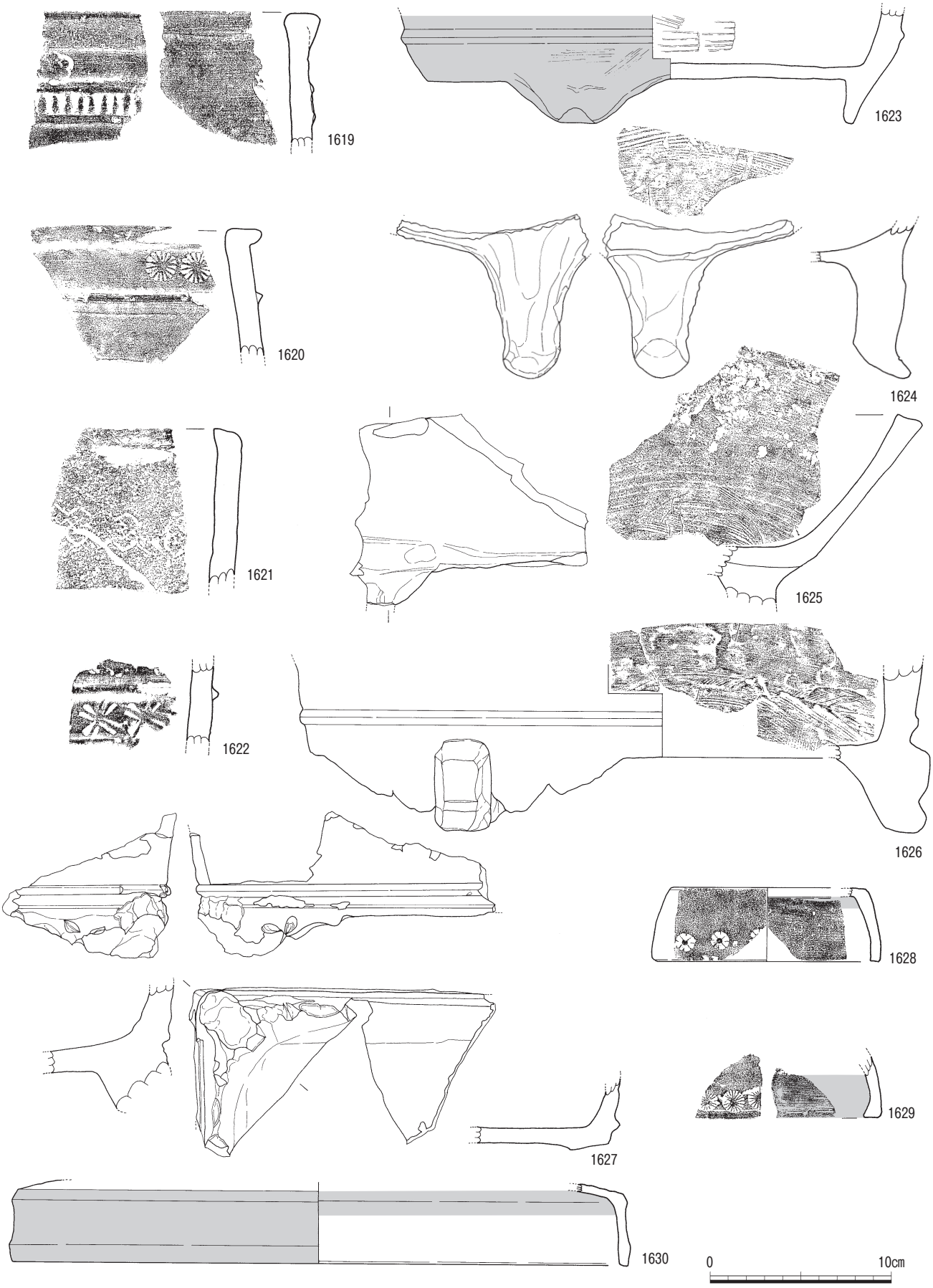
1631は筒形を呈する移動式のかまどである。内面上位に突起が３か所つく。上端には半円状に抉り取られた空気孔が１か所観察される。外面上位に１条の沈線が巡り，内面はヘラ状工具による調整痕が残る。1632は外形が方形，内形が筒形の移動式かまどである。外形と内形の間は中空となる。内形の内側は，ハケ目状の調整痕が横位に残り，突起が３か所付く。胎土には微細な金雲母が入る。上面には〇に喜助の押印がある。



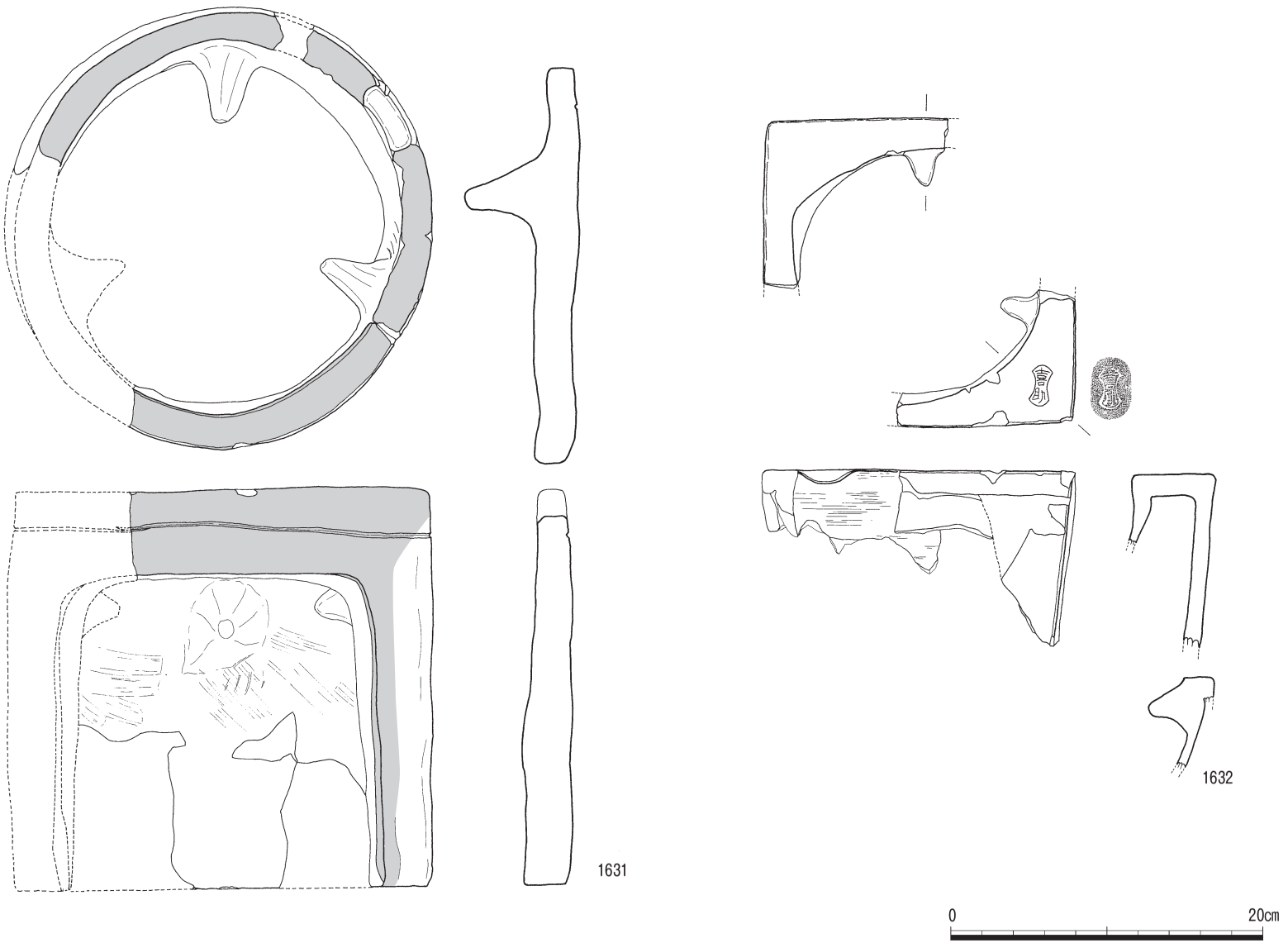
第263図　瓦質土器４



第264図　瓦質土器５


1619
1623
1620
1624
1621
1625
1622
1626
1628
1627
1629
1630
0
10cm

第265図　瓦質土器６



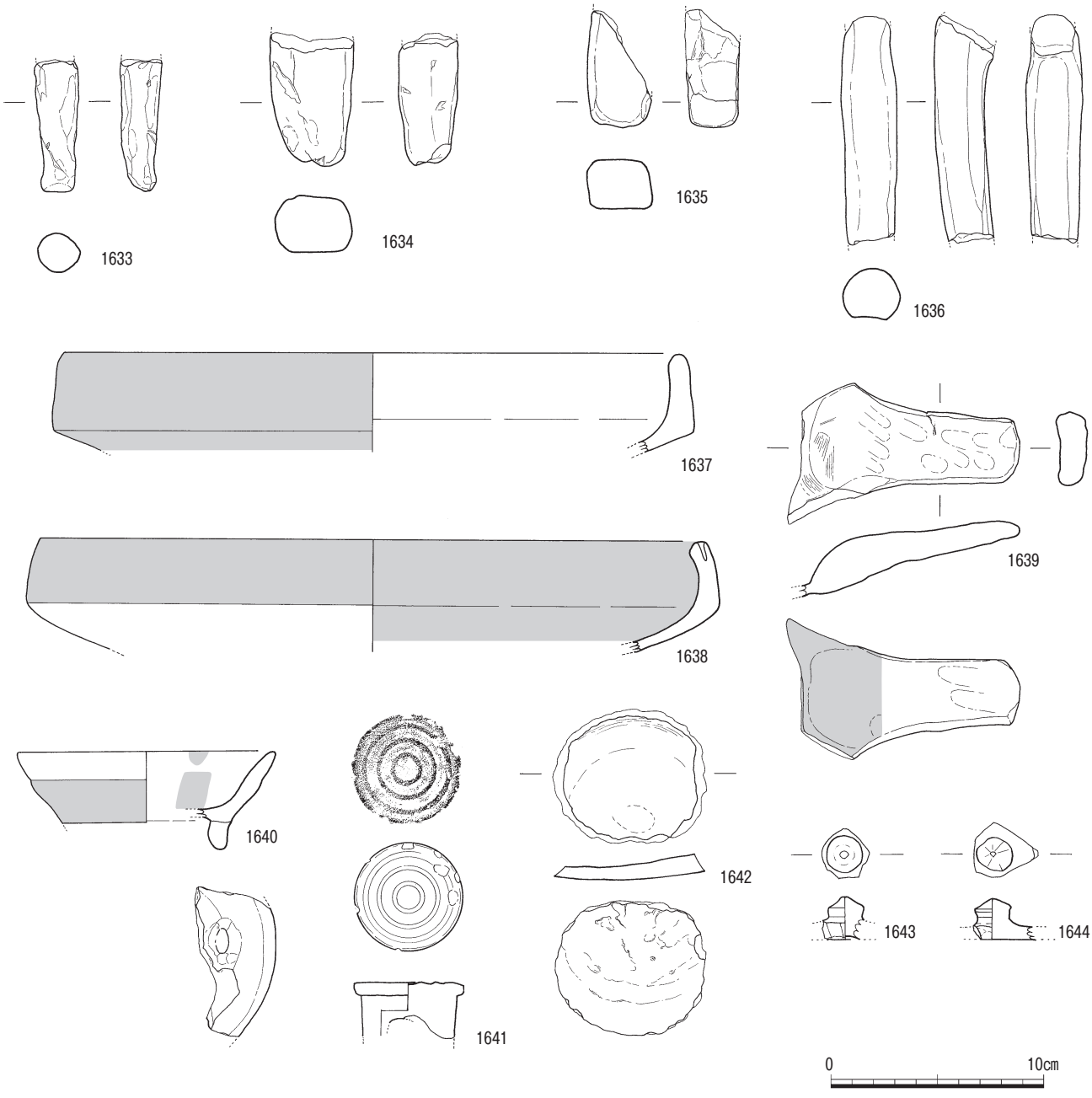
第266図　土師質土器 1

土師質土器（第267図）

1633～1636は，土師質土釜の脚部と思われる資料である。土釜には３足の脚が付き，その一部と思われる。1633・1636は断面が円形状を呈し，1633は先端が外側に反る。1634・1635は断面が隅丸方形状を呈するものである。1637～1639は焙烙である。中世に相当するものとして報告するが，近世に相当する資料である可能性も残る。1637・1638は外側面に煤が付着する。1639は焙烙の把手である。1640は３足付きの坏である。詳細な用途は不明である。

その他（第267図）

1641は土師質の資料で，上面に同心円状の低い突帯を有するものである。下部は棒状を呈するが，中心は穿孔される。タタキ成形の当て具のようでもあるが，詳細は不明である。1642は瓦質土器の底部を転用したメンコである。1643･1644は宝珠状を呈する蓋のつまみ部である。産地，材質等も含め詳細は不明である。



第267図　土師質土器２・その他

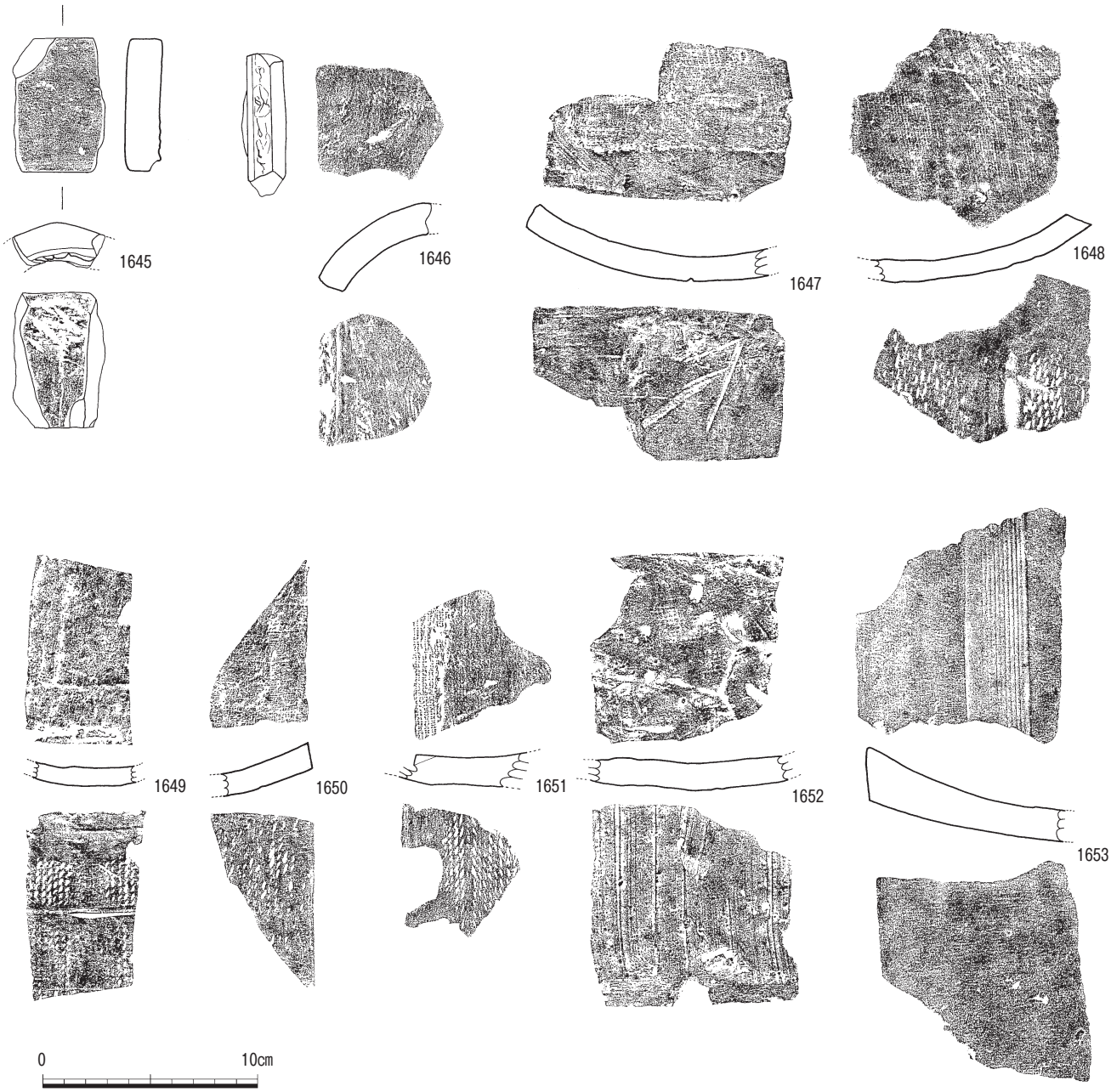
瓦（第268図）

1645～1653は中国産の瓦である。胎土は緻密で，灰色系を呈し須恵器質であるが，色調は灰白色を呈するもののほか黄橙色系のものもみられる。1645・1646は丸瓦である。1645は長さが非常に短い資料である。1646の左側は切り離しの痕跡が残る。1647～1653は平瓦である。1647～1652は模骨に布を巻き，粘土を叩き伸ばし製作し４分割したもので，内面には布の圧痕が明瞭に残る。外面は縄目叩きが施されるが，縄目をヘラ状工具でナデ消す資料とそのままにする資料がみられる。1653は中国瓦でない可能性が考えられる資料であるが，産地不明であるためここで報告する。胎土は鈍い橙色で，やや粗い。内面に木目と思われる圧痕が残る。外面も丁寧なナデ調整が施され，なめらかな仕上がりとなっている。

滑石製品（第269～271図）

石鍋（第269・270図）

1654～1664は石鍋である。ノミ状工具により加工されており，外面には縦位の工具痕が細かく残るものが多い。1654～1656は，浅鉢形のもので，体部は丸みを帯び口縁



第268図　瓦

部はやや内湾する。外面口縁下位に鍔が巡る。1654は胴部中位に２か所，貫通しない穿孔が入れられる。1657は口縁部が内湾しないもので，外面口縁下位には低い鍔が巡る。1658の体部は逆ハの字状に開く。1659～1661は穿孔があけられた口縁部である。1662は鍔部である。体部は丸みを帯び，外面には斜位のノミ痕が残る。1663・1664は底部である。1663は底部と胴部の境に，1664は底面に穿孔があけられる。

二次加工品（第270・271図）

1665～1686は滑石製品の二次加工品と思われる資料である。製品として完成されたものの他，加工途中で廃棄されたものも見られる。用途については不明のものが多い。1665～1670は，石鍋の耳部や鍔部分を二次加工したもので，円形もしくは楕円形の馬連状を呈する。1665は蓋状の形状をした資料である。1667はつまみの中央に穿孔を有する。1670は馬連状を呈する二次加工品としたが，他の用途も考えられる資料である。1671～1677は，滑石を棒状に加工し，表面に縦や横，斜めの沈線を刻んだものである。詳細な用途は不明である。1677は石鍋の胴部を転用したものである。上端を丸く加工している。1678～1682は楕円もしくは筒状に加工された滑石に円穿孔があけられた石錘状の資料である。1678は上面に沈線を刻む。1683は方形状に加工した滑石の３辺に抉りを入れた資料である。1684は上端に加工した資料である。右側面は口唇部にあたる。1685は楕円状に加工した滑石の一端に穿孔を施す。

石製品（第271図）

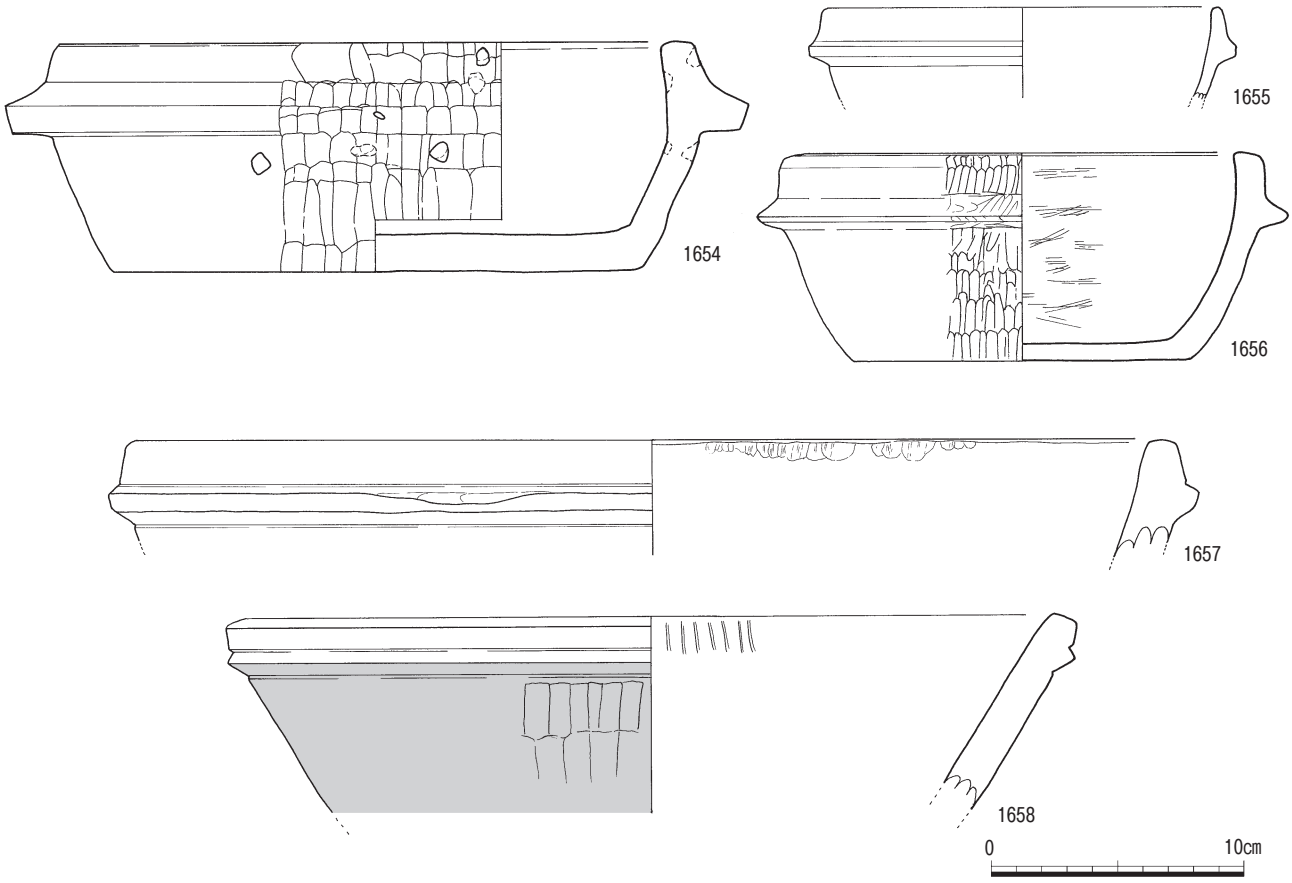
1686は，石製品である。方形を呈する薄い板状の石の中央には，つまみ状に削り出された方形の突起が付く蓋であるのか，詳細は不明である。

砥石（第272図）

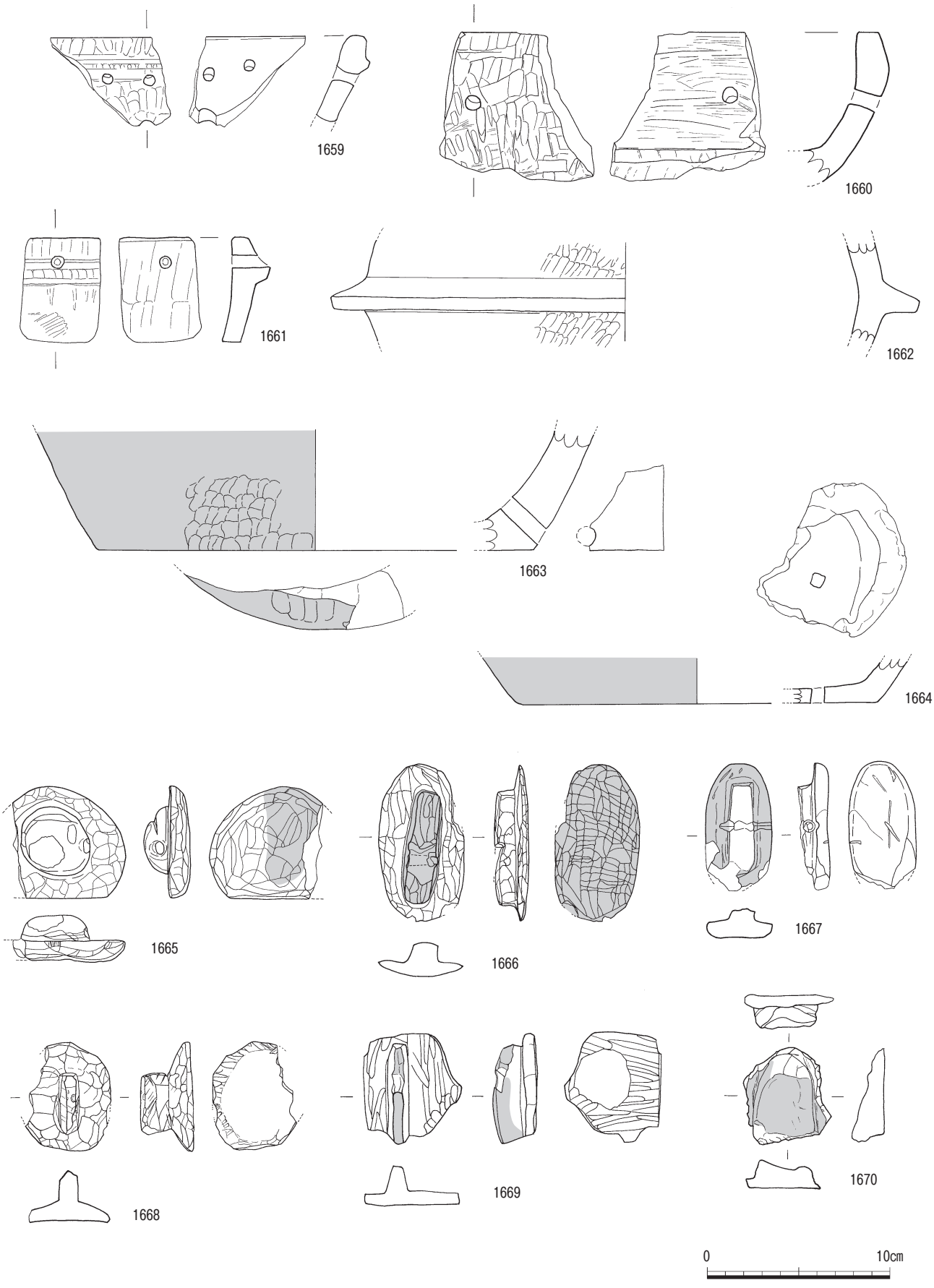
1687～1695は砥石である。これらの詳細な時代は不明であり，中世の範疇で報告するが，近世の可能性も考えられる資料である。1688は，上面と下面の中央に溝状の凹みを有する資料である。1694は下げ砥である。砥石の一方に吊り下げるための穴があけられている。

五輪塔（写真図版69）

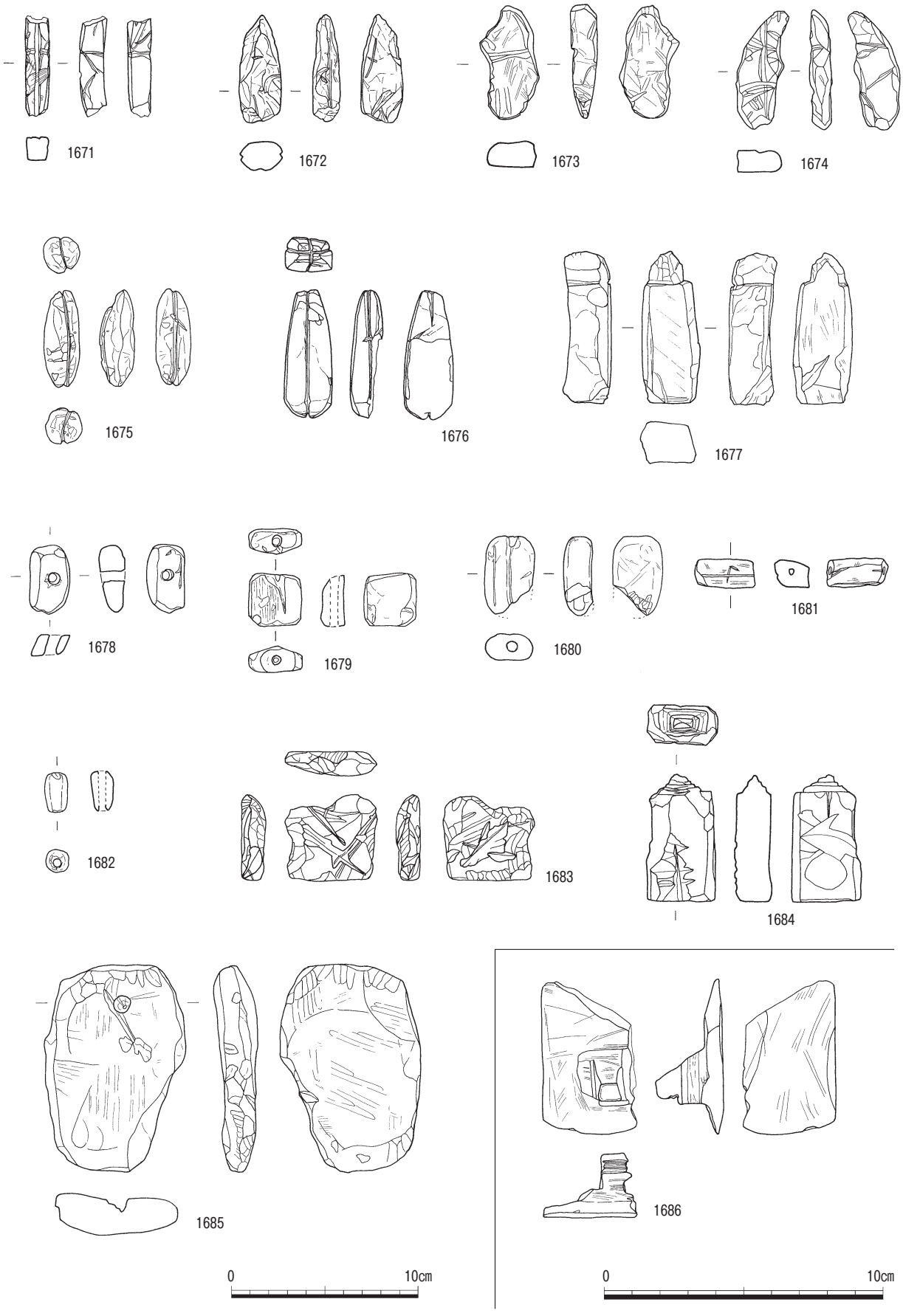
本遺跡の表層からは，五輪塔が出土している。本体の位置はとどめておらず，一か所に寄せられた状態で発見された。写真で掲載することとした。



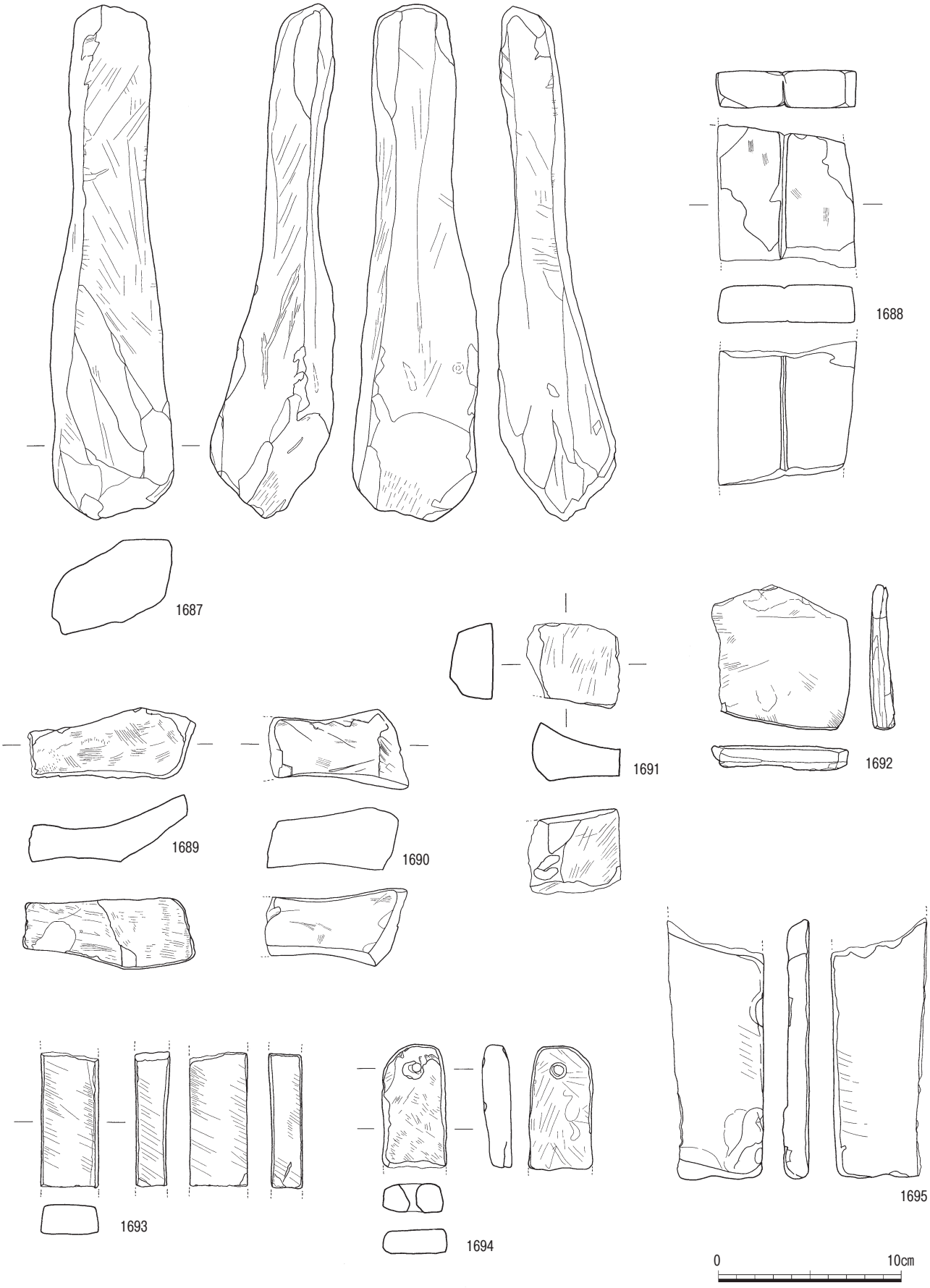
第269図　滑石製石鍋



第270図　滑石製石鍋・滑石製品



第271図　滑石製品・石製品



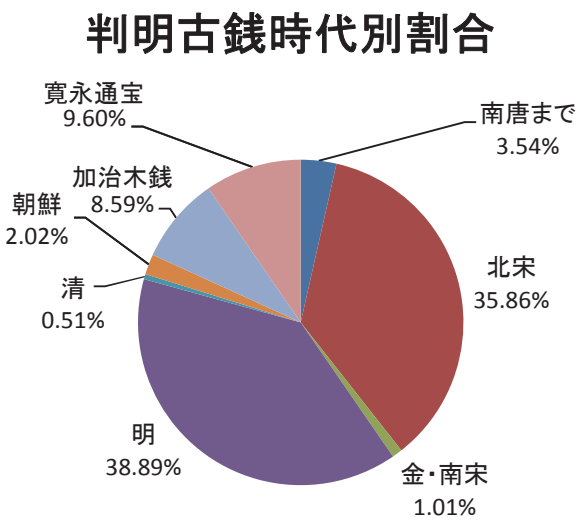
第272図　砥石

古銭

芝原遺跡では，284枚の古銭が出土した。内訳としては，遺構内遺物が124枚，一般遺物が160枚である。第273～277図では，一般遺物の古銭104枚の拓影を示す。尚，錆や腐食の影響で，複数枚癒着した状態で出土している古銭は，結合した状態のまま１枚とカウントし，結合枚数については，観察表に掲載している。また，解読不明の古銭についても，出土区等の情報を観察表に掲載している。

銭貨名が判明した古銭で，鋳造王朝別の構成を見てみると，明銭が77枚で全体の約39%，北宋銭が71枚で全体の約36%を占める。南宋銭は，金の古銭を含めて２枚で，約１%にすぎない。唐銭は出土数７枚で約3.5%，清銭１枚で0.5%，朝鮮銭４枚で約２%，寛永通宝の割合は，9.6%程度になる。

注目される古銭としては，16世紀から17世紀頃，薩摩国で鋳造されたといわれている加治木銭が17枚出土した（掲載箇所は観察表参考）。明銭の洪武通寶の銭文をそのまま用い，背面に「治」を鋳出している。内訳としては土坑墓内から10枚，一般遺物として７枚出土している。芝原遺跡周辺では，隣接する渡畑遺跡や万之瀬川上流の上水流遺跡，加世田川畑の花抜園墓地からも加治木銭は出土している。



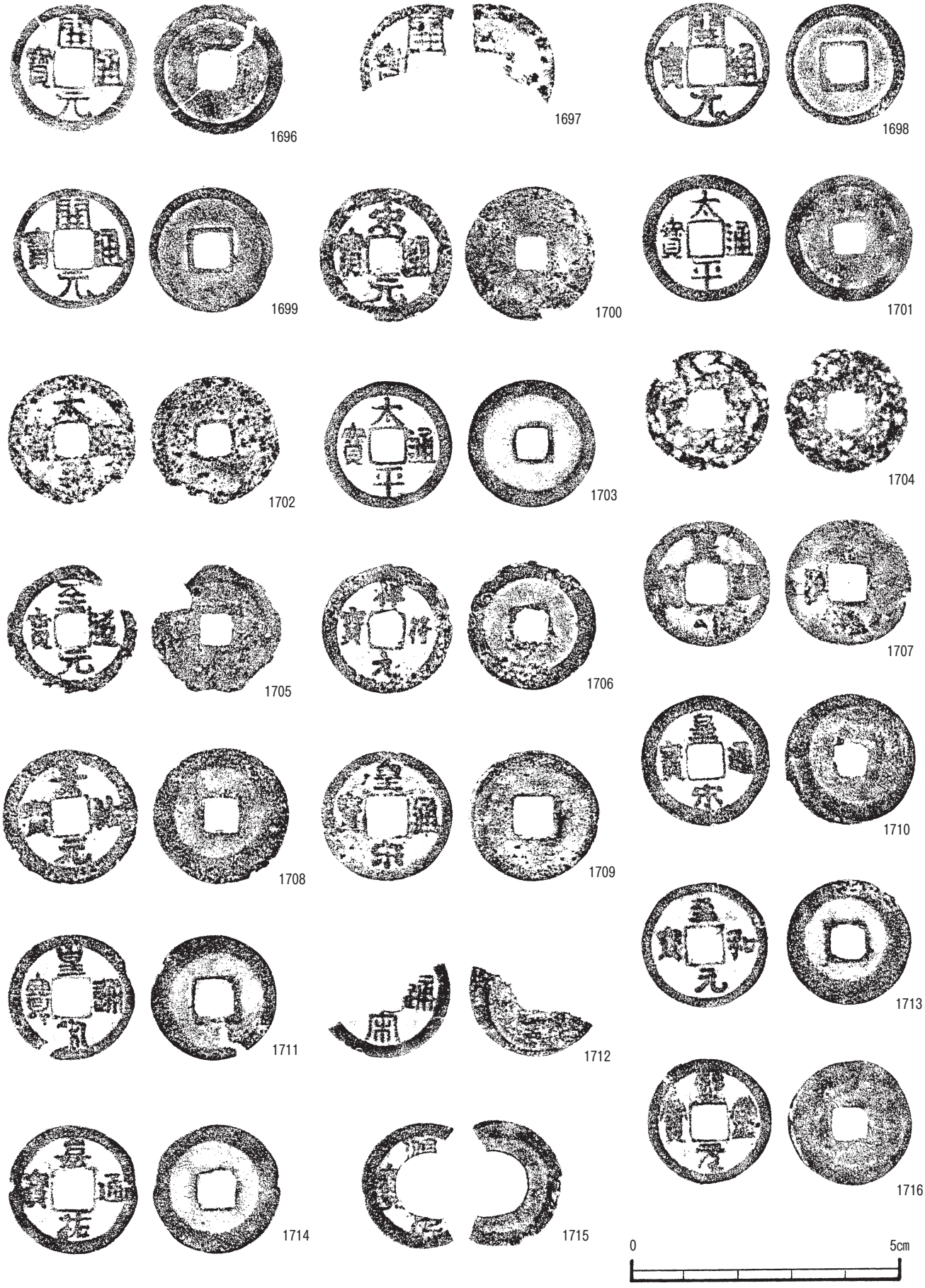
出土枚数として一番多いのは，　明銭の洪武通寶で70枚出土しているが，約半分の34枚が土坑墓内からの出土である。洪武通寶の模鋳銭である加治木銭も半分以上が土坑墓内からの出土であるのに対し，北宋銭は71枚中４枚しか土坑墓内から見つかっていない。これは，芝原遺跡では，北宋銭と明銭の使用目的に変化があることをうかがわせるものである。

また，江戸幕府の鎖国政策以降にあたる，1662年初鋳の康熙通寶が，１枚ではあるが出土している。

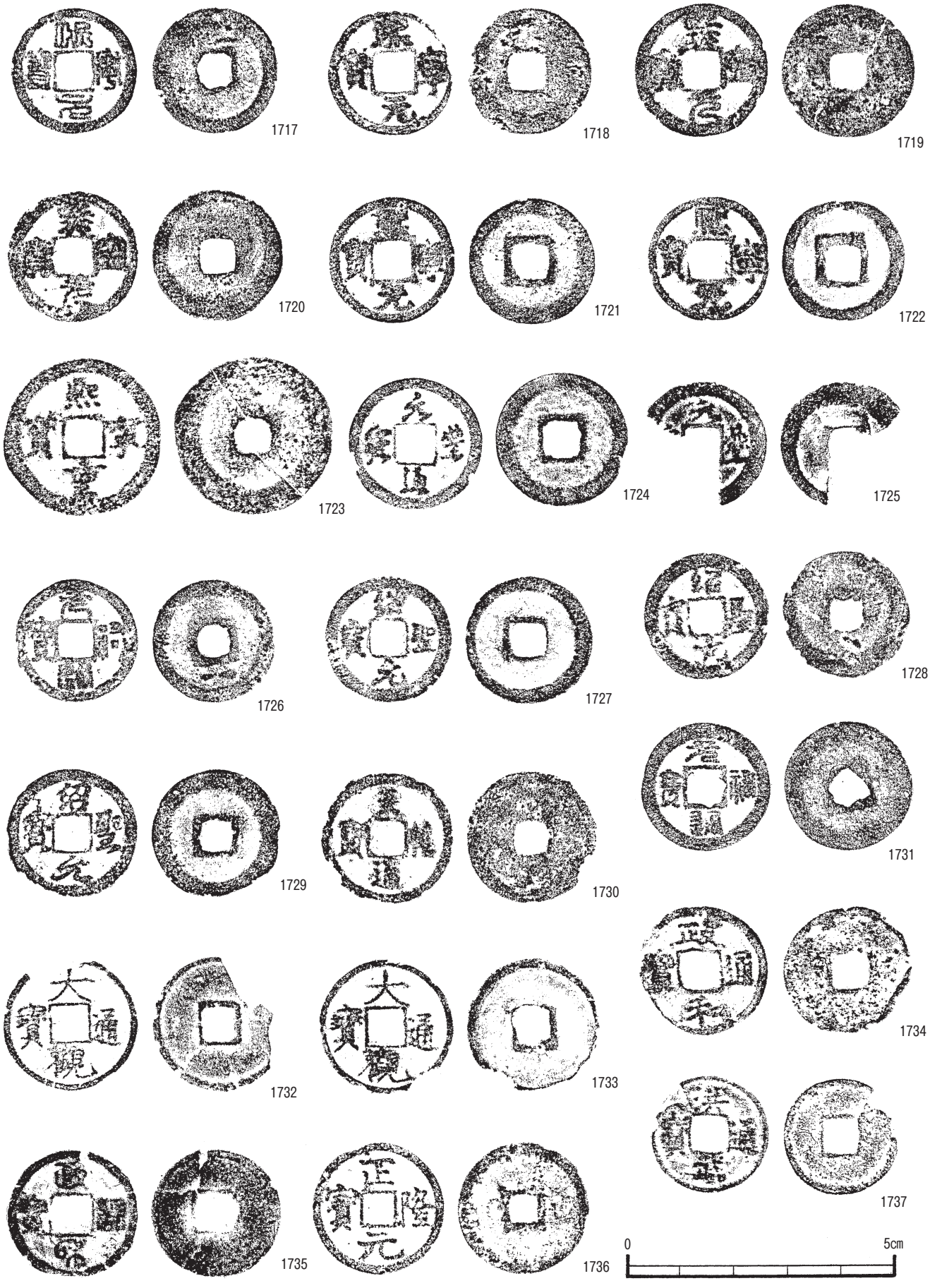
西暦別出土古銭一覧表

銭貨名	西暦	王朝名	初鋳年	枚数	銭貨名	西暦	王朝名	初鋳年	枚数
開元通寶	621年	唐	武徳４年	6	熙寧重宝	1071年	北宋	熙寧３年	1
	960年	南唐			元豊通寶	1078年	北宋	元豊元年	6
乾元重寶	758年	唐	乾元元年	1	元祐通寶	1086年	北宋	元祐元年	4
宋通元寶	960年	北宋	建隆元年	1	紹聖元寶	1094年	北宋	紹聖元年	4
太平通寶	976年	北宋	太平興国元年	8	元符通寶	1098年	北宋	元符元年	2
至道元寶	995年	北宋	至道元年	2	大観通寶	1107年	北宋	大観元年	2
咸平元寶	998年	北宋	咸平元年	1	政和通寶	1111年	北宋	政和元年	4
景徳元寶	1004年	北宋	景徳元年	2	正隆元寶	1157年	金	正隆２年	1
祥符通寶	1009年	北宋	大中祥符元年	2	淳祐元寶	1241年	南宋	淳祐元年	1
祥符元寶	1009年	北宋	大中祥符元年	5	大中通寶	1361年	明	明朝建国前	1
天聖元寶	1023年	北宋	天聖元年	3	洪武通寶	1368年	明	洪武元年	70
景祐元寶	1034年	北宋	景祐元年	2	永楽通寶	1408年	明	永楽６年	6
皇宋通寶	1038年	北宋	寶元元年	8	康熙通寶	1662年	清	康熙元年	1
至和元寶	1054年	北宋	至和元年	1	朝鮮通宝	1423年	朝鮮	世宗５年	4
嘉祐通寶	1056年	北宋	嘉祐元年	1	加治木銭		薩摩		17
嘉祐元寶	1056年	北宋	嘉祐元年	1	寛永通寶	1636年～	江戸	寛永13年	19
治平元寶	1064年	北宋	治平元年	1	近代銭				3
熙寧元寶	1068年	北宋	熙寧元年	10	解読不能				83
								出土総数	284

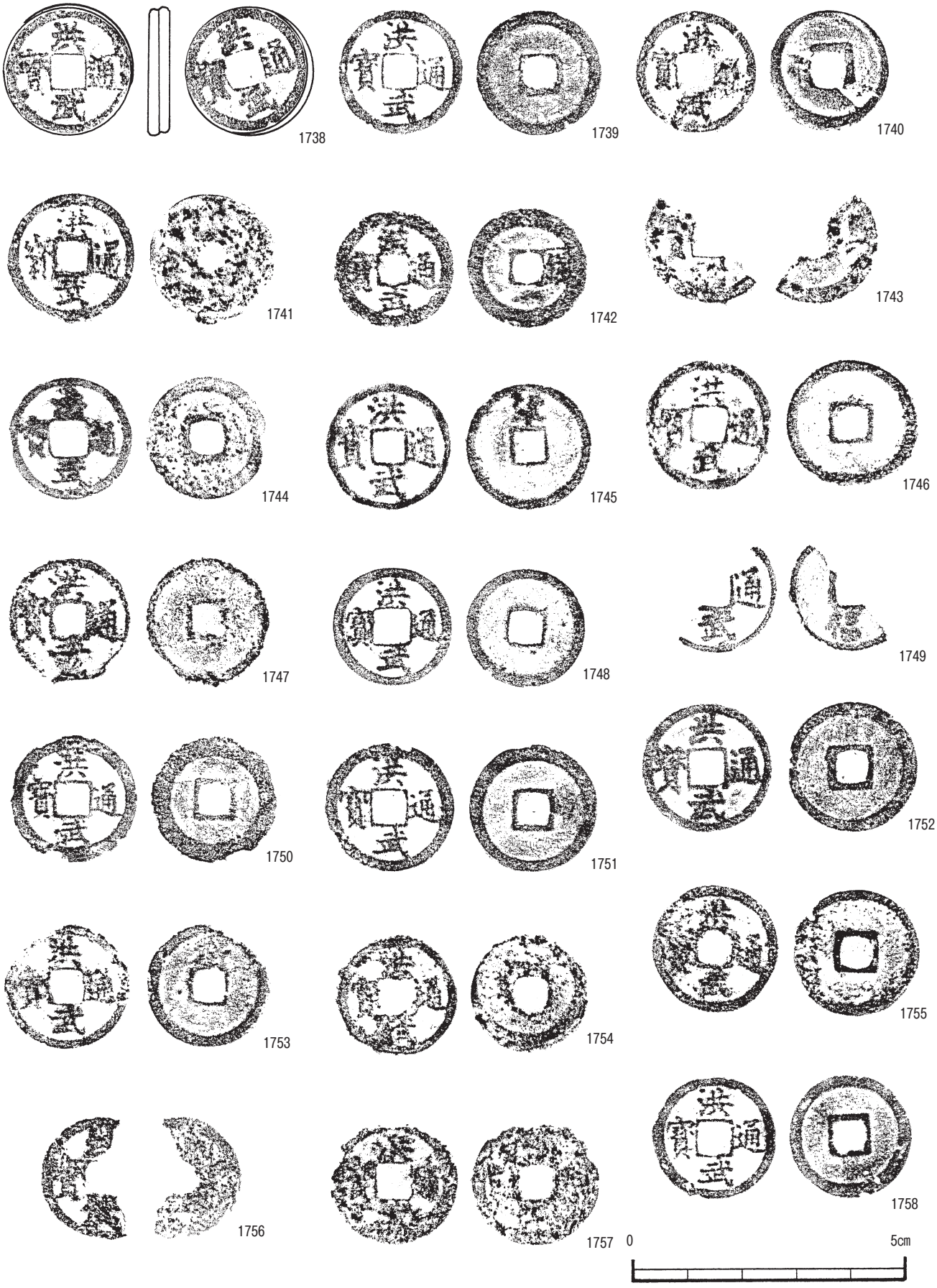
※初鋳年，西暦は『日本出土銭総覧』を参考にしている。


1696
1697
1698
1699
1700
1701
1702
1703
1704
1705
1706
1707
1708
1709
1710
1711
1712
1713
1714
1715
1716
0
5cm

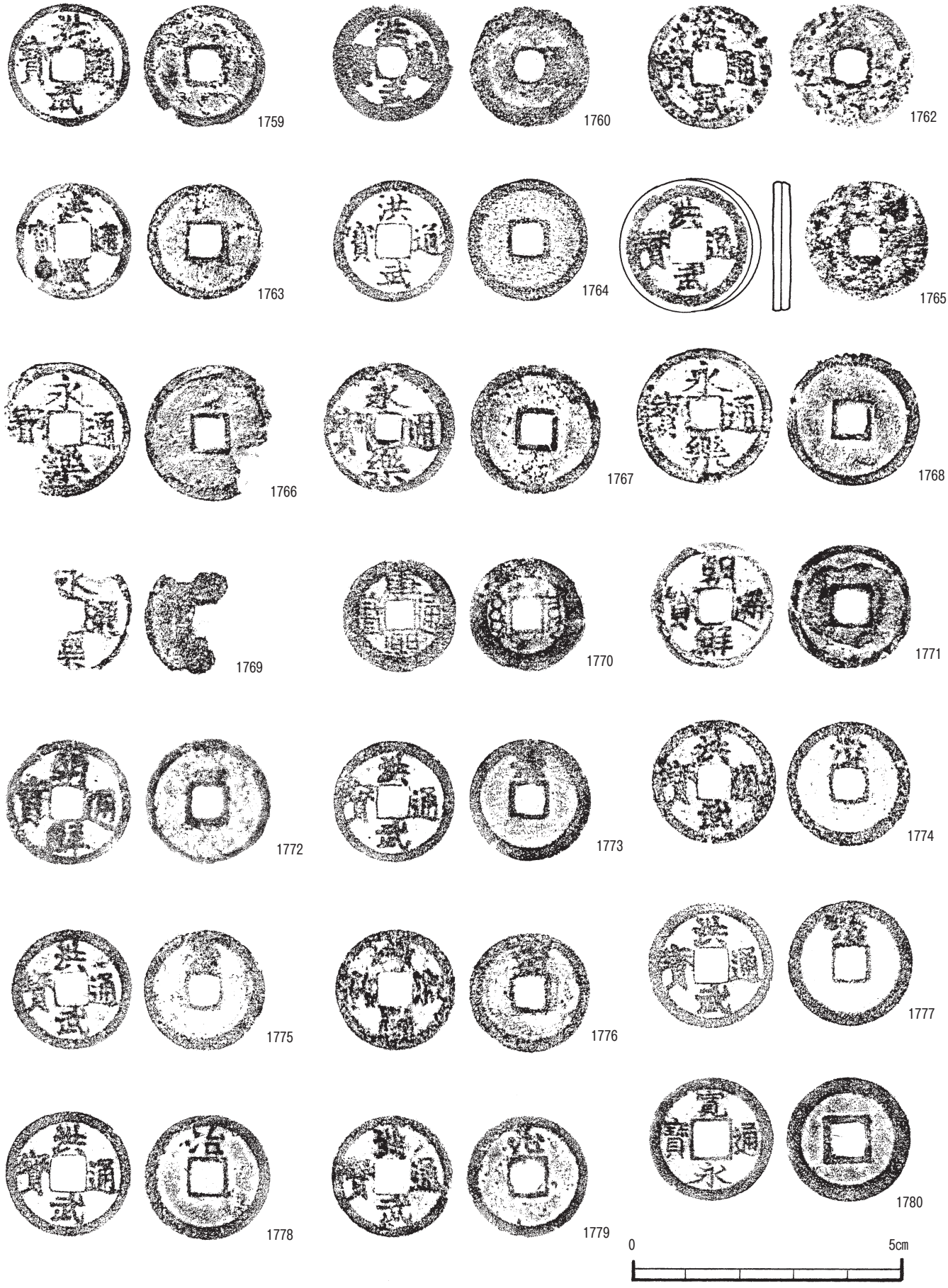
第273図　古銭１


1717
1718
1719
1720
1721
1722
1723
1724
1725
1726
1727
1728
1729
1730
1731
1732
1733
1734
1735
1736
1737
0
5cm

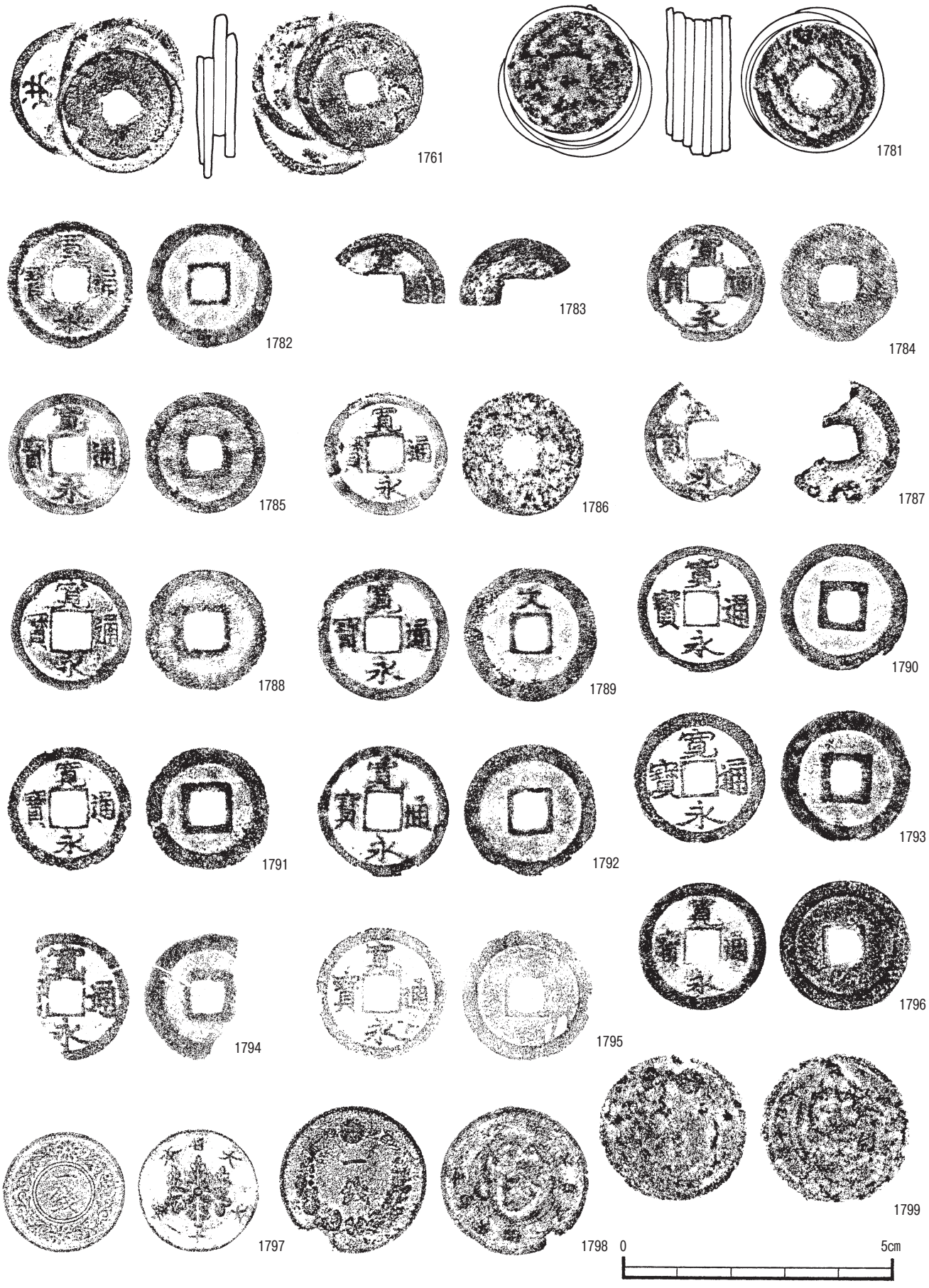
第274図　古銭２


1738
1739
1740
1741
1742
1743
1744
1745
1746
1747
1748
1749
1750
1751
1752
1753
1754
1755
1756
1757
1758
0
5cm

第275図　古銭３


1759
1760
1762
1763
1764
1765
1766
1767
1768
1769
1770
1771
1772
1773
1774
1775
1776
1777
1778
1779
1780
0
5cm

第276図　古銭４


1761
1781
1782
1783
1784
1785
1786
1787
1788
1789
1790
1791
1792
1793
1794
1795
1796
1797
1798
1799
0
5cm

第277図　古銭５

掘立柱建物跡出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第127図	701	掘立12号 柱穴6	A-25		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	9.4	7.3	1.6	底部糸切り　13ｃ～14ｃ代
第139図	709	掘立30号 柱穴10	G-7		土師器	皿	橙色	ナデ	ナデ	8.3	6.0	1.8	口縁部煤付着

方形竪穴建物状遺構内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第142図	712	竪穴建物１号	B・C-31		白磁	皿	灰白色	透明釉	外面腰部～外底面　露胎 口禿げ	10.2	6.2	2.4		13c後半～ 14c前半	Ⅲ区類　Ｆ期
	713	竪穴建物１号	B・C-31		青磁	椀	灰白色	青磁釉 灰褐色	残存部全面施釉	16.2	－	－	龍泉窯系	13c前後～ 前半	Ｅ期　Ⅱ類
	714	竪穴建物１号	B・C-31		滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－			外面煤付着
第144図	716	竪穴建物２号	D-24		白磁	皿	灰白色	透明釉 灰色	残存部全面施釉　口禿げ	9.6	－	c		13c後半～ 14c前半	Ⅸ類　Ｆ期
	717	竪穴建物２号	D-24		中国陶器	天目碗	暗灰黄色	天目釉 黒褐色	外面腰部以下露胎	－	－	－	中国	13c～14c	

方形竪穴建物状遺構内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第144図	715	竪穴建物２号	D-24		土師器	坏	橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.5	8.6	2.8	13C後半～14c初頭　太宰府Ⅸ期相当 消失家屋
第145図	718	竪穴建物４号	A'-21		土師器	皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.0	10.0	2.7	見込みに指ナデ
第150図	723	竪穴建物９号	C・D-19		土師器	小皿	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	9.7	7，4	1.2	

かまど跡内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第153図	725	かまど３号	E-29		炻器	擂鉢	にぶい 赤褐色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	森田E群
第156図	727	かまど６号	E-28	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.6	－	－		16c	森田E群
	728	かまど７号	E-27・28	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	13.0	－	－	龍泉窯系	15c後半	上田B類
第166図	737	かまど20号	G・F-16	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉　口禿げ	11.3	－	－		13c後半～ 14c前半	白磁Ⅸ類F期
	738	かまど20号	G・F-16	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	浅黄橙色	－	－	－	－	－		15c～16c	
第171図	740	かまど28号	C-15,D-15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	15c前半	上田C類

かまど跡内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第166図	731	かまど20号	F・G-16		土師器	皿	(内)灰黄色 (外)浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.5	5.1	1.6	底部糸切り
	732	かまど20号	F・G-16	Ⅱ	土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.8	－	－	
	733	かまど20号	F・G-16		土師器	坏	(内)黒褐色 (外)灰色	ヘラナデ	ヘラナデ	12.7	－	－	
	734	かまど20号	F・G-16	Ⅱ	土師器	坏	(内)浅黄橙色 (外)淡黄色	ナデ	ナデ	13.3	8.5	3.6	底部糸切り
	735	かまど20号	F・G-16		土師器	坏	にぶい 黄橙色	ナデ	ナデ	－	8.0	－	
	736	かまど20号	F・G-17	Ⅱ	土師器	坏	浅黄橙色	ナデ	ナデ	12.6	8.0	3.4	
	739	かまど21号	G-16		土師器	皿	明黄褐色	ナデ	ナデ	－	6.4	－	

製鉄関連遺構出土遺物　観察表（土製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第173図	742	製鉄３号	D-17		土製品	鞴の羽口	灰黄色	－	－	最大長 17.1	最大径 9.3	－	－		
第174図	744	製鉄６号	F-16		土製品	鞴の羽口	灰白色	－	－	最大長 6.5	－	－	－		

製鉄関連遺構出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第173図	741	製鉄３号	G-17		土師器	皿	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	7.6	5.2	1.0	底部糸切り
第174図	743	製鉄６号	F-16	Ⅱ	土師器	皿	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	7.8	2.6	1.2	

土坑内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第175図	745	土坑３号	B・C-31・32		白磁	椀	灰白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎	－	7.2	－		11C後半～ 12C前半	Ⅳ類C期
第176図	748	土坑７号	D-27		青磁	皿	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	－	2.5	－	龍泉窯系	12c中頃～ 後半	Ⅰ類2b　D期
	749	土坑７号	D-27	Ⅱ	中国陶器	天目碗	にぶい橙色	褐釉	外面腰部以下露胎	11.4	－	－			
第177図	751	土坑10号	B-25		中世須恵器	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	東播磨系	12c後半	

土坑内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第178図	754	土坑13号	E-18		白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	6.6	－	景徳鎮窯系	16c後半	森田E
	755	土坑13号	E-18		瓦質土器	火鉢	褐灰色	－	－	－	－	－	樺万丈系	15c～16c	
第180図	758	土坑16号	D-17		瓦質土器	捏鉢	灰白色	－	－	－	－	－	樺万丈	14cか？	
	761	土坑18号	C-16		青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	－	5.0	－		14C初頭～後半	Ⅳ類元
第181図	762	土坑19号	D-15		白磁	皿	灰白色	透明釉	外面腰部以下露胎	10.6	－	－		15c後半～16c代	森田D
	763	土坑20号	F-12		青磁	椀	鈍い灰褐色	青磁釉	畳付から高台内面露胎	14.3	6.2	7.3	龍泉窯系	15c後半	上田C類　雷文帯にラマ式蓮弁　見込み花文スタンプ
	764	土坑20号	F-12		青磁	稜花皿	明赤褐色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	14.0	5.0	3.9	龍泉窯系	15c後半	
第182図	765	土坑22号	F-10		青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系		上田B　類
	766	土坑23号	G-10		青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.2	－	龍泉窯系	12c中頃～後半	1類D期　見込みに片彫りで草花状（あるいは雲文状）の簡略化された文様を施す

土坑内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第176図	747	土坑６号	D-28		土師器	皿	(内)にぶい橙色 (外)橙色	ナデ	ナデ	7.6	5.3	1.5	底部糸切り
第179図	756	土坑15号	B-16		土師器	坏	浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.3	5.2	2.5	底部糸切り
第180図	757	土坑16号	D-17		土師器	皿	浅黄色	ナデ	ナデ	11.8	8.8	2.8	
	760	土坑17号	D-16		土師器	皿	明赤褐色	ナデ	ヘラケズリ	8.0	5.0	2.0	底部糸切り

溝状遺構内出土遺物　観察表（土製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）		備考
								最大長	最大径	
第175図	746	土坑４号	B-31		土製品	土錘	浅黄橙	3.8	1.65	

土坑墓内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第184図	772	土坑墓４号	D-31		白磁	輪花皿	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	9.4	3.6	2.3	不明	16c代	
第187図	777	木棺墓７号	C-25		白磁	輪花皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	8.7	4.0	2.7			ⅢⅧ類
第193図	807	土坑墓14号	D-14		青磁	坏	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.2	－	－	龍泉窯系	13c中頃～14c初頭	坏Ⅳ類　F期
第195図	816	木棺墓17号	G-9		青花	碗	灰色	透明釉	残存部全面施釉	12.0	－	－	漳州窯系	16c末～17c初頭	

土坑墓内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第185図	775	土坑墓25号	B-30		土師器	小皿	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.6	6.8	1.6	
	776	土坑墓25号	B-30		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.8	9.0	3.2	13c前半～中葉
第195図	814	木棺墓17号	G-9		土師器	小皿	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	9.8	6.4	2.2	側面に２か所　穿孔あり
	815	木棺墓17号	G-9		土師器	坏	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	12.5	9.1	2.8	内面煤付着

礫，土器集積遺構出土遺物

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第197図	821	礫・土器集中・出土遺構	D・E-18		滑石製品	鍋	－	－	－	26.1	11.8	8.2			

ピット内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第199図	822	ピット６号	B-31	Ⅰ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		11c後半～12c前半	Ⅳ類C期
	823	ピット６号	B-31，C-29，D-28	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎	16.4	6.3	7.1		12c中頃～後半	椀Ⅴ類D期
	824	ピット６号	B-31		白磁	椀	灰白色	青磁釉	外面腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	16.3	6.2	5.9	龍泉窯系	12c中頃～後半	Ⅷ-2　D期
	825	ピット６号	B-31	Ⅰ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		12c中頃～後半	Ⅴまたは Ⅵ類D期 見込みに短い櫛目文
	828	ピット９号	D-30		滑石製品	転用品	－	－	－	8.80	7.70	2.70			法量は最大長・最大幅・最大厚
	830	ピット11号	D-29		滑石製品	－	－	－	－	4.0	3.4	1.3	－	－	－
第200図	841	ピット21号	B-24		青磁	椀	灰黄色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.8	6.5	6.0	龍泉窯系	12c中頃～後半	Ⅰ-2a　D期　見込みに劃花文
	842	イコウ22号	D-24		滑石製品	転用品	－	－	－	2.50	2.00	2.00			法量は最大長・最大幅・最大厚
	846	ピット27号	C-27，D-23	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	7.9	－	－	龍泉窯系	12c中頃～後半	D期
	847	ピット28号	A'-21，C-26	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	外底面露胎	13.0	5.0	3.3	龍泉窯系	12c中頃～後半	Ⅰ-2　D期　見込みにスタンプ文
	848	ピット29号	D-20	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	－	－	－		15c～16c	849と同一個体
	849	ピット29号	D-20・21	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	－	－	－		〃	848と同一個体
	850	ピット30号	C-20		滑石製品	転用品	－	－	－	2.00	1.48	1.50			法量は最大長・最大幅・最大厚
	853	ピット33号	D-19		青花	皿	にぶい黄褐色	透明釉	高台内面露胎　見込みに輪状に釉剥ぎ	10.0	4.0	2.0	漳州窯	16c末～17c初頭	貫入　碁笥底

ピット内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第199図	827	ピット８号	C-31		土師器	坏	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	9.0	6.6	1.2	底部糸切り
	829	ピット10号	E-29		土師器	坏	橙色	ナデ	ナデ	12.0	8.0	2.8	底部糸切り
	831	ピット12号	D-29		土師器	坏	橙色	ナデ	ナデ	7.0	4.0	1.9	底部糸切り
	832	ピット13号	E-28		土師器	皿	浅黄色	ナデ	ナデ	9.2	4.7	1.4	底部糸切り
	833	ピット14号	D-28		黒色土器B類	皿	黒	ナデ	ミガキ	10.0	62.0	1.6	底部糸切り
	836	ピット17号	D-28		土師器	坏	浅黄橙色	ナデ	ナデ	7.8	6.0	1.8	底部糸切り
	839	ピット19号	A-24		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	－	6.4	－	
第200図	840	ピット20号	A-25		土師器	皿	浅黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	13.0	8.7	2.8	底部糸切り　13c代半ば
	844	ピット25号	E-23		土師器	坏	（内）橙色 （外）明赤褐色	ナデ	ナデ	10.1	5.0	2.8	底部糸切り
	845	ピット26号	F-24		土師器	坏	明赤褐色	ナデ	ナデ	7.6	4.0	2.1	底部糸切り
	852	ピット32号	E-21		土師器	皿	（内）橙色 （外）浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.0	6.5	1.2	底部糸切り
第201図	859	ピット39号	C-16		土師器	皿	浅黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	8.8	6.8	1.6	底部糸切り

溝状遺構内出土遺物　観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地	年代	備考
										口径	底径	器高			
第202図	866	溝４	D-37		瓦	平瓦	灰黄色	－	－	－	－	－	中国	11c後半～12c前半	C期
第203図	887	溝７	A-27・28		炻器	擂鉢	暗褐色	－	－	22	8.8	10.1	備前	15c前半	
第204図	889	溝10	C・D-25		中世須恵器	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈		
	890	溝11	D-25		中国陶器	鉢	灰赤色	－	－	22.0	－	－	中国	13c代	
第205図	891	溝13	E-22		青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.6	－	景徳鎮窯	16c後半	
	892	溝13	E-22		青花	碗	淡黄色	白濁した透明釉	畳付～高台内面露胎	－	5.0	－	漳州窯	16c末～17c初頭	
	893	溝13	D-22		青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み輪状に釉剥ぎ	13.0	5.0	4.9	漳州窯	16c末～17c初頭	
	894	溝13	E-22	Ⅲ	青花	皿	浅黄色	白濁した透明釉	外面腰部　高台内面露胎	12.0	－	－	漳州窯系	16c末～17c初頭	碁笥底
第206図	898	溝19	B・C-15		白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉　口禿げ	15.2	－	－			V類？
	899	溝20	A-16		中国須恵器	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈		
	900	溝20	A-16		中国須恵器	捏鉢	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈		
	901	溝20	A-16		瓦質土器	擂鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	G期以降
第207図	906	溝21	G-13		青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.4	－			
	907	溝21	G-13		青磁	椀	淡黄色	青磁釉	畳付～高台内底面露胎	－	5.8	－			
	908	溝21	F-12		青磁	椀	灰黄色	青磁釉	高台内面露胎	－	6.0	－			
	909	溝21	E-25，F-12	Ⅱ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	10.4	5.4	3.1	龍泉窯系	13c中頃～14c初頭	Ⅲ類　F期
	910	溝21	G-13		青磁	稜花皿か？	灰白色	青磁釉	外面腰部～高台内面露胎　見込み輪状に釉剥ぎ	－	5.0	－	不明	15c後半	
	911	溝21	F-12		青磁	盤	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	－	13.6	－	龍泉窯系		
	912	溝21	G-13		瓦質土器	擂鉢	暗灰黄色	－	－	－	12.0	－	備前		
	913	溝23	E-5		青磁	坏		青磁釉	－	12.4	4.6	3.7	龍泉窯系	13c中頃～14c初頭	Ⅲ類　F期
	914	溝23	F-7		炻器	擂鉢	暗赤色	－	－	28.0	13.5	9.2	備前	15c後半	

溝状遺構内出土遺物　観察表（土師器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	器面調整		法量（cm）			備考
								（内面）	（外面）	口径	底径	器高	
第203図	867	溝７	一括		土師器	小皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	9.6	6.0	1.2	
	868	溝７	一括		土師器	小皿	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.2	4.4	1.1	
	869	溝７	一括		土師器	小皿	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.0	5.6	1.1	
	870	溝７	一括		土師器	小皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.0	5.8	1.2	
	871	溝７	一括		土師器	小皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.2	6.0	1.1	
	872	溝７	一括		土師器	小皿	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	8.0	4.8	1.4	
	873	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.7	9.0	3.7	
	874	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.6	9.0	3.4	
	875	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.6	9.0	3.4	
	876	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.6	9.0	3.2	
	877	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.2	9.0	3.6	
	878	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	13.6	9.0	3.4	
	879	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.8	7.6	3.2	
	880	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.5	8.0	3.6	
	881	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.6	8.0	3.6	
	882	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	14.0	9.0	3.6	
	883	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	7.0	－	
	884	溝７	一括		土師器	坏	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	8.0	－	
	885	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	7.4	－	
	886	溝７	一括		土師器	坏	鈍い黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	－	9.0	－	
第206図	897	溝19	B・C-15		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	8.8	6.3	1.6	底部糸切り
第207図	903	溝21	F-12		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	7.0	5.0	1.5	
	904	溝21	E-12		土師器	皿	浅黄橙色	ナデ	ナデ	7.6	6.0	1.2	
	905	溝21	E-12		土師器	皿	浅黄色	ナデ	ナデ	8.8	6.8	1.7	底部糸切り

溝状遺構内出土遺物　観察表（土製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）		備考
								最大長	最大径	
第205図	895	溝13	D～F-22		土製品	土錘	黄灰	4.4	1.0	
第206図	902	溝20	F-7		土製品	土錘	浅黄橙	3.75	1.6	

中世土師器観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	部位	法量（cm）			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	内側	外側		
第208図	915	土師器	Ⅲ	G-16	Ⅱ	口縁～底部	8.6	5.8	1.6	ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部糸切り
	916	土師器	Ⅲ	A-28	Ⅲ	口縁～底部	9.0	5.8	1.4	ナデ	ナデ	(内)暗灰黄色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り
	917	土師器	Ⅲ	A-28	Ⅲ	口縁～底部	9.1	5.8	1.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	918	土師器	Ⅲ	F-16	Ⅱ	口縁～底部	8.6	5.8	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	919	土師器	Ⅲ	B-31	Ⅲ	口縁～底部	8.8	7.0	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	920	土師器	坏	D-12	Ⅱ	口縁～底部	8.7	5.9	2.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	921	土師器	坏	D-32	Ⅰ	口縁～底部	8.0	5.0	2.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	922	土師器	Ⅲ	G-17	Ⅱ	口縁～底部	8.5	5.6	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	923	土師器	Ⅲ	D-16	－	口縁～底部	－	7.6	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	924	土師器	坏	D-6	Ⅲ	口縁～底部	7.7	5.1	1.9	ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部糸切り
	925	土師器	Ⅲ	A-12	－	口縁～底部	8.4	6.6	1.4	ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部糸切り　ス ス付着
	926	土師器	Ⅲ	A-25	Ⅲ	口縁～底部	9.3	7.0	1.9	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り　ス ス付着
	927	土師器	Ⅲ	D-7	Ⅲ	口縁～底部	8.5	6.6	1.4	ナデ	ナデ	淡黄色	底部糸切り
	928	土師器	Ⅲ	F-16	Ⅱ	口縁～底部	8.0	6.0	1.1	ナデ	ナデ	浅黄橙色	底部糸切り
	929	土師器	Ⅲ	B-16	Ⅲ	口縁～底部	7.8	6.0	1.2	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	930	土師器	坏	－	－	口縁～底部	14.8	10.0	4.2	ナデ	ナデ	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい橙色	底部糸切り　ス ス付着
	931	土師器	坏	F-30	Ⅱ	口縁～底部	11.0	7.4	3.0	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	932	土師器	坏	F-15・16	Ⅱ	口縁～底部	12.4	6.8	3.4	ナデ	ナデ	橙色	底部糸切り
	933	土師器	坏	D-31	Ⅱ	口縁～底部	13.0	7.9	3.1		ナデ	明黄褐色	底部糸切り
	934	土師器	坏	F-17	Ⅱ	口縁～底部	13.1	8.9	3.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	935	土師器	坏	D-7	Ⅲ	口縁～底部	13.6	8.4	2.9	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	936	土師器	坏	－	－	口縁～底部	13.6	8.0	3.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	937	土師器	坏	－	－	口縁～底部	11.6	7.4	3.2	ナデ	ナデ	(内)にぶい黄橙色 (外)浅黄色	底部糸切り
	938	土師器	坏	B-15	－	口縁～底部	12.4	7.9	3.5	ナデ	ナデ	(内)浅黄橙色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り
	939	土師器	坏	C-15	Ⅲ	口縁～底部	12.4	8.4	3.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	940	土師器	坏	A-31	Ⅲ	口縁～底部	13.0	8.6	3.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	底部糸切り
	941	土師器	坏	C-15	Ⅲ	口縁～底部	12.2	8.6	3.0	ナデ	ナデ	(内)浅黄橙色 (外)黄橙色	底部糸切り
第209図	942	黒色土器	椀	B-31	Ⅱ	底部	－	7.2	－	ミガキ	ナデ	(内)黒褐色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り　ス ス付着
	943	黒色土器	坏	C-28	Ⅲ	口縁～底部	15.4	6.5	4.7	ミガキ	ミガキ	(内)黒色 (外)にぶい黄褐色	底部糸切り　ス ス付着
	944	黒色土器	椀	C-20	Ⅱ	口縁～底部	11.6	4.8	3.1	ナデ	ナデ	(内)黒褐色 (外)黄褐色	底部糸切り
	945	黒色土器	椀	B-36	Ⅱ	底部	－	8.4	－	ミガキ	ナデ	(内)黒色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り
	946	黒色土器	椀	A-28	Ⅲ	底部	－	6.6	－	ミガキ	ミガキ	(内)黒色 (外)橙色	底部糸切り
	947	黒色土器	坏	－	－	口縁～底部	11.6	8.8	1.4	ミガキ	ミガキ	黒色	底部糸切り
	948	黒色土器	坏	－	－	口縁～底部	10.8	7.0	2.0	ミガキ	ミガキ	黒色	底部糸切り
	949	赤色土器	椀	C-32	Ⅱ	底部	13.2	7.8	3.6	ナデ	ナデ	(内)明赤褐色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り
	950	土師器	坏	B-26	Ⅲ	口縁～底部	7.4	4.9	2.3	ナデ	ナデ	(内)橙色 (外)浅黄橙色	底部糸切り　ス ス付着
	951	土師器	坏	E-30	Ⅱ	口縁～底部	8.0	5.0	2.1	ナデ	ナデ	(内)にぶい橙色 (外)浅黄橙色	底部糸切り
	952	土師器	Ⅲ	F-25	Ⅱ	口縁～底部	9.0	6.0	1.1	ナデ	ナデ	橙色	底部糸切り　ス ス付着
	953	土師器	坏	D-8	Ⅲ	口縁～底部	8.2	4.6	2.1	ナデ	ナデ	橙色	底部糸切り
	954	土師器	Ⅲ	D-16	Ⅱ	口縁～底部	7.6	6.0	1.3	ナデ	ナデ	(内)にぶい黄橙色 (外)橙色	底部糸切り
	955	土師器	坏	E-24	Ⅱ	口縁～底部	7.2	4.5	1.8	ナデ	ナデ	橙色	底部糸切り
	956	土師器	Ⅲ	G-16	Ⅱ	口縁～底部	8.0	5.6	1.4	ナデ	ナデ	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色	底部糸切り

土錘観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量(cm)		胎土の色調	備考
						最大長	最大径		
第210図	957	土製品	穿孔土器	D-32	Ⅲ	5.0	1.05	橙色	
	958	土製品	穿孔土器	C-32	Ⅲb	4.8	0.8	明黄褐色	
	959	土製品	穿孔土器	C-32	Ⅲa	3.8	1.2	にぶい褐色	
	960	土製品	穿孔土器	F-18		2.8	1.2	浅黄橙色	
	961	土製品	土錘	D-26	Ⅱ	4.3	1.2	灰白色	
	962	土製品	土錘	C-29	Ⅱ	3.6	1.15	浅黄色	
	963	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.7	0.9	橙色	
	964	土製品	土錘	D-26	Ⅱ	3.35	0.9	橙色	
	965	土製品	土錘	C-9	Ⅲ	4.15	1.05	赤褐色	
	966	土製品	土錘	E-13	Ⅱ	4.85	1.1	黒色	
	967	土製品	土錘	B-24	Ⅱ	3.9	1.25	にぶい黄橙色	
	968	土製品	土錘	D-26	Ⅱ	3.2	0.8	にぶい赤褐色	
	969	土製品	土錘	G-17	Ⅳ	4.6	1.15	淡黄色	
	970	土製品	土錘	E-29	Ⅱ	4.2	0.95	暗赤灰色	
	971	土製品	土錘	G-17	Ⅱ	4.1	1.1	橙色	
	972	土製品	土錘	A'-29	Ⅲ	3.7	1.1	灰黄色	
	973	土製品	土錘	D-20	Ⅱ	3.95	1.1	にぶい黄橙色	
	974	土製品	土錘	E-24	Ⅱ	4.35	1.1	灰黄色	
	975	土製品	土錘	C-27	Ⅱ	4.5	1.4	(外)灰白色 (内)にぶい黄褐色	
	976	土製品	土錘	D-27	Ⅱ	4.3	1.1	明赤褐色	
	977	土製品	土錘	A'-29	Ⅲ	6.1	1.5	灰白色	
	978	土製品	土錘	E-22	Ⅱ	5.55	1.0	浅黄色	
	979	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	6.7	1.4	浅黄色	
	980	土製品	土錘	F-25	Ⅱ	4.95	1.25	灰黄褐色	
第211図	981	土製品	土錘	A-22	Ⅲ	4.4	1.4	にぶい黄橙色	
	982	土製品	土錘	A-24	Ⅲ	4.9	1.55	にぶい黄橙色	
	983	土製品	土錘	B-34	Ⅲb	3.9	1.3	にぶい赤褐色	

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量(cm)		胎土の色調	備考
						最大長	最大径		
第211図	984	土製品	土錘	E-17		4.7	1.5	灰白色	
	985	土製品	土錘	A-22	Ⅲ	3.25	1.7	にぶい褐色	
	986	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.8	1.85	にぶい褐色	
	987	土製品	土錘	A-22	Ⅲ	3.8	1.8	にぶい黄橙色	
	988	土製品	土錘	A'-26	Ⅲ	4.0	1.65	(外)にぶい褐色 (内)明黄褐色	
	989	土製品	土錘	F-26	Ⅳ上	4.0	1.8	橙色	
	990	土製品	土錘	G-14	Ⅱ	3.8	1.3	灰黄色	
	991	土製品	土錘	F-18	Ⅱ	4.45	1.7	橙色	
	992	土製品	土錘	D-31	Ⅱ	4.7	1.55	橙色	
	993	土製品	土錘	A'-28	Ⅲ	3.8	1.6	にぶい黄橙色	
	994	土製品	土錘	E-29	Ⅱ	3.8	1.85	(外)にぶい褐色 (内)にぶい黄橙色	
	995	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.95	1.6	にぶい黄橙色	
	996	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.9	1.45	橙色	
	997	土製品	土錘	E-15	Ⅱ	4.9	2.05	橙色	
	998	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	3.25	1.35	にぶい黄橙色	
	999	土製品	土錘	A'-28	Ⅲ	3.65	1.8	にぶい黄橙色	
	1000	土製品	土錘	A-22	Ⅲ	3.8	1.65	にぶい黄橙色	
	1001	土製品	土錘	C-27	Ⅱ	2.2	2.2	にぶい褐色	
	1002	土製品	土錘	D-25	Ⅱ	5.0	2.4	黒褐色	
	1003	土製品	土錘	D-26	Ⅱ	4.1	2.6	(外)暗灰色 (内)緑灰色	
	1004	土製品	土錘	E-24	Ⅱ	4.3	2.65	黒色	
	1005	土製品	土錘	B-22	Ⅱ	6.4	2.75	にぶい黄橙色	
	1006	土製品	土錘	A-28	Ⅲ	5.5	1.9	淡黄色	
	1007	土製品	土錘	D-32	Ⅲ	8.8	3.2	にぶい褐色	
	1008	土製品	土錘	F-23・24		5.5	3.25	黒褐色	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	分類	備考
									口径	底径	器高				
第212図	1009	D-35	Ⅰ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	腰部以下露胎	－	9.0	－	越州窯系	A期　8c末期～10c中頃	越Ⅰ-5類	見込みに胎土目跡
	1010	B-33	－	青磁	椀	浅黄色	青磁釉	残存部全面施釉	21.0	－	－	越州窯系	A期　8c末期～10c中頃	椀Ⅱ類	
	1011	E-30	Ⅰb	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	－	5.6	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰa類	
	1012	E-6	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.8	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰ-1b類	
	1013	A-16 B-16	Ⅱb Ⅲ	青磁	椀	淡黄色	青磁釉	残存部全面施釉	15.4	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰ-1c類	
	1014	D-14	Ⅲ	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰ類	
	1015	D-14	Ⅲ	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅰ類	内面に点描文
	1016	C・D-31 E-31	Ⅱ Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	15.2	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅱ類	
	1017	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	15.2	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅱ類	
	1018	B-24 E-24	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅱ類	
第213図	1019	D-7	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面胴部以下露胎	19.2	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	内面に櫛状施文具の花文
	1020	D-25 G-14	Ⅱ Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	内面に櫛状施文具の花文
	1021	E-28	Ⅳ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	
	1022	C-37	Ⅲb	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	
	1023	A-17	Ⅲ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安椀Ⅲ類	
	1024	－	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	17.4	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-1類	
	1025	表採	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.4	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
	1026	D-14	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
	1027	A-23	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.6	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
	1028	C-9	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.0	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
第214図	1029	C-36・37	Ⅱa Ⅲa Ⅲb	青磁	椀	浅黄色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.0	5.0	6.9	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-2類	
	1030	B-9 C-8	Ⅲ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	18.0	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-3類	
	1031	B-13	Ⅱb	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	17.6	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-3類	
	1032	表採	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.2	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-3類	
	1033	D-4	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	外面高台脇～高台内面露胎	15.4	5.6	6.2	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	分割線のみ
	1034	D-22	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.2	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	
	1035	D-21	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.0	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	見込みに茸状模様の片彫り
	1036	C-14	Ⅳ	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.0	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	
	1037	D-27	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-4類	
	1038	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-6b類	
	1039	C-12	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.2	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ-6a類	
	1040	表採	－	青磁	椀	にぶい赤褐色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.0	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	見込みに「金玉満堂」の印文
第215図	1041	D-30	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.1	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	見込みに「金玉満堂」の印文
	1042	E-31	Ⅲ	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	16.6	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1043	表採	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1044	F-17	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	16.4	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1045	D-18	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1046	G-4	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	内面に劃花文
	1047	D-16	Ⅱ	青磁	椀	淡黄色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.2	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	
	1048	表採	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.6	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	見込みに片彫り蓮花文
	1049	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.8	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅰ類	見込みに片彫り蓮花文
	1050	F-26	Ⅱ下	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.0	－	龍泉窯系	E期　13c前後～前半	椀Ⅱ-a類	
	1051	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.4	－	－	龍泉窯系	E期　13c前後～前半	椀Ⅱ-a類	見込みに草花文様の印文
	1052	D-28 F-26	Ⅱ Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.2	－	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-a類	見込みに草花文様の印文
	1053	D-23	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.4	－	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1054	E-15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.0	－	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1055	C-32	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1056	－	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	16.6	－	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1057	B-37	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.2	－	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
第216図	1058	A'-30	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.2	5.8	6.6	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1059	A-24	Ⅲ	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	17.0	3.6	5.9	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1060	C-15 F-25	Ⅱ Ⅴ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.4	4.8	6.7	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-b類	見込みに草花文様の印文
	1061	C-21	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	16.4	4.8	6.4	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-c類	見込みに草花文様の印文
	1062	E-22	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.6	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-c類	見込みに草花文様の印文
	1063	表採	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.2	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-c類	見込みに草花文様の印文
	1064	D-18	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.4	－	龍泉窯系	E期　13c初頭～前半	椀Ⅱ-c類	見込みに草花文様の印文
	1065	D-15	Ⅱ	青磁	椀	褐灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	15.4	6.0	7.8	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ-イ類	見込みに草花文様の印文
	1066	D-22 E-22	Ⅰb Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.0	－	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ-イ類	見込みに草花文様の印文
	1067	E-29	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	－	4.6	－	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	高台内面に他器の一部付着 見込みに草花文様の印文
	1068	C-30	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.2	－	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	見込みに草花文様の印文
	1069	E-18 F-16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	6.0	－	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	
第217図	1070	F-25	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	
	1071	E-20・26	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.8	－	－	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	分類	備考
									口径	底径	器高				
第217図	1072	E-20・26・27 F-23・24・26	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	15.2	5.6	7.0	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	見込みに草花文
	1073	－	－	青磁	椀	灰褐色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	5.8	－	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	見込みに草花文
	1074	B-15 A・B-15	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	椀Ⅳ類	
	1075	F-12	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	－	5.6	－	福建省	G期　14c初頭～後半	福建省産	
	1076	F・G-18	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1077	表採	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.0	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1078	D-21	Ⅰb	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.2	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1079	D-15	Ⅱa	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	13.6	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1080	D-7	Ⅳ	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	－	6.4	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	内面に陽刻
第218図	1081	F-17	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	高台内面露胎	－	5.2	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	見込みに草花文様の印文
	1082	F-27	Ⅱ Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.8	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1083	E-30	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1084	C-20	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.8	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1085	－	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1086	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1087	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.6	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1088	E-29・30	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1089	E-15	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1090	D-27	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	14.8	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1091	D-35	Ⅰ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.4	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田B類	
	1092	G-14	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.4	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1093	D-28	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.6	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1094	C-13	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1095	C-12 E-13・14・15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.0	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1096	F-25	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.2	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1097	D-15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.6	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1098	D-7	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	
	1099	G-16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	内面にラマ式蓮弁
	1100	C-15	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	内面にラマ式蓮弁
	1101	E-28	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	18.6	－	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	
第219図	1102	F-19	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	13.2	6.4	6.0	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	見込みに草花文様の印文
	1103	－	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面釉剥ぎ	－	5.9	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	見込みに草花文様の印文
	1104	F-30	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	－	6.6	－	龍泉窯系	G～J期　14c初前後～16c前・中	上田C類	見込みに草花文様の印文 高台内面に他器の一部付着
	1105	F6～18	－	青磁	椀	浅黄色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	15.2	5.8	7.1	福建省	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	見込みに草花文様の印文
	1106	B・C-28 D-30	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	高台内面露胎	17.4	6.4	7.7	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	見込みに草花文様の陽刻
	1107	F-8	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	15.4	6.8	7.5	福建省か？	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	内面に草花文様の陽刻
	1108	D-29・30 F-30	Ⅲ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎見込み円状に釉剥ぎ	15.2	5.8	7.4	龍泉窯	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1109	D-20	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	13.4	5.4	7.0	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1110	表採	－	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	13.4	5.4	6.4	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1111	B-30 E-17	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	高台内面露胎見込み円状に釉剥ぎ	17.0	5.8	7.6	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1112	F-25	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	13.4	5.4	6.5	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1113	F-26	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	12.8	4.5	4.7	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
第220図	1114	E-26	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16.0	－	－	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1115	E-23	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1116	D-7	Ⅲ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	14.0	－	－	龍泉窯系	G～H期　14c初前後～15c前・中	上田D類	
	1117	E-24	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	－	－	龍泉窯系	H～I期　14c後・末～15c後	上田E類	
	1118	F-25・26	Ⅳ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	12.2	4.2	4.9	龍泉窯系	H～I期　14c後・末～15c後	上田E類	
	1119	C-22 E-21・22	Ⅰb Ⅱ	青磁	椀	淡黄色	青磁釉	残存部全面施釉	14.6	－	－	龍泉窯系	H～I期　14c後・末～15c後	上田E類	
	1120	F-19	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.2	－	－	龍泉窯系	H～I期　14c後・末～15c後	上田E類	
	1121	D-27	Ⅱ	青磁	椀または皿	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	14.2	－	－	龍泉窯系	H～I期　14c後・末～15c後	上田E類	
	1122	F-19	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	－	4.9	－	龍泉窯系	H～I期　14c後・末～15c後	上田E類	見込みに草花文
	1123	C-29	－	青磁	椀	褐灰色	青磁釉	高台内面露胎	－	5.1	－	龍泉窯系	H～I期　14c後・末～15c後	上田E類	
	1124	B-15	表採	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	－	4.2	－	龍泉窯系	H～I期　14c後・末～15c後	上田E類	
	1125	B-21	Ⅲ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面腰部以下露胎	10.0	－	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-1a類	
	1126	－	－	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面腰部以下露胎	－	4.8	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-1b類	
	1127	－	－	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	－	4.7	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-1b類	
第221図	1128	－	－	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	10.4	4.0	1.8	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-1b類	
	1129	D-24	－	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面体部下位以下露胎	9.9	3.6	2.0	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-1b類	
	1130	C-32	Ⅲb	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面底部釉掻き取り	－	5.4	－	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-1b類	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	分類	備考
									口径	底径	器高				
第221図	1131	G-5	Ⅱ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面底部釉掻き取り	-	4.4	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-2b類	
	1132	B-30 E-31	Ⅱ Ⅲ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面底部釉掻き取り	-	4.4	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-2b類	
	1133	-	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外底面釉掻き取り	9.0	5.8	2.6	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-2b類	
	1134	E-31	Ⅱ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外底面釉掻き取り	-	6.2	-	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-2b類	
	1135	-	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	口唇部釉剥ぎ	10.6	5.8	1.6	同安窯系	D期　12c中頃～後半	同安Ⅲ-2b類	
	1136	B-31	Ⅱ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外底面釉剥ぎ	12.8	3.6	2.7	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	Ⅲ-1類	見込みに櫛目の草花文
	1137	B-29	-	青磁	Ⅲ	浅黄色	青磁釉	外底面釉剥ぎ	-	3.6	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	Ⅲ-1類	
	1138	C-13	-	青磁	Ⅲ	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	9.8	-	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	Ⅲ-1類	
	1139	D-16	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外底面釉剥ぎ	-	4.7	-	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	Ⅲ-1類	見込みに櫛目の草花文
第222図	1140	-	-	青磁	Ⅲ	灰色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	14.0	7.0	3.0	龍泉窯系	G期　14c初頭～中頃	Ⅲ-4類	
	1141	E-15	Ⅱ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	外面腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	12.4	6.0	2.9	福建省	G期　14c初頭～中頃	福建省産青磁Ⅲ	赤化部分(見込・高台内面)
	1142	D-16	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	12.6	8.0	3.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
	1143	F-27	Ⅱ・Ⅲ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	11.8	7.0	3.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
	1144	C-28	Ⅲ	青磁	Ⅲ	灰色	青磁釉	高台内面露胎 見込み円状に釉剥ぎ	12.0	6.0	2.7	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
	1145	D-28	Ⅱ	青磁	Ⅲ	浅黄色	青磁釉	高台内面露胎	12.6	7.6	4.0	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
	1146	F-26	Ⅰb	青磁	Ⅲ	灰色	青磁釉	高台内面露胎	13.6	7.3	3.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
	1147	F-18	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	12.8	5.8	4.0	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	見込みに草花文の印文
	1148	D-9	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	高台内面釉剥ぎ	8.2	4.4	2.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
	1149	B・C-30	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	高台内面釉剥ぎ	10.8	5.7	3.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	見込みに草花文の印文
	1150	E-28	Ⅲ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	高台内面釉剥ぎ	10.8	5.4	3.3	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	見込みに草花文の印文
	1151	D-13	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	10.4	5.0	3.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
第223図	1152	F-24	Ⅱ	青磁	綾花Ⅲ	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	10.6	5.0	2.9	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	見込みに草花文の印文
	1153	D-7	Ⅲ	青磁	綾花Ⅲ	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	12.0	5.5	3.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	見込みに草花文の印文
	1154	C-4	Ⅲ	青磁	綾花Ⅲ	灰褐色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	12.6	5.8	3.3	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	見込みに草花文の印文
	1155	D-16	-	青磁	綾花Ⅲ	灰色	青磁釉	高台内面露胎	11.6	5.6	3.4	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	双魚文 水銀朱(高台内面)
	1156	D-7	-	青磁	綾花Ⅲ	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	10.2	5.1	3.0	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
	1157	D-19	Ⅲ	青磁	綾花Ⅲ	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.0	7.4	2.2	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	
	1158	F-17	Ⅱ	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	底部露胎	-	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	碁笥底
	1159	F-19	Ⅱ	青磁	Ⅲ	灰色	青磁釉	底部露胎	11.6	4.6	3.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	碁笥底
	1160	G-17	-	青磁	Ⅲ	灰白色	青磁釉	底部釉剥ぎ	-	7.2	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代Ⅲ	碁笥底
	1161	-	-	青磁	浅型椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	15.8	6.0	3.2	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	浅型椀Ⅰ類	
	1162	D-32	Ⅲa	青磁	小椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	11.8	-	-	龍泉窯系	E期　13初頭～前半	小椀Ⅱ-b類	
	1163	B-28	Ⅲ	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	-	5.4	-	龍泉窯系	F期　13c中頃～14c初頭	小椀Ⅲ類	赤色に発色（高台周辺釉掻き取り部分）
	1164	C-18	Ⅱ	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	-	4.8	-	龍泉窯系	F期　13c中頃～14c初頭	小椀Ⅲ類	
	1165	-	-	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	-	3.8	-	龍泉窯系	F期　13c中頃～14c初頭	小椀Ⅲ類	
	1166	F-9	Ⅱ	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	10.4	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代小椀	
	1167	E-30	Ⅲ	青磁	小椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代小椀	
	1168	-	-	青磁	坏	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面釉剥ぎ	-	5.4	-	龍泉窯系	F期　13c中頃～14c初頭	坏Ⅲ類	赤色に発色（高台周辺釉掻き取り部分）
	1169	E-14・15 F-18	Ⅱ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	畳付～高台内面露胎	10.8	6.0	3.2	龍泉窯系	G期　14c初頭～後半	坏Ⅳ類	
	1170	E-28・29	Ⅱ Ⅲ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	11.0	5.6	3.1	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代坏	
第224図	1171	D-16	Ⅱ	青磁	坏	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	12.2	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代坏	
	1172	-	-	青磁	坏	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	12.4	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代坏	
	1173	-	-	青磁	盤	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に二条釉剥ぎ	22.0	9.0	4.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	口縁部稜花
	1174	D-29・30	Ⅲ Ⅳ	青磁	盤	灰白色	青磁釉	高台内面輪状に釉剥ぎ	28.0	17.6	5.6	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	
	1175	G-11	Ⅱ	青磁	盤	灰色	青磁釉	底部釉剥ぎ	-	9.6	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	碁笥底
	1176	E-30	Ⅱ	青磁	盤	灰色	青磁釉	底部釉剥ぎ	-	10.4	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	碁笥底
	1177	F-25	Ⅱ下	青磁	盤	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	29.4	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	
	1178	E-30・31 F-30	Ⅰb Ⅱ	青磁	盤	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	25.2	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	
	1179	E-28	表採	青磁	盤	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	30.6	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	
	1180	表採	-	青磁	盤	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	口縁部稜花
	1181	C-20	Ⅱ	青磁	盤	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	-	-	-	龍泉窯系	H期以降　14c後・末～	明代盤	折口Ⅲ
第225図	1182	-	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	-	-	-		A期　8c末期～10c中頃	椀Ⅰ類	玉縁口縁部
	1183	C-27・28 D-28	Ⅱ Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	5.9	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅱ-4a類	
	1184	F-20	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	6.4	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅱ類	
	1185	A-23 B-29	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	16.4	7.4	5.7		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1186	-	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	13.6	5.7	6.4		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1187	A'-18	Ⅱ	白磁	椀	淡黄色	透明釉	胴部以下露胎	16.0	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1188	F-25	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	15.6	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1189	C-34	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	-	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1190	A・D-30	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	16.0	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1191	C-19	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	14.8	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1192	-	-	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	-	7.0	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅳ類	
	1193	B-16	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部下位露胎	17.2	-	-		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅴ-2a類	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	分類	備考
									口径	底径	器高				
第225図	1194	A・B-16	Ⅱb Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	－	5.8	－		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅴ-2b類	
	1195	E-30	Ⅰb	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	－	5.8	－		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅴ類	
	1196	B-30	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	16.6	5.9	7.4		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅴ-2a類	
	1197	D-2	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	18.8	－	－		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅴ類	
第226図	1198	D-27	Ⅱ Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	17.4	5.8	6.2		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅴ-2a類	
	1199	B-30	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～底部露胎	17.0	－	－		D期　12c中頃～後半	椀Ⅴ-4b類	内面に劃花文
	1200	D-25	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	－	6.2	－		D期　12c中頃～後半	椀Ⅴ-4b類	
	1201	D-31	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	13.8	5.2	4.2		C期　11c後半～12c前半	椀Ⅵ-1a類	
	1202	D-31	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16.6	－	－	龍泉窯系	C期　11c後半～12c前半	椀Ⅶ-ｂ類	口縁部輪花
	1203	D-7	－	白磁	椀	褐黄色	透明釉	腰部以下露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	－	7.0	－		D期　12c中頃～後半	椀Ⅷ類	
	1204	E-2	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	－	6.2	－		D期　12c中頃～後半	椀Ⅷ類	
	1205	F-8	－	白磁	椀	浅黄色	透明釉	腰部以下露胎	－	－	－		D期　12c中頃～後半	椀Ⅷ類	
	1206	B-30	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	18.6	－	－	龍泉窯系	D期　12c中頃～後半	椀Ⅷ類	
	1207	D-30	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	－	－	－		D期　12c中頃～後半	椀Ⅷ-１類	
	1208	－	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	－	－	－		F期　13c後半～14c前半	椀Ⅸ類	
	1209	C-24	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	14.2	－	－		F期　13c後半～14c初頭	椀Ⅸ類	
	1210	D-15	Ⅲ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	15.4	－	－		F期　13c中頃～14c初頭	椀Ⅸ類	
	1211	F-16	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	13.6	－	－		F期　13c中頃～14c初頭	椀Ⅸ類	
	1212	－	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿 畳付～高台内面は粗い	－	5.3	－		F期　13c中頃～14c初頭	椀Ⅸ-２類	
	1213	D-22	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	高台内面露胎 口禿	－	4.8	－		F期　13c中頃～14c初頭	椀Ⅸ類	
第227図	1214	D-22	表採	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	19.4	－	－		Ⅰ・J期　15c中頃～16c中頃	森田Ｅ類	
	1215	D-18	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	－	6.0	－	龍泉窯系	G期以降　14c初頭～	森田Ｂ・Ｃ類	
	1216	B-13	－	白磁	椀	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	14.3	5.6	4.8		G期以降　14c初頭～	－	
	1217	E-24	Ⅲ	白磁	椀	浅黄橙色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	－	6.2	－		G期以降　14c初頭～	森田Ｄ類	
	1218	F-26	Ⅰb	白磁	椀	淡黄色	透明釉	腰部下位露胎	－	5.9	－		G期以降　14c初頭～	森田Ｃ類	
	1219	C-24	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		G期以降　14c初頭～	森田Ｃ類	
	1220	D-20	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部以下露胎	－	－	－		C期　11c後半～12c前半	ⅢⅡ１-b類	口縁部断面三角形の玉縁
	1221	－	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	8.9	4.2	2.2		D期　12c中頃～後半	ⅢⅢ-１類	
	1222	E-20	Ⅱ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	10.2	4.8	2.7		D期　12c中頃～後半	ⅢⅢ-１類	
	1223	－	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	9.6	5.0	2.4		D期　12c中頃～後半	ⅢⅢ類	
	1224	D・E-25	Ⅲ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.0	4.3	2.4		D期　12c中頃～後半	ⅢⅢ類	
	1225	C-32	Ⅲ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	9.3	4.4	2.7		D期　12c中頃～後半	ⅢⅢ-２類	
第228図	1226	－	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台外面露胎	10.6	3.4	3.1		C期　11c後半～前半	ⅢⅥ-１a類	
	1227	－	－	白磁	Ⅲ	黄浅橙色	透明釉	残存部全面施釉	11.0	－	－		C期　11c後半～前半	ⅢⅥ-１a類	
	1228	D-31	Ⅱ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.4	－	－		D期　12c中頃～後半	ⅢⅧ-１b類	ヘラ描き草花文
	1229	B-29	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	9.0	1.7	2.2	龍泉窯	D期　12c中頃～後半	ⅢⅧ類	
	1230	D-31	Ⅱ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	口禿	9.4	6.2	1.7		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１a類	
	1231	B-16 B・C-17	Ⅲ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ 口禿	9.2	6.0	1.8		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１a類	口縁部に黒色の付着物
	1232	D-30	－	白磁	Ⅲ	白色	透明釉	底部露胎 口禿	10.0	7.6	1.8		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１b類	
	1233	E-23	Ⅱ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	底部露胎 口禿	10.6	6.2	2.1		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１b類	
	1234	－	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	底部露胎 口禿	10.6	7.0	1.9		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１b類	
	1235	－	－	白磁	Ⅲ	淡黄色	透明釉	底部露胎 口禿	11.6	8.0	2.4		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１b類	外面の施釉が粗く凸凹
	1236	－	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	底部露胎 口禿	11.4	6.4	3.2		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-c類	
	1237	D-29	Ⅱ	白磁	Ⅲ	灰黄色	透明釉	底部露胎 口禿	11.6	－	－		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１d類	
	1238	D-23	Ⅱ	白磁	Ⅲ	灰黄色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	11.4	－	－		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-1d類	
	1239	A-30	Ⅲ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	底部円状に釉剥ぎ 口禿	11.3	6.0	3.3		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１d類	
	1240	D-30	－	白磁	Ⅲ	灰黄色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	10.6	6.0	3.3		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１d類	
	1241	－	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	残存部全面施釉 口禿	10.8	－	－		F期　13c中頃～14c初頭	ⅢⅨ-１b類	
	1242	－	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.7	4.4	2.4		H期　14c後半～15c前半	森田Ｄ群	割高台 四か所の目跡
	1243	E-17	Ⅱ	白磁	Ⅲ	淡黄色	透明釉	腰部～高台内面露胎	9.5	4.1	2.4		H期　14c後半～15c前半	森田Ｄ群	割高台 四か所の目跡
	1244	G-15	－	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	7.5	3.4	2.8		H期　14c後半～15c前半	森田Ｄ群	割高台 四か所の目跡
第229図	1245	D-15	Ⅱa	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	9.4	4.8	2.2		H期　14c後半～15c前半	森田Ｄ群	割高台 五か所の目跡１
	1246	E-31	Ⅱ	白磁	Ⅲ	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.9	4.5	2.9		H期　14c後半～15c前半	森田Ｄ群	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	分類	備考
									口径	底径	器高				
第229図	1247	C-29	−	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.6	3.6	3.2		H期　14c後半～15c前半	森田D群	
	1248	E-24	Ⅲ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.1	3.4	3.5		H期　14c後半～15c前半	森田D群	見込みに四か所の目跡
	1249	D-29・30	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	10.5	4.0	3.1	福建省	H期　14c後半～15c前半	森田D群	露胎部分は黒色
	1250	D-30	−	白磁	皿	淡黄色	透明釉	高台～高台内面露胎	8.4	3.6	2.9		H期　14c後半～15c前半	森田D群	
	1251	F-20	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.2	6.8	3.2		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ群	
第229図	1252	F-6	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.4	4.6	3.2		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ群	
	1253	E-7	−	白磁	皿	灰白色	透明釉	高台～高台内面露胎	11.0	4.6	2.7		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E群	
	1254	F-17	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.0	5.2	2.5		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱb群	
	1255	R-17	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	10.5	4.7	2.9		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E群	
	1256	E-30	−	白磁	綾花皿	灰黄色	透明釉	腰部～高台内面露胎 見込み輪状に釉剥ぎ	9.0	3.6	3.3		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E群	
	1257	−	−	白磁	綾花皿	黄浅色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ群	
	1258	E-30	Ⅲ上	白磁	綾花皿	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	10.7	4.8	3.0		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E群	
	1259	−	−	白磁	綾花皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ類	
	1260	E-18	Ⅱ	白磁	綾花皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E類	
	1261	F-19	Ⅱ	白磁	白磁坏	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.8	6.2	3.1		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ類	
	1262	E-30	Ⅱ	白磁	白磁坏	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.0	4.9	2.1		I～J期　15c中頃～16c中頃	森田E-Ⅱ類	
	1263	F-25	Ⅰb	白磁	多角坏	淡黄色	透明釉	腰部以下露胎	−	−	−		H期以降　14c後・末～	明代坏	
	1264	E-24	Ⅱ	白磁	多角坏	灰白色	透明釉	腰部～高台内面露胎	−	3.2	−		H期以降　14c後・末～	明代坏	
第230図	1265	B・C-29	−	青磁	壺	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	11.2	−	−				
	1266	D-16・22 F-25	Ⅰb	白磁	壺	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−				水注か？
	1267	F-25	Ⅱ	青磁	小型壺	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	−	−	−				
	1268	D-35	−	青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	−	−	−	龍泉窯系			耳壺
	1269	F-8	Ⅱ	青磁	小型瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	5.0	−	−	龍泉窯系			
	1270	表採	−	青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	9.6	−	−				耳壺
	1271	C・D-22	Ⅰb	青磁	大型瓶	灰白色	青磁釉	底部外面～高台内面露胎	−	8.0	−				
	1272	E-3 F-4	Ⅱb	青磁	小型瓶	灰白色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	−	3.8	−				
	1273	−	−	青磁	鉢	にぶい黄橙色	青磁釉	内面露胎	10.6	−	−				
	1274	E-16	Ⅱ	青磁	鉢	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	−	−	−				
	1275	−	−	白磁	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	8.8	−	−				
	1276	E-9	Ⅱ	白磁	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	12.8	−	−				
	1277	F-16 F・G-17	Ⅱ	青磁	鉢	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	13.2	−	−				
	1278	F-21	−	白磁	鉢	明黄褐色	透明釉	外面腰部～底部露胎	8.4	4.4	4.1				
	1279	D-28	−	白磁	鉢？	灰白色	−	−	−	−	−				口縁部に５㎜程度の穴
第231図	1280	B-29	Ⅱ	青磁	燭台	灰色	青磁釉	上面施釉	3.4	庇径 6.8	1.5	龍泉窯系			
	1281	F-25	Ⅱ	青磁	香炉	浅黄色	青磁釉	内面・高台内面露胎	−	−	−				三足
	1282	−	−	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	内面中位以下露胎	−	−	−				
	1283	D-26	−	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	内面中位以下露胎 畳付～高台内面露胎	6.5	3.8	4.8				三足
	1284	D-28	Ⅲ	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	7.6	−	−				三足
	1285	F-17	Ⅱ	白磁	香炉	浅黄色	透明釉	残存部全面施釉	10.0	−	−				
	1286	D-35	−	白磁	香炉	灰白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎	−	4.0	−				割高台
	1287	−	−	白磁	坏	灰白色	透明釉	内面見込み輪状に釉剥ぎ 畳付釉剥ぎ	6.3	2.6	3.0				
	1288	−	−	白磁	坏	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	6.6	−	−				
	1289	−	−	白磁	坏	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	6.8	2.4	4.4				
	1290	E-25	Ⅱ	白磁	坏	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	5.0	−	−				
	1291	F-26	Ⅰb	白磁	坏	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−				
	1292	F・G-26	表採	青白磁	蓋	灰白色	青白磁釉	内面露胎	2.9	庇径 5.2	1.2				上面に草花文を型押し
	1293	C-15	Ⅳ	青白磁	蓋	灰白色	青白磁釉	内面露胎	4.0	庇径 6.6	1.1				上面に草花文を型押し
	1294	−	−	青白磁	蓋	灰白色	青白磁釉	内面露胎	7.8	庇径 10.0	−				上面に菊座状の文様
	1295	D-20	Ⅱ	青白磁	合子蓋	灰白色	青白磁釉	身受け部・内面露胎	7.8	−	−				
	1296	D-24	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁釉	外底面露胎 蓋との接合面を釉剥ぎ	−	4.8	−				
	1297	E-29	Ⅱ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁釉	蓋受け部を釉剥ぎ 腰部～底面露胎	−	3.6	−				
	1298	C-24	Ⅲ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁釉	腰部～底面露胎 蓋との接合面を釉剥ぎ	5.2	3.2	1.7				
	1299	D-23	Ⅲ	青白磁	合子身	灰白色	青白磁釉	外面露胎	−	7.0	−				
	1300	D・E-22	Ⅲ	青白磁	皿	白色	翡翠釉	畳付～高台内面露胎	6.0	3.4	1.2	景徳鎮窯			稜花皿
第232図	1301	F-17	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	14.4	−	−	漳州窯	14c後半～15c中頃	小野碗B群	貫入
	1302	F-17	Ⅱ	青花	碗	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	13.2	−	−	漳州窯	14c後半～15c中頃	小野碗B群	貫入
	1303	F-18	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.2	−	−	景徳鎮窯	14c後半～15c中頃	小野碗B群	稜花碗
	1304	E-18	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−	景徳鎮窯	14c後半～15c中頃	小野碗B群	
	1305	−	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.6	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文
	1306	C-7	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.4	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文
	1307	E-30	Ⅰb	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.0	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文
	1308	D・E-4	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.7	−	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	分類	備考
									口径	底径	器高				
第232図	1309	F-8	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	−	5.2	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに蓮花文
	1310	表採	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.2	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1311	F-3・4	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1312	D・E-4	−	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	−	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1313	E-21・23	Ⅰb Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.0	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
第233図	1314	C・D-5	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.7	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1315	C・D-21	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.0	−	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに花弁文
	1316	C-29 D-30	Ⅲ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.8	−	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに花弁文
	1317	E-25 F-22・24	Ⅱ Ⅱ下	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.4	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1318	B-24	Ⅲ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.6	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1319	−	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	−	5.4	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1320	E-19	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	−	4.8	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	見込みに法螺貝文
	1321	D-10	−	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	15.4	−	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1322	D-7	−	青花	碗	浅黄橙色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み輪状に釉剥ぎ	−	5.0	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1323	F-23	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	−	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1324	C-31 D-19 E-19	Ⅱ Ⅲb	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 内面見込釉剥ぎ	12.6	4.2	4.3	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1325	F-19	Ⅱ	青花	碗	淡黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.4	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗C群	
	1326	−	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	6.6	−	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野碗D群	
	1327	F-19	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	5.6	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野碗D群	
	1328	E-29	Ⅰb	青花	碗	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.6	−	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
第234図	1329	D-7 E-7	Ⅱ	青花	碗	浅黄褐色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み輪状に釉剥ぎ	12.8	4.6	5.9	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	外面に唐草文
	1330	F-7	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.0	−	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	見込みに山水人物 高台内面に「萬福攸同」
	1331	E-17	Ⅱ	青花	碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.0	4.6	5.3	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1332	E-27 F-23・24	Ⅳ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.4	4.0	5.7	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	高台内面に梵字
	1333	D-23	−	青花	碗	灰白色	透明釉	高台脇～高台内面露胎	−	4.2	−	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1334	D-19	Ⅱ	青花	碗	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.6	−	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1335	B-30	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.8	−	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1336	E-21	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.8	−	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1337	D-9	−	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.6	−	−	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1338	F-22	Ⅱ	青花	碗	浅黄色	透明釉	残存部全面施釉	16.6	−	−	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1339	−	−	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.0	−	−	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1340	E-24	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−	景徳鎮窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1341	B-35・36	−	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.2	4.6	5.9	漳州窯	16c中頃～後半	小野碗E群	
	1342	E-30	Ⅰb Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	−	−	漳州窯	16c～17c初頭	−	
	1343	D-35	−	青花	碗	にぶい黄橙色	透明釉	見込み釉剥ぎ	16.8	−	−	漳州窯	16c～17c初頭	−	
	1344	F-19	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み輪状に釉剥ぎ	14.2	5.6	4.9	漳州窯	16c～17c初頭	−	
	1345	C-35	Ⅰ	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	10.1	4.2	3.2	漳州窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	
	1346	E-35	−	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.0	6.6	2.6	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに獅子
第235図	1347	表採	−	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.0	6.2	2.7	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに獅子
	1348	G-8	−	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.4	6.1	2.7	漳州窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに獅子
	1349	D-35	Ⅰ	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	9.6	−	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	
	1350	D-18 E-20	Ⅱ	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	8.2	−	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに十字花文
	1351	D-20	−	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	6.8	−	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	
	1352	E-9	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	8.0	−	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿B群	見込みに十字花文
第236図	1353	D-4	−	青花	皿	白色	透明釉	底部釉剥ぎ	11.6	3.6	3.1	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 見込みに人形化した文字
	1354	表採	−	青花	皿	灰白色	透明釉	底部露胎	−	4.8	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	高台脇に砂付着 碁笥底 見込みに人形化した文字
	1355	表採	−	青花	皿	灰白色	透明釉	底部露胎	10.1	4.2	2.7	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 見込みに人形化した文字
	1356	E-35	−	青花	皿	灰白色	透明釉	底部露胎	−	4.4	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 見込みに人形化した文字
第236図	1357	F-8	−	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.4	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 外面底部に砂目痕
	1358	表採	−	青花	皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	−	3.2	−	漳州窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底
	1359	D-19 E-19	Ⅲ	青花	皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	13.2	5.6	3.4	景徳鎮窯	15c後半～16c中頃	小野皿C群	碁笥底 見込みに十字花文
	1360	B-37	−	青花	皿	白色	透明釉	畳付き釉剥ぎ	−	12.8	−	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭	小野皿F群	つば皿
	1361	−	−	青花	皿	灰白色	透明釉	底部釉剥ぎ	8.4	4.6	1.9	漳州窯	16c末期～17c初頭		碁笥底
	1362	A-30	−	青花	皿	浅黄色	透明釉	腰部～高台内面露胎 内面下部露胎	9.4	5.8	1.9	漳州窯	16c末期～17c初頭		
	1363	F-17	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	高台内面露胎	−	5.2	−	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1364	E-19 G-16	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	高台内面露胎	−	6.4	−	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
第237図	1365	B-36	−	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.8	4.0	2.9	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		稜花皿 見込みに蓮花文
	1366	F-3	−	青花	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	−	−	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		

中世出土遺物観察表

※産地については，A群広東省系，B群浙江省系，C群福建省系を表す。

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	分類	備考
									口径	底径	器高				
第237図	1367	表採	－	青花	小皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1368	表採	－	青花	小皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1369	－	－	青花	大皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	20.6	12.1	4.3	漳州窯	16c末期～17c初頭		やや青みがかった釉薬
	1370	F-8	－	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		口縁部稜花
	1371	表採	－	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	14.0	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		畳付に砂付着
	1372	F-16・17	Ⅱ・Ⅲ	青花	大皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	26.2	－	－	漳州窯	16c末期～17c初頭		
	1373	D-22	Ⅱ	青花	大皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18.8	10.6	3.4	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
第238図	1374	E-8	－	青花	大皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	19.7	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1375	C・D-22	－	青花	大皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	11.5	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1376	－	－	青花	Ⅲ	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	13.5	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		赤絵
	1377	A-36・37	－	青花	Ⅲ	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		呉須赤絵
	1378	－	－	青花	Ⅲ	白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		赤絵
	1379	－	－	青花	Ⅲ	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		赤絵　1376と同一個体
	1380	E-20	Ⅲ	青花	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1381	－	－	青花	鉢	灰白色	透明釉	高台内面露胎	－	6.2	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		見込みに「喜」
	1382	－	－	青花	蓋	白灰色	透明釉	見受け部釉剥ぎ	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		
	1383	A-36	－	青花	蓋	にぶい橙色	透明釉	見受け部釉剥ぎ 白化粧土ぬり	11.6	－	－	漳州窯	16c末期～17c初頭		
	1384	D-35	Ⅲ	青花	徳利	灰色	透明釉	外面全面施釉	－	－	－	景徳鎮窯	16c末期～17c初頭		

中世出土遺物観察表

※産地については，A群広東省系，B群浙江省系，C群福建省系を表す。

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第239図	1385	E-31	－	中国陶器	天目碗	灰褐色	黒釉	外面胴部以下露胎	－	－	－	－		
	1386	E・F-18	Ⅱ	中国陶器	天目碗	にぶい黄橙色	黒釉	外面腰部以下露胎	－	－	－	－		
	1387	A・B-36・37 A-37	Ⅱ Ⅲ	中国陶器	天目碗	灰黄褐色	黒釉	外面腰部以下露胎	10.4	4.4	5.8	－	15c～16c	
	1388	－	－	中国陶器	天目碗	浅黄色	黒釉	外面腰部以下露胎	13.0	－	－	－		
	1389	E-24， F-24・25	Ⅱ	中国陶器	天目碗	灰白色	黒釉	外面腰部以下露胎	12.0	－	－	建窯		
	1390	G-3	Ⅰb	中国陶器	天目碗	暗灰黄色	黒褐釉	外面腰部以下露胎	11.1	－	－	－		
	1391	－	－	中国陶器	天目碗	黒色	黒釉	外面腰部～高台内面露胎	－	4.0	－	－		
	1392	A-16・28	Ⅲ	中国陶器	天目碗	黄灰色	黒釉	外面腰部～底部内面露胎	－	4.0	－	－	15c～16c	
	1393	F・G-17	表	中国陶器	天目碗	灰黄色	黒釉	外面腰部～高台内面露胎	－	3.8	－	－	15c	
	1394	E-27・28	－	中国陶器	天目碗	灰黄色	黒褐色釉	残存部全面施釉	－	－	－	－		
	1395	－	－	中国陶器	天目碗	灰白色	黒褐色釉	外面腰部下位露胎	－	－	－	－		
	1396	A・B-36・37， D-31	Ⅱ	中国陶器	天目碗	灰黄色	褐釉	外面腰部～高台内面露胎	－	4.4	－	－	15c～16c	
	1397	－	－	中国陶器	天目碗	灰色	黒褐釉	外面腰部～高台内面露胎	－	4.4	－	－	15c～16c	
第240図	1398	－	－	中国陶器	盤	灰白色	黄釉	外面露胎	－	－	－	C群	11c後半～12c代	口唇部に目跡あり
	1399	－	－	中国陶器	盤	灰色	黄釉	口唇部釉掻き取り	－	－	－	C群	11c後半～12c代	口唇部に目跡あり
	1400	C・D-36	－	中国陶器	盤	灰白色	黄釉	口唇部釉掻き取り 内面露胎	－	－	－	C群	13c代	口唇部に目跡あり
	1401	C-35	－	中国陶器	盤	灰白色	黄釉	残存部全面施釉	－	－	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1402	F-15	Ⅱ	中国陶器	盤	灰白色	黄釉	口唇部～外面釉剥ぎ	－	－	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1403	E-22	Ⅱ	中国陶器	盤	橙色	黄釉	外面露胎	24.8	－	－	C群	11c後半～12c代	盤Ⅱ－1
	1404	F-11	Ⅲ	中国陶器	盤	灰色	黄釉	外面露胎	－	－	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1405	D-31	Ⅱ	中国陶器	盤	灰褐色	黄釉	外面露胎	－	21.6	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1406	D-15	Ⅲ	中国陶器	盤	灰色	白化粧土に黄釉	外面露胎	－	－	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1407	B-34	Ⅱ	中国陶器	盤	浅黄色	白化粧土に黄釉	外面露胎	－	40.0	－	C群	11c後半～12c代	鉄絵
	1408	D-22	Ⅱ	中国陶器	盤	浅黄色	黄釉	残存部全面施釉	22.0	－	－	－	－	口唇部に目跡あり
	1409	－	－	中国陶器	盤	灰色	黄釉	残存部全面施釉	18.9	－	－	－	15c下限くらい	口唇部に目跡あり
	1410	E-8	－	中国陶器	盤	灰褐色	黄釉	口唇部釉掻き取り	35.0	－	－	－	－	
第241図	1411	C-29～31 D-31	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰赤色	－	－	37.8	－	－	C群	13c代	鉢Ⅰ－1b類
	1412	F-18， G-16・18	Ⅱ	中国陶器	鉢	黄灰色	灰白色釉	口縁部内外施釉	29.6	12.5	14.2	C群	12c中頃～後半	鉢Ⅰ－2a類
	1413	C-23	Ⅲ	中国陶器	鉢	褐灰色	－	－	24.2	8.3	9.3	C群	13c代	鉢Ⅰ－1b類
	1414	A-28	Ⅲ	中国陶器	鉢	灰褐色	褐色釉	残存部全面施釉	22.8	－	－	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅲ－1類 口唇部・外面腰部に目跡あり
	1415	B-21	Ⅲ	中国陶器	鉢	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	15.3	7.9	13.7	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅲ-2類 口唇部・外面腰部に目跡あり
	1416	－	－	中国陶器	鉢	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	23.0	－	－	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅲ類 口唇部・外面腰部に目跡あり
	1417	F-16	Ⅱ	中国陶器	鉢	橙色	褐釉か？	外面腰部下位露胎	20.4	－	－	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅵ類
	1418	B-30， C-30・34， E-31	Ⅱ	中国陶器	鉢	灰黄褐色	褐釉	残存部全面施釉	27.2	7.6	12.5	B群	12c中頃～後半	鉢Ⅵ類
第242図	1419	C-15	Ⅲ	中国陶器	水注	にぶい黄褐色	透明釉	口唇部釉掻き取り	10.4	－	－		11c後半～12c代	水注Ⅳ 口唇部・口縁内面に目跡あり
	1420	D-27	Ⅲ	中国陶器	水注	橙色	黄褐色釉	残存部全面施釉	10.4	－	－		11c後半～12c代	
	1421	B-15	Ⅱb	中国陶器	耳壺か水注	にぶい黄橙色	透明釉	残存部全面施釉	16.0	－	－		11c後半～12c代	耳壺Vか水注Ⅳ
	1422	F-29	－	中国陶器	水注か？	灰褐色	褐釉	残存部全面施釉	10.2	－	－	B群か？	11c後半～12c代	
	1423	E-28	－	中国陶器	取手	浅黄色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－		11c後半～12c代	

中世出土遺物観察表

※産地については，A群広東省系，B群浙江省系，C群福建省系を表す。

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第242図	1424	E-27	Ⅱ	中国陶器	取手	橙色	－	－	－	－	－		11c後半～12c代	
	1425	C-27	Ⅲ上	中国陶器	注口	灰黄色	鉄釉	内面露胎	－	－	－		11c後半～12c代	
	1426	D-24	－	中国陶器	注口	灰黄色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－		11c後半～12c代	
	1427	E-29	Ⅰb	中国陶器	耳壺	灰褐色	暗茶褐色釉	残存部全面施釉	16.1	－	－	C群	13c中葉以降～	Ⅲ類
	1428	－	－	中国陶器	耳壺	灰褐色	褐釉	残存部全面施釉	11.8	－	－	C群	11c後半～12c代	ⅢまたはⅣ類
	1429	C-27	Ⅲ	中国陶器	耳壺	灰褐色	黄褐色釉	口唇部釉掻き取り	11.8	－	－		12c代か？	Ⅴc類
	1430	E-24	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰色	褐釉	口唇部釉掻き取り	14.3	－	－		13c代	ⅩⅡ類
	1431	F-17	Ⅱ	中国陶器	耳壺	黄橙色	灰黄色釉に茶灰色釉	残存部全面施釉	10.0	－	－		13c代	耳壺Ⅵ類
	1432	D-32	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰褐色	黄白色釉に茶灰色釉	残存部全面施釉	9.6	－	－		13c代	Ⅵ-1類　口縁内面に目跡あり
	1433	D-8	Ⅲ	中国陶器	耳壺	黄橙色	灰黄色釉に茶灰色釉	残存部全面施釉	－	－	－		13c代	耳壺Ⅵ類
	1434	D-5	－	中国陶器	耳壺	灰褐色	灰黄色釉	残存部全面施釉	9.0	－	－		13c代	耳壺Ⅵ類
	1435	C-30	－	中国陶器	耳壺	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	10.6	－	－		13c代	口唇部に目跡あり　耳壺Ⅵ類
	1436	D-26	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰黄色	褐釉	残存部全面施釉	14.2	－	－		13c代	耳壺Ⅶ類　口唇部に目跡あり
	1437	A-14・15，E-17	Ⅱ	中国陶器	耳壺	にぶい黄橙色	褐釉	残存部全面施釉	14.4	－	－		13c代	口唇部に目跡あり 耳壺Ⅶ類か？
第243図	1438	A・B-20	－	中国陶器	耳壺	灰色	黒釉	外面施釉 口唇部釉掻き取り	9.8	－	－		14c以降	
	1439	D-29,E-30・31	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰白色	褐釉	外面施釉 口唇部釉掻き取り	10.2	－	－	BまたはC群	14c以降	1440と同一個体
	1440	F・G-18	Ⅱ	中国陶器	耳壺	褐灰色	鉄釉	外底面露胎	－	8.0	－	BまたはC群	14c以降	1439と同一個体
	1441	－	－	中国陶器	耳壺	灰褐色	鉄釉	残存部全面施釉	12.0	－	－		14c以降	
	1442	F-4	Ⅰb	中国陶器	耳壺	にぶい褐色	－	－	－	－	－		14c以降	
	1443	F-17	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰白色	黄褐色釉	残存部全面施釉	－	－	－		14c以降	
	1444	D-22	Ⅱ	中国陶器	耳壺	明赤褐色	黄褐色釉	内面頸部下位露胎	11.4	－	－	C群か？	14c中葉以降	1445と同一個体 外面に目跡あり
	1445	－	－	中国陶器	耳壺	明赤褐色		内面・外面腰部下位露胎	－	10.2	－	C群か？	14c中葉以降	1444と同一個体
	1446	－	－	中国陶器	耳壺	灰黄色	黒釉	残存部全面施釉	19.7	－	－		14c中葉以降	
	1447	C-28	Ⅱ	中国陶器	耳壺	赤褐色	緑褐色釉	口唇部釉掻き取り	7.8	－	－		13c～14c代	
	1448	E-8	Ⅱ	中国陶器	耳壺	灰白色	褐釉	口唇部釉掻き取り	22.6	－	－		13c代	
	1449	E-15	Ⅱ	中国陶器	耳壺	褐色	灰黄色釉	口唇部釉掻き取り	－	－	－	－	－	
	1450	D-26	Ⅱ	中国陶器	無耳壺	灰褐色	暗緑色釉	口唇部釉掻き取り	6.8	－	－		13c代	口唇部に目跡あり　Ⅰ類か？
	1451	E-22	Ⅱ	中国陶器	無耳壺	にぶい黄橙色	灰黄色釉	残存部全面施釉	5.8	－	－	C群か？	13c代	Ⅰ類
	1452	－	－	中国陶器	無耳壺	にぶい黄橙色	褐釉	残存部全面施釉	8.5	－	－		13c代	Ⅰ類
	1453	D-28	Ⅱ	中国陶器	無耳壺	にぶい橙色	浅黄色釉	残存部全面施釉	12.6	－	－		13c代	Ⅰ類
	1454	E-23	Ⅱ	中国陶器	無耳壺	橙色	－	－	15.0	－	－	B群か？	13c～14c	Ⅴ類か？
	1455	－	－	中国陶器	無耳壺	灰褐色	黄灰色釉	口唇部釉掻き取り	10.8	－	－	B群か？	13c～14c	Ⅴ類か？
	1456	B-13	Ⅱ下	中国陶器	無耳壺	灰褐色	黒褐色釉	口唇部釉掻き取り	9.6	－	－	－	13c～14c	Ⅴ類　口唇部貝目あり
	1457	E-22・23，D-21・22	Ⅰb，Ⅱ，Ⅲ	中国陶器	無耳壺	灰褐色	明黄褐色釉～透明釉	外底面露胎	10.0	11.2	30.0	－	13c～14c	壺Ⅶ類大型　内面にタタキ目跡
第244図	1458	－	－	中国陶器	水注または壺	灰白色	－	－	－	8.0	－	－	－	
	1459	A-21	Ⅲ	中国陶器	水注または壺	灰白色	－	－	－	9.0	－	－	－	
	1460	E-28	Ⅲ	中国陶器	水注または壺	灰色	－	－	－	9.0	－	－	－	
	1461	D-21・22	Ⅱ	中国陶器	水注または壺	灰白色	－	残存部露胎	－	9.4	－	－	－	
	1462	E-18・20	Ⅱ	中国陶器	水注または壺	灰白色	－	－	－	10.0	－	－	－	外面下位面取り
	1463	E-30	Ⅰb	中国陶器	鉢または壺	灰色	灰釉	残存部全面施釉	－	8.0	－	B群	－	B群の鉢Ⅲ・Ⅵ類か四耳Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ類
	1464	－	－	中国陶器	水注または壺	橙色	鉄釉	外面腰部～底部・内面露胎	－	10.8	－	－	－	
	1465	－	－	中国陶器	水注または壺	暗灰黄色	－	－	－	12.0	－	－	－	
	1466	D-18,E-18，F-16・18	Ⅱ	中国陶器	水注または壺	灰色	褐釉	外面腰部下位露胎	－	11.5	－	－	14c以降	C群に近い　盤Ⅱ類か？
	1467	E-15・16・18・19,D-19	Ⅲ	中国陶器	水注または壺	黄灰色	鉄釉	残存部全面施釉	－	15.4	－	－	14c以降	外底面に目跡あり
	1468	E-22,D-22	Ⅱ，Ⅰb	中国陶器	水注または壺	灰色	鉄釉	内面・外面腰部下位露胎	－	13.6	－	－	14c～15c	
	1469	－	－	中国陶器	水注または壺	橙色	－	－	－	10.4	－	－	－	
	1470	A・B-36・37	Ⅱ	中国陶器	水注または壺	灰黄色	灰白色釉	外底面・内面露胎	－	11.4	－	－	14c以降	
第245図	1471	B-37	Ⅲ	中国陶器	甕	にぶい褐色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅰ類
	1472	C・D-21・22	－	中国陶器	甕	灰色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅰ類
	1473	D-35	Ⅲ	中国陶器	甕	灰褐色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅰ類
	1474	－	－	中国陶器	甕	にぶい赤褐色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅱ類
	1475	E-6	Ⅲ	中国陶器	甕	にぶい橙色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅴ類
	1476	B-21	Ⅲ	中国陶器	甕	明赤褐色	灰黄色釉	口唇部掻き取り	－	－	－	C群	13c代	甕Ⅲ類
第246図	1477	F-22	Ⅲ	中国陶器	甕	明赤褐色	淡黄色釉	内底面・外底面露胎	－	26.0	－	C群	13c代	
	1478	D-15	Ⅲ	中国陶器	甕	褐灰色	灰黄色釉	外底面露胎	－	28.0	－	C群	13c代	
	1479	A'-17	Ⅲ	中国陶器	甕	褐灰色	－	－	－	－	－	C群	13c代	
第247図	1480	－	－	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花　1484と同一個体
	1481	D-36	Ⅲa	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花
	1482	F-6	Ⅱ	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花　1483と同一個体
	1483	F-4	Ⅲ	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花　1482と同一個体
	1484	－	－	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花　1480と同一個体
	1485	－	－	中国陶器	梅瓶	灰褐色	鉄釉	外面文様部分・内面露胎	－	－	－	磁州窯	11c後半～12c代	白地剔花・渡畑2の1351と接合
	1486	E-18,F-16	Ⅱ	中国陶器	盤	灰白色	緑釉	残存部全面施釉	26.0	－	－	華南	15c～16c	華南三彩 372・373と同一個体

中世出土遺物観察表

※産地については，A群広東省系，B群浙江省系，C群福建省系を表す。

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第247図	1487	–	–	中国陶器	盤	灰白色	緑釉	外底面露胎	–	–	–	華南	15c～16c	華南三彩 372・375と同一個体
	1488	F-19	Ⅱ	中国陶器	盤	灰白色	緑釉	外面腰部下位～外底面露胎	–	16.2	–	華南	15c～16c	華南三彩 1486・1487と同一個体
	1489	B-37	–	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	–	–	–	–	–	緑釉に鉄絵
	1490	B-37・38	Ⅲ上	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	–	–	–	–	–	緑釉に鉄絵
	1491	B-37	Ⅲ	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面露胎	–	–	–	–	–	緑釉に鉄絵
	1492	D-19・20・21，E-18・19・20，F-19・20	Ⅱ	中国陶器	瓶または壺	浅黄色	黄釉	内面肩部下位露胎	5.4	–	–	–	14c以降	
	1493	C-29	Ⅲ	中国陶器	Ⅲ	黄灰色	褐釉か？	残存部全面施釉	–	–	–	–	–	黒土による花文の象嵌か？
	1494	–	–	中国陶器	小壺	にぶい黄色	白象嵌に褐釉	内面露胎	–	–	–	–	–	
	1495	D-31	Ⅱ	中国陶器	小壺か？	灰黄色	鉄釉	内面肩部下位露胎	–	–	–	C群	–	
	1496	–	–	中国陶器	–	灰白色	透明釉	内面露胎	–	–	–	–	–	
	1497	E-3，F-4	Ⅰb	中国陶器	–	灰白色	透明釉	内面露胎	–	–	–	–	–	
	1498	B-26	Ⅲ	中国陶器	碗	にぶい黄褐色	黄褐色釉	残存部全面施釉	13.9	–	–	–	–	
	1499	–	–	中国陶器	仏像か？	灰白色	褐釉	頭髪部のみ施釉	–	–	–	–	14c以降か？	
第248図	1500	D-26，E-25	Ⅴ	朝鮮陶器	鉢	灰色	白象嵌・黒象嵌に透明釉	残存部全面施釉	19.4	–	–	高麗	14c末～15c？	森田Ⅱb
	1501	D-31，E-32	Ⅰb，Ⅱ	朝鮮陶器	碗	灰白色	白象嵌に透明釉	残存部全面施釉	–	–	–	李朝	15c～16c	
	1502	E-20	Ⅱ	朝鮮陶器	碗	灰色	灰釉	畳付釉掻き取り	–	3.8	–	李朝	15c～16c	見込み・畳付に目跡あり
	1503	A・B-36	–	朝鮮陶器	徳利	灰白色	黒釉	残存部全面施釉	5.4	10.0	19.5	李朝	13c後半～	外底面に目跡あり
	1504	D-35	Ⅰ	朝鮮陶器	壺か？	黒褐色	–	–	–	–	–	朝鮮	–	
	1505	D-25	Ⅲ	ベトナム陶器 青花	Ⅲ	灰白色	透明釉	胴部～底部露胎	15.4	–	–	ベトナム	15c～16c	
第249図	1506	F-4	Ⅱ下	瓦器	椀	灰色	–	–	14.6	5.2	5.0	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1507	F-4	Ⅱ下，Ⅲ	瓦器	椀	灰白色	–	–	13.8	4.5	4.4	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1508	F-4	Ⅱ	瓦器	椀	灰白色	–	–	–	–	–	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1509	F-4	Ⅲ	瓦器	椀	灰色	–	–	–	–	–	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1510	F-4	Ⅱ下	瓦器	椀	灰白色	–	–	–	4.3	–	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1511	F-4	Ⅱ	瓦器	椀	灰黄色	–	–	–	5.4	–	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1512	A-30	–	瓦器	Ⅲ	灰色	–	–	9.6	4.5	1.9	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1513	F-4	Ⅱ	瓦器	Ⅲ	灰色	–	–	5.2	3.8	1.5	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1514	F-5	Ⅱ	瓦器	Ⅲ	灰色	–	–	8.8	–	–	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
	1515	F-19	Ⅱ	瓦器	Ⅲ	灰白色	–	–	8.4	–	–	和泉	12c後半	和泉Ⅲ-1
第250図	1516	E-22	Ⅱ	中世須恵器（東播系）	捏鉢	灰色	–	–	36.8	–	–	東播系	12c～14c代	
	1517	–	–	中世須恵器（東播系）	捏鉢	灰色	–	–	–	–	–	東播系	12c～14c代	
	1518	E-30	–	中世須恵器（東播系）	捏鉢	灰色	–	–	–	–	–	東播系	12c～14c代	
	1519	F-24	Ⅰb	中世須恵器（東播系）	捏鉢	灰色	–	–	–	–	–	東播系	12c～14c代	
	1520	F-31	Ⅱ	中世須恵器（東播系）	捏鉢	灰色	–	–	–	–	–	東播系	12c～14c代	
	1521	–	–	中世須恵器（東播系）	捏鉢	灰黄色	–	–	–	10.0	–	東播系	12c～14c代	
	1522	E-22，F-25	Ⅱ	カムィヤキ	甕	灰色	–	–	16.6	–	–	徳之島	13c代	
	1523	–	–	カムィヤキ	甕	にぶい黄褐色	–	–	16.0	–	–	徳之島	13c代	
	1524	–	–	カムィヤキ	甕	灰褐色	–	–	18.6	–	–	徳之島	13c代	
	1525	C-34	–	カムィヤキ	甕	にぶい黄褐色	–	–	16.9	–	–	徳之島	13c代	
	1526	D-7，E-13・18	Ⅱ，Ⅲ	カムィヤキ	壺	にぶい褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1527	A-25	表	カムィヤキ	壺	灰褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1528	E-3，F-4	Ⅰb	カムィヤキ	壺	灰褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1529	–	–	カムィヤキ	壺	灰褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
第251図	1530	B-30	–	カムィヤキ	壺	にぶい赤褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1531	C-27	Ⅱ	カムィヤキ	壺	にぶい赤褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1532	–	–	カムィヤキ	甕または壺	にぶい黄褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1533	–	–	カムィヤキ	甕または壺	にぶい黄褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1534	C-27	Ⅱ	カムィヤキ	甕または壺	灰色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1535	C-22，E-25	Ⅱ，Ⅲ	カムィヤキ	甕または壺	にぶい赤褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1536	E-27	–	カムィヤキ	甕または壺	にぶい黄褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1537	–	–	カムィヤキ	甕または壺	にぶい赤褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1538	–	–	カムィヤキ	甕または壺	灰黄褐色	–	–	–	–	–	徳之島	13c代	
	1539	D-6	Ⅲ	カムィヤキ	壺	にぶい褐色	–	–	–	15.0	–	徳之島	13c代	
	1540	E-27	Ⅲ	カムィヤキ	甕	にぶい赤褐色	–	–	–	18.0	–	徳之島	13c代	
第252図	1541	D-24・30，E-24	Ⅱ	中世須恵器（樺万丈）	捏ね鉢	灰色	–	–	22.0	9.0	10.1	樺万丈	13c代	
	1542	B・C-30，C-31・32	Ⅱ，Ⅲ	中世須恵器（樺万丈）	捏ね鉢	灰色	–	–	26.0	10.7	10.6	樺万丈	13c代	
	1543	D-22	–	中世須恵器（樺万丈）	捏ね鉢	灰色	–	–	–	–	–	樺万丈	13c代	
	1544	C・D-21・22	Ⅰ	中世須恵器（樺万丈）	甕	灰色	–	–	–	–	–	樺万丈	13c代	
	1545	E-15	Ⅱ	中世須恵器（樺万丈）	甕	灰色	–	–	–	–	–	樺万丈	13c代	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第252図	1546	C-15	Ⅱb	中世須恵器（樺万丈）	甕	灰色	－	－	－	－	－	樺万丈	13c代	
	1547	A'-17	Ⅱ	中世須恵器（樺万丈）	甕	灰色	－	－	－	19.0	－	樺万丈	13c代	
第253図	1548	B-34	Ⅲ	中世須恵器	甕	灰色	－	－	－	－	－	－	13c代	
	1549	A-1415	－	中世須恵器	甕	灰色	－	－	－	－	－	－	13c代	
	1550	E・F-30	Ⅱ	中世須恵器	甕	灰色	－	－	－	－	－	－	13c代	
	1551	－	－	中世須恵器	甕	灰色	－	－	－	－	－	－	13c代	
	1552	C-27	Ⅲ	中世須恵器	壺	灰褐色	－	－	－	22.5	－	－	13c代	
第254図	1553	F-20	Ⅱ	陶器	天目碗	灰白色	褐釉	外面腰部～高台内面露胎	10.9	4.2	5.9	瀬戸	15c～16c	
	1554	E-18,F-18	Ⅱ	陶器	黄天目碗	灰黄色	褐釉	残存部全面施	－	－	－	瀬戸	15c～16c	
	1555	D-21・22	Ⅰ	陶器	卸皿	灰白色	透明釉	外面露胎	－	8.4	－	瀬戸	13c代	
	1556	C・D-21・22	Ⅱ	陶器	卸皿	灰白色	透明釉	外面露胎	－	10.2	－	瀬戸	13c代	
	1557	－	－	陶器	卸皿	灰黄色	透明釉	外底面露胎	－	－	－	瀬戸	13c代	
	1558	C-12,D-13・15,E-15,F-16	Ⅱ,Ⅲ	陶器	瓶子	灰白色	灰緑色釉	内面露胎	－	－	－	瀬戸	13c代	
	1559	D-32	Ⅱ	炻器	甕	灰色	－	－	－	－	－	常滑	13c前半	口縁帯1.5cm　5型式
	1560	A'-30,C-29,D-30	Ⅲ	炻器	甕	灰黄色	－	－	48.0	－	－	常滑	13c前半	口縁帯1.5cm　5型式
	1561	D-32・35	Ⅰ	炻器	甕	灰褐色	－	－	－	－	－	常滑	13c第３四半期	口縁帯2.0cm　6a型式
第255図	1562	D-35・36	Ⅰ	炻器	甕	灰色	－	－	37.2	－	－	常滑	13c第４四半期	口縁帯2.5cm　6b型式
	1563	A-17	Ⅱ	炻器	甕	灰色	－	－	－	－	－	常滑	14c前半	口縁帯3.0cm　7型式
	1564	G-16・17	Ⅱ	炻器	甕	灰黄色	－	－	－	－	－	常滑	14c前半	口縁帯4.0cm　7型式
	1565	D-22,G-16	Ⅱ	炻器	甕	灰黄色	－	－	－	22.0	－	常滑	－	
第256図	1566	F-19・21・22	Ⅱ	炻器	壺	赤褐色	－	－	11.5	－	－	備前	14c代	
	1567	E-18	－	炻器	壺	赤褐色	－	－	15.2	－	－	備前	14c代	
	1568	A-14・15	－	炻器	壺	赤褐色	－	－	－	－	－	備前	14c代	
	1569	A'-17	Ⅱ	炻器	壺	赤褐色	－	－	－	－	－	備前	14c代	
	1570	E-15・16,F-17	Ⅱ	炻器	壺	赤褐色	－	－	15.3	－	－	備前	14c代	
	1571	C-30,E-30	－	炻器	壺	赤褐色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	
第257図	1572	A-14・15	－	炻器	壺	灰白色	－	－	48.8	－	－	備前	14c代	
第258図	1573	G-14・15	Ⅱ	炻器	擂鉢	灰赤色	－	－	－	－	－	備前	14c後半	
	1574	E-30	Ⅱ	炻器	擂鉢	暗灰黄色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	
	1575	F-8,G-8	－	炻器	擂鉢	橙色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	
	1576	G-13	Ⅱ	炻器	擂鉢	灰褐色	－	－	31.2	17.2	10.5	備前	15c前半	
	1577	B-12	－	炻器	擂鉢	灰褐色	－	－	－	－	－	備前	15c前半	
	1578	－	－	炻器	擂鉢	にぶい褐色	－	－	26.6	11.9	10.4	備前	15c前半	
	1579	－	Ⅱ	炻器	擂鉢	黄灰色	－	－	32.8	－	－	備前	15c前半	
第259図	1580	－	－	炻器	擂鉢	明赤褐色	－	－	30.0	－	－	備前	15c第２四半期	
	1581	C-26・28,D-28F-26・27	Ⅰb,Ⅱ	炻器	擂鉢	明赤褐色	－	－	25.6	15.2	12.0	備前	15c第２四半期	
	1582	C-29・30,E-30	－	炻器	擂鉢	橙色	－	－	25.8	－	－	備前	15c後半	
	1583	F・G-18	－	炻器	擂鉢	灰色	－	－	－	－	－	備前	15c後半	
	1584	D-30,E-30・31	Ⅰb,Ⅱ	炻器	擂鉢	灰褐色	－	－	33.4	－	－	備前	15c後半	
	1585	E-21・26	Ⅱ	炻器	擂鉢	灰褐色	－	－	28.0	－	－	備前	15c後半	
第260図	1586	C・D-21・22	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	29.6	13.4	12.1	－	15c～16c	
	1587	E-29・30	Ⅰb,Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	にぶい黄橙色	－	－	30.0	17.2	11.8	－	15c～16c	
	1588	－	－	瓦質土器	擂鉢	灰黄色	－	－	26.8	13.6	12.1	－	15c～16c	
	1589	F-19・20	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	明褐色	－	－	23.6	－	－	－	15c～16c	
第261図	1590	E-18	－	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1591	D・E-4	－	瓦質土器	擂鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1592	C-22	－	瓦質土器	擂鉢	灰白色	－	－	16.6	10.1	5.5	－	15c～16c	
	1593	－	－	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	22.2	－	－	－	15c～16c	
	1594	－	－	瓦質土器	擂鉢	灰褐色	－	－	－	16.4	－	－	15c～16c	
	1595	D-26,E-26	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色	－	－	－	17.2	－	－	15c～16c	
	1596	B・E-15	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	10.6	－	－	15c～16c	
	1597	－	－	瓦質土器	擂鉢	暗灰色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1598	F-26	－	瓦質土器	擂鉢	灰黄色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
第262図	1599	B・C・E-30	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	明黄褐色	－	－	29.8	－	－	－	15c～16c	
	1600	C・D-22	－	瓦質土器	茶釜	にぶい黄橙色	－	－	14.6	－	－	－	15c～16c	煤付着
	1601	F-19・20	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	灰黄色	－	－	14.4	－	－	－	15c～16c	指頭痕あり　煤付着
	1602	F-16	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	灰色	－	－	17.0	－	－	－	15c～16c	指頭痕あり　胴部に連点文
	1603	－	－	瓦質土器	茶釜	灰白色	－	－	25.0	－	－	－	15c～16c	
	1604	E-30	－	瓦質土器	茶釜	灰白色	－	－	23.6	－	－	－	15c～16c	煤付着
	1605	F-20	Ⅱ	瓦質土器	茶釜蓋	浅黄色	－	－	11.0	庇径14.8	2.5	－	15c～16c	煤付着
第263図	1606	E-6,F-5	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	－	－	33.4	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文　煤付着
	1607	C-29,D-30,E-30	Ⅱ,Ⅲ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文　煤付着
	1608	F-23	－	瓦質土器	火鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1609	E-30	－	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									口径	底径	器高			
第264図	1610	E-22	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	明黄褐色	－	－	52.6	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文　煤付着
	1611	D-15	Ⅱ,Ⅱa,Ⅲ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1612	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	橙色	－	－	36.6	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1613	F-18	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黄灰色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1614	E-19,F-20	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄褐色	－	－	34.6	－	－	－	15c～16c	
	1615	－	－	瓦質土器	火鉢	にぶい黄色	－	－	29.0	－	－	－	15c～16c	
	1616	A・B-36・37	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1617	F-19	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面殻具刺突か？
	1618	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
第265図	1619	－	－	瓦質土器	火鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文・殻具刺突か？
	1620	D-7	Ⅲ	瓦質土器	火鉢	浅黄色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1621	A・B-35・36	－	瓦質土器	火鉢	にぶい橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1622	－	－	瓦質土器	火鉢	淡黄色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1623	C-21	Ⅰb	瓦質土器	火鉢	褐灰色	－	－	－	23.0	－	－	15c～16c	
	1624	F-17	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	浅黄色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1625	－	－	瓦質土器	火鉢	灰色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1626	C-22	Ⅲ	瓦質土器	火鉢	黒褐色	－	－	－	33.6	－	－	15c～16c	
	1627	C-29・F-28	－	瓦質土器	火鉢	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1628	F-20	Ⅱ	瓦質土器	火鉢蓋	橙色	－	－	12.2	10.6	4.1	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1629	E-8	Ⅱ	瓦質土器	火鉢蓋	黄灰色	－	－	8.8	－	－	－	15c～16c	外面スタンプ文
	1630	－	－	瓦質土器	蓋	橙色	－	－	34.0	－	－	－	15c～16c	外面・内面底部に煤付着
第266図	1631	D-35	Ⅲ	土製品	かまど	にぶい橙色	－	－	－	－	25.5	－	15c～16c	煤付着
	1632	B-35,D-35	Ⅲ	土製品	かまど	橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	「喜助」の銘あり
第267図	1633	E-24	Ⅱ	土製品	脚	にぶい橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1634	－	Ⅲ	土製品	脚	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1635	G-17	Ⅱ	土製品	脚	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1636	D-30	Ⅲ	土製品	脚	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1637	－	－	土師質土器	焙烙	にぶい橙色	－	－	28.8	－	－	－	15c～16c	外面に煤付着
	1638	E-30	－	土師質土器	焙烙	橙色	－	－	31.0	－	－	－	15c～16c	外面に煤付着
	1639	D-18	Ⅱ	土師質土器	焙烙	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	焙烙の取手　外面に煤付着
	1640	D-35	Ⅰ	土師質土器	坏	浅黄橙色	－	－	12.0	7.4	4.6	－	15c～16c	外面に煤付着
	1641	E-3,F-4	Ⅰb	土師質土器	敲具か？	にぶい橙色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	
	1642	－	－	瓦質土器	メンコ	にぶい黄色	－	－	－	最大径7.0	最大厚1.2	－	15c～16c	
	1643	E-16	Ⅱ	瓦質土器	ほうじゅ蓋	灰白色	－	－	－	－	－	－	15c～16c	つまみ径1.7cm
	1644	D-19	Ⅱ	瓦質土器	ほうじゅ蓋	灰白色		－	－	－	－	－	15c～16c	つまみ径1.7cm
第268図	1645	D-35	Ⅲb	瓦	丸瓦	黄褐色	－	－	最大長6.2	最大幅4.3	厚み1.7	中国	12c後半	（上面）布目圧痕 （下面）縄目タタキ後ナデ
	1646	A・B-36・37	表	瓦	丸瓦	にぶい黄橙色	－	－	最大長6.7	最大幅6.2	厚み1.4	中国	12c後半	（上面）布目圧痕 （下面）縄目タタキ後ナデ"
	1647	A-29	Ⅲ	瓦	平瓦	淡黄色	－	－	最大長11.6	最大幅7.5	厚み1.2	中国	12c後半	（上面）布目　（下面）縄目
	1648	－	－	瓦	平瓦	灰白色	－	－	最大長9.8	最大幅10.4	厚み1.0	中国	12c後半	（上面）布目　（下面）縄目
	1649	－	－	瓦	平瓦	褐黒色	－	－	最大長9.1	最大幅5.6	厚み0.9	中国	12c後半	（上面）布目　（下面）縄目
	1650	D-37	Ⅳ	瓦	平瓦	灰色	－	－	最大長8.3	最大幅5.0	厚み1.1	中国	12c後半	（上面）布目　（下面）縄目
	1651	C-37	表	瓦	平瓦	にぶい黄橙色	－	－	最大長7.4	最大幅7.8	厚み1.3	中国	12c後半	（上面）布目　（下面）縄目
	1652	D-36	表	瓦	平瓦	灰色	－	－	最大長9.7	最大幅10.6	厚み1.3	中国	12c後半	（上面）ヘラナデ （下面）布目後ナデ"
	1653	C-22	－	瓦	平瓦	にぶい橙色	－	－	最大長11.1	最大幅9.7	厚み2.5	－	－	（上面）木目
第269図	1654	－	－	滑石製品	鍋	－	－	－	25.0	20.5	9.0	－	12c代	
	1655	E-24	－	滑石製品	鍋	－	－	－	16.6	－	－	－	12c代	
	1656	A-24	Ⅱa	滑石製品	鍋	－	－	－	18.8	13.2	18.2	－	12c代	外面煤付着
	1657	B-15	Ⅲ	滑石製品	鍋	－	－	－	41.0	－	－	－	13c～14c	
	1658	F-26	Ⅲ	滑石製品	鍋	－	－	－	31.8	－	－	－	13c～14c	外面煤付着
第270図	1659	－	－	滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－	－	－	
	1660	D-32	Ⅱ	滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－	－	－	
	1661	G-17	－	滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－	－	－	
	1662	D-31	Ⅱ	滑石製品	鍋	－	－	－	－	－	－	－	－	
	1663	E-30	－	滑石製品	鍋	－	－	－	－	23.8	－	－	－	外面煤付着
	1664	E-28	Ⅳ	滑石製品	鍋	－	－	－	－	19.6	－	－	－	外面煤付着
	1665	E-29	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	6.15	6.1	2.5	－	－	
	1666	A-16	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	8.5	4.6	1.9	－	－	
	1667	－	－	滑石製品	転用品	－	－	－	6.95	3.7	1.7	－	－	
	1668	D-30	－	滑石製品	転用品	－	－	－	5.9	4.6	2.8	－	－	
	1669	C-29	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.3	6.0	2.2	－	－	
	1670	D-26	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.3	4.8	1.8	－	－	
第271図	1671	D-26	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.4	1.3	1.4	－	－	
	1672	E-19	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.8	2.2	1.5	－	－	
	1673	D-24	Ⅱ下	滑石製品	転用品	－	－	－	6.1	2.9	1.4	－	－	

中世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			産地※	時期	備考
									最大長	最大幅	最大厚			
第271図	1674	A-26	－	滑石製品	転用品	－	－	－	6.4	2.9	1.2	－	－	
	1675	A-24	Ⅲ	滑石製品	転用品	－	－	－	5.15	1.9	1.9	－	－	
	1676	D-26	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	6.8	2.55	1.8	－	－	
	1677	F-19	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	8.05	3.1	2.5	－	－	
	1678	D-16	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	3.7	2.1	1.4	－	－	
	1679	E-21	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	2.85	2.8	1.4	－	－	
	1680	D-31	Ⅱ	滑石製品	転用品	－	－	－	4.2	2.55	1.4	－	－	
	1681	D-17	－	滑石製品	転用品	－	－	－	3.2	1.6	1.9	－	－	
	1682	B-33	Ⅰb	滑石製品	転用品	－	－	－	2.1	1.3	1.3	－	－	
	1683	E-32	Ⅰb	滑石製品	転用品	－	－	－	4.9	4.6	1.4	－	－	外面煤付着
	1684	A-28	Ⅲ	滑石製品	転用品	－	－	－	6.8	3.7	2.0	－	－	
	1685	－	－	滑石製品	転用品	－	－	－	11.1	7.5	2.3	－	－	
	1686	－	－	滑石製品	転用品	－	－	－	5.5	3.4	2.3	－	－	
第272図	1687	B-25	Ⅲ上	石製品	砥石	－	－	－	28.1	6.6	6.0	－	－	
	1688	C-30	－	石製品	砥石	－	－	－	7.4	7.4	2.1	－	－	
	1689	C-23	Ⅱ	石製品	砥石	－	－	－	9.1	3.8	2.2	－	－	
	1690	－	－	石製品	砥石	－	－	－	8.2	4.4	3.4	－	－	
	1691	E-27	Ⅱ	石製品	砥石	－	－	－	5.0	4.2	3.1	－	－	
	1692	C-36	Ⅲb	石製品	砥石	－	－	－	7.2	7.6	1.3	－	－	
	1693	E-32	Ⅱ	石製品	砥石	－	－	－	7.3	3.2	1.9	－	－	
	1694	B-16	Ⅲ	石製品	砥石	－	－	－	6.7	3.4	1.5	－	－	
	1695	D-23	Ⅲ	石製品	砥石	－	－	－	14.1	5.1	1.5	－	－	

遺構内出土古銭

挿図	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径（cm）
45	46	古代土坑6	○○元寶	－	破片	－
46	48	古代土坑墓1	咸平元寶	998年	北宋・真宗	2.4
	49	古代土坑墓1	紹聖元寶	1094年	北宋・哲宗	2.4
	50	古代土坑墓1	景德元寶	1004年	北宋・真宗	2.4
47	51	古代土坑墓3	○○○寶	－	破片	2.1
48	55	古代ピット5	皇宋通寶	1038年	北宋・仁宗	2.2
	57	古代ピット7	皇宋通寶	1038年	北宋・仁宗　篆書	2.2
	60	古代ピット10	元豊通寶	1078年	北宋・神宗　行書	2.2
	61	古代ピット11	元祐通寶	1086年	北宋・哲宗　篆書	2.3
49	64	古代ピット13	乾元重寶	758年	唐・粛宗　当十銭	2.3
	65	古代ピット14	熙寧元寶	1068年	北宋・神宗　視認不可	2.2
	66	古代ピット15	熙寧元寶	1068年	北宋・神宗	2.2
	67	古代ピット16	元豊通寶	1078年	北宋・神宗　篆書	－
	68	古代ピット17	天聖元寶	1023年	北宋・仁宗	2.3
	69	古代ピット18	祥符元寶	1009年	北宋・神宗	2.3
	73	古代ピット22	嘉祐元寶	1056年	北宋・仁宗	2.3
	75	古代ピット24	太平通寶	976年	北宋・太祖	2.4
	76	古代ピット25	景祐元寶	1034年	北宋・仁宗　真書	2.3
	79	古代ピット28	太平通寶	976年	北宋・太祖	2.2
	80	古代ピット29	景德元寶	1004年	北宋・真宗	2.4
	81	古代ピット30	太平通寶	976年	北宋・太祖	2.2
	82	古代ピット31	開元通寶	960年	南唐　視認不可	2.1
	－	古代ピット32	聖宋元寶？	1101年	徽宗「宗」と「元」の破片	－
129	702	中世掘立15	不明	－		2.3
	703	中世掘立15	不明	－		2.1
	－	中世掘立15	不明	－		－
131	704	中世掘立18	開元通寶	960年	南唐	2.5
	705	中世掘立18	祥符通宝	1009年	北宋・真宗　祥符元寶と同じ	2.3
	706	中世掘立18	天聖元寶	1023年	北宋・仁宗　篆書	2.4
	707	中世掘立18	元祐通寶	1086年	北宋・哲宗　行書	2.4
	708	中世掘立18	天豊通寶	1078年	北宋・神宗　篆書	2.2
137	－	中世掘立26	不明	－		－
140	710	中世掘立31	政和通寶	1111年		2.3
	711	中世掘立31	洪武通寶	1368年		2.2
148	719	中世竪穴建物6	大〇通寶	－		2
	720	中世竪穴建物6	不明	－		－
149	722	中世竪穴建物7	天〇通寶	－		2.3
150	724	中世竪穴建物10	皇宋通寶	1038年	北宋・仁宗	2.3
154	726	かまど集中凹地	熙寧元寶	1068年	北宋・神宗　篆書	2.3
159	729	かまど跡11	不明	－	7枚重	2.2
	730	かまど跡11	不明	－	7枚重	2.3
176	750	中世土坑8	不明	－	土坑	1.9

挿図	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径（cm）
177	－	中世土坑9	不明	－	小片	－
	752	中世土坑11	元豊通寶	1078年	北宋・神宗　篆書	2.3
180	759	中世土坑16	祥符元寶	1009年		2.2
183	767	中世土坑墓1	洪武通寶	1368年		2.2
	768	中世土坑墓1	洪武通寶	1368年		2.3
	769	中世土坑墓1	洪武通寶	1368年		2.3
	770	中世土坑墓2	加治木銭	－	背治　2枚重	2.3
	－	中世土坑墓2	加治木銭	－	背治	－
	771	中世土坑墓3	加治木銭	－	背治　7枚重	2.3
184	773	中世土坑墓4	不明	－		2.4
	774	中世土坑墓4	洪武通寶	1368年	2枚重　布痕付着	2.5
187	778	中世土坑墓7	洪武通寶	1368年	背浙	2.2
	779	中世土坑墓7	洪武通寶	1368年	5枚重	2.1
188	780	中世土坑墓8	洪武通寶	1368年	7枚重	2.1
189	781	中世土坑墓9	洪武通寶	1368年		2.2
	782	中世土坑墓9	加治木銭	－	洪武通寶に背治	2.1
	783	中世土坑墓9	加治木銭	－	洪武通寶に背治	2.1
	784	中世土坑墓9	加治木銭	－	洪武通寶に背治	2.1
	785	中世土坑墓9	洪武通寶	1368年		2
	786	中世土坑墓9	洪武通寶	1368年	2枚重	2
190	787	中世土坑墓10	洪武通寶+？+朝鮮通寶	朝鮮通寶：1423年	3枚重	2.1
	788	中世土坑墓10	洪武通寶	1368年		2.2
	789	中世土坑墓10	洪武通寶	1368年	2枚重	2
	790	中世土坑墓10	洪武通寶	1368年		2.1
191	791	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	792	中世土坑墓11	不明	－	3枚重	2.1
	793	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2
	794	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	795	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	796	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	797	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年	小片	2.1
	798	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2.1
	799	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		2
	800	中世土坑墓11	洪武通寶	1368年		－
	－	中世土坑墓11	不明	－	銅屑　文章表記のみ	－
	－	中世土坑墓11	不明	－	小片　文章表記のみ	－
192	801	中世土坑墓12	鉄銭	－	3枚重	2.1
	802	中世土坑墓12	洪武通寶	1368年		2
	803	中世土坑墓12	洪武通寶	1368年		2
	－	中世土坑墓12	不明	－		－
	804	中世土坑墓13	？	－	2枚重	2.1
	805	中世土坑墓13	朝鮮通寶+？3枚	朝鮮通寶：1423年	4枚重	2.1

遺構内出土古銭

挿図	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径(cm)
192	806	中世土坑墓13	洪武通寶	1368年		2.1
193	808	中世土坑墓14	政和通寶	1111年	北宋・徽宗	2.2
194	809	中世土坑墓16	洪武通寶２枚+？1	1368年	３枚重	2.1
194	810	中世土坑墓16	加治木銭	－	背治	2.1
	811	中世土坑墓16	加治木銭	－	背治	－
	812	中世土坑墓16	加治木銭	－	背治	2.1
	813	中世土坑墓16	加治木銭	－	背治	2.1
195	817	中世土坑墓17	洪武通寶+？4	1368年	５枚重	2.1
	818	中世土坑墓17	洪武通寶+？1	1368年	２枚重	2.1
196	819	中世土坑墓18	洪武通寶	1368年		2.1
	820	中世土坑墓18	洪武通寶	1368年		2.1
199	826	中世ピット7	不明	－		2.1
	834	中世ピット15	洪武通寶	1368年		2.2
	835	中世ピット16	淳祐元寶	1241年	南宋・理宗	2.4
	837	中世ピット18	大中通寶	1361年	明・朱元璋	2.2
	838	中世ピット18	洪武通寶	1368年		2.2
113	－	中世ピット23	不明	－		－
200	－	中世ピット24	洪武通寶	1368年	「武」・「通」のみ確認	－
	851	中世ピット31	祥符元寶	1009年	北宋・真宗	2.4
	854	中世ピット34	永楽通寶	1408年	明・成祖	2.1
	855	中世ピット35	洪武通寶	1368年		2.3

挿図	No.	遺構名	出土古銭	古銭情報	備考	直径(cm)
200	856	中世ピット36	元祐通寶	1086年	北宋・哲宗　行書	2.2
201	857	中世ピット37	太平通寶	976年		2.2
	858	中世ピット38	太平通寶	976年		2.2
	864	中世ピット44	洪武通寶	1368年		2
	865	中世ピット45	不明	－	「通」のみ確認	－
205	896	溝14	皇宋通寶	1038年		2.4
313	－	近世土坑1	洪武通寶	1368年	鉄分多　破片	－
314	1807	近世土坑8	祥符元寶	1009年	北宋・真宗	2.3
	1808	近世土坑8	永楽通寶	1480年	明・成祖(永楽帝)	2
	－	近世土坑8	不明	－	文章表記のみ	－
	－	近世土坑8	不明	－	鉄銭　文章表記のみ	－
315	1809	近世土坑墓1	洪武通寶	1368年	鉄分多し	2.3
	1810	近世土坑墓2	寛永通寶	－	３枚重	2.3
317	1812	近世土坑墓6	洪武通寶	1368年		2.2
	1813	近世土坑墓6	加治木銭	－	洪武通寶に背治	2.2
	1814	近世土坑墓6	洪武通宝	1368年		2.2
318	－	近世土坑墓8	不明	－		－
	1815	近世土坑墓9	不明	－	５枚重	2.1
280	－	近世ピット5	不明	－	鉄分多　破片	－
326	1860	近世溝3	寛永通寶	－	江戸時代	2.2
328	1872	近世自然流路1	○○通寶	－		－

出土古銭(一般)

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径(cm)
273	1696	－	表	開元通寶	南唐　960年	真書	2.4
	1697	C-28	Ⅲ	開元通寶	南唐　960年	破片	－
	1698	C-16	Ⅱ	開元通寶	南唐　960年	真書	2.3
	1699	－	表	開元通寶	南唐　960年	真書	2.2
	1700	CD-29	Ⅱ	宋通元寶	北宋960年		2.5
	1701	F-19	Ⅱ	太平通寶	北宋　976年		2.4
	1702	D-23	Ⅲ	太平通寶	北宋　976年		2.4
	1703	－		太平通寶	北宋　976年		2.4
	1704	F-22	Ⅱ下	至道元寶	北宋　995年	篆書　太祖	2.3
	1705	E-22	Ⅱ	至道元寶	北宋　995年	真書	2.4
	1706	E-34	Ⅲ	祥符元寶	北宋　1009年	真宗	2.45
	1707	F-23	Ⅱ下	天聖元寶	北宋　1023年		2.4
	1708	C-23	Ⅲ	景祐元寶	北宋　1034年	真書　仁宗	2.5
	1709	E-16	Ⅱ	皇宋通寶	北宋　1038年	真書　仁宗	2.45
	1710	G-6	Ⅱ	皇宋通寶	北宋　1038年	真書	2.4
	1711	D-21	Ⅲ	皇宋通寶	北宋　1038年	篆書	2.4
	1712	G-17	Ⅳ	皇宋通寶	北宋　1038年	篆書	－
	1713	D-24	Ⅲ	至和元寶	北宋　1054年	真書　仁宗	2.4
	1714	C-13	Ⅲ	嘉祐通寶	北宋　1056年	真書　仁宗	2.45
	1715	G-16	Ⅱ	治平元寶	北宋　1064年	篆書　英宗	2.35
	1716	－	表	熙寧元寶	北宋　1068年	篆書	2.3
274	1717	D-28	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	篆書	2.35
	1718	CD-29	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	真書	2.35
	1719	G-6	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	篆書　破片	2.5
	1720	D-24	Ⅲ	熙寧元寶	北宋　1068年	篆書	2.4
	1721	D-17	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	真書	2.35
	1722	F-16	Ⅱ	熙寧元寶	北宋　1068年	真書	2.3
	1723	D-15	Ⅱa	熙寧重宝	北宋　1071年	折二銭	2.9
	1724	D-25	Ⅲ	元豊通寶	北宋　1078年	行書　神宗	2.5
	1725	F-28	大溝内	元豊通寶	北宋　1078年	行書	2.45
	1726	D-12	表	元祐通寶	北宋　1086年	篆書　行書	2.3
	1727	E-13	畠畝間	紹聖元寶	北宋　1094年	行書	2.35
	1728	D-23	Ⅱ下	紹聖元寶	北宋　1094年		2.35
	1729	D-28	Ⅲ	紹聖元寶	北宋　1094年	行書	2.4
	1730	D-24	Ⅲ	元符通寶	北宋　1098年	行書　哲宗	2.45
	1731	G-17	Ⅱ	元符通寶	北宋　1098年	篆書	2.4
	1732	－	表	大観通寶	北宋　1107年		2.5
	1733	－	表	大観通寶	北宋　1107年		2.5
	1734	G-17	Ⅱ	政和通寶	北宋　1111年	分楷	2.4
	1735	G-17	Ⅳ	政和通寶	北宋　1111年	篆書	2.3
	1736	D-29		正隆元寶	金　1157年		2.45
	1737	E-9	表	洪武通寶	明　1368年		2.2
275	1738	－	表	洪武通寶	明　1368年	２枚重	2.3
	1739	A-30	表	洪武通寶	明　1368年	溝内	2.3
	1740	－	表	洪武通寶	明　1368年		2.2

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径(cm)
275	1741	D-15	Ⅱa	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1742	A-30	Ⅲ	洪武通寶	明　1368年	背一銭	2.2
	1743	D-19	Ⅱa	洪武通寶	明　1368年	破片	2.4
	1744	E-19	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.2
	1745	F-24	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年	背北平	2.3
	1746	E-23	Ⅱb	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1747	D-23	Ⅱb	洪武通寶	明　1368年		2.2
	1748	D-20	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.2
	1749	F-11	Ⅱ上	洪武通寶	明　1368年	背下福	2.3
	1750	D-28	Ⅲ	洪武通寶	明　1368年		2.35
	1751	D-23	Ⅱ下	洪武通寶	明　1368年		2.35
	1752	D-23	Ⅱ下	洪武通寶	明　1368年		2.4
	1753	D-23	Ⅱ下	洪武通寶	明　1368年	背浙	2.3
	1754	E-18	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年	劣化　鉄分多	2.2
	1755	C-29	Ⅲ	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1756	F-21	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年	破片	2.2
	1757	E-19	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1758	G-6	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.3
276	1759	E-20	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1760	E-29	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1761	EF-16	Ⅱ下	洪武通寶	明　1368年	５枚重 １枚は小片	2.4
	1762	B-36	表	洪武通寶	明　1368年		2.35
	1763	D-23	Ⅱ	洪武通寶	明　1368年		2.2
	1764	一括	表	洪武通寶	明　1368年		2.3
	1765	－	表	洪武通寶	明　1368年	２枚重	2.3
	1766	D-15	Ⅱa	永楽通寶	明　1408年		2.5
	1767	Z-21	表	永楽通寶	明　1408年		2.45
	1768	C-20	Ⅱ	永楽通寶	明　1408年		2.5
	1769	D-15	Ⅱ	永楽通寶	明　1408年	破片	－
	1770	B-34	溝内	康熙通寶	清　1662年	背:「宝泉」満州文字	2
	1771	F-23	Ⅱ	朝鮮通宝	朝鮮　1423年	真書	2.3
	1772	－	表	朝鮮通宝	朝鮮　1423年	真書	2.2
	1773	－	表	加治木銭		背治	2.3
	1774	E-9	Ⅱ	加治木銭		背治	2.3
	1775	D-19	表	加治木銭		背治	2.25
	1776	F-23	Ⅱ	加治木銭		背治	2.3
	1777	一括	表	加治木銭		背治	2.3
	1778	－	表	加治木銭		背治	2.3
	1779	F-20	Ⅱ	加治木銭		背治	2.2
	1780	D-14	Ⅰb	寛永通寶	1636年～		2.3
277	1781	－	表	寛永通寶	1636年～	７枚重	2.3
	1782	D-35	Ⅲ	寛永通寶	1636年～		2.3
	1783	D-37	表	寛永通寶	1636年～		－
	1784	B-37	Ⅱ	寛永通寶	1636年～		2.2

出土古銭(一般)

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径(cm)
277	1785	B-34	Ⅱ	寛永通寶	1636年～		2.25
	1786	-	表	寛永通寶	1636年～		2.3
	1787	E-37	溝内	寛永通寶	1636年～		-
	1788	D-37	表	寛永通寶	1636年～		2.2
	1789	-	表	寛永通寶	1636年～		2.45
	1790	F-30	Ⅰb	寛永通寶	1636年～		2.4
	1791	D-34	Ⅰ	寛永通寶	1636年～		2.3
	1792	F-35	表	寛永通寶	1636年～		2.4

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	時代	備考	直径(cm)
277	1793	-	表	寛永通寶	1636年～		2.4
	1794	-	表	寛永通寶	1636年～		-
	1795	A-28	-	寛永通寶	1636年～		2.3
	1796	C-37	-	寛永通寶	1636年～		2.2
	1797	-	表	桐1銭青銅貨	1922年～	大正11年	2.3
	1798	F-31	表	一銭			2.7
	1799	-	表	竜1銭銅貨			2.75

出土古銭（一般・非掲載分）

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	直径(cm)
非掲載	1	-	表	○和○寶	-
非掲載	2	-	表	2枚重	2.3
非掲載	3	-	表	小片・摩耗のため判読不可	-
非掲載	4	C-20	Ⅱ		-
非掲載	5	E-14	カクラン	鉄分多し	-
非掲載	6	F-4	Ⅰb	鉄分多し	-
非掲載	7	E-25	Ⅱ	破片	-
非掲載	8	F-19	Ⅱ		-
非掲載	9	F-19	Ⅱ	永○通○(永楽通寶1587　永昌通寶1644　永歴通寶1644)	-
非掲載	10	E-21	Ⅱ下	鉄分多し	-
非掲載	11	E-22	Ⅱ	○元通寶(開元通寶960　慶元通寶1195　至元通寶1350)	-
非掲載	12	D-28	Ⅱ	小片	
非掲載	13	E-15	Ⅱ	破片	-
非掲載	14	E-18	Ⅱ	2枚重	2.35
非掲載	15	G-6	Ⅰb	破片	-
非掲載	16	E-24	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	17	E-25	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	18	E-25	Ⅱ	破片	-
非掲載	19	D-24	Ⅲ	表面摩耗	-
非掲載	20	E-22	Ⅱ	破片　○○○寶	-
非掲載	21	F-21	Ⅱ	破片　○○○寶	-
非掲載	22	D-17	Ⅱ	天○元寶 (天漢元寶917　天聖元寶1023　天慶元寶1111　天盛元寶1158　天慶元寶1194)	-
非掲載	23	E-25	Ⅱ	洪武通寶？	-
非掲載	24	D-13	Ⅲ	破片	-
非掲載	25	F-21	Ⅱ	小片	-
非掲載	26	E-20	Ⅱ	破片	-
非掲載	27	E-20	Ⅱ	劣化	

挿図	No.	出土区	層	古銭情報	直径(cm)
非掲載	28	D-25	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	29	E-29	Ⅰb	小片	-
非掲載	30	F-31	-	劣化	
非掲載	31	E・F-16	Ⅱ	小片	
非掲載	32	F-23	Ⅲ	破片	-
非掲載	33	G-16・17	溝内	劣化	2.2
非掲載	34	G-17	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	35	G-17	Ⅱ	○○元寶or○元○寶	-
非掲載	36	D-16	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	37	D-15	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	38	C-20	Ⅲ	表面摩耗	-
非掲載	39	D-28	Ⅲ	破片	-
非掲載	40	G-17	溝内	破片	-
非掲載	41	F-16	Ⅱ	小片	-
非掲載	42	B-34	Ⅲb	小片	-
非掲載	43	E-35	表	表面摩耗	-
非掲載	44	F-16	Ⅱ	小片	-
非掲載	45	D-23	Ⅱ	小片	-
非掲載	46	E-31	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	47	-	表	小片	
非掲載	48	F-16	Ⅱ	小片　鉄分多し	-
非掲載	49	F-16	Ⅱ	小片	
非掲載	50	D-23	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	51	E-15	Ⅱ	5枚付着　鉄分多し	-
非掲載	52	E-20	Ⅱ	表面摩耗	-
非掲載	53	D-18	Ⅱ	劣化	-
非掲載	54	F-31	泥炭	祥符通寶　非掲載	-
非掲載	55	E-23	Ⅱb	洪武通寶　破片　非掲載	-

3　近世の調査

（1）調査の概要

調査は近世の調査においても，10m四方のグリッドを基本に，調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。調査区内は河川敷という立地もあり，層堆積は不安定で発掘調査時は遺構把握，出土遺物の層認定に非常に苦慮した。表土直下の近世は，現代の耕作，掘削工事等の影響でさらに調査を厳しいものとした。また，多数のピットが検出されたため，掘立柱建物跡の認定作業は困難を極め，整理作業において図上での復元も試みた。遺構の時期認定は，出土遺物を中心に，埋土などを検討して認定を行った。

（2）出土遺物の分類方法

近世の出土遺物のうち陶磁器においては，1580年代か19世紀代の資料を近世の遺物として報告する。

遺物の分類方法としては，まず磁器，陶器，金属製品の３つに大分類し，さらに種別，器種に細分類した。また，器形や産地（判別できるもの）についても考慮しながら分類を行った。（以下参照）

磁器（白磁・色絵を含む）
　　碗・小坏・皿・鉢・蓋（食膳具），瓶・仏具
陶器
　　碗・皿・鉢（食膳具），蓋（浅鉢形以外のもの），水注，土瓶，徳利，片口・鉢・擂鉢・鍋・釜（調理具），蓋（浅鉢形のもの）・甕・壺（貯蔵具），灯明具，仏具，その他
金属製品

陶磁器の産地，年代の記載については，文章内で述べたものもあるが，基本的には観察表内に掲載した。

年代・編年については，以下の文献，報告書を参考にしたが，生産年代と使用年代等を考慮して定めた。

『九州陶磁の編年』2000　九州近世陶磁学会
『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　九州編』2006　九州近世陶磁学会　渡辺芳郎
『薩摩川内市　平佐焼窯跡群の考古学的研究』2007
鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室

（3）遺構

近世の遺構は，掘立柱建物跡２棟，焼土跡３基，製鉄関連遺構19基，土坑８基，土坑墓11基，礫集積遺構４か所，古道５条，溝８条，自然流路２条が検出された。ピットは多数検出され，根石などの構造物が確認できるもの以外は，掲載遺物のあるもののみ遺構配置図で平面形を図示するに留めた。

掘立柱建物跡（第304図）

掘立柱建物跡は，A-30，31区において２間×２間，２間×３間の２棟が検出された。調査区内において，現河川から，より内陸側に位置している。

掘立柱建物跡１号（第304図）

A-30区で検出された。規格が２間×２間の建物で，梁行約３m，桁行約3.8mの規模をもち，床面積11.4㎡となる。柱穴は径30cm前後のものが大半を占める。柱穴１は，掘立柱建物跡２号の柱穴と切り合っており，径85cm前後と大きいが，図中左側に見えるわずかな段差部分が当該建物の柱穴部分となる。掘立柱建物跡２号と切り合い関係にあるが，切り合う柱穴以外の柱穴検出レベルから，時間的前後関係については１号が先行すると考えられる。また同柱穴から遺物が出土している。

出土遺物（第304図）

遺物は柱穴１内より苗代川系の陶片が出土した。甕等の胴部片は図化できなかった。遺物は片口と甕の口縁部が出土した。1801は片口である。薄くシャープなつくりのものである。1802は甕である。口縁端部はＴ字状を呈する。口唇部には貝目が残る。

掘立柱建物跡２号（第304図）

A-30,31区で検出された。規格が２間×３間の建物で梁行約3.9m，桁行約６mの規模をもち，床面積23.4㎡となる。建物西側の梁行間の柱穴を１本欠く。柱穴は径40cm前後が平均となる。前述のとおり掘立柱建物跡１号と柱穴８が切り合っているが，図中右側のやや大きな底面部分が当該掘立柱建物跡の柱穴部分となる。柱穴８から遺物が出土している。

出土遺物（第304図）

1803は柱穴８から出土した，肥前磁器の染付碗である。

焼土跡（第305図）

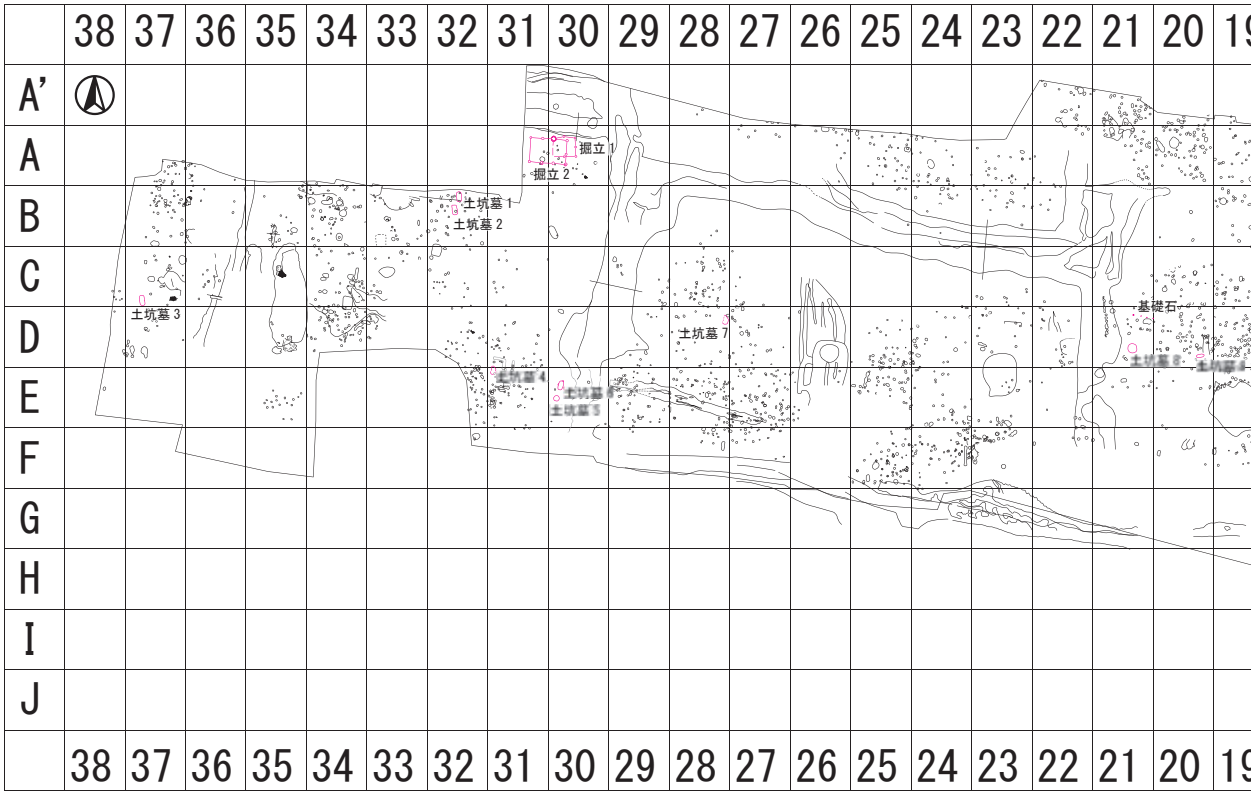
焼土跡は調査区内に点在し，F-7区，C-15区，E-38区の３箇所で見つかっている。鉄滓などが認められず，製鉄とは関係ないと思われるもの，所属時期不明のものを一括した。

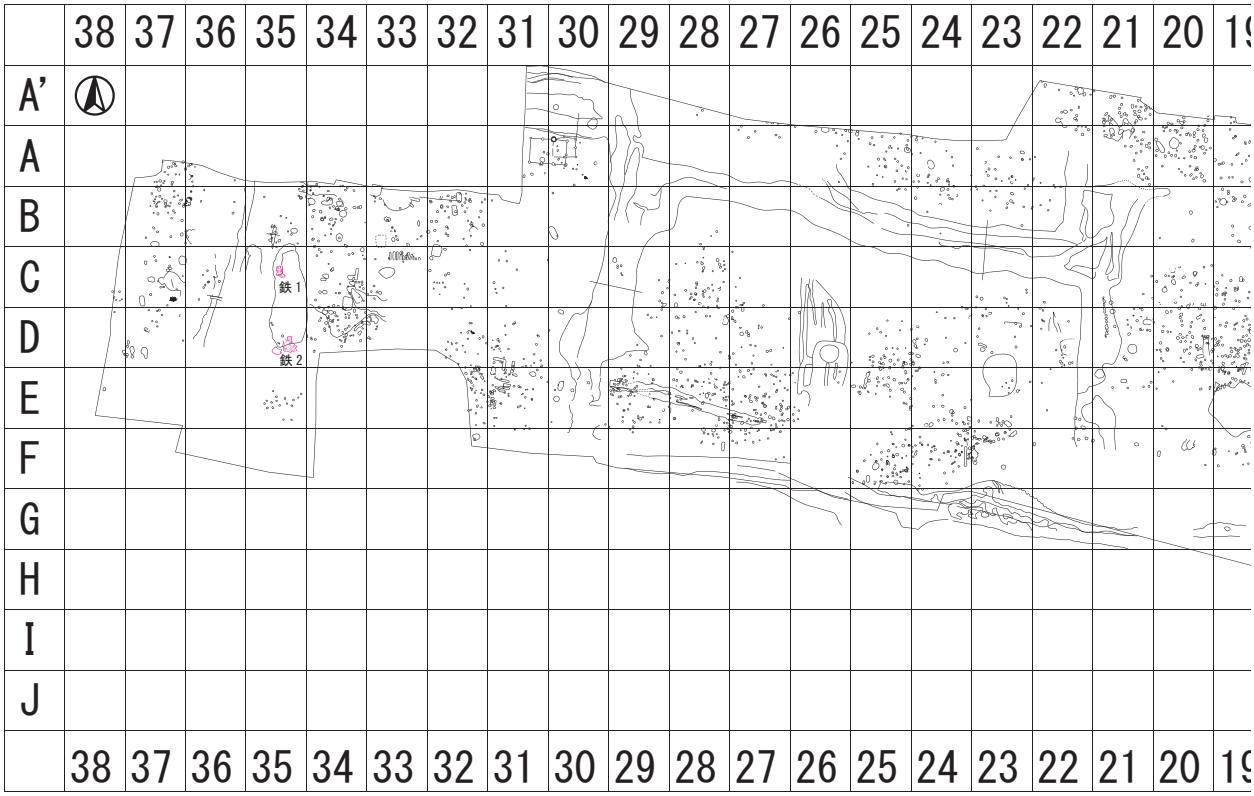
焼土跡１号（第305図）

E-38区で検出された。平面形は長軸0.6m，短軸0.4mの楕円形を呈する。検出面からの深さは２cmほどしかなく，埋土はやや粘性を帯びた砂で炭化物，焼土がみられるが，強い焼成は受けていない。

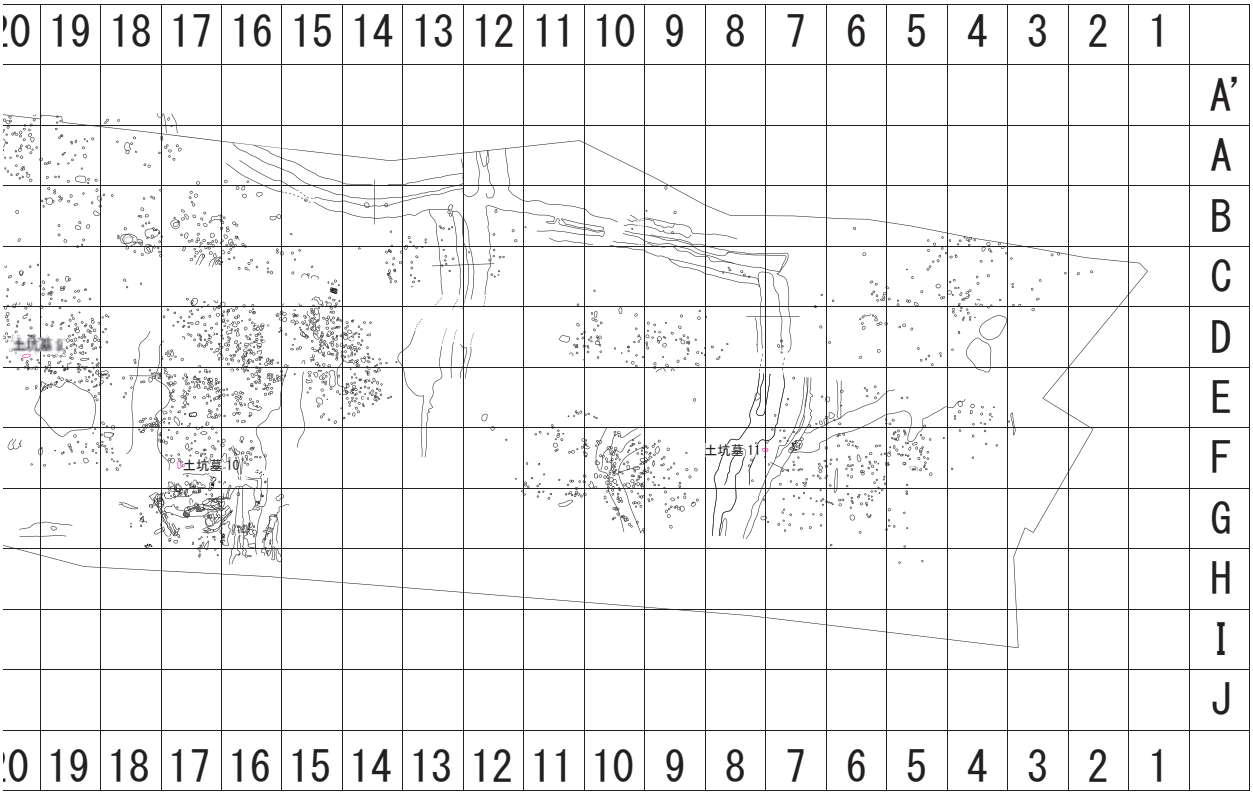
焼土跡２号（第305図）

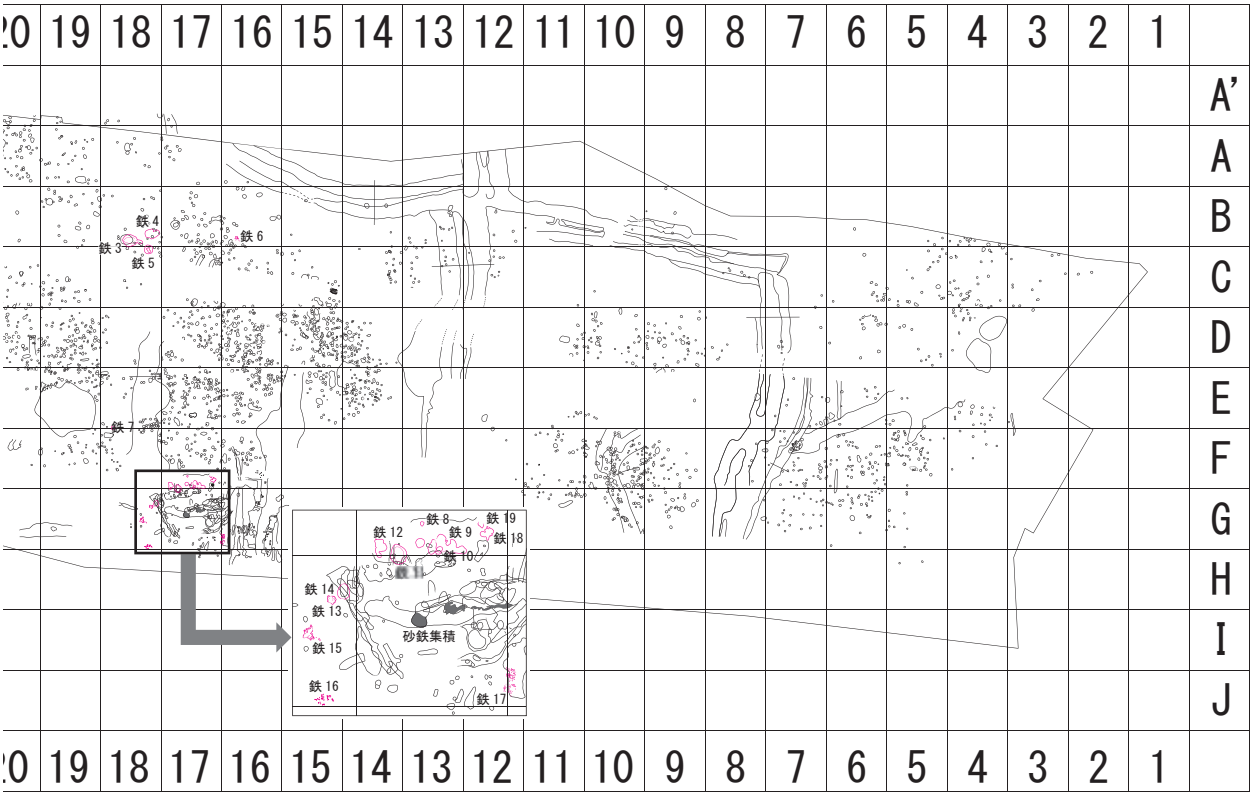
C-15区で検出された。平面形は長軸1.2m，短軸0.7mの長方形を呈し，検出面からの深さ0.1mほどである。遺構は，後年の耕作により破壊されており，焼土が筋状に３列残る。埋土に炭化物を多く含み，焼成を強く受けた様子が伺え，炉であった可能性も考えられる。



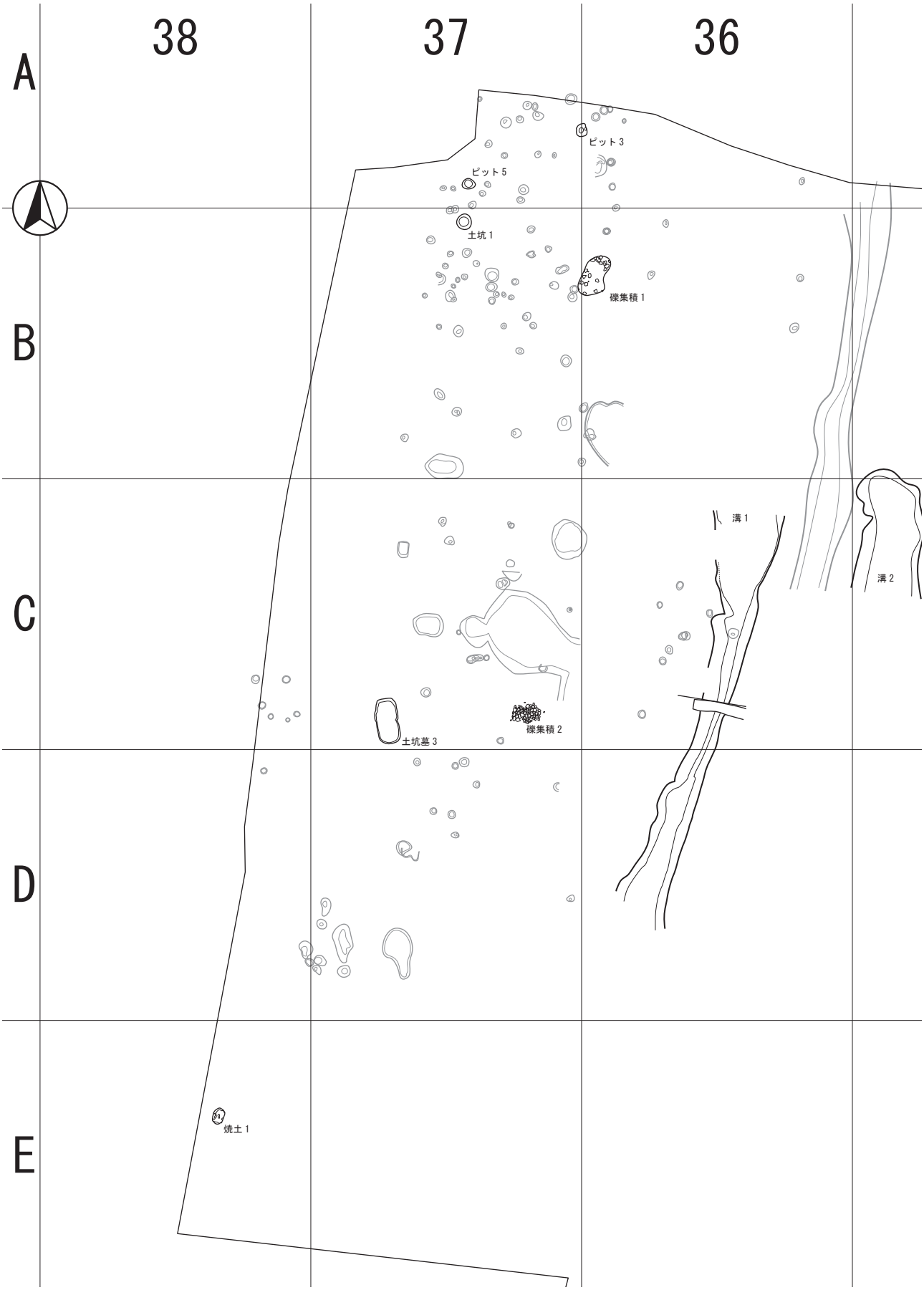


第278図　近世全体遺構図 1

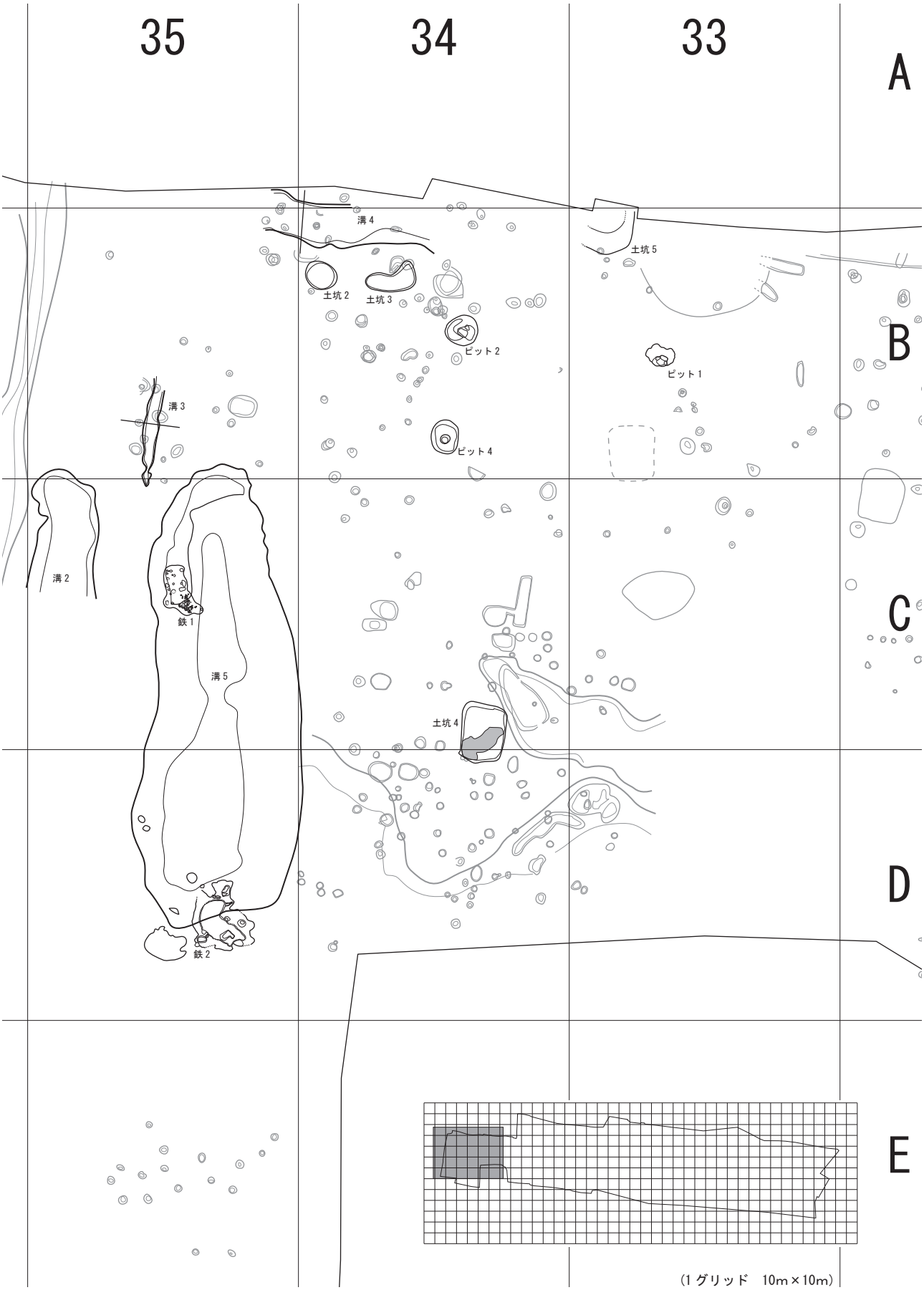




第279図　近世全体遺構図２



第280図　近世遺構配置図1



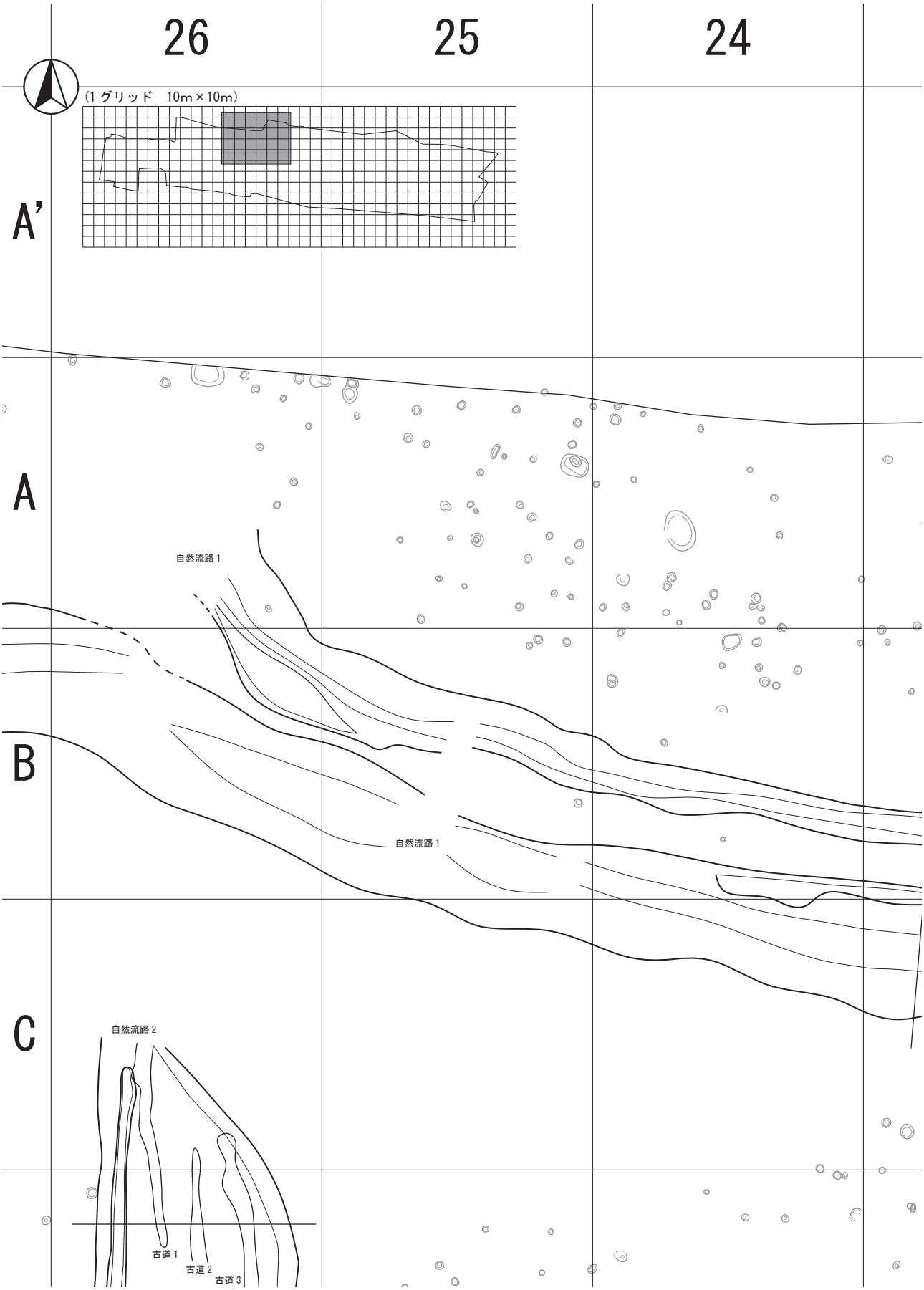
第281図　近世遺構配置図２



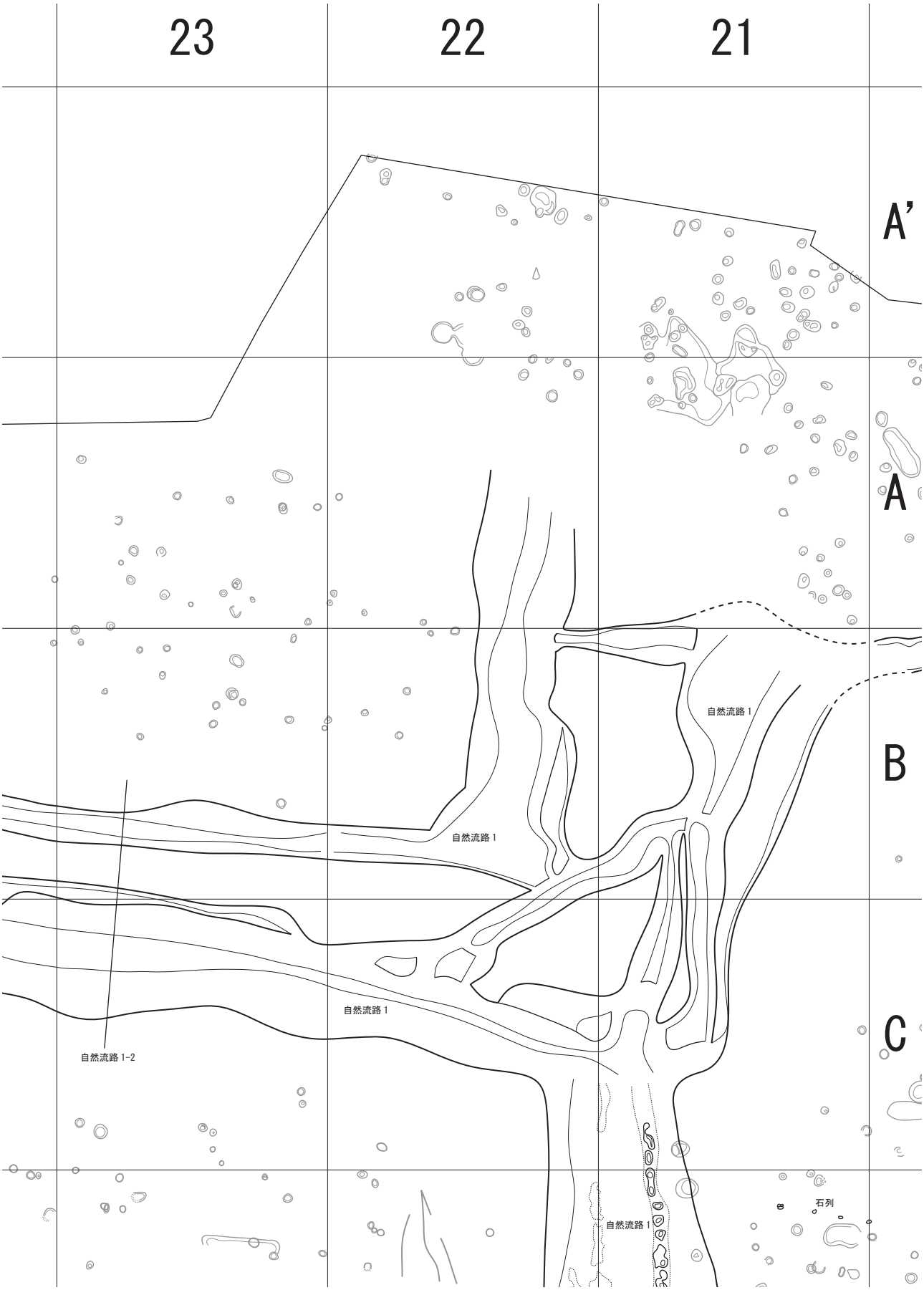
第282図　近世遺構配置図３



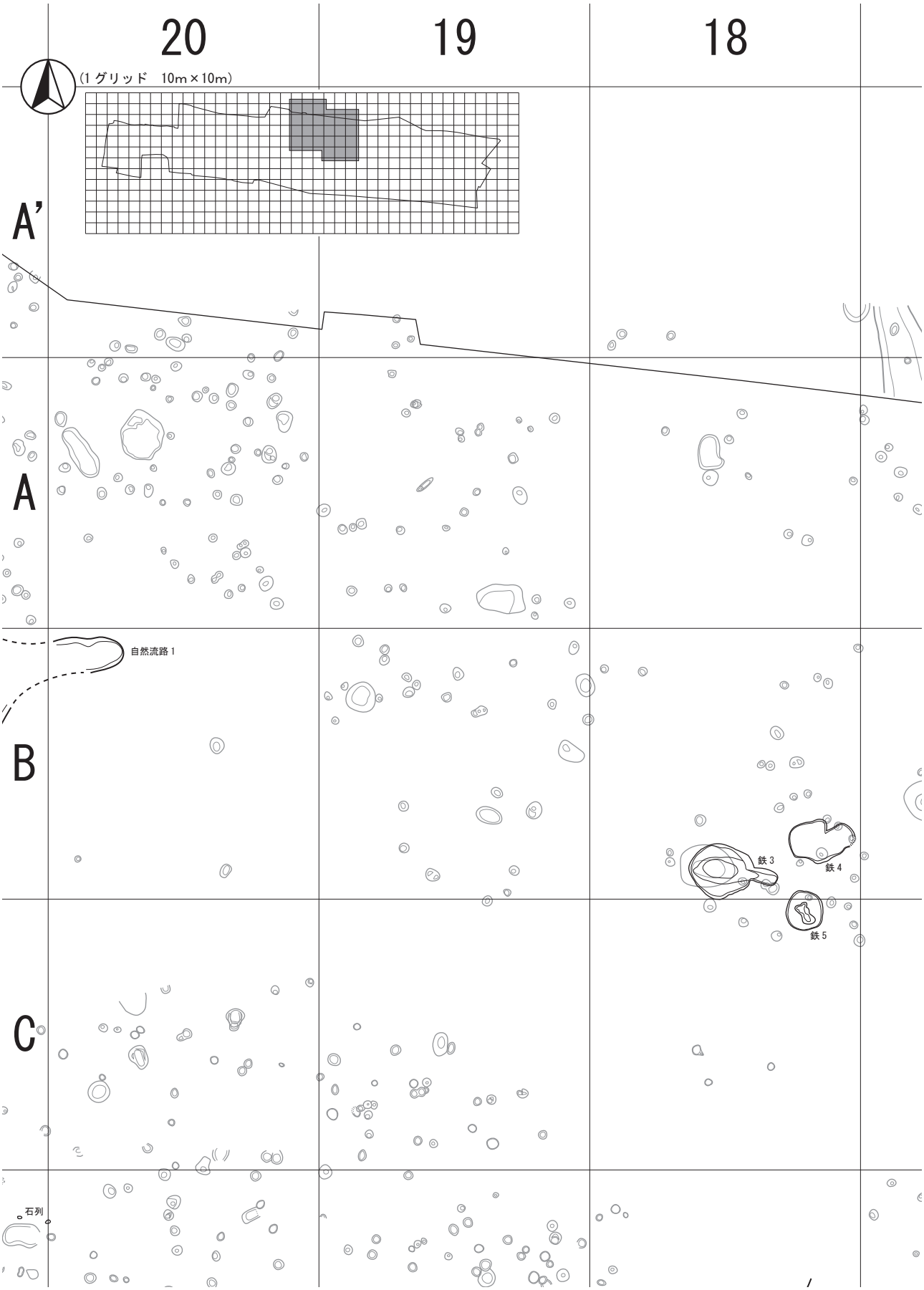
第283図　近世遺構配置図４



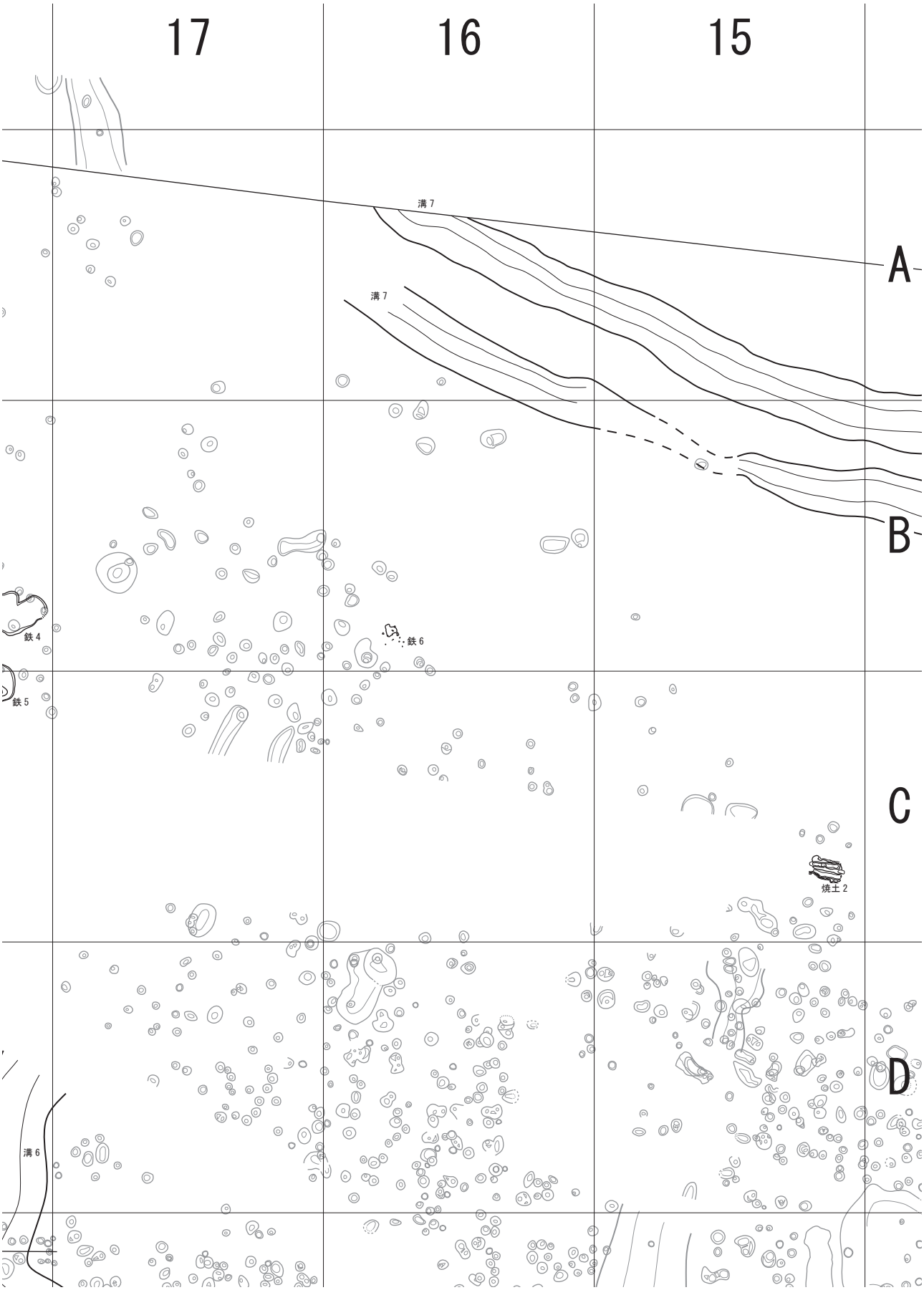
第284図　近世遺構配置図５



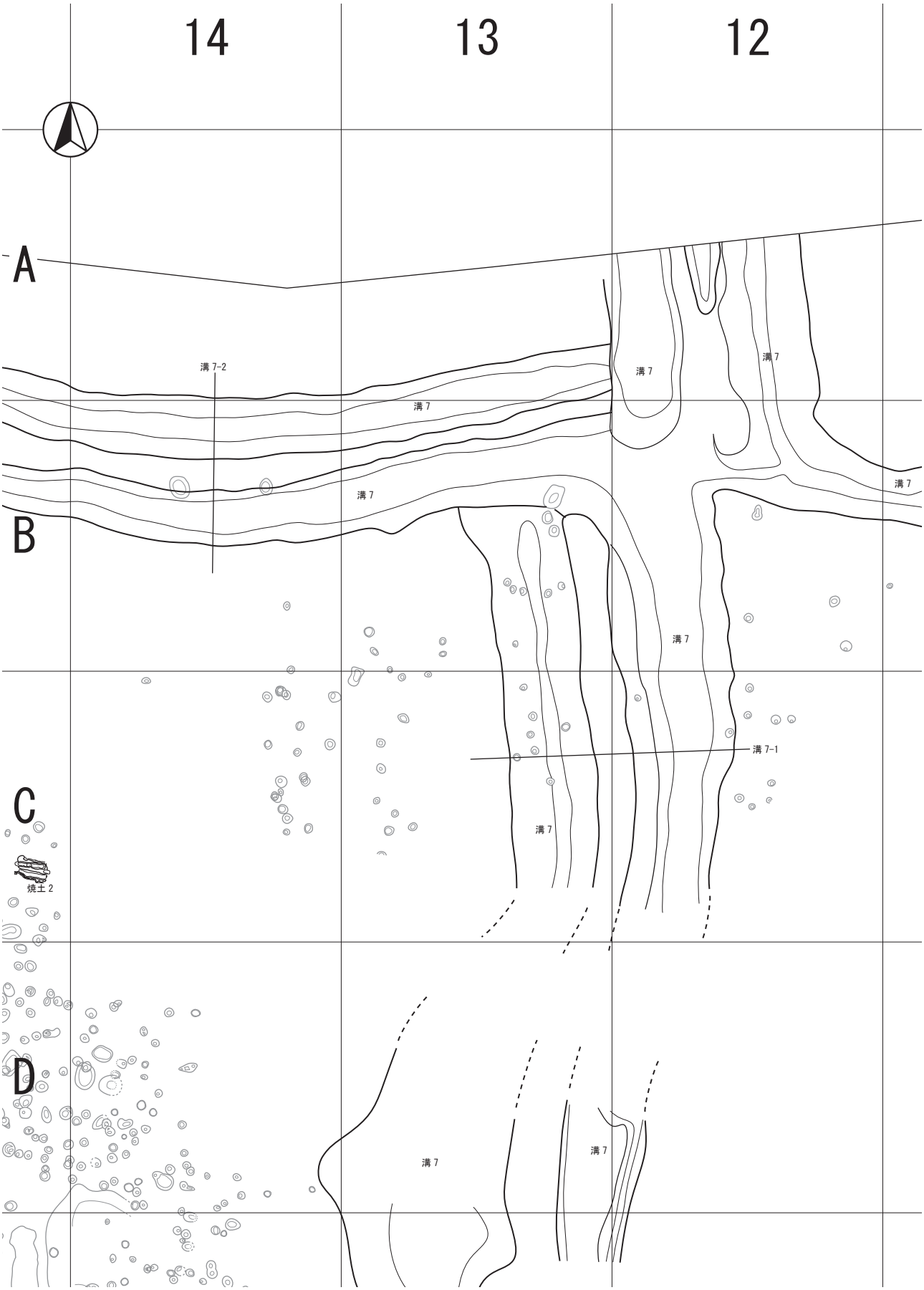
第285図　近世遺構配置図６



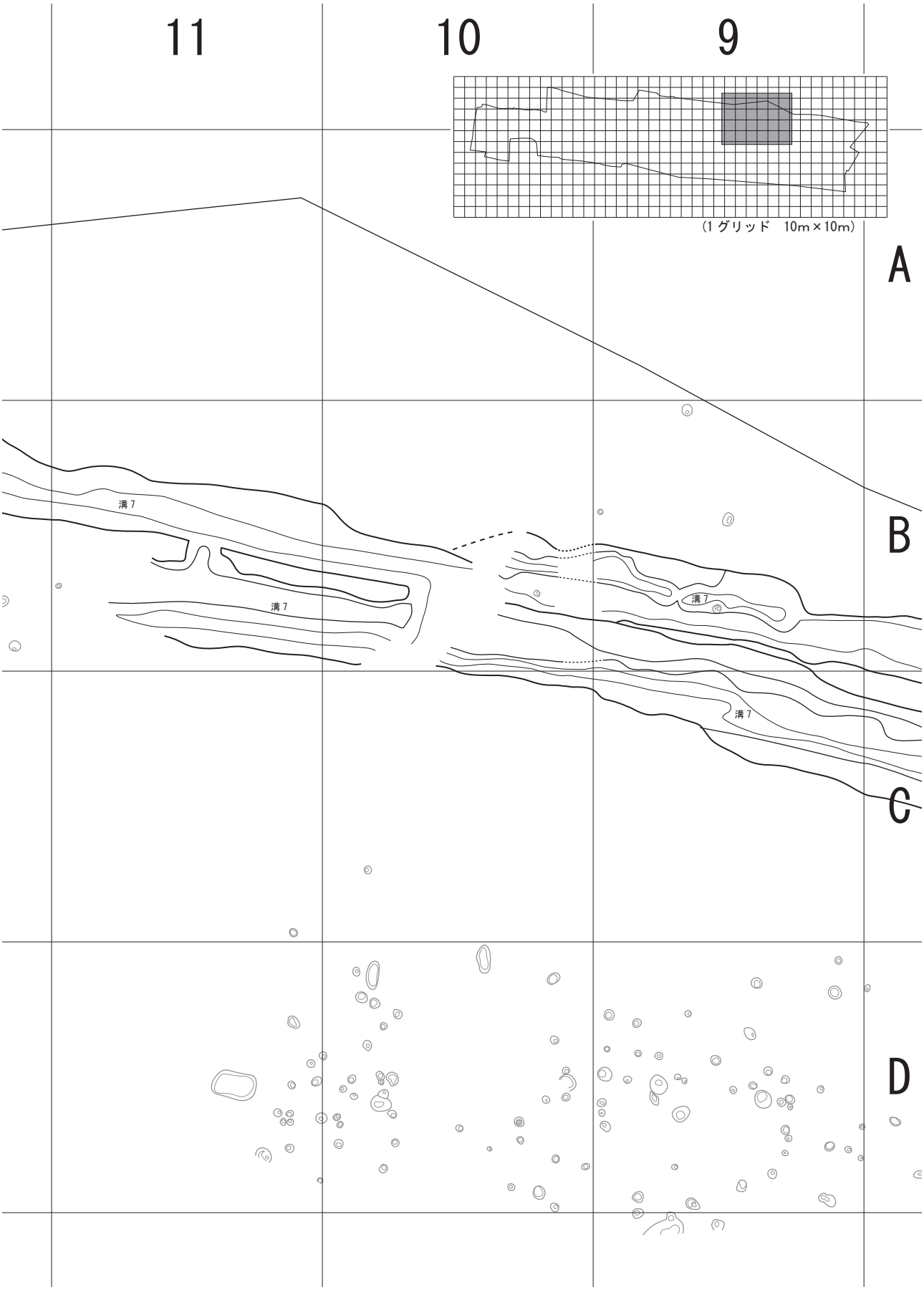
第286図　近世遺構配置図 7



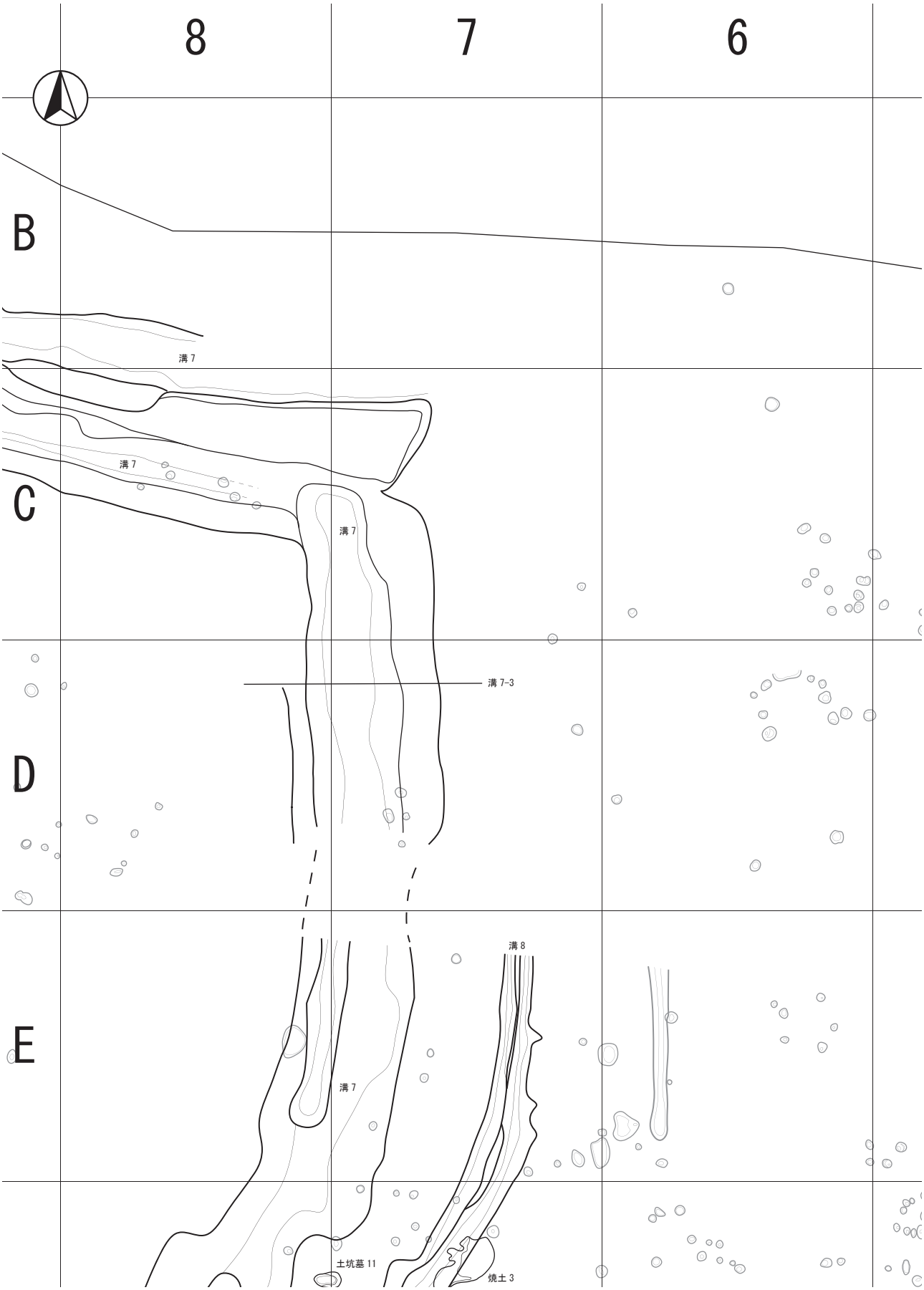
第287図　近世遺構配置図８



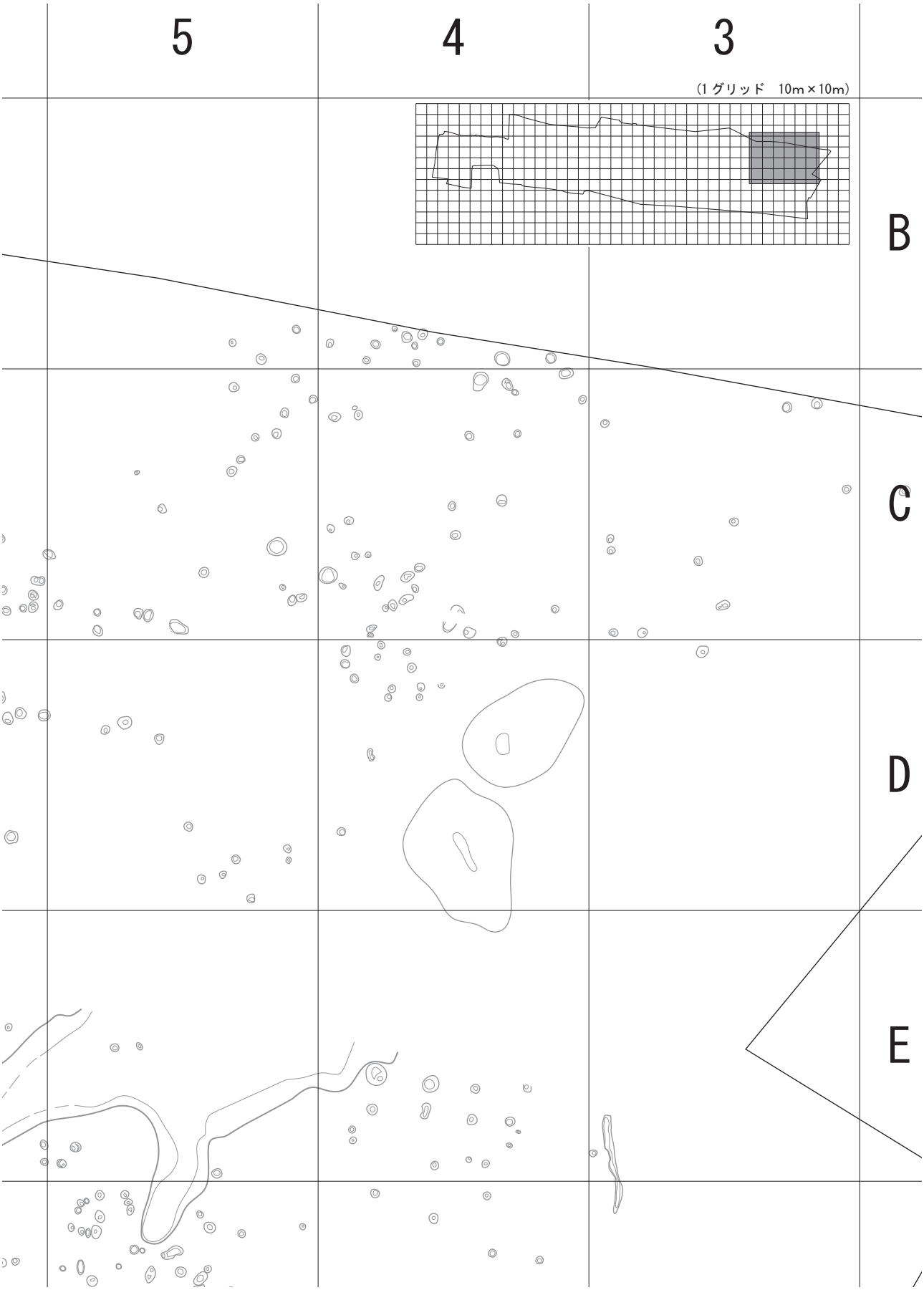
第288図　近世遺構配置図９



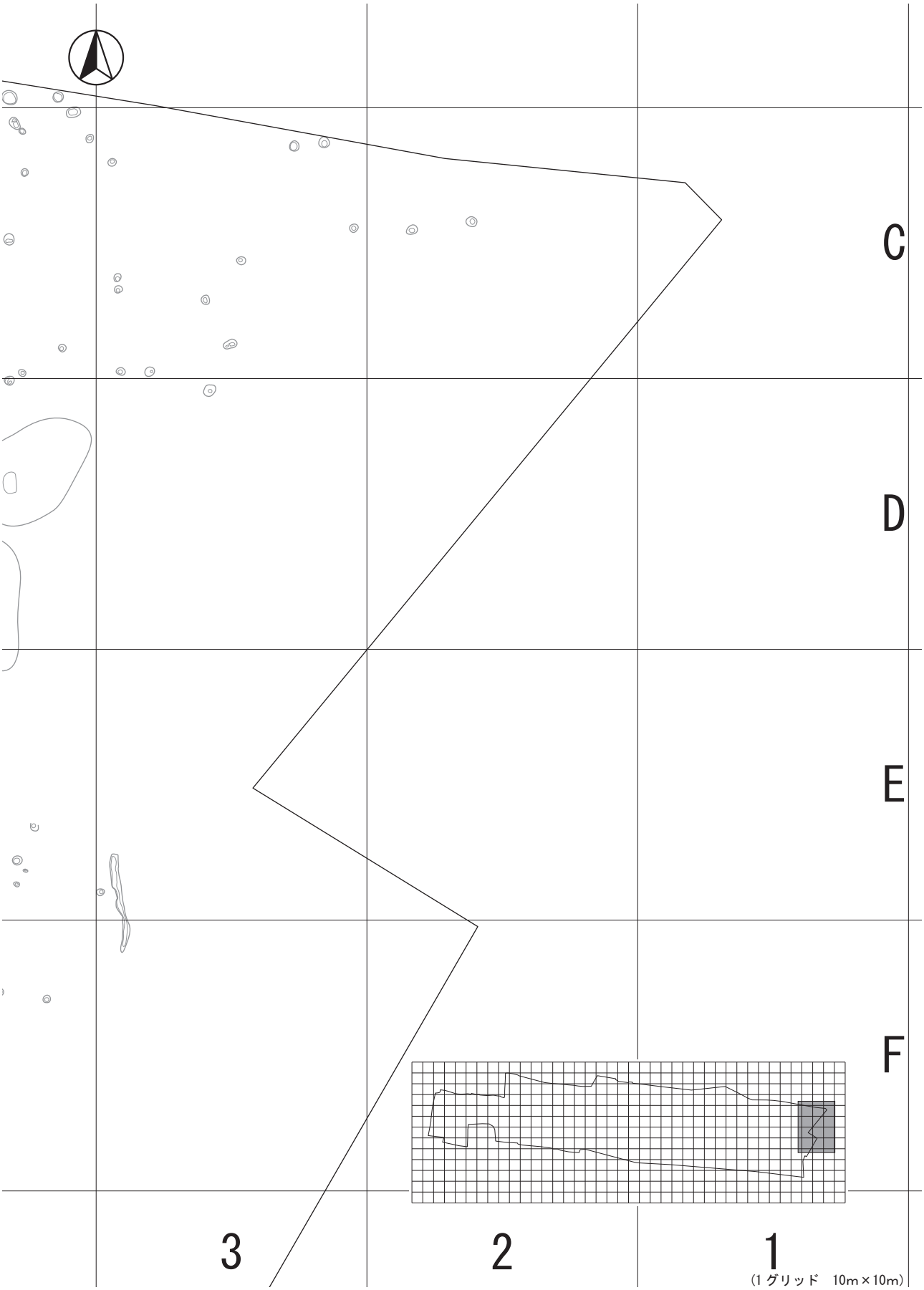
第289図　近世遺構配置図10



第290図　近世遺構配置図11



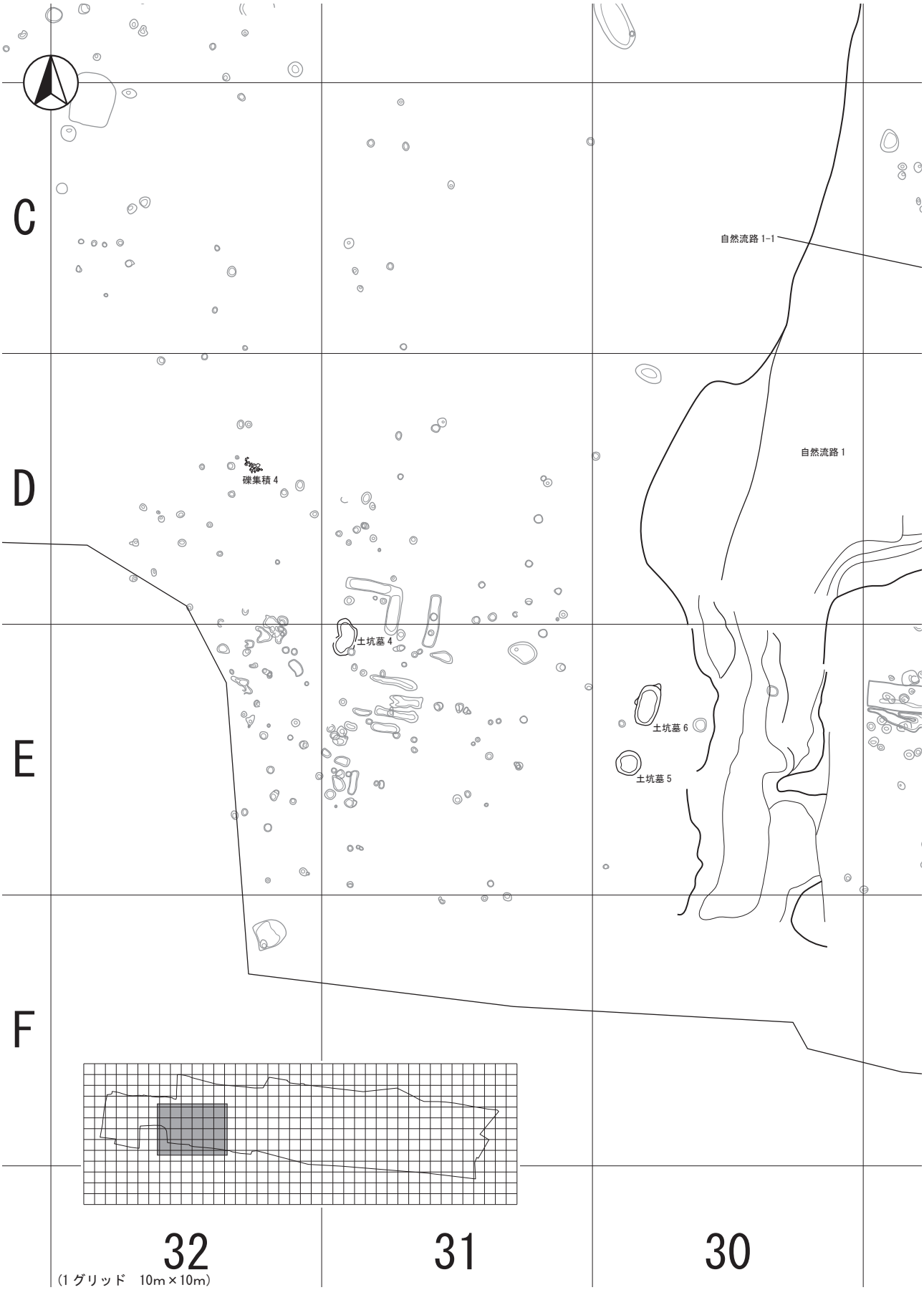
第291図　近世遺構配置図12



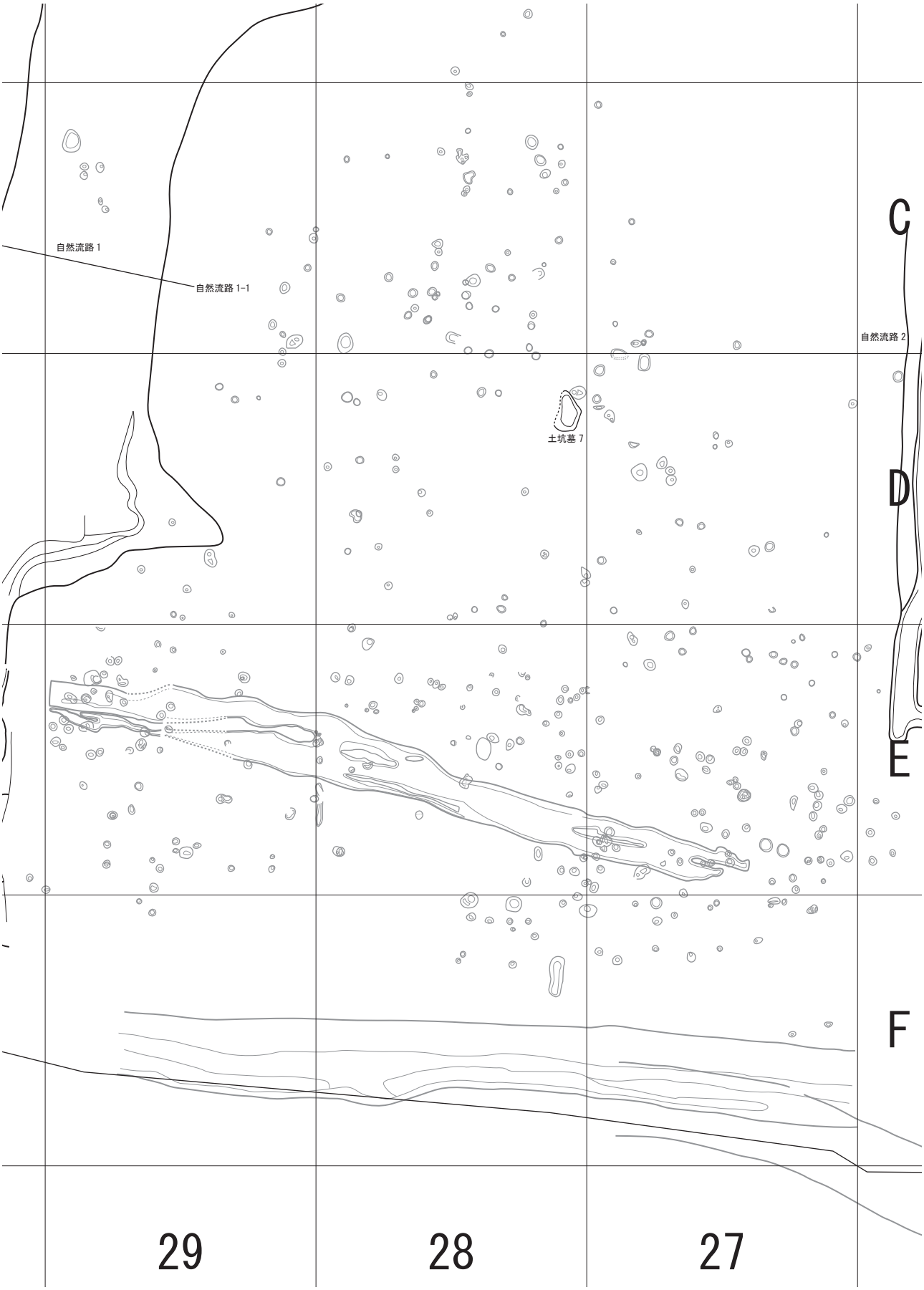
第292図　近世遺構配置図13



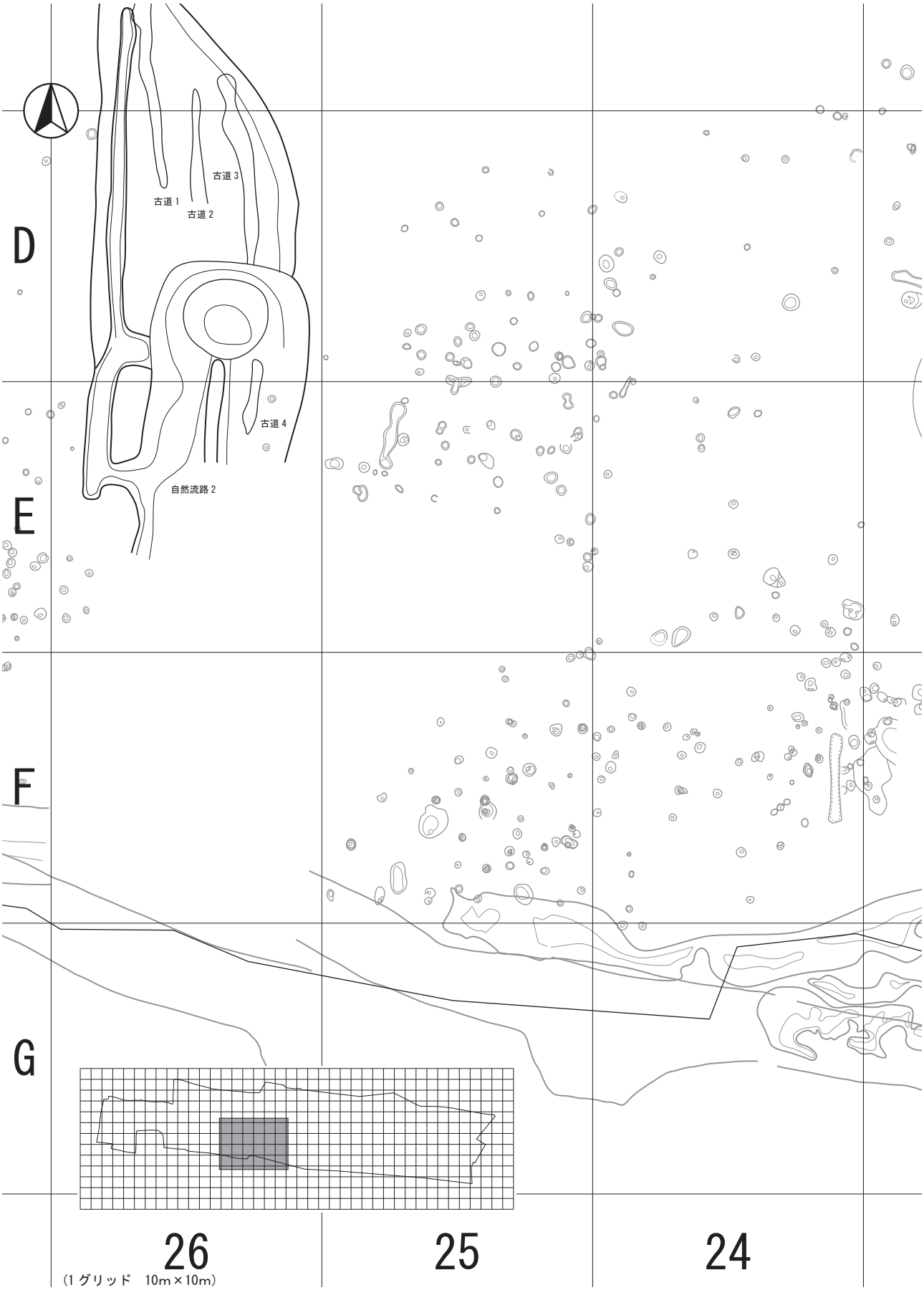
第293図　近世遺構配置図14



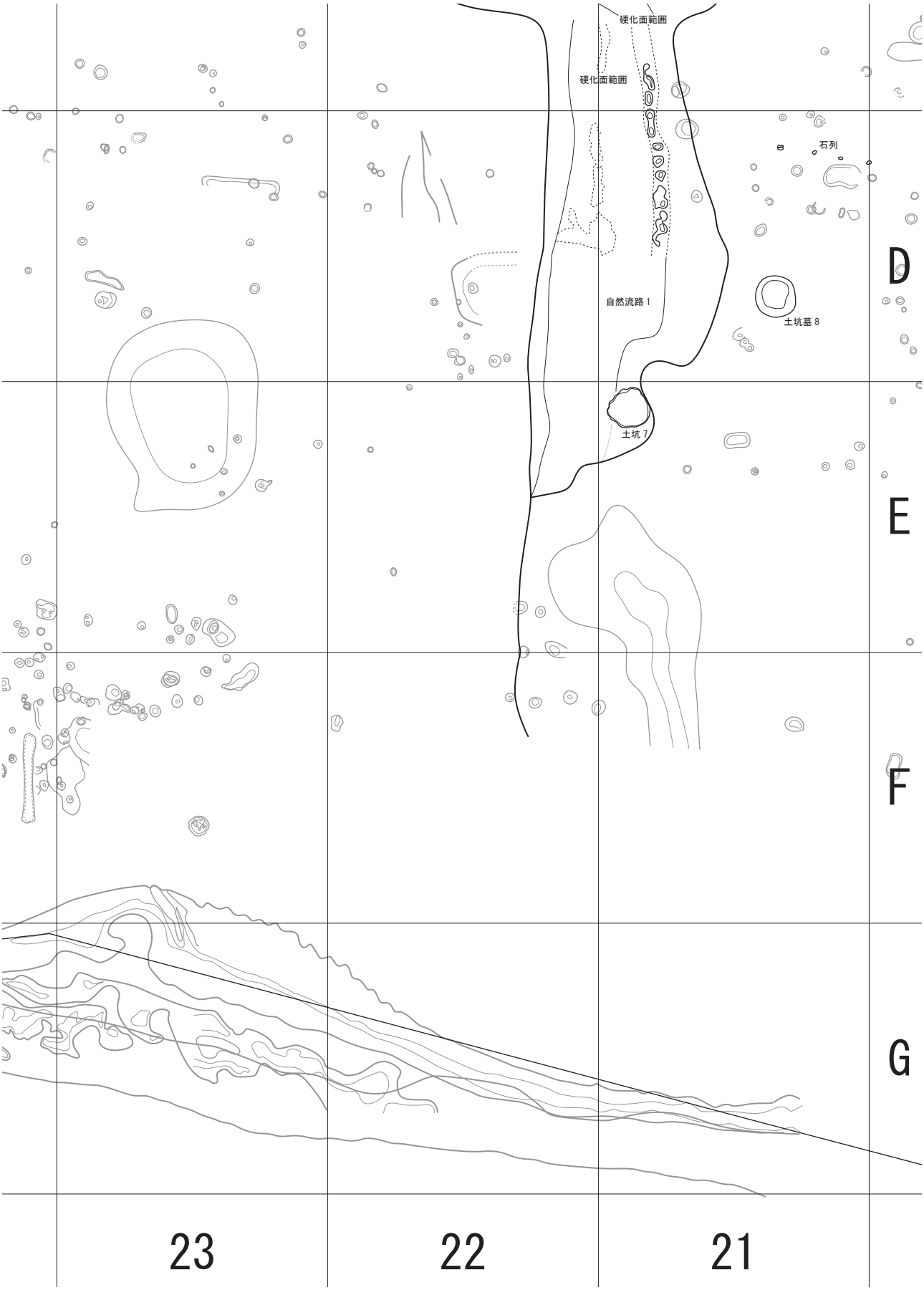
第294図　近世遺構配置図15



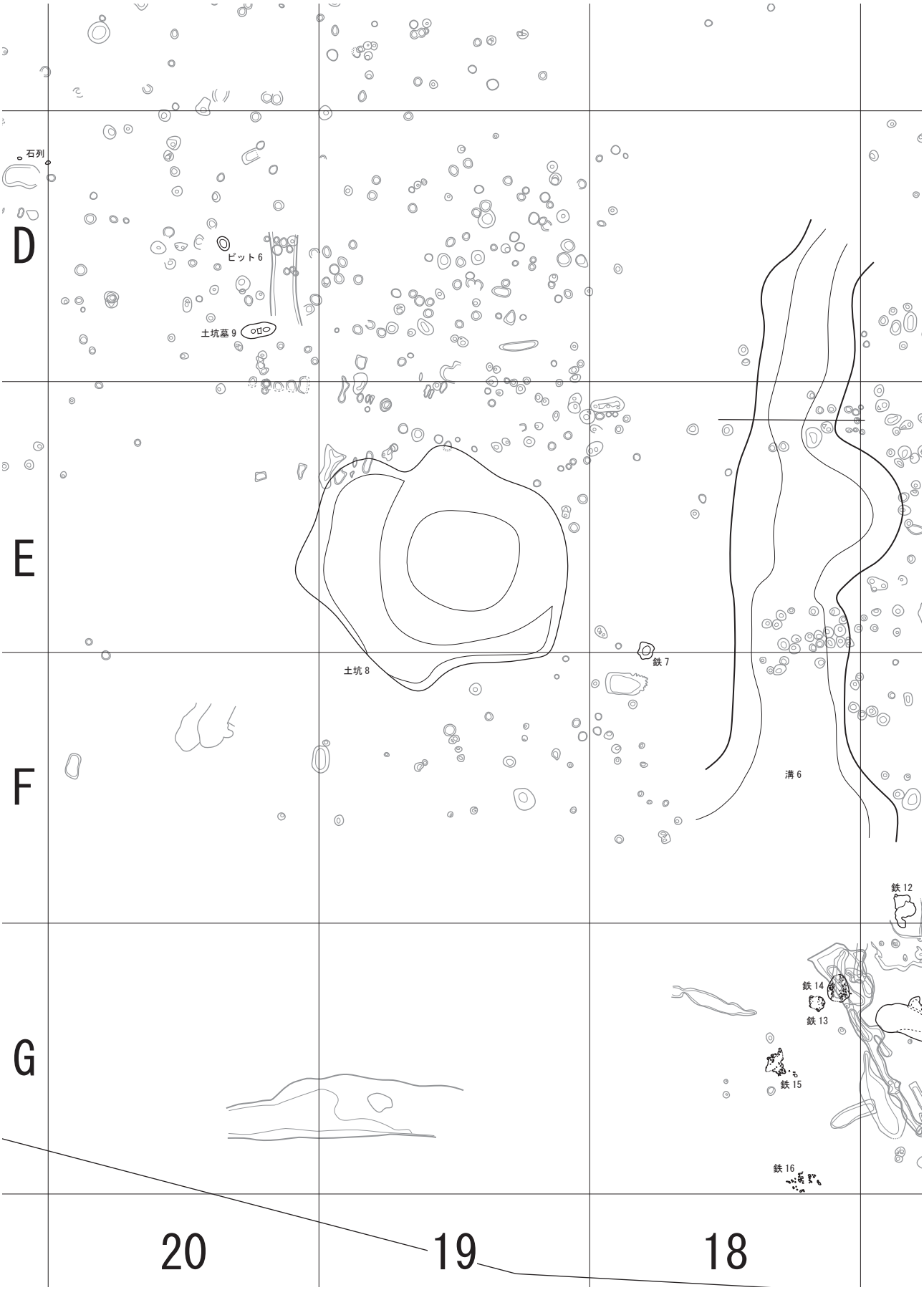
第295図　近世遺構配置図16



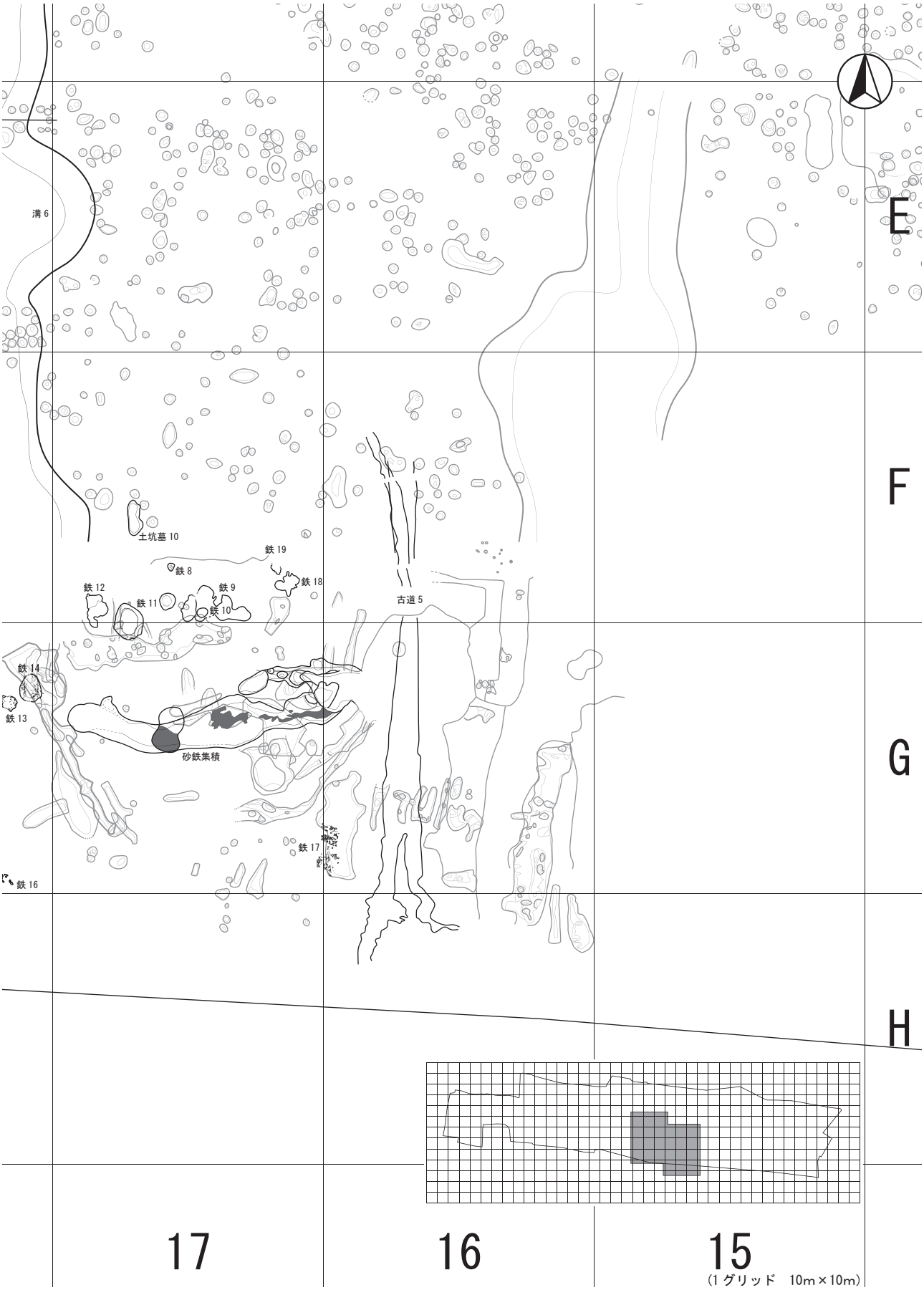
第296図　近世遺構配置図17



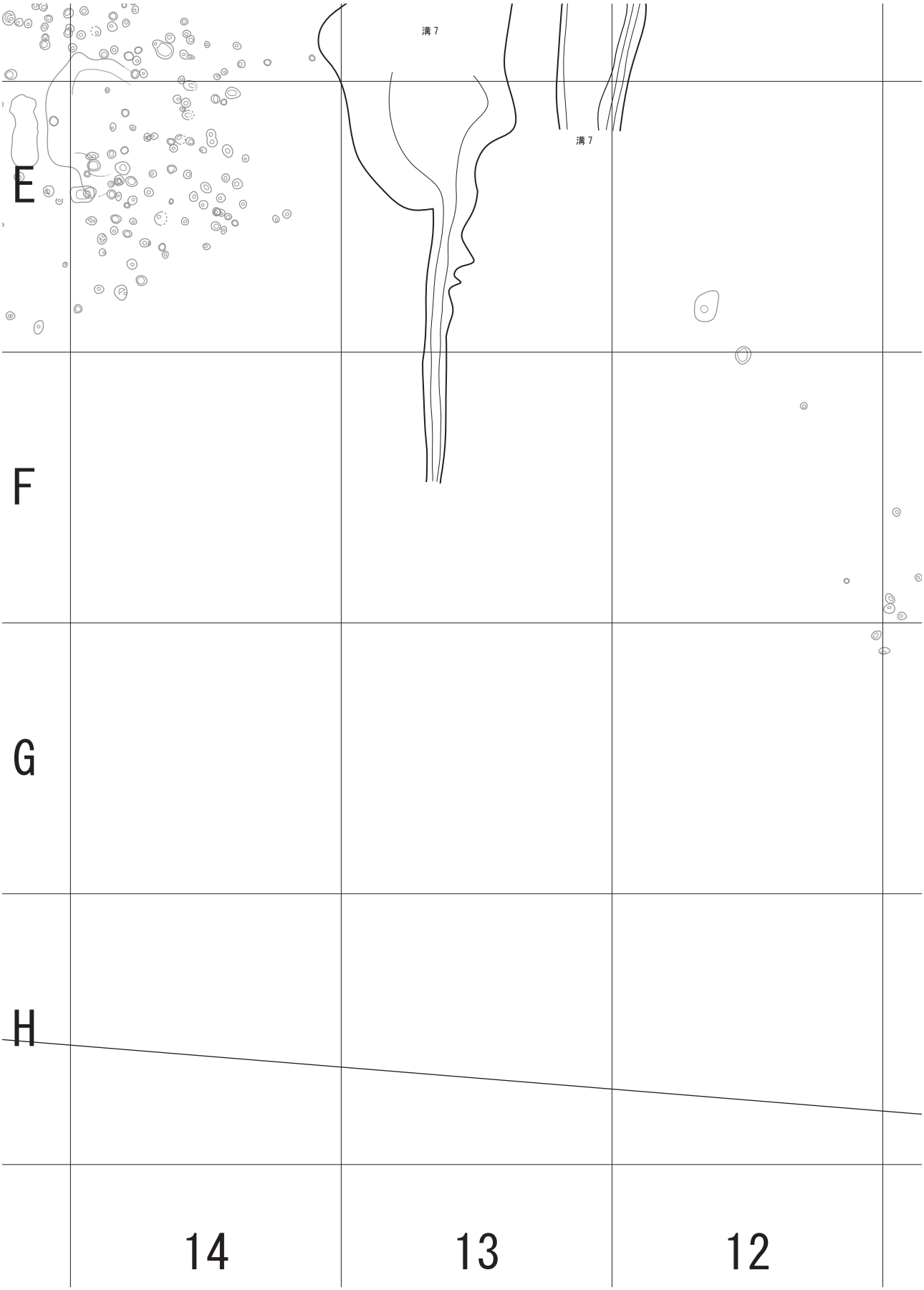
第297図　近世遺構配置図18



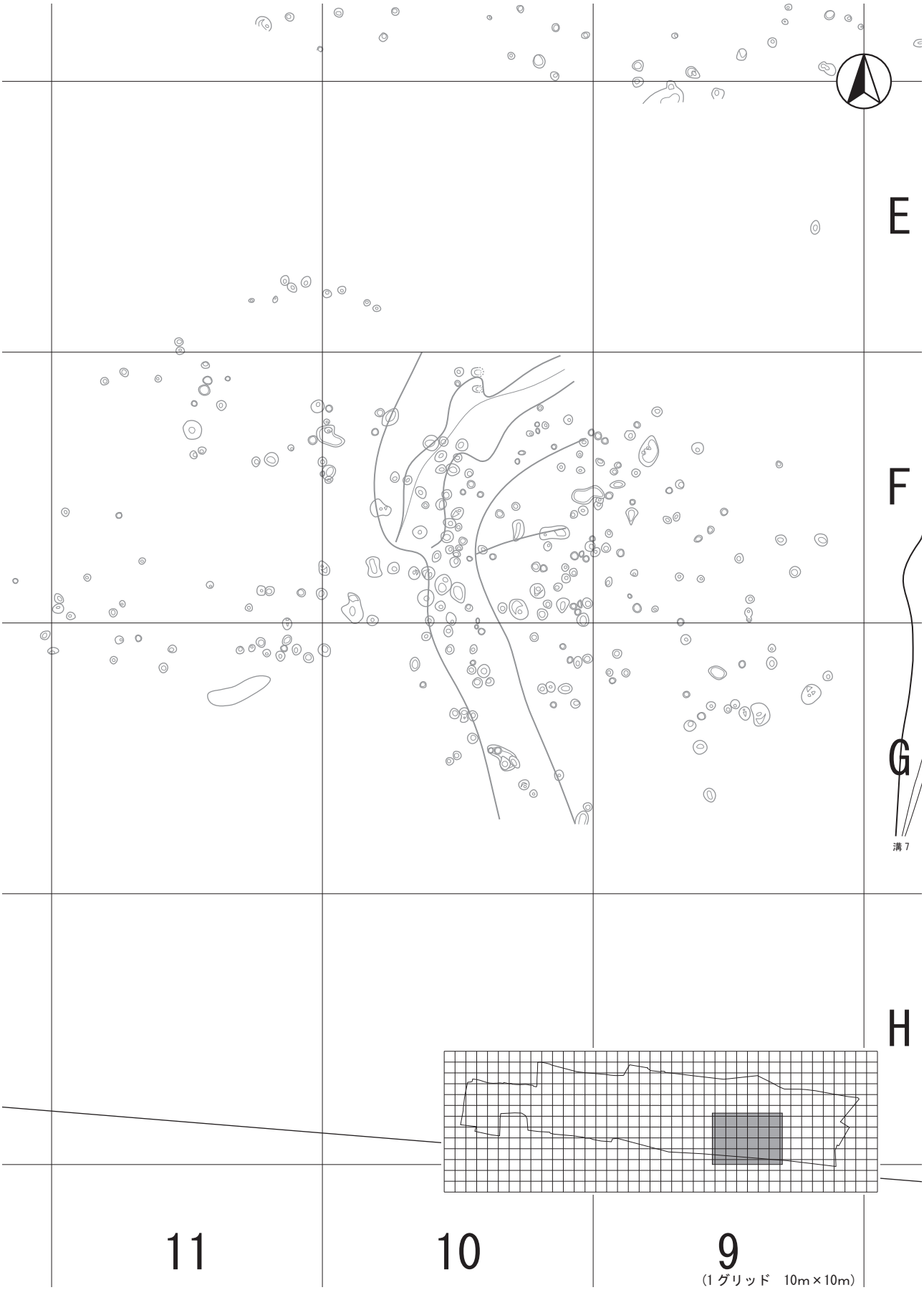
第298図　近世遺構配置図19



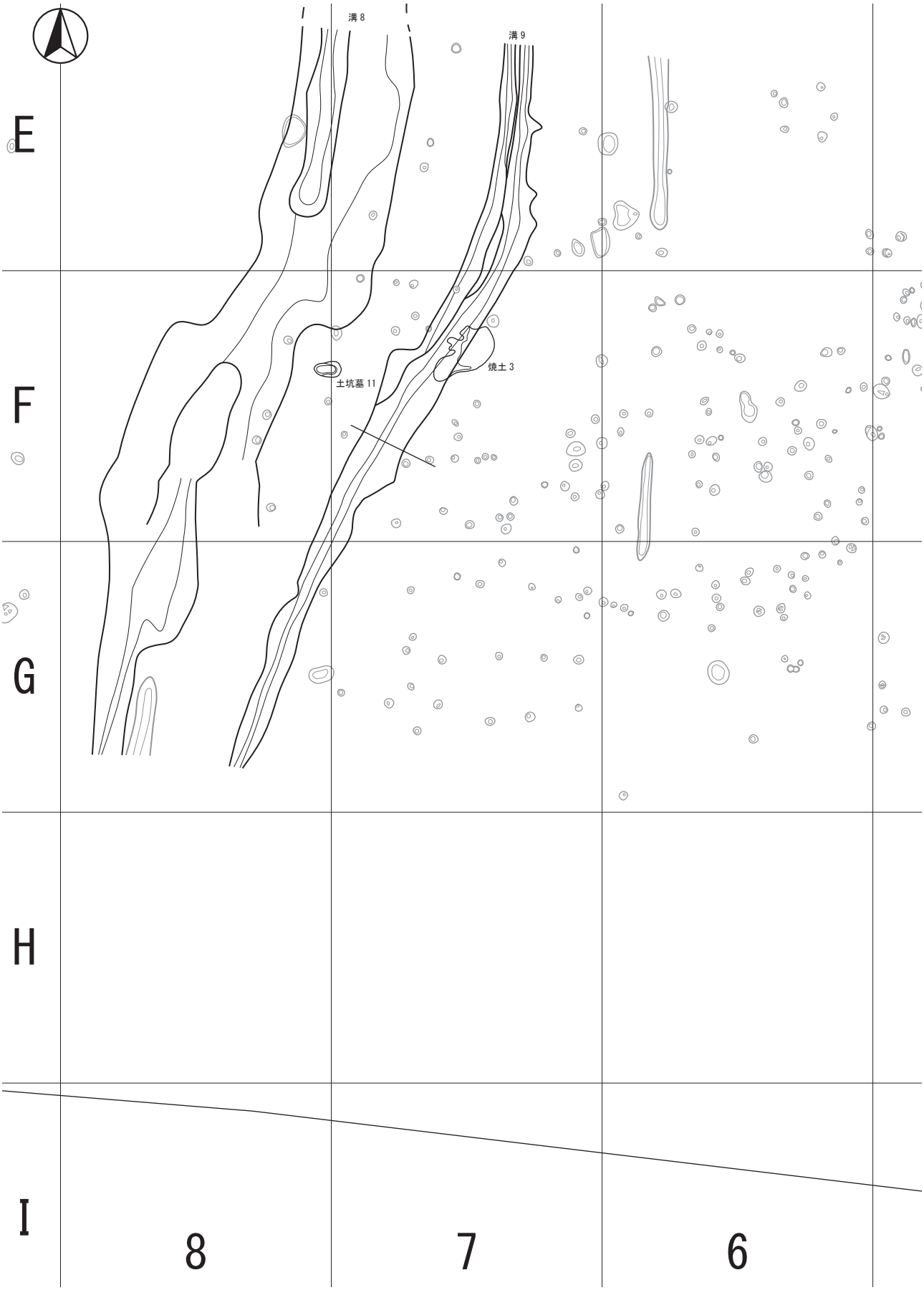
第299図　近世遺構配置図20



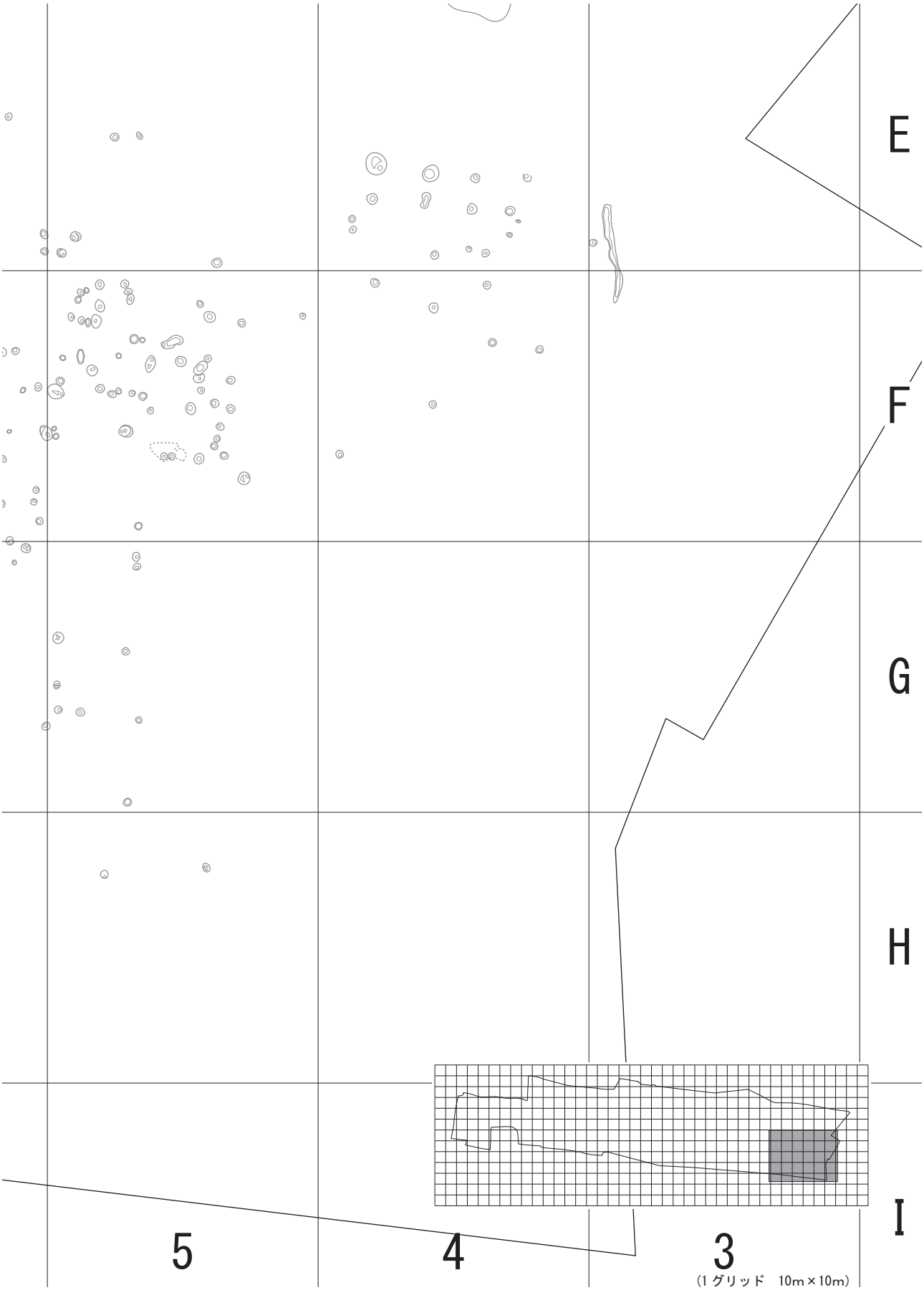
第300図　近世遺構配置図21



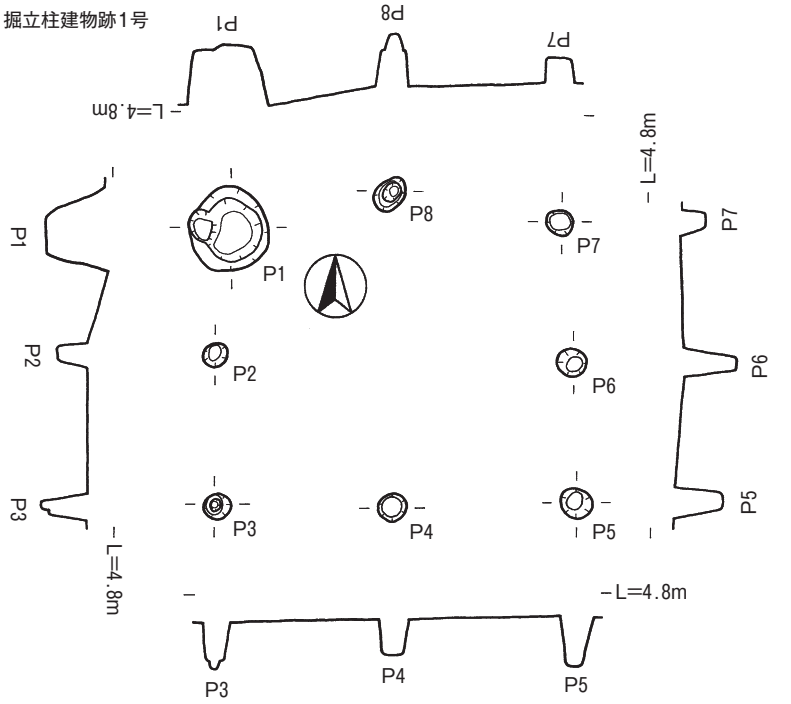
第301図　近世遺構配置図22



第302図　近世遺構配置図23



第303図　近世遺構配置図24

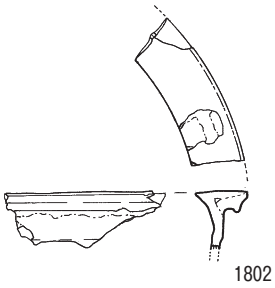


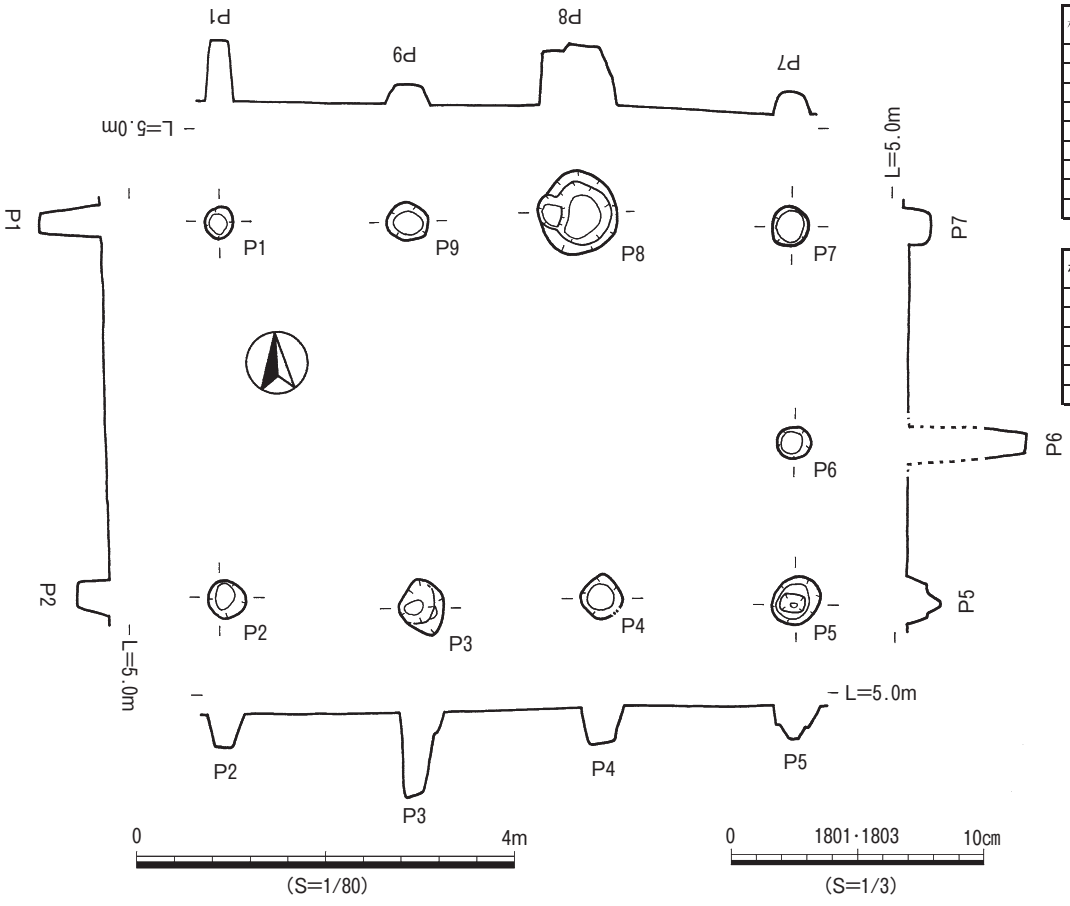
掘立柱建物跡1号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	87	83	66
2	26	24	32
3	28	28	49
4	31	28	38
5	34	32	53
6	32	28	58
7	30	25	27
8	39	31	57

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1–2	1.3	3–4	1.9
2–3	1.6	4–5	1.9
5–6	1.5	7–8	2.0
6–7	1.5	8–1	1.7



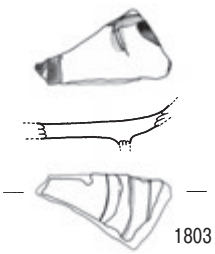




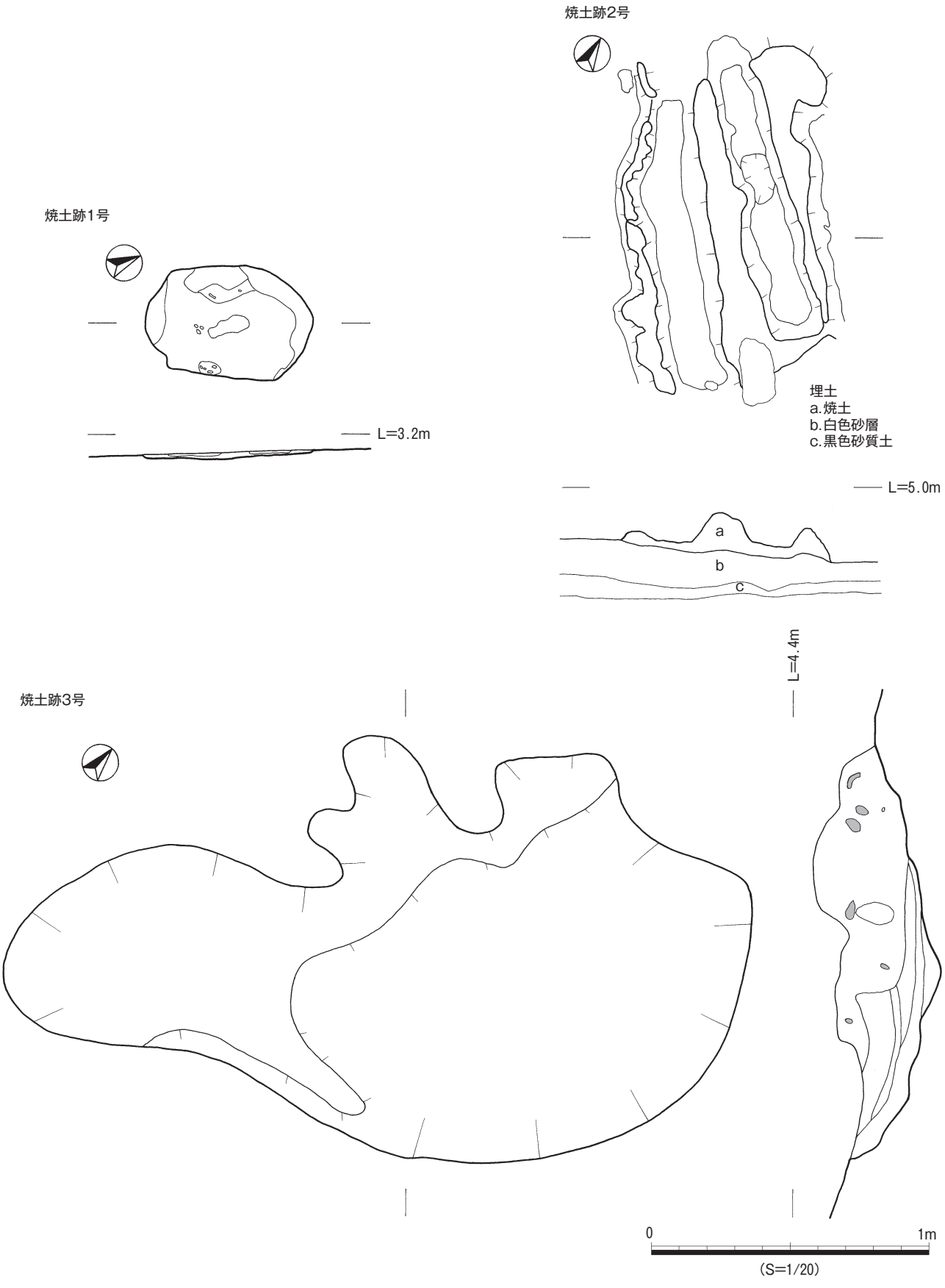
掘立柱建物跡2号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	35	31	68
2	40	38	36
3	61	47	87
4	48	45	41
5	55	46	25
6	35	33	46
7	42	39	26
8	87	83	66
9	45	40	20

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1–2	3.9	2–3	2.0
5–6	1.6	3–4	2.0
6–7	2.3	4–5	2.1
		7–8	1.7
		8–9	2.3
		9–1	2.0



第304図　掘立柱建物跡１，２号・出土遺物



第305図　焼土跡１～３号

焼土跡３号（第305図）

F-7区で検出された。平面形は長軸2.7m，短軸1.5mの不定形で，検出面からの深さ36㎝である。埋土中に赤色粘質土の焼土塊を含んでいる。

製鉄関連遺構（第306図～第312図）

製鉄に関係すると思われる炉跡や炭化物集中，鉄滓集中などの遺構を一括した。遺構は調査区西側のC・D-35区，調査区中央のB・C-16～18区，F・G-16～18区で検出された。特にF-17区に密集する傾向がある。

製鉄関連遺構１号（第306図）

C-35区で検出された。溝５号内の鉄滓集中である。長軸1.9m，短軸0.8mの範囲に礫とともに広がっている。溝の深い部分に鉄滓が集中しており，廃棄された状態と推察される。

製鉄関連遺構２号（第306図）

D-35区で検出された。掘り込みと鉄滓集中である。掘り込みはごく浅く６㎝程しかない。埋土は焼成を受けているとは言えないが，若干濁った土で，掘り込みより外側にまで広がり，その範囲は長軸2.6m＋α，短軸２m＋αである。また掘り込みの南西側約１mに鉄滓集中があり，１m×1.5mほどの広がりをもつ。

製鉄関連遺構３号（第307図）

B-18区で検出された炉跡である。平面形は径２mの円形に，長さ0.9m，幅0.6mほどの張り出しがつく，柄鏡状を呈する。検出面から底部まで，約0.3mである。埋土中に焼土や炭化物を多く含み，強い焼成を受けたことが伺える。鉄滓も多く出土している。

製鉄関連遺構４号（第308図）

B-18区で検出された炉跡である。平面形は長軸2.45m，短軸1.6mの不定形を呈する。検出面からの深さは0.2mである。平面形からは長方形と方形の炉の切り合いも想定できるが，埋土断面からは確認できない。埋土には焼土や炭化物を多く含んでおり，焼成の痕跡を残す。さらに遺構中央に大型の椀形滓，炉壁片なども出土した。

製鉄関連遺構５号（第309図）

B・C-18区で検出された炉跡である。平面形は径1.4mの円形を呈する。検出面からの深さは23㎝である。また円形の掘り込みの中央付近に深さ７㎝ほどの不定形をした凹みをもつ。埋土には焼土塊，炭化物などの焼成の痕跡が残り，鞴の羽口も出土している。

製鉄関連遺構６号（第309図）

B-16区で検出された。平面形ははっきりしないが，40㎝四方の広がりをもつ，炭化物集中である。断面からもわかるように，本来，掘り込みを有していたと考えられるが，削平のためその規模はわからない。検出面からの深さは４㎝ほどである。近辺に鉄滓も出土している。

製鉄関連遺構７号（第309図）

E・F-18区で検出された炭化物集中である。径0.6m，深さ14㎝ほどの掘り込みがあり，炭化物は掘り込みの外側まで広がっていたものと推察できる。埋土中からは，鉄滓片が多数出土した。また遺構周辺から，多数の鉄滓が出土した。

製鉄関連遺構８号（第309図）

F-17区で検出した炉跡である。平面形は径0.3mほどの略円形を呈し，上面は削平を受け，検出面からの深さはわずかに４㎝ほどの凹みしかない。凹み内からは，椀形滓，炭化物，鞴の羽口が出土した。

製鉄関連遺構９号（第310図）

F-17区で検出した炉跡である。炉跡の平面形は径約0.5mの円形を呈し，検出面からの深さ11㎝である。埋土は黒色灰が主体で鉄滓片が混じる。炉の東側35㎝には茶褐色砂に炭化物，鉄滓を含む埋土の深さ７㎝ほどの凹みがあり，さらに東側へ炭化物が混じる茶褐色砂が２mほど広がる。遺物では鞴の羽口片が出土している。

製鉄関連遺構10号（第310図）

F-17区で検出された炉跡である。平面形は径0.4mほどの円形を呈する。検出面からの深さ17㎝で炭化物を多量に含む暗褐色砂を埋土とする。検出面が９号の0.3mほど上面にあり，若干の時間差を認める。

製鉄関連遺構11号（第311図）

F・G-17区で検出された炉跡である。平面形は長軸1.3m，短軸1.1mの楕円形を呈し，検出面からの深さ16㎝である。黒色炭化物が主体となる埋土で，埋土内から鉄滓や検出面で鍛造剥片が数多く出土した。

製鉄関連遺構12号（第311図）

F・G-17区で検出された炉跡である。平面形は炭化物の広がりなどで不定形を呈しているが，掘り込みは径0.5m程度の円形を呈するのではないかと考えられる。掘り込み上面は炭化物混ざりの埋土が占め，掘り込みから，やや南にずれるように炭化物集中がみられる。掘り込み下部の埋土は焼成により，赤褐色に変色している。

製鉄関連遺構13号（第311図）

G-18区で検出された炉跡である。平面形は長軸0.6m，短軸0.5mの略方形を呈し，検出面からの深さ15㎝である。埋土はやや濁りの強い砂質土で，上面に炭化物の集中がみられる。鉄滓片も若干混じる。

製鉄関連遺構14号（第311図）

G-18区で検出された焼土跡である。平面形は長軸１m，短軸0.8mの楕円形を呈する。流動滓や鉄塊，炉壁片などが出土する。

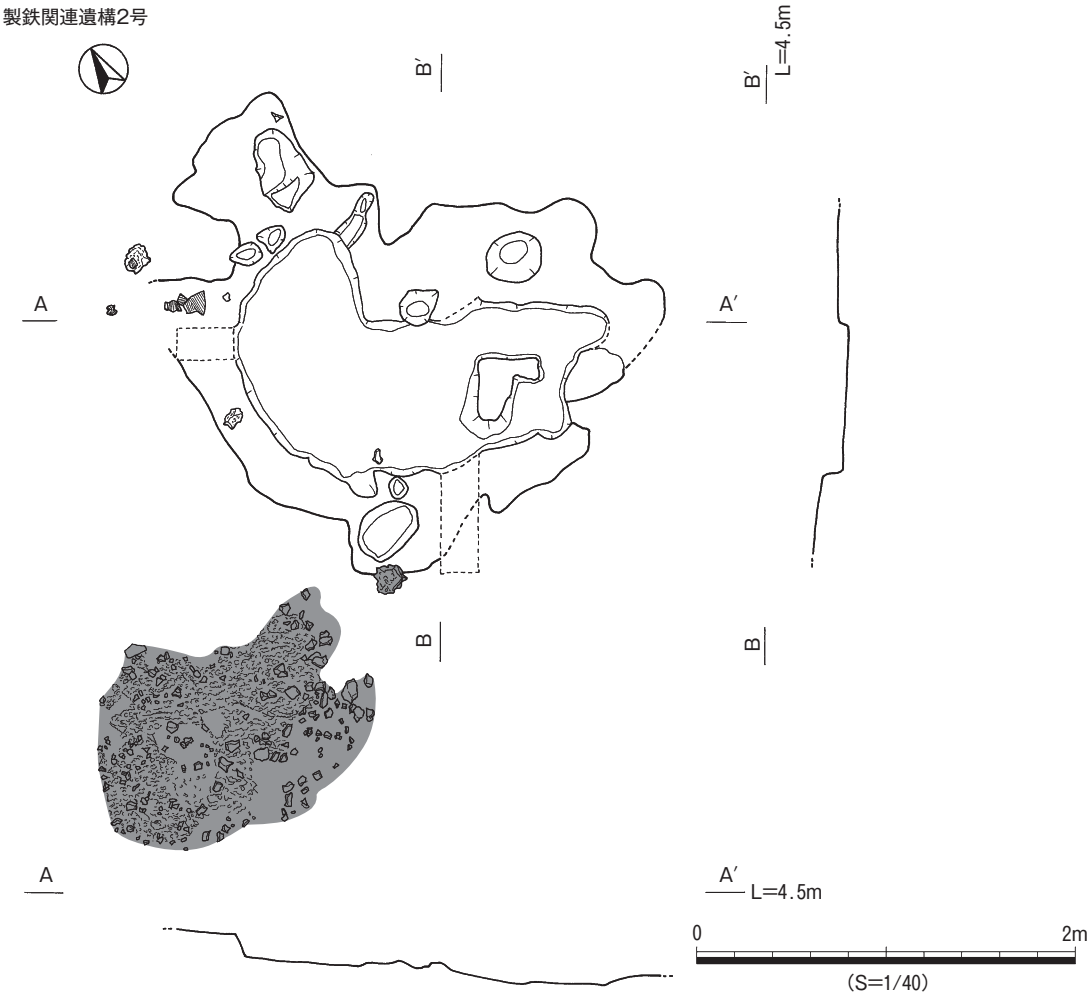
製鉄関連遺構15号（第311図）

G-18区で検出された焼土跡である。平面形は長軸１m，短軸0.8mほどで略三角形状に広がる。焼土内からは，炉壁片が多く出土し，流動滓，鉄塊も若干みられた。

製鉄関連遺構1号

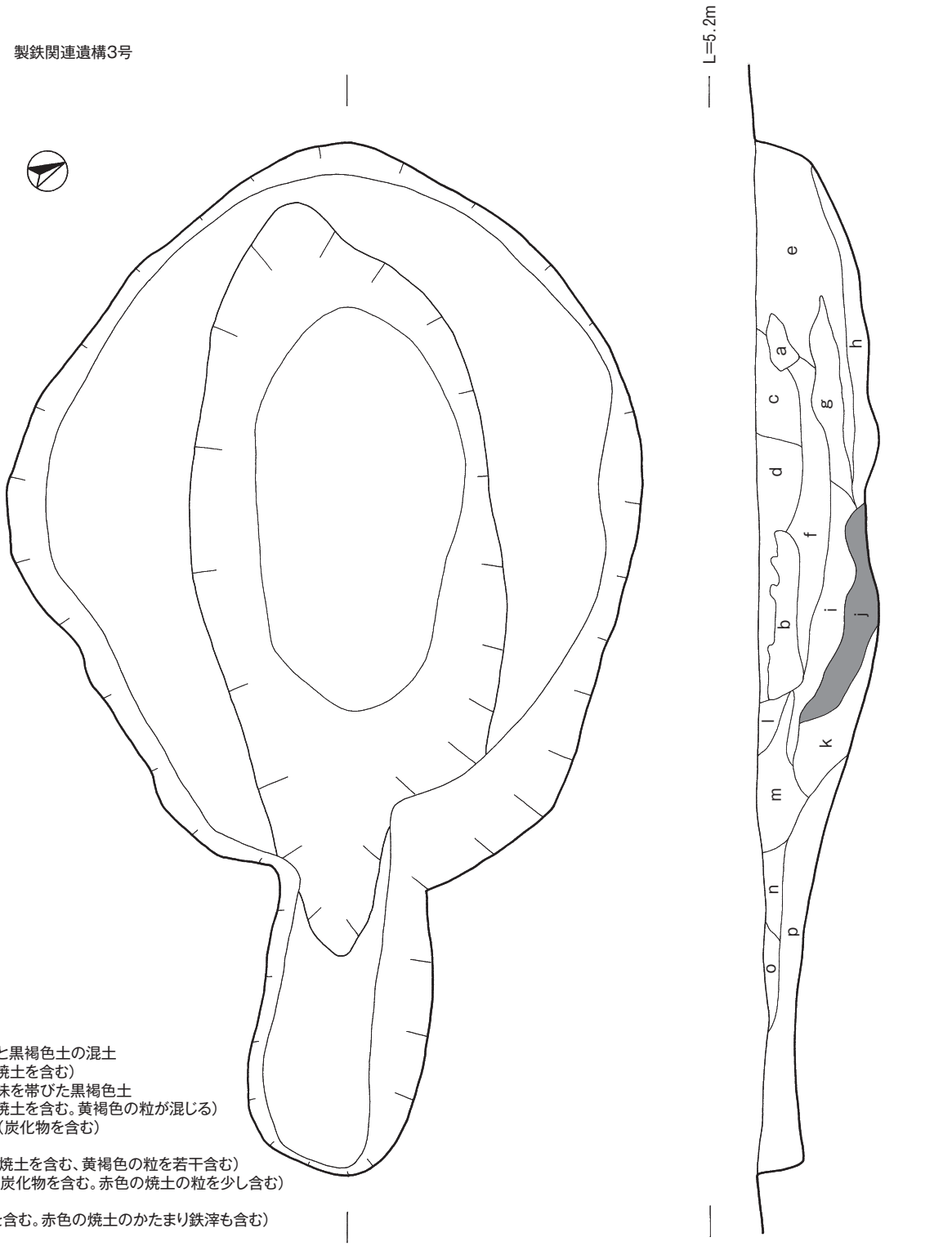


製鉄関連遺構2号



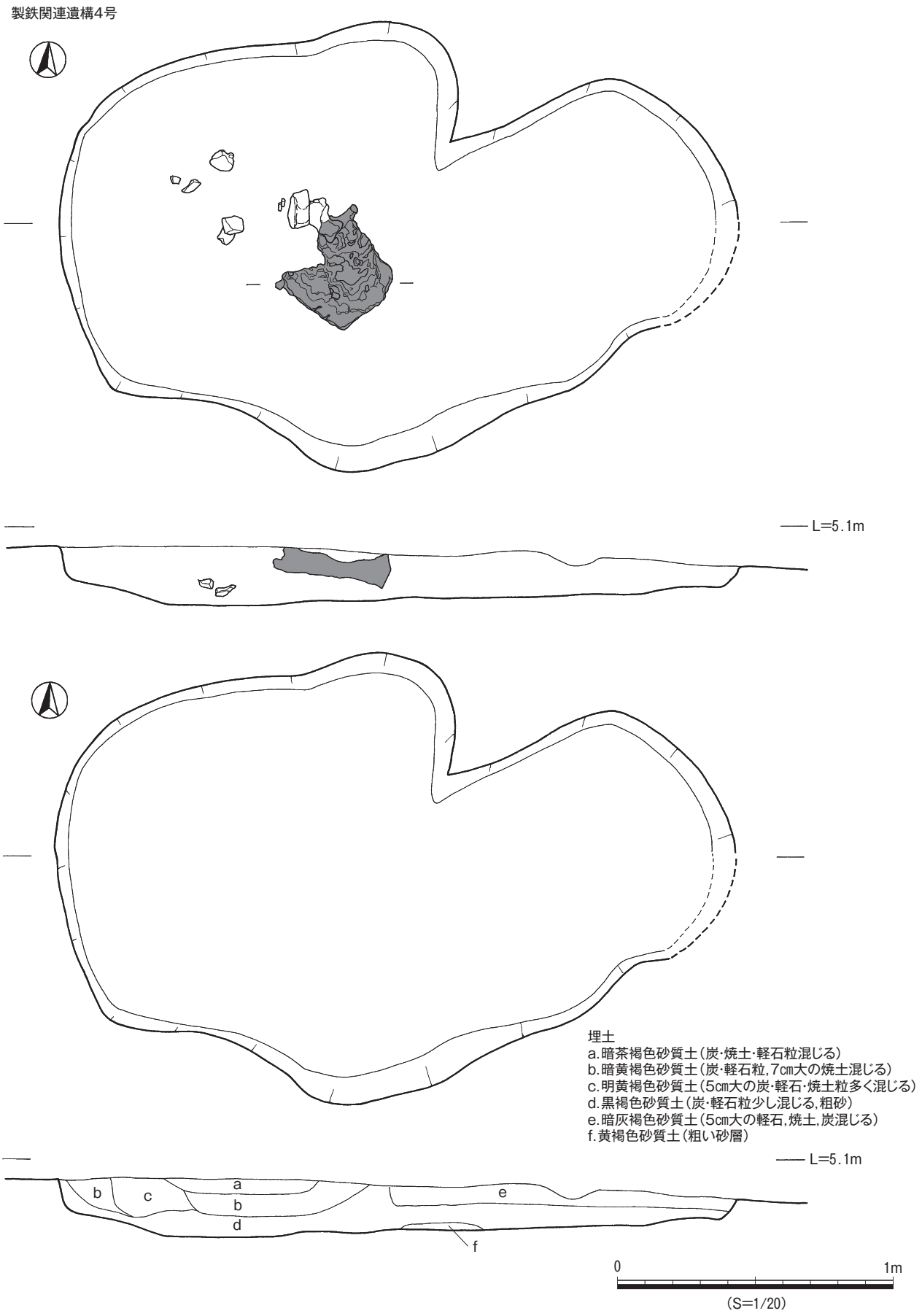
第306図　製鉄関連遺構１，２号

製鉄関連遺構3号

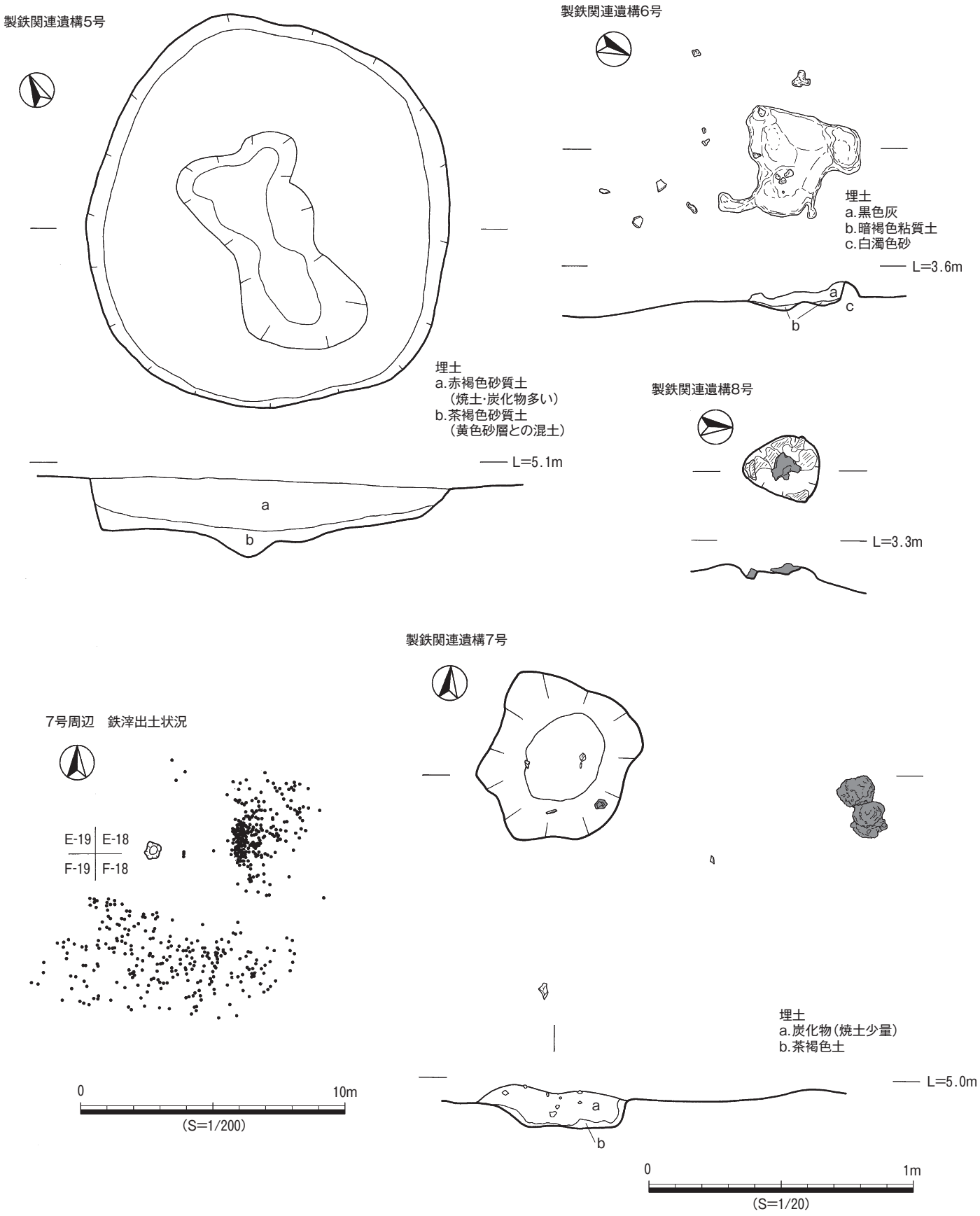


埋土
a.黄褐色土
b.黄褐色土と黒褐色土の混土
（炭化物･焼土を含む）
c.やや黄色味を帯びた黒褐色土
（炭化物･焼土を含む。黄褐色の粒が混じる）
d.黒褐色土（炭化物を含む）
e.黒褐色土
（炭化物、焼土を含む、黄褐色の粒を若干含む）
f.黒褐色土（炭化物を含む。赤色の焼土の粒を少し含む）
g.暗褐色土
（炭化物を含む。赤色の焼土のかたまり鉄滓も含む）
h.黒褐色土
（炭化物、焼土を含む。灰を若干含む。かたくしまりがある）
i.黄褐色の焼土（炭化物･焼土･鉄滓を含む）
j.黒茶色土（鉄滓を多量に含む）
k.灰（礫と鉄滓を含む）
l.黄褐色の焼土（炭化物･赤色の焼土の粒を若干含む）
m.桃色から赤色化した焼土（炭化物を含む）
n.灰（礫を含む）
o.桃色焼土
p.黒褐色砂質土（焼土の粒が若干混じる）

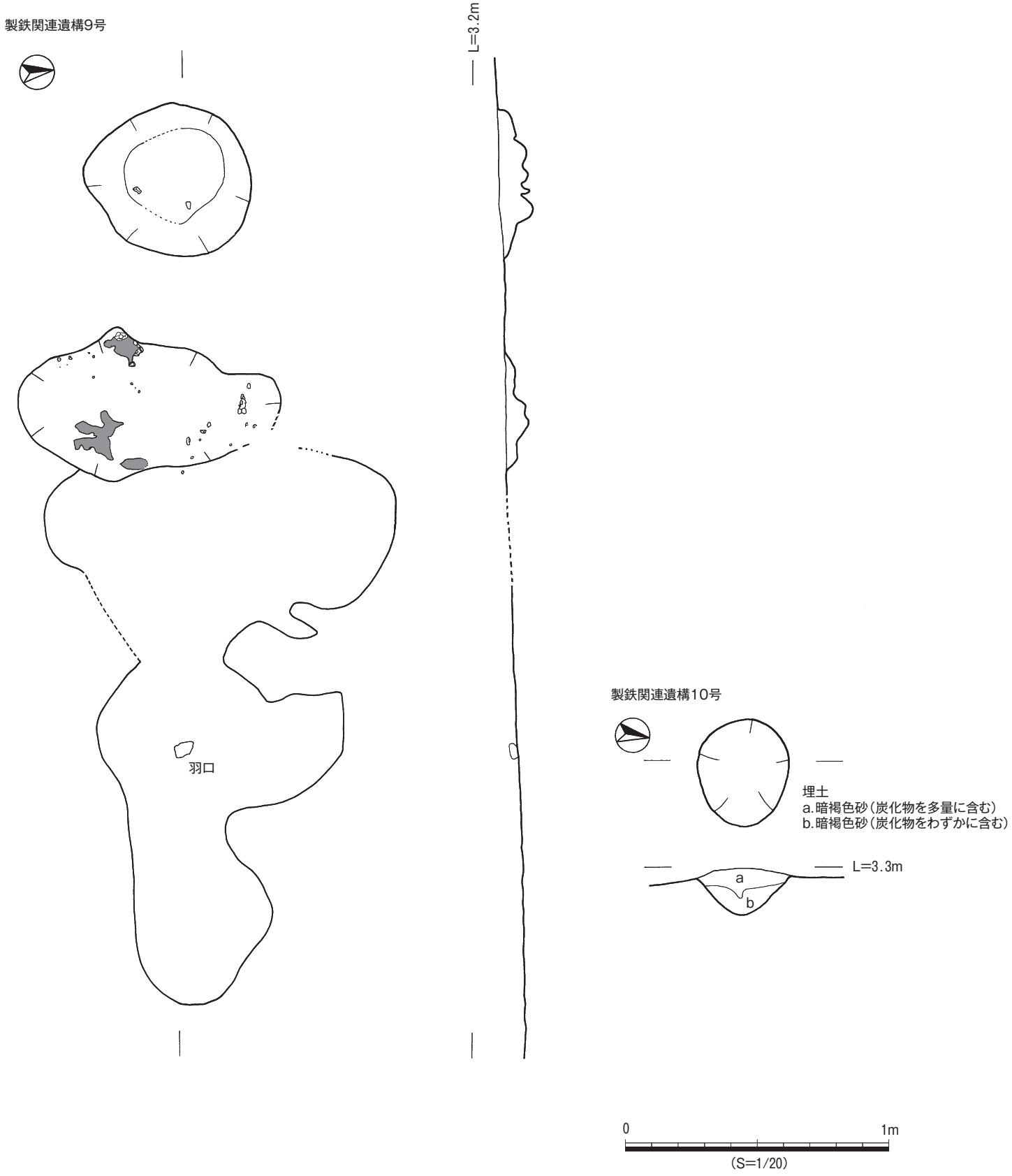
第307図　製鉄関連遺構３号



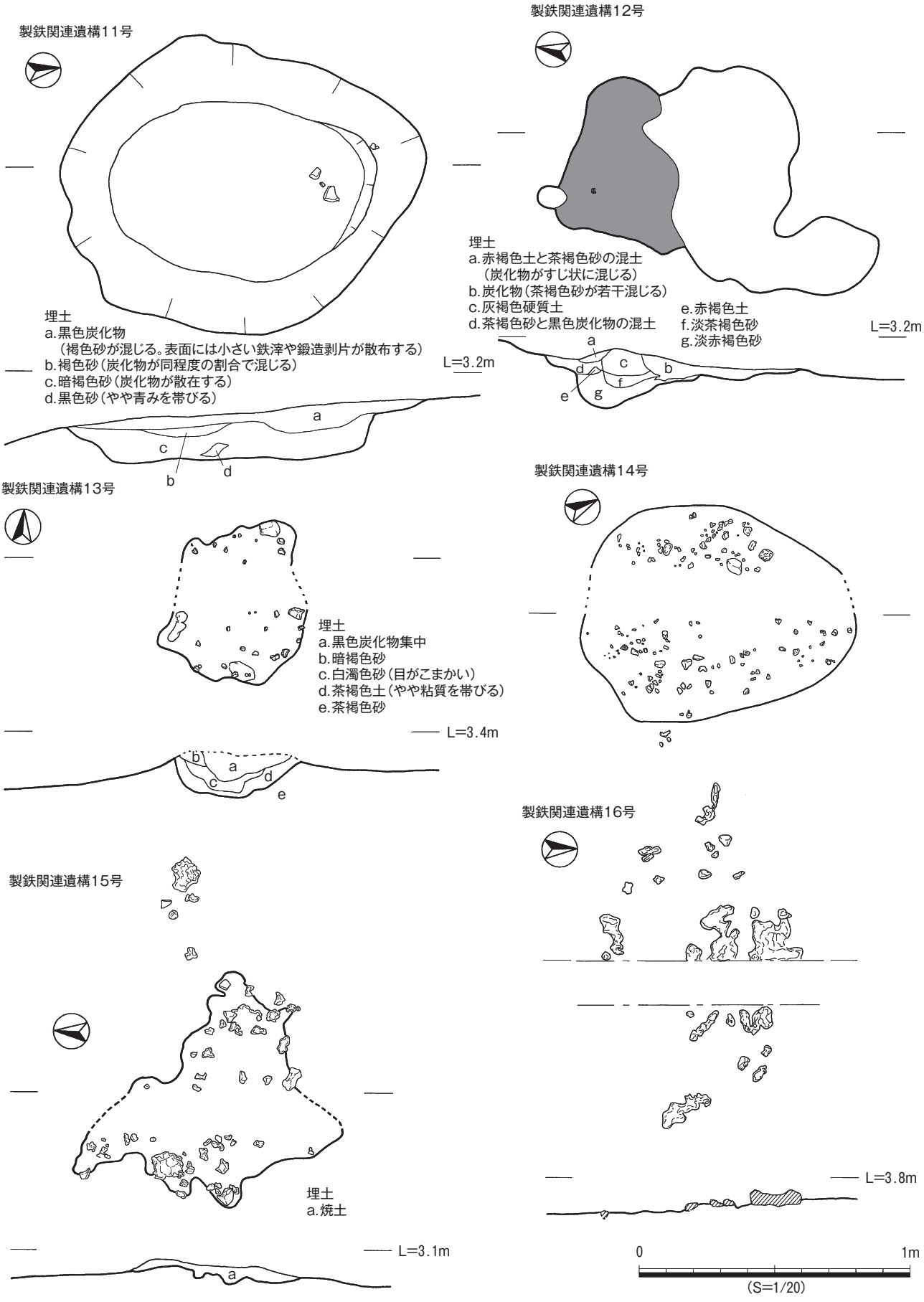
第308図　製鉄関連遺構４号



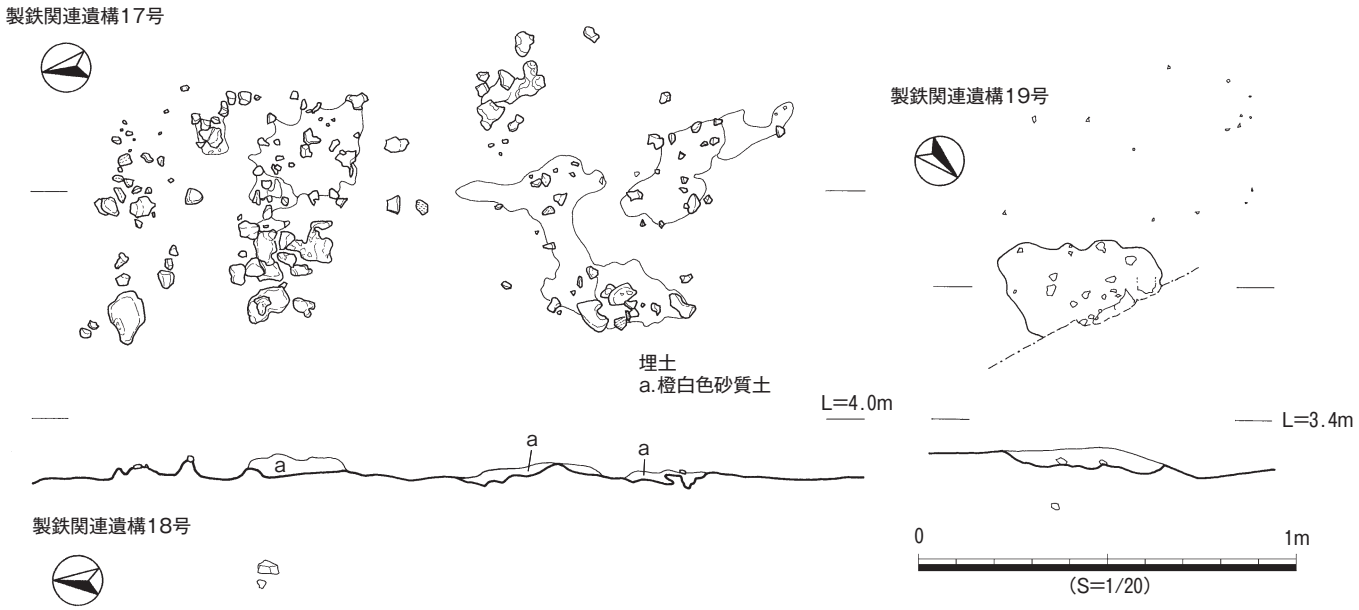
第309図　製鉄関連遺構５～８号・７号周辺鉄滓出土状況



第310図　製鉄関連遺構９，10号



第311図　製鉄関連遺構11～16号



第312図　製鉄関連遺構17～19号

製鉄関連遺構16号（第311図）

G-18区で検出された焼土跡である。砕けた焼土塊が長軸で，1.3m，短軸で0.8mの範囲で散らばっている。

製鉄関連遺構17号（第312図）

G-16・17区で検出された焼土跡である。橙白色の焼土ブロックと炭化物が長軸1.9m，短軸0.9mの範囲で散らばっている。

製鉄関連遺構18号（第312図）

F-17区で検出された。焼土跡である。長軸0.8m，短軸0.7mの不定形に炭化物が多量に混ざる茶褐色砂が広がる。ほかに鉄滓，鍛造剥片なども多量に出土し，排滓場と推察される。

製鉄関連遺構19号（第312図）

F-17区で検出された焼土跡である。一部をトレンチにより削平されているが，長軸0.4m，短軸0.2mの，長方形を呈すると思われる。焼土跡には炭化物が多くみられる。

土坑（第313図・第314図）

土坑は調査区内において多数検出されたが，ここでは遺構内から掲載に耐えうる遺物が出土したもの，特徴的な土坑８基のみについて報告する。その他については検出状況平面図に平面のみ記載する。

土坑１号（第313図）

B-37区で検出された。平面形は径0.6mで円形を呈し，検出面からの深さ0.4mである。埋土に焼土，炭化物を多く含んでいる。銭貨が１点出土したが，小破片のため種別は不明である。

土坑２号（第313図）

B-34区で検出された。平面形は長軸1.2m，短軸１mのほぼ円形を呈し，検出面からの深さ47㎝である。近世の遺物が出土した。

出土遺物（第313図）

遺物の出土数は４点である。内訳は肥前系磁器が３点（染付碗１，白磁２），薩摩焼１点（苗代川系）で，そのうち１点を図化することができた。

1804は肥前系白磁の小坏である。体部と高台が一直線につながる桶形の形状を呈する。

土坑３号（第313図）

B-34区で検出された。平面形は長軸1.9m，短軸0.6mの不定形を呈し，検出面からの深さ25㎝である。埋土に焼土，炭化物を多く含んでいる。

土坑４号（第313図）

C・D-34区で検出された。平面形は長軸2.1m，短軸1.6mの長方形を呈し，検出面からの深さ44㎝である。土坑埋土内には軽石，礫，土器片，釘などがみられた。また床面には，一部炭化物の広がりがみられる。

土坑５号（第313図）

B-33区の調査区境で検出された。平面形は長軸1.7m＋α，短軸1.5m＋αで，楕円形から円形の一部と思われる。検出面からの深さ44㎝である。埋土に焼土，炭化物が多く，軽石も若干混ざり，近世の遺物を出土した。

出土遺物（第313図）

遺物の出土数は11点である。内訳は，肥前系の磁器が６点（染付碗１・白磁小坏１・白磁徳利１・その他３），薩摩焼が６点（初期の龍門司系の碗１，苗代川系の土瓶蓋１，植木鉢１，陶器胴部３）で，そのうち１点を図化することができた。

1805は肥前系白磁の小坏で，体部と高台が一直線につながる桶形の形状を呈する。

土坑６号（第314図）

A'-30区で検出された。平面形は径0.9mの円形で，検出面からの深さ0.1mである。床面から壁面にかけて厚さ５㎝程度で粘土が貼り付けられている。

土坑７号（第314図）

E-21区で検出された。平面形は長軸1.9m，短軸1.5mの略円形を呈する。検出面からの深さ最大で34㎝である。床面から壁面にかけて粘土を貼り付けている。

土坑８号（第314図）

E・F-19・20区で検出された巨大な土坑である。平面形は長軸10m，短軸7.8mの不定形で，検出面からの深さは最大で１m98㎝である。埋土中から銭貨４点，陶磁器などが出土している。

出土遺物（第314図）

鉄片１点と銭貨２点を図化した。1806は厚さ約６㎜の鉄片である。鍛冶素材として利用されたものと思われる。1807は祥符元宝，1808は永楽通宝である。

土坑墓（第315図～第319図）

土坑墓は11基が確認され28区以西に比較的多くの分布を示し，次に17区から21区にわずかな集中がみられる。ここでは近世以外の時期不明のものも一括して掲載した。

土坑墓１号（第315図）

B-32区で検出された。平面形は，長軸1.6m，短軸0.8mで長方形を呈し，検出面からの深さは0.6mである。主軸方向は西に４°振れる。土坑内から遺存状況はあまりよくないが，頭位を北にしたと思われる人骨が検出された。また洪武通宝１点と釘が出土しており，木棺による進展葬であったことを示唆している。また図化には至らなかったが近世と思われる遺物小片も出土している。

出土遺物（第315図）

1809は洪武通宝である。

土坑墓２号（第315図）

B-32区で検出された。平面形は，長軸1.6m，短軸0.9mで長方形を呈し，検出面からの深さ53㎝である。長軸方向は西に６°振れる。また，１号同様に頭位を北にした人骨と，寛永通宝３枚と釘が出土しており，木棺仰臥屈葬であったと思われる。

出土遺物（第315図）

銭貨と釘を図化した。1810は寛永通宝である。1811は釘である。木棺に使用されていたものと考えられる。木質が残存しており，木棺の板材厚が12㎜であったことが推測される資料である。

土坑墓３号（第316図）

C-37区で検出された。平面形は，長軸1.7m，短軸0.8mで検出面からの深さは16㎝の楕円形を呈する。長軸方向は西に12°振れる。土坑内から頭位を北にした人骨が検出され，釘も出土しており，木棺屈葬であったことを示唆している。所属時期については不明である。

土坑墓４号（第316図）

D・E-31区で検出された。平面形は，長軸1.3m，短軸0.7mで不定形を呈し，検出面からの深さ８㎝である。長軸方向は西に３°振れる。掘り込みは，ほぼ失われており遺構内人骨も原位置を保っていない可能性もあるが，頭位は北方向を示している。所属時期は不明である。

土坑墓５号（第316図）

E-30区で検出された。平面形は，径0.92mの円形を呈し，検出面からの深さ26㎝である。土坑内からは人骨，鉄滓などを出土した。遺構平面形と下肢骨の位置関係から，膝を立てた状態で埋葬された座棺と考えられる。

土坑墓６号（第317図）

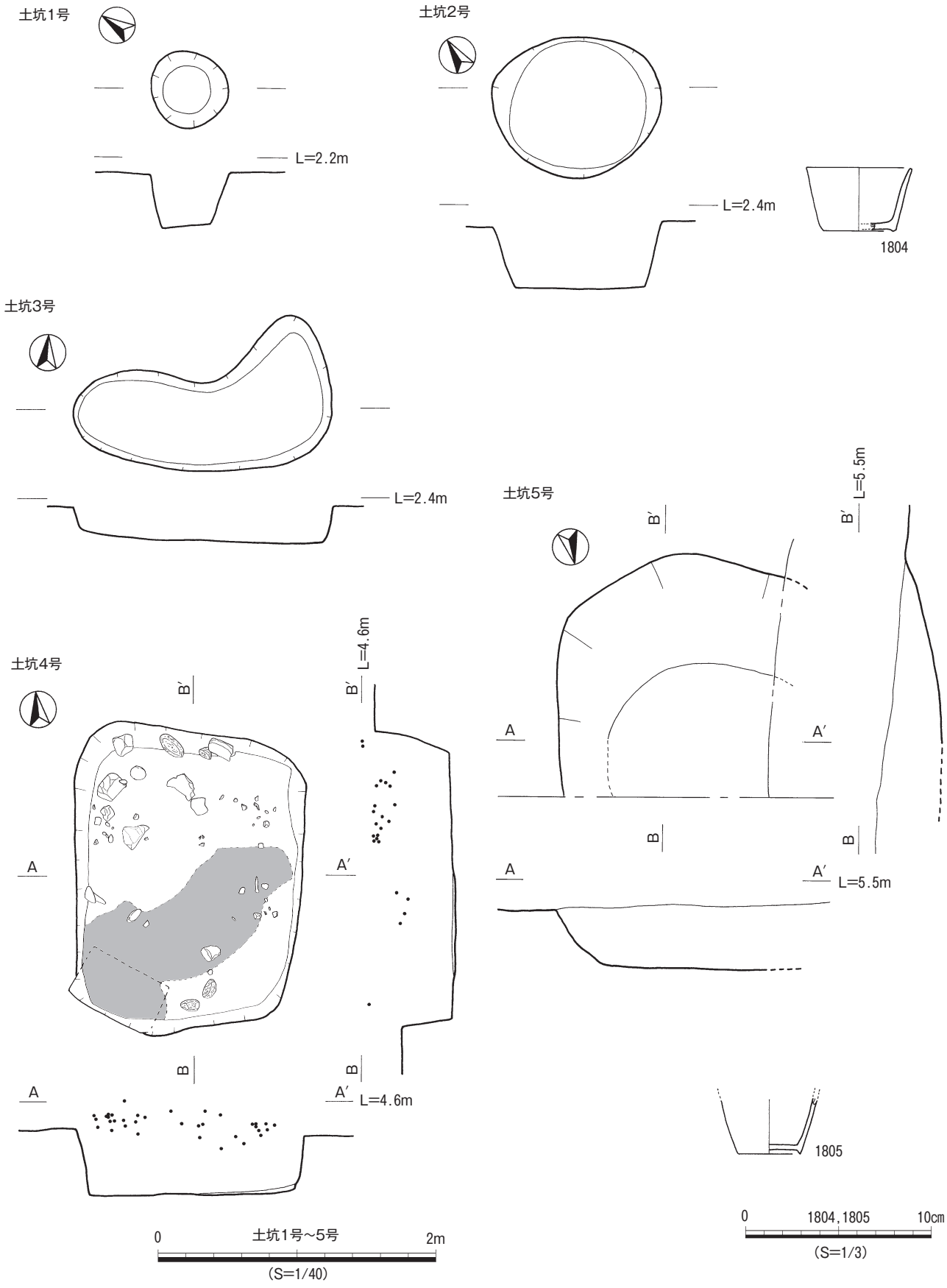
E-30区で検出された。平面形は長軸1.5m，短軸0.9mで楕円形を呈し，検出面からの深さ0.5mである。長軸方向は東に３°振れる。土坑内北寄りに歯が残存し，遺物では洪武通宝と鉄滓が出土した。伸展葬と思われるが，木棺の有無については確認できない。

出土遺物（第317図）

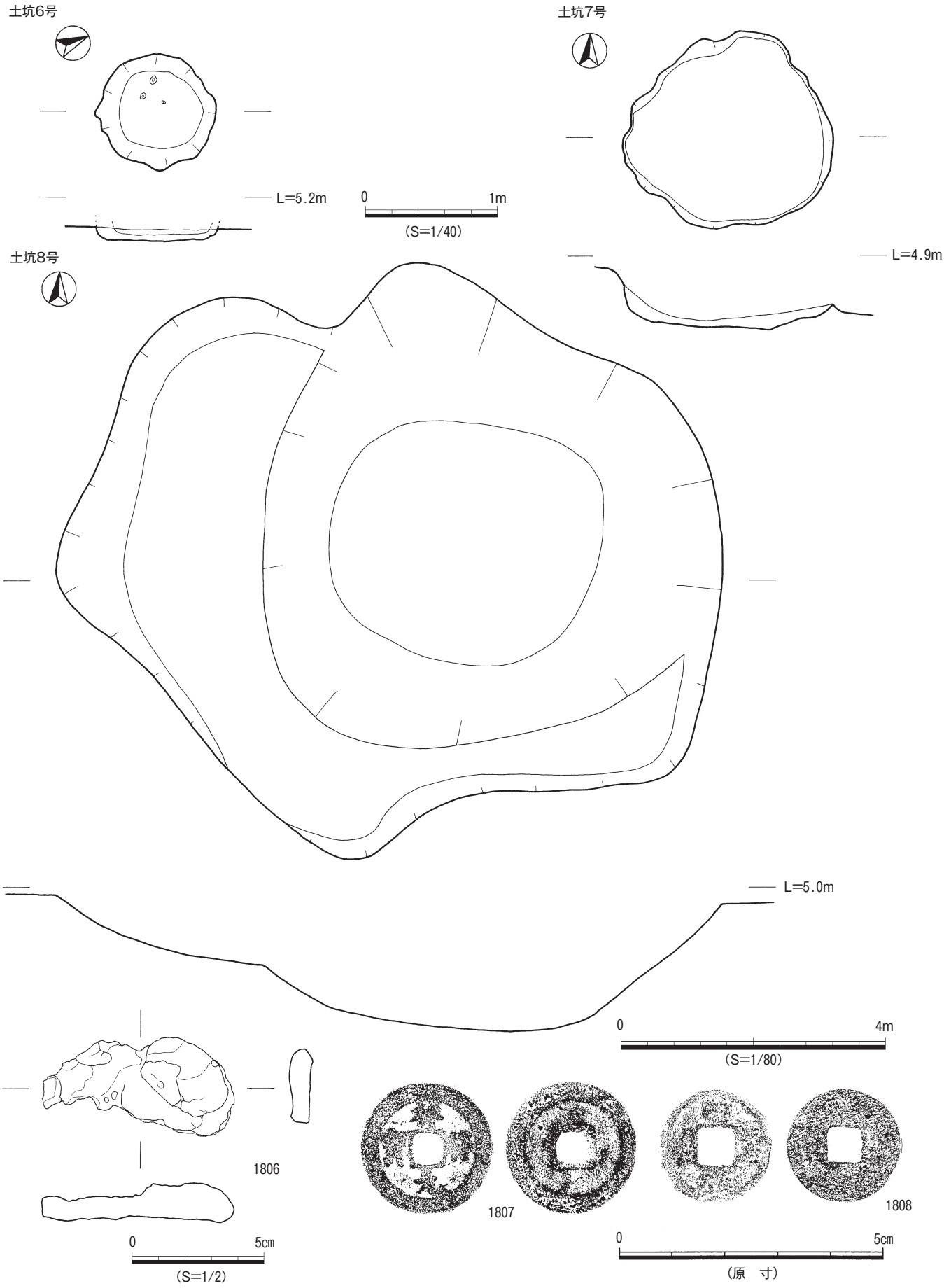
銭貨を図化した。1812～1814は洪武通宝で1813のみ背に治が読める，加治木銭である。

土坑墓７号（第317図）

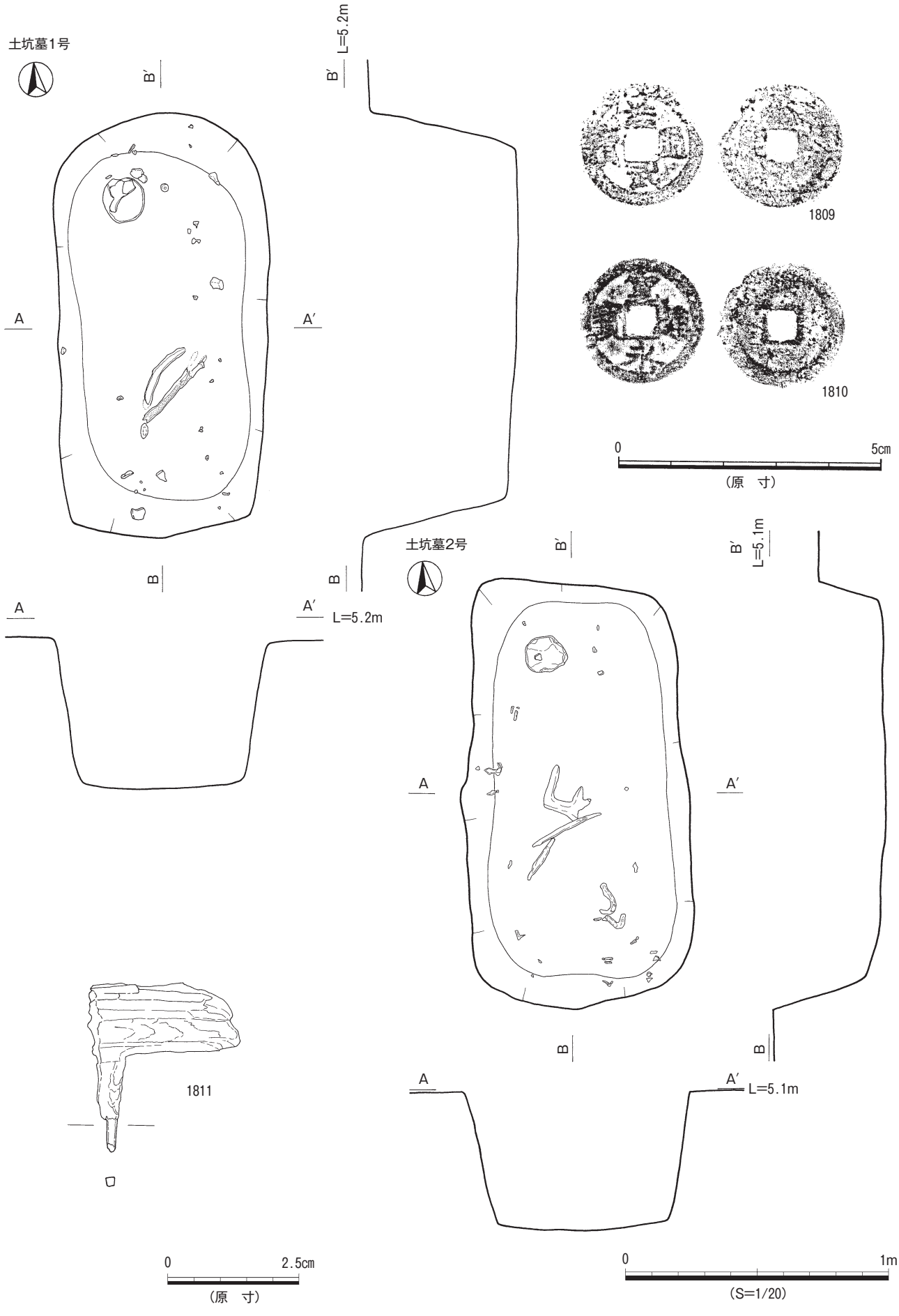
D-28区で検出された。平面形は長軸1.5m，短軸0.8m＋αで不定形を呈し，検出面からの深さ13㎝，掘り込みは，かなりの部分を失っている。主軸は真北を向く。



第313図　土坑１～５号・２，５号出土遺物



第314図　土坑６～８号・８号出土遺物

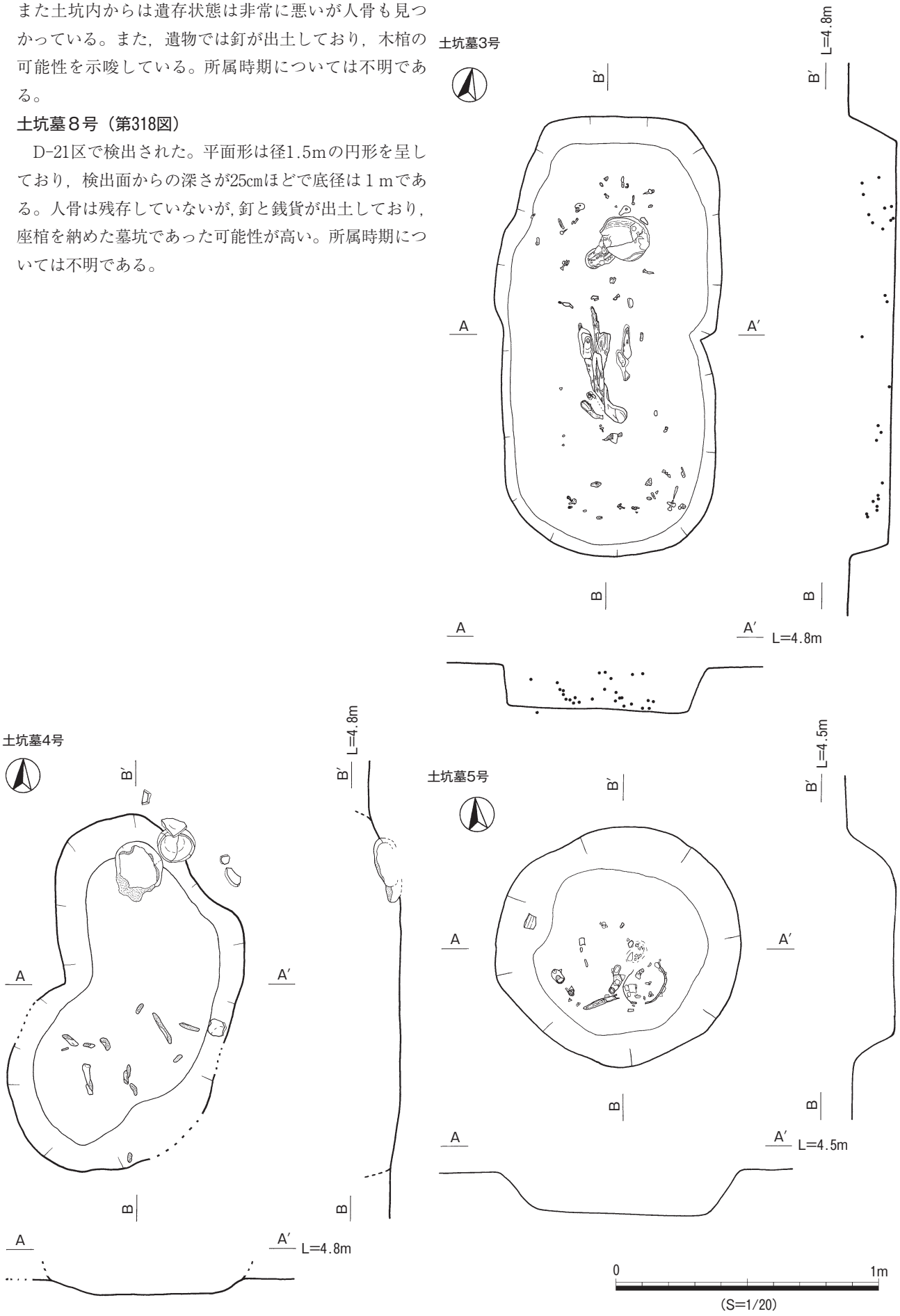


第315図　土坑墓１，２号・出土遺物

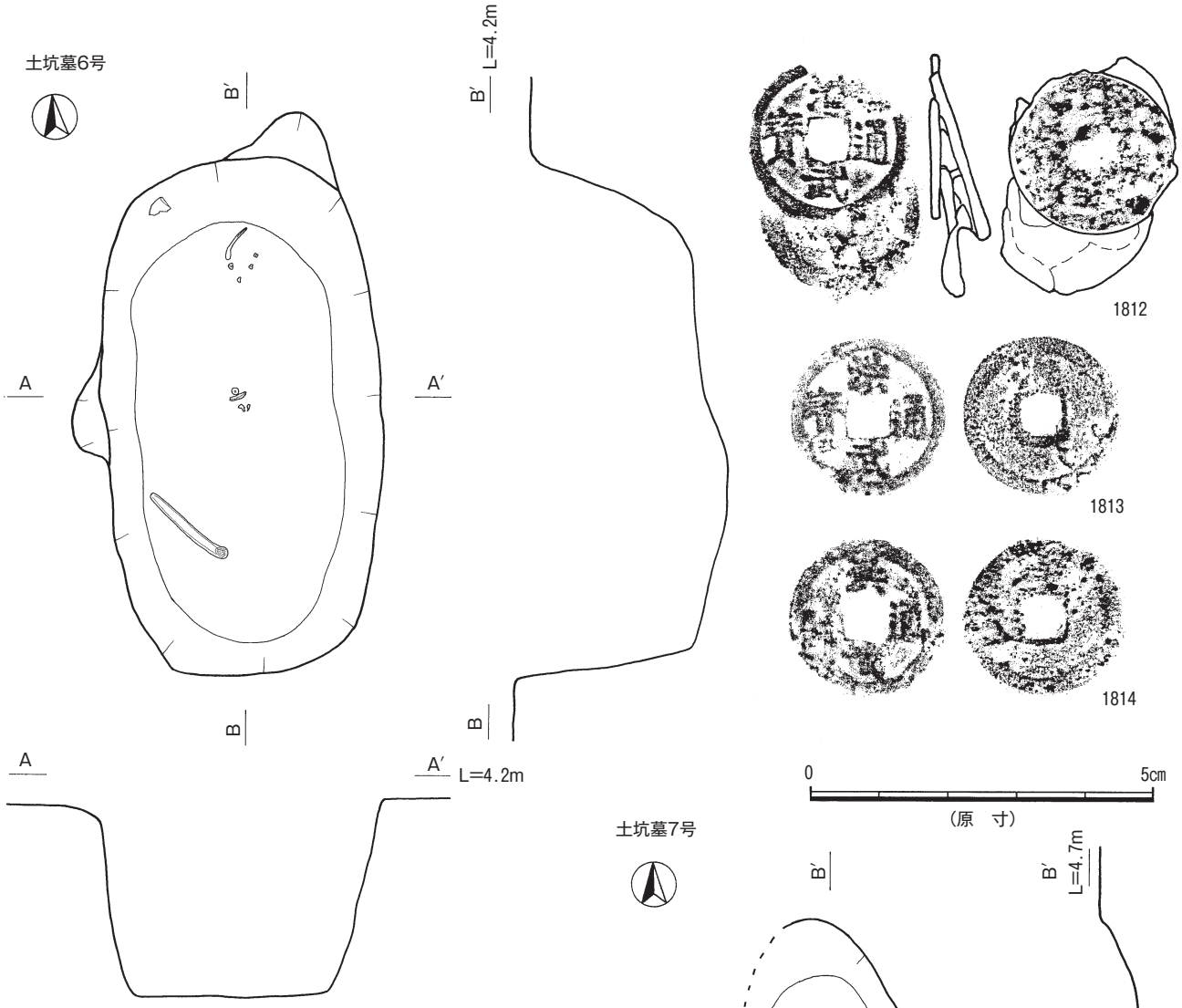
また土坑内からは遺存状態は非常に悪いが人骨も見つかっている。また，遺物では釘が出土しており，木棺の可能性を示唆している。所属時期については不明である。

土坑墓８号（第318図）

D-21区で検出された。平面形は径1.5mの円形を呈しており，検出面からの深さが25cmほどで底径は１mである。人骨は残存していないが，釘と銭貨が出土しており，座棺を納めた墓坑であった可能性が高い。所属時期については不明である。



第316図　土坑墓３～５号



第317図　土坑墓６，７号・６号出土遺物

土坑墓９号（第318図）

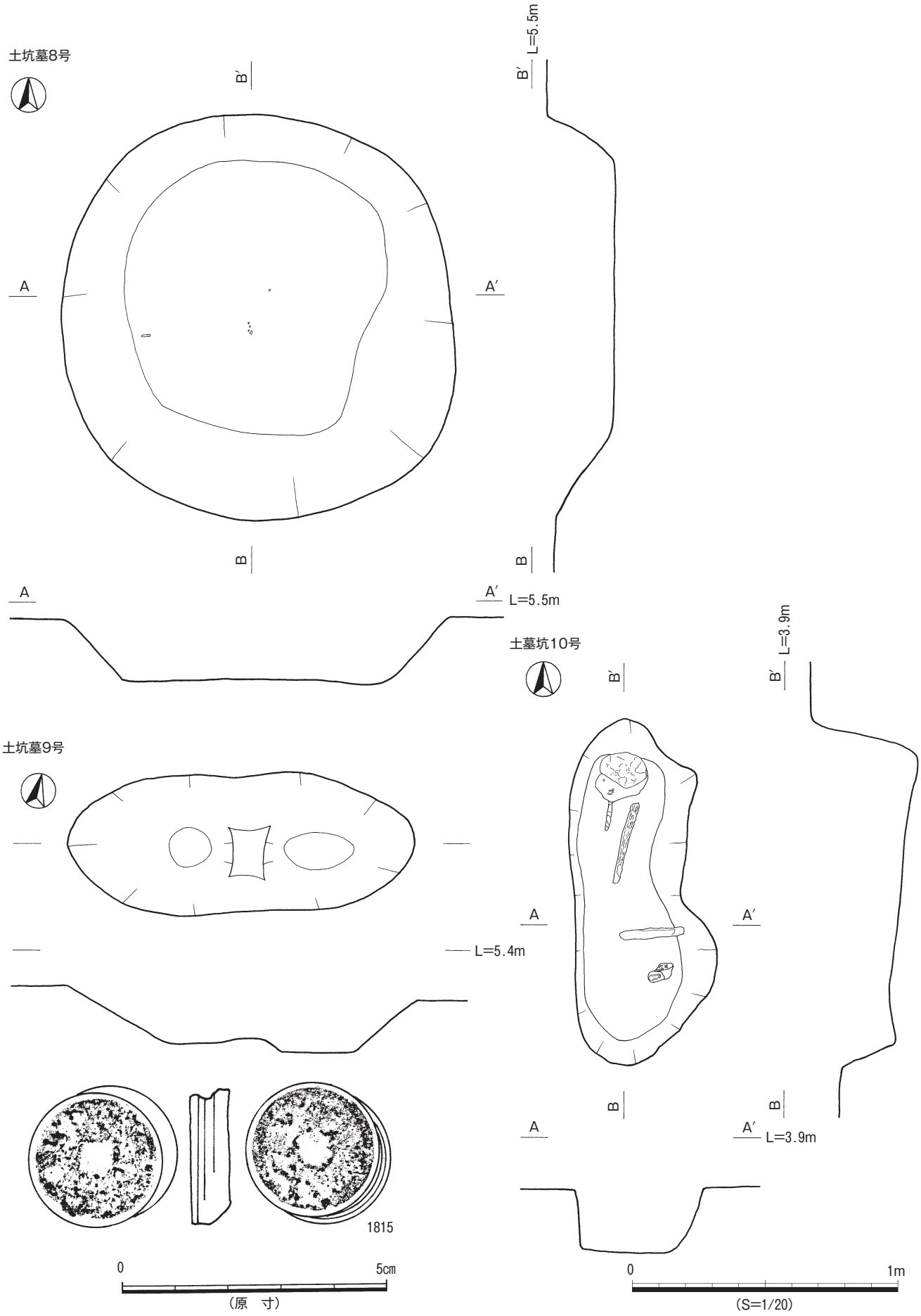
D-20区で検出された。平面形は長軸1.3m，短軸0.5mの楕円形を呈しており，検出面からの深さは0.2mである。長軸方向は東に80°振れる。ほかの土坑墓と比較すると長軸方向が約90°異なる。土坑底面は平坦にならず２カ所の浅いくぼみをもつ。土坑内から人骨の出土は無かったものの，銭貨が出土した。所属時期は不明である。

出土遺物（第318図）

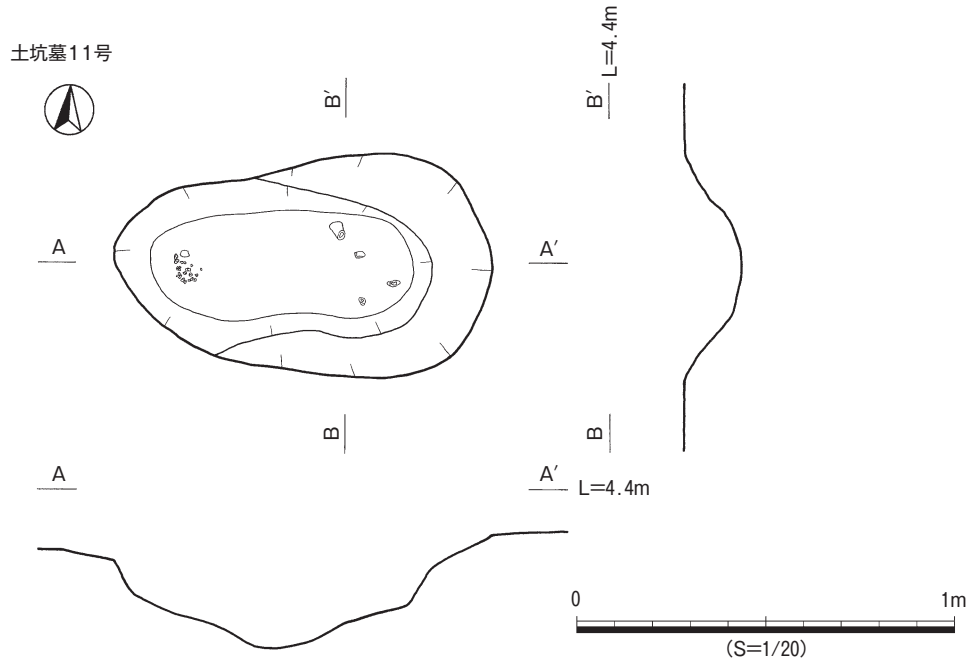
1815は銭貨で，５枚が付着した状態である。錆等で文字判別が出来ず種別不明である。

土坑墓10号（第318図）

F-17区で検出された。平面形は長軸1.3m，短軸0.5mの略楕円形を呈しており，検出面からの深さは26cmである。長軸方向は西に２°振れる。土坑内から人骨が出土し，頭位は北方向であることが確認できる。所属時期は不明である。



第318図　土坑墓８～10号・９号出土遺物



第319図　土坑墓11号

土坑墓11号（第319図）

F-7・8区で検出された。平面形は長軸１m，短軸0.6mの楕円形を呈しており，検出面からの深さは21㎝である。長軸方向は東側に85°振れる。人骨の遺存状況がよくないが，西側に歯が集中して出土するため，頭位は西向きと考えられる。所属時期は不明である。

礫集積（第320図）

用途不明な礫の集積を礫集積として一括した。所属時期の不明なものも一括してある。４基検出されており，調査区西側にやや偏る傾向を示しながら点在する。

礫集積１号（第320図）

B-36区で検出された。礫は長軸1.6m，短軸0.8m＋αの範囲に特に密集する部分をもたずに散在する。

礫集積２号（第320図）

C-37区で検出された。礫は長軸1.05m，短軸0.75mの範囲に密集する。やや扁平な礫が多く，礫上面の埋土は黄橙色土で固くしまっている。

礫集積３号（第320図）

A-30区で検出された。礫は径0.5mの範囲で円形に集中する。

礫集積４号（第320図）

D-32区で検出された。礫は長軸0.75m，短軸0.45mの範囲に，ややばらけた感じで集まっている。

石列（第321図）

D-21区で検出された。径20㎝前後のやや扁平な礫が１～1.2mの間隔で一直線上に配置されている。礎石建ちの建物の存在も想定されるが，周辺に同様な石列，石列に対して整然と並んだ柱穴などは確認できなかった。

ピット（第321図・第322図）

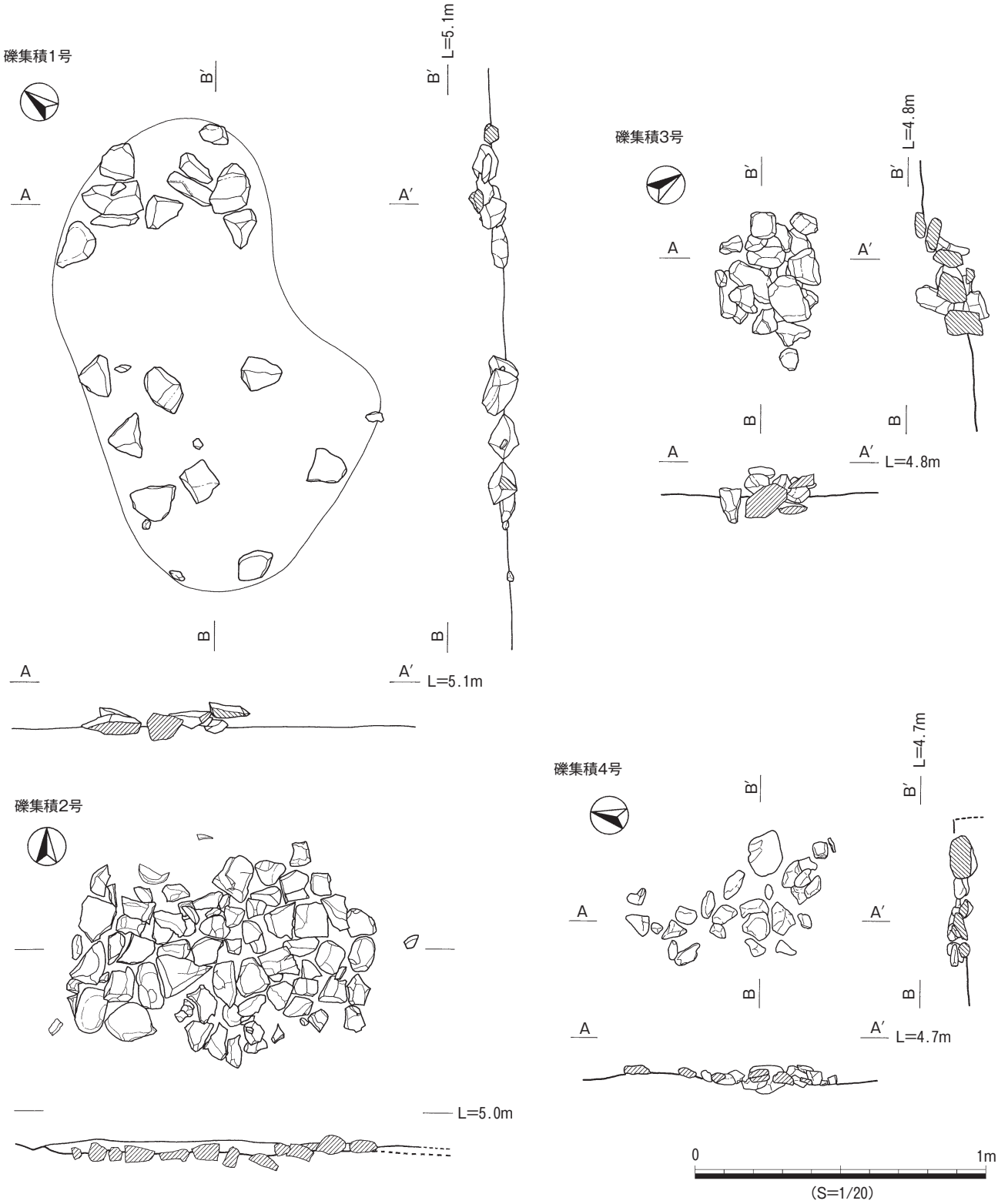
ピットは調査区全体に多数検出された。層位が不安定で，時代判別可能な遺物出土が少なく，時代不明のピットが大半を占めるため個別図掲載はピット内に礫が配置されるもの，遺存状況のよい遺物が出土したものに留める。また，時代不明のものもここに掲載する。

ピット１号（第321図）

B-33区で検出された。検出面から底部までが６㎝と非常に浅く，掘り込みのほとんどは失われている。径は現存部で長径１m，短径0.8mである。底面周縁部に３個の軽石が配置される。中心部は固くしまっており，上部から圧力がかかっていたことが想定され，柱穴下部の柱を支える根石と判断した。周辺からは建物に復元できる柱穴の配列は確認できなかった。

ピット２号（第321図）

B-34区で検出された。長軸1.2m，短軸1.1mのほぼ円形の形状を呈しており，検出面から底部までの深さ80㎝で底部中央付近に扁平な礫が配置される。径25㎝程度の柱痕跡も確認された。周辺からは建物に復元できる柱穴の配列は確認できなかった。



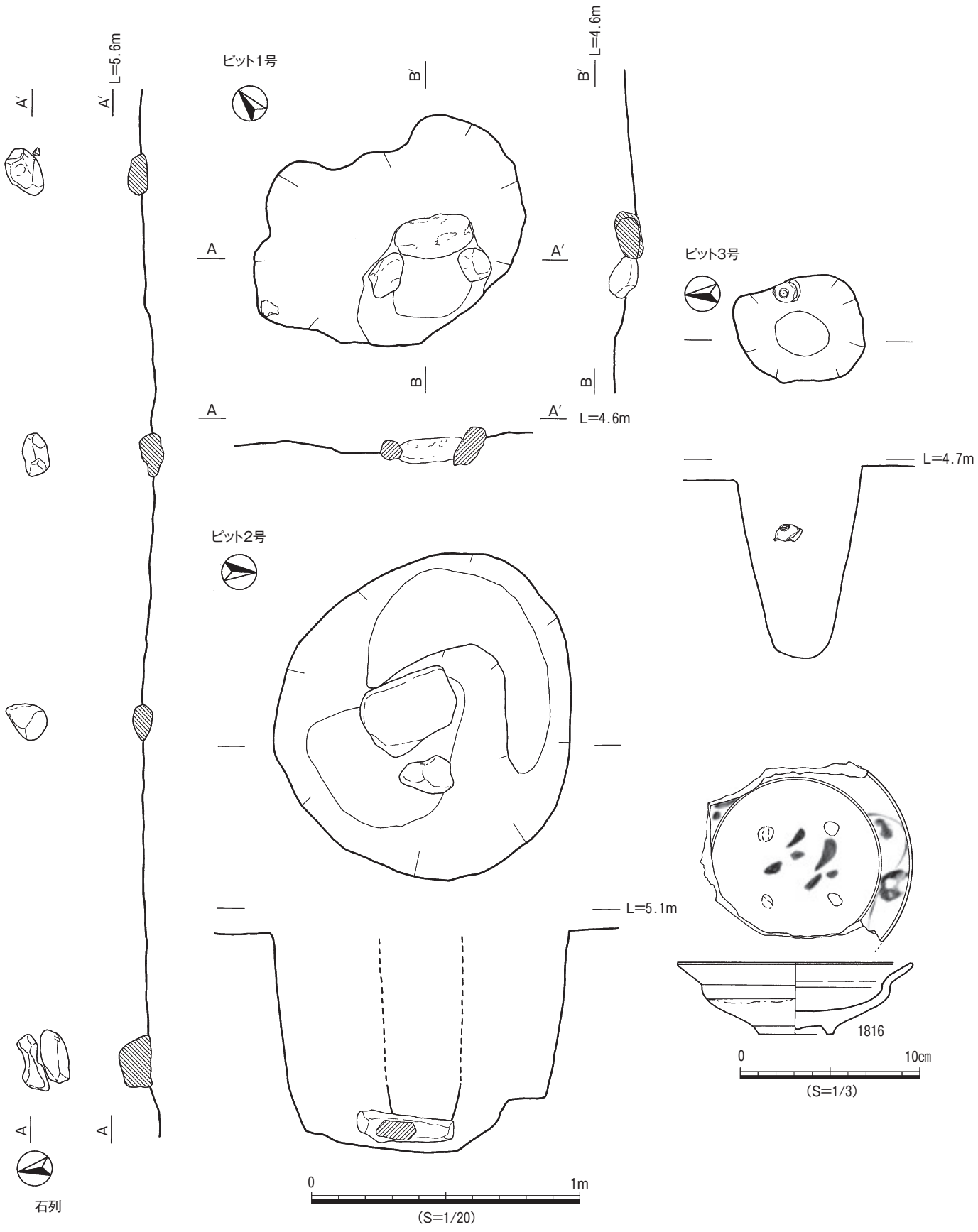
第320図　礫集積１～４号

ピット３号（第321図）

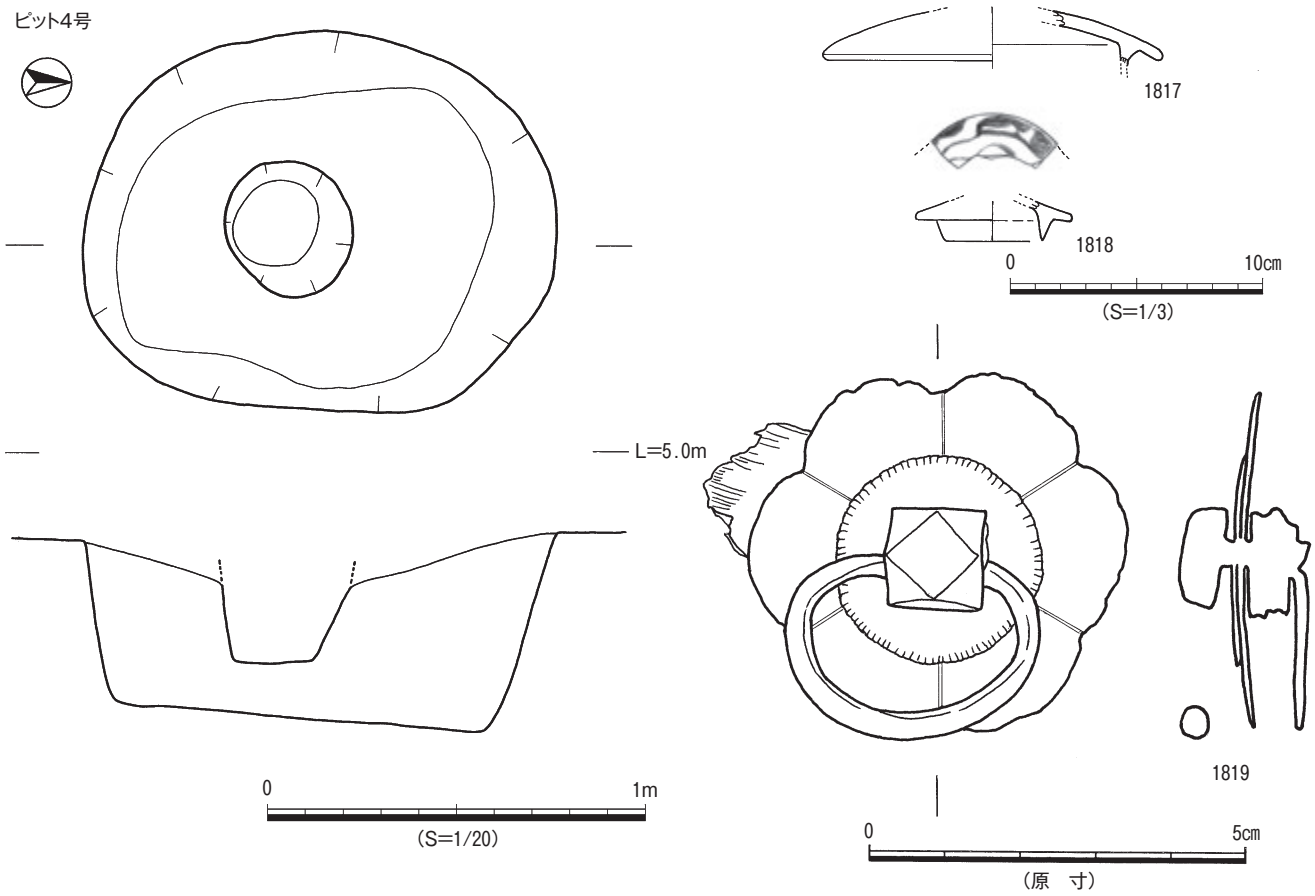
A-36・37区で検出された。平面形は，長軸0.5m，短軸0.4mの略方形を呈しており，検出面から底部までの深さ71cmである。底部から約45cmに伏した状態で肥前陶器が出土した。

出土遺物（第321図）

肥前陶器の折れ縁皿が１点出土した。1816は内面には鉄絵が描かれ，見込みに胎土目が４か所残る。口縁部の３分の２欠損しているが，地鎮として埋納されたものと思われる。



第321図　石列・ピット１～３号・３号出土遺物



第322図　ピット４号・４，６号出土遺物

ピット４号（第322図）

B-34区で検出された。平面形は長軸1.25m，短軸１ｍの略楕円形を呈し，検出面からの深さ0.5ｍの掘り方である。中央部に径30㎝，深さ20㎝の柱痕跡が確認でき，柱痕跡下部には粘土質の塊がみられた。

出土遺物（第322図）

遺物の出土数は４点である。全て薩摩焼（苗代川の土瓶蓋１，胴部２，龍門司系の土瓶蓋１）で，そのうち２点を図化することができた。

1817は苗代川系の土瓶蓋である。つまみ部は欠損している。上面に鉄釉がかかる。1818は龍門司系の土瓶蓋である。上面のみ施釉され，白化粧土の上から褐釉をかける。

ピット５号（第280図）

A-37区で検出された。銭貨が出土したが，小片のため種別は不明である。

ピット６号（第298図・第322図）

D-20区で検出された。1819は調度品の取っ手と思われる鉄製品で，花弁状の金具の裏には木質が残存している。

古道（第323図）

古道は，調査区内で５条検出された。規模の大きなものはなく，人の往来によって硬化面が形成されたもののみである。古道１～４は自然流路が埋もれた跡に形成されたものである。

古道１（第323図）

C・D-26区で検出された。南北に7.5ｍほど延びる。幅約50㎝の硬化面である。

古道２（第323図）

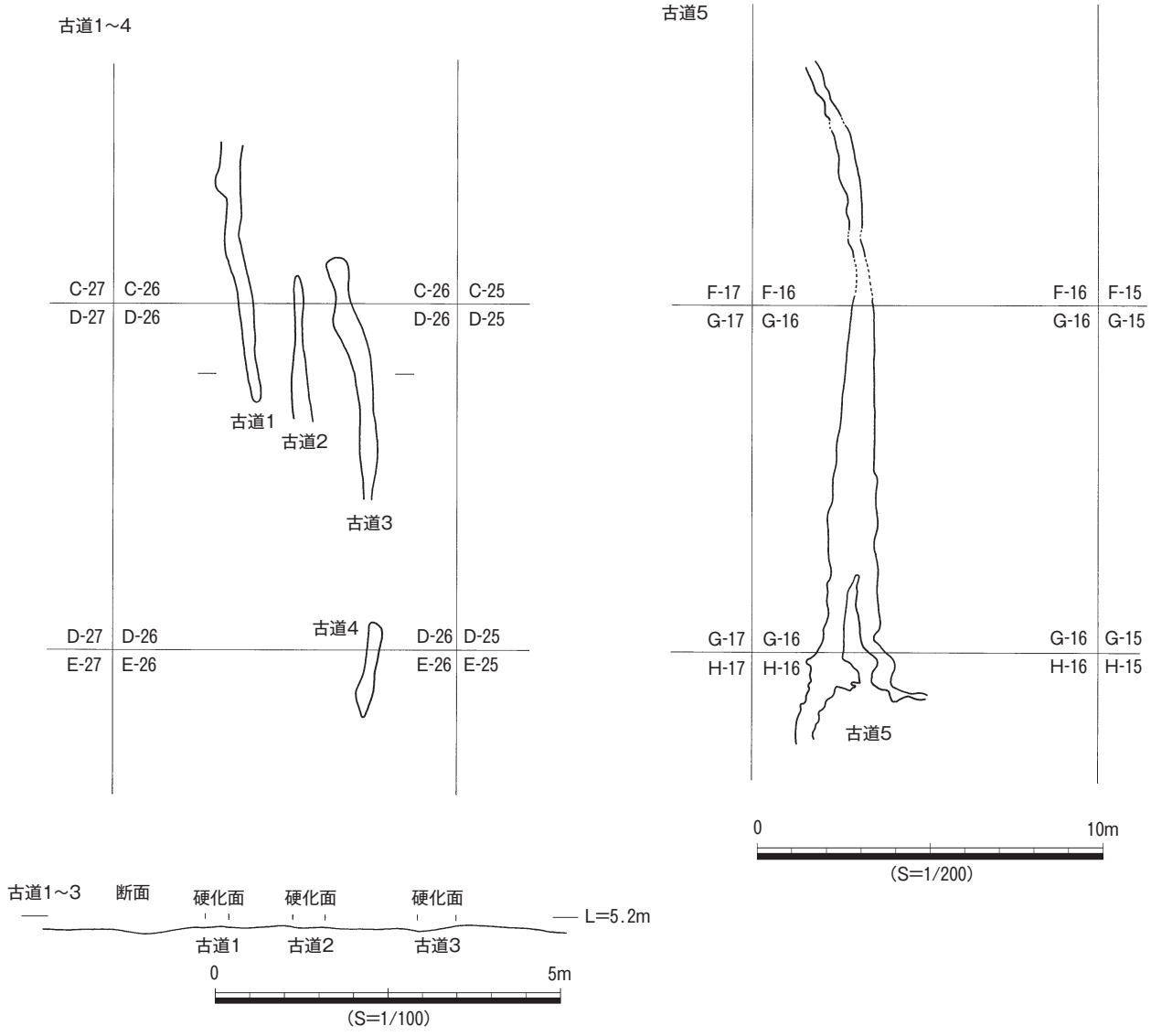
C・D-26区で検出された。南北に５ｍほど延びる。幅約50㎝の硬化面である。

古道３（第323図）

C・D-26区で検出された。南北に７ｍほど延びる。幅約50㎝の硬化面である。南に位置する古道4と連続する可能性がある。

古道４（第323図）

D・E-26区で検出された。南北に2.8ｍほど延びる。幅約50㎝の硬化面である。



第323図　古道１～５・古道１～３断面

古道５（第323図）

F～H-16区で検出された。南北に約20m延びる。幅は広いところで約1.5mあり，北側末端部では40cmほどに狭まる。南側末端付近で２条に枝分かれするが，その延長については確認できなかった。

溝（第324図～第335図）

溝は調査区内から８条検出された。内5条は34区以西で，残りは18区以東で検出された。調査区中央の20～31区には自然流路が流れており，近世遺物を多く包含していたことから，溝と同様に遺構と遺物について記載を行うこととした。

溝１（第324図）

C・D-36区で検出された。南西方向に約16m延びる。幅約90cm，検出面からの深さ約25cmである。遺構埋土中から多くの遺物が出土した。

出土遺物（第324図・第325図）

遺物は77点出土した。内訳は，薩摩焼（苗代川系の土瓶・徳利・擂鉢・甕・壺，それらの胴部や底部，龍門司系の碗や皿）がほとんどで，その他に肥前産の陶磁器が多く出土した。1820～1831は染付である。1820～1828は碗である。1820は外面に一重網目文が描かれる。1821はコンニャク印判による文様が押される。1822・1823は丸文が描かれたものである。1823は見込みにコンニャク印判五弁が押される。1824は広東碗の形状を意識したものと思われるが，高台が低い。1825は広東碗である。1826は湯飲み碗である。1827と1828は端反碗である。1828は在地産の資料と思われる。1829は皿である。見込みには

コンニャク印判五弁花がスタンプされる。また，高台内底にはハリ支えの先端が熔着している。1830は折れ縁の皿もしくは鉢と思われる。1831は油壺である。1832～1855は陶器である。1832は外面腰部まで銅緑釉がかかる肥前産の碗である。1833は京焼風陶器の煎じ碗である。1834は龍門司系の碗である。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。1835は碗としたが鉢の可能性も考えられる資料である。龍門司系のもので，外面は白化粧土に透明釉がかかる。1836は白薩摩の湯飲み碗である。1837は京焼と思われる碗で，見込みに色絵が描かれる。1838～1840は肥前陶器の皿である。1838は見込みに胎土目が残る。1840は見込みに砂目の痕跡が残る。1841は龍門司系の酒器で「からから」と称されるものである。外面肩部には飛び頑が施される。1842・1843は苗代川系の土瓶である。1842の注口部分は欠損している。1843は一穴である。1844は龍門司系の土瓶の注口である。Ｓ字状を呈する溜め口ではなく，直線的に伸びる鉄砲口である。茶止め穴は一穴である。1845は苗代川系の資料で，水注としたが，壺の可能性も考えられる。1846・1847は鉢である。1847は口縁端部が欠損している。1848～1850は擂鉢である。1848の擂り目は口縁下位に１㎝程度の余白を残して入れられ，その余白部分にはヘラ状工具による横筋状の調整痕が入る。1849・1850は底部である。1851・1852は蓋である。1851は口唇部に貝目が残る。1852は口縁部が平坦につくられるもので，外面口縁下位には２条の浅い沈線が巡る。1853～1855は甕である。1853は口縁端部を外側に折り返して三角形状につくる。口唇部は丸みを帯び，貝目が残る。1854・1855も口縁端部は外側に折り返してつくるものであるが，1854はＴ字状に仕上げ，1855は三角形状に仕上げる。

溝２（第326図）

C-35区で検出された。南北方向に約4.5m延び，さらに南へ延びると思われるが，確認できなかった。幅は約2.1m，検出面からの深さ約40㎝である。

溝３（第326図）

B-35区で検出された。南北方向に約４ｍ延びる。幅約50㎝，検出面からの深さ５㎝弱のごく浅い溝である。断面形は皿状である。

出土遺物（第326図）

遺物は93点出土した。内訳は，薩摩焼（苗代川系の土瓶・片口・鉢・擂鉢・甕・釜やそれらの胴部や底部，龍門司系の碗等）がそのほとんどを占め，その他に肥前陶磁器が少数出土した。また，鉄器１，銭貨１枚を出土した。1856は肥前陶器の碗である。内面は透明釉，外面は腰部まで銅緑釉がかかる。1857は龍門司系の碗である。胎土は緻密で，黒褐色の鉄釉がかかる。山元窯産の可能性も考えられる。1858は水注としたが，壺の可能性も考えられる。口唇部はやや凹んでおり，蓋がつくものと思われる。1859は鎌と思われる鉄製品で，先端部を欠いている。1860は寛永通宝である。

溝４（第326図）

A・B-34・35区で検出された。東西方向に約６ｍ延びる。幅約1.5m検出面からの深さ約15㎝で底面は凹凸がみられる。末端で浅くなり自然に消滅してしまう。

出土遺物（第326図）

苗代川系の擂鉢が１点出土した。1861の口縁端部は外側から内側に折り返してつくるもので，口唇部の一部には貝目が残る。内面は上位に余白を残さずに擂り目が入れられ，その下には横方向のヘラ状工具による調整痕が観察される。

溝５（第326図）

B～D-35区で検出された。南北方向に約17m延びる。幅約４～６ｍ，検出面からの深さ約1.3mで，断面形が緩いU字状を呈し，一部に段を有する。

溝６（第327図）

D～F-18区で検出された。南北方向に約22m延びる。幅約３ｍ，検出面からの深さ約15㎝で，断面形は浅い皿状を呈する。末端では浅くなり自然に消滅してしまう。

出土遺物（第327図）

出土遺物は，薩摩焼５点と，鞴の羽口２点出土した。いずれも小片で，１点を図化することができた。また鉄器が２点出土した。1862は薩摩焼苗代川系の資料で，甕壺に被せる蓋である。口唇部の外側は溝状につくられ，貝目が残る。17世紀前半の堂平窯の製品と考えられる。1863は先端が二叉状に分かれたかぎ爪状の鉄器で，取り付け部分と思われるところで110°折れ曲がる。最先端部は欠損し形状は不明である。1864は棒状に延びる扁平な鉄器である。円形部分には径５㎜程度の穿孔がみられる。

溝７（第327図）

A～G-7～16区で検出された。東西，南北方向の複数の溝が切り合い，長大な溝を形成している可能性もあるが，切り合い関係がつかめなかったため，一連の溝として取り扱った。中世の遺物も確認でき，溝が埋もれる過程で近世でも機能していた可能性がある。A・B-12区で４条に分岐している。総延長170mあり，幅は２～５ｍ，検出面からの深さ約65㎝である。

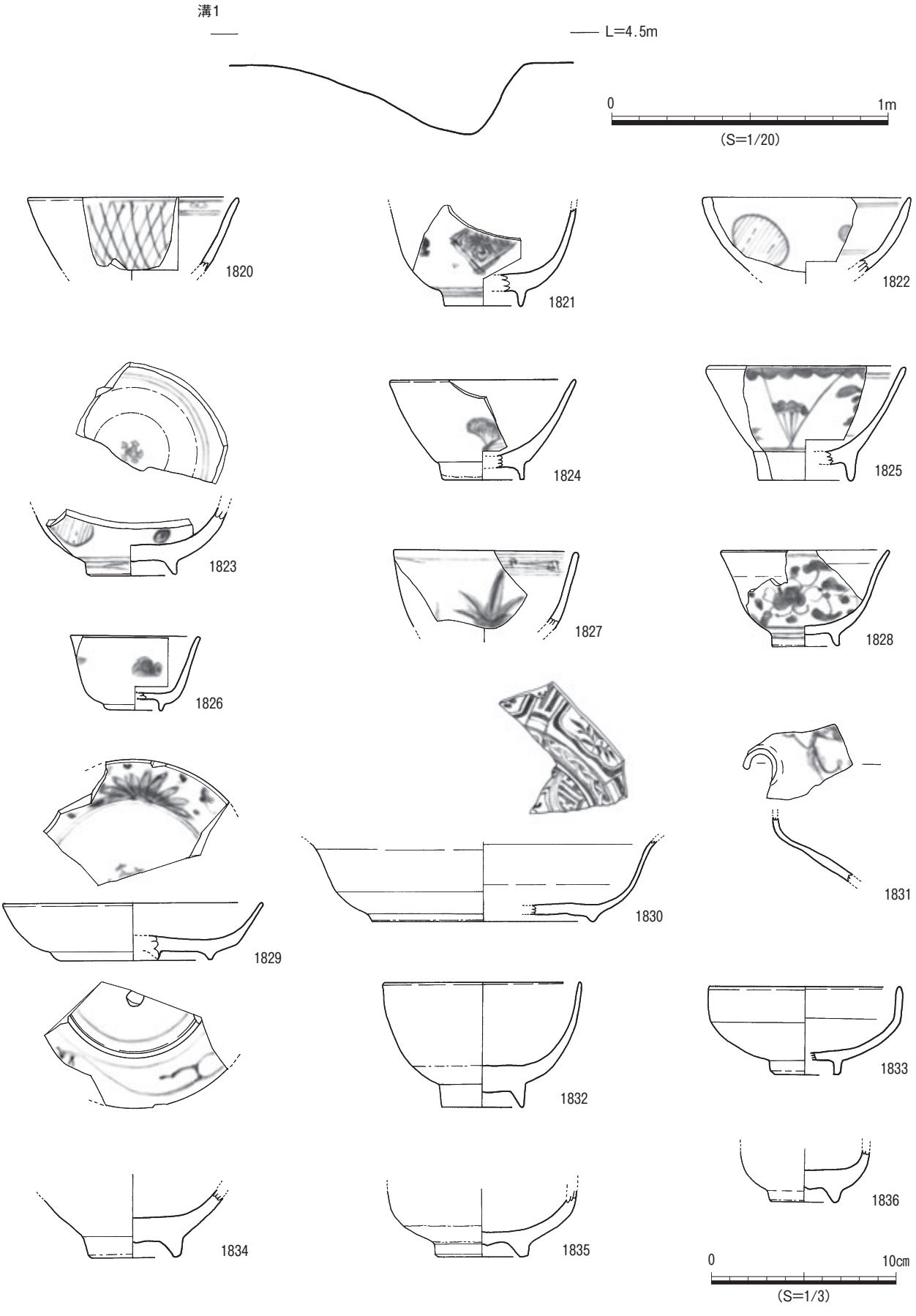
出土遺物（第327図）

出土遺物は２点で，龍門司系と思われる香炉と白土による刷毛目が施される肥前陶器が出土したが，後者は小片で図化できなかった。

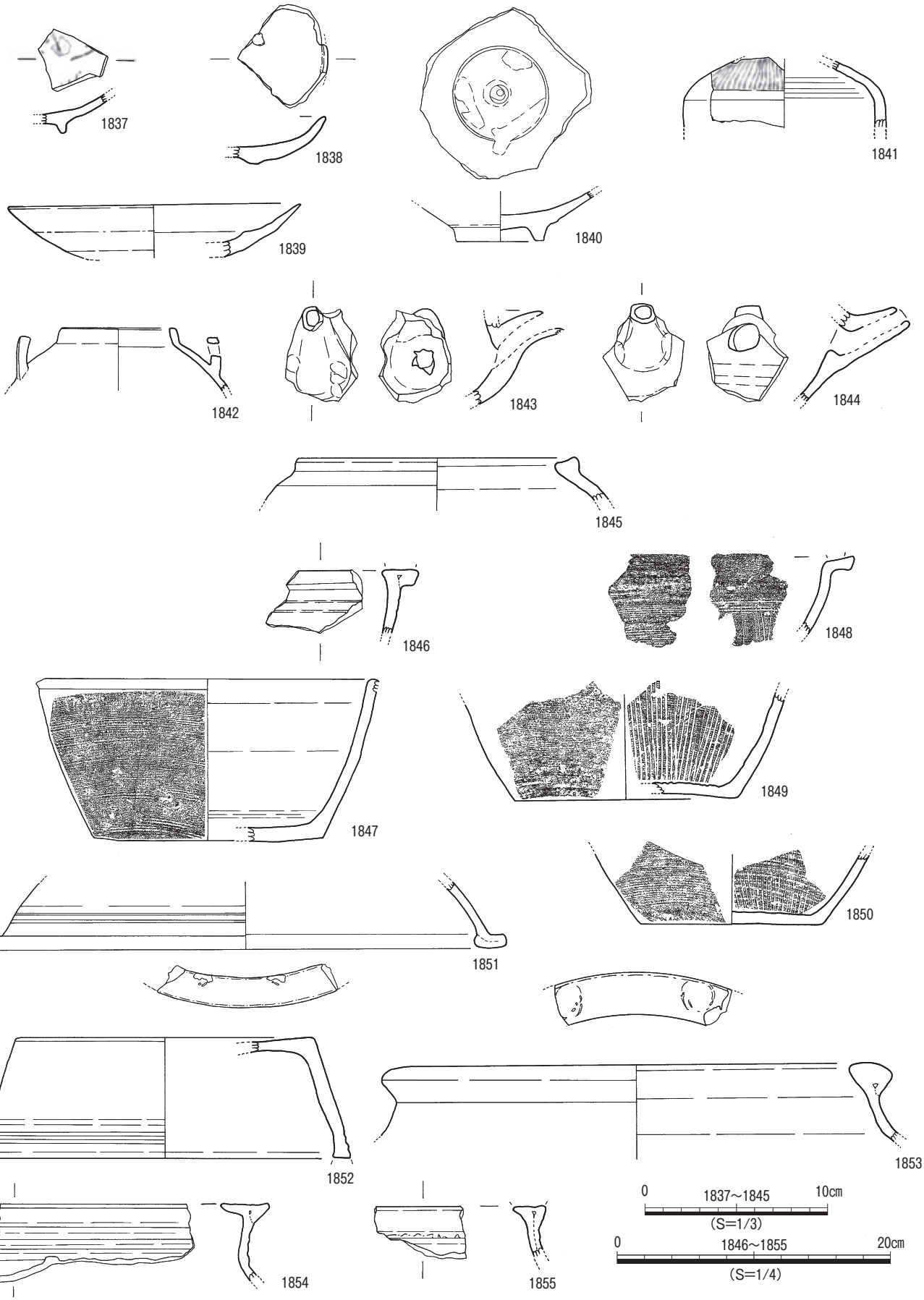
1865は香炉である。やや黄色みがかった灰白色の胎土に，黄釉が外面のみかかる。畳付が幅広の蛇の目高台を呈する。

溝８（第327図）

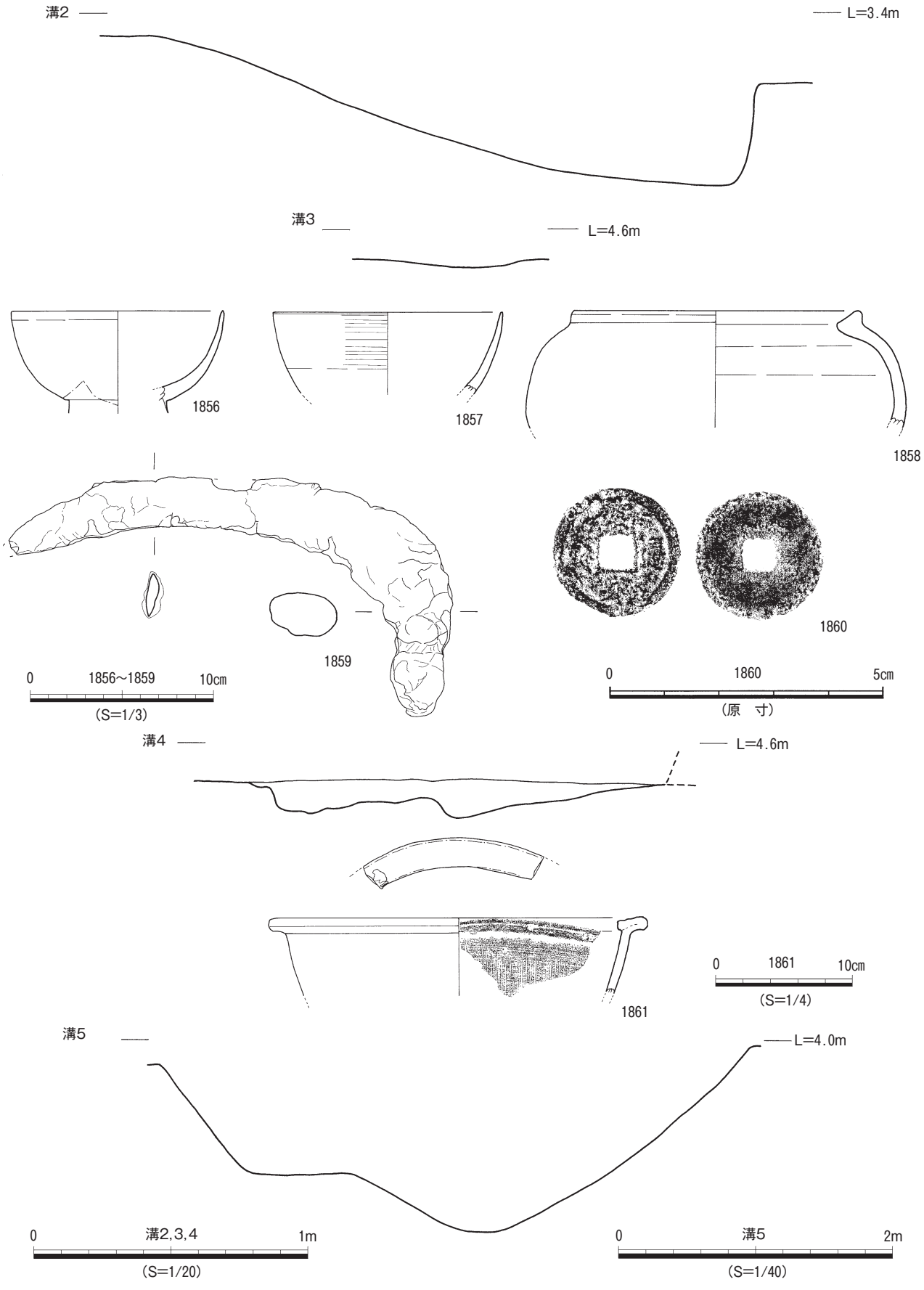
E～G-7･8区で検出された。南西方向に約30m延びる。



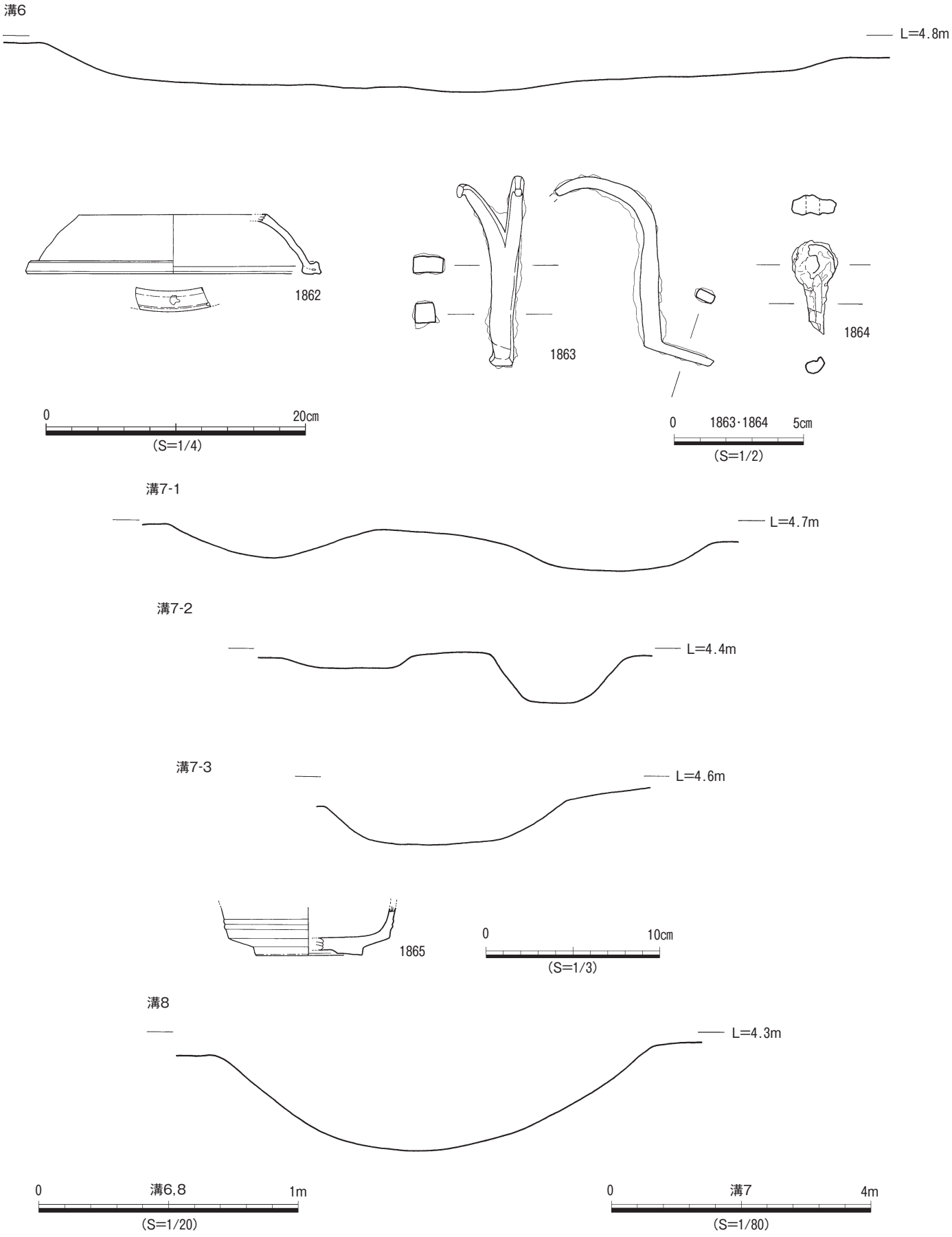
第324図　溝１・出土遺物



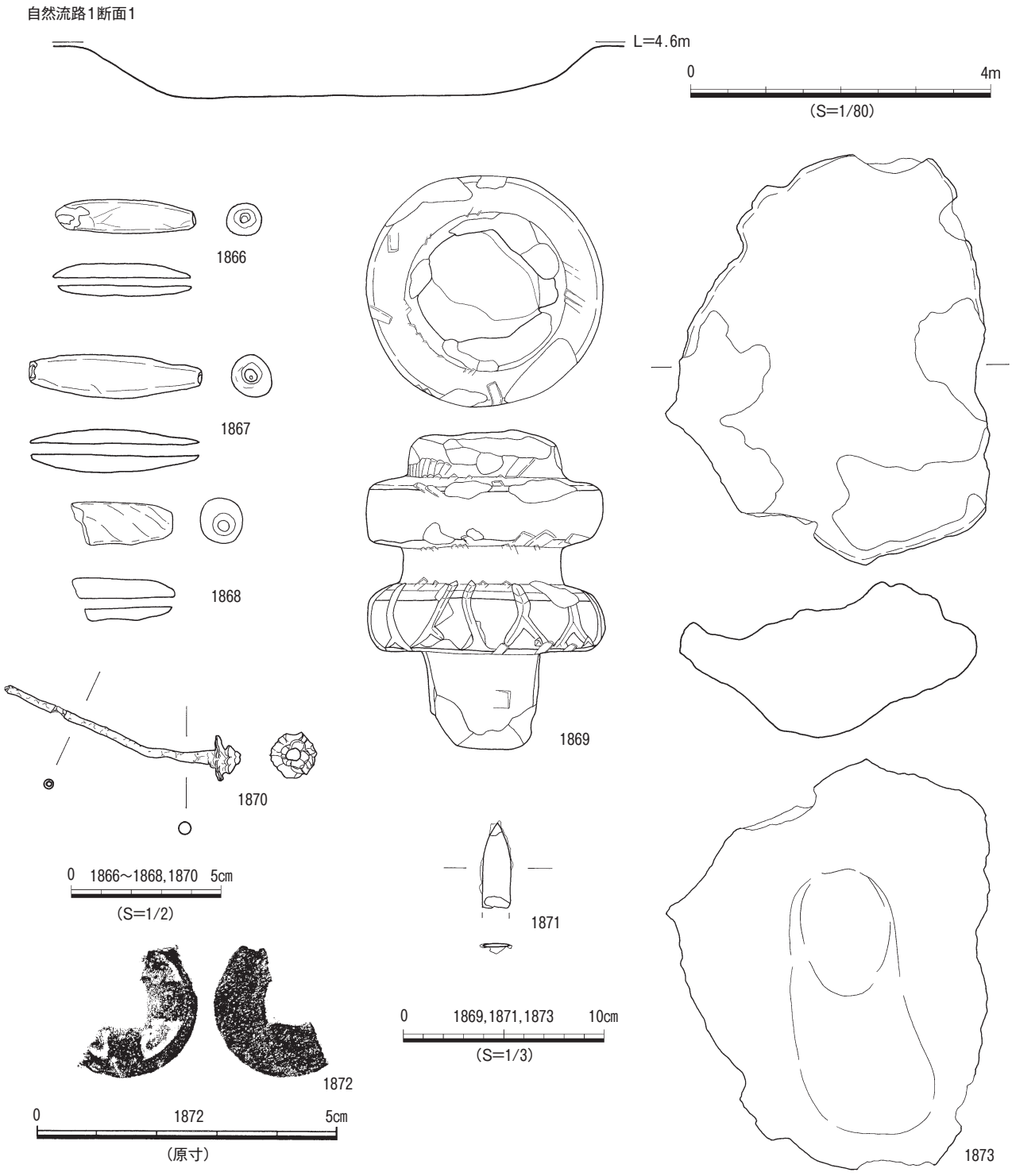
第325図　溝１出土遺物



第326図　溝２～５・溝３，４出土遺物



第327図　溝６～８・溝６，７出土遺物

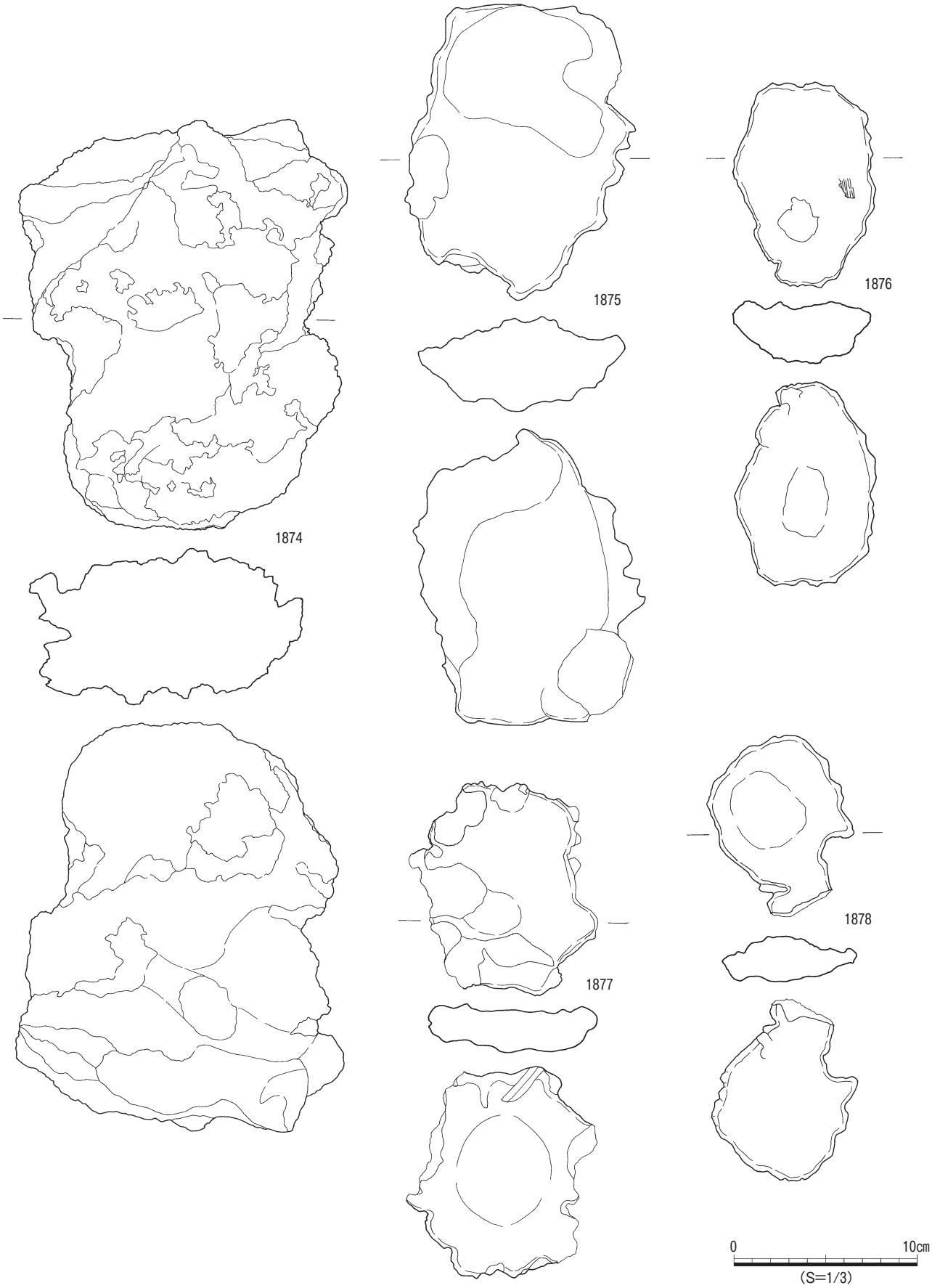


第328図　自然流路１断面１・出土遺物

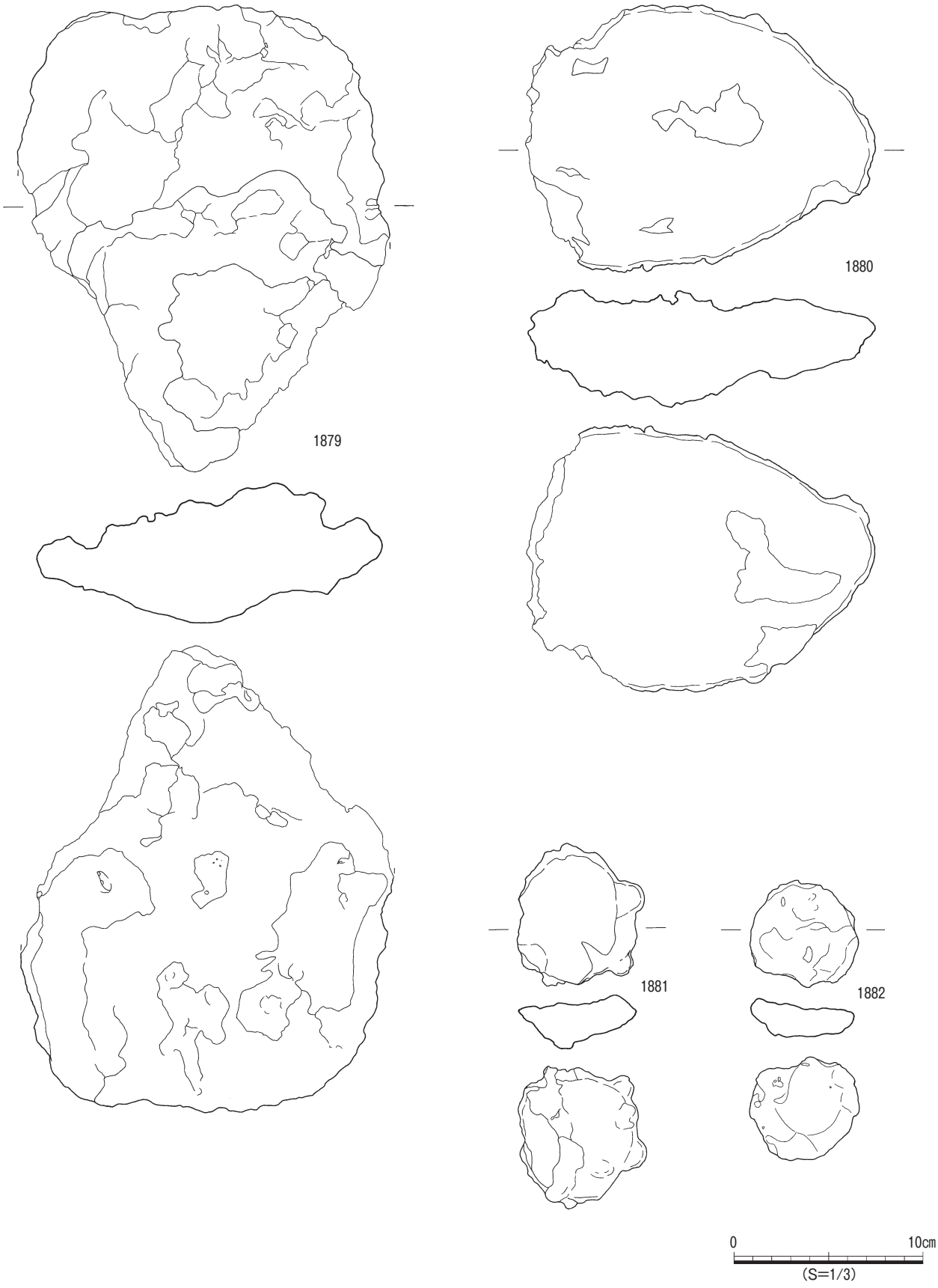
幅約1.6m，検出面からの深さ約40cmで，断面形は緩いU字状を呈する。溝７の末端とほぼ平行する。

自然流路１（第328図）

A'～F-20～31区で検出された。複数の流路が合流し，最終的に21・22区の南方向への流れ，29・30区の南への流れに集約される自然流路である。B～F-29・30区の流路から大量の鉄滓，鞴の羽口片が出土した。



第329図　自然流路１断面１付近出土遺物（１）

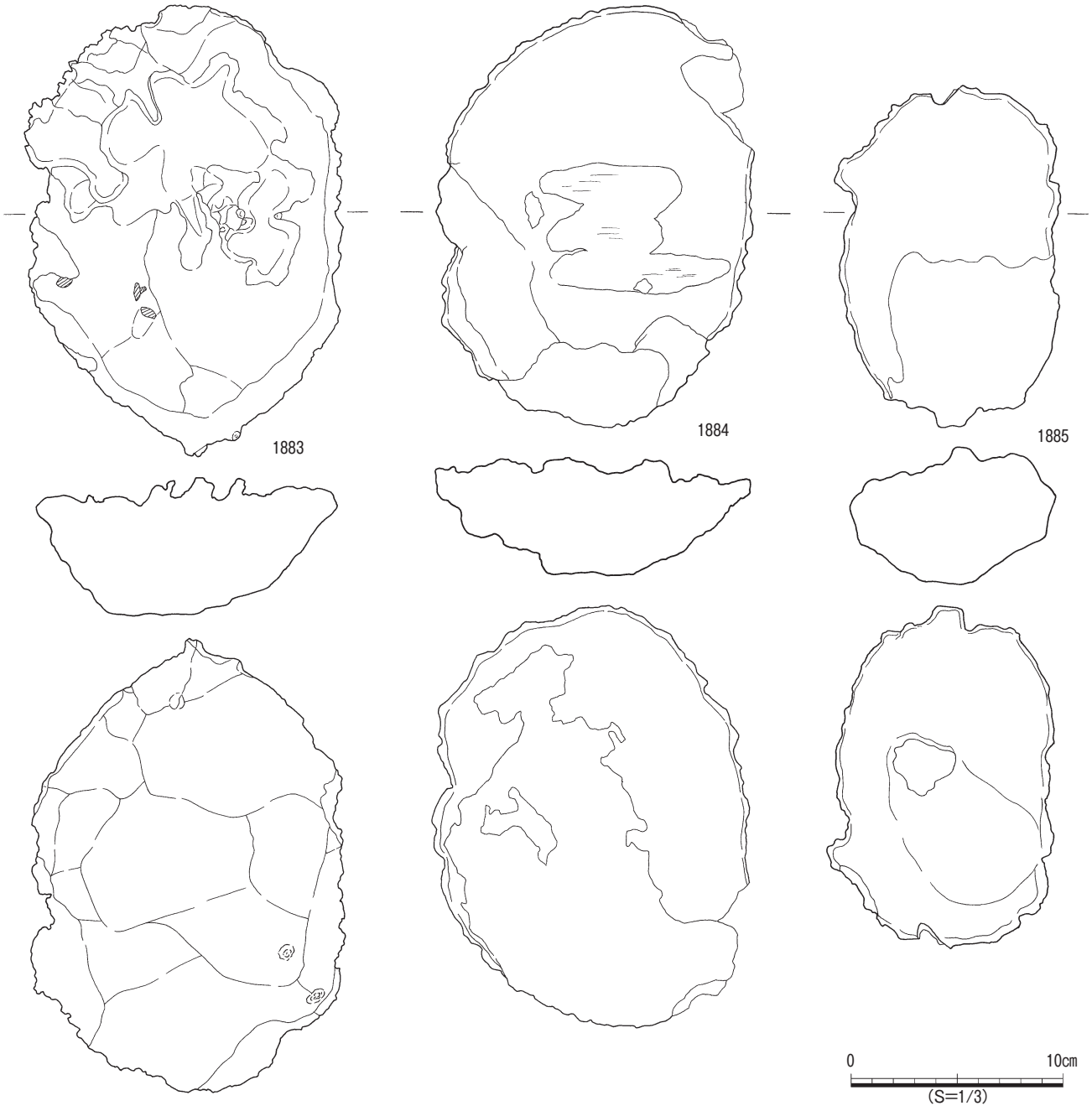


第330図　自然流路１断面１付近出土遺物（２）

出土遺物（第328図～第335図）

1866～1868は土錘である。1866･1867は完形のもので，1868は半分ほど残存するものである。いずれも細身の形状を呈することから，中世以降のものと考えられるものである。

1869は石塔の一部である。太い棒状の石材を二輪の環状部分を残して彫り込むものである。上部３分の２程度は断面円形であるが，下部（基部）のみは断面方形の形状を呈するものである。一段目の環状部分は無文であるが，二段目の環状部分には連弁が施されるものである。形状から「相輪」と呼称される石塔の一部と考えられるもので，宝篋印塔や宝塔，層塔などの上部に乗るものの可能性がある。また，時期はおおむね中世後半から近世初頭におさまるものと考えられる（狭川真一氏【元興寺文化財研究所】の御教示による）。1870･1871は金属製品である。1870は銅製品で，棒状部分の末端部に花弁状の装飾を施すものである。「かんざし」の可能性が考えられる。日本列島の多くでみられるかんざしは装飾部分を棒状部分で突き抜けるものが多いのに対して，本資料は装飾部分を突き抜けてはいない。

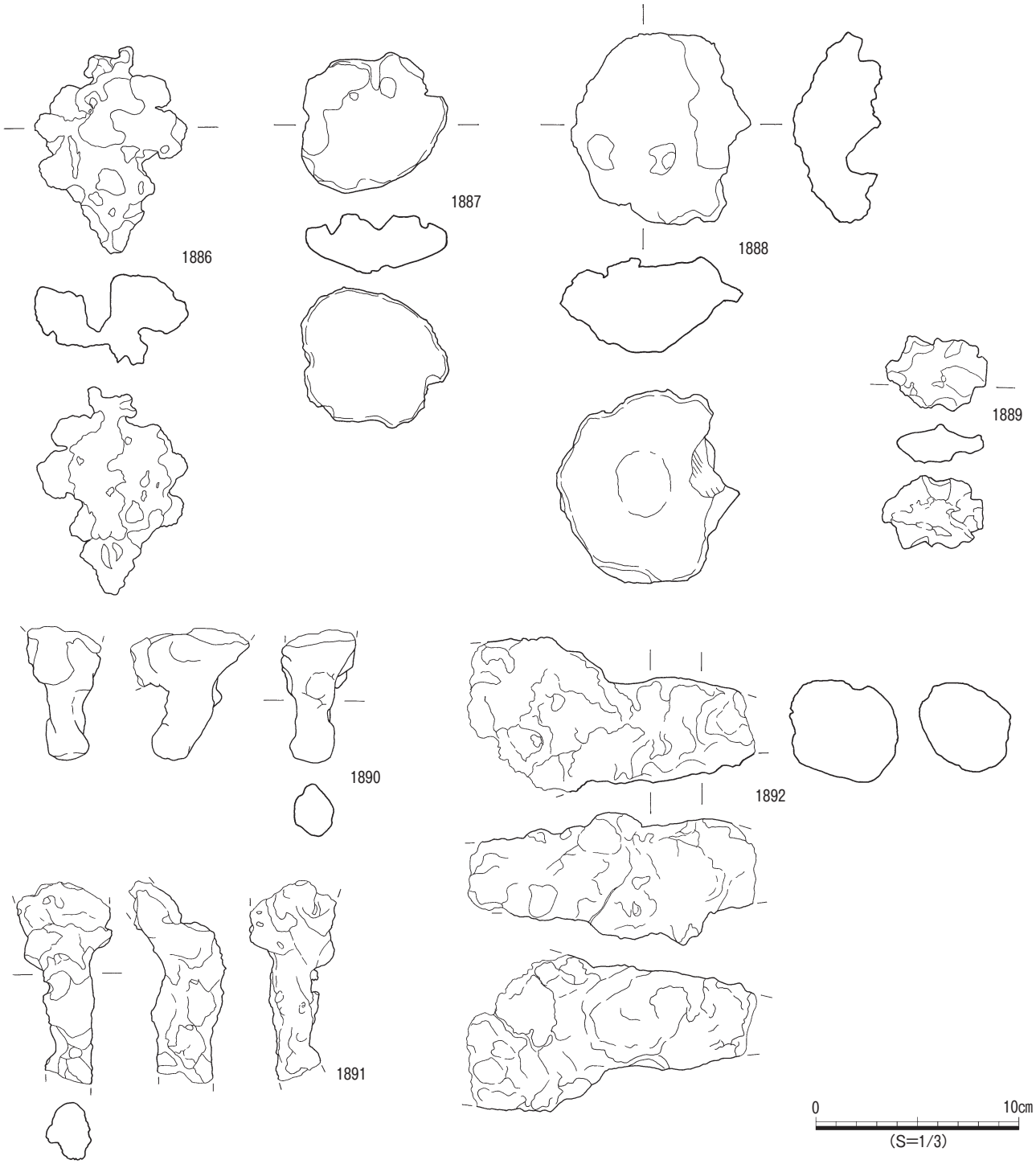


第331図　自然流路１断面１付近出土遺物（３）

これは琉球において多くみられるもの(沖縄では「ジーファー」と呼称）に類似するもので，奄美大島のノロ宅に伝承するかんざしにも類似のものが存在する（金属製品に関しては久保智康氏【京都国立博物館】の教示による部分が大きい)。1871は先端部が鋭く尖り，両側に刃部を持つものである。剣あるいはヤリガンナの可能性が考えられる。

1872は銭貨である。斜めに半分近く欠損しており，銭文も右側と下側の二文字が残存しているが，明瞭ではない。かろうじて「〇宋通〇」か「〇鳳通〇」と読める。前者であれば，「皇宋通寶」で初鋳は北宋の1038年で，後者であれば「龍鳳通寶」で初鋳は宋の1355年である。後者であれば非常に稀少なものであるが，字体が篆書であることから前者の可能性が高いと考えられる。

1873～1895は鉄滓である。1873～1889は「鍛錬鍛冶」



第332図　自然流路１断面１付近出土遺物（４）

と呼称される工程で生じた鉄滓である。1873～1875は，「平面長方形椀型滓」と呼称されるもので，刀剣など鍛打する際に生じた鉄滓の可能性がある。1876～1878・1880～1889は，「椀形鍛冶滓」である。この中で，形状・表面の様子などの特徴から1877・1878・1880・1881は「楕円状椀形滓」，1882は「小型椀形滓」，1886～1889は「ガラス質椀形滓」に分類される。1879は「炉底塊」である。文字どおり鍛冶炉の底部に生じた鍛冶滓で，鍛冶炉の形状が窺われるものである。隅丸方形状を呈するもので，送風痕（羽口から吹く風によってできた「めくれ」）が観察される。1890～1895は，「精錬鍛冶」と呼称される工程で生じた鉄滓である。なお，「精錬鍛冶」は「鍛錬鍛冶」の前の工程とされている。これらの遺物はいずれも「流出孔滓」である。鍛冶炉の炉内にたまった「炉内滓」を抜き出す排出孔にたまった鉄滓で，これらの遺物から排出孔のようす（大きさ・太さ・傾き）などが窺われる。1896～1901は羽口である。他にも数十点出土しているが，良好なもののみを選別した。いずれも一端がガラス化するもので，この部分を鍛冶炉に直接向けて送風を行っていたであろうことが推察される。特に1897は高温によって溶解した部分がガラス化して流れる様子が明瞭に観察されるもので，ほぼ45°の角度で「羽口」に固定してあったことが推測できるものである。

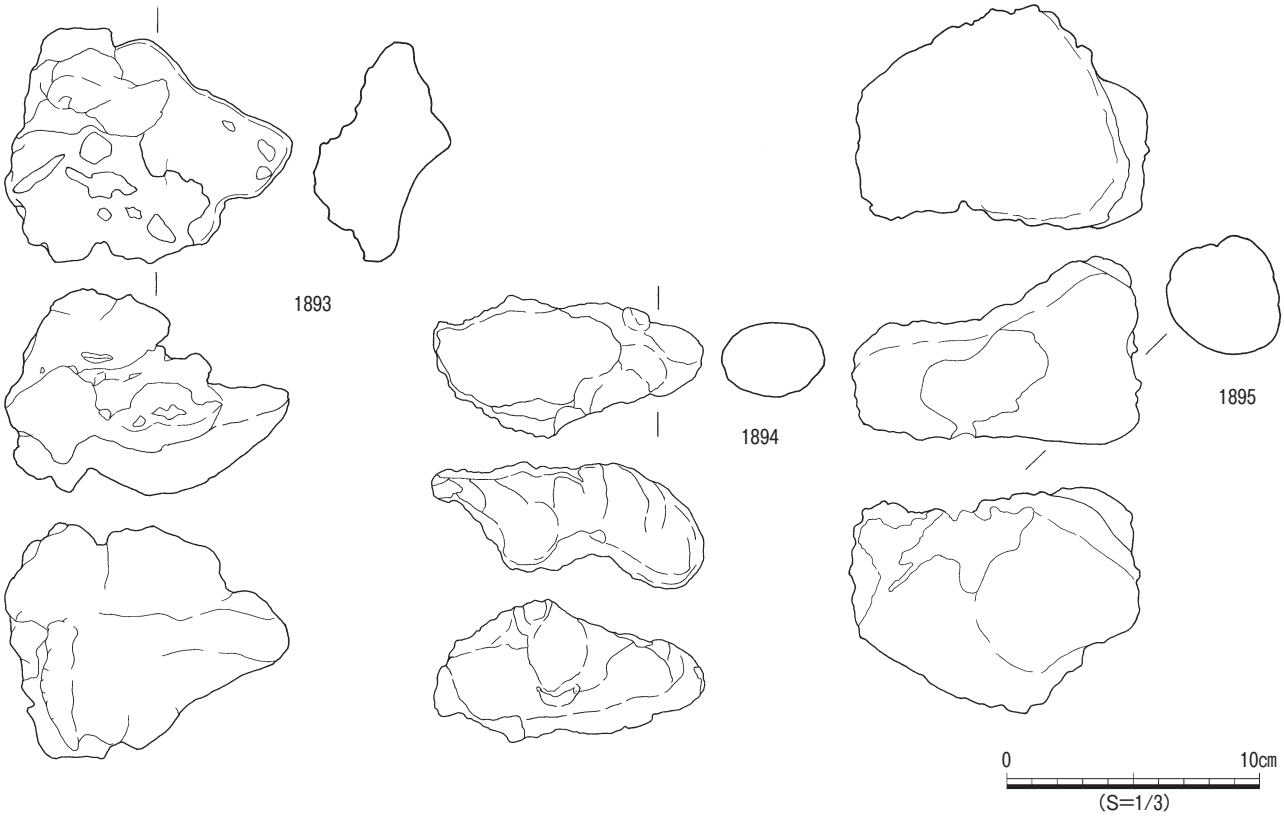
1902・1903は肥前陶器の碗である。1902は内外面に白土による刷毛目が施される。1903は見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。1904は肥前磁器の皿であるが，白濁した釉薬がかかり，半陶半磁状の胎土を呈する資料である。

自然流路２（第335図）

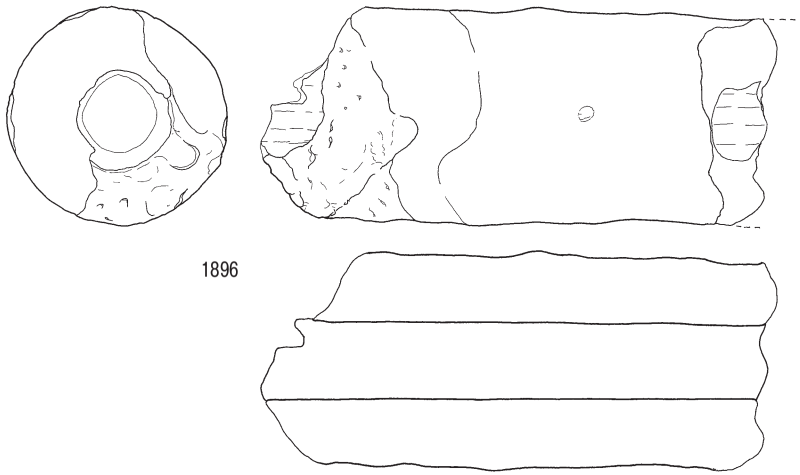
C～E-26区で検出された。南北方向へ約21.5m延びる。幅約7.5mで北側は2.5mと狭くなり，検出面からの深さ約30cmである。遺構埋土上位に硬化面が形成され，道として利用されていたと推測される。

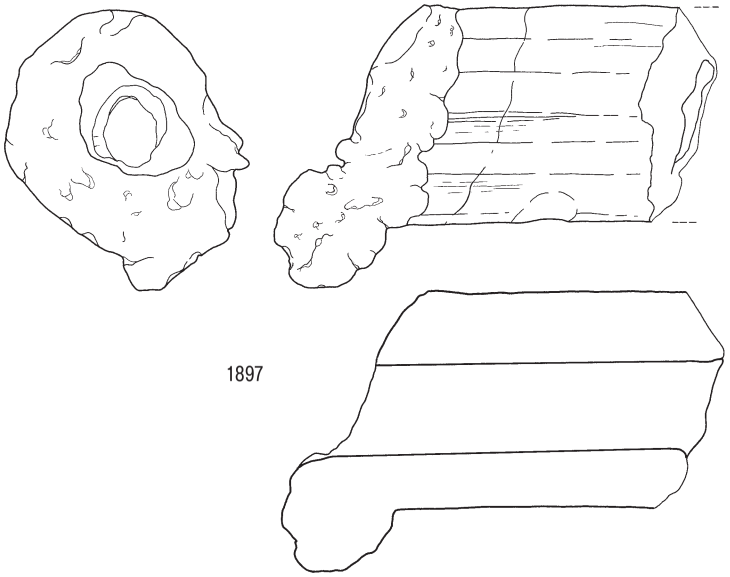
出土遺物（第335図）

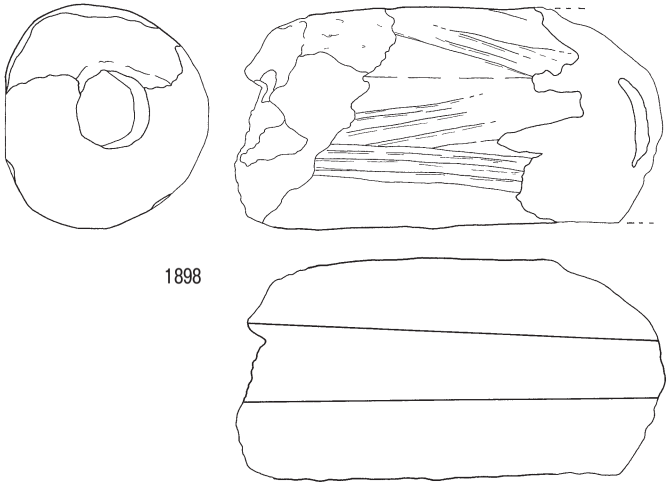
1905は頁岩製の砥石である。表面中央に縦方向の溝状の研ぎ跡がみられる。溝幅約1.2cmである。1906はやや小形の羽口である。

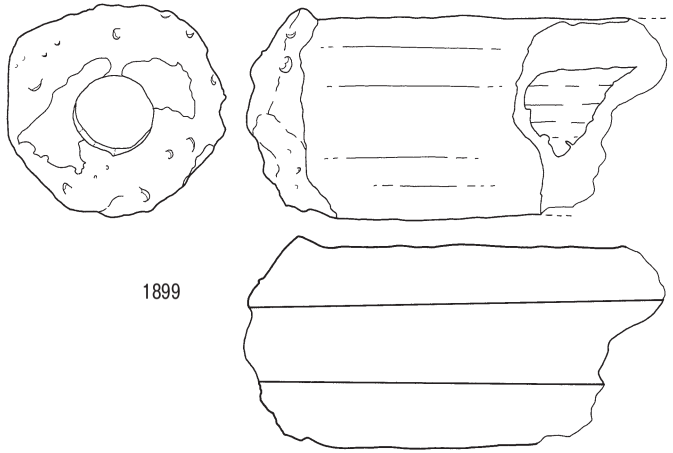


第333図　自然流路１断面１付近出土遺物（５）





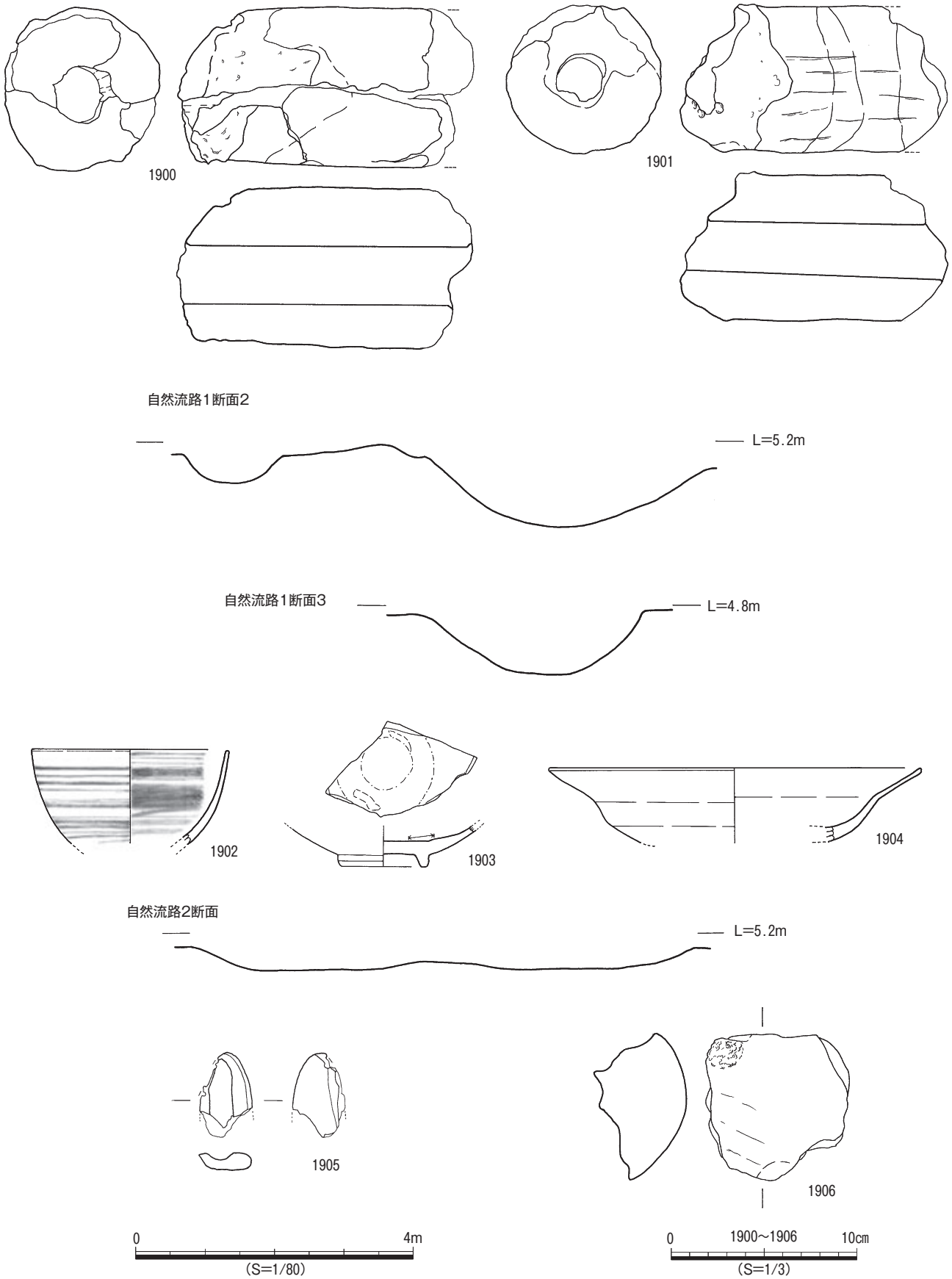




0 10cm

(S=1/3)

第334図　自然流路１断面１付近出土遺物（６）



第335図　自然流路１断面２，断面３，自然流路２断面・自然流路１断面１，断面３付近，自然流路２出土遺物

（4）遺物

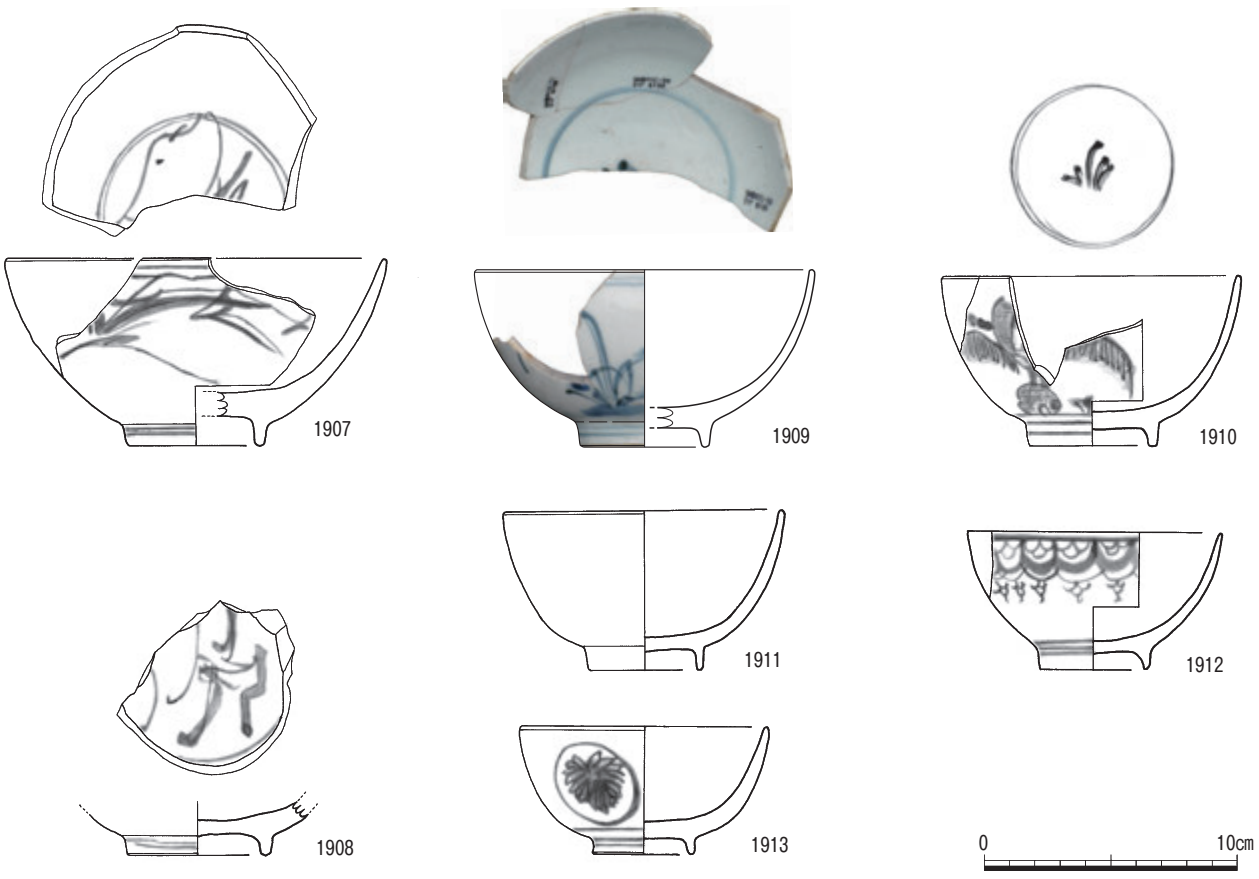
磁器

碗（第336～339図）

1907～1924は肥前系の丸碗である。1911は白磁で，その他は全て染付である。1907・1908は見込みに，波の間から鯉が飛びはね上には雲が描かれる荒磯文が描かれるが，かなり簡略化されている。輸出向けに生産された碗と考えられている資料である。器形はやや大振りで，碗の範疇に入れたが，鉢ともとらえられる資料である。1907は外面に竜の文様が描かれる。1908は底部のみの資料である。1909・1910は見込みに二重圏線と草文が描かれ，1909は外面に草花文，1910はソテツの文様が描かれる。２点とも器壁は薄手で，上手の作りである。器形はやや大振りである。1911は器壁が薄手の白磁である。高台は細く尖る。1912は外面口縁下位に輪宝繋文が描かれる。1913はコンニャク印判により家紋がスタンプされる。1914～1918は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1915・1918は五弁花が矮小化している。1914は外面青磁釉の資料で，高台内底には「渦福」が描かれる。内面口縁下位は四方襷文が描かれる。1915の見込みは蛇の目釉剥ぎが施され，重ね焼きを行った際の高台畳付の痕跡が輪状に残る。外面には，コンニャク印判によりスタンプされた家紋風の文様が入る。1916～1919は，外面に丸文が描かれる資料である。1916～1918は胎土が灰色を呈し，1916の高台内底には，一重方形枠の中に変形文字が記された裏銘がみられる。1917には，さらに簡略された変形文字の裏銘が記される。1918は見込みに蛇の目釉剥ぎが施され，重ね焼きを行った際の高台畳付の痕跡が残る。1919は外面に丸文と格子文が描かれ，見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。1920は胎土が灰褐色を呈する。外面には梅花文が描かれる。1921は外面に草花文が描かれる。裏銘が記されるが，判読できない。1922は焼成不良のためか，呉須の発色が悪く透明釉も熔けていない。肥前系の資料としたが，中国産の可能性も残るものである。1923は胎土が灰色を呈し，一重網目文が描かれる。1924は二重網目文が描かれる。

1925～1929は厚手で，深さの浅い丸碗である。すべて肥前系の資料である。見込みには蛇の目釉剥ぎが施され，特に1925～1928のものは幅広に釉剥ぎされる。1925は，外面に線描きの丸文が描かれる。1926は梅花文が描かれる。1927は胎土が灰色を呈し，外面には折れ松葉文が描かれる。1928はコンニャク印判による菊文がスタンプされる。1929は外面に梅花文が描かれる。

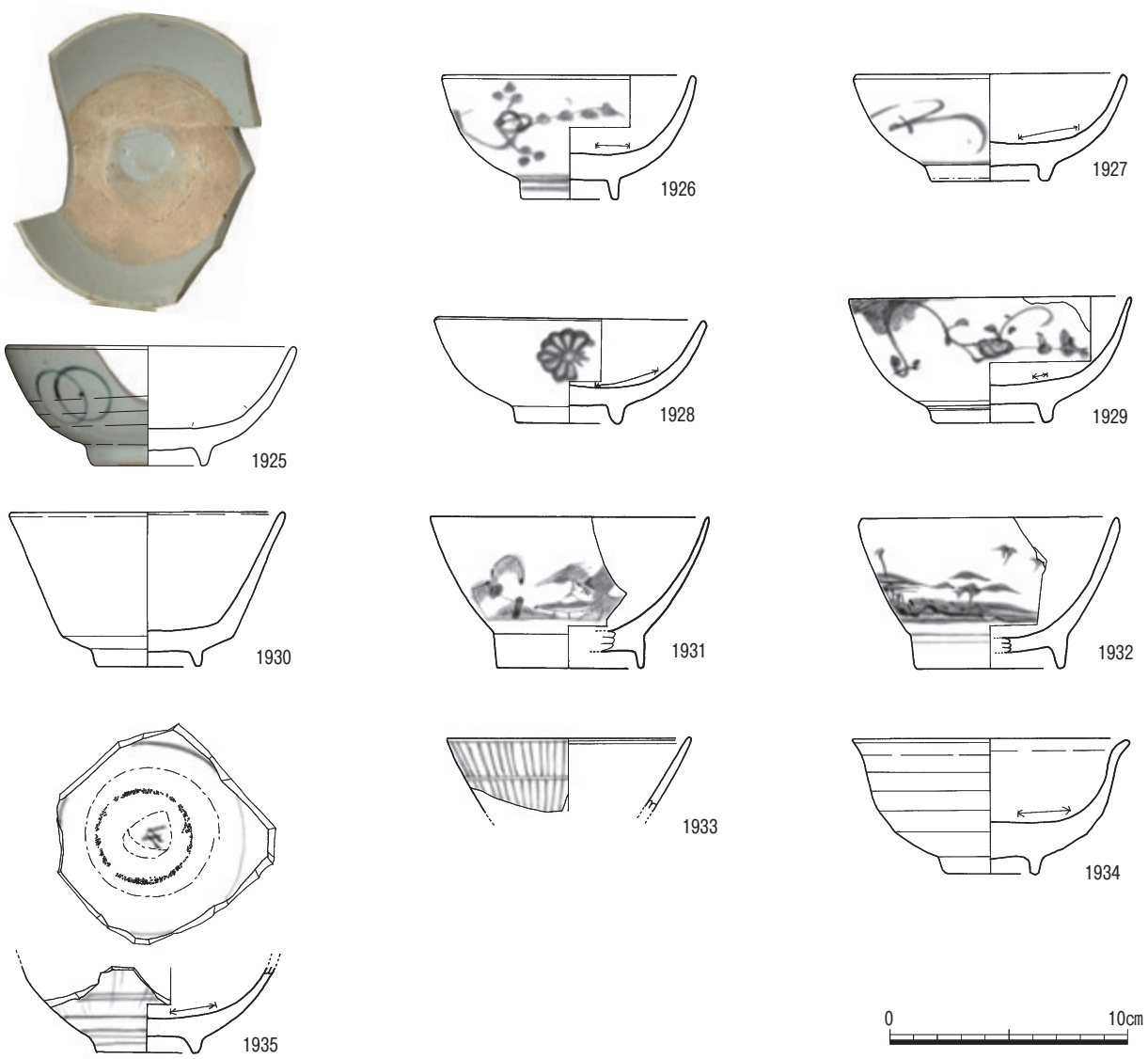
1930は，朝顔形の白磁碗である。体部は腰部で内側に



第336図　磁器１　碗



第337図　磁器２　碗



第338図　磁器３　碗

に屈曲し，口縁部にかけて逆ハの字状に開く。

1931・1932は広東形の碗であるが，一般的な広東碗に比べ高台が低く厚手である。どちらも外面には山水文が描かれる。

1933は小広東碗である。外面には線状に簡略化された梵字文が描かれる。器形はやや小振りである。1930～1933は在地産の可能性も考えられる資料である。

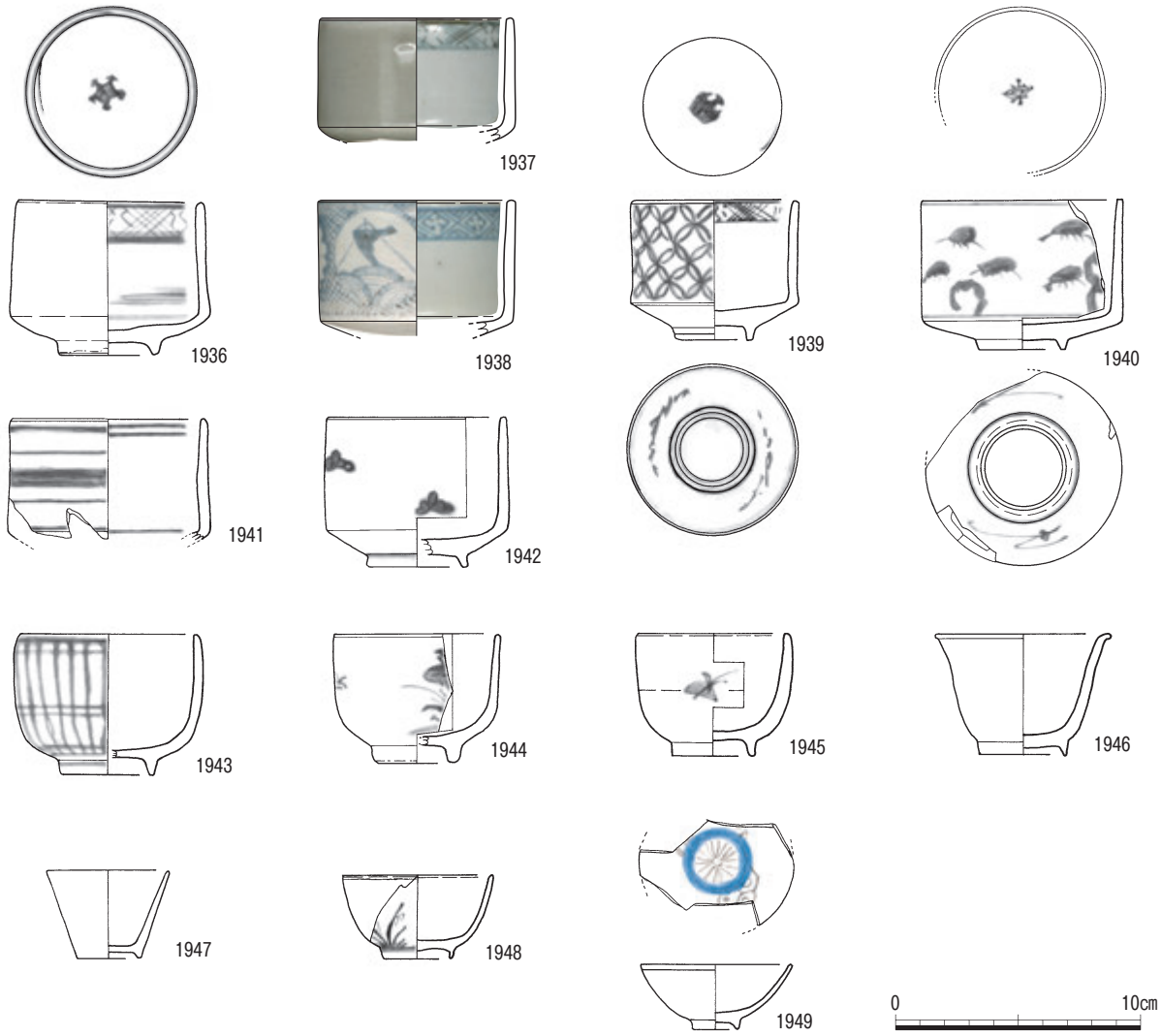
1934・1935は端反形の碗である。２点とも在地産と考えられる資料である。1934は白磁である。器壁が厚手で，外面にはロクロ引きの稜線が明瞭に残る。見込みには幅広の蛇の目釉剥ぎが入る。1935は端反碗の底部である。外面と見込み中央には格子文が描かれ，見込みには蛇の目釉剥ぎと重ね焼きの際の高台痕が残る。

1936～1942は肥前系の筒形を呈する碗である。

1936・1937は外面が青磁釉で，内面口縁下位に四方襷文が描かれる。1937は底部が欠損しているが，２点とも見込みにはコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1938は焼成不良のためか，呉須の発色も悪く，透明釉に光沢がない。外面には菊文と帆かけ舟文，内面口縁下位には四方襷文が描かれる。1939は，外面に二重網目文が描かれるもので，腰部には折れ松葉文が２か所描かれる。見込みには矮小化したコンニャク印判五弁花がスタンプされる。1940は外面に雪持笹文，腰部に略された折れ松葉文が描かれる資料である。見込みに虫文が描かれる。肥前系としたが，在地産の可能性も考えられる資料である。

1941は外面に横縞文が描かれる。1942は胎土が灰白色を呈するもので，呉須の発色も悪く，灰色みを帯びる。

1943～1945は腰部が丸みを帯びる筒丸形の碗である。1943は外面に格子文が描かれる。透明釉が青みがかって



第339図　磁器４　碗・小坏

おり，在地産の可能性が考えられる資料である。1944・1945は外面に草花と蝶が描かれる。1945はやや小振りである。

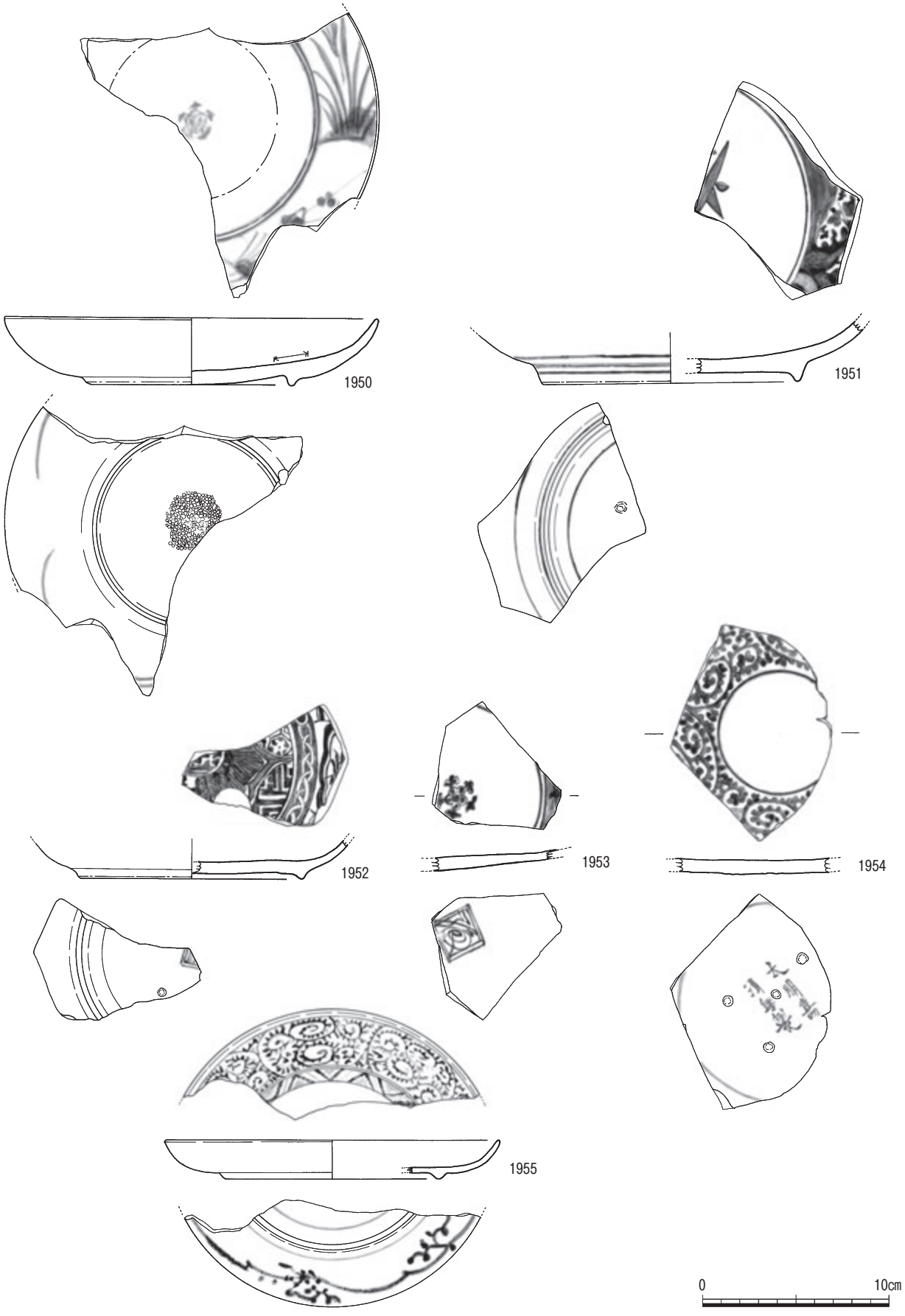
小坏（第339図）

1946～1949は小坏である。1946・1947は白磁である。1946は端反形を呈する。内面と畳付に焼成時に熔着したと思われる砂粒が観察される。小坏として報告するが，器形がやや大振りであるため，他の器種の可能性も考えられる。1947は，高台から口縁部までが直線的につながる桶形を呈する。肥前系としたが，在地産の可能性も考えられる資料である。1948は外面に草花文が描かれる。1949は清朝磁器である。見込みには菊文が描かれ，釉剥ぎ部分には青色の顔料が塗布される。

皿（第340～343図）

1950～1974は染付の皿である。1950～1955は肥前産の大皿である。1950は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされる。蛇の目釉剥ぎされた部分には，重ね焼きの際の高台痕が観察される。高台内底には，砂状の目跡が熔着する。1951は，高台内底にハリ支えの目跡が残る。1952は高台内底に「角福」と思われる銘とハリ支えの目跡が観察される。1953･1954は底面部のみの資料である。1953は見込み中央に手描き五弁花，高台内底に「角福」が描かれる。1954は内面に蛸唐草文が描かれる。高台内底には「大明嘉靖年製」の文字が記され，ハリ支えの目跡が残る。1955は内面に蛸唐草文，裏文様に唐草文が描かれるが，釉は透明度が低く，呉須は黒みを帯びた発色で，かすれている。

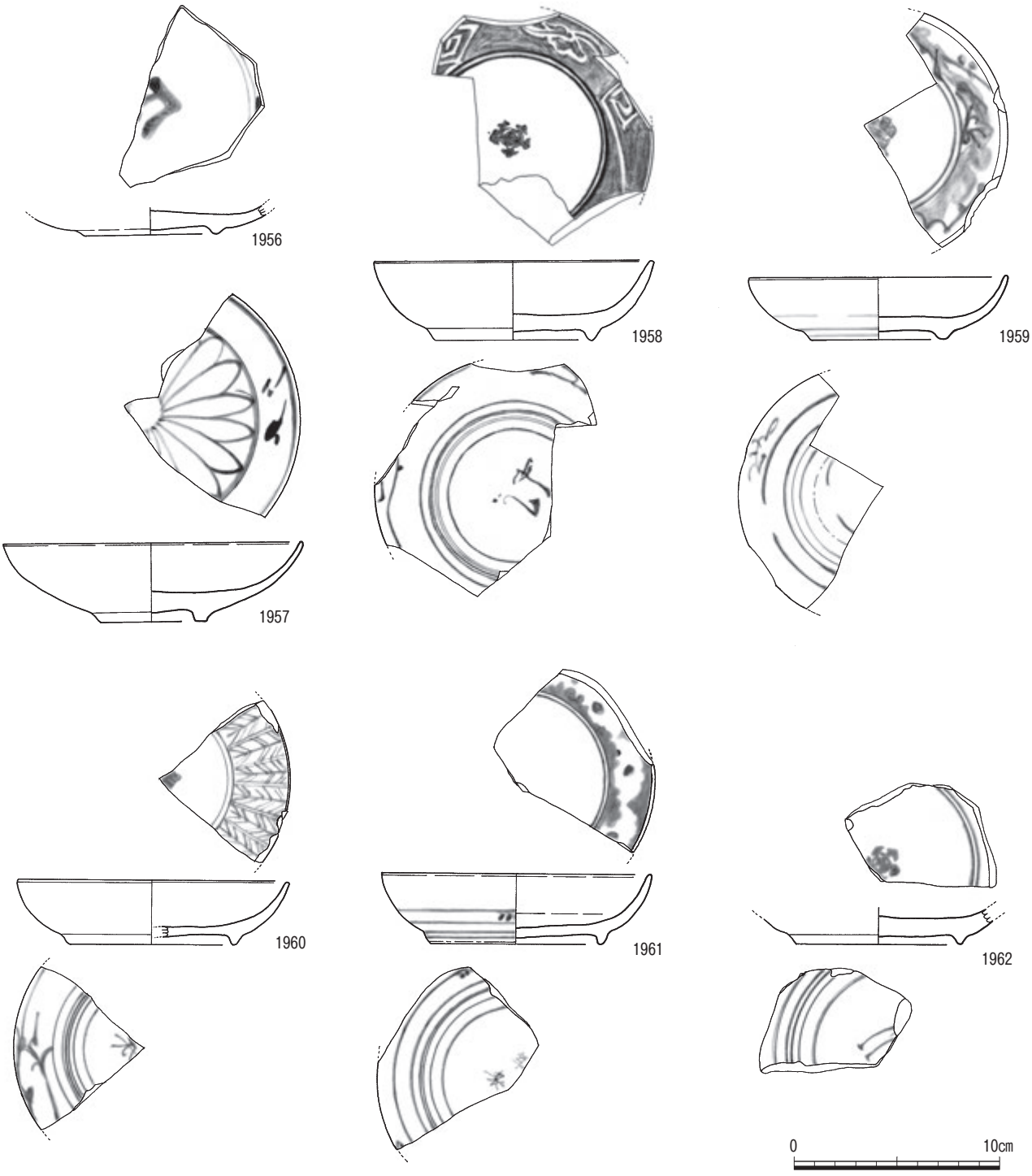
1956～1961は中皿である。1956・1957は初期伊万里の



第340図　磁器５　皿

皿である。1956は底部のみの資料で，見込み部分に描かれた「日」の文字の一部が描かれる。海外輸出向けにつくられた日の字鳳凰文の皿と思われる。畳付には白色の砂粒が熔着している。1957は，見込み全体に菊花文が描かれる資料である。口径に対して高台径が小さく，高台は断面四角形状を呈する。1958～1962は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされるものである。

1958の内面は墨弾きの技法により文様が描かれる。高台内底に裏銘が記されているが，判読不能である。1959は胎土が灰色みを帯び，呉須の発色も悪い。1960は内面に矢羽根文，裏文様に簡略化された唐草文が描かれる。呉須の発色が悪く，灰色みを帯びる。高台内底の銘は残存部が少ないため判読できない。1961は高台内底に「年製」の文字がみられる。内面には雪之輪文が描かれる。



第341図　磁器６　皿



第342図　磁器７　皿

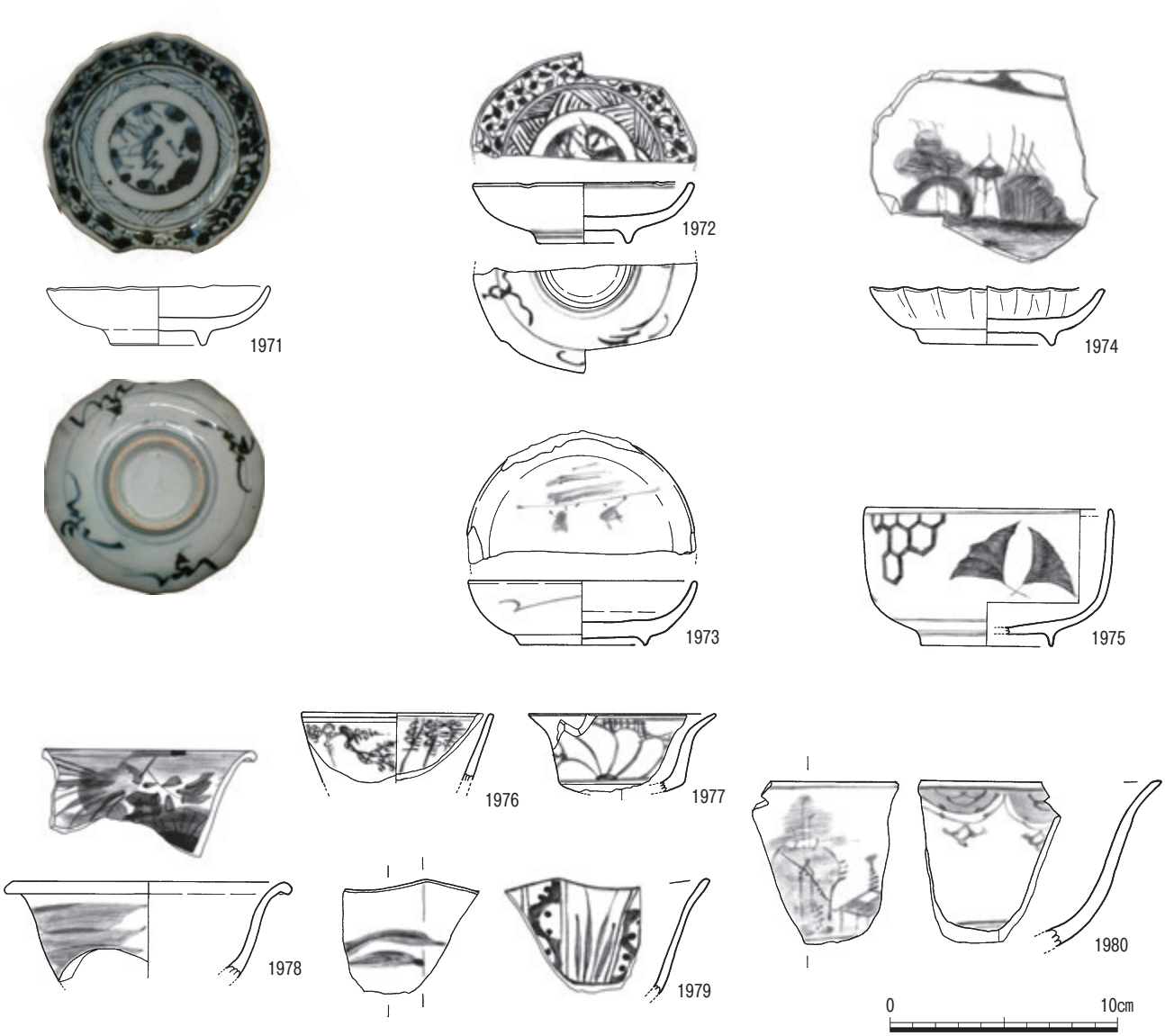
1962は胎土が灰色を呈するもので，呉須も鉄色に発色している。高台内底の銘は残存部が少ないため判読できない。

1963～1966は中形の深皿である。1963は，焼成不良のためか透明釉が白濁し，呉須の発色も悪い。1964は輪花皿である。高台は蛇の目凹型高台を呈し，釉は中央の凹んだ部分まで施釉される。裏銘は，「□化年製」（□は判読不能）と記されている。見込みは松竹梅文，内面は墨弾きと濃により文様が描かれる。裏文様は一筆書きではなく，縁取りをした唐草文が描かれる。1965は高台が蛇の目凹型高台を呈し，見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。1966は型作りの菊花皿である。白磁であるが，口唇部には口錆が施される。高台は蛇の目凹型高台である。1967・1968は見込みに幅広の蛇の目釉剥ぎが施され，重ね焼きの痕跡が残る。在地産の可能性が考えられる。

1969～1974は小皿である。1969は端反の皿で，口縁部に四方襷文，見込みに山水文が描かれる。1970は釉薬の胎土が灰白色を呈し，呉須の発色も悪い。外面には山水文が描かれる。1971・1972は輪花皿で，内面に細かい唐草文と松竹梅文が，裏文様に略された唐草文が描かれる。1972は顔料にコバルトが使用されている。1973・1974は内面に山水文が描かれたもので，1974は輪花皿である。

鉢（第343図）

1975～1980は染付の鉢である。1975は腰部が張る形状のものである。内面口縁下位は釉剥ぎされており，蓋付の鉢と考えられる。1976・1977は小形もので，鉢として分類したが，他の器種の可能性も考えられる。1978は，口縁部が大きく外反する。1979は口縁部が六角もしくは八角形を呈する鉢である。1980は大振りの鉢で，口縁部



第343図　磁器８　皿・鉢

は緩やかに外反する。外面には山水文が描かれる。

蓋（第344図）

1981・1982は飯碗の蓋である。1981は端反碗の蓋で，外面と内面口縁下位には染付で格子文が描かれる。1982は朝顔形碗の蓋で，白磁である。1983～1985は蓋物の蓋である。３点ともつまみ部分が欠損しているが，1985はアーチ状のつまみが付く。

その他（第344図）

1986は磁製の紅皿である。在地産の資料である。外面は型作りにより菊花状につくられ，内面のみ透明釉がかかる。1987はうがい碗と思われる。体部は逆ハの字状で直線的に開く。内面口縁下位に文様が描かれる。1988は油壺である。外面には梅花文が描かれる。1989は白磁の仏飯器である。在地産の資料と思われる。1990は白磁の徳利であるが，産地・年代ともに不明の資料である。近世磁器ではない可能性も残る。底部は碁笥底を呈し，畳付部分は釉剥ぎされる。透明釉が緑がかり青磁のようにもみえる資料である。1991は波佐見焼のコンプラ瓶である。肩部は張らず，なで肩である。一部欠損しているが，外面肩部には呉須で「JAPANSOHZOYA」と書かれるものと思われる。



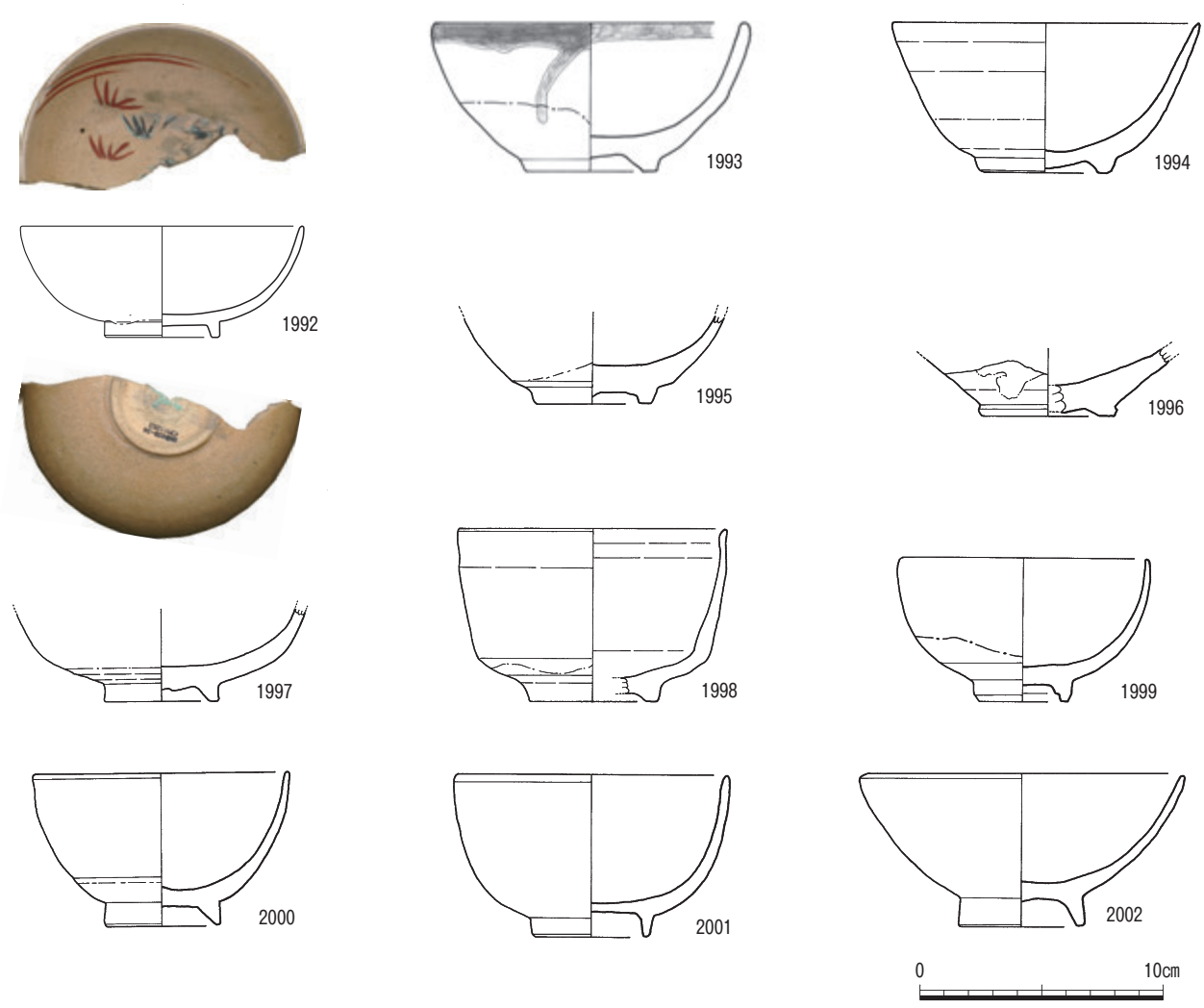
第344図　磁器９　蓋・その他

陶器

碗（第345・346図）

1992～2019は碗である。1992は京焼である。見込みには上絵付が描かれる。1993～2012は肥前陶器である。1993は灰色の灰釉の上から口唇部に鉄釉をかけたもので，皮鯨と呼ばれるタイプの資料である。1994は鈍い褐色の胎土に灰色の灰釉がかかるもので，見込みに胎土目の痕跡が残る。1995は，褐色の胎土に黒褐色の釉がかかる。腰部にはヘラ削りが施されるため，段を有する。1996は天目碗の底部と思われる。胎土は内面灰色，外面赤褐色を呈し，黒釉が厚くかかる。1997は腰が張り，1998は腰部が強く屈曲する形状の碗である。２点とも，内面と外面腰部まで黒釉が厚くかかる。1997の畳付には胎土目の痕跡が残る。1999・2000は内面に透明釉，外面に銅緑釉がかかる。2001は呉器手碗である。黄色みがかった胎土に，畳付以外に釉がかけられる。2002は黄色みがかった胎土に，畳付以外に釉がかけられる。2003～2007は京焼風陶器である。黄白色の緻密な胎土に透明釉がかけられ，外面腰部から高台内底は露胎する。2003～2005は煎じ碗形を呈するものである。2005の外面口縁下位には，鉄絵の笹文が描かれる。2006は筒丸形，2007は半筒形の資料である。どちらも外面には鉄絵の山水文が描かれる。2008は底部である。見込みには崩された「壽」と思われる文字が描かれる。2009・2010は腰が張る器形の陶胎染付である。灰色の胎土に，白化粧土をかけ山水文を描く。2011は筒丸形の碗で，内外面に白土による巻刷毛目が施される。2012は外面に蛍手，内面に打刷毛目が施される。

2013～2019は薩摩焼の碗である。2013～2017は龍門司系の碗である。2013の高台は竹節状に削り出され，畳付を除き飴釉が施釉される。初期龍門司と考えられる資料である。2014は褐釉がかかる口縁部である。2015は畳付を除き，黒褐色の釉がかかる。2016は白化粧土に透明釉をかけた資料である。畳付から高台内底は露胎する。見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。2017は黒褐色の釉がかかるが，畳付から高台内底は露胎する。



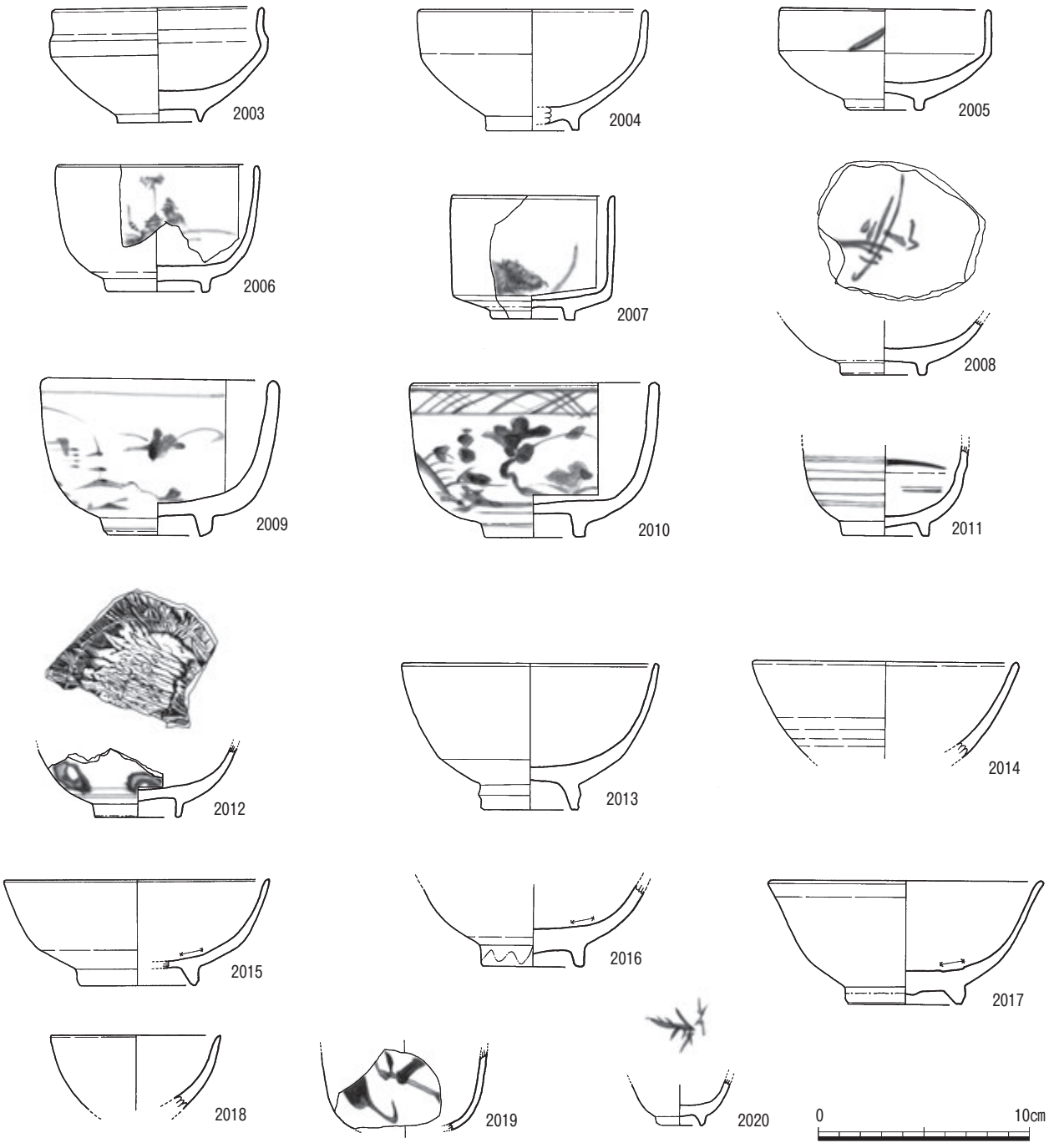
第345図　陶器１　碗

2018・2019は小碗と考えられる資料で，竪野系の白薩摩である。2019は外面に鉄絵（文字か？）が描かれる。

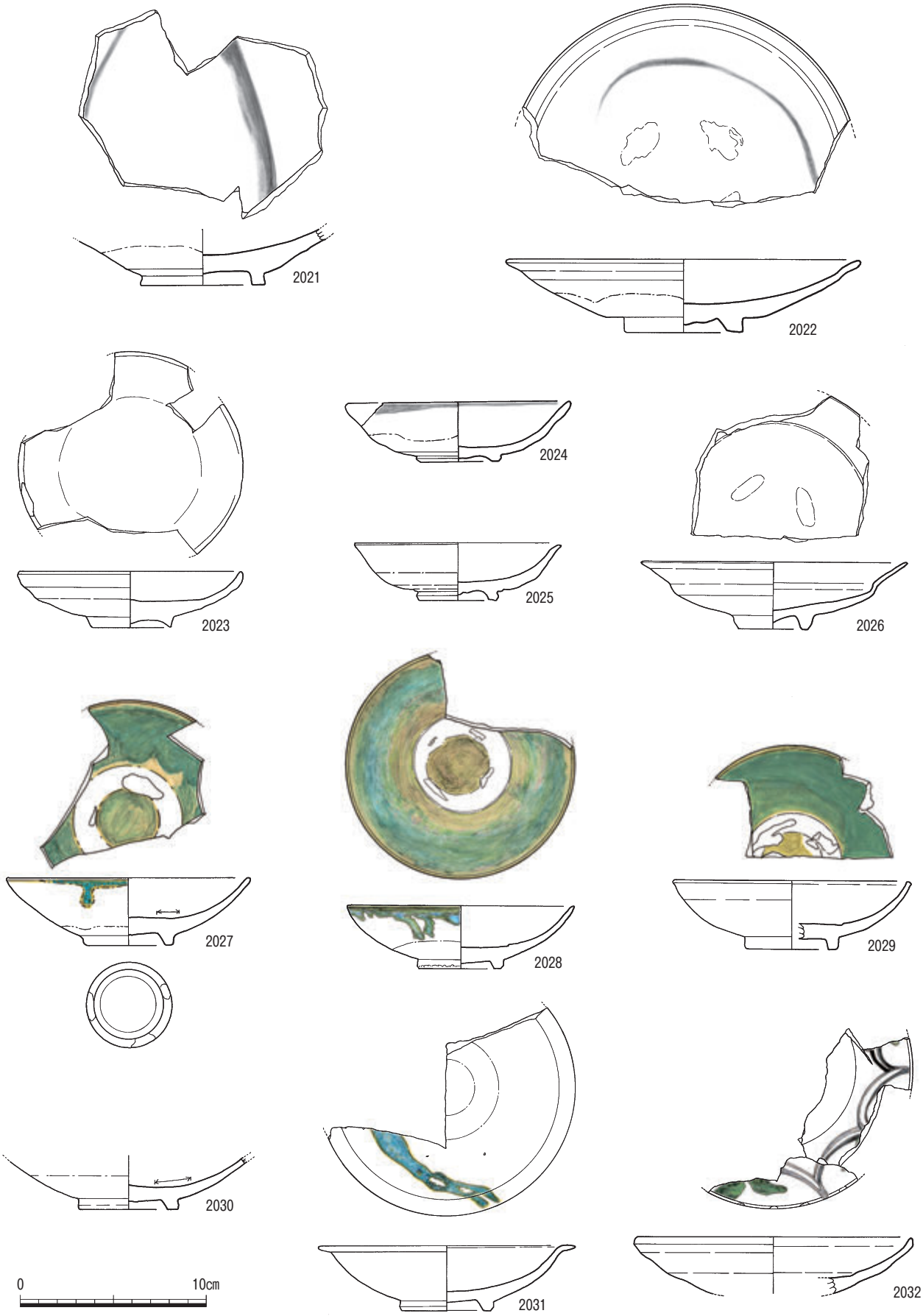
2020は竪野系の白薩摩で，小坏である。見込みに呉須で松葉文が描かれる。

皿（第347図）

2021～2032は肥前陶器の皿である。2021・2022は内面に鉄絵が描かれた大皿である。2022は見込みに砂胎土目の痕跡が残る。2023は灰色の灰釉がかかる。2024は灰色の灰釉の上から口唇部に鉄釉をかけたもので，皮鯨と呼ばれる資料である。2026は見込みに砂目が残る。2027～2031は内野山窯産の資料である。５点とも，見込みは蛇の目釉剥ぎされる。2027～2029は外面に透明釉，内面に銅緑釉がかかる。2030は，内外面とも鉄釉がかかる。2031は口縁端部が強く外側に屈曲する。内外面に透明釉をかけ，内面の一部に銅緑釉を流しかける。2032は陶胎染付の皿である。灰色の胎土に白化粧土をかけ，その上から呉須で文様を描く。



第346図　陶器２　碗・小坏

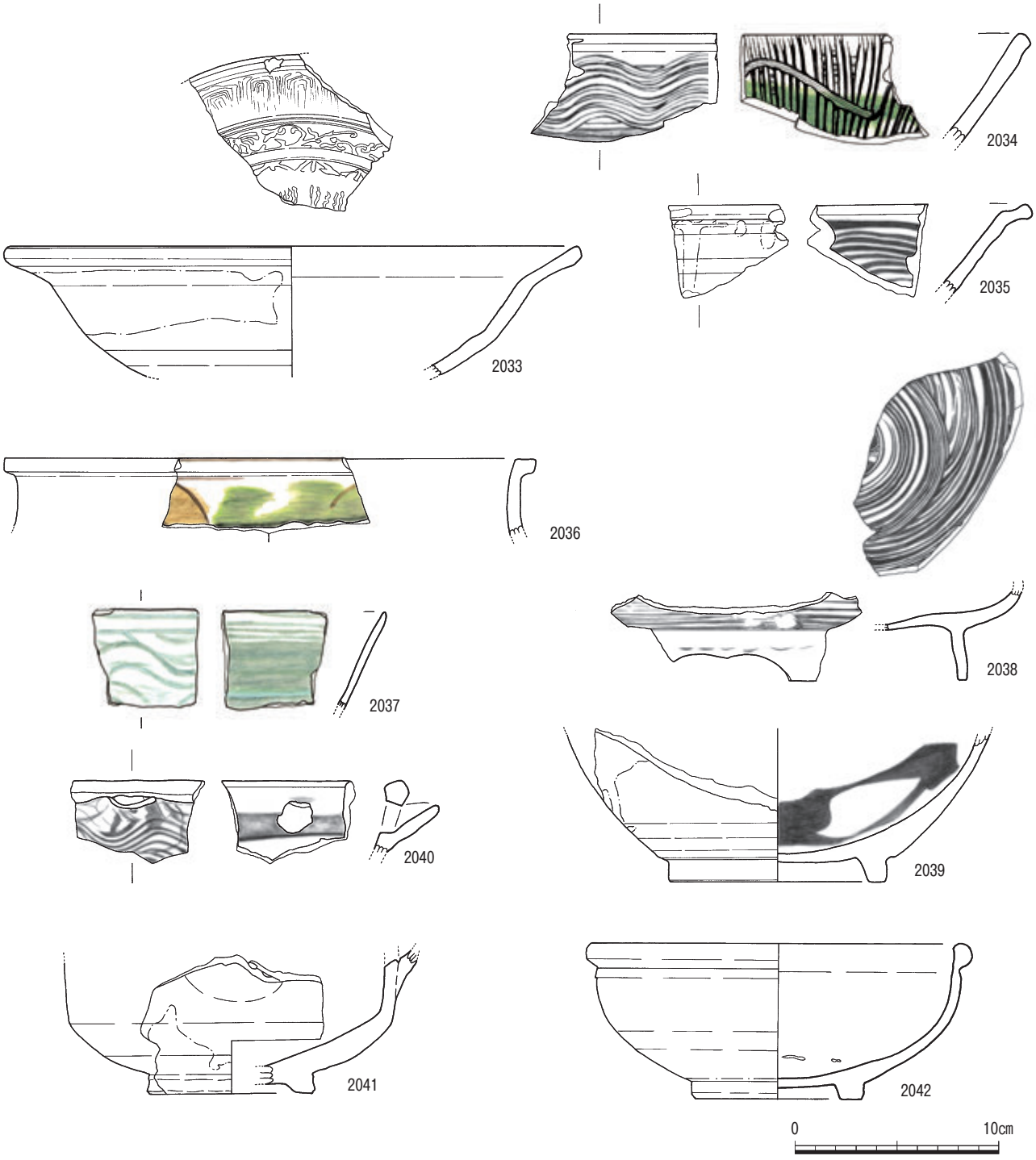

2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2030
2031
2032
0
10cm

第347図　陶器３　皿

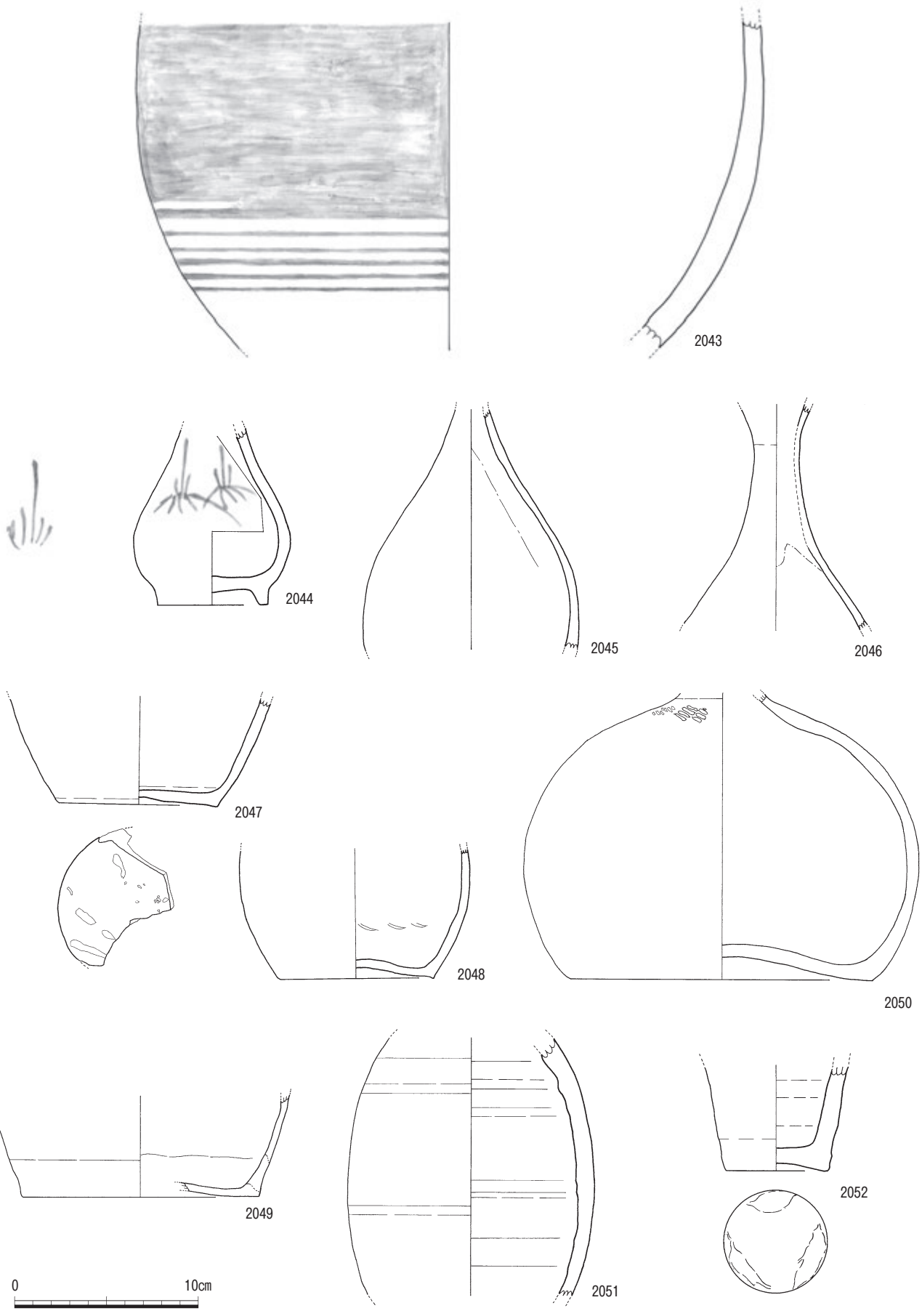
鉢・片口（第348図）

2033～2039は肥前陶器の鉢である。2033の文様は印花であるが，白象嵌は行われていない。2034は外面に白化粧土の刷毛目を施し，内面は白化粧土を掻き落として縦縞文様を入れ，上から緑釉をかける。2035は口縁端部が外側に短く折れる形状の鉢である。内面に白土の刷毛目が施され，褐釉がかかる。2036は内外面に白化粧土がかけられ，外面下位は鉄泥が塗布される。2037は外面に白土による刷毛目が施され，上から緑釉がかかる。鉢としたが他の器種である可能性も考えられる。2038は高台が高く，一部に抉りが入る。内外面には，白土による巻き刷毛目が施される。2039は胎土が赤褐色を呈し，内面と外面腰部まで白化粧土がかけられる。内面濁した釉がかけられる。

2040～2042は肥前陶器の片口である。2040は片口部である。白土による刷毛目が施される。2041は，片口部がわずかに残存している資料である。内面灰色，外面鈍い赤褐色の色調を呈する胎土に，灰色の釉がかかる。2042



第348図　陶器４　鉢



第349図　陶器５　徳利

は，口縁部が玉縁状を呈するもので，内底面には重ね焼きの目跡が残る。片口部は欠損している。

徳利・瓶（第349図）

2043・2045～2052は徳利，2044は瓶である。2043・2044は肥前陶器である。2043の外面は，鉄泥の上から白化粧土をかけ，筋状に掻き取る。2044は陶胎染付の瓶である。2045～2050は薩摩焼苗代川産の資料である。2045・2046は鶴首形の徳利である。2047～2050は底部である。2050は徳利としたが，形状等から漉瓶の可能性も考えられる。肩に貝目が残る。2051・2052は琉球産の荒焼である。2052は鬼の腕と呼ばれる泡盛用の徳利である。外底面に目跡が残る。

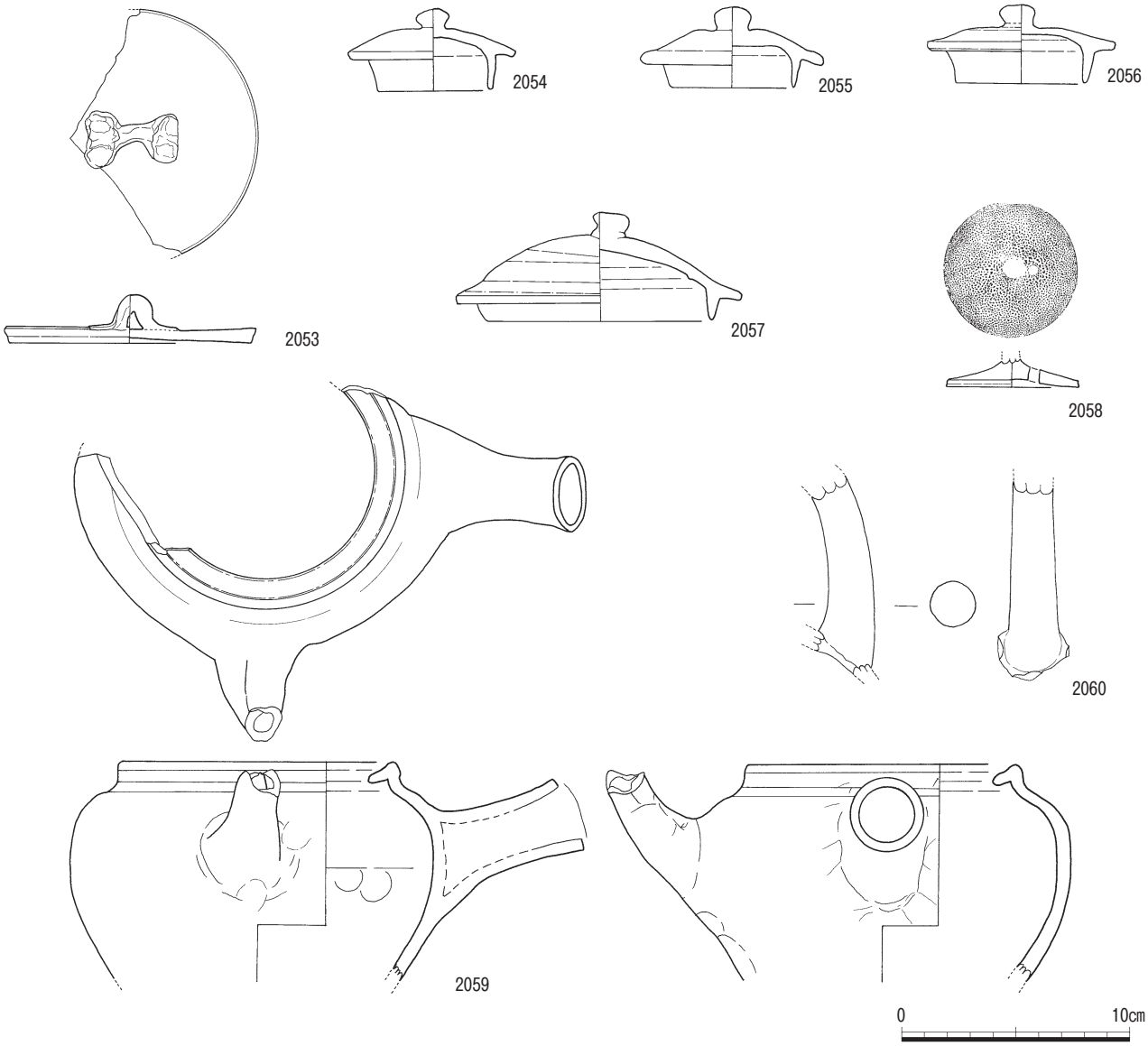
蓋（第350図）

水注，土瓶，釜，急須の蓋を掲載した。2053～2058は薩摩焼である。2053～2057は薩摩焼苗代川産の資料である。2053は水注の蓋である。素焼きのもので，初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2054～2056は土瓶蓋である。上面に鉄釉がかかる。2057は，薩摩で山茶家（やまじょか）と称される釜の蓋である。2058は薩摩焼龍門司窯産の急須の蓋である。上面に鮫肌釉がかかる。

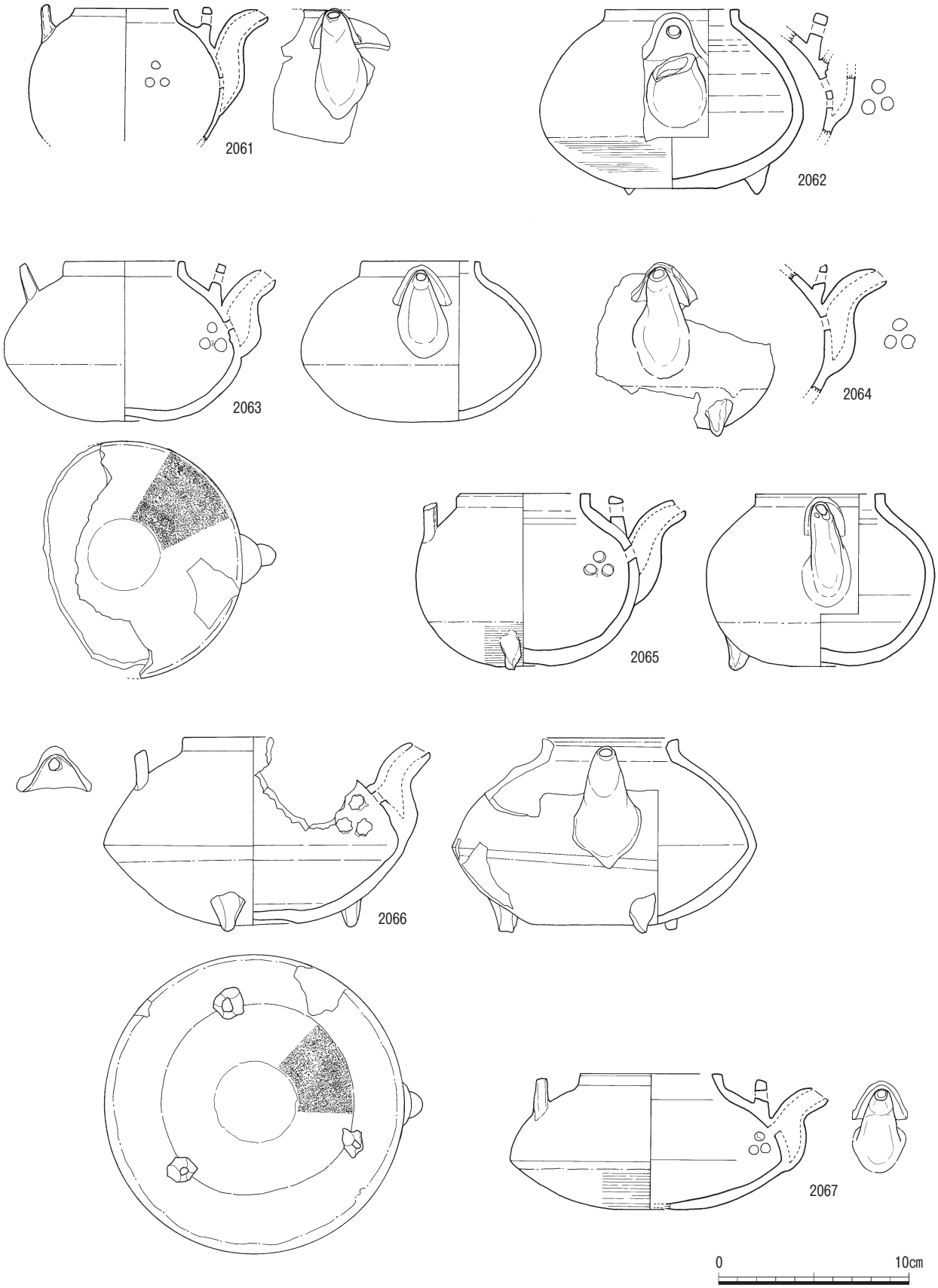
水注・土瓶（第350～352図）

2059は水注である。巻き口の注口を有し，注口に向かって約90度右側に筒状の把手が付く。器面はタタキ成形のあとナデ調整が施されているが，内面には円状のあて具の痕跡が一部に残る。初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2060は水注の把手である。

2061～2069は土瓶である。2061は竪野系の白薩摩である。やや下垂した丸形の形状を呈する。2062～2069は苗代川産の資料で，外面中位まで鉄釉がかかる。口縁脇に



第350図　陶器６　蓋・水注・土瓶

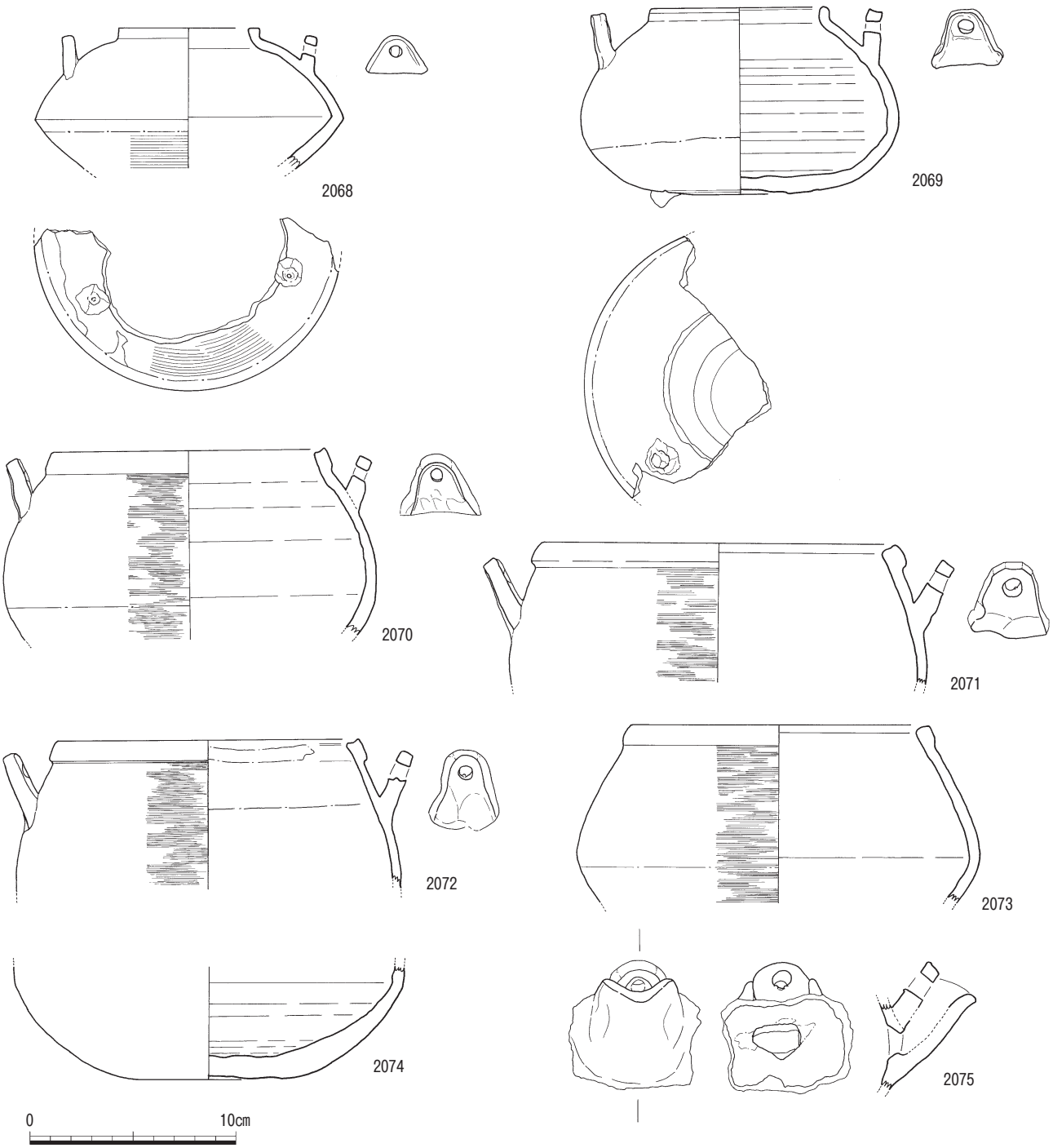


第351図　陶器７　土瓶

は型作りによる三角形状の耳が対で付き，外底面には円錐状もしくは三角錐状の足が３か所付く。外底面には，削り出しによる筋状の工具痕が輪状に残り，中央部は緩やかに凹む。2062～2064はややつぶれた丸形を呈するもので，胴部中央に稜はない。2065は丸形の資料である。2066～2068は平形の資料である。体部は，ソロバン玉状の形状を呈する。2069は，最大径を胴部下位に有する資料である。外底面に重ね焼きの際の痕跡が，沈線状に残る。

釜（第352図）

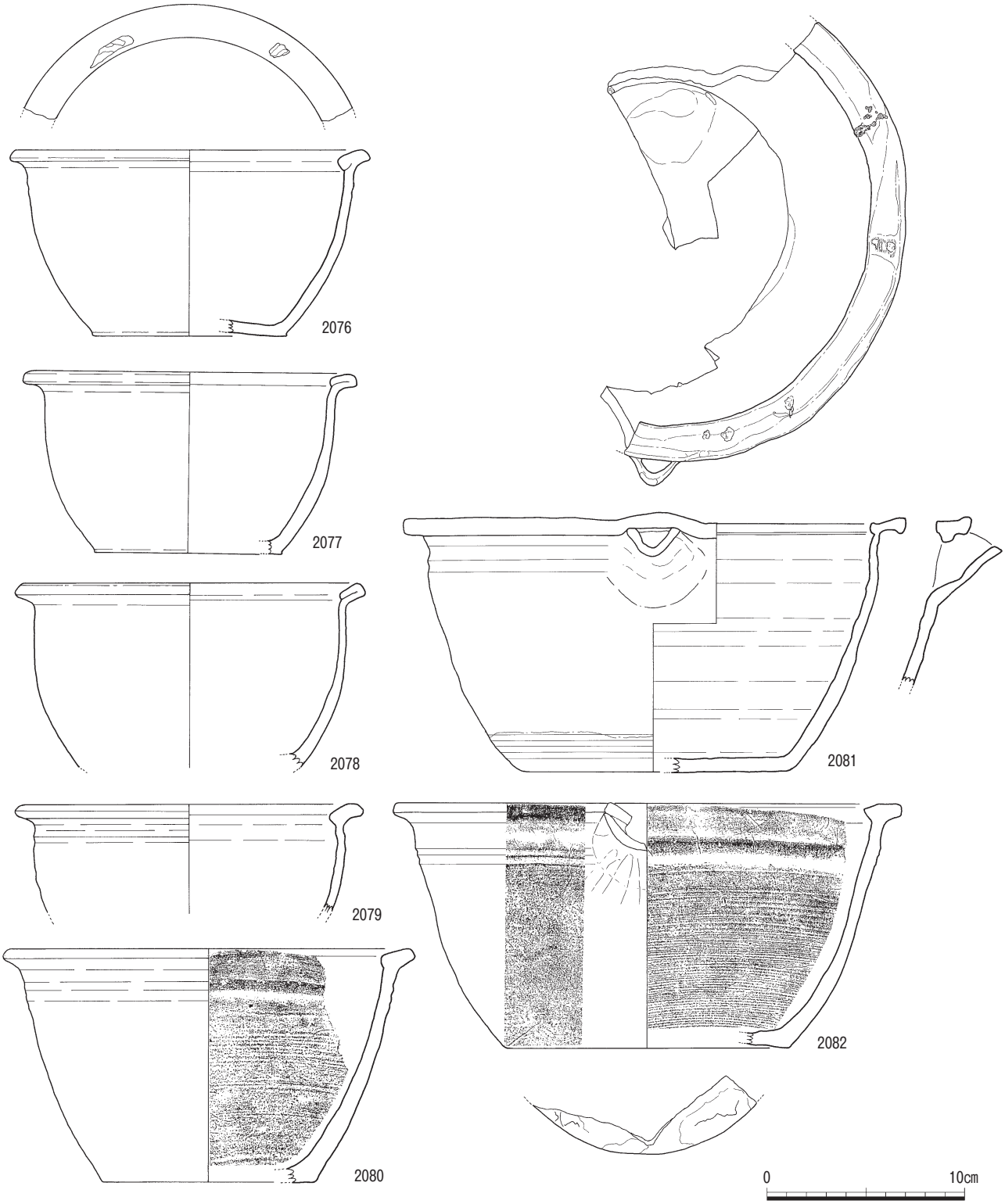
2070～2075は薩摩で「山茶家」と称される釜である。外面腰部まで鉄釉がかかり，口縁下位には型作りによる半楕円状の耳が対でつく。2074は底部である。土瓶のような足はつかない。2075は片口部である。片口の中に一方の耳がつけられる。



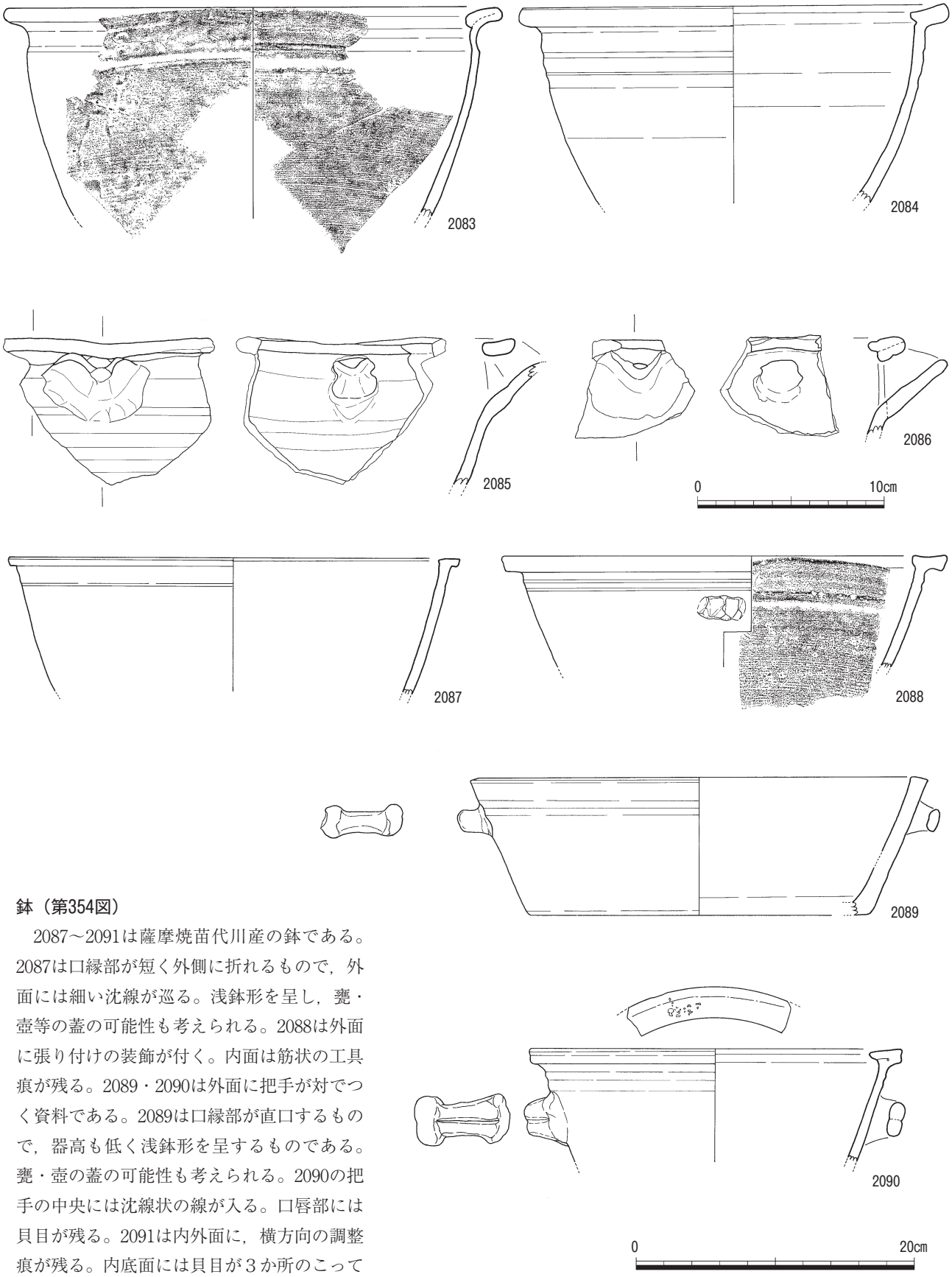
第352図　陶器８　土瓶・釜

片口（第353・354図）

2076～2086は薩摩焼苗代川産の片口である。2076～2080は小形，2081～2084は大形，2085・2086は片口部の資料である。口縁部は外側から内側に折り返してつくられ，胴部下位はヘラ削りされる。2076は，口唇部と外底面に貝目が残る。2080は，内面にヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。2081は口唇部に貝目が残る。2082・2083の内外面はヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。



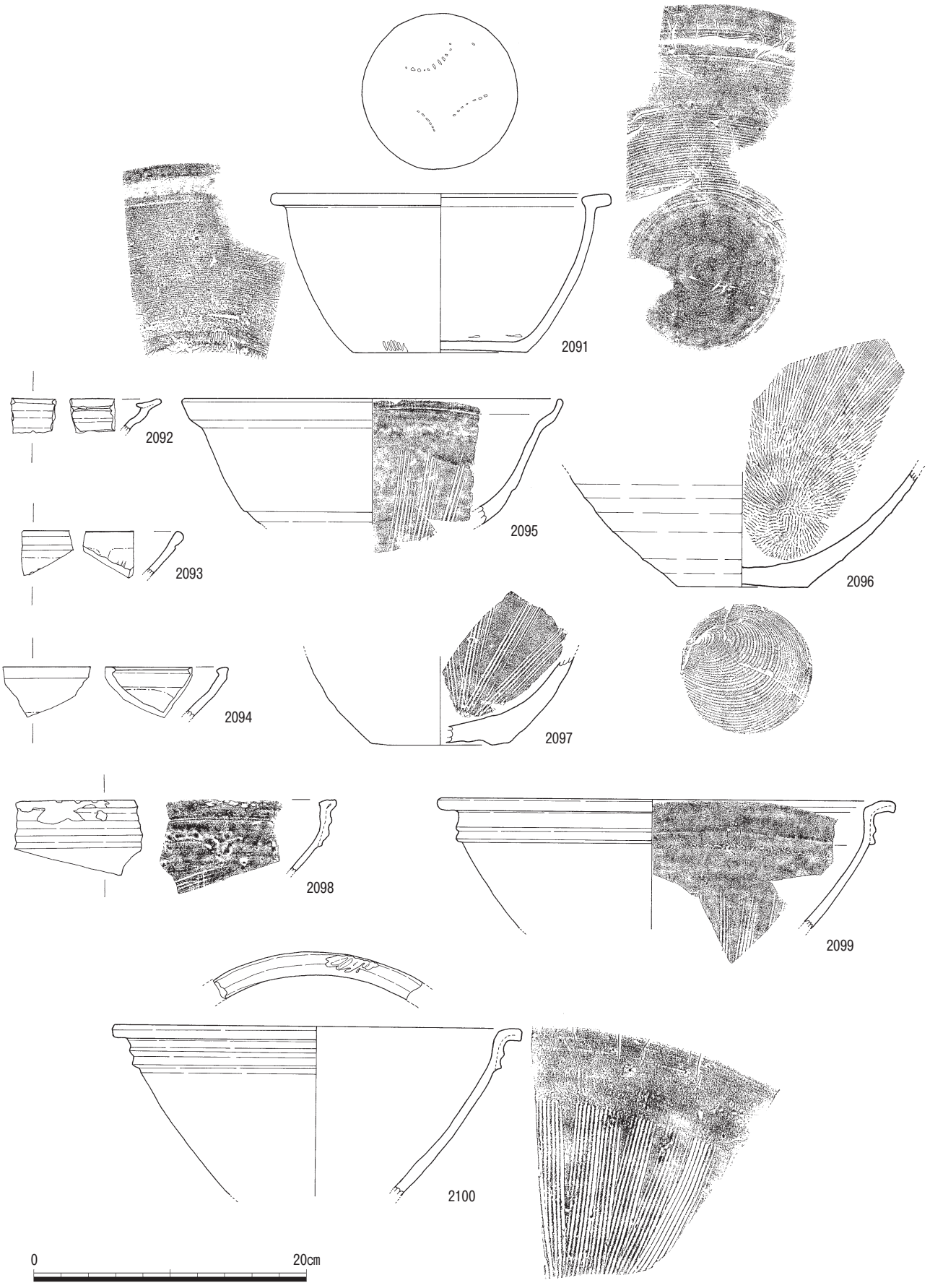
第353図　陶器９　片口



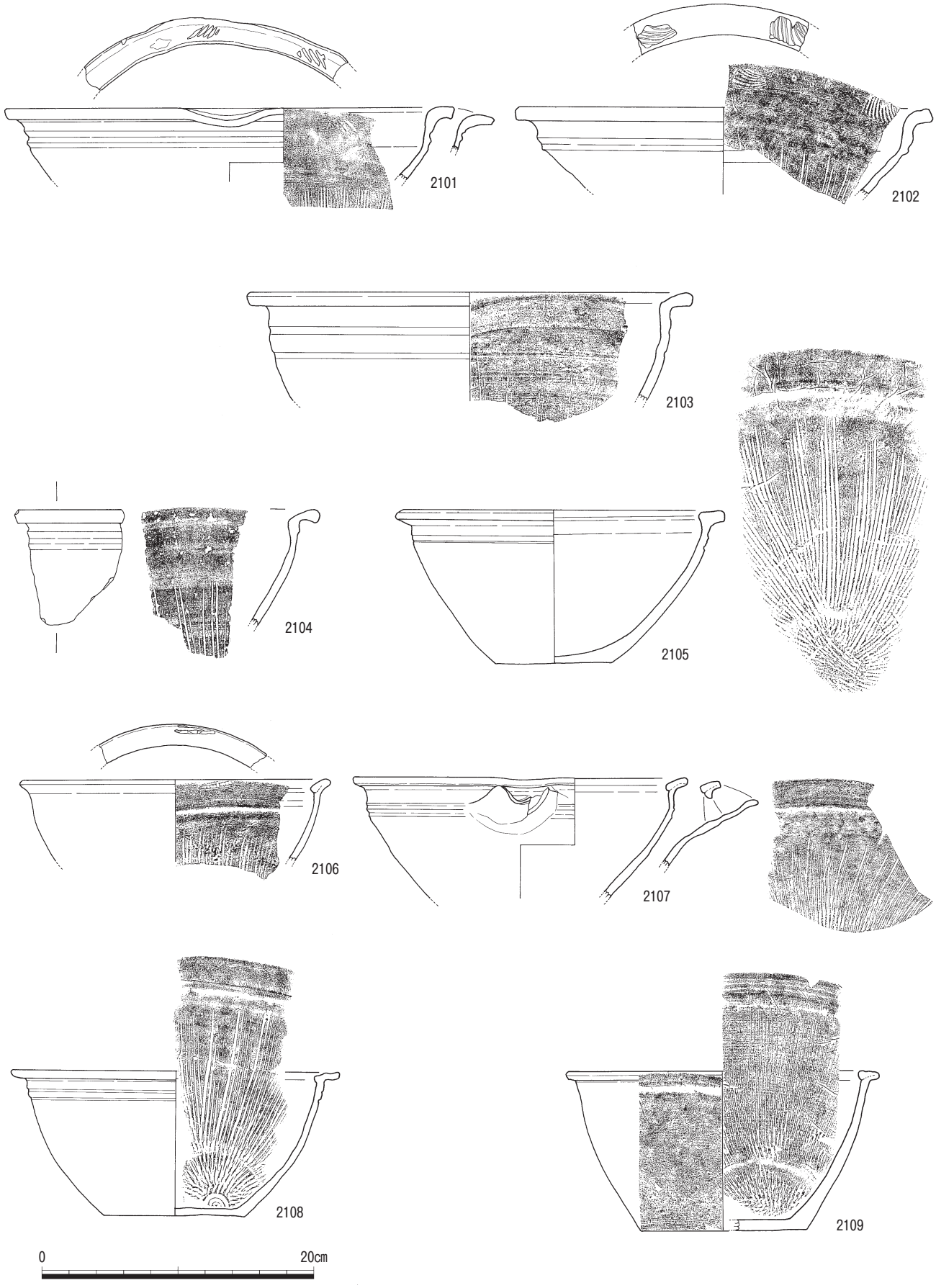
第354図　陶器10　片口・鉢

鉢（第354図）

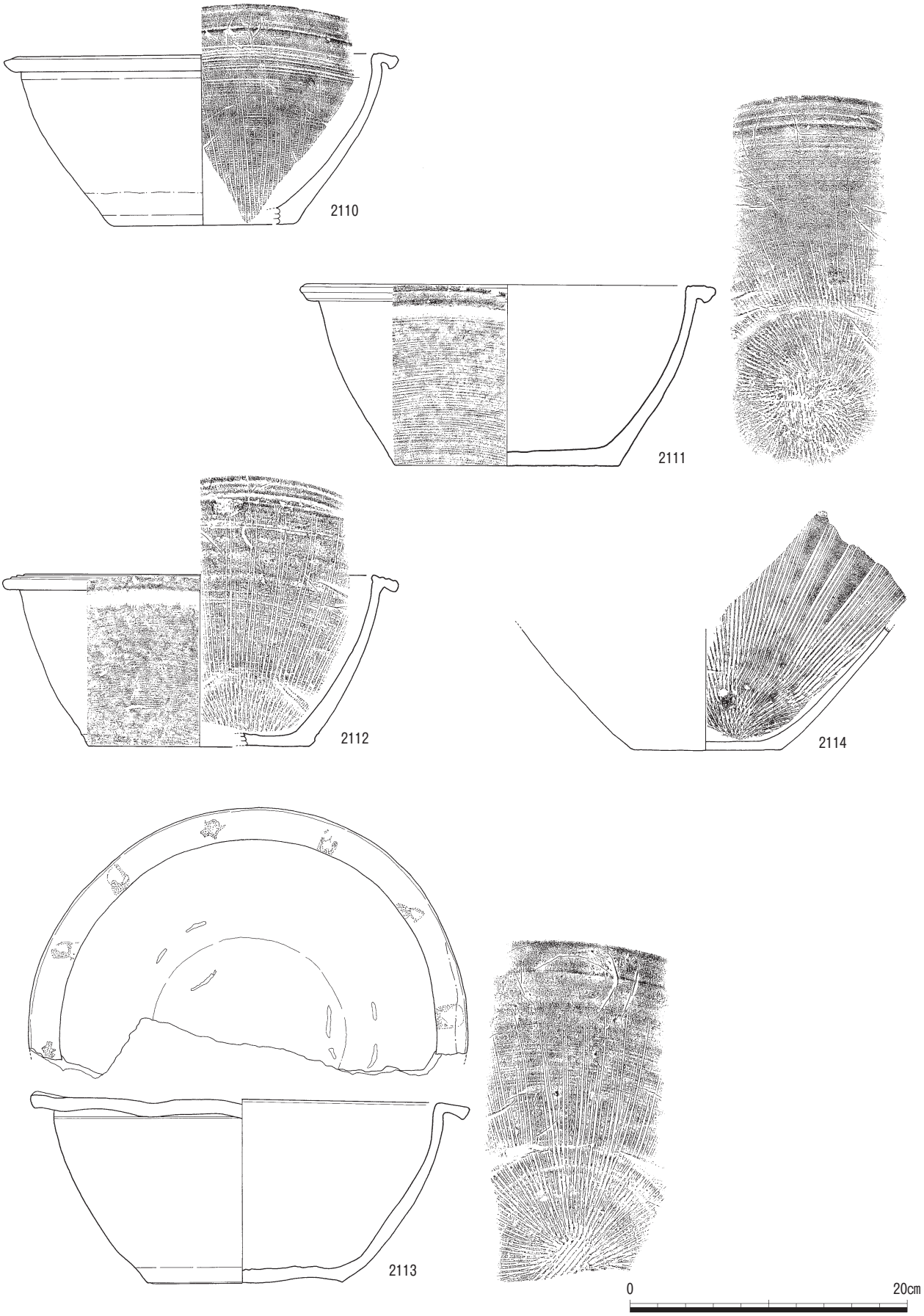
2087～2091は薩摩焼苗代川産の鉢である。2087は口縁部が短く外側に折れるもので，外面には細い沈線が巡る。浅鉢形を呈し，甕・壺等の蓋の可能性も考えられる。2088は外面に張り付けの装飾が付く。内面は筋状の工具痕が残る。2089・2090は外面に把手が対でつく資料である。2089は口縁部が直口するもので，器高も低く浅鉢形を呈するものである。甕・壺の蓋の可能性も考えられる。2090の把手の中央には沈線状の線が入る。口唇部には貝目が残る。2091は内外面に，横方向の調整痕が残る。内底面には貝目が３か所のこっており，焼成時に別の製品を内側に入れて焼いたと考えられる。



第355図　陶器11　鉢・擂鉢



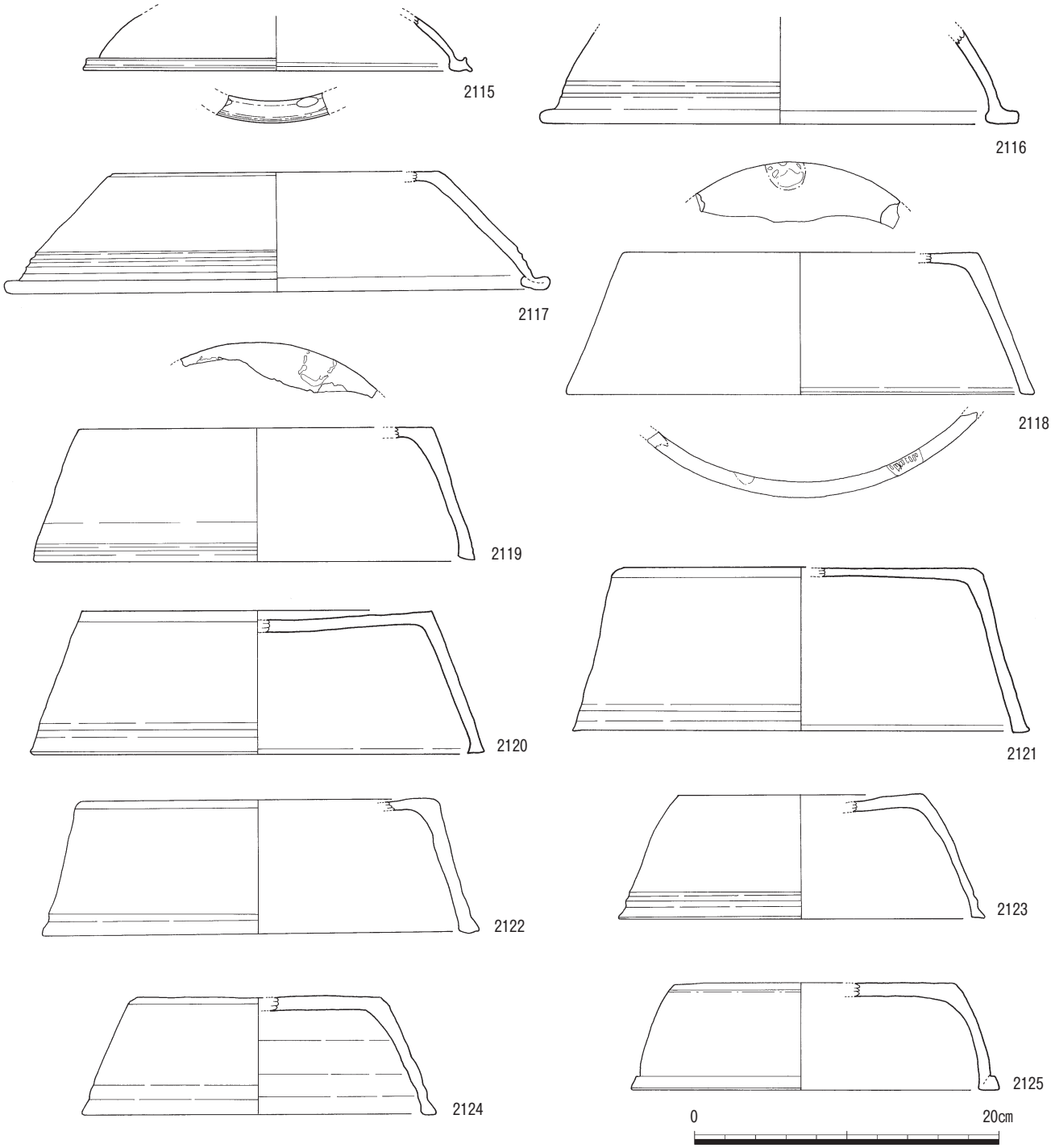
第356図　陶器12　擂鉢



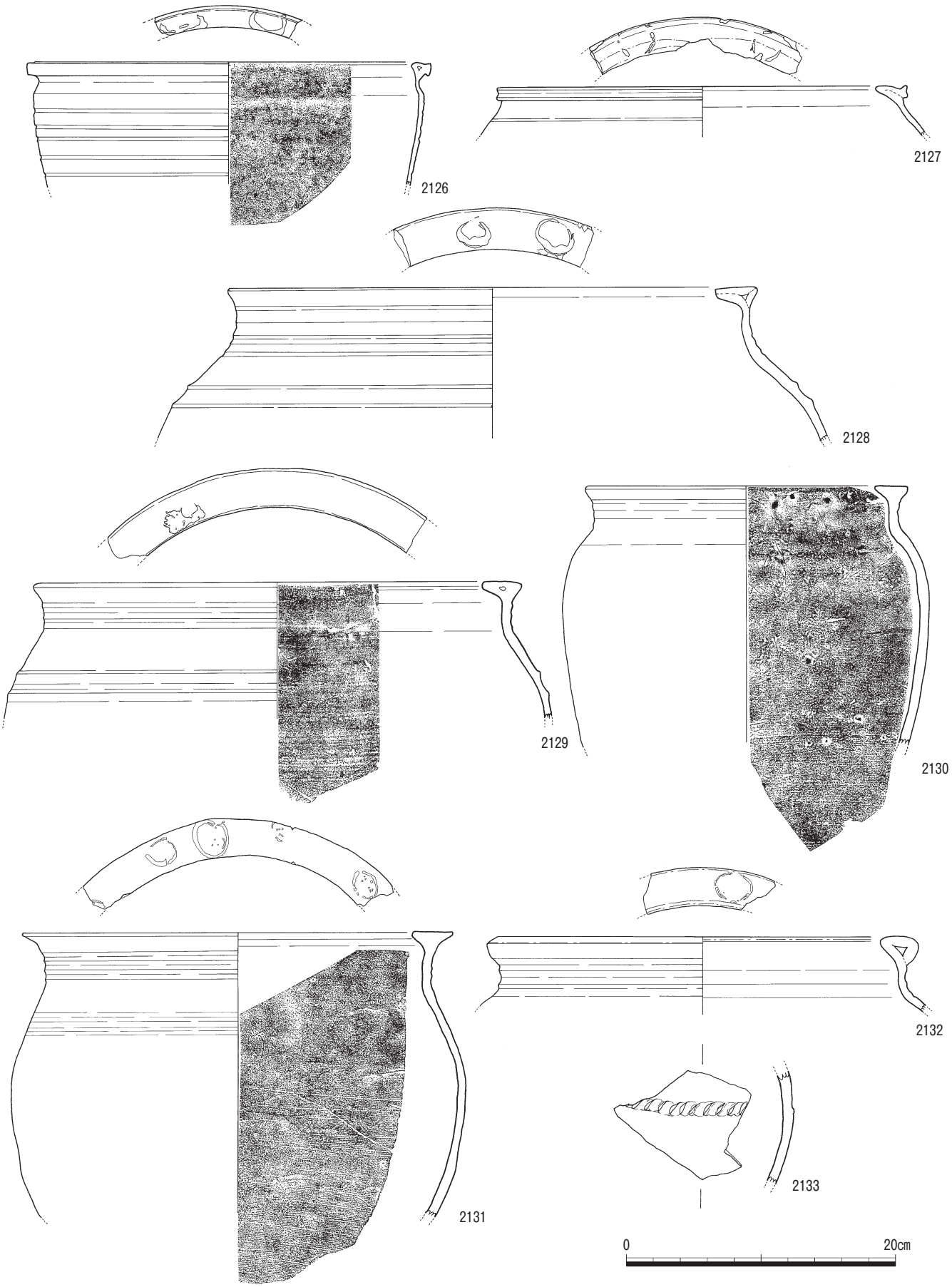
第357図　陶器13　擂鉢

擂鉢（第355～357図）

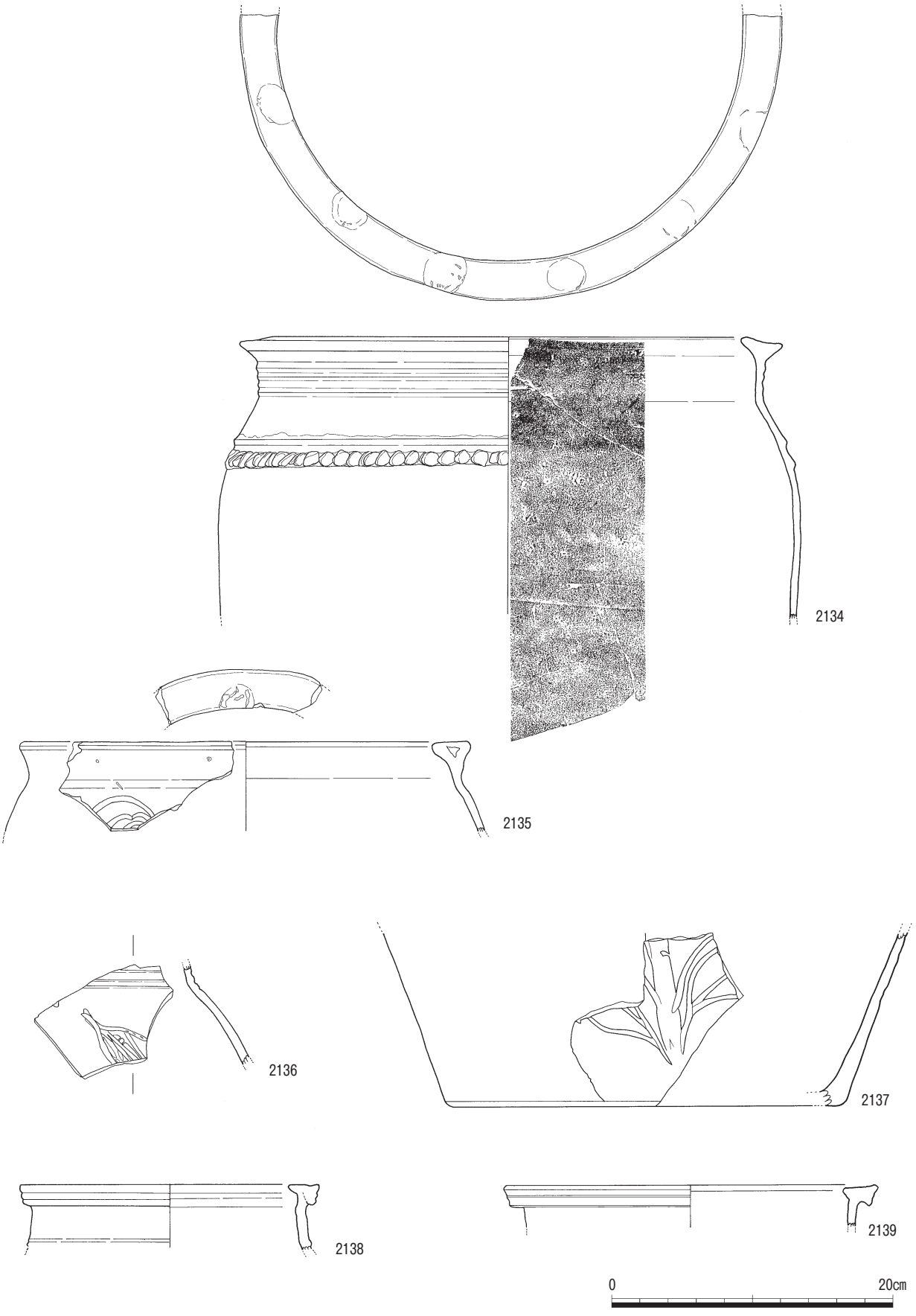
2092～2097は肥前陶器の擂鉢である。2092～2094は口縁部，2095は口縁～胴部で，口縁先端には褐釉がかけられ，以下は露胎する。2096・2097は底部である。擂り目は細くシャープであるが，2096はやや密に，2097は余白を空けて入る。2097は高台を有する。2098～2114は薩摩焼苗代川産の資料である。2098は口縁部を外側に折り返して肥厚させ，外面口縁下位に２条の突帯を巡らせるものである。2099～2104も同様の口縁つくりであるが，突帯は低く，口縁端部外側に長くのびる。2105～2108は，口縁部を外側から内側に折り返して丸くつくる。2107のような片口を有するものと思われる。擂り目は，2108を除き，内面口縁下位に余白を残し，細くシャープに入る。2109は口唇部が平坦につくられ，口縁部がＴ字状となる。擂り目は内面上位まで余白なく入り，擂り目の下と外面には，横方向の工具痕が残る。2110～2113は口縁部がＬ字状を呈する。胎土は赤褐色や鈍い橙色を呈し，粗く白色砂粒を多く含む。擂り目は細くシャープであるが，内



第358図　陶器14　蓋（甕・壺用）



第359図　陶器15　甕



第360図　陶器16　甕

面口縁下位まで入り，擂り目の下には横方向の工具痕が残る。2111・2112は外面にも横方向の工具痕が明瞭に残る。2114は底部である。擂り目が細くシャープに入る。

蓋（第358図）

2115～2125は，薩摩焼苗代川産の蓋である。甕や壺にかぶせる浅鉢形の形状をしたものである。2115は口唇部の外側が溝状に凹むもので，貝目も残る。2116・2117は，口縁部を外側から内側に折り返してつくる。

外面口縁下位には，浅い沈線が２条巡る。2118～2124は，口縁部が直口し，端部はやや肥厚する形状のものである。口唇部は釉剥ぎされ平坦につくられる。外面口縁下位には，２条の弱い沈線が巡るものもある。2118は外底面と口唇部に，2119は外底面に貝目が残る。2125は，口縁端部が短く外側に折れる。口唇部は釉剥ぎされ，外面腰部から底面にかけては露胎する。

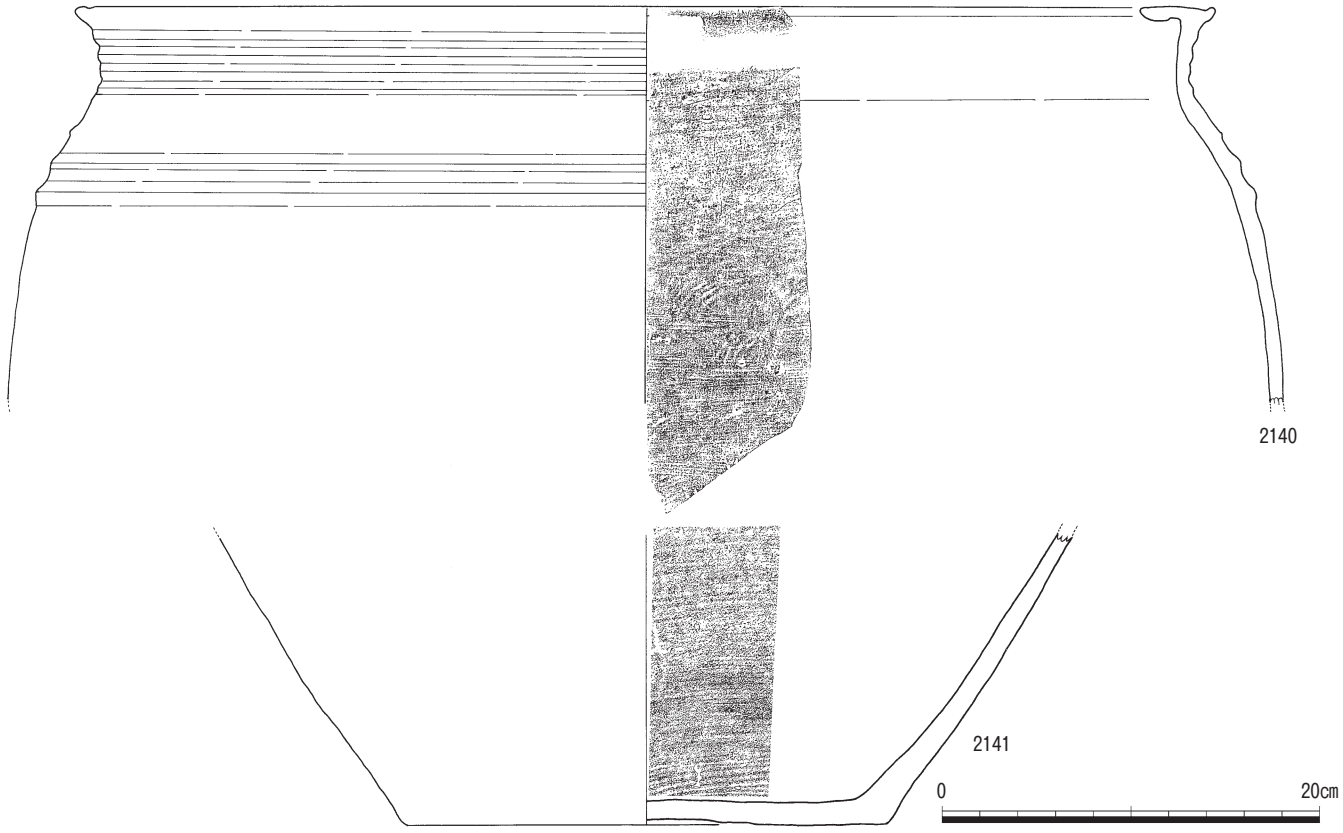
甕（第359～361図）

2126～2141は薩摩焼苗代川産の甕である。2126・2127は，胎土が緻密で器壁も非常に薄い。口唇部の外側は溝状に凹む。2126はバケツ状の形状のものである。外面には数条の沈線を有し，口唇部には貝目が残る。タタキ成形と考えられるが，ナデ調整により内面には当て具の痕跡は残っていない。胎土は灰黄色を呈し，非常に緻密で層状をなす。初期薩摩焼である串木野窯産の可能性が考えられる。2127は肩が張る形状のものである。口唇部には貝目が残る。初期薩摩焼の堂平窯産の可能性が考えられる。2128～2134は，口縁端部を外側に折り曲げて，断面三角形につくる資料である。肩部には１～２条の突帯や，縄状突帯が巡る。2135～2137は外面に掻き落とし文が描かれた資料である。2135は口縁部で，断面三角形につくられる。2136は肩部，2137は胴～底部である。2138・2139は口縁部がＴ字状を呈し，外端部が垂れ下がる資料である。胎土は赤褐色で粗く，白色砂粒を多く含む。2140・2141は大形の甕である。

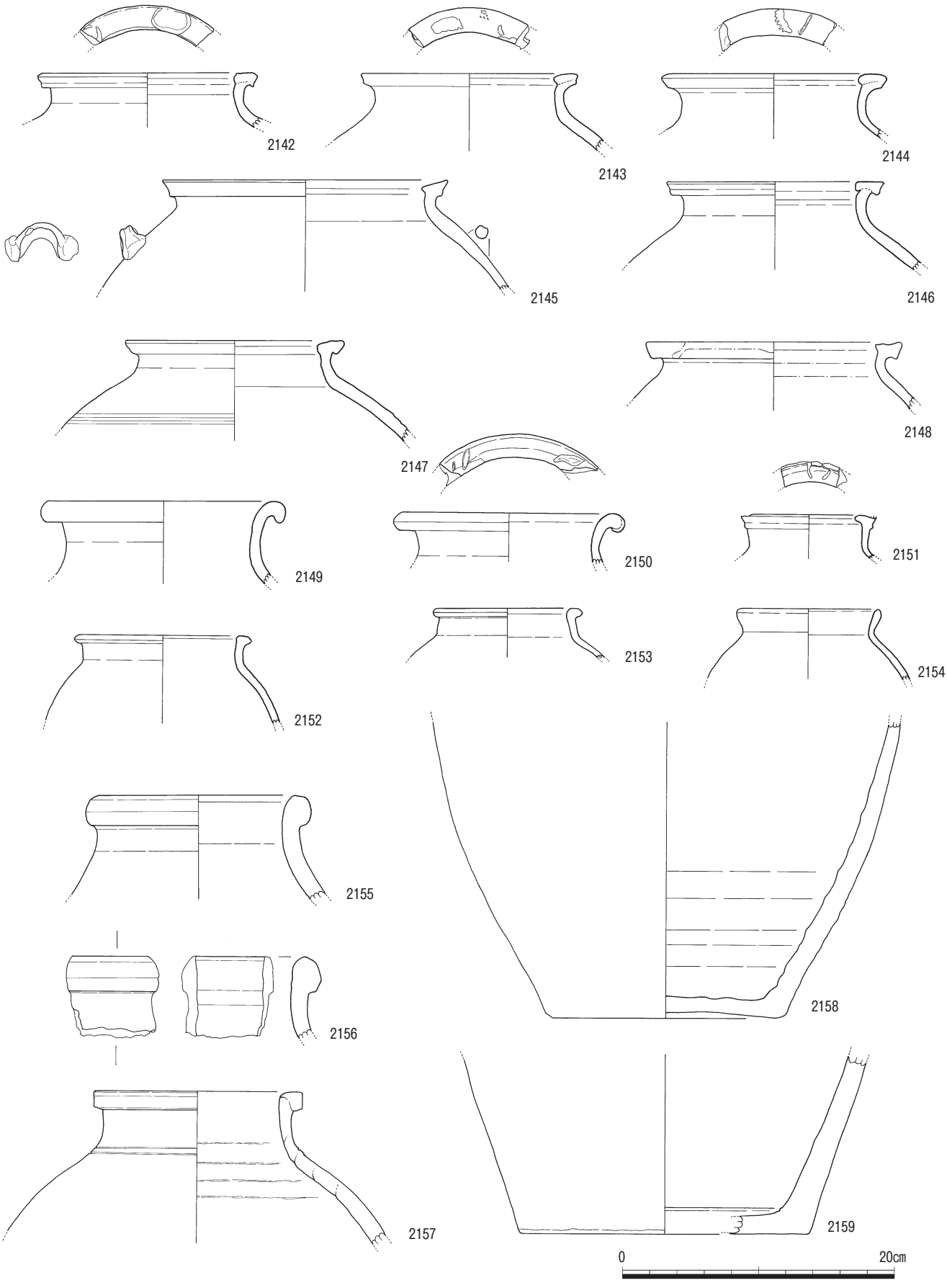
2140の口縁部はくちばし状に内側へ伸びる。施釉により不明瞭であるが，外面には横方向の工具による調整痕が筋状に残り，内面にはタタキ成形時の同心円状のあて具と，その上からの横ナデ調整が残る。2141は底部で，内面には横方向のナデ調整の痕跡が残る。

壺（第362図）

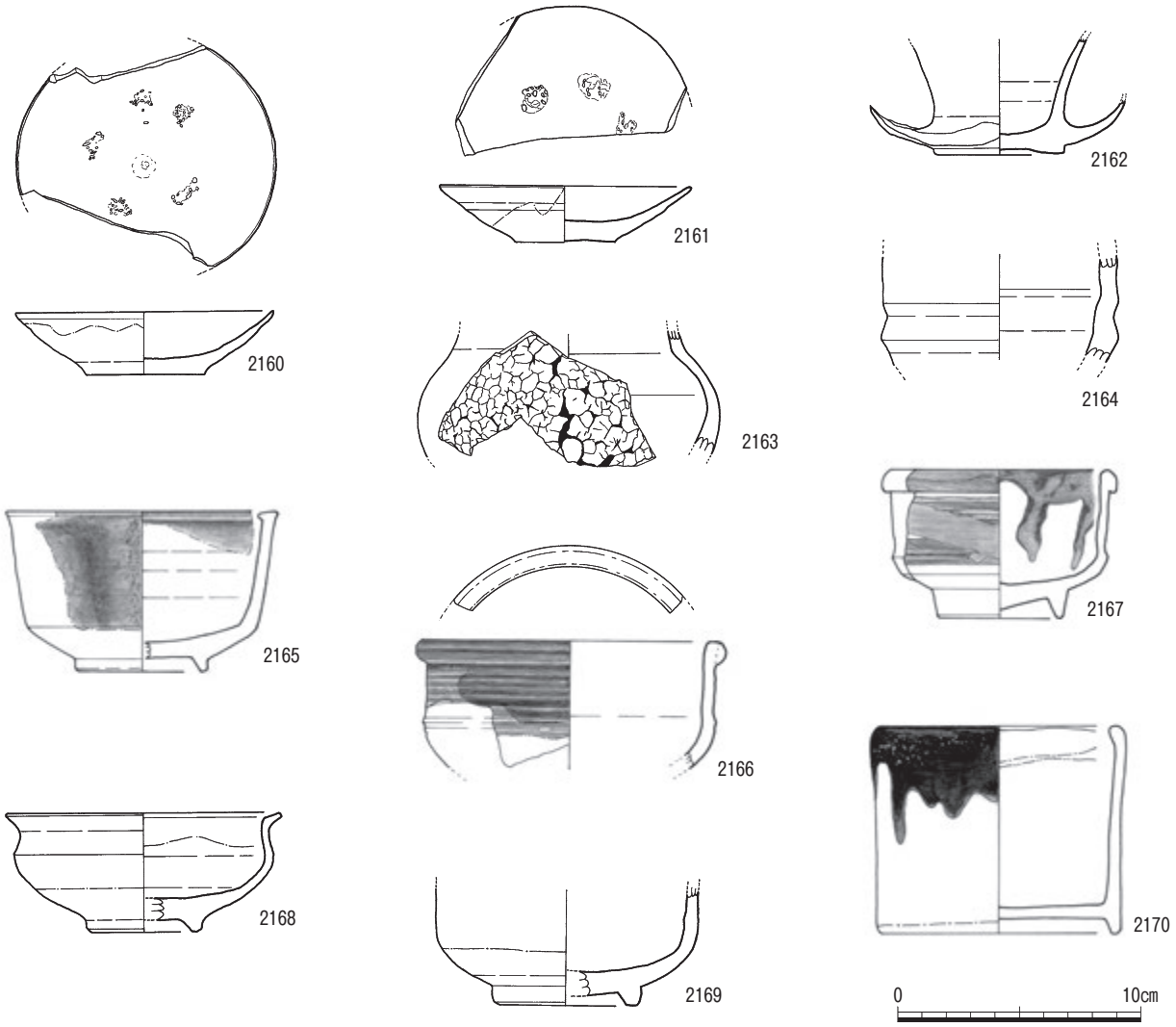
2142～2159は壺である。2142～2154は薩摩焼苗代川系の資料で，2155～2159は琉球産の荒焼である。2142～2150は大形の壺である。2142～2148は，口縁部は外側から内側に折り返してつくられる。2142～2144・2147は口唇部がやや丸みを帯び，貝目が残る。2145・2146・2148の口唇部は平坦につくられる。2145の肩部に



第361図　陶器17　甕


2142
2143
2144
2145
2146
2147
2148
2149
2150
2151
2152
2153
2154
2155
2156
2157
2158
2159
0
20cm

第362図　陶器18　壺



第363図　陶器19　灯明具・仏具

は横耳がつくが，個数は不明である。2149・2150は口縁部が外側に開き，端部を丸くつくるものである。口唇部にはイタヤガイの目跡が残る。2151～2154は中形の壺である。2151は器壁が薄く，口唇部の外側は溝状に凹み，貝目が残る。初期薩摩焼の堂平窯の製品と考えられる。2152・2153は，口縁端部が小さく丸くつくられる。2154は口縁部から頸部にかけての形状が，くの字状に屈曲する。2155～2159は焼き締めで，胎土は赤褐色を呈する。琉球壺屋窯の製品と考えられる。

灯明具（第363図）

2160～2162は薩摩焼龍門司系の灯明具である。2160・2161は灯明皿で，見込みにはゴマ目が残る。2162は灯明皿受け台である。外底面には糸切りの痕跡が残る。

仏具（第363図）

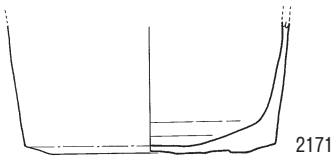
2163～2170は仏具である。2163・2164は薩摩焼で，元立院窯産の仏花器である。2163は黒蛇蝎釉がかかり，2164は黒釉がかかる。2165～2170は香炉である。2165～2167は肥前陶器である。2165は，灰色の焼き締まった胎土に，一部褐釉がかかる。2166・2167は，白化粧土による刷毛目の上から褐釉がかけられる。2168～2170は薩摩焼で龍門司窯産の資料である。2168は黄褐色に発色した鉄釉がかかる。2169は底部で，外面に黒褐色の鉄釉がかかる。2170は筒形の形状を呈し，外面は白化粧土に緑釉が流しかけられる。

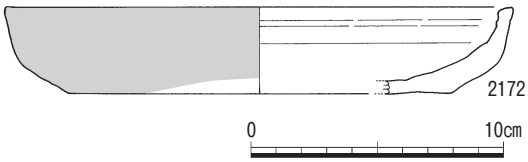
その他（第364図）

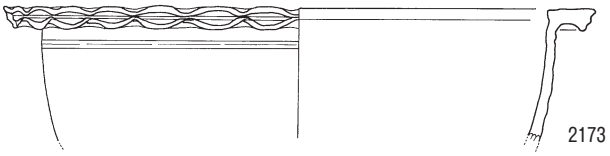
2171は浅黄色の緻密な胎土に透明釉がかかる資料で，肥前陶器と思われる。高台は幅広で非常に低く削り出され，高台脇は広く面取りされる。用途不明の資料である。

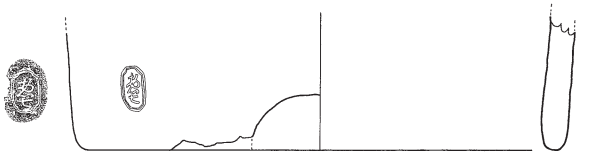
2172は土師質土器の焙烙である。外面に煤が付着する。

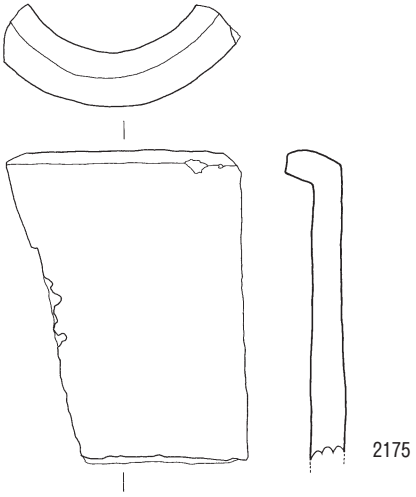
2173は薩摩焼苗代川産の植木鉢と思われるが，甕の可能性も考えられる資料である。口縁端部には指でつまんで波状にした装飾が施される。2174は瓦質土器の火鉢の底部である。器面には，金雲母状の光る鉱物が観察される。「お七」の印銘がみられる。2175・2176は燻し瓦である。2175は丸瓦，2176は軒平瓦である。2177は土製品の人形である。頸から上が欠損している。2178は陶器の底部を転用したメンコである。2179は，型作りされた菊花形のミニチュア皿で，素焼きである。

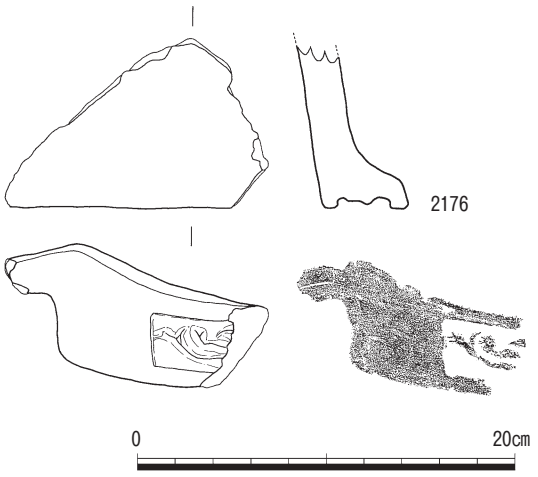


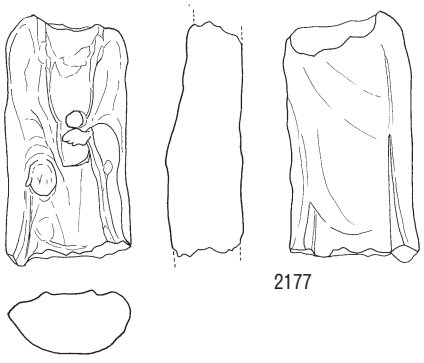


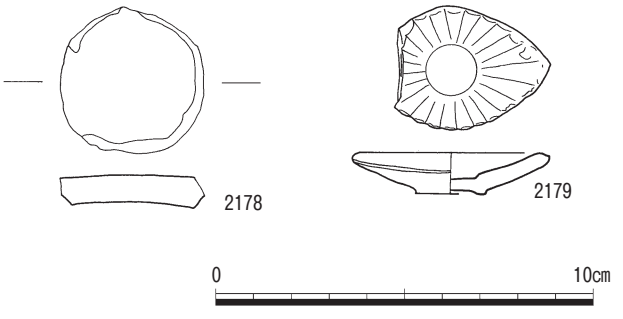












第364図　陶器20　その他

金属製品（鉄製品・銅製品）（第365～367図）

2180～2209は金属製品を一括した。いずれも中世から近世にかけてのものと考えられる。この中には，鉄製品と銅製品が含まれる。なお，諸般の事情によりＸ線撮影できたものとそうでないものがあり，詳細な形状については検討が必要なものも含まれている。

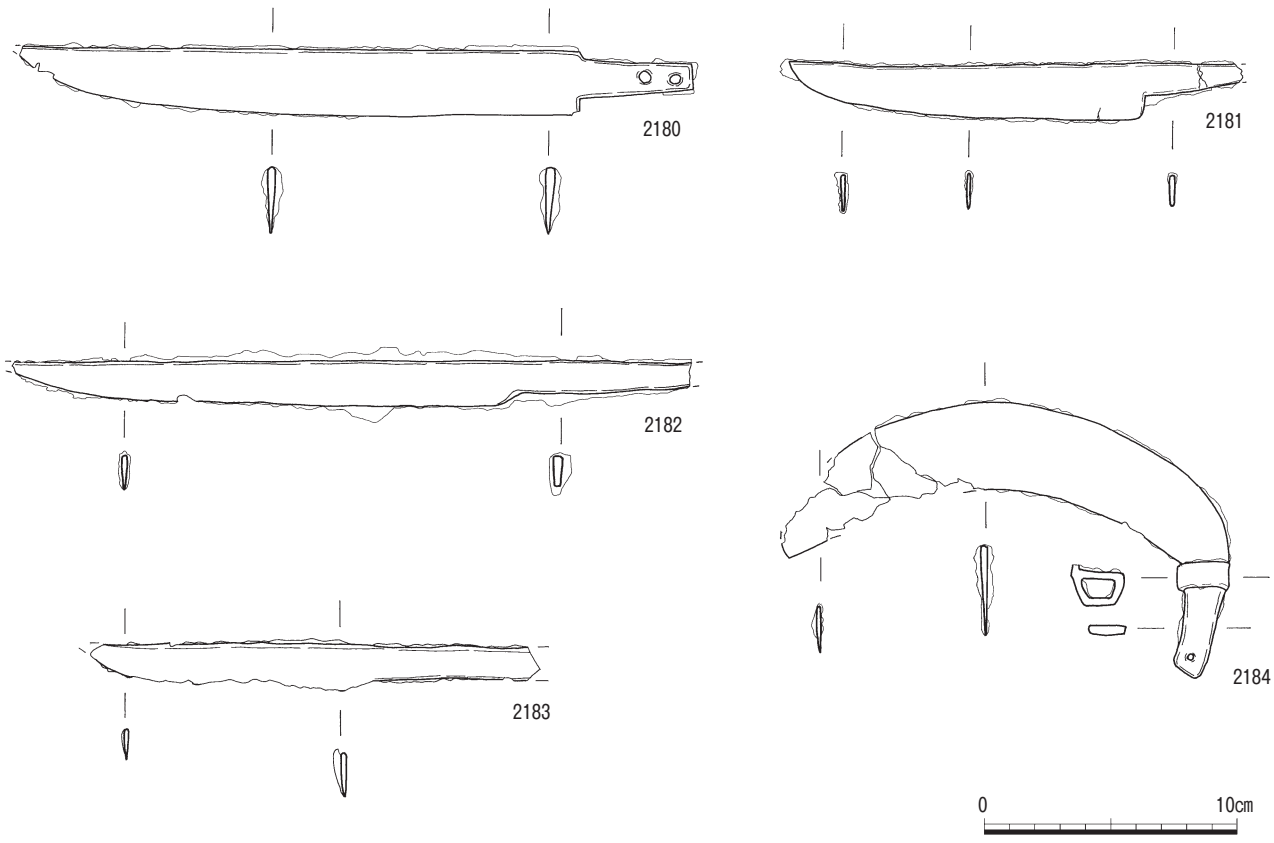
2180～2200は鉄製品である。

2180～2183は短刀である。2180・2181はほぼ完全なもので，特に2180については茎（なかご・柄部分のこと）に目釘穴が明瞭に残るものである。2181については本来は目釘穴があるはずであるが現状では確認できない。2182は2180・2181と比較して細身の刃部を持つものである。使用し研磨を繰り返すうちに現状の大きさとなった可能性も考えられる。2183は刃部の残存状況は良好ではないが，茎についてはほぼ完全なものである。

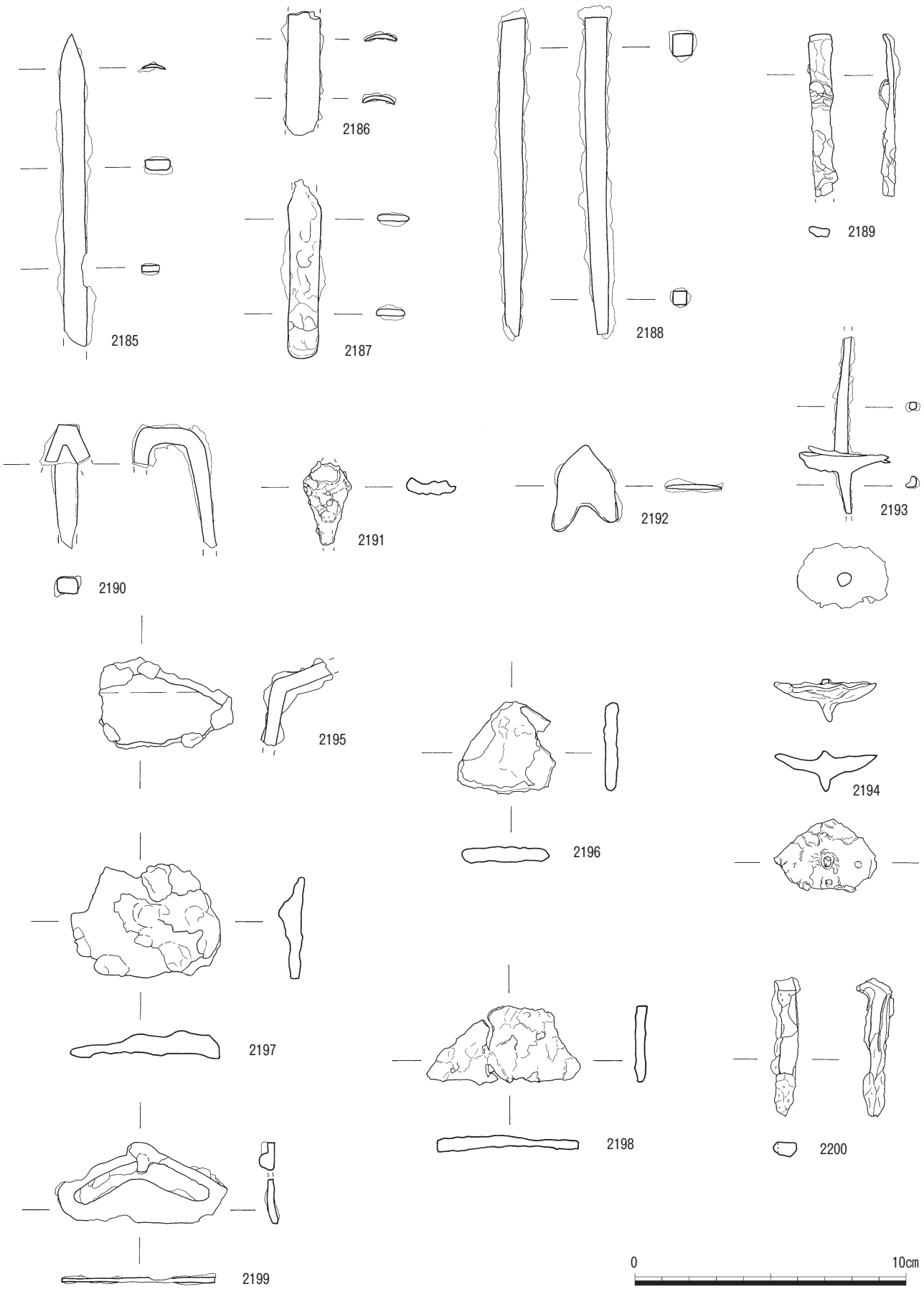
2184は鎌である。先端部に若干の刃こぼれと破損がみられるが，ほぼ完全な状態のものである。基部には輪状になった部分があり木質もわずかではあるが残存する。

2185・2186は先端部の断面が三日月状を呈する短冊状の製品で，ヤリガンナの可能性のあるものである。2185は先端の一部が鋭く尖る。2187は短冊状の製品である。上部にはやや幅が狭くなる部分があるのでヘラ状を呈していたものと考えられる。2188は方柱状の製品で先細りのものである。大型釘やタガネの可能性が考えられるものである。2189は短冊状の製品である。上端部に反りを持つ。釘の可能性もあるが，検討を要する。2190は，角柱状の棒を「Ｕ字」状に曲げ，途中で二股に加工した製品で，「熊手」状の形状を呈するものと考えられる。2191・2192は鉄鏃である。2191は菱形を呈するもので，古墳時代に多い「圭頭鏃」に類似するものである。2192はハート形を呈するもので，「無茎鏃」と呼称されるものである。この２点はいずれも古墳時代の遺物の混入の可能性も考えられるものである。2193・2194は鉄製紡錘車である。いずれも円盤状部分の破損が著しい。

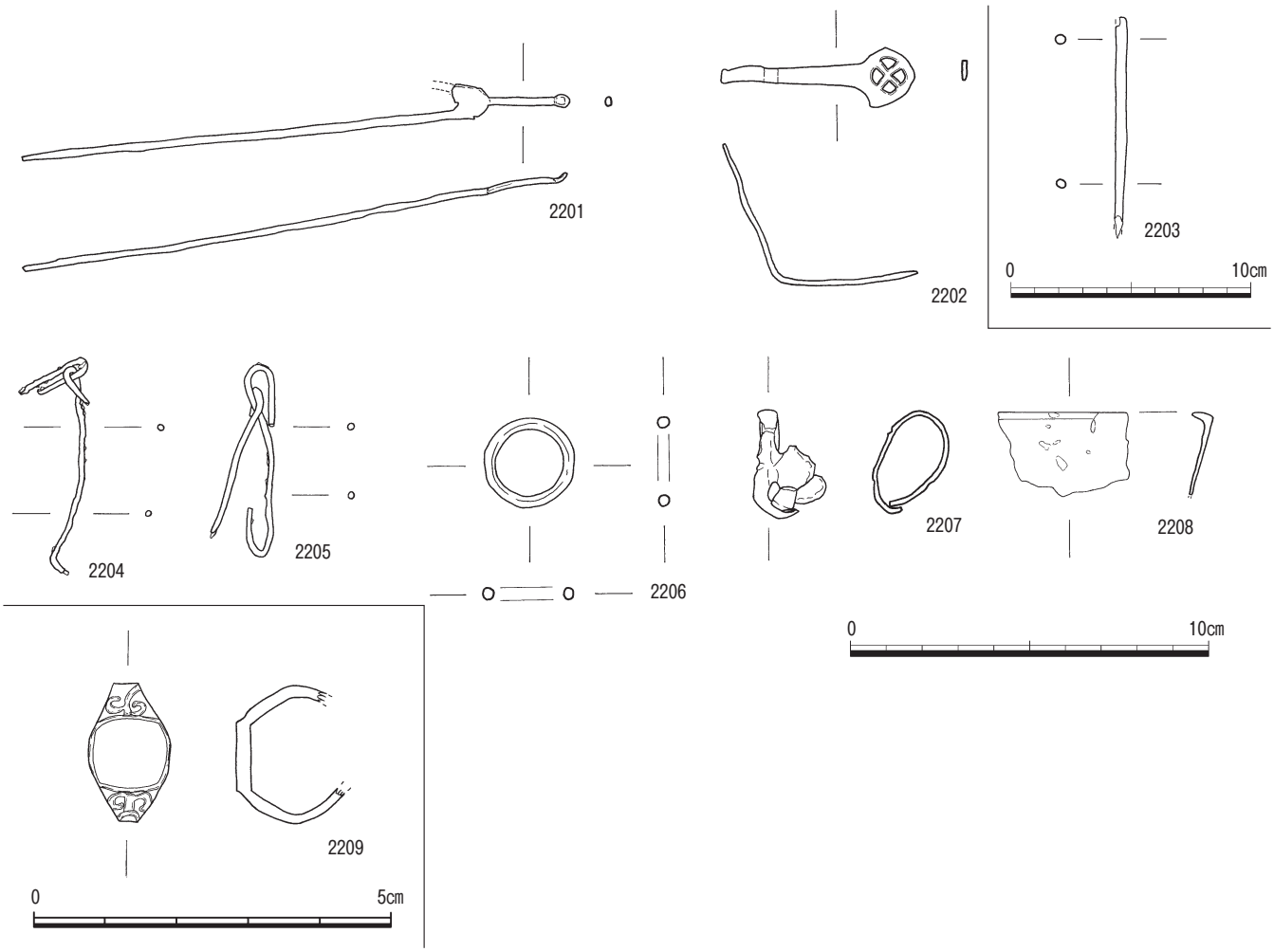
2195～2198は鋳造製品で，鉄鍋の破片の可能性が高いものである。特に2196は鍋の頸部とみられるもので，鍋の形状を窺い知ることのできる数少ない資料である。2199は，ハンガー形を呈する製品で，火打金である。上部に棒状部分を絡めたと見られる部分がある。全体的に錆化が進んでおり，破損が著しい。2200は断面が方形を呈し，上部で直角に曲げた棒状製品で，いわゆる「角釘」である。本遺跡では，土坑墓から出土することが多いが，



第365図　金属製品１


2185
2186
2187
2188
2189
2190
2191
2192
2193
2194
2195
2196
2197
2198
2199
2200
0
10cm

第366図　金属製品２



第367図　金属製品３

この遺物についても土坑墓の棺に使用された可能性がある。

2201～2209は銅製品である。

2201・2202は「かんざし」と考えられるものである。2201は，耳かき部分をもつもので，途中で二股になるものである。2202はＬ字形に折れているが，元は，まっすぐであったとみられる。端部は円形を呈し，クローバー形の４カ所の「透かし」を持つ。2203は棒状の製品で両端部の一端は丸くおさめ，もう一方については鋭く尖るものである。「縫い針」の可能性も考えられるが，糸通しの穴がみられないので検討が必要である。2204・2205は針金状のものを両端でフック形に環状にするものを連結するものである。何らかの金具の可能性があるが，「釣花いけ」という製品に類似する。なお，2204・2205は中世竪穴建物跡の壁面に接する状態で出土したという調査時の記録があったが，どの遺構であるかが判然としなかったため，一般遺物として扱った。2206は環状の製品である。指輪にも類似するものであるが，「金坐（かんざ）」と呼称される製品に類似する。金坐であれば，手箱の紐掛や兜の後頭部につけられていたものと考えられる。2207は王冠に類似した環状を呈する製品である。「太刀金具」と呼称されるものに類似する。「太刀金具」であれば，鞘の先端部付近に巻かれていたと考えられる。この場合，通常であれば「太刀」は上級武士のものであるのだが，本資料は簡素なつくりであるので，場合によっては農民クラスのものであった可能性も指摘される。2208は椀形とみられる製品の口縁部の破片で，「銅椀」と呼称されるものである。通常であれば，７～８世紀頃に比定されるものである。2209は指輪である。上面には方形の区画を持つ。また，側面には唐草文様がみられる。日本では，古代から近世にかけては「指輪」をつけるという文化自体がないので，大陸との影響によるものと考えられるもので，重要な資料である（銅製品に関しては久保智康氏【京都国立博物館】の御教示による部分が大きい）。

近世遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	備考
										口径	底径	器高			
第304図	1801	掘立柱1号	A-30		陶器	片口	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.0	−	−	薩摩苗代川	17c前半	
	1802	掘立柱1号	A-30		陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	−	−	−	薩摩苗代川	17c中頃	口唇部に貝目あり
	1803	ピット8	A-30		染付	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	−	−	−	肥前系	18c代	
第313図	1804	土坑2号	B-34		白磁	坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	5.6	4.0	3.4	肥前系	19c	
	1805	土坑5号	B-33		白磁	坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	3.4	−	肥前系	19c	
第314図	1806	土坑8号	E-19	Ⅱ	鉄製品		−	−	−	最大長7.2	最大幅3.5	最大厚0.6			重さ46g
第315図	1811	土坑墓2号	B-32		鉄製品	釘	−	−	−	最大長3.2	最大幅2.9	最大厚0.8			重さ2g
第321図	1816	ピット2	A-36		陶器	皿	褐灰色	灰釉	外面中位から高台内無釉	13.0	4.0	4.0	肥前	1580～1610	内面 鉄絵
第322図	1817	ピット4	B-34		陶器	蓋	にぶい赤褐色	鉄釉	上面のみ施釉	−	庇径13.0	−	薩摩苗代川	18c後半	
	1818	ピット4	B-34		陶器	蓋	にぶい赤褐色	白化粧土に褐釉	上面のみ施釉	3.8	庇径6.1	−	薩摩龍門司か？	18c後半	
	1819	ピット6号	D-20		鉄製品		−	−	−	最大長4.8	最大幅5.0	最大厚1.7			
第324図	1820	溝1	C-36		磁器	碗	白色	透明釉	残存部全面施釉	11.4	−	−	肥前系	18c後半	
	1821	溝1	D-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	4.2	−	肥前系	18c後半	
	1822	溝1	C-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.2	−	−	肥前系	18c後半	
	1823	溝1	C-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	−	4.8	−	肥前	18c後半	
	1824	溝1	C・D-36		磁器	碗	浅黄橙色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.0	4.8	5.4	肥前系	18c末期～19c初頭	
	1825	溝1	C・D-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.8	4.8	6.3	肥前系	18c末期～19c初頭	
	1826	溝1	C-36		磁器	碗	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	7.0	3.0	4.0	肥前系	18c後半	
	1827	溝1	C-36		磁器	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.0	−	−	肥前系	18c末期～19c初頭	
	1828	溝1	D-36, E-37		磁器	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.0	3.7	5.2	在地	18c末期～19c初頭	
	1829	溝1	C-36		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	14.0	8.4	3.1	肥前	18c中頃	高台内面にハリ支えの目跡あり
	1830	溝1	B-35・36, C-36		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	12.0	−	肥前	18c代	
	1831	溝1	C-36		磁器	油壺か？	灰白色	透明釉	内面路胎	−	−	−	肥前	18c	
	1832	溝1	C-36		陶器	碗	灰色	銅緑釉	外面腰部～高台内面露胎	10.6	4.4	6.7	肥前内野山系	17c後半	
	1833	溝1	D-37		陶器	碗	暗灰黄色	透明釉	高台脇～高台内面路胎	10.4	3.6	4.8	肥前	18c後半	
	1834	溝1	D-36		陶器	碗	にぶい黄褐色	鉄釉	畳付～高台内面釉剥ぎ 蛇ノ目釉剥ぎ	−	4.4	−	薩摩龍門司	18c後半	
	1835	溝1	C・D-36		陶器	碗	灰黄褐色	白化粧土に透明釉	畳付～高台内面露胎	−	4.6	−	薩摩龍門司	18c後半	
	1836	溝1	C-36		陶器（白薩摩）	碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	−	3.5	−	薩摩竪野系	18c代か？	
第325図	1837	溝1	D-36		陶器	碗	黄褐色	透明釉	高台内面釉剥ぎ	−	−	−	関西京焼	17c後半	見込み色絵
	1838	溝1	D-36		陶器	皿	灰褐色	灰釉	外面腰部以下露胎	−	−	−	肥前	16c末期～17c初頭	皮鯨 見込みに胎土目あり
	1839	溝1	C-36		陶器	皿	にぶい褐色	透明釉	外面腰部以下露胎	16.0	−	−	肥前か？	17c後半？	
	1840	溝1	C・D-36		陶器	碗	赤褐色	褐釉	外面腰部以下露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	−	4.7	−	薩摩龍門司系	18c後半	
	1841	溝1	C・D-36		陶器	瓶類	にぶい黄色	鉄釉	内面路胎	−	−	−	薩摩龍門司	18c後半～	飛び鉋 からから
	1842	溝1	C-36, D-36		陶器	土瓶	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	6.2	−	−	薩摩苗代川	18c後半	
	1843	溝1	D-36		陶器	土瓶	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	−	−	−	薩摩苗代川	18c後半	
	1844	溝1	C-36		陶器	土瓶	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	−	−	−	肥前	18c後半	
	1845	溝1	D-37		陶器	壺または水柱	褐色	鉄釉	残存部全面施釉	15.0	−	−	薩摩苗代川	18c代か？	
	1846	溝1	C-36		陶器	片口または鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	−	−	−	薩摩苗代川	18c後半	
	1847	溝1	C-36		陶器	鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	25.2	16.6	11.8	薩摩苗代川	18c代	
	1848	溝1	C-36		陶器	鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	−	−	−	薩摩苗代川	18c代	
	1849	溝1	B-37, D-35, C・D-36		陶器	擂鉢	暗赤褐色	灰釉	残存部全面施釉	−	16.2	−	薩摩苗代川	19c代	
	1850	溝1	D-36		陶器	擂鉢	赤褐色	鉄釉	外底面露胎	−	13.2	−	薩摩苗代川	19c代	
	1851	溝1	C・D-36		陶器	蓋	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	38.0	−	−	薩摩苗代川	18c代	口唇部に目跡あり
	1852	溝1	C・D-36		陶器	蓋	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	27.2	21.4	8.8	薩摩苗代川	17c後半	
	1853	溝1	E-36		陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	34.0	−	−	薩摩苗代川	18c代	口唇部に貝目あり
	1854	溝1	D-36		陶器	甕	暗赤色	鉄釉	残存部全面施釉	−	−	−	薩摩苗代川	18c代	
	1855	溝1	C-36		陶器	甕	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	−	−	−	薩摩苗代川	18c代	
第326図	1856	溝2	B・C-35, D-36	Ⅰ, Ⅱ	陶器	碗	灰白色	(内)透明釉 (外)銅緑釉	残存部全面施釉	11.6	−	−	肥前	18c前半	
	1857	溝2	B-35		陶器	碗	にぶい褐色	鉄釉	残存部全面施釉	12.4	−	−	薩摩龍門司	18c後半	
	1858	溝2	C-35		陶器	壺	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.4	−	−	薩摩苗代川	18c代か？	
	1859	溝2	B-35		鉄製品	鎌	−	−	−	最大長24.1	最大幅13.0	最大厚3.1			重さ187g
	1861	溝3	B-34・35		陶器	擂鉢	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	27.6	−	−	薩摩苗代川	18c後半	口唇部に貝目あり
第327図	1862	溝4	E-18		陶器	蓋	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	22.8	14.4	4.6	薩摩苗代川	17c前半	口唇部に貝目あり
	1863	溝4			鉄製品		−	−	−	最大長7.45	最大幅2.6	最大厚0.8			重さ58g
	1864	溝4	E-18		鉄製品		−	−	−	最大長3.65	最大幅1.75	最大厚0.75			重さ6g
	1865	溝5	B-10		陶器	香炉	灰白色	透明釉	内面・畳付～高台内面露胎	−	6.0	−	肥前	不明	

近世遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			重さ(g)	産地	時期	備考
										最大長	最大幅	最大厚				
第328図	1866	自然流路1	D-29		土製品	土錘	にぶい黄橙色	−	−	4.7	最大径1.1	−	−			
	1867	自然流路1	D-30		土製品	土錘	にぶい黄橙色	−	−	5.7	最大径1.4	−	−			
	1868	自然流路1	D-30		土製品	土錘	にぶい黄橙色	−	−	3.4	最大径1.5	−	−			
	1869	自然流路1	C-29・30		石製品	五輪塔	−	−	−	15.8	最大径11.7	−	−			
	1870	自然流路1	D-30		鉄製品	簪	−	−	−	8.3	1.5	0.3	0.7	琉球か？		
	1871	自然流路1			鉄製品	ヤリガンナ	−	−	−	4.4	1.5	0.6	−			
	1873	自然流路1			鉄滓	平面長方形椀型鉄滓	−	−	−	20.4	16.0	7.8	2330			
第329図	1874	自然流路1			鉄滓	流動滓	−	−	−	22.2	17.9	8.5	3040			
	1875	自然流路1			鉄滓	流動滓	−	−	−	16.2	12.6	5.2	958			
	1876	自然流路1			鉄滓		−	−	−	11.1	7.4	3.0	310			
	1877	自然流路1			鉄滓		−	−	−	11.6	10.3	2.6	328			
	1878	自然流路1			鉄滓		−	−	−	9.9	8.0	2.5	221			
第330図	1879	自然流路1			鉄滓		−	−	−	24.5	19	6.5	2440			
	1880	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	−	−	−	18.4	14.1	5.8	1610			
	1881	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	−	−	−	7.3	6.1	2.3	168			
	1882	自然流路1			鉄滓		−	−	−	5.4	5.8	1.8	80			
第331図	1883	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	−	−	−	21.1	14.7	6.4	2190			
	1884	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	−	−	−	19.7	14.7	5.5	2090			
	1885	自然流路1			鉄滓	楕円状椀型鍛冶滓	−	−	−	16.0	10.6	6.4	875			
第332図	1886	自然流路1			鉄滓	椀型鍛冶滓	−	−	−	10.0	7.4	4.4	139			
	1887	自然流路1			鉄滓	椀型鍛冶滓	−	−	−	6.8	7.1	2.9	110			
	1888	自然流路1			鉄滓	椀型鍛冶滓	−	−	−	9.3	8.6	4.6	243			
	1889	自然流路1			鉄滓		−	−	−	3.7	4.1	1.9	27			
	1890	自然流路1			鉄滓	流出孔滓	−	−	−	6.5	3.7	2.6	90			
	1891	自然流路1			鉄滓		−	−	−	9.9	4.5	3.4	120			
	1892	自然流路1			鉄滓		−	−	−	14.0	7.5	6.2	605			
第333図	1893	自然流路1			鉄滓	流出孔滓	−	−	−	11.0	9.3	8.3	461			
	1894	自然流路1			鉄滓	流出孔滓	−	−	−	10.7	5.7	5.0	261			
	1895	自然流路1			鉄滓	流出孔滓	−	−	−	11.5	8.8	7.4	674			
第334図	1896	自然流路1			土製品	鞴の羽口	にぶい黄橙色	−	−	20.5	最大径8.6	−	−			
	1897	自然流路1			土製品	鞴の羽口	にぶい黄橙色	−	−	17.5	最大径11.0	−	−			
	1898	自然流路1			土製品	鞴の羽口	にぶい橙色	−	−	16.9	最大径8.6	−	−			
	1899	自然流路1			土製品	鞴の羽口	明黄褐色	−	−	16.5	最大径8.3	−	−			
第335図	1900	自然流路1			土製品	鞴の羽口	にぶい黄橙色	−	−	15.9	最大径8.7	−	−			
	1901	自然流路1			土製品	鞴の羽口	灰黄色	−	−	14.3	最大径8.0	−	−			
	1902	自然流路1			陶器	碗	にぶい黄色	白化粧土の刷毛目に透明	残存部全面施釉	口径10.6	−	−	−	肥前	18c前半	
	1903	自然流路1			陶器	皿	灰色	銅緑釉	外面腰部下位露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	−	底経4.6	−	−	肥前	17c	
	1904	自然流路1			陶器	皿	灰色	透明釉	残存部全面施釉	口径20.0	−	−	−	肥前	18c代か？	
	1905	自然流路2	E-26		石製品		−	−	−	最大長4.5	最大幅2.8	最大厚0.9	−			
	1906	自然流路2			土製品	鞴の羽口	明褐色	−	−	7.5	−	−	−			

近世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
第336図	1907			磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	15.0	5.2	7.4	肥前	17c前半	荒磯文　竜文
	1908	A･B-30		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	5.8	－	肥前	17c前半	荒磯文
	1909	C-30		磁器	丸碗	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.4	5.1	7.0	肥前	17c前半	草花文
	1910	B-30	Ⅲ	磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.8	5.0	6.7	肥前	17c前半	ソテツの文様
	1911	A･B-30		白磁	丸碗	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.0	4.4	6.3	肥前	17c後半か？	
	1912	B-34,C-35	Ⅰ,Ⅱ	磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.0	4.2	5.4	肥前	18c前半	輪宝繋文
	1913	D-36		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.8	4.1	5.1	肥前	18c中頃	コンニャク印判
第337図	1914	D-35		磁器	丸碗	白色	(内)透明釉 (外)青磁釉	畳付釉剥ぎ	11.0	4.4	6.7	肥前	18c中頃	コンニャク印判五弁花, 内面口縁部　四方襷文, 高台内面　渦福
	1915	A-36		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.6	4.4	5.5	肥前	18c後半	矮小化したコンニャク印判五弁花
	1916			磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.8	4.9	6.1	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花
	1917	A･B-36･37	Ⅱ	磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.8	－	肥前	18c中頃	
	1918	D-36		磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.0	4.2	5.1	肥前	18c後半	矮小化したコンニャク印判五弁花
	1919	C-34		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.2	4.2	5.4	肥前	18c末～19c初頭	丸文　格子文
	1920	B-35		磁器	丸碗	灰褐色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.2	4.0	5.4	肥前	18c後半	
	1921	C･D-36		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.3	4.0	5.9	肥前	18c中頃	草花文
	1922			磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.5	4.6	6.0	肥前	18c後半	
	1923	B-36･37		磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.4	4.2	5.6	肥前	18c後半	一重網目文
	1924	D-35	Ⅲ	磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	4.2	－	肥前	18c後半	二重網目文
第338図	1925			磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	12.1	4.8	5.0	肥前系	18c後半	丸文
	1926	B-35		磁器	丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	10.6	4.0	5.2	肥前系	18c後半	梅花文
	1927	C-35	Ⅰ	磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.2	5.0	4.5	肥前系	18c後半	折れ松葉文
	1928	B-37		磁器	丸碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.4	4.4	4.4	肥前系	18c後半	コンニャク印判の菊文
	1929	C-36		磁器	丸碗	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.8	5.0	5.3	肥前系	18c後半	梅花文
	1930	C-35	Ⅰ	白磁	朝顔形碗	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.6	4.2	6.5	肥前系	18c後半	
	1931	C-35,D-35	Ⅰ	磁器	広東碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.6	6.0	6.3	肥前系	18c末～19c前半	山水文
	1932	C-35		磁器	広東碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.6	6.0	6.4	肥前系	18c末～19c前半	山水文
	1933	B-35	Ⅲa	磁器	小広東碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.2	－	－	肥前系	18c末～幕末	梵字文
	1934	B-36,C-34	Ⅲ	白磁	端反碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	11.8	4.0	5.7	在地	18c末～幕末	
	1935	B-35･37		磁器	端反碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	－	4.3	－	在地	18c末～幕末	格子文
第339図	1936	C-35	Ⅰ	磁器	筒形碗	白色	(内)透明釉 (外)青磁釉	畳付釉剥ぎ	7.6	4.0	6.3	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花, 内面口縁部　四方襷
	1937			磁器	筒形碗	灰白色	(内)透明釉 (外)青磁釉	残存部全面施釉	7.9	－	－	肥前	18c後半	四方襷文
	1938			磁器	筒形碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	7.9	－	－	肥前	18c後半	菊文と帆かけ舟文　四方襷文
	1939	D-37		磁器	筒形碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	6.7	3.0	5.7	肥前	18c後半	矮小化したコンニャク印判五弁花　二重編目文　折れ松葉文　四方襷文
	1940	B-35		磁器	筒形碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	8.7	3.4	6.1	肥前	18c末～19c初頭	雪持笹文 虫文　松葉文
	1941	D-35	Ⅲ	磁器	筒形碗	白色	透明釉	残存部全面施釉	7.8	－	－	肥前	18c後半	横縞文
	1942	D-35	Ⅲ	磁器	筒形碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	7.3	4.0	6.1	肥前系	18c後半～19c初頭	
	1943	D-35	Ⅲ	磁器	筒丸碗	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	7.2	4.0	5.8	在地？	18c後半～19c初頭	格子文
	1944	D-34	Ⅲ	磁器	筒丸碗	灰色	透明釉	口縁～底部	6.8	3.2	5.3	肥前	18c後半	草花　蝶
	1945	D-35		磁器	筒丸碗	灰色	透明釉	残存部全面施釉	6.2	3.4	5.0	肥前	19c代	草花　蝶
	1946	A'-30		白磁	小坏	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	7.0	3.5	5.0	肥前	18c後半	畳付に砂目あり
	1947	B-33･34	Ⅱ	白磁	小坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	5.0	2.6	3.5	肥前	18c末～19c	
	1948	E-24	Ⅱ	磁器	小坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	6.0	2.8	3.4	肥前	19c代	草花文
	1949	C-35		清朝磁器	小坏	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	6.2	1.9	2.7	中国景徳鎮	19c	菊文
第340図	1950	B-35, B-34･35	Ⅰ	磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	22.0	12.2	3.6	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花, 裏面砂付着
	1951	A･B-30		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	14.0	－	肥前	18c後半	高台内底にハリ支えの目跡あり
	1952	B-35･36		磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	11.7	－	肥前	18c後半	高台内底にハリ支えの目跡あり　角福
	1953	A'-30		磁器	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c後半	手書き五弁花　角福
	1954	D-35	Ⅲ	磁器	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c後半	蛸唐草文　高台内底にハリ支えの目跡あり
	1955	B-35		磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17.8	11.4	2.1	肥前	18c後半	蛸唐草文　唐草文
第341図	1956	F-36		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	6.4	－	肥前	17c中葉	初期伊万里　日の字鳳凰文
	1957			磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	14.5	5.2	3.9	肥前	17c中葉	初期伊万里　菊花文
	1958	C-35	Ⅰ	磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.5	7.6	3.8	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花
	1959			磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	12.5	6.4	3.0	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花
	1960	C-35		磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.2	8.2	3.1	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花　唐草文
	1961	B-34	Ⅱ	磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.2	8.2	3.4	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花 雪之輪文
	1962	B-35	Ⅰ	磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	8.0	－	肥前	18c後半	コンニャク印判五弁花
第342図	1963	D-36		磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.0	7.6	4.1	肥前	18c後半	
	1964	B-35		磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	14.6	9.6	5.0	肥前	18c後半～19c前半	輪花皿　蛇ノ目凹型高台　松竹梅文　唐草文
	1965	B-3		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.8	7.8	4.6	肥前	19c代	蛇ノ目凹型高台
	1966	C-35	Ⅰ	磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.6	8.1	3.8	肥前	18c後半～19c前半	菊花皿　蛇ノ目凹型高台　口錆
	1967	B-35	Ⅰ	磁器	皿	黄白色	透明釉	外面腰部下位～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.0	4.6	3.6	在地系	18c末～19c前半	
	1968	D-36		磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	－	5.0	－	在地系	18c末～19c前半	
	1969	B-10	Ⅳ	磁器	皿	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.5	5.3	2.7	肥前	18cか？	砂粒付着　四方襷文　山水文
	1970	A-36	Ⅰ	磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.3	5.0	3.1	肥前	18c末～19c前半か？	山水文
第343図	1971			磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.8	4.2	2.6	肥前	19c代	輪花皿　唐草文　松竹梅文
	1972	C-36		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.8	4.2	2.6	肥前	19c代	輪花皿　唐草文　松竹梅文
	1973	C-35	Ⅰ	磁器	皿	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.0	5.5	2.8	肥前	19c前葉～中葉	山水文
	1974	E-35		磁器	皿	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.3	6.0	2.5	肥前	19c前葉～中葉	輪花皿　山水文
	1975	D-35	Ⅲ	磁器	鉢	灰白色	透明釉	口唇部内釉剥ぎ	10.8	5.8	6.0	肥前	18c代	
	1976	C･D-36		磁器	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	8.4	－	－	肥前	18c代か？	
	1977			磁器	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	8.2	－	－	肥前	18c代	
	1978	B-35･36		磁器	鉢	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	12.6	－	－	肥前	18c代	
	1979	G-28	Ⅰ	磁器	鉢	白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c代	
	1980	C-35	Ⅰ	磁器	鉢	灰色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	肥前	18c代	山水文

近世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
第344図	1981	C-35	Ⅰ	磁器	蓋	白色	透明釉	残存部全面施釉	9.7	–	–	肥前系	19c代	格子文
	1982	D-36		白磁	蓋	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	9.2	つまみ径3.9	2.7	肥前系	18c末～19c初頭	
	1983	B-35		磁器	蓋	灰白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	8.6	庇径10.2	–	肥前系	18c後半	
	1984			磁器	蓋	白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	9.0	庇径9.2	–	肥前系	17c後半か？	
	1985	A・B-35・36, D-36		磁器	蓋	灰白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	10.6	庇径11.0	3.1	肥前系	17c後半	
	1986	A-36		磁器	紅皿	白色	透明釉	外面露胎	4.6	1.2	1.6	在地系	19c代	
	1987	A-30		磁器	うがい碗か？	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	14.0	–	–	肥前	17c末～18c初頭	
	1988	D-35	Ⅲ	磁器	油壺	灰白色	透明釉	内面頸部以下無釉	2.4	–	–	肥前	18c代	梅花文
	1989	C-33		磁器	仏飯具	白色	透明釉	外底面露胎	8.0	4.2	5.6	在地	19c代	
	1990	B-33・34	Ⅱ	磁器	徳利	灰白色	透明釉	内面無釉　畳付釉剥ぎ	–	5.2	–	–	–	
	1991	B-36, C-35	Ⅰ	磁器	コンプラ瓶	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ　内面口縁上位施釉	2.4	7.2	22.0	肥前（波佐見）	19c幕末	砂粒付着
第345図	1992	B-34		磁器	碗	淡黄色	透明釉	高台脇～高台内面露胎	11.8	4.8	4.6	京焼き	18c前半	絵付け
	1993	E-19		陶器	碗	にぶい褐色	灰釉　鉄釉	外面腰部～高台内面露胎	12.7	5.4	6.1	肥前	16c末～17c初頭	皮鯨
	1994	C-35		陶器	碗	にぶい褐色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	12.6	5.2	6.2	肥前	16c末～17c初頭	
	1995	AB-36・37	Ⅱ	陶器	碗	褐色	黒褐色釉	外面腰部～高台内面露胎	–	4.8	–	肥前	16c末～17c初頭	
	1996			陶器	天目碗	灰色	黒釉	外面腰部～高台内面露胎	–	5.6	–	肥前	16c末～17c初頭	
	1997	E-8		陶器	碗	灰黄色	黒釉	外面腰部～高台内面露胎	–	4.7	–	肥前	16c末～17c初頭	畳付に胎土目の痕跡有り
	1998	E-8・9		陶器	碗	灰褐色	黒釉	外面上部施釉　高台内下部露胎	11.2	5.2	7.1	肥前	16c末～17c初頭	
	1999	C-35	Ⅰ	陶器	碗	浅黄色	（内）透明釉（外）銅緑釉	外面腰部～高台内面露胎	10.2	4.0	5.9	肥前	17c後半	
	2000	C-35		陶器	碗	灰白色	（内）透明釉（外）銅緑釉	外面腰部～高台内面露胎	10.6	4.8	6.3	肥前（内野山系）	17c後半	
	2001			陶器	碗	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	11.4	4.8	6.7	肥前	17c後半	呉器手椀
	2002			陶器	碗	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	13.4	5.2	6.3	肥前	–	
第346図	2003	C-35		陶器	煎じ碗	黄白色	透明釉か？	畳付釉剥ぎ	10.0	4.0	5.9	肥前	18c前半	京焼風陶器
	2004	A'-30		陶器	煎じ碗	黄白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	10.8	4.4	5.7	肥前	18c前半	京焼風陶器
	2005			陶器	煎じ碗	黄白色	透明釉	畳付～高台内面露胎	10.0	3.6	4.8	肥前	18c前半	京焼風陶器
	2006			陶器	筒丸碗	黄白色	透明釉	高台～高台内面露胎	9.4	5.0	6.0	肥前	18c前半	見込み鉄絵　京焼風陶器
	2007			陶器	筒形碗	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面露胎	7.8	3.9	5.8	肥前	18c前半	見込み鉄絵　京焼風陶器
	2008	B-34	Ⅲ	陶器	碗	灰白色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	–	3.8	–	肥前	18c前半	見込み鉄絵　京焼風陶器
	2009	D-35	Ⅲ	陶器（陶胎染付）	碗	灰色	白化粧土に透明釉	総釉	11.2	5.0	7.3	肥前	18c前半	
	2010			陶器（陶胎染付）	碗	灰色	白化粧土に透明釉	総釉	11.4	4.8	7.3	肥前	18c前半	
	2011	A'-31		陶器	碗	黄灰色	白化粧土の巻刷毛目に透明釉	畳付釉剥ぎ	–	4.0	–	肥前	18c前半	
	2012			陶器	碗	灰褐色	透明釉	畳付釉剥ぎ	–	4.2	–	肥前	18c前半	内面　打刷毛目 外面　白土による蛍手
	2013	E-30		陶器	碗	灰白色	飴釉	畳付釉剥ぎ	12.0	4.7	6.9	薩摩龍門司系	17c後半	山元窯
	2014			陶器	碗	灰黄色	褐釉	残存部全面施釉	12.5	–	–	薩摩龍門司系	17c後半	初期龍門司
	2015	AB-35・36		陶器	碗	にぶい黄褐色	黒釉	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	12.4	5.2	5.0	薩摩龍門司系	18c後半	
	2016	C-35		陶器	碗	橙色	白化粧土に透明釉	高台～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	–	4.8	–	薩摩龍門司系	18c後半	
	2017	C-35		陶器	碗	にぶい黄橙色	鉄釉	高台～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.1	5.4	5.9	薩摩龍門司系	18c後半	
	2018	D-36		白薩摩	碗	黄白色	透明釉	残存部全面施釉	8.0	–	–	薩摩堅野系	18c代か？	
	2019	D-36	Ⅲa	白薩摩	碗	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	–	–	–	薩摩堅野系	18c代か？	鉄絵
	2020			白薩摩	小杯	黄白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	–	2.2	–	薩摩堅野系	18c代か？	松葉文
第347図	2021	B-35, ?-35・36	Ⅰ	陶器	皿	灰白色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	–	6.6	–	肥前	16c末～17c初頭	鉄絵
	2022	B-36・37	Ⅱ	陶器	皿	黄灰色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	19.0	6.4	3.9	肥前	16c末～17c初頭	見込みに胎土目あり　鉄絵
	2023	E-19・20		陶器	皿	灰白色	灰釉	畳付～高台内面露胎	12.0	4.3	3.0	肥前	1584～1610年	口唇部鉄錆
	2024	E-18,F-19	Ⅱ	陶器	皿	にぶい黄褐色	灰釉　鉄釉	外面腰部～高台内面露胎	12.0	4.2	3.2	肥前	16c末～17c初頭	皮鯨　口錆
	2025	E-19		陶器	皿	灰色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	11.1	4.1	3.1	肥前	1580～1610年	
	2026			陶器	皿	灰色	灰釉	総釉	14.2	3.8	3.6	肥前	16c末～17c初頭	見込みに砂目
	2027	B-30		陶器	皿	灰白色	（内）銅緑釉（外）透明釉	外面腰部～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.0	4.6	4.6	肥前（内野山系）	17c後半	
	2028			陶器	皿	灰白色	（内）銅緑釉（外）透明釉	外面腰部～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	12.2	4.4	3.4	肥前（内野山系）	17c後半～18c初頭	
	2029	C-30		陶器	皿	浅黄橙色	（内）銅緑釉（外）透明釉	外面腰部以下露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	12.6	4.8	3.7	肥前（内野山系）	17c後半	
	2030	D-30	Ⅱ	陶器	皿	灰白色	鉄釉	外面腰部～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	–	5.2	–	肥前（内野山系）	17c	
	2031			陶器	皿	灰黄色	透明釉に銅緑釉流し	外面腰部～高台内面露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	13.8	4.6	3.5	肥前（内野山系）	17c後半～18c初頭	
	2032	B-12,C-12, D-22,E-18	Ⅱ	陶器（陶胎染付）	皿	にぶい褐色	白化粧土に透明釉	残存部全面施釉	14.8	–	–	肥前	不明	鉄絵
第348図	2033	D-36		陶器	鉢	灰赤色	灰釉,鉄泥	外面中位以下露胎	28.0	–	–	肥前	17c代	
	2034	–		陶器	鉢	にぶい赤褐色	白化粧土の刷毛目に透明釉,緑彩	残存部全面施釉	–	–	–	肥前	17c後半	
	2035	D-34	Ⅰb	陶器	鉢	赤灰色	白化粧土の刷毛目に褐釉	残存部全面施釉	–	–	–	肥前	17c後半	
	2036	B-35・36 溝内		陶器	鉢	灰褐色	白化粧土,銅緑釉,褐釉	残存部全面施釉	26.0	–	–	肥前	17c後半	
	2037	F-3	Ⅰb	陶器	鉢	暗灰黄色	白化粧の刷毛目,銅緑釉	残存部全面施釉	–	–	–	肥前	17c後半	
	2038	C-36		陶器	鉢	灰白色	白化粧土の巻き刷毛目に透明釉	高台内面露胎	–	–	–	肥前	18c前半	
	2039	E-30		陶器	鉢	明赤褐色	（内）白化粧土・緑彩	高台脇～高台内面露胎	–	10.6	–	肥前	18c代か？	
	2040	C-35	Ⅰ	陶器	片口	赤褐色	白化粧土の刷毛目に透明釉か？	口唇部釉剥ぎ	—	–	–	肥前	17c後半	
	2041	C-35	Ⅰ	陶器	片口	灰白色	灰釉	外面腰部～高台内面露胎	–	8.2	–	肥前	16c末～17c初頭	
	2042	E-37		陶器	片口	にぶい黄橙色	透明釉	高台脇～高台内面露胎	18.0	8.2	7.6	肥前	19c代	内底面に目跡あり
第349図	2043	D-34	Ⅲ	陶器	徳利か？	にぶい赤褐色	鉄泥に白化粧土	外面腰部以下・内面露胎	–	–	–	肥前	18c後半	
	2044	C-30		陶器（陶胎染付）	瓶	灰白色	白化粧土に透明釉	畳付釉剥ぎ	–	6.0	–	肥前	18c後半	
	2045			陶器	徳利	赤褐色	灰釉	内面上部一部施釉	–	–	–	薩摩苗代川	17c後半	
	2046	A'-30		陶器	徳利	黄灰色	鉄釉	内面上部一部施釉	–	–	–	薩摩苗代川	17c後半	
	2047			陶器	徳利	黒褐色	鉄釉	残存部全面施釉	–	8.6	–	薩摩苗代川	17c後半	外底面貝目あり
	2048	A-23	Ⅲ	陶器	徳利	紫灰色	鉄釉	残存部全面施釉	–	8.4	–	薩摩苗代川	17c後半	
	2049	C-35		陶器	徳利	灰色	–	–	–	12.8	–	薩摩苗代川	17c後半	
	2050	A-23	Ⅲ	陶器	徳利	橙色	灰釉	残存部全面施釉	–	16.5	–	薩摩苗代川	18c代	肩部に貝目あり
	2051	C-35	Ⅰ	陶器	徳利	赤色	–	–	–	–	–	琉球	18c後半	
	2052	E-30		陶器	徳利	赤灰色	–	–	–	5.6	–	琉球	18c後半	外底面に目跡あり

近世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
第350図	2053			陶器	蓋	黒褐色	–	–	10.6	庇径 11.0	2.1	薩摩苗代川	17c後半	堂平窯
	2054	B-35	Ⅲb	陶器	蓋	にぶい橙色	鉄釉	上面施釉	5.0	庇径 7.0	3.6	薩摩苗代川	18c後半	
	2055	B-34	Ⅲ	陶器	蓋	明赤褐色	鉄釉	上面施釉	5.4	庇径 7.7	3.5	薩摩苗代川	18c後半	
	2056	D-36		陶器	蓋	褐灰色	鉄釉	上面施釉	5.6	庇径 8.2	3.4	薩摩苗代川	18c後半	
	2057			陶器	蓋	褐灰色	鉄釉	上面施釉	9.8	庇径 12.2	4.7	薩摩苗代川	18c後半	
	2058	C・D-36	Ⅶ	陶器	蓋	灰色	鮫肌釉	上面施釉	–	庇径 5.8	–	薩摩龍門司	幕末以降	
	2059	O・A-30		陶器	水注	黄灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	6.0	–	–	薩摩苗代川	17c前半	
	2060	D-35・36		陶器	把手	灰色	鉄釉	残存部全面施釉	12.0	–	–	薩摩苗代川	17c代	
第351図	2061	D-36		白薩摩	土瓶	灰白色	透明釉	口唇部釉剥ぎ	5.4	–	–	薩摩竪野系	18c後半	
	2062	D-34・35	Ⅲ	陶器	土瓶	にぶい橙色	鉄釉	外面腰部以下露胎	7.0	4.4	9.7	薩摩苗代川	18c後半	
	2063	B-33・34		陶器	土瓶	橙色	鉄釉	外面腰部～外底面露胎	6.4	–	–	薩摩苗代川	18c後半	
	2064	C-35		陶器	土瓶	赤褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	–	–	–	薩摩苗代川	18c後半	
	2065	B-34・35	Ⅱ,Ⅲ	陶器	土瓶	褐灰色	鉄釉	外面腰部以下露胎	7.0	2.8	9.2	薩摩苗代川	18c後半	
	2066	B-33・34	Ⅱ	陶器	土瓶	橙色	鉄釉	外面腰部～外底面露胎	7.4	–	10.0	薩摩苗代川	18c後半	
	2067			陶器	土瓶	にぶい褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	7.4	3.5	7.1	薩摩苗代川	18c後半	
第352図	2068			陶器	土瓶	明赤褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	6.8	–	–	薩摩苗代川	18c後半	
	2069			陶器	土瓶	赤褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	8.6	5.0	9.6	薩摩苗代川	18c後半	
	2070			陶器	釜	暗赤褐色	鉄釉	内面腰部以下露胎	13.2	–	–	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2071	D-35	Ⅲ	陶器	釜	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17.2	–	–	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2072	D-35	Ⅲ	陶器	釜	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	14.6	–	–	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2073	A-36	Ⅱ	陶器	釜	にぶい赤褐色	鉄釉	外面腰部以下露胎	14.4	–	–	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2074	C-35,D-35	Ⅲ	陶器	釜	灰色	鉄釉	外面腰部以下露胎	–	–	–	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
	2075	A・B-35・36		陶器	釜	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	–	–	–	薩摩苗代川	18c後半～19c代	
第353図	2076			陶器	片口	褐灰色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	18.2	9.6	9.4	薩摩苗代川	17c後半	口唇部・外底面に貝目あり
	2077			陶器	片口	灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	16.8	9.4	9.2	薩摩苗代川	17c後半	
	2078			陶器	片口	灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17.7	–	–	薩摩苗代川	17c後半	
	2079	B-35		陶器	片口	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	16.7	–	–	薩摩苗代川	17c後半	口唇に同心円状の敲き目
	2080	D-35	Ⅰ	陶器	片口	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	20.2	10.7	12.0	薩摩苗代川	18c代	
	2081			陶器	片口	灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	25.4	13.0	12.8	薩摩苗代川	18c代	口唇部に貝目あり
	2082	C-29		陶器	片口	にぶい橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	25.6	14.4	12.3	薩摩苗代川	18c代	
第354図	2083	A'-31		陶器	片口	にぶい黄褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	26.8	–	–	薩摩苗代川	18c代	
	2084			陶器	片口	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	22.5	–	–	薩摩苗代川	18c代	
	2085			陶器	片口	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	–	–	–	薩摩苗代川	18c代	
	2086	C-35	Ⅰ	陶器	片口	褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	–	–	–	薩摩苗代川	18c代	
	2087	E-35・36		陶器	鉢	明赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.4	–	–	薩摩苗代川	18c代	
	2088			陶器	鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.0	–	–	薩摩苗代川	18c代	
	2089	B-35	Ⅲb	陶器	鉢	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.8	25.0	9.9	薩摩苗代川	18c代	
	2090	B-36・37		陶器	鉢	灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	26.6	–	–	薩摩苗代川	18c代	口唇部に貝目あり
第355図	2091	E-35	Ⅰ	陶器	鉢	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	24.6	12.8	11.5	薩摩苗代川	18c代	外・内底面に貝目あり
	2092			陶器	擂鉢	にぶい橙色	鉄釉	口唇部上端施釉	–	–	–	肥前	1630～1650年	
	2093	D-36	Ⅲ	陶器	擂鉢	暗灰黄色	鉄釉	口唇部上端施釉	–	–	–	肥前	17c中頃	
	2094	E-9		陶器	擂鉢	灰黄色	鉄釉	口縁部上端施釉	–	–	–	肥前	17c中頃	
	2095	E-20・22, F-19・20	Ⅱ,Ⅲ	陶器	擂鉢	灰黄褐色	褐釉	口縁上端～外面腰部施釉	28.0	–	–	肥前	17c中頃	
	2096	C-30		陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	–	–	–	9.6	–	肥前	17c中頃	
	2097			陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口縁上端～外面腰部施釉	–	10.0	–	肥前	17c中頃	
	2098			陶器	擂鉢	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	–	–	–	薩摩苗代川	17c後半	堂平窯
	2099	D-36	Ⅰ,Ⅲ	陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	33.4	–	–	薩摩苗代川	18c前半	
	2100	A'-30, A・B-30		陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	29.8	–	–	薩摩苗代川	18c前半	
第356図	2101	A-30		陶器	擂鉢	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	33.0	–	–	薩摩苗代川	18c前半	
	2102	D-36		陶器	擂鉢	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	30.6	–	–	薩摩苗代川	18c前半	口唇部貝目あり
	2103	D-34・35・36	Ⅲ,Ⅳ	陶器	擂鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.8	–	–	薩摩苗代川	18c後半	
	2104			陶器	擂鉢	灰褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	–	–	–	薩摩苗代川	18c前半	
	2105			陶器	擂鉢	にぶい橙色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	24.2	8.6	11.2	薩摩苗代川	18c代	
	2106	C-36, D-35・36	Ⅲ	陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	24.0	–	–	薩摩苗代川	18c代	
	2107	A'-31		陶器	擂鉢	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	24.8	–	–	薩摩苗代川	18c前半	
	2108	B-33・34	Ⅱ	陶器	擂鉢	にぶい橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 外面腰部～外底面露胎	24.0	10.2	10.7	薩摩苗代川	18c後半～19c前半	
	2109			陶器	擂鉢	暗灰黄色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	23.0	12.2	11.6	薩摩苗代川	18c前半	
第357図	2110	B-34	Ⅲ	陶器	擂鉢	赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 外面腰部以下露胎	28.8	13.2	12.2	薩摩苗代川	18c代	
	2111	B-34・35, C-36	Ⅲ	陶器	擂鉢	明赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 外底面釉拭き取り	30.2	16.2	13.0	薩摩苗代川	19c代	
	2112	B-33・34	Ⅱ	陶器	擂鉢	にぶい橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 外面底部露胎	28.6	16.0	12.3	薩摩苗代川	18c後半～19c前半	
	2113	F-13	Ⅰb	陶器	擂鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 外底腰部以下露胎	31.3	14.3	13.1	薩摩苗代川	18c後半	
	2114	A'-31		陶器	擂鉢	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	–	11.0	–	薩摩苗代川	18c前半	
第358図	2115	E-17	Ⅱ	陶器	蓋	赤黒色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	25.4	–	–	薩摩苗代川	17c前半	口唇部に貝目あり
	2116			陶器	蓋	にぶい赤褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	31.4	–	–	薩摩苗代川	18c代	
	2117	E-35		陶器	蓋	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	35.8	21.4	7.8	薩摩苗代川	18c前半	
	2118	D-30,	Ⅰb	陶器	蓋	明赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	31.2	23.4	9.3	薩摩苗代川	18c前半	口唇部・外底面に貝目あり
	2119			陶器	蓋	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 上面露胎	29.0	23.4	8.7	薩摩苗代川	18c前半	外底面に貝目あり
	2120	A・A'-30・31	Ⅰ	陶器	蓋	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	29.9	23.0	9.4	薩摩苗代川	18c前半	
	2121	B-36	Ⅲ	陶器	蓋	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	30.0	23.4	10.5	薩摩苗代川	18c前半	
	2122	E-35	Ⅲb	陶器	蓋	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	28.8	23.2	8.8	薩摩苗代川	18c前半	
	2123	C-21	Ⅳ	陶器	蓋	暗赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 上面釉拭き取り	24.2	16.0	8.1	薩摩苗代川	18c代	
	2124			陶器	蓋	赤橙色	鉄釉	上面釉拭き取り	23.2	16.0	7.7	薩摩苗代川	18c前半	
	2125	B-35		陶器	蓋	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 外底面露胎	24.0	18.4	7.0	薩摩苗代川	19c代	

近世出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量(cm) 口径	底径	器高	産地	時期	備考
第359図	2126	B-12		陶器	甕	灰黄色	鉄釉か？	口唇部釉剥ぎか？	30.0	－	－	薩摩苗代川 串木野か？	17c初頭	口唇部に貝目あり 串木野産か？
	2127			陶器	甕	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	30.6	－	－	薩摩苗代川	17c中頃	口唇部に貝目あり
	2128	A'-30	Ⅲ	陶器	甕	赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	39.2	－	－	薩摩苗代川	18c前半	口唇部に貝目あり
	2129	A'-30・31		陶器	甕	黄灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	36.2	－	－	薩摩苗代川	17c後半	
	2130	B-29		陶器	甕	赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	24.2	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2131	AB-30		陶器	甕	にぶい黄橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.0	－	－	薩摩苗代川	17c後半	口縁部貝目あり
	2132			陶器	甕	暗灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	32.0	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2133			陶器	甕	赤色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩苗代川	18c代	
第360図	2134	A-23, E-35	Ⅲ, Ⅰ	陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	38.8	－	－	薩摩苗代川	18c前半	
	2135			陶器	甕	明褐色	灰釉	口唇以外全面施釉	31.0	－	－	薩摩苗代川		
	2136	B-37	Ⅳウ	陶器	甕	明赤褐色	灰釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩苗代川		
	2137			陶器	甕	明赤褐色	灰釉	残存部全面施釉	－	27.3	－	薩摩苗代川		
	2138			陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	21.0	－	－	薩摩苗代川	19c前半	
	2139	C-35	Ⅰ	陶器	甕	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	26.6	－	－	薩摩苗代川	19c代	
第361図	2140	B-35	Ⅲb？	陶器	甕	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	60.4	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2141			陶器	甕	黄灰色	鉄釉	外底面釉拭き取り	－	25.6	－	薩摩苗代川	18c後半	
第362図	2142	A'-31		陶器	壺	黄灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.4	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり
	2143			陶器	壺	灰褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	16.0	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり
	2144	C-36	Ⅲ	陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.0	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり
	2145	B-35,C-35, E-31	Ⅰ, Ⅰb	陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	21.0	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2146	A・B-35・36		陶器	壺	灰褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	16.0	－	－	薩摩苗代川		
	2147			陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	16.0	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり
	2148	F-13	Ⅰb	陶器	壺	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18.6	－	－	薩摩苗代川	18c代	
	2149	D-34	Ⅲ	陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	16.9	－	－	薩摩苗代川		口唇部にイタヤガイの目跡あり
	2150			陶器	壺	灰褐色	鉄釉	残存部全面施釉	17.6	－	－	薩摩苗代川		口唇部にイタヤガイの目跡あり
	2151			陶器	壺	褐灰色	鉄釉	残存部全面施釉	8.4	－	－	薩摩苗代川		口唇部に貝目あり 堂平窯
	2152	B-35・36		陶器	壺	灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	12.0	－	－	薩摩苗代川		
	2153	B-35		陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉 口唇部釉剥ぎ	11.0	－	－	薩摩苗代川	17c後半	
	2154	D-35	Ⅲ	陶器	壺	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	10.4	－	－	薩摩苗代川		
	2155	D-36	Ⅲ	陶器	壺	赤褐色	－	－	14.6	－	－	琉球		
	2156			陶器	壺	赤褐色	－	－	－	－	－	琉球		
	2157	D-34・35		陶器	壺	赤褐色	－	－	15.4	－	－	琉球		
	2158	D-34,D-37	Ⅲ	陶器	壺	赤褐色	－	－	－	16.6	－	琉球		
	2159	D-35	Ⅲ	陶器	壺	赤褐色	－	－	－	21.2	－	琉球		
第363図	2160	D-34	Ⅲ	陶器	灯明皿	赤褐色	鉄釉	外面口縁下位～外底面露胎	10.6	4.9	2.5	薩摩龍門司系	18c後半	見込みにゴマ目あり
	2161	B-34,D-35	Ⅱ,Ⅲ	陶器	灯明皿	灰黄褐色	褐釉	外面口縁下位～外底面露胎	10.4	4.1	2.3	薩摩龍門司系	18c前半	見込みにゴマ目あり
	2162	C-35	Ⅰ	陶器	灯明皿受け台	暗赤色	鉄釉	皿部外面露胎	－	5.4	－	薩摩龍門司系	18c代	
	2163	D-16		陶器	仏花器	灰赤色	蛇蝎釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩元立院	18c後半	
	2164	G		陶器	仏花器	灰褐色	黒釉	残存部全面施釉	－	－	－	薩摩元立院	18c後半	
	2165			陶器	香炉	灰色	褐釉	外面腰部以下露胎	11.2	5.0	6.6	肥前	18c代	
	2166	C-30		陶器	香炉	にぶい橙色	白化粧土の刷毛目に褐釉	口唇部～外面中位施釉	12.0	－	－	肥前	18c後半	
	2167	F-30	Ⅰb	陶器	香炉	灰白色	白化粧土の刷毛目に褐釉	口唇部～外面のみ施釉	9.6	5.2	6.1	肥前	18c前半	
	2168	E-38		陶器	香炉	浅橙色	鉄釉	外面・内面口縁下位以下露胎	11.4	4.4	4.9	薩摩龍門司	18c後半	
	2169			陶器	香炉	にぶい橙色	鉄釉	外面腰部まで施釉	－	5.8	－	薩摩龍門司	18c代	
	2170	A・B？-35		陶器	香炉	灰白色	白化粧土に緑釉から透明釉	内面口縁下位以下露胎 外面高台～高台内面露胎	10.0	10.0	8.5	薩摩龍門司	19c代	
第364図	2171	C-36		陶器	鉢か？	浅黄色	透明釉	外底面釉剥ぎ	－	9.9	－	肥前	17c後半～18c前半	
	2172	B-35		土師質土器	焙烙	にぶい黄橙色	－	－	20.0	15.0	3.4			外面に煤付着
	2173	D-35	Ⅲ	陶器	植木鉢	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	31.2	―	―	薩摩苗代川	18c後半	
	2174	B-35		瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	－	－	－	25.4	－			
	2175	E-30		瓦	丸瓦	灰白色	－	－	最大長 16.5	最大幅 12.7	最大厚 3.0			
	2176	D-34	Ⅲ	瓦	軒平瓦	赤橙色	－	－	最大長 8.9	最大幅 13.9	最大厚 4.6			
	2177	F-18	Ⅱ	土製品	人形	浅黄色	－	－	－	－	－			
	2178	D-35	Ⅲ	陶器	メンコ	にぶい橙色	－	－	3.8	－	0.7			
	2179				皿か？	灰白色	－	－	4.8	1.8	1.1	不明	不明	ままごと道具か？

金属製品観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	遺構名	出土区	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	備考
第148図	721	鉄製品		竪穴建物6	C・D-20・21	3.2	2.7	1.10	8.0	
第178図	753	鉄製品	煙管	土坑12	D-20	6.7	0.9		4.0	
第201図	861	鉄製品	鉄鍋片か？	ピット41	D-15	3.8	3.65	0.5	11.0	鋳造製品
	862	鉄製品	鉄鍋片か？	ピット42	D-15	5.4	4.3	1.1	2.3	鋳造製品
	863	銅製品	六弁花形金座金具	ピット43	D-9	2.6	2.4	0.5	3.0	塗金あり
第203図	888	鉄製品	鉄鍋片か？	溝7	A-27	5.1	2.6	0.5	21.0	鋳造製品

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	備考
第365図	2180	鉄製品	短刀	C-37	Ⅱ	26.6	2.8	0.8	138.0	
	2181	鉄製品	短刀	D-27	Ⅱ	18.1	2.35	0.4	41.0	
	2182	鉄製品	短刀	F-25	Ⅱ	26.7	2.75	0.9	89.0	
	2183	鉄製品	短刀	F-11	Ⅱ	17.6	2.0	0.5	27.0	
	2184	鉄製品	鎌			24.0	3.8	0.6	73.0	
第366図	2185	鉄製品	ヤリガンナか？	C-25・26		11.6	1.7	0.7	14.0	
	2186	鉄製品	ヤリガンナか？	B-37	Ⅳ	4.6	1.5	0.25	5.0	
	2187	鉄製品	ヘラ状製品	B-37	Ⅲb	6.6	1.65	0.45	11.0	
	2188	鉄製品	大型釘	D-21	Ⅱ	12.25	1.2	1.0	42.0	
	2189	鉄製品	短冊状製品	D-25		6.0	1.1	0.8	0.4	
	2190	鉄製品	熊手状製品	E-28	Ⅱ	4.6	1.7	0.9	16.0	
	2191	鉄製品	鉄鏃	A-23		3.1	1.8	0.6	3.0	圭頭鏃
	2192	鉄製品	鉄鏃			2.4	2.3	0.5	5.0	無茎鏃
	2193	鉄製品	紡錘車			6.5	3.3	0.5	14.0	
	2194	鉄製品	紡錘車			2.7	3.8	1.5	9.0	

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	備考
第366図	鉄15	鉄製品	鉄鍋片か？	A・B-30		4.9	3.3	0.4	37.0	鋳造製品
	鉄22	鉄製品	鉄鍋片か？	D-29		3.7	3.4	0.6	9.0	鋳造製品
	鉄32	鉄製品	鉄鍋片か？	D-23		5.5	4.0	0.9	17.0	鋳造製品
	鉄26	鉄製品	鉄鍋片か？	G-17	Ⅳ	5.6	2.8	0.4	14.0	鋳造製品
	鉄36	鉄製品	火打金			6.3	3.0	0.6	10.0	
	鉄19	鉄製品	角釘	E-31	Ⅲ	5.1	0.9	0.5	8.0	
第367図	鉄30	銅製品	簪	F-28	Ⅰ	15.3	1.0	0.2	5.0	
	鉄29	銅製品	簪	F-28	Ⅰ	8.0	1.7	0.2	3.0	
	25	銅製品	棒状製品	E-28	Ⅱ	9.3	0.5	0.4	7.0	
	鉄28	銅製品	針金状製品			5.75	1.75	1.75	2.0	釣花いけか？
	鉄28	銅製品	針金状製品			5.35	1.75	1.75	2.0	釣花いけか？
	24	銅製品	兜の金坐	D-34	Ⅲ	2.6	2.5	3.5	5.0	
	鉄25	銅製品	太刀金具	E-26	Ⅱ	3.0	2.1	0.15	6.0	
	鉄27	銅製品	銅碗	C-28	Ⅲ	2.8	2.4	0.3	8.0	7C後半～8C前半か
	50	銅製品	指輪	D-25	Ⅱ	2.0	1.1	0.2	2.56	

※挿図番号第148図・第178図・第201図・第203図は中世遺構

第４章　自然科学分析

第１節

芝原遺跡出土製鉄・鍛冶・青銅関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

１．いきさつ

芝原遺跡は鹿児島県南さつま市金峰町に所在する。縄文時代中期から近世にわたる複合遺跡である。調査地区内からは中世末～近世初頭と推定される鉄滓等の製鉄・鍛冶関連遺物が多量に出土している。遺跡内での生産の実態を検討する目的から金属学的調査を行う運びとなった。

２．調査方法

2－1．供試材

Table 1に示す。製鉄・鍛冶・青銅関連遺物計21点の調査を行った。

2－2．調査項目

（１）肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。これらの記載をもとに分析試料採取位置を決定している。

（２）顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として，光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後，エメリー研磨紙の#150，#240，#320，#600，#1000，及びダイヤモンド粒子の3μと1μで順を追って研磨している。また金属鉄の腐食には３％ナイタル（硝酸アルコール液），酢酸・硝酸・アセトン混合液を用いた。

（３）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は，真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し，発生する特性X線を分光後に画像化し，定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は，調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される金属（合金）や鉱滓中の結晶ほど明るく，軽い元素で構成される晶出物ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後，定量分析を実施している。また元素の分布状態を把握するため，反射電子像に加えて，適宜特性X線像の撮影も行った。

（４）化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C），硫黄（S），：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法
二酸化硅素（SiO_2），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K_2O），酸化ナトリウム（Na_2O），酸化マンガン（MnO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），五酸化燐（P_2O_5），バナジウム（V），銅（Cu），二酸化ジルコニウム（Zr_2O）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果

SIB－1：炉壁

（１）肉眼観察：熱影響を受けて内面が黒色ガラス質化した，大型で厚手の炉壁片である。内面表層には着磁性の強い黒灰色の滓部や茶褐色の鉄錆が溶着する個所も観察される。側面２面は直線状で，築炉時の粘土塊の接合面の可能性が考えられる。胎土は粘土質で，小礫や砂粒，赤色スコリアなどが含まれている。また微細な有機質の混和物が目につく。

（２）顕微鏡組織：Photo.1①～③に示す。①の明灰色部は錆化鉄である。また下側の暗色部は炉壁内面の溶融物（黒色ガラス質滓）で，②③はその拡大である。ガラス質滓中には炉材粘土中に混和された砂粒が散在している。さらに滓中のごく微細な明白色部は金属鉄である。３％ナイタルで腐食したところ，ほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite：α鉄）単相の組織であった。

内面に金属鉄（またはその錆化物）が溶着することから，当炉壁は製鉄炉の炉壁片と推測される。

SIB－2：砂鉄

（１）肉眼観察：遺跡内に集積した砂鉄である。砂鉄粒子は磨耗してやや丸みを帯びたものが多い。また砂鉄以外には斜長石，角閃石，輝石類などの無色・有色鉱物が混在する。地域周辺に分布する火山噴出物起源の砂鉄を採取している。

（２）顕微鏡組織：Photo.1④～⑥に示す。灰褐色粒は砂鉄〔磁鉄鉱または含チタン鉄鉱（注１）〕である。粒内の暗色多角形結晶は燐灰石〔Apatite：$Ca_5(PO_4)_3F$〕と推定される。鹿児島県下の砂鉄には，粒内に微細な燐灰石が多数含まれる事例が多い（注２）が，当遺跡でも同様の特徴が確認された。暗色粒は斜長石，角閃石，輝石類などの鉱物である。反射顕微鏡下で観察してい

るため，光を透過する鉱物ほど暗い色調になる。

SIB－2：砂鉄は，平成14年度に調査したSBH－1：砂鉄とほぼ同じ地点の砂鉄と判断されるため，その時に分析したSBH－1：砂鉄の化学組成について報告する。

（3）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）54.10%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.05%，酸化第1鉄（FeO）31.62%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）42.20%の割合であった。主に砂鉄以外の無色・有色鉱物に含まれる造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）12.23%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は2.83%である。砂鉄（含チタン鉄鉱）に含まれる二酸化チタン（TiO_2）11.72%と高値で，バナジウム（V）は0.24%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.59%，銅（Cu）＜0.01%である。さらに五酸化燐（P_2O_5）は0.50%と高値傾向を示した。

遺跡内の採取砂鉄は，地域周辺に分布する火山噴出物起源の高チタン（TiO_2）砂鉄と推定される。磨耗して丸みを帯びた粒の割合が高いことからも，近接する河川または海浜部に堆積した砂鉄を採取して製鉄原料としていた可能性が高いと考えられる。

SIB－3：炉外流出滓

（1）肉眼観察：やや小型で厚手の炉外流出滓の破片である。上面は滑らかで複数条の流動痕が残る。他の面はすべて破面で，内部に気孔は散在するが，緻密で重量感のある滓である。

（2）顕微鏡組織：Photo.2①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO\cdot TiO_2$），淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）が晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。

（3）化学組成分析：Table2に示す。全鉄分（Total Fe）46.62%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.06%，酸化第1鉄（FeO）51.23%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）9.64%の割合であった。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は18.69%と低めで，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は4.48%であった。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）17.92%と高値で，バナジウム（V）は0.26%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.81%，銅（Cu）＜0.01%である。五酸化燐（P_2O_5）は0.69%と高値であった。

当鉄滓はチタン（TiO_2），燐（P_2O_5）の高値傾向が顕著であり，地域の火山噴出物起源の砂鉄を原料とした製錬滓と特定できる。

SIB－4：鉄塊系遺物

（1）肉眼観察：表面全体が黄褐色の土砂で覆われた鉄塊系遺物の破片と推定される。特殊金属探知機のL（●）で反応があり，内部にはまとまった金属鉄部が存在する。表面には錆化に伴う放射割れも生じている。一方表面には広い範囲で暗灰色の滓部も観察される。内部には細かい気孔が散在するが緻密である。

（2）顕微鏡組織：Photo.2④～⑥に示す。④の明色部は金属鉄で，⑤はその拡大である。3%ナイタルで腐食したところ，フェライト単相～亜共析組織（C＜0.77%）が確認された。またフェライト結晶には燐（P）が固溶していて結晶粒が粗大化している部分がみられる。黒色層状のパーライト（Pearlite）組織の面積率からは，炭素含有量が0.1%前後の極軟鉄と推定される。

④の右下は滓部で⑥はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO\cdot TiO_2$）が晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である（注3）。

付着滓の鉱物組成から，当鉄塊系遺物は地域の火山噴出物起源の砂鉄を製鉄原料としたものと判断される。また金属鉄部は比較的炭素含有量の低い軟鉄（低炭素鋼）であるが，内部に燐（P）の影響が確認された。

SIB－5：羽口

（1）肉眼観察：熱影響を受けて外面がガラス質化した羽口先端部の破片である。暗灰色の滓が帯状に固着しており，下面側の小破片と推定される。滓部は細かい凹凸があり，着磁性の強い個所と弱い個所をもつ。羽口胎土部分は緻密な粘土質で，微細な有機質の混和物が観察される。

（2）顕微鏡組織：Photo.3①～③に示す。①は付着滓部分の拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO），淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。

②③の明白色部はガラス質滓中の金属鉄で，3%ナイタルで腐食した組織を示している。炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織であった。

付着滓の鉱物組成から，当羽口は鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）の不純物除去（精錬鍛冶作業）に用いられた羽口破片と推定される。

SIB－6：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：平面不整台形でやや偏平な2240gと特大の椀形鍛冶滓である。長軸片側に弧状の窪み部分があり，羽口からの送風痕跡の可能性が考えられる。表面は広い範囲が茶褐色の鉄錆や土砂で覆われるが，特殊金属探知機での反応はない。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸が多数残る。滓の地の色調は暗灰色で，細かい気孔がみられるが，重量感のある滓である。

（2）顕微鏡組織：Photo.3④～⑥に示す。滓中には白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）43.36%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.06%，酸化第1鉄（FeO）38.66%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）18.94%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）32.28%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は3.50%である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）3.34%，バナジウム（V）0.12%であった。酸化マンガン（MnO）は0.28%，銅（Cu）＜0.01%である。五酸化燐（P_2O_5）は0.65%と高値であった。

当鉄滓は遺跡出土砂鉄（SBH-1）や製錬滓（SIB－3）と比較すると，製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V，MnO）の低減傾向を示すことから精錬鍛冶滓に分類される。また砂鉄や製錬滓と同様燐（P_2O_5）の高値傾向がみられることから，やはり在地の砂鉄を製錬してできた鍛冶原料鉄（製錬鉄塊系遺物）の不純物除去作業での反応副生物と考えられる。

SIB－7：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：約1/4が欠損しているが本来の平面は楕円状で，厚みのある1419gと大型の椀形鍛冶滓である。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆や土砂で覆われる。錆化鉄部には比較的着磁性の強い個所が複数あるが，特殊金属探知機での反応はない。滓の地の色調は暗灰色で上下面とも木炭痕が多数散在する。下面には微細な木炭も複数付着する。破面には大小の気孔が散在するが，重量感のある滓である。

（２）顕微鏡組織：Photo.4①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）47.76%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.07%，酸化第１鉄（FeO）42.32%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）21.15%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）27.26%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は4.37%である。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は4.64%，バナジウム（V）0.13%であった。酸化マンガン（MnO）は0.38%，銅（Cu）＜0.01%である。また五酸化燐（P_2O_5）は0.60%と高値であった。

当鉄滓は椀形鍛冶滓（SIB－7）と近似する鉱物・化学組成であり，精錬鍛冶滓に分類される。

SIB－8：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：平面不整円形をした，260gの中型で完形の椀形鍛冶滓である。やや偏平で下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。表面は全体に茶褐色の鉄錆や土砂で覆われる。土砂中にはごく微細な木炭破片や鍛造剥片が含まれる。着磁性の強い部分があるが，特殊金属探知機での反応はない。また表面には気孔がほとんどなく緻密で重量感のある滓である。

（２）顕微鏡組織：Photo.4④～⑥に示す。④の左上は鉄滓表面に付着した土砂で，内部にごく微細な鍛造剥片が複数含まれている。⑤はその拡大である。一方④右下は滓部で⑥はその拡大である。白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鉄チタン酸化物の結晶はなく，鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）46.06%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.23%，酸化第1鉄（FeO）37.87%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）23.44%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）30.72%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は2.07%である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.31%，バナジウム（V）も0.02%と低値であった。酸化マンガン（MnO）0.07%，銅（Cu）＜0.01%も低い。五酸化燐（P_2O_5）は0.30%とやや高めであった。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V，MnO）の影響がほとんどなく，鍛錬鍛冶滓に分類される。

SIB－9：椀形鍛冶滓（ガラス質滓）

（１）肉眼観察：93gと小型で完形の椀形鍛冶滓である。ガラス質で軽く，炉材粘土（羽口・炉壁）または鍛接剤（粘土汁・藁灰）などの溶融物主体の滓と考えられる。上下面ともごく細かい木炭痕が多数残る。

（２）顕微鏡組織：Photo.5①～③に示す。素地部分は黒色ガラス質滓で，内部には熱影響を受けた無色鉱物が点在する。これは炉材粘土中に含まれていた砂粒の可能性が考えられる。また微細な明白色粒は金属鉄で，②③はその拡大である。３%ナイタルで腐食したところ炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織が確認された。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）は9.84%と非常に低値であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.18%，酸化第１鉄（FeO）6.47%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）6.62%の割合である。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）84.08%と非常に高値であるが，塩基性成分（CaO＋MgO）は4.46%と低めであった。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.66%，バナジウム（V）も0.02%と低値であった。酸化マンガン（MnO）も0.11%，銅（Cu）＜0.01%と低い。五酸化燐（P_2O_5）は0.26%であった。

当鉄滓は粘土溶融物（SiO_2，Al_2O_3主成分）主体の鍛錬鍛冶滓に分類される。

SIB－10：流出孔滓（鍛冶・含鉄）

（1）肉眼観察：平面楕円状でやや小形偏平な605gの椀形鍛冶滓の端部から，棒状の流出孔滓が伸びたものと推測される。また椀形滓部分では鉄部の錆化に伴う放射割れが顕著であり，特殊金属探知機での反応はないものの，まとまった鉄部が存在する可能性が考えられる。また流出孔部分は断面楕円状で，破面では中小の気孔が放射状に分布するが，緻密で重量感のある滓である。

（2）顕微鏡組織：Photo.5④～⑥に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（3）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）52.50%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.05%，酸化第１鉄（FeO）21.77%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）50.80%の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）15.46%と低めで，塩基性成分（CaO＋MgO）も2.73%と低値である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）1.97%，バナジウム（V）0.08%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.14%，銅（Cu）＜0.01%である。五酸化燐（P_2O_5）は0.53%と高値傾向を示した。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V，MnO）の影響が残ることから，精錬鍛冶後半段階の反応副生物と推測される。

SIB－11：流出孔滓（鍛冶）

（1）肉眼観察：120gと小形で偏平な椀形鍛冶滓の端部から，やや偏平な棒状の流出孔滓が伸びたものと推測される。流出孔滓（SIB－10）と比較すると全体に小型で，まとまった鉄部はみられない。椀形滓部分の下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。流出孔部分も細かい凹凸があり，流動性は弱いものと推測される。

（2）顕微鏡組織：Photo.6①～③に示す。白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。またウスタイト粒内の微細な淡茶褐色多角形結晶はウルボスピネルと推定される。③中央の微細舞白色粒は金属鉄で，３%ナイタルで腐食したところ，ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が確認された。

（3）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）57.47%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.17%，酸化第１鉄（FeO）55.76%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）19.96%の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）18.72%と低めで，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は2.84%である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は1.38%，バナジウム（V）0.03%であった。酸化マンガン（MnO）は0.12%，銅（Cu）＜0.01%である。五酸化燐（P_2O_5）は0.53%と高値傾向を示した。

当鉄滓は流出孔滓（SIB－10）と同様，脈石成分（TiO_2，V，MnO）の影響が残ることから，精錬鍛冶後半段階の反応副生物と推測される。

SIB－12：粒状滓（イ）・鍛造剥片（ロ）

イ－1，8.0㎜径

（1）肉眼観察：黒灰色で歪な球状の粒状滓様遺物である。表面には部分的に薄く茶褐色の鉄錆が付着する。全体に着磁性が強く，表面に気孔はみられない。

（2）顕微鏡組織：Photo.6④⑤に示す。内部は空洞化し，滓中にはウスタイトが凝集して晶出する。

イ－2，8.3㎜径

（1）肉眼観察：大きさの異なる二つの粒状滓様遺物が溶着している。色調は暗灰色で，どちらも歪な球状を呈する。表面にはごく微細な気孔が散在しており，着磁性は弱い。

（2）顕微鏡組織：Photo.6⑥⑦に示す。どちらもともに粘土溶融物（ガラス質滓）であった。また内面の微細明白色粒は金属鉄である。SIB-9椀形鍛冶滓的な鍛冶に関連した派生物。

イ－3，3.5㎜径

（1）肉眼観察：やや大型で比較的きれいな球状の粒状滓である。色調は暗灰色で，表面にはごく微細な棘状の突起がみられるが，全体に平滑である。着磁性は強い。

（2）顕微鏡組織：Photo.7①②に示す。滓中にはウスタイトが凝集して晶出する。

イ－4，2.8㎜径

（1）肉眼観察：比較的きれいな球状の粒状滓である。色調は暗灰色で，表面には１個所微細な鍛造剥片が付着する。表面は平滑で気孔はなく，着磁性は強い。

（2）顕微鏡組織：Photo.7③④に示す。写真上側にごく微細な鍛造剥片が固着している。また内部空洞化の外周滓中にはごく微細なウスタイトが晶出する。

イ－5，1.9㎜径

（1）肉眼観察：比較的きれいな球状の粒状滓で，色調は暗灰色である。表面は平滑で気孔はなく，着磁性は強い。

（2）顕微鏡組織：Photo.7⑤⑥に示す。内部気孔は少なく滓中には白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。また微細明白色部は金属鉄である。

イ－6，1.6㎜径

（1）肉眼観察：やや小型で歪な球状の粒状滓である。色調は暗灰色で，表面には１個所ごく微細な不定形の割れ面が観察される。着磁性は強い。

（2）顕微鏡組織：Photo.7⑦⑧に示す。内部空洞化の

外周は灰褐色多角形結晶マグネタイトが晶出する。

今回調査をした６点のうち５点（イ－1，3～6）は鉄酸化物の結晶主体であり，鉄素材を熱間で加工した時に生じた微細遺物と推定される。また残る１点はガラス質で，鍛接剤に用いた粘土汁などの溶融物の可能性が考えられる。前者が高温鍛接，後者は低温加工時の派生物の可能性をもつ。

ロ－1，9.3×6.5×0.6㎜

（１）肉眼観察：大型で微かに湾曲した形状の剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，淡褐色の土砂が薄く付着する。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.8①②に示す。写真上側の灰褐色多角形結晶はマグネタイトと推定される。普通鍛造剥片で確認される鉄酸化物の３層構造は見られないが，鉄酸化物からなる薄膜状の微細遺物である。

ロ－2，9.3×6.4×0.7㎜

（１）肉眼観察：大型で厚手の剥片様遺物である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，微細な凹凸が著しい。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.8③④に示す。最表層の灰白色針状結晶はヘマタイト，灰褐色多角形結晶はマグネタイト，灰色結晶はウスタイトである。

ロ－3，7.9×4.9×0.45㎜

（１）肉眼観察：大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.8⑤⑥に示す。表側は水平状に割れを起すもののロ－1と同様，灰褐色多角形結晶マグネタイトが凝集する。鉄酸化物からなる薄膜状の微細遺物である。

ロ－4，6.5×4.7×0.65㎜

（１）肉眼観察：大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.8⑦⑧に示す。表層（写真上側）の明白色部はヘマタイト，灰褐色部はマグネタイトと推定される。

ロ－5，4.7×3.0×0.5㎜

（１）肉眼観察：大型で平坦な剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，微かに皺状の凹凸がみられる。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.9①②に示す。肥大化した表層（写真上側）の明白色部はヘマタイト，その内側の灰褐色部はマグネタイト，下側の灰色部はウスタイトである。

ロ－6，1.7×1.3×0.3㎜

（１）肉眼観察：ごく小型でやや薄手の剥片である。表裏面とも光沢のない黒灰色で，表層に鉄錆が付着する。着磁性は強い。

（２）顕微鏡組織：Photo.9③④に示す。素地の黒色部はガラス質滓で，白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。鍛造剥片ではなく鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。鉄滓の表層剥片に分類される。

調査した６点のうち５点（ロ－1～5）は鉄酸化物であり，鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じる微細遺物と推定される。また残る１点は鍛錬鍛冶滓の表層部剥片の可能性が高い。

SIB－13：鉄塊系遺物

（１）肉眼観察：表面が黄褐色の土砂で覆われた74gの塊状の鉄塊系遺物である。明瞭な滓部はなく，鉄主体の遺物と推測される。また特殊金属探知機のL（●）で反応があり，内部にはまとまった金属鉄部が存在するものと考えられる。

（２）顕微鏡組織：Photo.9⑤～⑦に示す。⑤左下の暗灰色部は黒色ガラス質滓である。また明白色部は金属鉄で，３％ナイタルで腐食したところ，過共析組織～共晶状黒鉛組織が確認された。⑥が局部的に晶出した共晶状黒鉛組織で細い黒色部分は黒鉛（C）である。⑦は過共析組織の拡大で，白色針状のセメンタイト（Cementite：Fe_3C）が晶出する。

当遺物にはガラス質滓が付着することから，製鉄炉壁と接触する部分で生じた鉄塊の可能性が考えられる。また比較的炭素含有量が高く，局部的に鋳鉄組織も確認された。

SIB－14：鉄塊系遺物

（１）肉眼観察：355gとやや大型で塊状の鉄塊系遺物である。全体が黄褐色の土砂で厚く覆われており，本来の表面状態の確認は困難である。

（２）顕微鏡組織：Photo.10①～③に示す。内部にはまとまりの良い金属鉄部が存在する。３％ナイタルで腐食したところ，フェライト単相～亜共析組織（C＜0.77%）が観察された。炭素含有量は部位によるばらつきが大きいが，最大で0.5%程度の鋼と推定される。また部分的に燐（P）偏析が生じている。①は燐偏析の顕著な部分である。偏析状態についてはEPMA調査の項で詳述する。

（３）EPMA調査：Photo.10④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。淡褐色針状または多角形結晶は，特性X線像ではともにチタン（Ti）に強い反応がある。定量分析値は79.2%TiO_2－9.2%FeO－4.4%Al_2O_3－3.2%MgO－3.5%V_2O_3（分析点１），77.1%TiO_2－9.3%FeO－4.5%Al_2O_3－4.4%MgO－1.6%V_2O_3（分析点２），78.3%TiO_2－10.1%FeO－4.4%Al_2O_3－4.3%MgO－1.5%V_2O_3（分析点３）であった。チタン酸化物（TiO_2）主体で，ルチル（Rutile：TiO_2）に近い組成の結晶である。砂鉄を高温製錬した時の晶癖とい

える。また暗色結晶定量分析値は48.0SiO_2－30.4%Al_2O_3－10.5%CaOであった（分析点４）。アノーサイト（Anorthite：CaO・Al_2O_3・2SiO_2）と推測される。素地のガラス質滓部分の定量分析値は47.2%SiO_2－10.0%Al_2O_3－5.7%CaO－5.1%MgO－1.4%K_2O－14.1%FeO－5.2%TiO_2－4.2%MnO（分析点5）であった。非晶質珪酸塩で鉄（FeO）やチタン（TiO_2），マンガン（MnO）を含む。

Photo.10⑤は①の燐偏析部分の反射電子像である。微小黄褐色部は特性X線像をみると硫黄（S）に強い反応がある。定量分析値は61.7%Fe－36.0%Sであった。硫化鉄（FeS）に同定される。その周囲は特性X線像をみると燐（P）に強い反応があり，さらに環状に弱い反応が広がっている。定量分析値は燐に強い反応がある個所が86.4%Fe－22.0%P（分析点15）であった。燐化鉄共晶（α＋Fe_3P）に同定される。また反応の弱い個所でも97.4%Fe－3.1%P（分析点16），99.0－0.9%P（分析点17）と燐の影響が顕著であった。

付着滓の鉱物組成から，当遺物は砂鉄を高温製錬した生成鉄塊（製錬鉄塊系遺物）と特定できる。金属鉄部の炭素含有量は部位によるばらつきが大きいが，最大で0.5%程度の鋼であった。また燐（P）の影響が著しいところから，在地の砂鉄を製鉄原料とした可能性が高いと考えられる。

SIB－15：鉄塊系遺物

（１）肉眼観察：370gとやや大型で塊状の鉄塊系遺物である。錆化の進行に伴う放射割れが著しく，表面の剥落も生じている。特殊金属探知機のL（●）で反応があるため，内部にまとまった金属鉄部が存在する。また表面の土砂中には，微細な木炭破片が複数含まれる。表面には部分的に暗灰色の滓部を残す。

（２）顕微鏡組織：Photo.11①～③に示す。①全体に錆化が進んでいるが，一部金属鉄が残存する。②はその拡大である。金属鉄部は３%ナイタルで腐食したところ，黒色層状パーライト地に白色針状セメンタイト析出の過共析組織が確認された。炭素含有量は1.5%前後の鋼と推測される。一方①左上は滓部で③はその拡大である。発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルが晶出する。

付着滓の鉱物組成から，当遺物は砂鉄を高温製錬した生成鉄塊（製錬鉄塊系遺物）と推定される。金属鉄部は比較的炭素含有量の高い鋼であった。

SIB－16：椀形鍛冶滓（緑青付着，含鉄）

（１）肉眼観察：309gで平面不整楕円状の椀形鍛冶滓である。広い範囲が茶褐色の鉄錆に覆われている。錆化に伴う放射割れも著しいが特殊金属探知機のL（●）で反応があり，内部に金属鉄部が存在する。部分的に暗灰色の滓部も確認される。また上面側に1個所緑青が付着している。

（２）顕微鏡組織：Photo.11④～⑥，Photo.12①②に示す。Photo.11④～⑥は表層に緑青が付着する部分（16－1）であるが，断面には銅の影響は不明瞭である。暗灰色部は滓部で，白色微細樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。一方明灰色は滓部で過共析組織痕跡が残存する。またPhoto.12①②は金属鉄粒が残存する部分（16－2）で，３%ナイタルで腐食したところ，フェライト単相～亜共析組織が確認された。

（３）化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total Fe）51.05%に対して，金属鉄（Metallic Fe）1.20%，酸化第１鉄（FeO）20.84%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）48.11%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）19.62%で，このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は2.62%である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）の起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.26%，バナジウム（V）が0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）0.06%，銅（Cu）は＜0.01%と低値である。五酸化燐（P_2O_5）は0.28%と若干高めであった。

当初緑青の付着から銅関連遺物の可能性が考えられたが，断面観察と化学分析を実施した結果，銅（Cu）の影響が確認されなかったこと。また椀形鍛冶滓（SIB－8）と近似した組成であることから，鉄素材の熱間加工に伴って生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。

SIB－17：椀形鍛冶滓（鍛造品）

（１）肉眼観察：錆化に伴い複数の破片に分かれているが，比較的大きな３片が接合可能であった。その状態から，やや小形の椀形鍛冶滓の下面中央に鍛造製品が付着している。滓部は暗灰色で，表層は若干風化気味である。鍛造品は残存長が63㎜，断面は最大14×７㎜程度の長方形状で，特殊金属探知機のL（●）で反応がある。

（２）顕微鏡組織：Photo.12③～⑤，Photo.13①に示す。Photo.12③上側の暗色部は滓部で，Photo.13①はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

一方Photo.12③下側は横断面が長方形状に成形された鍛造品で，④⑤は金属鉄部の拡大である。３%ナイタルで腐食したところ，⑤に示したようなほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が主体であったが，④のように黒色層状のパーライトが析出する亜共析組織部分も存在する。ただし炭素含有量の高い個所でも0.1%以下の軟鉄であった。

（３）EPMA調査：Photo.13②に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像では

鉄（Fe）に反応がある。定量分析値は95.6%FeO－3.9%TiO_2（分析点８）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。淡茶褐色多角形結晶は特性X線像をみるとチタン（Ti）に反応がある。定量分析値は66.9%FeO－24.7%TiO_2－6.1%Al_2O_3（分析点９）であった。アルミナ（Al_2O_3）を含むがウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO･TiO_2）に近い組成の結晶といえる。また素地部分の定量分析値は39.5%SiO_2－8.9%Al_2O_3－7.3%CaO－1.2%MgO－2.3%K_2O－1.6%Na_2O－1.3%P_2O_5－33.8%FeOであった。非晶質珪酸塩で鉄分（FeO）の割合が高く，燐（P）も若干含まれる。

もう１視野，Photo.13③には鍛造鉄の非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶の定量分析値は95.6%FeO－2.4%TiO_2（分析点11）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。淡茶褐色多角形結晶は特性X線像ではチタン（Ti）に反応がある。定量分析値は65.2%FeO－22.3%TiO_2－8.7%Al_2O_3－3.4%V_2O_3（分析点12）であった。アルミナ（Al_2O_3），バナジウム（V_2O_3）を含むがウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO･TiO_2）に近い組成の結晶といえる。13の淡灰色結晶の定量分析値は62.5%FeO－3.0%MgO－1.1%CaO－30.9%SiO_2（分析点13）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）で微量ライム（CaO），マグネシア（MgO）を固溶する。また素地部分の定量分析値は37.4%SiO_2－8.4%Al_2O_3－8.8%CaO－1.0%MgO－3.7%K_2O－3.4%Na_2O－5.0%P_2O_5－30.2%FeOであった。非晶質珪酸塩で鉄分（FeO）の割合が高く，燐（P）の高値傾向も顕著である。

滓部の鉱物組成から，当鉄滓は精錬鍛冶末期の反応副生物の可能性がある。ただし滓下部に鍛造鉄器が付着していることから，鍛錬鍛冶滓の可能性も看過できない。ある程度製錬工程起源の不純物（鉄チタン酸化物の結晶を含む滓）の混じった新鉄と古鉄（廃鉄器）の両方を加熱・鍛錬していた可能性が考えられる。また鉄製品部分は炭素含有量のごく低い軟鉄（高融点）であった。介在物のEPMA調査の結果高チタン（TiO_2），高燐（P_2O_5）傾向が確認されたため，この製品の始発原料も在地の火山岩噴出物起源の砂鉄と推測される。

SIB－18：鉄製品（鍛造品）

（１）肉眼観察：椀形鍛冶滓（SIB－17）中の鍛造製品とよく似た棒状（長さ58×幅16×厚み５㎜）の鍛造品である。表面は錆化に伴う剥離が著しいが，特殊金属探知機のL（●）で反応がある。

（２）顕微鏡組織：Photo.14①～③に示す。横断面が長方形状の鍛造製品の端部である。明白色部は金属鉄で，3%ナイタルで腐食したところ炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織が確認された。また内部の暗色部は非金属介在物で，内部には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

当鉄器は炭素含有量の低い軟鉄を鍛打成形した鍛造品の破片である。また介在物中にウルボスピネルが含まれており，始発原料は砂鉄と判断される。椀形鍛冶滓（SIB－17）中の鉄製品と非常によく似た遺物であった。

SIB－19：鉄製品（鍛造品）

（１）肉眼観察：鉄製品（SIB－18）より細い棒状（断面８×４㎜）の鍛造品である。鉄釘などの先端寄りの破片の可能性が考えられる。表面は錆化に伴う剥離が著しいが，特殊金属探知機のL（●）で反応がある。

（２）顕微鏡組織：Photo.14④～⑥に示す。棒状鉄製品の縦断面の調査を実施した。金属鉄部を３%ナイタルで腐食したところ先端部中央（④右側および⑥上側の黒色部）で高炭素域が確認された。最大で0.7%程度の炭素含有量の鋼である。一方基部（④左側の白色部）は低炭素域で，粒度の微細なフェライト単相の組織であるが，下面側に若干炭素含有量の高い部分をもつ（⑤下側はその拡大）。炭素含有量の異なる鉄素材を鍛接した製品の可能性が考えられる。また鍛造品（SIB－17，18）とは異なり，非金属介在物中はウスタイトのみで明瞭なウルボスピネル結晶はなく，始発原料が砂鉄であったかは不明である。

SIB－20：鉄製品（鋳造品）

（１）肉眼観察：板状の鋳造製品の小破片である。鉄鍋などの鉄鋳物の体部破片と推定される。表面は錆化に伴う割れが著しいが，特殊金属探知機のL（●）で反応がある。

（２）顕微鏡組織：Photo.15①～③に示す。断面は約4.5㎜の厚みをもつ。全面亜共晶組成白鋳鉄組織（C＜4.26%）を呈する。また内部には微細な気孔（鋳巣）を残す。

SIB－21：青銅製品（両端：鋳鉄）

（１）肉眼観察：中央部は表面が緑青に覆われた流動状の銅（または青銅）である。両端部は茶褐色の鉄錆に覆われた薄板状の鋳鉄片であり，鋳掛による補修などを施した部分破片の可能性をもつ。

（２）顕微鏡組織：Photo.15④～⑥に示す。青銅と鋳鉄板が接する部分を示した。全体はほぼ左右対称で，中央の青銅部分が両端の板状の鋳鉄を挟んだ状態になっている。また青銅部分は酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食して現出した組織を示しているが，各相の組成に関してはEPMA調査の項で詳述する。一方鋳鉄部分は完全に錆化しているが，ほぼ全面蜂の巣状のレデ

ブライト（Ledeburite）の共晶組成白鋳鉄組織（C：4.26%）が残存する。出土遺物としてはかなり炭素含有量の高い鋳鉄製品といえる。

（３）EPMA調査：Photo.16①②に青銅部分の反射電子像（COMP）を示す。反射顕微鏡下の粒状黒色部は反射電子像では明白色を呈する。また特性X線像では鉛（Pb）に強い反応があり，定量分析値は86.0%Pb－8.0%O（分析点１），79.7%Pb－9.5%O（分析点８）であった。鉛酸化物と推定される。

反射顕微鏡下での淡橙色樹枝状相は反射顕微鏡下では最も暗い色調を呈する。定量分析値は81.3%Cu－2.6%Sn－3.9%Pb－4.2%Zn－4.2%As（分析点２），83.6%Cu－2.1%Sn－3.4%Pb－4.4%Zn－4.1%As（分析点９）であった。銅（Cu）の割合の高い相である。またその周囲の顕微鏡下では白色の部分も特性X線像では暗色を呈する。定量分析値は80.9%Cu－2.9%Sn－4.4%Pb－4.1%Zn－4.9%As（分析点３），79.5%Cu－2.7%Sn－5.7%Pb－4.2%Zn－5.4%As（分析点10）であった。銅の割合が僅かに低いが淡橙色部と類似した組成である。

反射顕微鏡下の青灰色相は，反射電子像では上記淡橙色～白色部分より若干淡い色調となっており，特性X線像では錫（Sn）にやや強い反応がみられる。定量分析値は73.1%Cu－8.3%Sn－3.8%Pb－2.2%Zn－10.3%As（分析点４），75.6%Cu－7.4%Sn－3.4%Pb－2.3%Zn－9.9%As（分析点５），71.4%Cu－9.8%Sn－4.1%Pb－1.9%Zn－10.4%As（分析点13）であった。錫（Sn）の割合の高い相といえる。

さらに反射顕微鏡下で灰色の針状・粒状相は，反射電子像では淡橙色～白色部分より若干淡い色調で，特性X線像では砒素（As）に強い反応がみられる。定量分析値は68.0%Cu－30.9%As（分析点６），64.5%Cu－33.7%As（分析点７），65.1%Cu－32.5%As（分析点11），66.9%Cu－29.8%As（分析点12）であった。銅（Cu），砒素（As）が主成分の相である。

以上の調査結果から，中央部は砒素をかなりの割合で含む鉛青銅に同定される。さらに亜鉛（Zn）も検出されているが，今回は化学分析を実施していないため，銅の鉱石起源のものか否かについては判断が困難である。また両端の鋳鉄部分は金属組織から，比較的炭素量の高い共晶組成白鋳鉄であることが明らかとなった。

４．まとめ

中世末～近世初頭と推定される芝原遺跡の製鉄・鍛冶および銅関連遺物の調査を実施した結果，遺跡周辺で砂鉄製錬から，鍛造鉄器製作までのマスプロ方式の一貫体制がとられた事が明らかとなった。大量の鍛冶廃滓，精錬鍛冶，鍛錬鍛冶用羽口の規格化（内径30㎜），粗鉄の大量徐滓にみられる流出孔滓の存在などで一大コンビナートは裏付けられる。また調査地区内から緑青の付着した転用取鍋の出土があり，近接する渡畑遺跡で緑青の付着した炉壁片が出土している。地域で銅（または青銅）鋳物生産が行われたことは確実であるが，今回調査を実施した遺物中には，遺跡内での銅（または青銅）製品生産に直接伴うものは検出されなかった。個々のまとめをTable 3に示す。詳細は以下のとおりである。

〈１〉出土砂鉄〔SIB－２（SBH－１）〕には，粒内に微細な燐灰石〔Apatite：$Ca_5(PO_4)_3F$〕を多数含む含チタン鉄鉱が複数確認された。当遺跡では火山噴出物の起源の砂鉄が製鉄原料であったと推定される。この特徴は鹿児島県下の他の製鉄遺跡でも共通しており，地域の地質を反映したものである。

〈２〉砂鉄と同様製錬滓（SIB－３）には，高チタン（TiO_2），高燐（P）傾向が窺える。やはり地域に分布する火山噴出物の起源の砂鉄が製鉄原料であった。また製錬滓としては鉄分（Total Fe）が高めである。これも鹿児島県下の出土製錬滓に広く共通する特徴であり〔Fig.1〕(注４)，高燐砂鉄を製鉄原料としていることと関連すると考えられる。

金属鉄中の燐は，鍛錬作業時の鍛接不良や製品の脆化といった悪影響の原因となるため，鉄製錬時に①砂鉄／木炭比を大きくして，製錬滓中のFeO含有率を上げることや，②製錬温度を比較的低く保つことで，生成鉄中への燐の移行を抑制した可能性が考えられる。

〈３〉鉄塊系遺物・含鉄鉄滓（SIB－４，13～16）中には，一部鋳鉄組織を呈するなど，比較的炭素含有量の高いものも存在するが，完全な銑は見られなかった〔Fig.2〕。また燐偏析が観察されるものもあり（SIB－４，14），地域の砂鉄製錬生成鉄塊（新鉄）が鍛冶原料となっていたと発言できる。

〈４〉椀形鍛冶滓（SIB－６，７）と流出孔滓（SIB－10，11）はチタン濃度が高く精錬鍛冶滓，椀形鍛冶滓（SIB－８，９，16）は鍛錬鍛冶滓に分類される。また粒状滓，鍛造剥片（SIB－12）など熱間での鍛打加工に伴う微細遺物も検出された。鍛冶原料（製錬系鉄塊）の不純物除去から鍛造鉄器製作まで，遺跡内で一連の作業が行われたことを示す遺物群であった。

また鍛造鉄器を含む椀形鍛冶滓（SIB－17）の存在から，遺跡周辺で生産された新鉄のみでなく，古鉄（廃鉄器）も合わせて鍛冶原料とした可能性が指摘できる。

〈５〉鍛造鉄器（SIB－17，18，19）のうち２点は，非金属介在物中にウルボスピネル結晶が含まれており，始発原料は砂鉄である。なかでもEPMA調査を実施したSIB－17は非金属介在物の素地部分に高燐（P）傾向がみられて，在地の砂鉄を始発原料とした鉄材の可能

性は十分に有りうる。

〈6〉青銅製品（両端：鋳鉄）（SIB－21）は鋳掛による補修などを施した部分の破片であろう。類似遺物はさつま川内市の古原遺跡でも出土しており，分析調査を実施している（注5）。中央の緑青部分は砒素（As），亜鉛（Zn）を高い割合で含む鉛青銅であった。近接地域の渡畑遺跡では鋳造用溶解炉の炉壁片が出土しており，溶着金属のEPMA調査を実施した結果，錫（Sn）の割合の高い鉛青銅と判明している（注6）。今回確認された砒素（As），亜鉛（Zn）などはごく微量であり，地域には様々な成分の鋳造原料（または青銅製品）が搬入されたと考えられる。

〈7〉Table 4に芝原遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の分類を示す。前近代製鉄の一貫体制を実証する遺物群である。各遺構との対応を参考にして頂きたい。精錬鍛冶では鍛冶炉の下部に排滓孔を設けた新機軸，羽口内径は30㎜に統一して精錬鍛冶，鍛錬鍛冶に充当したマスプロ方式の一大製鉄コンビナートを形成している。

（注）

（1）木下亀城・小川留太郎『岩石鉱物』保育社　1995

チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。（中略）チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には，チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし，全体が完全に均質なものと，チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものとがある。

チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり，これにも均質なものと，縞状のものとがある。（中略）このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱，または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱Titaniferous iron oreという。

（2）鈴木瑞穂「鹿児島県下の採取砂鉄の分析調査結果」『ミュージアム知覧紀要・官報11号』ミュージアム知覧2007

（3）J.B.Mac chesney and A. Murau：American Mineralogist，46（1961），572

〔イルミナイト（Ilmenite：FeO·TiO_2）の晶出はFeO－TiO2二元平衡状態図から高温化操業が推定される。〕

（4）Fig.1に示した鹿児島県下の出土製鉄関連遺物の分析データは，以下の文献より引用した。

①中山光夫・上田耕「小坂ノ上遺跡出土の古代の蔵骨器と埋納鉄滓について」『ミュージアム知覧紀要第1号』1995

②大澤正己・鈴木瑞穂「宝満製鉄遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『宝満製鉄遺跡』鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会　2004

③大澤正己「上加世田遺跡出土製鉄一貫体制遺物と鋳銅遺物の金属学的調査」『上加世田遺跡1』加世田市教育委員会　1985

④大澤正己・鈴木瑞穂「一ツ木遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『一ツ木地区（A・B）遺跡』鹿児島県宮之城町教育委員会　2001

⑤大澤正己・鈴木瑞穂「古原遺跡出土鉄滓・青銅製品の金属学的調査」『古原遺跡』さつま川内市教育委員会　2005年度分析調査実施

⑥大澤正己・鈴木瑞穂「厚地松山遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『厚地松山製鉄遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会　2000

⑦大澤正己・鈴木瑞穂「中原鉄生産関連（前畑西）遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『中原鉄生産関連遺跡（前畑西）遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会2007

⑧「宝満製鉄遺跡出土鉄滓の分析調査（予備調査）～周辺地域（東谷·吉原·花房）を比較して～」『宝満寺跡　宝満製鉄遺跡　牟田遺跡　弓場ヶ尾遺跡』鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会　2003

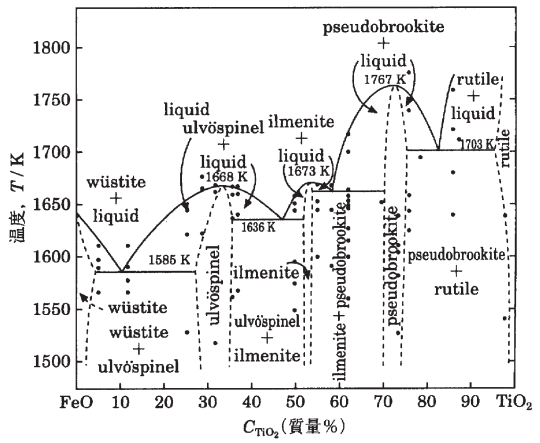
⑨鈴木瑞穂「南九州地域の中世～近世の製鉄技術について」『鉄の歴史－その技術と文化－フォーラム第12回公開研究発表会論文集』（社）日本鉄鋼協会　社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム　2009

⑩大澤正己・鈴木瑞穂「上水流遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『上水流遺跡4』中小河川改修事業（万之瀬川）に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅵ）鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（159）鹿児島県立埋蔵文化財センター2010

⑪大澤正己・鈴木瑞穂「出土製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査」『渡畑遺跡2』中小河川改修事業（万之瀬川）に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅸ）鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（159）鹿児島県立埋蔵文化財センター2011

（5）前掲注（4）⑤

（6）前掲注（4）⑪



FeO-TiO_2 二元平衡状態図

Table 1　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺構No.	遺構名	写真No.	遺物名称	推定年代	計測値					調査項目							備考
							大きさ（mm）	重量（g）	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ﾋﾞｯｶｰｽ断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	ｶﾛﾘｰ	
SIB-1	芝原	441	製鉄関連遺構4号	8	炉壁	中世末	116×102×85	1036	なし		○							
SIB-2		－	砂鉄集積	9	砂鉄	～近世初頭	－	281	なし		○				(○)			＊H14年化学分析実施
SIB-3		442	製鉄関連遺構1号	4	炉外流出滓		56×40×55	280	なし		○				○			
SIB-4				5	鉄塊系遺物		91×63×62	551	L（●）		○							
SIB-5		－	－	7	羽口		92×54×48	152	なし		○							
SIB-6				23	椀形鍛冶滓		245×190×65	2440	なし		○				○			
SIB-7		6100	自然流路1	3	椀形鍛冶滓		160×120×66	1419	なし		○				○			
SIB-8				1	椀形鍛冶滓		94×88×32	260	なし		○				○			
SIB-9		12050	製鉄関連遺構12号	12	椀形鍛冶滓		74×61×26	93	なし		○				○			
SIB-10		6100	自然流路1	21	流出孔滓		140×75×61	605	錆化(△)		○				○			
SIB-11				25	流出孔滓		99×45×34	120	なし		○				○			
SIB-12		12049	製鉄関連遺構11号	13	粒状滓・鍛造剥片		－	－	なし		○							
SIB-13		12050	製鉄関連遺構12号	10	鉄塊系遺物		49×31×24	74	L（●）		○							
SIB-14		6100	自然流路1	14	鉄塊系遺物		63×61×52	355	L（●）		○							
SIB-15				17	鉄塊系遺物		77×70×38	370	L（●）		○			○				＊錆化割れ進行
SIB-16				15	椀形鍛冶滓（緑青付、含鉄）		100×74×43	309	L（●）		○				○			
SIB-17				19	椀形鍛冶滓（鍛造品付）		69×44×26	172	L（●）		○			○				
SIB-18				20	鉄製品（鍛造品）		58×16×5	20.9	L（●）		○							
SIB-19				20	鉄製品（鍛造品）		58×8×4	6.4	L（●）		○							
SIB-20				16	鉄製品（鋳造品）		46×43×5	36.4	L（●）		○							
SIB-21		－	－	18	青銅製品（両端鋳鉄）		37×38×10	20.8	L（●）		○			○				

Table 2　供試材の化学組成

符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	全鉄分(Total Fe)	金属鉄(Metallic Fe)	酸化第1鉄(FeO)	酸化第2鉄(Fe203)	＊二酸化珪素(Si02)	＊酸化ｱﾙﾐﾆｳﾑ(Al203)	＊酸化ｶﾙｼｳﾑ(CaO)	＊酸化ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ(MgO)	＊酸化ｶﾘｳﾑ(K20)	＊酸化ﾅﾄﾘｳﾑ(Na20)	酸化ﾏﾝｶﾞﾝ(Mn0)	二酸化ﾁﾀﾝ(Ti102)	酸化ｸﾛﾑ(Cr203)	硫黄(S)	五酸化燐(P205)	炭素(C)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ(V)	銅(Cu)	二酸化ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ(Zr02)	Σ＊造滓成分	造滓成分Total Fe	Ti02Total Fe
SBH-1	芝原	G-14、15	砂鉄	中世末～近世初頭	54.10	0.05	31.62	42.20	6.31	2.76	1.03	1.80	0.09	0.24	0.59	11.72	0.04	0.02	0.50	0.04	0.24	<0.01	ー	12.23	0.226	0.217
SIB-3		製鉄関連遺構1号	流動滓		46.62	0.06	51.23	9.64	9.77	3.66	2.24	2.24	0.54	0.24	0.81	17.92	0.05	0.07	0.69	0.05	0.26	<0.01	0.09	18.69	0.401	0.384
SIB-6		－	椀形鍛冶滓		43.36	0.06	38.66	18.94	21.02	6.41	2.23	1.27	0.98	0.37	0.28	3.34	0.03	0.05	0.65	0.28	0.12	<0.01	0.02	32.28	0.744	0.077
SIB-7		自然流路1	椀形鍛冶滓		47.76	0.07	42.32	21.15	15.98	5.44	2.84	1.53	1.21	0.26	0.38	4.64	0.03	0.06	0.60	0.09	0.13	<0.01	0.04	27.26	0.571	0.097
SIB-8			椀形鍛冶滓		46.06	0.23	37.87	23.44	23.18	3.91	1.44	0.63	1.20	0.36	0.07	0.31	0.02	0.05	0.30	0.39	0.02	<0.01	0.02	30.72	0.667	0.007
SIB-9		製鉄関連遺構12号	椀形鍛冶滓		9.84	0.18	6.47	6.62	59.40	15.62	3.13	1.33	2.46	2.14	0.11	0.66	0.03	0.01	0.26	0.06	0.02	<0.01	0.03	84.08	8.545	0.067
SIB-10		自然流路1	流出孔滓		52.50	0.05	21.77	50.80	9.35	2.60	1.89	0.84	0.57	0.21	0.14	1.97	0.03	0.08	0.53	0.38	0.08	<0.01	0.02	15.46	0.294	0.038
SIB-11			流出孔滓		57.47	0.17	55.76	19.96	11.78	3.32	1.93	0.91	0.58	0.20	0.12	1.38	0.03	0.04	0.53	0.12	0.03	<0.01	0.01	18.72	0.326	0.024
SIB-16			椀形鍛冶滓(緑青付、含鉄)		51.05	1.20	20.84	48.11	12.54	3.04	1.99	0.63	1.05	0.37	0.06	0.26	0.03	0.09	0.28	0.31	0.01	<0.01	<0.01	19.62	0.384	0.005

Table 3　出土遺物の調査結果のまとめ

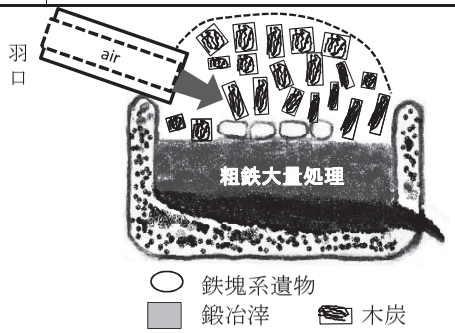
符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）							所見
						Total Fe	Fe203	塩基性成分	Ti02	V	Mn0	造滓成分	Cu	
SIB-1	芝原	製鉄関連遺構4号	炉壁	中世末～近世初頭	ｶﾞﾗｽ質滓、微小金属鉄粒（ﾌｪﾗｲﾄ単相）錆化鉄部	－	－	－	－	－	－	－	－	製鉄炉の炉壁破片と推測される
SIB-2		砂鉄集積	砂鉄		含ﾁﾀﾝ鉄鉱（粒内微細熔残石）、斜長石・角閃石・輝石類	54.10	42.20	2.83	11.72	0.24	0.59	12.23	<0.01	周辺地域に分布する火山噴出物起源の高ﾁﾀﾝ・燐砂鉄を採取した可能性が高い
SIB-3		製鉄関連遺構1号	炉外流出滓		滓部：U+F	46.62	9.64	4.48	17.92	0.26	0.81	18.69	<0.01	製錬滓（原料：高ﾁﾀﾝ・燐砂鉄）
SIB-4			鉄塊系遺物		滓部：U+I、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織(燐偏析)	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物（原料：高ﾁﾀﾝ・燐砂鉄、高温製錬）
SIB-5		－	羽口		滓部：W+U+F、微小金属鉄粒：ﾌｪﾗｲﾄ単相	－	－	－	－	－	－	－	－	精錬鍛冶作業に用いられた羽口先端部破片
SIB-6			椀形鍛冶滓		滓部：W+U+F	43.36	18.94	3.50	3.34	0.12	0.28	32.28	<0.01	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIB-7		自然流路1	椀形鍛冶滓		滓部：U+W+F	47.76	21.15	4.37	4.64	0.13	0.38	27.26	<0.01	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIB-8		（自然流路）	椀形鍛冶滓		滓部：W+F、鍛造剥片付着	46.06	23.44	2.07	0.31	0.02	0.07	30.72	<0.01	鍛錬鍛冶滓
SIB-9		製鉄関連遺構12号	椀形鍛冶滓		ｶﾞﾗｽ質滓、被熱砂粒散在、微小金属鉄粒（ﾌｪﾗｲﾄ単相）	9.84	6.62	4.46	0.66	0.02	0.11	84.08	<0.01	鍛錬鍛冶滓（炉材粘土溶融物主体のｶﾞﾗｽ質滓）
SIB-10		自然流路1	流出孔滓		滓部：U+W+F	52.50	50.80	2.73	1.97	0.08	0.14	15.46	<0.01	精錬鍛冶工程末期の滓の可能性が高い
SIB-11		（自然流路）	流出孔滓		滓部：W（粒内微細U）+F	57.47	19.96	2.84	1.38	0.03	0.12	18.72	<0.01	精錬鍛冶工程末期の滓の可能性が高い
SIB-12		製鉄関連遺構11号	粒状滓・鍛造剥片		ｲｰ1、3、4、5:W、2:ｶﾞﾗｽ質滓、6:M、ﾛｰ2、5:He+M+W、1、3:M、4:He+M、6:W（鍛冶滓片）	－	－	－	－	－	－	－	－	熱間での鍛打作業に伴う微細遺物
SIB-13		製鉄関連遺構12号	鉄塊系遺物		滓部：ｶﾞﾗｽ質滓、金属鉄部：過共析組織～共晶状黒鉛組織	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物の可能性が高い、炭素含有量が比較的高く局部的に鋳鉄組織を呈する
SIB-14		自然流路1	鉄塊系遺物		滓部：R、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物（原料：砂鉄）、炭素含有量は最大0.5%程度の鋼、燐偏析が著しい
SIB-15		（自然流路）	鉄塊系遺物		滓部：U、金属鉄部：過共析組織	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物（原料：砂鉄）、炭素含有量は1.5%前後の高炭素鋼
SIB-16			椀形鍛冶滓（緑青付、含鉄）		滓部：W+F、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織、錆化鉄部：過共析組織痕跡	51.05	48.11	2.62	0.26	0.01	0.06	19.62	<0.01	鍛錬鍛冶滓（緑青は廃棄後の二次的な付着の可能性が高い）
SIB-17			椀形鍛冶滓（鍛造品付）		滓部：U+W+F、鉄製品：ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織、介在物：U+W+F	－	－	－	－	－	－	－	－	砂鉄起源の不純物の残る新鉄と古鉄（廃鉄器）とをあわせて鉄素材とする作業で生じた滓の可能性がある
SIB-18			鉄製品（鍛造品）		介在物：U+W+F、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ単相	－	－	－	－	－	－	－	－	軟鉄を熱間で鍛打成形した製品破片（始発原料：砂鉄）
SIB-19			鉄製品（鍛造品）		介在物：W、金属鉄部：ﾌｪﾗｲﾄ～亜共析組織	－	－	－	－	－	－	－	－	炭素含有量の異なる鉄素材を合わせ鍛えした鍛造品の可能性が高い
SIB-20			鉄製品（鋳造品）		金属鉄部：亜共晶組成白鋳鉄組織	－	－	－	－	－	－	－	－	鋳造鉄器片
SIB-21		－	青銅製品（両端鋳鉄）		中央部：鉛青銅（砒素・亜鉛を含む）、両端：共晶組成白鋳鉄組織痕跡	－	－	－	－	－	－	－	－	鋳掛など鋳造鉄器の補修部分の破片の可能性が高い

U:Ulvöspinel（2FeO･Ti02）、I: Ilmenite（FeO･Ti02）、R:Rutile（Ti02）W:Wustite（FeO）、F:Fayalite（2FeO･Si02）、M:Magnetite（Fe304）、He:Hematite（Fe203）

Table 4　芝原遺跡出土製鉄・鍛冶・銅関連遺物の分析（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

＜前近代製鉄一貫体制操業を実証する遺物を出土＞:マスプロ方式製鉄一大コンビナート遺跡(精錬鍛冶：下部排滓新機軸採用、羽口内径30㎜統一)

生産工程	製　鉄 → 精錬鍛冶 → 高温沸し鍛接 → 鍛錬鍛冶 → 低温素延 → 低温火造 → 製　品 高チタン砂鉄製錬 砂鉄SBH-1 11.72%TiO_2、0.50%P_2O_5	粗鉄大量処理 ＜操業中断なく排滓＞ 粗鉄処理 故鉄（スクラップ）処理、表層slag化した中核に釘状鉄器遺存：出土位置不明一括資料(年代不詳)
遺　構	B－18 製鉄関連遺構1号(中世) 製鉄関連遺構4号(近世)	A'～J－18 自然流路1 大溝（鍛冶工房からの排出物を大量廃棄）総重量記録必要、生産状況を表わす EF－18 製鉄関連遺構13号(近世)　製鉄関連遺構3･6号(中世)，9･11･12号(近世) 鍛錬鍛冶工房推定地　粒状滓、鍛造剥片検出（9/15）
遺　物	砂鉄集積　EF－18 炉壁(内面、半還元砂鉄付着) 製錬滓(滑らか肌、緻密質) 鉄塊系遺物、再結合滓	←大・中・小椀形鍛冶滓→　ガラス質椀形鍛冶滓（5点実測図） 鉄塊系遺物・含鉄椀鍛冶滓 SIB-6、7：精錬鍛冶滓　SIB-8：高温沸し鍛接椀形鍛冶滓 SIB-10,11：精錬系流出孔滓　SIB-14,15：高Ti濃度滓付着鉄塊 製鉄関連遺構19号(近世)：ガラス質椀形鍛冶滓と微細遺物は共伴 SIB-9：低温鍛冶滓
課　題	どんな鉄を造ったか(炭素量) ＜粗鉄の組成＞	椀形滓形状から鍛冶炉の形態を推定 → 第228図1773～第332図1789 平面が長方形、楕円形、円形で大・中・小存在 断面：椀形　浅～深、扁平　炉底付着物 → 粘土、砂粒、木炭痕 鉄製品の特定
情　報 (特記事項)	高温操業 slag鉱物相：イルミナイト 17.92%TiO_2　ウルボスピネル	・羽口：内径30㎜ 肉厚20～30㎜、ずん胴タイプに統一、マスプロ方式製羽口充当、精錬・鍛錬鍛冶両方使用か ・平面長方形椀形滓の存在、類例少ない（岡山県灘崎町彦崎片屋からの表採品）　(12048から同一タイプ羽口出土) ・流出孔滓の存在(島根県板屋遺跡に類例)　粗鉄の大量除滓　高温排滓のslag



精錬鍛冶炉断面模式図

報告書紹介
①水巻町教育委員会1996『宮尾遺跡』江戸初期鍛冶炉　浅～深タイプ一挙検出
②岡山市教育委員会2009『研究紀要』第1号　年代不明　長方形椀形滓採取
③島根県教育委員会1998『板屋Ⅲ遺跡』精錬鍛冶炉の前壁排滓孔から鉄滓を流し出す

※ 芝原遺跡の調査指導参照(H14.11.14～15、H15.8.5)

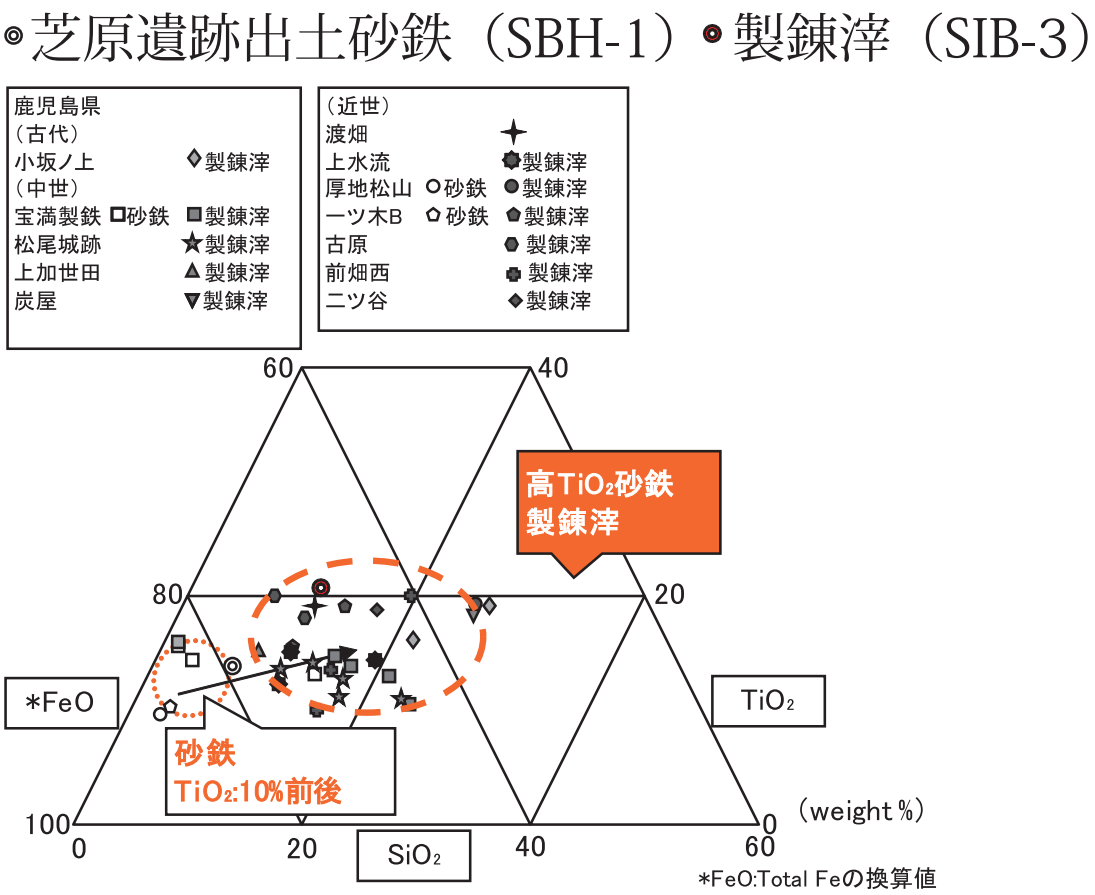


Fig. 1　鹿児島県下の製鉄遺跡出土砂鉄。製錬滓の化学組織

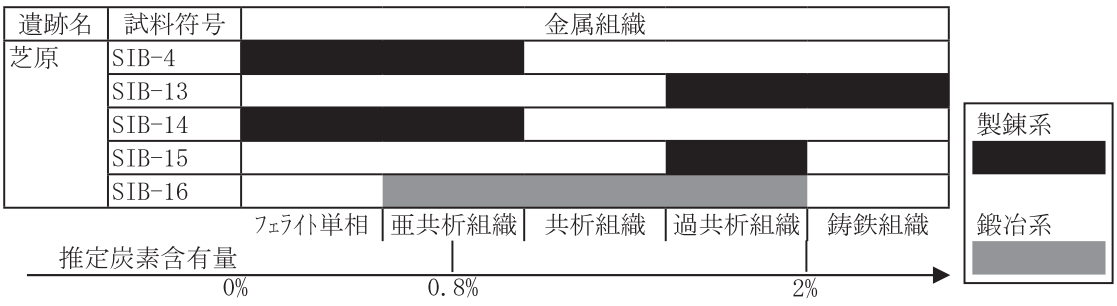
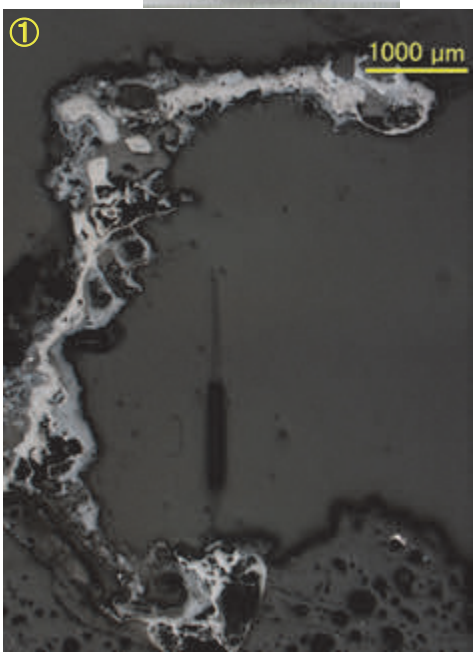
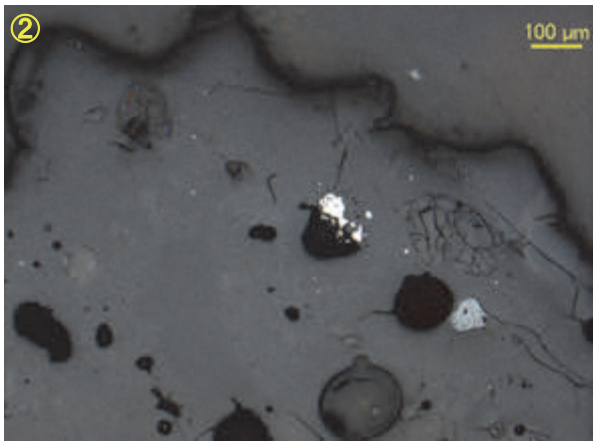


Fig. 2　芝原遺跡出土鉄塊系遺物・含鉄鉄滓の断面金属組織調査結果

SIB−1　炉壁
①〜③暗灰色部:内面表層ｶﾞﾗｽ質滓、砂粒散在、明灰色部:錆化鉄、微小明白色粒:金属鉄、ﾅｲﾀﾙetch ﾌｪﾗｲﾄ単相

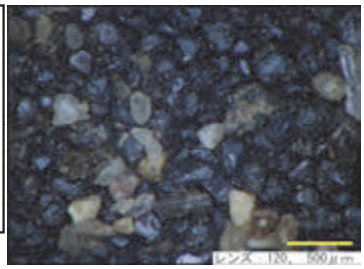


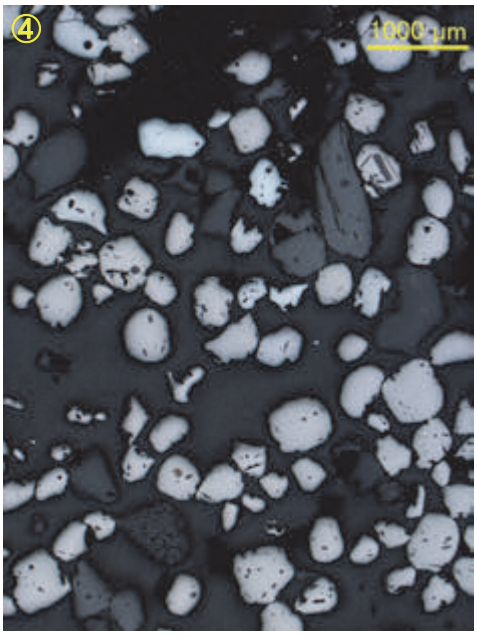


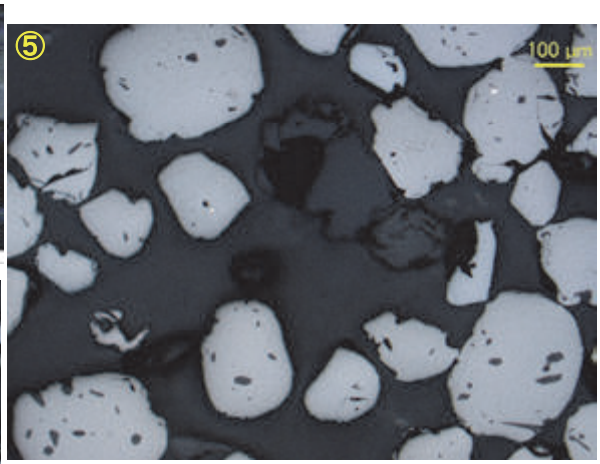




SIB−2　砂鉄
④〜⑥灰褐色粒:砂鉄(含ﾁﾀﾝ鉄鉱)、砂鉄粒内多角形状暗色鉱物:燐灰石、淡黄色鉱物:黄鉄鉱、
暗色粒:斜長石、角閃石、輝石類などの造岩鉱物







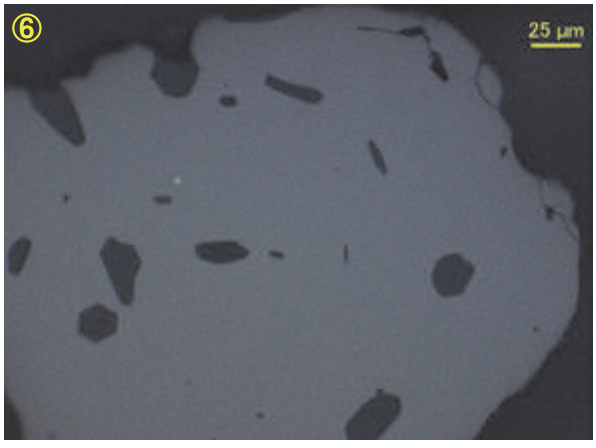
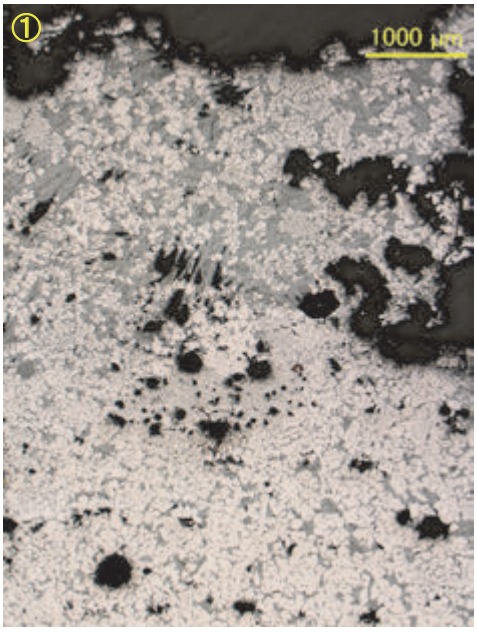
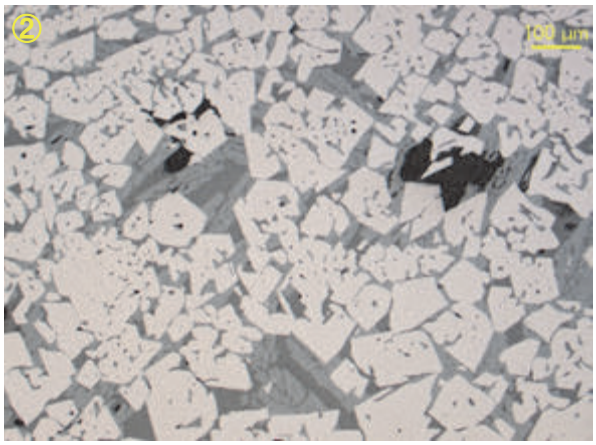


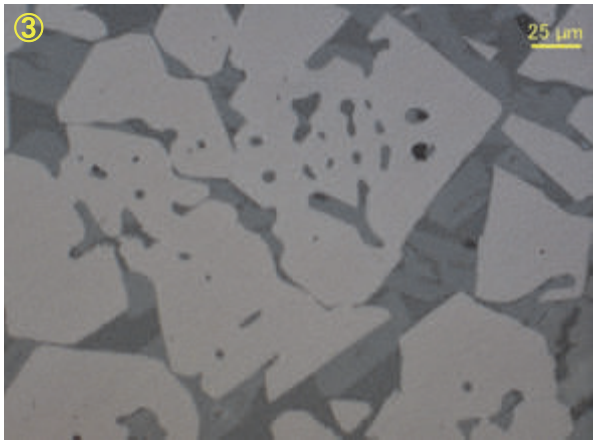
Photo. 1　炉壁・砂鉄の顕微鏡組織

SIB−3
炉外流出滓
①〜③滓部:ウルボスピネル・ファヤライト









SIB−4
鉄塊系遺物
④明白色部:金属鉄、フェライト単相〜亜共析組織(燐偏析)、滓部:ウルボスピネル・イルミナイト
⑤金属鉄部、⑥滓部拡大







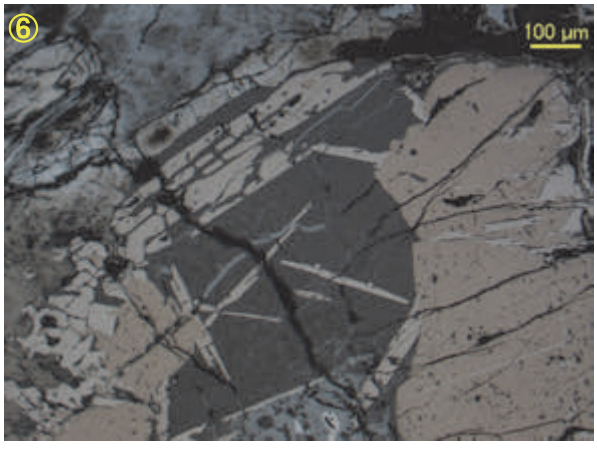
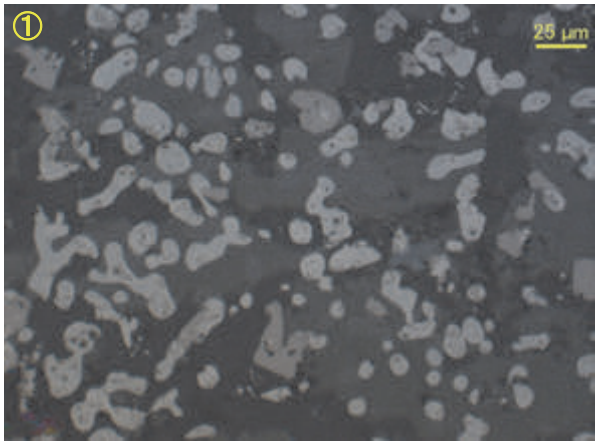
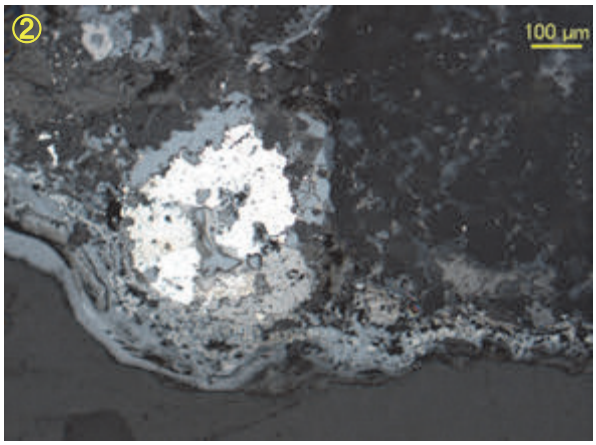


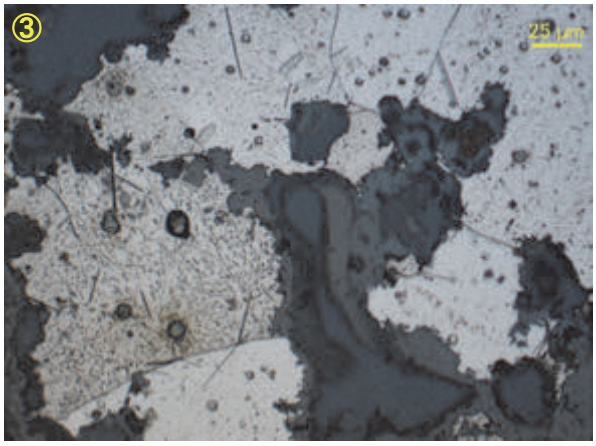
Photo. 2　炉外流出滓・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

SIB-5　羽口
①付着滓部:ウスタイト・ウルボスピネル・ファヤライト
②③明白色粒:金属鉄、ナイタルetch フェライト単相



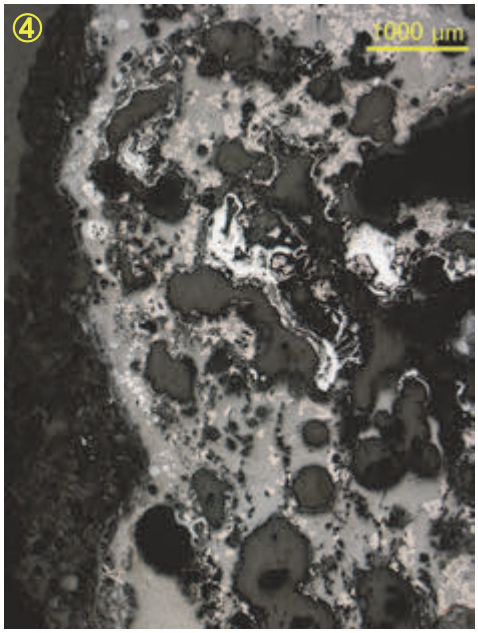






SIB-6
椀形鍛冶滓
④～⑥明灰色部:錆化鉄、滓部:ウルボスピネル・微細ウスタイト・ファヤライト





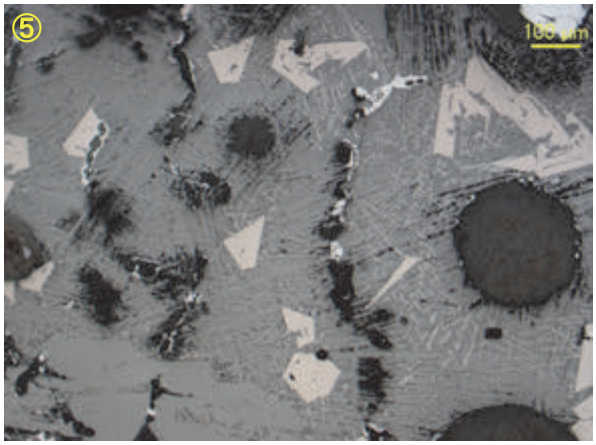


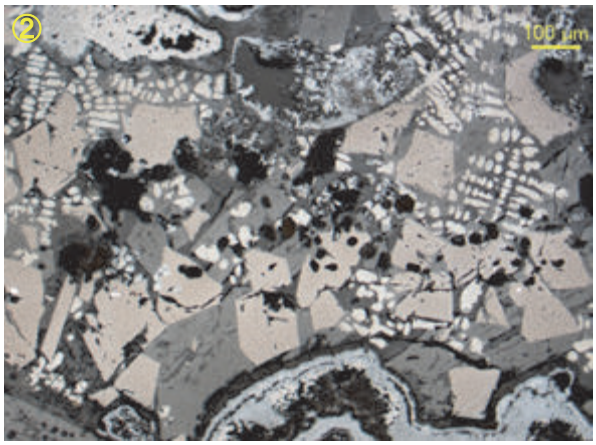


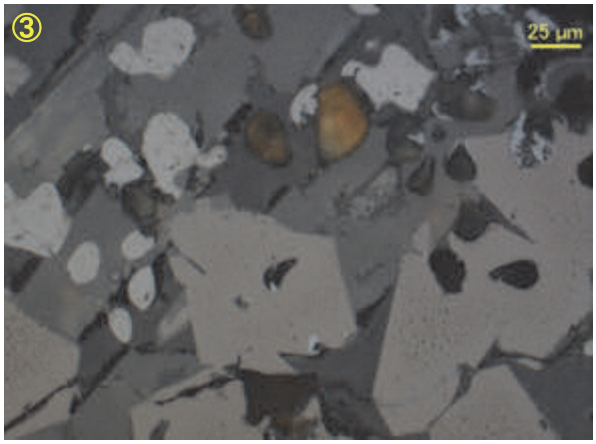
Photo. 3　羽口・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

SIB−7
椀形鍛冶滓
①〜③滓部:ウルボスピネル・ウスタイト・ファヤライト、不定形青灰色部:錆化鉄

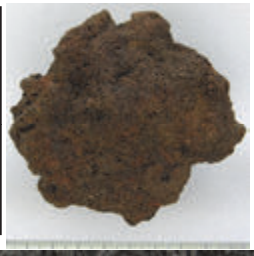


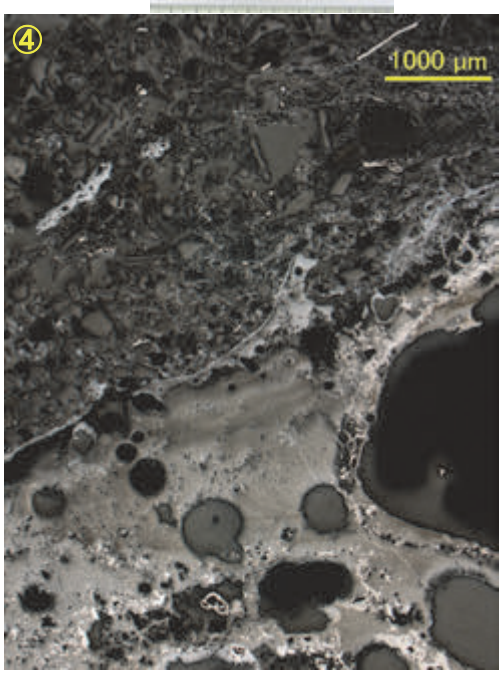


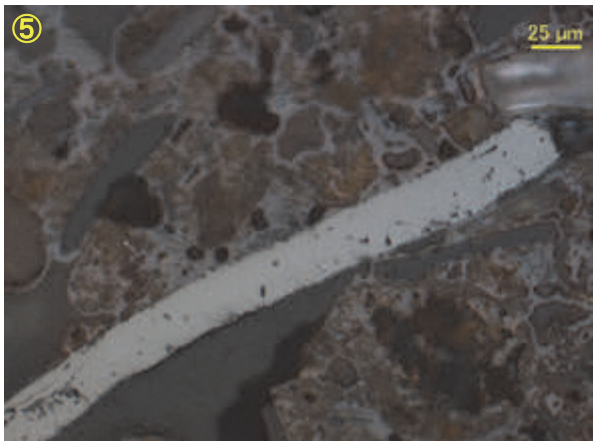




SIB−8
椀形鍛冶滓
④上側:表層付着土砂、鍛造剥片混在、下側:滓部、ウスタイト・ファヤライト、錆化鉄部散在、⑤鍛造剥片拡大、⑥滓部拡大







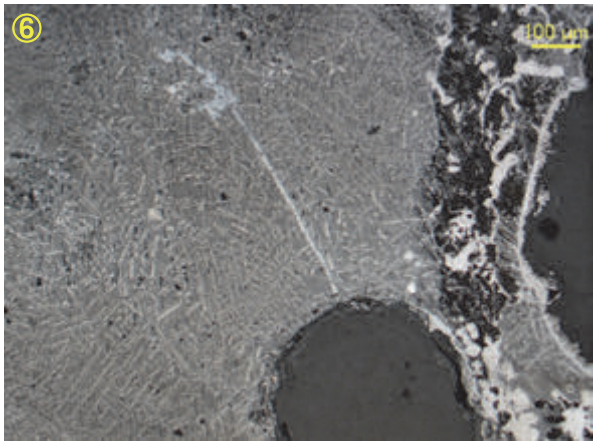
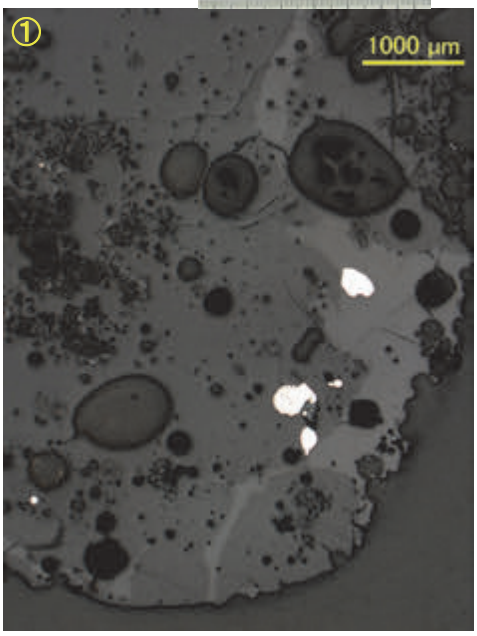
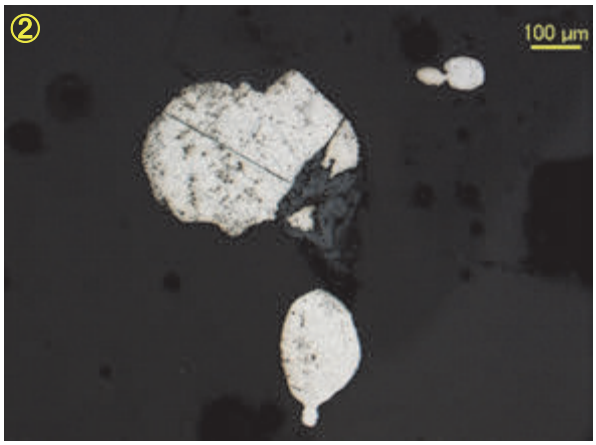


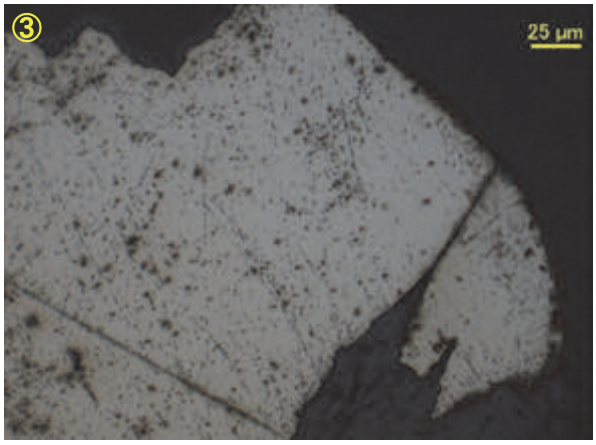
Photo. 4　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

SIB−9
椀形鍛冶滓
(ｶﾞﾗｽ質滓)
①ｶﾞﾗｽ質滓、被熱砂粒散在、明白色粒:金属鉄
②③金属鉄粒、ﾅｲﾀﾙetch ﾌｪﾗｲﾄ単相



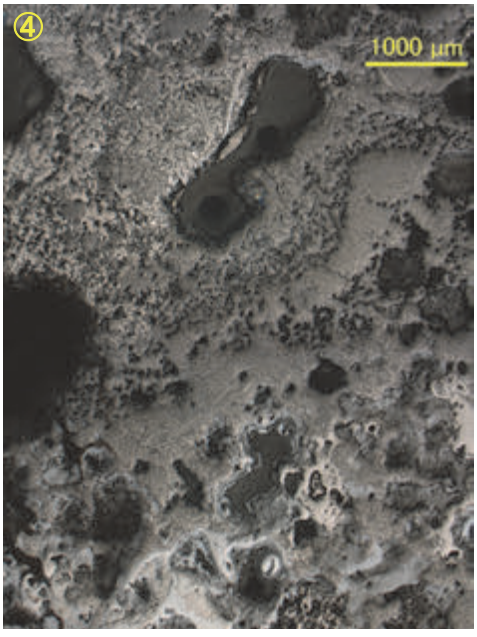






SIB−10
流出孔滓
④〜⑥滓部:ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ・ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ





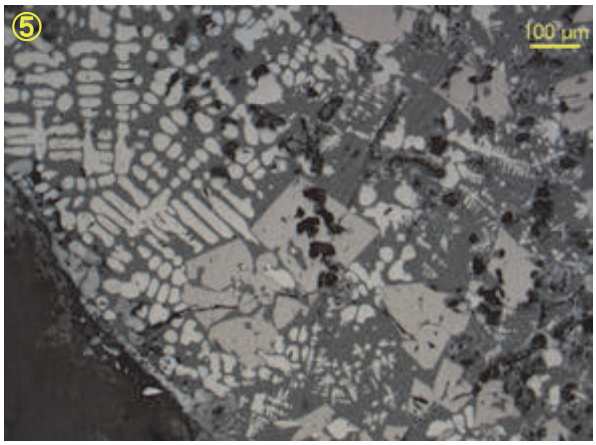
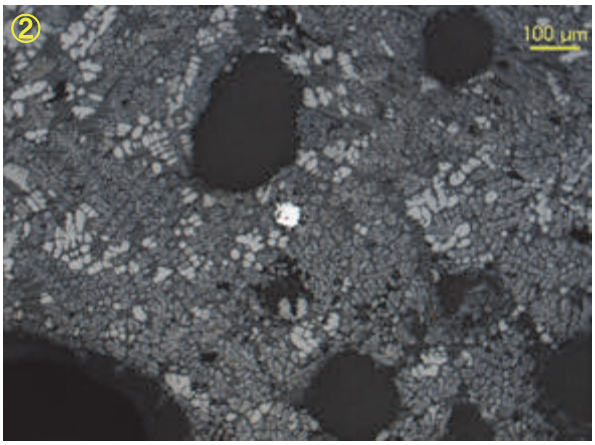


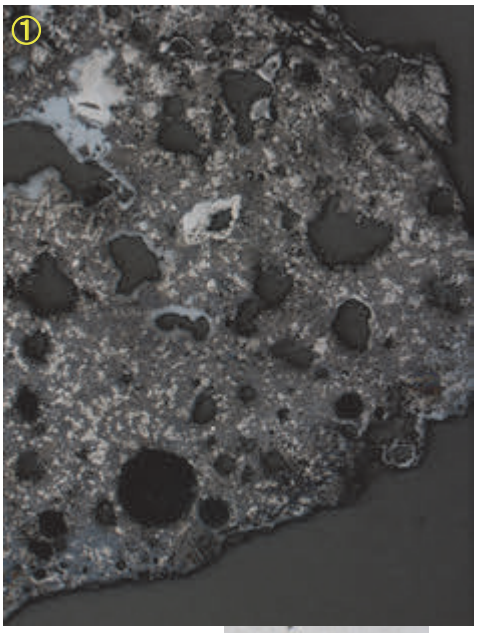


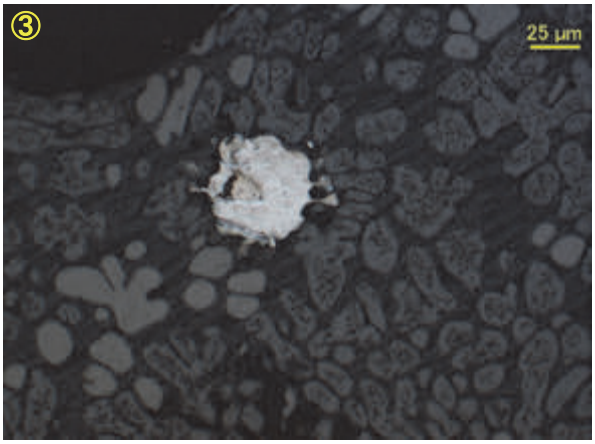
Photo. 5　椀形鍛冶滓・流出孔滓の顕微鏡組織

SIB-11
流出孔滓
①～③滓部:ｳｽﾀｲﾄ･微細ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ
②③中央:微小金属鉄粒、ﾅｲﾀﾙetch ﾌｪﾗｲﾄ単相



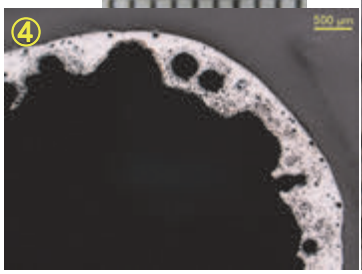


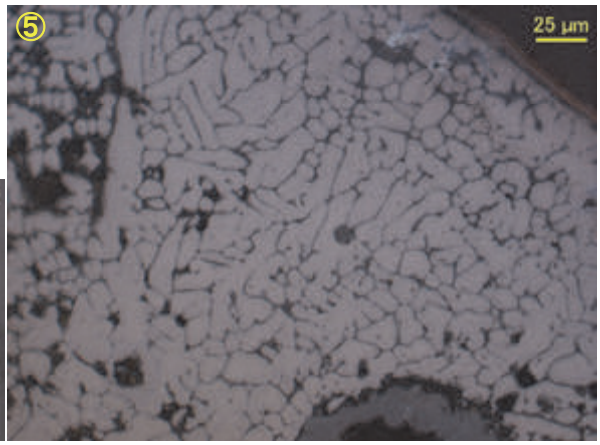




SIB-12-ｲ-1
粒状滓
④⑤ｳｽﾀｲﾄ凝集

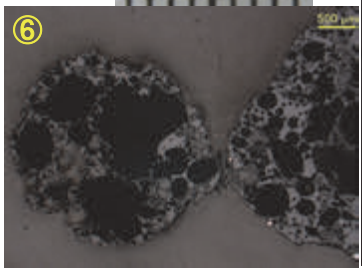






SIB-12-ｲ-2
粒状滓
⑥⑦ｶﾞﾗｽ質滓、微小金属鉄粒





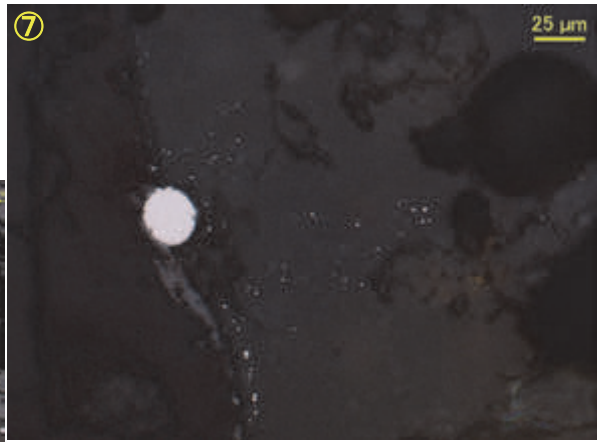
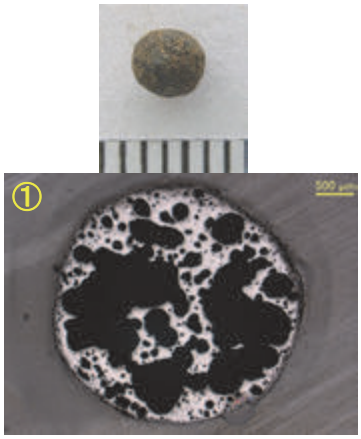
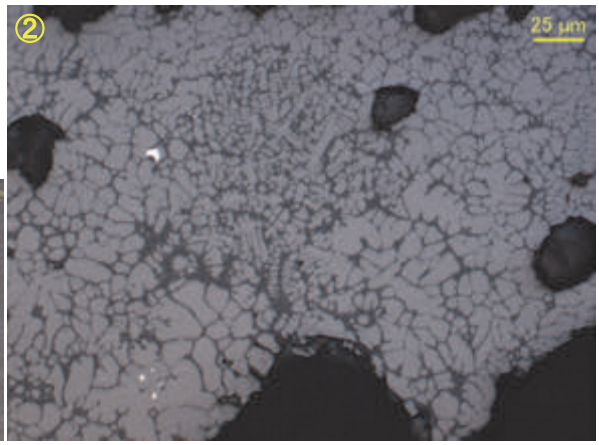


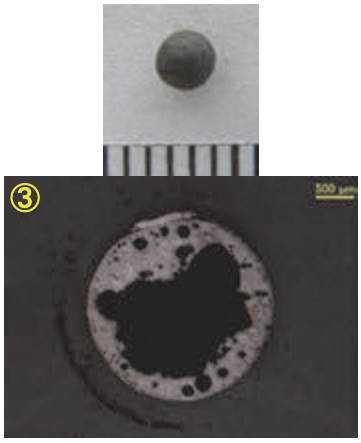
Photo. 6　流出孔滓・粒状滓の顕微鏡組織

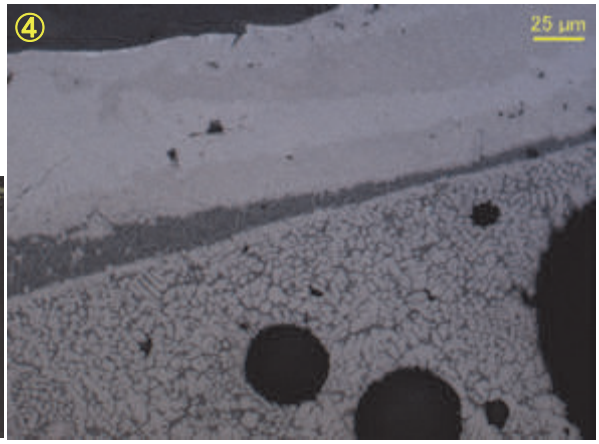
SIB−12−イ−3
粒状滓
①②滓部:ｳｽﾀｲﾄ、微小明白色粒:金属鉄



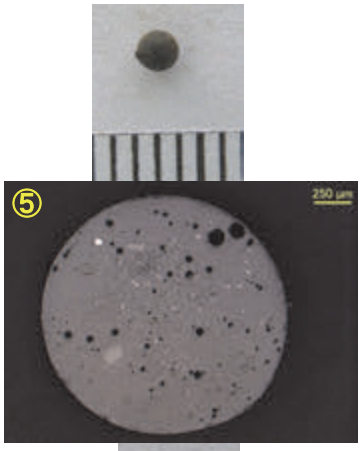


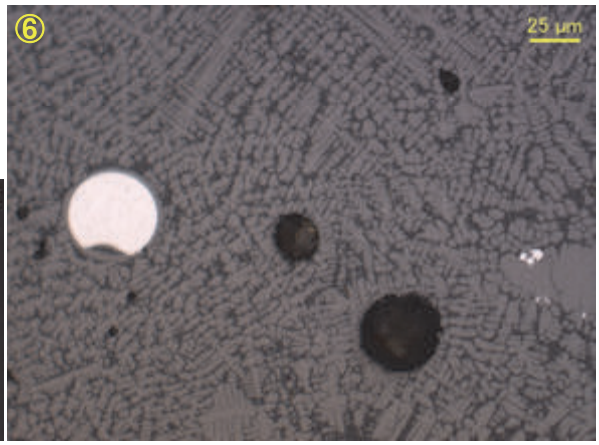
SIB−12−イ−4
粒状滓
③④上側:鍛造剥片溶着滓部:ｳｽﾀｲﾄ



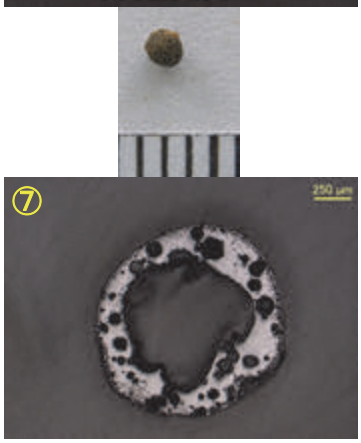


SIB−12−イ−5
粒状滓
⑤⑥滓部:ｳｽﾀｲﾄ、微小明白色粒:金属鉄





SIB−12−イ−6
粒状滓
⑦⑧滓部:ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ



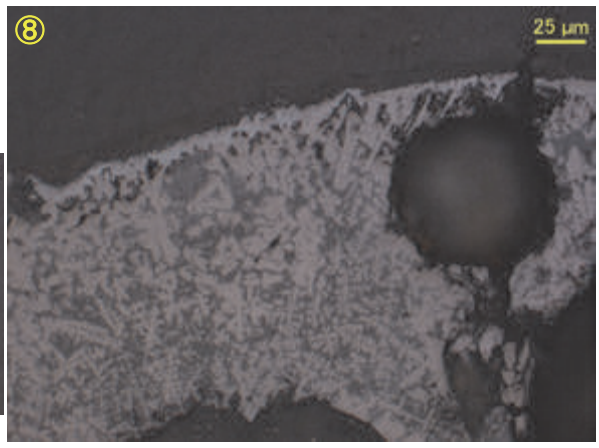
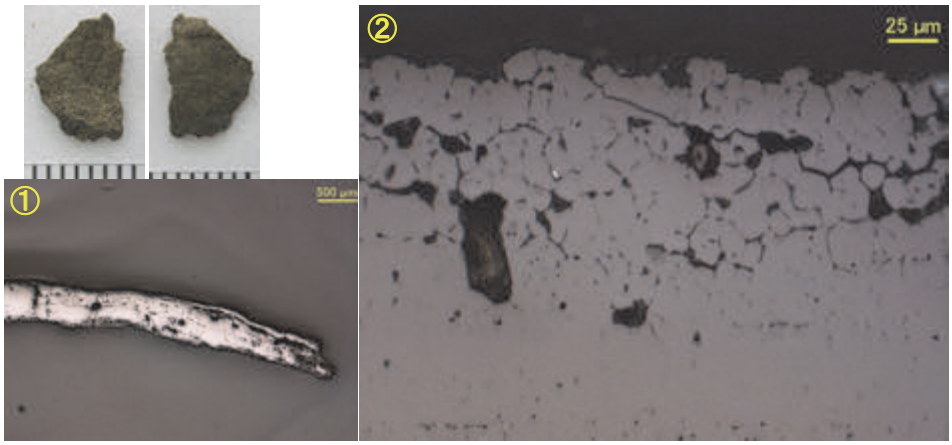
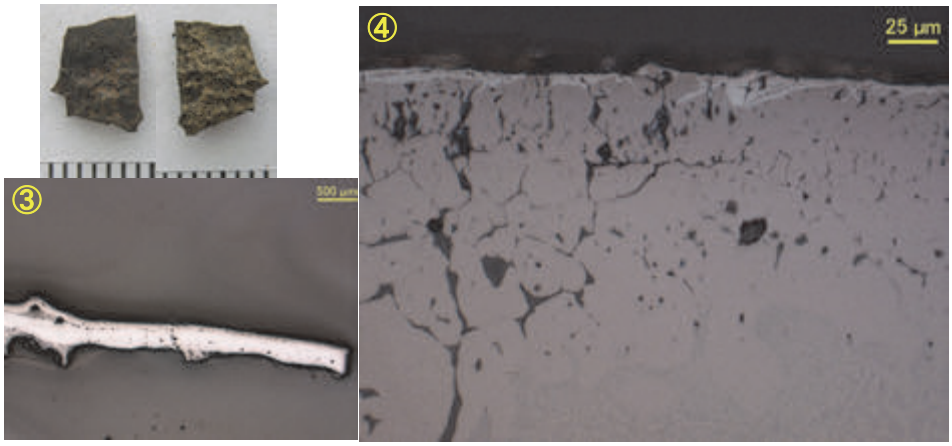


Photo. 7　粒状滓の顕微鏡組織

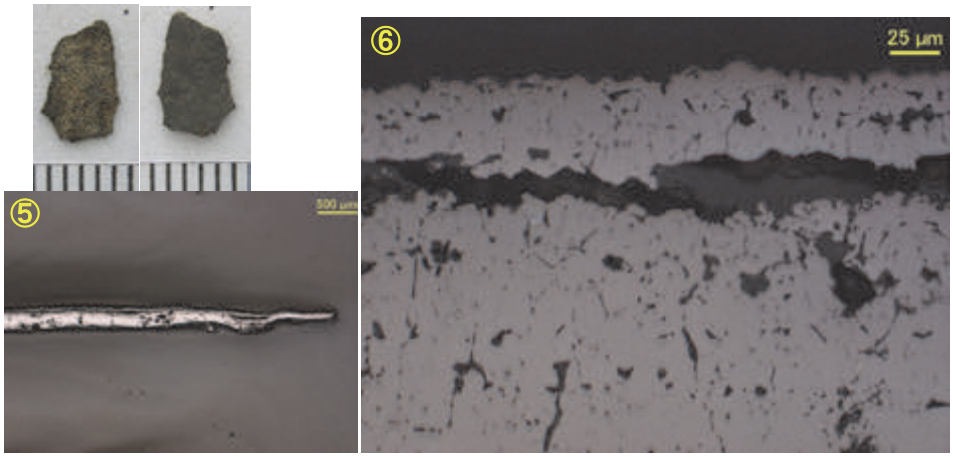
SIB-12-ロ-1
鍛造剥片様遺物
①②ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ



SIB-12-ロ-2
鍛造剥片
③④明白色層:ﾍﾏﾀｲﾄ、灰褐色結晶ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ、灰色層:ｳｽﾀｲﾄ



SIB-12-ロ-3
鍛造剥片様遺物
⑤⑥ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ



SIB-12-ロ-4
鍛造剥片様遺物
⑦⑧明白色部:ﾍﾏﾀｲﾄ、灰褐色部:ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ

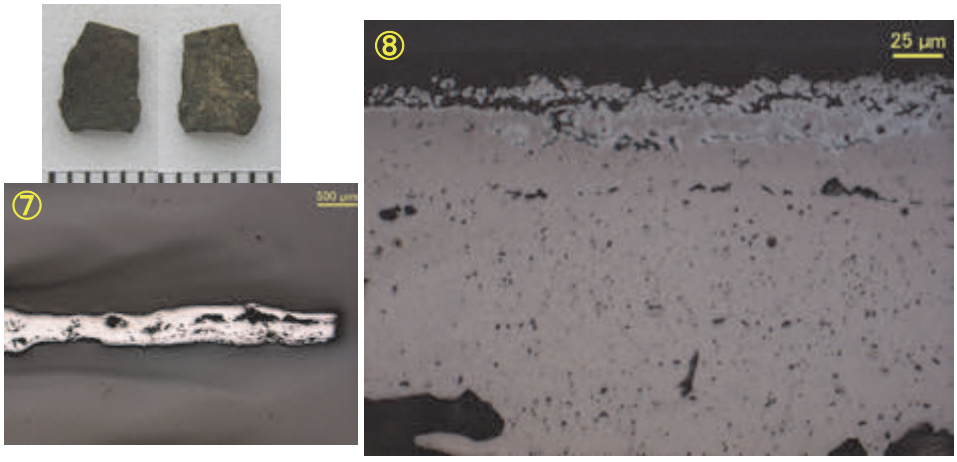
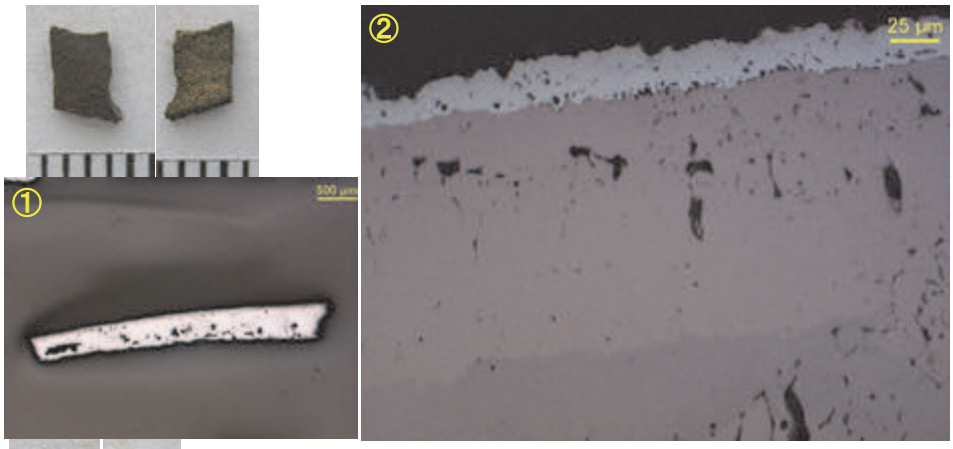
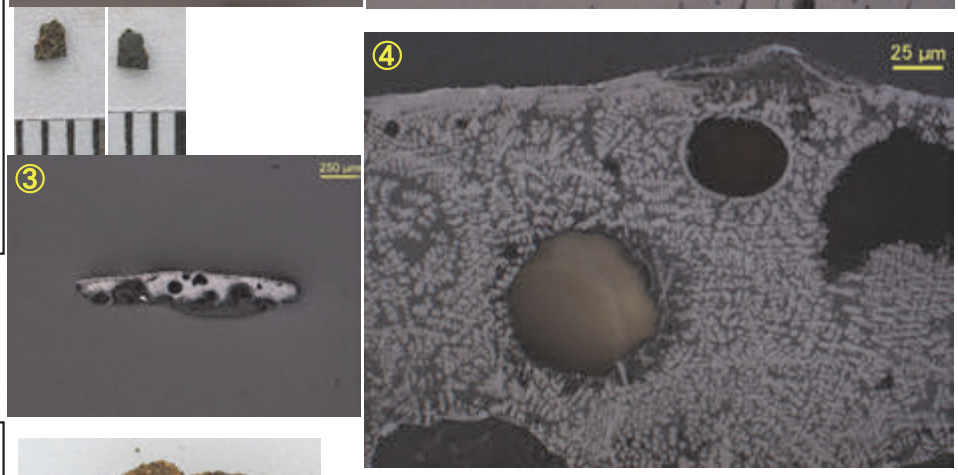


Photo. 8　鍛造剥片の顕微鏡組織

SIB-12-ロ-5
鍛造剥片
①②明白色層:ﾍﾏﾀｲﾄ、灰褐色層ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ、灰色層:ｳｽﾀｲﾄ



SIB-12-ロ-6
鍛造剥片様遺物
③④鍛冶滓破片、滓部:ｳｽﾀｲﾄ



SIB-13
鉄塊系遺物
⑤滓部:黒色ｶﾞﾗｽ質滓
金属鉄部:ﾅｲﾀﾙetch
過共析組織～共晶状黒鉛組織
⑥共晶状黒鉛組織拡大
⑦過共析組織拡大

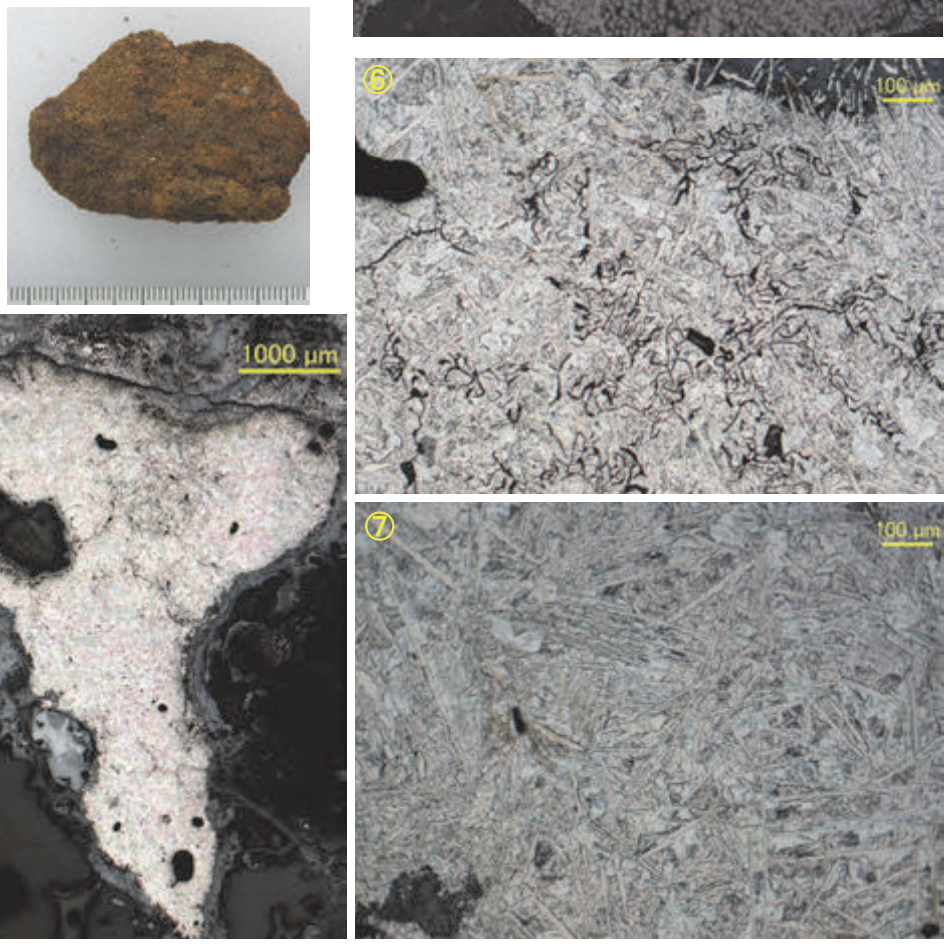
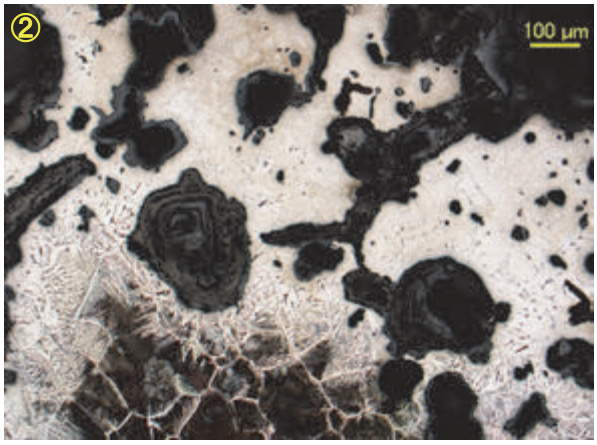


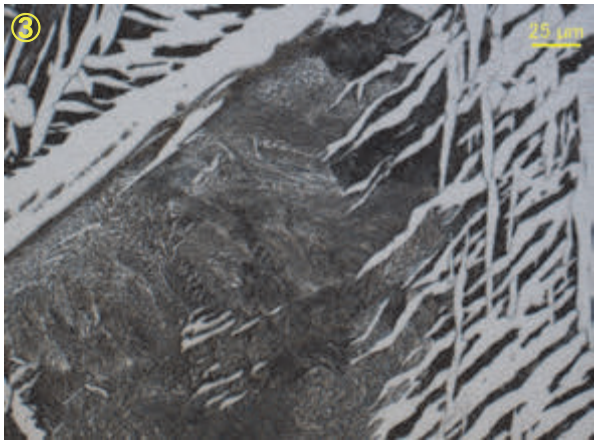
Photo. 9　鍛造剥片・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

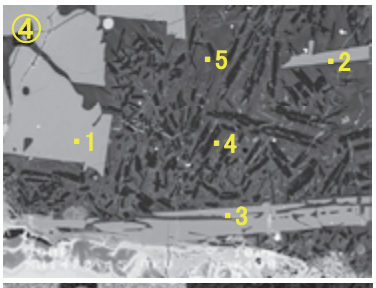
SIB−14
鉄塊系遺物
①亜共析組織、燐化鉄共晶、②③ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織

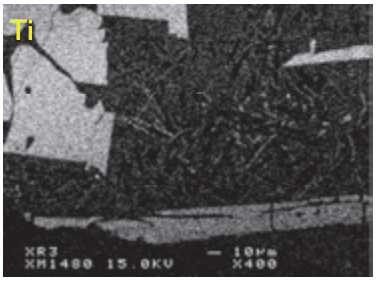








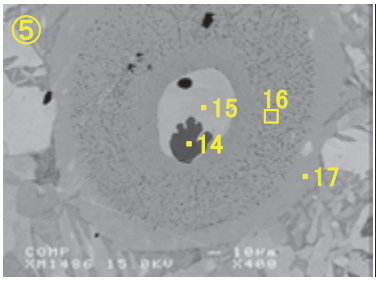


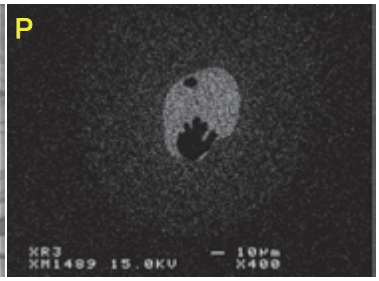


定量分析値

Element	1	2	3	4	5
Na_2O	0.022	–	–	1.960	0.170
MgO	3.248	4.372	4.284	0.407	5.100
Al_2O_3	4.392	4.525	4.352	30.432	10.022
SiO_2	0.121	0.097	0.082	47.963	47.208
P_2O_5	0.008	0.014	–	0.022	0.131
S	–	–	–	0.005	0.029
K_2O	0.011	0.054	0.042	0.890	1.383
CaO	0.019	0.174	0.117	10.474	5.672
TiO_2	79.233	77.083	78.329	2.675	5.164
Cr_2O_3	0.171	0.032	0.112	0.044	–
MnO	0.519	1.102	1.100	0.396	4.236
FeO	9.152	9.255	10.090	1.569	14.116
As_2O_5	0.485	0.458	0.714	–	0.081
V_2O_3	3.506	1.565	1.527	0.021	0.065
PbO	–	–	0.022	–	0.012
CuO	–	0.027	0.003	0.039	0.018
SnO_2	0.068	–	–	–	–
MoO_3	0.007	–	–	–	–
Total	100.962	98.758	100.774	96.897	93.407

Element	14	15	16	17
Cu	0.128	0.056	0.053	–
Pb	–	0.023	0.008	–
Sn	–	0.001	–	–
Zn	–	–	–	–
Fe	61.691	86.357	97.433	99.006
As	–	0.112	0.056	–
Sb	0.029	–	–	0.011
Bi	0.009	–	–	–
Se	0.029	0.027	0.002	–
Ag	–	0.010	–	–
O	0.089	0.301	0.739	0.049
S	35.965	0.230	0.031	0.012
C	0.944	–	–	0.003
P	0.008	21.985	3.143	0.895
Mn	0.377	0.011	0.008	–
Ti	0.047	0.010	0.009	–
V	0.684	0.004	–	0.024
Total	100.000	109.127	101.482	100.000





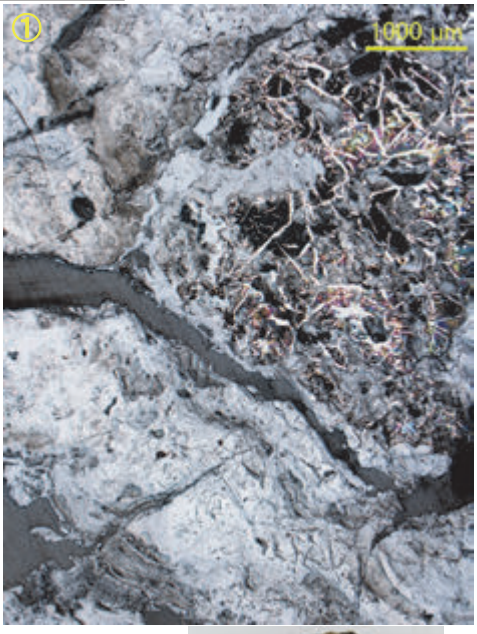


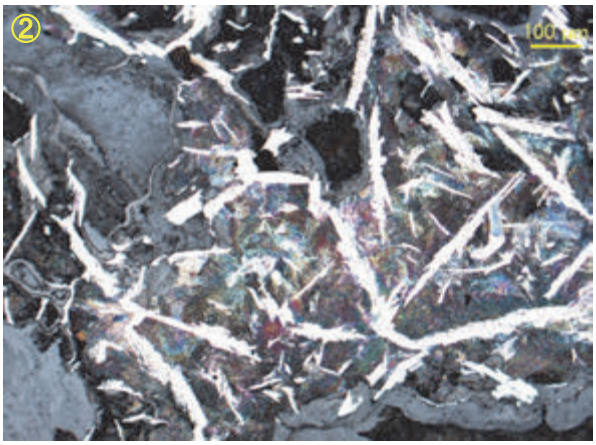
滓部および鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）・特性X線像

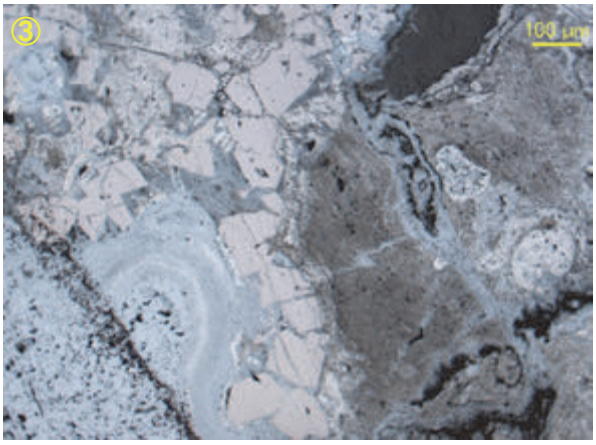
Photo. 10　鉄塊系遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果

SIB−15
鉄塊系遺物
①金属鉄部：ﾅｲﾀﾙetch
過共析組織、滓部：ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾙ
②金属鉄部拡大
③滓部拡大

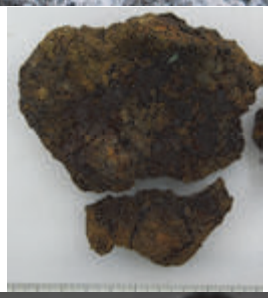


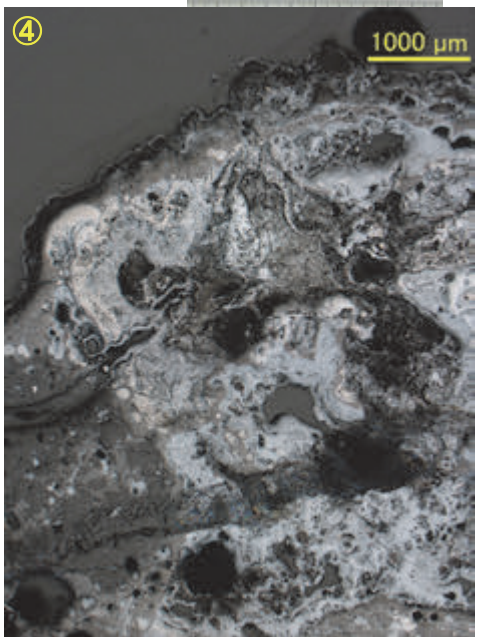






SIB−16−1
椀形鍛冶滓
（緑青付着 含鉄）
④〜⑥滓部：ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ、錆化鉄部：過共析組織痕跡





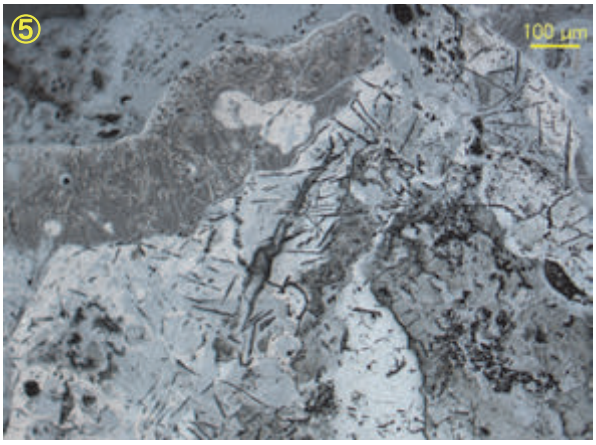
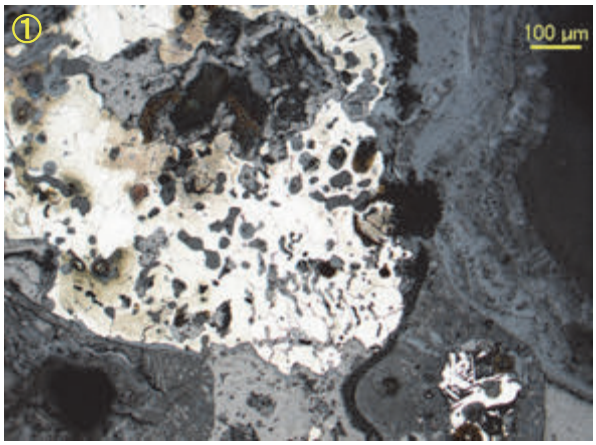


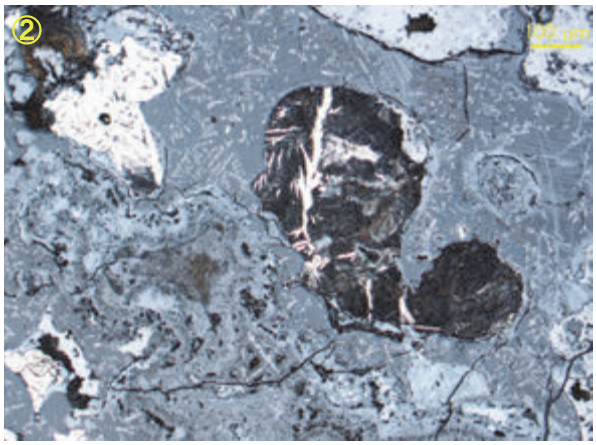


Photo. 11　鉄塊系遺物・椀形鍛冶滓（含鉄）の顕微鏡組織

SIB-16－2
椀形鍛冶滓
（緑青付着 含鉄）
①②金属鉄部:ﾅｲﾀﾙetch
ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織、
金属鉄:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ

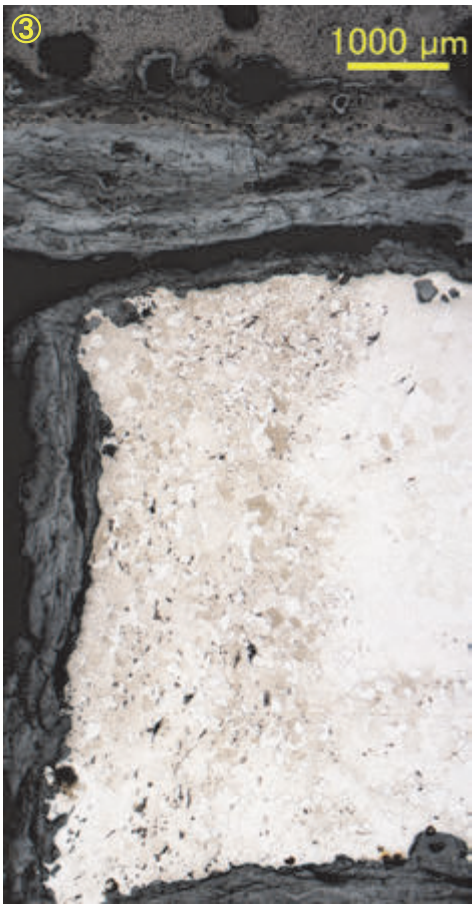






SIB-17
椀形鍛冶滓
（鍛造品付）
③上側:滓部、下側:金属鉄（鍛造品）部分、ﾅｲﾀﾙetch
④⑤金属鉄部拡大
④亜共析組織
⑤ﾌｪﾗｲﾄ単相
鉄中非金属介在物:ｳﾙﾎﾞ







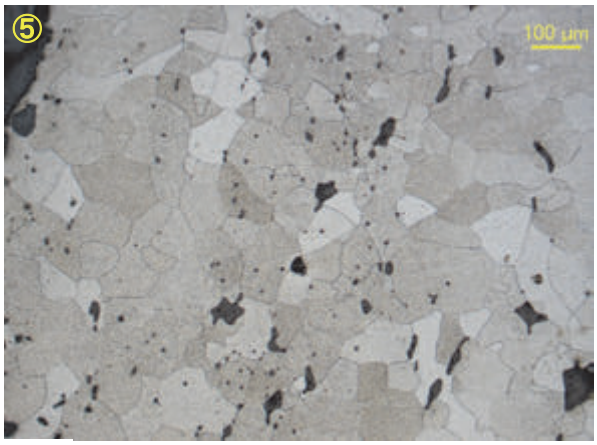
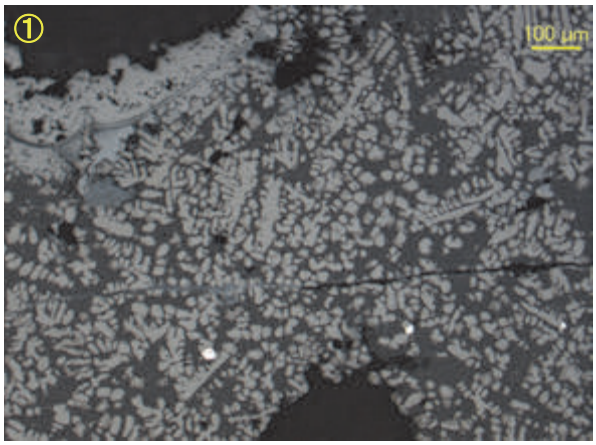
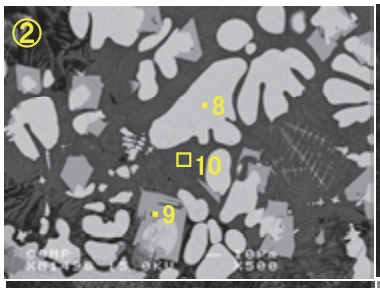


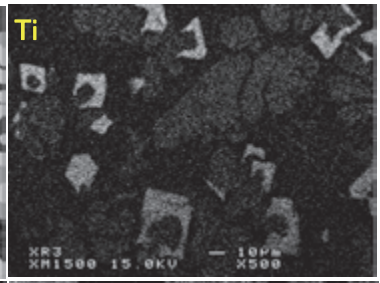
Photo. 12　椀形鍛冶滓（含鉄・鍛造品付）の顕微鏡組織

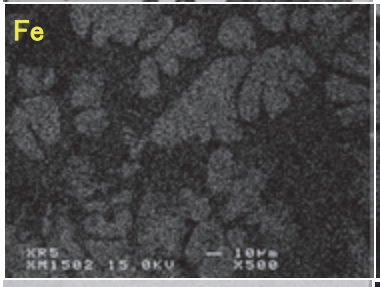
SIB-17
椀形鍛冶滓
（鍛造品付）
①滓部拡大、ウルボスピネル・ウスタイト・ファヤライト

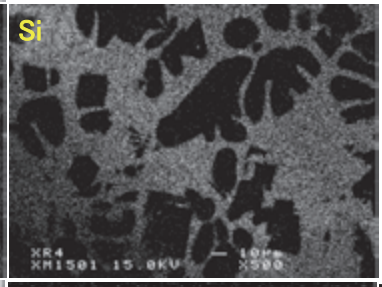


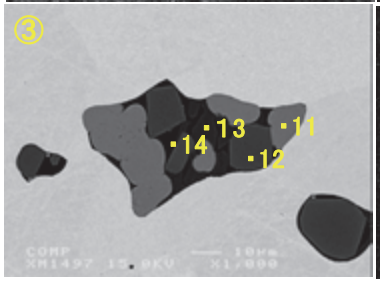


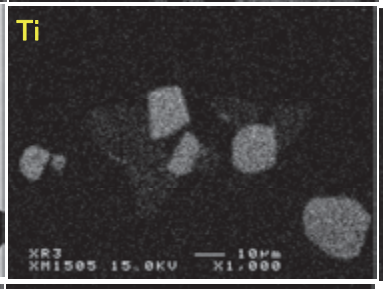


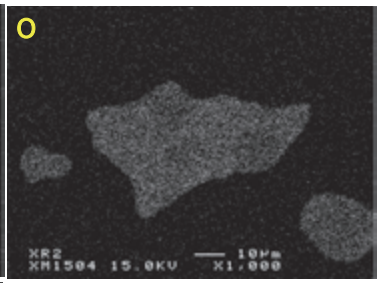


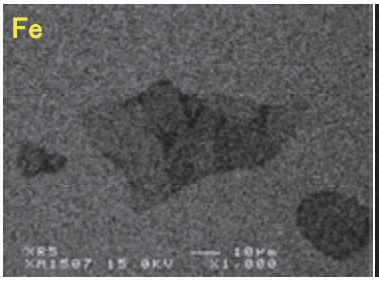


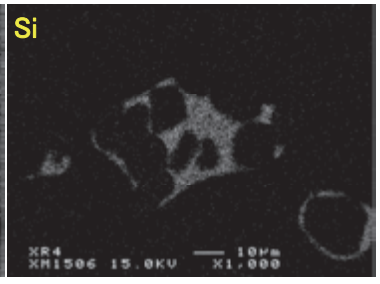












滓部および鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）・特性X線像

定量分析値

Element	8	9	10
Na_2O	0.118	–	1.637
MgO	0.681	0.773	1.159
Al_2O_3	0.680	6.144	8.917
SiO_2	0.273	0.113	39.546
P_2O_5	0.017	–	1.257
S	–	0.001	0.068
K_2O	0.013	0.004	2.314
CaO	–	0.030	7.252
TiO_2	3.941	24.671	0.534
Cr_2O_3	–	–	–
MnO	0.305	0.492	0.443
FeO	95.612	66.895	33.843
As_2O_5	–	0.338	–
V_2O_3	0.150	0.614	–
PbO	0.025	–	–
CuO	–	–	–
SnO_2	0.020	–	–
MoO_3	0.016	0.016	–
Total	101.851	100.091	96.970

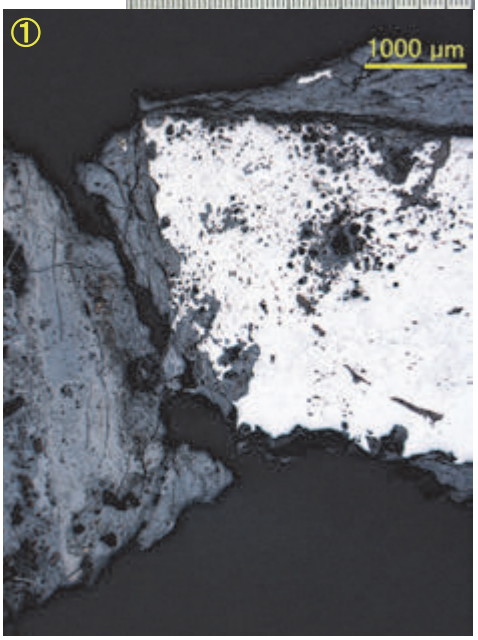
定量分析値

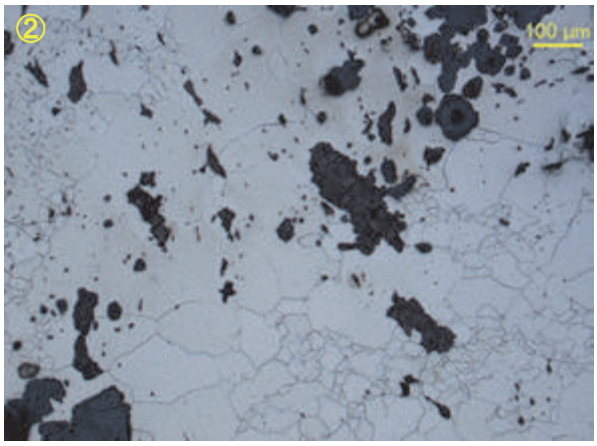
Element	11	12	13	14
Na_2O	–	0.098	0.139	3.393
MgO	0.386	0.973	2.995	1.026
Al_2O_3	0.835	8.665	0.215	8.392
SiO_2	0.440	0.052	30.875	37.416
P_2O_5	0.015	–	0.710	5.033
S	–	0.003	–	0.175
K_2O	–	0.007	–	3.690
CaO	–	–	1.100	8.799
TiO_2	2.356	22.290	0.361	0.539
Cr_2O_3	–	0.491	0.053	–
MnO	0.383	0.424	0.805	0.409
FeO	95.608	65.174	62.491	30.162
As_2O_5	0.267	–	–	–
V_2O_3	0.193	3.397	0.054	0.034
PbO	0.053	0.034	–	0.023
CuO	–	–	–	0.028
SnO_2	0.050	–	–	–
MoO_3	–	–	–	0.042
Total	100.586	101.608	99.798	99.161

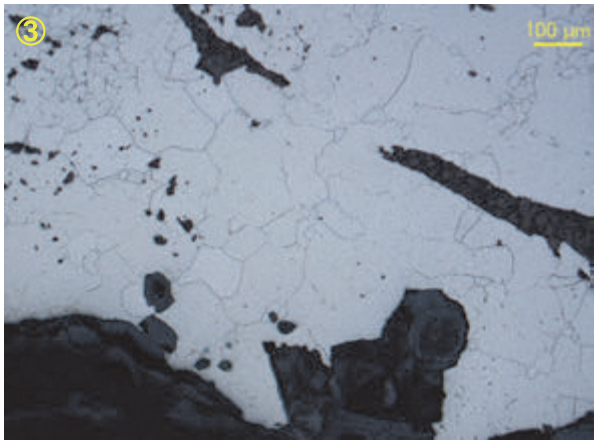
Photo. 13　椀形鍛冶滓（鍛造品付）の顕微鏡組織・EPMA調査

SIB-18
鉄製品（鍛造品）
①～③金属鉄部:ﾅｲﾀﾙ etch ﾌｪﾗｲﾄ単相、鉄中非金属介在物:ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ・ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ

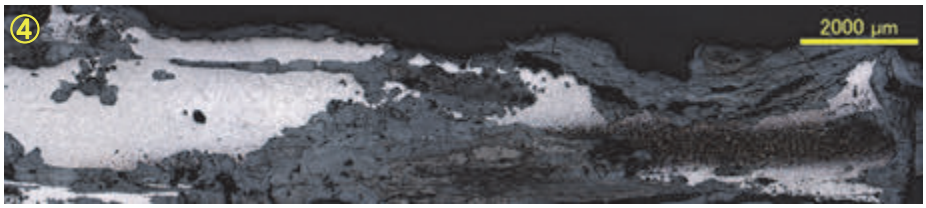


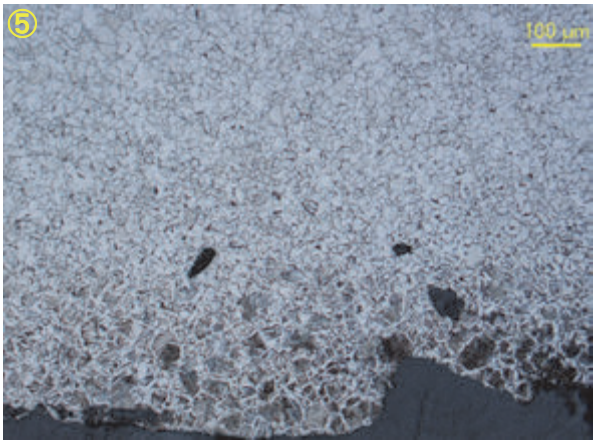






SIB-19
鉄製品（鍛造品）
④～⑥金属鉄部:ﾅｲﾀﾙ etch ﾌｪﾗｲﾄ単相～亜共析組織





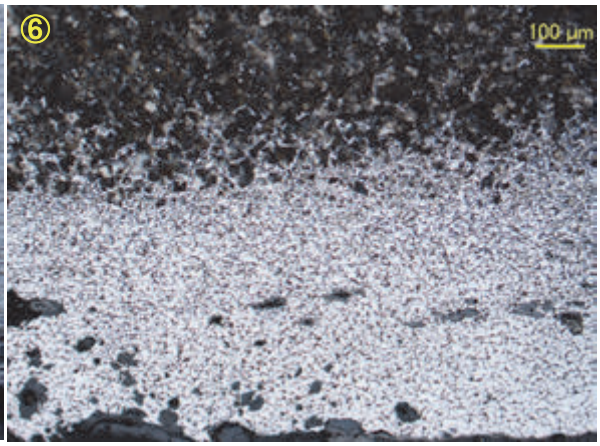
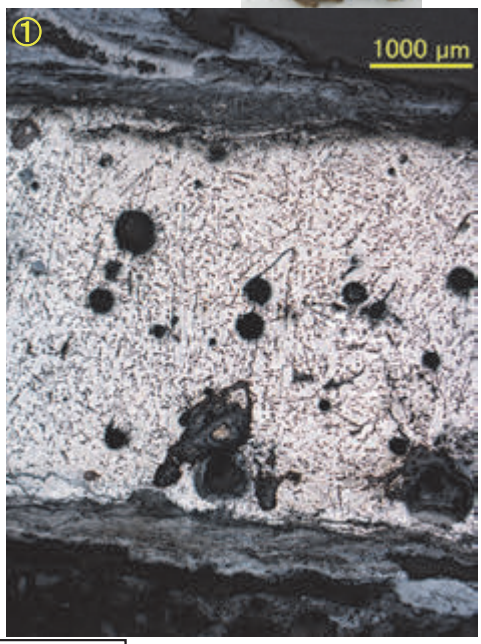
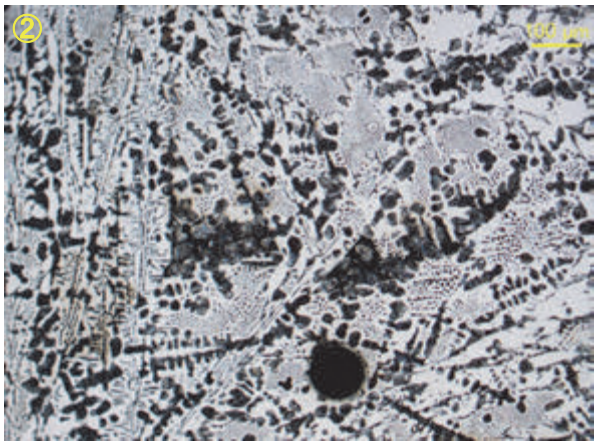


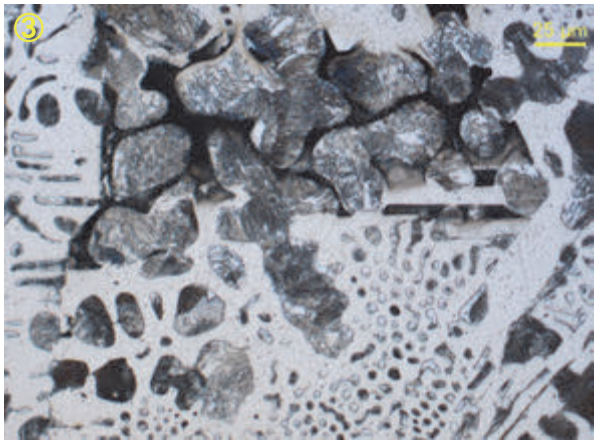
Photo. 14　鉄製品（鍛造品）の顕微鏡組織

SIB-20
鉄製品（鋳造品）
①～③亜共晶組成白鋳鉄組織





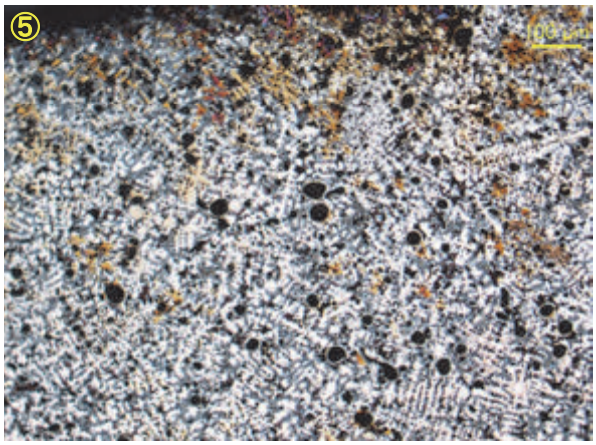




SIB-21
青銅製品
（両端:鋳鉄）
④明色部:鉛青銅、酢酸・硝酸・ｱｾﾄﾝetch 暗色部:白鋳鉄組織痕跡
⑤鉛青銅部分拡大







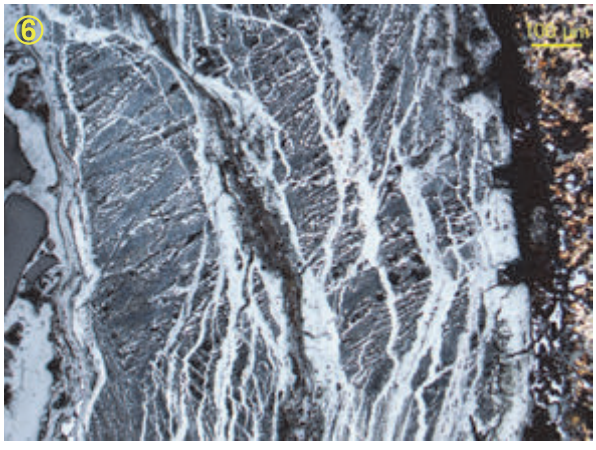
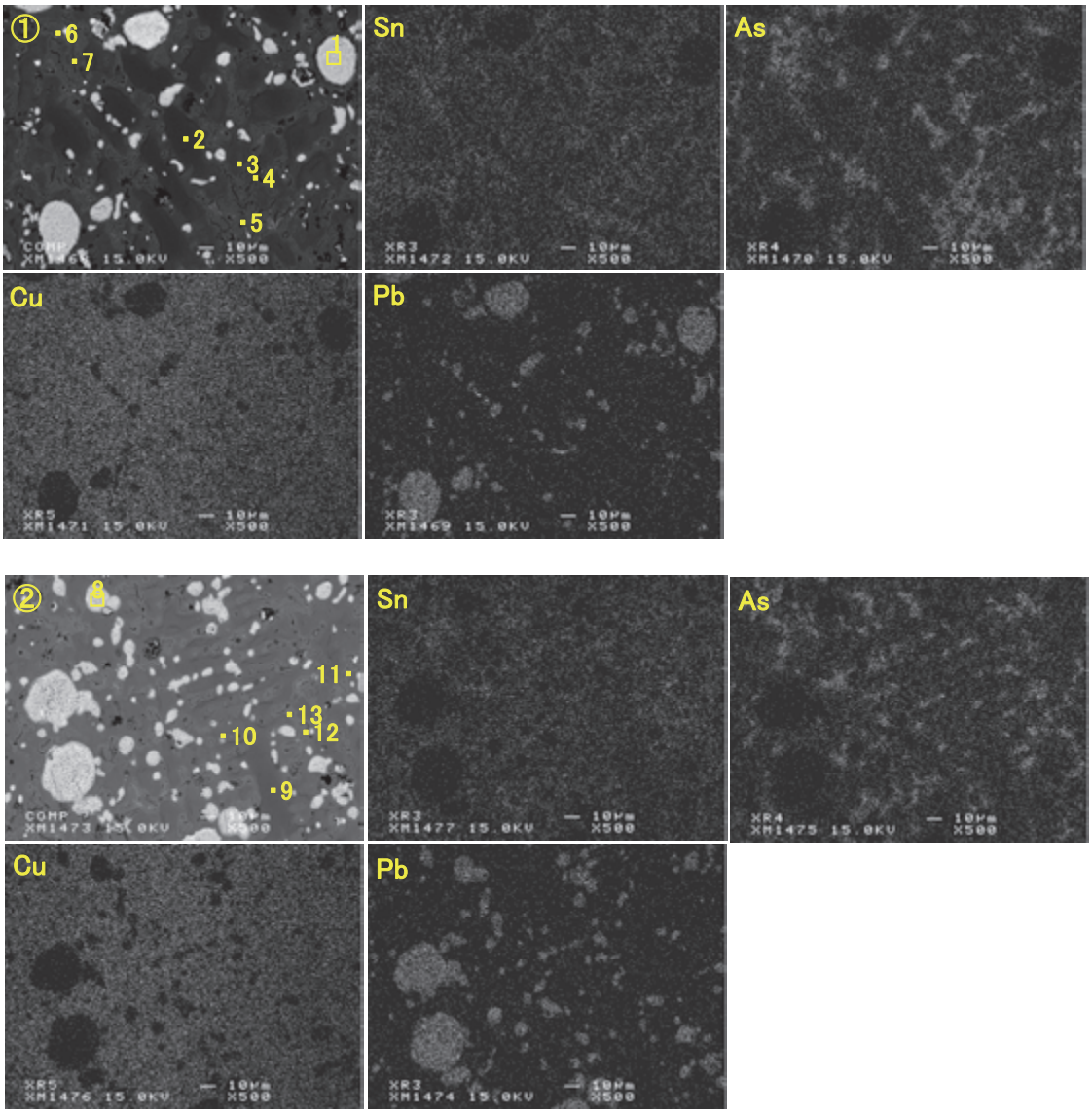


Photo. 15　鉄製品（鋳造品）・青銅製品（両端鋳鉄）の顕微鏡調査



青銅部分の反射電子像（COMP）・特性X線像

定量分析値

Element	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
Cu	3.688	81.331	80.894	73.101	75.566	68.049	64.468	3.969	83.550	79.496	65.079	66.915	71.446
Pb	85.965	3.880	4.386	3.767	3.386	1.164	1.659	79.744	3.380	5.730	1.192	1.162	4.111
Sn	0.081	2.644	2.865	8.300	7.365	0.898	0.976	0.096	2.143	2.731	0.922	0.852	9.792
Zn	0.133	4.223	4.135	2.161	2.286	1.448	0.879	0.207	4.383	4.170	1.196	1.705	1.913
Fe	–	0.244	0.163	0.090	0.167	0.081	0.046	0.023	0.251	0.220	0.080	0.063	0.125
As	–	4.179	4.923	10.268	9.865	30.912	33.717	–	4.086	5.431	32.491	29.775	10.400
Sb	0.027	–	–	–	–	0.598	0.594	–	–	–	0.847	0.919	–
Bi	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Se	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Ag	0.032	0.209	0.116	0.367	0.230	0.033	0.010	–	0.223	0.171	0.124	–	0.322
O	7.992	0.066	–	–	0.667	2.153	–	9.487	–	0.593	–	–	–
S	–	0.070	0.032	0.019	0.020	0.014	0.023	–	0.040	0.034	0.002	0.003	0.034
C	2.082	3.154	2.486	1.927	0.448	–	–	6.474	1.944	1.424	–	–	1.857
P	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Mn	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Ti	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
V	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Total	100.000	100.000	100.000	100.000	100.000	105.350	102.372	100.000	100.000	100.000	101.933	101.394	100.000

Photo. 16　青銅製品（両端鋳鉄）のEPMA調査結果

第２節

南さつま市芝原遺跡出土人骨

鹿児島女子短期大学　竹中正巳

南さつま市芝原遺跡から出土した人骨について人類学的精査を行った結果を以下に報告する。人骨の考古学的情報は表１に示す。顔面平坦度の計測値および示数は表２に，頭蓋計測値は表３に，頭蓋形態小変異の出現頻度は表４に示す。

人骨の所見

D-23区Ⅳ上層出土人骨

脳頭蓋の一部が遺存する。保存状態は悪い。性判定可能な部位は遺存していない。したがって，性別不明である。脳頭蓋の厚さは約２㎜ある。年齢は成人の可能性が高い。

中世土坑墓12号出土人骨（女性・壮年）

頭蓋と下肢が遺存するが，保存状態は悪い。本人骨の頭蓋は頭蓋底の蝶後頭軟骨結合は癒合している。左右とも外耳道骨腫は認められない。頭蓋形態小変異の出現状況を表４に示す。顔面部は上顎歯，下顎骨およびそれに植立する歯が遺存している。

歯式は以下の通りである。

・	・	・	・	・	・						・		・	・	・
8	7	6	5	4	3	×	×	×	×	×	4	×	6	7	8
8	7	6	5	4	×	×	×	×	×	3	4	5	6	7	8
・															・

性別は，頭蓋が小さく，左右の側頭骨の乳様突起が小さいことから女性と判定した。頭蓋の厚さは，厚いところで約３㎜と薄い。歯の咬耗は，Martinの１～２°であり，年齢は壮年と判定した。

下肢は骨盤から大腿骨にかけての骨が遺存している。

中世土坑10号出土人骨（性別不明・熟年）

左右の内耳および頭蓋片が残る。保存状態は悪い。性判定が可能な部位は遺存していない。頭蓋の厚さは薄い。歯は上顎左小臼歯の歯冠が遺存するのみである。咬耗はMartinの２°であり，年齢は熟年と推定される。

中世土坑墓８号出土人骨（女性・熟年）

長円形の土壙墓に埋葬されており，埋葬姿勢は側臥屈葬と考えられる。人骨の保存状態は良くない。脳頭蓋は右半分が残る。脳頭蓋は長い。上下顎も残る。右乳様突起が小さいことから，女性と判定される。右外耳道に骨腫はない。頭蓋形態小変異の出現状況を表４に示す。

歯式は以下の通りである。

8	7	●	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	×
	7	6	5	4	3	○	1		○	○	○	×	×	×	×	×

歯の咬耗はMartinの２°であり，年齢は熟年と推定される。

中世土坑墓７号出土人骨（男性・熟年）

人骨は全身が残るが，保存状態は悪い。埋葬姿勢は軽く膝を曲げた仰臥屈葬である。眉弓が突出し，右乳様突起が大きいことから，男性と判定される。顔面平坦度の計測値および示数を表２に示す。また頭蓋形態小変異の出現状況を表４に示す。

歯式は以下の通りである。

×	×	×	×	4	3	2	1		×	2	3	4	○	×	×	×
8	7	○	5	4	3	○	○		○	×	○	○	5	●	○	●

歯の咬耗はMartinの２～３°であり，年齢は熟年と推定される。冠状縫合は内板が完全に癒合している。矢状縫合は内外板が完全に癒合している。

遺構No.2397出土人骨（性別不明・熟年）

保存は悪い。頭蓋と四肢の一部が遺存する。遺存遺骨は細片化している。埋葬姿勢は膝を軽く曲げた仰臥屈葬である。頭位は北東である。足先は北西を向き，左右の両膝を南東に向けている。性判定が可能な部位は遺存していない。脳頭蓋は小さい。歯は下顎右犬歯，下顎右第一小臼歯の２本のみが遊離歯として遺存している。両歯とも咬耗はMartinの２°であり，年齢は熟年と推定される。２本ともエナメル質減形成も，う蝕も認められない。右側頭骨の外耳孔周辺が遺存しており，外耳道骨腫は認められない。冠状縫合は内板が完全に癒合している。矢状縫合は内外板が完全に癒合している。

中世土坑墓18号出土人骨（男性・熟年）（図１・２）

保存は良くないが，芝原遺跡から出土した人骨の中では最も保存がよい人骨である。頭蓋と四肢が遺存する。埋葬姿勢は軽く膝を曲げた仰臥屈葬。頭位は北。両膝を東に向け，足先は南を向く。頭蓋は前後に長い。観察できる頭蓋３主縫合は外板がすべて閉鎖している。歯の咬耗はMartinの２°であり，これらを考えると年齢は熟年と推定される。

眉弓が突出し，右乳様突起と外後頭隆起が大きいことから，男性と判定される。頭蓋計測値を表３に示す。また頭蓋形態小変異の出現状況を表４に示す。

歯式は以下の通りである。

×	×	×	×	4	3	2	1		×	2	3	4	○	×	×	×
8	7	○	5	4	3	○	○		○	×	○	○	5	●	○	●

歯の咬耗はMartinの２～３°であり，年齢は熟年と推定される。冠状縫合は内板が完全に癒合している。矢状縫合は内外板が完全に癒合している。

上顎中切歯，犬歯の近遠心径が大きい。頭蓋が前後に長いことは，中近世人骨の特徴である。本人骨の上顎前歯の歯冠計測値は大きく，この特徴は渡来人の遺伝的影響を受けた弥生時代以降の日本列島の人々に共通する特徴である。

中世土坑墓13号出土人骨（性別不明・不明）

古銭が副葬されている。保存状態は悪い。１体のみが埋葬されている。埋葬姿勢は不明である。右側頭部が遺存するのみ。頭位は不明である。

中世土坑墓17号出土人骨（男性・壮年後期）

保存状態は悪い。１体のみが，仰臥位で埋葬されている。頭蓋と四肢の一部が遺存している。頭蓋は脳頭蓋の小破片と上下顎の歯が遺存している。右乳様突起が大きいことから，男性と判定される。

歯式は以下の通りである。

8	7	6	5	4	3	2	1		×	×	×	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	×	×	×		×	×	×	4	5	6	7	8

歯の咬耗はMartinの１～２°であり，年齢は壮年後期と推定される。

遺構No.3826出土人骨（女性・壮～熟年）

保存状態は悪い。１体のみが埋葬されている。右側頭骨周辺が遺存している。部位同定ができる，ある程度の大きさの骨片は右側頭骨のみ。右側頭骨乳様突起の大きさは小さいことから女性と判定される。歯は上顎右第一小臼歯のエナメル質（歯冠全体）が残るのみ。咬耗はMartinの１°であり，年齢は壮～熟年と推定される。上顎右第一小臼歯にう蝕もChippingも減形成もない。

近世土坑墓10号出土人骨（性別不明・壮年）

保存状態は悪い。１体のみ。埋葬姿勢は北頭位で仰臥屈葬。頭蓋（脳頭蓋と上下顎歯列）と四肢骨の一部が遺存する。歯列がバインダーで固められているため，遺存しているすべての歯を確認できない。咬耗はMartinの１°であり，年齢は壮年と推定される。性判定できる部位が遺存していないので，性別は不明である。

中世土坑墓９号出土人骨（男性・熟年）

全身が遺存するも，保存状態は悪い。埋葬姿勢は北頭位で仰臥屈葬位である。左肘は曲げており，左右の膝を軽く曲げた姿勢で埋葬されている。両膝は西に向いている。

頭蓋の右乳様突起が大きいこと，外後頭隆起が大きいことから男性と判定される。頭蓋の縫合は，ラムダ縫合の内外板が癒合している。矢状縫合も内板が癒合している。頭蓋形態小変異の出現状況を表４に示す。

歯は上顎左側の大臼歯３本が遺存している。これらの歯の咬耗がMartinの１～２°であり，年齢は熟年と推定される。

中世土坑墓３号出土人骨（女性・壮年）

保存状態は悪い。１体のみ。埋葬姿勢は不明。頭蓋の右乳様突起が小さいことから女性と判定される。右外耳道に骨腫なし。右の鼓室板にフシュケ孔なし。

歯式は以下の通りである。

・	・	・	・			・					・				
7	6	5	4			2					2				
7	6				3										
・	・				・										

歯の咬耗はMartinの１°であり，年齢は壮年と推定される。

中世土坑墓４号出土人骨（性別不明・年齢不明）

保存状態は悪い。１体のみ。埋葬姿勢は北頭位で仰臥位。頭蓋と下肢の一部が遺存する。性別も年齢も不明。右側頭骨に外耳道骨腫なし。フシュケ孔は出現していない。

中世土坑墓６号出土人骨（男性・熟年）

保存状態は悪い。１体のみ。頭蓋は左側面が上を向いた状態で出土。埋葬姿勢は仰臥屈葬。頭蓋の左右の乳様突起が大きく，外後頭隆起が大きいことから，性別は男性と判定される。歯は下顎右側の小臼歯２本と第一大臼歯が遺存する。咬耗はMartinの２°である。

左右の側頭骨に外耳道骨腫もフシュケ孔も出現していない。

近世土坑墓７号出土人骨（性別不明・年齢不明）

保存状態は悪い。１体のみ。埋葬姿勢は不明。頭蓋と下肢が遺存するも，骨紛状を呈する。性別も年齢も不明。

近世土坑墓３号出土人骨（性別不明・壮年）

保存状態は悪い。１体のみが埋葬されている。埋葬姿勢は両膝を曲げており，屈葬である。頭位は分からない。ほぼ全身残るも骨は細片化している。性判定が可能な部位が遺存していないため，性別は不明である。

歯式は次の通りである。

・	・	・	・	・	・	・	・		・	・	・	・			
8	7	6	5	4	3	2	1		4	5	6	7			
		6	5	4					4	5	6	7			
		・	・	・					・	・	・	・			

歯の咬耗はMartinの１～２°であり，年齢は壮年と推定される。

近世土坑墓４号土人骨（性別不明・年齢不明）

保存状態は非常に悪い。１体のみが埋葬されていると思われる。頭蓋は後頭部が遺存するも，性別の判定はできない。歯は下顎小臼歯の歯冠部が一部残る。咬耗がMartinの２°であることから熟年と推定される。埋葬姿勢は不明である。

近世土坑墓６号出土人骨（性別不明・年齢不明）

保存状態は非常に悪い。１体のみが埋葬されていると思われる。人骨は細片状に残るのみ。性別も年齢も不明である。埋葬姿勢も分からない。

近世土坑墓５号出土人骨（女性・壮年）

保存状態は悪い。１体のみ。埋葬姿勢は立て膝座位での埋葬。人骨はほぼ全身残るも，細片化してしまっている。右乳様突起が小さいことから女性と判定される。

歯式は以下の通りである。

・	・
2	7
4	
・	

歯の咬耗はMartinの１～２°であり，年齢は壮年と推定される。遺存している歯に，エナメル質減形成，う蝕やChippingは認められない。

近世土坑墓２号出土人骨（性別不明・年齢不明）

保存状態は非常に悪い。１体のみが埋葬されていると思われる。頭蓋と四肢が遺存するが，細片状態で遺存している。頭蓋は前頭骨から頭頂骨にかけての部分が残る。ブレグマの周辺も遺存している。観察できる冠状縫合も矢状縫合も内外板は癒合していない。性別も年齢も不明である。埋葬姿勢は仰臥屈葬である。

近世土坑墓１号出土人骨（性別不明・熟年）

保存状態は非常に悪い。１体のみが埋葬されていると思われる。頭蓋と四肢が遺存するが，細片状態で遺存している。頭蓋は頭頂骨から後頭骨にかけての部分が残る。観察できるラムダ縫合の外板の一部が癒合し始めていることから，年齢は熟年と判定した。性別は不明である。埋葬姿勢も分からない。

中世土坑墓11号出土人骨（性別不明・壮年？）

保存状態は非常に悪い。１体のみが埋葬されていると思われる。頭蓋が遺存するが，細片状態で遺存している。エナメル質が20片程度遺存している。その中に下顎大臼歯の咬合面が含まれ，その咬耗はMartinの１°であることから，壮年の可能性が考えられる。性別は不明である。埋葬姿勢も分からない。

芝原遺跡から出土した人骨の特徴

芝原遺跡から出土した人骨は23体に上る。中世から近世にかけての人骨が出土したため，当初，南九州の中近世期の人々の形質が解明されると期待されたが，保存の良いものはなく，結果的に十分な解明には至らなかった。

芝原の中世人で脳頭蓋の形態がある程度わかるものは，中世土坑墓18号から出土した熟年男性人骨だけであった。この人骨は，頭蓋の前後径が長く，日本列島の各地で出土する人骨と同様の特徴を示す。南九州で他に中世人骨が出土したのは，中世末期の人骨が多数出土した枕崎市の松之尾遺跡だけである。松之尾人も頭蓋の前後径は長く，頭蓋長幅示数は長頭であり，１例ではあるが今回の芝原の例を加え，中世の南九州の人々の頭蓋が長いことの蓋然性がさらに増したといえる。

芝原遺跡から出土した中近世人骨は，南九州では非常に貴重な中世人骨を含む資料であり，今後も折に触れて参照される古人骨資料となるはずである。

表１　芝原遺跡人骨一覧

遺構番号	性別	年齢	人骨の年代	墓の種類	木棺の有無	副葬品	備考
中世土坑墓12号	女性	壮年	近世	土坑墓		洪武通宝6（うち鉄銭3）	
中世土坑10号	?	熟年	不明	巨大土坑			
中世土坑墓８号	女性	熟年	中世	土坑墓		洪武通宝2ほか5	
中世土坑墓７号	男性	熟年	近世	土坑墓	**木棺あり**	洪武通宝2青白磁皿4（加治木銭4）	
No.2397	?	熟年	不明	土坑墓			
中世土坑墓18号	男性	熟年	中世	土坑墓		洪武通宝2	
中世土坑墓13号	?	?	中世	土坑墓		洪武通宝1，朝鮮通宝1ほか5	
中世土坑墓17号	男性	壮年後期	中世	土坑墓	**木棺あり**	土師器2，染付土師器ほか4付着，洪武通宝1ほか付着	
No.3826	女性	壮～熟年	不明	土坑墓			溝に散乱，首に鉄の首飾り
近世土坑墓10号	?	壮年	不明	土坑墓			
中世土坑墓９号	男性	熟年	近世	土坑墓	**木棺あり**	洪武通宝6（加治木銭2），不明銭1	
中世土坑墓３号	女性	壮年	近世	土坑墓	**木棺あり**	洪武通宝ほか6（加治木銭）	
中世土坑墓４号	?	?	中世	土坑墓	**木棺あり**	洪武通宝1ほか古銭2，布痕付着	
中世土坑墓６号	男性	熟年	中世以降	土坑墓			埋土に近世陶器あり
近世土坑墓７号	?	?	中世以降		**木棺あり？**		
近世土坑墓３号	?	壮年	不明	土坑墓	**木棺あり**		
近世土坑墓４号	?	?	不明	土坑墓			
近世土坑墓６号	?	?	不明	土坑墓	**木棺あり**		
近世土坑墓５号	女性	壮年	近世	土坑墓	**木棺あり**		（座棺）
近世土坑墓２号	?	?	近世	土坑墓		寛永通宝3	
近世土坑墓１号	?	熟年	近世	土坑墓		洪武通宝2（鉄分多）	

表２　芝原遺跡出土人骨の顔面平坦度計測値（㎜）及び示数

人骨番号	芝原中世土坑墓７号
性別	男性
年齢	熟年
鼻骨弦	6.5
鼻骨左辺	4.0
鼻骨右辺	4.3
鼻骨垂線	2.6
鼻骨平坦示数	39.7

表３　芝原遺跡出土人骨の頭蓋計測値（㎜）及び示数

M　No.	人骨番号	芝原中世土坑墓18号
	性別	男性
	年齢	熟年
1	頭蓋最大長	189
3	グラベロラムダ長	180
48	上顔高	71

表４　芝原遺跡出土人骨の頭蓋形態小変異の出現状況

	遺構番号 性　別 年　齢	芝原 中世土坑墓７号 男性 熟年		芝原 中世土坑墓18号 男性 熟年		芝原 中世土坑墓９号 男性 熟年		芝原 中世土坑墓12号 女性 壮年		芝原 中世土坑墓８号 女性 熟年	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1	ラムダ小骨										
2	ラムダ縫合骨										
3	インカ骨										
4	横後頭縫合痕跡									—	
5	アステリオン小骨									—	
6	後頭乳突縫合骨									—	
7	頭頂切痕骨										
8	頭頂孔										
9	冠状縫合骨										
10	前頭縫合残存			—							
11	眼窩上神経溝										
12	眼窩上孔										
13	前頭孔										
14	二分頬骨										
15	横頬骨縫合痕跡										
16	頬骨顔面孔欠如										
17	口蓋隆起										
18	内側口蓋管骨橋										
19	外側口蓋管骨橋										
20	歯槽口蓋管										
21	顆管欠如										
22	後頭顆前結節										
23	第３後頭顆										
24	後頭顆旁突起										
25	舌下神経管二分										
26	頸静脈孔二分										
27	偏側頸静脈孔優位										
28	外耳道骨瘤	—		—		—		—	—	—	
29	フシュケ孔							—	—	—	
30	ベサリウス孔									—	
31	卵円孔形成不全										
32	棘孔開裂										
33	翼棘孔										
34	床状突起間骨橋										
35	左側横洞溝優位										
36	鱗状縫合骨										
37	矢状縫合骨										
38	プレグマ小骨										
39	後頭顆二分										
40	副オトガイ孔										
41	下顎隆起										
42	顎舌骨筋神経管										
43	副下顎管										



図１．南さつま市芝原遺跡出土中世土坑墓18号人骨（男性・熟年）頭蓋正面観



図２．南さつま市芝原遺跡出土中世土坑墓18号人骨（男性・熟年）頭蓋右側面観

第３節

芝原遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

芝原遺跡は，万之瀬川右岸の自然堤防上に位置し，縄文時代後期・晩期から近世にわたる複合遺跡である。今回の発掘調査により，古代以降の遺構が検出されているが，中でも中世の遺構が多く，溝状遺構・柱穴・土坑・掘立柱建物跡・製鉄関連遺構・畠跡・方形竪穴遺構・竈などが検出されている。また，中世の遺構に伴う遺物として，青磁・白磁・土師器・須恵器・刀子・天目・鉄滓・合子蓋・古銭・備前焼・滑石製石鍋・石鍋の２次加工品・鞴の羽口などが出土する。

今回はこれらの中世の遺構を対象として，以下の分析調査を実施した。

１）竈跡・土坑・鍛冶炉・焼土塊内から採取された炭化材の放射性炭素年代測定と炭化材同定を行い，各遺構の年代資料と燃料材に関する情報を得る。

２）焼失住居出土の炭化材と繊維状炭化物について灰像分析を行い，住居構築材に関する情報を得る。

３）土坑埋積土のリン分析を行い，遺体埋納の可能性について検討する。

１．試料

試料は，中世とされる各遺構内から採取された炭化材８点，繊維状炭化物２点，土坑の埋積土１点である。試料には便宜的に試料番号１～11を設定した。この内，炭化材７点（試料番号１～７）と繊維状炭化物１点（試料番号９・10を一括したもの）について放射性炭素年代測定，繊維状炭化物１点（試料番号９）について灰像分析，土壌１点（試料番号11）についてリン分析，炭化材７点（試料番号１～４・６～８）と繊維状炭化物１点（試料番号10）について炭化材同定を実施する。試料採取遺構と分析項目の一覧を，表１に示す。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は，株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお，試料番号１～４・６～９の８点はβ線計数法，試料番号５の１点は加速器質量分析法（AMS法）で測定する。

（２）灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は，珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は，ほとんどが土壌化や撹乱などの影響によって分離し単体となるが，植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば，パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）。そのため，珪化組織片の産状により，当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

試料には土壌が付着していたため除去したが，内部に入り込んだものまでは除去できなかった。また，灰像の観察に障害となる有機物が含まれていた。そのため，試料を過酸化水素水・塩酸処理で漂白・灰化した。これを400倍の光学顕微鏡下で観察する。

イネ科葉部（葉身と葉鞘）に由来した植物珪酸体を包含する珪化組織片を，近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて調べる。

（３）リン分析

硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法によ

表１　分析試料一覧

試料番号	グリッド	遺構番号	遺構種類	備　　考	試料の質	分析項目			
						^{14}C	灰像	リン	W
1	E-15	4206	竈跡		炭化材	●			●
2	B-23	中世かまど跡13号	竈跡	発掘調査所見では古代?	炭化材	●			●
3	D-15	中世かまど跡29号	鍛冶炉		炭化材	●			●
4	C-15	近世焼土跡２号	焼土塊		炭化材	●			●
5	A-18	中世土坑墓12号	土坑		炭化材	●			
6	D-15	中世かまど跡28号	炉跡		炭化材	●			●
7	E-15	中世かまど跡24号	竈跡	Ⅳ層上面検出遺構の床面下出土	炭化材	●			●
8	D-24	中世竪穴建物２号	住居	焼失住居跡	炭化材				●
9					繊維状炭化物	●	●		
10					繊維状炭化物				●
11	D-15	773	土坑		土壌			●	

※^{14}C：放射性炭素年代測定　灰像：灰像分析　リン：リン分析　W：炭化材同定

り，土壌中の全リン酸を測定する（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に，各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後，軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃，５時間）により，測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し，はじめに硝酸（HNO_3）約５mlを加えて加熱分解する。放冷後，過塩素酸（$HClO_4$）約10mlを加えて，再び加熱分解を行う。分解終了後，水で100mlに定容し，ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し，リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から，乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）を求める。

（４）炭化材同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し，実体顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し，種類を同定する。

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

結果を表２に示す。出土炭化材の同位体補正年代値は，試料番号１・３・４・７が約700年～800年前の12～13世紀中頃，試料番号２が約1400年前の６世紀中頃，試料番号５が約300年前の17世紀中頃，試料番号６が約3500年前，試料番号９・10を一括したものが約2100年前の弥生時代前期に相当する値を示す。なお，九州地方では，約3500年前は，縄文時代中期末～後期初頭に相当する（キーリ・武藤，1982）とされている。

なお，δ13Cの値は，質量分析器または加速器を用いて試料炭素の13C濃度（13C／12C）を測定し，標準試料PDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）の測定値を基準として，それからのずれを計算し，千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は，この値に基づいて補正をした年代である。

（２）灰像分析

植物繊維からは，特徴的な形態を有する植物珪酸体を含まない不明組織片が見られる。また，繊維以外にも栽培植物であるイネ属の葉部に形成される短細胞列，およびススキ属やウシクサ族の植物珪酸体も検出される。

（３）リン分析

分析結果を表３に示した。対象とした試料には多量の砂が含まれることから，土性はＳ（砂土）に区分される。また，土色が2.5Y5/4と黄褐色を呈することから，腐植含量も僅かであると予想される。このことから，本土壌の持つ吸着能（成分保持能）は著しく低いものと考えられたが，分析結果ではリン酸含量は4.29P_2O_5mg/gと予想とは異なる高い値が得られた。

（４）炭化材同定

樹種同定結果を表２に示す。試料番号７は，道管を有することから広葉樹材であるが，保存状態が悪いために樹種の同定には至らなかった。その他の炭化材は，広葉樹５種類（コナラ属アカガシ亜属・サクラ属・イスノキ・ゴンズイ・アワブキ属），繊維状炭化物はイネ科タケ亜科に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で，管壁厚は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

散孔材で，管壁厚は中庸，横断面では角張った楕円形，単独または２～８個が複合，晩材部へ向かって管径を漸

表２　放射性炭素年代測定および炭化材同定・灰像分析結果

試料番号	試料の質	樹　種	補正年代 BP	δ13C（‰）	測定年代 BP	Code.No.	測定法
1	炭化材	ゴンズイ	760±110	−29.4	830±110	IAA-31	β線
2	炭化材	イスノキ	1380±100	−28.9	1440±100	IAA-32	β線
3	炭化材	サクラ属	700±60	−25.5	710±60	IAA-33	β線
4	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	690±90	−27.8	740±90	IAA-34	β線
5	炭化材		300±30	−27.5±0.6	340±30	IAAA-10169	ＡＭＳ
6	炭化材	イスノキ	3520±140	−27.9	3570±140	IAA-35	β線
7	炭化材	広葉樹（散孔材）	820±60	−26.4	840±60	IAA-36	β線
8	炭化材	アワブキ属					
9	繊維状炭化物	イネ属・ススキ属・ウシクサ族	2070±100	−15.0	1910±100	IAA-40	β線
10	繊維状炭化物	イネ科タケ亜科					

表３　リン分析結果

グリッド	遺　構　名	土　性	土　　色	P_2O_5(mg/g)
D-15	中世土坑19号	S	2.5Y5/4 黄褐	4.29

注.
（１）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（２）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
S…砂土（粘土０～５%，シルト０～15%，砂85～100%）

減させながら散在する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型，１～３細胞幅，１～30細胞高。

・イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）マンサク科イスノキ属

散孔材で，道管は横断面で多角形，ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有するが，段数は５前後で少ない。放射組織は異性Ⅱ型，１～３細胞幅，１～20細胞高。柔組織は，独立帯状または短接線状で，放射方向にほぼ等間隔に配列する。

・ゴンズイ（*Euscaphis japonica*（Thunb.）Kanitz）ミツバウツギ科ゴンズイ属

散孔材で，道管は横断面で円形，単独または２～３個が複合して散在し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し，壁孔は交互状～対列状に配列する。放射組織は，異性Ⅰ～Ⅱ型，単列で１～20細胞高前後の組織と，５～10細胞幅，20～60細胞高の組織とがある。

・アワブキ属（*Meliosma*）　　アワブキ科

散孔材で，管孔は単独または２～６個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し，階段穿孔の段数は５前後で少ない。壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型で，異性Ⅱ型，１～３細胞幅，１～50細胞高。

本地域に生育するアワブキ属には，常緑性のヤマビワと落葉性のアワブキがある。組織の特徴からは，常緑性のヤマビワの可能性がある。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

試料は円柱状で，中空となる。横断面では維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ，放射組織は認められない。

４．考察

（１）遺構の年代について

放射性炭素年代は，測定法自体が持つ誤差や，測定の前提条件である大気中の^{14}Cの濃度が過去において一定ではなかったことなどから，年輪などから測定された，いわゆる暦年代とは一致しない。これらのことから，年輪年代による暦年代既知の年輪についての放射性炭素年代測定を実施することで，暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている（Stuiver，M. et al，1998）。この補正曲線によれば，補正された暦年代のばらつきが大きい場合がある。今回測定された年代値では，12～13世紀中頃の値（試料番号１・３・４・７）や６世紀中頃の値（試料番号２）が約50年～150年新しい年代へ，約300年前の17世紀中頃の値（試料番号５）が約100年古い年代へずれる。また，縄文時代中期末～後期初頭に相当する値（試料番号６）が約160年～260年古い年代へ，弥生時代前期に相当する値（試料番号９・10一括）が約50年～150年古い年代へずれる。

これらのことを考慮すると，今回試料とした炭化材の測定年代値の傾向は，１）縄文時代中期（試料番号６），２）弥生時代前期（試料番号９・10一括），３）７世紀中頃（試料番号２），４）13世紀～14世紀頃（試料番号１・３・４・７），５）16世紀中頃～17世紀中頃（試料番号５）に大別される。

これらのうち，中世かまど跡13号出土炭化材（試料番号６）と中世竪穴建物２号出土炭化物（試料番号９・10一括）の測定年代値は，考古学的所見よりもかなり古い。炭化物の年代値はもととなった植物の死滅した年代値であり，出土層の堆積年代や出土遺構の構築年代と必ずしも一致するとは限らない。中世かまど跡13号出土炭化材と中世竪穴建物２号出土炭化物の場合は，過去に形成された炭化材が，遺構埋積時に混入したものである可能性もある。本遺跡では縄文時代後期からの遺構・遺物が検出されていること，万之瀬川の氾濫堆積物も確認されており，物理的な撹乱の影響を受ける堆積層が存在することなどは，この可能性を支持する。ただし，出土炭化材（試料番号６・９）はかまど跡と中世竪穴建物２号から出土したことから，当時の燃料材や住居構築材の一部と考えられる。したがって，古材の使用なども想定されるが，住居構築材の一部とみられる繊維状炭化物については，このような状況も想定しにくく，現状ではその原因について不明と言わざるを得ない。今後さらに類例の蓄積をはかり，再検討したい。

中世かまど跡13号出土炭化材（試料番号２）は，７世紀中頃の年代値を示し，本遺構が他の中世の遺構よりも古いとする発掘調査所見と一致する。ただし，現時点ではこれ以上の詳細な年代の検討はできない。

それぞれ異なる遺構から採取された，遺構4206出土炭

化材（試料番号１）・中世かまど跡29号出土炭化材（試料番号３）・近世焼土跡２号出土炭化材（試料番号４）・中世かまど跡24号床面下出土炭化材（試料番号７）は，後述の炭化材同定結果より，すべて異なる樹種である。しかし，これらの測定年代値は，概ね13世紀～14世紀頃に揃う。特に，中世かまど跡24号では遺構床面下から測定試料が採取されていることから，炭化材の年代値が遺構の構築年代を示唆する可能性が高い。よって，これらの遺構や焼土は13世紀～14世紀頃の中世に構築・形成されたと考えられ，発掘調査所見と調和的な結果と言える。

中世土坑墓12号出土炭化材（試料番号５）は，16世紀中頃～17世紀中頃の年代を示す。よって，前述の遺構4206・中世かまど跡29号・近世焼土跡２号・中世かまど跡24号より新しい時期に，中世土坑墓12号が構築された可能性がある。しかし，本遺跡は近世の遺構・遺物が確認されていることから，中世土坑墓12号の構築時期は前述の中世の土坑と同じであり，炭化材は後代のものが混入した可能性もある。

以上，各遺構の年代について検討したが，中には相反する可能性を呈示したものもあった。今後これらの各遺構のより詳細な年代の特定のためには，各遺構についてより多くの測定例を蓄積することと，炭化材の詳細な出土状況の検討など，考古学的な所見と合わせて評価することが望まれる。

（２）炭化材について

炭化材は，炉跡や竈跡から出土したものや焼土塊に付着していたものであり，燃料材などの一部が炭化・残存したと考えられる。これらの炭化材は，種類不明の１点を除いて，５種類の木材とタケ亜科が認められた。この中には，アワブキ属など，住居構築材として適材とはいえない種類も見られることから，木材は遺跡周辺で入手可能な種類を利用していた可能性がある。利用されている種類の違いは，各遺構別の用材の違いを反映している可能性があるが，試料数が少ないため詳細は不明である。

出土した種類のうち，アカガシ亜属とイスノキは，暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の構成種であり，常緑性のアワブキ属（ヤマビワ）も同林内に生育する。一方，サクラ属とゴンズイは，常緑広葉樹林を伐採した跡の二次林内に生育する種類である。これらの種類は，本地域の潜在自然植生（宮脇，1981）等とも調和的である。これらの結果から，遺跡周囲には常緑広葉樹を主とした植生が見られ，その伐採跡や集落周辺などの陽地には，サクラ属やゴンズイなどの生育する二次林が成立していたことが推定される。

（３）繊維状炭化物について

灰像分析の結果，炭化した植物繊維からは不明組織片が認められたに過ぎず，種類の特定には至らない。しかし，イネ属の葉部に形成される短細胞列，およびススキ属やウシクサ族の植物珪酸体も検出された。これは，除去しきれなかった土壌に由来するものと思われる。炭化した植物繊維が中世竪穴建物２号から採取されたことを考慮すれば，付着した土壌は炉跡埋積土に由来する可能性がある。炉跡埋積土は，炉跡で利用された燃料材の痕跡を残すものと思われることから，検出されたイネ属の葉部に形成される短細胞列は，イネ属の植物体（稲藁）が燃料材のひとつとして利用されたことを反映する可能性がある。

また，ススキ属を含むウシクサ族は人里の周囲に普通に生育する植物であり，当時の植生を反映するものと思われる。しかし，古くから燃料材としても利用されており，この炉跡でも利用された可能性も否定できない。

（４）土坑埋積土について

土壌中に普通含まれるリン酸量，いわゆる天然賦存量については，いくつかの報告事例があるが（Bowen，1983；Bolt･Bruggenwert，1980；川崎ほか，1991；天野ほか，1991），これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg/g程度である。また，人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P_2O_5mg/g（川崎ほか，1991）という報告例がある。さらに遺構覆土に骨片などが認められたときの分析事例では6.0～10.0P_2O_5mg/gの高い場合も多い。

今回対象とした中世土坑19号埋積土のリン酸含量は上記の天然賦存量を明らかに越えており，かつ岩質から予想される値を超えた値であった。したがって，今回の分析結果は覆土土壌に骨片などリン酸成分の高い物質が濃集していることを示唆する結果と捉えられ，遺体埋納の可能性を裏付ける根拠の一つと考えられる。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』，p.28-36.

Bowen, H. J. M.（1983）『環境無機化学　－元素の循環と生化学－』．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen, H. J. M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

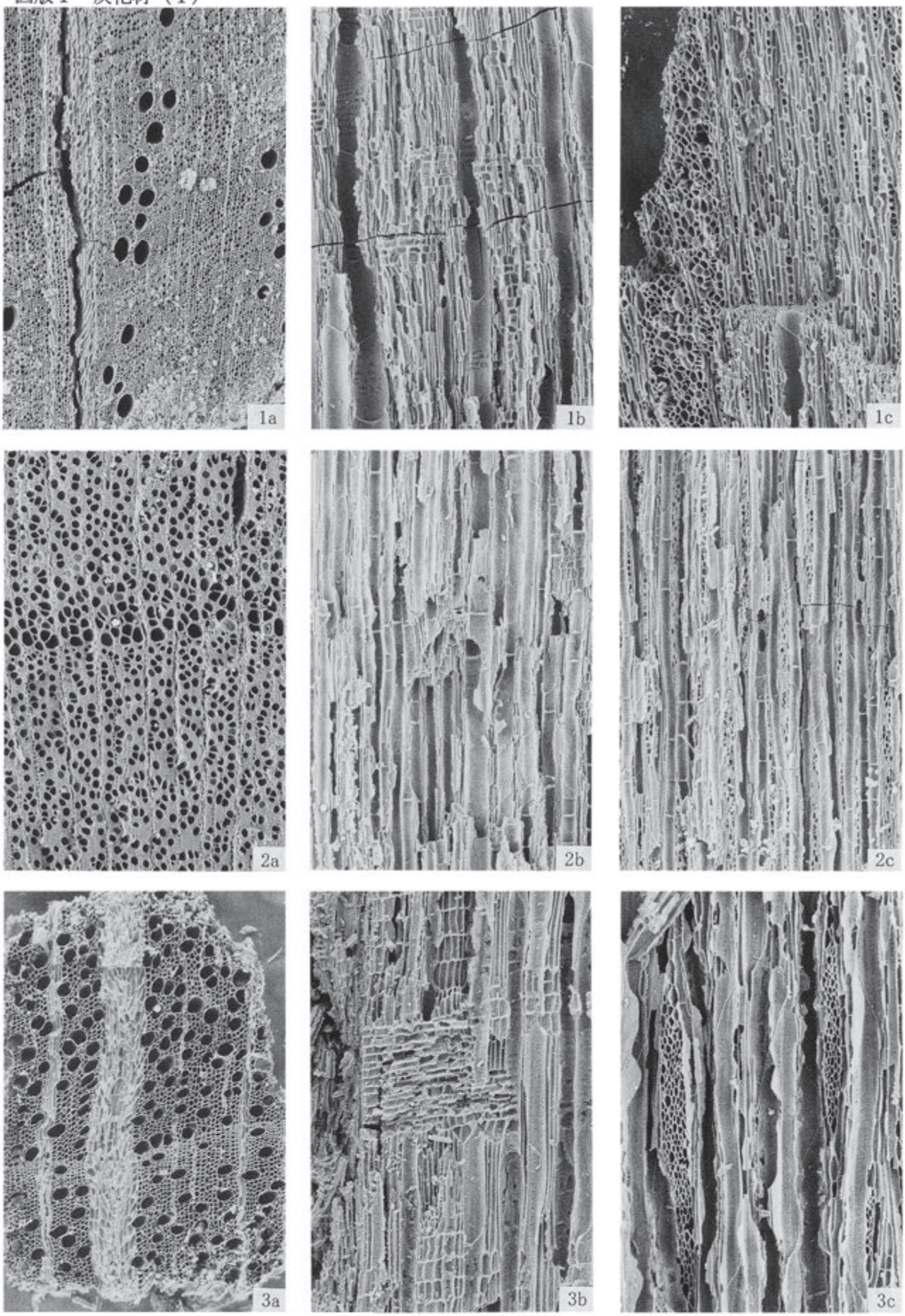
Bolt，G．H．・Bruggenwert, M. G. M.（1980）『土壌の化学』．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309p.,学会出版センター［Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1976）SOIL CHEMISTRY］，p.235-236.

土壌養分測定法委員会編（1981）『土壌養分分析法』．440p.，養賢堂.

川崎　弘・吉田　潔・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開

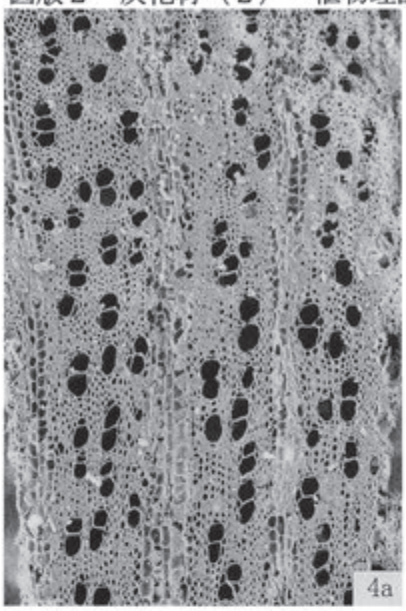
発』，149p．：p．23-27.
キーリ C. T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代，「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」，p．246-275．雄山閣.
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p．31-64.
宮脇　昭編（1981）日本植生誌　九州．484p．，至文堂.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析からみた人々の生活（1）．慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第 1 巻 総論」，p．347-370，慶應義塾.
ペドロジスト懇談会編（1984）『土壌調査ハンドブック』．156p，．博友社.
Stuiver, M. Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) : INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24, 000-0calBP. Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.

図版1　炭化材（1）

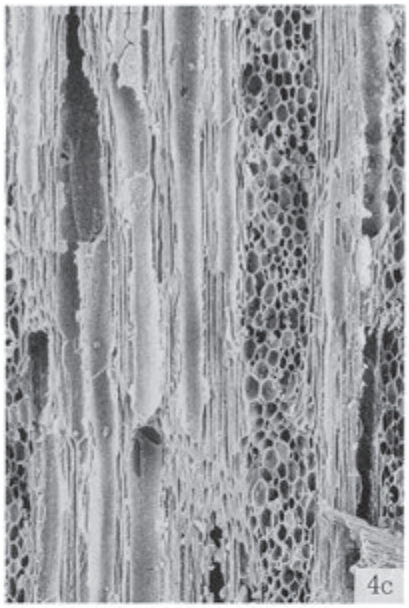


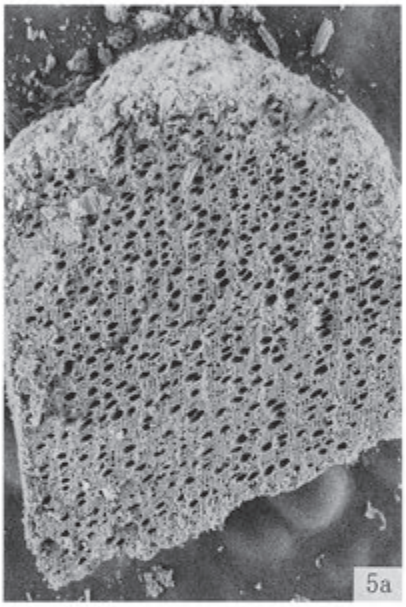
1. コナラ属アカガシ亜属（試料番号4）
2. サクラ属（試料番号3）
3. ゴンズイ（試料番号1）
   a：木口，b：柾目，c：板目

図版２　炭化材（２）・植物珪酸体

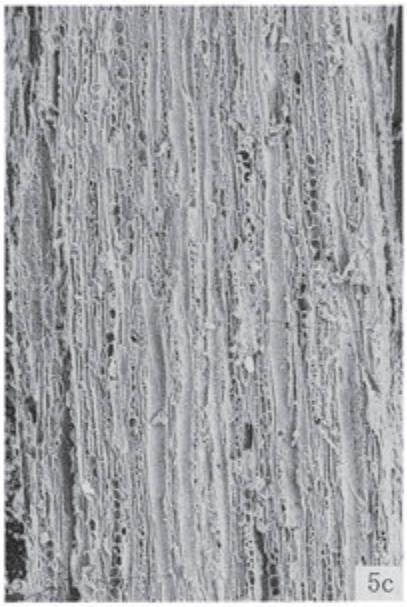


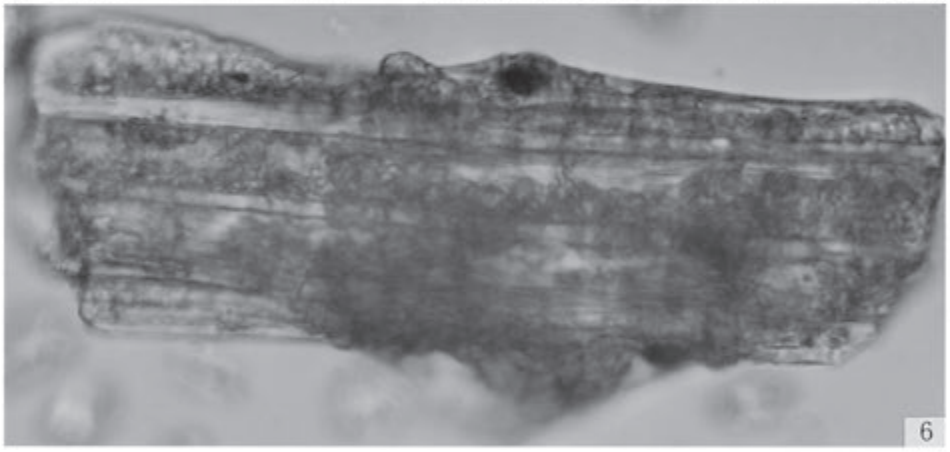




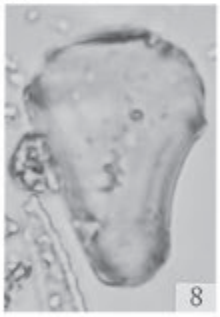












200 μ m;1-5a
200 μ m;1-5b, c
10 μ m;6-8

4. アワブキ属（試料番号8）a：木口，b：柾目，c：板目
5. イスノキ（試料番号6）a：木口，b：柾目，c：板目
6. 不明組織片（試料番号12）
7. イネ属短細胞列（試料番号12）
8. ウシクサ属機動細胞珪酸体（試料番号12）

第４節

芝原遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡は，万之瀬川右岸の自然堤防上に位置し，縄文時代後・晩期から近世にわたる複合遺跡である。中でも中世では，溝状遺構，掘立柱建物跡，土坑，製鉄関連遺構，畠跡などが検出されている。特に畠跡は，詳細な時代は不明であるが，３層準で検出されている。

今回は，畠跡の年代観を検討するため放射性炭素年代測定を，作物に関する情報を得るために花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。また，寄生虫卵の密度から糞便の堆積を検出できるとされる（黒崎ほか，1994）ことから，糞便などの施肥が行われていたか寄生虫卵分析で検証する。

１．試料

調査区内の層序は，上位よりⅠ層，Ⅱａ層，Ⅱｂ層，Ⅲ層～Ⅶ層に分層され，Ⅵ層が縄文時代後晩期の包含層，Ⅲ層が古墳時代・古代・中世の包含層，Ⅱｂ層が万之瀬川の洪水による氾濫性堆積物，Ⅱａ層が中世包含層とされている（図１）。現地調査時にはⅢ層までの発掘調査が終了し，Ⅲ層上面，Ⅱｂ層上面，Ⅱａ層上面で中世と推定されている畠跡が検出された。なお，縄文時代後期の遺物出土地点付近を拡張して，Ⅵ層の遺物の広がりも確認されている。

試料は，Ｄ－15東壁およびＢ－14から採取した。Ｄ－15東壁では，Ⅱａ層上面畠・Ⅱｂ層上面畠が検出されており，Ⅰ層下部からⅢ層までの合計５点の土壌試料を採取した。Ｂ－14ではⅢ層上面畠が検出されており，このⅢ層から土壌試料１点が採取された。これら土壌試料の中で，Ｄ－15東壁試料番号２・４，Ｂ－14Ⅲ層の３点について花粉分析・寄生虫卵分析・植物珪酸体分析を実施する。

この他，Ⅱａ層・Ⅱｂ層・Ⅲ層から出土した炭化材が採取されており，放射性炭素年代測定を実施した。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は，学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。なお，放射性炭素の半減期として，LIBBY の半減期の5570年を使用している。

（２）花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し，水酸化カリウム処理，篩別，重液分離（臭化亜鉛，比重2.3），フッ化水素酸処理，アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に

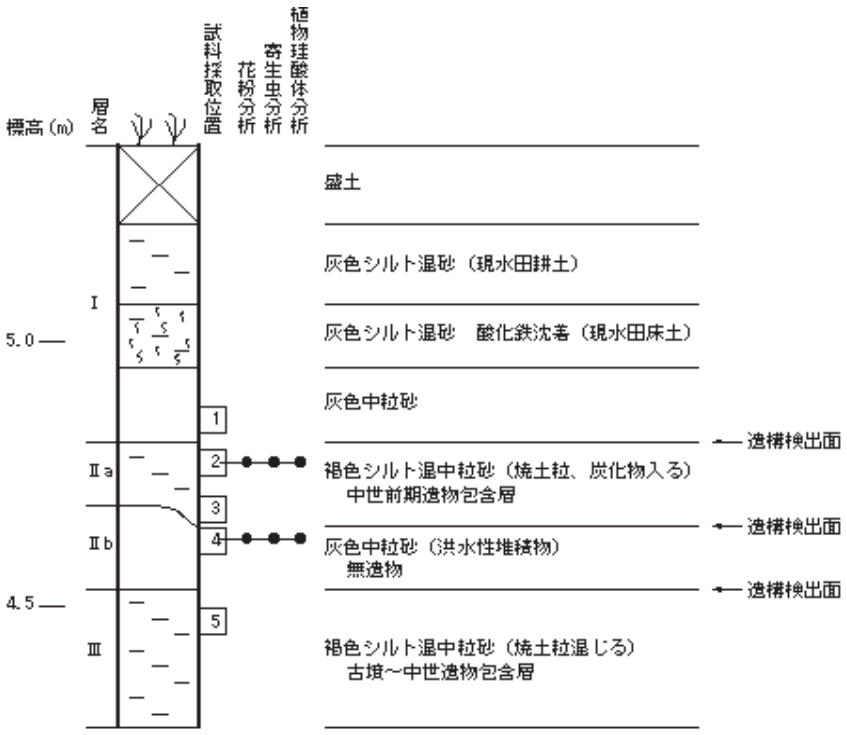


図１　Ｄ－15東壁の模式柱状図

凡例
砂　酸化鉄
シルト

物理・化学的な処理を施して，花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し，出現する全ての種類について同定・計数を行う。

（3）寄生虫卵分析

試料を15ccを秤とり，湿重・乾重を正確に測定する。これについて水酸化カリウム処理，篩別，重液分離の順に物理・化学的な処理を施して寄生虫卵を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する寄生虫卵について，同定・計数する。なお，残渣量とプレパラートを作成する際に供した量を測定し，堆積物１cc当たりの検出個体数を求められるようにする。

（4）植物珪酸体分析

試料を湿重約５ｇ秤量し，過酸化水素水・塩酸処理，超音波処理（70W，250KHz，１分間），沈定法，重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して，カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入し，プレパラートを作製する。これを400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ），および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は，検出される種類とその個数の一覧表と植物珪酸体群集の変遷図で表示する。各種類の出現率は，短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも珪酸体毎に，それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

３．結果

（1）放射性炭素年代測定

結果を表１に示す。測定の結果，Ⅱａ層上面畠出土炭化材が290 ± 50 B.P.，Ⅱｂ層上面畠出土炭化材が700 ± 80B.P.，Ⅲ層上面畠出土炭化材が2240 ± 80B.P.であった。

（2）花粉分析

Ｄ－15東壁試料番号２でシダ類胞子１個，Ｂ－14Ⅲ層でイネ科２個とヨモギ属１個が検出された程度である。これらの化石は保存状態が著しく悪く，外膜が溶けて薄くなっていたり，壊れている。

（3）寄生虫卵分析

寄生虫卵は，全く検出されなかった。

（4）植物珪酸体分析

結果を表２，図２に示す。植物珪酸体は，３試料とも豊富に検出される。植物珪酸体群集は，各試料とも類似する。すなわち，タケ亜科が多産し，イネ属・キビ族・ススキ属・イチゴツナギ亜科を伴う。また，組織片として，イネ属短細胞列なども検出される。この他，広葉樹の葉部に形成される植物珪酸体で，近藤・ピアスン（1981）で報告された第Ⅲグループに属する珪酸体も検出される。

４．考察

（1）畠跡の年代観

Ⅲ層で出土した炭化材は，2240 ± 80B.P.の弥生時代に相当する年代測定値が得られたが，本層準では古墳～中世の遺物が検出されている。したがって，本試料はⅢ層堆積時（弥生時代）に形成され，古墳時代以降に畠として耕作された可能性もある。よって，この炭化材で得られた年代値が，畠跡の時代を直接示すものでない可能性もある。

一方，Ⅱｂ層およびⅡａ層における放射性炭素年代測定値は，前者が約700年前，後者が約300年前であった。誤差範囲を含めて考えると，Ⅱｂ層が中世初期，Ⅱａ層が中世末期～近世初頭の頃の可能性があり，考古学的所見とほぼ調和する。

（2）栽培植物の検証

畠跡の堆積物からは，花粉化石がほとんど検出されな

表１　放射性炭素年代測定結果

試料	質	同位体補正年代	$\delta^{14}C$（‰）	$\delta^{13}C$（‰）	$\Delta^{14}C$（‰）	測定番号
Ⅱａ層上面畠	木炭	290±50	−43　±6.3	−28.6	−36.1±6.3	Gak-20649
Ⅱｂ層上面畠	木炭	700±80	−95.3±8.9	−30.9	−84.6±8.9	Gak-20650
Ⅲ層上面畠	木炭	2240±80	−253.2±7.9	−35.2	−244.1±7.9	Gak-20651

注１）年代値：1,950年を基点とした値
注２）誤差：標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代
注３）$\delta^{14}C$：放射線の測定で求めた試料炭素中の14C濃度Aと現在の炭素の標準濃度A(std)を用いて
$\delta^{14}C=[(A-A(std)/A(std)]\times1000$　により算出された値
$\delta^{13}C$：試料炭素の13C／14C原子比を質量分析器で測定し，標準にPDBを用いて同様に算出した値
$\Delta^{14}C$：試料炭素が$\delta^{13}C$=−25.0‰であったときの14C濃度を計算した値

表２　植物珪酸体分析結果

種類	D-15		B-14
試料番号	2	4	Ⅲ層
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	22	14	14
キビ族	10	10	8
タケ亜科	95	152	123
ウシクサ族コブナグサ属	3	2	4
ウシクサ族ススキ属	29	8	27
イチゴツナギ亜科	25	21	22
不明キビ型	22	12	19
不明ヒゲシバ型	12	10	7
不明ダンチク型	14	6	6
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	15	8	12
キビ族	2	－	4
タケ亜科	128	97	126
ヨシ属	1	－	－
ウシクサ族	21	13	27
シバ属	2	－	10
不明	12	12	11
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	232	235	230
イネ科葉身機動細胞珪酸体	181	130	190
総　計	413	365	420
組織片			
イネ属短細胞列	10	3	2
ススキ属短細胞列	－	1	－
不明組織片	2	－	－
その他			
樹木起源Ⅲ	6	5	－

かった。これは，遺跡の立地条件や堆積物が透水性の良い砂が主体であることから，堆積後に地下水位が低下して好気的な条件下となり，そのため化学的な酸化や土壌微生物の影響などによって，花粉化石が分解したとみられる。このように，今回の花粉化石の産状から栽培作物に関する情報を得ることはできない。一方，植物珪酸体では，短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに出現率は低率であったが，イネ属が検出された。特に短細胞珪酸体列が検出されることから，イネ植物体の存在が示唆される。この理由として，保温・保湿として敷き藁が行われていた，稲藁堆肥が利用されていた，陸稲栽培が行われていたなどが考えられる。現状では断定できないが，この畠跡ではかつてイネが栽培あるいは利用されていたことが伺える。また，ヒエ・キビ・オオムギなどを含む分類群が検出されないことから，本遺構でこれらの種類が栽培されていた可能性は低い。なお，隣接する持躰松遺跡でも，同様な傾向が得られており（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表），類似した土地利用状況が広がっていたのかもしれない。この点については，より多角的に検証を進めていく必要があり，今後の課題として残される。

また，寄生虫卵も花粉化石と同様に有機膜で構成されているために，好気的な条件で分解することが考えられる。このため，糞便等が施肥されていたか検討することは不可能である。糞便堆積物が施肥された場合，リン酸の成分含量が高くなることや特定のステロールなどが検出されることが予想される。今後土壌理化学分析や脂肪酸分析を実施することで，間接的にではあるがさらにこの点について検証できるものと思われる。

引用文献

近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）　双子葉被子植物　樹木葉の植物ケイ酸体について．帯広畜産大学研究報告，12，

p.217-229.
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.
黒崎　直・松井　章・金原正明・金原正子（1994）トイレの考古学．日本考古学協会第60回総会研究発表要旨集，p.49-51．日本考古学協会.

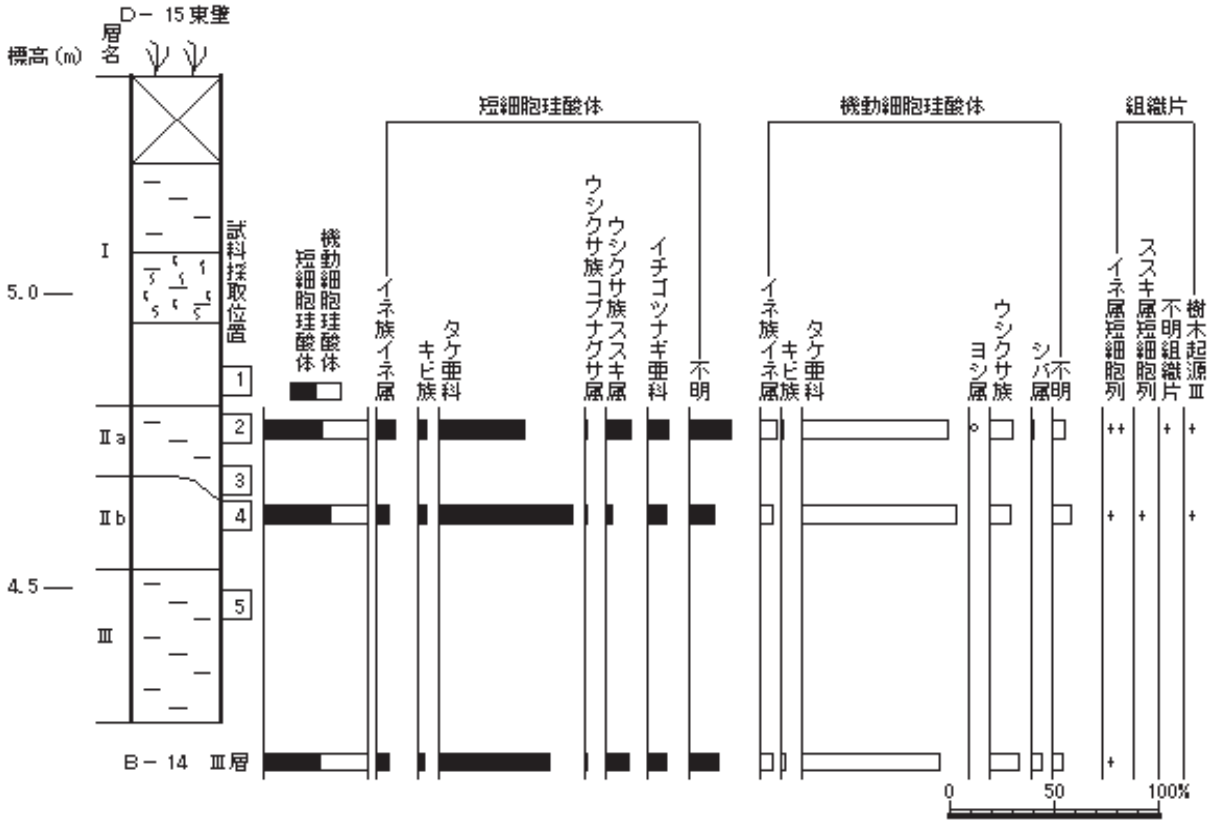
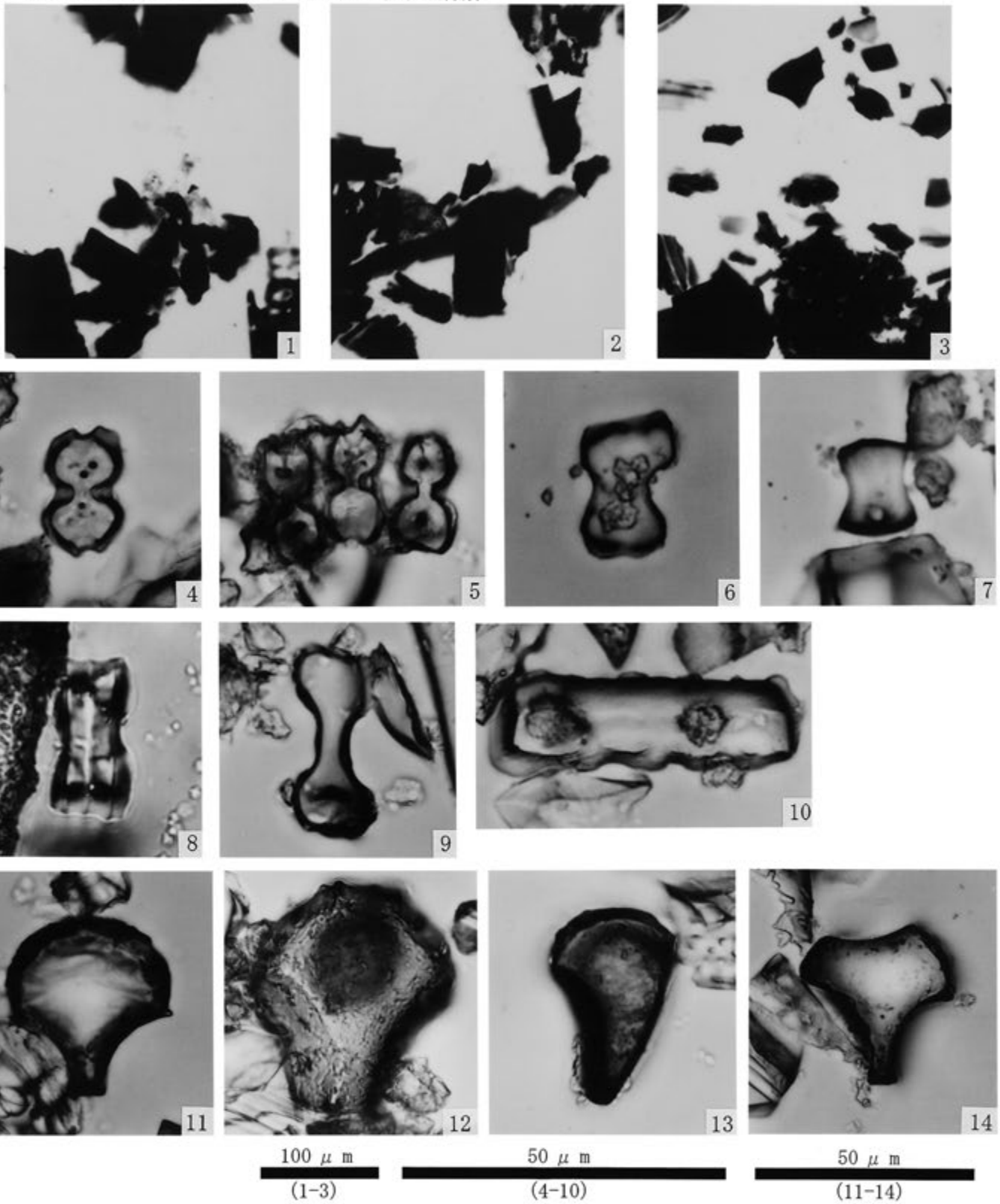


図2　植物珪酸体群集と組織片の産状
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。また、組織片の産状を検出個数により＋の記号で示す。

図版　花粉分析プレパラート内の状況写真・植物珪酸体



1．状況写真(D-15東壁;2)
2．状況写真(D-15東壁;4)
3．状況写真(B-14;Ⅲ層)
4．イネ属短細胞珪酸体(D-15東壁;2)
5．イネ属短細胞珪酸体列(D-15東壁;2)
6．キビ族短細胞珪酸体(D-15東壁;2)
7．タケ亜科短細胞珪酸体(D-15東壁:2)
8．コブナグサ属短細胞珪酸体(D-15東壁;2)
9．ススキ属短細胞珪酸体(D-15東壁;2)
10．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(D-15東壁;2)
11．イネ属機動細胞珪酸体(D-15東壁;2)
12．タケ亜科機動細胞珪酸体(D-15東壁;2)
13．ウシクサ族機動細胞珪酸体(D-15東壁;2)
14．シバ属機動細胞珪酸体(D-15東壁;2)

第５節

芝原遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

芝原遺跡は，万之瀬川右岸の自然堤防上に立地する。これまでの発掘調査により，縄文時代後・晩期から近世にわたる複合遺跡であることが判明している。また自然科学分析調査により，古墳時代以降と考えられる畠の栽培植物や中世の焼失住居での住居構築材，中世以降とされる土坑が墓坑である可能性などに関する情報を得ている。

今回の分析調査では，遺構・遺物の年代観を検討するために放射性炭素年代測定，畠跡での栽培植物や古植生に関する情報を得るために花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。

１．試料

分析試料を表１に示す。今回は，放射性炭素年代測定を５点，花粉分析を４点，植物珪酸体分析を３点用いる。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は，株式会社加速器分析研究所の協力を得た。今回の測定は，ＡＭＳ法で行う。なお，放射性炭素の半減期は，LIBBYの半減期5568年を使用する。

（２）花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し，水酸化カリウム処理，篩別，重液分離（臭化亜鉛，比重2.3），フッ化水素酸処理，アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し，出現する全ての種類の同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

（３）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水･塩酸処理，沈定法，重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し，カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は，検出された種類とその個数の一覧表で示す。また，検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や栽培植物について検討するために，植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は，短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に，それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

表１　分析試料

調査区	試料・地点・遺構	遺物・層位	質	分析項目			
				^{14}C	花粉	PO	材
C-20区	59	深鉢付着の黒色物質	炭化物	●			
C-24区	58852	Ⅵ層出土土器片の付着物	炭化物	●			
C-36区	m.1053	土器片の付着物	炭化物	●			
D-23区	縄文集石50	炭化材片	炭化材	●			●
D-34区	縄文竪穴状遺構１号	竪穴状遺構の埋土	土壌	●			
C-34区	72480	Ⅷ層　土器内埋土	土壌		●		
D-29区	Ａ地点　畠	うね間	土壌		●		
E-27区	Ｂ地点　畠		土壌		●		
E-27区	Ｂ'地点 畠付近	Ⅲ層（Ⅱ層埋土）	土壌		●		
E-27区	Ｂ地点　畠	うね	土壌			●	
E-27区	Ｂ地点　畠	うね間	土壌			●	
E-27区	Ｃ地点　畠の外		土壌			●	

^{14}C:放射性炭素年代測定（AMS法），花粉：花粉分析，PO：植物珪酸体分析，材：炭化材同定

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

結果を表２に示す。

測定した試料のうち，59 C-20区深鉢付着の黒色物質は約3820年前，58852 C-24区Ⅵ層出土土器片の付着物は約4160年前，C-36区 m.1053出土土器片の付着物は約3910年前，縄文集石50D-23出土の炭化材片は約3680年前，縄文竪穴状遺構１号Ｄ－34区の埋土は約3450年前の年代値である。この年代値の範囲は，桒畑・東（1997）によれば縄文時代中期後半，キーリ・武藤（1982）の九

表２　放射性炭素年代測定結果

試料	質	同位体補正年代	δ13C（‰）	測定年代	測定番号
59　C-20区 深鉢付着の 黒色物質	炭化物	3820±40	-26.84±0.86	3790±40	IAAA-30175
58852 C-24区 Ⅵ層出土土器 片の付着物	炭化物	4160±40	-27.14±0.86	4200±40	IAAA-30176
C-36区 m.1053 出土土器片の付着物	炭化物	3910±40	-26.51±0.94	3940±40	IAAA-30177
縄文集石50 D-23 出土の炭化材片	炭化材 （アワブキ属）	3680±40	-30.57±0.93	3770±40	IAAA-30178
D－34区 縄文竪穴状遺構１号	土壌	3450±50	-23.48±0.86	3430±50	IAAA-30179

年代値：1,950年を基点とした値
誤差：標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代
$\delta^{13}C$：試料炭素の^{13}C／^{14}C原子比を加速器で測定し，標準にPDBを用いて同様に算出した値

州地方の調査例からは縄文時代中期に相当する。

なお，「縄文集石50 D-23出土の炭化材」は同定の結果，アワブキ属であった。

（２）花粉分析

結果を表３に示す。

花粉化石は，畠試料３点および土器内埋土試料１点いずれも，ほとんど検出されない。

僅かに検出される花粉化石・シダ類胞子は保存状態が極めて悪く，外膜が溶けて薄くなっているもの，壊れているものが認められる。

表３　花粉分析結果

種類　試料番号	畠 D-29区 A地点 うね間	畠 E-27区 B地点	畠 E-27区 B'地点 畠付近	土器内 C-34区 72480 埋土
木本花粉				
マツ属	2	－	－	－
スギ属	－	－	1	－
ハンノキ属	－	1	－	－
コナラ属コナラ亜属	1	－	1	－
コナラ属アカガシ亜属	1	－	－	－
草本花粉				
イネ科	－	－	－	2
クワ科	－	1	－	－
マメ科	－	－	1	－
ヨモギ属	1	1	1	－
タンポポ亜科	1	－	1	－
不明花粉	－	－	1	－
シダ類胞子				
シダ類胞子	7	6	3	1
合　計				
木本花粉	4	1	2	0
草本花粉	2	2	3	2
不明花粉	0	0	1	0
シダ類胞子	7	6	3	1
総計（不明を除く）	13	9	8	3

畠試料で検出される種類は，木本花粉が５種類（マツ属・スギ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属），草本花粉が４種類（クワ科・マメ科・ヨモギ属・タンポポ亜科）である。この他，シダ類胞子も検出される。

表４　植物珪酸体分析結果

種類　試料番号	E-27区 B地点 畠 うね	E-27区 B地点 畠 うね間	E-27区 C地点 畠の外
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	60	59	24
タケ亜科ネザサ節	16	40	15
タケ亜科	50	55	62
ヨシ属	2	3	4
ウシクサ族コブナグサ属	1	2	2
ウシクサ族ススキ属	10	5	6
イチゴツナギ亜科オオムギ族	－	6	4
イチゴツナギ亜科	13	19	12
不明キビ型	39	26	88
不明ヒゲシバ型	25	19	34
不明ダンチク型	11	4	22
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	38	35	14
タケ亜科ネザサ節	19	24	9
タケ亜科	31	56	68
ヨシ属	5	10	13
ウシクサ族	42	60	71
不明	31	33	34
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	227	238	273
イネ科葉身機動細胞珪酸体	166	218	209
総計	393	456	482
組　織　片			
イネ属短細胞列	11	9	4
イネ属機動細胞列	－	2	1
樹木起源			
第Ⅲグループ	33	106	48
第Ⅳグループ	2	7	1

C-34区の72480土器内埋土試料ではイネ科とシダ類胞子がわずかに検出されたに過ぎない。

（3）植物珪酸体分析

結果を表４，図１に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの，保存状態が悪く，表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

栽培植物では，いずれの試料からもイネ属が検出され，この中には珪化組織片としてイネ属短細胞列やイネ属機動細胞列が認められる。特に，E-27区Ｂ地点畠のうねとうね間では短細胞珪酸体が25％前後，機動細胞珪酸体が約16～23％の出現率であり，Ｃ地点畠の外よりも高い。また，オオムギやコムギなどのムギ類が属するオオムギ族が，E-27区Ｂ地点畠のうね間とＣ地点畠の外で検出される。

この他にはネザサ節を含むタケ亜科，ススキ属を含むウシクサ族，ヨシ属，イチゴツナギ亜科が認められ，タケ亜科の両珪酸体とウシクサ族の機動細胞珪酸体の産出が目立つ。また，樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアスン，1981）が検出される。第Ⅲグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈し，大部分の樹木葉部に観察される。第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈し，第Ⅲグループと同様に大部分の樹木葉部で観察される。

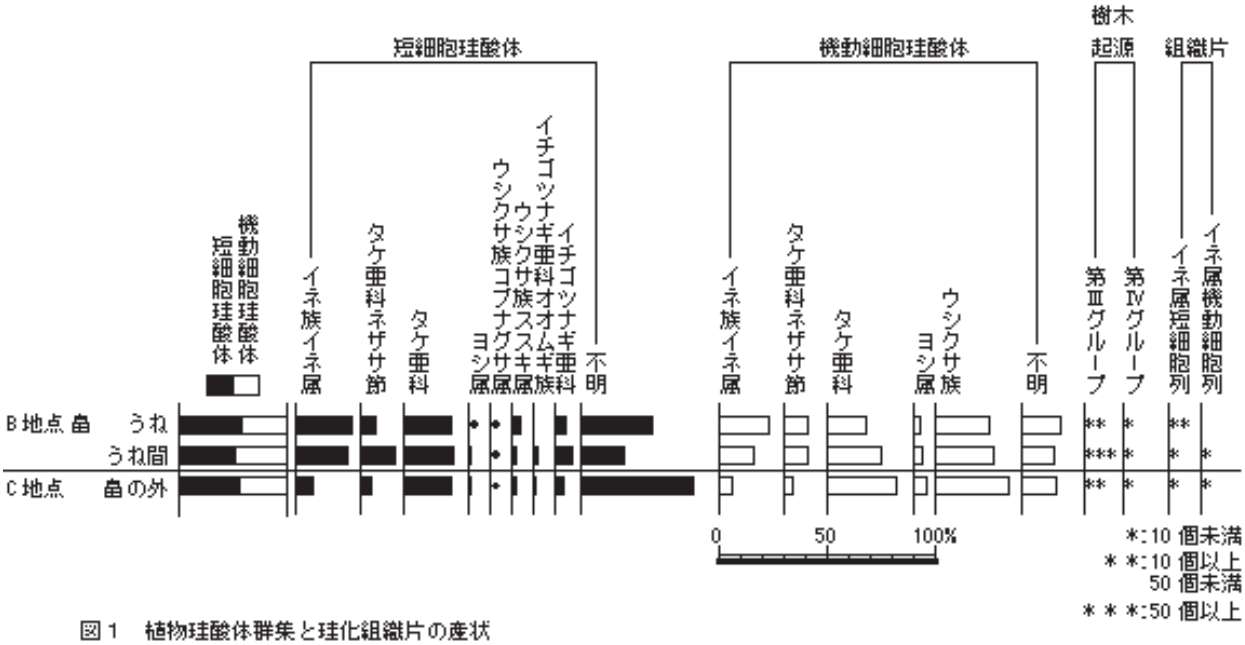


図１　植物珪酸体群集と珪化組織片の産状
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●は１%未満の種類を示す。また、珪化組織片と樹木起源珪酸体の産状を＊で示す。

４．考察

（1）遺構・遺物の年代

測定した５点の放射性炭素年代値は，約3680～4160年前であった。ただし，測定年代値は測定法自体が持つ誤差や時代による大気中の^{14}Ｃ濃度の違いなどにより，いわゆる暦年代とは一致しない。特に，放射性炭素年代と暦年代とのずれは，古くなるほど大きくなることがいくつかの分析例で出されている。例えば数千年前では，500～800年ほど放射性炭素年代の方が若い傾向を示す（中村，2000）。また測定した試料のうち，土器の付着物３点は土器の使用時に付着した可能性が高く，使用時の年代を反映していると思われる。これらの点を考慮すれば，土器の付着物３点の年代は縄文時代前期後半～中期前半に相当する可能性がある。

なお，縄文集石50や縄文竪穴状遺構１号は土器の付着物と同様な年代に構築された可能性があるが，今後複数の測定データを得ての検討が必要である。また，発掘調査で得られた考古学的所見などと合わせ，さらに総合的に年代を評価することが望まれる。

（2）遺跡内の栽培植物について

D-29区とE-27区の畠内外の土壌からは，クワ科・マメ科・ヨモギ属・タンポポ亜科の草本花粉やイネ属・オオムギ族などの植物珪酸体が検出された。このうち，E-27区Ｂ地点畠のうねとうね間ではイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出され，Ｃ地点畠の外よりも高い出現率であった。この点は，Ｂ地点畠のうねとうね間の土壌中に，イネ属の植物体が取り込まれていたことを示唆する。その要因として，この畠で陸稲栽培が行われていたこと，保温・保湿用に敷き藁が行われていたこと，稲藁堆肥が利用されていたことが考えられる。また，E-27区Ｂ地点畠うね間とＣ地点畠の外ではオオムギやコムギなどのムギ類が属するオオムギ族が検出された。検出さ

れた植物珪酸体の形態からは，栽培種か否かの判別はつかないが，仮に栽培種であるとすればムギ栽培が示唆される。さらに，畠の外で検出されていることを考慮すれば，検出された畠跡の以前にムギ栽培を行った畠が存在した可能性が想定される。この点は，畠跡での土壌の堆積状態など発掘調査所見を含めて検討したい。

ところで，先の分析調査によりD-15東壁で検出された中世末期～近世初頭のⅡａ層上面畠および中世初期のⅡｂ層上面畠，B-14で検出された古墳時代以降と考えられるⅢ層上面畠でもイネの栽培あるいは利用が示唆された。今回の畠の年代は現段階では明確でないが，遺跡内でイネが栽培されたか，肥料や資材として利用した耕作地が存在したと思われる。また，隣接する持躰松遺跡でもイネ属が検出されており，両遺跡で耕作地が広がっていた可能性も考えられる。今後，遺構の年代や畠作の様態を比較・検討することが望まれる。

（3）古植生

今回の試料では花粉化石の検出個数が少なく，検出される花粉化石も保存状態が極めて悪かった。一般的に花粉は，好気的な環境条件下において化学的な酸化や土壌微生物の影響によって分解・消失するとされている（例えば，中村，1967）。また，徳永・山内（1971）は，広葉樹に由来する花粉化石の大半に分解の痕跡が認められるならば，その試料は花粉分析に不適であることを指摘している。本遺跡の立地環境を考えると，堆積物中に取り込まれた花粉化石などは自然堤防上の好気的環境の中で，経年変化の影響により分解・消失したと考えられる。

一方，植物珪酸体の産状からは，畠の周辺にはネザサ節を含むタケ亜科の生育がうかがえる。ネザサ節などのササ類は，集落の周辺などの開けた場所に普通に見られる種類である。また，ススキ属を含むウシクサ族，ヨシ属，イチゴツナギ亜科などのイネ科，およびヨモギ属やタンポポ亜科などは人里付近に生育する，いわゆる人里植物と呼ばれる種類を含む分類群である。これらから，本遺跡周辺は開けた草地のような空間が広がっていたと思われる。また，樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループも検出された。九州・沖縄地方では，樹木起源珪酸体の第Ⅲグループが表層あるいは埋没土壌中に特徴的に認められ，その給源としてイスノキが想定されている（近藤，1976）。また，樹木花粉ではマツ属・スギ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が認められた。そのため，周辺の後背地にはこれらの樹木が存在した可能性がある。

引用文献

キーリ C．T．・武藤康弘（1982）縄文時代の年代，「縄文文化の研究１　縄文人とその環境」，p.246-275．雄山閣．

近藤錬三（1976）樹木起源の珪酸体について．ペドロジスト，20，p.176-189.

近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植　物ケイ酸体について．帯広畜産大学研究報告，12，p.217-229.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

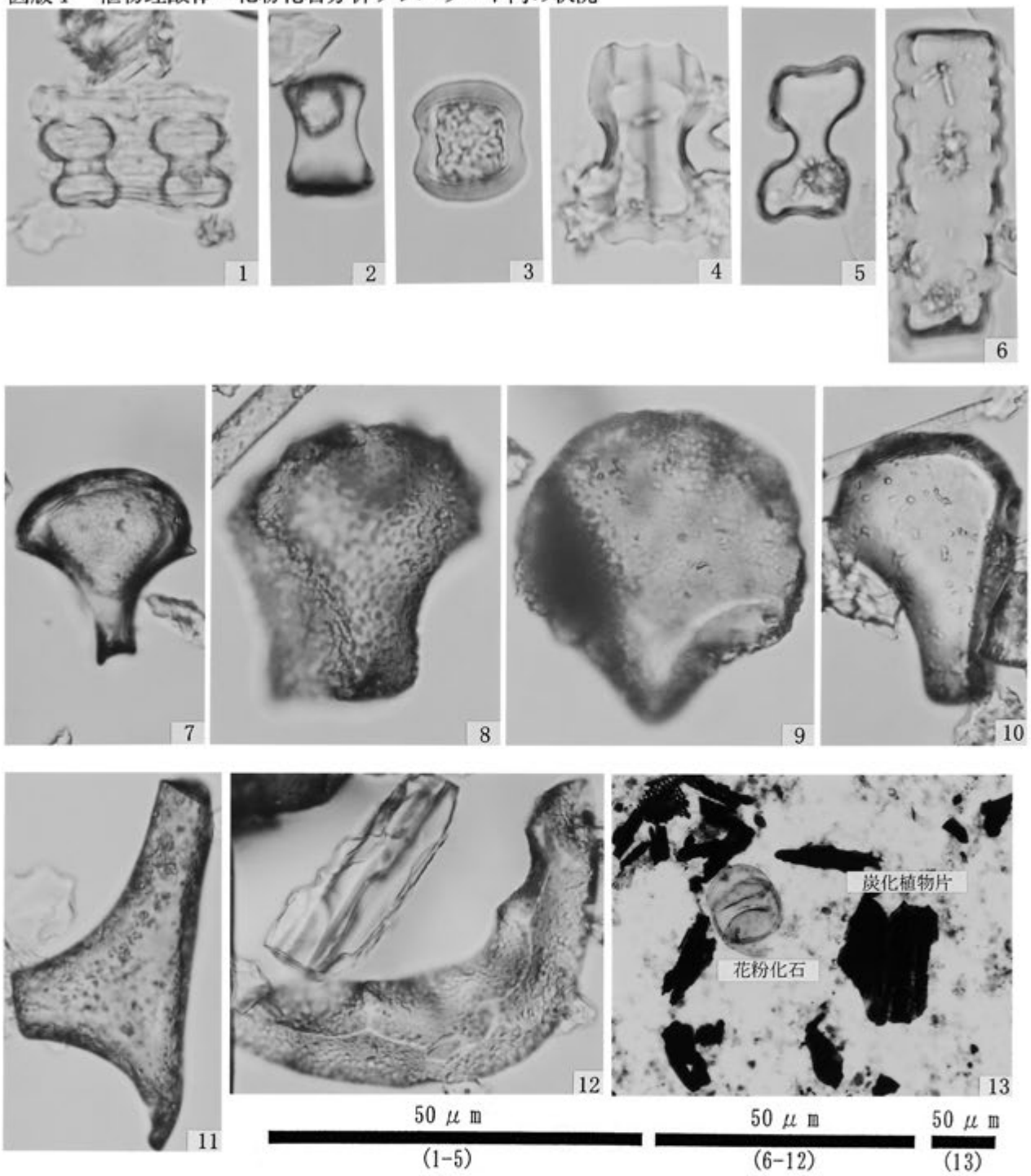
桒畑光博・東　和幸（1997）南九州の火山灰と考古遺物．月刊地球，19，p.208-214.

中村　純（1967）「花粉分析」．232p.，古今書院.

中村俊夫（2000）14C年代から暦年代への較正．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」，p.21-40.

徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子．化石研究会編「化石の研究法」，p.50-73，共立出版株式会社.

図版１　植物珪酸体・花粉化石分析プレパラート内の状況



1．イネ属短細胞列(B地点;畠うね)
2．ネザサ族短細胞珪酸体(B地点;畠うね間)
3．ヨシ属短細胞珪酸体(B地点;畠うね間)
4．コブナグサ属短細胞珪酸体(B地点;畠うね間)
5．ススキ属短細胞珪酸体(B地点;畠うね間)
6．オオムギ族短細胞珪酸体(B地点;畠うね間)
7．イネ属機動細胞珪酸体(B地点;畠うね)
8．ネザサ節機動細胞珪酸体(B地点;畠うね間)
9．ヨシ族機動細胞珪酸体(B地点;畠うね間)
10．ウシクサ族機動細胞珪酸体(B地点;畠うね間)
11．樹木起源第Ⅲグループ(B地点;畠うね間)
12．樹木起源第Ⅳグループ(B地点;畠うね間)
13．花粉分析プレパラート内の状況写真(A地点;畠うね間)

第６節

芝原遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は，B32から出土した土器の内部土壌，および比較試料として採取されたⅢb層の計２点である。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03），ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属（ススキ）は1.24，メダケ節は1.16，ネザサ節は0.48，ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。また，主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，キビ族型，ヨシ属，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），その他

（２）植物珪酸体の検出状況

土器の内部土壌では，ススキ属型が多く検出され，イネ，キビ族型，ヨシ属，ウシクサ族Ａ，メダケ節型，ネザサ節型，および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属）なども検出された。イネの密度は1,400個/ｇと比較的低い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/ｇを下回っている。比較試料として採取されたⅢb層でも，おおむね同様の結果であるが，イネやキビ族型は検出されなかった。おもな分類群の推定生産量によると，各試料ともススキ属型が優勢であることが分かる。

５．考察

B32から出土した土器の内部土壌についての植物珪酸体分析によると，ススキ属が主体でメダケ節が見られることから，遺跡の周辺環境にススキやササの低茎草地があり，また，ヨシ属があることから河川や池沼等の湿潤な環境もあったことが推定される。また，調査区周辺では稲作が行われていたと考えられ，遺跡周辺にはシイ属，クスノキ科，イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお，イネは土器外の比較試料（Ⅲb層）からは検出されないことから，何らかの形で土器内に入れられていた可能性も考えられる。

文献

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―．考古学と自然科学，17，p.73-85.

Ⅱ．リン・カルシウム含量分析

１．はじめに

土壌中に含まれるリンやカルシウムの起源としては，土壌の母材，動物遺体，植物遺体などがある。また，遺跡の生活面や遺構内には遺体，排泄物，代謝物，食物残渣，燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが，リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため，土壌中における保存性が高い。このようなリンやカルシウムの性質を利用して，墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認，および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

２．試料

分析試料は，B33（11303）から出土した土器の内部土壌の２点である。（P59　第44図　土坑３号内土器）

３．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて，元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

１）試料を絶乾（105℃・24時間）

２）メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕

３）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ，圧力15ｔ/㎠でプレスして錠剤試料を作成

４）測定時間300秒，照射径20㎜，電圧30keV，試料室内真空の条件で測定

なお，Ｘ線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット，ベリリウム（Be）窓，Ｘ線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

４．分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表１に示す。

５．考察

一般に，未耕地の土壌中におけるリン酸含量は0.1～0.5%程度，耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく，目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため，比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

分析の結果，リン酸含量は2.3～2.4%とかなり高い値であり，カルシウム含量は3.3～3.6%と標準的な値である。これらのことから，B33（11303）から出土した土器の内部には，リン酸を多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられるが，土器外の比較試料について分析が行われていないことから確定的なことは言えない。なお，カルシウムは一般に溶解性が大きいことから（竹迫，1993），土壌中で拡散・移動した可能性も考えられる。

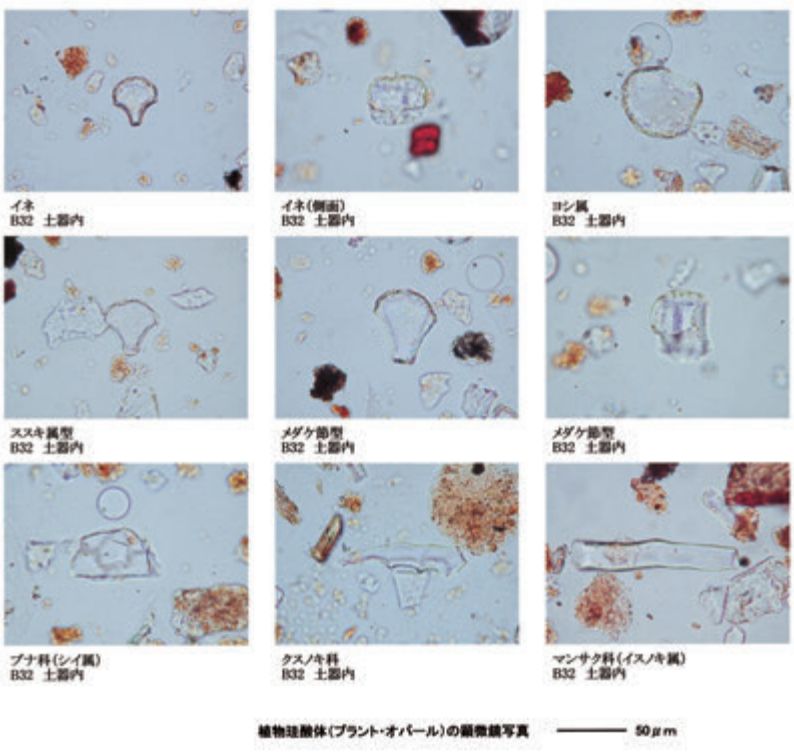
文献

竹迫　紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法２，研究対象別分析法．東京大学出版会，p.38-45.

表１　渡畑（芝原）遺跡における蛍光Ｘ線分析結果

単位：wt（%）

地点・試料		B33（11303）	
原子№	化学式	土器内１	土器内２
11	Na_2O	0.519	0.769
12	MgO	0.724	0.826
13	Al_2O_3	18.999	20.147
14	SiO_2	62.313	59.955
15	P_2O_5	2.308	2.397
16	SO_3	0.007	0.006
19	K_2O	2.017	1.992
20	CaO	3.627	3.343
22	TiO_2	1.010	1.152
23	V_2O_5	0.025	0.037
25	MnO	0.359	0.377
26	Fe_2O_3	8.039	8.911
37	Rb_2O	0.012	0.013
38	SrO	0.042	0.045
40	ZrO_2	0.000	0.032



第７節

芝原遺跡の土器付着赤色遺物について

県立埋蔵文化財センター　中村幸一郎

芝原遺跡から出土している墨書土器に塗彩された赤色顔料２点と，青磁高台内に朱書された赤色遺物について，分析を行った。

１　墨書土器に塗彩された赤色顔料

（１）試料

①　試料№1　古代土坑４号内　墨書土器（44）
　内赤土器で外面に赤色顔料にて文字が書かれているもの。試料は内面の赤色顔料。

②　試料No.2　墨書土器（464）
　内黒土師の外面全体に塗彩された赤色顔料。

（２）観察・分析方法

①　形状観察
　観察用の試料を採取し，走査型電子顕微鏡（日本電子製JSM-5300LV）による1000～1500倍観察を行った。

②　成分分析
　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μm）を使用して，非破壊で測定した。分析条件は次のとおりである。

Ｘ線照射径	：100μm
測定時間	：200 s
Ｘ線管電圧	：15/50kV
電流	：1000/700μA
パルス処理時間	：P3
X線フィルタ	：なし
試料セル	：なし
定量補正法	：スタンダードレス

（３）結果

①　形状観察
　試料44及び試料464共に，同様な結晶状の粒子が見られるが，これは鉱物由来のものと判断できる。（写真１）
　パイプ状を呈する粒子等は見られない。

②　蛍光Ｘ線分析
　分析の結果，いずれも強い鉄（Fe）のピークが得られた（図１，図２）。また，アルミニウム（Al）やけい素（Si）などのピークが比較的大きく表れているが，これらは土器胎土由来の土壌成分と考えられる。

　よって，赤色顔料の種類は酸化鉄を主成分とするベンガラであると判断される。顔料の粒子の形状はパイプ状のものではなかった。

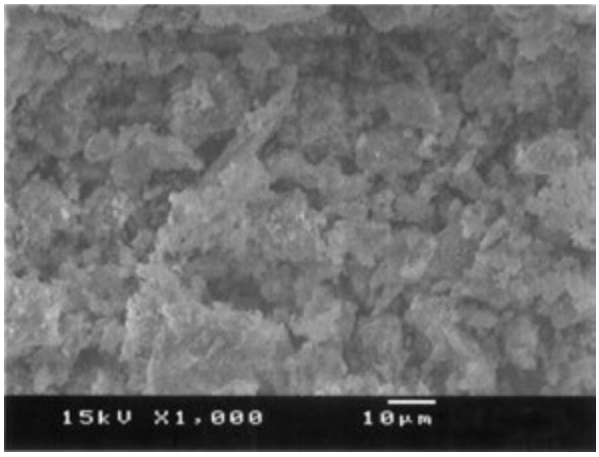
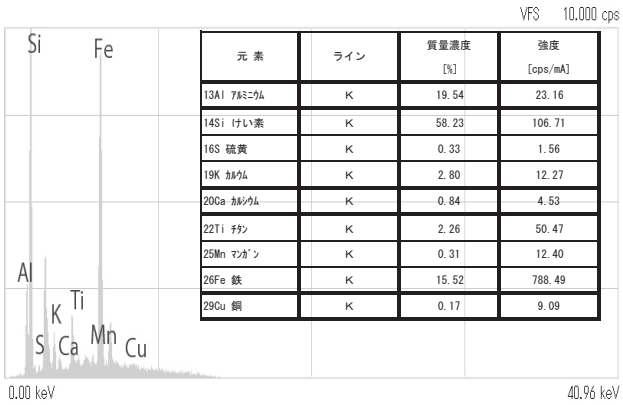
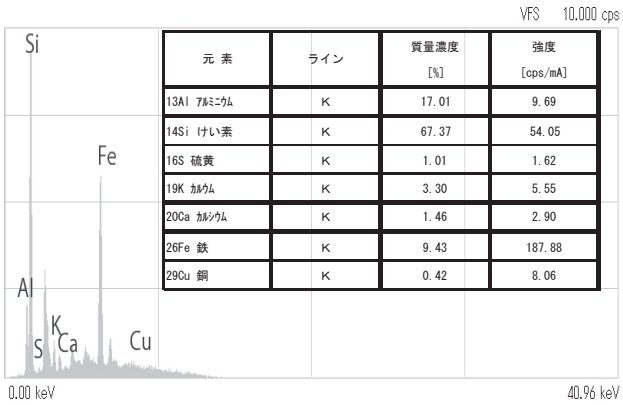


写真１　試料１の電子顕微鏡像



元 素	ライン	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
13Al ｱﾙﾐﾆｳﾑ	K	19.54	23.16
14Si けい素	K	58.23	106.71
16S 硫黄	K	0.33	1.56
19K ｶﾙｳﾑ	K	2.80	12.27
20Ca ｶﾙｼｳﾑ	K	0.84	4.53
22Ti ﾁﾀﾝ	K	2.26	50.47
25Mn ﾏﾝｶﾞﾝ	K	0.31	12.40
26Fe 鉄	K	15.52	788.49
29Cu 銅	K	0.17	9.09

図１　試料１の成分分析（蛍光Ｘ線分析装置による）



元 素	ライン	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
13Al ｱﾙﾐﾆｳﾑ	K	17.01	9.69
14Si けい素	K	67.37	54.05
16S 硫黄	K	1.01	1.62
19K ｶﾙｳﾑ	K	3.30	5.55
20Ca ｶﾙｼｳﾑ	K	1.46	2.90
26Fe 鉄	K	9.43	187.88
29Cu 銅	K	0.42	8.06

図２　試料２の成分分析（蛍光Ｘ線分析装置による）

２　青磁高台内の赤色顔料

（１）試料３　龍泉窯系青磁皿（1155）

青磁高台内に朱書された赤色顔料。「大」の字が書かれている。（写真２）

（２）観察・分析方法

①　形状観察

観察用の試料を採取し，走査型電子顕微鏡（日本電子製JSM-5300LV）による1000～3500倍観察を行った。

②　成分分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μm）を使用して，非壊で測定した。分析条件は次のとおりである。

Ｘ線照射径	：100μm
測定時間	：200 s
Ｘ線管電圧	：50kV
電流	：400／460μA
パルス処理時間	：Ｐ2
Ｘ線フィルタ	：なし
試料セル	：なし
定量補正法	：スタンダードレス



写真２　青磁高台内面の朱書

（３）結果

①　形状観察

鉱物に見られる結晶状の粒子が見られるが，これは鉱物由来の結晶粒子と判断できる。（写真３）

②　蛍光Ｘ線分析

分析の結果，強い水銀（Hg）のピークが得られた。（図３）

水銀のピークが見られる部分の他に，けい素（Si）やカリウム（K），カルシウム（Ca）などのピークも見られた。これは，磁器の胎土の土壌成分として考えられる。

上記の結果，この赤色顔料は水銀朱であると考えられる。

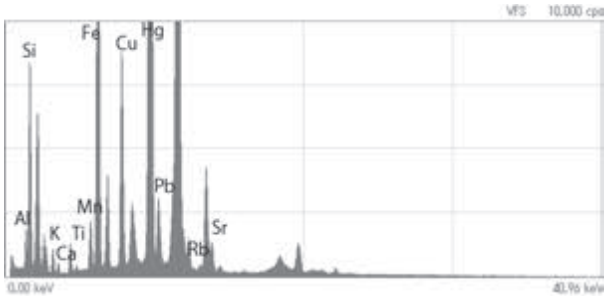


図３　試料２の成分分析（蛍光Ｘ線分析装置による）

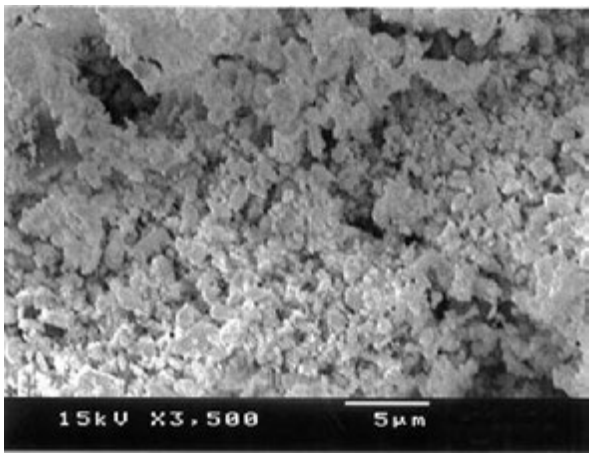


写真３　試料３の電子顕微鏡像

第５章　総括

第１節　芝原遺跡の遺構

古代

古代の建物は，掘立柱建物跡が15棟確認された。うち14棟は20区以西に立地する。建物は，掘立柱建物跡１号，12号，13号，15号を除き，東西，南北に軸をとり建てられている。建物は，C・D-27～29区に特に集中し，７棟がこの区域に建てられている。掘立柱建物跡７号，８号，９号は，切り合い関係にあり３時期が予想される。さらに，この３棟のみほぼ同位置に立て替えが行われており，建物軸にも変化がみられない，加えて，いずれかの時期に２面の庇をもつ建物が建てられていることは，この区画の中心的建物であった可能性を示唆している。また，残る４棟（掘立柱建物跡４号，５号，６号，10号）を含め，切り合う掘立柱建物跡７号，８号，９号を中心とした，３棟を１構成とする建物配置が想定できる。それぞれの掘立柱建物跡柱穴から出土している遺物が，図化に及ばない小片であるため，時間的前後関係はつかめなかった。

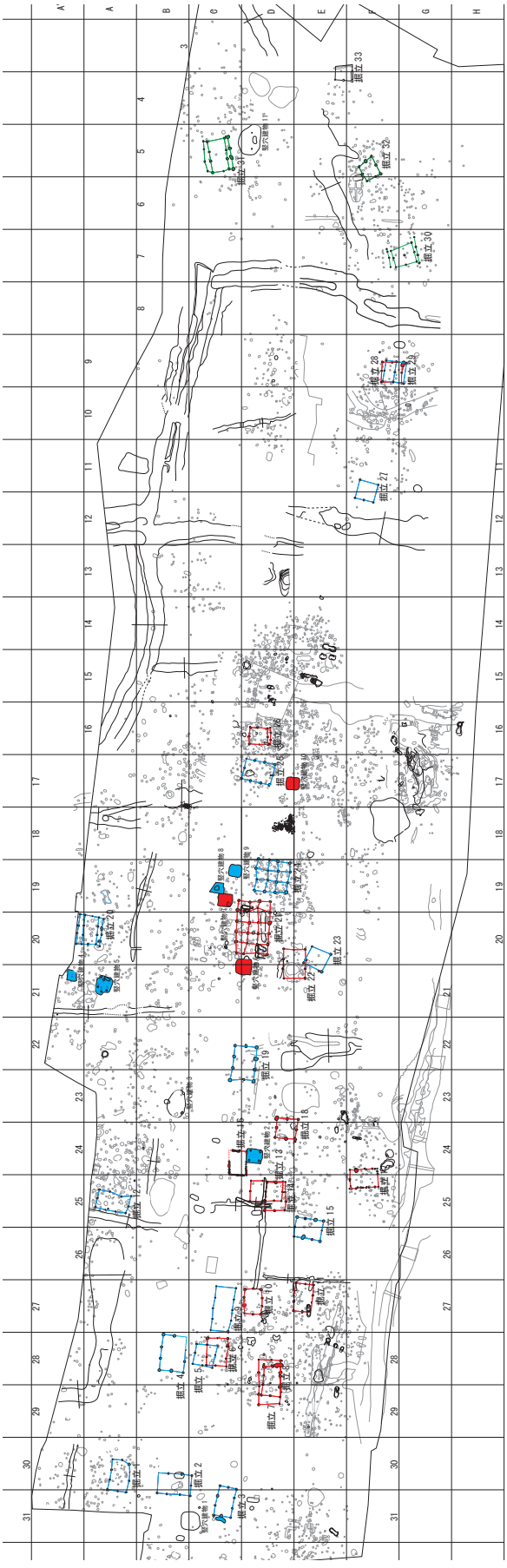
土坑墓は３基が確認された。そのうち２基からは釘が出土していることから木棺墓と思われる。また絶対数は少ないが，後述する溝８号で区画された範囲内に，３基とも検出されていることは非常に興味深い。

溝は17条検出され，半数以上が東西・南北方向を意識して直線的に作られている。特に溝８号は，川に向かってコの字に開く，断面形が箱堀のしっかりした作りの溝である。溝８号内からは，北東角付近から東側と，南側へ広がるように墨書土器が多量に出土している。また，多口瓶もこの溝から出土している。多量の墨書土器の出土や希少な多口瓶，硯，石製丸鞆の出土からその背景を考えると，識字層，下級官人の存在が想定されるが，それにつながると考えられる遺構は確認されていない。平成16年には，本遺跡北側で送電鉄塔建設工事に伴う発掘調査が行われ，平成17年に金峰町教育委員会により報告書が刊行された。ここにおいて中世の竪穴建物跡や土坑が検出され，古代の遺物では「宅」の刻書がみられる台付皿が出土しており（金峰町教育委員会2005），先述の遺構は，本遺跡北側に存在する可能性が考えられる。

中世

中世の建物は掘立柱建物跡33棟，竪穴建物跡11基が検出された。掘立柱建物跡は，規模２間×３間の建物が大半を占め，２間×２間，１間×１間の小規模のものがそれに続く。また特殊なものとして３間×５間，３間×３間の総柱建物２棟が目を引く。

竪穴建物跡は３号，11号を例外として，ほぼ同規模の建物が建てられており，単独ではなく，掘立柱建物跡に隣接するように配置する傾向がある。また建物は，近世以降の溝，自然流路により分断され，まとまりを持ったかのように検出されているが，本来は全体的に広く配置していたものと思われる。



中世建物配置

さらに建物全体の配置を眺めてみると，主軸が南北方向をとるものと，主軸がわずかに東に振れるもの，わずかに西に振れるものの３種があることがわかる。主軸南北方向の建物は，掘立柱建物跡６，７，８，10，11，13，14，16，17，18，21，22，26，28号・竪穴建物６，７，10号である。主軸がやや東に振れる建物は，掘立柱建物跡１，２，３，４，５，９，12，15，19，20，23，24，25，27，29号・竪穴建物跡２，４，５，８，９号である。主軸がやや西に振れる建物は，掘立柱建物跡30，31，32号である。（建物主軸の判断できなかった建物，掘立柱建物跡33号，竪穴建物跡１，３，11号）

この建物主軸の異なる３群の建物のうち，建物主軸が南北方向をとる建物と，建物主軸がわずかに東に振れる建物は，建物配置，建物規模に類似性がみられる。建物主軸が西に振れるものは，建物数自体少ないが遺跡東側に偏って配置する。また南北軸の建物の中には，切り合い関係にあるものもあり，若干の時間幅があったものと思われる。南北軸の建物と，東に軸が振れる建物の間にも切り合い関係があり，建物軸の差違には，時期差があることも想定できる。遺構に直接関係する遺物は建物数と比較してごくわずかではあるが，それからは，南北主軸建物（12～13世紀），主軸が東に振れる建物（13後～14世紀），主軸が西に振れる建物（15世紀）という時間的流れが想定可能である。

総柱建物跡については，当時の中心的建物，倉庫などの機能があったと想定できるが，遺構内，遺構周辺からの出土遺物からはその性格を特定することは困難である。あくまで想像の域を超えることはないが，総柱建物跡を交易にかかる，一時的な倉庫（貯蔵施設）と考えると周辺に見られる竪穴建物は，倉庫に付随する人物（倉庫番的人物など）が利用した施設，掘立柱建物跡は，それらを管理した人物が利用した施設と解することも可能である。また，多種多様な輸入陶磁器やコンテナとして持ち込まれたと考えられる，壺，甕などの大型貯蔵容器の大量出土は，この推論の補強材料とも言える。

土坑墓は18基検出され，そのほとんどから，銭貨や土師器坏，青磁，白磁などの副葬品を出土した。最も古手と考えられるのが土坑墓５号で出土した土師器の形態から13世紀前～中頃の時期が考えられる。次が土坑墓14号で龍泉窯系青磁坏の形態から13世紀中頃～14世紀初頭と考えられる。次に，土坑墓１～３，８，９，11，12，16，18号が14世紀中頃～15世紀，土坑墓10，13号が15世紀中頃～16世紀，土坑墓４号は白磁輪花皿から16世紀と考えられる。最終が土坑墓17号で青磁椀から16世紀末～17世紀初頭の時期が考えられる。大半の土坑墓は掘立柱建物跡や竪穴建物跡とは時期を異にする。整理作業当初，遺構配置状況から屋敷墓の可能性を考えていたが，建物と墓の時期差から，屋敷墓の可能性は低いと思われる。

かまど跡は29基が検出された。E-28・29区，E・F-23・24区，D-19・20区，E-14・15区の４カ所の集中箇所が確認できる。D-19・20区に見られるかまど跡のまとまりは掘立柱建物跡21号と重なるが，かまど燃焼部が柱穴に近接しすぎているため，異なる時期のものと考えられる。また，かまど跡はほぼ同じ場所に作り替えられていることから，煮炊きをする場所が長期にわたり固定化していたことを伺わせる。

近世

近世の建物跡は，A-30・31区に掘立柱建物跡が２棟検出されたのみである。この２棟は切り合い関係にあり，１時期に復元できる掘立柱建物跡は１棟ということになる。建物の前後関係は２間×２間の１号が先行し，２間×３間の２号が後出する。ピットはF・G-９・10区，D・E-14～17区に集中する傾向があり，多数検出されているが，建物の復元には至らなかった。遺跡西側B-33・34区，A-37区で遺構内に根石や，柱痕跡，地鎮と思われる陶器埋納がみられるピット４基が検出された。建物復元こそ出来なかったものの，周辺の遺物集中との関連を伺わせる検出状況と言えよう。

近世及び時期不明の土坑墓は11基検出された。９号・11号を除き墓坑は南北に主軸をとっている。埋葬は木棺を用いるものがほとんどで，伸展葬木棺，座棺の利用が伺える。埋葬方向は座棺を除き人骨の確認できるものでは，北頭位であることが確認できる。また，土坑墓の築造については，遺跡全体から見て，川寄りに立地する傾向が伺え，川岸が墓域になっていたことを示しているものと思われる。

近世の遺構で特徴的なものが製鉄関連遺構（以下，製鉄遺構）であり，19基が確認された。製鉄から精錬，鍛冶，廃棄の工程が伺える資料となった。G-17区に砂鉄の集積が検出された。

B-18区にみられる製鉄遺構４号は科学分析の結果，遺構内から出土した炉壁片内面に金属鉄（またはその錆化物）が溶着することから製鉄炉の炉壁片と推測され，製鉄炉の可能性が高い。砂鉄集積の東側には南北に延びる道跡も検出され，砂鉄集積場から製鉄炉までの作業道であった可能性も指摘できる。

B～E-29・30区にある自然流路１の埋土内から大量の鉄滓，羽口が出土した。鉄滓の中には大中小様々な椀形鍛冶滓が含まれており，精錬工程，高温沸し鍛接工程の大型椀形鍛冶滓，中型から小型の鍛錬鍛冶滓まで様々な工程の鉄滓がみられた。羽口は，口径３㎝程度のものがほとんどで，製造工程で必要とする消耗品的な羽口は規格化され，機械的に生産されていたことが推測される。科学分析では，椀形鍛冶滓や精錬鉄塊系遺物の付着滓の鉱物組成から砂鉄を高温精錬したと特定できる試料が確認され，燐の影響が著しいことから在地の砂鉄を原料とした可能性が高いという結果を得た。

さらにF・G-17・18区には小型の炉跡が集中し，炭化物集中もみられる。周辺には鉄滓が大量に出土し，製鉄遺構11号（炉跡），製鉄遺構18号（焼土跡）周辺には鍛造剥片，粒状滓が多量に検出されており，当該区では鍛錬鍛冶が行われていたことが伺える。

今回の調査では，明かな精錬工程の遺構は確認できなかったが，鉄滓の廃棄状況，廃棄量から自然流路１に囲まれた，B～F-22～29区あたりに存在していたと考えるのが適当であろう。また，操業時期については，自然流路１内の鉄滓，羽口が検出面ですぐ確認できることから18世紀が主体と考える。

芝原遺跡を含め，万之瀬川下流域の遺跡については，考古学のみならず，文献史学からの検討も進んでいる。今後，検討分野の多角化も含め，さらなる研究の深化を期待したい。

第２節　古代の遺物

隣接する渡畑遺跡・持躰松遺跡と同様に，大量の土師器，須恵器が出土し，ほかに土製品，古銭，鉄製品，石製品，竈，墨書土器が出土した。土師器は，椀・坏・高坏・高台付皿・皿・鉢・甕が出土し，他に赤色土器・黒色土器が出土している。土師器坏Ⅲ類の出土が他を圧倒することから，９世紀代が中心と考えられる。須恵器は蓋・椀・坏・皿・大甕・鉢・壺が出土し，他に風字硯・円面硯・多口瓶が出土している。本遺跡の東方1.5㎞には，須恵器窯跡である中岳山麓古窯群が存在し，溝８号西から出土した大甕などの須恵器もそこで製造されたものと考えられる。溝８号東から出土した多口瓶については，仏前の花器であると考えられる。形状は古代インドの打楽器「五面鼓」に類似し，小型化した土製品は供献具へ変化している。これが花器として伝来したとみられる。土製品は紡錘車・円形土製品・火舎・穿孔のある土製品が出土している。古銭は遺構内から23枚出土している。石製品は石帯丸鞆でピット内から出土している。墨書土器は，墨書・ヘラ書き・刻書・スタンプ文の４種類が出土している。

（１）遺物出土状況

遺構内からはA-36区の土坑１号と18～24区の溝８号からまとまった分量の遺物が出土している。特に土坑１号の出土遺物は，比較的近い時期に廃棄されたものと考えられる。９世紀代のものと考えられる多量の土師器坏・土師甕片ともに，「厨」などの特徴的な墨書土器も出土している。坏Ⅰ類に分類される北部九州でみられる形状の赤色土器も出土し，同形のものは隣接するC-37区からも出土している。

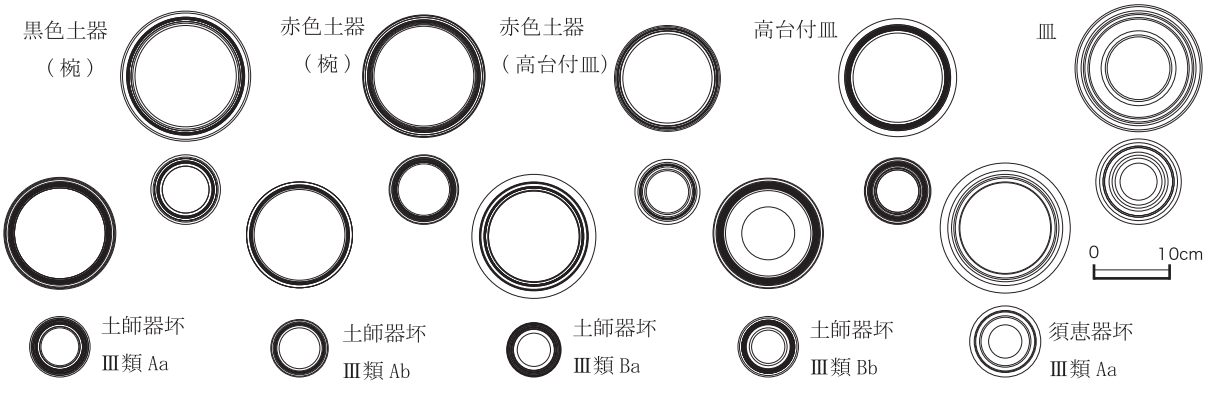
溝８号は，全長150m程度のコの字状の形状を呈し，囲まれた範囲からは２棟の掘立柱建物跡と３基の土坑墓と多数のピットが検出されている。土師器坏をはじめとした全体の遺物の半数近い量が出土し，須恵器の過半数はこの遺構から出土している。遺物は，コの字の一辺ごとに東・北・西の３地区に分けて掲載した。出土量は東から西にいくほど急激に増える傾向がある。特徴的な遺物としては，多口瓶，須恵器大甕，鉄鉢状の土師器鉢や内外面とも赤色の縦長の土師器壺，人面墨書とみられる土師器坏，「宅」「万」などの墨書土器，土師器高杯が出土している。特に溝８号西は，多量の土師器坏，赤色土器，須恵器大甕が出土している。これらの傾向から，祭祀に関連する施設が溝８号西側周辺に存在した可能性を指摘できる。

その他にF-27区の土坑５号からは朱書「屯」の墨書土器，D-27区のピット６号からは石帯丸鞆，土坑墓などからは古銭が出土している。

包含層からは，大量の土師器片とともに，須恵器，赤色土器，墨書土器，黒色土器が出土している。特徴的な遺物としては，風字硯と円面硯の一部とみられるものや，スタンプ文の施された土師器の一部，火舎の一部と考えられる脚付の鉢も出土している。

（２）墨書土器

渡畑遺跡から41点，持躰松遺跡から60点の墨書土器が出土しているが，芝原遺跡からはそれらを上回る223点の墨書土器が出土している。３遺跡の合計点数は 324点を数える。これまでも複数出土した「門」「凡」「富」「幸」「万」といった吉祥字句の文字も同様に出土している。また，渡畑遺跡から出土した「厨」「宅」「林」も出土している。特に「宅」は36点出土し，字形も４類に分けられることは本遺跡の特徴である。その他に人名と思われる「酒井」や，「□宅又」「金財」といった複数の文字で構成されるもの，人面墨書と考えられるもの，複数の記号墨書が施されたもの，「九字記号」とみられるもの，多様な字形をもつ「作」も同様である。なお，本遺跡の文字・記号の釈読については，永山修一氏（ラ・サール学園教諭）の御教示を得た。



土師器・須恵器の口径（上）底径（下）

C-32区では「福」の墨書が施された黒色土器が３点出土し，32～36区にかけては吉祥字句の文字の出土数が多い。D-36区出土の火舎や，溝８号東出土の多口瓶といった仏具と考えられる遺物から，遺跡西半の範囲に，寺院関連の施設が存在した可能性が考えられる。ヘラ書き土器「金財」が出土したC-27区の検出状況からは，掘立柱建物跡７～９号の３棟の同じ場所での立て替えが考えられている。他にも先に記述したF-27区の朱書の墨書土器，D-27区の石帯丸鞆も近接し，これらの建物との関連がうかがわれる。

（３）土坑１号出土の墨書土器「厨」と「酒井」

土坑１号からは，９世紀代と考えられる土師器坏片や土師甕が多数出土し，土師器皿39の墨書は「厨」，土師器坏38の丁寧な楷書体の墨書は「酒井」と読める。墨書「厨」は，官衙や寺院の給食施設に伴う食膳具のものと考えられている。他方では，国司の地方巡行などの際の饗宴の場で使用された食膳具にみられる場合もある。本遺跡の土師器皿38は底部外面中央に墨書が施されているので，後者の可能性が考えられる。

次に，墨書「酒井」の人名について考えてみたい。現在の南九州では「酒井」姓は少ないが，中世期の大隅国では酒井氏の存在が知られている。古代の南九州と「酒井」の関連を，氏族と人物の２面から記述する。

氏族との関連からは，政府の南九州支配を円滑にする施策として，豊前国から大隅国への移民があげられる。712年（和銅５）に終結した古代隼人族の反乱ののち，714年（和銅７）に移民の記録がある。古代の豊前国宇佐郡には酒井郷が所在し，現在の大分県宇佐市大字川部と推定される。移民の中に郷名の「酒井」を名字とする氏族が含まれ，薩摩国に移動した可能性を指摘できる。

人物との関連からは，896年（寛平８）１月から902年（延喜２）２月まで，国司（薩摩掾）として薩摩国に赴任していた「酒井人真」（？～917年（延喜17））の存在があげられる。この人物は，「古今和歌集」に「大空は　恋しき人の形見かは　物思ふごとに　ながめらるらむ」の一首を残し，他に「大和物語」102段にもその名がみられる文人貴族と考えられる。889年（仁和５）に備前権大目へ任ぜられ，左馬属・中宮少属・左大史などを経て914年（延喜14）土佐守となっている。現在判明している薩摩国司の中には，他の「酒井」氏は見当たらない。人物との関連の２例目は，国司（大隅目）として大隅国に赴任した２人の人物があげられる。1131年（天承元）の「酒井某」と1132年（長承元）の「酒井忠末」である。時期が近接していることから同一人物の可能性もある。12世紀代の人物と９世紀代と考えられる土坑１号の時期的な隔たりは大きく，地理的にも中世以降の大隅国御家人で大隅国正八幡宮社家となった酒井氏との関連がうかがえる。

以上のことから，土坑１号は豊前系氏族あるいは薩摩国司が参加した饗饌で使用された食膳具などの廃棄土坑の可能性がうかがえる。

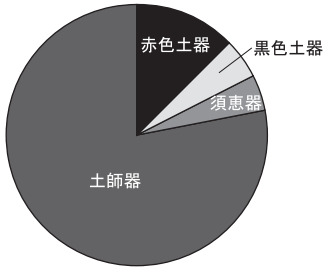
（４）墨書「宅」

古代においては「家」と「宅」は明確に使い分けられていたと考えられている。人間集団（家族など）をさす場合は「家」を，建物とその敷地をさす場合には「宅」を用いられている。このことから考えると，墨書「宅」は「富」「幸」「万」といった吉祥字句とは異なり，具体的な施設（建物・敷地）に伴う実用的な性格を想定できる。本遺跡からは，36点の「宅」と読める可能性のある墨書土器が出土した。西側に隣接する渡畑遺跡の２点，北側に隣接する芝原b遺跡の１点まで含めると，39点の「宅」が出土したことになる。本遺跡での内訳は，墨書16点，ヘラ書き20点を数え，ヘラ書きによるものが多い傾向がある。遺構内出土の内訳は，墨書６点，ヘラ書き２点を数え，包含層まで含めた出土数とは，逆の傾向がうかがえる。また，丁寧な楷書体から，装飾的な草書体，かなりくずした書き方，変形したとみられる書き方とバリエーションに富むことも特色であり，書き手が様々であったことが想定できる。

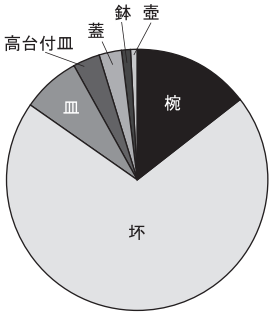
次に，「宅」の出土状況を隣接する渡畑遺跡，持躰松遺跡まで含めて検討してみる。持躰松遺跡，渡畑遺跡の大部分では出土せず，14～38区の範囲に分布することが看取できる。墨書「宅」については，14～37区の広範囲で出土しているが，20～25区に集中する傾向がうかがえる。遺構との関係からみると，コの字状を呈する区画溝と考えられる溝８号の区画内に集中することが指摘できる。この範囲内からは，掘立柱建物跡13号と掘立柱建物跡14号のほか多数のピットが検出されている。中でも，掘立柱建物跡14号のあるE-20・21では，４点の墨書「宅」が出土している。一方，ヘラ書き「宅」については，遺跡西側の24～38区に出土する傾向がうかがえ，特に30～33区に集中区を看取できる。遺構との関係では，全体的な出土範囲は溝８号より西側に限定され，集中する範囲は溝４号と溝５号に区画されたコの字状の区画範囲内に収まることを指摘できる。この区画内からは，掘立柱建物跡１号と掘立柱建物跡２号のほか多数のピットが検出されている。また，隣接するA-30区からは円面硯が出土している。墨書は溝８号の区画内，ヘラ書きは溝４号と溝５号の区画内に集中し，この範囲内にそれぞれと何らかの関連をもつ施設が置かれていた可能性をうかがうことができる。

上記の施設の性格について，以下の事例をあげる。第１に，これまでの調査指導からヘラ書き土器は公的な性格を持つ物流拠点との関連を持つことと，９世紀代の倉庫群（倉院）は間隔を空けて配置することが指摘されている。また，本遺跡の北東1.5㎞には，郡名「阿多」の墨書の出土した小中原遺跡があり，近隣に阿多郡家があったと考えられている。本遺跡の立地は，万之瀬川と薩摩半島西岸を縦貫する道の交差する渡河点にあたり，河川と陸路の流通の要所であり，近辺に阿多郡家に関連する倉庫群が存在した可能性がある。次に，本遺跡と同様に「宅」墨書を多数出土した遺跡として，石川県金沢市の畝

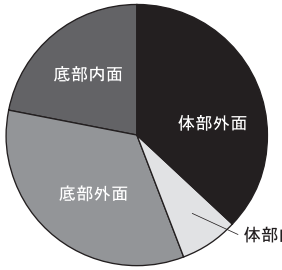
墨書の施された器種



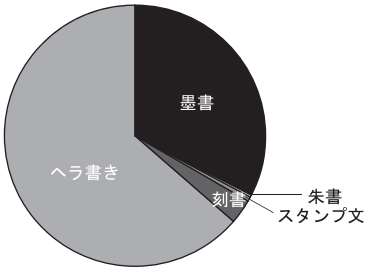
墨書の施された器形



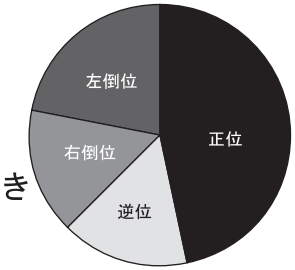
墨書の施された部位



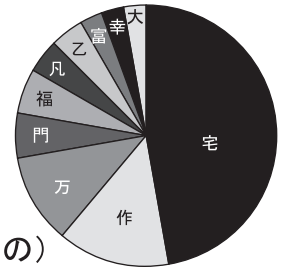
墨書の種類

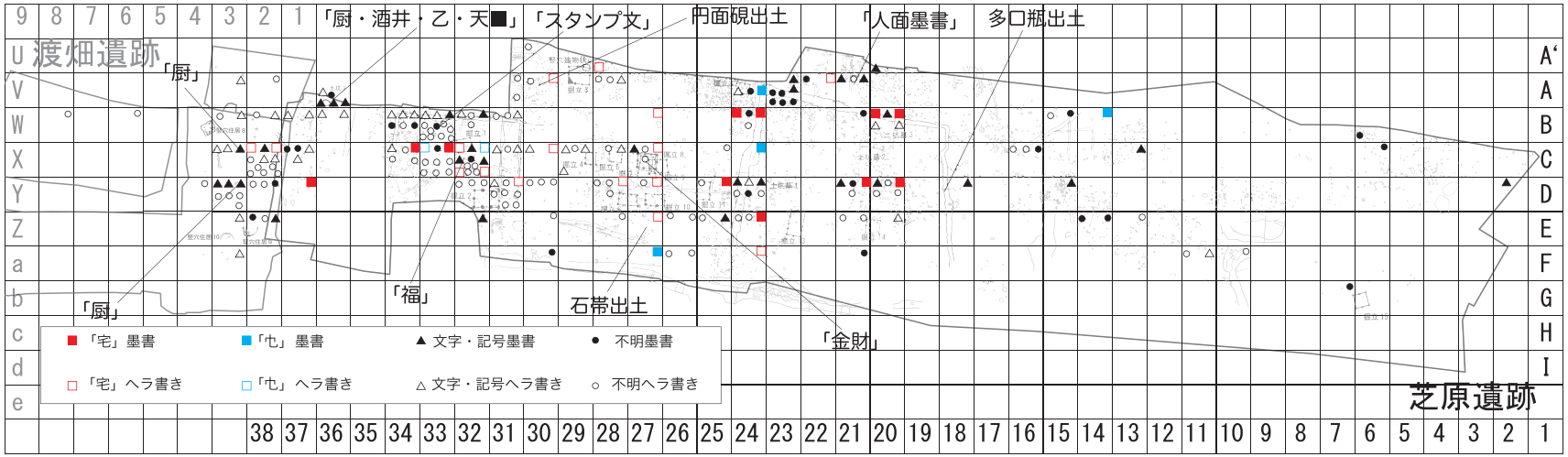


墨書の向き（体部）



墨書の文字（複数あるもの）





墨書土器出土状況（グリッド単位）

田ナベタ遺跡があげられる。この遺跡は日本海に面した大野川下流域に位置する大規模な遺跡である。古代官衙跡と考えられ，多数の建物跡（倉庫群）や「殿」「舘」「三宅」「宅」などの墨書土器・荷札木簡が出土し，これらは倉庫群との関係があるとみられている。

以上のことから，本遺跡で出土した墨書「宅」は，２ヶ所の区画溝エリア内から集中して出土し，そこには古代の倉庫群とみられる掘立柱建物跡があり，これらは公的な性格を持つ倉庫群と考えられる。墨書「宅」は，官衙あるいは寺院などの公的な性格を持つ倉庫群に伴う土師器・須恵器に施されたものであると考えられる。

第３節　中世の遺物

本遺跡の基本土層（調査時）では，Ⅲ層を中世の包含層としているが，整理作業時において詳細に遺物を分類すると，Ⅱ～Ⅳ層にわたって中世の遺物が出土していることが判明した。これは河川の氾濫による不安定な堆積のためと考えられる。このため表層からも大量の遺物が出土しており，それらも包含層内出土遺物に含め掲載した。

本遺跡からは，多種多様の輸入陶磁器や中世の国産陶器が出土している。その総数は約17000点と，同じ万之瀬川流域の持躰松遺跡（一次・二次），渡畑遺跡，上水流遺跡や県内の中世遺跡と比較しても突出している。出土遺物の年代幅も，Ａ期からＫ期まで連綿と続く。

万之瀬川流域の中世遺跡については，すでに，持躰松遺跡（一次）の性格や評価が様々な論考でなされている。本遺跡も持躰松遺跡と渡畑遺跡を挟んで近隣することから，両遺跡の関連性が考えられるが，ここでは，本遺跡から出土した輸入陶磁器や国産陶器の組成や特徴を述べ，そこから推測される本遺跡の様相について考えてみたい。

（１）芝原遺跡の青磁・白磁・青花・青白磁

芝原遺跡からは，多くの輸入陶磁器が出土した。ここでは，青磁・白磁・青花・青白磁から見た芝原遺跡の特徴をまとめていきたい。

芝原遺跡からは，青磁3880点・白磁2686点・青花855点，青白磁36点，合計で7457点が出土した。青磁が全体の52％を占め，次に白磁が36％，青花が11％，青白磁が１％となる。

次に，種別ごとに見ると，青磁は，中世前期にあたる龍泉窯系青磁椀Ⅰ類やⅡ類，同安窯系青磁が多く出土している。中世後期も，上田Ｂ群と上田Ｄ群を中心に多く出土している。白磁は，椀は中世前期にあたる白磁椀Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類を中心に，皿は中世前期後半から中世後期にかけての白磁皿Ⅸ類や森田分類の皿を中心に出土している。青花は，碗はC群とE群を中心に，皿はC群を中心に出土している。

時期ごとの出土遺物の様相は，以下のとおりになる。

Ａ期（８世紀末～10世紀中頃）

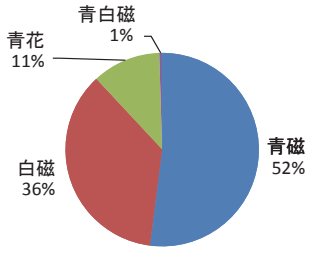
小振りな玉縁を持つ白磁椀Ⅰ類と越州窯系青磁が，少数ながら出土している。

Ｂ期（10世紀後半～11世紀中頃）

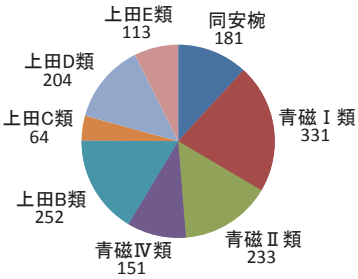
この時期の貿易陶磁器は出土していない。

Ｃ期（11世紀後半～12世紀前半）

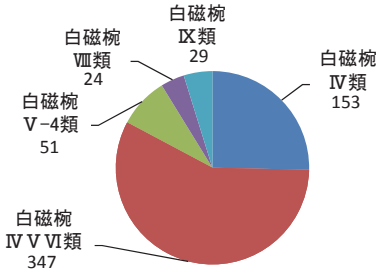
白磁のピークがこの時期にあり，その中でも玉縁口縁を呈する白磁椀Ⅳ類が多く出土している。その他に，白磁椀Ⅱ類・白磁椀Ⅴ類・白磁椀Ⅵ類・白磁皿Ⅱ類・白磁



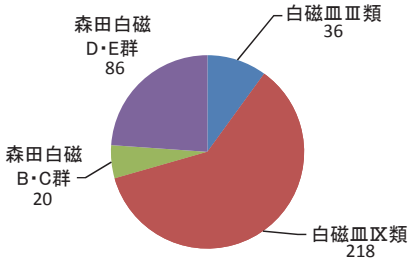
芝原遺跡　輸入磁器出土割合



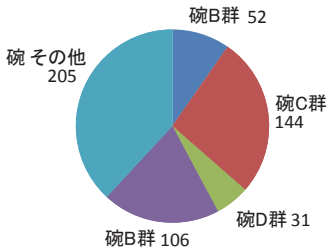
青磁・椀の分類別内訳



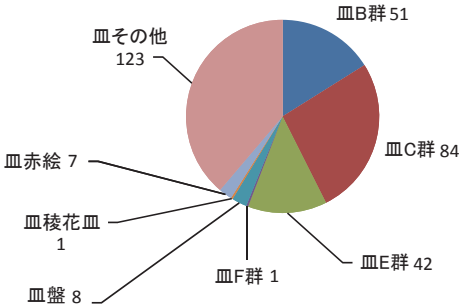
白磁・椀の分類別内訳



白磁・皿の分類別内訳



青花・碗の分類別内訳

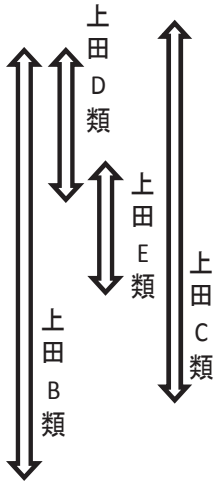


青花・皿の分類別内訳

芝原遺跡青磁・白磁・青花編年表

（○：出土、◎：多く出土）

時期区分		白磁	青磁	青花	青磁上田分類
A期 古	8C末	白磁Ⅰ類 ○	越州窯系青磁Ⅰ類・Ⅱ類 ○ 長沙窯系青磁 青磁褐彩 青磁褐釉		
A期 新	10C中				
B期	10C後 11C中	白磁ⅩⅠ類	越州窯系青磁Ⅲ類		
C期	11C後	白磁椀Ⅱ類 ○ 白磁椀Ⅳ類 ◎ 白磁椀Ⅴ1類 ○ 白磁椀Ⅴ2類 ○ 白磁椀Ⅴ3類 ○ 白磁椀Ⅵ類 ◎ 白磁椀ⅩⅡ類 白磁椀ⅩⅢ類 白磁皿Ⅱ類 ○ 白磁皿Ⅳ類 白磁皿Ⅴ類 白磁皿Ⅵ類 ○ 白磁皿Ⅷ類 白磁鉢Ⅲ類	初期龍泉窯 同安窯系青磁O類 耀州窯系青磁 青白磁 ○		
	12C前	白磁椀ⅩⅣ類			
D期	12C中	白磁椀Ⅴ－4類 ○ 白磁椀Ⅷ類 ○ 白磁皿Ⅲ類 ○	龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1類 ◎ 龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2類 ◎ 龍泉窯系青磁椀Ⅰ－3類 ○ 龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類 ○ 龍泉窯系青磁椀Ⅰ－6類 ○ 龍泉窯系青磁皿Ⅰ類 龍泉窯系青磁坏Ⅰ類 同安窯系青磁椀Ⅰ類 ○ 同安窯系青磁椀Ⅱ類 ○ 同安窯系青磁椀Ⅲ類 ○		
	12C後	白磁椀Ⅶ類 ○ 白磁皿Ⅷ－1類 ○	同安窯系青磁椀Ⅳ類 同安窯系青磁皿Ⅰ類 ○		
E期	13C初前後 13C前	白磁皿Ⅷ－2類 ○	龍泉窯系青磁椀Ⅱ－a・b類 ◎ 龍泉窯系青磁坏Ⅱ類		
F期	13C中	白磁Ⅸ類 ◎ 白磁Ⅹ類	龍泉窯系青磁椀Ⅲ類 龍泉窯系青磁坏Ⅲ類 ○		上田B類 ◎ 上田C類 ○
	14C初前後		龍泉窯系青磁椀Ⅱ－c類 ○		上田D類 ◎ 上田E類 ○
G期	14C初前後	森田白磁B群 ○ 森田白磁C群 ○ 福建省系白磁 ○	龍泉窯系青磁椀Ⅳ類 ◎ 龍泉窯系青磁坏Ⅳ類 ○ 龍泉窯系青磁皿Ⅳ類		
	14C中		福建省系青磁 ○		
H期	14C後・末 15C前・中	森田白磁D群 ○		染付碗B群 ○	
I期	15C前・中	森田白磁椀E 森田白磁皿E2群 ○		染付皿B1群 ○	
	15C後				
J期	15C末	森田白磁椀E群 森田白磁皿E2群 ○		染付碗C群 ◎ 染付碗D群 ○ 染付皿B1群 ○ 染付皿C群 ◎	
	16C前・中				
K期	16C中・後	森田白磁皿E群		染付碗E群 ◎ 染付皿B2群 ○ 染付皿E群 染付碗F群	
	17C前			染付皿F群 ○	



皿Ⅳ類が出土している。青磁は出土していない。青白磁は，草花文を型押しした良質の合子や小型の坏を中心に出土している。

D期（12世紀中頃～後半）

中世前期の青磁のピークがこの時期にあり，内面無文や劃花文が描かれる龍泉窯系青磁椀Ⅰ類が多く出土している。その他に，ヘラ状工具による略化した花文と櫛状工具によるジグザク状の点描文を持つ同安窯系青磁，嘴状の口縁部を持つ白磁椀Ⅴ-4類，白磁椀Ⅷ類，白磁皿Ⅲ類，白磁皿Ⅷ類等が出土している。C期とは異なり，青磁が出土遺物の中心になる。

E期（13世紀初頭前後～前半）

鎬蓮弁を持つ龍泉窯系青磁椀Ⅱ類が多く出土し，その他に白磁皿Ⅷ類が出土している。E期もD期と同様に，青磁が出土遺物の中心を占めている。

F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）

口縁部に口禿を持つ白磁Ⅸ類が多く出土し，その他に龍泉窯系青磁坏Ⅲ類や龍泉窯系青磁椀Ⅱ-c類などが少数ながら出土している。青磁の中でも優品とされるⅢ類の椀や皿，坏などの出土はごくわずかで，大量生産品の白磁Ⅸ類の椀や皿が多く出土していることは，当時の芝原遺跡の様子を知るヒントになる。

G期（14世紀初頭～14世紀中頃）

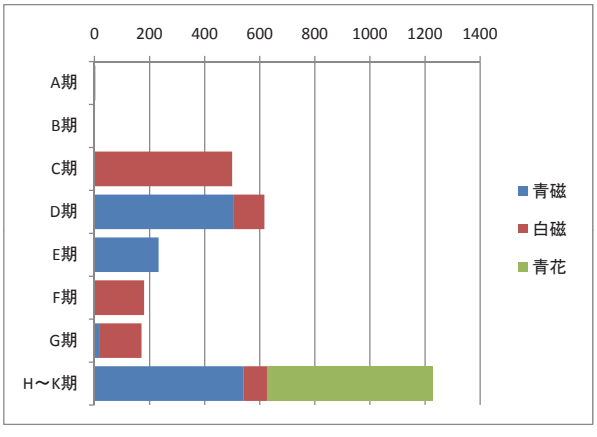
龍泉窯系青磁椀Ⅳ類が多く出土し，その他に龍泉窯系青磁坏Ⅳ類や森田分類B群･C群の白磁も出土している。また，福建省系の青磁や白磁も少数ながら出土している。

H期～K期（14世紀後半～17世紀前半）

中世後期の青磁のピークが見られ，上田分類青磁椀B類とD類，青花が多く出土している。その他に，線刻蓮弁を施す上田分類青磁椀C類や太い直口口縁を持つ上田分類青磁椀E類，森田分類D群・E群の白磁も出土している。

時期区分ごとの出土点数をグラフで示すと，以下のようになる。

これらを概観すると，芝原遺跡の輸入陶磁器については，中世全体を通して連綿と遺物が出土していることがわかる。また，その中でも中世前期のC期からD期，中世後期のH期以降に遺物出土の大きなピークが見られる。鎌倉時代から南北朝時代にあたるE～G期の輸入陶磁器の遺物量は，どの地域でも減少傾向が見られるが，芝原遺跡でも同じような傾向が見られる。また，芝原遺跡では，輸入陶磁器の標識陶磁器となる大量生産品だけではなく，中世前期には青白磁の合子や坏，中世後期には大型の盤や香炉，小型の壺や瓶などの稀少品が少数ながら出土している。



時期ごとの青磁・白磁・青花出土状況

（2）貿易陶磁器を出土する周辺の遺跡との関係について

芝原遺跡周辺には，貿易陶磁器を出土遺物に持つ遺跡が数多くある。それらの遺跡の貿易陶磁器に関する出土遺物の特徴をまとめてみる。

・持躰松遺跡

芝原遺跡の下流に位置する持躰松遺跡からは，中世前期にあたるD期～E期（12世紀中頃～13世紀前半）を中心に貿易陶磁器が多く出土する。中世後期における貿易陶磁器の出土は減少する。

・渡畑遺跡

芝原遺跡の下流に隣接する渡畑遺跡からは，中世前期にあたるC期～D期（11世紀後半～12世紀後半）を中心に貿易陶磁器が多く出土する。これは下流に隣接する持躰松遺跡の遺物構成と類似する。しかし，G期以降の中世後期にも，ポルトガル語が記載された景徳鎮窯系の青花碗などが出土しており，中世後期は芝原遺跡とのつながりがうかがえる。

・上水流遺跡

芝原遺跡の上流にあたる上水流遺跡は，中世全体を通して貿易陶磁器が出土するが，そのピークは中世前期にあたるE期～F期（13世紀初頭前後～14世紀初頭前後）である。持躰松遺跡より少し遅れて発展し，万之瀬川流域の活動拠点の一つとなっている。

・掛ノ上遺跡

渡畑遺跡･持躰松遺跡の対岸に位置する掛ノ上遺跡は，中世前期の貿易陶磁器の出土量は少ない。しかし，中世後期になるとヘラ描き蓮弁文を持つ龍泉窯系青磁を中心に，貿易陶磁器の出土量は増えてくる。中世後期にピークを持つことから，持躰松遺跡や渡畑遺跡とは遺跡の性格が異なる。掛ノ上遺跡からは中世住居跡の遺構が検出されてないため推測ではあるが，持躰松遺跡周辺の機能が何かしらの理由で対岸に移った可能性もある。

・小薗遺跡

万之瀬川の支流で，金峰山西側裾野を流れる境川の河岸段丘上に位置する小薗遺跡では，中世前半のD期に貿易陶磁器出土のピークを持つ。持躰松遺跡の遺物構成と近似していると報告がなされている。しかし，F期の標識陶磁器である白磁Ⅸ類が当該期の主流となり，その後も中世後期の貿易陶磁器が出土する傾向は，むしろ芝原遺跡の遺物構成に近似すると考えられる。

・箕作遺跡

金峰山南東部，標高約210ｍの丘陵端部に位置する箕作遺跡は，F期の白磁Ⅸ類が主体を占める遺跡である。

箕作遺跡の近くには，万之瀬川の支流である長谷川が流れ，長谷川は上水流遺跡付近で本流の万之瀬川と合流する。箕作遺跡からは，鎬蓮弁をもつ青磁椀Ⅱ類や良質の青磁椀Ⅲ類が出土しており，貿易陶磁器出土のピークは下流の上水流遺跡と遺物構成が近似する。

・川辺郷地頭仮屋跡

万之瀬川の上流にある川辺郷地頭仮屋跡は，平山城の麓に位置し，鹿児島市から枕崎や加世田に通ずる要衝の地である。中世遺物の主体として，輸入陶磁器が占めている。中世前期の青磁椀Ⅰ類・Ⅱ類も出土するが，輸入陶磁器出土のピークは，中世後期のH期以降となっている。これは，坊津の泊港との関係も併せながら，万之瀬川下流域の上水流遺跡や芝原遺跡とのつながりをうかがわせるものである。

これらの遺跡のピークをまとめてみると，次ページの年表のようになる。中世全体を通して万之瀬川やその支流の上流に向かって，貿易陶磁器の流れがある。その中で芝原遺跡周辺は，貿易陶磁器を含め，物流の集結地点及び出発地点としての機能をもつ場所であったと考えられる。また，芝原遺跡対岸の地頭所という地名から市場の存在を示唆する報告もある(『持躰松遺跡　第1次調査』1999年)。掘立柱建物跡やかまど跡，まとまった古銭の出土や製鉄関連遺構などの中世遺構がある芝原遺跡は，市場を支える人々の生活の拠点であった可能性も高い。

（3）輸入陶器・国産陶器からみた芝原遺跡の性格

本遺跡からは，中世に相当する輸入陶器が2946点（中国瓦を含む），国産陶器が3980点出土した。その内訳は多種多様で，輸入陶器は中国陶器の天目碗，盤，鉢，水注，壺（耳壺，無耳壺），甕等が出土し，朝鮮陶器やベトナム陶器も若干ではあるが出土している。国産陶器は，畿内系瓦器，中世須恵器（東播系，カムィヤキ，樺万丈産），中世陶器（瀬戸・美濃，常滑，備前），瓦質土器，土師質土器，瓦等が出土している。その年代は中世前期のみならず，中世後期においても依然大量の遺物が出土する状況が見られる。

本稿では，本遺跡から出土した輸入陶器と国産陶器の様相や特徴を述べ，そこから導き出せる芝原遺跡の性格について考えてみたい。

輸入陶器については，中国陶器が2931点，朝鮮陶器やベトナム陶器も若干ではあるが出土している。これらの中で特徴的な出土状況として次の３点が挙げられる。

まず一つめは，大型貯蔵容器である壺・甕の出土量が多いことである。壺（耳壺・無耳壺）は1355点（口縁部33点，底部145点），甕は138点（口縁部25点，底部８点）出土している。これらを大宰府分類に比定すると，壺は耳壺Ⅲ～Ⅶ類，ⅩⅡ類，無耳壺Ⅰ類，Ⅴ類，甕はⅣ類を除くⅠ～Ⅲ類とⅤ類に分類され，年代は，12世紀後半から13世紀後半頃に比定される。このような大型貯蔵容器の出土状況は，博多や大宰府と類似している。また，大宰府分類に該当しない資料で，14世紀前半以降の遺物も出土している。これらの大型貯蔵容器は，製品としてではなく，コンテナとして本遺跡に持ち込まれたものと考えられる。

二つめは，磁州窯系の白土掻き落としの瓶（梅瓶）の出土である。小片であるが９点出土している。隣接する渡畑遺跡からも文様構成や胎土が同様の資料が４点出土している。９点中４点の出土地点は，渡畑遺跡と重複しており，同一個体であることが確認された。この付近からは３間×３間の総柱建物跡も検出されている。報告ではこの建物跡の性格について触れられていないが，周辺からは博多遺跡群出土の瓦と同様の瓦が集中して出土していることから，廟の可能性が考えられる。(佐藤2008)白土掻き落としの梅瓶についてもこの遺構との関連性が考えられる。一方で９点中の２点については，約300m上流の上水流遺跡に近い場所から出土しており，文様構成や胎土は類似しているが，別個体と考えられる。

三つめは，華南産の緑釉陶器（華南三彩か？）や中国産と思われるが詳細な産地が不明な緑釉陶器の存在である。華南産の資料は，盤が10点みられ，同一個体と考えられる。産地不明の緑釉陶器については，瓶等が10点出土している。このうち瓶は緑釉の上から鉄絵が描かれたもので，渡畑遺跡からも同一個体と思われる資料が出土している。

そのほかの中国陶器としては，盤90点，鉢156点が出土した。天目碗は204点出土しており，そのほとんどが中国産で，瀬戸・美濃産は３点と少ない。いわゆる「建盞」に近い器形で，13世紀代の資料もあるが，多くは高台脇が水平に削られており，15～16世紀代に比定されるものである。中国産天目碗がこれほど大量に出土した遺跡は，県内では非常に珍しい。盤は黄釉盤が出土している。大宰府分類Ⅰ-1a類，Ⅰ-1b類，Ⅰ-2b類と分類外のものがみられ，そのほとんどは11世紀後半～12世紀代に比定されるが，一部13世紀代や14世紀以降のものもある。鉢は，福建省産で白色砂粒を多く含む粗い胎土の資料と，清良な胎土を有する資料がある。それぞれ，前者が大宰府分類Ⅰ-1b，Ⅰ－2a，後者がⅢ－1・2，Ⅵ類であり，12世紀後半～13世紀に比定される資料である。またその他に，大宰府分類にない14世紀以降の資料と思われるものも，点数は多くないが出土している。

朝鮮陶器は高麗青磁が３点(同一個体)，粉青沙器１点，徳利８点（同一個体）等が出土しており，ベトナム陶器は青花の皿が２点（同一個体）出土している。

国産陶器については，次の４点が特徴として挙げられる。

まず一つめは，畿内産瓦器の出土である。本遺跡から出土した瓦器は椀，皿が46点で，ほぼ完形の資料も１点みられる。北部九州産の資料はなく，すべて畿内産の和泉型で，和泉Ⅲ-1（橋本2009），12世紀中頃～後半に相当する資料である。持躰松遺跡（一次・二次）や渡畑遺跡からも和泉型瓦器椀は出土しているが，持躰松遺跡では楠葉型も若干出土している。瓦器生産は畿内から九州中

世紀	年代	時代		出来事	各遺跡貿易陶磁器ピーク								中国	朝鮮	南薩地域の出来事
					芝原遺跡	渡畑遺跡	小薗遺跡	持躰松遺跡	箕作遺跡	上水流遺跡	掛ノ上遺跡	川辺郷地頭仮屋跡			
一〇世紀	901～	平安時代		菅原道真大宰府へ									五代十国	高麗	
	911～														
	921～														
	931～														
	941～														
	951～														
	961～														
	971～														
	981～														
	991～			藤原道長右大臣											
一一世紀	1001～												北宋		
	1011～		摂関政治	このころ「源氏物語」											大宰府から島津荘が藤原氏に寄進
	1021～														
	1031～														
	1041～														
	1051～			前九年の役											
	1061～														
	1071～														
	1081～		院政	後三年の役											
	1091～														
一二世紀	1101～														
	1111～														
	1121～														
	1131～														
	1141～														阿多四郎忠景が私領を金峰山観音寺に寄進
	1151～			保元・平治の乱											
	1161～														
	1171～			法然浄土宗を開く											別府五郎忠明，別府城を築く
	1181～			守護・地頭をおく											
	1191～	鎌倉時代											南宋		惟宗忠久，薩摩・大隅国守護職に補任
一三世紀	1201～		執権政治	運慶・快慶金剛力士像											
	1211～														
	1221～			承久の乱											
	1231～			御成敗式目											
	1241～														
	1251～			鎌倉大仏											
	1261～														清水磨崖仏大梵子
	1271～			元寇（文永の役）											
	1281～			元寇（弘安の役）											
	1291～			徳政令											清水磨崖仏宝篋印塔
一四世紀	1301～												元		
	1311～														
	1321～														
	1331～	室町時代	南北朝の対立	建武の新政											
	1341～			天龍寺船を中国へ											
	1351～			倭寇盛ん・紅巾の乱											
	1361～														
	1371～														
	1381～														
	1391～			金閣寺完成											
一五世紀	1401～			勘合貿易はじまる										朝鮮	二階堂氏，伊作島津家の傘下に
	1411～														鮫島氏，伊作島津家の傘下に
	1421～														島津国久が加世田の領主に
	1431～														
	1441～			土木の変											
	1451～														
	1461～			応仁の乱											
	1471～														
	1481～			銀閣寺完成・一向一揆											
	1491～														島津友久，亀ヶ城を築城
一六世紀	1501～		戦国時代										明		
	1511～														
	1521～														
	1531～														島津忠良別府城を攻略
	1541～			鉄砲・キリスト教伝来											
	1551～														
	1561～														
	1571～	安土・桃山													
	1581～														相星の二世観音が祀られる
	1591～			文禄・慶長の役											鮫島宗政，海外貿易を始める
一七世紀	1601～	江戸時代													
	1611～			一国一城令									清		
	1621～														

部における西日本一帯で行われているが，南九州では産地は確認されていない。そのため中世の遺跡から瓦器が出土することはほとんどみられない状況であったが，近年，万之瀬川下流域や鹿児島神宮関連の遺跡において瓦器の出土例が報告され，資料が増加しつつある。この時期は，九州型の瓦器椀が搬入されることが一般的であるが，本遺跡を含め万之瀬川流域では，畿内産の瓦器のみが搬入されていることが注目される。

二つめは広域流通する以前の備前産擂鉢や甕，常滑産大甕などがまとまって出土している状況である。中世後期を代表する一大港湾遺跡である堺環濠都市遺跡を有する堺市域では，15世紀前半頃より備前産擂鉢の出土が増加し始め，15世紀第４四半期にはシェアを独占する状況が見られることから（續伸一郎2010），備前産擂鉢の広域流通は15世紀後半以降と考えられるが，本遺跡では，14世紀後半から15世紀前半に相当する資料が出土している。また，大甕や壺が一定量みられることも注目される。常滑産大甕についても，口縁部がＬ字状を呈する５型式（13世紀第２四半期）の資料がみられ，東海，瀬戸内地域との早くからの交易が窺い知れる。

三つめは古瀬戸製品の出土である。天目碗３点，瓶子１点，卸皿４点が出土している。天目碗は黄天目もみられ，15～16世紀頃の資料と思われる。瓶子は13世紀代，卸皿については13世紀後半以降の資料と思われるが，詳細は不明である。県内での古瀬戸の出土例は極めて少ないが，持躰松遺跡の卸皿のほか，近年の出土例では川骨遺跡（薩摩川内市）の水注や下鶴遺跡の瓶子など，わずかづつではあるが増加している。

その他，中世前期においては，東播系捏ね鉢やカムィヤキも多く出土しており注目される。

中世後期に相当する瓦質土器の擂鉢や火鉢なども大量に出土している。火鉢については，多様な印刻文様がみられ，15～16世紀代の資料と思われる。また，風炉も出土している。瓦質土器の擂鉢については出土量も多く，そのほとんどは内面があばた状に摩滅した使用痕が残る。同様の状況は備前産擂鉢にも見られる。

以上，輸入陶器と国産陶器についての特徴を述べたが，遺跡の性格について考えてみたい。

出土遺物の特徴（＝組成）は，中世前期においては，九州の一大貿易都市である博多やその消費地である大宰府の出土状況に，規模こそ違えども匹敵するものである。多種多様な輸入陶磁器の存在と，倉庫や廟の可能性が考えられる建物跡のほか，多数の掘立柱建物跡群等から，本遺跡は，万之瀬川流域における大規模な中国貿易の拠点と見なすことができよう。また，畿内産瓦器や，古瀬戸，常滑産大甕，備前産擂鉢・甕・壺，東播系捏ね鉢等の希少性の高い資料の搬入は，宋から博多への交易とは異なり，東海から畿内，そして瀬戸内をとおる別ルートで搬入されたものと考えられ，この地で中国貿易を取り仕切る権力者が，畿内地域の権門とも深い関係にあったことが想像できる。

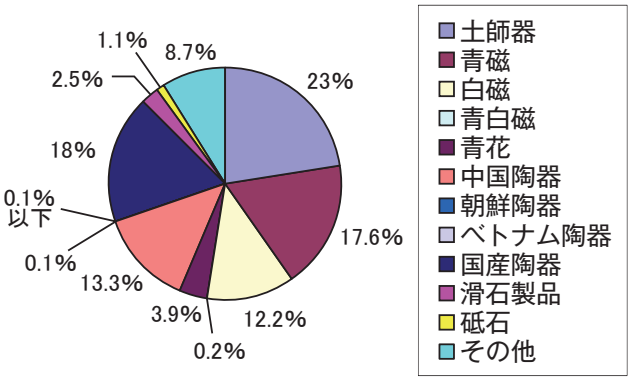
中世後期においては，前期に引き続き輸入陶磁器の出土量は多いことから，本遺跡が依然，中国貿易の拠点であった可能性が考えられる。しかし，大型貯蔵容器類は前期に比べると少なくなり，国産陶器類が中心を占める。遺構では，この時期に相当する掘立柱建物跡やかまど跡も多く検出されており，前述した擂鉢の状況等からも考えると，生活の場でもあったことが推測される。また，居住していた人々は，風炉の出土や天目碗の出土量から，茶道をたしなむ上級階層の人々であり，中国貿易の権益を掌握する権力者であった可能性が考えられる。

本遺跡では，中世全般にわたり中国貿易や国産陶器の搬入が盛んに行われているが，地域の歴史からみてもその権益を握った権力者は入れ替わったと思われる。その人物については想定するに至らなかったが，本遺跡が中世全期を通じて，万之瀬川下流域の中心的役割を果たした場所であったことは，多くの遺構，遺物から想定できる。

芝原遺跡を含め，万之瀬川下流域の中世的景観を復元することは，この地域の中世史を明らかにするためにも必要なことである。万之瀬川流域の中世に関する報告は，本報告書で最後となる。今後は，万之瀬川流域の４遺跡に止まらず，周辺の遺跡も含めた，各分野からの総合的な再検討が必要である。

（４）古銭について

芝原遺跡では，284枚の古銭が出土した。万之瀬川下流域では，隣接する渡畑遺跡から34枚（寛永通宝が24枚），持躰松遺跡から１枚，上水流遺跡から31枚の古銭が出土している。近隣の遺跡として二頭遺跡から32枚（墓内副葬品），花抜園墓地から49枚（墓内副葬品），上加世田遺跡から24枚出土している。古銭の出土枚数として，芝原遺跡は他の万之瀬川周辺の遺跡に比べて，大量に出土していることがわかる。　遺構内出土枚数のうち58枚が土坑墓内からの出土である。芝原遺跡の土坑墓は，古代から１基，中世から18基，近世から11基検出されている。中世・近世の土坑墓からは，明銭の「洪武通宝」や模鋳銭の「加治木銭」を中心に出土している。洪武通宝は，



中世出土遺物の破片数の割合

輸入陶器・国産陶器カウント表

種別	種別または器種	分類または器種	口縁	底部	胴部	合計	総数
中世土師器			—	3327	—	3327	3327
中国陶器	盤	Ⅰ-1a	2	3	0	5	90
		Ⅰ-1b	1	0	0	1	
		Ⅱ-2b	15	2	0	17	
		ⅠorⅡ	0	17	44	61	
		分類以外	6	0	0	6	
	鉢	Ⅰ-1b	10	0	0	10	156
		Ⅰ-2a	4	0	0	4	
		Ⅰ	0	13	35	48	
		Ⅲ	21	0	10	31	
		Ⅵ	17	0	9	26	
		分類不明	0	3	34	37	
	水注	Ⅳ	1	0	0	1	1371
		分類不明	7	1	7	15	
	耳壺	Ⅲ	2	0	0	2	
		Ⅳ	1	0	0	1	
		Ⅴ	1	0	0	1	
		Ⅵ	5	1	0	6	
		Ⅶ	4	1	0	5	
		ⅩⅡ	1	0	0	1	
		分類以外	4	2	2	8	
		分類不明	0	7	43	50	
	無耳壺	Ⅰ	8	0	0	8	
		Ⅴ	1	0	0	1	
		分類以外	6	1	10	17	
	水注or壺	分類不明	0	133	1122	1255	
	甕	Ⅰ	16	0	0	16	138
		Ⅱ	3	0	0	3	
		Ⅲ	2	0	0	2	
		Ⅴ	4	0	0	4	
		分類不明	0	8	105	113	
	磁州窯系梅瓶		0	0	9	9	303
	華南産盤		1	2	7	10	
	緑釉陶器		—	—	—	10	
	褐釉陶器		—	—	—	70	
	天目碗	—	41	31	132	204	
	中国瓦		—	—	—	30	30
	不明		—	—	—	843	843
朝鮮陶器	高麗青磁		3	0	0	3	13
	粉青沙器		1	0	0	1	
	徳利		8	0	0	8	
	壺		1	0	0	1	
ベトナム陶器	青花		2	0	0	2	2
国産陶器	瓦器	椀	5	4	—	9	46
		Ⅲ	11	1	—	12	
		椀orⅢ	—	—	25	25	
	中世須恵器	東播系	164	33	11	208	208
		カムィヤキ	12	7	237	256	256
		櫛万丈（捏ね鉢）	72	19	—	91	773
		〃　（その他）	29	0	—	29	
		捏ね鉢orその他	—	—	653	653	
		産地不明	—	—	—	109	109
	瀬戸・美濃	天目碗	2	3	0	5	26
		卸皿	0	4	0	4	
		瓶子	—	—	—	17	
	常滑産甕	５型式	3	0	0	3	465
		６a型式	11	0	0	11	
		６b型式	8	0	0	8	
		７型式	6	0	0	6	
		型式不明	0	14	423	437	
	備前産擂鉢	中世３期a	5	0	0	5	903
		中世３期b	8	0	0	8	
		中世４期	9	0	0	9	
		中世５期a	1	0	0	1	
		分類不明	0	56	156	212	
	備前産甕・壺		29	17	622	668	
	瓦質土器	擂鉢	144	154	580	878	1170
		火鉢	58	34	171	263	
		茶釜	7	0	14	21	
		羽釜	6	0	2	8	
	土師質土器	かまど・その他	—	—	—	24	24
滑石製品		石鍋	—	—	—	488	526
		二次加工品	—	—	—	74	
砥石			—	—	—	237	237
その他（不明）			—	—	—	1929	1929

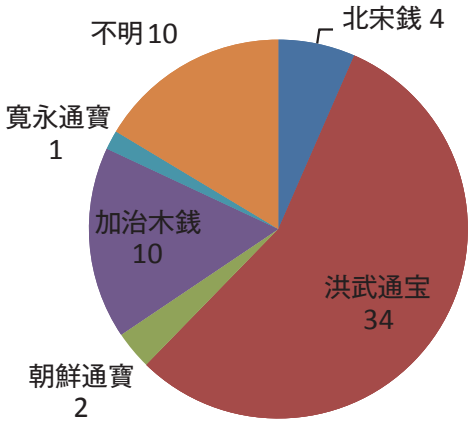
※　表内の「—」はカウント不可能，「０」は出土なしを意味する。

※　土師器については，糸切り底のものを中世は時期として取り扱った。底部総数は3327点であったが，口縁部，胴部については古代土師器との区別が難しく，カウントできなかった。そのため，便宜上1.5倍した数値を中世土師器の総数としてデータを作成した。

※　水注・壺（耳壺・無耳壺）については，口縁部の携帯により可能な限り分類を試みたが，胴部や底部２関しては判別不可能な資料も多く，それらの数量はまとめてカウントしている。

1368年が初鋳年で，土坑墓出土の古銭の半分を占める。また，加治木銭については，鋳造時期が定かでない。島津氏９代目の島津忠国（1425年太守任命）とのつながりについても，はっきりとしない。少なくとも慶長20年（1615年）以前とされている。これらは，六道銭として埋納していたと考えられる。一般に六道銭は６枚であるが，南九州では７枚埋納する例が多く，近隣の遺跡である上水流遺跡や花抜園墓地からも７枚埋納された古銭が出土している。芝原遺跡でも，６基の中世土坑墓から７枚埋納された六道銭が見つかっている。

埋納された古銭の種類についても，中世は洪武通宝，近世は洪武通宝と寛永通宝を中心に納められており，県下の遺跡と比較しても変化が見られない。このことから，芝原遺跡においても同様な葬送儀礼を行っていたと考えられる。



土坑墓内出土古銭内訳

芝原遺跡・土坑墓内の古銭出土表

古代	土坑墓１号	咸平元寶・紹聖元寶・景徳元寶	３枚
古代	土坑墓３号	不明	１枚
中世	土坑墓１号	洪武通宝	３枚
中世	土坑墓２号	加治木銭	２枚
中世	土坑墓３号	加治木銭	７枚
中世	土坑墓４号	洪武通宝	２枚
中世	土坑墓７号	洪武通宝	６枚
中世	土坑墓８号	洪武通宝	７枚
中世	土坑墓９号	洪武通宝	７枚
中世	土坑墓10号	洪武通宝・朝鮮通宝	７枚
中世	土坑墓11号	洪武通宝・不明	14枚
中世	土坑墓12号	洪武通宝	６枚
中世	土坑墓13号	洪武通宝・朝鮮通宝	７枚
中世	土坑墓14号	政和通宝	１枚
中世	土坑墓16号	洪武通宝	７枚
中世	土坑墓18号	洪武通宝	２枚
近世	土坑墓１号	洪武通宝	１枚
近世	土坑墓２号	寛永通宝	３枚
近世	土坑墓６号	洪武通宝・加治木銭	３枚
近世	土坑墓９号	不明	５枚

第４節　近世の出土遺物からみた芝原遺跡

本遺跡では，近世の包含層に相当する層をⅡ層としているが，河川流域であるため川の氾濫等により本遺跡における層位は不安定である。したがって近世に相当する遺物はⅡ～Ⅳ層から出土している。また，表層からも大量の遺物が出土しており，それらを含めると，近世陶磁器は3260点出土している。出土状況はD－35区を中心とした周辺から多くの出土が見られる。出土遺物は，肥前陶磁器の碗・皿・鉢・蓋・徳利・擂鉢等，薩摩焼の碗・皿・蓋・徳利・土瓶・片口・鉢・甕・壺・灯明具・仏具等である。年代としては，1580年代～19世紀代に相当する陶磁器が出土している。

以下，本遺跡における陶磁器組成の変化について述べる。

1580年代～17世紀初頭は，肥前磁器の生産が開始される前にあたり，磁器については中世末期からの流れで，景徳鎮窯産や漳州窯産の青花が残る。陶器は，肥前陶器の胎土目積みや砂目積みの碗や皿が流入している。碗は，天目碗や沓形碗等の茶器が目立つ。また，皿では鉄絵唐津の大皿が少量出土した。大型の日用雑器については，初期薩摩焼で，串木野窯産と思われる甕（第359図2026）が１点出土している。この時期は，中世と近世の過渡期のため，近世陶磁器は中世的な組成の中に混在する傾向がみられる。そのため，時代は近世としているが，中世から続く中国陶磁器が組成の主体を占め，17世紀以降に多くなる肥前陶磁器や薩摩焼は，まだ数少ない状況である。

17世紀初頭～17世紀代は，肥前陶磁器が主体となりはじめるが，近世における本遺跡の主体時期は次の18世紀代であり，そこからすると数量的にはまだ多くはない。磁器では初期伊万里の碗・皿等がみられる。清朝の明暦２年（1650年）の海禁令などの鎖国政策により，中国磁器の輸出が激減することによって，肥前磁器の海外輸出は本格化するが，本遺跡においても出土の荒磯文の碗（第336図1807・1808）や日の字鳳凰文の皿（第341図1856）等，海外輸出向けに製作された肥前磁器が出土している。荒磯文の碗は，隣接する渡畑遺跡や上鶴遺跡でも出土しており，本遺跡から出土した３点を含め，万之瀬川流域での近世初頭における陶磁器の流通を考える上で重要な資料である。陶器の食膳具では，京焼の色絵碗が１点あるが，その他は肥前陶器で，内野山産の呉器手碗や銅緑釉の碗・皿，京焼風陶器の煎じ碗等が中心である。薩摩焼では，初期龍門司と思われる碗が出土している。竪野系の白薩摩については，数点の出土が確認されるが，17世紀代に相当するものはないと思われる。調理具・貯蔵具では，肥前陶器の擂鉢が数点出土しているが，その多くは初期薩摩焼の堂平窯産と考えられる製品である。水注，片口，擂鉢，徳利，蓋，甕，壺等が出土しており，量的には多くないがさまざまな器種のものがみられる。堂平窯産の製品と考えられる資料は，近年出土例が増加しており，榕城跡，金丸城痕，川内川流域の川骨遺跡や下鶴遺跡でも数多く確認されており，17世紀代，特に17世紀中頃から後半（堂平Ⅰｂ期～Ⅱ期）においては，初期薩摩焼である堂平窯の製品がすでに広く流通していたことを裏付けるひとつの資料である。

18世紀代は，本遺跡での陶磁器の出土量がピークを迎える。この時期は，肥前磁器の生産が増大する時期で，18世紀後半には，くらわんか碗に代表される大量生産された碗や皿が多く流通する。本遺跡においてもその傾向は見られ，食膳具の碗や皿において，コンニャク印判五弁花がスタンプされる資料や，波佐見産と思われる碗・皿が数多く出土している。また，高台内底にハリ支えの目跡の残る大皿や上質の鉢などもあり，生活した社会的階層を類推できる資料も散見している。また陶器の碗・皿については，一部肥前産が残るものの，流通は磁器が主体となるため出土量も減少し，それに代わり，在地産の陶器が増える。本遺跡では，龍門司系窯場の資料が目立ち，17世紀末の初期龍門司と思われる製品や，18世紀後半の龍門司窯，元立窯の碗や皿，灯明具，仏具などの小形の日用品がみられる。それに対し，竪野系窯場の製品で，白薩摩の資料は３点と少ない。これは前述した上質の大皿や鉢，資料と合わせて，本遺跡に居住した人々の社会的階層を知る手がかりである。

大形の調理具・貯蔵具は，苗代川産の製品で占められるが，17世紀代にあたる堂平窯産の製品とは異質であり，19世紀代に比定される資料は極めて少ないため，これらの資料は18世紀代に該当すると考えられる。

19世紀の薩摩藩内における陶磁器の流通は，在地産の端反碗などが肥前磁器を抑えて大量に出回る傾向があるが，本遺跡では極端に少ない。この要因は，享和２年（1802）に発生した万之瀬川の川筋が変わるほどの大氾濫が考えられ，遺跡及びその周辺には環境が激変するほどの大規模な被害が発生したと思われる。この災害以降，この遺跡の性格は，それまで居住地主体中心から耕作地主体に変化することなる。

（参考文献）

金峰町教育委員会　2005『芝原ｂ遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(21)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(39)

大口市教育委員会　1997『新平田遺跡・辻町B遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)

永山修一　2009『隼人と古代文化』同成社

平川南　2000『墨書土器の研究』吉川弘文館

阿部猛編　2009『古代史人名事典』東京堂出版

吉田孝　1983『律令国家と古代の社会』岩波書店

宮崎康充編　1989『国司補任』続群書類従完成会

大野進　2007『日本語の源流を求めて』岩波書店

五味克夫　1981「大隅国御家人酒井氏について」『御家人制の研究』吉川弘文館

柴田博子・永山修一　2010『日向国出土墨書土器集成・

補遺（２）・薩摩国出土古代墨書土器集成』
柴田博子　2006「鹿児島県の墨書土器」『先史・古代の鹿児島・通史編』鹿児島県教育委員会
伊藤雅文ほか　2006『金沢市畝田東遺跡群Ⅵ』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
坂元佳代子ほか　2004「墨書土器の性格―鹿児島県の場合―」『縄文の森から　第２号』鹿児島県立埋蔵文化財センター
中四国農政局　下関市教育委員会　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
下関文化財調査報告書(25)2007『波原遺跡・森広遺跡・片山遺跡』
鹿児島県加世田市教育委員会
加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(24)2003『掛ノ上遺跡』
鹿児島県金峰町教育委員会
金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)1999『持躰松遺跡　第１次調査』
金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)2000『小薗遺跡』
金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(18)2004『箕作遺跡』
鹿児島県南九州市教育委員会
南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)2010『川辺郷地頭仮屋跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書(120)2007『持躰松遺跡』
発掘調査報告書(136)2009『上水流遺跡３』
発掘調査報告書(159)2011『渡畑遺跡２』
『金峰町郷土史』1987・1989金峰町郷土史編さん委員会編
『加世田市史』1986加世田市史編さん委員会編
本田道輝1988「鹿児島県下出土の銭貨集成」『鹿大史学35号』
小畑弘己1997「出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流路」『熊本大学　文学部論叢57史学篇』
兵庫埋蔵銭調査会『日本出土銭総覧1996年版』永井久美男編
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書，（163）2011　『下鶴遺跡』，（165）2011『川骨遺跡・西ノ平遺跡・川幡遺跡』
大庭康時「博多遺跡群の発掘調査と持躰松遺跡」，中村和美・栗林文夫「持躰松遺跡（２次調査以降）・芝原遺跡・渡畑遺跡について」，山本信夫「12世紀前後陶磁器から見た持躰松遺跡の評価-金峰町出土の焼き物から追求する南海地域の貿易・流通―」2003『古代文化vol.55』
中野晴久（1995）「常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研　究会編
藤澤良和2005「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～実行委員会
佐藤一郎2008『博多居留宋人が遺したもの』『福岡市博物館紀要第18号』福岡市博物館
橋本久和2009「瓦器椀の編年と年代観」『第28回中世土器研究会　中世考古学と地域･流通―瓦器椀からみる―』日本中世土器研究会
續伸一郎2010「堺環濠都市遺跡から出土した擂る卸す焼き物」『備前歴史フォーラム　擂る　～擂鉢からみる中世の社会～』備前市教育委員会・備前市歴史民俗博物館

補　遺

本稿は「芝原遺跡２　縄文時代遺物編」2011.3と「渡畑遺跡２　弥生・古墳時代以降編」2011.3の補遺編である。

１「芝原遺跡２　縄文時代遺物編」補遺

（１）土器

2501～2507は，並走する２本の沈線で文様を構成する土器群で，縄文時代後期の指宿式土器に該当する。

2501は底部を欠くが，2502に類似する深鉢形土器である。施文は絵画的雰囲気の高いいわゆる“人形文”で，４カ所の頂部を起点に２種類の文様が対峙する。第368図で示したように，Ａ面左に靴形文を右にＳ字の変形と見られる並走する２本の沈線文が見られる。一方Ｂ面には，向かい合う弧状文を３重に重ね，外側の下部は両側に鰭状に広がる。また，３重の向かい合う弧状文は，口縁部から胴部にシンメトリーな波状文（Ｓ字の変形文）が取り巻く。中でもＢ面に関しては，一見して波頂部方向を頭部とするシャチ等の鯨類の姿が連想できる。すなわち，シャチを鳥瞰した姿であり，左右のＳ字文は力強く泳ぎ進む波紋で，下部の両側に広がる鰭状文は尾鰭に相当する。また，波紋とした左右のＳ字文をシャチの胸鰭と見ることもできる。波頂部内面にも短沈線による鋸歯文，菱形文，向かい合うＳ字文が施される。施文帯及び内面とも丁寧に撫でて仕上げている。

2502は完形の深鉢形土器で，底部から胴部に膨らみ，胴部から口縁部にかけては直線的に立ち上がる形状で，口縁部と胴部の径がほぼ同一となる。なお，口縁内部を外側に押さえて調整することから，端部がやや外反する傾向が見られる。口縁部は４カ所の緩やかな山形頂部を持ち，口縁部には直線による細長い靴形文が連続して描かれる。頂部内面にも２本の短沈線を交差するように施し，その直下に２点の刺突を行い，底部接地面には網代圧痕が残される。

2503もほぼ完形の深鉢形土器で，器形は上記２点と同じである。口縁部は平口縁で，数カ所の内外面に縦方向に粘土を貼付けて小突起を持つ。口縁部周辺を除き，外面に縦方向，内面上部に横方向の条痕調整仕上げをそのまま残し，底部接地面は撫でて仕上げる。施文は上下に２本ずつの並走する鉤形を周回し，その間を並走するＳ字文で結ぶ。

2504は底部を欠くが，復元径44.8㎝を測る平口縁の深鉢形土器である。施文は上下に２本ずつの並走する鉤形を周回し，その間を並走する４本の短沈線で結ぶ。

2505は胴部から口縁部に直線的に開きながら立ち上がる形状で，口縁は４か所の小規模の波頂部を持つ。波頂部内面にも二本沈線で逆三角形が描かれている。施文は口縁部に限られ，三角形や菱形文を組み合わせた文様で，これも人形文の範疇と見られる。

2506は最大径を胴部に設置した鉢形土器で，丸く張った胴部が頸部ですぼみ，口縁部が短く外反する器形を成す。４カ所の緩やかな波頂部の内側には短沈線文を施し，頸部下には並走する２本の沈線で靴形文や屈曲文が描かれている。

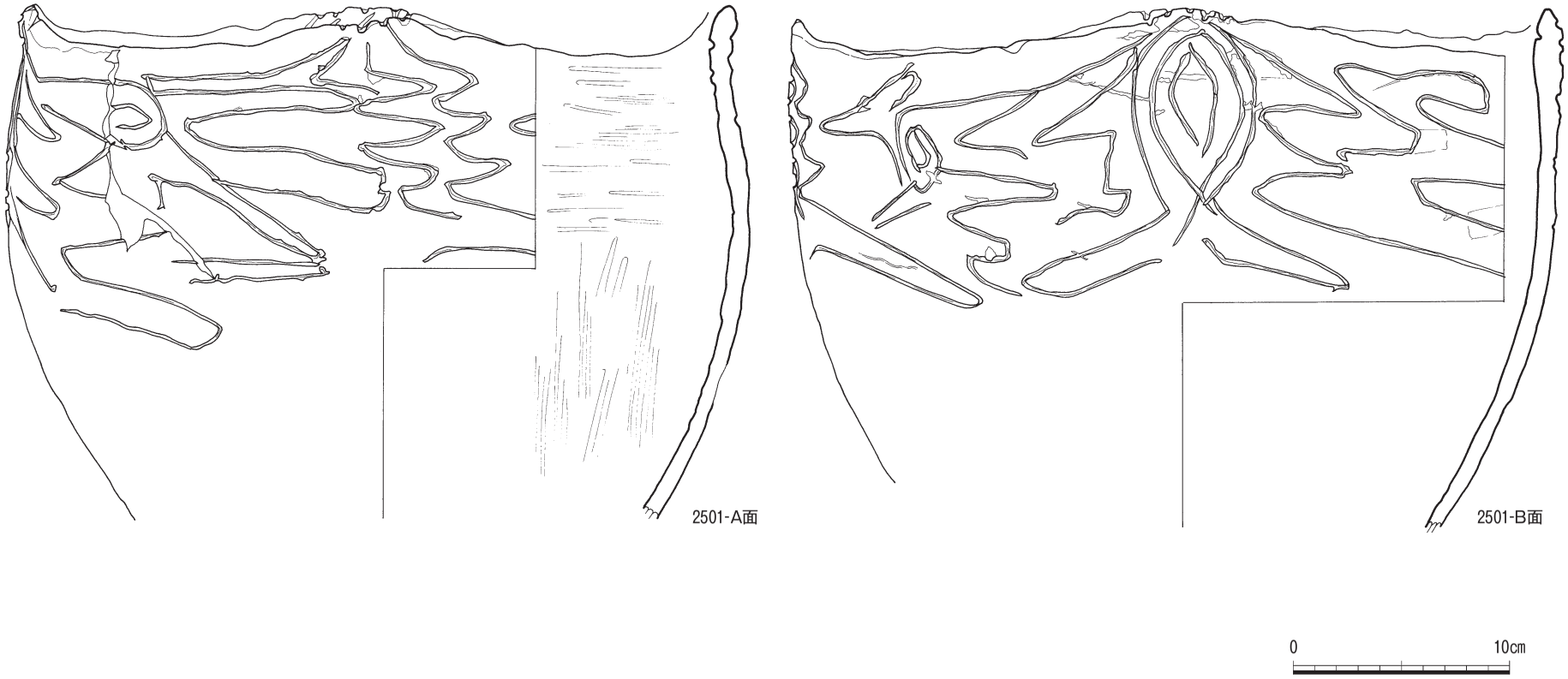
2507は丸く張った胴部上部が締まり，そのまま口縁部を形成する形状で，いわゆる無頸の鉢形土器である。施文は２本及び３本の並行沈線文で描かれ，渦巻き文様や並行沈線文などが確認できる。また，橋状把手が剥落した痕跡も確認される。内面の施文からは，長楕円形状の曲線文に沿って刺突文が施されている。

2508は口径14.6㎝，器高16.9㎝の無文の小型深鉢で，口縁端部が若干三角形に肥厚する。底部から胴部にかけては緩やかに外向に立ち上がり，口縁部にかけてはほぼ直立する。外面は条痕による器面調整を撫で消し，内面には条痕が残される。市来式土器に該当する。

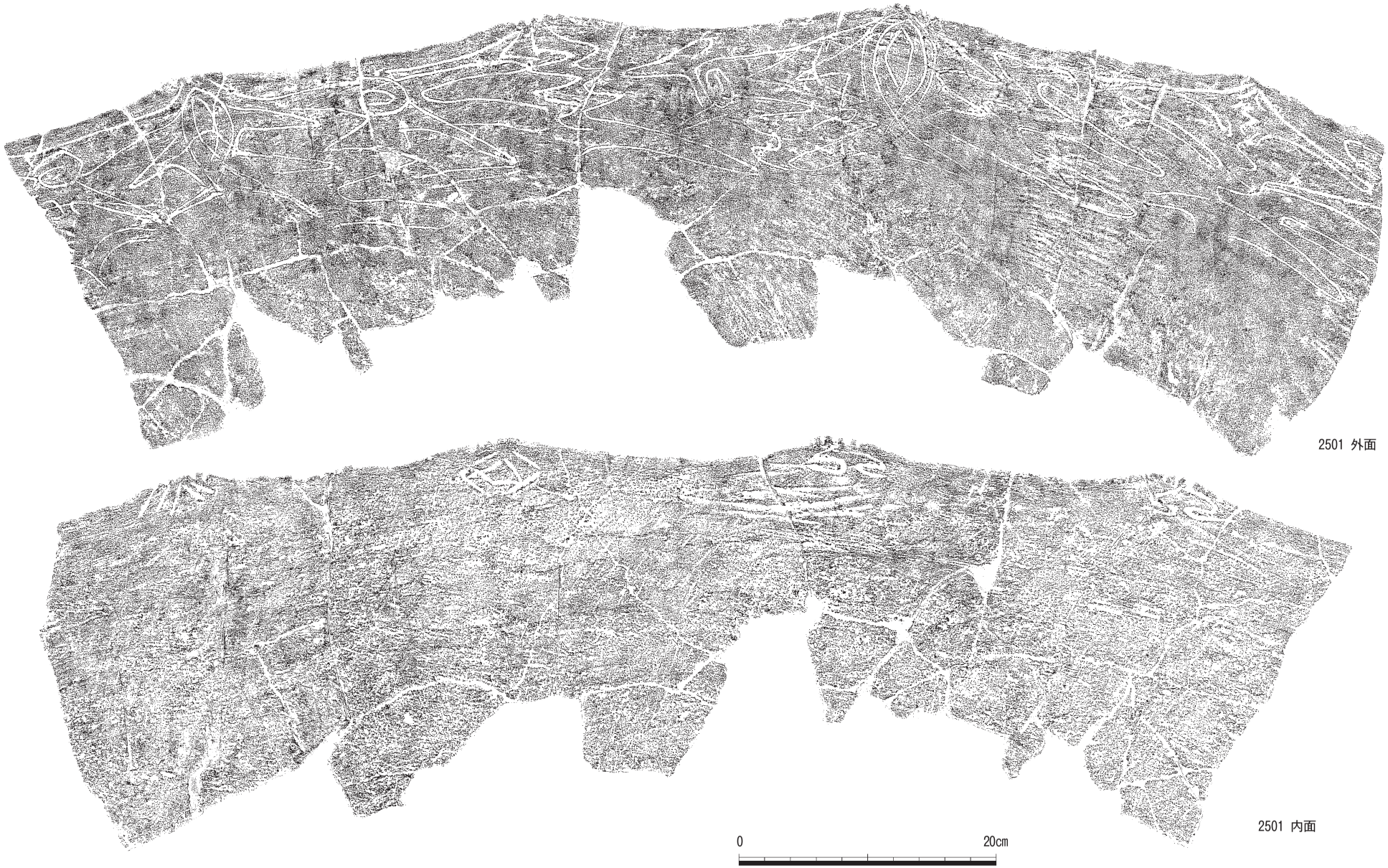
2509は厚さ2.3㎝，復元径11㎝の環状の土製品で，台付皿形土器脚台の再利用と推測される。ちなみに，上面には脚柱が剥脱した痕跡が２か所観察できる。外周には横位の沈線が一条巡り，２本並行の沈線文が交互に施される。台付皿形土器の全体形状としては，本底部に５本の脚柱を立て，その上に皿部分が載る形状が想定される。

補遺　縄文土器観察表　　凡例　　胎土　　石－石英　長－長石　角－角閃石　雲－雲母　ガ－火山ガラス

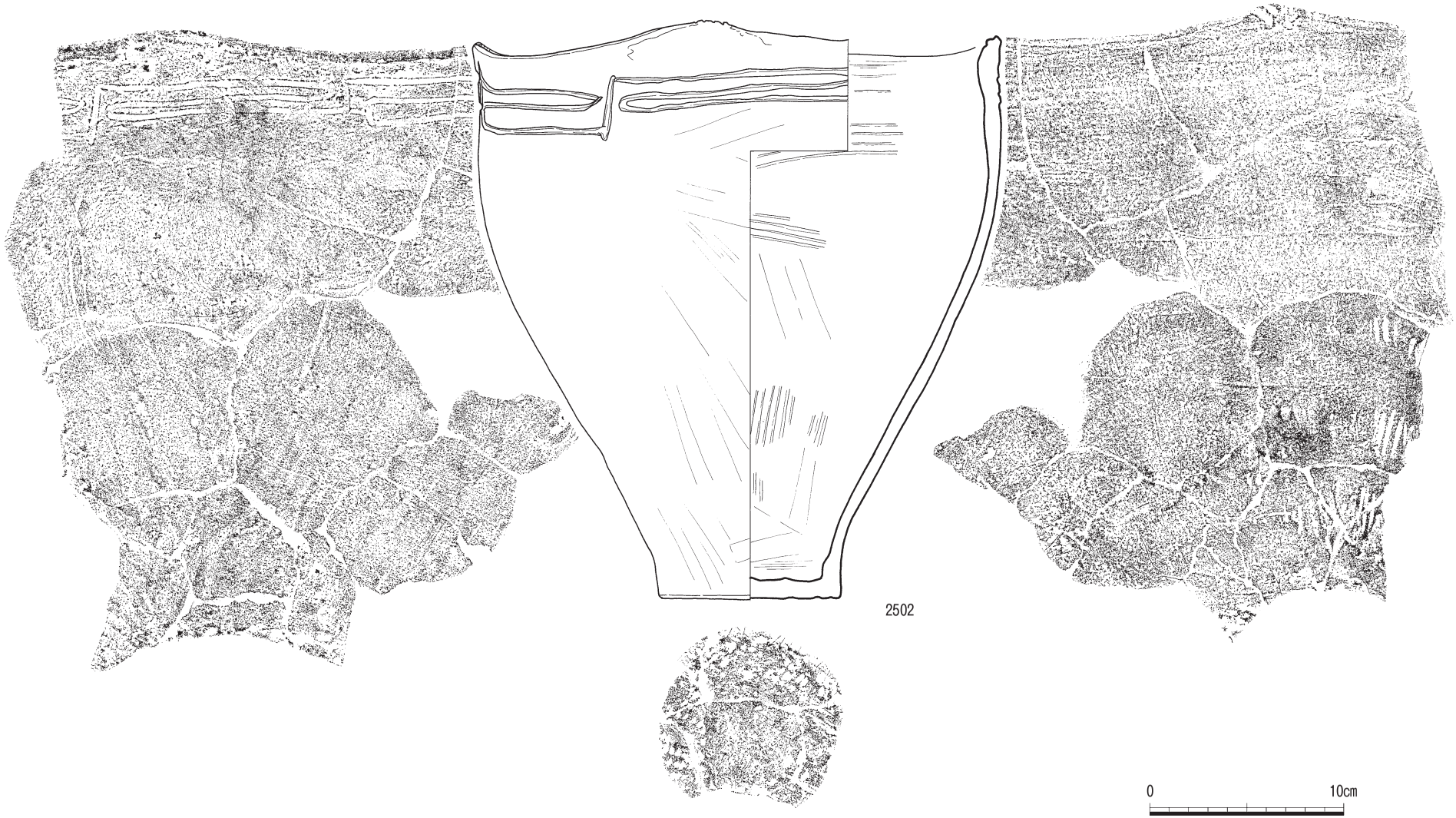
挿図番号	掲載番号	区	層	取上番号	口径（㎝）	底径（㎝）	器高（㎝）	調整　外面／内面	色調	胎土
368，369	2501	E-28		土坑10206	35.5	－	（28.5）	ナデ／ケズリ・ナデ	明茶褐色	石，長，角，ガ
370	2502	A-20		土坑263	27.2	9.4	29.7	ケズリ・ナデ／貝殻条痕・ナデ	赤褐色	石
371	2503	AB-26，27	Ⅵ	35260ほか	32.2	11.0	34.0	貝殻条痕・ナデ／貝殻条痕	茶褐色	石，長，雲
372	2504	C-37	Ⅲｂ	一括	44.8	－	（25.0）	ケズリ・ナデ／ケズリ・ナデ	暗茶褐色	石，長，雲，ガ
	2505	E-28		土坑10206	30.0	－	（18.0）	ヘラ・ナデ／ヘラ・ナデ	茶褐色	石，長，角，雲
373	2506				21.8	－	（19.5）	ヘラ・ナデ／貝殻条痕・ナデ	明赤茶褐色	石，角
	2507	A-21	Ⅵ	3311	11.0	－	（9.0）	ナデ／ナデ	褐色	石，長，角
	2508				14.6	9.0	16.9	貝殻条痕・ナデ／貝殻条痕	明赤茶褐色	石，角
	2509	D-25	Ⅵ	52589	－	11.0	2.3	ナデ／ナデ	茶褐色	石，角，ガ



第368図　補遺　縄文土器 1



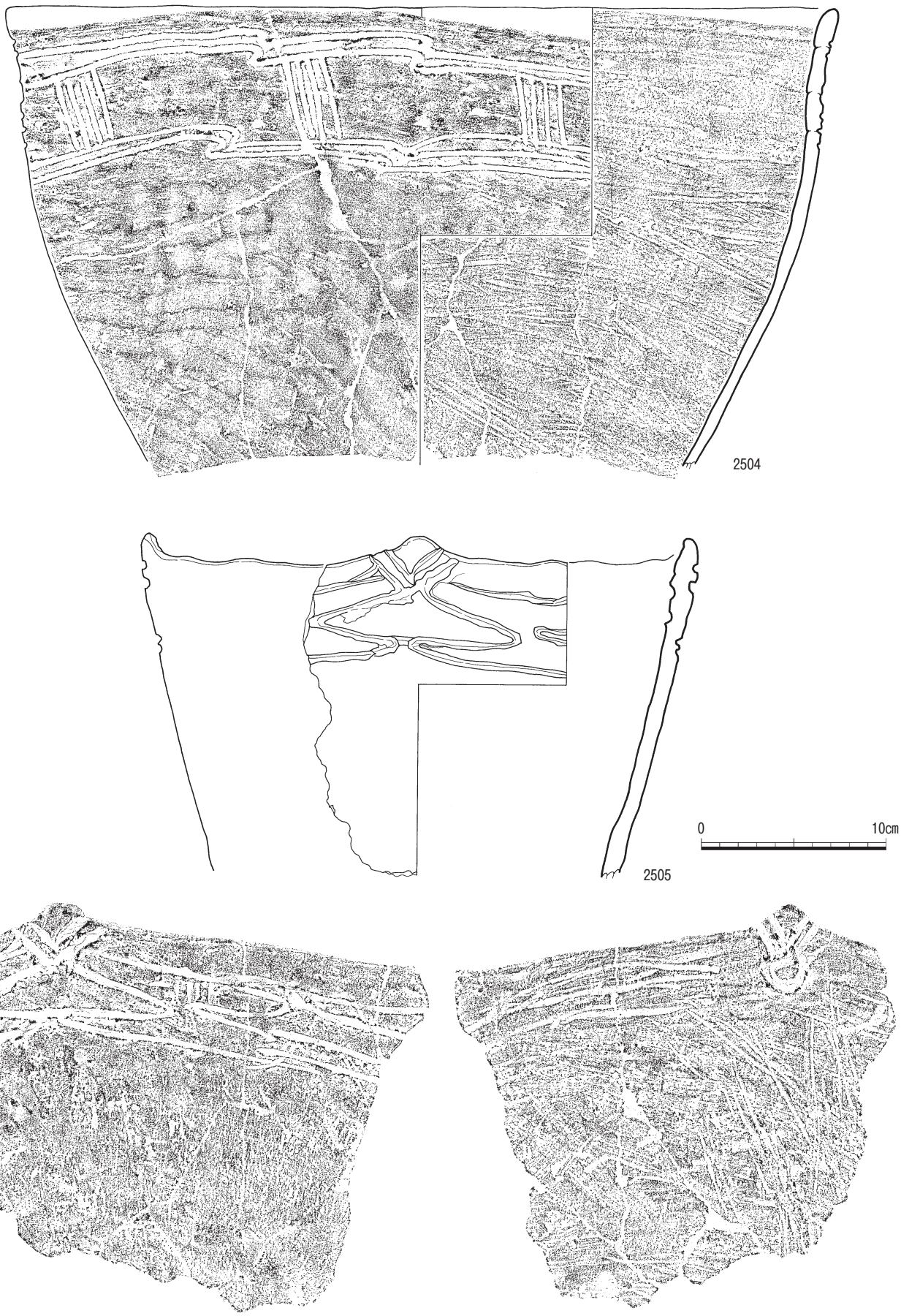
第369図　補遺　縄文土器２



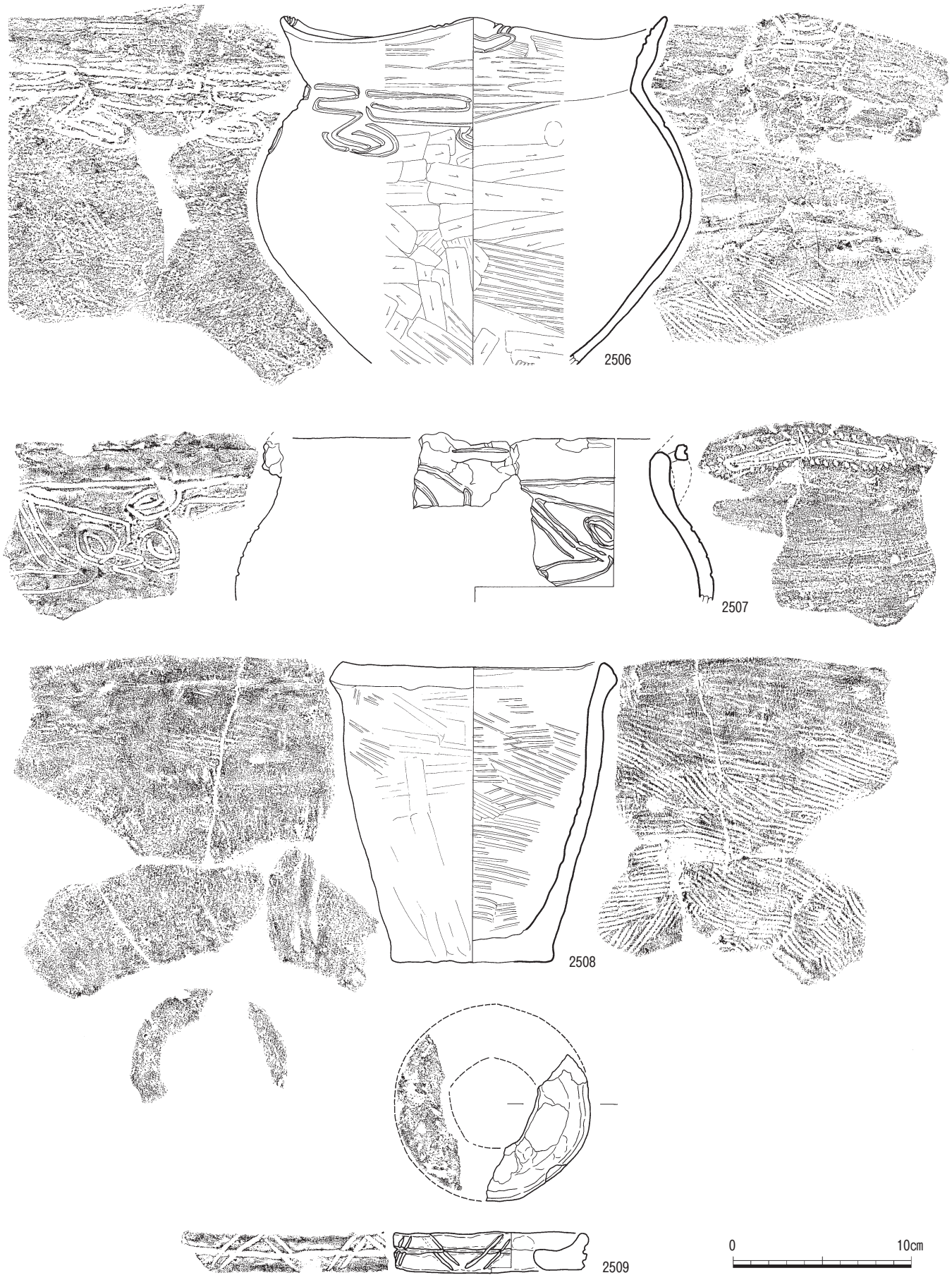
第370図　補遺　縄文土器３



第371図　補遺　縄文土器４



第372図　補遺　縄文土器５



第373図　補遺　縄文土器６

（2）石器

2510～2516は打製石鏃で，2510・2511が正三角鏃，2512～2516が長身鏃で，特に2516は二等辺鏃の可能性が高い。

2510は小型で，基部がわずかに内湾する。石材は良質な黒曜石で，腰岳産と見られる。なお，2511と2513も同一石材を使用している。

2511の先端部から３㎜程に研磨痕が認められ，類例の少ない資料と評価される。なお，右側縁下端部にはリダクションを意識した再加工痕も見られる。

2512の両側縁は鋸歯状に加工が施され，青灰色の黒曜石で西北九州産の石材と見られる。2513は安山岩製で，丸みを帯びた細身の形状で鋭利な先端部を持つ。なお，長身鏃はやや厚手の剥片を選択している傾向が見られ，共有する技法の存在が看取される。2515・2516も安山岩を使用する。

表採品も含まれるが，これらの石鏃は，縄文時代中・後期の所産と判断している。

2517はホルンフェルス製の磨製石鏃で，基部をやや内湾させ両面を平坦に仕上げた後，側縁を鋭く研ぎ出している。時期は不明である。

2518は打瘤部の厚い剥片を選択したもので，この打瘤部を回転基軸としたドリルと見られる。

2519・2521・2522・2523は磨製石斧とする。

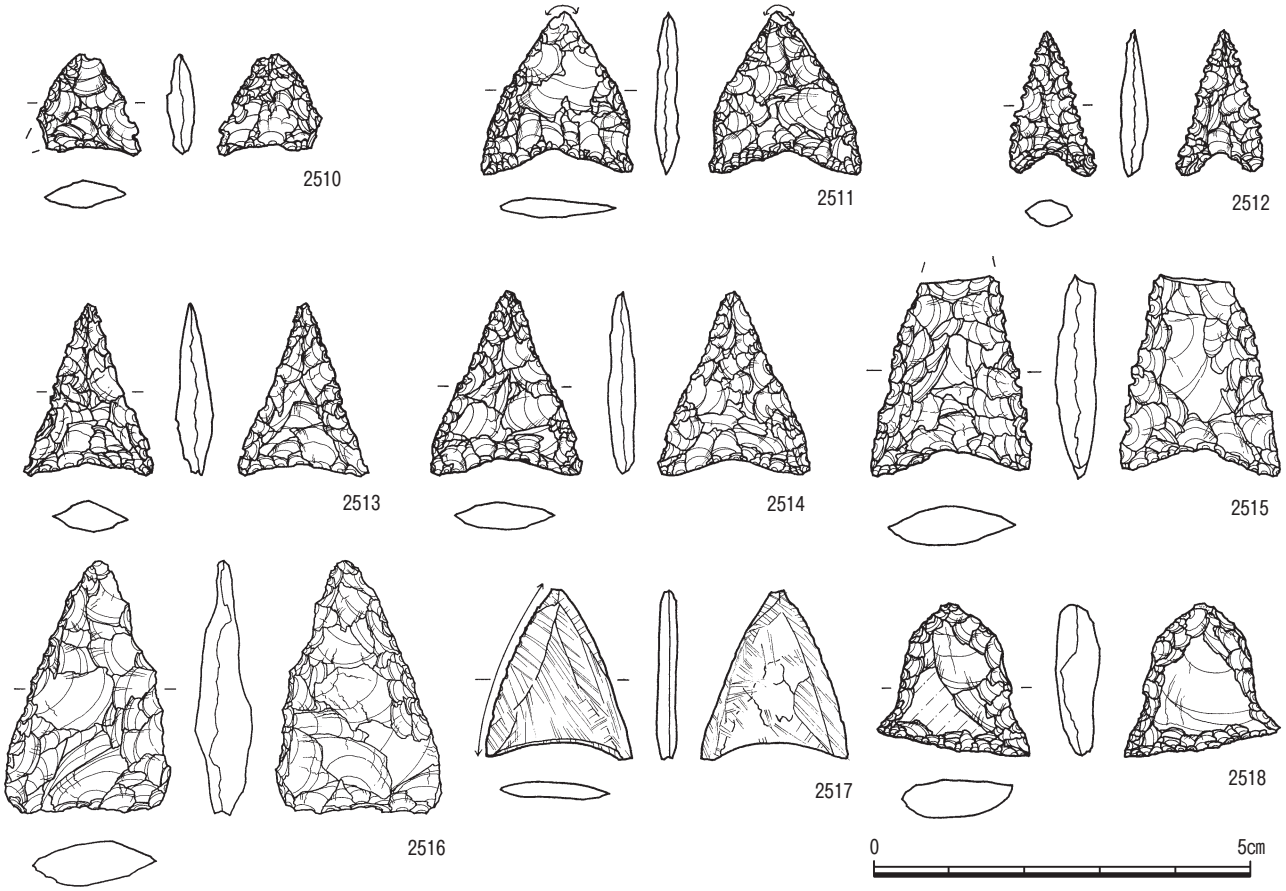
2519はホルンフェルス製の小型の刃部磨製石斧で，選択した横剥ぎで扁平な素材剥片の周辺部に二次加工を施し，刃部先端部のみに研磨加工を施している。この種の，ホルンフェルスや頁岩等の堆積岩石材を使用する扁平で刃部周辺を研磨する小型石斧は，南九州縄文時代後期の土器文化に普遍的に見られることが明らかとなってきている。

2521は扁平磨製石斧の体部，2523は扁平磨製石斧の基部に該当する。

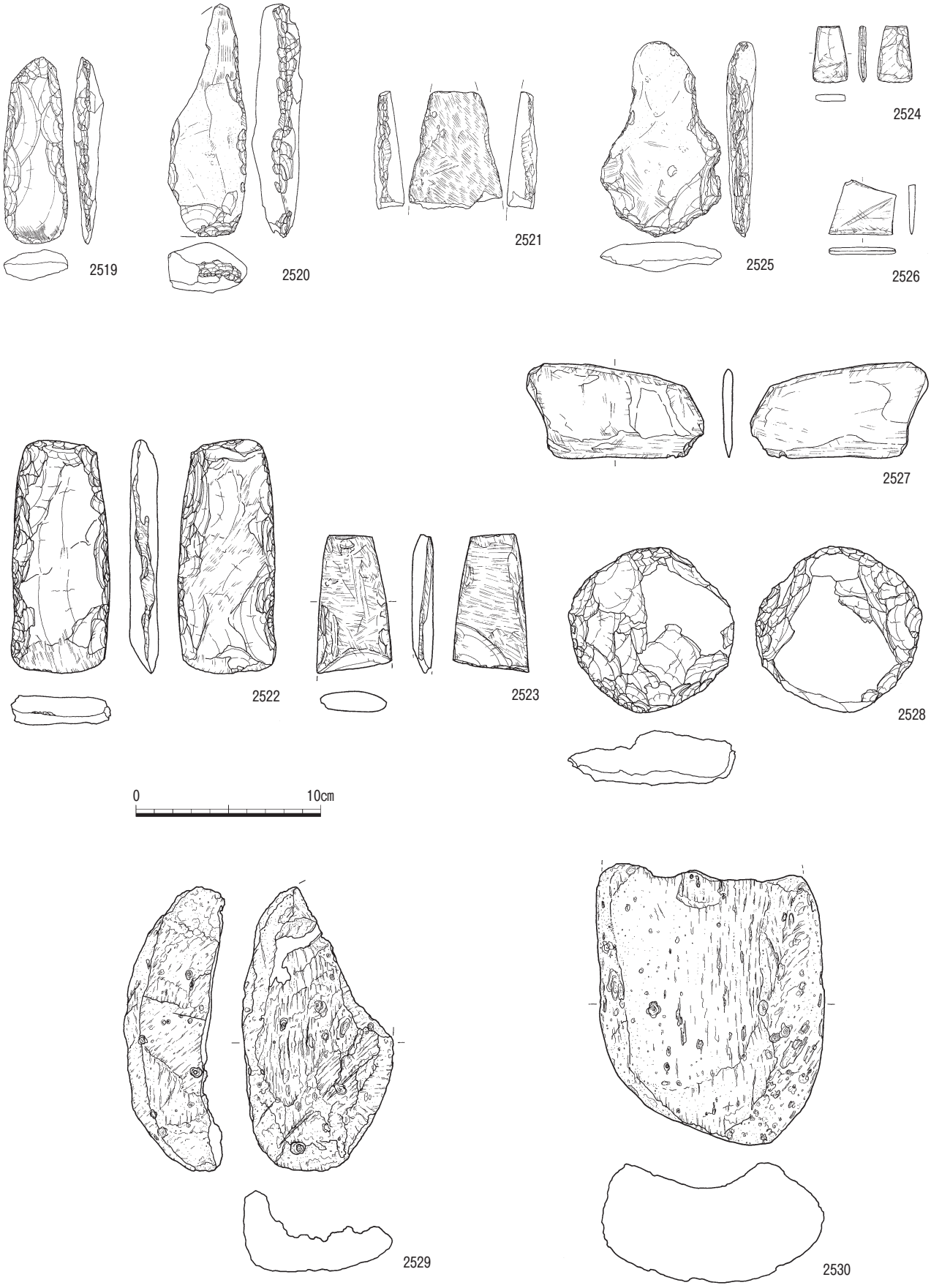
2522も扁平な短冊形を呈し，2519同様横剥ぎで扁平な素材剥片の周辺部に二次加工を施し，刃部に加え側縁に研磨を施している。なお，刃部は片刃状の仕上げとなる。2524は小型であるが，2522同様刃部は片刃の仕上げとなる。長さ３㎝，幅２㎝の完形で，厚さ４㎜の撥形を呈する。擦切技法で製作されたものである。

2520は円礫素材の形状を活かしたもので，わずかに側縁部形成加工が施される。具体的な刃部加工を行った痕跡も少ないことから，敲打具として使用した可能性が高い。

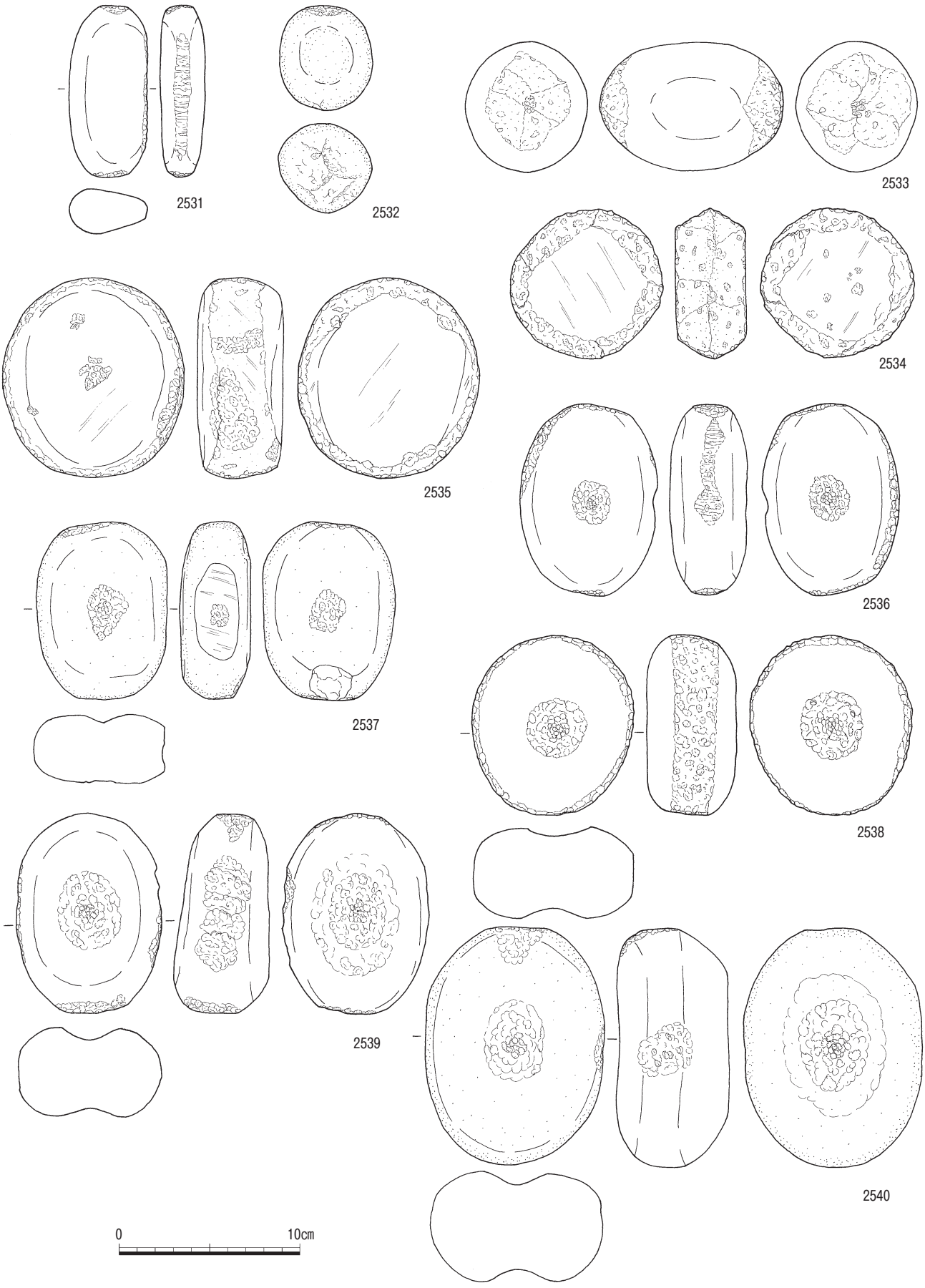
2525は扁平礫を素材とした打製石斧で，その素材の形状を活かし，ラケット形の基部を作り出した土掘具と見られる。



第374図　補遺　石器１


2519
2520
2521
2522
2523
2524
2525
2526
2527
2528
0
10cm
2529
2530

第375図　補遺　石器２



第376図　補遺　石器３

2526・2527は擦切石器と判断している。２点とも扁平な砂岩の剥片を素材とする。2526は両面を研磨し，刃部と想定する下端部の断面形はV字状を成す。2527の正面は礫面と見られ，ほぼ全域に摩耗面を持ち，下端部の断面形はV字状を成す。擦切技法に伴う工具で，刃部に平行して擦痕が残ることから，扁平磨製石斧を擦り切るための前後運動によるものと考えられる。

このように芝原遺跡においては，擦切石器(2526･2527)とそれを使用した擦切技法により製作されたと見られる磨製石斧（2523・2524）も存在することから，擦切技法で量産する石斧製作技術が存在したことが伺える。

2528は周辺加工石器である。厚さ４㎝の扁平な礫素材の周辺を打ち欠き，直径12㎝の円盤形に整形している。類似資料として，「芝原遺跡１縄文時代遺構編」に掲載されている落ち込み状（掘り込み？）遺構８号出土の，二次加工した周辺部に研磨を重ねた円盤形の石器があるが，本資料では研磨痕は認められない。

2529・2530は軽石製品である。

2529は楕円形の素材礫の中央部を抉り，周辺部に面取り加工を施し，ボート状の船形に仕上げている。舷側には意図的な穿孔が見られる。2530も中央部が抉れることから，船を意識した加工と見られる。

2531から2533は敲石である。

2531は棒状の敲石すなわちハンマーストーンで，円礫の両端部に敲打痕，右側縁部に円形の敲打痕と溝状の敲打痕が観察される。中でも，側縁部に連続する溝状の敲打痕は，いわゆるストーンリタッチャーを想定させる。2532はボール状の小円礫で，全周を敲打に使用しているが，特に端部には敲打による緩い面が形成されている。2533は卵形の自然礫の両端を敲打に使用している。

2534～2540は磨石類である。磨石，敲石，凹石の機能を合わせ持つものであり，明確な器種区分は困難であるが，すべて表裏面は磨り作業に使用されているものである。

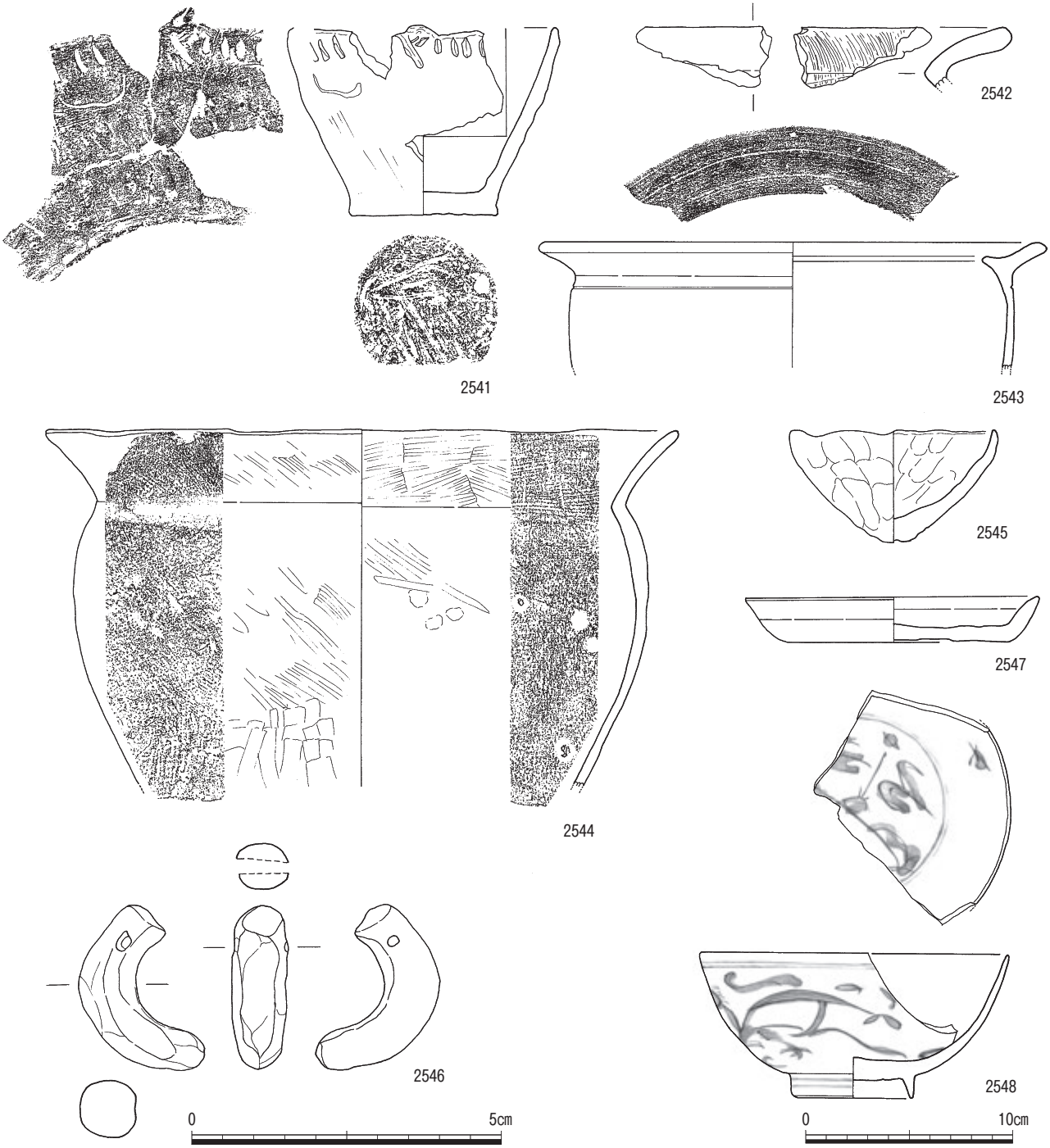
2534の表裏面は著しい磨り作業により平滑面を成し，周囲は全周に渡って敲打により潰れた面を形成している。石器を斜めに持って使用したようで，敲打の面が中央で稜を成す。2536と2537は中央に浅い凹みを持つものである。2536は側辺に2531と類似した帯状の敲打痕が残る。2537は片方の側辺が磨り作業により平坦になっており，その面の中央にわずかな凹みが観察される。2538～2540は中央に深い凹みを持つものである。2538は表裏面だけでなく全周も敲打と磨り作業でよく使い込まれている。2539は両側辺と両端部に敲打痕が残る。2540は最も重量のある円礫を用いている。「遺物編」に掲載されている資料も含め，重量のある礫を用いているものほど凹みが大きい傾向がみられる。

補遺　石器観察表

挿図番号	掲載番号	区	層	取上番号	器　種	石　　材	最大長(㎝)	最大幅(㎝)	最大厚(㎝)	重量(ｇ)	備　考
374	2510			表採	打製石鏃	黒曜石	1.4	(1.4)	0.4	0.5	腰岳類似
	2511	D-33	表		打製石鏃	黒曜石	2.2	2.1	0.3	1.0	腰岳類似
	2512	E-26	Ⅵ	50407	打製石鏃	黒曜石	2.0	1.2	0.4	0.5	西北九州系
	2513	C-37	Ⅷ	123767	打製石鏃	安山岩	2.3	1.8	0.4	1.1	
	2514			表採	打製石鏃	黒曜石	2.5	2.1	0.4	1.3	腰岳類似
	2515			表採	打製石鏃	安山岩	(2.7)	2.2	0.6	2.7	
	2516	B-32	Ⅵb	一括	打製石鏃	安山岩	3.4	2.2	0.8	4.0	
	2517				磨製石鏃	ホルンフェルス	2.3	2.0	0.3	1.1	H12年度分
	2518	B-18	Ⅷ	8838	ドリル	頁岩	2.0	2.0	2.0	2.1	
375	2519				刃部磨製石斧	ホルンフェルス	10.2	3.6	1.8	58.9	
	2520				敲石	ホルンフェルス	13.8	4.6	2.6	148.9	
	2521				磨製石斧	ホルンフェルス	(6.4)	5.2	1.6	56.2	
	2522				磨製石斧	ホルンフェルス	12.6	5.4	1.6	162.5	
	2523				磨製石斧	ホルンフェルス	(7.4)	4.2	1.2	48.4	
	2524				小型ノミ形石斧	頁岩	3.1	2.0	0.4	3.8	
	2525				打製石斧	ホルンフェルス	10.8	6.8	1.6	103.8	
	2526				擦切石器	砂岩	(3.0)	(3.6)	0.2	4.8	
	2527				擦切石器	砂岩	5.2	9.6	0.6	48.1	
	2528				周辺加工石器	安山岩	9.0	9.0	3.0	229.0	
	2529				軽石製品	軽石	(15.4)	8.4	4.6	107.0	
	2530				軽石製品	軽石	(15.8)	12.2	6.5	321.0	
376	2531	A-26		溝1349	敲石	砂岩	9.5	4.4	2.4	156.6	
	2532	D-25	Ⅲ		敲石	砂岩	5.8	5.2	4.9	203.0	
	2533	D-29		11088	敲石	花崗岩	10.1	7.1	6.7	662.0	
	2534				磨石類	花崗岩	8.5	8.2	3.9	430.0	
	2535	B-26	Ⅵ		磨石類	砂岩	11.0	10.0	4.7	898.0	
	2536	A'-28	Ⅲ		磨石類	砂岩	10.5	7.6	4.3	564.0	
	2537	B-33	Ⅲb		磨石類	花崗岩	9.8	7.3	3.9	488.0	
	2538	B-20		溝570	磨石類	花崗岩	10.0	9.0	5.0	697.0	
	2539	C-28	Ⅲ		磨石類	花崗岩	11.0	8.0	4.9	713.0	
	2540	D-25	Ⅲ		磨石類	花崗岩	13.1	9.9	6.0	1214.0	

２「渡畑遺跡２」補遺

2541は器高９㎝の小型の鉢形土器である。口縁部には縦位の短沈線が連続して施され，口唇部に粘土紐を貼り付けた突起がある。縄文時代後期前半に属すると考えられるものである。2542は弥生時代中期末の須玖式系丹塗り甕型土器の口縁部である。ヘラによる暗文状の調整痕が残る。2543は弥生時代中期末から後期初頭にかけての黒髪式の甕型土器である。器壁が薄く精緻な作りである。2544は古墳時代の成川式の甕型土器である。胴部の丸みや口縁部内面の稜が明瞭であることから，中津野段階よりも一段階古い様相を呈している。2545は成川式の手捏ね土器である。器高約５㎝の小型の鉢形土器で，指押さえによる成形痕が明瞭に残る。2546は土製の勾玉であるが，帰属時期は不明である。2547は土師器の皿である。底部はヘラ切りであり，古代に属するものと考えられる。2548は肥前産の染付碗である。見込みに荒磯文が描かれる。輸出向けに生産された碗と考えられているものである。



第377図　補遺　渡畑遺跡

図　　版



芝原遺跡遠景

図版２



発掘状況



遺構精査状況



雪の中の調査

調査風景



遺構検出状況



掘立柱建物跡３号



古代掘立柱建物跡８号，中世掘立柱建物跡９号



古代掘立柱建物跡５号，中世掘立柱建物跡５号・６号



掘立柱建物跡２号

図版４



竪穴建物状遺構検出状況



竪穴建物状遺構完掘状況



土坑１号検出状況



土坑１号遺物出土状況



溝４検出状況



溝８完掘状況



溝８内遺物出土状況



多口瓶出土状況



竪穴建物跡１号，掘立柱建物跡２号・３号検出状況



掘立柱建物跡22号



掘立柱建物跡30号



竪穴建物跡１号遺物出土状況



竪穴建物跡１号完掘状況

図版６



竪穴建物跡２号



竪穴建物跡２号炭化材出土状況



竪穴建物跡２号埋土断面



竪穴建物跡２号完掘



竪穴建物跡３号検出状況



竪穴建物跡３号完掘



竪穴建物跡３号付属かまど（１）



竪穴建物跡３号付属かまど（２）


竪穴建物跡６号


竪穴建物跡６号完掘


竪穴建物跡６号内かまど


竪穴建物跡６号内かまど完掘


竪穴建物跡９号


竪穴建物跡９号完掘


竪穴建物跡７号・８号


竪穴建物跡10号

図版８



かまど跡２号検出



かまど跡２号完掘



かまど跡４～６号検出（１）



かまど跡４～６号検出（２）



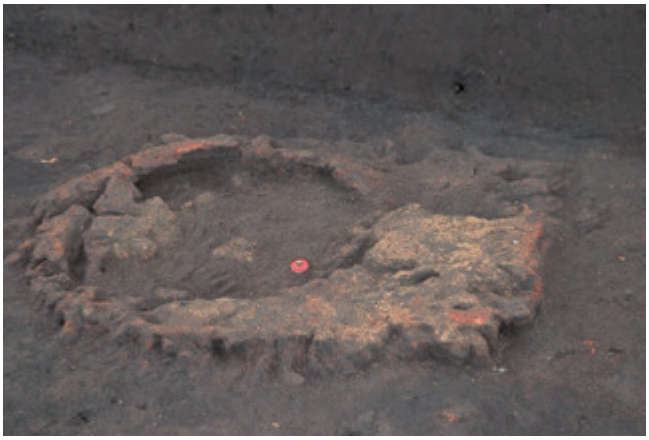
かまど跡４号炭化物残存状況



かまど跡５号検出



かまど跡５号完掘



かまど跡７号検出



かまど跡７号断面



かまど跡11号検出



かまど跡11号断面

図版10



かまど跡14～16号切り合い



かまど跡17～19号切り合い



かまど跡22号



かまど跡26号



かまど跡27号検出



かまど跡27号完掘



かまど跡29号切り取り作業



切り取り遺構の活用状況



土坑墓４号人骨検出



土坑墓５号遺物出土状況



土坑墓７号人骨検出



土坑墓７号完掘



土坑墓８号人骨検出



土坑墓９号人骨検出

図版12



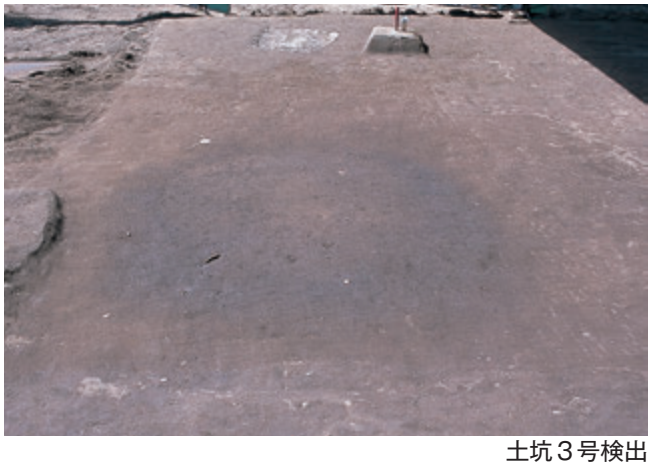
土坑墓10号検出



土坑墓10号人骨検出



土坑墓12号人骨検出



土坑３号検出



土坑３号遺物出土状況



土坑２号半截，埋土断面



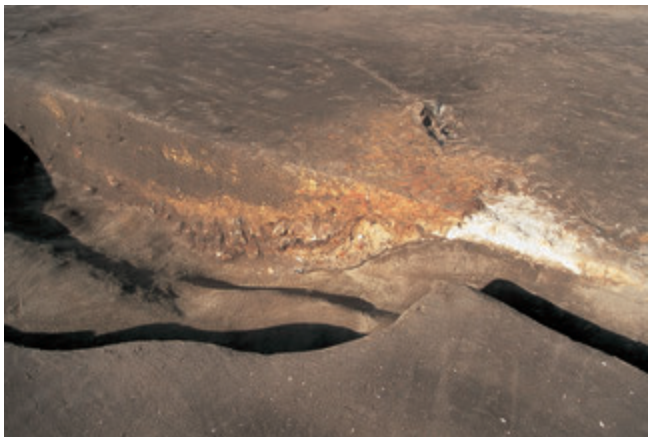
溝２，３検出



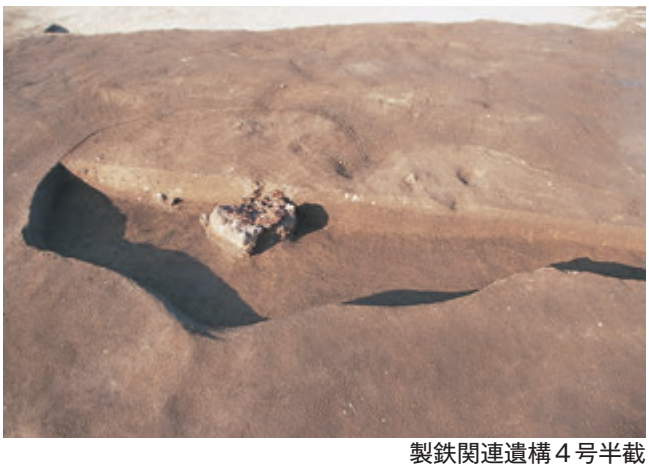
製鉄関連遺構３～５号検出



製鉄関連遺構３号半截



製鉄関連遺構３号埋土断面



製鉄関連遺構４号半截



製鉄関連遺構４号鉄滓出土状況

図版14



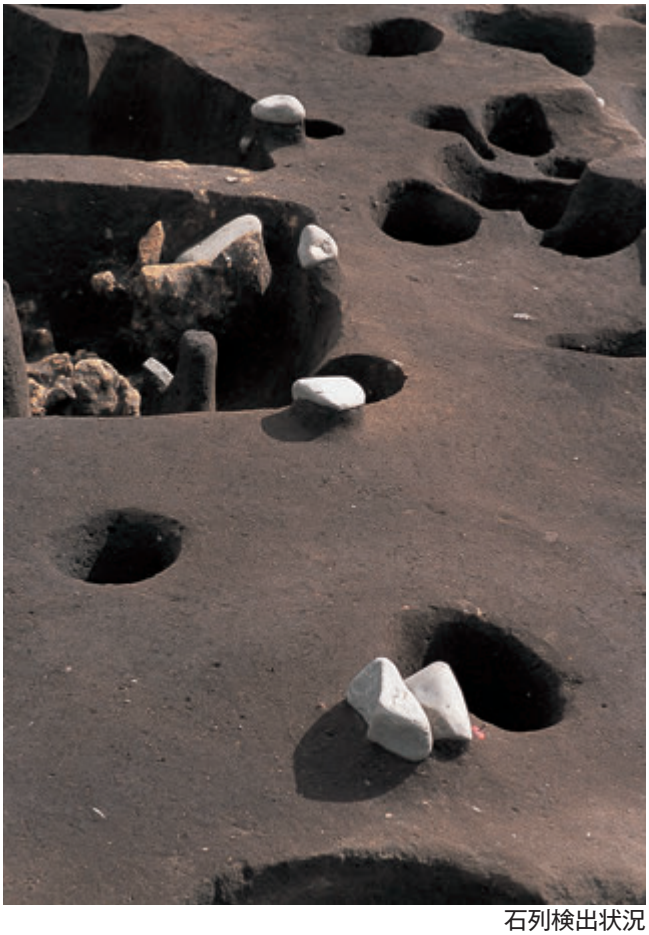
自然流路内鉄滓出土状況



土坑４号炭化物出土状況



土坑６号底部粘土張り状況



石列検出状況



ピット１号内礫検出状況



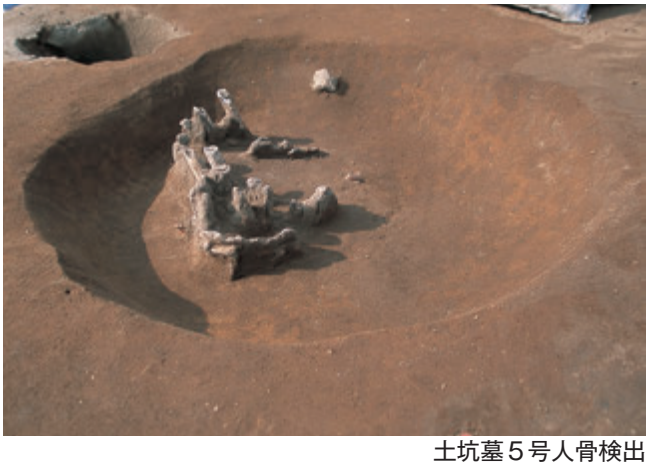
焼土跡２号



土坑墓１号人骨検出



土坑墓３号人骨検出



土坑墓５号人骨検出



土坑墓10号人骨検出

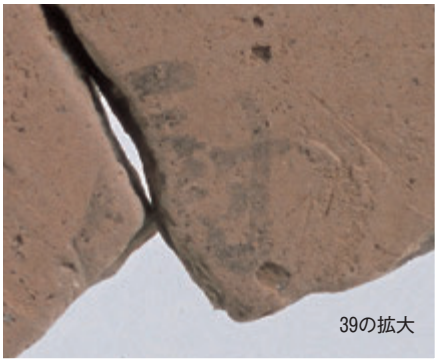


土坑墓６号人骨検出

図版16

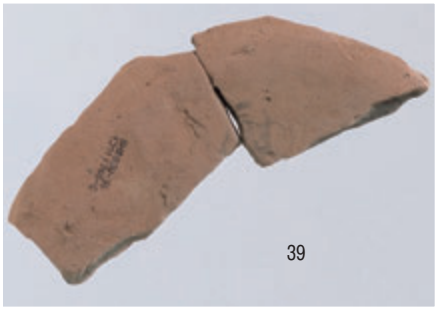


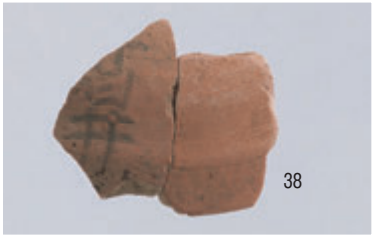
古代の遺物


39の拡大


38の拡大


37の拡大


39


38


37


41の上面からの拡大


11


10


8

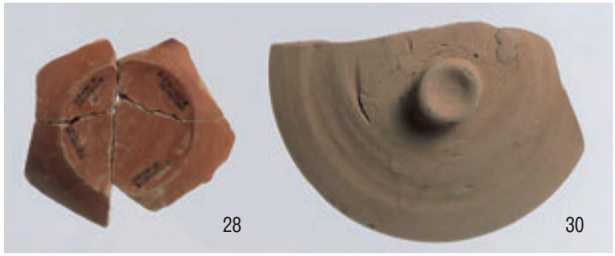

5


41


14


7

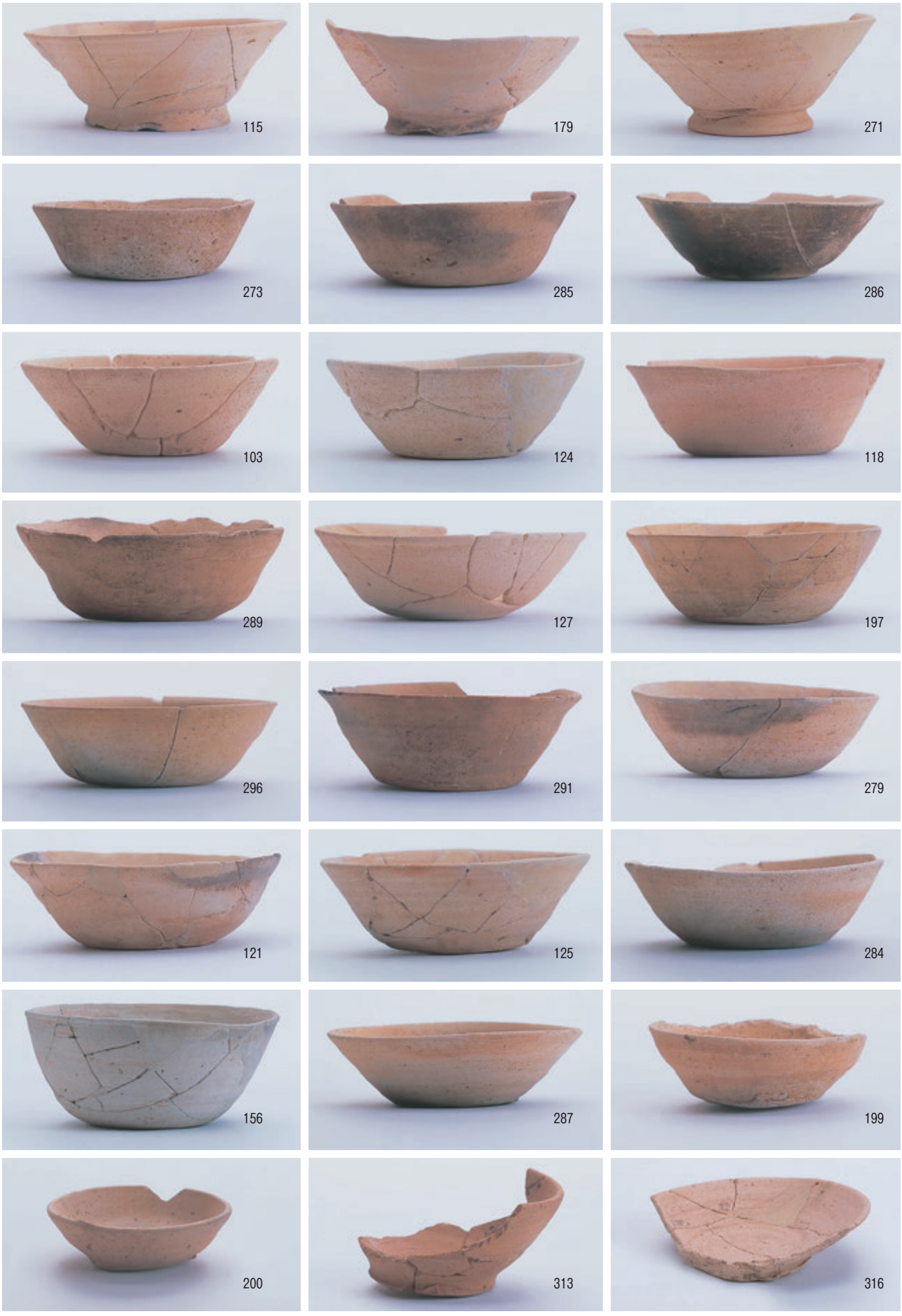

19


28
30


23

土坑１号出土遺物

図版18


115
179
271
273
285
286
103
124
118
289
127
197
296
291
279
121
125
284
156
287
199
200
313
316

土師器椀・坏


108


318


320


319


228


321


131


52


325


323


204


135


89


203


43


207


205

土師器皿・鉢・甕

図版20



黒色土器・赤色土器・須恵器


177


253


162


213


248


249

須恵器壺・多口瓶

図版22


244


410


402


400


245の拡大

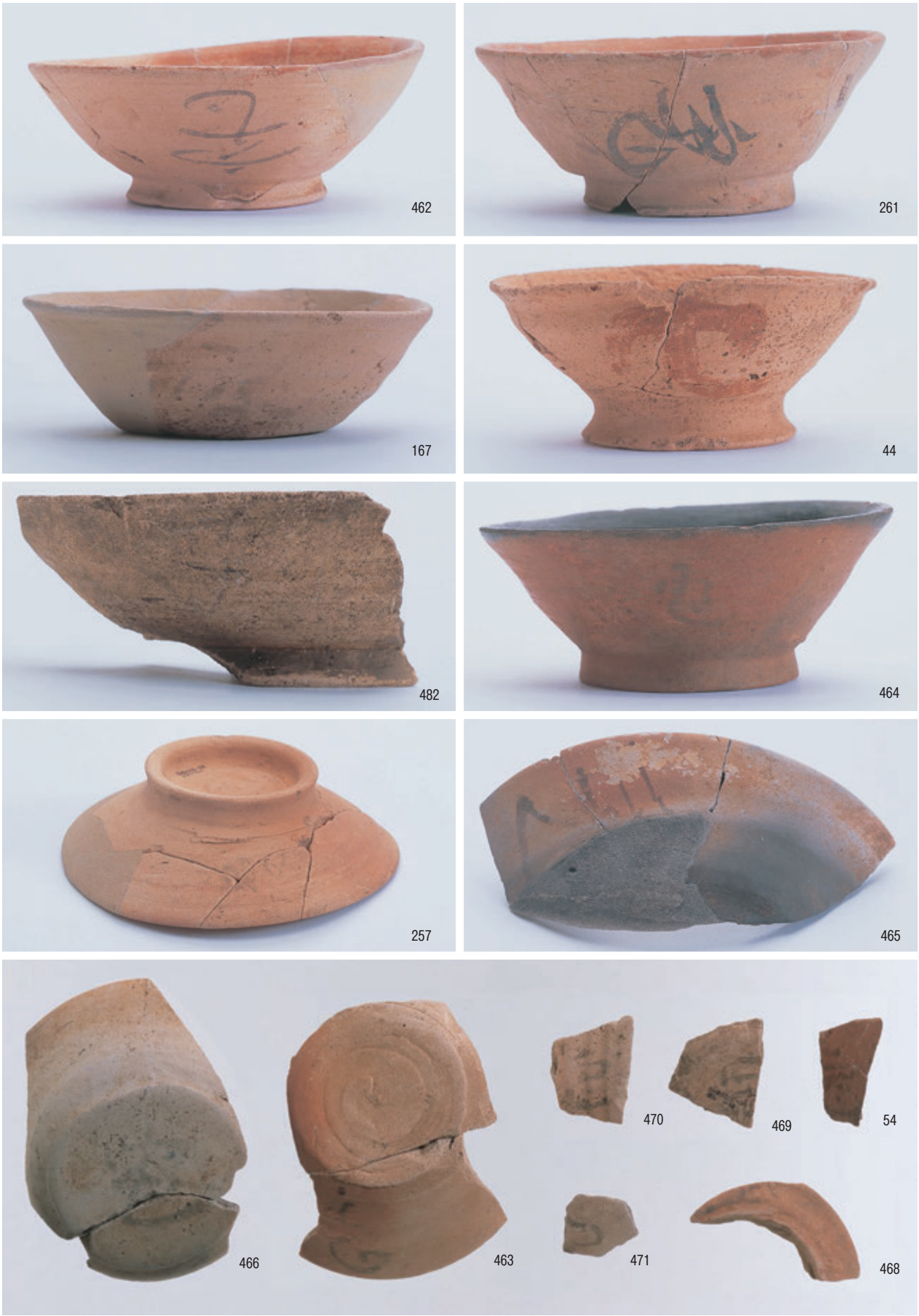

245

須恵器大甕


476
477
483
264
472
473
169
265
262
467
263
475
479
478
266
168
490
268
474
480
488
484
269
487
505
77
481
53
485

墨書土器

図版24

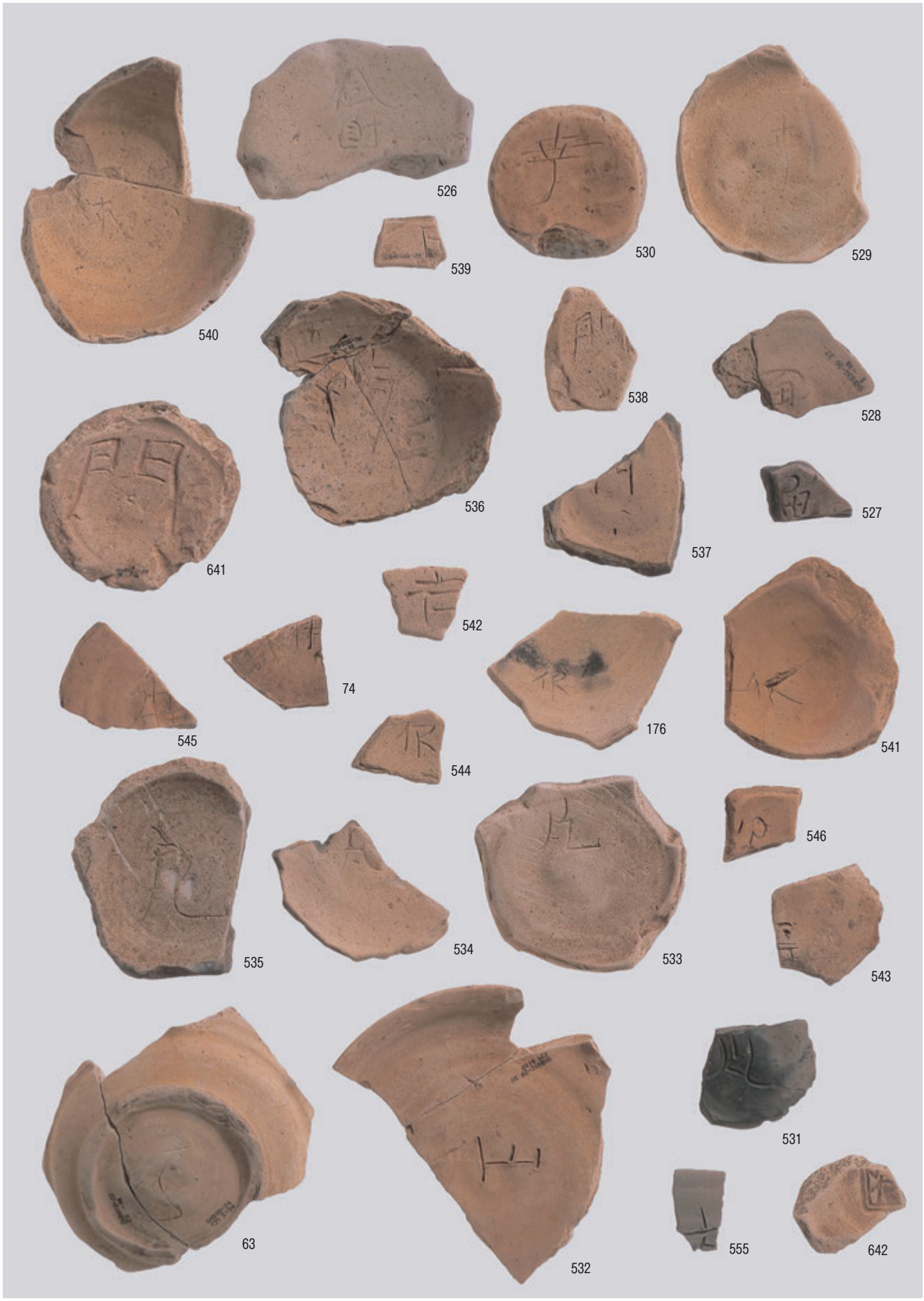


墨書土器「宅」

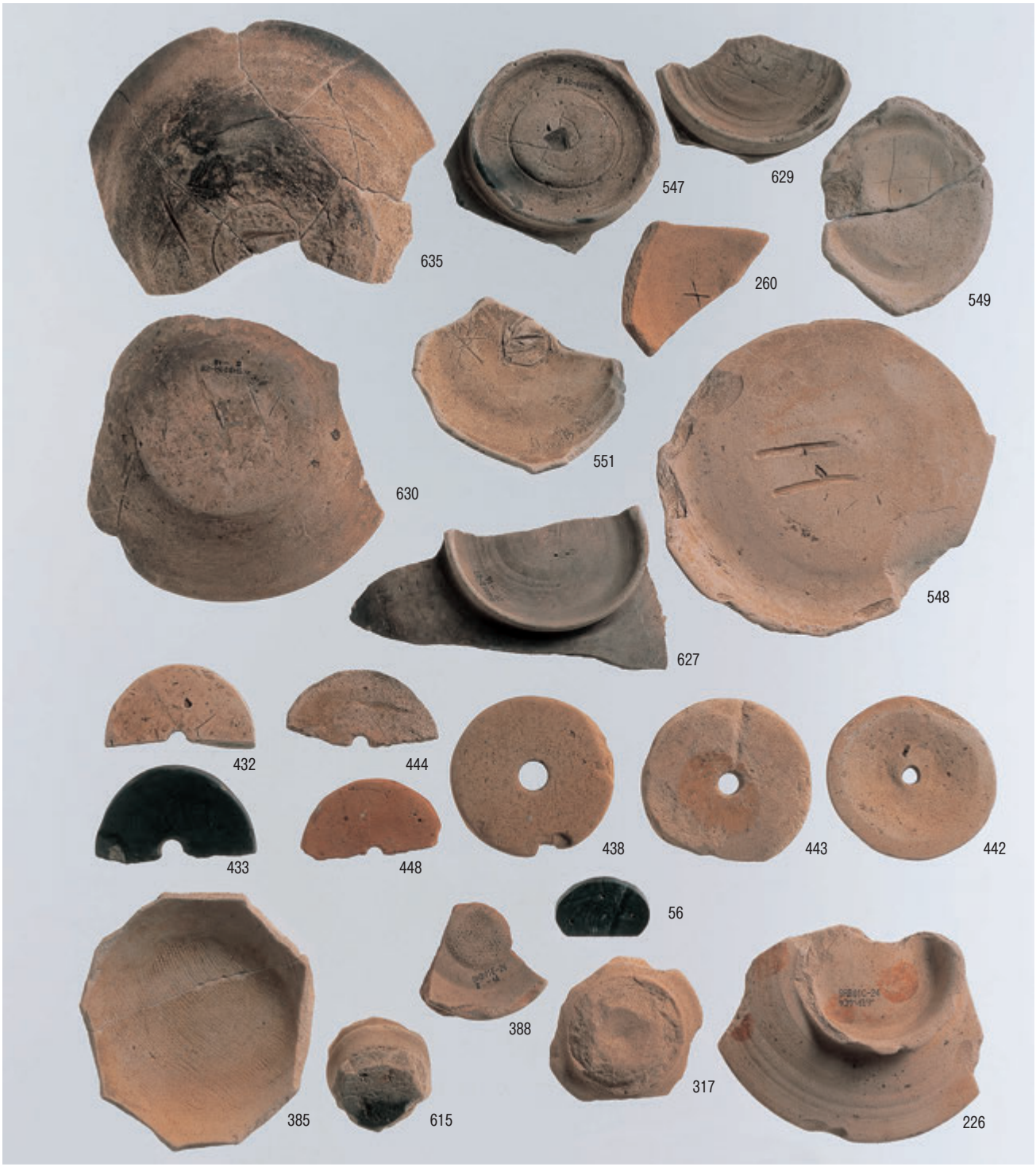

520
519
510
524
521
512
518
511
585
514
513
516
523
99
509
515
525
517
174
508

ヘラ書き土器「宅」

図版26



ヘラ書き土器　文字


635
547
629
260
549
630
551
548
627
432
444
438
443
442
433
448
56
388
385
615
317
226


422
430
429

ヘラ書き土器・硯　その他

図版28


763


764




1369


816
815
814


1499

中世の出土遺物


溝7
873


溝7
874


溝7
875


溝7
876


溝7
878


溝7
877


溝7
880


溝7
884


溝7
881





溝7


溝7
886


溝23
914

中世　遺構内出土遺物１

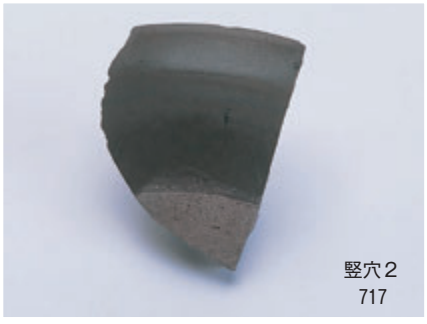
図版30


掘立12
701


竪穴１
713


竪穴１
712


掘立30
709


竪穴２
717


竪穴２
715


竪穴４
718


カマド20
736


カマド20
731


製鉄関連遺構３
741


土坑６
747


土坑15
756


土坑墓４
772


土坑墓７
777


776
775
土坑墓５

中世　遺構内出土遺物２


ピット14
833


ピット13
832


ピット７
826


ピット25
844


ピット26
845


ピット32
852


ピット39
859


ピット20
840


ピット21
841


ピット６
824


ピット33
853

中世　遺構内出土遺物３

図版32



中世土師器・土錘

番号なしは挿図非掲載


1013
1020
1016
1018
内面


1013
1020
1016
1018
外面

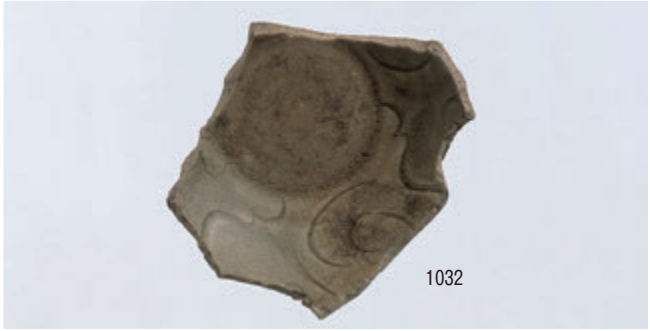



1009




1029


1033


1032

青磁 1

図版34













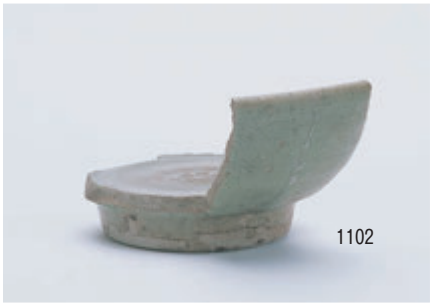


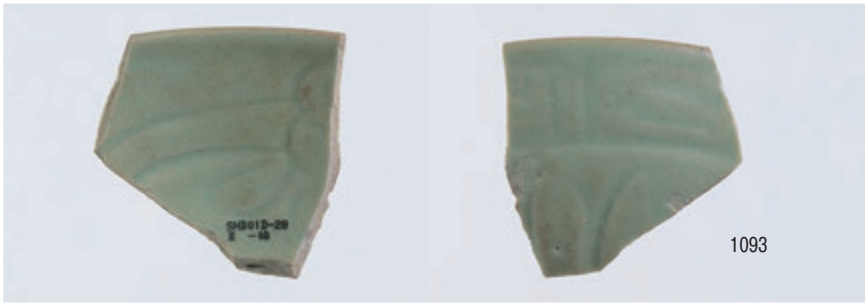


青磁２


1084


1092


1102


1093





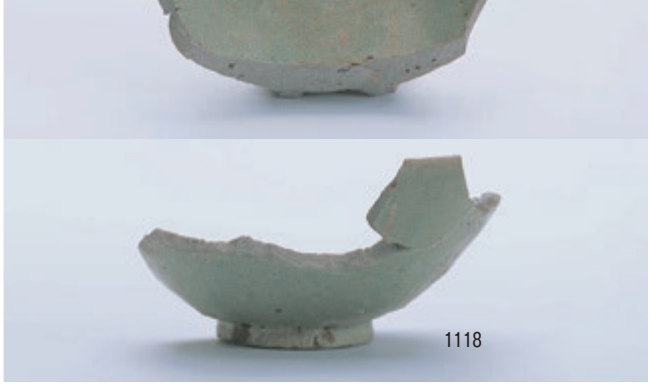

1105


1110



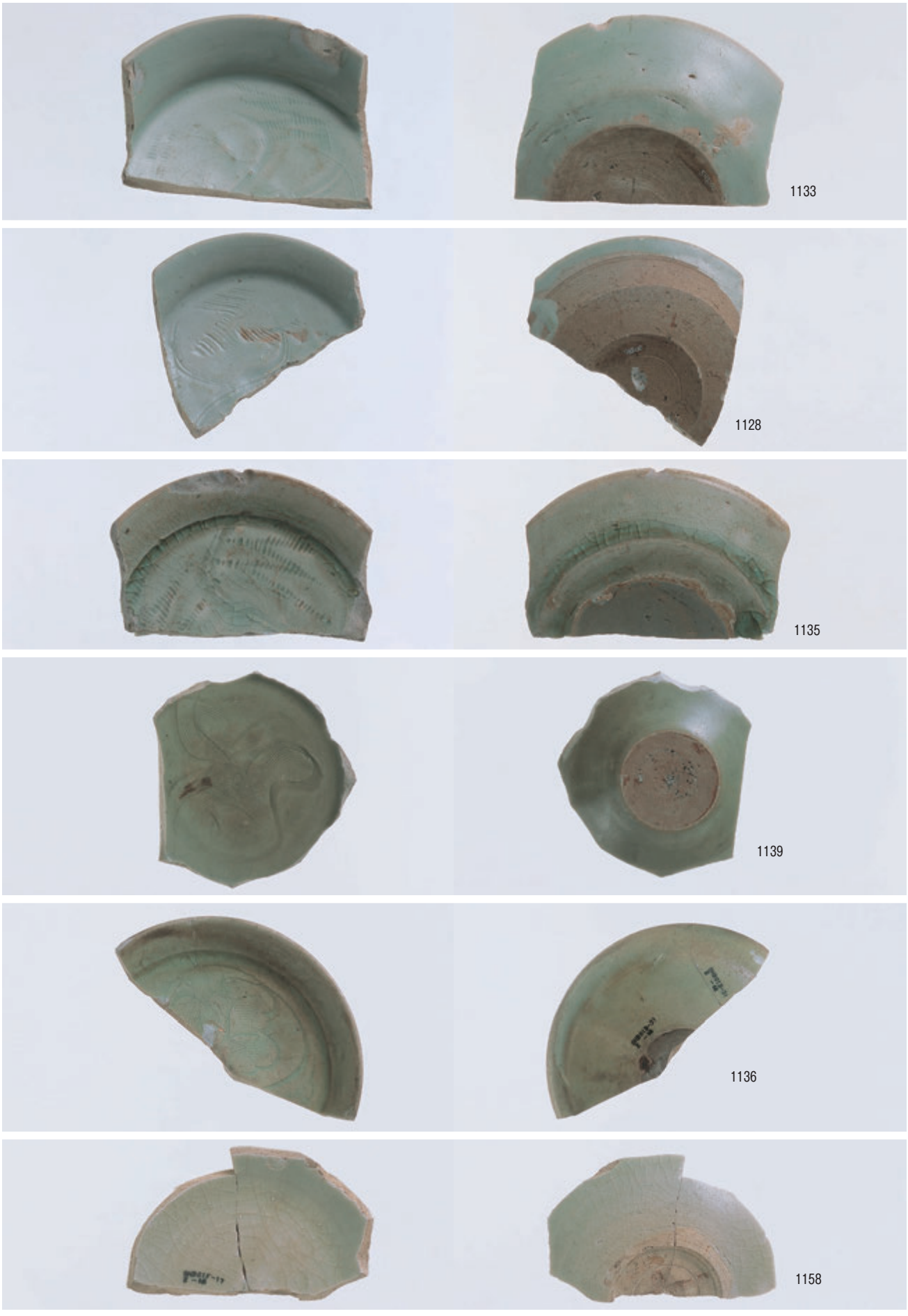



1106


1118

青磁３

図版36

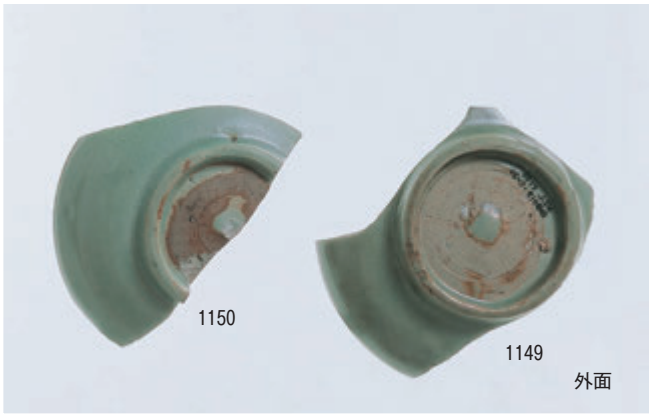


青磁４


1147


1142

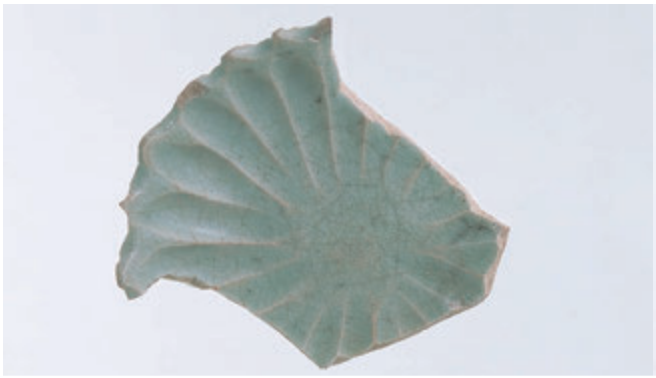

1150
1149
内面

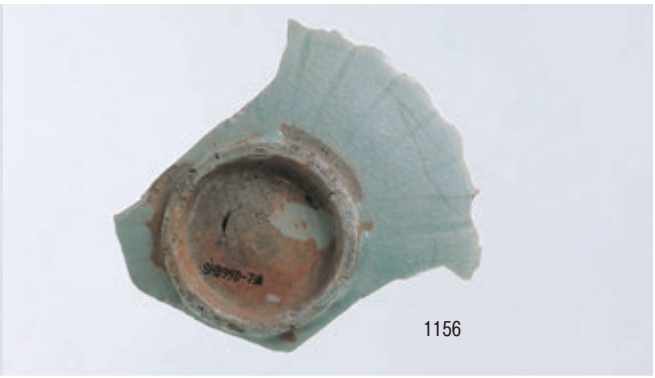

1150
1149
外面

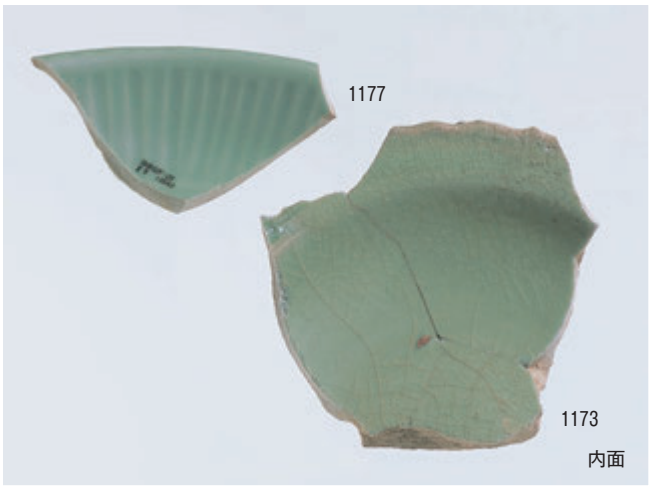

1157
1154
内面


1157
1154
外面

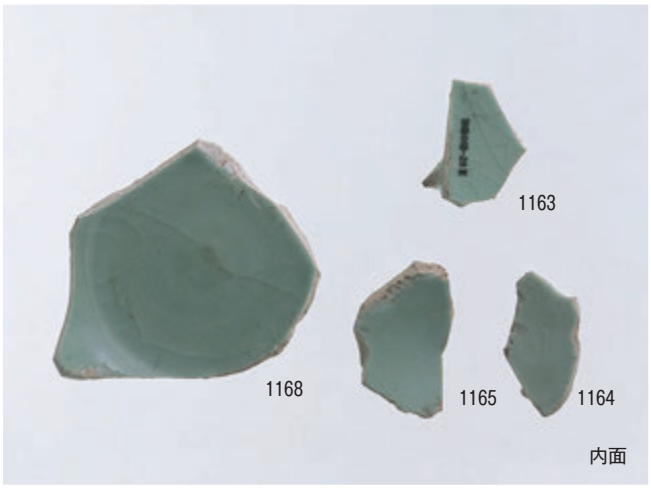
図版38

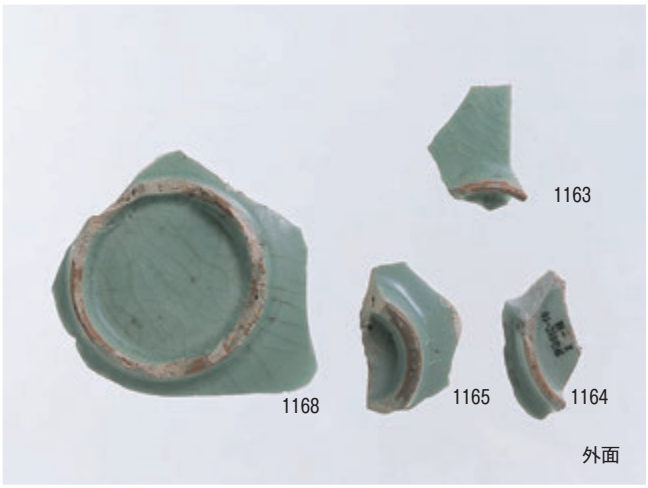


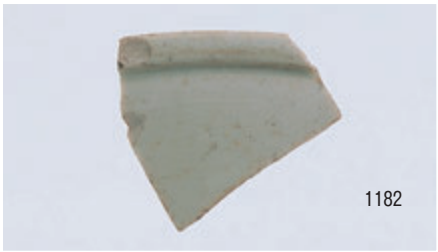

1156

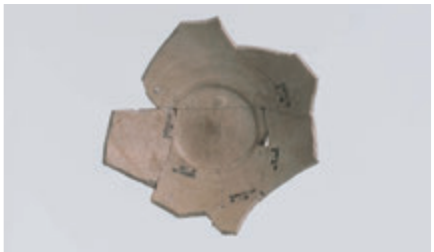

1177
1173
内面


1177
1173
外面

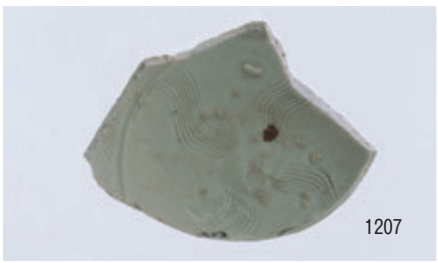

1163
1168
1165
1164
内面


1163
1168
1165
1164
外面


1182



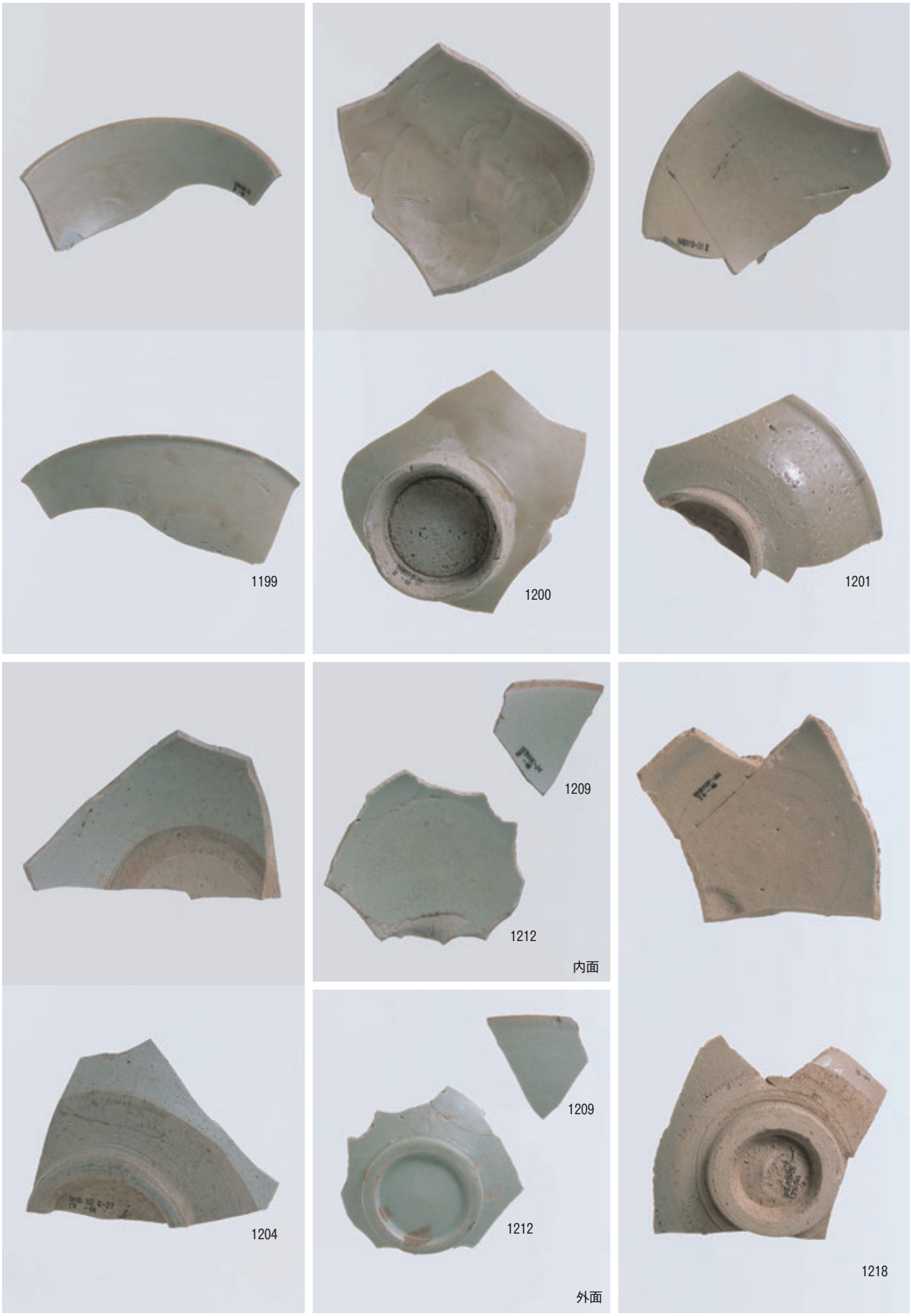



1207


1183

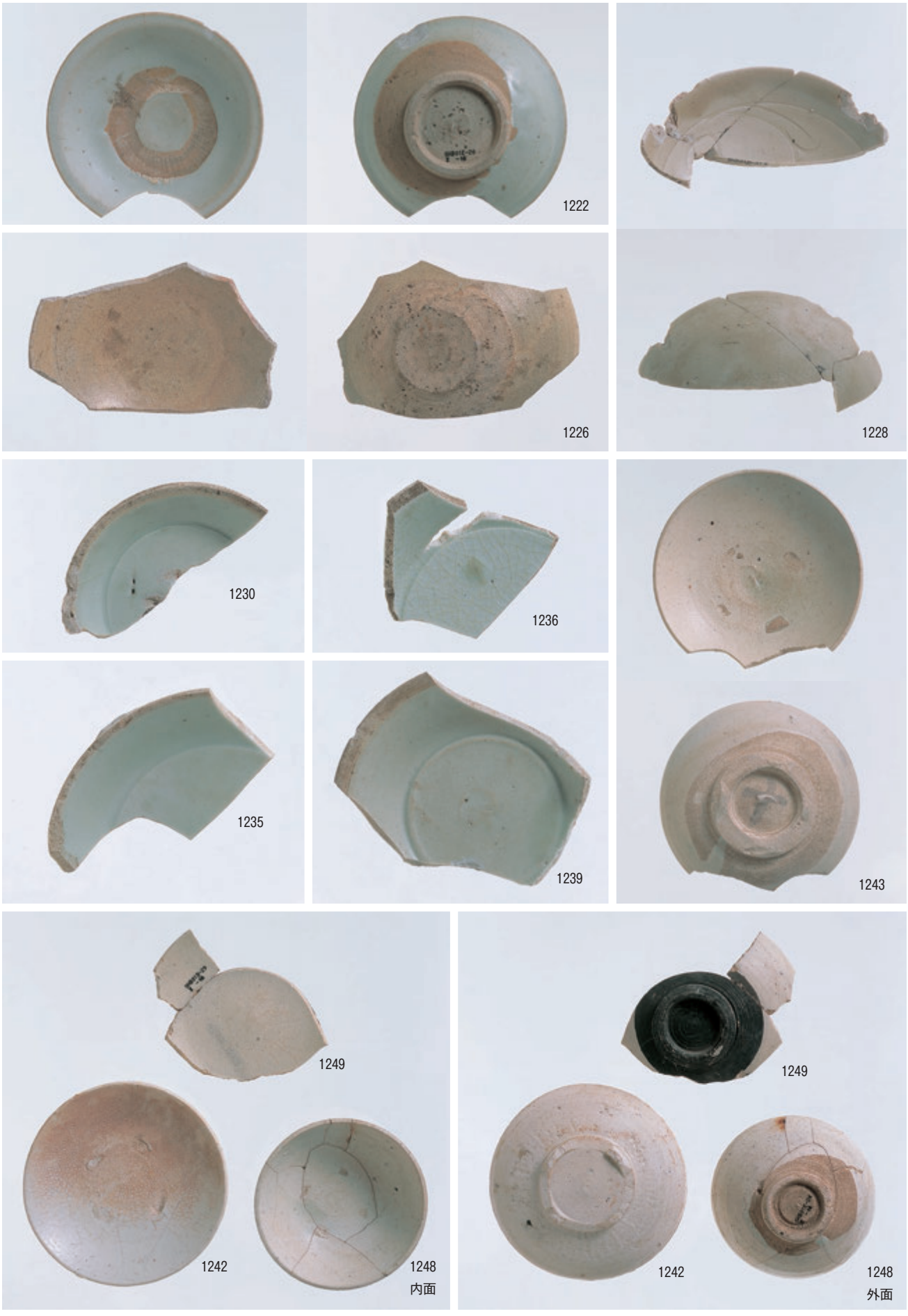

1186

青磁６・白磁１

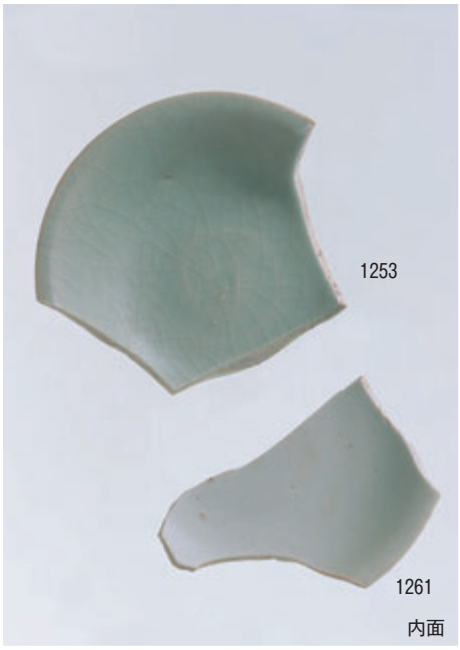


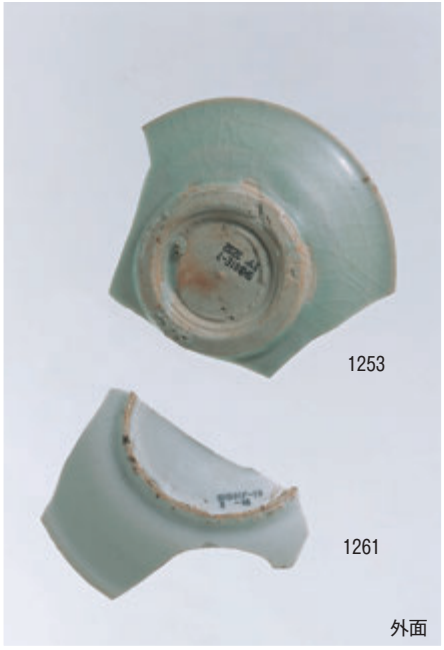
白磁２

図版40

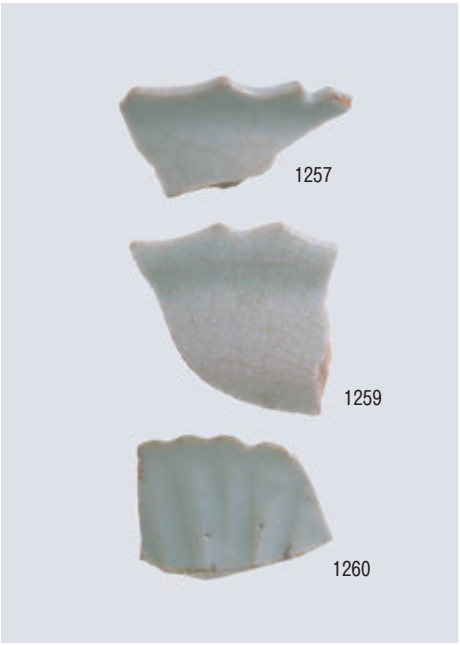

1222
1226
1228
1230
1236
1235
1239
1243
1249
1242
1248
内面
1249
1242
1248
外面

白磁３


1253
1261
内面


1253
1261
外面


1256


1257
1259
1260


1258


1263
1264


1265


1270
1269
1268

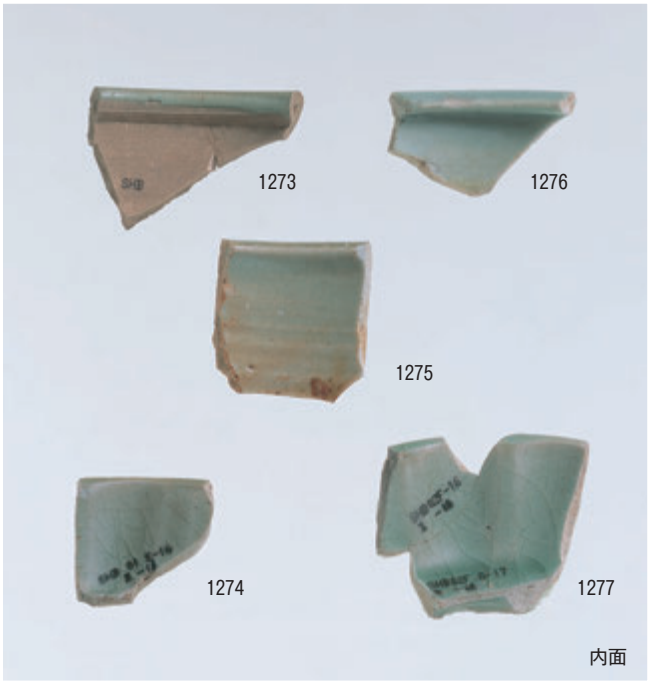
青磁７・白磁４

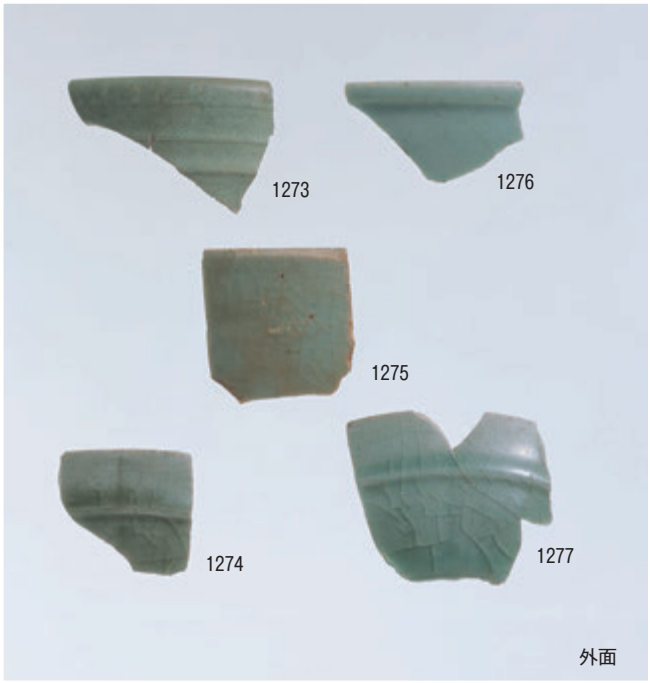
図版42

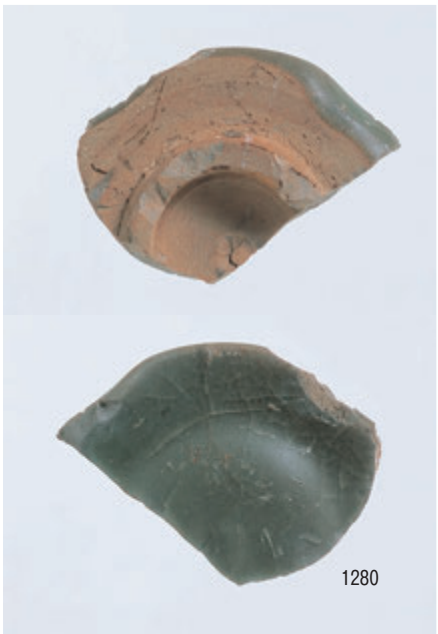

1272


1271


1278


1273
1276
1275
1274
1277
内面


1273
1276
1275
1274
1277
外面


1280

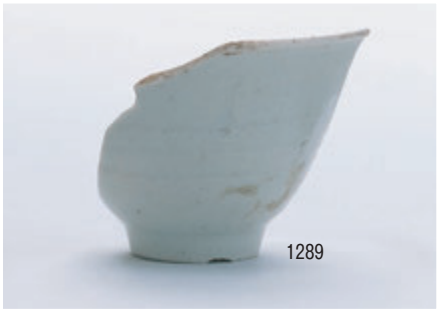

1286


1285

青磁８・白磁５

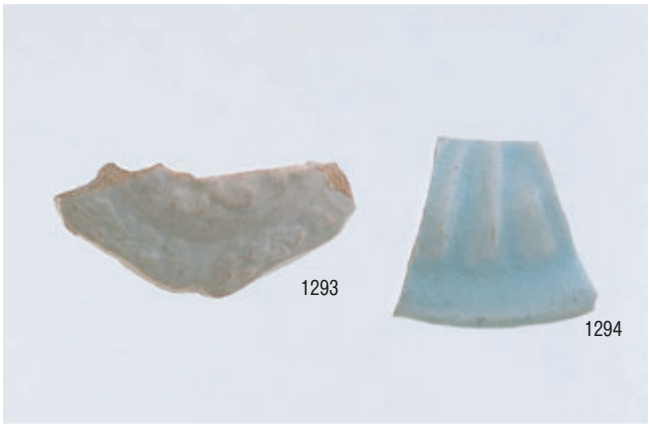






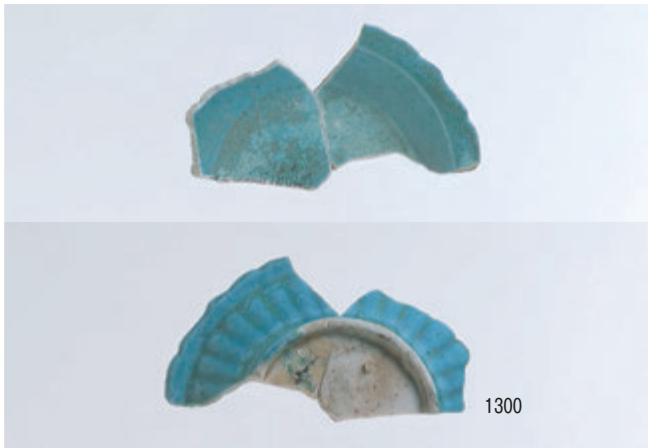








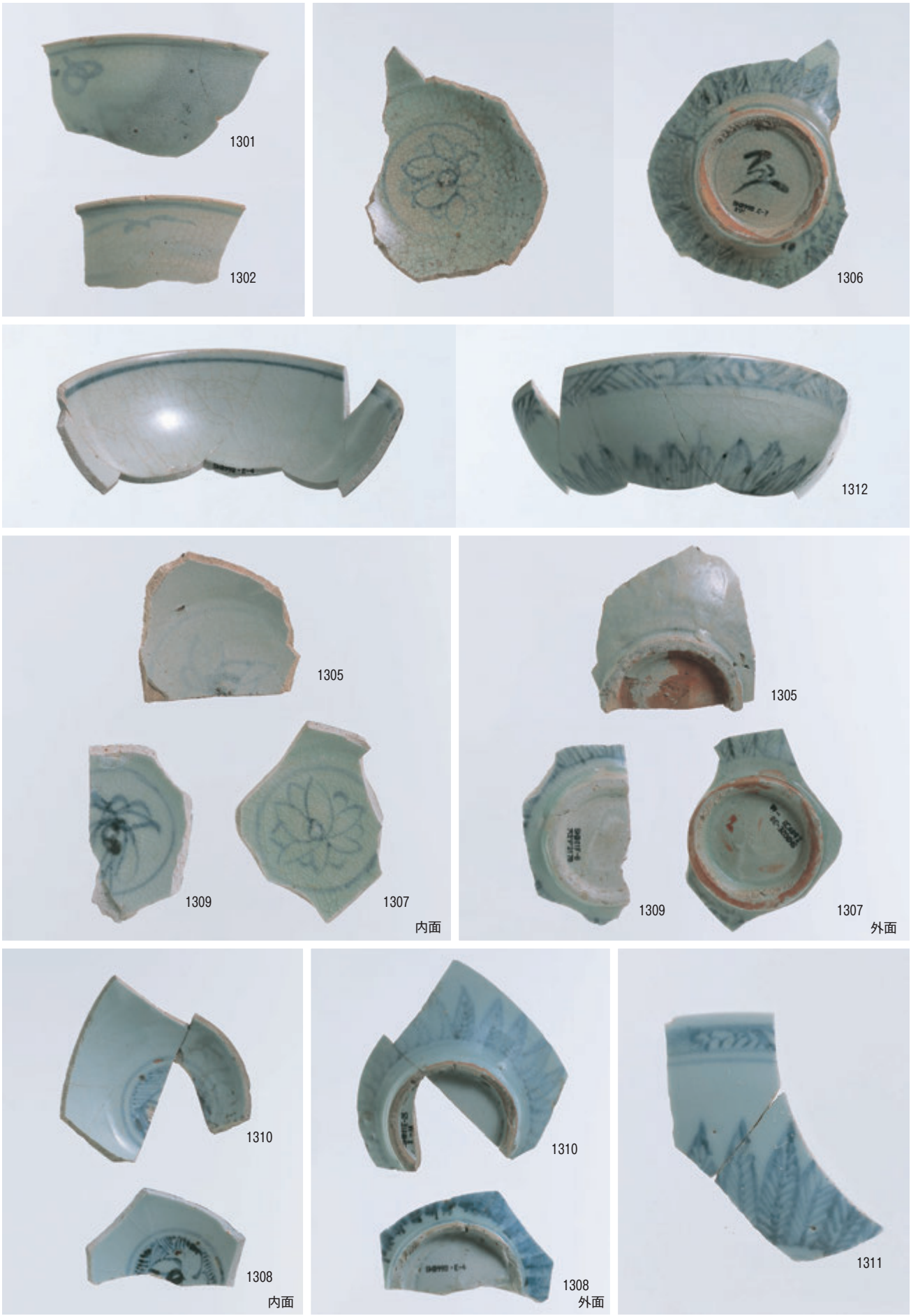




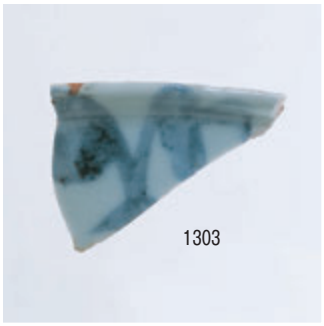
番号なしは挿図非掲載

青磁10・白磁７・青白磁

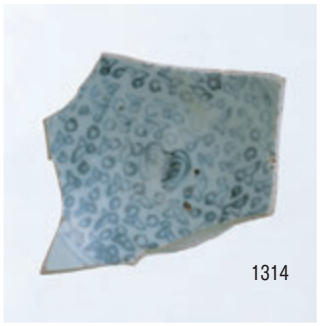
図版44


1301
1302
1306
1312
1305
1309
1307
内面
1305
1309
1307
外面
1310
1308
内面
1310
1308
外面
1311

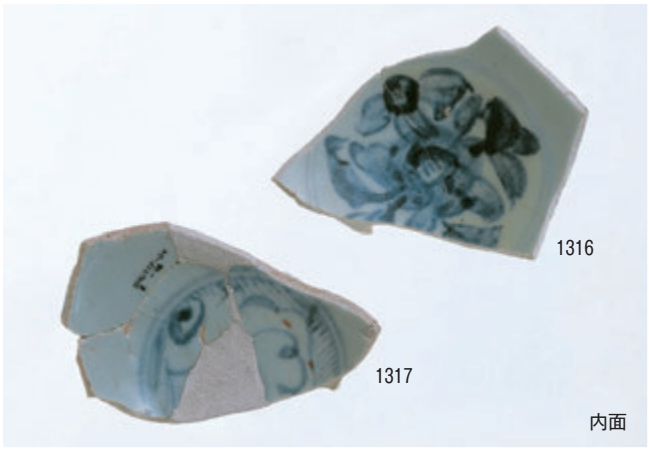
青花 1

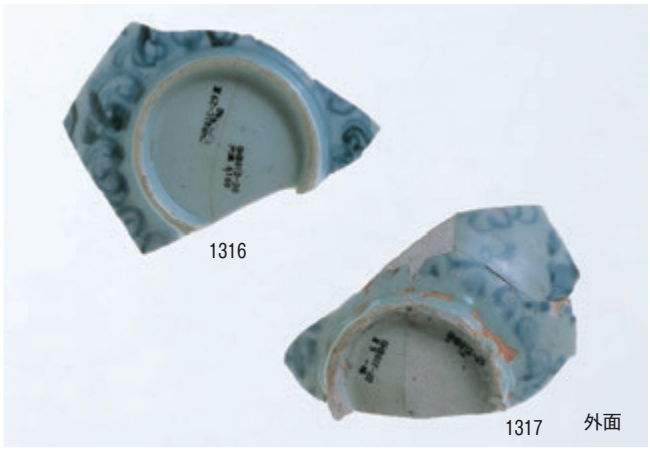

1303

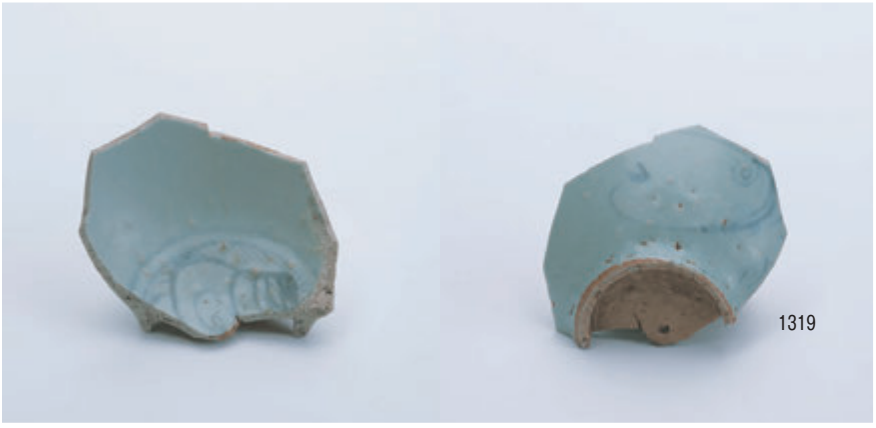

1304

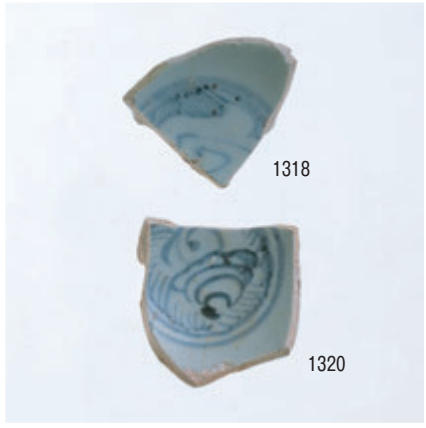

1314


1321

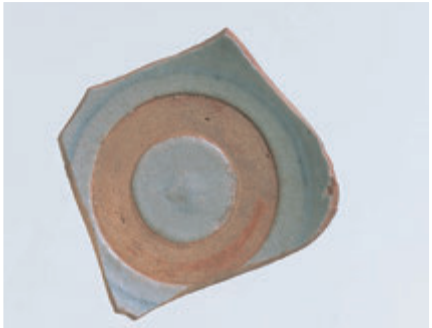

1316
1317
内面

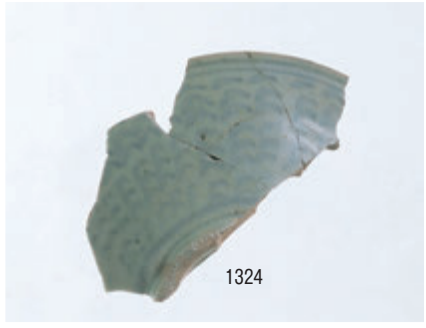

1316
1317
外面


1319

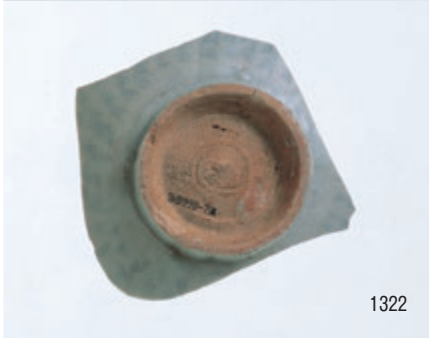

1318
1320

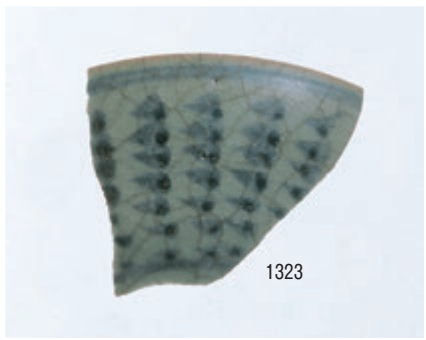





1324

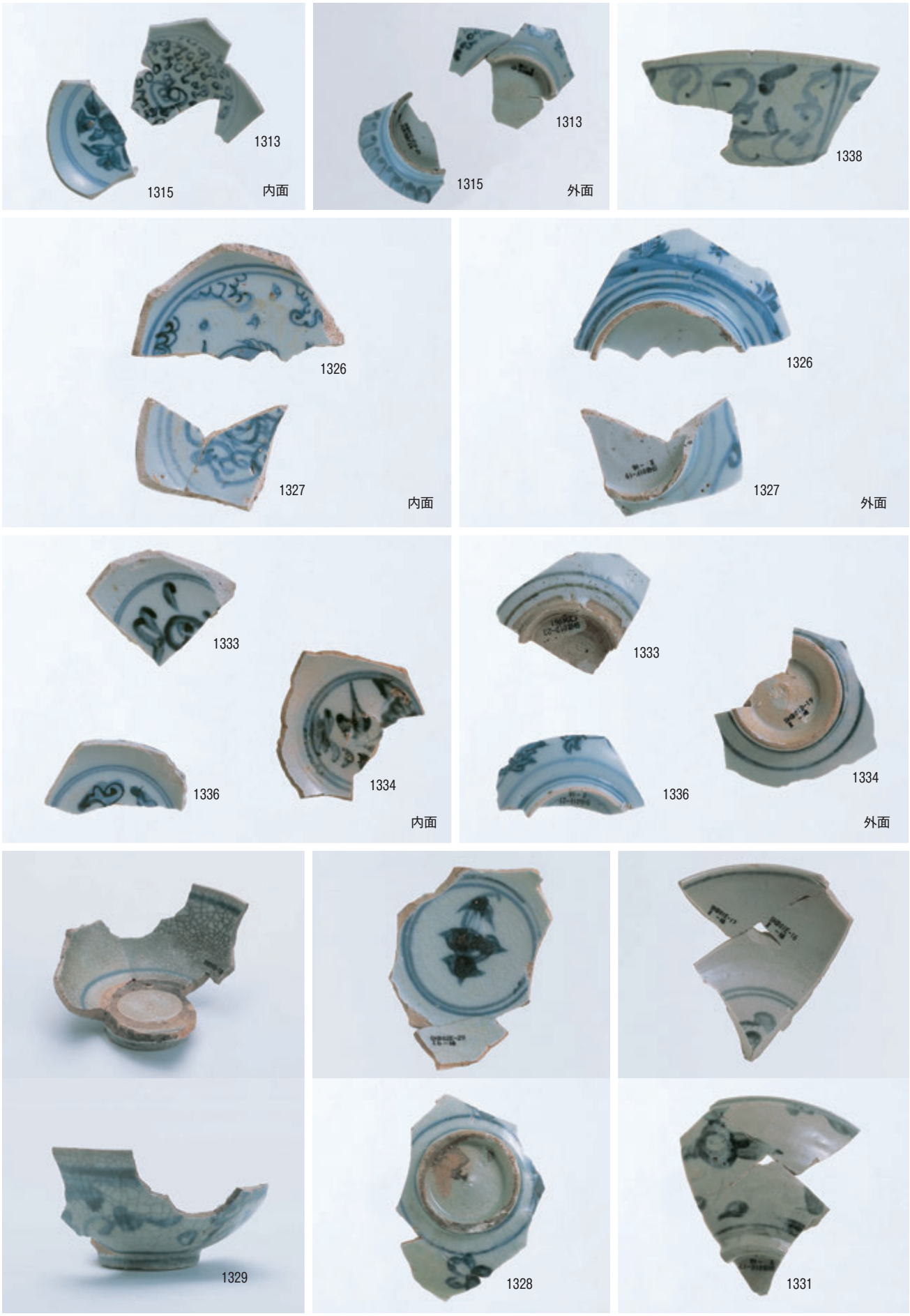

1325


1322


1323

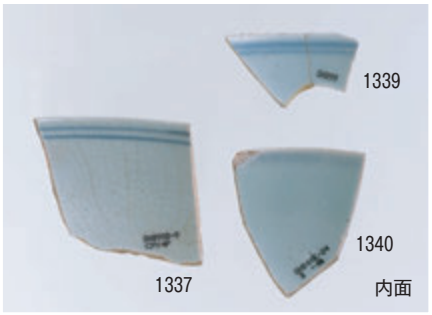
青花２

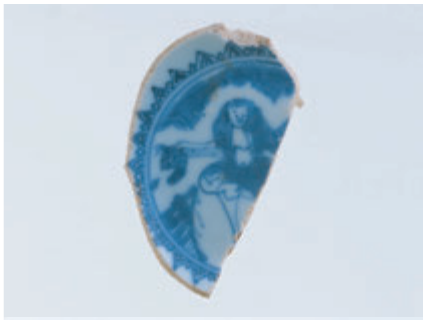
図版46


1313
1315
内面
1313
1315
外面
1338
1326
1327
内面
1326
1327
外面
1333
1336
1334
内面
1333
1336
1334
外面
1329
1328
1331

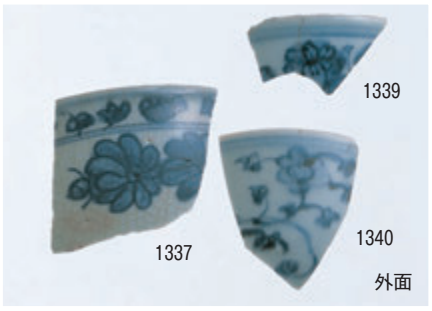
青花３

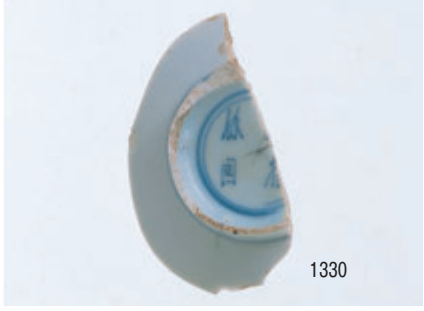


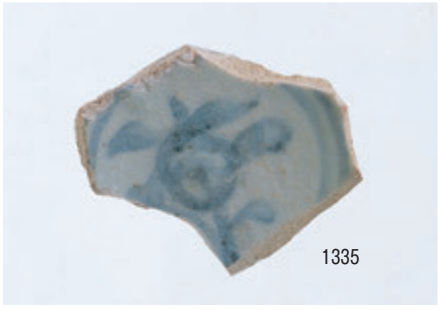

1339
1340
1337
内面



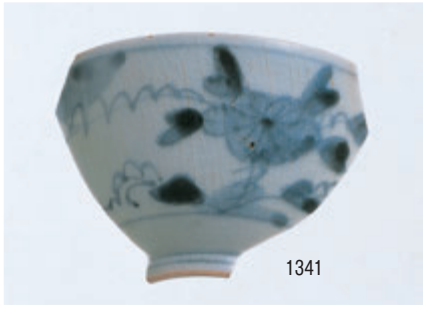

1332


1339
1340
1337
外面


1330


1335


1343


1341


1344




1352

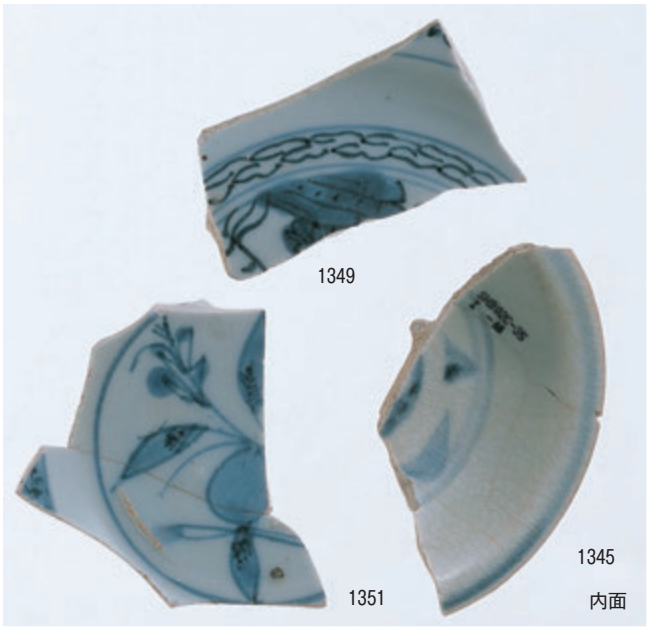

1347

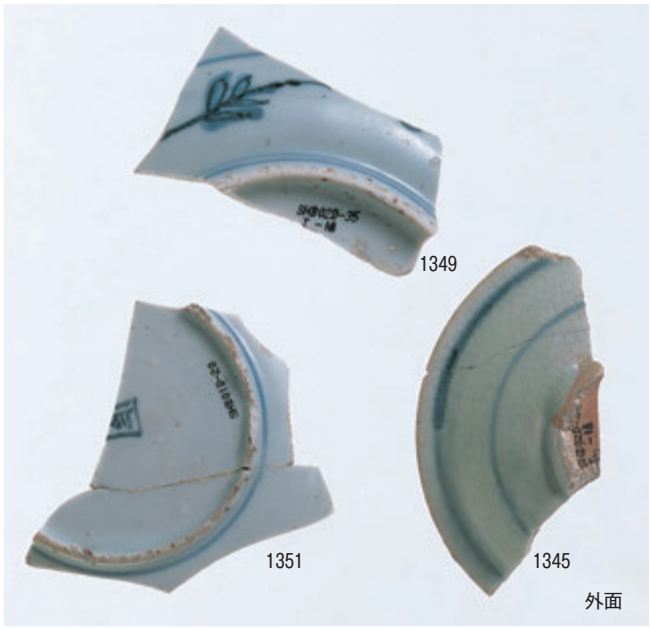

1348


1346

青花４

図版48

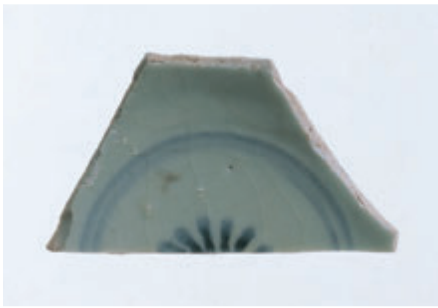

1349
1351
1345
内面

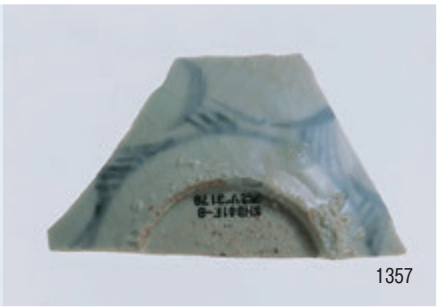

1349
1351
1345
外面


1350


1355


1354




1357

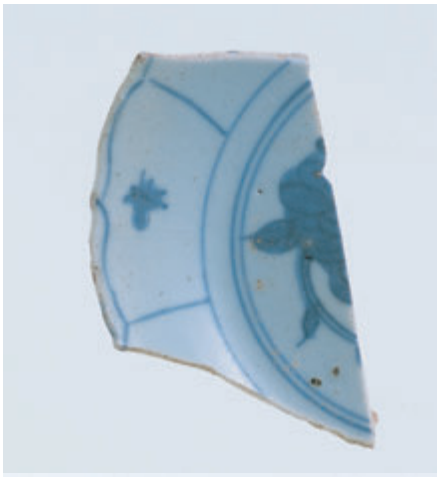





1356


1359

青花５

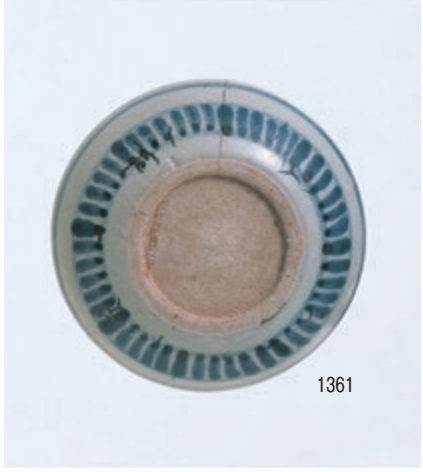


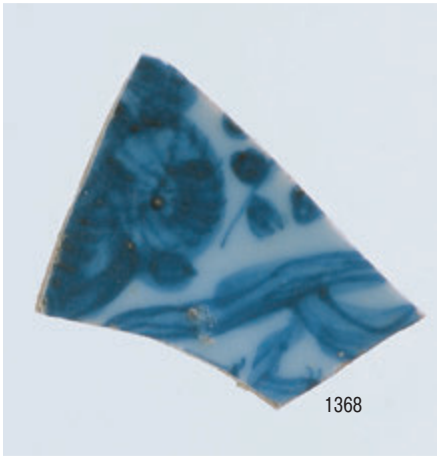




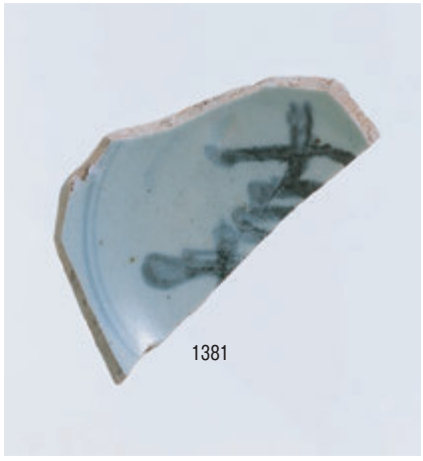


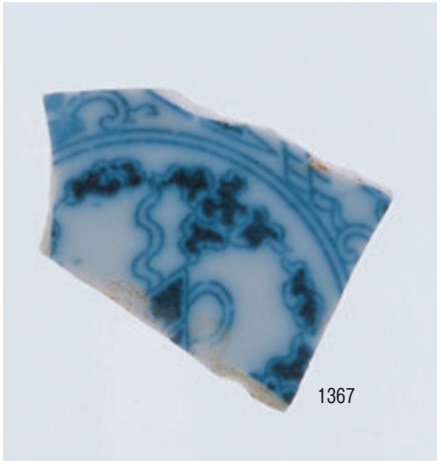


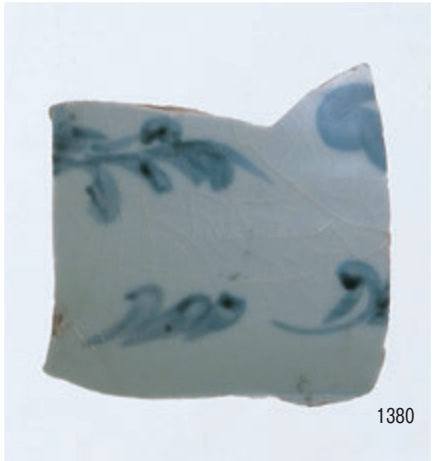


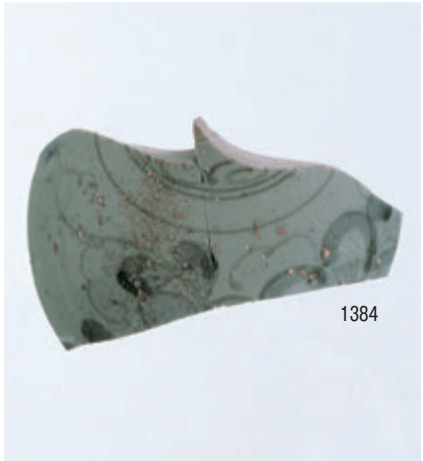






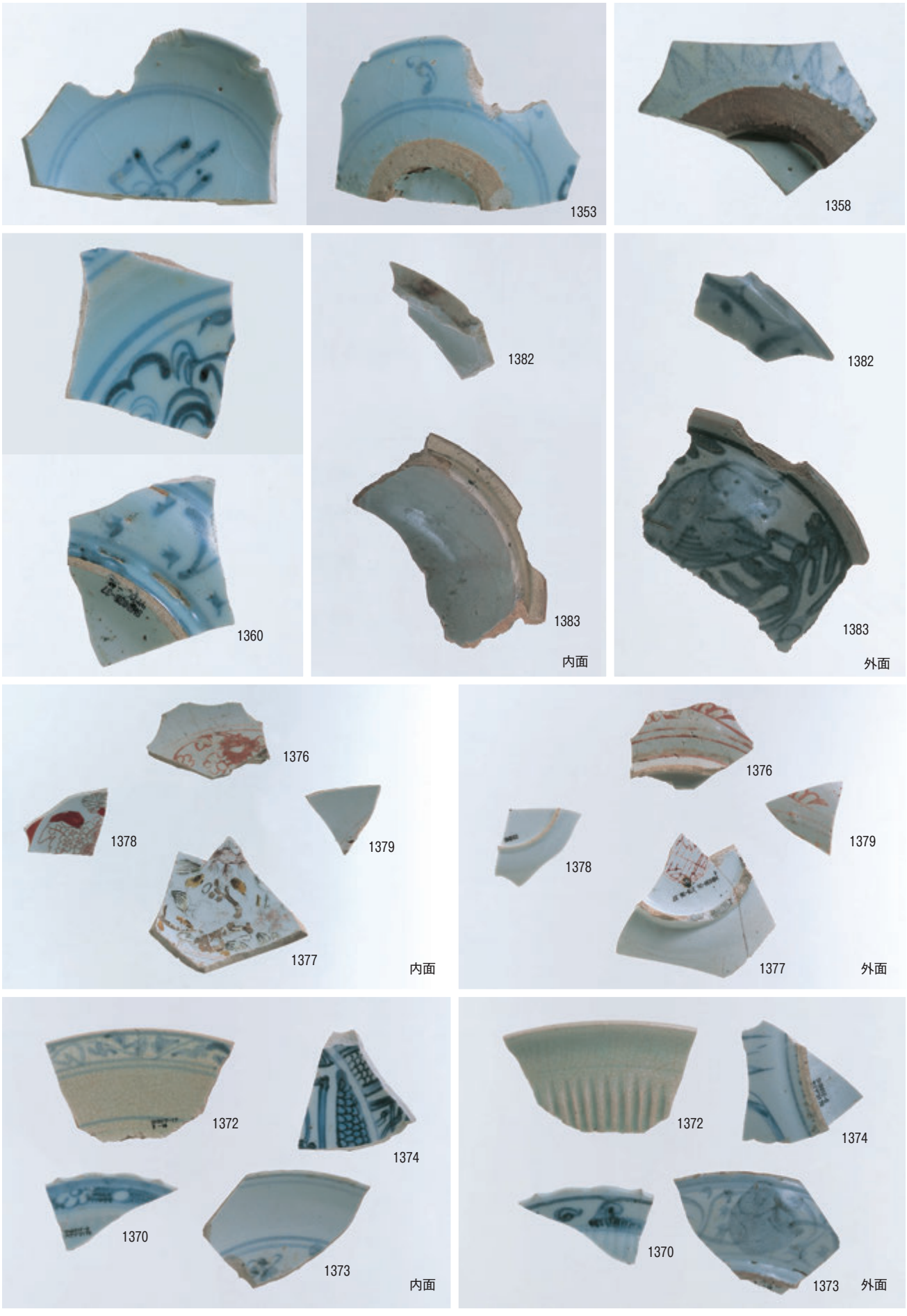






青花６

図版50


1353
1358
1360
1382
1383
内面
1382
1383
外面
1376
1378
1379
1377
内面
1376
1378
1379
1377
外面
1372
1374
1370
1373
内面
1372
1374
1370
1373
外面

青花７・赤絵


1387


1396


1393


1412

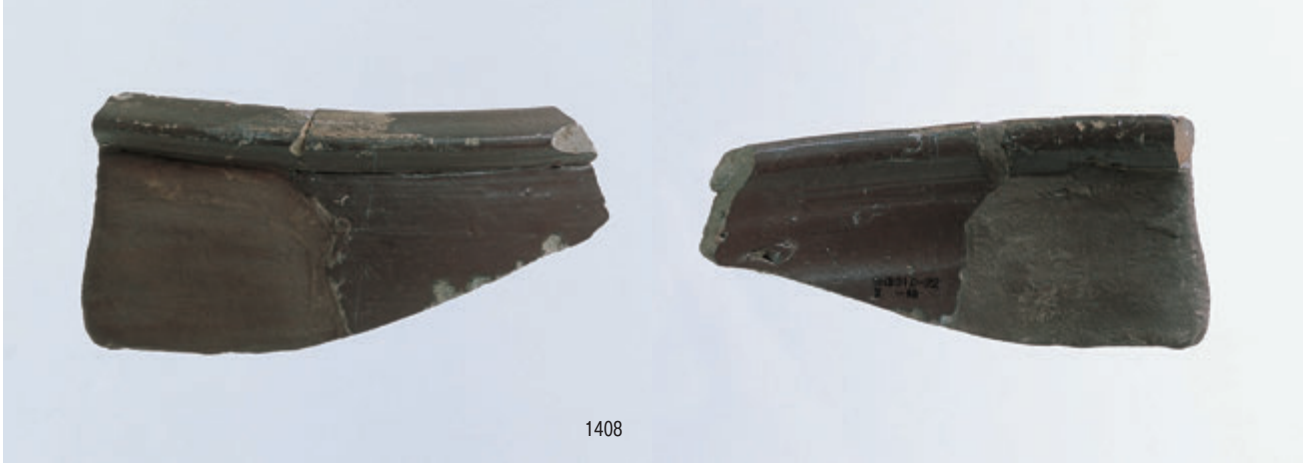

1413


1417

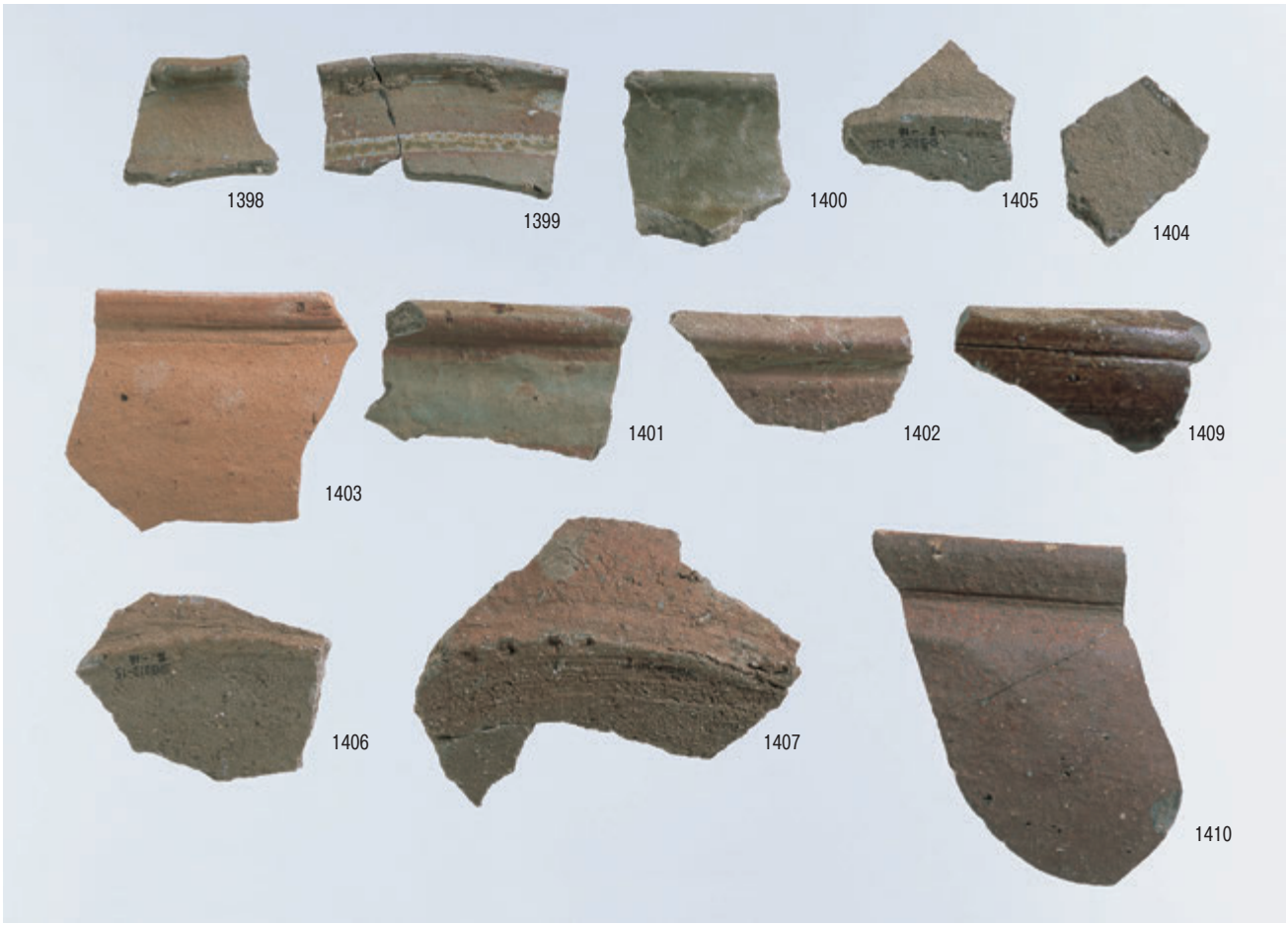

1414

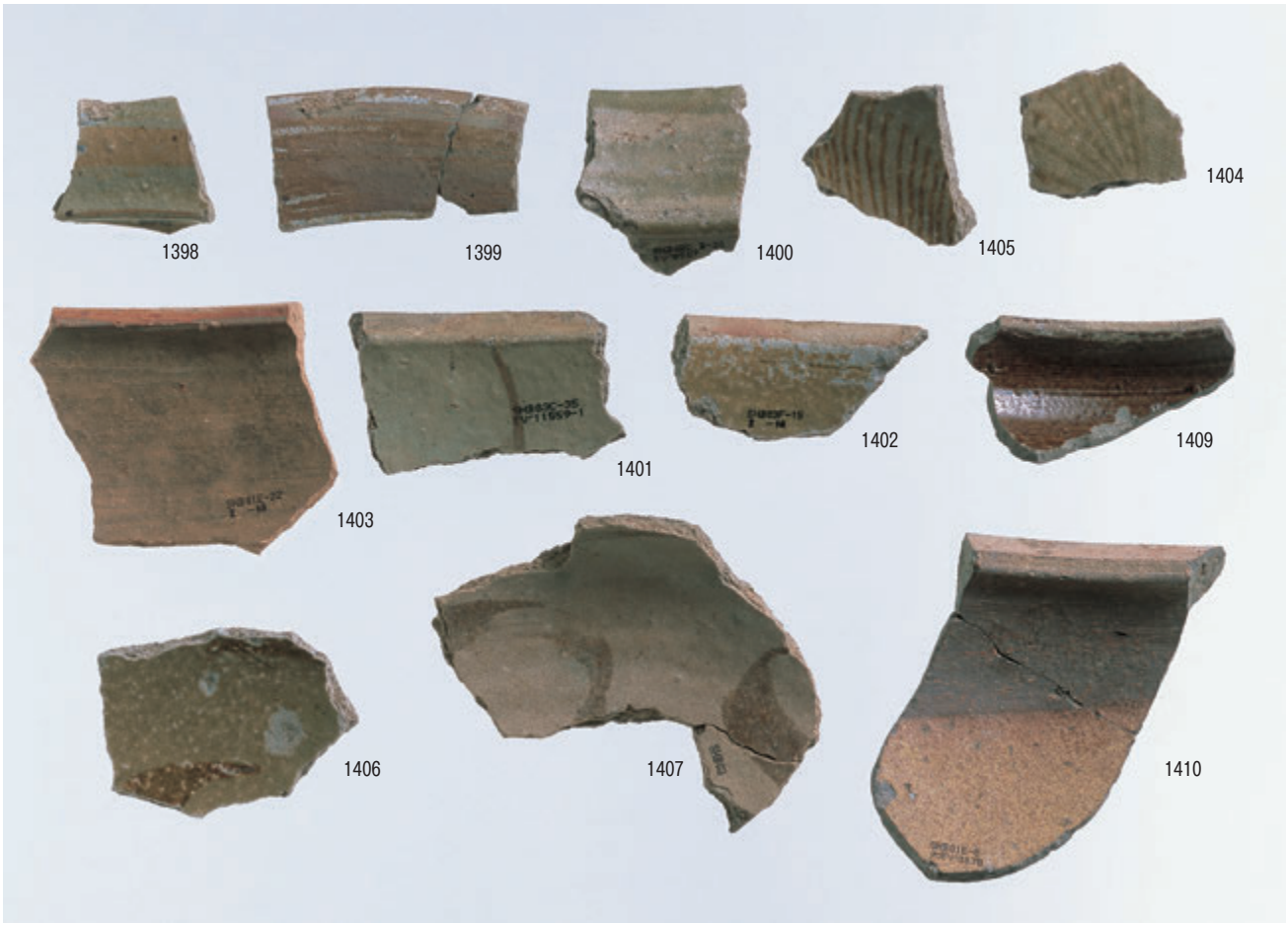

1416


1415


1408

図版52


1398
1399
1400
1405
1404
1403
1401
1402
1409
1406
1407
1410


1398
1399
1400
1405
1404
1403
1401
1402
1409
1406
1407
1410

中国陶器２



中国陶器３

番号なしは挿図非掲載

図版54

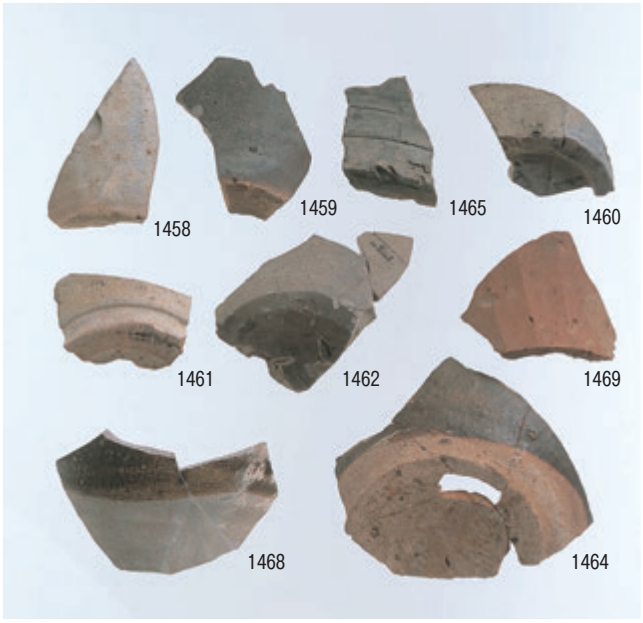


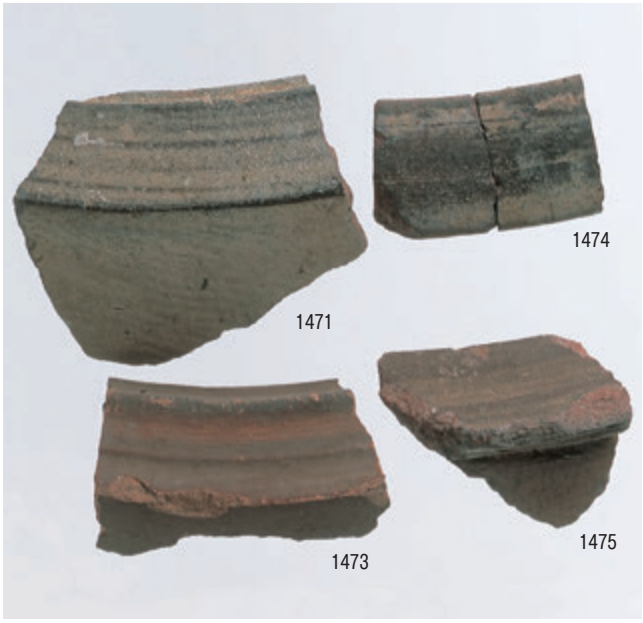




番号なしは挿図非掲載

中国陶器４

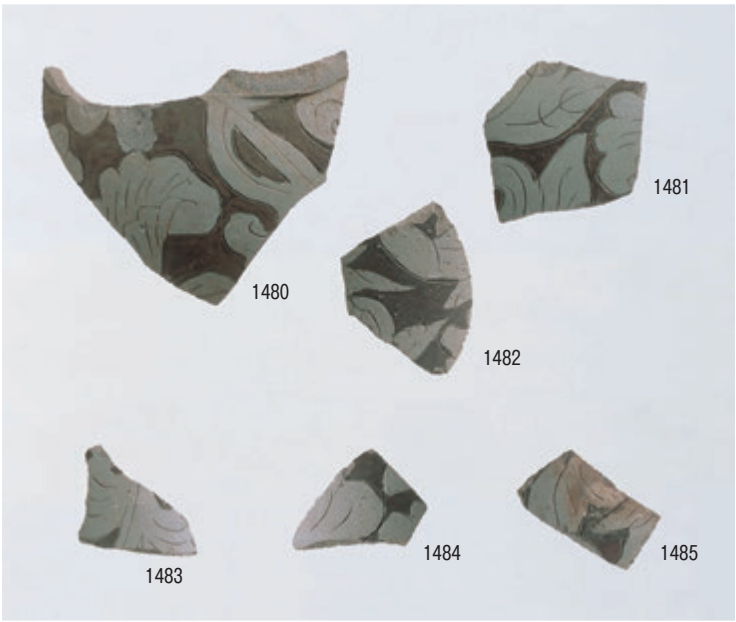








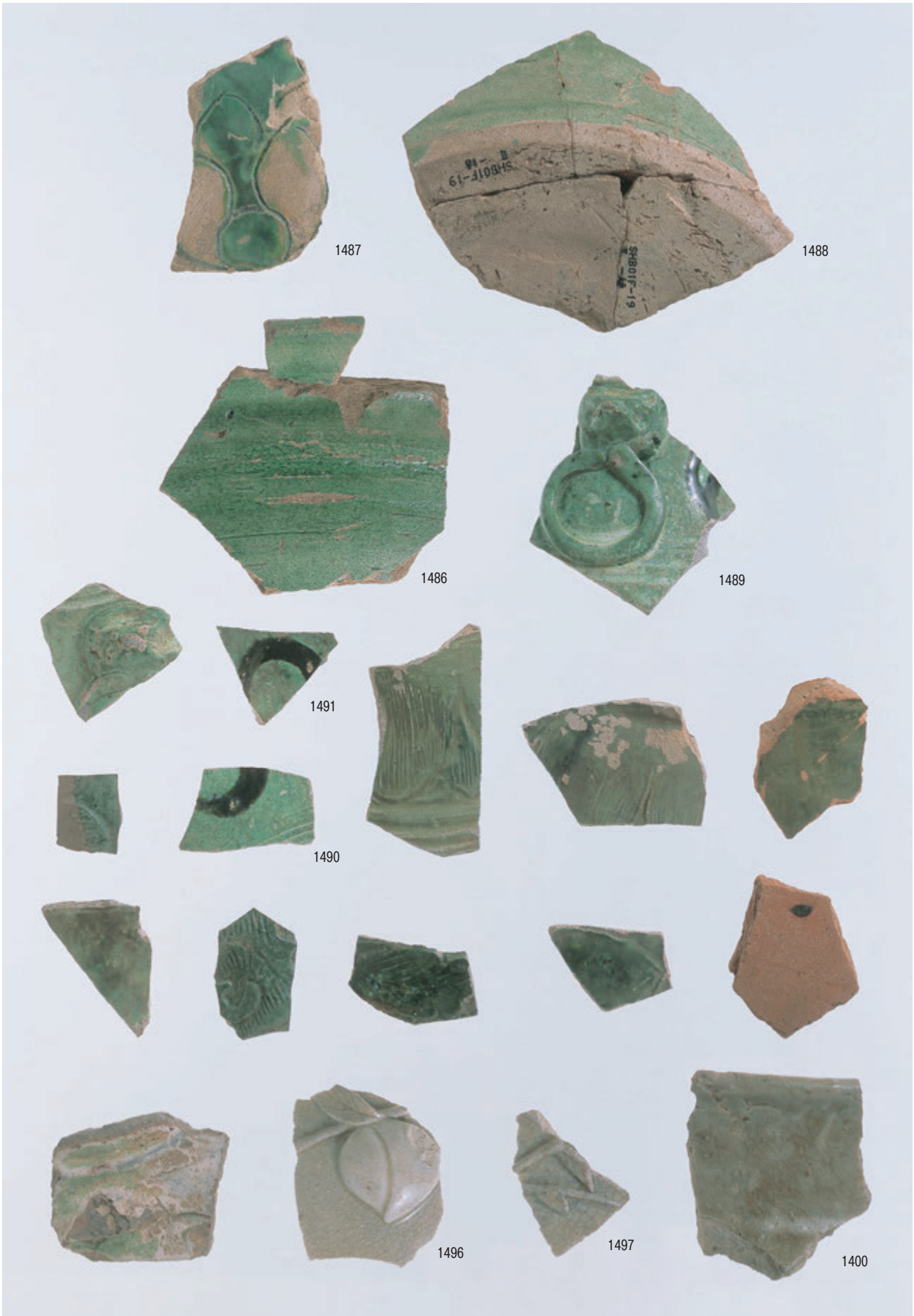




番号なしは挿図非掲載

中国陶器５・朝鮮陶器１

図版56



中国陶器６

番号なしは未掲載



中国陶器７

番号なしは未掲載

図版58


1492

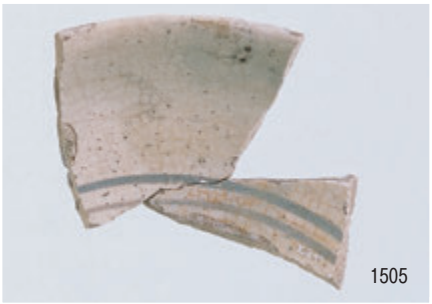

1428


1446

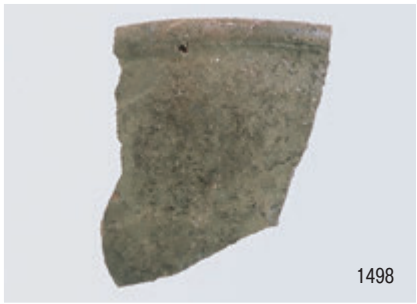

1463


1467


1466


1505


1504


1498


1501

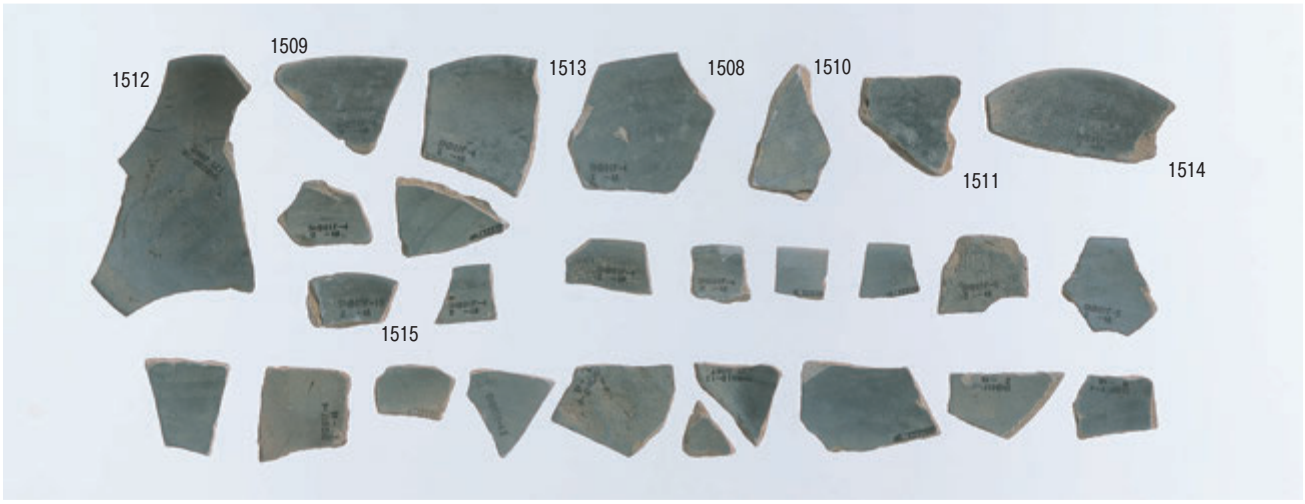

1500

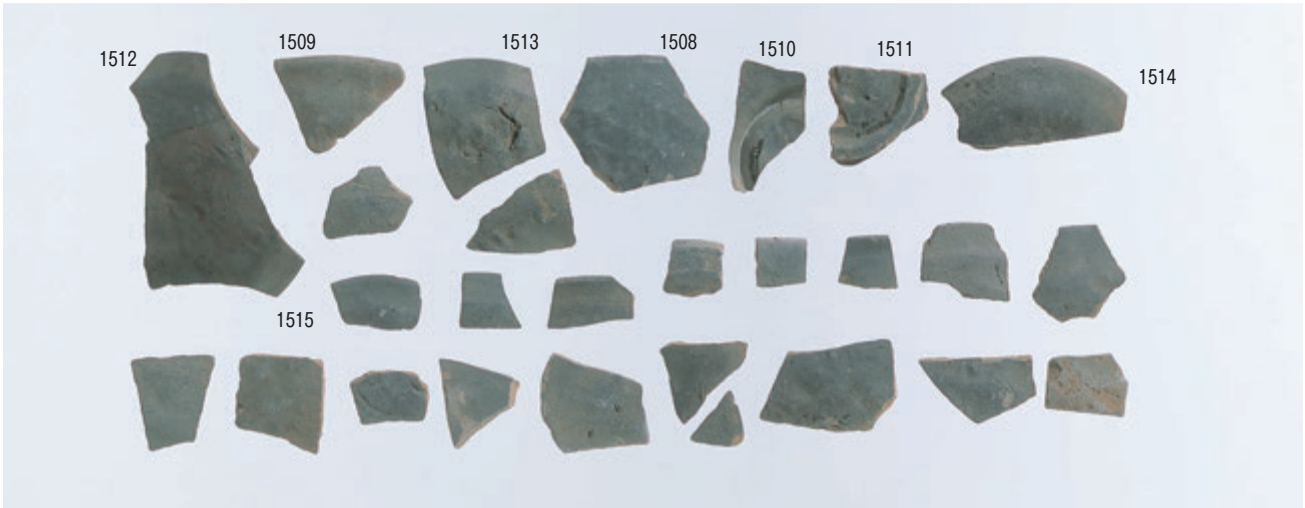

1502

中国陶器８・朝鮮陶器２・ベトナム陶器





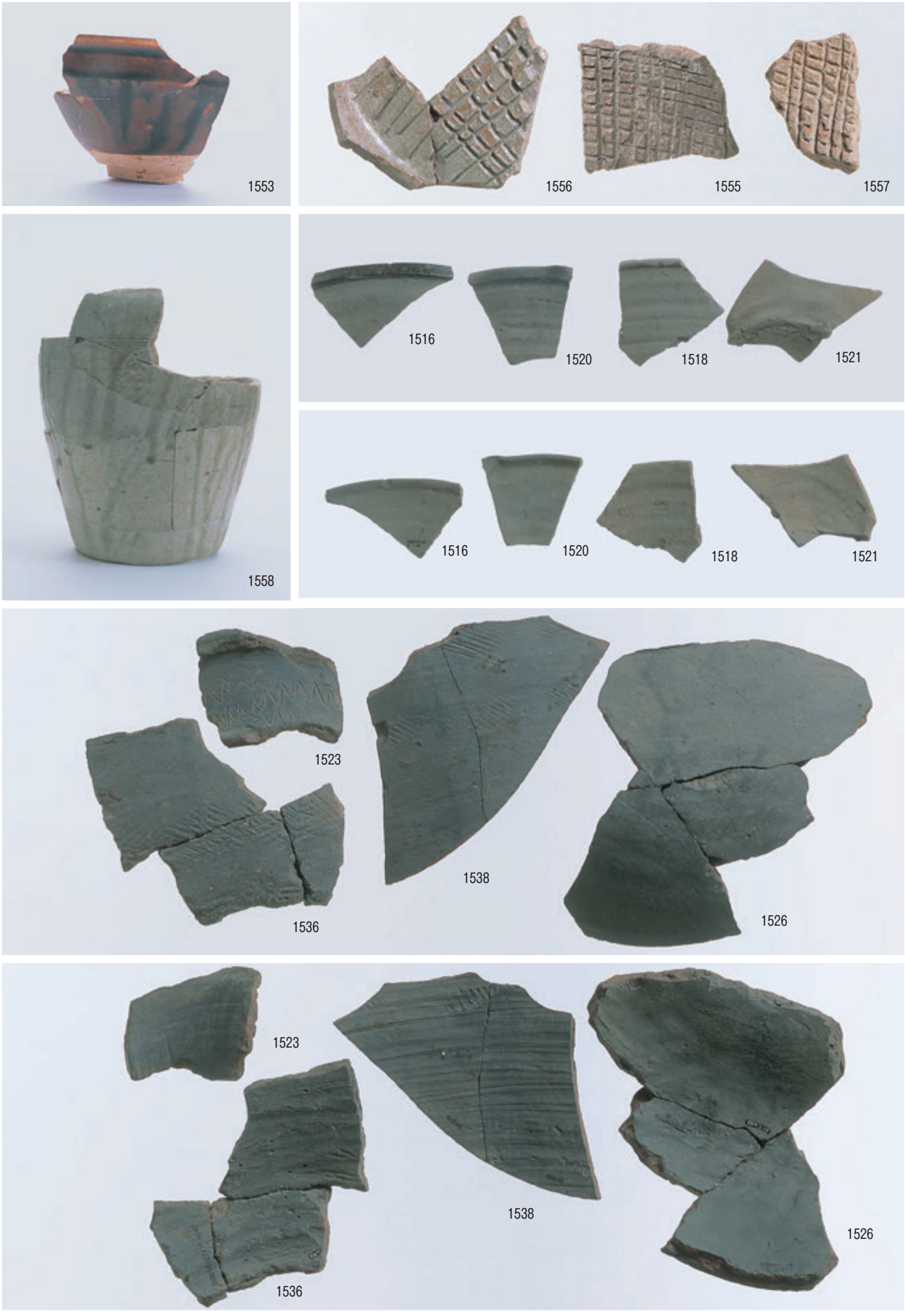




番号なしは挿図非掲載

瓦器

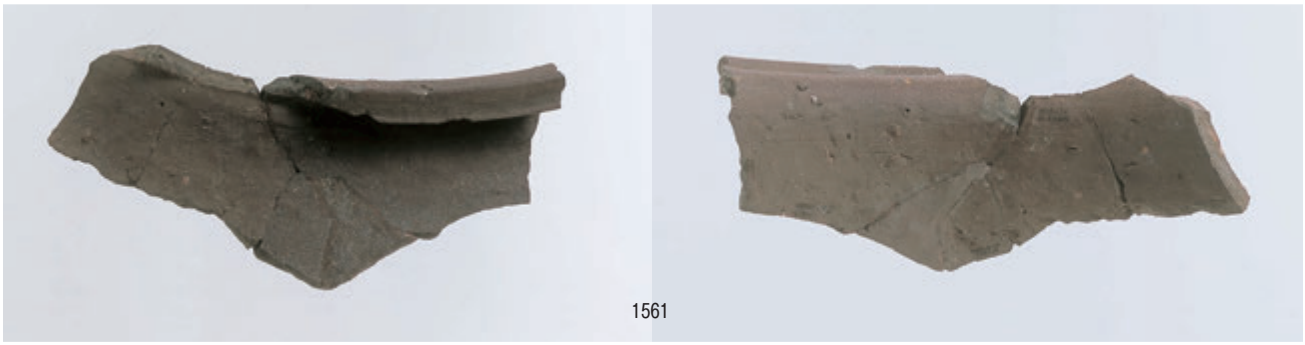
図版60



中世陶器１・中世須恵器１



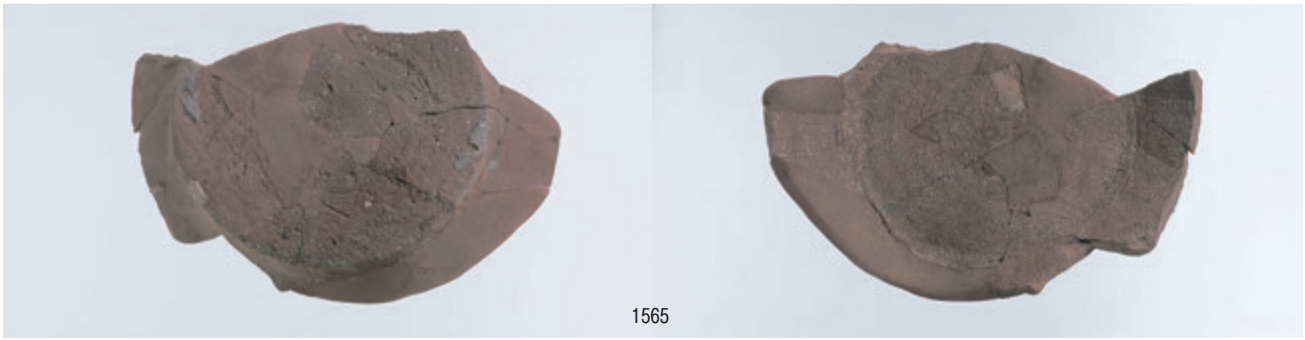
1564



1561



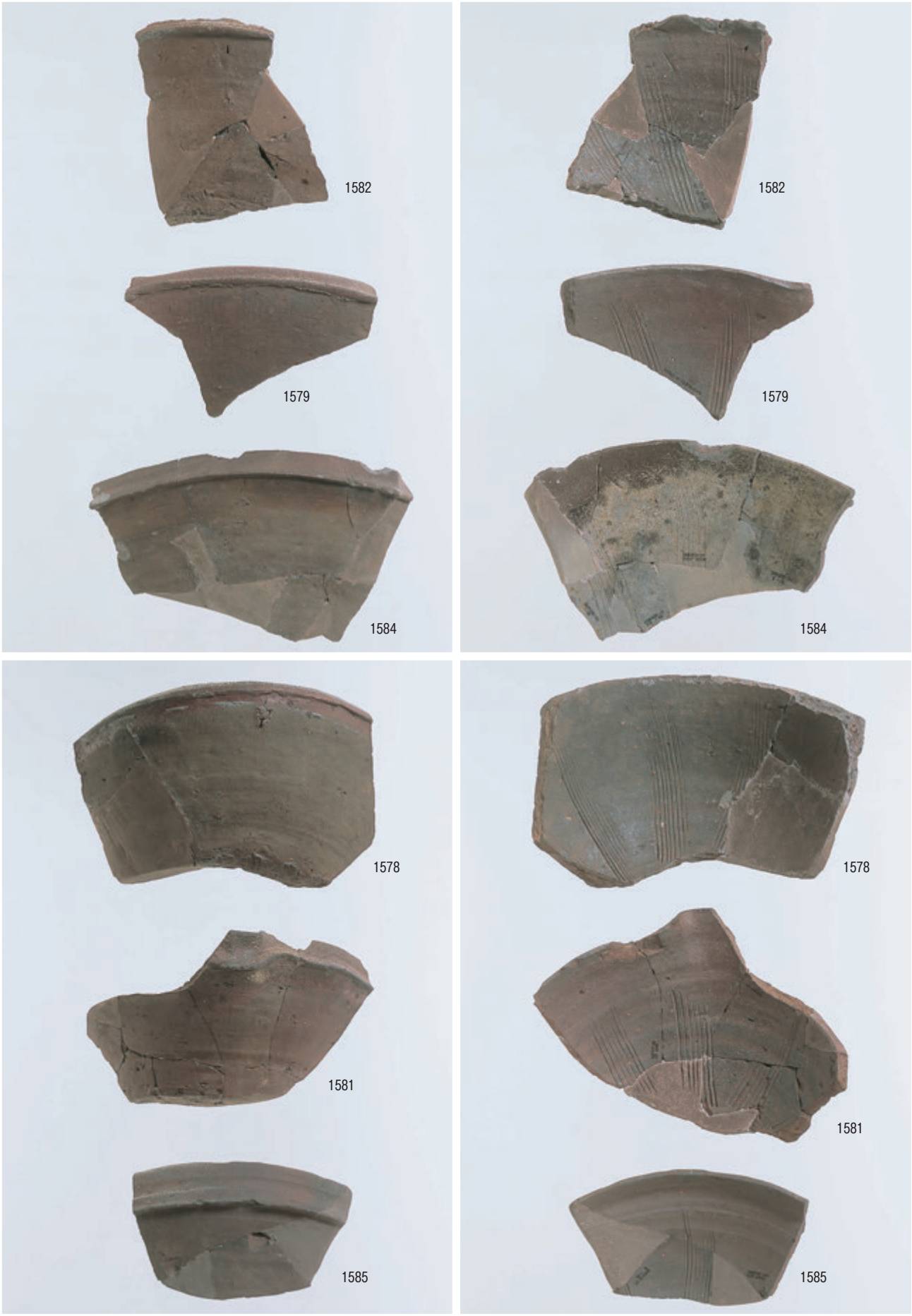
1562



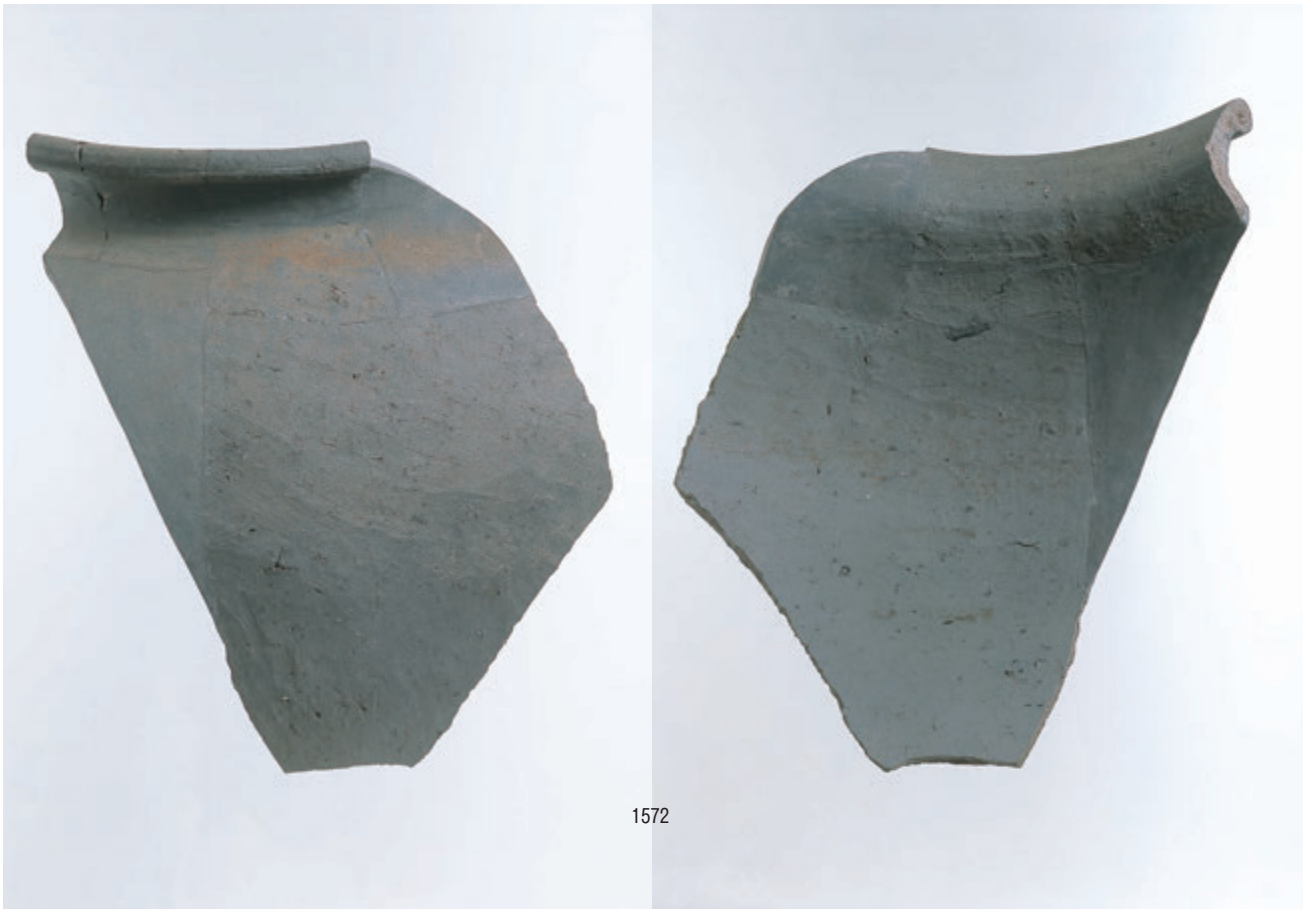
1565

中世陶器２

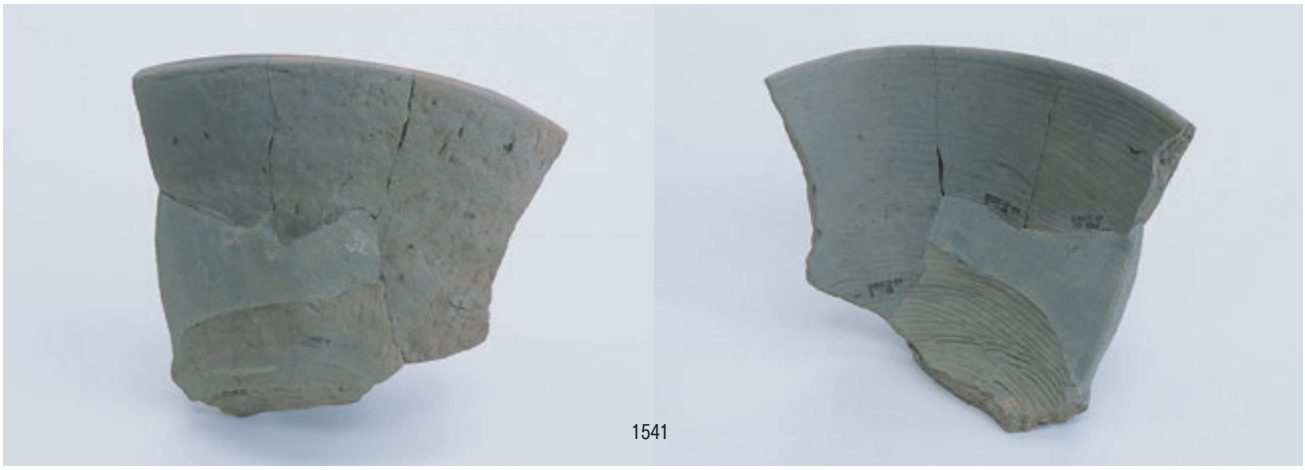
図版62



中世陶器３







中世陶器４・中世須恵器２

図版64



1542



1587



1586



1599

中世須恵器３・瓦質土器１















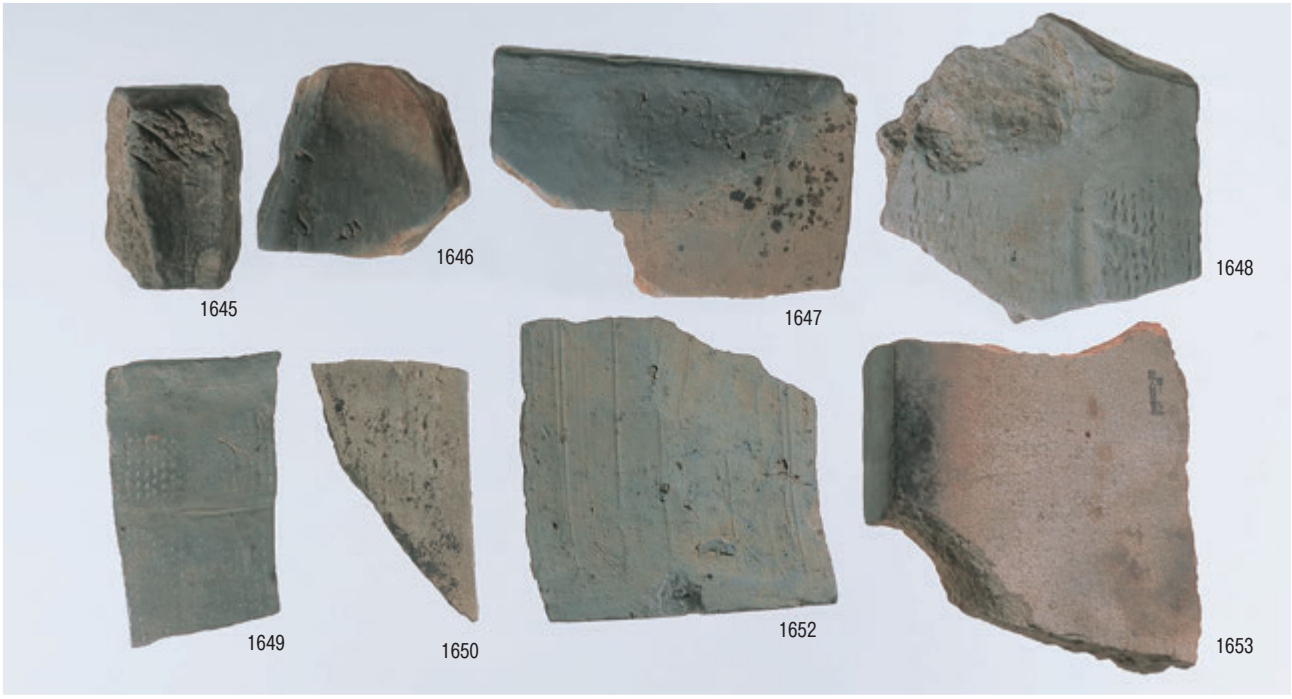


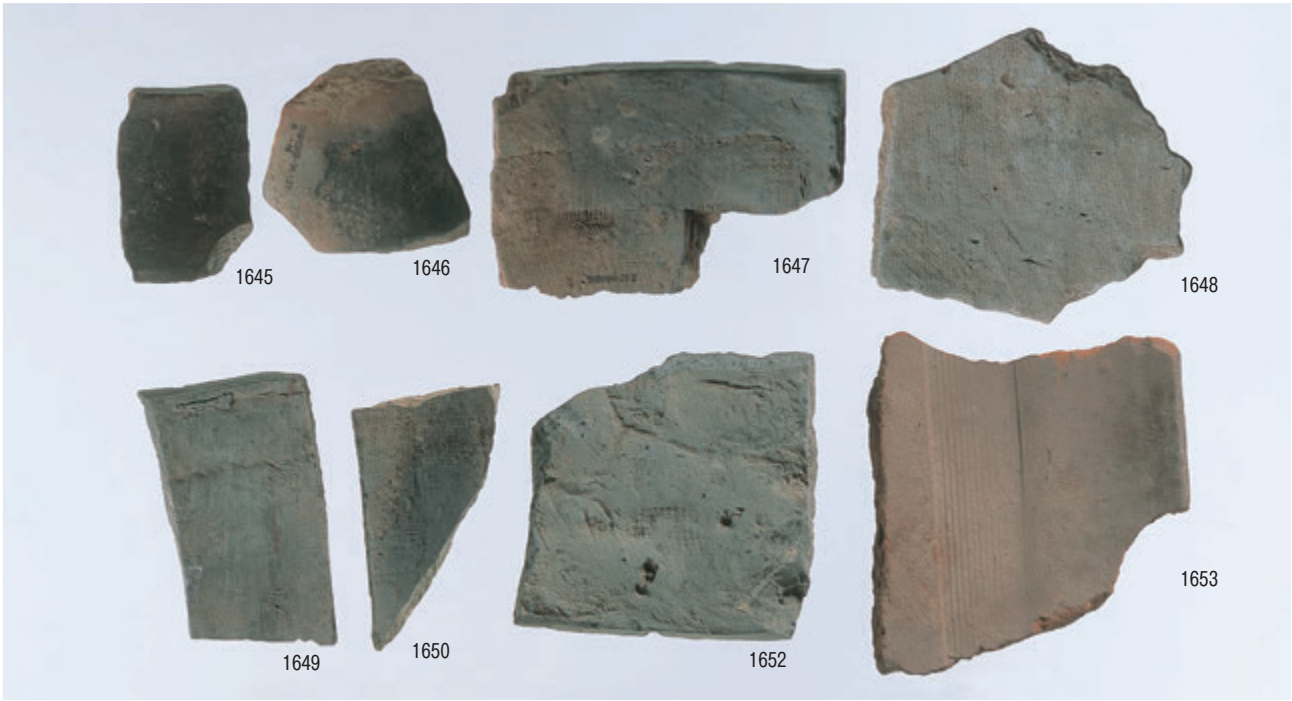


番号なしは挿図非掲載

瓦質土器２・土師質土器・その他

図版66


1645
1646
1647
1648
1649
1650
1652
1653


1645
1646
1647
1648
1649
1650
1652
1653


1654


1656

瓦・滑石製石鍋





滑石製品

番号なしは挿図非掲載

図版68


1688
1689
1691
1690
1695
1693
1694
1692
1687


1688
1689
1691
1690
1695
1693
1694
1692
1687

砥石





五輪塔

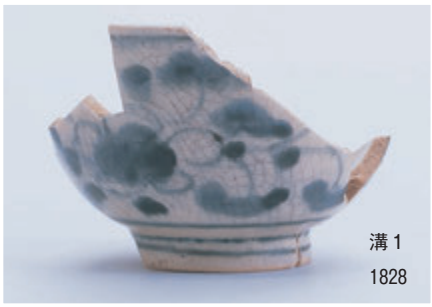
図版70


掘立
1803


ピット４
1817




ピット４
1818


溝１
1828


ピット２
1816


溝１
1833


溝１
1836


溝１
1865

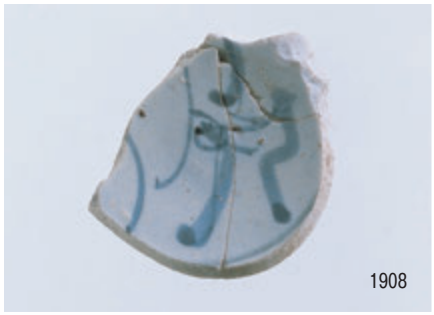


自然流路１


1870
自然流路１


1869
自然流路１

近世　遺構内出土遺物



1908

1913

1907

1912

1915


1921

1923

1911

1926

1928

1929

1930

1931

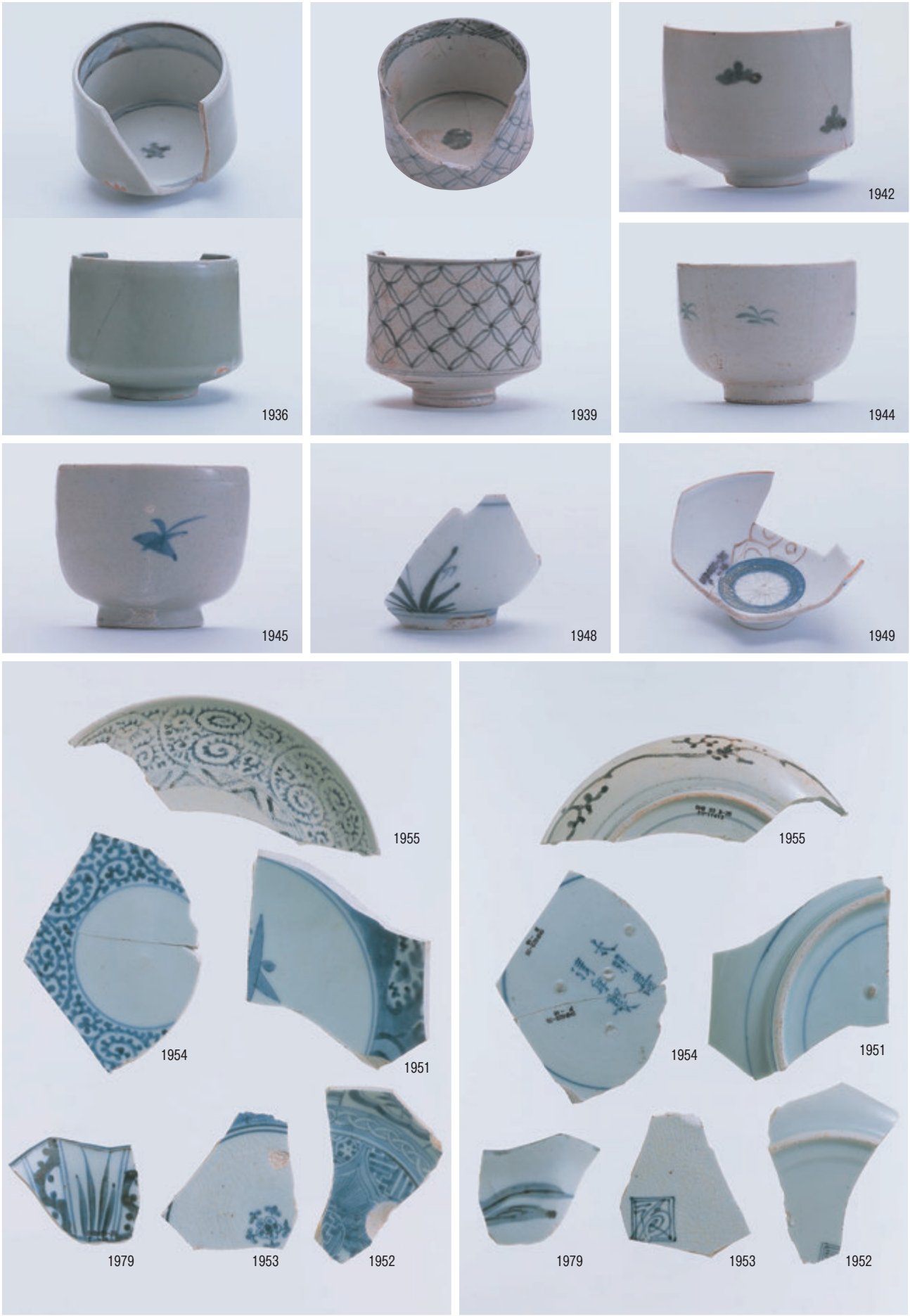
1932

1934

1940

近世　磁器 1

図版72


1936
1939
1942
1944
1945
1948
1949
1955
1954
1951
1979
1953
1952
1955
1954
1951
1979
1953
1952

近世　磁器２


1950
1956
1957
1958
1964
1967
1991
1990
1985
1983
1969
1975
1986

近世　磁器３

図版74



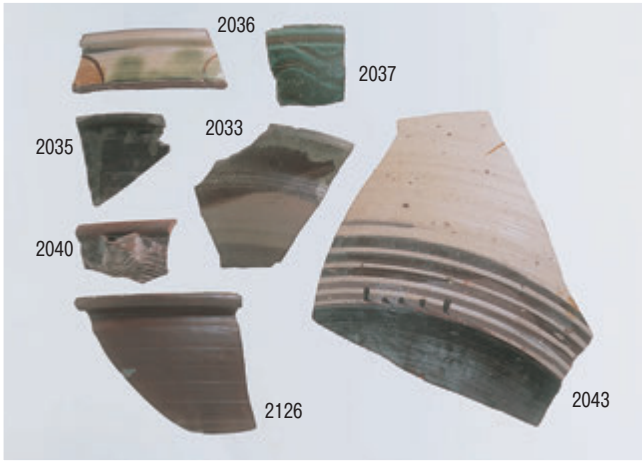
近世　陶器 1

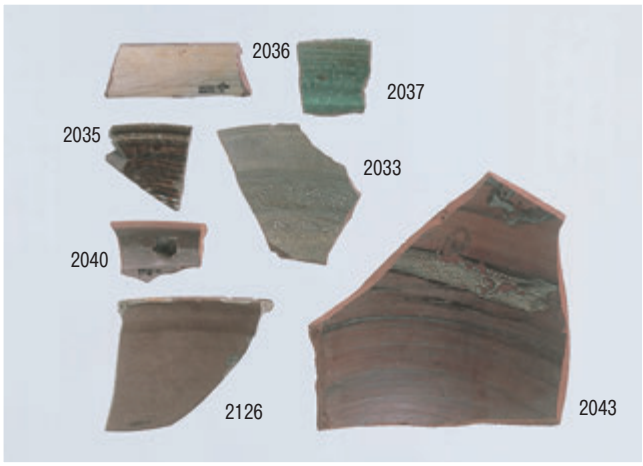

2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2018
2019
2013
2017
2014
2016
2031
2032
2038

近世　陶器２

図版76


2022
2021
2026
2024


2036
2037
2035
2033
2040
2126
2043

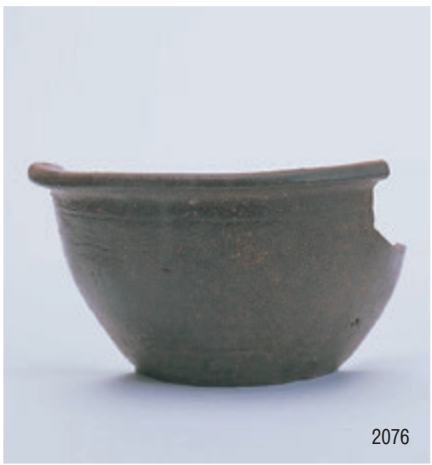

2036
2037
2035
2033
2040
2126
2043


2044


2046


2053


2081


2076


2091

近世　陶器３


2057
2054
2058

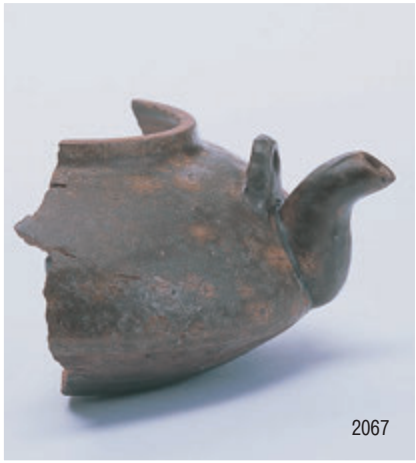

2059


2066

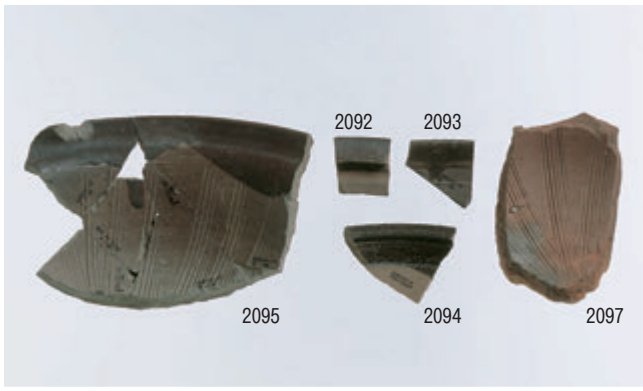

2065


2061


2064


2067


2092
2093
2095
2094
2097


2092
2093
2095
2094
2097

近世　陶器４

図版78













番号なしは挿図非掲載

近世　陶器５


2115


2120


2121


2140
2131


2145
2150
2152
2144
2151


2158
2157
2159
2052
2155
2156

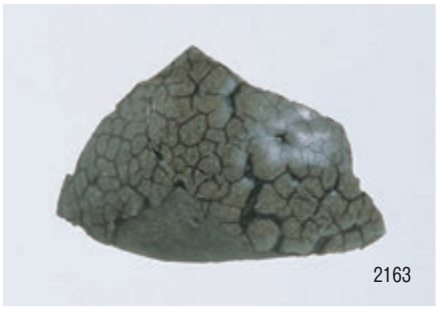
近世　陶器６

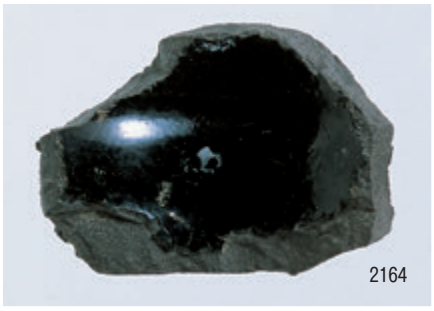
図版80


2160


2161


2162


2163


2164


2165


2166


2167


2168


2169


2170


2171


2177


2179

近世　陶器７









金属製品

図版82


1883


1875


1874


1880


1890


1894

鉄滓


2501


2502


2503


2506

補遺　縄文土器 1

図版84

縄文土器文様展開写真


2504


2508


2507


2505




2509

補遺　縄文土器２

図版86


2510
2511
2512
2513
2514
2515
2516
2517
2518
2519
2520
2521
2522
2523
2524
2525
2526
2527
2528

補遺　石器 1





補遺　石器２

図版88









補遺　渡畑遺跡出土遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（170）

芝 原 遺 跡 3

発　行　2012年３月

編　集　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811　FAX 0995-48-5821

印　刷　株式会社　トライ社
〒892-0834
鹿児島県鹿児島市南林寺町12－6
TEL 099-226-0815　FAX 099-225-7933